

俺は、スーパーザンク
ティンゼル人だぜ？

Par

【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

ある日、帝国が来た。蒼の少女が堕ち、強き少女が命を落とし、二人が出会う。命と共に、仲間と共に。彼女は故郷を旅立った。

そんな事を外野から見てたジータの幼馴染の男が、例のザンクティンゼル婆さんに鍛えられて星晶獣（マグナ）に挑み、本人の意思に関係なく強くなり、遥かなる蒼い空と全く関係ないところで繰り広げられる大変なようにゆるく進む物語。

追記

一応本編全4話でやりたい事はやりました。今後は仲間のフェイトエピソードやイ

ベントに絡めたものの、その後のショートショートをちよいちやりたと思います。

追記2 11/17

今まで短編集で連載してましたが、短編集と言うには無理がある気がしたので、連載扱いにしました。

追記3 2018/02/13

試しに一言評価の設定を変えました。

諸注意

- ・オリ主もの
- ・キャラ崩壊
- ・ゲーム本編・キャラフェイトエピソードのネタバレ有。
- ・星晶獣、特にマグナ関連の設定を独自のものにしていきます。
- ・本来喋らない星晶獣も色んな形で喋ります。
- ・一部キャラクターは顔文字を使用して喋ります。
- ・原作のキャラだけでなく、星晶獣もキャラ崩壊します。
- ・メインストーリーは、原作準拠でアニメも参考にしています。

以上の項目が苦手な方は、ご注意ください。

目次

本編

幼馴染が旅立ち、ババアが来た日

1

星晶獣（笑）

21

光と闇が合わさり

41

GO

65

スーパーザンクティンゼル人の軌跡

名前を決めて迎えよう酔っぱらい

113

縁を感じろ、強敵へともとなれ。風は

いつでも吹いている。

137

こいつは、独楽った

158

クロスフェイト 正義を叫べ（前編）

172

クロスフェイト 正義を叫べ（後編）

208

ドツキの相方来る

248

大笑いハンター

282

クロスフェイト 邪眼が呼ぶ天災

前

編

306

クロスフェイト 邪眼が呼ぶ天災

中

編

326

クロスフェイト 邪眼が呼ぶ天災

後

編

344

衝撃！アウギユステ編

	トリプルフェイト	魔蛇とトレジャー	
	ハンターと(後編)	――	
	こんにちわ、メドウ子	――	10611011
1100	世界一可愛い謎の美少女	前編	
1137	世界一可愛い謎の美少女	後編	
	出会いのガロンゾ編		
	ガロンゾで出会おうぞ	――	1170
	安心してから来る苦勞	――	12131
	些細な約束、大きなトラブル	――	12571
	アイキャンフライは強引に	――	12901
	ガロンゾ帰還への道	編	

	団長とは落ちるもの	――	
	ゴーストがバスターズ	――	
	トラumontまるごと超決戦	――	
	信頼と実績の団長	――	
	飛び出せ、濃霧の島!	――	
	ギャルと青春の旅立ち	前編	
	ギャルと青春の旅立ち	中編	
	ギャルと青春の旅立ち	後編	
	ハピネスチャージの“瞬間”	前編	
1632	ハピネスチャージの“瞬間”	中編	
1664	ハピネスチャージの“瞬間”	後編	
			15871553152114921449139213591324

アナザーストーリー ゆく年くる年

2451

夢の冒険編

木人危機一髪

転寝

不安夢

夢の中へ

夢の“また”夢

夢に吞まれて

ビューティ腐ルドリーマー

見知らぬ悪夢

Dreamers 夢見た者達、

る者達

2770 27282695265326192593256125292485

Repair the Night

mare (前編)

2799

Repair the Night

mare (後編)

2821

少し違う空編 IV

アナザーストーリー 騎空団 for

the New Year

2858

本編

幼馴染が旅立ち、ババアが来た日

一 いい日、旅立て

ある時、俺の住む島ザンクティンゼルへ少女が「墮ちた」。それが全ての始まりだった。俺はその場にはいなかったが、村に住む幼馴染のジータが彼女（ルリアと言う名だと後に知る）の元へと向かった。そして直ぐエルステ帝国の船が現れそこから兵隊達がルリアを狙う。その中でジータはルリアを守り一度命を落とす。

だが奇跡を体験した様な少女であったルリアの力によりジータはルリアと命を共有しその魂を蘇らせた。元より非凡な才能を持つ彼女は己を殺した魔物を打ち倒し兵達は逃げ帰った。

そして、ジータと少女達は旅立つ。自身の親の残した言葉を胸に。少女を救う使命を受けて。遙かなる空の先、星の島イスタルシアを目指して――

二 ワイ、幼馴染が強すぎて引く

だが、だがあえて言おう。そんな事は、どうでもいいのだ。

いや、どうでもいいと言う事は無い、無いのだが——しかしこの事は殆ど数日の内に起きた事で実に事態急変、急転直下の連続である。俺はもうわけがわからない。

ジータは年下の友人であり妹のような幼馴染の少女だ。そのジータがいつの間にか死んで生き返って、しかも星晶獣と言う化け物を操る術をルリアと命を共有する事で間接的に得て元より非凡の才能を更に開花させ俺より一つ下の少女と思えぬ歴戦の勇士の様な風格さえ漂わせていた。「私今なら何でも出来そうツ!!」と溢れる力を抑えきれず、森に出て魔物を狩りまくった彼女を見てどう反応せよというのだ? 「スーパーザンクティンゼル人かな?」と思わず言えば、「やだもー」と照れ隠しの手刀をくらい俺の意識は刈り取られた。よしんば照れ隠しでピンタはわかるが手刀とは、実に殺意が高い。恐ろしく早い手刀、俺でなきや見逃しちゃうね。尤も見えるだけで避けれないがぐえー。

そして帝国兵襲来の次の日。

「私、お父さんに会いに行くっ!」

と、決意した目でいきなり宣言された俺は、尚更どう反応せよと? 間をおいて「は

あ、そうか」としか言えず、ルリアの保護者らしいカタリナと言う女性に取りあえずジータと相棒の子供ドラゴンのビィを共々宜しくと言うぐらいしか出来なかった。

そして更に次の日にはジータ一行は、小さな騎空艇に乗りこみザンクティンゼルを去った。操縦するカタリナさんの操縦が下手だったのか無茶苦茶な飛行をしながら雲海へと消えた騎空艇に一抹の不安を覚えながら、初めて俺はジータが旅立った事を実感した。

この間二日と半日である。ジータ、君は確かに御淑やかなようで嵐の様な性格だが、一変死んで生き返り、一日ちよつとで星の島を目指すとは、落ち着きが無さ過ぎないだろうか。しかもルリアと言うなにやら帝国がらみの問題まで抱えている。心配だ。実際に心配である。

だがどうしてであろうか、不思議と彼女の死ぬ姿はまるで想像できない。いや、一度死んだらしいが多分もう死ぬ事は無いような気がする。それどころか行け行けドンドンと帝国を蹴散らし化け物共も跨いで通るような姿の方がしっくり来るしまつ。いつかきつと、ドラゴンすら跨いで通るかもしれない。噂でそんな奴がいると聞いた事もある。きつとジータと気が合うだろう。

そしてそれで終われば幼馴染が旅立ただけで終わるが、どっこいそうはならず、この時から俺の災難と試練と苦難の日々が始まるのだ。

三 婆襲来

「あの子が旅に出たから次はあんただねえ」

ジータが旅立った次の日、俺の元に村に住むばあさんが現れた。ばあさんはよくわからない事を言いながら突然俺の首根っこを掴み、そのままズルズルと俺を引きずり連れて行った。

恐ろしきはその力であり、普段腰を曲げて歩くばあさんと思えぬ足取りと力に俺の抵抗はまるで意味が無かった。

その日から唐突な地獄の特訓が始まった。

連れて行かれた訓練場で、俺はわけがわからぬままに刀剣類や弓に銃に鎚に槍に格闘技に、果ては楽器までも使い特訓を強制的に受けさせられた。これら武器（楽器も？）の扱いをマスターするまで続けるというのでたまつたものではない。そもそも何故俺がこんな目に遭わねばならぬ。と非難の声を上げるとばあさんは、突然語りだす。

「ジータはあの人の娘……かねてよりその力が非凡である事は、無論わかつていたよ……1を教えればあの子はそれで10を知り、そこから100を覚える。あれは正に天赋の才」

んなことあ知っている。あの娘の凄まじさは今回の事で更に思い知らされたのだから。

「そしてあんたはその逆……剣を振るった事も無ければ弓もまともに扱えない」

それも言われんでも知っている。わざわざ言わないでほしいものである。

「だが、故に面白い。あんたにはあの子と違う才がある」

ばあさんが、目を光らせる。

「言うなればあの子はどのような事も幾らでも受け止め蓄えられる巨大な器、最早大海とも言えるその器は一度蓄えれば尽きず、あらゆる戦術を己のものにする。ならばあんたはなんだ？ あの子とは違うあんたはあらゆるものを吸い取る布さ。今はまだカラカラのただの布切れ。だけどね、あんたという布はこれから技と言う水を吸う。しかもその布は、幾ら吸おうが限界は無い。だが溢れぬ無限の器と違い、吸い続けねばいつかは乾く布なのさ」

なるほど、ばあさんの言いたい事はわかる。要はジータは一度身に付けたらそれを完全に自分の物にしてしまう。一方俺はジータと違い、得た経験を直ぐに己のものとするがほっとけばそれも忘れちまうと。

「だから鍛える。一日も絶えず、怠らず、只管にやるよ」

いや待て、やはりわからん。答えになっていない。ジータと俺の才能はこの際どうで

もいい。何故俺がこんな目に遭つてるのかの答えが出てない。

「そんなの決まつてる。あんたが旅立つあの子を追いかけたそうにしてたからねえ」
 そのような事実はございませぬ。

マジな話、確かにジータは心配だ。どちらかと言うとジータの周り、彼女に振り回されるビーなどの面々のほうだが。ジータに振り回されて何度ビーが死にかけたかわからん。稀に文字通り振り回された時があるのだから悲惨だ。挙句精神を崩壊させ「オイオイ、死んだわオイラ」「オイ、オイ、オ、オイオイラオイララ……オイラアツ!!」となんかヤバイ感じになった時期もあつた。ビー、今頃どうしてるだろうか？ また精神を崩壊させてないといいが。

だがそう言つてもばあさんは「あたしはわかつてるよ、坊主」的な視線を向けるばかり。ねえ聞いて、聞いてクレメンス。

無常にも修行は続行された。

■ 四 デケエ!!

■ さらに暫く経つた時、島に異変が起きた。

ザンクティンゼルには「碧空の門」と呼ばれる場所がある。閉鎖的な島の中で、外に

通じる場所のひとつ。そもそも山に囲まれた所為で騎空艇での飛行技術が向上するまで正に閉ざされた島だった。そんな門へと行くまでに島の中の森を歩く。その森には、古くから星晶の祀られる祠がある。ありがたい場所であり、森には魔物も出るため遊ぶような場所ではなく、子供はおろか大人でさえも近づかない。また、そこには選ばれた巫女などしか近づいてはいけないと言う理由もあった。

唯一、例外としてあのジータを除いて。

彼女は、とにかく奔放でヤンチャだった。だから大人に近づくなと言われた祠だろうと魔物の巣窟であろうと、ガンガン突き進む。それに付き合わされたビィは勿論だが俺も悲惨であった。何度死にかけたかわからない。

話を戻すと、その碧空の門へと向かう祠で異変があった。だがこの異変に気がついたのは俺とばあさんだけであった。ほかの皆は天気が変わったかな程度にしか感じ取っていないが、俺達は大気を振るわせるような力と重圧を感じた。

「どうやら星晶の力が溢れたらしいねえ……」

ばあさんの言う事はよくわからないが、何かえらい事が起きたのは確からしい。果たしてどうするのかばあさんに聞くと「お前がやるんだよ」と言われた。

「星晶獣でも特に力の強いのが、真の力を解放したんだよ。きつとお嬢ちゃんあたりが楔を壊したんだね。ただそれだけなら力が漏れる程度だろうけどね。これも多分だけ

ど、お嬢ちゃんが旅に出る前にここで遊んで偶然祠をいじったんだろうねえ」

待つてほしい。ジータが何かしたのはまあしようがないとして、今の事態と俺が解決する事が結びつかない。俺に彼女の尻拭いをしろと言うのか。

「ほつとくと、溢れた力の制御が利かなくなる。危険だから止めるよ」

サラツと言うけど、俺がだよな？

「当たり前さ、修行の成果をみせてみな。あんたなら一人でもあの状態もいけるさ」

「無理っす」

俺は即行で逃げ出した。

「逃げ切れると思うのかい？」

だが後ろを向いた瞬間にばあさんが目の前に現れた。即座に俺の鳩尾に拳が抉り込まれ、俺の意識は一時途絶えた。だが手加減をしたのだろうか、俺の意識は少し後で目覚める。そして目の前に現れたのは、今度はばあさんではなく巨大な女だった。女だった。3頭の首の長い竜を従える巨大な女だった。

「人ノ子ガ、風ノ力ニ敵ウト思ウノカ」

思いませんから帰っていいですか？

五 勝ってしまった。

■
あの日、突風旋風大嵐で大騒動であった碧空の門付近での戦いは俺の勝利で終わる。実に激しい戦いだった。巨大な女ティアマト、彼女は風を司る星晶獣。ティアマトは、まずその巨体が既に圧倒的な武器であるが、それ以上に常時突風が吹き俺を吹き飛ばそうとして、そうかと思えば上下左右360度全方向から紫の光線が飛び、圧縮した風の力で土地ごと吹き飛ばそうとしたりと最早人間のやる戦いじゃないと思った。それで勝ってしまったのだから我ながら自分も化け物じみたと思う。ばあさん経由で以前手に入れた火の属性付与の剣が無ければやられていた。

戦い終わってコテンパンにしたティアマトに話を聞いてみる事にする。少しよんぼりしながら巨体のまま正座して他の三頭の竜達も頭をたれていてちよつとかわいい。

彼女ティアマトは、普段は別の島であるポート・ブリーズ群島で祀られる土地神である。そんな彼女が少し前になにやら帝国の罠にはまり、同時に「最近人間ガ私ヲ信ジナイ」とかナイーブだった所為で案外あつけなく洗脳されたとか何とか。んでポート・ブリーズ崩壊の危機の中それをジータが物理で止めたらしい。やるな、流石ザンクティンゼルのリーサル・ウエポン。

以降ジータと共に居る蒼の娘ルリアの呼びかけに応える形で力を貸していたが、旅立

ちより以前にここで遊んでいたジータがいじった祠に綻びが生まれここにも顕現した。

ちよつとまつてよ、君普段ポート・ブリーズにいんじやないの？ と聞くと、あの姿は「マグナ」と呼ばれるものでありどっちが本体とかあまり区別は無いとか。マグナの力が強すぎるためにポート・ブリーズ一箇所を力留めておくとかヤバイから、封印に適したこの地に他の星晶獣と寝てたと言う。

ほーん？ 他の星晶獣、と。

この時点で言っておこう。嫌な予感しかない。

暢気に茶を飲んでたばあさんに視線を送ると「ひっひっひ」と急に魔女みたいに笑いながら「今更祠を直したつて、溢れた力は収まらないよ」「なあに今日明日つてわけじゃない、しばらく体を休めておきな。そしたら直ぐに修行だよ。次何が出るかはわからないからねえ」だと。

更にはあさんは「お嬢ちゃんならもう少し上手くやれたかもね」「婆の私でももう少し早く出来る」とダメだし。ならばあさんがやれよと非難の目を向けるが「これも修行だよ」と言われる。

冗談ではない、逃げるぞ俺は。

六 ■ 【魔境】 ティアマト、我が家に居つく【ザンクティンゼル】

■
なんかティアマトが縮んだ。曰くマグナ本体を祠の所で休ませた状態での分身かつ省エネモードらしい。マグナ形態のボインちゃんからちよい控えめボディになり身長も俺よりちよい下程になる。三頭の竜（ニル、ゼル、エア）もミニサイズでどこかビイを思い出す。

いや待て。ビイを思い出してちよつとほっこりしたがなんで君縮んだの？ あとなんで家にいるの？

「星晶ノカラ、正面カラ打チ破ル人ノ子、才前ニ興味ガワイタ」

いや知らんがな。

「アトアノ老婆ガ、才前ヲ鍛エテヤレト」

またばあさんか。あのばあさん、ティアマトを修行サボり阻止のために派遣しやがった。なんとというばあさんだ。監視役に星晶獣使う奴があるか。第一、いきなり竜を三匹引き連れた女連れ込んで他の人にどう説明すればいいのだ。俺は村で一人暮らしで人の目も在ると言うのに。

「なんだ、ジータちゃんの旅立ったと思つたらまた変なのが来たなあ」

全く心配なかった。

村人全員ティアマトとニル達を見ても「わ、知らん奴」「ほ、何時の間に？」程度で、

俺の家に引き取る事ということを言うと「がんばっ！」で終わった。

ジータとビイと言う前例を忘れていた俺は、同時にこの村の住人がばあさんほどでないにしろちよつとおかしい事を忘れていた。

不本意ながら無事にティアマトが我が家の住人になった事で、俺の修行バックレ計画はほぼ消えてなくなった。というかティアマトが「コノ食べ物ハナンダ?」「食エルノカ」「風呂ツテナンダ」「服方無イゾ」とか世話がかかる。星晶獣つて神様じゃねーのか? なんも知らないじゃないか、と憤慨していると「人ノ生活マデ知ラヌ」と言われた。とにかく赤子より手のかかるティアマトに振り回されサボりどころではない。それどころか朝昼晩ティアマトだけでなくニル達の世話までするのだ。俺が。もう一度言う、俺が。

朝起きると、現在のサイズで寝たことが無いティアマト達はベッドの上でこんがらがっていた。最初そう言うプレイかと疑ったが、ティアマトもニル達も息苦しそうだつたので寝相が悪いだけのようだ。俺の朝は彼女達を解く事で始まる。

飯を食わせるとティアマトが外でザンクティンゼルに風を吹かせる。風を司る彼女は、風を吹かせるのが日課と言う。風を吹かさないと調子が悪くなるとか。ウンコみてーだなど言ったらトルネードディザスターで吹き飛ばされた。

ばあさんの修行に行く前に洗濯をする。洗い物を外で干すとティアマトが風で乾燥

させてくれるのでこれは助かる。星晶獣でもトップクラスの存在を洗濯乾燥に使うなど全空でも俺ぐらいだろう。

昼前、修行開始。またばあさんにしごかれる。今まででも大概辛かったのにまた修行の激しさと使用武器の種類が増えた。俺の使いたい武器の要望を言うとはあさん経由で何かしらの武器が手に入る。だが最終的な武器チョイスは俺の実力に見合ったばあさんチョイスなので、完全に要望通りの武器が来るかはわからない。しかしばあさんの武器入手経路が謎なのは気になるが、聞いたらなにか怖い気がするので聞けない。

「その内あんたもいろんな島に行って、いろんな武器を自分で手に入れるといいよ」
ばあさん曰く、武器には人との縁があるものが多いと言う。縁が強い武器を手に入れば、武器と縁のある何者かと出会い仲間となるかもしれない。おそらくジータもそうしているはずだと。

じゃあ俺の武器は、縁もゆかりもないちよつと良い武器と言う事かと聞けば、「あんたにはそれで十分さ」とにべも無い。仕方なく俺は、ばあさん経由で手に入ったちよつと良い武器でセコセコ修行するのである。

■ 七 ■
もつと熱くなれよっ!!

家が揺れた。急に嫌な気配がすると思つたら、圧迫されるような感覚と共に嫌に村全体が熱くなった。そしてこの感覚は、ティアマト出現の時と同じ感覚であつた。

「どうやら次が出たみたいだね」

ばあさんがまるで焦つた様子も無く笑つて祠の方角を見ている。

「この熱気……どうやら相手はとつても熱いようだよ。水属性武器を持つていきな」

それはいいが、姿が見えない段階でこの熱さだと死んでしまふそうだ。無言の抗議が続けるがばあさんはそれを無視。そしてピクニックに行くようなバツクの中身を見せる。中には、赤い瓶が何本もあつた。

「死に掛けたらエリクシールぶつ掛けてやるから安心おし」

なにも安心できない。

エリクシールと言つたら秘薬である。一応は市場に出回るようだが、基本的に高価で模造品も多く、手に入つても精々ちよつとした体力回復効果のあるハーフサイズ程度のはず。それをばあさんが何十本ももっている。

この際どうやって手に入れたかは追求しないとして、この瓶一本あれば確かに即死でもなければ死ぬ事はない。ないのだが、それはつまり、俺は死に掛けても戦わされるといふ事を意味した。

ふと、近くでビーチ用の折り畳みベッドでサングラスを付けてキンキンに冷やした飲

み物を飲んでくつろいでいるティアマトを見る。

「ティアマトは、手伝ってくれたりとか」

「アレハ熱イカライヤダ」

にべもない。あとお前、そのベッドどうした？ 買った？ 金は？ 俺の金で？

買ったの……あ、そう……勝手に、おま、お前、お前……。

いや、しかし冗談ではない。確かにティアマトには勝てたが、次もそうとは限らない。俺は逃げ出した。今度はばあさんの動きを予測し逃げ切つてやる。

「予想して逃げ切る。そう考えてそうだけど甘いよ坊主」

が、またも回り込まれた俺は手刀で意識を刈り取られた。次の展開、予想できます。

「——ッ!! ——!!!」

「何言ってるかわからねえ」

熱さで目を覚ますと、ティアマトほどではないにしろ巨大な鉄の鎧が俺を見下ろし言葉にならぬ鉄が擦れる様な音を上げていた。手には巨大な剣。当然ばあさんとティアマトはいねえ。

やるつきやない（諦め）。

■

八 　　また勝ってしまった。

■ フアツキン^熱ホツトツ!!

戦い終えた俺は脱水症状で死に掛けた。ばあさんに運ばれ家でティアマトの出す風で冷やされているとティアマトにエリクシールぶつ掛けられた。ティアマト、違う。それは口で飲む物です。けどそれで症状が改善されるのだからさすが秘薬である。

今回の相手は、巨大な鉄巨人コロツサス。いやあ、今回も強敵でしたね。などと他人事のように言いたくもなる程疲れた。ティアマトの時も大概疲れたが、今回はとにかく熱かった。熱は熱いし、気温は暑いし、コロツサスの装甲も厚い。熱い、暑い、厚いと熱盛状態だ。正直やってられない。次元断とか言う一文字の斬撃なんか食らえばミンチより酷い事になるのは間違いなかったろう。

結果的に鎧もボコボコにしてやったコロツサスは、すっかり熱が冷めサイズダウンして俺の家にいた。

お前もか、コロツサス。

「……………ッ！」

「何言ってるかわかんねえ」

ティアマトの通訳を交え一応流れで話を聞けば、ティアマトと似た展開であった。

コロツサスは、もともとドラフ族と言うでかい角付きの種族が主に居るバルツ公国で

作られた星晶獣。ざっくり言うとか昔々労働力としての奴隷だったドラフ族の怨念が宿ったとかなんとか。怨念がおんねん、などと下らない事を言いたいほど暗い話で言う事無い。まあ暗い話はどうでもいいや。結局未完成だったけど最近帝国がなんかいらん事して結果的に完成してバルツヤベエとなつた時に、ジータが現れ物理で止めた。ジータ、また君か。

結果的にティアマト同様呼ばれたら力を貸してるとか。

それはいいんだけど君なんで家に居るの？

「才前ガ倒レテル時ニバアサンガ、家ニ来イト連レテ来タ。修行ト監視用ニダソウダ」

あの婆っ!!

「ヨカツタナ、家族ガ増エタゾ」

「よくねえよ、ティアアちゃんっ!!」

平穏が、ガラツと壊れる、音がする。俺、心の俳句。

■ 九 (・・ω・・)

■ 拜啓、ジータさん。お元気ですか？ 落ち込んだりばかりで、俺はもうだめかもしれ

ません。もし話が出来たらお聞きしたいのですが、そちらのコロツサスとは、どう

やってコミユニケーションをとっていますか？ 我が家のコロツサスなんです、ちよつとおかしいかもしれません。

「(◇▽)オハヨウ」

これ、これね？ コロツサス。ちよつと意味わからないけれどね、コロツサスなのね。今朝起きたらこの……これ、なに？ なんて言えばいいのか、とにかくこうなつてた。

「(、・ω・) / シヤキツ」

わあ、凄いい感情豊かなのね君。それでそれ、どうなつてるの？

「(、・ω・) ?」

なんかできた？ 気合で？ 自分でもわからない、と。このなんと言うのか、表情が現れてるのか、浮かんでるのか、俺の脳に直接見せてるのかわからないが、とにかく表情がわかるようになった。気合で何とかなるなら発声能力を取得してもよかつたんじゃないかと思う。

「(—ω—)。(。—ω—)ンーン」

あ、これでよかつたのね。

「(、・ω・) ウン」

まああんたがそれでいいならいいけどさ。サイズダウンしてもごつつい黒い鎧なも

んだからギャップが激しい。本気でジータに会う機会あったらあっちのコロツサスはどうな感じか聞いておこう。

「(*、▽、*) ノオハヨウ」

「ウワ、ナンダオ前」

テイアマトもびつくりだった。

ところでコロツサスだが、案の定テイアマトとニル達で我が家のキャパシティーは当然の様にオーバー、入りきらない。すまんなコロツサス、お前は基本外で置物になってくれ。雨降ったらちちゃんと屋根は作るから。

「(*、▽、*) ヨロシクオネガイシマス」

すまんな、恨むなら無責任に俺の家によこした婆さんを恨め。

なお、村人達は「でけー案山子だな」「なんだ動くんか、ちよつと荷物運ぶの手伝って」とちよつと反応が鈍すぎる。

「\、▽、\、\、イイヨツ!!」

そして嫌な顔一つ……そもそも表情筋がないが、喜んで村の手伝いをするコロツサス。

オイオイオイ、良い奴だわアイツ。

「ヨクヤルナ、アイツ」

一方ティア様、家のソファでくつろぎながら菓子食ってる。薄い服をだらしくはだけさせて、色っぽさよりおばさん臭い。君数日でイメージ崩壊してない？ ニル達もだらしない主(?)に困惑している。

「アノ老婆二頼マレタノハ、才前ノ監視ト修行デアツテ、家ノ事ナド知ラン」
ちくしよう。

だがそれは構わないが、そんな生活すると太ると思う。

「星晶獣ハ太ラナイ」

「本当かよ……」

「太ツタ星晶獣ナンテイナイ、ツマリ星晶獣ハ太ラナイ」

星晶獣の事にそんな詳しくないのでそう言われると否定も出来ない。だとしても家の食料を勝手に食わないでほしい。

なお、数か月後の事。見事腹の弛んだデブマトが出来上がり、世にも珍しいダイエツトに勤しむ星晶獣(笑)の姿があった事をここに記す。

きっともう星晶獣の住人は増えない。ありえないしね。ただでさえ家にトップレベル^s星晶獣^rがゆるキャラ化して住んでる状態が異常なのに、これ以上そんなことある？ きっと無いさ、ないないない。アハハ。

星晶獸（笑）

■ ■
一 星晶獸（笑）

今日の星晶獸。

ザンクティンゼルはキハイゼル村から。今我が家には二体の星晶獸がいます。ええ、ええ普通居ませんよ、星晶獸二体が普通の民家になって。しかも方や基本家でダラダラしてる星晶獸（笑）。方や表情筋ないのに表情豊かになった鉄巨人。

なんだこれ？

「ドウシタ、モット走レ走レ。デナケレバ死ヌゾ」

そして家じゃダラダラ女の星晶獸（笑）のティアマトが、今俺に向かって全力で紫光線を撃ちまくる。当然修行のためである。実質イジメだが。

この時のティアマトはサイズアップする、と言うか通常の巨人モードになる。ただしマグナ形態ではない姿。ポート・ブリーズでのティアマトはこれがスタンダードらしい。しかしこの状態でもポート・ブリーズの土地神、風系星晶獸トップレベルの実力は

伊達ではない。迫る光線の威力はマグナ状態の時に比べても遜色ない。しかも俺に負けた事を少し根に持つてるのか、攻撃に私怨を感じる。

「逃げるだけじゃ駄目だよ坊主。ちゃんと攻撃おし」

この激しい攻撃の中、切り株に腰掛けて暢気に茶を飲み観戦するばあさんが俺に檄を飛ばす。そうは言うがこれでも必死なのだ。マグナで勝てたんだから楽なもんだろうと俺もちよびつと思つた。思つたけどそんな事ないです。やめていいですか？ マグナに一戦勝てた事とティアマトに常勝無敗である事はイコールでない事を痛感した。やめていいですか？

「あんたも刀剣類の扱いがやつと上手くなつたんだ。感覚忘れないように死ぬ気でやりな」

死にそうになつたつてあんたエリクシールぶっかけて特訓再走させるじやないですかーやだー！ しかもエリクシールハーフまでしこたま溜め込んで、ただの体力疲労はそれで回復させてくる。今ばかりは秘薬の高い効能が恨めしい。

「あと5分したらコロッサス追加だからね」

「デバン（。▽。）キタコレ」

「死ぬわっ!?!」

「だからやるんだよ」

この婆悪魔か何かじゃないだろうか。あとコロツサス、やる気出さないで。死ぬ。

吹き荒れる暴風が炎の斬撃を飛ばし俺の周りには熱風が吹き荒れる。ティアマトのエリアルクラスターとコロツサスのフォースグラウンドで風が吹き荒れ大地が弾ける。ちくしょう、この野郎、馬鹿野郎。俺にも我慢の限界と言うのがあるんだ。

「二度とはいえ仮にもテメーらボコボコにしたんだからなっ!! 見とれこの野郎、馬鹿野郎っ!!」

おそらく逃げ回ってもばあさんが終了を認めないだろう。倒すことでしか俺の安寧は訪れないのだ。見せてやろう、無駄に鍛えられた結果身に着けた秘儀・戦闘中の武器取り換えの術。

「ムウ、小賢シイヤツメ」

「うるせいやい」

婆さん曰く。武器には、構成要素が幾らでもあると言う。単に火や水、風に土などの属性でなく、武器にこもった製作者の思いや時を経て宿った力など様々だ。それらを組み合わせ構成する事で、戦いを有利に進める事が出来るのだ。今俺はばあさん経由の武器しか持っていないが、それでも武器特有の特性がある。いつかもっといい武器、更Sに良い武器Rを手に入れればその幅も広がるだろう。

現状俺は今あるちよレいアい武器で頑張るしかないが、戦う二体の星晶獣の弱点属性を

個別でつけければ幾分か楽になる。特にティアマト、テメーは許さん。

「お前いい加減俺の金で勝手に買い物すんな!!」

「ヨク寝レル枕ガ欲シカツタンダツ!!」

「だからつて5万ルピもする枕勝手に買うなっ!!」

5万ルピの枕。信じられるだろうか。5万ルピだ。この女、己が惰眠を貪るために家主の俺に黙って且つ俺の金で勝手に5万ルピもする枕を購入しやがった。「フカフカダゾツ!」と興奮気味に枕を見せに来て値段を聞いた時俺はぶっ倒れた。今月の生活費の殆どを枕一つに使いやがった。それが星晶獣のやる事か。結果両手足を縛り、長いアイツの髪を柱に括り付けて目の前でシチューを食つてやった時の悔しそうな表情を見て幾分か気は晴れたがそれでも許せん。なおニル達3匹に罪はない。許せる。

「(・ω・) ケンカヨクナイ」

コロツサス、君なんでそんないい子なん? もういいよ、ティアマトは祠の本体の方帰つてコロツサスだけいてよ。

「祠帰ツタラ、才菓子食ベレナイジヤナイカツ!!」

「子供かつ!!」

星晶獣(笑)め、世俗に染まり過ぎだ。

なお、この言い合いの最中でも戦いの手が緩められる事は無いので、やはり俺も大概

おかしくなりつつある事を実感した。大変複雑な気持ちである。

■ 二 二度ある事は、もつとある

毎日毎日修行とティアマトの勝手な買い物に怒り、ニル達の世話で少し癒され、ティアマトの一切家事をやらないスタイルに怒り、コロツサスとのコミュニケーションで癒され、ティアマトとの食事ではグルメぶったティアマトのうんちくに怒り、実は酒乱だったティアマトの暴走に怒り狂い、枕に加え安眠グッズを買おうとするティアマトに怒りの奥義をぶち込む毎日が数週間続いた。

そしてまた来た。あの嫌な感覚。圧迫するような星晶の力。

「あつて欲しくなかった」

「嘆いたつて無駄だよ。この感じ、次は水かねえ……土の武器を揃えておきな」

相変わらずばあさんは冷静そのもので、戦いに向かう俺に武器構成をすすめる。

「あとあんたは基本戦術とか無い脳筋だから、今回は……そうさねえ、ビシヨツプあたりで攻めな」

珍しくばあさんからのアドバイスが多い。脳筋は余計だが。こら、ティアマト笑うな。

ばあさんによる地獄の特訓によって、俺の武器の応用力は高くなったと思う。少なくとも、帝国の雑兵よりは断然強いはずだ。今でこそ星晶獣（笑）となったティアマトであるが、星晶獣でもトップクラスのマグナ状態の彼女やコロツサスに勝てたのだからこれぐらいは自負してもいいと思う。と言うか思わせて。そんぐらいしか今のところ修行の意義を見出せない。

そのおかげで俺は多くのジョブを選べるようになって来た。ジョブとはファイター、ナイト、ウィザード等、剣や斧に魔法等それぞれが武器や扱う技に特化した武器と鎧などの構成だ。ジョブそれぞれに色んな特徴があるが、今回ばあさんが勧めたビシヨップは、中堅かそれよりも有名な騎空団にも一人は欲しいサポート系ジョブである。

「そろそろ純粋な殴り合いでの勝負が難しくなりそうだからね、これも修行だよ」

尤もである。尤もであるが、一つ聞きたい。

「基本サポートジョブ構成で俺一人？」

「当然」

俺は逃げた。今度はあらかじめ用意した煙幕まで使用して逃げた。フハハ、とらえきれまい、この動き。

「戯ケメ」

瞬間、ティアマトの風で煙幕は吹き飛ばされ、晴れる煙の中から飛び出たばあさんの

拳が俺の意識を刈り取った。

あのねー、僕この後の展開知ってる。

「UGYAAAAAAAAAAAAAAAA!!」

「うるせえっ!!」

バカでかい声で目が覚めたら水色の巨大な奴がいた。竜なのか、蛇なのか、魚なのか、それともそれ以外の何かなのか。全長であればティアマト・マグナを超すかもしれない巨大な怪物は、自ら生み出した水流で俺を飲み込んだ。

■ 三 サンサンサン、さわやかリヴァイアサン

危なかった。死ぬかと思った。死ぬかと思った事は、もう既に経験済みだが今回は、またさらに死を覚悟した。クソデカ魚類のリヴァイアサン、水を司る星晶獣。もうね、水ヤバイ。あいつ水を引っ切り無しに生み出しては操り俺を溺死させようとする。やる事は単純だが一番きつい攻撃。水の中に入る事は、既にリヴァイアサンの腹の中にいるのと同意なのだからたまったものではない。土壇場の気合で取得したザンクティンゼル泳法で乗り切れなければマジで溺死したと思う。決るような潜り込みに弾丸の如く進む泳法は、リヴァイアサンの水流に何とか打ち勝てた。ありがとうザンクティンゼ

ル泳法。ひとえにばあさんに鍛えられた肉体のおかげで可能だったザンクティンゼル泳法、ただどここんな目に遭ってるのは、ほかならぬばあさんのせいなのでばあさんへの感謝の念はまるで無い。

ザンクティンゼル泳法を会得した俺に最早水攻めは効かぬ。それでも阿保みたい固いバリアみたいなのを張るのでピシヨップ怒りのデイスベルで解除して最終的にポコポコにしてやった。魔法？最終的には物理だよ。杖でも殴れるから良し。サポートジョブとは、なんだったのか。

でまあ聞きましたよ。ええ、事情をね。君なんでこんなとこいんの？ 結局「Gua a……」とかしか叫べないリヴァイアサンに代わりテイアマト通訳再び。

リヴァイアサンは、通常水の島アウギユステ列島におり、そこで滾々と清らかな水を生み出し人々を見守る水の星晶獣。アウギユステの水、広大なそれは海と呼ばれこんな僻地のザンクティンゼルでは、縁も無い膨大な水の広野と俺は聞いている。その海が最近とにかく汚れてたまらなかつたそう。汚い臭い気持ち悪いの3Kそろい踏み。めっちゃイラつきテンションアゲアゲ状態の時帝国に操られたそう。

また帝国か。

アウギユステ消滅の危機（帝国原因による島消滅の危機今季3度目）であったが、現れた騎空団「ジータとゆかいな仲間たち団」を率いる団長ジータによって物理で止めら

れた。

またジータか。

なんだろう、ジータが活躍するに比例して俺の心労と肉体疲労が蓄積されていく。あと「ジータとゆかいな仲間たち団」は無い。いくら何でも無い。自己主張どころじゃない。きっとビーあたりが必死で止めた事は、想像に難くない。あの女は、捕まえた魔物のウインドラビットをペットにしようとして、名前を「スーパードラビリアントマサムネ三世」にしようとした前科がある。なおそのウインドラビットは、スーパードラビリアントマサムネ三世にされる前にあまりに不憫に思った俺とビーの手で解放した。心なしか目に涙を浮かべ俺達に礼を言いながら逃げていった気がした。

はい。さて、もうね、この時点でもう俺は、疲労困憊であるわけ。なのにもうわかってやうのね。次の展開。予想するより早くわかってしまいます。

「バアサンニ頼マレテ、買ッテオイタゾ」

我が家の庭に幅10mぐらいの巨大な生け簀が設置されました。ティアマトがばあさんに頼まれた俺の金で買った工事費込み25万ルピの生け簀。うん、もつと安いのがあったと思う。一番いいのいいと思った？君もつと買物と言うものを覚えようか。

中身？うんうん、中身はなんだろうなあ、俺気になるう。

〈水は弱酸性で頼む〉

「こいつ、脳内に直接……っ」

知ってた(覚り)。

生け簀で悠々と泳ぐサイズダウンの省エネモードリヴァイアサン。図々しくも水の水質の注文をしてきた。しかも発声器官がないため念話で。むだに星晶獣っぽいことしやがって。水槽に入った星晶獣なんてもう(笑)だよ。星晶獣ならぬ水槽獣ってか、馬鹿野郎。お前ティアマトと同類だ。ちくしよう、いいじゃねえかどうでも。水なんてみんな一緒だよ。

〈我は敏感肌だ〉

「3枚におろすぞでめー」

もう自分で調整しろよ水出せんだろお前。

案の定リヴァイアサンは、ばあさん依頼での俺の監視兼修行要員であった。「これだ三属性の攻撃への特訓ができるよ」とばあさんは満足げだが勘弁してほしい。ティアマトとコロツサスに加えリヴァイアサンの攻撃が入り混じる特訓をする事になるのだから。

「(・ω・) ダイジョウブ?」

■ ほんとコロツサスは癒しやで。

四 風の噂は、ろくでもねえ

■ ザンクティンゼルに噂が流れてきた。月に何度あるかわからない行商の船が立ち寄り商人達から聞いた噂。

「なんでも、「ジータとゆかいな仲間たち団」とか言う新興の騎空団がえらい活躍しとるとよ。聞いた話じゃここ出身とか言うじやねえか」

「名前はともかく、とにかくすげー活躍ぶりなのよ」

「おう、名前はともかくどんな星晶獣にも負けないとき、名前はともかく」

「仲間も少数だが全員が凄腕。特に団長のジータは、一人であらゆる武器を扱って手のつけられない強さってな。名前はともかく」

名前はともかく。

ジータの活躍は、空に轟き始めたようだ。知ってるけどな。ティアマト始めリヴァイアサンの暴走まで止めたのだ。当事者から聞いたのだから間違いない。その活躍と同時に俺の命の危機が増えていくが。

同時に壊滅的な彼女のネーミングセンスも広まりつつあった。きつと彼女は満足げだろうが他の団員のなんとも言えない表情も全空に広まってるだろう。たとえどんな凄腕でも噂される度「あの、ジータとゆかいな仲間たち団の」と頭についてしまうのだ

から当然だろう。

〈あんな酷い名前の団は、我も初めて聞いた〉

湯に浸かるように優雅なリヴァイアサンがしみじみと言う。皆さん、庭の生け簀でくつろぐ星晶獣（笑）が見れるのは家だけですよ。

そしてただ飯を食らわせる気は俺にはない。ただでさえティアアマトの浪費癖が酷いので無理やりこいつら全員には、家事をやらせないと気がすまない。おうおうおう、働かないと無理やり祠にぶち込むからな。

特に洗濯だ。リヴァイアサンの水流で衣類の汚れを吹き飛ばし、ティアアマトの風で脱水、乾燥、コロツサスの熱い籠手でアイロンをする。なんだよ、なんだよこいつら便利すぎ。一家に一体星晶獣かよ。

とにかくティアアマトが嫌がるが菓子を没収するとしぶしぶ働くのでいよいよ子供みたいだ。リヴァイアサンもなんとなく嫌がったが、光属性武器で雷の力を持つナイフを水槽に入れたら言う事を聞いた。コロツサス？二つ返事で手伝ってくれました。おう、他の星晶獣（笑）、コロツサス見習えよ。

■ 五 巨女、再び

麗かな午後。相変わらずばあさんの修行に悲鳴をあげティアマト達の3体の星晶獸から攻撃を受け必死に攻撃をかわしては、反撃してを繰り返すを行っていた時。

「おや、次が来たねえ」

皆が動きを止めた。

「コレハ、アイツダナ」

〈ああ、あいつだ〉

「（——）ウン」

どうやら皆この気配を知っているようだった。

「オイ、アイツハ、土ノ星晶獸ダ」

まえのばあさんに続いて、ティアマトが珍しくまともなアドバイスをしてきた。驚きである。

「ダカラコレヲ使エ」

ティアマト、と言うかニルが口に一振りの剣を差し出してきた。鏢近くの刃に鋭い返しがついた紫の剣。その意匠には、凄い見覚えがあった。

「え、これティアマトプレゼンツ？」

ぶつちやけティアマトの従えるニル達を剣にしたような姿だった。

「私ノ加護ヲ与エタカラ私ノ技モ使エル。今マデノニ比レバ遙カニ良イ武器ダ。役ニ

タツダロウ」

ちよつと、ちよつと信じられます？あの、あの惰眠を貪り人の食料を勝手に食い、人の金で勝手に買い物をするあのティアマトがまるで威厳のある星晶獣みたいな事言ってますよ。ちよつとコレは、認識を改める必要があるかもしれない。

「相応ノ鍛冶家ニ頼ンダ。ソノ剣ヲ創ルノニカカツタ費用ハ、才前ノ金カラ引イトイタカラナ」

「ぶつとばすぞでめー」

やはり（笑）だった。

まってるまってる、この剣幾らかかかったの？普通のやちよい良いのなら、安くて1000か良くてまあ4、5000ルピで買えるよね？

「私ノ加護ヲ受ケルニ相応シイ剣デナケレバナラナイ。一カラ創ルヨウニ依頼シタ。シメテ12万ルピダ」

クレイジー。

「もうやだ、俺帰るっ!!」

俺の金勝手に使われてまで戦いたくない！やだやだ、俺もうやだ!!

「無駄だよ、無駄無駄」

「くそうっ!!食らえババア、怒りのドライブバーストッ!!」

「甘いよ坊主ツ!!」

「ぼへえっ!?!」

逃走経路に立ちふさがるばあさんに我が怒り込めた斬撃を繰り出すがあっけなく躲かれてしまい頸動脈辺りをクニツとされ俺の意識が途絶えた。知ってます。この展開、4度目。

「——ツ!!」

「何言ってるか、わからねえ」

コロツサスと同じ反応をしてしまう。

目が覚めたら目の前にでかい女がいた。フワフワスカートをはいた耳鳴りみたいな声を出す女の星晶獣だった。

■

六 ユーグユツグユツグ ユツグドラツシル

■

強い。この女、土の星晶獣ユグドラシル強い。まあ勝ったがね。

我が家の星晶獣の面子と比べても若い少女の容姿をした彼女だが、俺たちが暮らす島、即ち土を司る力は、尋常ではない。リヴァイアサンの時もそうだが、生き物が無意識に、そしてもつとも必要とする自然の物を司る者達は、強すぎる。まあ勝ったがね。

大地をうねらせ盛り上がり襲い掛かる土の槍。吹き飛ばされたりしながらも戦うが、このユグドラシル草や木まで操れるときたもんだ。森の木々が俺を囲い襲いだしたのには、大変参った。まあ勝ったがね。

やつてられんので火属性のナイフで焼ききって、がむしやらに突貫して、武器で焼ききって、突貫して、焼ききって、適当にティアマト剣（仮）を取り出し今必殺のエリアルクラスターで撃破。ポコポコにした。それでも俺の体もポロポロで帰ってからは、エリクシルハーフのお世話になった。まあ、勝ったがね。

しかも今回俺が家に帰るともうユグドラシル居ました。展開速いね。と言うかなんかマグナ状態より縮んで衣装も大人しくなったユグドラシルが家で菓子食ってんの。ティアマトに薦められた？あいつ居候と言う立場をわからせてやる必要があるな。

はい、それでこれも恒例のね。事情を聞いてみようのコーナー。

彼女の場合ちよつと今までと事情が異なる。まあ大凡は、同じのようだが。帝国関係の奴が彼女の普段眠るルーマシー群島でシャレにならない悪戯して目が覚めて寝起き悪くて暴走して丁度いたジータの手で再び眠りにつかされた。けど眠りが浅いのか、今でもちよつと暴走気味でこっちのマグナも影響を受けたそうだ。低血圧かな？

「……………」

彼女は、基本しやべらない。コロツサスのように奇天烈コミュニケーションも無けれ

ば、ティアマトのように片言でなく、リヴァイアサンのように念話でもない。不快ではない耳鳴りの様な音を鳴らしているだけだが、それでも何故か彼女の意思はわかる。なんだらう、一番星晶獸っぽい。

そしてえらい申し訳なさそうな表情で落ち込んでいる。暴走気味のまま俺を襲った事を悪く思っているようだ。「ソウ落チ込ムナヨ」とティアマトが彼女の口元にクツキーを運ぶと、申し訳ない顔でポリポリ食べている。まてまて、なにそれ可愛い。ちよつと俺にもやらせて。

「これもあげよう」

「――」

スティック状のチョコ付きビスケットを差し出す。

「――♪」

「そうかそうか、もつと食うといいぞ」

お気に召したようなのでクツキーやらビスケットやら出す。喜べ俺、コロツサスに続く癒し枠だぞ。やったぞ俺。

「オイ、私ト扱イガチガウゾ」

「星晶獸（笑）は、黙っててくれませんかねえ」

「ヨーシ、表出口」

本日第2ラウンド開催であった。

■ 七 家を作るなら、星晶獣（笑）のいない癒し系コロツサスとユグドラシルのいる家にしたいのではありません。

■ 我が家のゆるキヤラ星晶獣（笑）が4体になった。

いい加減家のキヤパシティーどころではない、家の中にティアマトとニル達3匹のチビ達。庭に生け簀にコロツサス。そしてユグドラシル。幾らなんでももう無理だ。だがユグドラシルを家の外に出すわけには行かない（使命感）。ならニル達だけ残してティアマトだけ追い出そうと思った。

「フザケンナ」

却下された。

しかし拡張するにも金がない。なんでないってそりやもう言うまでもなくティアマトのせいである。枕の5万に始まり生け簀の25万、ティアマト剣（仮）の12万、その他勝手に注文したり盗み食いで食費などで込々彼女だけで50万以上飛んだ。一人暮らしてほぼほぼ自給自足のキハイゼル村のためにそれなりの貯金があつたはずが、どんどん溶ける。こうなるといくら自給自足可能な自然の村でも家を工事する金どこ

ろか、しばらく生活も危うい。

「——！！」

「お、おい？」

俺の金への執念を感じ取ったのかユグドラシルがなにか決心をしたようで唐突に家を飛び出した。待つんだユグドラシル、癒し梓のお前を外に追い出すわけにはいかな
いっ！！

「ダカラ、対応ガ違ウ！！」

うるさい、（笑）！！

ユグドラシルを追いかけるとすぐ外で彼女は、なにか唸りを上げて両手を掲げていた。

「——ッ！！」

彼女が雄たけびを上げるともりもり俺の家が建つ敷地が盛り上がる。するとどう言う事か、俺の家を取り囲むようにして大木が生えてきてグングン育つではないか。しかもそのままその大木は、形を蛇の様な動きで形を変えついにそこには、100%自然素材で出来たメイド・イン・ユグドラシルのログハウスが我が家を啜え込むようにして出来たではないか。

なんということでしょう。あれほど星晶獸（笑）のせいで狭く住み辛かった我が住ま

いが匠の手で立派なお家になったではありませんか。

「♪」

ユグドラシルが少し誇らしげに俺を見る。

「星晶の力の使い方、ナイスだね！」

サムズアツプ。

ユグドラシルが来た事で我が家は、予想しなかったリフォームが行われたのだった。

光と闇が合わさり

■ 一 旅立ちへの予感と必要性

ひよんな事で完成した家の拡張。居住性が抜群なのは言うまでもない。一本の大樹から変形したのにもかかわらず、扉もついでに部屋も区切られ、間取りもバッチリでいつの間にかリヴァイアサンと協力して水道までひかれていた。なにこれステキ。見た目は巨大な大樹なので村人達も騒然とした。星晶獣が我が家に現れた時より驚いている事は、この際無視しよう。

元の住まいを飲み込むように生まれたユグドラシルハウス。木漏れ日に誘われ小型の大人しい動物と魔物まで我が家の庭に休みに来る。丈夫な枝には、何時の間にかハンモックまであり一番いい場所をティアマトが占領している。案の定このハンモックもティアマトがまた黙って購入したものだ。ふざける。

大した名所も無いこの村で、大樹の家など中々に刺激的だったのか村人も来るわ来るわ、家はキャンプ場じゃねーぞと言いたくなるような事態にもなった。ああ大丈夫、ユ

グドラシル、怒ってないから。そんな不安そうな顔しなくていい。君は何も悪くない、いい子いい子。

そんなもんで、村の子供もしよつちゆうこのハウスに来るのである。そしてその子供達とユグドラシルとコロツサスが遊んでいる。木を操り生み出したブランコではしゃぐ子供。コロツサスをアスレチックにして遊ぶ小僧たち。人間と星晶獣、垣根無く触れ合う素晴らしい光景だ。

なお、ティアマトは子供の相手を嫌ったが、子供の一人が最近弛み出した腹を指摘、更に「デブマトのねーちゃん」と呼ばれた結果怒りの鬼ごっこが開始。だが大樹を縦横無尽に駆け回る子供に遊ばれていた。子供とは言えザンクティンゼル人を舐めてはいけない。リヴァイアサンも特に興味無さそうだったが、キラキラ光る子供の純粋な視線に根負けして自身の生け簀の水流を操作して流れるプールにしてかまっていた。あれで面倒見がいいので同じ（笑）でも、ティアマトよりはマシかもしれない。

これだけだと実に穏やか（？）で平和（？）な光景だが、俺は大きな問題を抱えていた。そうだ、金がねえ。金が無いのだ。

ひどいものだ。この一月と数週間を思い起こした時最初に思う事がこんな事とは、あまりにひどい。何時から俺は、金の亡者になったのか。しかしユグドラシルのおかげで我が家のキャパシティー問題は解決したが、根本解決には至っていないのだから仕方な

い。

ティアマトの浪費と増える居候達の生活費。どう考えても俺一人で賄えない。それを原因の一つであるばあさんに相談したが、「そうだねえ、そうだねえ」と怪しく笑う。意味を含んだ笑いだっただがその意味は、俺には読み取れなかった。

こうなると俺は、いよいよ最後の手段を取る必要がある。あまり乗り気ではなかったが、たとえ呑気な片田舎でも金はあるのだ。この世界、この空で金を稼ぐ手取り早い方法が、かなり大きな賭けでもあるが一つある。

後々、思えばこの手段を考えた事こそがああさんの狙いだっただが、この時の俺は、それを微塵も考えていなかった。

二 出たぞ、第三巨女

5度目の威圧感を感じた時。俺は既にあきらめの境地であった。ただし、今回は少し出現場所がずれた。今までは、例の祠を中心に碧空の門付近であったが今回は、碧空の廻廊。場所の特徴としては、今までの碧空の門のように数少ない外界へと通じる場所の一つ。そこから辺からプレッシャーを感じて仕方ない。

「お次は何だ？」

カッコつけたはいが、正直辞めたい。

「光ノ気配ガアル。持ツテ行クナラ闇属性武器ニシロ」

へたぶんあいつだからな、我の時みたいにビショップで行け」

なんだこの協力的星晶獣（笑）コンビ。一緒に来て手伝うとか言わないあたりは相変わらずであるがまあいいだろう、慣れたよあはは。

しかしふと思う。俺はティアマトに始まり今の所ユグドラシルと戦ったが、その戦闘の余波は凄まじいものだった。今まで何にも思わなかったがいつこのザンクティンゼルが吹き飛んでもおかしくなかった。ねーねーなんでこの島無事なん？

へ我等とてこの島が無くなると困る。戦う時は、可能な限り星晶の力で自身の戦いの場を展開しているからこの村等には、被害は無いはずだ」

リヴァイアサンが疑問に答えた。こいつの水召喚とかも似た物だろう。そらこいつらぐらい（一応）高等な星晶獣となれば、優位な地理を生み出したり召喚できても不思議ではない。

さて、現実逃避もほどほどに俺はビショップ装備に着替え覚悟を決め死地へと赴きだす。

「なごと思つたか馬鹿野郎!!」

煙幕だけではティアマトに無力化される事を知り、煙幕をぶちまけた後に今度はあら

はじめ用意した脱出用地下通路へと潜り込み逃走を図る。な、なんて天才的発想。奴らの目を盗み作り上げたこの地下通路をネズミの様に逃げる俺を捕えられると思うなよ。

「~~~~~♪」

「Oh……」

楽しそうな笑顔のユグドラシルが目の前に現れた。はっはーん、土の星晶獣がいる以上この方法まるで無駄でしたね？うん、あとこれ別に鬼ごっこでもかくれんぼでも無くても、俺が逃げたいだけであつて遊んでるわけじゃなくて。

「無駄口叩いてないで行きな」

地表から突きこまれたばあさんの手刀が地下の俺の身体を正確につかみ取りそのまま芋でも引き抜くように俺を引っっこ抜いた。同時にその衝撃で俺の意識がとぶ。

そして次に意識が回復した時。

「Woooooooooooooooooooooooooo!!!」

「目がいてえ」

■ やたら光り輝く巨大な女がそこにいた。

■

三 くっ殺せ！

■

女騎士と言うものに勝つたら妙な高揚感と満足感を得られると聞いた事があるが、そんなものはまるで無く俺の身にあるのは、疲労感のみであった。

巨大な4腕の女騎士、光の星晶獣シヴアリエ。彼女は、その四つの腕に剣、斧、槍、レイピアを握り殺意が高い。彼女との闘いに関して言うなら、もうただ只管めんどくさかった。何がって固い固い。その上羽虫みたいに飛び回るビットがうつとおしい。逐一攻撃の殆ど、全属性をカットしてくるバリアみたいなのを展開するのでデイスペルをかけては殴りを繰り返し、ついでにビットを叩き墮とす事を繰り返す。何度バリア張ってもデイスペラれるので痺れを切らしたのかシヴアリエ怒りの天からいっばい光の剣攻撃を食らった時は、結構ヤバかったが俺もいい加減疲れていたので振ってきた剣の何本かを閻属性の杖で叩き返してやった。むこうも意外だったらしく叩き返した四つの光の剣が彼女の得物をはじめき落とした。それに焦りを見せたのもう後は、ボコボコにするだけである。なめんな。

例によってちよい暴走気味なシヴアリエであったが、負けてしまえば冷静になったのかその場でへたり込む。後ろでなんかくっついてた城の残骸も消えてやっとなんか視界にやさしい。

すると自身の眼下にいる俺に気が付き彼女が発した最初の言葉。

「くっ殺せ!!」

なんなんこれ？

結局殺すも何も俺の要望としては、祠に大人しく帰って欲しいので「いいから帰れ」と言ったのだが「アルビオンでは強すぎる力を抑えるために分けたアストラル体とは言え、マグナ形態で負けては、私に何が出来ようか……くっ殺せっ!!」「おのれ、ゲスな視線を向けるとは……くっ殺せっ!!」とばかり。始めてまともに言葉を話す星晶獣と出会いましたが話す内容は、わけがわからずこれは（笑）の気配が濃厚になってきて俺は、早々に絶望し始めた。

「殺さねーから帰れよもう！」

「そう言つて、あれだ……私が油断した隙に好きにするんだらう!!」

「しねーよサイズ差考えろ!!」

「じゃあこれでどうだっ!？」

そう言うところシュヴァリエは、一気にサイズダウンし俺より少し背が高い程度の大きさになった。

「これでどうだ、じゃねーよ!?!なんでお前から縮んでんだよ阿保かっ!？」

「はっ!?!おのれ、私とした事が、ゲスの話術に騙されこの様な失態を……っ!!」

確かに失態だわ、大失態だ。これ以上ない自滅だが。

「負けた上にこの様な姿にされ……おのれ、もう既に私に抵抗の手段は無い、くっ!殺

せっ!!」

帰れっ!!

■ 四 星晶騎士シユヴァリエ あなただって本当に最低のオリ主だわっ

■ 帰れと言っても帰らないシユヴァリエは、俺が家に帰るまでずっと「くっころ!くっころ!」と鳴き声みたいに騒いでいた。

光を司り騎士の心を体現した星晶獣シユヴァリエは、城砦都市アルビオンの領主を主としてその主に仕える星晶獣。だが近年不穏な動きを見せる帝国。士官学校として有名なアルビオンからは、多くも帝国へ兵を輩出している故に現在微妙な関係であったが、案の定帝国のあんぼんたんがやらかしてしまい、アルビオンのシユヴァリエが激おこになり、そして利用された。これまた案の定アルビオンピンチな時に現れたのは、最近話題のいかした奴ら、ジータとゆかいな仲間たち団である。

帝国の兵器アドウエルサを動かすために利用されたシユヴァリエを物理で解決。活躍を聞くにジータは相変わらず元気そうだった。

「必要な事は話したはずだ。早く私を解放しろっ!!」

「これなんなん?」

どうせまたジータ関連と思ひ話を聞こうとしたら「私は何も吐かんぞ!」「た、たとえ体を弄ばれようと……っ!」と訳が分からない。そういいながら自分からペラペラしゃべるから尚更訳が分からない。別に拘束もしてないのに開放も何もあるか、帰れよはやく。こいつ何時もこんななの?

〈知らん、我らは常に互いを認識はしているが、基本不干涉だ。そもそもこんなに話をしたりなど本来星晶獣はせん〉

「今コノ環境ガ異常ナノダ」

「(—ω—) ヨクシラナイ」

「——?」

リヴァティア(笑) コンビがそういうが、その異常環境を作り上げた原因の筆頭達と言つてもなあ。あと(笑) コンビが(笑) トリオになりそうであるが。コロユグ癒し組の反応も似たようなものだ。

「おのれ、情報だけでは飽き足らず私の体が目当てだと言うのか……」

「ねえ、なんで君鎧がだんだん剥げてんの?」

さつきから気になったのだがシユヴァリエの鎧がだんだん?がれている。確かに戦いのせいで鎧にヒビは入っていたが、ここまで簡単に剥がれる程酷い損傷じゃなかったはずだ。

「く……っ！やはり私の体が目当てなのか。ああ、やめろ！鎧を脱がすのをやめろっ！」
「待つて待つて、あんたさつきから自分で鎧剥がしてない？ねえ、いままた自分で剥がし……おい、おい！やめろお!!」

わかった。なんとなく予想してたけどやっぱりこいつ変態だ。(笑)どころじゃない、
星晶獣(変態)だ。

良かったな(笑)コンビ、仲間は増えないようだぞ。残念だったな俺、自体はより深刻だぞ。

「すでにオークを数十体も用意して準備万端なんだろう、この屑めっ!!」

なんでオーク？いねーよ、こんな片田舎の島に。

「ふんっ！さあ、好きにするがいい！だが勘違いするな、例えどれ程の責め苦を受けようとわが心は、私だけのもの。貴様になど屈する事はありません!!」

ところで俺は、こいつと激戦を繰り広げいい加減休みたいのだ。それなのにこんな疲れる話題と会話を続けられて俺も我慢の限界である。キレちまったよ、もう日常的で久々ではないが。

「おめーいい加減大人しくしろや。今すぐ祠に帰るか、ここにいるつもりなら即口を閉じて豚みてーに鼻で必要最低限の呼吸だけでして黙ってな」

「……………ぶ、た？」

ピタリと、シュヴァリエの動きが止まりとたんに息が荒くなった。

「この私に、栄光の騎士とまで言われた星晶獣である私に対して、雌豚などと……」

「雌とは言つとらん」

「……良い」

あ、凄まじく嫌な予感しかない。

「本来アルビオン領主しか主と認めぬが……だが今この私は、アルビオンより離れたマグナの力を宿しアストラル体。別に、ちよつと、性癖に正直になっても……」

「おい、やめろ、何考えてるか知らんがやめろ」

「な、なあ……ちよつともう一回、私の事雌豚って呼んでみないか」

「だから言つてねえ!!」

ちよつと誰か、この際ティアマトでもいいから助けて、誰かあつ!!

「無理ダ」

「(…ω…)(ゴメンネ」

〈諦めろ〉

「……………」

ちくしょう!!

「一回、もう一回だけでいいから!!頼む主様!!雌豚と呼んでくれ!!」

「悪化してるじゃねーか！」

誰か男の人呼んでえーっつ!!

五 星晶獣と

イジメなどと言う言葉も生ぬるい修行の末、最早人の身でありながらジータに追いつかんばかりの強靱になった身体。ナチュラルにジータを人間として扱わないのは仕様だ。あれを純粋な人の強さとは認めん。ばあさん、あんたもだ。

ティアマトのトルネード、デイザスター、クロツサスのイグニスリリース、リヴァイアサンのグランドフォール、ユグドラシルのアクシス・ムンデイ。そしてシュヴァリエの光の剣。シュヴァリエだけマグナ形態なのが非常に文句があるのだが、見た目はそのままに省エネモードなので文句言うなどの事。そしてシュヴァリエは、修行終わる度に「くっ殺せ！」を言うのをそろそろやめるべき。

とにかくこの星晶連合に俺単体で挑み勝ち越してるのである。そろそろ星晶獣キラを名乗っても良いのではなからうか。

だが一つ、非常に気になる事がある。

ばあさんが修行をティアマト達に任せ居なくなる事が増えた。何をしているのかは、

ティアマト達には話したらしいが俺には秘密のまま。のけものは酷いと思います。

ともかくばあさん一人が動いている事態が非常に気になる上に不安だ。何しているかわかったもんじやない。以前ならこの隙に逃げだしたものの、今ではシユヴァリエ加え星晶獣が5体。逃げ切れるわけがない。結局俺は、大きな動きがあるまで日々ティアマト達のイジメを受けるのだ。助けて。

マイホーム改めユグユグハウス。大樹の我が家でも俺の戦いは続く。相変わらずだらけるティアマトのケツを蹴り上げ彼女に割り振られた家事当番をさせる。食うだけ食って寝る生活なんてお母さん許しませんよ。

リヴァイアサンは、別に完全水棲じゃないが見た目蛇なので洗濯以外では、特にやる事が無いのだが、それでも十分役にたつ。ユグユグハウスは、リヴァイアサンの生け簀と一部連結したので、やつも室内に入る事が出来るので室内での水を使う掃除もある程度出来る。

だがティアマトが勝手に買った女物の衣装が多量に溜まりだしたのでその洗濯をさせた時、一度水流の加減を間違えたため服の幾つかが破れティアマトが怒り狂った時があった。その後は、一応は謝罪したりリヴァイアサンに対し怒り続けるティアマト、それにキレたりリヴァイアサン。どっちが悪いだの子供の喧嘩の様相を呈してきてついに、風と水の星晶獣が一着の衣類を原因によりによってマグナ形態でガチ喧嘩し始め

た。たぶんかつてあったと言う覇空戦争含め類を見ない最低な理由の星晶獣同士の戦いでは無いだろうか。

コロツサスとユグドラシルは、大変すばらしい花丸優等生。ユグドラシルの手で我が家は、コロツサスすら入れる星晶獣バリアフリーハウスだ。住む以上自分にできる事はするとコロツサスは進んで掃除洗濯家事手伝いを全てこなす。これ本当にドラフの怨念と共に作り上げられたの？ユグドラシルが外で箒を掃いてる姿は、もうご近所ではおなじみだ。嫁に欲しい。

シユヴァリエは、現在教育中である。だが戦闘時とくつ殺状態以外では、案外常識人だったので幸いにもそう手間はかからなかった。それでも腕が四つあるクセに不器用すぎて今のままでは使えん。「だって、剣や槍以外持った事ないもの」じゃない。今てめーが手に持つべきなのは、箒と塵取りと雑巾にバケツなんだよ。掃除しろおら。

「私のケツは蹴らないのかっ!？」

やだよお前何時も鎧じゃん、痛いもん。これは、ティアマト用の蹴りです。ティアマト、嫌い。

六 ゴシック巨女

まただよ。

「はいはい、星晶獣星晶獣。相変わらず修行中に急に来るんだね。出現場所は、シュヴァリエとほぼ同じとみた。今の俺は、島一つぐらいの範囲なら星晶獣の気配でその位置を誤差5〜10mで当てられる自信がある。すごいだろ、別に要らなかつたよ、こんな能力。」

「と言う事は、アイツか……主様、私の力を使うとよい」

シュヴァリエは、くつ殺ばかり言うくせにもう俺を主認定である。言葉にはまるで敬意は無いが、なんだこの妙なポジションは。それはともかく、シュヴァリエが一振りの剣を俺に渡す。

「私のコアの欠片を埋め込んだものだ。光の属性が付与されたのと私の力の一部が使えるから役に立つだろう」

確かにこのシュヴァリエ(仮)からは、非常に聖なる力を感じる。感じるがこのパターンは、非常に嫌なパターンなのを俺は知っている。おう、金はどうした?いくら使った。「……?なぜ金が必要なのだ?既にそれなりの武器がそろっていただろう。その内の一振りにコアを埋め込んだだけだから金など使っていないぞ」

今明かされる衝撃の真実ウ。

おうおう、ティアマトこっち向けや。おら、逃げんなコラ!おいコラまでいっ!!

「ダツテ、私好ミノ武器が無カツタンダツ！」

「だつたらためー自分で金稼いで依頼しろや、おらあ!!」

そんな理由で俺の12万ルピが溶けたのか。あんまりすぎる。

こんな気持ちじゃ俺、……星晶獣と戦いたくなくなっちゃうよ……。いや、前からそうだわ。なんで俺使命にかられだしたの？別に俺に星晶獣と戦いさらには、面倒を見るような使命も義務も無かったわ。

そして考えてみると今ここには、あのばあさんが居ない。確かに少し前まで星晶獣達に囲まれていたせいで脱出も絶望的であったが、今までの例を考えると俺への止めはいつもばあさんだった。いけるかもしれない。いや、いける。

やれるやれる、頑張れ俺。

「うおおおおー!!くらえ、無駄に鍛えられた結果身に着けた逃走用スキルコンボをおおーっ!!」

全員にソウルピルファア、デイレイ、グラビテイ、クイックダウン、ブラインドを瞬時にぶち込んでその上煙幕を放ち閃光玉も破裂させ俺は逃げた。デバフ効果の手応えはあったのでもしかしたら今日は、いけるかもしれない。

「私が居なければ、逃げれるなんて……それは、甘いよねえ」

「なん……だど……」

いつの間にか、俺の目の前にはばあさんがいた。いつ帰ってきたのか。いつ近づいたのか。そんな事を思った瞬間に俺の意識は刈り取られた。

「FoooooUumu……」

「でか……え、デカアツ!？」

目を覚ますと、そこには無数の船の残骸に結ばれるようにしてそびえる今までのマグナ達以上に物理的威圧感が凄まじい女がいた。

■ 七 日光嫌いセレストさん

■ マジふざけんなよ、この野郎。

船の墓場に立つ巨大な闇の星晶獣セレスト。こいつ通常の攻撃はともかく、やる事がえげつない。なんか戦ってたらいきなり俺に再生効果を付与してきて困惑したら、直後俺をアンデッドにしやがった。いわゆるアンデッド状態と呼ばれるのだが名の通り死を奪われた状態、そのせいか原理は知らんが『回復すればするほど死ぬ』と言う訳が分からない状態になった。言葉が矛盾していて無茶苦茶だが、そうなので仕方ない。そのうえ俺を腐らせやがった。シャレや冗談じゃなくマジで「腐敗」させてきた。どう足掻いてもダメージを食らい死ぬに死ねない状態なのに弱ると言うどうしようもない状態

が続くため下手すると詰んだ状態になる。

だがセレスト、相手が悪かったな。

日々星晶獣とばあさん達の相手をしていた俺が、そんなねちっこい手段でやられると思うなよ。別にデイスペつてもいいが、俺が死すら超えた死に行きつき貴様に食われる前にポコポコにすればなんの問題も無いのだ。物理万歳。体格差？殴れるならそんなものは意味をなさん。

船の残骸も奥義で粉碎しセレスト本体をポコポコにしたらセレストの生み出したらしい辛気臭いフィールドが消え、そこには縮んだゴスロリ女がタンコブつけてぶっ倒れていた。もう慣れましたよ、このパターン。後どんだけつづくん？

どうせ放っておいてもばあさん辺りが回収していつの間にか家にいるのは、火を見るよりも明らか。仕方ないので肩に背負って連れて行く。

家に行くまでに気が付いたのかうめき声がやたら聞こえてきて、ああ喋れる系星晶獣かと思つたが「熱い……日差し、きつい」とか「つらい、死ぬ……死なないけど」とか聞こえてくる。なんか残念そうな気配がする。

家ついてまず床にジュースを零しニル達の仕業にさせようとした上に、証拠を隠滅しようとしているティアマトのケツを蹴りあげ掃除させた後は、お待ちかねでもない質問タイム。ねーねー教えてセレストさん。あんたは、どういう状況でジータに殴られたん

?

「彼女が関わってるのは……わかってる、のか……」

そろもうね、確認取るまでも無いもん。絶対ジータなんかしたよ。

セレストは、移動する星晶獣。どこかの島に居続けるわけではなくただ只管空を移動する。その先で出会う、相手からすれば「出遭って」しまったが……とにかくセレストは、出会う者達の「死」を奪う。それが何故かと言われてもそれはそう言うものなのだろう。彼女は闇の星晶獣、闇と死を司る。そう言う星晶獣なのだ。そしてここ百年ちよいある島にひっついて島全域の住民をまとめてアンデッドや幽霊にしまったようだ。理由は「なんか、呼ばれたし……」との事。結果万年霧に包まれたその島は、より濃く暗い瘴気に包まれた。それにどうやらジータが巻き込まれたらしい。

始めは迷い込んだ迷子の騎空団程度の認識で、そんなものは今までもいたのでまた死を奪い食うか眷属にでもしようか考えていたらまさかの反撃にあい倒されたらしい。何度が自身の死まで奪い復活したが、結局敵わず復活しても倒されるだけなので逃げたとの事。

「あの島は、霧が濃くて良かった……薄暗い場所が良い……」

真つ黒のゴスロリ衣装に身を包むセレスト省エネ。クソ熱そうな恰好のクセに暑いのは苦手。直射日光なんて冗談じゃないとき。適当にじめつとして日の少なそうな

島に極力留まりなんなら動きたくないのだが、星晶獣としての本能がそれを許さず、偶然とは言え呼ばれてそれを利用して島にいる事が出来たのに追い出されたと不服そう
だ。

ただ島にいた方のセレストと、この元マグナのセレスト省エネは、同一でありかつ別
個体なのであくまで意識を共有した上での意見である。

「ユグドラシル……ここ、地下に部屋作れる？」

「――」

「じゃあ……お願い、キノコ生えそうな……湿り具合で」

「おいおい、まてまて。なに唐突に我が家へ移住する話を家主抜きに進めてるわけ？」

「……だめですか、そうですか……」

「ウワ、コイツ星晶獣トハ言エ、女ヲ泣カセタゾ」

〈最低だな〉

「はい、黙れ（笑）コンビども」

わかつたよ、わかつてますよ。どうせ俺が断つてもばあさんがまた勝手に話進めるも
んよ。無駄無駄、所詮俺の抵抗など無駄なのだ。

「住むのはいいとして、掃除洗濯家事手伝いはやつてもらおう。それと勝手な買い物をし
ようものなら、てめーがいかに死を奪えようが、復活するたびボコボコにするからなて

めー」

「ひい……この人間怖い」

うるせいやい。こちとら死活問題なんだ。祠にぶち込まないだけいいと思え。

■ 八 (笑) と癒し

■ 俺は気が付いた。

我が家に来る星晶獣達。(笑) と癒し系にかかわらず総じてゆるキャラ化しているが、それにある法則があった。

初めに俺が戦い家に住み着いた居候星晶獣はティアマト、これは(笑)となった。そしてその次、コロツサス。こちらは、見た目に反して実に優等生で癒し枠だった。そしてその次、リヴァイアサンは、今では生け簀の主となり(笑)だ。その次のユグドラシルは、言うまでもない。シユヴァリエも普段はともかく、くつ殺モードがひど過ぎて(笑)と言うか変態だ。変態で大変だ。

おわかりいただけただろうか?つまり(笑) と癒し枠が交互に来てるのだ。

「お、お茶……淹れたから……」

もうね、ちよつとほんと……このセレスト、やばい。

「明日……シユヴァリエと私で交互の光闇属性特訓だから……準備、しとくね」

ハツキリ言って体力が無いセレスト省エネが、甲斐甲斐しく家事をする姿を見た時俺は衝撃を受けた。俺から言ったとは言え、なんか申し訳ない気持ち溢れてきて、やれる事だけでいいと言ったらなんて言ったと思う？

「そ、それでも……住まわせてくれたし、やるから……」

ティアマト、お前はセレストの爪の垢を煎じるどころか直で食わす。

「き、汚いよ……」

うんうん、例えだから。先人の言葉の例えだからあんしんして。

そしてね、また別の日なんだけどもうね、もう見て……うちの癒し達見て。

「（＊、ω、）クツキーハネ コウヤクノ」

「なるほど……」

「——♪」

コロツサスとユグドラシルが、セレストにクツキーの焼き方教えてんの。直後ソファーでヘソ出して寝てるティアマト見て直ぐに焼けていくクツキーを見ているセレスト達を見て俺は泣いた。色んな感情が押し寄せた。

なにが闇と死の星晶獣じゃあい!!うちの子です、もうセレストも家の子だから!!祠に
なんか帰すか!!

「今日ノ飯ハナンダ？」

おま、お前はほんと……この、この野郎!!

「ワアツ!? ナンダ、ウワヤメ、ウワアア……ッ?」

■ 九

老婆はある島にいた。

あの孤立した孤島ザンクティンゼルをどのようにして出たのか、それは老婆だけが知る。

「それじゃあ、予定通り納品はこの日で頼むよ」

「はいく了解しました」

人が多く集まる食堂で、老婆は一人の少女と話をしていた。互いに書類を確認し満足そうにしている。

「それで？ 例の方は、どのような具合ですか」

「いい塩梅だよ。流石にジータちゃんと比べるのは気の毒かもだけどね。それでもいつ空に出てもいい。今のあの子なら、古戦場でも相当なものになるよ、ふっふっふ……」

「それはそれは素晴らしい御弟子さんですね〜」

「ただもう二つ、あの子にはやってもらおう戦いがある。それが終わればもう準備は終わりさ〜」

「うふふ〜ジータさんのように誠実で頼もしい騎空士さんが増えてくださるなら、私の方も助かるので嬉しい限りですね〜」

「あの子が村を出たら、世話してやっておくれ。空の事なんてこれっぽちも知らないんだから〜」

「勿論ですとも〜」

「それじゃあこの事、よろしく頼むよよろず屋さん」

「はい〜今後とも、御贖員に〜」

老婆がこの島で交わした話を、勿論彼は知らない。まして、その内容が自分の知らぬ所で進められる自分の人生にかかわる商談である事など本当に知らない。

幼馴染の死と復活と旅立ち。星晶獣との闘いとそれによる心労。彼の人生とは、常に唐突なのだ。

■ ■
一 今は昔、気苦勞の少年と言う者ありけり

■ ■
ばあさんに呼ばれた。

修行の後疲れ切った俺に話をしないかと誘われた。ばあさんの実に優しい老婆らしい笑みをむしろ不気味に思いながらもばあさんの家に付いて行く。

「あなたの修業を始めて、もう二月は経つかねえ」

そうですね。しみじみとあつという間みに言いますけどな、この二月俺は地獄よりもつらい思いをしてるのだがその所どうですか。

「あんたは、私の想像以上だったよ。年甲斐も無く若い頃思い出してしまうねえ……あの人達との旅は、楽しかった」

無視しないでください。

「……ジータちゃんは、心配かい？」

……ふむ。どうやら真面目な話らしい。

「そら、心配つすよ」

ジータの無茶は、居なくても不安にさせる。なまじ我が家の星晶獣戦隊から聞いた話もあるものだから余計に。主にビィと周りの人達が。

「そう言つて、真つ先に原因のジータちゃんを案じるのだから、誤魔化せないねえ、あんたも」

うるせいやい。どんな化け物じみた強さの少女でも俺の幼馴染で妹みたいな娘なのだ。心配するなと言うのが無理な話なんだ。元から強かった彼女でも、一度命を落としている。ルリアがいたから助かったが場合によつては、それが最後の別れだったかもしれない。だとすれば、俺はあの幼馴染の死に目に会う事が無かったのだ。こんな理不尽があるか。結果オーライとは言え帝国に対しての不満や、死を恐れなすぎるジータへの不安は今でもあるのだ。

「二人はいつも一緒だったねえ……あの子が村に来て、丁度近所であの子の面倒を見れる歳近い子は、あんただけだったから」

「あの時から危なっかしい娘つすから。一人手作りの木刀で魔物討伐に行った時は、しつかり監視してなかつた自分を恨みました」

ビィが泣きながら俺にその事を教えに来た時、マジでジータが死ぬと不安になり大人達の制止を振り切り手斧片手に森に助けに行った。だが魔物の巣につくと4、5匹の魔

物を既に余裕で狩って「お兄ちゃん、これ食べよう!!」と明るい笑顔で言ってきた。あまりの事に俺は、一度ぶつ倒れて目を覚ました後しこたまジータを説教した。あの日ばかりは、泣いても許さんかった。魔物？ 美味しかったよ。

以来どこに行くにも俺とビィが居なければ一人で森に行く事は禁じた。

「それでもあの子は良い子だからねえ。ティアマト達の話の聞くにいい仲間に恵まれるよ」

「でしようね。あれで人を惹きつけますから」

ナチュラル・ポーン・人たらしとは、彼女の事だ。

「……羨ましいかい？」

はあん？ 何を言うやらおばあさん。俺が何をうらやましいと言うのか。馬鹿言っちゃいけない。そんな要素ありましたかねえ？

「表情に出てるよ。自分も空に行きたいってねえ……ふえつふえつふえ」

「まさかまさか」

「自分も空に行きたい。あとどうせなら、騎空団を作って生活に困らないお金を稼いで平穩を手に入れたらいいってねえ」

俺の表情筋素直過ぎません？

「……もしかして、我が家の財政事情圧迫原因のティアマトにまったく注意をしない

のつて」

「さてさて……あれは、勝手にティアマトがしてる事だからねえ」

利害の一致ですか？　くそう、くそう。

結局具体的な何かを言われる事無く俺は、家に帰った。だがジータの事、ばあさんの言いたい事はわかる。そして、俺もそれは自覚していた。

俺が家に帰る前にはばあさんは言った。

「あんた達は、よく話したねえ……」「どっちが先に、イスタルシアに行けるか」って
忘れるわけの無い、それは二人の約束だった。

なお、これで終わればちよつといい話なのだが、ただ本当に珍しい事に、明日は一日だけ休みを取るからよく体を休ませておけ、との言葉が気になる。嫌な予感がまんまんだ。

■ 二 褐色と黒銀

休みを挟んで修行日、ばあさんがいつもより早く家に現れた。そして開口一番。「残り二回、あんたは戦ってもらうよ」だと。

わーお、この地獄が後二回で終わるつて？　そいつあハッピーだねえ……とでも言う

と思う？ その二回つてなによ、何が来るのさ。

「そろそろいい具合にバランスが崩れ出したからね。もう現れるだろうさ。ジータちゃんもやんちゃしてるみたいだし、思ったより早かったよ」

話を勧めないでくれ。嫌な言葉がさつきからバンバン出てる。

ばあさんに詰め寄ろうかと思った時、我が家の扉をノックする者が現れた。ユグドラシルが耳鳴り音で返事をしながら扉を開けると、そこには見慣れぬ褐色肌の少女が一人立っていた。誰やあんた。

「貴様が例の男か……」

「おや、もう来たのかい？」

「今日は様子見だ。結果がどうあれ、一度顔を見ておきたかった」

「そうかい、そうかい。なら今日は、アレとかねえ」

「そうなるな」

少女はドカドカと我が物顔で家に入り俺の目の前に。だから誰や。

「……なるほど、顔も雰囲気も普通の至って平凡な男だ」

喧嘩売ってんの？

ティアマト笑ってんじゃねーぞ。

「だが確かに強い。星晶獣を人の力のみで下すその力、危険だな」

少女よ、何を思つての発言か知らんが、俺はこんな力別に欲しいなんて言つてないのだよ。

「しかし聞いた通りの人物でその点は、安心したよ。星晶獣を従えし男よ、また直ぐに会う事となる。今日を生き延びればだがな。さらばだ」

へいへいへい、言うだけ言つて帰んな。君ばあさんとどう言う関係？　これは既に俺がいない時に話がまとまっていた案件ですぞ。どゆことー。

「さあ、坊主。既に賽は投げられた。試練は二つ、まず一つを打ち破り空への道を開きな」

何それ、俺は選ばれし勇者かな？　違いますね。いよいよヤバイ。これは今まで以上にヤバイ。さらに言うなら、少女が現れた時点で彼女から発せられる覇気が凄まじいのと同時に別の場所から今までと比べ物にならない気配が発せられた。

これは流星にヤバイ。語彙力が死滅するぐらいヤバイ。ヤバイしか言えない。「なんだい、そんなに震えて武者震いかい」

ビビつてんだよ。

「安心しなよ。流星に今回ばかりは、一人ではいかせられない」
「は？」

「ティアマト達を連れて行きな。マグナ形態全員でやるんだよ」

勝ったな（確信）。

おいおい、いいのそれ？ それちよつとヌルゲー過ぎると思うけど、それOKなん？
 なんぼ我が家で（笑）認定受けたゆるキャラ達でもマグナになると鬼の様に強いのに？

「ああ、かまわないよ」

「事前二話八聞イテイル。私達モ準備ハ出来テイル」

「(p、・ω・q)ガンバル!!」

〈前衛には、シユヴァリエを入れろ〉

「——!!」

「護りを固くする必要がある」

「私は、後衛で……がんばるから」

頼もしすぎる。こゝろ勝ち確定ですわ。逃げる必要ないね、さあ行くとしよう皆の衆。
 どんな星晶獣だろうと俺達に倒せないものはない。

目指すは、この気配の元。碧空の領域!! 待つてる星晶獣!! 今の俺には、マグナ6
 体が付いているのだ!!

「UGA A a a a a A A A A A A A!!」

「すんません、調子乗ってました」

邂逅、黒銀の翼。

■ ■ 三 ぼくらの火の七日間熱戦・烈戦・超激戦

洒落や冗談でも比喻でも無く、死ぬかと思った。

七日間だ。現れたドラゴン、黒銀の翼をもつ圧倒的な存在。プロトバハムートとの闘いは、七日間続いた。

舐めてました。調子乗ってました。マグナ6体いれば楽勝とかありません。ほんと調子乗ってましたごめんなさい。プロトバハムート（以下プロバハ）が戦闘フィールドを弄って無ければザンクティンゼルどころか世界が吹き飛んだとしてもおかしくなかつた。

初日プロバハは、拘束具を装着した状態で開幕一発目からラグナロクフィールドと言う特殊力場を発生。ダメージを食らい続けるので即クリアオール発動で事なきを得る。以降ある程度強い攻撃と特殊技アルカディアで一々こちらにデバフをかけてくる。格の違いなのか野郎の弱体効果が普通にティアマト達に通るので念のためボールかけてよかつた。この時点で「おつ？ いける？」とか思ったがそんな考えが甘いとわかるのにそう時間はかからなかつた。

二日目に突入。プロバハは、まるで体力が減つてないようなそぶりだ。攻撃も無茶苦茶でレギンレイブはあらゆる属性攻撃を放つので、凄まじい痛手だ。だがあえてベール状態でセレストのヴォイドオールを味方全体で食らう事で体力を無理やり回復させるなどで耐える。これが三日目まで続く。

四日目、ついにプロバハが、手加減無用となる。戦闘開始しばらく着けていた拘束具を外し本気を出して来た。嫌なる。自分で外せるんじゃないや拘束具の意味が無いと思うのだが。なお激しくなるプロバハの攻撃にシュヴァリエのイージスマージが無ければ即死んでいたのは、間違いない。また幸いにマグナ達のほとんどが幻影効果持ちなので、かなり助かった。それでも全体攻撃が多いので常に死と隣り合わせだが。ダメージカットスキルを持つていてよかった。

五日目から六日目。やっとこさプロバハに疲労の色が見え始めた。こちとらそれ以上の疲労具合だね。

基本的な戦法は変わらないのだが、自分達に再生効果をかけてもとにかく食らうダメージの方が多いのでマグナ達の再生効果でも到底間に合わない事態に。俺の回復スキルとマグナ達の防御スキルをフルに活用してやっと耐えられる程度なので必死になる。護りながら殴るを繰り返すしかない。

七日目、最終日。前まではあった、俺は何でこんな戦いをしてるのかと言う疑問すら

消え、空腹も渇きも最早感じないほどに熾烈を極めた戦いの終わりが見え出し、自分の感覚がどこか不思議な空間へと飛びような気持ちになった。相手の行動が見えるような。今奴ほどの程度の体力なのか、弱点は、どんな攻撃か、それがわかるような気がしたのだ。なんとなく、これがジータが戦う時に得ていた感覚なのではないか、そう思えた。

だからこそ、奴がその喉に怪しくも神々しい光を宿し始める前に、マグナ全員に防衛態勢をとらせあらん限りのダメージカットを行えたのだと思う。だがこれでコロツサスとリヴァイアサンが落ちた。死んではいなかったが、最早限界を迎えその姿が消えた。

いよいよ正念場。コロツサス達が死んでいないのは、ティアマト達の言葉でわかっていた。マグナの大元は、依然として祠なのでたぶん家に帰ったとの事。こんな状況であれだが呑気なものだ。だがとにかくもう後は、殴り続けるしかない。物理攻撃が苦手なセレストまで前衛にいられて戦闘を続行。出し惜しみなしのスキル乱舞。ばあさん達に鍛えられ得たあらゆるスキルを舐めるなよ。

満身創痍。俺もプロバハもポロポロ。奴もさすがに空を飛ぶのも出来なくなり、互いに大地で相対する。だが最後の最後に奴の喉がまた光る。瞬間残ったマグナ達がダメージカットを発動しかつ自身を盾にした。プロバハの口から放たれる大いなる破局。俺は無事だがティアマト達が消し飛んだ。家に帰ったのだろう。残ったのは、ついに俺

とプロバハだけ。

「星晶獣を従え、しかし人の身であり続けながら我を下そうとするか」

行き絶え絶えになりながらプロバハが念話を送ってきた。

「そんなつもりもなかったけど……ちくしよう、疲れる……アイツらが御膳立てしてくれたからな。ちくしよう、この野郎、とりあえず勝つぞ、俺は」

剣を杖にしてやつとの思いで立っている。もうあと少しで終わる。

「勝つたとしてどうする？ 世界を護る戦いでも無い、貴様になんの得があると言うの

か？ 竜殺しを名乗るか？ 我より強き竜は、まだいるぞ」

「知らんわ、んなこと」

もうここまできると男の子の意地です。今まで嫌々ながら死地に投げ込まれても勝つたのは、負けるのが悔しいからだ。男の子なんだよ、俺は。

「意地を通す男の力を知れよトカゲ野郎!!」

「トカゲでは、ないっ!!」

プロバハが腕を振り上げ、俺が剣を構える。互いに同時の攻撃は、ぶつかり合ってはじけた。同時に俺の意識が飛ぶ。

「見事だ、人の子よ。しばし身体を休めるがいい。最後の試練で待つ」

最後にあの褐色少女の声でした。

■ 四 オイラアツ!!

俺が目を覚ました時、見知った天井で自身の寝室である事はすぐわかった。ああ、あの後誰かに回収されたんだなと思ひ、その誰かがたぶんあの褐色少女だと言う事は予想できた。かなりポロポロであつたので、誰かの看病でも期待したのだが誰もいやしねえ。仕方なくまだ痛む体を引きずるようにして部屋を出るとティアマトが相変わらずソファアでへソ出して寝てた。

あきれ返るほどいつも通りだった。

「。ω。ω。 ） オキタツ!？」

コロツサスが起きて来た俺に気が付いてキッチンから飛び出して来た。

「(; ω ; *) ダイジョウブ?」

「? —————」

「身体の調子、どう……?」

すると我が家の癒し梓達が一斉に来た。それを見た瞬間俺を蝕んでいた倦怠感が全て吹き飛ぶようだった。だがティアマトのだらけ具合から、俺が寝ていた間の家事は、ほとんどコロツサス達がしていたようだ。これはもう寝てなどいられない。

「エリクシール持つてきな！」

その勢いでエリクシール一気飲み。スタミナが溢れあの七日間などなかったような気分だ。

「オウ、起キタノカ」

ティアマトが俺に気が付いたが一言そう言つてまた寝た。てめーこの野郎。〈結構時間がかかったな。三日寝てたぞ〉

「死にはしないとわかつていたが、もどかしかったな」

そしてリヴァイアサンとシユヴァリエ。七日の激闘で死にかけて三日で回復したのか俺。もう俺、普通の人間には戻れないのかな。

「まあ、そう悲観することたねえぜ」

「だけどなあ……」

「力こそ、パワー。おめえは、オイラを倒すだけの力があつた。それは誇つていいことだぜ」

「そ、そうか？」

「そうさ、力はあつて困るものじゃあねえ……おめえがその力の使い方間違えねえなら、おめえだけじゃねえ、おめえにとって大事な人や物を護る力になるぜ」

「お前いい事言うな……お前、おま………」

誰やこいつ。

「であええ——!! 曲者、曲者だあああつ!!」

「ウルサイ」

超絶ビビッて錯乱したがティアマトに蹴りを入れられた。普段は俺が蹴るのに。

「混乱してるみてえだな。ま、無理もねえか……突然家の住人が増えてんだからよ。だけれど、この姿ならそう混乱させる事もねえと思っただけだなあ」

この姿? それはその、なんだ……うわあ、なんだよこれ。まさかと思うけどその姿お前、まさか“ビィ”のつもりか?

「おう、あいつがこの村にいる時からよく知ってるからなあ、参考にさせてもらったぜえ」

そしてその口振り、今までのパターンを考えるとまさかお前。

「そうさ、オイラはプロトバハムート。もつとも、その力の一部……角一本分ぐらいの力しかねえけどよう」

うわあ、うわあ。待ってくれ待ってくれ。ちよつと理解が追い付かない。ビィをモデルにしたって? プロバハお前、本気? その姿鏡で見た?

ビィは基本宙を浮いてるけど、確かに二足歩行できるよ? けどお前、それ完全に二足歩行向きじゃない? 脚が完全に円錐なんだけど。あと申し訳程度に浮いてるけど

さ。なんか等身とか顔のバランスとかおかしいぞ。喋り方もなんだ、その絶妙なパチもん臭さは。しかも色が黒い。カラーリングが完全にプロバハじやんか。

「ま、あくまで参考にした程度だからな。いわゆる2Pカラーってやつだけ。本体から切り離される時に、ちよつと別の「特異点るっ！」から影響強く受けちまつたみてえだな」

言っている意味がわからない。なに2Pカラーって？ 【特異点るっ！】ってなに？

「世界に同じモノが存在するのは難しいのさ。おめえのところに居る星晶獣が（笑）や、或いはゆるキャラになつてるのも、完全な同一個体にならねえための修正力ってやつだよ。オイラの場合それがかなり強くなつちまつたけど、まあ問題は徹々たるもんさ、気にするこたねえぜ」

気にするよ、気にするよ。

今までの状況からプロトバハムートが家に来るかもしれないのは予想したけど、こんなビイもどきが来るなんて予想できるか？ 七日間の激闘のシリアスが一気に崩れていく。

「なんだよ？ もしオイラの実力について不安なら心配ないぜ。角一本程度とは言え、腐つてもプロバハH相当の角だからな」

ねえ、プロバハHして何？ もしかしてなんかのランク？ 俺ってもしかてやらなくてもいい難易度でプロバハに挑まされた？ ねえ、ちよっとつてばねえ!!

「だから、おめえを鍛えるのも模擬戦もいくらでもできるぜ……こんな風に、なっ!!」

突然ビィ？ が気合を入れると、ビィ？ の身体が膨れ上がり一気に筋骨隆々のマツチヨマンの変態になった。顔がそのまま。顔がそのままで。

「つと……いけねえいけねえ、やり過ぎちまうところだったぜ。これがパワー特化、それでいてスピードも兼ね備えてる。戦力としては、申し分ないぜ」

違うんだ。お前が戦力になるとか、ならないとか、そんな事はどうでもいい。なんだこれ、なんだこれ。

「ま、これからよろしく頼むぜ相棒。俺もちよいと外の世界つてのを見てみたかったからよ」

なんだこれ。

■
五 B・ビィ

■
ビィもどき改め、ブラック・ビィ。略してB・ビィ。

法則的に（笑）梓なのはわかっていたが、シュヴァリエが変態だった時以上の混乱が

俺を襲う。そもそも星晶獣なの？ なんなのこいつ。

「本体が星晶獣だからな、まあ括りとしては星晶獣だぜ。シユヴァリエのビットと似たようなもんさ」

そうですか、そうですか。つまりよくわからん謎生物でいいね。

「失礼な奴だな」

お前がビィに失礼だよ。よくそんな姿でビィを名乗れるな。

「しようがねえだろ、あまりにも【特異点るっ！】の闇が強すぎたんだ。オイラがオイラを参考にする以上避けられねえ問題さ。オイラに文句言われてもしかたねえぜ」

だからなんだよ【特異点るっ！】って。

「おめえが知る必要ねえ事さ相棒」

あと、相棒になった覚えはない。

ともかくビィを模してプロバハが創ったB・ビィ。謎の【特異点るっ！】の影響とやらで本物のビィと比べ絶妙に似せて来ているのが腹立たしい。

「オリジナルの影響も大きいからよ。オイラの好物は当然リンゴだぜ」

ああ、そうかい。お前にもビィっぽさは、一応あるんだな。

「当然だぜ、オイラはビィだからな」

それは認めん。お前にビィの要素があるとしても、お前をビィそのものと認めると何

かまずい気がする。色んな方面で……うん？ 色んな方面ってなんだ？

「おっと、あぶねえ。オイラの影響を受けちまつてるな。ちつとばかり抑えるか」

……俺今何を話してたっけ？

「別に何でもねえぜ、リングの話をしてただけさ」

「そうか……そうだったろうか？ 何かもつと、割と重要な事だった気がするが。」

「気にするなって、それよりおめえ体力のほうはどうだ？」

誤魔化された様な気がするがまあいいか。

体力の方は、寝起きのエリクシールでかなり回復した。何時でも奥義を放てるぐらいだ。流石秘薬の効果はすげえや。

「そうか、そいつはよかったぜ。次の闘いに調整できるからよ」

……あいたた、うーんやつぱりまだ本調子じゃないかも？ 肋骨、肋骨あたりが痛いなあ？ 折れたかも、鎖骨とかもぼつきりイッてそう。肺とかやられたかもしれない。ちよつと吐き気もするし、頭痛もするような。

「仮病は無駄だぜ、エリクシールに加えて星晶獣の加護で爆発的に体力と傷を戻したからな。たとえ骨が折れててももう接合してる筈だぜ」

おーい、そいつぁ初耳だぞお。

「ばあさんは、しばらく用事で来れねえが、その間オイラがおめえの修行を任された。次

は最後の試練で更に強敵だからな、すでにティアマト達は修行場にいる。今から死ぬ気でやるぜ」

瞬間B・ビイの体が膨張しまたマツチヨのビイ、マチヨビイになった。キモイ、キモ過ぎる。やめろお、マチヨビイ！俺に触れるなあ!!

「無駄無駄あ!! 病み上がりでオイラとの戦いに慣れてねえおめえに避ける術はねえ!!」

ぎゃああああああつ!!

六 我家Ⅱ世界の均衡が崩れる可能性

■ 星晶獣戦隊にB・ビイが加わりいよいよ俺の勝ち越し記録が破られそうになる。むしろよく今まで勝ち越していたものだ。

B・ビイのやつ見た目ビイもどきの癖にその強さときたらプロバハそのもの。何が角一本分だ。こんなの詐欺だ詐欺。野郎ただでさえ普段のB・ビイ形態でも何故か強いくせにマチヨビイになると力が増してスピードも上がりやがる。それでもやばいのに「なるほど、耐えしのぐか……ならこいつはどうだあ!!」と吼えると、その姿が細身の人間のようになった。顔はそのままに。

「これが、スピード特化のオイラだ」

ほんととお前なんなんだよ。それでもまだビイと言ひ張るのか？

スピード特化B・ビイは、手刀にエネルギーを纏わせる斬撃が得意らしく、いつの間にか切り刻まれていることがある。悪夢だ。さらにとんでもない事にB・ビイが言うには、分裂ができると言う。

「やろうと思えば自己を分離させてパワー特化とスピード特化の二体で戦えるけど、自己が確立しちまうからな。【特異点るっ！】でないこの世界じゃ冗談じゃすまねえから、使わないでくれ」

そうしてくれ。そうなると流石に俺は、状況を受け入れる事が出来ず自身で命を絶つかもしれん。なんと言うか、お前元のプロバハより強くないか？ プロバハと違うべくトルで強すぎる。

そんなこんなで、混迷きわまる修業が続きながらもついに運命の日が来た。

「待っていたぞ、人の子よ。はむ」

その日も修行から帰ると、我が家でクッキーを食べているあの褐色の少女がいた。

「無礼は承知で上がらせてもらっている。今はいないが、あの老婆に合鍵を貰ったのでね。はむっ」

食うな。

「はむむ……この、くつきーと言うのは、美味しいな。初めての感覚だ」

だから食うなって。ハムスターみたいに食うのは、かわいいから、やめろ、かわいいから。その攻撃は、俺にきく。俺の心が揺らぐからやめろ。

「むう……まあいい。人の子よ、どうやら準備は整っているようだ。私も安心して戦いに臨めると言うものだ」

「……次は、君とか」

「まさか小さな女と侮りはしないだろう？」

まさかまさかである。少女の持つ力がプロバハと同じかそれ以上と言うのは、聞くまでもなくよくわかる。マグナ六対にプロバハとの戦いを経てなければわからないし、わかってても気絶していたかもしれない。

「やだなーやめたいな……平和万歳、戦争反対」

「すばらしい考えだ。だが君の力、そして君の周りの力はすでに世界の均衡を崩しかねない。私は、使命に従い君と戦わねばならない」

「お断りしたい」

「残念だが無理だ。くつきー、美味しかったよ。明日、会おう……私の使命のため、世界の均衡のため、君の運命を試す」

少女は、凜々しい顔で去って行った。頬にクッキーかすを付けながら。まるでしまら

ない。

流石に俺もこうなつては、腹を括るしかない。どうあがいても戦いは避けられないらしい。避けられるような気もするが経験上無駄と悟る。明日に備えてティアマト達も早くに就寝し俺も準備を終え眠りについた。

【探さないでください】

なんて思ったか馬鹿め!! 寝る前の準備は夜逃げの準備だこの野郎。そうだ、いつも俺は、さあ行くぞ言うタイミングで逃げるからだめだったのだ。用意周到に準備した夜逃げ。わはは、今頃俺の置手紙を見て騒いでいるだろうがもう遅い。慣れ親しんだ森に逃げ込めば、俺一人なら一月、三月は余裕で逃げれるぜ。ぎやはは、ばーかばーか!! 「そんなこつたろうと思つたぜ」

うそやん。

「おめえが基本せこくてへたれなのは、周知の事実だぜ。大人しく戦いに行く訳がねえよな」

馬鹿な、だとしても何故貴様が、B・ビー!!

「忘れたのか? オイラの本体は、プロトバハムートだぜ。ザンクティンゼルを守護する役目も持つ本体とリンクすりゃあ、おめえの居場所なんて一発よ」

そんな……失敗……うそだ。こんなことが……ありえない。逃げ、逃げる……無理、

けど……逃げたいつ。

「さあ、現実逃避もそこまでだぜ。マグナとオイラ、そしておめえの力で調停の翼をもいでやろうじゃねえか!!」

は、な、せつ!!

「世界の均衡が崩れる可能性が生まれた時、私は顕現する!」

B・ビィに首根っこをつかまれ連れて来られたのは、プロバハとの戦いの跡地。そこには、すでにマグナ形態となったティアマト達。そしてあの褐色の少女が、二体のワイバーンを従えながら、剣と盾を構えていた。

降臨、調停の翼。

七 あのと戦いのGONGを鳴らすのはあなた

少女、調停の翼ジ・オーダー・グランデ。彼女とプロトバハムート、どちらが強いかなンセンスな質問だ。この両者は、互いに極端な位置にいる。プロバハは、破壊と再生。ジ・オーダー・グランデは、均衡。どちらが強いというものでは無いのだ。それぞれに、役割と使命がある。それだけなのだ。

ゆえに、彼女との戦いにプロバハに勝てたから、と言うのは通じない。

開幕は様子見、ジ・オーダー・グランデの出方を見ながらこちらの守りを固める。当然ベールも展開し何時でもクリアオールも出来る。もつとも、それ以上に護りと体力回復が重要で、結局ダメージカットスキルが凄まじく仕事した。二体のワイバーンを、三体のマグナ達に任せ残り俺はジ・オーダー・グランデ本体とも言える少女に向かう。

「俺の家を勝手に世界のバランスブレイカー認定しないでくれないかねえ!!」

「マグナの力を従え、黒銀の翼を下した君を見過ごす事はできないのだ!!」

「あいつらはただの（笑）と癒しのゆるキャラだよっ!!」

そして、俺はただの一般人だっ!!

「それだけは、断じて……無いっ!!」

失礼な女め。

だがやはりジ・オーダー・グランデ、偉大なる秩序を名乗り語るだけはある。プロバハと比べるのは、やはり意味がない。これは別のベクトルの強さだ。リヴァイアサンをリーダーにセレスト、ティアマト達が一体のワイバーンを足止めしてくれているだけでもだいぶ助かるが強い。ああ、逃げたい逃げたい。

〈おい、こちらも長くは持たんぞ〉

「小型だけど……ジ・オーダー・グランデの力の一端……期待してくれるの嬉しいけど、限度はある……っ」

「早メニソツチノ、ケリヲツケロヨツ!!」

言われんでもこつちもまた七日間も飲まず食わずで戦いたくない。今日中に決着をつけるぞ俺は。

「おうおう! 意気は良しだけども、飛ばし過ぎつとバテちまうぜ!!」

B・ビー(マチヨビー)が残りのワイバーンをボコボコにしながら叫ぶ。ワイバーンもあまり参っていないように見えるが、そもそもマグナ三体で足止めできるワイバーンを一人で割と問題なく足止めしてる件について。化け物が化け物と戦ってやがる。怖いです。

さて、実際ムキになるとヤバイ。ジ・オーダー・グランデは、ちよいちよい幻影を出してくるので、攻撃が当たらない時がある。冷静に対処しないと、スタミナが切れてしまい不利になってしまう。

「一々幻影潰したつて意味ねえ!! ユグドラシル、俺達を護れ!! コロツサスは俺ととにかく殴るぞつ!!」

「——つ!!」

「(*・ω・*) ヽデシ」

「主殿、私は!!」

「シユヴァリエは打ち合わせ通り、やれる限り俺達固めて再生サポートと攻撃!!」

「よし、後でケツを蹴ってくれっ！」

「うるせえっ!!」

「むう……破廉恥、なっ!!」

ほらみろ、敵に呆れられた。

しかしたぶんコレが一番早いやり方じゃない？

……はあ、んなわけないか。とにかく安定した形を作ってそれを続けるのがいいだろう。実際それでジ・オーダー・グランデも後退を始めている。ボッコボコにしてやるぜ。

「……なるほど、やはりこの力……強い!!」

いかん、調子に乗ったかもしれない。嫌な予感がする。

「いいだろう……来たれ! 調停の翼よ!!」

すると一瞬で彼女の姿が消え、代わりにデカイ馬のような翼竜が出て来た。本気を出した? 違う、こいつは第二段階って感じた。あとこいつが調停の翼だったのか。こういう時は、様子見しながらベールにダメージカット準備ですぞ!!

とか言いながらやってるうちに、調停の翼の口が怪しく光って……。

「総員対即死ダメージ防御おとおおっ!!」

何かをしないと、即溶ける光景が浮かんた。ファランクス発動してシユヴァリエもイージスマージを展開。コロツサスがシエルターを張り物理結界でユグドラシルが山

のような岩盤を俺達の間に生み出した。

それでも、それでもなお調停の翼から撃ち出された光線ガンマ・レイが岩盤を焼き切りイージスマージを突破。頼みのファランクスとシエルターでなんとか耐えきったが何つう攻撃だよ。衝撃だけで死ぬかと思つたわ。

「これを、耐えるか」

すると姿が見えなかつた彼女が再び姿を現す。

「ならば、見せよう……均衡を護る翼の真の力っ!!」

少女が飛び上るとそれを追うように調停の翼が飛翔。縦に並んでそのまま一人と一体が近づき、近づ……な、なにいつ!?

「行くぞー! 蒼天の映し鏡たる我が剣にて、万象の憂いを断たん!」

が、ががが、合体したあぁ——っ!?

う、ううっ!! ちくしよう、羨ましかねえ!! 羨ましくなんかねえ!! けど、ちくしようカツコいいこの野郎!!

「ふっ……そう褒めるな」

うるせえ!! 男の子心をくすぐりやがって!!

「混沌の体現たる子よ!! 今こそ均衡を正すため、貴様を討つ!!」

「俺を大げさな存在にするんじゃ、つねええええっ!!」

ぶち抜け成層圏。マグナ達をブッチギリ、俺とジ・オーダー・グランデは、一騎打ちへ。大気渦巻く不思議空間でぶつかり合い、そして眩い閃光と共に終わった。

■ 八 あの娘かわいいや大食娘

■ 疲れた、もお——っ!!

一週間、ジ・オーダー・グランデとの闘いの後ぶつ倒れた俺は、一週間寝ていた。プロバハより多いじゃないか!! 筋肉が痛いっ!! ベッドから起きれないっ!!

「煩イ」

「ぐわああああああああああっ?!」

と、一週間の眠りから覚めた俺を出迎えたのは、傷まみれの俺の身体にエリクシールをぶちまけるティアマトであった。くっそ染みてクソいてえ。

「かい、ふくっ!!」

それでも治ってしまう俺の身体よ……。

プロバハより多く寝たのは、結局取り切れていなかった疲れの反動だろう。ああ、もうこれで星晶獣とのやらんでいい戦いが終わると言う安心感もあったかもしれない。うーん、開放感。そして空腹感。飯を食うぞ俺は、食うぞ俺は。

「ふあむ？ ふおきふあか」

俺の胃は、食料を求めていた。空腹だったのだ。胃液が空の胃の中で流れ、より刺激する。食料を、一心不乱の食料を……そう思っていた俺の目に飛び込んで来たのは、大皿何十枚も積み上げ両頬をボールのように膨らましむっちやむっちやと飯を食いまくる女がいた。

「はむむ……んっぐむんっ！ ……失礼した、料理がおいしくてな」

と言うか、ジ・オーダー・グランデだった。

まあ、予想はしてたけどさあ……まあ、家来るだろうなあとは思ってたけどね？ そもそも前から侵入してたし。けどさあ、このもうゆるい空気よ。今までもそうだけど、激戦からの落差の凄まじみがすごい。

「はもむう？」

「ガー」

「キー？」

ああ、駄目です。これは、ダメダメ。カワイイ、何これどうしよう、どうすればいいの？ ジ・オーダー・グランデだけじゃなくよりサイズダウンしたワイバーンズまで飯食っててうわあああ。くそう、命のやり取りしたのにも俺はこうだ。ティアマトはじめ（笑）のストレスがデカすぎてカワイイモノにちよろくなってきた。

「……ほむ？ 美味いぞ、食べないのか？」

あ、もういいや。カワイイは正義、はつきりわかんたね。

問題保留！ コロッサス、おれにもごはん!!

「(; ω ; *) ……ゴメンナサイ」

「こ、この子が家にある食材……全部たべちゃって」

……うん？ ごめん聞こえない、セレストもつかい言って？

「今日そろそろ、君が起きるかもって……急にこの子が来て……待ってる間、何か料理を食べたいって言うから……そしたら」

「(; ω ; ;) リヨウリオイツカナイノ」

「食材全部……貯蔵庫のも、もうからっぴっぴ………」

セレストが腕を交差させバツテンマークを作る。

貯蔵庫って……ユグユグハウスになってデカくなった貯蔵庫？ 財政難の我が家で

も今後問題ないようにしこたま溜め込んで、保存食だけでも一年は持つ様にしたはずじゃない？ それが？ 今日一日で？

「……正確には、一人と二体で、一年分……大凡1時間での、完食」

あひい。

「……すまん」

ジ・オーダー・グランデが謝る言葉を聞きながら、目が覚めたばかりなのにもかかわらず、俺は全く違う理由でぶっ倒れたのだった。

■ 九 笑えばいいと思うよ

■ 後日、また一日気絶した俺はやつと目を覚ました。

話をまとめると、ジ・オーダー・グランデが家に、と云うか俺に付いて行くと宣言した。

「君は、あまりにも危険だからね。あの彼女、ジータ……だったか？ 彼女を面白いと観察していたが、君の場合彼女と似ていながら混沌そのものだから……今回も私は、本気で君を討つつもりだった」

あーあ、ジータ。出ましたよ最恐で最強の幼馴染。こら逃げれん運命だな。あいつ関わっていると、もうどうしようもないわ。

「彼女は凄いな、定められた運命を歩むようで、常に運命の外を選びつかみ取っている。それがまた、均衡を崩す事にもなるが……あの力は、実に興味深いよ」

わかる。あいつは、たとえ運命が相手でも手が届かないなら届くようにする女だ。無理で。崖の上に欲しい花があれば、崖を壊してとるかも知れないような女だからな。無

理だとか不可能なんて言葉アイツには無駄だろう。

「そして君も実に面白いな。なんだか、彼女とは違う感覚を覚えたよ。彼女への興味と君への興味……何が違うのだろうか……私には、わからないんだ」

俺にもわからん。

「そして、君が黒銀の翼を下しこの家に招いた時、ついに均衡が崩れる可能性が危険なまでに膨らみ私は顕現した」

招いてねえ、野良ネコみたいに勝手に来てるの。

「私は、そう……世界の味方。世界の敵になりえる者は、討つのが私の使命。だけれど、私は均衡を崩す可能性の塊の君に負けた……なぜだろう？」

知らん。

「わからない……君は、混沌そのものなのに。秩序が混沌に負けるのだろうか？」

たぶん時と場合によりけりだと思えます。あと俺をカオスの権化扱いやめて。不本意極まる。

「そして同時に、負けて私はホツとした気がした……あの場所で、君に負けて最初に思ってたのは……使命の失敗への後悔でなく、君や他の人の子達をまだ見ていられると言う気持ちだった……この気持ちはなんだ」

はあ……クソでかいたため息が出てしまう。

何という固い頭だ。まるで感情と言うものを理解していない。

「いいか、よく聞け」

「うん？」

「まずあれを見ろ」

俺は離れたところにいるティアマトを指さした。そこには、あの激闘などなかったかのようないつも通りにだらけて弛み出した腹とヘソを出したティアマトがいる。

「アイツは風の星晶獣のくせして星晶獣（笑）第一号にして、我が家では怠惰と惰眠の星晶獣認定だ」

「ふむ」

「どう思う？」

「どう？ ……どう、とは……」

「胸から湧き上がる妙な殺意に似た怒りがないか？」

ジ・オーダー・グランデは、きよとんとしながらも胸に手をやりジツとしてふつと目を見開いた。

「あった、不思議な……殺意とも怒りともつかない……なんだこれは、胸がざわつく」

「それはな、呆れてるんだ」

「呆れ？」

あとイラついている。星晶獣ともあろう者が部屋のソファで弛んだ腹とへそを出し、さらに言うなら最近、足の指で服を拾う姿も見かけた。呆れかえるしかない。いっそ殺してやった方が星晶獣の名誉が護れるのではないかと思うほどだ。

「じゃあ次にあれを見ろ」

「うむ」

次に窓の外に見えるコロツサス、ユグドラシル、セレスト癒しトリオを見せる。彼らは、近所の人と談笑したり、子供達と残り少ない材料で作っていたお菓子の交換をしたりと楽しそうだ。

「どうだ」

「……うん？」

「すごく良いだろう」

彼女はまたきよんとした後、一度ティアマトを見て顔をしかめた後もう一度コロツサス達を見た。表情の違いは、明らかだ。

「良い、か……そうだ、な。良いな……この感情、不思議だが悪くない」

「それはな、楽しいとか、嬉しいとか、あとは……胸があつたけえって気持ちだ」

「胸が、あつたけえ……？」

彼女はもう一度、胸に手をやってティアマトとコロツサスを交互に何度も見た。同時

に顔を面白おかしく変化させ、だんだんその変化も激しくなる。

「あつたけえ……不思議だ。熱なんてないのに、その言葉がピツタリとはまる。ティアマトの姿をみると、無性にざわつくのに……外のコロツサスや子供達を見ると、あつたけえ……」

ああ、あつたけえ……自分の胸に手を当ててほほ笑むジ・オーダー・グランデを見ていてこちらの心が癒される。なるべく視界にティアマトを入れないのがコツだ。

「……俺に負けた時、俺達をまた見れると思つたなら、それは……良かった、つて事なんだろう。お前は、俺だけじゃなくて人を見ていてそういう気持ちだつたんだろう。見てたんじゃないの？ 人とかを」

「人を……」

今度はコロツサス達でなく、その周りに更に集まりだした子供や大人達を見る。星晶獣だろうとかまわず困んで井戸端会議をする奥様達。コロツサスに上ろうとする子供。彼女の顔は緩むばかりだ。

「見ていたい……そうか、私はもつと見ていたいのか、人々の営みを。使命なのではなく、これが私のしたい事なのか……」

「はい、解決」

もう難しい話で俺は疲れました。結局飯食えてないし。もうご近所さんに頼んで食

料分けてもらうしかないわ。

「ふふっ……だが、あの老婆がいきなり現れて君の事を教え、君を試せと言われた時は、何事とも思ったよ。私の領域に入り込んで来たのだからね。しかも、人の子の試練のためにはわざわざね」

……。

なん、だと？

「……聞いてなかったのか？」

あ、あのババア……それじゃあジータが原因のマグナ達以外のプロバハとジ・オーダー・グランデは、全部あのばあさんが、仕組んで……。

十 決断

「ふえふえふえ……よくすべての戦いを耐えきったねえ」

久々に帰ってきたばあさん。ばあさんは、やたら大荷物でにこやかに俺の家に現れた。

「ええ、まったくもってばあさんとティアマト達の修行のおかげで死ぬいっババア
アアアッ!!」

「甘いッ!!」

「……ちいつ!!」

両手を広げばあさんを迎え入れるように向かって行きながらそのまま手刀を突き刺
そうとしたが容易くつかまれてしまった。

「けど、遥かに強く……本当に強くなったね坊や」

「何時もみたいに坊主呼びにしてくれ」

感動的な台詞を言ってるが俺の怒りの感情は凄まじいぞ。

「へっへっ……さあて、丁度みんな予定通り揃ったね。よくやったよ坊主」

今、俺の家には、ティアマト達マグナ6戦隊とB・ビー&ジ・オーダー・グランデ……
改め。

「私の名前は、ゾーイだ」

「おやまあ……名前、つけたのかい?」

「つけてもらった。ずっとジ・オーダー・グランデじゃ長いし、名前らしくないって」

ああ、心が浄化される……ゾーイが笑顔で、自分の名前を愛おしそうに言うのが尊
ぎる。今ばかりは、ばあさんの組み合わせが孫と祖母みたいで素晴らしい。

なお、名前を付けるのは、いい加減ジ・オーダー・グランデでも、グランデでも名前っぽくない会議が開かれ、ティアマト達と話し合い決められた。ジータがいなくてよかった。もしいたら「シルバー褐色レディちゃん」ぐらいは無理やりつけてそうだ。ついでにワイバーンズにもデイとリイの名が付いた。B・ビイ、と言うよりビイに似せて来た形になる。デイには尻尾にリボンが付いててカワイイ。カワイイ。カワイイ。

まあともかく、マグナ6戦隊とB・ビイ&ゾーイがいるわけで、それをばあさんが「予定通り」と言いやがった。

「俺はずつとあんたの掌の上ですかい」

「私の期待通りだったと言う事だよ」

ため息がでる。

「さて、なら話を進めようかね。坊主、あんたこれからどうする?」

「……どうするも何も」

「村に、残るか?」

さて、さてさて……どうするか。

「正直言えば金がねえからもう騎空団でも立ち上げて金稼ぐしかない気がするんだけど」

主にティアマトのせいだ。最近だとゾーイの貯蔵庫全滅事件も大概酷いが、いいんだ

……ゾーイに罪はない。

「オイ、コラ」

お黙り（笑）。

「そうだねえ……確かに、坊主には苦勞を掛けたからね。ならもし村に残るなら、今まで使われた出費全部出してあげるよ」

……この家、録音機器とかある？

「勿論昨日消えたと言う食料も都合するよ」

あーこの音声証拠でおいときたかったー。

「ただし、空に出たらやらんけどね」

ま、そうだよね。

あーあー……そうですか、そうですか……。

「……いや」

「うん？」

「……俺、行くわ」

「どこへ向かうんだい？」

「それは……」

行く場所、会いに行くやつ。

もう、決まっているのは、わかっていたのに。置いてかれたなんて、もう思っていたのに。何度も死にかけてやっと決心がつく。

「俺は」

■ 零 こぼれぬ、おもひで

「わたしね、何時かイスタルシアに行くの」

「マジかよ」

「なんか楽しそうだから行く!! なんかお父さんも帰ってこないし……それにお父さん、お母さんの事知ってる感じだからわたし、おつきくなったらお父さん追いかけてボッコボコにするの!!」

「マジかよ……」

「だからね……その時、一緒にきてくれる?」

「一緒かあ……どっちかって言うど競争でもした方が面白そうだけどなあ」

「競争……競争!! いい、すごいいいね!! じゃあ私とお兄ちゃん、どっちが先にイスタルシアにつけるか競争しよう!!」

「……ん」

「もしわたしより先にお父さん見つけたら、代わりにボッコボコにしておいてね!!」
「マジかよ」

■ 終 戦い終はらば、苦勞らうがまた来たり

■ ばあさんに俺の意志を告げて数日。ザンクティンゼルに一隻の船が来た。珍しい事だ。その船の前に、俺とティアマト達が並んでいる。

「これが、エンゼラか……」

緑のヒレを付けたような丸っこい、魚のような印象を受ける騎空艇「エンゼラ」。

「この度は、ご購入ありがとうございます」

そして俺の腰の下あたりから聞こえる声。別に腹が喋ってるのではない。

「あんたが、噂のよろず屋さんか」

「はい♪ その噂のよろず屋シエロカルテと申します」

ハーヴィン族と言う種がいる。大人になろうと人間の子供と同じかそれよりも小柄な種族。彼女、よろず屋シエロカルテは、そのハーヴィン族だ。

「中古ト聞イタガ、悪クナイナ」

へ水の加護をかけられているようだ。我にとっては居心地がいいな。コロツサス、生け

簧を移してくれ。ユグドラシルも生け簧の固定を頼む」

「* > 3 < オマカセ」

「————♪」

「我々の私物も移さねばな、使ってもらう予定の首輪や鞭が多くて……」

「そ、倉庫とか……じめつとした場所ないかな……そこ部屋にしたい」

「キッチン、キッチンはどうだ？ 美味しい料理作れそうか？」

お引越し気分のマグナ戦隊とゾーイは置いておこう。

「エンゼラは、以前海や水の豊かな島をめぐるのに利用されていた騎空艇でして、目的を終えて解体待ちだったのですが、まだまだ現役で通用するようでしたので、私が引き取ったんですよ、良い船ですよ♪」

「確かに、綺麗な船だよな」

実際に中古とは思えない。

これが、俺の船。いつの間にか、ばあさんが手配していたらしい。予定もピッタリに納品されている所をみるに、やはり俺はばあさんの掌の上であつたようだ。

結局俺は、空に出る。ジータに会いに、そしてその後どっちが先にイスタルシアにつくか競争するために。マグナ達を引き連れて、空を飛ぶ。

置いてかれたんじゃない、俺が行かなかつただけだった。だから追いつく。あいつ

と、同じ場所に。強さだとか関係なしに、楽しんでいきたい。同じ憧れを抱いていたあの時の様に。

「おめえの準備はいいのかよ？」

B・ビイが俺の顔の隣に浮いている。すっかり定位置になってしまい、もうあきらめた。すっかりビイ気取りか。

「だから、オイラはビイだぜ」

うるせい。

さて、用意と言っても俺には大して用意する物はない。ティアマト達は、俺に黙って買った私物やらが溜っているようだが、そのせいで、そのせいで、そのせいで、そのせいで、俺が個人的な私物を買う余裕がなかったのだ。持っていくのは、今までのちよつと良い武器程度だ。

見てろよ、ジータに追いついてガンガン金稼いで俺も好きな物買うんだからな!!

「ふっふっふ。楽しそうだね坊主」

ばあさんが現れた。もう流石に奇襲は仕掛けない。

「だが恨みは忘れねえ」

「ふえふえ、そう言っているのかい？　せつかく餞別を持ってきたのに」

「うん？」

言われてみると、ばあさんが俺の荷物に交じって置かれている大き目の木箱を指さしている。数は三つ置かれていた。

「よろず屋さんにも都合してもらった各地に散らばる武器さ」

「おっほっ」

思わず変な声出た。

「人との縁が深い物を選んでもらったからね、もしかしたらいい仲間に出会えるかもしれないよ」

「こちらの方でも、がんばらせていただきました〜♪」

「マジか、そんなにくれんのかよ」

「三つの内一箱だけ選びな」

んだよ、んだよおー。テンション下がるわお前ー。

「流石にそんな甘えさせられないよ。一箱に10個の武器、それでも必ずかなりいい武器が一本はあるよ。もしかしたら二本かもね。どれに何を入れたかは、私ももうわからない運試しさね」

ふーむ、それはそれで面白いな。俺の船出の運試しつてところか。

「まあ、いわゆる初回の10連無料ガチャだな。あいにくリセマラは出来ねえけど、直感でやりな」

B・ビィ、お前は何を言ってるんだ？

さて、では選ぶとするか。真ん中か、右、左……。

「せっかくだから、俺は真ん中の箱を選ぶ!!」

ずいっと箱奪取。

「はいはい、それじゃオマケ、あれも上げるよ」

するとばあさんは、武器箱とは別の木箱を指さした。

「修行で余ったエリクシールとエリクシールハーフだよ。20本以上あるからしばらく

は大丈夫だろう」

「うわあい、ばあさん太っ腹」

まるで今までの反動のようだ。優しいおばあちゃん僕大好きー。

「箱は船に乗った後にでも開けな。広げると手間だからね」

「そうするわ、ありがとなばあさん」

ちようど戻ってきたコロツサスに頼んで搬入しておいてもらう。ありがとね。

「さて、それじゃあそろそろ旅立つわけだけど……坊や」

おっと、坊や呼び。

「あなたにはあらゆるジョブの特訓を課した。そこいらの騎空士じゃできないようなスキルを身に着け、特殊な武器もより多く使える。これから武器は、自分で好きなように

工夫して使いな」

「それって」

「免許皆伝、つてことだよ」

……ばあさん。

「ジータちゃんに会ったらよろしくね。そろつてでも、どつちかだけでもたまに帰つてきな、いつでも組手してやるからね」

……ば、ばあさん。

「最初の目的地は、ポート・ブリーズだったね。ジータちゃんの辿った後を追うつて事で」

「道中と島についてからの事は、ついでに乗らせていただくので私の方から色々とお教えしますね」

「ティアマトがいれば風の調整もできる。そもそもが船型のセレストは、船を動かしてくれるしこの空域のルート殆ど覚えているようだから心配はないよ」

ちくしょう、恨みこそ多けれど……やはり、ばあさんのこの気遣いには、感謝の念がある。

そして、ついに船に乗り込み船が出る。

「身体に気を付けなよお——！！」

「おーう!!」

徐々に離れていくエンゼラ。村のみんなや、ばあさんが俺達を見送る。ジータもこんな気持ちだったのだろう。また村に帰る事もあるだろうが、最後にばあさんに感謝の言葉を言うべきだろう。船から身を乗り出し叫ぶ。

「ばあさああ——ん!!」

「ぼうやあ——言い忘れてたけどねえ——!! 船代と船の補修代!! 武器代とその他旅の必要な雑貨食料その他料金あんたにつけておいたからねええええええ——!!!」

「ヴァヴァアアアアアアアアアアアツ!!! はあああ、は・な・せえええええ、はなせえシユヴァリエエエエ!! 今すぐ、あのババア殺してやるううううう!!!」

「借金かなりあるけどおお——!! 全部シエロカルテさんに払うようにねえ——!! それじゃあ元気でねえ——!! ふえーっふえっふえっふえっ!!」

「船代維持費生活必需品、もろもろしめて、100万ルピになります♪ 今後とも、今後」ともよろず屋をよろずず♪ ぷっぷっぷう♪」

「んっがああああああ〜〜〜!! ふね、船を戻せせレストオオオオオ!! あ、ああああんぎやあああああああ!!! ムキギイイイイイイイイイイ!!」

俺の遙かなる空への旅立ち、怒りの絶叫と大量の借金と共に始まった。

そしてその後、せめていい武器をと武器を確認すると【割れた酒瓶】【ハリセン】暴発しやすい【ハンターライフル】等ポンコツ武器が混ざり10個入っている事にも気が付いた俺は、何処までも続く蒼い空に叫び続けていた。

「へっ！ こいつあ、にぎやかな旅になりそうだぜ。な、相棒!!」

「ぬがあああああああああ————つ!!!」

これが、スーパーザンクティンゼル人GODと呼ばれ全空から尊敬と、信頼と、畏怖を集めた史上最強のヒト、ジータが率いる後の伝説の騎空団【ジータとゆかいな仲間たち団】と双壁をなす事となるもう一つの伝説、もう一人のスーパーザンクティンゼル人の男が率いた伝説的騎空団【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z OY】の物語の始まりであったのだ。

スーパーザンクティンゼル人の軌跡 名前を決めて迎えよう酔っぱらい

■ 一 団の名は。

重要な事に気がついた。

俺達がザンクティンゼルを旅立ち、イスタルシアへと向かう……。その前に俺は知らぬ間に作られた借金を返済するためよろず屋シエロカルテから報酬のいい依頼を貰ってはそれをこなし金を稼ぐ。そんな中で気が付いた重要な事。これを何時までも後回しには出来ない、俺は至急エンゼラの会議室に団員達を集めた。

「寝テタノニ……」

「(・ω・) ドシタノ？」

もつとも今居る団員などザンクティンゼル出た時の化け物集団ばかりだが。

「皆の衆、俺は大変な事に気がついた」

〈なんだ唐突に〉

「わからないか？俺達は、過程はどうあれついに船を手に入れた」

「借金と共にな」

「……それなりの武器も手に入れ」

「8割……ポンコツだったね……」

「……頼もしい仲間もむかえて、むかえ……」

（笑）ばかりだが。

「泣いてるのか、団長？」

よそう、これ以上自分で自分の傷をえぐるのは。

「それよりもまだ俺達に無いものがある」

「イイカラ本題ニハイレ」

「……いいか、耳かっぼじってよおうく聞け」

極めて重要で可及的速やかに、今後俺達が騎空団として活動するに当たり絶対的に必要なものがある。

「団名決まってるないじゃん」

「そーいや、そうだったな」

名前がない。俺達は未だ無名の騎空団なのだ。旅立ちの時点ですら屋シエロカル

テと出会えたためにわりと最初から依頼を受けたりできたので完全に忘れていた。あつはつは、うつかり。

これを決めない事には今後自分達だけでは依頼を取りにくい。

無名の騎空団などあるだろうか？ いや、ない。

騎空団とは、名が売れてなんぼである。覚えてもらうには、活躍と共に名前を売り込むのだ。

「と言うわけで、速やかに騎空団名を決める会議開始します。はい、団名案ある人挙手」
「急すぎるぞ主」

へまあ、確かに重要だ。あの娘でさえ団名をつけているからな。名前はともかく

ジータとゆかいな仲間たち団の事は置いておこう。あんな名前になんかせんぞ俺は。

「だがジータの団名は覚えやすさでは抜群だよ団長」

「たしかになあ。名前はともかく、誰が団長か一発だもんな！」

ゾーイとB・ビィの意見も最もである。よし皆の衆、なるべく覚えやすくてインパクトばつちりな奴頼むよ。

「ジャア、【美しき風のティアマトの団】」

ふざけんよ。

「却下に決まってるだろ」

「ナゼダ!!」

「おめーの団じゃねーだろ!! 俺が団長だぞ!!」

「オマエミタイナ、パットシナイ奴ガ団長デハ覚エテモラエンダロ!!」

「うるせえ!!」

こいつじゃ駄目だ。次だ次!!

「(。—ω—) ボクナンデモイイヨ」

コロツサス、それちよつと一番困るやつ。

〈【リヴァイア団】とかどうだろうか〉

駄洒落かよ。しかもクソつまらんし。

」

ユグドラシルよ……【ユグユグ団】は、可愛いけどちよつと勘弁して。なんか悪の組

織っぽいし。

「なら【星晶騎士シユヴァリエ〜へ、変態、この変態男!少しは恥を知りなさい!〜】」

なめてんの? なんでサブタイトルあんの? 悪名しか轟かねえよ。依頼一つも来

ないよそんなの。

「じゃ、じゃあ……えつと、えつと……【団長が普通の団】とか」

セレスト、君良いつもりで言った? 俺の心が粉碎し始めてるんだけど。

「ネタでいいなら【ぐらぶるっ！】でいこうぜ」

いいわけあるか。なんだよ【ぐらぶるっ！】って。例の【特異点るっ！】の事か？

「……ふむ、【世界調停の翼】」

まてまてゾーイ、これ別に大喜利じゃないだ。お前までネタに走るな。いや本人は真面目なつもりかもしれない、字面が良いのがまた何とも言えんがこの団にそんな使命はない。

と言うか何これ、この団殆どの奴センスが壊滅的じゃん。ジータの事何もいえないよ。目くそ鼻くそだよ。クソしかねえよ。

「ナラ、オマエノ案ヲ言エ」

……まあ結果的に？ 真打が最後に来る的なね？ 俺のネーミングセンスが良いと自惚れるつもりは無いが、これだけクソな名前が揃えば悪いと言うこともあるまい。全員の特徴を踏まえ、インパクト抜群なやつをかましてやるぜ。

「騎空団【グランブルー】だ」

「普通スギル、却下ダ」

「(—ω—)ン、ン？……？」

へつまらん

「……？」

「グラブル団とか略されそうだぞ主よ」

「ジータの船って……グランサイファーだっけ……かぶってる」

「かつこいいとは思ったんだろうな。遅く来たお年頃か相棒」

「私にはよくわからないな」

あれあれ？ねえ、俺なんか変な事言った？　ここまでボロクソ言われる様な事。

「うるせえ！　団長は俺だ!!」

「横暴ダ!!」

「ならせめてもうちよつとまともな案だせやオラア!!」

へしかたない、力尽くしかないようだな……」

「主が相手とて致し方ない……なるべくケツを攻撃してくれ」

「おもしれえ……死にてえ奴からそこに並びな」

おう、いい度胸だこの野郎。騎空団命名権賭けてやってやろうじゃないかこの野郎、
てめえ。

「まとめてかかって来いやあああーっ!!」

■ 二 寿限無ジユゲム

その後、船が壊れそうになるのを回避するため無人の孤島で繰り広げられた騎空団の命名権を賭けた最低の戦い、それは全員ノックアウトの引き分けとなり戦いに参加せずお菓子をつまみながら静観していたコロツサス等癒し組の手によって阿呆達全員が気絶している間に考えられた団名をシエロカルテを通して正式に「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女ZOY」として登録された。

このことに関して、一切初期メンバーにかかわらずスルーされた団長の少年は、後にファータ・グランデ空域で著名な雑誌のインタビュで「誠に遺憾である。改名の機会があればせめて自分（団長）の名を入れたい」と語っている。

事実この後この騎空団は新たな仲間を迎えた後も何度か改名機会があつたが、そのたびに上がる候補がクソ過ぎて結局阿呆達による命名権を賭けた戦いを繰り広げられ、全員が倒れた後その時の癒し組達によって「超星晶戦隊マグナシックスクライマックスwith具羅武流! B・ビイクンマン&均衡少女キューティ・ZOY」、或いは「星晶戦隊マグナシックスMEGA MAXと仮面戦士B・ビイクンマン&プリティー均衡少女ZOYマックス・スマイル」などの些細な改名が何度かされるもの「略し辛いし、いくら何でも長い」と各方面から言われ結局「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女ZOY」と稀に「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女ZOYと仲間達」に落ち着きついに団長の名が追加される事は無かつたと言う。

この伝説のスーパーザンクティンゼル人と呼ばれる男が率いているにかかわらず、名を入れぬ事でもよりそのスーパーザンクティンゼル人の存在を神秘的にさせていると言う説もあるが、当時のメンバーの証言からも「忘れてた」説が定説である。

■
一 フェイトエピソード 帰ってくれ酔っ払い

ある村の居酒屋。何か特別な村と言うわけでもない、過度な善人がいるでも最悪の悪党がいるでもない普通の村の居酒屋で。

「なあ……ラムレッダ？ おまえ、今回で皿割るのとお客様に粗相するの……何回目？」

「ふにやあく……？」

「ね、聞いている？」

「んにやあ……ごめんなしゃい、店長。聞いているにやあ……」

酔っ払いが説教を受けていた。

「じゃあ、俺の質問答えれる？」

「はひい……おしやはあ、今日で25枚い？ おきやくさんに、おしやけ零したりし

たのはあ……34回い？」

「皿は56枚客への粗相は70回だよ、この店が開店して以来、一人が一月で割った数の新記録だ」

「おお〜」

「私はなんで君を雇ったのか、自分でもわかんなくなってきたよ」

「にやは、にやはは……ごめんしやい」

ベロンベロンに酔っ払い修道服を着たドラフのシスター、ラムレッダがこの店に来た時の事をこの店長の男はよく覚えていて。半年前の事であろうか、彼女は初めこそ普通の客として店に酒を飲みに来た。そして何時まで経っても店を出ない。しこたま飲んだ酒の空き瓶が並び、床にも転がり一方で彼女は幸せそうだった。

「お客さん、閉店ですよ」と呼びかけてもまるで反応が無い。しかしそのままにも出来ないで少し肩を揺らしたのだがそれがまずかった。

「おぶう」

彼女の口から虹がかかり店がちよつとすっぱい匂いになった。

後日一日店で安静にさせた後、心底申し訳なさそうなラムレッダに毒気を抜かれた店長が話を聞いた。

今まで修道院で清貧な生活を心掛けていたが、成人して初めての酒を飲んで飲んで飲みまくり、ついに記憶が飛ぶほどに呑んだ。そして冷静になった時自分は、修道院の外

におり、記憶が無く何をしでかしたのかわからぬ恐怖にかられ飛び出してしまったこの事。

彼女は今27と言うので、もう7年もそれを理由に放浪し続けているのだからある意味大したものだ。はつきり言ってしまうえば自業自得なのだ。がなんとも目の前でしょぼくれるラムレッダを見るとほおつて置けない気持ちにさせられる。

店長は、ラムレッダを雇う事にした。打算的な事だが彼女は、女性のドラフ族特有の小柄でありながら豊満な胸があつた。そして容姿も良い。シスターと言うのも面白かつた。案外いい看板ウエイトレスにでもなるかもしれないと、暢気に考えラムレッダもまた店長に感謝していた。

そして店長の期待が大きく外れたのは、彼女を雇つたその日の内であつた。

ラムレッダは、酔つていた。常に酔つていた。酔つたウエイトレスが居るだろうか？ いや、いない。よしんば酒が入つても前後不覚、営業に影響が出るほど飲むか？ 飲まないはずだ。だが彼女は飲んだ。飲んで呑んでのみまくる。当然皿は割る、客に料理をぶちまける。出す料理を間違えるなんて日常茶飯事だ。

客も客で夜の居酒屋にくる客の中には、既に出来上がつてゐるものもいる。大酒飲みラムレッダを面白がつて、接客中に飲ませるやからがおおい。そのまま接客に戻るラムレッダによる被害が大きくなるのは、当然の事であつた。

普通ならもうその日の内にクビにするのだが、酔いが覚める度申し訳なさそうな彼女の顔や、それでも楽しそうな店の客達を見ていると、どうしてもクビには出来なかつた。だからこそ、半年持ったのだ。

だが流石に限界が来た。幾ら客が彼女を許し、自身も彼女を許そうと彼女による物損被害などもろもろが多すぎる。

「……君の事を理解はしてるけど、だが私は店とそこで働く店員の生活を預かる身だ。これ以上は見過ごせないよ」

「あう……はい……」

「一先ず、今日一日頑張つて……お酒は……もう飲んじやつてるから無駄だけど、それ以上飲まないでね、いいね？客に勧められても飲んじや駄目、ね？」

「んにゃ、わかつたにゃあ」

店の休憩室からトボトボ出て行くラムレッタを見ると罪悪感が湧くが、しかし同時に彼女に頭を悩まされているのも事実だった。男は、人からはよく、御人好しいと言われるが彼は、自分でもそれを今自覚していた。

（だれか都合よく彼女を引き取ってくれる人でも現れないだろうか）

あんな問題児、好き好んで引き取る人間なんて全空広しと言えどいないだろうにそんな期待を持たざるをえない店長だった。

二 問題児には、問題児をぶつけんだよ

その日、ラムレッダはとても緊張していた。まるで初めて働き出した時のようだ。店長の言葉が頭に日響く。

「これ以上は、見過ごせない」

わかっている。自分でもこのままではいけないと。酒が悪いんじゃない、酒に飲まれる自分が悪いんだ。酒、なんて罪深い命の水よ。だが彼女は決意した。わかった、私は断とう。この日を乗り切るため、酒を断ち接客に挑むのだと、そして緊張を和らげるため彼女は、一杯の酒をあおったのだ。

「……んにゃあ!? だめじゃん!」

結局彼女は、酔ったまま接客に挑むのだった。

そして……。

「きやあつ!! 服にスープが!!」

「ひいつ!! 皿が飛んできたぞ!」

「料理が違うんだけど……」

「なあ、この料理はなんて言うんだ?」

「よう知らんけどこの島の名物のしこたま芋ぶち込んだシチューだそうだ」

「それは、食べがいがあるなあ団長」

駄目だこりや。店長は頭を抱えた。

こうなるだろうとは思っていた。まずこうなると思っていた。けれど最後に信じてみようと思つたのも確かだった。だが無理、もう駄目だ。ほろ酔い状態で接客に挑んだらラムレッダ、あつさり客に勧められた酒を飲みまくりペロンペロンになった。

だが店長が更に頭を悩ませているのは、店の団体席を物理的に占領してる団体に対してだった。団体席が使用し占領するのは当たり前のように思えるがこの団体、圧が凄い。小型の竜を3匹従えた美人なのに残念そうな女性と、床ぶち抜きそうな鎧と、でかい蛇つばい魚類(?)と、めっちゃ癒し空間撒き散らす少女に、腕が四つある女と、クソ暑そうなゴスロリ衣装の女に、黒い竜のような小さいナマモノ、さつきから大人五人前ぐらいの料理を一度に注文し平らげては追加注文する褐色の少女。あとなんか印象が薄い少年。旅の騎空団らしいこの者達だが、何だこの色物集団。入店させたのはどいつだ。

「んにやあくおもしろそうなお客さん達……ごあんやいしくしておきましたにや〜」

ラムレッダだった。店長は願つた。正直早めに店を出て欲しい。

「んにやああく〜く〜く〜?」

「あじやあつ!？」

「ああ……団長が、熱々シチューに顔を……っ!」

「はにやあゝゝゝっごめんによさゝい」

「ブークスクス、ダツサ。超ウケルワ」

「そう言う熱々なのは、蟻攻めで私にしてくれ」

「団長、皿に顔を突っ込むほどお腹すいてたのか?」

そしてよりによってラムレッダがその印象の薄い少年の頭に持ち歩いていた酒瓶を当ててしまい、少年の頭は熱々シチューにイン。他の仲間と思われる者達の反応もおかしい。

「らいじようぶですかあゝ? おきやくさんゝ」

「あ、気にしなくていいぜ。こいつ何時もこんな感じだからよ。酔っ払いの姉ちゃん、オ

イラりんごあれば欲しいんだけど頼むぜ」

「にやあゝゝん? ぬいぐるみがしゃべってるにや?」

「はっはっは、オイラは人形じゃねえぜ」

「にやははゝおもしろゝいにやゝ……」

よりによってその団体に絡まないでくれラムレッダ。

店長は頭を抱えてうずくまった。

その時である、店の中に一人の「チンピラ風の男」が現れた。店長の嫌な予感が膨れ上がる。チンピラ風の男は、腹が減ってしょうがないからと食事を出せと言いながら席に着いた。

そして、店長は知る事になる。酔いどれラムレッダ、奇天烈集団、チンピラ風の男。この組み合わせが、この店長にとっての光明となるのだった。

■ ■ ■ 三 割れた酒瓶の出会い

変な店に来た。

いや、店自体はおかしくないのだが、店員の一人がおかしい。ドラフ族の女なのだが、この女酔っ払いながら接客してる。しかも商品ではない個人用のでかい酒瓶を持って、るもんだから危ないと思ったらありやしない。とか思ってたたら、バランスを崩したその女に瓶で頭を打たれ俺は、注文したやたら芋のあるシチューに顔を突っ込んだ。クツソ熱い。

おら、ティアマトも笑うんじゃない。ゾーイ、別に腹空いてるわけじゃないよ、見てなかった？あとB・ビー、何時もどおりって何だてめえこの野郎。我が団の仲間達は、コロッサス達癒し組みを除き心配してねえ。俺は認めねえぞ、こんな通常運転。

おうおう、姉ちゃん何してくれんの？と文句の一つでも言おうと思つたが、どうもこのドラフの姉ちゃんを見てると毒気を抜かれる。酔つたのも客が飲ませたらしいのであるとも言えん。だとしてもよく店は、こんな店員雇つているもんである。しかもシスターの格好。なんなの？ 趣味なの？ もしかして、ここそう言う店？

勿論そんなわけないだろう。だとしたら、未成年の俺を入店させていない。なお更この姉ちゃんの位置が不明だが。

「ふざけやがつて、ぶつ殺してやる!!」

唐突に誰かが叫んで店長の悲鳴が上がった。

なんだ喧嘩かと声のほうを見ると、あの姉ちゃんがチンピラに絡まれとる。物の数秒でトラブルを起こすとは、トンでもないトラブルメーカーだ。店長が仲介に入っているが、それでもチンピラの怒りは、収まらないようだ。しかし、あんな脅し文句言う奴がいるとは、実に三下つぽい奴だ。

「オマエモ、悪態ツク時大概三下ツポイズ」

うそやん。

「は？ お前、何証拠にそう言う事言うわけ？ ふざけんなよ、てめーこの野郎、てめー」

「ソウ言ウトコロダ」

「わざとだし、わざとそれっぽくしただけだし」

「(; . ω .) ケンカ イヤダナア」

「お代わりを頼みたいのだが……店員さんがいないな……」

「……………」

「お前まだ食うのか……」

〈今日稼いだ報酬の殆どなくなるな〉

「燃費……悪すぎ……」

「りんごまだかよ」

「そこっ!! さつきからゴチャゴチャうるせーぞ!! この、なんだこの……なんだこの集団っ!」

チンピラが俺たちに向かって咆えるが直ぐなんかわけわからん物を見た表情になる。気持ちにはわかるぞ、チンピラ。正直よく店に入れたと思うほど混沌とした集団だからな。見た目完全に人間っぽい奴が俺とゾーイ以外いない。

「お構いなく、俺達ただ飯食ってるだけです」

「いや……と言うか、お前大丈夫か? 顔めっちゃ火傷してるけど……」

「その店員に出来立てシチューに顔突っ込まされただけだからご安心ください」

「ええ……やだ、何この店こわい……」

強気だったチンピラだがカッとなったただけだったのか俺の惨劇を聞いて途端に弱気

になつてゐる。俺も自分で言つててなんだろう、なんでこんな目に遭つてるのか。ただ飯を食いに来ただけなのに。

「お、お客様……大変ご迷惑をおかけして申し訳ありません……お食事の方直ぐにお運びしますので……」

「いや、いいよこわいよ……何だよこの店……シチューに客の顔ぶち込む店員と訳わかんない集団いるし……帰るわ……帰るわ」

店長は恐る恐るとチンピラに謝罪を述べるが、チンピラはすっかり怯えた様子で店を出てつた。店長の後姿が実に哀愁漂つてゐる。きつと何時も苦勞してゐるんだろうな。わかるよ、その気持ち。

「にやあく……しゆみましえん、てんちよ……もつて行く順番と料理間違えて、危うくおしやけの瓶でおきやくさん叩きそうにやつて、おしえけおきやくさんにぶちまけちやつて……」

そら怒るよ。あのチンピラなにも悪く無いじゃん。おこだよ、激おこだよそら。何してんのこの店員。チンピラが気の毒だよ。こわ、近づかんとこ。

だが、その時店長の哀愁の中に鋭さを宿した眼光が俺を見たことに気がついた。めっちゃ嫌な予感がした。

「オイお前ら、帰るぞっ!!」

「逃がしやしませんぞお客さまあ!!」

「ぎゃああああああつ!!」

なになに、なんなのこの店長はやっ!! やめろ、腰を掴むな離せこの野郎!! 何だ

つよいぞ、この店長っ!!

「思いだしたぞ……最近話題の……っ!! 僥倖……っ!! 圧倒的……僥倖っ!!」

「なにこの店長怖いんだけどっ!!」

「特徴的な色物の団員しか居ないと話題になって、そのくせ団長の印象が薄いと言われる騎空団っ!! あんたらがそうだな!? そうなんだなっ!!」

「うるせえ!!」

色物は否定せんが団長の印象が薄いつてどういう事だおらあつ!!

「見夕目普通ダカラナ」

〈正直地味だ〉

「平凡と言うやつだな」

「主人公顔ではねえよな」

お前らぶつとばすぞオ!!

「……お願いです、私の頼みをお聞きくださいいゝゝゝっ!!」

すると店長が野獣の様な表情から一気にポロポロ泣きまくる。周りの客の目など気

にするそぶりは一切無い。ああ、俺のズボンがおっさんの涙と鼻水で汚れていく……。

■ 四 俺の胃死にたまふことなかれ

後日、船に一人団員が増えた。

「にやあく今日からよろしくにや」

結論から言ってしまうとあのウエイトレスのドラフをうちの団で引き取る事になった。どうしてこうなった。どうしてこうなった。

見たくも無い涙と鼻水と涎をポドポドに出しまくる店長のおっさんに無理やりに店の休憩室に引き込まれ曰く“聞くも涙、語るも涙”なドラフ娘、改めラムレッダの話を聞かされる。だがなになが“聞くも涙、語るも涙”だこの野郎。世間一般じゃそれを笑い話とか失敗談と言うのだ。初めての酒で失敗しただけじゃないか。

それでも店長のおっさんには、確かに同情を禁じ得ない。なまじ人が良いために追いつけない問題児。わかるよ、なんとなくその気持ち。苦労人だったんやな。

そこに来た問題児に慣れていると噂の騎空団。慣れてないよ、つらいよ。店長の脳内に「押し付けよう」と言う妙案、俺にとっては迷案が思い浮かぶのに時間はかからず、俺の腰にタックルし俺を確保したのである。

「君の真の居場所はあそこだラムレッダ！」

と、目を輝かせ適当に感動的な台詞を言いながらラムレッダの説得を完了させ、とうとうラムレッダ本人もなんとなくその気になってしまい、最終的に俺の説得をこり押しした。と言うか外堀を固められた。「別ニ、カマワンダロ」とティアマト始め全員がOKサインを出してしまい、団長として立場がいまいち弱い俺が反対しきる事が出来なかった。

そして何より。

〈我々以外の仲間もそろそろ必要だろう〉

リヴァイアサンのその一言に揺らいだのは確かだった。

そして今に至る。

「んにゃああくあくはっはっはあつ!! きょうはあくあたしの入団歓迎ありがとうにゃあくあくんっ!!」

「オウオウ、飲メ飲メ」

〈酒なら多量に買つといたからな〉

どうしてこうなった。どうしてこうなった。

さつきまでまだシラフじゃなかった？ なんでもう出来上がってるの？ 歓迎会つてなによ、俺知らない。なんで料理と酒が用意されてるのさ。 歓迎会つ

「戻る途中でみんなで購入したじゃないか、団長」

必要な生活用品の補充だったはずだよーイ。何時の間に買ったのさ。こんな飲み食いしまくるだけの材料買う予定なかったよね。酒も暫く買う予定なかったよね？

主に（笑）達がウワバミだったから、しこたま飲むからやめようってなったよね？ ねえ!!

「（*・ω・）イッパイツクルヨツ！」

「ぞ、材料は……良いものを揃えてるからね」

高級食材ですか？ そうですか……あのところで、お金……お金は？

「あたし……こんなに歓迎しやれたのはじめてだにやあ〜とつても嬉しいにやあ〜！」

「ウム、イイ飲ミツプリダナ」

「美味しい酒にあう飯もあるからな」

だ、駄目だ……全員既に酒が回っている。話が通じねえ。

「だあ〜んちよ〜!! たのしいにやあ〜うれしいにやあ〜おしゃけおいしいにやあ〜」

「ちよ、いきなりつかまるな……くつきっ!! 酒くさ!!」

ラムレッダが千鳥足と思えぬ早さで俺の腰に絡みついてくる。その上酒臭い。

「あらためてえ、よろしくにやあ〜だんちようくん〜」

「はいはい……」

「にやはは……団長君は、まだ子供だったねえ……おしゃけ、飲めるようになったら、飲み方おしえてあげるにゃ〜」

「はいはい、ありがとう、ありがとう」

「む、むぐ……ッ!? あ……やば、い……き、昨日までのおしゃけ……まだ、けっこ……のこつて……うぷつ!?!」

へいへい、ちよつとそれはまずいですよ、まつてまつて!!

「あ、ごめ……ちよつと……む、りい……うつ!」

待て待て待てまていつ!! 待つんだラムレッダ、耐えろ! せめて離れてから……力つつよつ!! はなせねええつ!?

「あ……ゆらすと……まず、うつぶつ」

し、しまったつ!! あ、ああつ!! うわああああつ!!

■ 五 苦勞を買った覚えはない

「シエロさん……依頼ください、報酬良いやつ」

「うふふ〜団長さんは、熱心で関心ですねえ♪」

「出費がひどいもんで……」

「出費がしゅつぴきならぬ事になってるんですねえ？うぷふう♪」

「あはは、わらちやう……ちなみに、今借金幾らです」

「えつとお……現在234万と5600ルピですねえ」

「なんで増えてんのっ!？」

「たまに団員の方達、主にティアマトさんがツケで趣向品などをうちで購入されるもので〜」

「あのくそどもがっ!!」

縁を感じろ、強敵へともとなれ。風はいつでも吹いている。

■ ■
一 俺待つわ（常識人を）

旅の中で必要な物とは、色々あるが騎空団を立ち上げた以上武器が必要なのは言うまでもない。もともとばあさん経由での武器は、色々と持っておりミスリルを使った武器は全種類あつたし、丈夫で使いやすいため基本それを俺は愛用している。

さて、旅立ちの時質が良い悪いもバラバラな武器がランドムに入っている三つの箱の一つを選んだ俺だがその中身のほとんどが到底武器と思えぬものが多かった。

具体的に言うと【割れた酒瓶】【ハリセン】など完全にネタである。これを入れたばあさんのいるザンクティンゼルに向かって吠えた俺の気持ちたるや……。だが普通に武器として使えてしまったため、複雑な気持ち俺を支配した。

他に【ハンターライフル】、一見宝石を埋め込んだ良い銃に思えたが、何か知らんが頻繁に暴発する。前の使用者のクセでも残ってるのだろうか。ポンコツである。

「ブラストヘヴィナックル」、バチバチ蒼い光がうるさい手甲。格闘戦では、かなりいい感じ。

「ナイトベル」、小振りの鐘である。夜中鳴らすとよく寝れる。武器？　だがばあさんの特訓により楽器すら魔力を操り武器として使えるので武器である。

「ホワイトソード」、実に素直な直剣。実際は儀礼用らしく武器としての使用は、あまり期待しない方が良さだろう。

「ブルークレスト」、蒼い刀身が実に美しい剣で質も結構なもので、箱にあつたまともな武器の一つ。

「ライトスタッフ」、結構な呪い耐性力をもつ杖。悪くは無いがシエロさん曰く、俺が使うにはちと弱いので、対呪能力を期待したお守りとしての方が優秀。

「クラウ・ソラス」、めちやくちやいい剣——のレプリカだそうだ。本物のクラウ・ソラスは、本来なんたら騎士団とか言うところの団長殿だけが手にしてるはずなので、ここにあるのはおかしいとシエロさんの談。けど単純な武器としては、本物と遜色なく優秀なので入荷し箱に入れてくれたらしい。

「ソウルイーター」、鎌。デカイ鎌。三日月形の鎌にはボロ布が少しまかれててイカすと思う。いいね、こう言うのだよこう言うの。

全体的に見て、「あれ、いいじゃん？」って最初なりそうだった。だが、どうも一部ハ

ンターライフルやプラスチックヘヴィナックル、より良い武器のはずのソウルイーターなどから嫌な予感がする。ナイトベルあたりも何とも言えん。クラウド・ソラス(レプリカ)も何故だろう、なにか胸騒ぎがする。

ばあさんが言っていた。「特に人と縁が強い武器を選んだ」と。

武器がよかろうと、はたしてその縁はどうなのだろうか。少し前に仲間になったラムレッタと言う例がある。彼女がしょっちゅう戦いで使うのがでかい酒瓶で何時も酔っ払ってる事から、「割れた酒瓶」が引き寄せた縁なのだとわかる。

だが今後もきつと俺は色んな武器を手に入れるだろう。その縁で様々な人達と出会い、仲間になるかも知れない。

仲間になるのなら、ぜひ常識人が多めに来てほしい。特にうちの面子を制御できる人材募集中。「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y」(と俺)は、いつでも仲間を募集してるぜ!!

■ ニ フェイトエピソード 強い奴に会いに行こう

■ 少年は、ある噂を聞いた。

少年は、強き者を求めた。

少年は、故にその噂の者を探した。

少年は、夢があつた。

少年は、信じた。

拳で語れぬ者はいない。拳で通じぬ心は無い。

強さとは心、心とは強さ。

心の強さを拳に乗せて、交わす拳の語り合い。

口でわからぬことあれど、拳でわからぬ事は無い。

拳を信じる者ならば、心を信じる者ならば。

口で語るな、拳で語れ。

己が魂たぎらせて、その手を握り力を籠める。

強敵ともよ待つてろ、そこへゆく。

俺の拳を受けてくれ。

お前の拳を魅せてくれ。

だから闘う、己のために。

だから闘う、強さを求め。

だから闘う、君と強敵ともとなるために。

「あんたが【星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y】の団長だ

「なっ!! さあ! 拳で語り合おうぜ!!」

「お断りします」

■ 三 強い奴が“遭い”に来た

魔物討伐依頼を報告しに行った帰り、なんか知らん奴に「殴り合おう」宣言されてド
ン引きしてる。

「いや、誰君?」

「おっとすまねえ、名乗るのが遅れちまった。俺はフェザー! さあ、拳で語り合おう

!!」

「あー……うん、ちよつと待って」

「待つぜ!!」

これはヤバイ奴に絡まれたかもしれない。少しばあさんと同じ心配がするのもいた
だけない。見たところ暑苦しい俺と同じ歳ぐらいの少年だが、相当な実力者であるよう
だ。ううむ、一発で相手の実力見抜けるようになってるなあ俺。

「……どうしよう」

「別にかまわねえんじやねえか？」

「相手シテヤレバイイダロ」

「にゃ〜？ 団長君なら、すぐ終わるんじやないかにゃあ〜？」

今回の依頼メンバーのB・ビィとティアマトとラムレッダによる適当な言葉。誰だこのメンバー依頼で選んだやつ。依頼中B・ビィはビィ気取りで特に戦闘に参加せず、ティアマトもサボるわ、ラムレッダは吐くわ大変だったぞ。それでも仕事はしつかりとしたから文句言えんが。ラムレッダはなんで酔うと攻撃力上がるのだろう。本来修道院出の詠唱魔法の方が得意なはずなのに、始終酒瓶を武器に物理で殴るし。吐くし。

「……うん、それでフェザー君、なぜ俺と戦いたいのかね？」

とりあえず理由を聞いておこう。問答無用で殴り掛からないぐらいには常識はあるようだから。

「よく聞いてくれた！ 近頃、駆け出しの騎空団でありながらメンバーの殆どが星晶獣並みの力を持ちそれを束ねる影が薄く地味だけどやたら強い団長がいると聞いたんだ！」

「その噂流したの誰じゃい」

「俺は知らないな！」

「元気がいいね君。」

「それだから強いと聞いた俺は、ぜひ手合わせ願おうと思ひ噂を頼りにあんたを探し出したんだ！ さあ、語り合おう!!」

「落ち着こう、ちよつと落ち着こうか」

「落ち着くぜ!!」

「落ち着こう?」

とんでもねえ噂だ。星晶獣並みと言うか星晶獣その物だが、この際それはいい。影の薄い地味な団長つてなんだ。

「確かに地味な感じだが逆にそのおかげで直ぐあんたが【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z O Y】の団長だとわかったぜ!!」

「うるせいやい」

「それにさっきの魔物との戦い、観させてもらったぜ……間違いない、あんたは強者だ!

ぜひ闘いたい、語り合いたい!!」

ああ、暑苦しい暑苦しいよう。苦手だぞこいつ。

「やだよ、見てたならわかるけど俺魔物の群れ全滅させて疲れてるもん」

「そうなのか!?!」

「そうだよ」

君と会ってからさらに疲れたよ。

「……確かに、実力が発揮できない時に語り合ってはあんたにも失礼だな」

「わかつてくれたか」

「後日また尋ねる！　じゃあな!!」

「わかつてくれなかったか……」

フェザー君は、俺の返事を聞かないで走り去ってしまった。

実にマズイ。これはいかんですよ、目を付けられた……面倒な奴に絡まれてしまう。早急に彼から逃れる必要がある。

「急ぎエンゼラに戻り島を離れるぞ！」

「疲レタカラ途中ノ村デ休ミタイ」

「ごめ……途中で、飲んじやったから……はき、そ……」

「駄目だ相棒、特にラムレッダが動けねえぞこれ」

このしまつ。

仕方なくその日は、船にすぐ戻らず途中にある小さな村に一泊していった。

■ 四 確かみてみる！

■ 村で一泊した後、すぐにエンゼラへと戻る俺達。幸いにもフェザー君は、村に現れず

無事やり過ぎせたらしい。俺はこれ以上気苦労を抱えずに済むとホツと胸をなでおろし、やっと戻ったエンゼラへと入り込んだ。

「待っていたぜ、団長!!」

「うそやん」

まさかのフェザー君であった。

おいおい、誰だこいつエンゼラに乗せたの。と言うかいつの間にかいたのさ。

「これがあんた達の船だつて言うのは、親切なよろず屋から聞いていたからな! 昨日のうちにこの島で停泊中の船調べておいて、先にならさせてもらった!!」

ストーカーかな? とするか、シエロさんなに勝手に教えてんの?

「君の知り合いと言うから船にあげておいたよ」

ちよつとドヤ顔なゾーイ、カワイイ。そうだね、君の純粋な気持ちは大切だね。けどこいつは別に知り合いにすらまだなつてない。時間にして五分ぐらいしかあつてない。

「しかし凄いな団長! 団員が星晶獣並みに強いとは聞いたけど、みんな星晶獣そのものだったなんて! しかもみんな団長と闘って仲間になつたらしいじゃないか!」

「うん……まあ、流れでしかたなく」

「うおお——! あんた最高だぜ! 俺は、何時か星晶獣とも拳で語り合えるぐらい強くなりたいたい、そう思つてた。それをあんたはもう可能としてる!」

「あ、うん」

「拳がうずいて仕方ないぜ！ さあ、団長！！ 今から拳で語り合わないか！！」

「これだよ。」

「相手してやったらどうだ主殿。一回闘つてやれば満足するだろ」

悔しいがシユヴァリエの言う事も一理ある。キラキラと目を輝かせ闘気をその身から溢れさせているフェザー君は、既にやる気満々のようである。

「しかたねえなあ……一回だけだからな」

「ありがとう！！」

とつとと出航して、次の依頼をシエロさんに貰いに行きたいのでとりあえず一回だけ相手してやろう。やだなーめんどうくさいなー。

「ふっ……やつぱりだ。あんたを前にすると、より気持ちが昂る……」

俺は無用な闘いを前に、気持ちが萎える。

「改めて名乗らせてもらうぜ！！ 俺はフェザー！！ 騎空団【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z O Y】団長……さあ、語り合おうぜ！！」

■ 団名は別にフルで言う必要ないよ。

五 アニムス見てから幻影余裕でした

語り合いました。

「ぐう……っ！ さ、流石だ……俺が、手も足も出ないなんてな……っ!!」

すまん、フェザー君。君は確かに強かった。たぶんそこいらの雑兵帝国兵や魔物の群れとかも問題なく一人で対応できるような実力だ。若くしてその実力はすごいと思う。うん、すごいすごい。

ただやつぱマグナ戦隊の援護有とは言え、マジなプロバハとゾーイと戦った身としてはね、ああこれが人間の強さだよなって感じなのね。同じ人間でもばあさんとジータを知る身としてはね。結局全体攻撃少ないようなので、幻影張りまくったら完封してしまつた。

「へ、へへ……空は、広いなあ団長！ こんなに強い奴が、いっぱいいるなんてさー！」
爽やか過ぎか。なんか申し訳ない気持ちになるなあ、適当に戦った身としては。

「はは……それに、あんたがまるで本気じゃなかったのは、わかってたぜ……悔しいなあ、たまらなく悔しいぜ！」

「けど楽しそうだね」

「そりやそうさ！ あんたの拳、響いたぜ！ 星晶獣とだつて語り合える拳……本物だつた。やつぱりすげえよ、あんた！」

……うん、まあこうストレートに褒められるのは、素直に嬉しいな。むふふ。

「団長君、顔が緩んでるにゃあ」

「褒められ慣れてないから……普段から辛い思いしてて……うっうう」

「。(。＼3＼)。カワイソウ」

うるさい、可哀想じゃないやい。

「……団長、無理言っつて闘つてくれたうえに負けた俺が頼める立場じゃないのは重々承知、だが一つお願いを聞いてくれないか」

フェザー君がいきなり神妙な態度になり、今までとはまた違う真剣な表情で俺を熱烈に見てくる。嫌と言っつても話してきそうなので聞くしかないだろう。なんか悪いし。

「いいよ、言っつてみ」

「すまない……団長、あなたの強さと星晶獣達を束ねる「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女ZOY」の団長と見込んで頼みたい！俺を、団に加えてくれないか!？」

うむ、なんかそんな気はしたよ。あと団名はフルで言わなくていいってば。

「あなたの元に居れば、俺は更に強くなれると思う。それに先に船へ来た時、コロツサス達から話は聞いたぜ。あなた星の島を目指してるんだろ？ そんな途方もない旅……どれ程の強敵達と出会えるだろうか！俺は、考えただけでも身体が震えてくる!!」

俺も同じこと考えると震えるよ。ビビッてしまつてね。こわいです。

「だから頼む、俺をあんたの仲間に、旅に連れてつてくれ！ 迷惑はかけない、雑用だろうがなんでもやる！」

ん？ 今なんでもやるつて言つたね？

「依頼での金銭稼ぎ多いけど」

「いくらでも受けて立つぜ!!」

「一人当たりの負担多くて大変かも」

「一人の旅でも似たようなもんだつたさ！」

「……けどうち、金欠気味でさあ……団員増えるとなあ」

「俺が旅で稼いだルピも勿論団に寄付するぜ!!」

「ようこそ、強敵ともよ」

「つ!! ありがとう、団長!!」

俺とフェザー君が熱く握手！ 面倒な性格だが素直に戦つて依頼をこなしてくれる要員を確保できたぞ。悪くない、悪くないんじゃないこれ？

「お金の絡んだ話になつた瞬間目の色変わったな」

〈金の亡者か〉

うるさいぞ、シユヴァリエとリヴァイアサン。主にお前らの出費が多いから借金が減

るどころか増えてんだ。シエロさんが優しいから……うん、優しいから返済期限は、何時でもいいって事になってるけど大変なんだぞ。これが弱みで無茶苦茶な依頼を頼まれても断れないし、なんか近々ようわからん島の古戦場とか言うところで色々やらされそうだし……あれ、優しい？ ……うん、優しい。シエロサンハ、ヤサシイデスヨ。

「ああ、団長……戻って来るんだ……っ！」

「~~~~~!!」

「ハッ!？」

セレストとユグドラシルに体を揺すられ正気になる。俺今どうなったの？ な、何か疑問に感じてはいけない事を疑問に思ってしまったような、うっ！ 頭が。

「うう……っ！」

「あ、どうしたフェザー君、怪我が痛むのか」

「うう……うおおっ！ 駄目だ、まだまだ拳がうずいてる！ 語り足りないぜ!! 団長、もう一戦どうだ!!」

「お断りします」

心配してそんした。

冗談ではない、一戦だけの約束だ。俺は疲れたんだ。精神的にも疲れた。しかしフェザー君元気だね、引っ込まなさそうなのでしかたない。

「B・ビィ、相手してやってくれない？」

「ええ、オイラかよ」

「いいじゃん、たいして仕事してないんだから」

「しかたねえなあ……ふんっ!!」

B・ビィが体に力をこめると、一瞬で膨張しマチョビィへと変貌する。やはりキモイ。

「おお！ トカゲ、お前も只者じゃないとは思ったけど、凄いな!!」

「ふうふう……オイラは、トカゲじゃねえぜ」

そうだな、トカゲではないな。ドラゴンでもないと思うが。どっちかと言うとB・

ビィという謎生物と言うナマモノか。

「オイラは、相棒ほど手加減が上手くねえからよ、死ぬ気でかかってきな」

「勿論だぜ!!」

二人は、そのまま外で好きなかだけ闘ってもらいながらその間俺達は、荷物の積み込み等出港準備をしていつでも出れるようにした。

なんともまた面倒な奴を仲間にしてしまったが、まあ仕事を手伝ってくれるならかわないだろう。きつと何とかなる。

■ 数時間後、マチョビィにポロポロにされながらも満足そうなフェザー君がいた。

六 メタモルフオーゼだB・ビイくんマン!

■ 後日、B・ビイとフェザー君が揃って現れた。

「相棒、オイラ一つフェザーと連携技編み出したぜ」

「……一応みるわ」

「おう、行くぜフェザー!」

「わかったぜB・ビイ!!」

するとB・ビイが飛び上がりフェザーが拳をかかげた。

「うっおおおお——っ!!」
「ブラストへ『ビイ』ナックル!!」

「ぎゃああああっ?!」

B・ビイが突然体をグネグネ不定形生物みたいに變形させて手甲型に變形、変身?

した。キモイキモイ、キモイ!!

「でやあ! 装着!! B・ビイアニムス・ブロー!!」

その手甲? をフェザーが装着すると光と闇の力の渦が巻き上がり凄まじいパワーを感じた。

「つとお……どうだ相棒?」

「凄いだろ!!」

「キモイわ」

フェザーが仲間になり、B・ビイの謎が更に増えた。

■ 七 日常回

■ 俺の旅というのは、今のところジータを追いかける旅になる。今も彼女が立ち寄った島をめぐりながら騎空団として依頼を受ける日々だ。

会おうと思えば勿論直ぐにでも会えるのだが俺としては、それは面白くない。やはり彼女の旅の跡と言うのを見てから会ってみたいという思いがある。

最初に立ち寄ったポート・ブリーズは実にいい島だった。広がる平原に吹く穏やかな風は、体を透き通るようで嫌なものを飛ばしてくれる。薄着では肌寒さを感じるかもしれないがそれでも心地良い風だ。

「ソウダロウ、ソウダロウ」

……あそのこの風は騎空士達、とくに操舵士に好まれる船を飛ばしやすい風だ。うちは操舵士という者がおらず通常では船型星晶獣のセレストが「頑張るよ」と星晶パワーで動かしてくれているが、やはりポート・ブリーズに立ち寄った時は動かしやすいと言っ

ていた。

「ダロ？　ダロ？」

……ポート・ブリーズに来るまで同行してくれたシエロさんは、今後も困ったら取りあえずポート・ブリーズに寄れとアドバイスをくれた。立ち寄りやすい場所であり多くの騎空士が立ち寄るために物資の補給などがしやすいからだ。確かにその通りで今でもちよいちよいポート・ブリーズへ用事で立ち寄っている。それだけ発展もしたバランスの良い島だと言う事だ。

「フフン」

……ちなみにポート・ブリーズを守護し恵まれた風を吹かせているのは、星晶獣ティアマトである。島の人達は最近まですっかりティアマトの守護を自然と受け入れすぎて忘れていたので、帝国による騒動が起こりゾータが物理で解決したのであるが、今ではすっかり「やっぱティアマト様はすげえや」感があるそうだ。

「ドヤア」

うちのティアマトも見習って欲しいものである。

「オイ」

いい加減物思いにふけり旅の日記を書いている俺の横で始終ドヤ顔満面なティアマトがウザイ。人の日記覗き込んでんじやないよ、食堂で書いてる俺も悪いけどさ。

「アソコニ居ル、ティアマト」モ同ジ「ティアマト」ダゾ!!」

「いや、俺は認めないしティアマト（真）に失礼だ。」

「（真）ツテナンダ!？」

お前忘れたの？ 里帰りのな感じだからってこっちの自分に顔出してやるかとか何故か先輩風吹かせてポート・ブリーズのティアマトに会いに行ったらめっちゃ嫌な顔されてたじゃん。

「私ハ星晶獣ノ、マグナトシテノ「力」ヲ分ケタ部分ダ。強サ的ニハ私ガ凄イ」

結果ティアマト（真）がお前の墮落ぶりに顔をしかめてたけどな。サンガラスつけて花柄シャツ着てちよい腹弛んだ自分が「オッス、元気？」みたいに現れたら誰だつていやだよ。「エエ、コレガ私?」ってショック受けてたじゃん。お前ら星晶戦隊つてふだん他の島とかにいる個体とリンク切ってるから、互いに情報無くて度肝抜いてたぞ。あまりの変わりように。

あつちとこっちのニル達は親しげだったけどさ。

「別ニ私モ仲良カッタダロ」

いや、お前面白がって「我ハ汝、汝ハ我」とか耳元で呟いた所為であつち「才前ナンテ、私ジヤナイ!」と叫んでたぞ。完全にうっとおしい親戚の姉に絡まれてる感じだったよ。気の毒だったわ。

「ウルサイ、ソレニモウ腹ハ引込メタ」

「そういつてリバウンドするんだお前は、オラオラ」

「アフィン……ッ！」

知ってるか、ティアマト（笑）の弱点は、ヘソだ。たとえ引込めても、弛み気味の腹のヘソの位置は、簡単にわかる。つつついてやれ！

「ゴ、ゴノ餓鬼!!」

フハハハハッ!! 愚かなりティアマト! 怨むなら怠惰な生活を送り腹を弛ませた己を怨むのだな!!

「ああっ! 主殿がティアマトになんか羨ましいことしている!!」

めんどくさいのが来た。

「ヘソ責めなんて、そんなマニアックな……私にもやってくれ!!」

「やだ」

「そんな!?!」

日記をたたみ逃げるように食堂を出る。ティアマトやシュヴァリエがうるさいがとつと逃げる。

さて、部屋に戻ったら日記に書こうと思うのは、ティアマト（真）の言葉。（笑）の方がゲラゲラ笑いながら街の居酒屋に繰り出しに行く姿を見て肩を落としながらも俺に

「アツチノ私ヲ頼ム」と言つて来たのは印象深い。

島を守護する星晶獣として責任があるため、自身が世俗の世界に行けないので、何も考えず飲み食いしに行くもう一人の自分が羨ましそうでもあった。その姿を見てうちとあつちのトレードを考えた俺は悪くない。まあ、トレードできたとしてポート・ブリーズがえらい事になりそうなので無理だが。

次に会う時は、酒や食い物を土産で持つていこうと思った。

なんて、再度物思いにふけりだしたら甲板からフェザーとB・ビイの組み手の騒音と、ラムレッダがえずく声がどこからか聞こえて来てしまい、俺は一気に現実に戻されてしまった。

こいつは、独楽った

一 フェザー「噂の騎空団について教えてくれ!!」

【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女ZOY】ですか？ええ、勿論してますよ。

以前からお得意様だった方のご紹介でしたが想像以上の方で驚きましたね。同じ出身のジータさん。ああ、そうですよあの【ジータとゆかいな仲間たち】のジータさんです。

彼女と同じ出身ではありませんが、まさかあそこまで強いとは思いませんでしたよ。今ではすっかりお得意様です。

それに、あの方は、普通の騎空団では頼めない依頼を押しつ……任せられる頼もしい方で、嫌な顔一つせず依頼を受けてくれる優しい方なんですよ。

あの方の特徴ですか？うう……特徴は無いですねえ……。ええ、本当にな

んですよ。しいて言うなら身長がヒューマンの平均男性よりわずかに高いぐらいでしようか。けれどそれもほんの少しですからね。街なんかの人が多い場所で、あの方一人だときつと気が付きませんね。

ただその分やたらめつたら強い集団にいる異常に強い地味な少年、と気にしていればわかるかも知れないですね。あの方、いつも面倒事に巻き込まれますから。

ええ、そうなんです。基本あの方は、人畜無害な闘いを好まない人間ですが、状況がそれを許してくれないんですね。この空域じゃあ、あの人に並ぶトラブルホイホイはいないと思いますよ。

その分面倒な事に慣れているので、先ほど言ったようにそんなややこしい依頼を押しつ……いえいえ頼むには、これ以上ない騎空団ですよ。それ以外でもトラブルを起す騎空士や人物が居る時なんか……うふふ、喜んで仲間として迎えてくれますよ。強いだけじゃなく本当に、懐の広い方ですから。今度も古戦場へ行ってもらい、ちよつと珍しい武器を探してもらおうかと……

「てな感じで、教えてくれたぜ！」

「……あ、そう」

■ 一 フェイトエピソード 回る回る、思考は回る

■ 話すのが好きなのだろうか。

■ 答えを得るのが目的なのだろうか。

それが何時からそうであつたか、覚えてはいない。思考を廻らせ己で問い、己で思考する。答えがあろうはずはない

それは哲学である。底の見えぬ空を落ち続けるかのような、答えの無い問い。先の見えぬ道を歩き続けるような問い。答えを求め、それでいて求めてはいない。追及する、それが哲学だろうか。だが追及する事に囚われてしまえば、それが答えになつてしまう。それは答えなのか。

彼女の思考の空間には、常に問いと一時の答え、そして新たな問いが生まれては、消えていく。完全な答えなどなく、それを思考し空を漂う。彼女は、黙々と考える。

■ 戯れに人に問う時もある。

■ 難解、奇天烈。はなから答えらしい答えなど無い問いを問われ、誰もが顔をしかめる。馬鹿にしているのかと怒る者もいる。考え続けて疲れ果てる者もいる。知つたような口でつまらぬ答えを言う者もいる。だが誰もが総じて困り顔だ。彼女は、それがたまらな

く面白かった。旅の中、困る顔が面白そうな人を見つけては、いつも声をかけて問いかけた。広い空の中、一人一人の出会いを大切にし、面白く問い続けた。

だから今回も問う。一際困り顔が面白そうな少年を見つけたから。

「おっと、操作が……あつ」

「ぐはあつ!?!」

■ ■
二 前が見えねえ

人との出会いつて言うのは、大概唐突だけれどき、俺の出会いがごとごとく唐突過ぎで困る。星晶戦隊からのラムレッダしかりフェザー君しかり。しかし船で移動中に頭の上から降ってきて、そいつが乗ってるデケー独楽の先が顔に刺さる経験ってある？俺初めてだったわ。たぶん全空探しても俺しかないだろう。

「いやあ……ごめんね少年。急な風でクリュプトンの操作が狂ってしまった……」

「そう思うならどいてくれ」

空が晴れていい天気だから、甲板で風にもあたろうかと思つて空を見上げてみればこれよ。急になんか不審物が落ちてくると思つたら一気に俺の顔面に刺さりやがった。もう体験したくない痛みランク堂々のN.O.である、【格闘戦の特訓ではあさんに関節

全部外され、ぶっかけられたエリクシールによって「ベキベキ」と一瞬で治ると同時に訪れる関節痛」に次ぐ痛みかも知れない。死ぬほど痛いぞ。

「団長！何か降りて来て団長の顔に刺さるのが見えたが……うん？誰だ!!」

「また変な奴引き寄せたなあ相棒」

「サツキ、クシヤミシタラ、ウツカリ風吹カセテ何カ落トシテシマッタガ特ニ被害ハナイナ」

俺の珍事を目撃したフェザー君が駆けつける。その騒ぎを聞きつけゾロゾロ他の奴らが来るが、お前らちゃんと俺の心配しろ。と言うかお前が原因かティアマト。バツチリ被害でとるわ、俺の顔がちよつと沈んだぞ。

「やあやあ、皆様。お騒がせして申し訳ない。申し訳ないついで、突然ながらお一つ問うね？」

「問うな問うな、何なんだあんな」

「君は、君達は空を飛んでいるのかな？それとも飛んでいないのかな？」

無視かよ。

〈なんだなんだ、何かと思えば頓智か？〉

「わ、魔物？」

〈魔物ではない〉

あ、そいつ一応星晶獣（笑）なんですよ。省エネのせいでデカイ蛇かうなぎにしか見えなけれど。

「おやおや……星晶獣に地味な少年……もしや、これが噂の騎空団かな？」

「うむ、主殿を地味と感じたか。その通りだ」

「じゃあ噂の騎空団だ……あは！」

シユヴァリエ、その言い方ないんじゃない？

「これは面白い答えが聞けそうだね……あは。さあ、答えを聞かせておくれ」

「ヤレヤレ……飛ンデイルカナド……私ハ、風ノ星晶獣ティアマト。常ニ飛行シ飛ブノハ当然ダ」

「ほうほう？それは確かに……けれど風の星晶獣様？風の星晶獣ならば、風そのものでもありますね」

「ウン？」

「そうであれば、あなたは飛ぶのではない、空に存在するだけ、あるいは浮かんでるだけなのではないですか？」

「イヤ、ソレモ飛ンデイルダロウ」

「しかし浮かぶのであれば、水でもできますね。空中水中、どちらも上へは上がる、下へ下がる。どれも同じです」

「ウン……ウン？ソレジャア、泳イデル事ニナツテシマウゾ」

「ならあなたは、実は空を泳いでいるのであつて、飛んではいけないのかな？」

「エ、エ……？イヤ、私ハ飛ンデ……アレ、ケド前空テクロールシタラ進メタシ……アレエ？」

「ティアマト？君人間に言いくるめられているよ、大丈夫？と言うかクロールしたの？何してんの、暇なの？ポート・ブリーズのティアマト（真）が泣いてるぞ。」

「じゃあその君、君は飛んでるのかな？それとも飛んでないのかな？」

「私か？」

「次はゾーイが指名されてしまった。え？これ続けるの？誰も文句言わないから言いにくいじゃん。」

「ふむ……深い問いだ。我々は今、騎空艇に乗り飛んでいる。そういう意味であれば飛んではいるだろう。だが我々自身は、騎空艇に立っている。であれば、飛んでいると言
い難い……ううむ」

「あは……君の困り顔、かわいいね」

「そうか、ありがとう……飛ぶ、飛行とは……」

根が真面目なゾーイは、適当な返事をしてそのまま思考の海に沈んでしまった。

「あは……いいねえ、人の困り顔って可愛いと思わないかい？」

ゾーイの困り顔がカワイイのは、全面的に同意したい。

「それはともかく、結局あんた何者なの？」

「ああ、すまない自己紹介が遅れたね……私はフィラソピラ、人は私を賢者と呼び、人は私を哲学者とも呼ぶ」

ああ、なるほど。つまり面倒な方なんですネ、お帰り下さい。

「あは……君のさつきから次々変わる困り顔、すごくいいね」

まるでうれしくねえ。顔について地味だとかしか言われないうえ、困り顔褒められただってどうせいと言うのか。

「君の答えは面白そうだ……だから、君の問いの答えは最後に聞くよ。さあ、他の皆の答えもきかせておくれ」

そう言つてフィラソピラが皆に答えを促した。というか、勝手にハードルあげるな、おいコラ。

しかし、こんな答えの無い問いなど、みんな大体困り果てるだけで終わる。たとえば（笑）であつても理性派のリヴァイアサンと、変態状態で無ければ真面目のシュヴァリエなどは、色々と答えを出しては彼女と問答をするが、結局頭を捻るばかり。癒し組は、そもそもよくわかつてない。

「おぶえ……と、トぶうえ……うぶつ」

お前はなんで来たラムレッダ。ある意味ぶっ飛んでるわ。一人だと寂しい？ いいから部屋で寝てなさい。コロツサス、介護してあげな。

「よくわからないから、拳で語り合おうぜ!!」

これは論外である。物理学としての哲学でなく、哲学（物理）とは、たぶんフェザー君と同じ人種じゃないと通用しないだろう。見なさい、フィラソピラが少し引いている。

「オイラってオリジナルビィをモデルにしてるから羽と言うより魔力飛行に近いんだよな……けど、キラービィ形態なら、露骨な羽の飛行になれるぜ!」

やめろ、露骨とか言うな。あとそれ以上不定形生物ぶりを見せないでくれ。

「みんな面白い答えばかりだね……あは」

一人拳で語り合おうとして、一人吐きそうだったがな。

さて、面倒な事に俺がトリである。団員とフィラソピラの期待が無駄に大きい。勘弁してくれ、俺は哲学なんて柄ではないのに。大体なんだってんだい、飛んでるかどうかなんて、それ聞いてどうすんの？ 言い方で答えが変わってしまう事もあるじゃないか。

「さあ、それじゃあ君の答え……聞かせておくれ?」

満足いく答えじゃなくても文句言うなよ、ちくしようめこの野郎。

三 困り顔しかない男

「ガツカリダナ、実ニガツカリナ男ダ」

「うるさい」

「オマエノ程度ガ知レル、ガツカリナ答エダッタ」

「うるさい」

テイアマトが食堂で不貞腐れている俺の後ろから、うだうだとうるさい。

「アンダケ引ツ張ツテ置イテ、アレハナイ」

「うるさい」

「ガツカリ団長ダ、オマエハ」

「うるさい」

まったくもってうるさい星晶獣だ。誰がガツカリ団長だ。俺がガツカリ団長ならお前は、ガツカリ星晶獣だよ。バーカバーカ。

「オオトリデ、一番最後ノ答エガ『宿題にしちやダメ?』ハナイ」

「うるさいっての」

いくら頭捻つてもそれらしい答えが出ず、とつさに逃げの答えを出してしまった。

だつてわかんねーもん、そんなパツとでないよ答え。

「まあまあ……私は実におもしろかったから、いいじゃないか……あは」

俺の前でくつろぐフィラソピラ。

ちやつかりいる、フィラソピラ。

「結局ついて来るの？」

「勿論、君の困り顔は実に面白いからね……」

やかましい。

俺の『宿題にして』発言を受け、面食らったフィラソピラは、すぐにケラケラと鈴の様な声で笑った。どうも彼女のツボにはまる発言だったようで、興味を惹かれてしまったらしい。

「その後の君が言った“いいわけ”を言う時の顔は、実に可愛かったよ……今思い出しても、あは」

あの時、空気が死んだのを察した俺は、直ぐに弁解してしまい、余計に彼女を樂ませてしまった。あーでもない、こーでもない、つまり今は思いつかないけど、きつとあとでいい答えが云々……その時の俺の顔の百面相がよほど愉快であつたらしい。俺としては複雑だ。

「それに、宿題なんだろう？楽しみだな……空の果て、星の島を目指す先に出る君の答え」

更に俺達が星の島イスタルシアを目指している事を話すと尚更興味を持ったようで、雑用でも構わないから連れて行っておくれ、と頼まれてしまった。聞けば回復魔法の心得もあると言うので、依頼などでも頼れるだろうと思いい仲間を迎えた。

「(*・ω・) カンゲイスルヨ」

「お菓子、あるから……食べてね」

常に通常運転なのは、癒し組も変わらずで早速仲間になったフィラソピラに色とりどりの菓子を出して……出して……。

「さて、何だこの高そうな菓子は」

「ああ、前買い出しに行った時、団長が買うよう言つてたと聞いたから買ったんだが」
フェザー君、それ初耳なんだけど。誰に聞いたの？

「うん？ 買い物に行く時にティアマトが」

「(・ω・) アツ」

「に、逃げた」

後ろを向いたが、そこには僅かにそよ風が残るのみであった。

「……フィラソピラ、このお菓子は入団記念だから全部食べていいよ」

「わあ……全部いいのかい？」

「ああ、勿論……」

「じゃあ、全部は流石に無理だし、みんなで食べようか」

俺はいいや、食べても虚しさしかなさそうだ。

しかしあれである。シエロさんと会った時が初ハーヴィンとの出会いであったが、本当に小柄だ。歳聞いても「秘密」との事なので、想像がつかない。まあ、これはハーヴィン共通の特徴であり、彼等そして彼女等にとつての種族的悩みともいえる。ザンクティンゼルを出て色々な島に行くとはやはりハーヴィン族をちよいちよい見かけるが男女問わず、なんと言うかカワイイので癒される俺がいる。だがそう思われるのを嫌うハーヴィンも少なくない。そりやそうだ、もし大人なら「カワイイ」とかより「大人」として見てほしいだろう。多民族との交流をする際、ハーヴィン本人達からすれば悩みの種かもしれない。

「はむはむ」

そう、だから迂闊にハーヴィン女性にカワイイだなんて言うのは、失礼と言うものだ。シエロさんにもそうそう言わない。思ってはいるけど。あのモフツとした髪とかワシャーつとしたいけど。

「甘い……あむっ」

うん、だからね、けっしてハーヴィン達は、かわいいと思われたくてああいう姿ではないし、けどその姿でこう小動物みたいに菓子を食われると、どう足掻いても。

「はむっ……あむっ……」

だめ……ああ、だめですねこれ、カワイイは真理、カワイイは哲学。

「……フィラソピラ、改めて歓迎するよ」

「うん？ああ、ありがとう、団長……これからよろしくね。あは」

「うん、うん……あと、これも美味しそうだぞ」

「わあ……ありがとう、あむっ」

そう、俺には癒しのある日常が必要だ。ラムレッダは、そりゃ美人だが酒癖が悪い。フェザー君は、戦闘では頼もしいが隙あらば拳で語り合おうとする。フィラソピラは、まあ難解な問いかけがあるが、しかしいいや、もういいです。カワイイからいいや。

なお、後日俺はティアマトの菓子類を全て没収した。愚か者め。

クロスフェイト 正義を叫べ (前編)

一 フェイトエピソード 最後の切り札

騎士団の掲げる正義を誇りに、騎士の正義を使命として、彼女は蒼き剣を携え正義を問う。

“正義とは、何ぞや”

正義を問われ戸惑う者よ、この蒼き剣を恐れる者よ。使命にはむき、正義を忘れるならば、この者が相手になる。

リュミエール聖騎士団遊撃部、最後の切り札、コーデリア・ガーネット。彼女は、騎士団の使命を今日も使命を帯び、正義を問う。だが、正義を問われる者、それは、愚か者だけではない。

(リュミエール聖騎士団団長……シャルロット・フェニヤ。小柄なハーヴェイン族でありながら、種族の差を覆す剣技とカリスマを持つ彼女……歴代最強とも謳われる彼女への正義審問、最も辛いものとなるだろう……)

騎士団遊撃部として、彼女は騎士団を抜け姿をくりました者を追い詰める。騎士団としての使命を、正義を忘れ悪しき道に進む者あればそれを討ち、騎士団の名を貶める者あればそれも討つ。

遊撃部としての任とは、かくも辛く厳しいものであった。それがまして、現騎士団団長を相手とするのであれば、いつも以上に厳しいものとなるのは、明白であった。だがそれを遊撃部の任務と割り切り、正義を問うべき相手を探し出す。

(それに、まだ他に最近団に姿を見せぬ者……退団したわけでは無いらしいが、それでも問わねばなるまいな……)

聖騎士団の名は、軽くはない。たとえ見習いや新人であろうと、片手間に出来るようなものではない。その者が、リュミエール聖騎士団に仇なすか否か、小さな芽のうちに摘むのも彼女の使命だ。

騎士団長シャルロツテ・フェニヤは、騎士団長としてよりふさわしくなると言う名目で職務を休みがちとなり、結果その姿をくらしめている。使命を完遂するためには、まずシャルロツテを探し出さねばならない。

人探しは、この任務を多くこなして来た彼女にとって常である。見つかるかはともかく、有効な手段は既に承知であるために今回も今まで通りに彼女は、シャルロツテとそれ以外の騎士団員を探し出す。

この空の世界における人探しの常とう手段は、騎空団の人間に情報を求める事だろう。島々をめぐる騎空団は、それだけ様々な人間に出会っている。そして今は知らなくとも、今後島をめぐる上で出会う可能性もある。それでも今回探し出す人物は、騎士団長とあって特別だ。迂闊に口の軽い騎空団に話を聞くのは得策とは言えないだろう。無論百戦錬磨の遊撃部最後の切り札、下手な真似はしないがそれでも万が一を考え慎重に行う。騎士団でも名の知れた信用あるよろず屋に、情報が集まりそうであつ、信頼のおける騎空団の紹介を頼むとある騎空団を紹介された。

ハッキリ言つて名前を考えた者はどうかして思うような団名であつたが、よろず屋が自信をもつて「必ず尋ね人につながる」と言うのでそれを信用しある島のよろず屋が経営する居酒屋で落ち合う事が決まつた。

そして、その待ち合わせ場所へと向かう途中の事。

「……やれやれ、私はこれから用事があるのだがね」

「へへ……悪いけどそうはいかねえよ兄ちゃん」

街の路地裏の袋小路。そこでコーデリアは、悪漢達に囲まれていた。ヒューマンとドラフの混ざる悪漢達は、品のない笑みを浮かべ手にナイフにこん棒と得物を持つ。既に日は沈み時間は、夜となつている。人を呼ぶにも人通りは無い。

「ある人から頼まれてな、なんでもあんたに恨みがあるそうだ」

「恨み、か……確かに恨みを買う事をして来たと自覚しているがね。しかし私一人を大勢でこんな場所に追い込むとは……卑怯とは思わないのかな？」

「ひやひやつ！違うね、これは知略って言うんだぜ！」

「兄ちゃん一人やるだけで、大金がもらえるんだからよ。何だつてするぜえ」

「ふっ……なんでも、か。だがそれがこんな浅知恵ではな」

「なにいつ!!」

コーデリアの冷やかな微笑、そして挑発に悪漢達が声を上げた。

「相手一人を大勢で追い込むなど、子供的手段だ」

「うむうつ!？」

「それに、君達は私を何者か知らぬようだが……相手の力量もわからずそうしたのであれば、救いようもないな」

「ここ、この野郎!!」

自身の事を「兄ちゃん」と男として認識しているのを見て、男達は依頼主からろくな情報を貰っていないと確信があった。指摘され動揺する様子からも間違いなかった。

「はっはっはっ!この程度の挑発で顔を赤くして、凶星を突かれたのかな？」

「う、うるせえ!!やるぞお前ら!!」

芝居がかった言葉としぐさが様になるコーデリア、もしここにいるのが悪漢でなくう

ら若き乙女であれば心奪われたろう。しかしここにいるのは、正義も知らぬ悪漢。もう我慢ならぬ、悪漢達がそれぞれ得物を振り上げ襲い掛かろうとする。コーデリアは、正義の証であるリュミエール聖騎士団から賜った蒼き剣を抜き構えた。多勢に無勢、相手は10人。だが恐怖は無い。引き抜かれた剣が描く蒼き光跡、一切のブレの無いそれが彼女の研ぎ澄まされた心、鍛え抜かれた剣技を現している。

リュミエール聖騎士団、遊撃部最後の切り札。その強さが披露されるかと思われたその時であった。

「ほがっ!?!」

「でがあっ!?!」

「たっばすっ!?!」

「むっ!!」

彼女へ襲い掛かろうとした悪漢の内三人が情けなく短い悲鳴を上げ倒れた。悪漢達だけでなくコーデリアも驚き倒れた三人の傍に立つ者達を見た。

「おうえ……にやあくんだか物騒なかんじだにや……うえっぷっ!?!」

「喋んなラムレッダ」

「こう言うのは好きじゃないな……その根性、鍛えなおしてやる! さあ、語り合おう!!」

「あーうん、存分にそうしてやんな」

酒瓶を持つドラフのシスター、拳を構える暑苦しい金髪の少年。そして、それに挟まれた一人。

「……」トラブルが起きて、強い者達の中にいる地味な少年、もしや」

「おう、姉さん。それ誰に聞いたの？」

さして特徴のない少年は、何時もと変わりなく憤慨した。

■ ■
二 イケメン来りて、地味霞むきた

「団長殿、改めて礼を言わせてくれ。ありがとう」

「ああ、はいはい」

俺に頭を下げる麗人に、適当な返事をする。

数日前、シエロさんから依頼が来て「ぜひ会って力になって欲しい人がいる」と言われる。とにかく会ってみてから、あとは俺達のほうで自由に対応してよしとの事であったので、とにかくシエロさん側でセッティングされた待ち合わせ場所で依頼人を守った。だが待ち合わせの場所に一向に来ない依頼人が心配になり、B・ビィを店で待機させ今回の依頼メンバーであったフェザー君、ラムレッダと共に待ち合わせ場所である店の周辺を探索。そしてラムレッダの「にゃんかきこえる」という言葉をうけ路地裏の方

へ行つてみれば案の定ややこしそうな事が起こっていた。

如何にも三下奴な奴らの集団が一人女を囲っている。その人が例の依頼人であるかは、すぐはわからなかつたが、違つたとしても見捨てるわけにもいかない。まあ結局依頼人であつたが。

依頼人の姉さんの実力も高く、時間もかかる事も無く雑魚はボコボコにする。依頼人が現れるまで酒を飲んでいたラムレッダの酒瓶で殴打され案の定吐いたラムレッダのゲロにまみれたヤツ。フェザー君の拳を受け唐突に心入れ替えたヤツなどなんとも混沌とした場となつた。街の衛兵が駆けつけ男達を連行する時、ボコボコにされゲロまみれとなつた奴に、瞳が綺麗になつた男達を見て何とも言えない表情であつた。

やつと場が落ち着いたので、俺達は大幅に予定が遅れたものの、もう一度約束の店に行き依頼人、コーデリア・ガーネットから話を聞いていた。

「人探しねえ」

「ああ、貴君はリュミエール聖騎士団を知っているかな？」

そう言えば、シエロさんの言つてた騎士団の名前がそんなだったな。やつと思ひ出せた。

「あいにく今までど田舎に住んでたもんで、そういうの知らないですよね」

「なあに、そのように己の出身を卑下する事は無いよ。知らない事は、誰にでもある事

「や」

ヒューツ！イ、イケメン。

「てことは、探してるのは騎士団関係者ですか」

「まあそんなところだね。だが、あまり深く追求しないでくれると助かるよ」

「そら勿論。態々藪を突く真似は、したくないので」

俺の場合、藪を突くと蛇や鬼どころでは無い結果になりそうで怖い。

「助かるよ」

「まあ、とりあえず依頼の方は、その失せ人探しに情報提供つてところですかね」

「そうなるな。この島で目撃情報が幾つか上がっている。貴君達には、私と共にその調

査を願いたい」

「あいあい……久々にまともな依頼だな」

いつも異常なまでに増えた魔物の討伐や、盗賊団のアジトにカチコミかけての掃討作戦など、駆け出し騎空団に頼む内容ではない。まあ、うちの戦力も異常なのは承知しているが、俺一人当たりの負担が多い。魔物の巣に行った時も、洞窟が崩落して俺とそれ以外のメンバーが分断。結果、俺一人で100匹以上の魔物と戦う羽目になり、洞窟からの脱出も三日かかった。盗賊団共のアジトへのカチコミも、その日に限って「盗賊団のトップが誕生日だから」と言う理由で他の島で活動している盗賊メンバーが急きよ勢ぞ

ろいとなり、想定の3倍の数を相手にしなければならなかった。しかも深夜の奇襲計画であったため、目立つマグナ達を置いて俺とB・ビィにフェザー君のみと言う編成のせいでもかなり疲れた。

しかもなんだ、よくよく調べると魔物の異常発生は、帝国主導による実験の結果でその後始末もせず帝国は、実験機材だけ持って撤退し増えた魔物はそのまま放置したせい。盗賊団も構成メンバーのほとんどが帝国の脱走兵やらで構成されていた。

また、帝国か。

あいつらマジ許さんからな。その内本気で帝国乗り込んでやろうかこの野郎。星晶戦隊全力投入だこの野郎。

「どうかされたか?」

「あ、いや……ちよつと普段の疲れが出たみたいで」

嫌な事を思い出したらコーデリアさんに心配された。

帰ったらゾーイかフィラソピラと戯れよう、そして癒しを補充するんだ。

■ ■
三 イケメンと引き立て役（なお主人公）

後日、俺は団のメンバーで街でも目立たぬ面子を揃えて情報をあつめる。単独行動に

向かないコロツサス、リヴァイアサンは勿論、意思疎通が出来ても目立つユグドラシル、日光が嫌いで体力が無く聞き込みに向かないセレストもお留守番。またティアマトは人型であるが彼女をはじめ(笑)の奴らは、街に入れると何をしでかすかわかったものではないので、今日は船で待機させる。ようは星晶戦隊は、みんな待機。癒し達には、後でお土産をあげる。

搜索対象の情報は、限られている。その者がハーヴィン族である事と、コーデリアさんは明言してはいないがリュミエール聖騎士団関係者である事のみ。ハーヴィン族は、シエロさんのように商人を生業にしてる者が多いがそれ以外のハーヴィンを街で見かけるのは、他の種族に比べると少ない。別に多種族との交流が少ないわけじゃないのだろうが、失礼を承知で言うと多分ドラフやエルーンのような高身長的面子に交じり目立たなくなるのではないか。ドラフの男となると、2m越えは珍しくない、街によってはそれが集団でいるのだから、そんな中に居たらヒューマン男性だって目立たない。ううむやはり、そんな気がしてしまう。

だからこそだろうか、一際目立つ行動をするハーヴィンとなればおのずと情報が集まる。

「騎士らしきハーヴィン女性の目撃情報は、結構あるようだね」

「にやあくけど情報が二通りあるにや」

フィラソピラとラムレッダの言う通り、どうも目撃情報のハーヴィンの特徴が分かれている。どちらも騎士らしきハーヴィンなのは共通しているが、話を聞くとどうも別人のようだ。

片方は、特に何をすると言うわけでもなく色々話を住民から聞いて周り情報を集めていたらしい。片方は、街で困る者を見つけては、手伝いをしまくっていたと言う。

「とりあえず、片方はもう島を発つたらしいのは確かだな」

フェザー君は、聞き込みとか地味で地道なのは苦手らしいが、暑苦しくも爽やかで人当たりが良いおかげか、案外しっかりと情報を集めてくれるので助かる。

「私達のほうも、似た情報ばかりだな」

「一応片方のハーヴィンのいる場所は、ある程度わかるから、行ってみるのもいいかもしれないねえぞ？」

B・ビィは、ゾーイと共に行動させた。俺といると、かなり相手に不信感を与える。かといって待機するのを拒否られたので、せめて見た目が良いゾーイと行動させてみたがどうやら正解だったようだ。

さて、とにかく有力かはまだ分からないが、一人それらしいハーヴィンを見つけそれがまだこの街にいるのは、間違いのないようだ。俺はすぐに別の場所で聞き込みをしているコーデリアさんと合流しその事を話した。

「ふむ、手あたり次第に人助けをするハーヴィンか……」

「心当たりあるんですか？」

「……実は探している人物は、何人かいてね。今回の本命は、別だったので特に話さなかつたが……いや、とにかく確認した方がいいだろうな」

「ある程度場所はわかるようなんで、行きますか」

「ああ、お願いするよ」

もう片方の目撃情報については、コーデリアさんも意外であつたようだ。ともかく俺達は、そのハーヴィンがいると言う場所へ向かう事にした。

「……しかし」

「うん？ どうかしたかい？」

コーデリアさんが表を歩くと、蜜に集まる虫の様に、と言うとかなり言い方が酷いが、思わずそう思ってしまうほどの勢いで女性が集まる。

「あらあくいい男ねえ！」

「ほんと、うちの旦那とはえらい違いだわあ！」

「旅のお方かしら？ ねえねえ、ちよつとうちの店、寄つてきなさいよお」

「ありがとう、ご婦人方。だがすまない、今は所用があつてね。またの機会に」

集まる女性達を慣れた様子でかわして行き、進む姿が実に様になっている。

「いやいや、手慣れたもんだと感心しまして」

「ふふ……まあ、仕事柄と言うやつだ」

「羨ましい話ですねえ」

「いやはや……しかし、今日はいつもよりか声をかけられるが……どうした事だろうか」
「ああ、そりやイケメンの姉さん、横に相棒がいるからだぜ」

「彼が？」

「地味モブ顔の相棒が、超絶イケメンの隣にいたりや、そりや姉さんが目立つってもんさ」

B・ビィ、ぶっ飛ばすぞお前。

「ここら、B・ビィ殿。そのような事を言う者じゃない。愛嬌があつて、かわいらしい顔じゃないか」

おっと、一瞬ときめいたぞ俺。ヤバイヤバイ。

しかし、モテたいとは思わないが、ちよつとぐらい街で声をかけられるぐらいの事を経験してみたいとは思ふ。モテたいとは、別に思わないけどさ、まあ地味だ平凡だと言われる身としては、ありがたい男、なんて台詞をマジで言われてる場面を見せられては、そうも思う。いや、別にモテたいとかは思わないけど。

「相棒、考えてる事顔に出てるぞ」

「うそやん」

「団長、モテたいとは思わないが、ちよつとぐらい街で声をかけられるぐらいの事を経験してみたいとは思ふ」みたいな事考えてたろう?」

前も似た事あつたけど、俺の表情筋正直すぎない?

「ふっ……これはこれで、面倒なものだよ」

コーデリアさん、それ逆に惨めになるんで言わないでください。

「情報を集めるうえで、私の端麗な容姿は、なにかと便利ではあるがね……女性としては、複雑なものさ」

「まあ、そりやそうでしょうけど」

「貴君も、シエロカルテ殿に聞いていなければ私が女性とは、わからなかつたろう?」

などと、突然言われて首をかしげる。

「は?何がっすか」

「うん……? 貴君は、昨日悪漢達を蹴散らす際に、私を“姉さん”と呼んだらう? その後も自然と女性として接するので、シエロカルテ殿から依頼人が女性である事を聞いていたと思つたが……違うのかい?」

あーあーなるほどね、はいはい。一瞬何の事かわからなかつたが、そう言われて納得。「俺ある人に無理やり鍛えられたんすよ」

「うん?」

「その過程で、襲ってくる相手が男に見えても女だったり、女と思ったら男だった……みたいなヤツが稀にいるから、相手の体格と声の出し方やクセから一発で男女見分けろって叩き込まれたんで……まあ、そう言うわけで直ぐわかりました」

「そのような事が……」

ようは主にハニートラップ対策である。他にも足音で体に仕込んでる武器を見分けろとか、体重移動だけでそいつの得意な武器を予測しろとか、無茶な事ばかり叩き込まれた。勿論あのばあさんにである。しかも、慣れるとわかるもんなのだなあ、これが……。もつとも、ハニトラにかかった事なんぞ一回も無いが。厳密には、ハニトラが一回も無かったが。

「ただそれ抜きでもわかりそうなもんですけどね」

「おや、そうかな？」

「だって……コーデリアさん、まんま『男装の麗人』過ぎて俺は、男と思えんですね。男性像として理想的過ぎますよ」

こんな芝居がかかった台詞が素で似合う男と言うのは、中々いない。そしてそんな理想的男性を演じれる男もこれまたいるもんじゃやない。女性のツボをおさえた台詞や仕事と言うのも、女性ならではの技にも思える。

「なるほど……そう言う意見は、初めてだな」

「あーいや、失礼でしたね」

「ふふ、そんな事は無いよ。貴重な意見だ。……しかし、如何なる理由とは言え、最初から女性として接してもらおうと言うのは、嬉しいものだよ」

「そんなもんすかね」

街で女性に声をかけられもせず、ハニトラにもあわん俺にはわからん感覚である。

「そんなものなのだよ。男性としての振舞いが板につきすぎたのか、騎士団内でも私を女性と知っていないながら先程の婦人達の様な扱いを受けてね。色々複雑なものさ」

ふむ、イケメンには、イケメンの悩みがあるらしい。俺は一生わからん悩みだろう。

「そういえば、信じられますか？前フェザー君にハニトラがあつたんですよ……」

「ああ、あつたにやうそう言えば」

「私が団に入る前のことかな？」

「そうそう、フィラソピラが来るちよい前かな」

「ん？そんな事あつたか？」

お前が忘れるなよフェザー君。

「噂の騎空団の一人だつて聞いて、彼から俺達の情報を引き出して財産盗もうとしたらしいんですけどね」

宿泊先の個室でハニトラ仕掛けに來た女が「坊や、私と良い事しない？」と迫つたら

「良い事?……なるほど!それじゃあ早速語り合おうぜ!!」と良い事を自己流に解釈したフェザー君によって、「良い事」は「拳の語り合い」になり、女は一発ノックアウト。そこから女が所属する盗賊組織が捕えられた。愚かな奴だ。仮にエンゼラに侵入しても、それぞれの属性を司る星晶戦隊が、侵入者の息づかいや、体温など何かしらの形で感知して侵入者を撃退してしまう。そもそもうちの騎空団に財産など無いのに……。

ちなみに団長である俺を何故ハニトラしなかったのか?については、「地味とは聞いたが、まさかあんな地味な男が本当にあの団の団長と思わなかった」との事。コメントは、差し控えさせていただきます。

ところで、コーデリアさん笑ってません?ねえ?肩震えてますけど、ちょっと。

「……す、すまない……内容が、予想外だったので、その……くっ」

まあ、笑い話ではあるけどね、何処で笑ったの?怒るよ?笑った場所によつては、依頼人で年上でも怒りますよ?ねえちよいと。

「ふっく……ああ、本当にすまない……」

しかたない、顔を背けて笑う姿にギャップがあつて可愛かったから今回は見逃そう。俺のカワイイものへのちよろさは、全空一ぞ。

「ふふ……さて、そろそろ例のハーヴィンがいる場所だ」

「おっおっ」

世間話をしていたら、いつの間にか目的の場所にたどり着いた。集めた情報では、ここでゲリラ的に人助けをするハーヴェインがいるらしいのだから……。

「ご老人！お荷物、とことんお持ちするです！」

「あらあら、ありがとうねえ」

いたわ。間違いないわ、一発で発見だわ。

「……やはりか」

コーデリアさんは、彼女に見覚えあるらしく、どうやら情報は間違いないようだった。

「まさか、貴君を最初に見つけるとは、予想していなかったよ。ブリジール」

「え？あ、コーデリアちゃん！」

小さいながらに甲冑を着込んだハーヴェイン、ブリジールが驚きの声をあげた。

■
一 クロスフェイト 小さな勇氣はデカくなる

■
リユミエール聖騎士団団長、シャルロツテ・フェニヤ。その名は、歴代最強として名を馳せ、騎士団の中で知らぬ者はいない。そして多くのハーヴェインにとっては、種族としての体格差をもっともしい剣技とカリスマを併せ持つハーヴェイン界の憧れとして

も知られていた。

憧れを憧れのままにするか、それとも自分自身もその高みへと昇るのか。前者を選んだとしても、だれも責めはしない。だが、己自身が後悔するだろう。だからこそ、彼女ブリジールは、ハーヴィン族でありながらもリユミエール聖騎士団の門をたたいた。

彼女が騎士団に入る事を笑う者はいない。だがその道が困難である事を告げる者は多かつた。シャルロット・フェニヤと言う例外、あれは正にずば抜けた努力と才あつての事、全てのハーヴィンがあの域に達する事が出来ると軽々と言える者はいない。

そして、彼女は弱かつた。ハーヴィンと言う種族差以前に全てが足りない。剣技、スタミナ、才能、あらゆる面で弱い。だが、誰もが彼女に一目置いたのは、ひたむきな努力と言う才能かも知れない。

どれ程無理だと言われても、それを自身で理解していた。そして、あきらめはしなかつた。厳しい訓練について行けない事は、常の事。それでも憧れをただの憧れ、夢物語にする気など一切なかつた。

そして、彼女は友に恵まれた。ヒューマンの女性と親友となり、彼女と共に切磋琢磨しあつた。辛い時があらうと、友がいれば乗り越えられた。

結果、彼女は友と共に見事リユミエール聖騎士団へと入団が叶い、なおもハーヴィンとしての不利や偏見に悩みつつも自身が掲げたモットー「一日十善」を行う。自分の身

の丈に合わぬ善行、余計なお世話と言われても、困る者いれば手を指し伸ばす。それこそが、自身の正義だと胸張っていえる。

「貴君を最初に見つける事になるとは、予想していなかったよ……ブリジール」

「コ、コーディネリアちゃんっ!？」

一人の老婆を手助けしている時、現れた騎士団の友。そして地味な少年。その出会いが、ブリジールとその友コーディネリアにとって大きな転機となる。

二 何ニモマケズ

俺達の情報収集によって見事見つけ出したハーヴィンの女。だが、どうもコーディネリアさんの探す本命とは、また別の探し人であったようだ。

「ブリジール……こんな所で何をしているんだい?」

相手の事をコーディネリアさんは、よく知っているようで呆れた調子でブリジールと呼ぶ彼女へと問いかけた。

「わあ、コーディネリアちゃん! ご無沙汰でありますです! 見習い時代以来ですか?」

「ブリジール……」

さて、俺はコーデリアさんから詳しい目的は聞いていない。だが彼女の強い意志を秘めた目を見れば、ただならぬ目的であるのは理解できた。まあよからぬ感じはしなかった。特に追及をする気は無いが。

ともかくシリアスな雰囲気は漂ったのだが、ブリジールと言う彼女の何とも間の抜けた言葉で一氣に場の空気が和んでしまった。

「ブリジール、その……ちゃん付けはよしてくれないか」

「え？なぜです？」

「いや……まあいい。それよりもブリジール、場所を移したい。どこか人のいない所へ」
「ああ、そうだ！コーデリアちゃん!!ちよつと手伝ってくださいです!!」

やおらブリジールは、コーデリアさんの手を掴むと彼女を無理やりに連れて行ってしまふ。

「ちよ、ちよつと待ちたまえブリジールッ!?わ、私は今から君に」

コーデリアさんは、狼狽えながらもそのまま連れていかれる。

「……いや、これ俺達もいかと駄目だぞー!」

あまりに急な展開にポケッとしてしまったが、依頼人が連れていかれるのを黙っているわけにいかない。俺達も急いで彼女達の後を追いかけた。

「と……とんお助けするですー!」

ブリジールさん、やはりハーヴェイン族と言う事で年の頃はわからないが、コーデリアさんと馴染みと言うのなら年上だろう。彼女は、コーデリアさんを連れまわし行く先々で困っている人々を見つけその手伝いをしまくる。とにかく手伝う手伝う、その勢いたるや休む暇ない手伝いマラソンだ。

東に重い荷物に困る人あれば、行って荷物をもつてやり。西に犬に怯える子があれば、あつち行けと追い払い。南に粗暴な客に怯える者があれば、やめよやめよと場をおさめ。北に伸びすぎた街路樹に困る声あれば、私が切ろうと声をあげる。

そんな人に俺は今なってる。

「ゼエ……ハア……あ、あんたあ、無茶すんなよ」

「め、面目ないです……」

重い荷物を持つとうとして、そこまでは良いが荷物のせいで足元が見えずこけそうになりフェザー君と俺で咄嗟に荷物と彼女を受け止める。

犬に怯える子供のために、犬を追い払おうとしたら吠えられて逆に怯え俺とゾーイで犬をなだめてどっかに行かせた。

乱暴な客に怯える八百屋の女将がいたので、助けに入ったらやはり怯えてしまったのでマチョビイ状態のB・ビイを客にけしかけ退散させる。女将や他の客も怯えていたが、気にしない。

街路樹の剪定をしようと云って梯子を借りてきたは良いが、登ったら高くて怯えてしま
い剪定どころで無いので、仕方なしに俺が代わりに剪定した。

「聞き込みより疲れたぜ……」

「すまないな団長殿……付き合わせてしまつて」

別にコーデリアさんが謝る事は無いのだが、なんともブリジールさんとやらは、空回
りが多い。それでフォローする方は大変だ。

「彼女、いつもこんな何ですか……」

「ああ……彼女は、人助けをモットーとしているからね」

「そりゃ立派ですが……」

「まあ、見ての通り身の丈に合わぬ事までしようとするのだよ……」

コーデリアさんもあきれた様子であるが、ブリジールさんに付き合っていると面白い
事に気が付く。

「まあ、結果的にみんな喜んでるんで良しとしますけどね」

「そう言ってくれると助かるよ」

とにかく一生懸命なブリジールさんの手助けは、空回りはしているが助けられた人
は、皆笑顔であった。そうであるなら、文句は言えまい。過程も大事だが結果も重要だ。
「兄ちゃん、上手く切るもんだねえ？どっかの職人かい？」

「良ければうちの庭の木もやってくんねえかい？ 伸びちまって仕方ねえのよ」

……ふっ。どうやら、今は懐かしきユグドラシルハウスでの剪定技術が唸っちゃったな。あの巨大なログハウスは、家であると同時に生きた大樹。ほつとくと枝が伸びる伸びる。だから剪定は俺の仕事だった。

しかも面白かったユグドラシルが、ちよくちよく樹木を生やし俺に色々な形で切らせた。リクエストに応えてウインドラビット、ビィ(B・ビィじゃない)はお手の物。リヴァイアサンにプロトバハムートだつて軽いぜ。そのおかげか、技術ばかり向上して、村の老人達に植木なんかの剪定を任せられまくつててしまったからな。多分これだけでも食っていけるんじゃないだろうか。

「わ、わ……たくさんですー！」

明らかにブリジルさん一人では、捌ききれない人数がワラワラ集まってきた。そして申し訳なさそうにしながらも、どこか期待した目で俺を見るブリジルさん。カワイイ。

「……しかたねえ、俺の鋏裁きを見せてやるぜオラア！」

——この時の、火の様に激しくも、水の様に流れる剪定技術は、瞬く間に評判となり、その日一日を費やし街の殆どの街路樹や庭木を剪定、「一夜大剪定」と呼ばれた出来事は、【星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y】の新たな伝説を生

み出し【ザンクティンゼル剪定術】と言う新たな剪定術の流派を確立したとかなんとか。その噂を聞きつけたある庭師のエルーン女性がいたと言うが、街の誰もが剪定技術だけ印象に残り、肝心の少年の姿がおぼろげのままであつたため、【星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y】以外の情報は、集まらなかつた。そのため「もしかしたらこの活躍で、俺個人の印象アップ？」と期待した少年の思惑は、見事にハズれたのだった。

■ 三 ますです！

「本当に助かりましたです！ありがとうございます！！」

俺と団の仲間と、コーデリアさん全員を巻き込んだゲリラ的人助けは、結果的に一日中行われ、本来の目的を果たせていないコーデリアさんは、後日コーデリアさんと待ち合わせたあの店でブリジールさんを交えて集まつた。

「是非お礼を言いたかつたのです！」

俺は一応の目的を果たし、依頼も終わりとなりコーデリアさんからは、あとは自分達の問題だと言われたのだが、ブリジールさんがどうしてもお礼を言いたいと言う熱意に負けたコーデリアさんの許可がでたので、俺達も店に現れた。依頼も終わつてるので団

の皆は、自由行動と言う事にした。なので今ここには、俺とB・ビーだけ。

「改めて、自分リユミエル聖騎士団の新入り、ブリジールと申しますです。昨日はあわただしく、ろくに挨拶も出来ず申し訳ありませんです」

「あ、いやこれはご丁寧に……」

「団長さんの騎空団の噂は、私もかねがね聞いておりますです。団員だけでなく、団長さんもかなりお強いと聞いておりますです！」

「あ、はあ……」

「しかし、強いだけでなく素晴らしい剪定技術もお持ちとは、驚きましたです！」

「うむ、確かにあの技術……リユミエル聖国の王室庭師としても申し分ない……いや、それ以上か」

「ええ……」

俺そんなにすごい事してたのか？調子乗って「これで食っていける」なんて思ってたけど、冗談のつもりだったのだが。

「いや、もし騎空団以外の選択肢があったなら、選んでみるのもいいかもしれないよ。君は、自分で思っている以上に多芸に秀でているかもしれない」

コーデリアさんの、冗談とも本気とも取れる言葉は、一応胸にとどめておこう。

「しかしよお、ぱっつん髪の姉ちゃん。人助けも結構だけど、自分でやれる事ぐらい見極

めないと危ないぜ？」

B・ビイは割と言いにくい事をばつさり言うなあ。

「あう……も、申し訳ないです」

「そうだぞ、ブリジール。貴君の行いが立派なのは、私も認めるがそれで貴君に被害が出ては周りが困ると言うものだ」

「お、おっしやる通りです……」

きつとこの人は、今までも同じ事を言われたのだろうなあ、とぼんやり考えながらも、同時に昨日街の人達が喜んでいた事も思い出す。

「まあ、昨日も言っていましたが大みんなブリジールさんに感謝してだし、今回はそれで良しッて感じですかね」

「やれやれ……良かったなブリジール」

「はいです！ありがとうございます！」

ああくなんだろうか、今日はB・ビイがいるがそれ以外は他で自由行動。それもあって目の前で微笑み談笑するコーデリアさんにブリジールさんの組み合わせが素晴らしく和む。本人達には、あまり言えないが年頃では美女の組み合わせのほが、見た目にウエイトがかかり美男子と美少女と言う組み合わせに見え、なんとというか絵になるなあ……しかも騎士甲冑のせいもあって余計に絵になつてる。場面を変えてもいいなあ、草

原や花畑、二人がたたずむだけでどこでも絵になりそうだ。

「団長さん？どうかしたです？」

「いえいえ、なにも」

いかんいかん、ちよつと考えが膨らみ過ぎた。

「……ところで、ブリジールさんは何でこの島に？お聞きした感じでは、騎士団の本拠地の方に居る事が殆どらしいですけど」

「あ、えつとその……自分、未だ新人なので大きな任務は、あまり来ません……けど、それでも誰かの力になりたいと思って、困っている人を助けていましたです。それで——」

彼女が話すのは、ハーヴェイン族ゆえの苦悩と逆境。憧れのリュミエル聖騎士団の団長のようにするには、未だ未熟で力を付けるにも基礎体力がそもそも無い。だけれど彼女は、困る人がいれば助け続けた。一步一步は小さくとも、それが成長につながると思つて。「清く、正しく、高潔に」、これがリュミエル聖騎士団のモットーと言う。彼女は、それをまさに実行しているのだ。

まあ、それを実行しまくつていたら、だんだんとそつちに集中し出し、ついに騎士団の仕事以上にのめり込み「あれ？最近ブリジールいなくない？」と言われ出した。そんなことある？と思つたが、どうも彼女は、普段から手伝いの幼子と間違われてろくに剣

術指南も受けれず、騎士団の任務もあまり来ないと嘆いているようだ。そのため姿を見せなかったとしても、なんとなく「そういえばいねえな」程度だった。そしてその頃彼女は、島を渡り善行を行い続けていたのであった。

「リュミエール聖騎士団って、そんなゆるい職場なんすか？」

「断じて違う……」

しかしコーデリアさんの言葉も、力無いものだった。色々思う所があるらしい。まあ、本当にそんなゆるい職場なわけは無いだろう。あくまで色々な事が重なったの事だと思いたい。

「さて……ブリジール？彼への礼は、もう終えた。気はすんだらう？」

「はいです！お手数おかけしましたです!!」

ペコリと頭を下げるブリジールさん。くそう、カワイイ。

「ブリジールも満足しようだ。貴君には、色々と世話になった」

「かまいませんよ、仕事ですし」

「それじゃあ、我々は」

「あの、騎士様……」

「うん？」

「コーデリアさんが席を立ちさいならしようとしたら、突然見知らぬ男に声をかけられる。」

「突然の無礼お許しください。そちら、昨日街で多く人助けをして下さった方々とお見受けしますが」

「はい！昨日はとことんお助けしましたです！」

「おお！これは、何と言う幸運！」

男は実に嬉しそうにブリジールを見て歓声を上げる。

「実はお願いがあつてまいりました。貴女様方に、魔物の討伐をお願いしたいのです」

「魔物討伐だと？」

「はい、実は街外れの洞窟に少し前からゴブリンが巢食つてしまい……初めは気をつけさえすれば大丈夫でしたが最近更に数を増やし、ほとほと困つてしまひまして。特に我々は、仕事でその近くの道を通つて荷物を運んでいるのですが、一度襲われると何せ数が多く逃げるので精一杯……」

「むう、それは許せないです！」

話を聞くとブリジールさんは、目に闘志を燃やして立ち上がった。

「待ちたまえブリジール。まさか貴君、行く気ではあるまいな」

「勿論行きますです！人々の暮らしを脅かす魔物、許してはおけません！」

「やれやれ……だが、貴君ゴブリン複数相手に戦えるのか？」
「あ、それは……」

ああ、この人はゴブリン相手もきついのか。もともと、ゴブリンも知能のある魔物であり迂闊に「ゴブリン程度」と舐めてかかれれば痛い目を見る。ゴブリン狩りを専門とする者もいると聞くほどだ。特に今回の様な集団となると、指揮を取るボスもいるだろう。

単体での強さと集団の強さを知らなければ、魔物とは戦えない。ばあさんによく言われたものだ。

「手伝いましょうか？」

「いや、貴君にこれ以上迷惑はかけられない」

「やーしかし」

「安心したまえ、私がついていくからね」

「コーデリアちゃん？」

爽やかな笑みをブリジールさんに向けるコーデリアさん。爽やかさで目が焼けそう。

「どうせ止めても貴君は行ってしまうだろう？止めて聞くなら、私がここに現れる事も無かったのだから。だがその後は、わかつているね？」

「コーデリアちゃん……勿論です！ありがとうございます!!」

「ふっ……とところで、そろそろ、ちゃん付けは辞めて欲しいのだが……」

「お兄さん、その場所へ案内してくださいです!」

コーデリアさんの最後の言葉を聞かずブリジュールさんは、いかにもやる気満々という様子である。

「やれやれ……それでは、団長殿。我々は、これで失礼するよ!」

「本当にお手伝いしなくていいんですか?」

「ああ、ゴブリンの群れとは、騎士団の任務で何度か戦っているからね。対処の仕方は、心得ている……それと」

「はいはい、わかっています。今後もう片方の情報があれば、シエロカルテさんを通してお伝えしますので」

「助かるよ。では、また会う事があれば、共に食事でもしよう、若き団長殿!」

「本当にありがとうございます!!」

まあ、コーデリアさんの強さは、最初に会った時ある程度把握している。確かにあれほどの強さなら、小さなゴブリンの群れであれば大丈夫か。深追いをするような人でもないし、手に負えないとわかれば撤退して他の騎空団に協力を仰ぐなりするだろう。あとのリュミエール聖騎士団の問題にまで関わる事は無いので、互いに社交辞令を述べて分かれる。後は俺も自由時間。久々に羽を伸ばして街を散策するのもいいだろうな。

「相棒、どつかでりんご食おうぜりんご」

B・ビーがついてるが、この際気にしない方がいいだろう。割り切ろう、それが肝心だ。

■ ■ 四 巣窟

依頼人の男から案内されたゴブリンが巣食っていると言う洞窟。確かに魔物の発する薄気味悪い気配をその入り口奥から感じ取る事が出来る。

「うっ」

「怖いかい、ブリジール?」

「こ、怖いです……」

まだゴブリンの姿を見てもいないが、ブリジールは既に腰が引けていた。それを見てコーディリアは、やさしく微笑みかけた。

「安心したまえ、私がついている。いざとなれば直ぐ撤退するつもりだ」

「け、けどそれじゃあ……困ってる皆さんが」

「ブリジール、民を助けるとは、己もまた助けねばならない。民のため戦う牙となるならば、我々は倒れる事は、許されない」

リユミエール聖騎士団の騎士達にとって、命がけの任務は珍しくない。罪無き民を護り、牙無き民を護る。如何なる場で命を落とすかわからない。だが、その時その瞬間、最後まで彼らは立ち続けねばならない。彼らに死に場所は無い、あるのは無事己の命と共に、仲間と共に帰る場所のみ。命を捨てる覚悟を持って倒れた時、その後誰が民を護るのか。

人を守護する事は、己もまた守護せねばならない。

「それに貴君に何かあれば、私はとても悲しいからね……頼むから無茶はしないでくれ」

「コーデリアちゃん……わかったです！あたし、自分の出来る事をしますです！」

「ああ、その意気だ」

ブリジールらしい言葉を聞き、コーデリアは安心したようで再度洞窟の入り口を見る。

「前見た時は、10体程度でした」

ついて来た複数の男達。依頼してきた男の仕事仲間です。今までは、自分達で何とかゴブリンを追い払ってきたらしい。今も猟銃や小さな剣に手斧をもって申し訳程度の武装をしている。

「それ以上には増えていないのだね？」

「おそらくは……ただ、ゴブリンの繁殖力は強いですから」
「確かにね……」

ゴブリンの繁殖力の高さは、広く知られている。だからこそ多くの人恐れられているのだ。

「ともかく様子を見よう、君達はこのままでいい」

「いえ、この洞窟は見かけ以上に入り組んでいます。それに見ての通り暗いので、ゴブリン達がいるはずの居住エリアにまでは案内させていただきます。ある程度進みさえすれば、ゴブリン共が設置した松明もあります」

「ふむ……」

詳しく男達に話を聞くとこの洞窟は、蟻の巣のように道が分かれているところがあつる。一度慣れてしまえば迷う事は無いが、初めて来たコーディリア達では、間違いなく迷ってしまうだろう。

「わかった。ではゴブリンが見つかるまで案内を頼む。その後は、直ぐに引き返してくれたまえ」

「ええ、わかりました」

男達は松明を用意し火をつけた。洞窟は、松明無しではとても先が見えない暗さだ。

「さあ、行くよブリジール。準備はいいかい？」

「勿論です！とことんがんばるです！」

頼もしい友の声を受けてコーデリアも強く頷いた。

クロスフェイト 正義を叫べ (後編)

■ 一 悪しき姦計

「お前ら、自由行動とは言ったけどさ……その荷物はなんだ？」

「イヤ、ソノ……」

俺の目の前でティアマトが正座している。あとそれ以外の女性陣は、正座こそしてないが頭を垂れている。場所は、街のマーケット。当然目だつてしようがないが、しかし言わねばなるまい。

「俺の目には、大量の女物の服が見えるなあ？」

ティアマトの横には、しこたま女物の服の入った買い物袋が並んでいる。ゆうに20人分はあるだろうか、それも色とりどりの良い服だ。

自由行動で街を巡って、シエロさんの店に顔出したらこれだよ。

「あの前しこたま服買ったから、仕方なしに……フィラソピラも仲間になったから、本当に仕方なく、借金増やして女性陣のためのクローゼットを増やしたばかりだよなあ」

俺達男共で服を着るのは、人間である俺とフェザー君だけでそもそも服なんて少ない。動けばいいのだ。だから必然的に女性陣の衣類が多くなるのは、確かに仕方ない事だ。星晶獣とは言え、彼女達もオシャレはしたいだろう。だがそれと爆買いする事は別である。

「シエロさん、これらの品はお幾らです?」

「そうですね〜どれも有名ブランド製で、希少な生地を使った物が多いので……しめて26万5600ルピとなります〜」

「返品します」

「待ッテクレ!!」

俺の言葉を聞いてティアマトが土下座から素早く俺の腰にしがみ付く。

「コノブランドノ、コノモデルガ売ッテルノハ、コノ島ダケナンダ!!シカモ今季限定モデルデ、今買ワナイト絶対二手ニ入ラナイ」

「やかましいっ!!前同じこと言ッて服と靴買ッたらうがっ!!」

「アレハ、【ギユステ・オリジナル】ノ、別モデルダッ!!」

「知らんわっ!!」

本当に駄目になったなこの星晶獣(笑)!!真面目にティアマト(真)さんとトレードするか、ザンクティンゼルの祠にぶち込んでやろうか。

「だ、団長……私の服はいいから、彼女の分は買ってやってくれないか？ 見るに堪えない」

「にやあ、あたしも基本は修道服だし……」

待て待てお前達、特にゾーイ。お前はオシヤレと言うものが新鮮だから面白い物やいろんな服を着る事を楽しんでいるのを俺は知っている。他の星晶獣達も、基本決まった姿でしかないからこそ色んな服を着るのが楽しんでるのは、わかってるぞ。

だがこのティアマトは別だ。こいつはもう十分楽しんだ。他の服は、財政難の我が団でも正直買えん値段ではない。値段も、数も圧倒的にこいつが増やしてる。団の資金を切り詰めるとしたら、こいつしかない。

「諦めなさいっ!!」

「ヤダヤダ、絶対買ウンダツ!!」

「駄目ったら駄目ツ!!」

「買ウンタラ買ウンダッ!!」

前代未聞、服を買いたくて駄々をこねる星晶獣（笑）。皆さん、これ片割れとは言え、ポート・ブリーズ群島を守護する星晶獣（笑）ですよ？ 多くの騎空士達が感謝する風を生み出す星晶獣（笑）ですよ？

「……どうしても買いたかったら、お前分だけ自分で稼ぎなさい」

「稼イダラ買ッテイイノカツ!？」

「団の資金で買わないなら今日は見逃してやる」

「ヨロズ屋ツ!! 丁度服買エル報酬ガ出ル依頼無イカ」

俺ね、結構前から思っただけけど、このティアマトは、ティアマトの子供の部分がかれたんじゃないかと思う。だから対応の仕方でも幼児へ向けるような対応で十分だ。

「そうですね〜ティアマトさんの服のお値段分でしたら〜丁度増えすぎたゴブリン討伐依頼が来てますね〜」

「オオツ!!」

「……ちよつと待った」

すげー嫌な予感がする。

「シエロさん、その依頼って街外れの洞窟で増えたゴブリン?」

「おや、ご存知でしたか?」

「さつきそれを、例のコーデリアさんとその知り合いに依頼しに来た男が居ただけど」「あれ〜それは、おかしいですね〜? この依頼は、かな〜り増えたゴブリンの掃討依頼なので〜私やギルドを通してでないと依頼は、出来ないはずなのですが〜」

「普通の人一般人が依頼を頼むことは無い?」

「ほぼ間違いない〜」

三日、コージェリアさんは男達に襲われていた。曰く、恨みを買ってしまった。この事。

「……相棒、行くか？」

うむ。

「お前ら、全員で行くぞ」

駆け足だ。

■ 二 今、正義を叫べ

「ギヒイツヒイイ!!」

「はあああつ!!」

「ギャヒツ!?!」

暗闇で蒼の光跡が走る。ゴブリンの断末魔が洞窟内に広がっていくが、その音もすぐに別のゴブリン達の下劣な笑いと叫びにかき消された。

「くつ……きりがいな」

「コ、コージェリアちゃんつ!!」

「かまうなブリジール!今はとにかく走れ!」

「は、はいです!!」

ブリジールが洞窟の奥へと走り、その後をコーデリアが付いて行く。後ろからは、暗闇から湧き出るかのような錯覚を覚える程。

「っうー!」

右足に激痛を感じ、コーデリアが態勢を崩す。

「ああ、コーデリアちゃん!!」

「へ、平気だよブリジール、少し痛むだけだ」

「け、けど……」

「大丈夫だ。さあ、今はとにかく」

本来甲冑で守られているはずの右足だが、無残にも甲冑は砕かれ、へこみ込んでいる。割れた甲冑の隙間からは、赤い鮮血が垂れていた。ゴ布林達は、その臭いを追う。若い女の血を目ざとく嗅ぎ分け追い詰める。

(あの男達……気が付くべきだった。私としたことが……)

痛む足を庇いながら、自分達にゴ布林退治を依頼しに来た男達を思い出す。

それは、洞窟に入って少し経ってからの事だった。

「そろそろゴ布林達が多くいる場所です。奴ら、ここら辺を居住エリアにしてるんです」

先導する男がゆっくりと進みながら話す。男の言う通り洞窟は、奥に進むほどただの土の壁からは、打って変わってある程度の生活感がある様子に見える。それでもゴブリンの様な魔物が手を加えた物なので、通路に設置された松明や簡単な木製の家具に、恐らく人々を襲って手に入れた生活用品がちらほらとある程度だ。

「あ……き、騎士様つ。あ、あそこ」

身を屈めて男が指さす所。岩陰からのぞき込めば、そこには一体の大柄なゴブリンを中心に集まる無数のゴブリンがいた。大型は一般的に「ゴブリンソルジャー」と呼称される近接特化のゴブリンであり、それ以外は小柄な「ゴブリン斥候兵」と思われる。ゴブリンソルジャーがここのリーダー格であるのは、間違いない。だが、その数が予想をはるかに超えていた。

「ぴいつーた、たくさんいるです……」

「仲間を集めたか、それとも増えたのか……」

10体程度と聞いていたが、ぎっと見てもその数は、30を超えている。しかも入り組んだ洞窟には、恐らくまだ多くのゴブリンがいるだろう。

(これは、我々だけでは無理だな……多すぎる)

10体程度であれば、問題なく倒す自信があったがそれ以上となると、コーディアの実力でも不可能、更には戦闘に不慣れなブリジュールがいては尚更であった。撤退の二文

字が頭に浮かぶのには、時間を要せず男達にもすぐに逃げる事を伝えようとしたその時であった。

突然の破裂音。同時に高温がコーデリアとブリジールを襲った。

「なにつ!？」

「きやあつ!!」

咄嗟にブリジールを庇い地面に伏せる。急ぎ立ち上がり爆発のあつた後ろを見ると、洞窟の通路が完全に崩れていた。

「っ、これは……むうっ!!」

そして男達が一人もいない事にすぐさま気が付く。

「ここまできくろうだったなあ、コーデリア・ガーンネット」

爆破され崩された通路の奥から聞こえる男の声。今までいた男達とは別の声だったが、その声を彼女は、よく覚えていた。

「貴様はっ!!」

「覚えてくれてたのかいつ!!嬉しいねえ!!そうだよ、あんたに騎士団を追われた哀れな男だよ、懐かしいなあオイ!!」

その品の無い言葉遣い、コーデリアは忘れるはずもなかった。

「清く、正しく、高潔に」をモットーとするリユミエル聖騎士団と云えど、その心に

醜きモノを隠し持つ者は、少なからず存在する。故にコーデリアの様な遊撃部所属の者が存在するのだ。

この声の主である男。この男は、コーデリアが記憶する中でも特に下劣な部類の男であつた。ヒューマンでありながらも、ドラフと見間違えるような恵まれた体躯にすぐれた剣技を認められリュミエール聖騎士団への入団が許されある程度の地位を得たが、徐々にその本性を現す。自身がりユミエール聖騎士団の名の知れた騎士である事を利用し、裏で悪事を働くようになった。時には無法者と結託し、男にとつて手ごろな悪党を仕立て上げて己の手柄とするなど、最早リュミエール聖騎士団のモットーばかりか、人の道に反する行いをするようになっていた。

表向きは、模範的な騎士を演じていた男であつたために、誰もがこの男が隠していた醜さまでは“その時”まで誰も見抜く事が出来なかつたのだ。

遅れてこの事に気が付いた遊撃部上層部は、急ぎコーデリアに男への【正義審問】を命じた。この【正義審問】こそがコーデリアの任務、遊撃部最後の切り札としての最大の使命。リュミエール聖騎士団に害なすと思わしき騎士団内の団員を暴き、正義を問う。真意を探り騎士団へ仇名すと判断されれば、その者を討つ。

即座に男の元へと現れたコーデリアは、証拠を押さえた男の罪の数々を突き付け最後に正義を問う。たとえ外道であつても、一時はリュミエール聖騎士団の騎士であつた

男、それは最後の審判、そして情けともいえる。“正義とは何ぞや”それを問われた男は、言葉ではなく剣で答えた。その行動にコーディアの怒りが爆発したのは、言うまでもない。最早問うべき正義は無い。研ぎ澄まされた剣技は、男の力を上回りあつてなく倒してしまった。

遊撃部の団員達によつて連行された男。その後男は、しかるべき沙汰を牢獄で待つているはずであった。

「詰めが甘かったなあコーディアよお！俺の息がかかったのが、団内にいないと思つたかい？時間はかかったがなあ、無事に逃げ出させたぜ」

「貴様あ……」

「てめえのせいで、俺の人生計画が一からやり直した……本当なら直接殺してやりてえが、その悔しそうな声が聴けただけいいとするぜ」

「こ、この程度の壁……ぐうっ!」

「コーディアちゃんっ!!」

剣を抜き力を込めた斬撃で壁を破壊してしまおうとしたコーディアであったが、右足に激痛が走り倒れてしまう。

「コーディアちゃん、怪我をしてるです……っ!」

爆破から咄嗟にブリジュールを庇ったさい、爆風と吹き飛んできた瓦礫が不運にもコー

デリアの右足を強く殴打し深い怪我を負ってしまった。

「じ、自分を庇ったせいで、そんな……」

「かまうなブリジール、貴君のせいではない……っ」

「怪我でもしたかあ？役に立たねえ仲間がいると、大変だねえ」

「だまれっ!!」

「遊撃部最後の切り札もこうなっちゃお終いだなあ……まあ、あとはゴ布林共に任せて俺達は退散させてもらおうぜ……飢えたゴ布林共に嬲られて死んじまいな……」

「ま、待てえっ!!ぐうっ!!」

遠ざかる男達の笑い声。立ち上がるのさえやつとな今のコーデリアには、壁を壊し追う事も不可能だ。そして何よりも今彼女達は、恐ろしい危機の中にある。

「ギギイ!人間ツ!!」

「サツキノハ、オマエラカツ!!」

爆発で混乱していたゴ布林達が、倒れているコーデリア達を見つけ自分達の住処に攻め込んで来た人間達だと認識し興奮状態になった。急ぎ武器を持ち洞窟の奥から無数のゴ布林達の声が聞こえてくる。

「コ、コーデリアちゃん……」

「くそ……ブリジール、とにかく逃げるぞ」

「け、けどどこに逃げるです!？」

「むう……っ!だが、どのみちこのままでは、奴らに戮殺しにあうのみ。その道を進むぞ、走れ!!」

痛みに耐えながらも立ち上がり、コーデリア達はゴブリンの数が少ない方の分かれ道へと入りとにかく走り続けた。

そして、今に至る。二人は必死に逃げ入り組んだ道の各所からゴブリン達が現れては、二人でお互いを庇いつつ撃退し、なんとか逃げ続けた。

しかし、怪我を負ったコーデリアと、戦いに慣れていないブリジールの二人の逃走劇が長く続くはずもなかった。勝手もわからぬ入り組んだ洞窟にも苦しめられながら、最後にたどり着いたのは、無情にも二人を待ち構えたような行き止まりであった。

「そ、そんな」

「いや……どうか、ここであつていてくれ……」

ブリジールの表情が絶望に染まるが、コーデリアにはある考えがあつた。右足が痛む中壁へと急ぎ駆け寄りその壁を手で探る。

「コーデリアちゃん、なにを」

「ブリジール、貴君はジツとしていたまえ」

後ろからは、迫るゴブリン達の声が聞こえるが、彼女は実に冷静であつた。

「間違いない……神よ、感謝いたします」

何かを見つけたのか、コーディリアは小さく呟きながら蒼剣ブルークレストをかまえ、叫んだ。

「ライトニング・ピアースッ！」

放たれる剣技。しかし今の彼女には、本来の威力を出す事は出来ない。鋭いキレも無い力任せの攻撃。だが渾身の力を込めた剣は、壁の一部を穿ち僅かだが外へ通じる穴を開けてみせた。

「男達から聞いた洞窟の構造……あれも嘘であつたら無理だつた……」

洞窟へと向かう前、男達の一人から聞いた洞窟の話の中で洞窟の一部は、壁が薄い場所があると聞いていた。風によって風化し外から崩れていった場所が多いせいだった。そのような薄い壁であれば、今の自分でも壊せるのではないかとコーディリアは考え、どこかの行き止まりを探した。その場所が外へと通じるかは、大きな賭けであつたが、見事彼女は賭けに勝つた。

しかし、それでも開けた穴は、小さなもの。精々ハーヴィン一人が身を屈めて通れるかどうかの大きさである。

「ブリジール、君はここから逃げろ」

力を使い果たしたのか、壁に背を向けて倒れ込んだコーディリアがブリジールにとつ

て、非情な言葉を告げる。

「そんな、コーデリアちゃん、なにを言ってるです!？」

「背を向けるんだ、急ぎ貴君の甲冑を取る……そうすれば、この穴でも君は通り抜けられるはずだ……」

「ちがうです、そんな事を聞きたいんじゃないです!!逃げるなら二人で!」

「甲冑を着ては、無理だ……二人で取る時間もない。それにこの怪我では、逃げたとしても足手まといになる」

討ち捨てられたゴブリンの死骸は、同時に二人の行き先を示す痕跡となる。もうゴブリン達は追いつくだろう。仮に二人で逃げれても、もうまともに走る事もできないコーデリアを連れてでは、直ぐにゴブリンは追いつきやはり、ブリジールも助からないだろう。コーデリアは、せめてブリジールだけでも逃がすつもりだった。

「誰かが、あの男達の事を騎士団に報告をせねばならない……なおも騎士団の誇りを貶める男を許すわけにはいかぬのだ」

「それは、それじゃあコーデリアちゃんが……」

「ブリジール、頼む……」

「ダメです……そんなの、ダメです……っ」

「……友よ、君には、生きてほしいのだ」

ブリジールさえ生きていれば、リュミエール聖騎士団へ報告が可能だ。そして遊撃部、最後の切り札として最後の責任を果たし、なによりも彼女を助ける事ができる。それ以上今コーディネリアが望むものは無く、それだけを願う。

「……ダ、ダメです」

「ブリジール……?」

「違います、それじゃあダメなんです!!」

やにわにブリジールは、コーディネリアの手とその手に握られたままのブルークレストを掴み上げた。

「自分は、最後まで諦めないです!」

「待て、ブリジール何をっ!!」

そしてブリジールは、そのままコーディネリアからブルークレストを奪い、開いた片手に握り自身の持つ剣と共に構えた。

「リュ、リュミエール聖騎士団ブリジール。同聖騎士団が正義審問に則り、いざ……この碧き剣に誓い、応えるです……っ!」

ブリジールがブルークレストを掲げ、たどたどしくも言葉を繋ぐ。

「自分にとって……正義とは、一日十善です!自分の正義を、押しつけと思われたって、たとえ無理だとか、ダメだと言われても、自分は、自分の正義を信じてるです!諦めな

いのです!!とことん貫くと決めたんです!」

「ブリジール、それは……」

「正義審問、一度だけ見たことあるです……コーデリアちゃんの目的、わかってるんです!!だから自分の正義、とことんみせるです!!」

それは、まさしくリユミエル聖騎士団の正義審問であった。誰かに問われるまでも無く、ブリジールは自ら蒼剣へと己の正義を誓ったのだ。

「イタゾツ!!」

その時、ゴ布林達がついに二人を見つけ出し、ワラワラと洞窟の奥から溢れるように迫った。だがブリジールは、果敢にもコーデリアを庇うように立つ。

「自分がコーデリアちゃんをとことん護るですっ!!」

足も震え、目に涙をため、しかしその正義の叫びは騎士のものである。

今、この瞬間のブリジールは、リユミエル聖騎士団団長に劣らぬ、真の騎士であった。

そして、正義を叫ぶ者は、決して孤独ではない。

「壁が邪魔ああっ!!!」

叫び声が聞こえたかと思うと、紫の閃光が壁をぶち抜き二人に向かい襲いかかろうとしていたゴ布林達を巻き込んで全てを吹き飛ばしていった。

「ゴ、ゴブリンが、居なくなつた……です?」

「こ、これは……助かつた……のか?」

「あ、いたいた。無事つすか?」

コーディアの呟きへの答えたのは、破壊によつてできた土煙が晴れる中から現れた少し前に別れを告げたはずだった、あの地味な少年であつた。

■ ■ ■ 三 濡れ手で粟

俺は今、かなり上機嫌だ。

一度胸糞悪いクソ共の阿呆な企みを知つて激おこであつたが、今となつては気分が良い。スカツとしている。

「異常発生ของゴブリン討伐と合わせて指名手配犯逮捕協力の報奨金……なは、なははつ!!」

エンゼラの金庫にしまわれた大金。思わぬ形で受けた依頼によつて芋づる式に捕えた元リユミール聖騎士団出身者とその仲間の犯罪集團の捕縛。

あの時、不穏なゴブリン討伐に向かつたコーディアさん達を追いかけて行くと。明らかに怪しい集團が例のゴブリンの巣から出てきたので取りあえずボコボコにした。も

し違ったら「ごめんね」だが、「くくく……いくら遊撃部、最後の切り札と言えど、手負いであれほどのゴ布林達相手では一溜まりもあるまい」とか言いながら出てきたから問答無用である。

コーデリアさん達の居場所を吐かせようとして、最初強情だったリーダーの男だった。その場で星晶戦隊全員がサイズ抑えながらもマグナモードになり、B・ビィがマチョビィへと変貌しゾーイが甲冑へと変身したら完全に怯えきって全部吐いた。

男達はその場で気絶させてユグドラシルに頼み土中に体埋めて生首状態にした。ラムレッタとフィラソピラに男達の監視を任せ、俺達はすぐさま突入。途中埋まっていた通路は吹き飛ばし、ガンガン進む。

作戦内容「ゴ布林はサーチアンドデストロイぶつ飛ばせ」。ガンガン突き進む星晶戦隊達を数だけ集めたゴ布林程度が止めれるわけも無く、二人の場所も星晶戦隊の超星晶的能力を駆使すれば特定は容易い。入り組んだ道を通っては遠回りなので奥義をうちまくって直進である。以前ティアマトによって必要も無いのにクソ高い金を勝手に使ったティアマト剣(仮)改め「ティアマトソード」での奥義エリアルクラスターは、放ちまくると気分がいい。

もう後は蹂躪である。

「オラオラオラアツ!!死にてえ奴から、かかってきやがれっ!!」

「ウオオオオツ!! 魔物だろうと全力で、語り合うぜええつ!!」

「お前達は、増えすぎた……それは、均衡を崩すツ!!」

「私ノ服ノタメニ、大人シク狩ラレロオオオツ!!」

「全員……死を奪って、あげるから……」

「我が、光の剣に貫かれるがいいっ!!」

へ水底へと、沈めてくれる……

「アクシス?ムンデイ!!」

「クラエツ?????」

カクサンレーザーツ」

正直やりすぎた。

未だかつて、ここまで蹂躪されたゴブリンは、いなかっただろう。気の毒に思うほど

だった。俺はとつと二人を担いで外に逃げたが、そのあとついに洞窟は完全に消し飛んでしまった。調子が出てきたコロツサスが、うっかり広域攻撃の「プロミネンス・リアクター」を結構な出力で発動させてしまい星晶戦隊達ごと巻き込んで洞窟ごと吹き飛ばしたのだ。上空へと撃ち上がって行く星晶戦隊達は、なんともシユールだった。リヴァイアサンなんか、まるで昇り竜のようだったよ。

まあ、みんな無事だったよ。髪がある奴は、みんなアフロで。唯一人間だったフェザー君は、よく無事だったと思うけど。アフロにタンコブ一つで。この団で過ごした

所為か、肉体的にも色々と慣れてきたな彼も。コロツサスは「(・ω・) テヘペロ」だつてさ。んもー。

その後は、埋めといた男達連行して衛兵に突き出して終了。ゴブリン討伐も完了して報酬ゲツトでワツハツハ!

しかも、リーダーの男がリュミエール聖騎士団出身者のうえに、脱走犯と言う事もあって、リュミエール聖国側からの何かしらの謝礼を期待してよいとシエロさんがちらりと話していた。むふふ。

ともかく結構な臨時収入だ。追加報酬も期待できるときたもんだ。借金全部返済と行かないが、一日ぐらい騒いでもいい分の金は手に入った。なので後日俺達は、シエロさんの経営する店を貸し切つて宴会を開く事とした。

「という訳で、今日は無礼講である! みな良く呑み良く食つて、大いに騒げ!!」

「無礼講も何も、うちの団に序列あるのか?」

「うるさいよフェザー君! よし、乾杯ツ!!」

俺の乾杯音頭にみなも呼応してグラスにジョッキを掲げて叫ぶ。そしてすぐにそれを飲み干し、並んだ料理に手を伸ばす。貸し切りであるので、体のデカイコロツサスや人型でないリヴァイアサンも不自由なく飲み食いできる。……そういえば、コロツサスってどうやって飲み食いを……。

まあいいや、さあ宴会だ！たまには、俺だって何にも気にせず飲み食いしたいんだ！
酒は無理だがジューズをあおる！

「カーツ！こおの一杯ツ!!」

「オレンジジュースでよくそこまで唸れるな主殿」

お黙りシユヴァリエ。この100%オレンジジュースの美味さをわからんのか。

「へ、へへ……トコロデ团长？例ノ事ダケド」

「うわあ」

突然ティアマトが気持ち悪い笑みを浮かべて擦り寄ってくる。なんだよ気味悪いなあ、わかったよ、言いたい事はわかってるから寄るなっ!!

「しかたない、欲しがった服ぐらいいは良しとする。買うがいい!!」

「イヨツ!!团长太ッ腹ツ!!全空一ノ地味男!!チヨロ男ツ!オーイ、ヨロズ屋!!キープシ
テタ商品全部買ウカラナツ!!」

こんな時だけ团长である俺をおだてるティアマト。調子の言いやつめ。まあ、今俺も
ちよつと調子乗ってるけどね、うはは。

「自然と馬鹿にされたのに気がついてないねえ」

「ば、場の空気に……流された、みたいだね……」

何か聞こえるが気にしない。

「はいはい！—どんどん、お料理追加しますよ〜」

シエロさんと店員がしこたま追加の料理を運んできてくれる。普段なら気を失うような値段の料理だが、今日は大丈夫なのだから気分がいい。

「うっひょー！りんごの山だぜ！」

「酒っ！おさけにやあ!!」

追加料理と追加の酒に飛びかかる者達。うむ、にぎやかである。

「やあ、団長殿」

団員達を眺められる場所でゆったりしていたら、イケメンボイスが傍から響く。いつの間にか、コーデリアさんとブリジールさんが揃っていた。

「今日は来てくれてありがとうございます」

「こちらこそ、声をかけてもらえて光栄だよ」

「招待されましたす！」

宴会をすると決めた時、二人にも声をかけておいた。コーデリアさんは、怪我を負っていたので、来れないかとも思ったが、どうやら大丈夫のようだ。

「傷の方は、大丈夫ですか？」

「ああ、あの後君の仲間、フィラソピラ殿に傷を癒してもらったおかげで、もう大事は無
いよ」

コーデリアさんの言う通り、フィラソピラの回復魔法での処置が早く行われたのは、良かったろう。でなければ彼女は、未だ病室にいたはずだ。彼女の足には、包帯が巻かれているがそれが取れる日も近いだろう。

「次ぎに会う時は、共に食事でも……とは言ったが、こうも早く約束が果たせるとはね」「全くです。つと、そういや飯追加貰いに行くんだった」

「あ、自分料理持つてくるです！」

「え？いや、けど……あの中に？」

料理がある場所へ視線を向ける。

「おしゃけえくおしゃけドンドンもってこおくっいっ!!」

「美味しい……はむ、はむ……これも美味しいなあ……」

〈酒は樽に入れてくれ、グラスでは飲めん〉

「——♪」

「シュ、シュヴァリエ……全部の手で料理取るの……ずるい……」

「あるものを使って何が悪いッ!!」

「ヒヤッハーツ!!酒ダ!!酒ヲモツテコイ!!」

「(＊、ω、) オイシイネ」

「コロッサスは、ほんと器用に食うよな、どうなってるのそれ？」

配膳された料理へは、星晶戦隊と異次元ストマック少女ゾーイとその他が群がりえらい騒ぎだ。あの中に小柄のこの人が行くのか……。

「無理じゃないかなあ……」

「い、いえ！ここは自分に任せてくださいです！とことん料理運ぶです！」

そう言うやブリジールさんは、料理が並ぶ机に突進していった。星晶戦隊にもみくちゃにされなければいいが。

「彼女は、今回の様な事があっても変わらさずですか」

「そうだね。だがそれでいいのだ……私が怪我を負った事で、負い目に感じてしまわなにか心配だったが、それもまた今回の事で吹っ切れたみたいだからね」

自分出来る事を精一杯に、一日十善。それが彼女のモットー。まあ真面目なのだ。ブリジールさんは、きつとこれからもそれを貫くのだろう。

「……結局騎士団の任務は、ちよつとは済みましたか？」

「……ああ」

態々聞くことも無いのだが、捕らえた男が元リユミエール聖騎士団と言う事もある。やはり気になってしまう。

「あの男は、嚴重に移送される。今度こそ牢獄へと入り直ぐにでも沙汰が下るだろう。奴と通じていた団内の者も直ぐに捕らえられる。奴らは、もう日の目を見る事はあるま

い」

まあそれはそうだろう。きっと叩けば埃がしこたま落ちるに違いあるまい。今回だけでなく、色々な事を騎士団でもやっていたようだから実に救いような無い男だ。

「ブリジールさんへの用事ってのは？」

「それも今回の事で意図せずながらも、無事終える事ができた」

「ん、よかつたすね」

「ああ、まつたくだ」

終わり、終了。これではれて、完全に依頼達成……とは、ならず。

「けどまだ残ってるんでしたっけね。探してる人」

色々重なって「めでたしめでたし」と言いたくなかったが、考えたらブリジールさんへの用事とやらは、本命ではなかったのを思い出した。

「その通りだ。これが極めて厄介な人物だね。シャルロット・フェニヤ、我らリユミエール聖騎士団の現団長だ」

「……ん、んんっ!?!」

なにサラツと言ってるのさ、この人。

「任務内容ってあんま話さないって、言ってますんでした？」

「普通はね……ただ、貴君には話しておこうと思う」

「それは、またどうして」

「……貴君は、信頼できると思ったからね」

少し陰のある微笑。そして机に置かれたグラスを指でなぞる仕草が様になる方だ。

「私はリユミエール聖騎士団の遊撃部に所属しているのだ」

「遊撃部、ですか」

「そこでは戦時の際、哨戒、攪乱、陽動を行い主要部隊のサポートに回る特殊戦術部隊」

「はえーなんかカッコいい」

「ふっ、そうかい？」

男の子は、特殊部隊と言う言葉に弱いのです。

「普段は、諜報活動に内偵調査、籠絡、暗殺など工作員の如き秘密任務に従事している」

「なお更かつこいい」

「ははは……だが私は、その中でも団内の裏切り、不正行為を調査し告発する【正義審問】において絶大な信頼をえている。身内を疑う任務だからね、団内からでも私を嫌う者は、少なくない。何時しか人を信じる事を忘れていたよ……」

「はあ」

「だがブリジールの真直ぐな正義に目を覚まされたよ。私には、あんな素晴らしい友がいた事を思い出せた」

確かに二人は、色々と正反対だ。見た目も中身もアベコベ、けれどだからこそ二人は、唯一無為の友と成れたのかもしれない。

「貴君にも感謝してるよ」

「俺ツすか？」

だが身に覚えが無い。

「三日程度の付き合いの私達のために、団員全員引き連れて助けに来てくれたからね。貴君等が現れなければ、私だけでなくブリジールもやられていたろう。それを思えば、幾ら感謝してもし足りないさ」

ティアマトが服を買いたいために進撃したのもありますがね。

「あー……その、あれですよ、当然の事をしたまです」 ってやつ」

「ふふ、素晴らしいね」

「まあ、あはは……ところで、ブリジールさん遅くないですか？」

「確かに、どうしたのか」

揃って配膳された料理の山に視線を向けると、相変わらず野獣のように群がる星晶戦隊や酒を飲み突撃するラムレッダ等がおり、その中でワチャワチャして目を回すブリジールさんがいた。

「あーあー……」

「はっはっは！彼女には、あの中に入るのは少し荷が重かったようだね」

「助けますかね」

「そうしよう」

俺達は席を立ち、未だ星晶戦隊の中から抜け出す事も出来ないブリジールさんの下へと向かった。

■ ■ ■ 四 踊れ乙女

「あう、目が回ったです……」

「無理せんでいいのに」

星晶戦隊にもみくちやにされたブリジールさんが、へとへとになって椅子で休んでいる。結局料理も俺達で運んだ。

「こ、これぐらいでしか今回のお礼が出来に無いと思ったのですが……面目ございません」

まあらしくていいけどね。言っちゃ悪いが、見てて面白かった。

その後色々話していると、会って最初の頃には、態々話さないような事も話題に出る。

「ブリジールさん、俺より歳一個上なんすね」

「はい、ちよつとだけお姉さんです！」

「それよりも、コーデリアさんが二個上つて言うのが意外……大人び過ぎてない？」

「任務の弊害かな。眉目秀丽、そうあるべきを心がけてるからね」

「けどコーデリアちゃんは、本当はもつと女の子らしい恰好や趣味が」

「はっはっは、やめようか、ブリジール」

引きつりつつも爽やかな笑みでブリジールさんの口を押えるコーデリアさん。はい、何も聞いてません、聞いてないから剣に手を伸ばさないでね。

そんな他愛もない話をしていると、シエロさんが「ちゆくもくく」と声を上げる。

「今日は音楽隊の方達をお呼びしておりますので、そちらの方も、存分にお楽しみくださいいね」

シエロさんがそう告げると、店の控えめながらも、立派なステージに6人編成の音楽隊が現れる。いいじゃないか、こういう演出は好きですよ。

直ぐに音楽隊による明るい演奏が店内に流れる。いいなあ、何時か何も気にせず、あの故郷のユグドラシルハウスや、風の穏やかな日に船の甲板で音楽を聴きながらのんびりとした時間を過ごしたい。

ユグドラシルハウスに帰ってももれなく星晶戦隊達がいるだろうし、船の甲板は、基

本フェザー君達が暴れるから静かさなど皆無だが……。

「ふふ、こう言う音楽が流れると気分が乗るね」

「そうですね」

すると、彼女の口が悪戯っぽく弧を描く。

「どうだい？ 一つ付き合ってくれないか？」

「はっ。」

おもむろにコーデリアさんが立ち上がり俺の手を掴む。

「あ、ええ？ 何を……」

「宴には、余興が付きものだろう」

そう言う彼女、俺を立ち上がらせて音楽隊の前に連れて行ってしまふ。きつと例の任務だとかでこうやって人を誘う事に慣れているのか、流れるような動きでなんとそのまま俺と踊り出してしまふ。

「ちよ、ちよつと?!」

「安心したまえよ、私に合わせればいい」

俺は踊りなんて踊った事はないのに、勘弁しておくれよ。あ、ああ！ ほら見ろ、他の奴らが面白そうに笑って見てる!! ティアマトそのむかつく顔やめろ!!

「さあ、胸を張りたまえ、若き団長よ!」

突然踊り出した俺達に興が乗ってきたのか、音楽隊の方達の演奏も一段と激しく、早くなる。それに合わせてコーデリアさんの踊りのペースまでが上がる。一方俺は追いつくのに必死だ。

「団長！腰が引けてるぞ!!」

フェザー君うるさい、勝手がわからないんだ!!

「男ガリードサレテ情ケナイゾ!!」

うるさいティアマト、服没収するぞ!?

「て、って言うか!!コーデリアさん、酔ってます!？」

見ると照明の加減で今まで気がつかなかったが、コーデリアさんの頬が赤い。確かに、結構呑んでいた気がする。

「異な事を言うね。かように楽しき宴で酔わぬは、無礼と言うものだよ」

くっ！イケメン力が高すぎて納得してしまう。

いかん、もう完全に彼女のペースだ、巻き返せない！リードが上手すぎる……っ!! ああーっ!!だめだ、こ、心が乙女になるくっ!!いやあーっ!!

——その後、二人の踊りに盛り上がった団員達もまたそれぞれ思い思いに踊りだし、宴の熱狂は、朝まで続いた。

またこの時の踊りが元になり、団長は後に新たなジョブ「ダンサー」を確立させ、踊

りながら戦う【舞闘】をマスターするのであった。

■ 五 濡れ手で“泡”

結局大幅に出航が遅れに遅れ、俺達はやつと島を発つ。思った以上にややこしい事件だったので、宴会の後も更に依頼の報告やら、手続きに時間がかかった。

人探しの依頼のはずが、なんとも長い滞在になったものだ。失せ人探しからのゴブリン掃討オーバーキル、元リユミエール聖騎士団員の捕縛と結構疲れた。次は、適当に島巡りながらアウギユステ方面にでも行ってみたいと思う。

「積荷の確認は済んだぜ」

「ご苦労さん、全員乗ったな？」

フェザー君達と積荷に乗員の確認。後はもうセレストに声をかけて出航と言うタイミング。

「おーい、待つてくれたまえ！」

すると遠くから声を上げて駆け寄ってくる人影が三つ。

「よかった、間に合ったです！」

コーデリアさんと、ブリジールさん。そしてシエロカルテさんの三人だった。

「どうかされました？ 依頼の方は、昨日全部確認してますけど」

「いや、それとはまた別だ。また頼みたい事が出来てね」

「新たな依頼ですか？」

「依頼とも言えるが、まあ聞いてくれたまえ」

俺としては、コーデリアさんとブリジールさんが持つ大きめの荷物が気になる。なんか、この展開、嫌な予感がする。

「実は、昨日日本から知らせが入った。例の男達は、問題なく移送されているが、あの男の息がかかった仲間が、国外にまだいる可能性があるよね」

「はあ、それじゃあそいつらを捕まえるって事ですか？」

「ああいや、それも頼みたいが……単刀直入に言おう、私とブリジールを君達の旅に同行させてはくれないだろうか？」

「お願いしますです！」

ほら来た。それぞれの手荷物からなんとなく予想できたよ、この展開。

「いやいや、コーデリアさんの任務どうすんですか」

「勿論、それも引き続き行う。どうも貴君等の団にいれば、失せ人も直ぐに見つかると思えてね。それに、6体以上も屋晶獣がいる騎空団は、リユミエール聖国でも危険視されている……監視が必要だろうか？」

「ええ……」

マジ？俺ら危険人物？またまたご冗談を。

「知らないんですか？あの【ジータとゆかいな仲間たち団】に勝るとも劣らない、また別の方向で危険な、星晶戦隊を引き連れた『騎空団のヤベーター』として、団長さん達は有名ですよ？」

「うそやん」

「いや、真の事だ。既にリュミエール聖国だけでなく、各国でも貴君等の事は、マークさ
れているだろう」

「……うそやん」

「星晶獣6体以上引き連れておいて今更ですようぶぶ」

あはは……まるで、反論できねえ……。

「それに正式な指令でもあるのだよ、『件の騎空団に同行し、任務を続けよ』とね。どうも私の報告を聞いて、本国でも私と同じ考えに至ったようだ」

それ言つていいの？まあ、いいのか。きつと話しても問題無い事しか話してないな、この人。

「……それはいいとしても、じゃあブリジールさんは何故？」

「はい！自分はコーデリアちゃんの補佐として同行を命じられたです！」

胸を張って答えるブリジールさん。とても誇らしげですね。

「自分、これほどの任務を受けるのは、初めてです!!とことん頑張るです!!」

そして嬉しそうですね。友人の力に成れるのが嬉しくてたまらないのか。微笑ましみ溢れる。

「それに、団長さんの傍にいれば、自分もつと強くなれると思うです! 団長さんのように鍛えれば、コーデリアちゃんの役にも立って、シャルロット団長の様な騎士にも成れると思うです!!」

俺参考にしてない方がいいです。まず限界まで体作ってから、マグナ6体と戦っても余裕でるぐらいになって、最後に本気のプロバハとゾーイ（ジ・オーダー・グランデ）と戦う必要があります。

「……まあ、いいか。それじゃ、しばらくよろしくお願いします」

俺の応えに二人は、笑顔を浮かべてくれる。

「ありがとう。勿論、貴君達に迷惑はかけない。騎空団としての依頼も手伝おう」

「自分もとことんお手伝いするです! 自分、掃除洗濯も得意です! なんでもするです!!」

「期待させてもらいます……んで、シエロさん?」

「はい」

ある意味一番嫌な予感がする。

「実はですね、先日の宴会の料金なのですが」

「……はい」

「頂いた金額が、ちよ……と、足りないんですよ」

「はい？え、え？ちよちよ、俺の耳が悪くなったのかな？今なんて？え？

「すみません、もう一回お願いします」

「貸切宴会の支払いが足りないんですよ」

「うそやん」

「本当です」

「だ、ただだだって確かに宴会貸切の料金びつたりを払ってるはず」

「それにプラス、音楽隊の演奏21万ルピに食べ放題飲み放題 “対象外” の品分150万2345ルピ、計171万2345ルピが未払いのままなんですよ。お食事に関しては、かなりお高いお酒が多かったので、このお値段ですな。こちら今回の事で何かと忙しく手間取ってしまいました、確認が遅れてすみません」

「まって」

「まって。」

「まって」

「はい、未払い分は、借金に回しておきますな」

違う、そうじゃない。

「音楽隊の料金？」

「ええ〜」

「あれって……サービスじゃ……」

「違いますよ〜別料金ですよ〜結構な音楽隊の方達なのでちよつとお高いですが〜」

「だって……頼んでない……対象外の料理とか……聞いてない……」

「いえいえ〜お店の予約の際に頼まれてますよ〜？そちらでの説明もお願いしたはずですよ〜」

「全員っ!!集合っ!!」

俺の凄まじい怒声を受け、ワラワラと団員達が集合する。

「どうしたのかにや団長きゅん？」

「うん、聞くけどね……俺って店の予約確かフェザー君に頼んだよね？」

「ああ、けど予約しに行こうとしたら、強そうな奴を見かけて、語り合いたくなつたから、ちよつと居たラムレッダに任せませ〜」

「ラムレッダ？」

「にやぱっ!?だ、団長きゅん顔が怖いにや……」

話、続けてどうぞ？

「あ、あたしは、フェザーきゅんに頼まれたから、予約しによろず屋さんに行こうとして、
そ、そしてたら前から欲しかったお酒が売ってたから……誰かに買われないうちに買お
うと思つて、ちょうど通りかかったゾーイちゃんに予約お願いしたにや……」

「なるほど、それでゾーイ?」

「うん、そのままよろず屋に言つて予約をしてたけど、私は予約コースとかよくわからな
いからな、それでどれがいいか悩んでたらティアマトが通りかかつて」

もういいです。

「ティアマトの馬鹿はどこだっ!!」

「さつき千の風になると言つてどっか飛んで行つたぞ?」

ふ、ふふふ……いい度胸だあの野郎!!

「今宵の火属性ソードは、血に餓えておる……」

「まあまあ、落ち着きたまえ」

暗黒面に落ちそうになつた俺を、コーデリアさんの冷静な声が現実へと引き戻す。

「そうやけになつてはいけないよ。確かに彼女の所為で、酷い出費は出たようだが、貴君
程の男であれば、この程度直ぐに稼ぐ事ができるさ」

「で、でも今回の報酬より、多い……借金が増えるだけ……」

「無論彼女が相応の罰を受けるのは当然としても、貴君はその刃を仲間に向けてはいけ

ない。身内に刃を向けるのは、私の様な疑う任務を請け負う者の役目。貴君の刃は、この様な事に振るわれるべきではない。彼女には、また別の罰を与えればいいよ。それに、本国から謝礼が出る事は、聞いているだろう？僅かだが、それも今回の支払いに回すといい。それに、資金稼ぎは、私も協力するよ」

「あ、ああつ……」

流れるように肩を抱き寄せられ、そのまま耳元でささやくような声に、脳が致命傷を受ける。やばい、コーデリアさんに後光がさして見える。いや、それ以上の……これは、イケメン力が溢れているっ！

「コ、コーデリアさん……そうだ、俺貴女みたいな人仲間にしたかったんだよっ!!」
「そうかい？それは、光栄だね」

じよ、常識人!!圧倒的な常識人!!癒し等とは、また別の俺の求めた仲間!!常識人粹!!しかもブリジル（毒）さんまでついて来てくれている!!

「俺には、貴女達が必要だったんだああーっ!!」

「わわわっ!!」

「はっはっは、熱烈だね」

俺にとって精神的にも非常に頼もしい仲間が増えた事に、俺は感涙の涙を流し二人を思わず抱きしめた。今後の旅が、今まで以上に楽になると信じて。

なおティアマトは、見つけ出した後ボコボコにして縛り上げて、「(笑)」と書かれた紙を顔に張って腹に落ちにくいインクで落書きして、マストに一日吊るし上げておいた。刃は向けてない、拳を向けた。あとご飯抜きだもんね、バーカバーカ。

六 友のみぞ知る

■ コーデリアちゃん、自分は知ってるです。

貴女が、誰よりも乙女である事を。本当なら、自分以上に遊撃部での任務に向いていないはずなのに、あなたはその繊細な性格を押し殺して、騎士団の正義のために任務に当たっている事を。

■ コーデリアちゃん、自分はわかってるです。

あの宴会の席で飲んでたお酒は、そんなに強くなかったです。それにコーデリアちゃんは、そんなにお酒弱くないです。あの頬の朱色は、お酒の所為じゃないです。

■ コーデリアちゃん、自分は覚えてるです。

貴女は、誰よりも乙女で、甘酸っぱい恋を綴った詩集が好きで、そして好みの男性が、ちよつとアレな感じなのを。

だから、コーデリアちゃん。自分、いつでもとことん、貴女の味方です!!

ドツキの相方来る

■ 一 パンケーキを食おう

■ 今日も今日とて、エンゼラを飛ばし、空を移動する。

さて、次の目的地は、アウギユステとした。途中幾つかの島での依頼を消化しながらの移動となる。アウギユステは、一度行けたのだが依頼の関係で直ぐに発たねばならずリヴァイアサンも、あつちの自分に挨拶が出来なかつたと不満そうだったので、改めて向かう事にしたが、どうも星晶戦隊の里帰りの旅になりつつある気がする。まあ、ルー卜的にも問題ないからいいけどさ。

俺としては、道中の依頼で今回の出費を無くして少しでも借金を無くしたい。現在あの忌まわしき〔宴会予約事件〕の事もあわせて借金が300万を越えている。これはいかん。シエロさんに更に頭が上がらなくなる。コーデリアさん達を迎えた日の去り際、「ところで、パンデモニウムと言う遺跡があつてですねぇ〜」と不穏な事を言われた。借金返済の助けになると言う事だが、俺は何をやらされるのだろうか……。

いや、気に病んでも仕方ない。そうだ、シエロさんは、返済はいつでも良いと言って
るじゃないか。実に優しい。天使かな？

(まあ、前笑顔で「今のところは」って言ってたけど……)

け、けどいきなり何かを差押えられるとかがあるわけじゃない。精々無茶な依頼をや
らされる程度だ。未だ死を覚悟するような依頼とかあるけど、その程度で……。

「……ダメじゃん」

「どうした団長？」

あんまりな結論を出してしまい、通路で落ち込んでいたらフェザー君に心配されてし
まった。

「ちよつと、嫌な事考えちゃって……」

「そうか……なら拳で語り合おう!! スツキリするぜ!!」

君のそう言うところ羨ましいよ、俺。

「今そう言う気分じゃ無いなあ」

「そうか……じゃあまたB・ビーでも誘うとするかな」

「良いけど甲板壊すなよ? 前床壊したろ」

「ああ、今度は気をつけるよ!!」

そして去り行くフェザー君。元氣だねえ。

今の俺は、どちらかと言うと美味しい物を食べたい。金が無いから贅沢な物は買えない、ならば格安の材料を買って作ればいいのだ。

俺の口は、今甘味を求めている。確かパンケーキが作れるはずだ。ジャムも残ってるし、それでいこう。

「な、無いっ!?!無い無い無いッ!?!」

だが、何と言う事だ。緊急事態である。

「おや〜どうしたんだい、団長? そんな困った顔をして」

俺の困った顔に釣られて来たのか、フィラソピラがひよっこり表れる。

「と、とんでもねえ事に気がついた」

「ほお?」

「こ、小麦粉がねえ……」

「おやまあ」

俺とした事が、まさか補給物資のリストに小麦粉を入れるのを忘れていたとは……。食堂はもちろん、倉庫にも小麦粉一袋どころか一匙すらない。普通に旅の中で困るし、パンケーキ一枚も焼けやしないよこれじゃ。

「ベーキングパウダーと砂糖と水……やろうと思えば、餡菓子は作れるが……」

「作るのかい?」

「……いや、俺はパンケーキが食いたいッ!!」

あつたかで、ふわっふわで、スフレみたいで、バターとジャムを乗せたパンケーキが食いたいのだっ!

ここで材料の無駄遣いは、しない事にする。仕方ないので次の島で小麦粉を買おう。ついでに依頼をこなして、ホイップクリームを買えたらいいな。

「甘い物なら、私も楽しみだね〜」

俺は、紅茶を淹れて、それにジャム入れちやうもんね。

一 フェイトエピソード 風読み

■ 【風読みの相場師】と呼ばれる者が居る。

その耳は、あらゆる噂を聞き漏らす事は無く、些細な世間話から物価の変動を読み取る。

その口は、あらゆる情報を纏め上げ、その者にとって最も有益になる事を告げる。

その目は、あらゆる価値を見極め、自身と周りにとって最も良き物を選ぶ。

「取引で困ったら、風読みに聞け」

各国の大商人達は、口を揃えてそう言った。

風読みに読めぬ事は無い。生活に必要な物資を安全に購入するため、かの帝国関係者であろうと風読みに世話になった事は、少なくない。

風読みは、風を読む。

風の声に耳を澄まし、あらゆる場所へと赴いて、その慧眼を發揮するのだ。

「人多っ!?!小麦粉クソ高あぁっ!?!」

そして、風読みは、少年と出会う。

■ 二 お値段異常

待って待って?何これ、どういう事なのん?

「お、俺の目がおかしいのかな……小麦粉1kg2000ルピって見えるんだけど」

「残念だね団長、私にもそう見えているよ」

「私もだよ……これは、どうした事だろうね」

「しかもその1kg2000ルピの小麦に、奥様方が群がってるんだけど……」

「それも現実だよ、団長」

パンケーキを作りたいので、調度寄る予定であった島に立ち寄りついでに小麦粉を買いおうと思ったのだが、異常事態がおこる。

小麦粉が高い。高すぎる。

1kg2000ルピは、異常だ。幾らなんでもおかしい。1kgなら230か高くても6〜700ルピだ。それが四桁？しかももつと異常なのは、そのクソ高小麦粉に、数え切れないほどの主婦が群がり我先にと小麦を買っているのだ。買い物に同行したフィラソピラにコーディアさんも困惑している。ど、どどどうなってるの？

「なんや、あんたら小麦粉買いに来たんか？」

啞然としていると、後ろから声をかけられる。振り向けば、そこには頭から猫っぽい耳を生やして、ゴチャゴチャと色々背負った女性が居た。エルーンの人か、他の島でも見かけたが直接話すのは、初めてだな。

「あんたは？」

「うち？うちは、カルテイラや。なんや、あんた等がエライ困つとるように思えて声をかけたんや」

「まあ困つてますが……」

「うんうん、どうせ小麦のことやろ」

初対面だがグイグイ来るなこの人。だが何か事情を知っているようだ。やはりこの

価格には、わけがあるようだ。

「あんたらが驚くのも無理ないで。運があらへんかったなあ……小麦粉やけど、ごらんの有様や。今からじゃ多分買えへんわ」

「ふむ、しかしこの価格は、あまりにもおかしい。それでいて、この小麦粉を買う者達がいるとは、一体何があつたのかな？」

「それがな？この空域でも特に有名な穀倉地帯、しつとるやろ？」

「ああ、あそこか。ファータ・グランデ空域だけでなく、全ての空域でも屈指の穀倉地帯だが」

さすがコーデリアさん、良くご存知。

「リュミエール聖国でも、その小麦などを多く買うからね。しかし、そこで何かあつたのかい？」

「私も知っているよ。あそここの小麦は質も量もいいからね、お菓子を作るのに欠かせないのさ」

「せや、せやけどその農場で魔物が増えすぎた所為で収穫も出荷も出きんくなつて……普通やつたら増えすぎる前に雇った傭兵か騎空団なりに退治してもらうんやろうけど……今年、魔物の数がえらい増えてしもてな、追っ払うにも退治するにもちくちくとも追いつかんのやつて」

更に話を聞くとその小麦は、フアータ・グランデ空域の人間が消費する小麦の殆どを占めている。たった一つの島とは言え、そこかから出荷が減っただけでかなりの打撃であった。

そこで誰かが、まことしやかに言つたと言う、「小麦粉が無くなるかも」と。些細な冗談であつたかも知れないが、結局みんなして、小麦粉始め小麦製品が無くなる前にわれ先に小麦製品買い占めてしまい、結果この有様。そりゃ小麦産業への打撃は、確かに大きいがここまでの値段高騰は、そうそうするものではない。だが有名穀倉地帯での問題が深刻である事は、紛れも無い事実であつたために民衆は、その流言に踊らされる結果になつた。

カルテイラさんは、その事情をかなり知つていよう、他の店をめぐりながら今回の騒動について教えてもらう。

「特にこの島は、その噂の影響が大きくてなあ……見てみ、なんぼ値段上げても売れるよつて、何処もかしこもけつたいな値段であるだけ小麦粉売つとるわ。便乗値上げなんてツマラン事するやつちゃ」

めぐる店では、小麦粉だけでなく小麦製品、ケーキやクッキーにその他諸々の品までもが高騰していた。これじゃパンケーキを作らず、買って食う事もできないなあ。

「だが小麦粉の生産自体は、極端に下がっては無いのだろう？」

「せやねん、實際島の責任者は、その事ちゃんど説明しとる。せやけどみーんな噂の方が怖いみたいやね。誰もそんなお上の言葉に耳かさんわ」

「それは困ったなあ……」

この様子では、他の島に行っても似た事がおきていそうだ。

「そう、うちもこまっとる。このままじゃ小麦が適正の価値で売られへん。こんなゆるせへんわ……」

「貴君も商いを？」

「まあな、聞いた事無い？風読みの相場師とはうちのことや！」

「風読み……なんと、貴君がそうであつたか!!」

カルテイラさんの肩書きを聞いて、コーデリアさんが驚いている。風読み、なんかカッコいいぞ。

「フィラソピラ知ってる？」

「うくん、それこそ風の噂で……かなりの慧眼を持つ相場師と聞いたことがあるね」

「その通りだ。どこの国であろうと、あらゆる分野で先を読む力とは、重宝されるものだ。特に金銭のからむ市場や取引においては、その力は重要だ。リュミエール聖国でも、彼女の力を借りた事は、少なくないだろう」

そ、そんなに凄い人だったのか……不思議な方言の、ただのエルーンじゃなかったの

か。

「ああ、なーんか見た事ある甲冑や思ったら、あんたリュミエール聖国の騎士様かいな。今でもたま〴〵抱えになりますか〴〵」って誘いがうつとうしうてかなわんわ、兄ちゃんやめさせーな」

「リュミエール聖国からの誘いを〴〵うつとうしい〴〵で済ますのは、貴君ぐらいだろう。それと、私は〴〵見えて女性でね」

「なんやそやつたんか？そらすまんかったなあ」

「慣れているからね。かまわないよ」

「うーん？そーいや、リュミエール聖騎士団の騎士が仲間になった騎空団言うたら……あああっ!？」

突然俺とコーデリアさん達をじつと見て何か思い至ったのか、カルテイラさんが声を上げた。

「もしかしてあんた、あの星晶戦隊マグロチップスなんたらとか言う、頭おかしい名前の騎空団の団長さんやろっ!!」

「マグナシックスです」

頭おかしい名前なのは、否定しませんが。

「そーそー、マイタソックス」

「マグナシックスです」

「まあまあ、細かい事気にしたらあかん」

ソックスを巻いてどうする。

「けど、やっぱりあんたらやったんか！あんたらの事は、よーシエロはんから聞いたとるでっー！」

「うん？シエロさんと知り合いなんすか？」

「知り合いも何も、うちら古い付き合いやで。今でも商売仲間であり商売敵！しつかしあのシエロはんが「あの人はですね〜地味な印象です〜」「地味な顔ですね〜」しか言わんから、ほんまか思うたけど、ほんま地味やなー自分」

「やかましいわっ!!」

物まねも似てねえし、それ本当に言ってたのかシエロさん!?

「まあそのおかげであの騎空団って今わかったわけやけどな」

地味な顔で判断しないで。

「落ち込む事は無い我らの団長よ。貴君の魅力が解る者は、必ずいるのだから」

ほんと、コーデリアさんは、すぐそう言うこと言えちやうんだからなく。イケメンと
言う概念が凝縮して物理的な形を得たのがこの人なんじゃないだろうか。

「けど君の困った顔も可愛くて私は好きだよ？」

それはコメントし辛いよ、フィラソピラ。

「なな、ところであんたら小麦粉欲しいんやろ」

「まあ、そりやねえ……」

「ならちよつと、うちの頼み聞いてえな」

「……それって依頼って事でいいっすか?」

「せや、シエロはんの言うとおりの騎空団ならきつとこの事態何とかできるやろ」

「つまり、依頼をやれば、小麦粉買えるって事ですか?」

「結果的にそうなる事は間違いなしや!」

うーむ、面倒事はイヤだが依頼とあれば受けぬわけにはいかん。それに小麦粉は、今後のためにも、価格を適正に戻さねば困る。

「かまわないですかね?」

「無論だとも、我々の手で人々が助かると言うのなら、断る理由はない、もとより私は、ここではただの一団員、団長の意志に従うよ」

「私もかまわないよ。君のパンケーキも食べたしね」

他の奴らも態々戻ってまで聞く事も無いか。基本的に暴れられればいい奴や、物でつれるような奴らだし。

「了解つす。カルテイラさんの依頼、受けましょう」

「ほんまつ?! いやーおおきに!!」

「それで、俺達は何をすればいいんですか?」

「うんうん、ようはこの事態は、あの農場からの出荷が無いから起きた騒動やから、原因を断てばおのずと価格も戻って騒動も治まるわけや」

「それはつまり……」

「魔物退治や! まず農場へ行くで! うちも同行するさかい、あんたらの船で連れてつてっ!」

本当に押しが強いな。

しかし確かに原因を治める。これが手っ取り早いな。魔物が増えていくという事だから、やる事は単純、まさに異常な戦力を保有する我が騎空団向きの依頼だな。

そうして、俺達はカルティラさんを一時的に向かえて、一路例の農場へと向かいエンゼラを飛ばしたのであった。

■ ■ ■ 三 麦畑戦線異常事態

「でっけええーっ!」

エンゼラから見えた黄金色の小麦畑。なんヘクタールあるのか想像も付かないほど

の広さがあり、上空からでさえその全貌が見えない。

「どや？ここから空域で使われる殆どの穀物が出荷されるっちゅーのも納得やろ？」

「ほんとだわ、こりや凄いわ」

「ああ、すごいな団長、人はここまでも畑を広げられるのだな」

「麦といえばビールだにやあ」

純粋な感嘆とストレートな欲望が出てきたりと、甲板から畑を眺める団員からの感想は様々だ。しかし……。

「けど一部畑が荒れてるです……」

ブリジールさんが指差す方向、その畑は他に比べると明らかに荒れている。遠目からでも分るほどに、麦が飛び散り地面の色が見えるが、収穫した跡と言う訳ではないのは、明白である。

「あっちゃく……やつぱ被害で始めよつた。こら、そうとう増えとるな魔物。呑気しとる時間も多くないで」

やはり魔物であった。ゆるせぬ、俺のパンケーキへの欲求は既に限界を向かえそうだ。

「団長、船停めるね……」

「頼むせレスト。シュヴァリエ、島入ったら俺とコーデリアさんとカルテイラさんで責

任者の人に会いに行くから、しばらくここを頼むわ」

「承った。ところで」

「この程度の働きのケツは蹴らん」

「そんなっ!!」

「ご褒美がケツを蹴ると言う事に俺は、常々辟易しているのだがこれをしないとこいつ言う事聞かない時あるからなあ。しかも、手加減せず蔑んだ目線を加える必要がある。ほんと、どうしてこうなった。一度理由聞いたら「シユヴアリエ本体の方の主が、少し歪んだ愛情を持っていた影響だと思う」、だとき。『なんじゃそりゃ』、だ。

この広大な畑は、驚くべき事に一つの村で管理している。村そのものは、普通の村と変わらぬ規模だが、古くから農業が盛んであったためにこの規模の畑を維持し続ける事が出来ている。それでも魔物も出てくるので、村人だけでなく、村で雇った騎空団や傭兵達の力を借りて例年魔物による被害を防いでいた。

「それが全く、今年は魔物の規模が違いすぎるのです……」

と、俺の前で困り果てているのが村の村長、同時に農場の責任者である。

「何よりも困ったのが、虫の魔物です……」

「虫、ですか？」

「はい……今年がそう言う時期なのかわかりませんが、虫の魔物が多い、特に芋虫型が多

く食害が酷いのです」

「じゃあ、空から見た荒れた畑は」

「正しくそいつらの仕業です」

虫型の魔物は、結構な種類がいるが芋虫と言うと「クロウラー」と言う緑の魔物を思
い出す。だがあいつらは、動きが遅いので対処できそうと思っただが……。

「情けない話ですが、畑が広すぎて……自分達ですら対処が追いつかないのです……」

村長は、恥じるように話すが、仕方ない事だ。今までは、少数の魔物が稀に来る程度
だったから手が回ったが、今回は別であった。完全に広大な畑が裏目で出た。

畑を護るための増援を依頼しようとした時、丁度村でもひいきにしている商人カルテ
イラから「ええ騎空団みつけたで！」と知らせを受けたのである。つまり俺たちだ。

「と言うわけで！今回の仕事は、麦畑防衛と同時に虫型魔物の退治である!!」

「気合入ってるなあ団長！」

「パンケーキ食いたいんだよ!!」

高級なケーキと同じ値段する小麦粉買ってまで作る気は無い。さっさと適正価格に
戻させてもらおう。

「まず今日は、魔物からの畑防衛だ」

へ一気に殲滅しないのか？

「そうしたいけどね。まずは防衛、ここ最近はこの時間あたりに麦やら農作物を食い荒らしに現れるとき」

麦畑防衛組には、星晶戦隊を要所へと配置。一体のマグナに既にこの村で雇われ畑を護っていた騎空団や傭兵を編成した混合部隊を配置する。

「防衛終わったら、明日朝一で魔物の巣を探して退治する感じ」

「私の方から補足させてもらうが、畑が無事である事が第一になる。特に星晶獣の皆は、うかつに広範囲攻撃を行わないようにしてほしい。特にコロツサスは、前の様にうっかりプロミネンス・リアクターを放つと言うのは、絶対に無いようにしてほしい」

「*・ω・」 ヅ リヨウカイ」

ああ、コーデリアさんいると指示出し楽だなあ……。

「ちなみにうちは、戦力として期待せんといてな」

「あー……それは、なんとなくわかってたんでいいです」

「話が早くて助かるわ。弱い魔物程度ならシバけるけど、あんだけの数やと、うち足手まといやさかい。それじゃ、キバってやー！」

曰く、武器はハリセン。思い出すのは、ばあさんのくれた武器。ああ、あんだったんか、あの武器の縁って……。

とりあえず、とてもカルティラさんを今回の戦いに参加はさせられない。そもそも依

頼主の一人なので、当然である。ともかく、今日は防衛戦。他の騎空団との連携と言うのも初めてだし、気合入れて行こうね。

「キモイ、キモイキモイイイイーッ!!?」

とか気合入れたとたんこれだよ。

やばい、想定以上だ。とんでもねえぞこれ。地面が魔物で見えねえ。魔物が七分に、地面が三分、しかも全部虫型でキモ過ぎる！いくら鈍足の魔物でも、うっかりしていると直ぐに抜かれるような数だ。

「こ、これが他の方向からも来てんのかよっ!?!」

「兄ちゃん、こんなんで参ってられないぜ？これがしばらく続くからよ、最初っからとばし過ぎるなよ！」

既にここで長い事防衛にしていた騎空士の一人が教えてくれるが、この人達も大概凄いな。よくこんな数の魔物相手に畑をほんの一部食われた程度で済ませたものだ。

「M o g a a a a !!」

「ぎゃああつ!!キンモオオオツ!?!」

■ 呑気してる場合でもなく、俺は無数の魔物の群れを相手せざるを得ないのであった。

五 虫退治

「可及的速やかに全部潰すぞ」

精神的にも参つた俺の言葉に団員の誰もが頷いた。

「もう迫り来る虫の相手は嫌だにやあ……」

「うう……返り血、と言うか体液でベタベタです、気持ち悪いです……」

主に女性陣の精神ダメージが大きいい。あんな芋虫の群れ誰だつて嫌だ。

「ユグドラシルの張つた壁で一時的に侵入を防げたが、これが続くようでは何時破られるかわからんぞ主殿。あいつら壁も登れるし」

「……………」

ユグドラシルが申し訳なきさそうにしているが、彼女は悪くない。あんまり派手に地面掘り起こしたりしたら、焔にまで影響が出てしまう。焔を護れる壁を生み出せただけ手柄だ。

「今日は諦めて森に戻つた魔物は、フェザー君が斥候してくれて位置を把握出来た。休んだら予定したより早く攻める」

焔が無ければ遠慮もいらぬ。とにかく巢なり見つけ出して奴らをぶつ潰す。

数時間の仮眠の後。俺達は、まだ日が昇らぬうちにフェザー君の見つけ出した魔物の

集団生息地へと向かった。島の森にあるある場所で、やつらはいた。

「やつぱキモすぎる」

凄まじい数の芋虫型の魔物が身を寄せ合って眠りについている。それでも稀に体を動かすので、ボコボコした魔物が集まり出来上がった魔物絨毯が波打つ様はかなり気持ち悪い。

「ユグドラシルが地面押し上げて、全部押しつぶしてもらおうって言うのは……」

「~~~~~……!」

「だよね」

ちらりとユグドラシル見たら、イヤイヤと顔を振る。カワイイ。まあ、無理に頼み込めばやってくれそうだが、人間の感覚的には、50匹近くの芋虫を一気に両手で潰せつて感じだろう。彼女、ある程度大地と感覚は、共有してるし。そら嫌だわ。

「と言つて、ちまちまやる数でもないからな。仕方ない、シユヴァリエ。畑程遠慮する必要ないからあそこ全部に光の剣掃射」

「私もいやなんだがなあ……」

「つべこべ言わねえで、はよやれや雌豚」

「アヒン……ッ!くっ!この様な安い言葉攻めで……やるに決まってるだろっ!!」
どっちや。

ドM気質のシュヴァリエを見て、コーデリアさんとブリジールさんは、すごく複雑な顔してる。同じ騎士として、思う所あるのだろうか。大丈夫です。こんなやつは、こいつだけだとわかってますから。

「しかし、あれが彼の求める騎士像だと言うのなら……私は……っ!!」

「早まらないでコーデリアちゃんっ!!? 団長さんも嫌そうにしてたですっ!!」

なんか二人が喋ってるけど、よく聞こえない。

とにかくはよ解決しよう。

「あ、まて団長」

「どしたのゾーイ」

「あれを見てくれ」

ゾーイが指さす方向、目を凝らして見てみると、一匹芋虫型ではない虫の魔物がいた。蛾の姿だろうか、その魔物が他の魔物と違って今もなお眠らずに何かしている。双眼鏡を取り出しよく観察すると、なんとその魔物は、モリモリ元気に黙々と木々に卵を植え付けていた。

「もしかせんでもあれ元凶?」

「そのようだよ。私の均衡センサーにすごく反応する」

「え、何そのセンサー?」

「世のバランスが崩れそうになる原因に反応するセンサーだ。あれは結構強い反応がするぞ」

ゾーイの頭をみると、鳥の尾羽みたいなアホ毛がピコンと動いている。それセンサーだったんだね。聞かれなかったから言っていない？そう……じゃあ、仕方ないね。けどかわいいから今度じっくり見せて。

しかしあの蛾型は、どうも怪しいのでまとめて消し炭にせず生体を手に入れた方がよさそうだ。

「生け捕るのかにゃ？」

「いや、無理っす」

ただし見たところ、一般的な蛾型の魔物より二倍は大きい。その点も怪しいなあ。魔物も多すぎて生け捕る余裕がないので、倒して回収するしかない。あいっだけ避けて範囲攻撃しても、その隙に逃げられるだろうし。

「麻醉でもあれば別だけどね」

「麻醉？ 麻醉弾ならあるで？」

「マジか、用意いいじゃんうわああっ!？」

「ドアホツ?! 声大きいっ!」

「いやいやいや、なんでいるのカルテイラさんっ!」

「普通について来たで？」

「そういやいたな、自然過ぎてオイラ達も気が付かなかつたぜ」

「なーんかありそうな気がしてな、虫の知らせつちゆうやつ？まあ正解やったな。丁度麻酔弾あるで」

「また都合のいい……なんであるんすか」

「商人つてのは、都合がいいようにするのが仕事や。魔物用の麻酔買う客もおるんやつて。あのタイプの魔物にも効く麻酔やで。それで、つかう？」

「あー……銃が無いんだけど」

「銃かーそっちは流石にないな」

麻酔弾あるのもおかしい気がするけどね。

「銃でいいなら用意できるぜ相棒？」

今度は、B・ビーがなんか言い出してすごい嫌な予感がする。

「……一応聞くけど、どうやって？」

「そりやおめえ、こうやってウオオオオオッ!!」

「ぎゃああつ!!」

突如B・ビーが体をくねらせたかと思うと、その姿をまったく別の物へと変貌させた。

デジャヴウー!

「B・ビイトランスフォームッ！B・ビィムガン！」

何をどうしたのか、骨格とかそう言うのを全て無視した変形なのか変身なのか、ともかくB・ビィが自らの顔を発射口にして体を拳銃へと変えた。見た感じ、ただB・ビィが気をつけて、腰曲げただけなのに銃に見えてくるもんだから、余計にわけがわからん。コーディネリアさん達比較的最近のメンバーは、マジで驚いてる。

「さあ、オイラをつかえ！」

そんな無駄に澄んだ眼差しを向けられても。

「……銃弾込めれるの？」

「口にくわえればOKだぜ！」

「狙撃に向いてない形状なんだけど……」

「ライフルモード！」

「ほげええっ!!？」

今度は首が伸びて形状“だけ”はスナイパーライフルっぽくなった。ほんとなんなんだ、こいつ。

「さあ、麻酔弾をよこしな！」

「団長、B・ビィの熱い魂に応えてやってくれ！」

フェザー君、よく組手してるからか君ってB・ビィと仲いいよね。

「えっと、どうするん？」

「……やりませう。弾くだしやい」

「お、おう」

あまりにも汎用性の高いかつ気持ち悪い変身に度肝を抜かれつつ、疲れた表情の俺にどこか同情を含んだ視線を向けるカルテイラさん。同情はいらぬ、だがやさしくしてー。

「ぱくっ！」

B・ビイの口、もとい銃口に麻醉弾を装填する。そのままB・ビイムガンを構える。銃の心得は、既にばあさんから叩き込まれたため、使用する銃によるが遮蔽物が無く目標が見えるなら基本島の端から端でもいける。やった事無いしそんな状況ありえないが。

「早く終わらせるか……」

B・ビイムガンをかまえる。生暖かいのに、しっかりと感触は銃だ。なにこれ？スコープ無いのに、なんで見えるの？トリガー無いけど、大丈夫？え、星晶パワーで全部OK？便利だねその言葉。

ツツコムとキリがないので、無駄に軽く使いやすいB・ビイムガンの引き金をさっさと引く。

「狙い撃つぜー！」

オメーじやねーよ、俺がだよ。

六 商人魂

総括。虫は無視したい。なんて、言いたくなるような依頼であった。

あの後、問題なく放たれた麻酔弾によって無力化した魔物。その後は、俺達に気がついた他の魔物が迫り来る前に、手はず通りにシユヴァリエの光の剣で全て消し炭にした。撃ち漏らしもいたが、たいした数じゃないので俺達で殲滅。眠っている魔物も回収した。

「うちの知り合いの客で、こう言うの好きな研究者おるから、そこに魔物もってつてもらうわ」

と、捕獲した異常に成長した魔物は、カルテイラさんの勧めで彼女の知り合いの研究所に引き渡された。ただし俺達で調べた所、やはり自然に起きた変異ではないと、非自然な事に敏感な星晶戦隊達によって結論付けられる。

「明らかに自然の摂理から逸脱している。繁殖期でも無いのに、卵を産んだり、仮に繁殖期だとしても、この産卵ペースはおかしい。これじゃ、均衡が崩れる」

「……………」

ゾーイの見解、さらにユグドラシルが言うには、魔物の行動には「繁殖」と言う思考が消えていた。ただ只管に増えると言う事のみを考えており、自らの体がおかしくなるような勢いで魔物を増やし続け、同時に生まれた子供も異常な成長スピードであった。繁殖と言うよりも、量産である。明らかに人の手が加えられている。

まあ、あとは案の定と言うか、魔物が寢床にしてた森のある場所から、帝国の物と思われる機材が残っていた。その事について村長に聞くと、「そういえば、たまに帝国の船が来ていた」「人数もそんなにいなかったから、普通に客だと思った」との事。多分人数分けて、森に勝手に入ったんだろうなあ。

「また帝国か」

何度目だろ、この台詞。

目的もなんとなく察する事は出来る。どうせ、大量に増やした魔物を軍事利用とかでしようよ。んもー、しょーも無い事をするやつらめ。俺も星晶戦隊も、激おこですよ。もし帝国兵に会ったら、ちよつとお話しようか？大丈夫、俺と星晶戦隊で取り囲んでお話しするだけ、乱暴シナイ。団長、ウソツカナイ。

「なんにしても、念願の小麦粉を手に入れたぞ!!」

何かと疲れる依頼であつたが、俺としては、カルテイラさんからの報酬に、村からの報酬としてルピと多量の小麦粉をいただけたので気持ちちは潤っている。

さあ、やっとパンケーキが作れる。しかし焦ってはいけない、一度また別の島によって物資補給と、ホイップクリームの材料を買う。報酬がちよつと多いので、少し贅沢するぞ。けど、アンゼリカ（フキの蜜煮）やチェリーのシロップ漬は、贅沢すぎるな。駄目です、駄目駄目。

「せやったら、うちから買うてつてや。良いの揃えるで?」

「まだ居たんすか、カルティラさん」

シエロさんといい、商人つて神出鬼没なの?

「そう冷たい事言わんと。ところで、うち次の予定でアウギユステ行く予定やねん」

「はあ、そうですか」

「けど今回の騒動の所為で、しばらく島からの定期便出られへんのや。まずは、滞った小麦とかの出荷に船集中して使うてな」

「ほーん」

「いやー親切な騎空団でも居て、ついでに乗せてつてくれんかなー? 偶然アウギユステにも寄る騎空団とかおらんかなー? こーんなかわいいお嬢さんが困ってるんやけどなー?」

露骨う!!

かわいいけどさ、かわいいけどさ! 耳とかモフらせて欲しいけどさ!

「……わー偶然だなー俺達、アウギユステに行くけどカルティラさん乗ってくー?」
「えー、ほんま? ええのん?」

「あ、別に無理にとは」

「そいじやあアウギユステまで世話になるで!!」

露骨ううっ!!

あんた絶対知ってただろ、俺達がアウギユステ行く事!!

「まあまあ、今回の事でうちもほんま感謝しとる。今度の騒動で、混乱に乗っかって阿漕な商売したやから見たやろ?」

ああ、いたね法外な値段つけて売ってた連中。

「ああ言うの、うちほんま許せんわ! 商人なら、たとえ儲け第一でも護るべきもんあるつちゆうねん! 客の足元見るような商売なんて、邪道や邪道!」

えらい熱の入りようである。思う所あるのだろうか。しかしあまり突っ込んで聞く事も出来ないなあ。

「だからありがとうな。この島から、小麦の出荷された事が広まれば、直ぐに今回の騒動も治まる。正しい値段で、正しい売り買いを商人と客が出来る。「嫌なら買うな」、そんな商人優位の商いやと、何時か客に愛想つかされるだけや。そうなったら、商人自体が必要とされなくなってしまう。互いに平等、そこから商人と客との値段の競り合いがあつ

て本当の商売っちゅうもんや」

ふ、深い。唐突に説かれるカルテイラ商売訓とでも言うのか、彼女の商人としての心意気が俺にまで伝わるようだ。

「せやから、欲しいもんあつたら言うてや！なんでも揃えたるで！シエロはんのところにまけたるから！」

……けど実際は、ただ商魂逞しいだけなんじゃないだろうか？いや、それもあるとう事か。思わずそう思ったのであつた。

■ ■
七 焼けっぱちパンケーキ

結局アウギユステまで同行を決めたカルテイラさん。途中他の島にも寄る事も了承済みである。まあ色々な商売についての話を聞く事も出来るので、結構楽しい旅になる。

それよりも俺としては、ついにパンケーキを作るための材料を完璧にそろえた。カルテイラさんによってお手ごろ価格で、トッピングも買い揃えれた。いざパンケーキ!! 「ふわっふわ、じゃーじゃーいっ!!」

可能な限りふわふわに仕上げたパンケーキは、俺が待ち望んでいたものだった。まる

で重力を感じさせず、皿に乗せるとふわりとはねて、分厚い生地でも絹のように滑らかに噛み切れるこの出来栄え。我ながら上出来である。

「貴君には、この様な特技まであったのか……」

「凄いなれた手つきだったです」

コーデリアアさん達が驚いているが、そんなに意外だろうか？レパートリー多いよ俺？「あたし達も最初団長きゅんが料理するつてきいて、ちよつと信じられなかったにやあ。精々男の料理とかそんなのかと思つたにや」

「普段料理作るのコロツサス達だしな」

フェザー君達も団員になつて暫くしてから、俺の手料理を見たがやつぱり意外そうだったな。

「ダンチヨウニ（・ω・） オシエテモラツタンダヨ」

「わ、私達で料理できるよになつたら……あんまり、作らなくなつたからね……」

他人の料理が食いたいんだよ。今日は俺も作りたかつたから作つたけど。コロツサス達は、まだ上手くパンケーキ生地ふわふわにできないし。

「二人暮らしだったのと、面倒見てた幼馴染に飯食わせなきやならなかつたから、基本俺が作つてやつてたらこうなつてた」

「それってあの『ジータ団』のジータ？」

そんな略し方あんのか。悪の組織みたいだ。

「そう、そいつ」

あいつは、飯作れるようになって俺の飯が良いとか言って、自炊全くせんかったからなあ。普通に料理上手いのに。嬉しいといえれば嬉しいが、それでもたまには、他人の作った飯が食いたいと思うのは、しょうがない。

思えばあいつが旅立つ時、「お兄ちゃんのクッキー食べたい」とか言うから、大急ぎで焼いたなあ。旅に持っていったが、上手く焼けていたろうか。

「フワッフワ、ジャーイー!!」

「はむっふふあっふふあ、ふあーい」

「ゾーイ、飲み込んでから喋りなさい」

「はむん」

ただ食うだけなら元気なティアマト。リスの頬袋みたいな頬つぺたのゾーイ。どっちがかわいい?言うまでもないね。

「やーわるいなあ、うちもご馳走になってしもて」

あと、すっかり我々の仲間の様な様子でパンケーキを頬張るカルテイラさん。

「今回色々お世話になったので、そのお礼と言う感じで」

「そかそか、いやしかしあんた滅法強いし、そのうえ料理もできるなんて、結構な優良物

件やな。さぞかしモテるんとちがう？」

「え、そそそう思いますか？」

ベツタベタな感じで焦ってしまった。

「キモイゾ」

「うるせい」

パンケーキ没収すつぞこら。

「あ、いやけど顔が地味やからなく面食いには、うけ悪いな」

「やかましいわっ！」

結局それかい！わかってたよ、どうせそんなオチだつて、この野郎！！

「ままそう怒らんと。地味やけど愛嬌はあると思うで？」

「慰めにもならねえ」

「それにこうやって、ぱぱつと反応するのもええところやなあ。打てば響くつて感じがええ。シエロはんが気に入るわけや」

そんな部分を気に入られたのか俺は。もつところ、他にさ、あるじゃん……じゃん。

「シエロはんが鼻屑にする騎空団は、他に無いわけやないけど、あんただけやで？シエロはんが、滅多にやらん借金作らせてまで首にわかを……あ」

「へい、今最後なんか凄く不穏な」

「い、今の聞かんかった事にしてー！」

「あ、またんかこのっ!？」

俺の借金つてそんな理由なの!! 待てこらこの野郎!!

「か、堪忍してえーっ!!」

俺の台詞だよ畜生めっ!! 借金なんて嫌いだいっ!!

大笑いハンター

一 ポンコツライフル

突然であるが、騎空団の騎空艇である以上エンゼラにも武器庫がある。しまつてあるのは、殆どが俺の物で、基本団員の皆は、自分で武器を管理してる。星晶戦隊は、そもそも武器要らずだし、シユヴァリエとゾーイは、自身の意思で武器を出したりしまつたり出来るので関係ない。

なんで武器庫の整理は、基本的に俺の役目となる。俺のものしかないからね。ザンクティンゼルの忌まわしき修行時代から使う平凡な武器に、ちよいい武器。そしてばあさんがくれた箱に入っていた「ハリセン」から「クラウ・ソラス（レプリカ）」の様な、差がある武器達。依頼によって使う武器は、変えているが基本は、剣とかを使う事が多い。物理で解決、手っ取り早いです。

そんな武器の中で、俺がその扱いに困っている物がある。「ハンターライフル」と言うライフル銃である。他の「ハリセン」だとか「割れた酒瓶」とかも扱いに困るが、この

際横において、問題はこのハンターライフル。

魔導の力が込められた結晶が埋め込まれた物で、その効果によるのか非常に視力がかかる。撃つ弾丸も闇属性でその点は悪くない。だがどうもこのライフル、肝心なところでポンコツであった。

何度か試し撃ちをしたのだが、6割近くの確率でまともに弾丸が飛ばない。一度撃つたら、まず弾道がズレた。自身のミスと思い、もう一度撃つたがやはりズレてしまい、跳弾がおきて大変だった。調べると、前使っていた人物が独自の調整を加えたのか、ありえない調整が施されていた。まるで「最初から、上手く発射されない」事を前提にした調整であった。その癖を直してからもう一度撃つと、今度は発射前に暴発して目の前が真っ暗になった。もう一度調べると、前の調整を直したためかいつの間にか砲身にゆがみが出てその所為で発射されずに砲身内で爆発したようだ。それも直して再度撃つと、なぜか発射されず「パスッ」と乾いた音だけがあった。こちら辺でもう謎のポンコツ銃であるが、再度弾丸とライフル両方を点検して撃つてみると、銃口から色とりどりのパーティーグッズの旗が飛び出してきた。

もうわけがわからない。何処に入ってたの？ 何度も点検したのに、こんなの見当たらない。結局最初の仕様に戻るからたちが悪い。どうなってるの？

そのため、この銃は魔導結晶の効果は高いものの、旅立って直ぐに武器庫の主と化したのである。

果たして、この武器のもたらす縁と出会いとは何であろうか。俺はとても嫌な予感がしたのであった。

■ 二 食堂の一時

あの「小麦騒動」を解決して、俺達はアウギユステへと向かいながら、小さな依頼も消化しつつの移動を続けていた。溜まった依頼は、シエロさんに頼まれたものとしては、比較的易しいものがばかりで、それに安心しながらも後が怖い俺がいた。

「尻に引かれた亭主みたいやな、あんた」

依頼報告書を纏めつつ、まれに落ち込んだりしていると一時旅に同行しているカルテイラさんに指摘されてしまった。

「誰が亭主じゃない」

「亭主じゃないなら、首輪つけられた犬や」

「ワンワンワンツ!!」

「わ、犬が吼えたっ!!」

まったく、失礼な人だ。と言うか、もう首輪について隠そうともしない。開き直ったな、こいつめー。

「見ているがいい、俺は見事この借金と言う首輪を外し、この大空の旅をより自由なものにするんだ」

「ほっほっ？ できるんか？ あんたに」

「なにおうっ！」

「聞いた話やと、あんたの借金つて事のなりゆきや、自分以外の所為で増えたやつばっかやろ？」

あ、いや止めて言わないで。

「こー言うのつてな、いっくら自分が気をつけとつても、何故か減らんのや。借金からあんたに近づく！ 増える一方、借金人生！」

「うわああああーっ！！」

くそ、それについては自分でも、ちよつと考えて直ぐ捨てた考えなのに！！

「まああんたが借金返せたら、それはそれでええこつちや」

それはそれでつてなんだよ、それでいいんだよ！

「もし返す見込み無かつたらうちに相談してや、借金チャラにするの協力したるから」
あ、一瞬心揺らいだ。

「優秀な商人に必要な以上の借り作ると怖いんで遠慮します」

「あら残念」

少なくとも今は、シエロさん以外の商人にでかい借りは作らない。前回の騒動は、カルテイラさんのおかげで小麦粉が手に入ったが、騒動自体は俺が解決したので貸し借りなしです。たぶん。

まあ今の話もカルテイラさんの冗談であろう。ずっとニヤニヤ笑ってたし。

「団長、島がみえたよ」

キュルキュル回転音が聞こえたと思ったら、やはりフィラソピラか。相変わらず謎の空飛ぶコマ〔クリュプトン〕に乗って移動するフィラソピラ。船内でもそれで移動するから、最初コマの回転音に慣れるまで時間かかったよ。

たまたま歩いてるのを見ても、「歩行をする事で、より飛行についての考えを」云々。考えるの好きね、ほんと。

「報告どうも」

「君は何時も書類整理を食堂でやるね」

「俺雑音ある方が仕事進むタイプなの」

しかもここだと、誰かに紅茶とか淹れて貰える時がある。最近ではコーデリアさんや、ブリジールさんがよく紅茶に菓子も添えてくれるのだ。天国かな？まあ雑音も騒音

になれば無理だ。具体的にフェザー君やティアマトとか来ると駄目、拳での語り合いを強要され、御小遣をせびられる。地獄かな？

それにもう島に着く。次の依頼は、なんかとりあえず島の村長に聞いてくれとの事。面倒な戦いは、無いはずだとシエロさんは言っていたので、直ぐにでも済ませよう。

■ 三 怪奇、樹海に響く笑い声!!

島で依頼のあった村へ行き、その村長に聞いた依頼は、何時もと変わらず奇妙なものだった。近くの山の中から、奇妙な声がすると言う。しかも女性と思われる笑い声。それが数日前から聞こえてくるので、怖くてたまらないから調べてくれと言う内容。

主に笑い声の確認、そしてもしその声の主が魔物か危険人物であればそれを倒すと言う可能性を踏まえた依頼になる。

「はい、では今回の選抜メンバー発表します」

今回の依頼選抜メンバー。普通に安定した編成で行く事にしたので、過剰戦力の星晶戦隊は、お留守番。俺とリュミエール聖騎士団コンビと、戦闘があつた場合を考えてフェザー君をくわえた四人編成。B・ビイもついてくるが、こいつは基本的にマスコックト気取りなので大規模戦闘や強大な敵が相手じゃない限り普段戦力外である。

「その声が聞こえるのは、夜に多いそうなので夜になってから入るから。あと森には、魔物はあまり多くないとは聞いてるけど、用心して進もう」

そう言うわけで夜、山の深い森へと入っていく。

実に気味が悪い。湿気が多いのか、木々の葉から雫が滴りたまに顔に当たったりするのがうつとおしい。

「びいっ!?冷たいです!!」

一際怖がりだったブリジールさん。怖がりの事を何も言わなかったから気にしなかったけど、強がりだったようだ。申し訳ない気持ちと、ちよつとメンバー選び間違えたかなと思いつながら、怯える彼女がカワイイと思ってしまう。

「ぱつっん髪の毛のねえちゃん、怖がりだなあ」

「だ、大丈夫です!驚いただけです!お、おぼけと言うわけでもない、ただの夜露です!怖くないです!」

そう言いながら、徐々に俺との距離が縮まる。おいおい、余計にカワイいわ。

だが確かに不気味に思うのは、俺も同じ。しかも夜道で森の中なので、ランタンもつて歩いているがやはり暗い。木々の隙間から漏れる月明かりなども頼りにして進んでいき、そして足を止める。

「……聞こえた?」

「聞こえたね」

コーデリアさんも聞こえたようだ。僅かだが、声が聞こえる。

「あつちかな？」

「森の更に奥になる。用心して進もう」

我々探検隊は、更に森の奥へと進んでいった。

奥に入ると更に湿度は高まり、また湧水があるのか各所にやや深い池や穏やかな小川も流れている。晴れた日の昼にでも来れば、小川を眺める事ができる絶好の登山ルートかもしれないが、今はただ不気味さが目立つ。

泥濘に注意して進むと、件の笑い声がだんだんと大きくなってきた。だが同時に気づく。

「これ、移動してませんか？」

笑い声に近づいてはいるのだが、向こうの方も少しずつ俺達から離れていつている。もしや俺達の存在に気がついたのだろうか。しかし、笑いながら？

「団長、魔物の気配がするぜ」

「知ってる……」

フェザー君に言われるが、俺も気がついてる。しかも笑い声の方向に気配を感じる。どう言う事態になるかわからなくなってきたな。

「コロッサスあたりは、つれて来るべきだったか……」

「問題ないと思うぜ？ どうせ相棒の事だから、騒動になったって何時もの事だぜ」

それが嫌なんだよ。楽しみたいんだ俺は。だが、そうは言っても依頼は続けねばならない。ため息を一つ吐いて俺は、笑い声を追った。

数十mも追うと、笑い声以外に魔物の声も聞こえてくる。しかも複数の声、群れのようだ。笑い声の主は、魔物に追われているのだろうか？ 状況が読めないためどうすべきか悩んでいると、突如森に銃声が鳴り響いた。

「近いっ!？」

「いや、これは声の方向からだー」

声の主が撃ったのか？ わからないが、魔物に誰かが追われていると仮定して動いても良いかも知れない。俺達は、急ぎ銃声のあった方向へと向かう。その間も何度も銃声はなるのだが、音だけを聞いていると、やたらめつたらに撃っている印象があった。

そしてついに魔物の姿を確認した。すぐに声の主を探そうとしたが、また銃声があった。

「また銃せいいうおわあああああつ!？」

「団長っ!？」

じゅ、弾丸が俺の頬を掠めて飛んでいきやがった。

「ふ、ふざけんなっ!? 魔物狙いじゃねーのか!？」

「て、敵と言う事でしようか?」

「わからんな、我々を敵と思ってるのかもしれないが」

そしてまた一発の銃声。だが発射の後に、数度跳ね返る音が聞こえた。

「ちよ、跳弾でぎゃああっ!？」

今度は俺の眉間に飛んできた。咄嗟にかわしたけど死ぬぞこれ!!

だが、それで終わらず銃弾はドンドン発射される。どれもこれも、跳弾を繰り返す俺に向かう。

「なんつで……っ!? おれ、ばっかり……ぬおおおっ!？」

どこに身を潜めても、あらゆる方向から跳弾して銃弾が襲ってくる。死角が無いのか相手は!? 見えてるのか俺が!? どう言う奴だ!! 後なんて俺しか狙われてねえんだよ!?

そんな事考える暇を与えないかのように、再び弾が迫る。

「ギャヒンツ!!」

こ、今度は魔物に当たったぞ!

「だ、誰か知らんが魔物に追われてるなら、手伝ってやる!! 俺達を、と言うか俺を狙うな!!」

「ふ、ふひゅ……ひいひいつ!!」

■ 一 フェイトエピソード 笑撃のファーストコンタクト

ある島にそれなりに名の知られた山賊団がいた。

山賊と言うと、主に盗賊の事を指すが、物を奪う対象が居ない場合普通に自給自足の生活をする。この山賊団も盗賊行為を行う事もあり、それでいて山での狩猟生活を続けていた。

そしてこの山賊団の頭には、一人娘が居た。

彼女は、家族と言える山賊の仲間達に囲まれ暮らしてきた。頭領の娘とあってよくされていたが、頭領である父と仲間達からは、ある点を常に心配されていた。

「あいつは、好奇心が旺盛すぎる」

子供の頃から彼女は、とにかく好奇心が旺盛であった。興味を持ったものには、大人の警告を無視して近づく。それが危険な魔物であったりすれば、周りの大人達は、たまったものではない。彼女には、常に監視がついたがフラフラと歩いて興味を持った魔物を追いかけたり、面白い植物が崖にあればそこに行き、とにかく危なっかしい。何時も大人達は冷や冷やしていたが、それも子供の内だけと思っていた。

實際彼女は、歳が19に成った頃には流石に落ち着きを見せていたが、実のところ本質は変わっていないかった。好奇心旺盛なのはそのまま、そして彼女の興味の殆どは、キノコへと集中する。

彼女は、キノコが好きだった。珍しいキノコが好きだし、美味しいキノコは、大好きだ。見たことも無いようなキノコは、毒の有無を気にせず思わず取って食うほど。その事を父も仲間も知ってはいたが、まさか、仲間に出す料理に毒キノコを知らずに出すなんて事をするとは、思いもしなかった。だが結局それをやってしまった。

案の定父含め仲間達を一夜にして再起不能にした彼女は、自身も「笑いキノコ」を食してしまい、四六時中笑い続ける症状に苦しめられる事となった。

仲間の全員を再起不能にして、始終笑い続ける者を山賊として、まして仲間として置いておくわけにはいかない。父も仲間も彼女を囚から追い出し、「ここに戻るにしても、せめて笑いつばなしなのを治してから帰って来い」と言われたのは、当然だろう。

そして彼女一人、放浪の旅が始まったのであるが、運が無い事に彼女の食したキノコは、新種のために解毒剤がなく何処に行っても有効な治療法が見つからない。同時に笑い続けの彼女を気味悪く思い、彼女の相手をする者は多くない。そのため、道中の路錢を稼ぐ事も満足に出来ずにいた。

そして例えどこであろうと、笑い続けるためにゆっくりと眠る事は出来ない。過呼吸

で苦しみなながら、眠りにつくのか気絶するのかわからない睡眠をとる。そんな生活を繰り返す中、常に引きつった笑顔の裏に隠れる、彼女の肉体と精神両方の疲労は、凄まじいものであった。

そして、ある日の夜。彼女は森の中で発作で笑いを抑えられず倒れ、笑い声に集まってきた夜行性の魔物に追われながら、まともに動く事ができないまま、そして出会ったのだ。

四六時中笑い続けようと、彼女と同じかそれ以上に濃い面子が揃い、それをまとめながらも、その濃さに埋もれ霞む地味な少年に。

「じゅ、銃から手え離せコラ!! うおおっ!! かす、かすったああっ!!」

「やべえ、相棒三発同時だっ!!」

「う、うおおおっ!! B・ビィガードッ!!」

「ンギヤアアアッ!!」

■ ■
二 ノコノコキノコ

「はひ、ひぐうふっ!! あは、すま……あははっ!! すまなひひっ!!」

「まるで誠意が伝わらねえ」

今回の依頼は、山中での戦い、では無く、結果的に救助となった。

エンゼラの救護室内のベッドで、笑いながらのた打ち回るハーヴェインの女性。名をルドミアと言う。

あの後跳弾の嵐を必死に潜り抜ける中、放たれる銃弾は魔物を狙い貫いた。俺も狙われたが、必死に避けてたまにB・ビイを盾にしたので無事だった。俺も狙わ

「死ぬかと思っただけ、ひでえや相棒」

「絆創膏一枚ですんでちゃ説得力無いぜ」

おでこに一枚絆創膏を張るB・ビイ。ビイのサイズとはいえ、それでもプロバハの分身(曰く、角一本分)みたいなものだからな、銃弾ぐらいじゃ死なねえとは思っただが、本当に問題ないからやっぱおかしいなこいつ。

B・ビイの別に尊くは無い犠牲を出しつつも、銃を撃つ笑い続ける者、すなわちルドミアに接近できた俺が見たものは、あらぬ方向を向きながら大笑いして片手だけでライフル銃を振り回して撃ち続けるルドミアだった。

危ないどころではない。まさかあんな状態で魔物を全滅させて、俺のみを跳弾で狙っているとは思わなかった。ただ正確には、偶然であって狙ったわけじゃないようだ。と言うのも、彼女は、なにかの発作か笑いが止まらず痙攣して、手がトリガーから離れない状態だった。そんな状態でも、しっかりと装弾を済ませていたのかまだ弾切れを起こさ

ない。急ぎ彼女と銃を離そうとしたが、上手く離す事ができない。その間も銃弾は放たれ俺を狙う。俺だけを狙う。なんでじやい。

なんども死にそうになりつつ、やっと銃を手から外す事が出来、倒れ付すルドミリアに事情を聞こうとしたが、笑いすぎて顔が真っ青になり泡吹いて、こつちが死に掛けていた。そのため急ぎエンゼラへと戻り治療をしていたのだが……。

「あはーははひっ!!こ、こんな、あははっ!!状態ですまなひいひひひっ!!」
「……うん」

「す、すきで笑っている、あはははっ!!わけじやあはははっ!!ないだひひひっ!!」
「そろこの状況で好きで笑ってたら、完全にヤバイ人だよ。即衛兵に突き出すわ。」

「ご、ごめごふう……っ!?す、少し……ふふうっ!?深呼吸するから……」

ルドミリアは、必死に深呼吸をして呼吸を整えてる。その間も「ほごおっふうっ!!」
「すーっふっひひっ!」と、まともに深呼吸も出来てないが、多少落ち着いたらしい。
「や、やっ……ひひ、落ち着いたようだ……はは」

まあ、あんまそう見えないけど。

「あ、改めて、んふっ!ル、ルドミリアだははっ!!」

「ほんと大丈夫なのこれ?」

「だ、大丈夫、すま、すまない……これでも、落ち着いてる方なんだ、あはっ!」

これで落ち着いてるんだ……。

「さつきは、すまなかった。魔物に追われて……あーはっ！ひひ、銃を撃っていたら発作で、狙いが、さだまらなくなつて……ふひっ！」

「俺ばかりに跳んで来たんだけど……」

「ね、狙つたわけじゃ、あははっ！無いんだ……ぐ、偶然だが、あんなの私も初めて、ふっ!!」

撃つた弾全部跳弾して8割俺に向かつてくる偶然つてある？

「なんでそんな状態で銃撃つのさ……と言うか、なんでそんな事に」

「じ、実はキノコを食べてから、笑いが止まらなく、くつくうふ、あははーっ!!」

毒キノコ食つて笑いが止まらなくなつた……そう言う事、本当にあるんだね。

「これマジだと思います？」

「嘘をついている様子……それ以前の問題だが、多分本当だろう。嘘で引き付け起すほど笑う事が出来る訓練をつんでるなら別だが」

「ねえわ、そんな訓練」

「私もそう思うよ」

嘘を見抜くのが上手そうなコーディアさんに聞いてみても、一応マジで笑い続けるキノコ食っちゃった人らしいな。

「何で食っちゃったんだよ……」

「んふっ！は、初めてみるキノコで、たべ、食べてみたくなって、あはっ!!そしたら、このありさまあはははははっ!!」

もしかして、この人笑ってなくてもヤバイ人じゃないかな？初見のキノコを毒の有無確認せずに食うとかってあるの？

「あんたって、聞いてた以上にトラブルと濃い人材ホイホイやな」

誰から聞いたのそれ？まあ、どうせセシエロさん辺りでしょ、知ってた知ってた。ちくしょう。

ここいらで、他の団員への説明のための、話してるところこっちも気が変になりそうなるドミリアの事情要約。

前いた山賊団を、毒キノコ料理で全員再起不能にして、自分も毒に当たって追い出されて、キノコは新種だから解毒できず、放浪していて魔物に追われて今ここ。

「コイツ、馬鹿ナンジャナイカ？」

お前にだけは言われたくないだろうな。

「ユグドラシルあたり、解毒できない？キノコ詳しくそうだけど」

土系統だけど、キノコはそんな詳しくないと首を振られてしまった。他の星晶戦隊

も、解毒は無理との事。

「俗に【笑いキノコ】とか【ワライダケ】って呼ばれとるキノコは、うちも何度か商品で扱った事あるけど、解毒薬が無いっちゅうもんは、聞いた事ないわ。せめて現物あれば、どこその研究所に渡せたんやけどな」

「わ、私も色々な島を探したが、ふふふっ！解毒薬は、無いしこんな状態だから、あははっ！！ろくに相手もされず、だはははははっ！げほううっ!？」

まーヤバイの来たと思うわそれは、ライフル銃担いで大笑いしてる人間来たら。

しかし、治療したいのにこの発作のせいでまともに相手されず、薬も無い。ろくに一箇所でも留まる事もできず、魔物に襲われれば今回の様な事になる。気の毒と思わないでもない。

俺はふと、あのポンコツのライフルの事を思い出した。

「……あんたって、魔導結晶埋め込んだハンターライフル使った事ある？」

「あははっ？や、闇の魔導結晶かい？」

「そうそれ」

「うぶっ!!そ、それなら結構まえに……ふひゅっふふふっ!!使っていたな、こぶっ!!い、今の奴を手に入れたから、路銭にして売ってしまったけど……はあ、あははっ!!」

はいはい、そう言う奴ね。やっぱりあの銃の癖あんたの所為か。

「……行く当てないなら、うちの団入る？」

「ぷふううーっ!!」

「これって返事？馬鹿にされた？どっち？」

「あはーあは、あははっ！と、突然なんだい……はひ、ひっ」

「いや、今までの流れで多分俺が何かしなくても、結局うちに来そうだなと思つて」

「よ、よくわからないが……んっふうっ、たす、助けてもらったうえに、これ以上迷惑をかけ、かけられないはははっ！ごほ、がほっ!!」

「いかん、気管に入ったようだ」

「うーん、前言撤回したくなって来たぞお。」

だが実際ここでこの人と別れても、何かしらで合流しそうなんだよなあ……。これも武器のもたらす縁なのだろうか。縁って引き合うイメージがあるけど、俺の場合良い物悪い物ひっくるめて向こうから突進して鳩尾に挟り込んでくる感じだからなあ。

「まあ、治療法見つかるまでぐらいいいなさいよ。どうせこの島の村とかで宿とつても追い出されるのが関の山だし」

「くふふ、痛いところを、つくなあ……。だが、こんな目立つ私を連れては、くひ、君達にまで、迷惑をかけてしまう……。あっはっは！」

「目立つ……」

俺は周りにいる星晶戦隊を見た。

三匹の竜を引き連れた星晶獣（笑）筆頭ティアマト。動く黒鉄鎧、癒し常識枠コロツサス。水質にうるさい敏感肌の尊大ぶったりヴァイアサン。ふわふわと浮いているユグドラシル。腕四本生やしたドM星晶獣シユヴァリエ。移動中も若干瘴気を漏らしているセレスト。存在が闇、バグ、ギャグ、非常識のB・ビィ。ゾーイは、一見ただの少女だが一度飯を食べれば嫌でも目立つ。

「目立つとか、こいつら以上に目立つてから言つてよ」

「せ、星晶獣を比較に出すのは、ふふつ、卑怯だよ、あは、あはつはつはー」

かもしれない。だが見てみよ、星晶獣以外の面子も。

酒飲みゲロインドラフ。二言目には、拳で語り合う格闘馬鹿。謎の浮遊コマに乗る哲学者。男よりイケメン女性騎士。とことんガンバルハーヴェイン。あと、一時的だが同行中の商魂逞しいエルーン。

「目立つとか、うち全員と比較してから言つてよ」

「うふつ君の騎空団どうなってるの……？あは、あはつー！」

うるせいやい。

だがルドミリアは、俺達面々を改めて確認してなにか一つの結論に至ったのか、顔は笑っているがハツとした表情になる。笑つてるけど。

「そ、そうか君達……いひひ、あ、あの噂の星晶戦隊か」

「今気が付いたんだね」

「こ、濃い面子を紹介されてから、あは、君を見たら確信に至ったよ」

「ねえ、それどう言う意味？」

「そ、それは、うぷぷつ!!ぼはつ!!うぶつふううーっ!!」

なんだろう、何時も以上に馬鹿にされてる気がするぞおくく?

「くすぐり倒してもいいかな？」

「ご、ごめ、勘弁してくれ、はひひ……っ!!」

足の裏くすぐつたら、きつと致命傷だろうなこの人。

「だ、だがいいのかい……うぐつ、ほんとうに迷惑をかけてしまうが、ほふっ!」

「いいよ、いいよ……今も言っただけど、どうせここで外放り出したって、またうちに来るだろうから」

「ここらへん、俺は諦めの境地である。厄介な事が、不意に来られるより、目の届くところに置いておきたいんだ。」

「な、なにか辛い事があるようだが、おふつ、お言葉に甘えていいのかい？」

「ああ、俺達星の島目指してんだ。流星にそんな所目指してりや道中見つかるでしょ、治療法の一つぐらい」

「イ、・イスタルシアかい？あははっ！それは、すごいひっ！」

わかつてる、わかつてるよー、馬鹿にされてるわけじゃないのは。

「んっふ……な、ならお世話になるうかな……。こ、こんな事になつてるが、何かと役に立てるつもりだ、んふっふ。な、なるべく迷惑はかけないようがんばるよ……。なは、んなはははっ!!」、げほごふう……。っ!!？」

「いかん、また気管に！」

「ああ、泡吹き始めたにやつ!!？」

「引き付け起しとるでっ!!」

……早まっただろうか。いや、しかし、やはり結局彼女はうちに来る気がする。今か後かの違いになるのなら、とつとこの状況に慣れておきたい……。

「がほ……。っ！ごほう……。っ!!」

「これ、いつそ気絶させた方がよくねえか？」

「かもしれないな」

「おっしや、フェザーやってやんな！」

「よっしやあーっ!!」

「げほほおおっ!!」

うん、慣れたい……。

■ 三 スーパーザンクティンゼル人考察学会 ■

——その後、色々な依頼でルドミリアをつれて行く事もあった団長であったが、彼女の発作に巻き込まれトラブルが続出。ブレブレの狙いから放たれ、跳弾しまくる弾丸に襲われ死にかける事数百回以上。しかし、ルドミリアを退団させる事は無かった。

なぜ一般的に足手まといと思われる者を仲間にし続けたのか？後のスーパーザンクティンゼル人を研究する者達からは、様々な憶測が出たが、発見された「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y」の団員の物と思われる手記に「団長は、彼女に関しては既に諦めの境地であった。だが、同時に楽しんでいた」とあり、単純に苦勞性で諦めていたのと、それを楽しめる度量の深さを併せ持っていたとされる。

それが幸か不幸かは、本人のみが知る事である。

取られると心配する団もあるらしい。取らん取らん、基本シエロさんから次々と依頼が来るだけで依頼なんて奪わねえって。

だがこの事をコーデリアさんに相談したら割とマジな感じで「各国がマークしてると言つたらう？」と言われた。震えてきやがった、怖いです。

しかし実際のところ、ルドミリアが仲間になつてまだ依頼に出てはいないが、ヤバみを感じる。エンゼラ船内でも笑いの発作は、当然の様に止まらないので、あんまり発作が酷いようだと近くにいる団員に気絶させる方法を取る事にした。ルドミリアもいつそ気絶しての方が楽だそうなので了承しているが、近くにいた団員がフェザー君だったり、ティアマトだったりすると拳か星晶パワーで気絶させられるのでキツイらしい。

なお、一番楽なのは、セレストによる気絶で、まるで眠る様に気を失うと言うが、セレストヤバイ事してないよね？

そしてアウギユステ前に行く最後の依頼。なんでも新しい魔物図鑑を作るから図解の絵を描く絵師がいるので、その絵師が野生の状態で生きた魔物を描くまでの護衛をしろとの事。

大きな戦闘が無いと信じて新参のルドミリアを連れて行くのにちようどいいかと思ひ彼女をメンバーに加えて俺はその絵師に会いに行ったのだった。

——絵師を護る、ただそれだけの依頼がまさかあんな事になるとは、この時思いもし

なかつたのだ。

■ ■ ■
ニ フェイトエピソード 一 乾き疼く瞳を持つ者

運命の出会いは、何年も前。絵物語を扱うマーケツトで偶然目にした一冊。全身に電流が走るがごとき衝撃をその表紙を見て受けた。心が肉体から離れ、物語の世界に入り込むのを感じた。美しき男達の尊さを知った。

湧き上がる創作への意欲。元から絵は好きだった。だが、美しいもの、特に美しく可憐な人間を描く事が彼女には、とても難しかった。決して絵は下手ではない。だが、彼女は魔物を描く事に特化していた。見様見真似で人物を描いた。何百、何千、何万、どれ程描いたろうか。

その中で運命の出会いであった一冊は、「不埒」と断定され親に捨てられた。しかし彼女は、描いた。美しき男達を、耽美なる絵を。

自分なりに描けた一冊を本にして、店に置いたが売れない。そのため一際才能があつた魔物の絵を生活の糧にするうち、何時しか彼女は「魔物絵師」として広く知られ、魔物凶鑑或いは魔物の手配書等の仕事では、多くの指名を受ける程になった。

「彼女の描いた絵は、まるで生きているようだ」

「セレストさんがこけたですっ!!」

「いひひっ!! ぶちまけた餌に、まも、魔物がはははっ!んひーひひひっ!!」

「あかん、全部食われるでっ!!」

「だ、だめです!まだ食べちゃだめですっ!!」

「ま、まだルナルさん!」

「ダメ、もうちよつと」

「んだあぁー……っ!!」

思ったよりきつい。

依頼メンバー、ルドミリア、カルテイラ、セレスト、ブリジール、俺。ルドミリアは、入団して直ぐで様子を見るのにちようどいい依頼と思ったから参加。ブリジールさんは、コーデリアさんに比べると戦力としては不安だがサポーターとしては十分と思っただ。カルテイラさんは、アウギユステまで船に乗せてあげてる分手伝ってもらおう。セレストに関しては、星晶獣を連れてくるほどの依頼とは思わなかったが、たまには自分も依頼に行きたいと思ったようだ。肉体労働は、相変わらず苦手だが依頼内容が比較的楽に思えたらしい。

あと一番着いてきて欲しいがコーデリアさんには、お留守番と補給物資確認の指示をお願いした。ティアマトが残っているがたぶん今船にいるメンバーで一番の常識人だ

からあつちは心配ないだろう。

だが全部裏目に出た。

「いいわ、そのままです。止まつてるなら描きやすいわ……」

一心不乱に、スケッチブックへ魔物を描き込みまくる絵師。ハーヴィンの女性絵師ルナール、今回受けた依頼の護衛対象である。彼女が魔物をスケッチしている間、俺達はひたすら魔物を引き付け逃げ逃がさないようにする。シエロさん曰く、「難しくない仕事ですよ」との事。

だが、魔物一匹を追い回すのに右往左往する俺達。倒さず逃がさず追い回すと言うのは、思ったより大変だった。こんな姿ばあさんに見られたら、また一から鍛え直されそうで怖いぜ。

しかし一方こんなありさまでも冷静、と言うかいつそドライに魔物を描き続けるルナールと言う絵師、かなりの集中力だ。腕の良い絵師とは聞いたけど、確かにこれは凄い。凄いが早くして、早く、早くしてくれたのむからねえ!!

「このアホッ！ 勝手に餌全部くうなっ！」

「Gyan!?!」

強化ハリセンで魔物をドツキ回すカルテイラ。案外この点は助かる。今回は、魔物の討伐が目的で無いので非殺傷武器(?)を使うカルテイラさんには、けん制をしてもら

う。

「もう少し動いてる時が見たいわ、うまく誘導して」

注文が来れば俺達は、従うほかない。何故なら彼女は、依頼主だから。

「しかたねえ……行けB・ベイ!!」

「しょうがねえな……」

あと普通にいたB・ベイ。まあ、こいつはベイを自称してるので基本俺といえるから当然なのだが。

そんなB・ベイが俺の指示を受け、通常形態のまま空を飛び魔物が食らい付いている餌を奪う。

「U g a a ! ?」

「こつちだぜノロマツ!!」

餌を奪われ怒った魔物は、絶妙なスピードで飛ぶB・ベイを追いかけた。

「いいわね。そのままお願い」

「変身は無しだからな!魔物が怯えて逃げるから!!」

「クツソが!これ結構つかれんだからな!あとでリングよこせよ!!」

通常形態でもクソ強い癖に文句言うんじゃない。

ちなみに、こんな感じの事が午前中からずっと続いている。今のところ休みなしだ。こ

の魔物が終われば一息入れて午後残りの魔物スケッチだ。

■ 四 一時の安らぎ

普通の戦いより疲れた気がする依頼の前半を終え、一時丘の上で休息する。飲まず食わずでこんな事出来る訳がないし、いい加減腹が減ったのだ。

「ああ、しんど……」

すっかり疲れて丘の上でねっころがるカルテイラさん。かく言う俺も、レジャーシート広げて一緒に倒れ付している。

「そ、想像以上にきつかった。まだ午後もあるのか……」

「あんた、もうちよつと考えて依頼貰いや。船乗せてもろてるさかい、そら手伝いせい言われたら断る気はあらへんけど、限度ツちゆうもんがあるで」

「だって、シエロさんが難しい仕事じゃないって……」

そしたら「ド阿呆」とハリセンで頭をはたかれた。

「『難しくない事』と『楽な事』は別や」

「うぐぐ」

「まあ、これもシエロはんの信頼の証かもしれんな。あんたらなら、なんやかんやで依頼

をやり遂げるちゆう信賴があつたんやろ。せやけど、気をつげんと一々面倒な依賴ふられる事になるで」

好きで依賴を受けているのではない。シエロさんから来る依賴は、選好みできないのだ。借金あるから。

「おまはん、借金無くても貧乏くじばつか引きそうやな。生まれついで苦勞人」

「やかましいなあ、思い当たる事多すぎて困るから止めて」

「あるんかいな」

あるんだなあこれが。

「ご飯準備できたです！」

「うっひょー！ 待つてたぜ、りんご！りんごくれ！」

「落ち着くですB・ビイさん、りんごは逃げないです」

ブリジールさんが持つてきた荷物から用意した弁当を取り出す。手馴れた様子で食事の準備をするブリジールさん。更にコーデリアさん手製のサンドウィッチだぞ。やつたぜ。

「そーいやルドミリアはんは？おらんやん」

「なんか、近くの森で珍しいキノコないか見てくるつて」

「止めんでええんかいな、またけつたいなキノコ食つて症状悪化すると面倒やで」

「キノコ見つけても、まず持って来いって言うておいた」

「大丈夫やろな」

多分大丈夫だよ。多分、きつと、メイビー。

「てか、セレストは？ルナルさんも」

「お二人なら、木陰でお休みになつてゐるです」

ブリジールさんが指差す方向には、確かに二人がいる。一応声をかけた方がいいだろう。

「熱い……日差しきつい」

「……」

どっちも日光が嫌いのようで、セレストはぐったりとしている。大して日差しはきつくは無いのだが、彼女にはつらいようだ。一方でルナルさんも日差しを疎ましそうにしているが、それ以上にスケッチに熱中している。休憩中と言うのに熱心なものだ。

「セレスト、飯どうする？」

「お、おいといて……後で食べる……」

「ルナルさんも、ちよつとは休んだらどうですか？食事も用意してますけど」

「別にいいわ、もう少し描いておきたいし」

「あ、はい」

にべもねえや。

仕事人間なのだろうか、それとも絵が好きなのだろうか、俺にはわからん。しょうがないので、食事と飲み物だけ置いておく。

彼女の持つスケッチブックには、既に多くの魔物の姿が描かれている。一体の魔物もあらゆる角度で描いて最もその魔物が生き生きとしている構図を見つけ出す。そして図鑑用のわかりやすい挿絵用の構図もまた同時に考える。一度彼女の絵を見たが確かに「生きているようだ」と言われるだけはある。

絵を描く事を仕事にするって大変だなあ、と思いつながら元のレジヤシートに戻りコーデリアさんお手製のサンドウィッチを食べて休む。

「あは、あははっ!! だ、団長、ちよつといいかな?」
はずだった。

「……どしたの、ルドさん」

「その略し方は、初めてだよ、ふふっ! ちよつと、森の方で気になる事が……ほふひひっ!」

「気になる?」

「魔物じゃない気配がするんだ……んふっ、人がいない場所のはずだからおかしいと思つて、ひひっ。か、確認をしたいが、私一人では多分無理だろうからね……なはははっ

!!

そうだね、現状ルドさんは、全空一斥候とか出来ない人ナンバーワンだろうさ。

「10秒待って」

手に持ったサンドウィッチを頬張り一気にお茶で流し込む。本当はもつと味わいたかったよ。コーデリアさんの手作り。

「セレスト、ルナールさんの護衛お願い。なるべく直ぐ戻る」

「わかった……」

ぐったりしたまま返事してる……大丈夫かな。俺が残ってブリジールさんに様子を見に行ってもらうって言うのも……ああ、いや駄目だ。たぶん彼女だと、ルドさんに振り回されてまともに動けないだろう。危険な魔物か人物であった場合を考えれば、カルテイラさんも除外だ。やはり俺しかないか。

「ルナールさんも、すみませんが」

「かまわないわ、どうせまだ描いてるから」

ドライだねえ。

「カルテイラさんにブリジールさん、ちよつと森の様子見て来るんで少し頼みます」

「了解しましたです！とことん頼まりました！」

「氣いつけや」

「あと特にB・ビー、お前は念のため残しておくからな。勝手についてきたりするなよ」
「わかつてるよ」

あいあい。それじゃ行きますよルドさん。魔物じゃないと言うが、せめて盗賊程度であるといいが。俺の場合、藪突いた場合蛇どころか星晶獣が出かねないからなあ、悲しいかな。

「んふふう……つ、そ、それじゃ案内するよ、うぶつ！」

しかしよりにもよって気配に気づいたのがルドさんか。道案内の途中でその未知の相手に気取られないよう願うしかない。相変わらず笑い続けるルドさんを連れ、二人森へと入っていった。

■ 五 闇引き合い、天災来たり

笑いまくるルドミリアを引き連れながら森へと入っていく団長を、木陰でうなだれたままのセレストは見送る。

そしてふと気がついた。隣にいるハーヴィン、絵師ルナル。彼女は黙々と絵を描いているが、この空間に気まずさを感じ始めてしまった。視線をカルテイラとブリジュールがいるレジャーシートに移す。そこは、普通であれば穏やかな日差しだが彼女にとって

は炎天下。そこに移動する気は起きなかった。

「(づ)はん……食べなくていいの？」

「(づ)わ」

やはりにべも無い。

移動する気も起きない以上、ここで用意された食事を取るしかなく、団長が置いていったサンドウィッチをモソモソと食べ始める。

モクモクと絵を描くハーヴィン、モソモソと食事をする星晶獣。相当珍しい光景だろう。だがそれぞれは、それぞれの事に集中してるのでそんな事を考えていない。そんな事が数分続く。

だが気まずい。何も問題が無いはずなのに、互いに無言の気まずさ。ただ純粹に星晶獣であった頃には、味わうはずの無かった感覚に戸惑いながらセレストは、この気まずさの突破口を探していた。

(そうだ、絵の話題……)

絵を仕事にしてるなら、絵の事を話題でふったら反応してくれるだろうか。そう思いルナールを見る。だが彼女は相変わらずスケッチに夢中だ。

(声……かけ辛いなあ……)

セレストは人見知りであった。この時ばかりは、星晶戦隊内でも空気を読まない事に

定評があるティアマトの図々しさが羨ましかった。反面ああはなりたくないとも思うが。

どうしようか悩んでいると、今度はルナルのほうがセレストを見た。

「あ……」

「なに？ さつきからチラチラ」

どうやら気が付かれていたらしい。セレストは、申し訳ないのと恥ずかしさで赤面した。

「ご、ごめんなさい……」

「はあ……貴女、話を聞いた限り星晶獣なのよね？ただの人間に何遠慮してるのよ？」

「い、今は……ただの星晶戦隊の一員だから……」

「それにしたって威厳が無いんじゃないの？」

「け、けど……うちには、無駄遣い多くて団長にお尻蹴られたり……住んでる水槽の水質に煩すぎて、蒲焼にされかけたり……DMで団長に罵られたがる……もつと駄目駄目なの……いるよ」

「大丈夫なの、その星晶獣……」

きつと大丈夫ではないだろう。

「それで、何か聞きたいの？」

ルナールは、すっかりセレストを星晶獣と言うよりもただの気弱な人間として認識したようだ。

「あ、あのね……」

まさか向こうから話をふつてくれるとは思わず、慌ててしまう。そもそも漠然と絵の話をすればいいかと思っただけで、どう話題をふろうかまで考えていなかったのだ。

ワタワタしながらセレストは、何か言わなければと焦りそして。

「絵って描いてて楽しい？」

言つてちよつと後悔した。もう少し言うべき事があつたらうに、なぜこんな当たり障りも無さ過ぎて話の続かない事を言つてしまったのだ。ペールで隠されたセレストの瞳は、涙目であつた。

「いきなり何よ……」

「あは、はは……ずつと描いてるから、好きなのかなつて……なんか、ごめん」

「星晶獣が簡単に謝らないでよ、調子狂うわね……別に好きじゃないわ、嫌いでもないけど」

「え……？ならなんで描いてるの？」

「仕事だからよ、それ以上理由ある？」

そうだろうか？セレストは、疑問を感じた。言われてみれば、彼女の魔物を描く姿は、

絵師か職人のそれだがどこか作業的であった。しかし絵を描くという行為にたいして「好きでも嫌いでもない」と言う半端な思ひは、感じられなかった。

「他に、魔物以外を描いたりとか……してるの?」

「ううん……っ! ……いい、いいえ? まあ、たまに? 人物や模写とか? 人型の魔物とかいるし? そう言うのとかは、するわよ? 当然ね、ええ」

露骨に焦りだした。これはあまり聞かない方がいい内容のようだ。そうセレストは、人間社会に出て学んできた技 “空気を読む” によつて感じ取つた。なので、とりあえず話題を変えることにした。

「ちよ、ちよつと……見てもいいかな?」

「……これは、仕事用だから……うん、何も描いてない」

「え?」

「ああ、ううん! なな、なんでもないわよ? まあ、見るぐらいなら別に、ある程度は描けたし……はい」

そう言つてルナルは、今まで使用していたスケッチブックをセレストに渡した。セレストは、それを嬉しそうに受け取ると、パラパラとめくり絵を見る。

「わあ……す、すごいなあ……」

そこには、団長も見たようにまるで生きているような魔物達の姿があつた。ただ一つ

のペンから生まれるとは思えない躍動感。この短時間で描いたとは思えない量と精巧な書き込み。

人の生み出す芸術、それをセレストは初めて実感した。

「ど、どうやったら……こんな風に描けるの？」

「どうもなにも、描くしかないわ。スケッチでも模写でもいいから、一日一枚とか十枚とか決めて、描き続けるの。じやなきや上達もしないし腕が描き方忘れるわ」

そう言うルナルの姿に、まるで歴戦の戦士の様な風格すらセレストは感じた。ほんの22歳、しかし絵師としての心構えは、既に達人の域に達しようとしている。セレストは、星晶獣として長く生きてきたが、あの団長とジータの次にルナルと彼女の描く絵に強く関心を持った。

そして可能なら、彼女の描く他の絵が見てみたいと言う欲求が生まれる。自ら欲する、それもまた初めての感情だった。

「依頼が終わったら……ちよつとだけでいいから、絵の描き方とか……教えて欲しい」

「私が？」

「だ、駄目かな？」

ルナルは、意外そうにしている。またかなり困惑もした。

「なんでそんな」

「わ、私星晶獣だから……団長と出会うまでずっと空を漂っては、人の死を奪って眷族にしたり、取り込んだりするだけの生活だったの……」

「そ、壮絶ね……そこら辺は、流石星晶獣だわ」

「だからね……今団長と空を旅するの、凄く……た、楽しい。こうやって……今まで気にも留めなかった……絵とかに興味がわくから」

血の気の無い、蒼白の皮膚。だが紫の口紅が弧を描き、表情はベールに隠れても彼女が生き生きとした笑みを浮かべているのは、ルナールにもわかる。

「……ちよつとだけよ？」

「あ、ありがとう……」

見た目は大人の女性で、しかも星晶獣。なのにやたら人間らしく、弱々しさすら感じるのは、あの変わった団長の所為だろうか。船に残りまだいると言う、セレストよりも「駄目駄目」な他の星晶獣とやっても、少し気になりだしたルナールだった。

そして、そんな穏やかな時間は、突如として終わりを迎えるのだ。

「あ、あれ？」

「どうしたのよ」

「なにか……聞こえた」

「なにか？」

「うん……森のほうから」

セレストが不思議そうに団長とルドミアが入って行った森をみた。一見何も無いただの森であつたが、しかし徐々に、徐々に奇妙な音が響く。

「な、何の音？」

「わ、わからない………何かが、動いて………回転する様な………」

その時である。木々が伐採され吹き飛ぶ。けたたましいエンジン音が鳴り響き、そして現れたのだ。

「そ、総員退避いいい………っ!!」

「あはは………っ!! あははははっ!? やばひっ!! ぶへえっ!! うははははっ!」

二人並んで森から出てくる団長とルドミアの二人。その後ろからせまる、一人の女性。

「ヒヤアアアッハアアアアアア………っ!! クウウウレイイジイ
イイイ………っ!!」

人はそれを、「歩く天災」と呼ぶと言う。

クロスフェイト 邪眼が呼ぶ天災 中編

■ 一 クロスエピソード 加虐少女は安心の夢を見るか

上流と下流、二つに分かれた生きる世界。安寧とは程遠い下流の世界、更にその下。世の掃きだめの様な場所、スラム街で彼女は生まれた。

スラムで生まれる事は、その時点で試練である。生まれて直ぐに命を落とす事など珍しい事ではない。まともな医者もない場所では、出産すら命取りだ。だがそこで無事生まれたとして、それは幸運であろうか。

親がいない、それも珍しくない。誰もが自分の事は自分で守らねばならなかった。彼女もそうだった。加虐者達は、少し脅すだけで怯え震える少女を面白がった。ドラフト有の幼いながらに豊満な肉体を狙った者もいた。

そんな世界で小さな少女が生き残るのは、並大抵の事ではない。

何故皆は自分を虐めるのか？ なぜ自分がこのような目に遭うのか？ 逃走の日々

の中、彼女は一つの答えを導き出した。

「遠ざけるには、自分以外が離れていけばいい。自分以外の、全てが」

無心にガラクタを集め、彼女は一つの武器を作る。ドラフには、手先が器用な者が多い。彼女もそうだったからこそ、その武器を作れた。全てを遠ざけ恐れさせる事だけを考え作り上げた物。 “全てを遠ざける暴力” そのもの。彼女は、それを壊天刃と名付けた。

一振りすれば誰もが怯え逃げて行つた。その音を聞くだけで、誰もが悲鳴を上げた。それを持つ限り、誰もが彼女に近づく事は無かつた。

その事に安堵しながら、彼女はスラムを後にした。遠ざけるだけでは駄目だ。誰も来ない、自分を傷つける者が現れない平穩の場所を求めて。島々を渡り歩くうち、その姿を見た者が言い出した。

「知ってるか……」 歩く天災 “つてやつを”

壊天刃は、全てを壊す。あれは最早災害、近づく事なかれ。無数の刃が回り鳴り響く破壊の音が聞こえたならば、すぐさま逃げろ。

そして徐々に誰もが彼女へと近づこうとはしなくなる。ただ只管に破壊を楽しむ天災に関わる事を恐れた。

中には、度胸試しだと天災を探し会おうとする者がいた。噂を確かめようとする者も

いた。だが、誰もが真つ青な顔で戻り、もうあれに関わるのは止せと同じような事を考える者達に言った。

その事を彼女は、喜んだ。しかしこの時、ぽつかりと心に穴が開いたような感情にも戸惑う事になる。彼女は、この時得られた安心が、望んでいた安心と違う事に、気づけずにいたのだ。そして人々は、彼女はただ安心を求めている事に気がつかずにいた。

本当に望む事に気がつけない少女。彼女が何を望んでいるか気がつかない人々。だが天災とは程遠い平凡で特徴もない男が、この不幸なすれ違いを埋める事になる。

「総員撤退いい——っ!!」

■ 二 逃げるんだよおっ!!

■ 絶賛回転鋸を振り回すドラフ少女に追われる俺達。ルドさんに言われて森に入ったらこれだよ。森で正体不明の気配があると言うから来たが、途中珍しいキノコに興味を奪われたルドさんが、俺の制止を聞く前にそれを食べてしまい発作が悪化。森全体に響き渡るような大爆笑をあげ引き付けを起こしようがないので一発腹部を殴打してキノコを吐かせた。

この大声でその謎の存在に気がつかれやしないかと思つたが、時既に遅し。

「ハアツロオオオ〜ツツ?」

背後から聞こえた少女の声は、ぞつとする様なものであるが同時に可愛らしい声だった。一緒に猛烈に殺意全快バリバリな武器が音を上げていなければよかったよ。

「ねえねえ〜? なあ〜んで君達い、こお〜んな所にいるのお?」

「あは、あはは……えつと、ここにお住まいの方でしょうか?」

「そお〜住んでたの、独りぼつちで静かあ〜に住んでたのに……また、怖い人達来ちゃった」

「そ、その武器を向けるのを止めてくれないかなあ、なんて……」

その武器は、初めてみる武器だ。そもそも武器なのだろうか? 複数の刃が常に回転している。刃を動かすなんて発想、した事が無い。

「ノンノンノ〜ンツ! ダメダメダメエ〜ツ! だつてだつて〜……君達、僕に酷い事に来たんだろお? こわいなあ……」

「あひやつ!? あひひひつ! わ、私達は君に危害なんて加え……はひひつ!! ひひ、あはーははつ!!」

「ひひつ!? なんだなんだなんだあ〜つ!? こんな状況で笑つてやがるぜえ〜? やべえなあ……こわいなあ……けどサイツコーに、クレイジーだぜえつ!?」

確かにクレイジーだけどね。好きで笑つてるんじゃないのこの人。

「だくからあく……怖い人達はみくくんな……っ!」

少女がその武器についている紐を思い切り引つ張ると、より大きく刃が回転する。俺が何をしたって言うんだ、くそつたれ。ちくしょう、この野郎。

「ルドさん、逃げますぜ!」

「さ、賛成だはははっ!!」

「サヨナラ、バイバイしねええとなああ——っ!!」

全力で振り返り走り出す。そして直ぐに少女があゝの武器を振るうと一瞬で周辺の木々が切り刻まれ吹き飛んだ。凄まじい切れ味に度肝を抜かれるがそれよりも逃げる事が先だ。急ぎ森を出てこの事態を知らず、暢気してるB・ビー達が見えた。

「総員退避、退避い——っ!!」

「ヒヤツハアアアアア——ッ!! クウウレイツジイイ——ッ!!」

鬼気迫る俺の叫びと木を吹き飛ばしながら迫るドラフ少女を見て、瞬時に異常事態を悟ったB・ビー達は、一瞬で荷物をカバンや籠に押し込み逃げ出した。

だが一人この事態に置いていかれる者がいた。

「な、ななな何事よおっ!」

今回の依頼人ルナルさんが、腰を抜かしている。これはいかん、ヤバイ。

「失敬っ!!」

「きやあつ!!」

通り過ぎる前にルナルさんを左手で掴み抱える。小柄なハーヴェインだから掴めた
が、他の種族では無理だな。本人には言えないが、彼女がハーヴェインでよかった。

「……つてえ!!? この担ぎ方はないんじゃないのっ!!?」

「余裕無いんっすよおっ!!」

急ぎ逃げる都合上、申し訳ないが肩に担ぎ上げている。まるで人攫いのようながこの
際仕方ない。

「もつと普通に抱き上げるとか無い訳っ!!?」

「んな暇無いですってばあ!!」

「こう言うシチュウなら、お姫様抱っことかあるじゃない!?」

「知らんですって!!」

「オラオラオラア——ツ!! みいゝんなバイバイしちまいなあ!!」

「んぎやあああつ!!? せ、せめて正面向かせてえ——っ!!」

担ぎ上げた時、彼女の顔は後ろに向いてしまった。その所為で猛進する少女と、その
少女が振り回す異形な武器が誰よりも見えてしまい悲鳴を上げている。

「あ、あんたっ!! なんちゆうヤツ連れて戻って来とるんやっ!!?」

「俺だつてこんな事態想定外ですよっ!!」

「んは、んははっ!! ごほっ! ……んひやははっ!! はひ、逃げ、にげばはははっ!!」

「ルドミリアさんが顔真つ青ですよっ!!」

笑いながら全力疾走すりや死にそうにもなるわな。

「ルドさん空いてる肩乗りなっ!!」

「す、すまなひいっ!!」

ルドさんが走りながら俺の空いてる方の肩に飛び乗る。ハーヴェインとは言え、二人抱えては流石に重いが走る分には問題ない。ばあさんのしごきを耐えた日々は、伊達じゃねえぜ。

「ぜえ………っ! ひい………っ! うえ………うふうっ!」

「相棒、セレストもヤバイぜ!」

「わ、私も……おぶつてえ……」

「無理に決まってるだろっ!」

既に二人担いでるんだから無理だ。それにコイツの運動神経だとルドさんみたいに飛び乗れるわけもなく、もうこのまま走ってもらうしかないが……。

「どうしても無理なら、マチヨビイ形態のB・ビイに運んでもらえ」

「……も、もう少しがんばる」

「そりやどう言う意味だよっ!？」

単純にキモイんだと思うよ。

ギヤーギヤー騒ぎながら逃げる逃げる。ひたすら逃げる。

「逃げる逃げろお〜! そのままどつかに、いつちまいなあ〜っ!!」

言われんでも逃げとるわ。そっちが追うのだから逃げるしかない。

「こ、このままじゃいかん、説得作戦だ!」

「あんなん、どう説得すんねんっ!？」

見とれ、無害アピール作戦じゃっ!!

「お、俺達なんもしないから見逃してくれえ——っ!!」

「ダウトダウトオー!! そー言って騙すんだろお〜っ! うっかり信じて後ろからばっ

さりダア〜っ!!」

「んなこたあしねえよっ!!」

「どんだけ疑い深いんだよ!？」

「駄目、無理でした、説得失敗ですっ!!」

「ド阿呆っ!! そんな説得の仕方あるかっ!？」

「じゃあ次カルテイラさん!!」

「えっ!? ……あ、えつと、じよ、嬢ちゃんお菓子やるから見逃してえーなっ!」

「それもノッツ!! 知らない人からお菓子なんてくダメだ、ダメだ、ダメダメだアッツ!!」

「ダメやつ! 作戦失敗や!」

「あんたも大概しよばい説得じゃねーか!?」

あれお菓子で釣れるよーな感じじゃないよね。むしろ「手前らの血をよこしなっ!!」とか言い出しそうな勢いだよ!!

「次ブリジールさんっ!」

「え、えつと……自分、何もしいです! とことん無害ですっ! 騎士に二言はないですっ!!」

「ヒヤツハアア~~~~ツツ!! 騎士様だからってエ? 信じると思うのかア~~~~ツツ!!」

「ぴいつ!? すみません、無理だったですっ!!」

くそ、彼女では臆病すぎるかっ!

「次、ルドさんっ!!」

「あは、あはははっ!? いひい——ひひっ!! ぼほっ! うおあ……んひゃ、ひゃはは

はっ!」

「ヒヤツハアツ!! まだ笑ってやがるぜえくくくつ!」

だろうと思つたよ、ちくしょうめっ!!

「セレストツ!」

「む、むりいゝ……」

だろうなっ!!

「B・ビイツ!!」

「もうめんどくせーから、倒すでもいいんじゃねーか?」

「やっぱり怖い人達じゃねーかあっ!! ウオラオラオラアアツ!!」

この野郎、余計に場を乱しやがった!!

つ、次は、残りはもう……。

「ル、ルナールさん!!」

「わ、わたしい!」

「頼みますっ!!」

「そ、そんな事急に言われたってえ……うわっ!」

走る振動の所為かルナールさんの腰につけたカバンから一冊のスケッチブックが零れ落ちた。

「ケヒツ!？」

「そ、そっちのスケッチブックはダメエ〜っ!？」

そのままスケッチブックは、あのドラフの顔に直撃した。だが、それで動きを止めた。これは今のうちに逃げられるぞ。

「ちよ、戻ってっ!! あれは、アイディアスケッチ用で、仕事用じゃないから駄目っ!!
取り戻さないとっ!!」

「んなの、後でいいでしょっ!？」

「いいわけないでしょっ!？ アレを見られるわけにはいかないのよっ!？ あれ見られたら死ぬる、と言うか死ぬっ! わたしは行くわっ!!」

「あ、ちよまつ!？」

「トウウアーツ!!」

やたら軽快な声を上げてルナルさんが俺の肩から飛び去ってしまった。

「ウキヤ？ なあにこれえ〜……」

「ウナー——ツ!! か、返しなさいっ!!」

「ひぎやああ——っ!？」

直ぐ鬼気迫るルナルさんが突貫。相手も悲鳴を上げてひっくり返った。そしてそのまま、二人はぶつかりゴロゴロと丘を転がり落ちていく。

「相棒、二人とも行っちゃまうぞ?！」

「あーもう、くそつたれ!! どうしてこう何時もまともに事が進まないんだつ!!」

「文句いつとる場合かつ! 追うでつ!!」

「わかつてるよ!!」

ルナルルさんを見捨てるわけにいかない。全員疲れているが、それでもまだまだ必死に走って追いかける。

「ああ、いたぞまだ取っ組み合ってる」

転げ落ちた先で、二人がドタバタとしている。体格小さい同士だから、子供が喧嘩してるように見えてしまう。

あ、ルナルルさんがスケッチブックを掴んだ。

「取ったどオ——つ!!」

ルナルルさんの叫びがこえました。やたら勇ましいな。

「あ、危なかった……やつぱりアイディア用とは言え、安易に外に持ち出すべきじゃなかったわね……」

「きゆう……ひ、ひどいイ……ボク、なにもしてないのにい……」

「ちよ、ちよつと泣かないでよ……」

「ああ、いたいた。ルナルルさん勝手に飛び出さないで……と言うか何これ」

「し、知らないわよお……なんか、急に泣き出して」
ええ、なにそれ、どういう事。

「ちよつとちよつと、お嬢さんそんな急に泣かないですよ……なんか、俺ら悪いみたいじゃ
ん」

「だって、お前ら……ボクをイジメにきたんだろオ……うう、帰れよう……こ、怖い人は、
いやだよ……」

「こ、怖くないよ？」

「嘘だ……み、みんなそうやって嘘つくもん……もう、どっかいけよお……バ、バラバラ
にするぞ……ほ、ほんとだぞお……ぐすっ」

説得力ねえなあ……。だがまいったな、とことん疑っている。放置つて言うのも気が
引けるしなあ。

だが本当にどうしようか悩んでいると、また遠くから可笑しな音が聞こえてきた。こ
う、壺がズンズン動いてくるような、そんな音だけ……。

「……なあ、走つてて気がつかなかったけどさ、ここつて」

「……そ、そういえば……次の、魔物目撃地帯……」

魔物の観察、スケッチ予定地、またその対象の出没地域。今日の依頼最後の「標的」
と、「その仲間達」。恐る恐る、近づいて来る音の方向を見る。するとそこには、小さ

なスライムの群れを引きつれ元気にこちらに迫るキングゴールドスライムがいた。

「総員退避い——ッ!!」

本日二度目の逃亡開始である。

■ ■ ■
三 スライム狩り

「どう言う日だよちくししょうっ?! こうも連続でトラブルが起きやがる!!」

つぶらな瞳で俺達を追いかけるスライム達。基本奴等は、無害な魔物に分類される。だがどう思ったのか知らないが、俺達に興味を抱いたようで妙に執拗に追ってくる。

「相棒、倒さなくていいのかよっ?!」

「こいつ倒すと依頼完了しないんだよっ!!」

ただ働きをする気はないので、そんなのは冗談じゃない。

「ルナールさん、今描けますか!？」

「走ってるうえに、こんなにスライムいるんじや無理に決まってるでしょっ?!」

「ですよね、こんちくしよいつ!!」

キングゴールドスライムは、かなり発見率が低いレアな魔物だ。倒しても逃しても次何時見つかるか分からない。だが、俺はあきらめんぞ!!

「いや、あ、あ、くくくつ！ ねばねば、こないでええくくくつ!!」
「いや、なんで一緒に逃げてんの!？」

あと何故かあのドラフ少女が共に逃げていた。

「ねばねば嫌なんだもんっ!!」

「だもん、つてあんた……」

「だつてあいつら、壊天刃でも切れないんだもんっ!! 嫌い……ねばねば嫌いっ!」

ねえ、君なんか感じ変わってない？ さつきまでのクレイジーさはどこへ消えたの？

「んで、実際どうするつもりやっ!! 何時までも逃げられへんでっ!」

カルティラさんの言う事も尤もだが、キングゴールドスライム以外のスライムが多すぎる。あれ30匹以上いるぞ。しかもこんな大規模な戦闘想定してない今の装備だときつい。

一応手段はあるのだが、逃げながらでは無理だ。誰か囷になつてもらう必要があるが……。

「きやうっ!？」

とか考えてたら、視界の隅に見えてたドラフ少女の角が消えた。

「ああ、ドラフの人こけたですっ!？」

「なあにいつ!？」

振り向くと確かに見事すつころんでいる。しかしあれは、駄目だ。ああ、もうスライムに取り囲まれた。と言うか完全にスライムの興味があつちに向いた。

「うあ……こ、こないでえ……うう、やだあ……」

「――!」

「!?!」

「ひんひん……っ! やめ、いじめないでえ……っ!」

何と言う事だ。スライムの群れが完全に彼女を取り囲み、ポコスカいじめだしたではないか。しかし襲うと言うよりも、ちよっかいをかけているような雰囲気だ。

「なんか、敵対してると言うか子供のイジメを見ているようだ……」

「うちもそう見えるわ……なんやあれ……」

「あーあー……ペチペチ叩かれて、粘液飛び散っちゃってるよ」

言っちゃ悪いが、まるで危機感がなかった。だが少女はマジ泣きしてて、彼女にとってはわりと深刻な事態らしい。スライムの粘液も気持ち悪いしなあ……。

「んふ……っ! い、いじめられっ子なのかな……ほふっ!」

「た、助けた方がいいです! かわいそうです!!」

ブリジールさんは、本当にいい人だなあ……。

だが実際これは好機だ。スライム達の興味が完全にあの少女に向いているので、この隙に大技で数を減らす事が出来る。

「……よし、ルナールさん。離れた場所でスケッチお願いします」

「えっ！ や、やるのっ!？」

やるともさ。今やらないと多分もう無理。

「けど、数多いけど……」

「まあ、意図せずあの娘さんが囷になったんで雑魚は、この隙に一網打尽にします。ブリジールさんとカルティラさんは、ルナールさんの護衛頼みます」

「ん、まかせときー!」

「とことん御守りするです!」

うむ、実に頼もしい。

「セレスト、やれる?」

「うん……今なら、集中できるから……」

「よし、なら全員やつちまって」

「わ、わかった……『安楽』……」

普段は体力もやしのセレストだが、仮にも星晶獣である。一言吹き、闇の力を使うと、瞬く間にスライム達はパタリパタリと倒れていった。セレストの技「安楽」によって強

制的に眠らされ、しかも「アンデッド状態」になっている。まあ、この場で重要なのは睡眠効果であるが。

だが一体、キングゴールドスライムだけは、無事なままで仲間の異常事態に驚いていた。ううむ、セレストの状態異常を跳ね除けるとは、伊達にキングじゃないようだ。

「後はルドさん、適当に標的を釘付けにしてやって。あの子助けたら、俺も行くんで逃がさないでね」

「よ、よし……ふふ、ま、任された、あはっ!!」

「あと俺を撃たないでね」

「いひっ! だ、大丈夫だ……んはははっ!!」

本当に大丈夫なのだろうか……。

「じゃあ、ルナールさん。スケッチ頼みます」

「わ、わかったわ」

「B・ビィ、あの娘さん助けるよ」

「おうよ!」

それでは、行動開始!

クロスフェイト 邪眼が呼ぶ天災 後編

一 プルプルッ！ ボク悪いドラフじゃないよう

「うえぐ……こ、怖かったよオ……」

「もう大丈夫です、魔物はみんな追っ払いましたです！」

ベそかいてるドラフ少女を安心させているブリジュールさん。迷子保護した気持ちだよ俺あ。

「スライム達もう全部いないな？」

「大丈夫だぜ。寝てる間に放り投げたしな」

セレストの“安楽”で睡眠状態になったスライム達は、マチヨビイが全部遠くに放り投げた。やつらが住処にしている壺を除けば、液状の生物だから死にはしないだろう。その隙にやられ放題だったドラフ少女を救助する。

キングゴールドスライムは、俺も合流してルドさん達と共に引き付けルナルさんにスケッチさせた。普通の攻撃が殆ど通じないから、手加減なしでもいいのは、実にやり

やすかった。別にストレス発散ではない。ほんとだよ。

ただ結局ルドさんの発作が起き、跳弾地獄再び。こんな丘で、土と草しかないような場所で、どうしてポンポン跳弾できるんだよ。しかも相変わらず8割俺に飛んでくるし。

その後スケッチが終わったら、キングゴールドスライムもマチヨビイに遠くまで投げさせておいた。逃げ回ってたのが嘘みたいな結末である。まあ、無力化したからね、しかたないね。

「んで、君は結局なんなのだね？」

そして最後の問題であるこの少女。

「うお…………ぐじゅ…………い、いじめないでえ…………」

「泣きすぎだよ…………そろそろ俺も傷つくぞ…………」

「うぎゅ…………ほ、ほんとにいじめない…………」

「だから、いじめないってば…………」

「ぐず…………うう…………」

結局更にブリジルさんなど癒し枠の説得を受け泣き止んだ少女。目に涙が溜まっただけだが、とりあえず話せる状態にはなった。

彼女は、名をハレゼナと言うらしい。この辺りに住んでいる…………正確には、住み始め

た少女。もう見ての通りのいじめられっ子で、何処に行くにも人や魔物からいじめられ
たらしい。小動物感あるから、いじめたくなつたのだろうなあ。

しかしいじめられる側からするとたまつたものではない。呼んでもないのに寄つて
きて自分をいじめめる輩に嫌気がさしたハレゼナの対抗策が、この場所の様に人氣が無い
場所に隠れ家を見つける事と、万が一誰かと鉢合わせた場合の回転鋸と異常な言動で
あつた。

「ようは、うちらのことさつさと追い出そうおもて、あんなドギツイ事叫んで追い回した
んか……」

「良くそれであれだけ叫べるなお前……」

「ひゃ、ひゃは……や、やばい感じ出すと……みんな離れてくから」

そりやあねえ、大木簡単に切り飛ばすような武器振り回すヤツに追われたら誰だつて
逃げるわな。

「回転鋸……もしかして、あなた〃歩く天災〃つてやつ？」

「あ、うん……ケヒヒ、だ、だんだんそう呼ばれ出してるのは知ってる」

ルナルさんがどうやらハレゼナについて知っているらしい。

「なんすか、その〃歩く天災〃つて？」

「人氣の無い場所で突如聞こえる駆動音。そして現れる回転鋸を振り回し、目に付くヤ

ツを全て八つ裂きにする災害が如き何者か……つて言う噂があったのよ」

「ああ、そらこいつだわ、間違いないわ」

そもそも回転鋸なんて武器扱うヤツなんてこいつぐらいだろう。

「しっかし、よくまあ人遠ざけるために、こんな武器手に入れたな……」

「手に入れたんじゃないよ……自分で、作ったんだよ……」

「はっ!? お前作ったのコレ!？」

「フヒヒ……ツ、そ、そうだぜ?」

どう見ても個人で作るような構造をしていないが……。ノコギリ部分を回転させるために、駆動させるエンジンも必要だし、高速回転する振動に負けない上に、いくら大木を切り倒しても刃こぼれしない強度が必要だろうに。しかもそれを、人ひとりで振り回せるサイズに収める点もすごい。

「誰か手伝ったりとかは?」

「そおんのはナア〜ツシング! ボク一人で適当にいく材料集めて、アレしてコウして、ガシャーンとして、ウイーンツとして、ここをこうして……そおくれえ〜でえ〜完成だア!!」

その「アレしてコウして、ガシャーンとして、ウイーンツとして」の部分がわからないのですがそれは……。いや、しかしどうもマジで自分で作ったらしい。ドラフって手

先器用とは聞くけどこれほどとは。

あと、だんだん調子が戻ってるね君。

「はえくすげえな、お前」

「んふふくく？ もつと褒めてもいいんだぜエ？」

「それにあれだ。メカメカしいのが良い。ありえん組み合わせを混ぜるって言う発想が
好き」

いや、見れば見る程、ロマンあるなこれ。普通にかっこいいし、ちよつと欲しいぞ俺。

「あと、なんつったけ……これのその、名前？」

「壊天刃オオ!! キルデスゾー 天も壊す刃で、壊天刃つだアア——っ!!」

「それな、勢いが良い。かなりイカす」

「へ、へへ……っんだよオ、お前エくくわかるじゃん、わかってんじやあくくくんっ!!」

いいよなア、ラブリーくだよなあ!! サイツコーにクレくジくだよなあ!!」

クレイジーなのは同意するが、ラブリーなのだろうか？ いや、しかし要所要所に、女性らしい可愛らしさが……ねえな。まあ、感想は人それぞれか。ラブリーと言うなら彼女には、きつとこれがラブリーなのだろう。

「相棒ってこう言うの好きな。そこんとこ、男の子なんだよなあ」

「いや、だって普通にかっこいいじゃん、メカメカしい所がいいじゃん、すげーじゃん」

「わから無くはないけどよう、まあいいけど」

「……黒トカゲ」

「おう？」

「このトカゲも、超、ラブリー!!」

「んぎやあつ!!」

ハレゼナが会話に入ってきたB・ビイを見つめると、素早くB・ビイを抱きしめた。抱きしめたと言うか、抱き潰す感じだった。

「んごお——つ!? ぐ、ぐるちつ!!」

「トカゲエー黒色でクルクルつとしてて、モチモチつとして、お前も超ラブリーだよ」

「オ、オイラは……トカゲじゃ、ぐわっ!!」

「んふふくきやあくわいいくくっ!!」

「ぶへえっ!! ち、力がつよく、つよ……おごっ!!」

「こ、こいつあのB・ビイを割とマジで困らせているだと……」。

「そんなラブリー言う程カワイイやろか、アレ……」

「ま、まあ普段何もしなければ……その、カワイイかもです」

「ふふっ! わ、わたしは、トカゲよりキノコの方が、いひっ!! 好きだなあはははっ!!」

「……どちらも理解できないわね」

「う、うん」

ああ、他の面子はやつぱりB・ビイに対してはそんな感じだったか。

「んきゆるラブリくなトカゲエ……なあなあ、お前らつてえ、騎空団なのかあ？」

「うん？ まあ、そうだけど」

「ヒヤツハーツ!! じゃあじゃあ、ボクも連れてつてくれよおー!!」

おつとお？ これは、またそういう展開ですかあー？

「……まず、理由を聞こうか」

「あんしん、あんぜーんっ!!」

理由がみじかあい！

「……つまり？」

「騎空団ならさあ？ もう一々隠れ家探さなくていいもんなあー。それに、お前はあんぜんで、あんしんみたいだし？ つまり一緒に居れば、あんしんじゃあ……んっ!!」

これは、もしかして懐かれたのだろうか……。やたらはじけた口調と裏腹に、先程からハレゼナから溢れる小動物オーラが増している気がする。まるで捨て犬を目の前にしているような感覚だ。だが、天災と呼ばれる人を仲間にする、また妙な噂が流れるんだらうなあ……。

「……だ、だめ？」

あ、駄目じゃないです。涙目上目遣いで一発KOですわ。

「来いよ、クレイジーガール！」

「ヒヤツハーツ!! やったぜえ!!」

カワイイ万歳、超ラブリー。噂なんて気にしないでですよ？ 言いたい奴に言わせとけ

ばいいの。俺、噂、気にしない。

「あーあー……また、濃い仲間増やしおった」

「賑やかになるです！」

「また……女の子だね」

「ぷふふ、だ、団長は、基本的に変わり者に、あははっ！ あま、甘いなあっひやはははっ

!!」

あっはっは。ルドさん、あなたがそれを言うのかい？

「貴方、こうやって無茶苦茶な騎空団になっていくのね」

「言わないでルナルさん、俺もわかってるんです……」

「苦労性と言うか、何と言うのか……それじゃあ、スケッチも全部済んだから今日はもう

帰るわよ。家まで護衛お願いね」

「了解です」

「……ところで、あのトカゲ死にそうだけど」

そう言えばB・ビイがハレゼナに捕まったままだった。

「た、たすけ、たす……あいぼ……」

「んふふトカゲエ〜？ これから一緒だぞお〜楽しいな、うれしいなあ〜、サイツコーにラブリー〜！」

「……ふむ」

「これ、対B・ビイ用の抑止力になるな。」

「ハレゼナ、B・ビイと仲良くしてやってくれ」

「んなあつ!？」

「言われなくてもヒヤツハーツ!!」

「オ、オイラを売ったな、あいぼ〜お——っ!？」

マチヨビイ形態にならず、されるがままなのを見る限り彼女に対しての遠慮があると見た。よしよし、上手くすればこれで俺の胃痛の一つが減るかも知れん。

「……胃痛が減るとか考えてそうやけど、天災がおるとむしろ胃痛増えるんと違うか？」

「可愛ければ許せる」

「このガキ……」

B・ビイもせめて見た目が元のビイの通りならよかったのにな。その姿になった君が

悪いのだよ、B・ビィ。

■ 二 今解かれし、禁じられた書

「はぐ……ほああ……」

「ラ〜ブリ〜、ラ〜ブリ〜♪ ラ〜ブ、ラ〜ブリ〜♪」

B・ビィが白目をむいている。珍しい光景だな。

「本当に助けなくていいの、あれ？」

「いいのいいの。たまには、あいつも苦労すればいいんだ」

「あっそ……貴方達は、適当にくつろいでちょうだい、今日は疲れたろうからね。お互いに」

「いやあ……なんか、すみません」

「いいわよ、別に」

我々は、ルナールさんの自宅で休ませてもらっている。家までの護衛で終わろうと思っただが、俺の視界の隅に見えるルドさんが発作を起こしたため、お言葉に甘えて休ませてもらっている。少なくとも、ルドさんの発作が収まるのを待つ必要がある。

「ふひ……あは、なははっ!! ギャひっ!! ぐほっははひゃっ!!」

「ほんと、すみません」

「今回と言い、よくアレを仲間にしようと思ったわね……」

「返す言葉もねえ」

実際依頼も、想定したよりも大変な依頼になってしまったからな……あれ？ いつも想定より疲れてるような……。いや、よそう。あんま考えたくない。

「ルナルルさんはお休みにならないです？」

ルナルルさんは、今日使った道具を整理した後スケッチブックを広げている。休む用が無いのでブリジールさんが気にして声をかけた。

「わたしは、このまま仕事。絵を仕上げないといけないからね」

「ん？ 絵はさつき描き終わったんと違うんか？」

「あれはスケッチ。描いた魔物のイメージが残ってるうちに、修正したりして着彩、それで終了よ」

「はあー、絵師つちゆうんも大変な仕事やな」

「仕事だから割り切れるけどね。クライアント側の指定した、ここまで描けてればOKって言うラインがあるのは、色々考えなくていいし」

「そう言うもんかいな？」

「そう言うもんよ」

やはり俺達にはわからない、絵師の世界の苦労があるのだろうなあ。絵を描くつてもっと楽しいものと思っただけ。

「……あれ、セレストがおらんわ？」

「は、さつきそこに……あ、いない？」

カルテイラさんが指摘して気がついた。ソファでぐったりしていたはずのセレストがいない。

「便所か？」

「言い方……星晶獣言うても女やで、せめてお手洗いと言わんかい」

「お手洗いの場所は聞かれてないわよ？」

「じゃあどこに……」

外に出た様子も無いので、星晶獣だし星晶的な力で勝手に消えたかと思ったその時。

「ほ、ほわあくくくっつ！」

家の奥から間の抜けたセレストの声が聞こえた。

「わ、わたしの仕事部屋から……っつ！」

「あいつ、人の家でなに勝手に！」

リビングの奥の扉が、薄く開いている。どうやらそこにセレストがいるらしい。変わったってはいえるが、こんな失礼な事するような奴じゃないのだが、どうしたんだアイツ。

「おいおい、セレストなに勝手に人んちうろついて……うわ、暗っ！ 窓ねーのかこの部屋！」

入った部屋は、深い暗闇であった。入り口から入るリビングの明かりだけが部屋をわずかに照らしている。窓も見ればカーテンで覆っているの、まだ日は沈んでいないのに真っ暗だ。

その部屋の隅でうごめくもの、暑苦しいドレスですぐにわかる。セレストだ。

「お、おおー……これ、ええー……わ、うわあ……」

「セ、セレスト？」

そのセレストだが、部屋の隅で座り込み俺にも気がついていない。何かを読んでいるようだ……。と言うかこの部屋、ルナールさんの仕事部屋だよな。

「セレスト、こら、セレストお前……って」

セレストに近づいたら床に何枚も紙が散らばっていた。ルナールさんの仕事の絵かな？ まさか、セレスト君が散らかしたのかい、んもー。片づけないとだめよ君い。

「人ん家の物散らかしてまったくもー」

ひよいつ、と拾ってその瞬間、俺は紙に描かれた絵を見た。見てしまった。そして。

「見るな嗚呼ああ!!」

「うわあああっ!!」

「あ、あわ——っ!？」

「うなあああ——っ!？」

ルナルさん登場により驚いた俺、そしてセレストがやっとな俺達に気付く声を上げ、セレストと俺がぼつちり何かを見てるのに気がついて悲鳴を上げるルナルさん。

「見たなっ!! なあ!？」 それ、見たなっ!？」

「あ、わ……その、あわわ」

「ちよ、落ち着いてルナルさん」

「落ち着いてられるかあ——っ!！」

「なんや、なんや騒がしい」

「うわあ——っ!！」

ドタバタしていると他の面子が来てルナルさんが更に悲鳴を上げた。

「なんで来るのよっ!？」

「あんな騒がしくしおつたら様子見に来るわ。あんたら何しとん?」

「なんもないわよ、とにかくここから出て」

「ヒヤッハーツ!？」 ク、クク、クレージーツ!？」

「ギヤーツ!？」

ハレゼナが叫んだと思ったら、一冊本を手に持っていた。それをみてまた更にルナ

ルさんが叫んだ。目にも止まらぬ速さでハレゼナの手から本を奪い取る。今日の動きといい、とつきの動き凄いなこの人。

「なんで！ 勝手に！ 見るのっ!？」

「は、はわわ……ご、ごめん……」

「とにかく、ここは仕事部屋だから貴方達は」

「ね、ねえねえルナル……ここ、この本なんだけど……っ」

「なんで見開きページを開いて来た——っ!？」

必死に見せまいとしていたルナルさんの行動むなしく、セレストが手に持っていた本をバツチリ開いて駆け寄ってきた。勿論みんな見てしまう。そう、見てしまったのだ。

おぞましい絵のタッチで二人の男達が、ほぼ全裸で絡み合う姿が描かれた見開きのページをつ!!

「うわあ——っ!？」

「ひやああ——っ!？」

「うひゃーっ!？ クク、クレージーッ!？」

「あひやははっ!! ふはーっ!! ふひ、んはははははっ!!」

約一名笑ってるだけだった。

「な、なななんちゆうもん見せるんやつ!? し、しまえやはよっ!!」

「わわわ、お、男の人が、男の人が男の人ですすうくくくっ!!」

「サイツコーにクレージー……だけど、ラブリーじゃないイ……」

「ぶははははっ!!」

「他の意見もあれだけど、笑われるのも腹立つっ!!」

「ごめんね。そればかりは、もうどうしようもないです。」

「これ、すごい……これ、他にない……っ?」

「セレストは凄い食いっついてるし……」

「あ、ああ……な、なんで……」

「どうも、今日の騒ぎはまだ終わらなそうだ……。」

「なんで、こうなるのよおくくくっ!?!」

■ 三 その欲望、開放しろ

■ 世の中、男同士、或いは女同士の愛と言うのはあるのだろう。俺にはわからないが、わかる者にはわかるのだろう。そしてわかる者同士が出会い、通じ合えばその愛は、更に深まるのだろうな。

まあ、現実の話はともかくそれを空想、想像、物語で楽しむ人もいるんだろう。同性だからこそその良さがあるのだろう。うん、そういう人もいるんだろう。そうだろう。

「だからね？　今まですれ違ってた二人が、立場も変わり敵と味方で再会してからの……苦悩がね？」

「ふんふん……っ」

と言うか、目の前にいた。そして今日の依頼人だった。ようは、ルナルさんだった。今まで会いたかったのよ？　会いたくて、いろんな事を話したかったのに、いざ再会したら敵と味方……国を背負う故に、己を殺し友をも殺さないといけない、そこで揺れる思いがね？　もうね……」

「おお……ポ、ポポルウ……」

そしてルナルさんは、主にセレストに対し、熱心に何かを語っていた。あとセレストの食いつきが凄まじい。

「……これいつまで続くん？」

「お二人がとことん満足するまで……でしょうか？」

「そら長くなりそうやな……」

……えらい事になったなあ。

発端としては、勝手にルナルさんの本を読んだセレストが原因だった。そう、ル

ナルさんは男同士の愛を描く通称「耽美物」と呼ばれる絵物語が大好きだったのだ。そして彼女は、自身でも耽美絵を描いていた。それをセレストは見つけた。ちなみに、セレストが勝手に部屋に入った理由は、曰く「ジメツとして……暗く……閉鎖された感じ」を感じ取ったから吸い寄せられたとの事。

もうね、すごい内容だった……内容と言うか、絵柄がね？　こう、魔物が上手い方だったけど、人のとかもそのまんまのタツチだったから……内容とのギャップがさあ。

様子見に来た全員にそれ見られて「いつそ殺してっ！」と叫び出すルナルさんを落ち着かせるのは大変だった。ちよつと男二人が出てる絵なら人体模写とか誤魔化したかもしれないが、その……つまり、バツチりな絵だったからもう言い訳のしようが無い。そういうのに免疫ないのか、セレスト以外ほとんど赤面して混乱状態だった。ああ、けどルドさんは、単純に笑いまくってそれどころじゃなかったけど。

落ち着かせたルナルさんは、即弁明を始めた。部屋に積み重なった大量の絵。それは全て仕事の絵ではなく耽美絵だったのだ。よくもまあ、こんな数こさえたものだ。更に全てがオゾマシイ絵柄なのは、最早仕方ない。

つまりルナルさんは、本当はこう言う耽美絵を描く耽美絵師になりたかったようだ。だが絵柄が絵柄のせいで、いまいち上手くいかない。本人もそのギャップに悩まされ、一冊二冊耽美物の絵物語を作り店に置いてもらってるようだが現状一冊も売れては

無いらしい。セレストが見つけたのは、その一冊だった。内容はお察し。

だがここで更に問題と言うか、事態をややこしくしたのがセレストがそれを非常に気に入った事だった。星晶獣になって以来、生まれて初めての衝撃。耽美の世界がセレストを受け入れ、セレストは一瞬にしてその世界へのめり込んだのだ。

なんてこつたい。

その後色々と聞いてくるセレストに同志の匂いを感じ取ったのか、ルナールさんは、俺たちには分からない世界を語り出し、セレストはそれを熱心に聴いていた。

「つ、続きは……」

「ちよつとまって、こうなったらポポル・サーガ全巻持つてくるわ……」

「いや、それも待って、ちよつと待って」

「何よ良いところで」

そう言わないでくれよ、これほつとくと終わらないやつだよ。

「これ長くなります?」

「……まあ、ちよつと?」

「具体的には?」

「……………2、3時間は欲しいわ」

「夜中じゃねえか」

駄目に決まってるんだろ。エンゼラに帰れねえよ。

「だ、団長……私、まだ話したいかなって」

「いやいや、出来れば今日中にエンゼラに戻りたいんだよ。途中宿とかないんだぞ」

「なら泊まってきなさいよ、わたしもまだ話したいし……」

「ええ……」

そう言われてもなあ……趣味人って話すると長いからなあ、もー。どうしたものか……。

「んふーふふ……っ、だ、団長」

「なんすかルドさん」

「あ、あれ……ほっひ」

ルドさんがソファを指差す。そこには、ぐったりとしたB・ビィを抱きしめたまま穏やかな表情で眠るハレゼナの姿がっ!!

「……静かだと思ったら」

「っ、つかれて寝ちやつたんだね、んはは……っ」

「子供かよ……いや、子供か……」

だが「むにやむにや……クレ〜ジ〜……」とか寝言を言ってる姿を見ると、起すのが申し訳ねえな。カワイイ。

「B・ビイの息は？」

「呼吸はしてるようだから、うひ……っ、だいじょう、ぶだよ、ひひっ」

「……あと笑い方が相当無理してるけど、どしたんすか？」

「おこ、起こしちゃ……はひっ、わ、悪いと思つて……んっふうう……ふぐっ！」

さつきまで酷い発作だったしなあ。今も笑い声が出そうになるたび、息を飲み込んでるからルドさんも大変な事になってるなあ。

「しゃーねーなー、んもー。」

「泊まつていいんすかね？」

「良いわよ、仕事用で住んでる無駄に広い家だから、部屋はあるし」

「いいんですか、団長？」

「うん、なんか俺も疲れました……」

帰るのも面倒になつてきたよ、俺あ。

「セレスト、好きにしていよ」

「あ、ありがと……ね、ね続き」

「はいはい……」

ああ、セレストが耽美の世界に入り込んでいく……。お堅い感じの星晶獣より、人間臭さが出てきたが、これって喜ぶべき事？ それとも辞めさせるべき事？ 俺にはわか

らん。

「子供の育て方に悩む親父の哀愁が出てるで」

「マジっすか……」

「18で出す雰囲気じゃあらへんわ」

「そりゃ、まいつちやうなあ」

その夜、ルナルさんとセレストがいる部屋から、二人の語り合う声が止む事はなかった。

ほんと、まいったなあ……。

■ 四 「やはり星晶戦隊か……いつ出発する？ わたしも同行させろ」 「強引」

■ 「騎空団に入れば、他の島の耽美絵物が手に入るんでしようね……」

次の日、朝食を頂いてる時にやたらと露骨に俺を見ながらルナルさんが呟いた。思わず手を止めてしまう。

「……そっすね」

「耽美物ってね、一般的に流通するものじゃないから、描いてる絵師さんがいる島じゃないとまず手に入らないのよね……」

それは昨日聞いた。その所為でコレクションも増えず、絵の模写も出来ない事も延々と聞かされた。

「きつと空には、わたしの知らないような耽美物があるのよねえ……」

「い、今まで行つた島も……気にしなかつただけで……色々、あつたかもね」

おつとお？ セレストが会話に混ざってきたぞこれ。

「ルナル先生は……色々絵をみて、もつと絵の勉強……したいんだよ、ね……」

ルナル先生なんて呼んでんのセレスト？ 昨日の間にどんだけ語り合つたんだよ。

「ええ、そうね。自分の絵柄じや耽美物には向かないつてわかつてるから、ね」

「そ、そうだね……色々、手に入るといいよね……ね」

ね、の所で二人とも俺を見た。

「あんた、遠まわしやけど、あれ完全に連れてけつて意味やで」

「言われんでもわかりますよ。けど何故突然」

カルテイラさんと小声で会議。誤魔化しきれてない露骨なアピールに苦笑すら出ない。
い。

「あははっ！ んっは……っははっ!!」

「ヒヤッハーツ!! 今日も朝からクレージーだなア、オイイ!!」

「んぎぎ……っ、め、飯が……食べ、ねえ……」

「あ、あのハレゼナちゃん、B・ビイさん離してあげた方がいいです」

笑ってますが、これは別です。うーん、にぎやかでよろしい。

「あーあー……偶然一人の絵師を仲間にしてくれる様な、変わった騎空団がないかしら、ね？」

「そ、そうだね……どんなに扱い辛い仲間でも……仲間にしちゃう様な、変わった騎空団とか……ね」

「OK、OK……どうした？」

とりあえず話を聞いたほうが良いなこれ。

「べ、別に……？ も、もつと話したいし、耽美絵の事勉強したいから仲間にするために打ち合わせしたとか、ない……よ？」

「ええ、まったくそのような事実はないわ、ええまったく」

こいつら、急に早口になりやがった。

「あ、あれ？ そう言えば……エンゼラには、まだ部屋いっぱい余ってるな……」

「えーなんですってー、ああ、けど突然わたしが同行するなんて、そんなあつかましい事できないわー」

「わ、わーどうしようー……」

へたくそか。棒読み極まれり、演技する気無いなこいつら。

「……昨日と言い、俺が何時もこう言う状況だと、なあなあで終わるから押せばイケると思っただろ、セレスト」

「はう……っ」

「や、やばいわセレスト……作戦がっ」

「ど、どどどうしようルナル先生」

目に見えて慌て出したぞ、ポンコツか。

「で、どないするん？」

「さーて、これは……」

ぶっちゃけ、この人来てどうする？ 耽美物集めるだけは論外だ。何もしない人を乗せれるほど余裕はない。かと言って絵師だからなあ、旅の記録の絵を描いてもらうとかはそれっぽいけど、それだけと言う事も出来ない。戦えないだろ、依頼どうするのさ。戦いだけではないけども。

「弊騎空団を希望のようですが、入団した場合どのような活躍ができますか？」

「へあ?! え、えつとお」

「面接かつ?!」

カルティラさんにハリセンでどつかれた。だが聞いておくべき事ではある。今まで
は、聞くまでも無い人達だったから聞いてないが、絵師だぞ？ 聞かないとね。

「ル、ルナル先生……っ、き、昨日のあれ」

「はっ!! そ、そう! わたし戦えるわよ!?! 役に立つわっ!!」

セレストが何か耳打ちすると、ルナルさんが張り切って応えた。

「……いやいや、どうやって?」

「き、昨日試しに星晶パワーの加護を与えたら……描いた絵を短時間だけ、具現化して……攻撃でできるようになったよ」

「魔物とかなら、ごまんと描いてきたわ!! 速筆で魔物を描いて攻撃できるわ!」

「そ、その速さなんと……0.02秒っ」

「おいおいおい」

「こころ、何勝手に星晶パワー安売りしてるのこの子は。あと0.02秒は流石に嘘だろ。」

「うん……本当は、1秒か0.5秒ぐらい」

「うそやん」

ワオオ、どの道すごかった。

「絵の熟練のルナル先生だから……出来た技だよ……っ」

「いや、だけどセレスト、お前ねえ……」

「だ、だって……ルナル先生と、お話するの……た、楽しいから……騎空団で、活躍で

きるなら……一緒に旅できると思つて……ダ、ダメ？」

ダメ？ & 上目づかいコンボ、昨日に続いて二度目です。あーもーあーもー、うちの子なんでもう……こう、カワイイのか、畜生め。

「おとうちゃん、しつかりせな」

「ハッ!？」

またハリセンで頭叩かれハツとする。あと誰がおとうちゃんじやい。

「くう……ほら、ルナール先生も」

「ええ、わたしもっ!？」

「団長は……ハーヴェインとかの小柄な、かわいいのに……弱い」

「な、なるほど……そんな趣味が……」

「聞こえてんだけど？」

「け、けど私別にかわいいとは……」

「だ、大丈夫……ルナール先生ならイケる……っ」

「聞こえてんだけど？」

誰が小柄なかわいいのに弱いだ。その通りだよ畜生この野郎。

「だが心構えが出来てる今、安易なおねだり攻撃なんて」

「ダ、ダメ……?？」

「あ、団長白目向きおったわ」

えーなにあれ、えーハーヴェインの上目遣い、えーちよつと……あれ？ ルナルルさん、あんな可愛かった？ 昨日今日だけどこんな印象変わる？ あ、ダメ……た、耐えろ俺の常識い……。

「……あ、あんまり、船で耽美物の布教は、しないで下さい」

「や、やったつ!!」

「よ、よかつたね……ルナルル先生っ!」

あゝ可愛いのが二人はしゃいでるよ。

「チヨロすぎやで自分」

「可愛い無罪」

「大丈夫かいなこの騎空団……」

うーむ、島移動する度仲間増えるなあ、俺。これも喜んで良いんだか、悪いんだか。だが喜ぶセレストの笑顔、プライスレス。

ちなみにエンゼラに帰った時、「今度は団長が、どんなヤツを連れてくるか」の賭けが行われていた。ふざけんな。なお「女性で濃いキャラで、ドラフとハーヴェインの二人」と中々にピンポイントな予想をしたゾーイの一人勝ち。ヒューマン女性を予想して負けたティアマトに文句を言われたが、知ったこつちやない事であった。

■ 五（笑）と癒しの星晶獣が七体いて、割と吐く大酒飲みドラフトと、格闘馬鹿と、回る哲学者と、イケメン騎士と、頑張り騎士と、名の知れた商人相場師と、始終笑い続けるキノコキチハンターと、歩く天災のファッシュيونクレージと、腐女子絵師がいるアットホームで団長の胃痛が耐えない騎空団です

■ ある時、街を歩いていたらまた俺達の噂を話す男達がいた。どうせろくな噂じゃないとは思いつつも、聞き耳を立てる

「聞いたかよ、『星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y』にまた仲間が増えたってよ」

「ちよつと待てよ、ちよい前に笑いまくるハンターが仲間に入ったって聞いたばっかだぞ……」

「そうなんだが……しかも仲間になったと言うのが噂の歩く天災と、有名な絵師を仲間にしたって話だ」

「なんなのあの騎空団」

そんな事言われても知らん。俺だって自分の騎空団ながらわけわからんと思うわ。

「……ところで、星晶戦隊の面子……女子多くね？」

「それな」

どれな？ いや、ああそう言えば確かにうちは、女所帯である。今回の事で更に増えたからな。人間の男なんてフェザー君しかいないし。

「あとさ、なんでかハーヴィンとドラフ多いけど……これさ」

「え？ ああ……いや、けど」

「いやいや、流石に狙わないとこれ揃わないだろ？」

え、なにになに？ なんか嫌な予感するよー？

「確かに……全員ちっさいな」

「一部デカイけどな」

「ああ、一部な。ドラフはな……けど、やっぱり」

「うむ、もしかしたら……」

「あそこの団長、ロリコンか……」

違いますッ。

違いますッ！

違いますッ!!

「しかもハーヴィン、合法ロリ……考えたな」

考えてねえよ、何言ってるんだよ。馬鹿なのこの人達？

「けど团长って、まだ子供だよな？ 会った事ねーけど」

「合法ロリの年上ハーヴィン、ドラフ特有のトランジスタグラマー……すでに目覚めてやがる」

何に？ 何に目覚めたって？

「こりゃこれから見逃せねえな……あいつらの活躍によ」

全力で見逃せ。

「まったくだな……今度友達になろうかな」

「え、お前……」

二人の会話を打ちひしがれながら、その場を後にする。また、この事を後でコーデリアさんに相談すると、そつと蜂蜜を入れたホットミルクをくれた。

少し泣く。

衝撃！アウギュステ編

ギュステが荒れる5秒前

■ 序 同じ空の下 ■

「はあ……」

ある騎空艇、その中の食堂で一人、いや一匹で机の上に腰かけたため息を吐いている小さき者がいた。赤い皮膚に小さな翼。当然人ではない。彼は手に持ったリングをガジガジ食べては、またため息を吐く、それを繰り返した。

「おやどうしたビィ君？」

そんな小さき者、子供ドラゴンであるビィに声をかけたのは、鎧を着た女騎士カタリナであった。

「ああ……姐さんか」

「うん？ 元気がないな……何か悩みでもあるのかい」

カタリナはにこやかな表情でビィに語り掛ける。彼女は小さくて可愛らしいビィを気に入っていた。多少スキンシップが過激な時があるが、その事をビィは、ほどほどにして欲しいと思いつながら、よく思われていること自体を悪くは思っていない。

悩むビィの力になりたいとカタリナは、手を差し伸べる。だがビィは依然表情が曇る。

「悩み……まあ、悩みだなあ……ジータの事なだけだよ」

「おおう……そ、そうか」

ジータ、その名を聞いた途端、カタリナの表情は強張った。

今この場にはいない少女、ジータ。彼女こそまさに「ジータと愉快な仲間たち団」の団長にして、最近話題のイカれた奴ら「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女ZOY」の団長である少年の幼馴染であった。

カタリナとジータの出会いは、カタリナが元々所属していた帝国で道具の如き非道の扱いを受けていた神秘を秘めた少女ルリアと共に帝国から逃げ出す最中、ルリアが誤ってザンクテインゼルへと堕ちた事が始まりだった。ルリアを保護したジータは、カタリナと出会いジータは二人を逃がそうと戦いに加わった。だがその戦いで命を落としたジータだが、ルリアが自分の力で自分とジータ、二人の命を繋ぎ文字通り一心同体となる事で蘇生した。

その身に秘めた、有り余る力を目覚めさせて。

その後、運命共同体となった二人は、互いのために旅に出た。星の島イスタルシアを目指して。

旅の中で仲間も増やし、帝国の妨害や野望を打ち砕き進む彼女達。だが団員全ての悩みの種は、他ならぬ団長ジータだった。

強い、強すぎる。ジータは強すぎたのだ。一度命を落とし復活した彼女は、まるで何かの枷が外れたかのように強靱な肉体と溢れる力を得ていた。向かう所敵無し、戦略的苦戦はあれど彼女自身の実力で苦戦した事が今の所ない。しかもその強さは、成長を続けていた。

一度相対した全空でも恐れられ“化物”とも言われる七曜の騎士が一人“緋色の騎士バラゴナ”をして「あの人に負けず劣らず、化物ですね……貴女も」と冷や汗を流し言われたのは、彼女ぐらいだろう。なお、直後「体も温まってきました！ さあ、続きしましょう！」と疲労の無い笑顔で剣を振り回すジータを見て、流石にバラゴナも真顔で固まっていた。

強さは、騎空団を率いる団長であれば損な事ではない、むしろ必要な事だ。だが「ジータの事だ」と聞いただけでカタリナが顔を強張らせる理由は、ジータが強い上にトラブルメイカー&トラブル大好き人間と言う事だろう。

どこに行こうとトラブルを起こし、或いは巻き込まれ。そして嬉々としてそれを解決する全空一のお人好し、それが彼女なのだ。

聞こえはいいが、仲間は大変だ。ただでさえ「あの【ジータと愉快な仲間たち団】の仲間か」とか言われるのに、トラブルに巻き込まれるのだ。なまじしつかりトラブル解決して感謝されてるから文句も言えない。

もう少し落ち着きを持ってほしい、そう団員達は願い、誰よりも彼女と過して来たビイはもつと強く願っていた。

「ま、まあ話は聞こう……」

「オイラ達、ザンクティンゼルを旅立ってだいぶ経つだろ？」

「そうだな」

「それはつまり、ジータが兄貴と会わなくなって長いつて事なんだよ」

「兄貴？」

はて、ジータに兄弟はいたろうか？ カタリナは、首を傾げた。

「ほら、姐さんも会ったろ？ 見送りの時にクッキー焼いて来た奴だよ」

ビイに言われ思ひ出す。ジータに貰ったやたら美味しいクッキーを焼いて来たと言う男のぼやけたシルエットを。

「……あ、ああつ！ いたな、そう言えば……クッキーの美味しさ以外、印象が妙に薄く

て思い出せなかった」

「兄貴……本人がいなくても不憫な……」

ビィの言う兄貴、それは「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z OY」の団長の事だ。家が隣で親のいないジータとビィ、その普段の面倒を見ていたのは、彼だった。故に二人とも、少し年上の彼を「お兄ちゃん」「兄貴」と慕った。

「それで、彼に会えないと何か不味いのか？」

「ああ……そろそろ〝お兄ちゃん分〟が足りなくなる頃合いなんだよ」

「……すまん、ビィ君。もう一度たのむ」

「だから〝お兄ちゃん分〟が足りなくなるんだよ、ジータの」

カタリナは眩暈がした。日ごろ滅茶苦茶なジータだが、またよくわからない設定が出て来た事に頭痛も感じた。

「うん、気持ちはわかるぜ姐さん」

「……その、お兄ちゃん分とは？」

「ジータが言うには、自分が生きる上で欠かせない癒しと、栄養と、デトックス効果と高揚効果とテンションが上がる効果がある成分だつてさ」

「……それは、彼に会おうと補給されるのか？」

「らしいぜ？」

(……そうか、あの男もまた「生きる上で欠かせない癒しと、栄養と、デトックス効果と高揚効果とテンションが上がる効果がある成分」を持つルリアと同じ生きた神秘だったのか……)

カタリナは、一時思考を放棄した。

「冗談はともかく、結局何が問題なのだ？」

「ようは、ホームシックみたいなものだよ。兄貴に会いたくてたまらなくなるんだ」

「……それだけなら、問題なさそうだが」

「ああ、それが……お兄ちゃん分不足状態のジータのやつ、普段より妙にトラブルに巻き込まれるみたいでさあ……ザンクティンゼルにいた時も、一日二日お互い用事とか重なって近所なのに会えない時あったんだけど、そしたら山で竜巻が起きたり、一度も降った事がない雹が降りだしたり何かとあつてさ……」

お兄ちゃん分不足は、気候まで変えるらしい。論文にしたら、大発見だなとカタリナの頭脳は、思考の放棄が進んでいた。

「待て待て、ザンクティンゼルを発つて一日二日どころじゃないぞ？　なぜ今になって

……」

「なんか兄貴と交渉して、兄貴が使ってた毛布とクッション貰って来たんだってさ……けど、その効力がそろそろ」

「中毒患者か何かか彼女は……」

そしてそれが自分達の団長である事を思い出し、カタリナも椅子に座りため息を吐いた。

「それじゃあ、そろそろ我々はまた何ぞトラブルに巻き込まれるのだな……」

「いや、まあ兄貴に会えば多少解決するんだけどな」

あくまで“多少”だけだよ、とビィは付け加えた。

「それもそうか……だが今からザンクティンゼルへ戻るのには、結構な時間を要するぞ？」
「それがよ、前よろず屋が噂の「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z.O.Y」の団長が兄貴だって教えてくれたんだ」

「……何だって？」

星晶戦隊（以下略）。その名は、自分達が騎空団として活動し始めて少し経ってから轟きだした騎空団の名、カタリナはそのぶっ飛んだセンスの名をよく覚えていた。

「オイラ驚いたぜ、まさか兄貴まで空に出てるなんて。しかもあの星晶戦隊（以下略）の団長って言うんだからよ！」

今までと一転してビィの表情が明るくなった。

「実を言えば、オイラも兄貴に会えなくて寂しくつてき……その内会いに行こうぜってジータに言おうと思ってたんだ。けど今空にいるなら、もしかしたらザンクティンゼル

に行かなくても直ぐ会えるんじゃないかって考えてて」

「そうか、そうすれば必然的に……」

「ジータのお兄ちゃん分不足も解消されるってわけだよっ!」

「ビィとしては、兄貴と慕う彼に会いたいと言う思いと、ジータの「お兄ちゃん分不足症候群による、偶発的天変地異とトラブル」の頻度と被害を少しでも小さくしたい切な願いがあった。それは、この話を聞いたカタリナも同じである。

「近くシエロカルテ殿に頼んで会わせてもらっても、いいかもしれないな」

「だなっ! よろず屋なら、騎空団との連絡を取るぐらいできそうだしよ!」

ジータのお兄ちゃん分不足症候群を解消する手段を見つけられた事に喜ぶ二人。だがカタリナは、一つ気がついた。

「解決手段があるなら、何故あんなに悩んでいたんだい?」

「それは……姐さん、星晶戦隊（以下略）の名前ってどう思う?」

「どうって……それは、まあ」

「オイラ正直うちの団名より酷いと思うぜ……しかも、何故か知らねえけど、オイラの名前入ってるし」

「ああ……何故だろうな」

「B・ビィってなんだよ……兄貴、どうしちまったんだよう……」

ビイは知っている。自分が兄貴と慕うあの男が、ジータに普段から振り回され彼女の絶望的ネーミングセンスにも頭を悩ませていた事を。だからこそ解せなかった。彼に限って、何故こんなジータを上回る酷過ぎる団名を付けたのか。

ビイは知らない。兄貴と慕うあの男の元には、ジータと同等かそれ以上のトラブルメイカーで、彼の胃を痛ませ、団の資金を圧迫し、借金を増やす者達が多く集まり、その者達の所為で自身の考えた団名が採用されるどころか、クソ長い団名にされ、更に初期メンバー（しかも団長）にも関わらず名前を入れるのを忘れられていた事を。

きつとこの事を知ったらビイは涙を流すだろう。

「ま、何にしてもよろず屋に会わねえとな」

「では島にいったら会いに行くとしようか」

「ああ、久々のアウギュステだから楽しみだぜ!!」

ビイ達が乗る騎空艇、蒼き飛竜の如き姿。グランサイファー、その巨体は真っ直ぐに海の島アウギュステを目指す。

だが、もう一つ……ビイは知らなかった。最近追加された「星晶戦隊（以下略）の団長は、巨乳好きでロリコンの苦勞人」と言う諸々の噂をジータが既に耳にしている事を。既に波乱の種は、芽生えていたのだ。



一 行くぜギユステ

なんか、めっちゃ嫌な予感がした。

え、なんで？ 俺普通に甲板でクールに決めて考え事してただけなのに。どつかで誰か噂してる……いや、されるわ。と言うか最近噂しかされてないわ。持ちきりだわ、ろくでも無い噂で溢れてるよ最近。なんだってロリコン疑惑をかけられねばならんのだ。俺が何をしたって言うんだ……。

次もし仲間にするなら、男の人にしよう……なるべくゴリゴリのマツチヨさんにしよう。そうすれば、ロリコンとかなんてクソな噂は消えるはずだ。最悪でもコーデリアさんとかの様な大人の女性である必要がある。

そう言えば俺のロリコン疑惑を強める一因となった一人、ルナル先生が仲間になって、セレストは殆ど彼女の部屋に入り浸っている。元々倉庫の隅の暗い場所を気に入ってジメジメとキノコのように生活していたセレストだが、多少社交的になったと思っただ。だが、ルナル先生の部屋は、一部屋あげたその日のうちに魔窟と化した。持ち込んだ彼女の絵の資料が積み上げられ、そして先生自身の絵で更に埋まった。それを見に行くセレスト。二人の生活リズムは、殆ど同じで更にどちらも暗くジメジメした場所を好んだ所為でセレストはただいる場所が変わっただけだった。

今日も彼女は、ルナール先生の部屋でなにかの作品の話を書いたり、絵の練習したりしてんだろう。まあ趣味が出来たのは良いことだよ。ルナール先生の趣味が趣味なだけに、若干不安なのも事実だが。「受け」「攻め」とか廊下ですれ違う時になんか呟いてるんだよな……。

まあ今はやっとアウギュステに辿り着くことの方を考えよう。一々受けた依頼が面倒な事になって、移動も遅れに遅れたからな。同時に仲間も増えたが大変な道中であつた。もう一時間もすればアウギュステ、暫く羽伸ばせるかな。

「ああ、こんなところにおつた」

甲板でアウギュステでの事を考えていると、カルテイラさんが声をかけてきた。

「部屋にも食堂にもおらんから探したで」

「あ、そりやすみません。なんか用ですか?」

「いや、うちつて一応アウギュステまで乗せてつてくれつちゆう話しやったやろ?」

ああ、そう言えばそうだわ。なんか凄く馴染んでたけどこの人アウギュステまで運ぶという話だったな。

「アウギュステでも商売ですか?」

「もちのろんや。アウギュステは、空域でも一二を争う観光地で商売激戦区。当然人はぎょうさん集まる。やり方さえうまけりや、ちよつとした屋台でも相当稼げるで」

「遅い事で」

「そつちは？」

「もちのろん、バカンスですよ」

「はは、そらええわ」

ふらりと一度だけ寄つた事のあるアウギユステ。観光どころか、シエロさんから依頼の話聞いて終わったのだ。信じられねえ。

「もうね、しばらくは休みますよ俺は、もう疲れたわ。肉体と心が休息を求めているのがわかるね」

「そら疲れるやろなあ……他の騎空士でこんな疲れる仲間率いる団長そうおらんわ」
「わかつてくれますか……」

アウギユステでは何しようか。噂の海は、遠目で見ただけだからなあ、砂浜でのんびりして、海で泳ぐつてのは当然だよなあ。名産の海産食いまくるのもはずせねえな。ああ、あと船だ。騎空艇ではない水上を進む船も乗りたい。

「アウギユステはええよお。食いもん、名所目白押し。一日二日じゃ足らんわ」
「滞在日数は、しつかり一週間を予定してます」

「遊び倒す気満々やな」

「まだまだ遊び盛りの少年なので」

「せやったな」

あれもこれも、なんでもやりたい。ギュステが俺を、呼んでるぜ。

二 水の島、海之都

来たよ、ギュステに。

ああやつと着いた。もう俺の心はウキウキだ。海ですよ海、島に着いただけでもう磯の香りがする。流石海の島、改めて見て凄さがわかる。島の殆どは、広大な塩水の水溜り【海】になっている。巨大な湖等は、他の島にもあるがここまでの規模の水溜りがあるのは、ファータ・グランデ空域でアウギュステだけだ。団員の何人かも、海は初めてなのか甲板から身を乗り出して眺めていた。

「ヒヤッハーツ!! なんだアありやあつ!! 馬鹿デケエ水溜りじゃねーかアーっ!」

「あははははっ!! あ、あれが、わはっ! う、噂で聞いた……うっふっ! う、海か……っ」

特にハレゼナやルドさんの興奮具合は、他より大きい。ルドさんなんかは、元山賊らしいので、本当に珍しいのだろう。島上空からでも首都と観光地の砂浜が見える。水があるとところ人は集まるが、ここは別格だな。アウギュステは、アウギュステ列島特別経

済協力自治区と正式に呼ばれるが納得だ。カルテイラさんが商売に来るのも領ける。

騎空艇停泊は、島の特性故に島の岸壁への停泊ではなく、海への着水になる。その後
棧橋付近に止めるのだがこれも初見組には、中々衝撃だったようで驚いていた。かく言
う俺も、まだ水へ直接騎空艇が降りるのに慣れていない。楽しいけどね。

「これ……結構大変なんだよね……」

普段そうは見えないが、エンゼラの操縦を殆ど全て担っているセレストは、水上への
着水を何時もより慎重に行う。船型星晶獣時代でも着水経験など無かったと言う。も
しうっかり速度上げたまま角度間違つて着水すると、そのまま水に弾かれ最悪バラバラ
になるから神経質になる。その姿に、何時もありがとうと手を合わせておく。ありがと
う。

てなわけで、無事アウギユステへと来ました。

「ほな、うちはここで」

停泊の申請をしに行く時カルテイラさんが沢山の荷物を背負って挨拶をしに来る。

「ここまで助かったわ、ほんまおおきに」

「いえいえ、俺も助かりましたから」

「面倒事もあつたけども」

それ言われちゃうと弱いなあ。

「はっはっは……面目ない」

「にしし、まあお互い様や。うちミザレアの『願い橋』近くで店出すよって、暇あったら見に来てや」

「勉強してくれるなら行きますよ」

「うちは勉強熱心やでえ〜」

「だと思つた。それじゃ、また会いに行きますね」

「ん、ほなな〜」

手を振つて去つていくカルティラさん。短いながらも、濃い時間を過ごしたので、少し寂しいが時間もたつぷりあるし、アウギュステ居る間また会いに行こう。

その後滞りなく手続きを終えて俺達はついに街へと繰り出したのだ。

■ 三 星晶戦隊ご一行様

「自由行動に入る前に、言っておくことがある」

宿泊する宿に荷物を置いて部屋も割り振つた後、解散する前に団員全てを集めた。この後は、もう全員が自由行動でたつぷり一週間羽を伸ばす。故に、俺はちゃんと話しておかねばならない。

「我ら星晶戦隊（以下略）は、これから完全自由行動に入り誰かと行動するも、一人で行動するも自由だ」

「早く行カセロヨ」

うるさいよ、ティアマト。もう既に着替えて完全に遊ぶ気満々の服装じゃねーかこの野郎。セレブ気取りの服着やがって、なんだそのデカイサングラスは？ ファビュラスだろうつて？ 知らんがな、割るぞ。

「いいかね皆の衆、こうやって話を遮って勝手な行動をしようとする奴がいる。俺は大変その事が心配です」

「引率の先生みたいね」

「彼は何時もこの様な立ち位置なのだよ、ルナール」

「それは予想出来てたわ」

「我々でフォローもしているのだがね……」

うんうん、ルナールさんもこの数日ですっかり馴染んでくれたね。コーデリアさんの言う事に自分の事ながら眩暈を感じたが今はいいや。

「いいかつ!? 自由行動とは言ったが、常識をもって行動しろよっ!? 非常識な買い物、他人への迷惑は禁ずる！ 特に（笑）共、と言うかティアマト!!」

「名指シツ!」

「てめえ前の音楽隊の事忘れたと言わせねえからなっ！ 高額な物で欲しい物があつたらまず相談しなさいっ!! もし勝手に団の金でクソ高いもん買ったらただじゃおかねえからな、肝に銘じとけよっ！ マジでっ!!」

「ハイハイ、ワカリマシタヨ」

「……」

「ア、・ハイ。ワカリマシタ、ダカラソノ火属性ソードシマツテ」

後でそれとなくコーディネリアさんかブリジールさんに監視を頼んだほうがいいかもしれん……考えておくか。

「と言うわけで、ぶっちゃけアホな買い物や行動しなきやもういいです。はい、解散」

「実質ティアマトへの注意だったな」

「(・ω・) コリナイカラナア」

「ウルサイツ！」

シユヴァリエ、コロツサスの眩きに顔をしかめているティアマト。星晶戦隊同士でもすつかりこんな扱いか。

俺からの諸注意も終わったので、後はそのまま皆は思い思いに行動を開始する。

「私達は、観光がてら団長の情報を集めるとするよ」

「シャルロット団長も来てるかもしれないです」

リュミエール組は、本来の目的も忘れていないので実にしっかりしてるなあ。

「アウギユステの軍つてのは、ほとんどが傭兵らしい。かなりの手練れもいると聞いたからちよつと語り合つてくるぜっ！」

フェザー君、君はほんと変わらないね。観光しないの？ あ、こつちの方が楽しい……はいい、じゃあうんもういいです。怪我しないでね。

「アウギユステにも色々美味しいお酒があるからにやゝ今からはしご酒にやゝ」

この人も変わらねえなあ、まだ日も高いのに……さつきも言ったけど、常識ある行動を心がけてね？ あと吐くなよ？ 絶対だぞ？ 団長との約束だぞ？

「人が多いからね、色んな答えが聞けるね」

そう言つてクルクル回り飛んでいく我が団の哲学者。この人も他の人に迷惑かけないといひけど。

迷惑と言うとあとの問題児達。

「ルドさんとハレゼナは、一人で行動しないで下さい」

「あはは、だ、だ、だ、だ……いひひっ！」

なんなら部屋でじつとして欲しい二人組みだ。特にルドさん。しかしここまで来てそれはあんまりだ。

「ルドさんは、発作起きた時対処できる人と行動する事。今日は、シュヴァリエと一緒に

居てくれますから」

「発作が起きても直ぐに気絶させてやる」

「お、お手柔らかに、はははっ！ たの、む……うひひっ！」

「それと、主……この任を終えたら」

「ハレゼナは、そうだな」

「無視、放置プレイか……悪くないなっ！」

「君は、色々と、ぷふふっ！ て、手遅れだなあ」

変態の相手は疲れるからね。仕方ないね。

「ハレゼナは……よし、B・ビー頼んだ」

「な、なにいつ!? あ、相棒までそれは」

「トオ〜カゲ〜！」

「んぎやおっ!？」

無残B・ビイは、ハレゼナに抱きしめられた。計画通り。

「ハレゼナ、B・ビイの言う事よく聞くように。変な事しちゃだめだからね」

「任せろお！ さあ〜トカゲエ〜一緒にお出かけ、しようナア？」

「あ、相棒、まって……く、くそお……これは、特異点「るっ！」の影響か……っ!?! 力

が……ち、ちくしょお——っ!?!」

「久々に特異点〔るっ！〕が出たな。まあ奴の言う事は、よくわからない事しかないの
 で無視しよう。頑張れB・ビィ、ハレゼナに外の楽しみを教えてやれ。」

「ゾーイは？」

「私は、コロツサスとユグドラシルとで食べ歩きに行くよ」

「——♪」

「カイセンリヨウリ（*、ω、*）タノシミダネ」

「今日の分のお小遣いだと、どれぐらい回れるかな？」

「——？——♪」

「シヨニチダカラ（*、ω、*）ヨウスミデイコウ！」

平和だ………すさんだ俺の心が癒されていく。コロツサスは、店の入り口氣を付けて
 ね。

「あれ、そう言えばセレストは？」

「もうルナールと出かけたぞ？ アウギユステでしか見つからない本を探すと言つてい
 た」

あの二人、好きな事への行動は、妙に早いな。インドアなのかアウトドアなのか分か
 らん。

「リヴァイアサンは、こっちの自分に顔出しに行くんだよね？」

〈ああ、直ぐにでも会いに行く〉

「じゃあ、俺も行くわ。一応顔を出した方がいいだろうし」

海にさえ行けば何処でもいらしいので、近くの海岸に行けばいいだろう。

さあ、俺達のアウギュステ一日目が始まるぞ！

■

三 楽しい一週間が始まる。とでも思っていたのか？

■

〈最近、海水がちよつと肌にキツク感じてきてな……〉

〈たまには汽水域に入らないとダメだ。海水だけだと肌に悪い〉

〈そつちはどうケアしてるんだ？ 〉

〈生け簀は、淡水で水質を軟水か中性にしてる。ただ、海水生活が長かったからかたま

に塩水にしないと逆に鱗が弱るな〉

〈いいな……こつちじゃプライベートな場所がないからな、勝手に水質を変えられん〉

〈どこか人気の無い入り江がなかったか？ 　そこでなら良いだろ〉

女子か。

もう一度言う。女子かつ！

うちのリヴァイアサンと一緒にアウギュステのリヴァイアサンに会いに来たが、二体

の会話があまりに女子過ぎて言葉を失う。すっごいシニールだよ。二体の星晶獣が肌ケアの仕方を熱心に話し合う光景。しかも人型じゃないときたもんだ。と言うか、お前等肌じゃなくて鱗だろ。

頭が痛くなりそうだったので、俺は早々にその場を後にした。付き合ってもらえん。リヴァイアサンは、暫く海に残るそうなので何なら最終日まで帰らん。そう思うと（笑）の一体が一週間いないのでちよつと気が楽になった。

だが呆れたやり取りを見た所為で初日も初っ端から疲れたな。いや、しかしまだ一日目、俺のアウギユステは始まったばかりだ。前向きに行こう。ほらもう既に俺の周りには、アウギユステ自慢の名産を扱う店が並ぶ。今の俺は、完全フリー、B・ビイも居ない。好きに出来る、選り取り見取り、さあ！どこから行こうかな！

「うう……っ!？」

「あ、ご婦人大丈夫でありますか？」

「いってーなあ、ババア？ ちんたら歩いてるんじゃねーよ、邪魔だつー!」

「何を言っているでありますかっ!?! 今のは、そちらからぶつかって来たではありませんせんかっ!」

「あゝん、俺達が悪いつてのによ?」

「そう言ってるのでありますっ!」

「たくつなんだあ？ さつきからこのガキア？」

「だ、誰がガキでありますか！」

……さあ、どこから行こうかなっ!!

「お、お嬢ちゃん、私は大丈夫だから……およしよ」

「いえ、この様な非道を見過ごすわけにはいきませんっ！」

……さあ、どこから行こうかなっ!!

「おうおう、威勢のいいガキだ。一丁前に玩具の鎧に剣なんぞ持ちやがって」

「玩具じゃないでありますっ!! これは由緒ある騎士団の鎧であります！ それにこの剣も」

「あーあーうるせえなあっ!! 痛い目見たくなかったらとつとと消えなっ！」

「それとも俺達に喧嘩売る気かあ？ チビのくせによお！」

「ななな……っ!! ガキだけでなくチビとまで……も、もう許さないのであります！ 全員成敗するでありますっ!!」

なんなのっ!! 何で態々一步踏み出そうとした目の前で俺の行く道を全部塞ぐように老婦人が不良グループに絡まれてそれに割って入ったハーヴィンの女と不良グループの争いが起こるのっ!? 治めろっつてか、俺にっ!!

「馬鹿がつ！ かまわねえ、たたんじまえっ！」

「ヒヤハハハッ！ 身包みはがしてその鎧と剣売り払ってやるぜーっ！」
「しねえ〜〜いっ!!」

俺は茶番か寸劇でも見せられてるのかな？ なにこの絵に描いたような三下奴。馬鹿なの？ だがハーヴィンの騎士（？）が悪漢に襲われそうになっているのは事実……
しゃーない、助けに入るか。

「甘いでありますっ！」

「うづっ!!」

（おっと……これは）

思わず感嘆の声を漏らした。ハーヴィン女性だからと甘く見てしまったなあ、殴りかかる悪漢に対して難なく攻撃をかわし手に持つ剣の柄頭で鳩尾を突いた。相手はそのまま気を失ったようだ。

「こ、このガキ！ もうただじゃおかねえぞっ!!」

「無駄口を話す暇があるなら、皆でかかって来てはどうですか？」

「な、舐めやがって〜〜くらえっ」

「まだまだっ！」

「ほげえっ!?!」

「おい、なんだっ!?! やべえ、強いぞあのハーヴィンッ!!」

おーすげえ、すげえ。幅広の剣身部分の腹や柄頭の部分で血を流さず戦ってやがる。これは、助けいらぬいな。

しかし、その動きの滑らかなこと、荒っぽい喧嘩しかした事無いのであろう悪漢達の大振りばかりの攻撃は、彼女にかすりもしない。同時に剣の重心を利用した攻撃は、見た目以上の攻撃力がある。回避に攻撃、小柄の体型をむしろ有利に使っている。ただのハーヴィンじゃねーなこれは……。身に着けている鎧も立派だし、どこぞの騎士様かもしれな……。い……。い……。

『搜索対象の情報は、その者がハーヴィン族であること』
『シャルロット・フェニヤ、我らリユミエール聖騎士団の現団長だ』

俺の脳内で過去の情報が蘇る。見覚えのある蒼い鎧に剣、ハーヴィンの騎士。なんかリユミエール感あるよ……。？ いやいや、まさかそんな……。こんな偶然ってある？ ないない、俺の休暇一日目からこんな騒動の種に出会うなんてありえないって、マジで。「口ほどにも無いであります」

とか悩んでたらもう男達は、地面に伏していた。彼女が強いのもあつたがやつば烏合の衆だったな。

「く、くそ……」

あ、この野郎。

「しつこい、展開的にも大人しくせい」

「あひっ!!」

「むむっ?」

彼女にやられて後ろで倒れていたが、ナイフを手にして起き上がった一人の男を拳骨で気絶させる。

「いらん手助けだったかな?」

「いえいえ、助かりました。感謝いたします」

互いに挨拶。しかし彼女の顔より、その頭に載せた身の丈の半分ぐらいの冠が目につく。40センチ程度かな? どうやっても視線がそこにいくな。

「むっ? どこを見ているでありますか?」

「冠」

「むむっ! 自分の顔はその下ですっ!」

「分かってますよ、視線合わせます?」

だがそうするには、しゃがむしかない。子供に対する接し方だな。試しにしゃがんでみた。

「うぐぐぐ……これはこれで、馬鹿にされてる気がするであります!」

「してるつもり無いですけどね」

「そ、それはわかっているでありますが……」

「ハーヴェイン故致し方なし」

「はつきり言いすぎでありますっ?! もっと誤魔化すなどしないでありますかっ!」

「まあまあ。奥さん平気? 怪我してない? 荷物これで全部かい?」

「ああ、ありがとうね貴方達……」

腰を抜かしていた婦人を助け起こしてのびた悪漢達は駆けつけた衛兵……ああ、アウギュステだと傭兵なのか? まあ担当の人達に任せた。まあこいつらはいいいんだ、問題じゃない。問題は、悪漢達に立ち向かい数と体格の不利をもつかもしれないハーヴェインの彼女。ああ違つて欲しい、厄介事にならないで欲しい……だが確認しないわけには行かない、コーデリアさん達の依頼は、まだ生きている。もし彼女がそうであるのなら、コーデリアさん達に教える必要があるのだから。

「先程は助かりました。改めて御礼を言わせて欲しいであります」

「なに、あんたなら問題なかったんじゃないかな。けどあんた強いねえ、どつかの騎士かい?」

それとなく確認。いや、けど違う可能性の方が普通大きいよね? 早々こんな連続で島に立ち寄るたびに色々濃い人に会ったりなんてね? まさかまさか、そんな御冗談を。

「はい。自分は、かのリュミエール聖国を建国せし、誉れ高きリュミエール聖騎士団の現団長を務めております、シャルロット・フェニヤであります！ 以後お見知り置きを」

……知ってたよ、この展開……。

——星晶戦隊（以下略）、ギユステバカンス一日目。【ジータと愉快的な仲間たち団】アウギユステ到着四日前の事であった。

嵐の前の静かすぎる数日

■ 一 フェイトエピソード 小さくも、高き志を胸に

空には、多くの国がある。そして国の成り立ちは、それぞれだ。

優れた者が王として選ばれ、国とした。

人々を力でねじ伏せ己の国とする。

何かの目的で集まり何時しか国となる。

しかし栄枯成衰、国生まれればまた滅びもする。それを繰り返すのが世の習いである。その中で長い歴史を持つ国こそ安寧の国なのだろうか。

ここもまた長い歴史を持つ一國、かつて正義を掲げ集った騎士達が建国したりユミエール聖国という国がある。何時の世も正義を求める声は止まない。その声に答えるため、何時しか騎士が集まり国となった。聖王と呼ばれる者を王として、それに仕えるのは、誇りあるリユミエール聖騎士団。

「清く、正しく、高潔に」

それを掲げた者は、誰だったのだろうか？最初の騎士団長か、初代聖王か。だが誰が言ったのかは、重要ではなかった。その言葉の重みが、聖騎士団の結束を生んでいる。その三つの言葉を胸に刻み、信じる事が出来るならば、リュミエール聖騎士団は、これからも繁栄し正義を護り続ける。

その事を騎士団の者は、誰も疑わない。だが、ある時リュミエール聖騎士団の歴史上例の無い事態が起きた。現団長、シャルロット・フェニヤの出走であった。

シャルロット・フェニヤは、若きハーヴェインの騎士である。ハーヴェイン族の騎士団員は、決して少なくない。だが多くが下級の見習い騎士などである。あるいは、体格の不利に悩まされ剣を置き騎士団の事務仕事を担う事になる者が多い。戦う騎士として重要な役職につく事は、ハーヴェインと言う種族の体格ゆえにまず無い事だった。その本来戦いに向かぬ小柄なハーヴェイン族である彼女が誉れ高きリュミエール聖騎士団の団長となれたのは、尋常ならぬ鍛錬の成果である。

ハーヴェインの努力を笑う者も居た。無駄だと言う者も居た。だがそれを気にする事無く直向な努力を続ける彼女の姿に何時しか騎士団の者達は、騎士としてあるべき姿を彼女に見出し、そして思った。彼女こそが、新たな団長に相応しいと。そしてシャルロットは、リュミエール聖騎士団の新たな団長と成ったのだ。誰も考えもしなかったで

あろう、ハーヴェイン族の騎士団長として。

騎士団長としての任は、並大抵の物ではない。騎士としての戦いは勿論の事、騎士団の運営にも関わる。慣れぬ運営業務は、他の団員が手伝いを申し出て彼女の助けとなった。戦いの場でも、頼れる仲間が居た。皆がシャルロッテを慕い団長として尊敬していた。

その事を誇りに思い、自分はなんと仲間に恵まれたのだろう、とシャルロッテは思っていた。だが、ある日任務で外に赴いた折人々の噂を聞いてしまう。

「リユミエール聖騎士団の新しい団長は、ハーヴェインだそうだ」

「小さなヤツに従うようじゃ、あの騎士団もお終いだぜ」

所詮戯言である。小柄なハーヴェインが騎士団長と言う名誉を得た妬みでもあるかも知れない。だが当事者であるシャルロッテにすれば、その言葉は如何なる刃よりも鋭く胸を抉った。何より、あの信頼できる仲間達までもが嘲笑の的にされる事が悔しくてたまらなかつた。

自分がハーヴェインである所為で、この事で悩む事が以前より多くなつたシャルロッテは、目に見えて落ち込む事が多くなつた。そして噂を聞いた団員達は、それが原因と察し「そんな戯言気にはしない、言わしておけばいい」と話し、また彼女を気遣い励ました。その心遣いに更に仲間への感謝の念を強くしたシャルロッテだったが、一つ気がつ

いた。

(あれ……?自分、マスコット扱いされてはいませんか……?)

妙に甲斐甲斐しい気遣いや、着せ替え人形の如き扱いで可愛い服を団員が持ち寄ってきた時自分の扱いに気がついた。勿論団員達の騎士団長への尊敬の念は、並々ならぬものがあるが、それと同等か稀にそれ以上の熱意を込めて愛でられている様な気がしてならなかった。

彼女はもう24の大人の女性だ。見た目が小柄だからといって子ども扱いを受けるのは耐えられない。ガールじゃないのだ、レディなのだ。これはいよいよハーヴェインの体型ではいられない。シャルロットは、ある決意をした。

体型に悩まされていたのは、今に始まった事ではない。だから彼女は、知っている。子供の頃から調べていたのだ。この空には、想像も付かないような神秘が散らばっている事を。そして、その神秘の力を使えば、今の自分の姿を念願のヒューマン、エルーン、ドラフ(胸部)顔負けなダイナマイトなボディに変える事も可能に違いないと。

そして、出奔へといたる。

勿論黙って消えたわけではない。名目上は、他国で活動する騎士団員の査察とした。だが行動が唐突過ぎたため団員達からは、突然消えたように思われており、更に「身長をおつきくしたい」と言う真の目的が目的だけに、内心申し訳なさや情けなさであまり

本国と連絡を取ろうとせず、ついにリユミエール騎士団は、彼女の行く先を見失い失踪扱いでもある。

そして一応他国での騎士団査察もすっかり、こっそり行いながら、島々をめぐり身長アップの手段を探していた。そんな中で彼女は、アウギユステへと訪れていた。理由としては、ちよつとした「願掛け」をしに来たのだが、そこで偶然老婦人に狼藉を働く悪漢達を目撃してそれを成敗する。その中で手助けに入った一人の少年と出会う事になった。

「いいでありますか？自分はこれでも立派な大人の女性なのでありますよ？」

「知ってます、分かっています」

「なんだかいい加減でありますなあ……」

自分の名前を知った途端、妙にテンション下がった少年なのであった。

■ 二 まともな休日など送らせるものか

■ 「シャルロッテ団長に、会っただって……？」

「そつす」

我ら星晶戦隊（以下略）の宿泊する宿のコーディアさん達の部屋に俺達は集まった。

勿論リユミエール聖騎士団団長について話すためだ。そのまんま今日シャルロットに出会った事を話したら、コーデリアさんは久々にシリアス顔になった。

「才前ハ、初日カラ厄介ナ事ニナツテルナ」

「うるさい」

「それで、シャルロット団長は？」

「引き止めても怪しまれるんで、適当に誤魔化してまた会う事にしました。勿論コーデリアさん達の事は、話してないです」

「素晴らしい、何時でも遊撃部に入れるよ」

「……次の事聞いてもそれ言えます？」

「と言うと？」

シャルロットさんと出会った後、無理に引きとめ怪しまれないように誤魔化したのは本当だ。ただその時色々と後日合う理由を考えた時、シャルロットさんがアウギユステに慣れている雰囲気を感じて出てきた言葉が「アウギユステって初めてで、何見れば分からないから、案内してくれませんか？」であった。

アウギユステは二度目だが、観光は初めてだから嘘じゃないよ？何見ればいいのか分からなくて案内が欲しいのも本当だよ？調度助太刀のお礼をしたいと言われたのでそれにのった形になる。最初めっちゃキョトンとしてたけど、結局「お任せください、ア

ウギユステは、何度か来ております」と自信満々の彼女に観光案内を頼むことに成った。しかもその後にはシャルロットさんに予定を聞かれて失敗をする。

「日程はどの様になつていてありますか？」

「あく、今日込みで一週間だけ……どつか都合がいい日で……」

「おや、それは奇遇でありますな。自分も一週間ほどアウギユステに滞在する予定なのであります」

「え？ ああけど、どつか一日だけで」

「ただ今日は、少し都合が悪いので……それでは明日にでもまたお会いしましょうか」

「え、あ、いやその」

「六日もあれば、十分にアウギユステを楽しめるでしょう。楽しみにしていて下さいであります。騎空艇の係留所近くの閘門、あすそこで落ち合うといたしましょう」

「あ、はい場所は、わかりますけど、あの」

「それでは、自分は用事がある故ここで。また明日にお会いしましょう！」

「あ、あはは……た、楽しみだなあ……さいならあ……」

てな具合である。俺は残り六日間シャルロットさんと共にアウギユステ観光をする事になった。我ながら上手いこと話をこまかし進めるのが下手だと思った。

「てなわけで、俺明日からシャルロットさんとアウギユステ巡りしないといけなくなり

ました」

「なるほど……遊撃部見習いからかな？」

呆れた様子ながら笑みを絶やさないコーデリアさんは、流石だと思いました。

「君は、本当に面白いなあ」

「押シニ弱インダ、コイツハ」

「気合が足りないぞ団長！」

えらい面白そうにしてるねフィラソピラさん、俺が困った顔してるとほんと嬉しそうだね。あとティアマトもフェザー君もうるさい。

「どうしましょうか、別に明日とつととコーデリアさんが用事済ませても良いと思いますけど」

「ふむ……」

顎に手を当てて思索するコーデリアさん。申し訳ねえな、無駄な面倒起しちやつて。

「いや、ここは一つ様子を見てみようか」

「様子、シャルロツテさんのですか……」

「相手を問い詰め真意を問うのは、いつもの事。だが、話を聞いているとシャルロツテ団長は、君に気を許したようだ」

コーデリアさんに「その点は、本当に人たらしだね」と言われてしまう。覚えがあり

ませんなあ。

「自然と出てくる言葉にこそ真実はある。我々では、顔が割れているかもしれないからね。団長殿、一つ君にはシャルロット団長が失踪へ至った経緯をそれとなく調べてみて欲しい」

「俺がつすか……」

「事態をややこしくした責任を取るつもりで頼むよ」

ああつらい、それ言われるとつらい。あとコーデリアさん、めっちゃ笑顔つすね。

「気が休まらない休暇になってしまった……」

「自業自得だ」

「やかましいー！」

「ふふ、まあ良いじゃないか、リユミエール聖騎士団の団長に案内されてのアウトギステ観光なんて、滅多に無い機会だ」

「うう……じ、自分もお供したいです。シャルロット団長との観光……」

変わるなら変わって欲しいよブリジルさん。けど貴女だとなんか俺以上に嘘がつけなさそうだから、きつとこう言うの向いてないですよ。

「それと、君が【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y】の団長だとバレると、そこから私達に感づかれるかもしれない」

「知ってますかね、あの人」

「団長の顔を知らなくても、名は知っているかもしれない。名前は名乗ったのかい？」
「いや、なんか急いでたみたいで、俺だけ名前言つてないです」

顔どころか名前も最近覚えられてない気配があるけどね。俺つてば。いい加減団名変えるか、せめて俺の名前入れたい……。

「そうか、普通なら礼を欠くが今回は、かえって都合がいい。君が騎空士である事も話してはいないね？」

「身の上話する暇も無かったつす」

「よし、ならば明日から君は、ただ観光に来た一般人だ。シャルロット団長には、偽名を名乗りたまえ」

「偽名……何にしましょうか」

「『ジミー』トカデ良イダロ、地味ダシ」

「んっふ……」

ねえ、コーデリアさん笑った？ねえ、今ティアマトの発言聞いて笑った？

「ああ、成る程ジミー……」

「あはは……っ！ジ、ジミー団長……っ」

「星晶戦隊（以下略）団長のジミーか」

お前らジミー、ジミー煩いぞこの野郎、畜生!!

嫌だからな!?俺そんな偽名嫌だからな絶対!!聞いているのかお前ら、この野郎てめー
オイコラ!?オーイツ!!

三 ジミー団長（仮名）のウギユステ二日目

「……………」

アウギユステの首都ミザレアは、商業と観光が盛んな水上都市として名を馳せている。アウギユステ列島内の移動は、主に空を飛ぶ騎空艇でなく水上を進む船で行われる。ここを訪れる人の中には、水の上を進む船を珍しがる者もあり、観光用の船もまたミザレアの観光資源である。

張り巡らされた水路は、主に移動のために作られたものである。中でも水位を調整し船を上下させ進ませる閘門こうもんと呼ばれる装置は、豊富な水量と水路を持つアウギユステぐらいでしか見られないために、観光客が見に来る名所の一つでもある。

そんな幾つかある閘門の内でも有名な一つの傍で、やたらソワソワした挙動不審な男が一人いた。星晶戦隊（以下略）の団長である。普段の服装……は、どんな格好を好んでるかも団員からは、既に忘れられているが、多少（彼なりに）決めた服装に身を包ん

でいる。

「アノ馬鹿、モウチョット御洒落ヲ出来ナイノカ」

「あれが相棒の限界だよティアマト」

「ダカラ私ガ、コーディネートシテヤルト言ツタノニ」

さらにその挙動不審な男を、建物の影から覗く幾つもの影があった。

「団長は、何故あんなに緊張してるんだ？」

「今朝起きて、冷静になって初めて女性とデートをすると気がついたそうだよ」

「童貞力振り切れてるな、主殿」

「け、けど……相手の人、たぶんデートとか、思つてないよね……」

「デートと言うか、デート（笑）って感じね」

「あれ？騎士団長と語り合うんじゃないのか？」

「フェザー、君はそれしかないのかい？」

と言うか、ティアマトやらコーディアやらルナルやらがワラワラと物陰にいた。この事を団長である彼は、まるで知らない。普通に休日を過ごすように言っておいたのだが、彼らは「ジミー団長（仮名）見たたほうが面白そうだ」と言つてみんな来てしまった。

だが、まるで潜んでいない。すっかり建物からは、はみ出ている。当然である。省工

ネモードに加え未だ海にいるリヴァイアサンを除くとは言え、星晶戦隊が5体にB・ビーとゾーイ、その他団員全員だ。むしろ、どうやって覗き込む姿勢を維持してるか不思議でならない。他の通行人がギョツとしているのが当然の反応だ。

「けど、それで団長はボロ出さずにお相手できるのかい？」

相変わらずクリュプトンに乗ったままで目立つフィラソピラの懸念にB・ビーが胸を張って答えた。

「そこは、相棒を知り尽くしたオイラがアドバイスしておいたから平気だぜ」

「ほう、どの様なアドバイスをしたんだい？……あと、彼の事で少し色々聞かせてくれ、好きな料理とか」

「お？おう……まあ、アドバイスは簡単だぜ。『普段どおり』ってな。うちの団員と接する感じでいいのさ」

「……それって大丈夫なの？」

入団して日が浅いルナルだが、普段の団長の言動を思い出しむしろ不安になった。だがB・ビーは、心配する素振りはない。

「どうせ緊張して畏まったって、相棒は面倒な事になるだけさ。なら何時もどおりのノリでやった方がやりやすいってもんさ」

「そんなもんかしらねえ……」

「それに、相手がハーヴィンってなら……たぶん大丈夫だろうな」

「ハーヴィンならって……」

「んあ？アレじゃあねえのかあ？」

ハレゼナが閘門へ来るための橋を渡つてくる一人のハーヴィンを指差した。私服ではないが、かと言つて重装備でもない、この空の街中では珍しくも無い軽装の騎士が現れる。

「ああ、間違いないシャルロット団長だ……」

「わ、わ……ほ、本物のシャルロット団長ですッ」

リュミエール組み二人が間違いないと頷く。一方シャルロットは、待ち合わせ相手の男を捜してキョロキョロと辺りを見渡しながらトコトコ歩いていた。

「あーやばい、アレは相棒の琴線触れるわ、色々ストライクだわ」

愛らしさ100%の姿を目にしてB・ビィは、何かを覚った。

「アレツテホントウニ（*・ω・）ダンチヨウサン？」

「その通りだ。ハーヴィン種特有の体格でありながらも、並々ならぬ鍛錬を行い我らがリュミエール聖騎士団の団長と成った彼女こそが」

「あ、迷子と間違われて声かけられたにゃ」

「……彼女こそが」

「才前ラノ団長、子供扱イサレテメツチャ怒ツテルゾ」

「……」

「コーデリアちゃん、辞めないで!?!そこで言葉を詰まらせちゃだめです!」

「おや、団長が気がついたよ?」

プリプリしてるシャルロッテに気がついた彼は、急いで駆け寄り何か適当にその場を誤魔化したようだった。だがいつそうシャルロッテの機嫌が悪くなつたようにも見える。

「——?」

「ユグドラシルに、大丈夫かって心配されてるぞ相棒……」

「何言ツタンダカ」

「B・ビィのアドバイス通り、〃いつも通り〃だったんだろう。主殿は基本適当だからな」

「おっと、どうやら移動するようだよ?」

プリプリするシャルロッテをなだめながら、団長が移動を開始する。

「よし、確かにシャルロッテ団長である事は、この目で確認できた。一度散ろう、各自それとなく彼を監視しておくように」

「もうコーデリアが団長でいいんじゃないかなーのかな」

「ふふ、この団は彼が団長でなくてはダメさ」

「んは、じゃ、じゃなきや……んふふつ、私の様なヤツも仲間になれなかつたからね、あはっ！」

「それもそうだな、よっしやそれじゃあ別々にこうど、ごおっ!」

「トカゲエ〜? お前は、ボクと一緒だよ〜」

「お、おう……う、うで緩め、ゆるめ……」

と、賑やかに彼らは解散した。それにまるで気がつかないジミー団長（仮名）とシャルロッテ騎士団長のダブル団長であった。

■ 四 やあ、ボクはジミー、ハハッ!

「うう〜迷子扱いなんて……屈辱でありますう」

「まま、しかたないっすよ。一応善意ですよ、相手も」

「それは、勿論承知でありますが……と言うか、ジミー殿! 娘とは、なんでありますか! そっちの方が酷いであります!」

「第一印象で決めてました……」

「なお酷いっ!」

迷子の迷子の、リュミエール聖騎士団現団長シャルロット・フェニヤ（24歳児）を保護した俺だが、誤解解こうとした時、「あ、すみません俺のツレなんです」「……娘さんですか?」「あ、はい」と勝手にシャルロットさんを娘にしてしまった。

「そもそも種族が違うではありませんか……」

その所為でシャルロットさんを憤慨させてしまった。けど、ごめんなさいプリプリして怒ってるのが、その、可愛い。言わないけど。あと種族については、気付いてたんじゃないかなあ、そうでなくても……相手の人「お若いのに……」とか妙に同情を含んだ視線をしてたけど、あれ若い義父と養子と思われてないか。

「すみませんって」

「まったく……」

後、誠に遺憾ながら偽名がジミーになってしまった。反対意見が俺しかおらず、謎のジミー推し勢力によって、暫し俺の名はジミーです。

ダメかなあ……偽名で「グラン」ってかっこいいと思うのに。

「ふふん、しかし自分の考えたアウギユステ観光ルートを堪能すれば、そのような認識は、一変するでありますよ」

「自信満々つすね」

「勿論であります。今日含め6日間でじっくり巡るルートで自分が考えた完璧な大人な

観光ルートであります」

あー「大人な」、とか言っちゃうんだ……。と言うか、俺年齢的に未成年なのだが、まあいいけど。

「これでジミー殿もアウギユステ知り尽くしの満足コースであります！」

「ほう」

大人かどうかは別として、それはジツとしてられないな。ワクワクが押し寄せてくるぜ。

「まずは、ミザレア観光であります。一日じっくりとミザレアを見て回りましょう。ジミー殿は、そもそも水上都市が珍しいのではないのですか？」

「確かにそうですね。でかい湖すら驚くのに、海とくればもうね。しかもその上に都市建ててるってんだから、昔の人は大したもんですよ」

建物を縫うように巡らされた水路。そこには、廻船の船や観光用の小舟が行き来している。ザンクティンゼルでは勿論、他の島でもそうそう見れない水の島特有の光景だ。

「そうでありますな。自分も最初に来た時は、驚いたものです」

「何時頃来たんです？」

「まだ見習い時代に、任務の一環だったはずですよ。自分は生まれが一年通して雪に埋もれ囲まれた島でしたので、驚きも一入でありました」

「俺もつすよ。なんせド田舎でしたからねえ。と言うか、俺雪って言うのも見たことないなあ」

「そう面白い物でもありませんが、観た事が無い方にすれば珍しいのでありますなあ」

しかし、ジータもこの島に来てはしゃいだんだらうなあ。その時の事を聞いてみたいもんだ。

「船を利用した店も多くあります。一定の場所で商うも良し、要望があればそのまま船で移動も出来るので、都市の特徴をよく活用した商売が確立してあります。アウギユステの特徴の一つでありますな」

通路に寄せられた船には、主に日用雑貨が積まれている。食料品も加工品や調理済み物ではない、殆どが素材をそのまま売っている。観光客よりここの住民向けの商売のようだ。

「時間はありますゆえ、一つじっくりと街を見て回りましょう。入り組む水路に沿って進むのもまた面白いであります」

「確かに」

ここは、ブラブラのんびりするか。B・ビイに言われてしまったが、気負いすぎると空回りしかねない。女性と二人っきりのデートみたいだと思って緊張してしまつたが、幸いシャルロットさんを目の前にして、逆に何故か緊張しなくなつたからな。何故かは

……まあ、考えないでおこう。決して保護者気分になったとかではないはずだ。そう信じた、互いの名誉のために。

■ 五 増える騒動の種類

「まいどおおきにー！またきてやー！」

商品を手渡して快活な声を上げる一人のエルーン。アウギユステの名所“願いの橋”の傍で店を出すカルテイラの声。人通り多く賑わうその場所に彼女は、一時店を構えていた。

団長達星晶戦隊（以下略）一行と別れてから直ぐに宣言通り商売を開始。既に目標とする売り上げに向かいガンガンと売上を伸ばしている。主にアウギユステでとれた貝類の貝殻やサンゴなどを使用したアクセサリーやお守りを商品にしている。色とりどりのアクセサリーを売りに売りまくっている。

アウギユステでの商売は、初めてではない。こなれた様子で店を切り盛りするカルテイラの頭には、商売仲間でありライバルでもあるシエロカルテの事が浮かんでいた。少し前にアウギユステの幾つかあるビーチの中でも、特にリゾート地として知られるであるベネーラビーチに新しいよろず屋の店舗を建てたと言っていたのだ。

新店舗開店を祝うのと同時に自分も負けてられないと俄然商売への熱意が燃えた。シエロカルテと違いカルテイラは、一定の場所に店を持たないがそれゆえの強みを持つ。自分は、自分の商売でシエロカルテをアツと言わせようと奮闘していた。

「カルテイラ、儲かっているなあ」

「お？おっちゃん、待ったわ」

大きな荷物を抱えたドラフの男がカルテイラの店を訪ねて来た。荷物の中身は、全てアウギユステで作られたアクセサリー、即ちカルテイラの商品であった。

「持ってきたぜ、希望通りの奴だ」

「おおきに！」

貝にサンゴ、ヒトデなどの物が入っている。カルテイラは、それを物色するが、その最中一つのアクセサリーを手にとって動きが止まる。

「おっちゃん、コレはアカンわ、角が欠けとる。あ、あとコレもや」

「ありや？運んでる時ぶつかったか？すまん、後で別の持つてくるわ」

「んく……珍しいなあ、アウギユステで採れたのなら、かなり丈夫やから、そうは欠けへんのに」

「ああ、たぶん前に採れたの使ったな。覚えてるだろ？帝国が悪さして海が汚れてた時」

「あー、あれなあ」

男の言う事にカルテイラは、覚えがあつた。彼女だけではない、アウギユステに住む者は、誰もが覚えている。

数か月前に、帝国がアウギユステを自らの支配下に置こうと活動した事があり、その際に島の海を汚した事件があつた。更に星晶獣リヴァイアサンを暴走させたが、あの【ジータと愉快な仲間たち団】のジータが物理的に解決させて、事件は終息した。それでも事件の影響は、後々まで残つた。

海が汚された影響を受けた貝やサンゴは、脆くなつていたのだ。アクセサリーやお守りにするには、強度が足りなかつた。それだけでなく、海産物全体が打撃を受けていた。徐々にその影響も落ち着きを取り戻しているが、全くなくなつたわけでは無い。

「ほんつま帝国は、碌な事せーへんなあ……」

「ああそうそう、その帝国だけだな、なーんかまたアウギユステに来てるらしいぜ」
「またかいな……」

男の言葉を聞いてカルテイラは、酷くげんなりした。それ程までに帝国の悪名は、高いと言える。

「具体的に何してるのかつてのは知らねえけど、十数人の帝国兵が来ては帰つてを繰り返してるとか……俺あどうも嫌な予感がするよ」

「うちもや……態々商売し始めた時にこんでもええのに、んもー」

「全くだな。まあ、また物騒な事が起きる前に島離れた方が良いかもしれないねえな。ちよつと考えときな」

「教えてくれてどーも。取り合えず入荷分は、売り切つてから考えるわ」

「はは、相変わらず商魂逞しいな、じゃあな」

「ん、ほなさいならー」

去つて行く男へヒラヒラと手を振つて軽く挨拶をするカルテイラだが、内心は帝国の暗躍に關しての不安があつた。

（帝国、か……団長達がいるうちに、話しとつた方がええかもしれへんな）

それは、呑気にバカンスで来ている少年への警告もあるが、それ以上にもし何かがあつた時彼等なら割と問題なく解決してしまひそうな気がしたからだ。

（休み潰すようで気が引けるわあ……）

カルテイラの中では、もう少年達は休日満喫中である。帝国の事を話す事は、その休日の場合によつては失くしてしまふ事になる。だからこそ後ろめたさもありつつ、話さぬわけにもいかないと思つた。

だが彼女は知らない、この時少年は、あのリユミエール聖騎士団の現団長にアウギユステ観光案内をさせながら気の休まらぬ休暇を過ごしつつ、更に彼女も彼も知らぬ帝国以上の騒動の種がアウギユステに近づいている事を。

「どこまで行っても苦勞人、か」

せめて彼の借金が増えない事ぐらいは、願ってあげようとカルテイラは空を仰ぎつつ思った。

——星晶戦隊（以下略）、ギユステバカンス二日目。【ジータと愉快的な仲間たち団】アウギユステ到着まで、あと三日。

騒動の“目”、 団長君

■ ■
一 ブラギユステ

ただアウギユステの街をブラブラ歩く、ブラギユステ。つまらないと思う人は思うだろうが俺は面白いと思う。街の造りと建物の立地から地形の特徴を読み取ったり、先人が何を思っただここに建物を建てたのかを知ったりとできる。多分アウギユステで橋の痕跡とか、アウギユステ建築を見たり、暗渠探して回ったのは、俺とシャルロットさんぐらいだろう。

「お前、もつと……もつとさあ……お前」

と言う俺の報告を聞いたB・ビィの反応がこれだ。文句あつか？

「とても十代と二十代の男女がアウギユステを巡った一日と思えねえ……」

「あの騎士団長も中々渋いな……」

どうも俺達のアウギユステ巡りは、団員達には不評のようだ。悪かったな。

「まあ、二人がどう言った趣向で街を巡るかは、自由として……首尾の方は？」

「初日ですからねえ……世間話する程度でした」

「いやそれでいいのだ。徐々に聞き出すのも諜報だよ」

そう言ってくれると助かるなあ。

だがシャルロットさんは、騎士団の事を話すのが嫌と言う雰囲気は無かった。

「自ら騎士団長と名乗った以上、話を振って問題は無かったですね。実際幾つか騎士団での事聞いたら誇らしげに話してましたよ」

「誇らしげに、か」

「自分の事と言うよりも、自慢の仲間達の話が多かったです」

「そうか……」

気持ち嬉しそうなコーデリアさん、そして一緒に聞いていたブリジュールさんの二人。

「残り数日でまあ何とか聞いてみます。ただコーデリアさんの方でも例の仕事をして問題ないと思ったら自由にどうぞ」

「そうするよ。だが今は、推移を見守るとしよう」

「明日は、どこ行くのかにゃ？」

「えつと……ザニス高地だつて」

「列島を一望できる場所だったな。つてこたあ、そこで雄大な景色を見るのか」

「うん、立体的に列島の形を見て、島の成り立ちを考えてくる」

「お前アウギユステに何しに来たの？」

これも不評であった。えゝ楽しいと思うのになあ、アウギユステつてくり貫かれた様な面白い形してて気にならない？島の成り立ち……あ、ならない、そうですか。

しかし残り五日、この調子なら無事終わってくれるんじゃないだろうか。うん、街歩きも思ったより楽しかったし、大丈夫そうかな。そんなに不安になる事無かったかなー。

■ ■ ■
二 THE・神出鬼没

「いやあく本当に助かります〜」

「いえいえ、これも騎士の使命であります」

そんなに不安になる事無かったと言ったな？あれは嘘だった。

「助かります〜」

俺を挟むようにして歩くハーヴィン二人。一人は言うまでも無くシャルロットさん。もう一人は、なんで居るのか我らがよろず屋シエロさん。何で居るの？

ザニス高地への行き方は、主に二通り。陸路か船である。陸路の場合美しい珊瑚礁も見れるラヤの水辺を歩いて行く方法だが、一番手っ取り早いのは、小回りの利く船であ

る程度移動する方法だ。ラヤの水辺は、また別の時にゆっくり見ようと言う事で、ここはパパツとザニス高地に行つてしまおうと言う事になった。てなもんで、移動は船である。が、ここで主に観光用の船に乗ろうと渡し場へ行くと、何故かシエロさんが居た。「あ、マズイ」と思った途端俺と目が合う。その時のシエロさんの笑顔ときたらね。トコトコ近づいて来て、直ぐに傍に居たシャルロットさんにも気がついた。

「おやおや〜これは奇遇ですね〜」

「む？ジミー殿は、よろず屋殿とお知り合ひでしたか？」

「ジミー？」

ジミーと言う俺の偽名を聞き、顔を強張らせている俺と対照的なシャルロットさんを交互に見たシエロさんは、俺の状況を察したのか更に笑顔になった。

「ええ〜ジミーさん〴〵は、何かとお世話していますので〜うぶぶ〜」

「うん？何かおかしかったでありますか？」

「いえ〜少し意外な組み合わせでしたので〜うぶぶ〜」

俺氏、シエロさんに新たな借りを作る。

「シヤ、シャルロットさんも、シエロさんと知り合ひだったんすね」

「はい、よろず屋殿には、リュミエール聖騎士団でもお世話になっております」

なんら不思議な事では無い。コーデリアさんもシエロさんを頼っていたのだから。

「あー……シエロさんは、何をしてたんですかね？」

「えつとく実は、今からザニス高地へ行くこうと思っていたのですが、私の行く所は、特に魔物が多い所なので、誰か護衛を頼める人は居ないかと探していたんですよ」

「護衛、でありますか」

シャルロツテさんがソワソワします。

「急な事ですので、本当は、知り合いの騎空士の方に頼もうかと思つてたんですが、どうもその方は、「急な用事で無理」と仲間の方が言つておりまして」

チラツと俺を見るシエロさん。誰だろうね、その騎空士って？

「あうあう……」

「うふふ」

シャルロツテさんは、ウズウズしてる。シエロさんは、ニコニコしてる。俺は、シブシブしてる。

「……俺等ザニス行きますけど手伝いしましょうか？」

「ジ、ジミー殿？」

「え、しかしお休みの最中なのですが、よろしいんですか？」

「はっはっは……隣の騎士团长がお助けしたくてたまらないようですよ」

何をしたいか見抜かれたのか、シャルロツテさんが慌てておられる。

「じ、自分はその……と言うか、ジミー殿の方こそよろしいのですか？それに危険では……」

「俺実は、徒手空拳で武者修行をしていた事があり……」

「唐突な設定でありますな……」

あながち嘘ではないがね。修行はしてたから。

「いやいや、ジミーさんは、こう見えてお強いので、シャルロットさんが心配する様な事は、無いと思いますよ」

「そうなのでありますか？」

「はい」

本当だろうか？と言う視線を受ける。まあ、気絶寸前の荒くれ者を殴り倒したぐらいだからね、実力なんて分からんでしょ。

「騎士団団長と比べては、流石にあれですがまあ魔物程度には、遅れは取りませんよ」

「うふふ」

「……あと、シエロさんをほつとくなんて、できないなーおれー」

「そうですか、そうですか」

笑顔の視線がなんか怖いッ!!

「そ、そうでありますか……いや、義を見てせざるは勇無きなりとも言いますし、しかし

ジミー殿の案内もありましたから、けれどジミー殿が共にとあればここは、リュミエール聖騎士団团长として、よろず屋殿を助けぬ訳にはいかないであります」と言う事である。

結局さつきから俺とシャルロットさんは、シエロさんが何かしている間中、現れる魔物共をボコボコにしていた。

「いやはや、ジミー殿本当にお強いでありますな」

「いやいや、シャルロットさんに比べたら」

「謙遜なさらず……と言うか、強すぎる様な気がします、本当はただ武者修行しただけなのでありますか？」

本当にそうなんだなこれが。修行相手が人間か怪しいばあさんと、星晶獣と言う事を除けばだが。

「なんなら、即戦力としてリュミエール聖騎士団に来て問題ないであります」

「いや、勘弁」

「そうでありますか、ちよつと残念でありますな」

騎士団つて柄じゃないし。

「お二人ともくありがとうございました」

そんなところで用が済んだのかシエロさんがヒョコヒョコと現れた。

「お二人のおかげで、無事用事も済みました」

「なんだったんです？色々と見てましたけど」

「うふふふ、実はですね、本当は秘密なのですが……シエロちゃんのよろず屋ザニス高地支店を開店する事が決まりましたですね」

「支店増やすんっすか？アウギュステだけでも、もう既に幾つかあるだろうに。しかも魔物が出る場所なのに……」

「シエロちゃんのよろず屋は、コンビニエンスですから、必要とあらば、どんどん展開しますよ」

流石カルティラさんもライバルと言うだけある。この人も商魂逞しいな。

「それでは、自分は念の為魔物がいないか、周辺を見ておくであります」

「お願いします、私は、ジミーさんと少しお話してありますので」

帰りの事も考えてか、シエロさんの護衛を俺に任せてシャルロツテさんが辺りの警戒に向かう。

「さてと……うふふふ？団長さん、面白い事になってますね？」

「疲れるだけっすよ」

今の俺はジミーではない、星晶戦隊（以下略）の団長へと戻る。

「シャルロツテさんが居ると言う事は、コーディアさんには既にお伝えしたんですね」

「？」

「当然ですよ」

「でしたら、私の方からも幾つかお耳に入れておきたい事があるんですよ」

「……あんまり聞きたくないような。」

「まあ、聞きましょう」

「実は、リュミエール聖騎士団のある部隊が明後日任務のため、アウギユステへ一時滞在するらしく、シャルロットさんの事は、知らないとは思いますが、少し気にしておいた方がいいかもしれませんね」

「……引き合わせないほうがいいですか？」

「それは团长さんやコーディネアさんのご判断にお任せします。今の彼女は、名目上は各国での騎士団活動査察中ではありますけど、本人は、進んで騎士団の方と会おうとは思わないでしょうね」

「理由って知ってますか？」

「そこまでは、少なくとも正義への忠義は、あるままですからね。きつと個人的な事かと」

「個人的な事か……团长と言う立場でありながら、理由でつち上げてまで騎士団休む程の理由って何だ？ 考えても分からない、ヒントが無さ過ぎる。」

「了解です。情報感謝します」

「いえいえ、これもよろず屋のお仕事ですからね、うふふ」

ああ、笑顔が怖い、笑顔が怖い。

■ ■ 三 秘密のシャルロットちゃん

シエロさんの用事も済み、ザニス高地もまあまあ満喫したのでミザレアへ戻ると、もうお昼を過ぎていた。俺とシャルロットさんは、二人ミザレアのシャルロットさん曰く「大人な、オシャレなカフェ」へと足を運んだ。が、ここで問題が起きる。

ミザレアでは、水路での移動が多いのであらゆる店舗に言える事だが、低い位置にある店ほど良い店になる。そこから辺は、シエロさんにも聞いたことがある。シャルロットさんの連れてきたカフェも、開けた水路に面した場所にあり確かにオシャレなカフェだ。その入り口にあるメニューの張られているたて看板を見る。

(……たっか)

ランチメニュー2600ルピって高くない？そもそもドリンク一杯辺りの値段が高いよ、グラス小さいのに5600ルピ以上すんの？そんなもんなのこれ？いやだわ、都会怖いわ。

などと、俺がメニューの中でも比較的安い物を探していると、隣のシャルロットさんが、ぼそり、と一言。

「……お子様ランチが無いです」

そりやねーよ。カフェの狙う層じゃねーもん、お子様ランチ食うやつ。と言うか、食うんかいお子様ランチ。

「……結構店混んでますね」

「え、ああ……そうでありますな」

「別のところに、良さげな喫茶店あったんでそこ行きます？メニュー多そうですし」

「そ、そうですか……確かに、並んでいても時間がかかりそうですから、他の店のメニューを見て決めるのもいいであります」

「じゃあ、そう言うことで」

そいで移動して、如何にも普通だが悪くない喫茶店。財布に易しいメニューの中には、輝かんばかりのお子様ランチがつ！

「ここにしましょう！」

「そうでありますな！」

満場一致であった。

結局店は混んでいるが、メニューが決め手である。オシャレなカフェ、またの機会に

会おう。

「具詰め込みまくったミックスサンドうま」

「おお……見てくださいジミー殿、このお子様ランチの旗は、中々雄々しいと思いませんか」

「クリームコーヒーのソフトクリームの割合がデケエ」

「実質ソフトクリームであります」

「パフェ、パフェ食いましょう。俺チョコバナナにクリーム多目にしちゃうもんね」

「なななっ！ならば自分は、フルーツ多目で！」

この時俺達の頭からは、オシヤレなカフェは消し飛んでいる。こう言うのは、駄弁りながら食べるのが良いんだ。勿論行儀は悪い、悪いがしかし許してくれ。これがいいんだ。まあ、当然回りに迷惑かけるほどの事はしないが。

「けぷっ……フルーツ多目は、失敗でした」

「無茶しやがって」

「うう、しかし自ら多目にしたのに残すのは……」

「ほら、俺が余ったの食いますからよこして」

「め、面目ないであります……」

ちよつと昔のまだ落ち着きのあつた頃のジータを思い出す。胃が小さいような頃は、

よく食べ切れなくてに粹がつて飯大盛りにしては、食べきれないと泣いて俺とビーが食ってやったものだ。まあ、そう経たずして運動量の増加に伴って俺以上に食うようになったが。

「あらあら、仲の良い御兄妹ねえ」

「面倒見のいいお兄さんだこと」

（ハッ!?!）

ついつい昔の頃を懐かしみ、面倒を見てしまったが、その時間こえる喫茶店に居るおばあちゃん達の声。と言うか他の客もなんとなく俺達を見てる……微笑ましい視線で!!

（お、落ち着け……そう、兄妹と思われてるなら、まだいい……。そうだ、これで事案とか言われて通報されるとヤバイが、大丈夫だ。ロリコンとか言われて少し疑心暗鬼になってるな……）

幸いにもいかにも憤慨してしまいそうなシャルロットさんには、聞こえてなかったようだ。他人の噂を気にしすぎててもいい事は無いな。だが噂をそのままと言うわけにもいかなしい……。困ったものである。

「どうかされたでありますか、ジミー殿？変な顔をして」

「……嫌な噂されるといやだなーって事思い出しましてね」

「噂、でありますか……」

噂について言うと、途端にシャルロットさんの顔が曇り出す。ここで俺は、直感でこの話題に彼女の失踪について鍵があると感じた。

「シャルロットさんも、なんか言われたんすか？」

「うう……まあ、色々と」

少し押せば聞けるなこれ。今こそ彼女の秘密を探る一歩、押しに弱いだけが俺じゃない、押す事だつて出来ると照明してやる。

「誰に聞いたんだか……酷いもんですよ、噂つてのは。あること無い事ばかり。言った覚えも無いのに、俺の女性の好みとか趣味趣向とか……」

「皆誰しもが何かを噂されるのでありますな……ジミー殿」

「は、い？」

「ジミー殿は、小さな女性をどう思いますか」

空気が死んだ。

■

四 黒い謎生物「迂闊に話題振つて、ロリコン疑惑自ら広めた男がいたんだつてよく某風星晶獣「ナ〜〜ニイ〜〜!?! ヤッチマツタナWWW」

■

(その聞き方は、まずいですよシャルロットさん、ん、っ、!!?)

「ハーヴェイン族は、小さいことを理由に、色々と言われる事は少なくないであります。ジミー殿は、小さいのは、ダメとお思いでありますか」

(その言い方もまずいですよお、お、ー、ー、っ!!?)

さつきまでの微笑ましい視線が、俺一点に集中、冷えた視線に変わった。死にたい。

「そ、それはあ……ど、どういう意味ですかー?」

「……前お話したように自分は、リュミエール聖騎士団の団長であります。けれど、騎士団の団長がハーヴェインである事に不満を持つ者が、騎士団内外に居る事をしました」

「あ、仕事の話ね!ハーヴェイン、そうねー他に比べて小柄な種族だから、うん!言われるよねー!!」

「……?何故声を大きくするでありますか?」

「ちよつと必要だったんで……」

何とか俺への視線が和らいだが、まだ疑念が晴れきった気がしない。だがこれ以上の弁明は、露骨でむしろ悪手かもしれない。シャルロットさんに対しては不信感を与えてしまおう。畜生。

「ま、ままあ……なんだ、そのー言いたい事は、分かりました。何をどう言われたかは、聞く気は無いですけど、ほっときやいいんじゃないですかね。噂なんて、根も葉もない

事。有名税なんて言葉ありますけど、騎士団トップともなりやそんなもんですよ。嫌ですけどね、そりゃ勿論」

これね、同時に自分に言い聞かせてるのね。

「それは、確かに最初はそうも思いました……けれど誇り高き騎士団と仲間達までもが嘲笑されるのは、自分耐え切れないのであります！」

「はあ……まあ、確かに仲間とかまで色々言われちゃあねえ」

「ハーヴェインである事を怨みますが、やはりそのような事を言われてしまえば、見返したいと思ってしまうであります。自分が、ヒューマンやエルーンのようにスラリとした身長に、ドラフの様なメリハリある肉体には、憧れがあります……」

一般的女性やドラフのようなシャルロットさん……いや、なんか違うな。ダメじゃないが、なんか違う。

「まあ、そのままの良さと言うのもありますし……」

「しかし自分は、もう24の大人の女性であります！なのに子ども扱いされるのは、やはり我慢なりません！」

24が大人かと言われれば、まあ成人女性だけ成人してたかだが4年の人じゃあ、まだまだ若いと言われそうにも思えますがねえ。

「……ジミー殿は、ハーヴェインでも身長を伸ばせると思いますか」

「物理的にですか？」

「言い方がなんか怖いであります！ 違うであります、もつとこう身長が伸びる薬とか、魔法的なのも込みで聞いているであります！」

背骨増やすとかじやないのか。薬ねえ……まあ買わんし頼りたくないな、怖いわ、それこそ、身長が伸びる薬とか。あと魔法はなあ……こつちありそうだけど、なんか対価払わされそうでやつぱ怖い。

「どつちもあつても、なんか怖いんでやです俺」

「むう」

ちよつと不満だったのか、頬を膨らまししながらオレンジジュースを飲むシャルロツテさん。多分そう言う仕草が子供っぽく見られるかと……だが言わない、あとカワイイ。

「……ふふふくしかし実は、自分密かに身長を伸ばす秘薬や魔法の存在を調べたのであります！」

「調べたんすか……」

「し、信憑性は高いでありますよ？ 薬に至っては、実際に背が伸びたと言う評判も各島で聞いたでありますし」

俺の中でそれはなお更信憑性が下がるがそれは……。

「……え、と言うかまさかそれ手に入れに行くんすか？」

「まあ、ええ」

「場所の目星は……」

「薬の方は、一応……あと自分の姿を変えられる泉とか、そう言うのはまだ具体的には」

この空には、そんなに見た目に関しての薬や伝説があるのか……俺知らなかったよ。けど自分の姿変えられるなら、イケメンとは言わなくてもうちよつと覚えてもらえる姿にしたいかもしれない。いや、信じてないけどね？あつたらまあ、いいな的な？

「けど騎士団の仕事あるんじゃないやあ……」

「あ、いや……ああ、心配無用であります。ちゃんと休みをとっているであります」

今日が少し泳いだね？……待って待って……俺の情報じゃシャルロットさんは、現在【騎士団査察】を理由に国を出て以来突如姿を消し失踪とコーデリアさんから聞いた。その本当の理由は、って言う話だけでも……えっ!?これっ!?リユミエール聖騎士団現騎士団長失踪理由これもしかして!?俺コーデリアさんに言うのこれ?「シャルロット団長、背伸ばしたいってよ」って言うの!?

「どうしたでありますか?また突然顔色が悪いですが」

「いや、ふと知人に伝えるべき事を思い出して……ちよつと伝えづらい事だから気が重いなあと……」

「なるほど、そう言った事は自分も身に覚えがあります。仕事柄部下には、厳しく

とも心を鬼にしても言わねばならない事もあるゆえ」

正に貴女の事だけどね言い辛いこと。と言うか、正に貴女の部下に言わないとダメな案件なんだよ、心を鬼にして貴女の事言わないといけないんだよ、言い辛いけど!!

「まあそういう病まず、後でまた美味しい物を食べるであります」

「はい……ありがとうございます」

■ どう言やいいのさこれ……。

■ 五 その頃の、空

「明後日の昼頃には、アウギユステか」

「羽を伸ばすには、丁度いいぜ」

「お前には、文字通り羽があるしな」

「まあな!」

蒼き騎空艇グランサイファアの甲板で、ビイと語り合う一人の男。舵を取る姿が様になる彼はラカム、グランサイファアの操舵士であり「ジータと愉快な仲間たち団」の一員でルリア達と空に旅立ってから最初に仲間になった一人であった。

「よろず屋には、ビーチで開いた新しい店にも招待されたしな、たまには帝国だとか星晶

獣だとかの事忘れてのんびりしたいぜ」

「オイラも最近戦ってばっかで疲れちゃったよ」

「お前は、別に戦っては無いだろ？」

「馬鹿言うなよラカム！オイラだってな、立派な騎空団の一員だぜ！オイラがいなきや、誰がジータの暴走とジータの暴走と、あとジータの暴走を……」

「あ、悪かった……だから戻ってこいハイライト」

自分でジータの事しか出てこない事と、その時の事を思い出したのか目がどんどん死んでいったビイを見て、ラカムは途端真顔で謝罪した。

「まあ、そう言うのから逃げるために休むんだけどな」

「あ、ああ！そうだよな！オイラ、アウギユステに着いたらよろず屋に兄貴の事も聞くんだ！」

「ああ、例の故郷で世話になったって言う奴か……星晶戦隊（以下略）の団長って話だが、それだけの男なのか？」

ラカムも最近噂の星晶戦隊（以下略）の事は、聞いている。星晶獣6体だとかそれよりも多いとか、それに負けない濃い面子を従える騎空団、それを率いる男の事を、一騎空士としても気になった。

「うーん、ザンクティンゼルにいた頃は、そんな強いとか気にしなかったなあ。けど

……」

「けど?」

「考えてみれば、オイラ以上にジータに付き添って色々巻き込まれてたから、何時の間にか鍛えられてたって事は、あつたかもしれないねえなあ」

「俺、お前の兄貴が一気に気の毒に思えて来たぜ……」

「オイラは、当時から気の毒に思えてたよ……」

脳裏に浮かぶ満身創痍の少年の姿に涙するピイ。まだ顔も知らぬ少年がああジータに振り回される姿を想像し思わず黙祷するラカム。だが、別に死んでいない。

「もし会えたら、そいつに何か奢ってやるか……」

「そうしてやってくれよ。きつと喜ぶから」

金銭面的に彼は、奢ってもらおうと本気で喜ぶがその事をまだ彼らは知らない。そしてアウギユステにその少年が居る事も知らず、帝国がまた何かやらかそうとしている事も知らない。

皆、何もまだ知らないのだ。

—— 星晶戦隊(以下略)、ギユステバカンス三日目。【ジータと愉快な仲間たち団】アウギユステ到着まで、あと二日。

団長Ⅱ爆弾、その他Ⅱ火種

一 告げれぬ真実

結局、俺はコーディネリアさんにシャルロットさんの「身長伸ばすから、騎士団休んじやつた(テヘペロ)」を伝えれずにいた。取り合えず何か個人的に思う所あつての失踪、とだけは伝えておいたが全部を話す気には、まだなれなかつた。

俺は、シャルロットさんの言う理由を呆れてしまう一方で、騎士団と慕ってくれる仲間のためにと言う言葉も真実でもあるとわかつてしまい、責められないと思つてる。あとは、ただ単純に高身長に憧れもあるようだ。

それに、すぐにリユミエール聖騎士団の部隊がアウギユステに立寄るとシエロさんから聞いている。色々と面倒な事が重なりそうで早めに決着をつけるべきなのだが、かと言つてシャルロットさんの話を聞いてしまった俺は、コーディネリアさんにとつと正義審問とやらをしてくれと頼みにくくなつてしまった。

上手く全部丸く収めたいものだが、俺にはそんな力も知恵も無く、宿の窓から夜のア

ウギユステを眺めているだけしかできない。なお同室のフェザー君はもう寝てるし、B・ビイは、ハレゼナの抱き枕と化したので別室だ。合掌。だが静かで考え事をするにはちようどいい。

「か、語り合おうぜ……っ!」

「おおうっ!」

「こ、拳で、語りあお……むにやむにや」

いや、フェザー君は寝てても煩かった。起きているよりはいいけども。寝相悪いなあ、ほらもう布団落ちちゃってるじゃんかー風邪ひくぞ、んもー。

……よしよし、フェザー君は大人しくなったね。これでもう一度考え事に集中して……。

「ヨオーシツ!夜ノギユステデ飲ムゾオーツ!!」

「今いないリヴァイアサンの分飲めるからなっ!!」

「あたし今日いいお店みつけたにゃ〜!」

「オオ、行コウ行コウツ!!」

……宿の玄関から出ていく見慣れた(笑)二人とドラフ一人。もう日が沈んできると言うのに、煩い奴らめが。

まあ、各々でアウギユステを楽しんでると言う事か。リヴァイアサンは故郷の海を満

喫して、ゾーイもコロツサス達と食べ歩きをして毎日ホクホクしてるし、フィラソピラもクリュプトンの回転がいい具合だからまあ楽しんでるのだろう。セレストもルナールさんと色々本を見つけて楽しそうだ。コーデリアさん達もまあ、それなりにやっているようだし、ルドさんは……まあ、アレで上手くやってる方だろう。ハレゼナはB・ビイと言う犠牲のおかげで実に楽しそうだ。

俺は……どうなんだろう。楽しいと言えば楽しいのかもしれないが、リュミエール聖騎士団の問題を抱えてしまった以上気が抜けない。明日含めあと四日か……なーんか、嫌な予感するんだよなー。大丈夫かな、俺……。

二 赤と青の二人

団長が頭を悩ませ宿の窓辺でウゴウゴしている。その姿を、夜の闇に紛れて覗き見る二つの影があった。

「あれか、例の騎空団の団長って言うのは……」

「そーそー、あのジータちゃん幼馴染って言う少年ね」

二人の男女。彼等は、一見ただの少年にしか見えない団長を星晶戦隊（以下略）の団長と知って見ている。

「……あたしには、頭抱えて窓辺で項垂れてる気の毒な奴にしかみえんが……」

「僕にもそう見えてるよ。あははくきつと苦勞してるんだらうね。結構気が会うかもな」

「お前が何に苦勞してるって言うんだ」

「いやいや？ 僕かなり苦勞してるよ？ 日々依頼をこなし暗躍し、それにちよつとふざけるとお尻刺してくる相棒の相手をし……」

「……」

男の軽口が気に障ったのか、女の方が腰の剣を引き抜き血が出ない程度に男の尻に剣先を突き刺した。

「いってえ!? ご、ごめん！ じよ、冗談です、じよーだん！ だから無言で刺すのやめてっ!？」

「じゃあ、刺すからな」

「いってええ!? よ、予告すればいいってもんじやないと思うんだ僕っ!？」

「うるさい……それで、どうする。特にあいつに關しては、依頼は受けていないぞ」

女の冷えた視線に多少の不満を覚えつつもまた刺されてはかなわないと男は、大人しくなった。

「切り替え早いなく……うーん、まあ確かにそうんだけどくただ僕としては、一度ぐらいはちよつかいかけとこうかなうって思うよ」

「なんでだ、態々相手するのか？」

「別に戦うわけじゃないよ？尤も本当にジータちゃんの幼馴染とかならどーせ戦う事になりそうだけどね〜」

「まあな」

「あと最終的にそつちの方が良い方に転びそうな感じがするだよ〜」

「なんだそれは……」

「んふふ？始めは敵対してて後々仲間なんて展開面白いと思わない？」

「……」

女がまた剣を抜く。

「あ、まって刺さないで！」

「お前がふざけた事言うからだ」

「まあまあ……それにさ、単純に気にならない？」

「何が」

「星晶獣をただの騎空団の一員として率いてる少年の力……そうそういるもんじゃないよ。あのジータちゃんと同じでさ」

男に言われ、女がもう一度窓辺の少年を見た。相変わらずウゴウゴしている少年、だが確かに「噂通りとしたら……」と彼の存在が気になった。

「……確かにな」

そして直ぐに二人は、夜の闇に消えて行った。

■
三 珊瑚を見に行こう

■ 今日のはね、昨日ザニス高地へ行く過程で通り過ぎたラヤの水辺をのんびりブラブラすると言おう予定でした。

予定でした。はい、過去形です。

「シャルロットさん、こっちは異常なしです」

「了解であります、ジミー殿！」

「次の巡回ルートは……あっちつすね」

「それでは行きましょう」

俺らが今何してるかって？ 観光？ 違うんだなあ〜これが（諦め）。

今朝方俺とシャルロットさんが、ラヤの水辺を見て回ろうかって話をしながら待ち歩いてたら出たんですよ、ええ、よろず屋シエロさんが。またねえ、カワイイ笑顔でニコニコ来るの、俺の方向に真っ直ぐ、ええ、ええもう一直線。可愛くても怖いです。

「おやおやくまた、奇遇ですな〜」

「……本当に偶然ですかい？」

「勿論偶然ですよ？そして、ちようどお二人にぴったりな依頼があるのも偶然ですよふふふ」

嘘つけいっ！

「依頼でありますか？」

「実はですね、ここ最近珊瑚の密猟をする密猟者が現れるそうでした。珊瑚は、アウギユステの重要な観光資源ですから許可無く獲るのは、勿論違法ですし生態系が崩れてしまうと、今後の珊瑚礁への影響が懸念されてまして」

「むむ、不埒な輩でありますな」

「複数犯では無いようなので腕利きの誰かに依頼を出そうと言う事になりましたね。ちようどラヤの水辺方面へ行く方を探してたんです」

貴女昨日俺達またラヤの水辺行ってくて話し聞いてたよね？ねえ？

「ジミー殿、ここは一つよろず屋殿の頼みを聞こうではありませんか」

ほら、この騎士道精神の塊。昨日俺が「いいよ」したから遠慮がないぞう。

「まあ、依頼受けるのはいいとして何すりゃいいんです？」

「珊瑚礁の巡回と怪しい人間が居た場合の対処ですね。ようは、捕まえて欲しいわけです」

軍とかの仕事ではないんだね。組織的犯罪ならまだしも、一人二人の犯罪者なら騎空団とかに依頼を出すわけか。

「珊瑚礁見て回れるなら……ついであつて事でいいか」

「ありがとうございます〜」

と言う事で俺とシャルロットさんは、ラヤの水辺周辺に広がる珊瑚礁で巡回作業をしているわけで……しかしここは珊瑚礁が迷路の様になっているので、ただ巡回すれば良いと言う訳でもなく更に魔物も出る。

「オラア!!」

まあ雑魚なのでここ最近の鬱憤を晴らさせてもらう。すまん魔物達、俺の諸々のストレスを怨みたまえ。本来休日なので、俺達は武器を宿においてきてる。精々護身用の短剣があるぐらいだ。なのでシエロさん提供の実に安価な武器を使っているがまったく問題ねーなこれ。

「うむむ……やはり強い」

あと魔物と戦う俺を見て目を細めながら唸るシャルロットさん。

「武者修行とは言いしましたが、どう言った方々に師事されたのでありますか？」

どういった方々と言つても……田舎に居るばあさんと星晶獣ですが。だがそれをそのまま言うわけにもいかない。下手すると星晶戦隊（以下略）とバレる。

「まあ……武芸の達人とか言われた化け物みたいな人とか、6属性のプロフェッショナルとか……」

うん、嘘ではない。

「ほお、それは、自分も一度手合わせ願いたいでありますな」

「止めた方がいいですよ、マジ殺しにかかってくるんで。真空波で切り刻もうとしたり、熱波で焼き殺そうとしたり、濁流で押し流そうとしたり……」

「それ本当に修行でありますか」

一方的な虐殺とも言います。思い出すだけで眩暈がしてきた。修行の時ばかりは癒し組すら鬼と化すからな。優しい顔したユグドラシルでもえげつない戦法とる時あるし。全方位土壁で囲って押しつぶすとか。

「正直俺は、もう修行なんてしたくないです」

「何故でありますか？鍛錬は心身を鍛えるでありますよ」

「いや、俺さつき言つた化け物みたいな人に強制されたんで……本当は、もつと気ままに生きたいのです」

「はあ、実にもつたないであります……」

そう惜しまれなくても……。

「騎士団の部隊長でも申し分ない……いや、それ以上……」

「だから俺その気無いですって」

「うむむう……しかし、自分達リユミエル聖騎士団はいつでもその門を開いているのであります。気が変わったらいつでもどうぞであります！」

「はいはい……」

シャルロットさんの視線が徐々にシエロさんっぽい視線になってるんだよなあ。俺、狙われてる？騎士団強制入団とかないよね？いやいや……そんなまさかね。

「……あ、シャルロットさん待った」

「はい？」

シャルロットさんを俺の後ろに下げる。直ぐに（一応）元ハンターであるルドさん手製の魔物威嚇用の痲癩玉を取り出す。それをそのまま俺達の後方にあるデカイ珊瑚の影に放り投げる。投げてから数秒で破裂、すると……。

「わ、わわわっ!!」

「ちっ!!」

ドンパチドンパチ破裂する痲癩玉に驚いて二人の人間が飛び出してきた。

「む？曲者でありますか」

「ええ、気のせいと思っただけど……なんすか、あんたら。俺等の後つけて」

エルーンの男とドラフの女、魔術師と剣士っぽいな。二人組みで特に腕章も勲章も無

し……騎空士って感じでもない、傭兵かな。

「たははくまいったねえ、まさか気づかれるとは」

「お前がうちよろするからだ」

「ええく!? 僕の所為なのく! スツルム殿のデカイ部分がはみ出してたんじやないのく?
?」

「……」

「いつてええ!? ご、ごめんって!! ごめん、スツルム殿ごめ、いったああ!?」

「流れの夫婦漫才師だろうか……」

「単に愉快な二人組みかもしれません」

「違うツ!! おいドラंक、お前が余計なこと言うからだツ!!」

「ええ、また僕つ!? っつ!? ごめ、はいスマセン!! 僕が悪いですごめんなさい!!」

何なんだこいつら……。

■ 四 夫婦漫才 【スツルムドラंक】

俺達の後をつけていた二人組。ドラフの女はスツルム、エルーンの男はドラंकと名乗った。つけていた理由は「おもしろそうだから」だそうだ。舐めてんの？

「いやいや、真面目な話しさ〜お兄さん達強いよね〜迫る魔物をバツバツ倒して
いつて見てるこつちが気持ち良いぐらいだよ!」

ドラंकさんとやらがヘラヘラと話すがまるで真意が見えない。

「流石に。おもしろそう」なんて理由でつけられちゃ堪らないよ」

「いやごめんね〜あんまりにも強いから見たくなつちやつてさあ〜」

「子供かあんだ」

「子供のままでかくなつたんだ、コイツは」

「酷くないスツルム殿!」

力関係はスツルムさんが上か。

「貴女も物見遊山気分でつけたでありますか?」

「あたしは無理やり……ただの付き添いだ」

「止めてくださいよ保護者」

「誰が保護者だ。こんなヤツの保護者なんてごめんだ」

「まあ気持ちは分かるけども、軽薄そうだし」

「それにいい加減なんだ」

「あと破廉恥そうであります」

「あれあれ〜? 僕もしかして盛大にデイスられてる?」

第一印象でここまで言われるとは、中々やるなドラックさん。

「ま、後つけたのは悪かったよ。興味本位って怖いね」

「これ本当に反省してるヤツですか？」

「話半分でいいのでは？」

「半分以下でいい」

「あ、スツルム殿基本そっち側なんだね、僕シヨック」

「これ普段から辟易してるやつだ。俺スツルムさんの気持ちちよつとわかるぞ。」

「それで？進めてどうぞ」

「投げやり……うーん、あ！じゃあこうしようか！！お詫びに君達手伝ってあげる！なにかのお仕事なんですか？役に立つよお僕達」

唐突う。これ最初からこの展開狙ってたんじゃないのこイツ？

「これは、どうするでありますか？」

「多分首縦に振らないと、ズルズルくっついてくるパターンですよ」

「よくわかったな、お前の方が保護者向きだ。欲しいならやるぞ」

「謹んでリリース」

「アンド、リリースだ」

「再リリース」

「ねえ、僕泣いていい?」

男に泣かれても鬱陶しいだけだよ。見たくもないし。

「スツルムさんは、まあ大丈夫そうですね、ドランクさん戦えるですか?」

「やるやる、僕こう見えて強いんだから」

「こいつはこれで魔法の腕は立つ。足手まといにはならない」

さてどうするか……。

「作戦かーいぎ」

「どうぞ」

ドランクさんから許可得たのでシャルロットさんとしやがみ込んでココソ会議。

「さつきも言ったけど、断つても来ますよこいつら。と言うか、ドランクさん」

「自分もそう思うであります、どうも信用なら無い気がして……」

「信用なんて出来ませんよそりゃ、ただもしも不審な動きみせたら、即座に麻痺かけて縛って満潮まで魔物の巢に放置しましょう」

「ジミー殿時折怖いであります……」

俺は、基本俺の胃に優しいくないヤツには容赦ないのです。

「はい、それじゃあついて来ていいですよ」

「やったねえ! ありがとうお兄さん」

「ただ変な事したら即座に麻痺かけて縛って満潮まで魔物の巢に放置して、樽に二人とも詰め込んで空の底にさよならです」

「もっと凶悪になったであります!?!」

「君容赦なさ過ぎないっ!?!」

「樽は二つにしろ、こいつと最期まで一緒なんて想像したくない」

「スツルム殿ほんつと酷いなく!?!」

こうして何故か俺とシャルロットさんとの依頼に二人同行者が追加した。そもそも休暇中に何故俺は、依頼なんて受けてるのか甚だ疑問である。

五 火種

「いたいたいた……あつち!ねえ!あつち行ったよ、あつちいー!」

「ちくしよう、バレたかつ!」

「あ、この野郎逃げるな!!」

「チョロチョロと……ネズミみたいなヤツだ」

「待つであります!」

あの後直ぐに密猟者が現れた。別に現れるとは限らなかつたが、姿を見せた以上捕ら

えるのが今日の仕事である。

「修行で蹂躪と言う名の鬼ごっこを経験した俺から簡単に逃げられると思うなよ……」
「ジミー殿本当にどう言う修行を……」

マグナ6体から追われてみてください、気持ち分かるから絶対。

「んで、どうするの？パパッと派手に倒しちゃう？」

「珊瑚に影響がある事出来ないんで追い詰めて拘束！」

「追い詰めるのはいいが、相手の方が道を知っている。このままでは逃げられるぞ」

「そこは、任せて」

走りながら懐から羊皮紙を取り出し広げる。

「マップピングは、基本だよねっと」

迷路のように入り組んでいると聞いて、ここで仕事を始めた時点でちゃんと地図を作りながら進んでいた。帰り困るからね。ここ周辺の地図なら既に出来ている。

「この先三叉路は、どっちに曲がっても、最終的に開けた場所に出ますから、そこで挟み撃ちにしましょう」

「ジミー殿流石であります」

「マメだね」

「お前も見習え」

「俺とシャルロットさんは右へ行きます。二人は左から。途中また三叉路が幾つかあります。全部右に曲がってください」

「わかった、右だな」

「じゃ、またあとで〜!」

三叉路で一旦別れ俺とシャルロットさんも走り密猟者を追いかける。三叉路を曲がると、遠くに密猟者の後姿が見えた。まだまだ追いつける距離だ。しかし道は覚えているが、流石に慣れているヤツの走りには迷いが無い。追いつけないと困るから速度上げるか……。

「シャルロットさん、ちょっとペース上げ……」

俺の後方を走るシャルロットさんを見て気がつく。体力にはまだ余裕がありそうだがハーヴィンの彼女では、どうしても俺との歩幅が違いすぎる。同じぐらいの速度で走っても追いつけないだろう。どうしようかな……。

「なんでありませんか?」

俺の困った視線に気がついたシャルロットさん。

「……その、走るスピード上げようと思ったんですけど」

「え、あ……」

何で俺が困ってるのか察したようで、何となく気まずい感じになる。きっと騎士にな

る前からこんな事で悩まされたんだらうなこの人。しかたが無いので、何時かのルナールスタイルで行く事にする。

「失礼！」

「うわあ!？」

THE・山賊担ぎ。ただし今回は、脇に抱える形にする。

「突然なんでありませるか!？」

「多分あのままでと面倒なやり取りになって、話がややこしくなるんで」

「だとしても担ぎ方はなんとかならないでありますか!？これじゃ人攫いであります!？」

「全ては依頼達成のため……正義のため」

「それらしい理由言えばいいわけじゃないでありますよ!？」

色々言われているがその甲斐あってスピードアップ、ドンドン距離を詰める。仲間が居る様子がないし、シエロさんの言うとおり単独犯のようだ。アイツ一人捕まえれば終わりだな。

とか考えている間に入り組んだ道を抜けて、開けた場所へ出る。

「はいはい!さつきぶり!」

「げっ!？」

「追い詰めたぞ珊瑚泥棒、この野郎」

反対方向から現れたドラंकさん達と俺達に挟まれて密猟者が動揺している。ふふ、見たか袋の鼠だぜ。

「ち、ちくしょう……捕まってるかよっ!」

「あ、コラ!!」

往生際の悪い事に密猟者は、積み重なった珊瑚の壁をよじ登り出してまだ逃げようとする。ある意味小物犯罪者の鑑だな。だが逃がさん。

「シャルロツテさん、投げるんで頼みます」

「了解であります!……ん? 投げ……」

「犯罪者め、シャルロツテ砲をくらえい!」

「あ、ちよま……っ!?!」

小脇に抱えていたシャルロツテさんを、砲丸投げのように密猟者へと投げ飛ばす。

「わああああーっ!?!」

「は? あ、お、うおおおおーっ!?!」

結構な速度で投げたので、シャルロツテさんの悲鳴が上がり、また自分に向かって飛んでくるハーヴィンに驚く密猟者。

「も、もうやけくそでありますうーっ!?!」

「ぐえっ!?!」

弾丸のように飛んでいったシャルロットさんは、見事密猟者の頭に激突。がっちりとしがみついた。しかしパツと見おんぶだなあれ。

「捕まえたでありますよ、素直に投降するであります！」

「ふ、ふざけんな……こ、この……離しやがれ、ガキッ！」

「ガ、ガキ……ふんっ！」

「おぐえ……っ!？」

ガキと言われてカチンと来たのだろう、シャルロットさんは相手の片腕だけを持ち上げ、これを首に沿わせて両手足で固定。そのまま一気に閉め落とした。ハーヴィン流サブミッション間接技だろうか。いや、ちと違うか？まあいいけど。

「うーむ、流石騎士団長、剣が無くとも強い」

「君酷い事するね〜」

「緊急時ゆえ致し方なし」

「そう言う問題か……」

「そうであります、酷いであります！」

皆から不満を買ってしまった。特にシャルロットさん。まあそうだろうね。ごめんなさいでした。だがのびた密猟者をズルズル引きずる姿を見ると、まあいいかってなる。そんなでもって……はいまあ、密漁者はこれで確保。そのまま縛り上げてギユステの

軍にでも引き渡せば終わりだ。

……ところで、今日って俺休日のはずだよな？

「貴様ら、そこで何をしてるっ!!」

「はっ。」

突如大きな声が響く。

「貴様ら傭兵か？アウギユステの軍かつ!!」

「バカな、今ここで軍の動きは無いはず……」

何かと思うと俺達の周りを武装した兵達に囲まれた。鎧が統一されており、アウギユステの傭兵ではない事が一目で分かる。

「帝国兵……」

俺達を包囲した兵を見てシャルロットさんが緊張した様子で呟いた。

……もう一回。俺、休暇のはずだよな？

■ ■
六 帝国はいつでも悪いやつ

「全員動くな、大人しくしろ!」

銃を構えた兵が俺達を包囲し相手の指揮官が叫ぶ。帝国兵、実際には初めてみるな。

ザンクティンゼルでの暴挙から俺の旅先での騒動の原因だったり、ろくな事をしない奴等と言うイメージだが……。

「あららくこれは、まいったねえ」

「そのエルーン、大人しくしてろ!!」

「ドラंक、黙ってろ」

ああ、撃つなこれは……変な事したら間違はなく。一先ず両手を挙げておく。

「ふむ……おいその男、ここで何をしていたか答えろ」

「……あー」

チラリと視線だけでシャルロットテさんを見る。彼女は俺の視線に気がつき、僅かに頷いた。応えて良いって事だよね？

「何というか、ただ依頼を受けまして……」

「依頼？」

「珊瑚の密猟者が出るってんで……コイツね、コイツ」

シャルロットテさんが気絶させた密漁者を足で軽く蹴って教える。

「それだけか？隠し事はしない方が身の為だぞ」

「その少年の言ってる事は間違いないであります」

「ここでシャルロットテさんがインターセプト。」

「なんだ貴様？」

「自分は、リュミエール聖国はリュミエール聖騎士団の団長シャルロツテ・フェニヤであります」

「何……」

シャルロツテさんの名を聞くと、帝国兵の間に動揺が走る。

「シャルロツテ・フェニヤ……確かに、リュミエール聖騎士団の団長が女のハーヴィンに成ったとは聞いているが……何故ここに」

「騎士団の任務ゆえ細部は話す事はできません。ただここに居るのは、密漁に困る方を助けるためにその少年と依頼を受けたからです。傭兵の二人は、この巡回中に知り合って、依頼のために自分が個人的に雇った二人であります」

「ソーソー、ほんとだよ？」

「ドラルク、いいから黙ってる……」

「うーむ……」

相手の指揮官は、判断しかねる様子であった。よくわからんが、シャルロツテさんの存在がかなりいい感じに動いてるぞ。

「依頼発注者は、アウギユステの軍とよろず屋シエロカルテ、確認を取ればすぐにわかる事であります」

「むう……」

「逆に帝国兵がここでなにをしているのでありますか？以前アウギユステでの暴挙はリュミエール聖国でも聞き及んでいましてあります。またよからぬ事を企んでいるのでありますか？」

「こちらにも任務だ。細部を語る事は出来ん」

暫し、にらみ合いが続く。上げてる両手が疲れるんだが……。

「……いいだろう、おい」

「はっ！」

指揮官の男が手で銃を下げるよう仕草で伝えると、直ぐに銃を構えていた兵達が銃を下げた。

「今は、互いに追及は無しとしようか、騎士団長殿」

「……致し方なし、でありますな」

「うむ。おい、戻るぞ！」

「はっ！」

「ではな、騎士団長殿。なるべく、もう会わぬ事を願う」

「ええ、自分もであります」

帝国兵達は、ズラズラと隊列を組んでどこかへと去って行った。割と話の通じる隊長

だったな。完全に居なくなるのを確認してから両手を下ろす。

「いつや〜スリリングだったね〜」

「冗談じゃないつすよ、こんなスリル」

「まったくだ……」

別にあれぐらいなら負けるとは思わないけど、いらん騒動は呼びびではない。帝国と喧嘩するつもりはないぞ俺。

「……突っ立ててもしょうがない。一先ずコイツ引渡しに戻りましょう」

「そうでありますな。自分も少しやる事が出来たので……」

「あそつかりユミエール聖国って帝国と友好関係なんだっけ？」

ドラंकさんが割りととんでも無い事言ったぞ。え、え？ そうなの？

「……マジつすかシャルロットさん」

「ええ、事実であります」

「ヤバイじゃないつすか。これ、国際問題的な……」

「いえ、ジミー殿が心配する事ではありません。それに、先ほどの男も衝突は避けたいようでした。いきなり国家間での問題にはならないであります」

ああ、ちよつとほつとした。したけど安心できない。

「帝国、来てるのか……アウギユステに」

「バカンスって感じじゃないよね〜」

ドランクさんの軽口が炸裂、そりやそうだ。だがジータの事もある。帝国には、思う所がありすぎだ。会ったら色々確かめたい事があつたが、しかしこれは……嫌な感じがするなあ。

七 帝国過激団

「よろしかったのですか隊長。奴等をあのままにして」

彼ら帝国兵は、現在極秘の任務を受けて行動していた。ゆえに部隊の隊長が作戦行動中、偶然出くわした二組の男女をそのままにした事に不安を感じる者が居た。

「もし奴等が我々の行動を調べてたとしたら——」

「わかっている。だがあのハーヴィン……シャルロット・フェニヤが本物だとすると、迂闊な行動はとれん」

隊長の男は、リュミエール聖騎士団の団長シャルロット・フェニヤを直接見た事は無い。ただ小柄なハーヴィン種にして歴代最強と言われる者だとだけ聞いていた。

帝国——エルステ帝国——は、現在ファータ・グランデ空域での勢力を一気に伸ばしている。その為に多くの国との争いは絶えない。だが、シャルロットの所属するリュミ

エール聖騎士団本拠地リユミエール聖国とは、現在も友好関係にある。その事を勿論シャルロットは知っており、この男も承知している。ここで無駄な小競り合いを起こしてしまえば、自分達の受けた任務の遂行に障害が出る可能性があった。シャルロットが本物か否かを確かめる術が今無い以上は、危険な賭けをする気にはならなかった。

一つ気になる点は、リユミエール聖騎士団の団長が持つと言う蒼の聖剣「クラウソラス」、それを彼女が持っていないかった事。理由は色々考えられるが、その事が彼にとって彼女が本物であるかわからない要因となった。

「だが、このままと言うわけにもいかん……ユーリー！」
「はっ!!」

隊長にユーリーと呼ばれた兵がその場で敬礼し声を上げた。

「従来の激しいアウギユステとて、商人以外のハーヴィンは比較的珍しい。聞き込めば場所の特定は難しくないはずだ」

「では……」

「シャルロット・フェニヤと思われるあのハーヴィンの動向を探れ。我々の行動に支障が無いかを調べればいい」

「しかし、もしも我々の邪魔をするようであるなら……」

「いや、迂闊に手は出さな。お前では勝てん」

「そ、それは……」

「不満か？」

「い、いえ……」

「誤魔化すな、わかっている」

実にきつぱりと「勝てん」と言われシヨックを受けるユーリを見て、カラカラと笑う隊長。兜で見え無いが、ユーリは酷く赤面した。

「お前も何度も強い者と戦えばわかる。何もしていない時ですら、その者の強さを感じるのだ……」

「うっ……」

「だが、本当にシャルロット・フェニヤであるなら、そう迂闊な事はしないとは思うが……だが我らに正義がある様に、奴等の正義もある。その時が来ねばわからんか……」

「しかし、帝国の正義が負ける事などあるはずがありません」

「……ふっ、ああその通りだ」

強く真つ直ぐなユーリの答えに、これもまた隊長は笑う。だがこの笑いには、苦笑がある。

「隊長？」

「だがユーリ、これも覚えておけ。己の正義を信じる者は強いとな」

「己の、正義ですか？」

「自分の正義を信じるのは、間違いではない。だが相手も同じだ。だからこそ、正義を武器にするな。正義とは、掲げ背負う物だ。それが同じなら全ては対等、差を分けるのは、己自身の強さ、それが真の武器だ。忘れるな」

ユーリの前に歩み寄った隊長は、握った拳をユーリの胸に数度軽く押した。鎧越しにユーリは、自分達をまとめ上げる隊長の男としての熱さを感じた。

「了解です、胸に刻みますー！」

「よし、ならば今より行動を開始せよー！」

「はっ!!」

再度敬礼し、ユーリは颯爽とミザレアへと向かった。それを見送り残った部隊は、そのまま本来の任務を続ける事となる。

「引き続き我々は、周辺の魔物の分布を調査する！海とは言え、遊びではない！気を抜くなよ!!」

隊長の声に応えた部隊の兵達は一斉に散り、各々の任務へと走った。それを見て自分の部隊の練度と士気の高さに満足している隊長だが、未だ気がかなりな事があった。

（何もしていない時ですら、その者の強さを感じる、か。我ながらなんとも……シャルロット・フェニヤは、当然としてあの場にいた傭兵二人も相当の手練れだった……だが、

あの男)

脳裏に浮かぶのは、まるで顔がぼやけた様に印象の薄い少年。

(奴は何者だ……？底知れぬ強さ、シャルロット・フェニヤのモノと思つたが、あれは……)

もしも、あの少年が星晶戦隊(以下略)の団長だとわかつていたのなら、彼の対応は少し変化し、ユーリに対して『シャルロット・フェニヤと共にあの少年も監視しろ』と言つたかも知れない。だとしても、大した違いは無いのだろう。この時点であのジータが来ているのだから。

“たられば”に意味無し。全ては、後の祭りだ。

——星晶戦隊(以下略)、ギユステバカンス四日目。帝国、アウギユステにて活動開始。
【ジータと愉快的仲間たち団】アウギユステ到着まで、あと一日。

ヤバイ奴等×アウギユステ×全員集合

一 ジータ100%

アウギユステへと近づく一隻の騎空艇グランサイファー。【ジータと愉快な仲間たち】は、正にアウギユステへと向かう中、幾つもの困難に直面していた。

「ぐおおおお——っ!? な、なんつー風だっ!」

アウギユステへ残り僅かとなった時、グランサイファーに突如襲い掛かる突風。それもただの突風ではない。並みの騎空艇ならば、容易く吹き飛ばしてしまうような突風が右から左、前から後ろへと何度も何度も吹き荒れる。

「ラカムッ!? 大丈夫なのかっ!」

「大丈夫も何もやるしかねえ!! あぶねえから、お前らは中入ってろっ!!」

操舵士であるラカムが、必死に舵を握り離すまいとする。心配になって駆け寄ろうとするカタリナだったが突風の中では、まともに動く事もできない。それでも卓越した操舵技術を持つラカムのおかげでこの突風を抜けることが出来た。

そして、またある時――。

「ぬわあああ――つ!? な、なんだあ!?」

頭上より降り注ぐ弾丸の如き電の嵐が彼らを襲う。

「ひえええつ!? 天井貫通してきやがったぞ!!」

「ビイ君危ない! こっちに來るんだ!!」

拳ほどの大きさの電は、幾つかがグランサイファーに激突し痛々しい傷跡を残すが何とかこれも抜け出す。

そして、またある時――。

「ぐわわあああああああつ!!」

「ラカムウウウ!」

突如の落雷により、ラカムが携帯する火器が爆発しラカムだけが吹き飛ぶ。

こんな出来事が、数時間の間に連続して起きている。

「いや、明らかにおかしいだろつ!? なんだこの天候は!!」

ボロボロになりながらも割と元気なラカムが誰に對してか怒りの声を上げた。

「なんだってんだ!? またヘンテコな星晶獣でも出たつて言うのかよ!!」

「ち、違うぜ……」

一人、この異常事態の原因に思い当たったビイが怯えた様子で声を上げた。

「……お兄ちゃん分不足現象だあ」

「は？ お兄ちゃん分不足？」

ビィの眩きにラカムは、わけが分からないと言う表情であったが、一人カタリナの表情が強張った。

「ま、まさかビィ君……以前言っていたあの……」

「そうだけ姉さん、あのお兄ちゃん分不足だ……まさか、もうここまで深刻な事になってたなんて……」

「オイオイ、待ってくれ俺にもわかるよう説明してくれ」

「あ、ああ……お兄ちゃん分不足とはな——」

カタリナは、以前ビィからジータが無自覚に抱える異常な性質「お兄ちゃん分不足による偶発的トラブルの発生と天候悪化現象」の事を聞いていた。ジータが「お兄ちゃん」と慕うあの「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女ZOY」の団長と長い間会わない事で起こる無自覚の能力とも言える。

効果は、様々でこの状態の彼女が移動すれば必ずトラブルが起き、あるいは今の様に異常な天候悪化をみせる。この事をラカムに説明すると彼は、呆然として天を仰いだ。

「オイオイ……あいつ、まだそんな滅茶苦茶な設定持ってたつてのか」

「設定とか言うなよ……まあ気持ちは、分かるけどよう」

そのジータだがボロボロになったグランサイファーの修繕を他の仲間と共に進んで行っていた。自分の所為であんな天気になったなど考えてもいない。純粹な分、文句も言いづらい。

「しかし実際問題このままでは、我々もグランサイファーも持たないぞ……ラカム、アウギユステまでは、後どれくらいだ？」

「本当ならもう着いても良かったんだけどな……今までのでかなりロスしちゃった。到着は、夕方になるだろうな」

「まあ、ジータがいるからグランサイファーが沈むって事は、ねえと思うけどよ……」
吹き荒れる突風、降り注ぐ雹、鳴り響く雷雨。全て最後は、ジータが先頭に立ち奥義で突風を相殺し、雹を全部吹き飛ばし、雷雨を生み出す雲を消し去った。

「逆にジータがいるからこんな事態になってるけどな……」

ジータがいる以上は、彼らの命の保障はある。だがそれは、死なないだけでトラブルには遭う事を意味した。ラカムの指摘に一同ため息。果たして無事にアウギユステに辿り着けるのか？ 主に精神的に心配になってしまった。

二 何も知らぬ俺達

今日、決めないといけない。

と、シャルロットさんとの待ち合わせ場所で気合を入れている。この状況でこんな言い方だと、まるで告白だが勿論違う。今日シャルロットさんにコーデリアさんから「正義審問」を受けてもらう。

昨日帝国兵と出会った事でアウギユステでの優雅なバカンス計画は、完璧に消え去った。シャルロットさんに出会った時点で既に計画は壊れ出してたが、やつらが動いている以上なにかやらかすに違いないと俺の勘が告げる。そうなるともうリユミエール聖騎士団問題ものんびりしてられない。

コーデリアさん達には、帝国の事は当然伝えている。休暇中で申し訳無いが動けるメンバーは、既に帝国の思惑を探るように指示を出し動いてもらった。マジでなんかアホな事する気なら後手に回る気は無いからな。その間俺は、シャルロットさんの相手をしておく。そして日が沈む頃、シャルロットさんを連れてコーデリアさんが待つ宿で落ち合う。そこでリユミエール聖騎士団関係とは、決着をつける。

「ジミー殿、お待たせしました」

「おお？」

とか意気込んでいたら、突然腹が喋った。と思つたら、いつの間にかシャルロットさんが現れていた。位置的に傍でシャルロットさんが話すと腹が喋ったかと思うな。

「……今、お腹から声が出たとか思いませんでしたか？」

「ナンノコトヤラ」

「凶星であります!？」

なんと言う事だ、俺の巧妙なポーカーフェイスが見破られてしまったぞ。

「まったくもう、自分ジミー殿の考える事何となく分かって来たであります……」

むむむ、そうは言ってもほんの四日程度、全てを見透かされるわけではないはずだ。

「ほんの四日程度じゃ分からないだろう、とか考えてるでありますな？」

「Oh……」

「顔に出てるであります」

俺の顔正直すぎだよ!! ポーカーフェイスなんて無かった!! なんか、前もティアマトとかに似た事言われたなあ……そんなに分かりやすいかな俺。

「あー……そう言えば、シャルロットさんは昨日大丈夫でした? その、帝国関係」

「そちらは問題ありません。少なくとも彼らが大きな問題を起さない限り自分が動く事は、無いであります」

彼女が問題ないと言う以上追求は、出来ない。するとしたらそれこそコーディネリアさんの仕事だ。

まあしかし今は、ただ残り僅かでも二人でアウギュステを楽しむとする。シエロさん

は、もうアウギユステに俺達がいる間は、依頼を出さないと言っていたので今日は、依頼も戦いも無い時間でアウギユステの街を楽しむ日なのだ。

切り替え大事、これ本当。

「で、今日はどうしますか？」

「前は主に街並みを見て歩きましたが今日は、色んなお店を見て歩きましょう」

「それってつまり」

「そう、ウインドウショッピングであります！」

うーむ、声高らか。妙に嬉しそうだな。

「ウインドウショッピング、ふふふ、なんとも大人な休日の過ごし方ではありませんか？」

あ、それで嬉しそうなのね。確かにミザレアは、見てるだけでも楽しいショーウィンドウがある商店が多いから如何にもなウインドウショッピングできるね。他の島の商店じゃ、露店とかだから別にウインドウショッピングじゃないし。ただそれを態々“大人の”とか言わなくて良いと思うんだ俺。

しかしウインドウショッピングと言うがそう言うのは、大体女物の服屋とかになるだろう。俺見てて楽しいかな？ とは、流石に言葉には出せないがちよつと思っちゃう。

「商業都市ミザレアは、空中の珍しい品が集まる場所です。職人が手間暇かけて作った逸品に、最新のファッションが見られる……と言うのは、言うまでもないでしょう」

「そりやま、前の街歩きでもある程度は、店を覗きましたしね」

「ならば！ 今日、更にじっくりお店を見て回ろうではありませんか！」

……これは、きつと自分が楽しみなんだな。シャルロットさんの熱意が高い。たぶん前もうちよつと店見たかったんだらうなあ。ブラギュステ、あれはあれでお互い楽しかったが。

「そんじゃ、まあ……行きますか」

「はい！」

■ 三 何色チエイサー

「そんじゃ、まあ……行きますか」

「はい！」

街角で待ち合わせをする二人の男女。その二人を気が付かれないようにひっそりと除き込む人影が一つ。

(やはり、シャルロット・フェニヤ。最近街中で見かけるといふ情報は、本当だったか)

黒髪の少年、帝国軍兵士ユーリ。帝国軍の鎧兜を脱ぎ私服へと着替えた彼は、街の人混みへ見事溶け込んでいた。

(だがまさか今日直ぐに見つかるとは……)

昨日隊長から指令を受けシャルロッテを探していたユーリだが、ミザレアで「蒼い鎧を着た金髪のハーヴィン女性」だけの情報で直ぐに足取りが掴めるとは、流石に思わなかったらしい。その上得た情報がどれもこれも可笑しなものが多かった。

「パツキンのハーヴィン？ ああ、いるねえ最近一人」

「あの前お兄さんと歩いてた子でしょ？ 微笑ましくって覚えてるわよ」

「お兄さん？ 私ロリコンの犯罪者予備軍って聞いたわよ？」

「ああ、あのロリコン兄ちゃん？」

「けどハーヴィンだから、一応年上って聞いたけど？」

「合法ロリ狙った変態って話よね？ いやだわあ」

「お互い合意って聞いたけど？」

「それはそれでなんか、ねえ？」

だんだんシャルロッテの情報でなく、共にいる男の情報になってしまったがともかく彼女の居場所が分かったので一応その点は良しとしたユーリであったが、ロリコン疑惑のある男が見た目幼いシャルロッテと共に歩いている姿を見ているとどうもハラハラ

してしまおう。

（そもそもあの男は、何者だ？ 何故シャルロット・フェニヤと行動を共にしている……昨日の件といい傭兵か騎空士かのどちらかだろうが……）

歳若く青い帝国兵ユーリは、純粹に悪を許せぬ男だ。その点を見込まれ今の隊長からも若くして信頼を得ている。反面若さゆえの思慮の浅さがある。よく言えば真直ぐな男、悪く言うなら猪突猛進。

（ううむ……推定無罪だが、あの男がシャルロット・フェニヤを狙った不埒な男と言う事もありえるのか？）

どこか親しげな二人を見てその関係が分からないユーリ。

（帝国とリュミエール聖国は、友好関係……いや、それ以前にもしあの男が彼女を騙す破廉恥な男だとすると……捨て置くわけには行かないっ！）

そんな事は、命令に受けてないぞ、あと飛躍しすぎ。と、誰か冷静なツツコミを入れればいいが、残念ながらここに彼の心情を知りツツコミを入れられる様な者はいなかった。

■ 四 ■ もう大体街でもロリコン認定

ちがあうつ!! と、唐突に叫びたくなった。何故かは知らないが。思わず周りを見渡す。

「どうかしましたか?」

「いや……誰かに噂されたか、見られてる様な」

「またスツルム殿達でありますか」

「そう言う感じでは……」

一度覚えた気配は、基本忘れないようにばあさんに叩き込まれた。特にドラंकさんは、独特の雰囲気があるからここまで気配感じたらドラंकさんとわかる。あの流れの夫婦漫才師、では無く傭兵のスツルムさんとドラंकさん。結局シエロさんに依頼達成報告をする前にそそくさと帰っていった。思えば帝国と出会った辺りから少し様子が変ではあったなあ。それでもドラंकさんは、変わらぬ調子で「そんじゃ、また会おうね」とヘラヘラ笑いながら手を振って、スツルムさんは「帝国には、精々用心する事だな」と忠告を貰った。全くもって謎の二人である。また会おうとは、単なる社交辞令か? どうも本当にまた会いそうな気がしてならないなあ……

「……いや、多分気のせいですね」

流石にもう知らん、気にしてたら何も出来なくなる。きつと自意識過剰なんだ今、気にしすぎなんだ。そうに違いない。

「そうですか……まあ、そう何度も後をつけられる事はないでしょう」

「そうでそうです。まさかそんなねえ」

あつはつは。と二人で笑う。

しかしじつくり店を見て回ると前とは、やはり違う楽しさがあるな。俺が楽しめるかどうかなんて憂いだつたな。楽しいです。

まあ、ショーウインドーに並ぶ服なんて大体が女物で男物あつても、値段の方がわつはつはつは。

(まるで買う気が起きねえ)

服にあんな値段出す気にならん。これは、ちよつと不満だ。俺には、普段の私服数着にジョブ用装備があればいいのだ。ティアマトのように服を何着も買いまくるような事をしない。

……ティアマトの事考えると途端不安になるなあ。やだやだ。

まあ、なので俺は、並ぶ商品の出来栄えとか素材に注目して楽しむ。どこ産の布を使ったのだの、どんな有名な職人が手掛けたのだの、要はそんな所。

だがシャルロットさんは、俺とは別の要因でちよつと不満げな時がある。

「サイズが無いであります……」

無いよね、サイズ……。ハーヴェイン故の根本的過ぎる問題に直面する彼女を見ると

いたたまれない。まあ、あるっちゃあるんだけどね、ハーヴィンサイズ。ただ、如何にも普段着って奴があるのと、それ以外だと自ずとね……子供っぽいデザインになる傾向があるようだ。サイズの関係だなあ。そしてそれは、シャルロットさんの趣味ではない。彼女は、大人のレディな服が欲しいのだ。ただ実際ハーヴィンの体系で大人の雰囲気が出る服って言うのは、中々難しいだろう。

「ハーヴィンの衣類専門店とか無いんすかね？」

「中々そう言うのは……服飾関係でハーヴィンの専門店は、あまり聞かないであります……」

需要の関係だろうなあ。ハーヴィン族が多く住む島に行けばあるだろうが、だがそんな事は、元よりハーヴィンであるシャルロットさんが知らぬはずは無い。今までも色々見た上で気に入った服が中々無いのだろう。

「オーダーメイドとかしないですか？」

「そうなるかと採寸から何まで時間がかかってしまいます。騎士団の任務も忙しい故中々難しいであります」

あんた背を伸ばしたいだけで騎士団ズル休みしとるじやろうが。服作るより背を伸ばす方が早いとでも思ったか。

「ああ、これも中々シックで憧れるでありますう」

シヨーウインドーの中で輝く蒼が基調の洒落た服に憧れの眼差しを向けるシャルロットさん。それを見て思わず苦笑する。リュミエール聖騎士団のイメージカラーっぽいのもポイント高いのだろうか。

そんな感じのウインドウショッピング。得る物があるようで無いような、ただ憧れを募らせるそんなブラブラ。だがウインドウショッピングってそんなもんだらうなあ。

思えばブラブラこんな大きな都市を見て回るのだって今回が初めてだ。ザンクティンゼルなんか基本が物々交換、金銭でのやり取りをする店なんて物好きの親父が趣味でやってる申し訳程度の雑貨屋兼宿屋がある程度。しかも宿屋なんて稀に立ち寄る商人が休憩で利用するぐらいで、俺が生まれてから使われた回数なんて両手で足りる。

最初、ポート・ブリーズを見た時、空つてのはこんなに広いんだと思った。人がこんなに生きているんだと思った。ジータは、もうそれを知っていた。

あいつは、今どこでどんな騒ぎを起こしているのだろうか。もう少し色んな島を見てまた会えたら、あいつが見て来たものを聞きたい。そして俺が見て来たものを教えてやりたい。島々を巡る度にそんな思いが増す。

「ジミー殿？ どうかしたでありますか？」

「んあ？」

と、唐突に物思いにふけてしまった。

「いや、誰かとこんな風に街を見て回るのって楽しいんだなって……」

「では、今まで誰かとかう言つた事は？」

「前話しましたが、田舎でしたからね。まあ、騎くう……っ」

「きく？」

「ああいや、そのおきく……、そうそう！ 人からそう言う話聞くだけなら何度かあつたなあ。あはは」

危ない危ない、思わず「騎空団の仲間ともあまりしない」とか言いそうになった。俺、今はまだ一般人だよー。

「そうでありますか。自分も故郷でよく出稼ぎ等で出かけ帰つて来た大人達から外の話聞いては、外の世界を見てみたいと憧れました」

「シャルロットさんもっすか」

そんな人は、きつとごまんと居るのだろう。俺もそうだった。だが彼女は、憧れをそのままにせず本当に外に出た。しかも有名な騎士団の騎士団長になるんだから凄いなこの人も。

一方で俺は、外に出はしたが団の仲間には頭を悩ませ、財政難に頭を悩ませ、シエロさんへの借金に頭を悩ませ……悩んでばかりじゃねーか。何と言うか世の中女性って

強いんだなって思う。ジータは極端だが団員の女性、まあ殆ど女性だが皆何かと逞しいからなあ。

「……じゃ、どつかで飯食ったら他の服屋も見て回りましょうか。なんかいい感じの奴あるかもしれませんよ」

「ええ、ミザレアはまだまだ広いであります！」

何はともあれ、きつとあつという間の今日を、まだ楽しもうと思う。

■ 五 包围網形成中

「バウタオーダ隊長！ 点呼完了致しました！」

「はい、どうもご苦労様です」

アウギュステへと寄港した一隻の中型騎空艇。ある一国の紋章が刻まれ、蒼を基調としたその船は、あのリュミエール聖騎士団の所有する高速艇である。主に少数の部隊が移動する際に使用される。

その船の上で乗って来た騎士団の部隊が集まり部隊の点呼を行っていた。その部隊を取り仕切る一人の大男、その体躯に加えて頭部から生えた雄々しい角が彼がドラフである事を物語る。

リュミエール聖騎士団、部隊長バウタオーダ。騎士団の中でも「清く、正しく、高潔に」のモットーを強く体現する男。彼は、騎士団の任務でリュミエール聖国と繋がりのある幾つかの島へ書簡を届ける任務の最中であつた。アウギユステへは、一日の休息のために立寄つた。

「予定通り明日の朝にはここを発ちます。貴方達は、補充すべき積み荷を確認しなさい」
「はっ!!」

「さて……」

「バウタオーダ隊長!」

バウタオーダが一息置いたタイミングを狙い、一人の団員が前に出て声を上げた。

「なにか?」

「補充すべき積み荷に関しては、すでにリストアップが完了しております! また数もそう多くなく、揃えるのにも時間はかからないかと!」

「ほう、それは感心ですね」

「それで、あの……」

ハキハキと話していた団員だが、途端声小さくなり、バウタオーダの様子を伺う。また他の団員もどこか「隊長察して、俺達の言いたい事」と言いたげだつた。

「どうしました? 続けなさい」

「えー！ あいやあのっ」

「おや、言えないような事なのですか？」

「そのような！ ただ、その……おそらく、かなり空き時間が出来てしまうと、その時間は、その……」

「確かにそうですね……」

もう一押し！ と団員の誰かが小さく呟いたが前に出た団員は、馬鹿言うな！ と言う意志を込めてパウタオーダに見えないように軽く手をパタパタと振って応えた。

「ふむ、最近の船の上で体も鈍っているでしょうから、鍛錬をするのも良いですね」
瞬間、団員達が石の様に固まった。だがパウタオーダは、その様子を見て微笑みを返す。

「なに、冗談ですよ」

「と、と言うと……」

「任務が終わったわけではありませんが、今日は休息のために来たのです。空いた時間は、各々好きに過ごささい」

その言葉を待っていたと言わんばかりに、わつと団員達が声を上げた。せつかくの商業の島アウギステへ来たのに何も出来ないでは、普段は生真面目な騎士団もたまらないようだ。

「ただし、あくまで任務中での休息です。わかっていますね？」

「はっ!! 我ら栄えあるリュミエール聖騎士団ッ!! 常に——」

「清くっ!」

「正しくっ!」

「高潔につ!」

「よろしい」

団員達が一斉にリュミエール聖騎士団のモットーを声に出した。それを見てバウタオーダは、深く頷いた。

「とは言え、まず食事にしましょう。せっかくアウギユステへ来たのですから」

「では、自分が以前友人から聞いた海鮮料理が素晴らしいと評判の店などどうでしょうか!」

「おやおや、リサーチは十分でしたか? 初めから行く気だったようですね」

「あ、これは……いや、あはは」

船の上で騎士達の笑い声が響いた。

この時点で、まさかいつの間にか居なくなっていた自分達の騎士団長とひよこり出会ってしまうとは、思いもしなかったバウタオーダ達であった。

六 商売！ 商売！

午後、食事を終えた俺達は、ウインドウショッピングから屋台などの店を見て回る事にした。水路や道路で店を出している屋台は、食べ物なら地元で採れた海鮮焼き。雑貨でもやはりアウギュステで採れた珊瑚や貝などを利用した物を主に観光客向きに販売している。もう服を見てもサイズは無い、あと値段高いとあって俺達は、色々諦めていた。

だが切り替え大事、これ本当（二回目）。

「イカ焼きうめえ」

「あちち、であります……」

二人並んで香ばしく焼かれたイカを食う。飯は食ったが別腹だ。良い匂いで誘うイカ焼きが悪いのだ。食べ歩くから消化も直ぐだ。気にしない。

「二気に食うと中熱々だから火傷しますよ」

「ふええ……」

そしてイカ焼き本体とその中に籠った熱い空気をもろに口に受けてしまい涙目になるシャルロットさん。舌をペロリと出して、あちち言うてるがそう言う可愛い仕草自然にしないでくれ、俺に効く。

「あーもう、ほら俺のジュース飲んで、氷も一個口入れといて」
「あう〜面目無いでありますう」

一緒に買った冷えたジュースを手渡すと何度かコクリコクリと飲み、氷を一つ口に含んで舌を冷やした。昔ジータが同じ事何度かやって毎度水や氷で冷やす羽目になったもんだ。俺もビイも笑ってたなあ。

「ふはあ……落ち着いたであります。ありがとうございます」
「いいいえ」

きつと騎士団の人達ってこう言う所がツボなんだろうなあ、シャルロットさんの仕草と云うか言動と云うか歩く癒しと云うか。そりやマスコット扱い受けるわ。きつと俺もそうする。

そんな風に俺は、今までのストレスをシャルロットさんに癒され、今後受けるであろうストレスもなるべくダメージを軽減しようと癒し成分を溜めていた。

「おお、ここでは雑貨などが多くあります！」
「貝殻とかのアクセサリーか……」

飲食系の屋台通りを抜けると毛色が変わって今度は、雑貨系の屋台が多くなった。観光客へ向けての屋台だろう。どの店も色とりどりのアクセサリーを並べている。その多くがアウギユステで採れたであろう貝や珊瑚の加工品である。女性には、特に人気に

違くない。

せつかくだ、日ごろ頭を悩ませる要因でもあるが、何かと助けられている……うん、助けられてるうちの女性陣にでも買ってやるか。無論コーデリアさんとブリジュールさんは、純粋に感謝を込めてである。それに値段は、そう高い物ではないし、それに大きい物でも無いから貰っても要らないならどっかしまえるだろ。

あとフェザー君は、こう言うのよりどうせ「語り合おう!!」の方が嬉しいだろうし、コロッサスは、何でも喜びそうだ。まだ海にいるリヴァイアサンはちよつと良い酒でもあげればいいや。B・ビィは……リングでいいや。

さて、そうなるとどの店で買うか。どこも似たような物だが値段が少し違ったり、セットで売っていたりと工夫している。それに自然の物の加工品だから形は、僅かに違う。気に入ったものを見つけねば。

「知り合いのお土産に買いたいで、見ていいですか？」
「勿論大丈夫であります」

シャルロットさんの了承を得たのでじっくり見て回る事にする。まあ妥当なのは、ヘアピンかネックレスあたりだろうが……今更だが女性への贈り物で男からアクセサリーって色々重いかな？ ようわからん。

「うーむ……」

「お悩みですか？」

「ええ、どうしようかなくて……知り合いの女性で何人かいるんですけど、考えたらアクセサリーって重いですかね」

「ああ……まあ、勘繰る人はいるかも知れませんが、高価で無いなら気にしないのでは？ とは言え、自分もそう言った事には、いささか疎いので何とも言えませんが」

「ですよ。うむむ、うちの女性陣が俺からアクセサリー貰った時の反応は、どんな風だろうか……。ティアマトはどうだろう？」

『ダサッ。センス悪イ、買イナオセ』

……言われそう。次、ユグドラシルは？

『~~~~~♪』

うん、まあ純粹に喜ぶだろう、問題ない。では、シユヴァリエは……。

『ネットワークス……つまり首輪ツ!! つ、ついにその気になったのか主殿ツ!!』

うむ少なくともネットワークスはやめておこう。セレストならどうだ？

『ふ、ふへ……あ、ありがとう……』

よし、大丈夫だ。いや、しかし彼女の普段着では、どう合わせる？ ちよつと明るすぎるとこの品では……。いや、とにかく次にゾーイは……。

『綺麗だな団長、ありがとう』

まあ、こんな所か？　だが彼女の場合、食い気が強そうだな。

他のメンバーも結局普段通りの反応をしそうだ。ラムレッダは、渡すタイミングを素面の時にしないと訳が分からなくなる。酔っているとテンション上がって最悪吐く。アイツ昨日も飲み歩いて朝帰りでヤバかったからな。ティアマトも割とヤバかったが。

フィラソピラさんは、感謝と一緒に変な問いを投げかけられそうだ。あとあの人は、甘味の方が嬉しいかもしれない。

コーデリアさんは、眩しい微笑みと共に受け取り、イケメン返しを俺が食らいそうだ。ブリジールさんは、きつと真面目に感謝してくるに違いない。

ルドさんは、ラムレッダと並んでもうわけわからんな、笑いで全部消える。

ハレゼナは、うん多分「クレ〜ジ〜」で「ラブリー」ぐらいがハイテンションで返ってくるだろう。

ルナルさんは……仲間になりたてで一番反応がわからん。基本クールと言うか、反応薄い感じだし……まあ、普通にありがとうぐらいを言うんだろう。

だめだ、考えたら余計全然わからんくなった。

「お？　お客さんお悩みでつかあ〜？」

「ええ、知り合いに土産を買いたいんだけどね」

「うんうん、ほならアドライブするさかい、ウチの商品見てつてやくにししし〜」

「……うん？」

商品覗き込んで声かけられたが、この声めっちゃ聞き覚えあるんだけど。

「あ」

「あ」

パツと顔あげて互いに間抜けな声を出してしまう。やはりカルテイラさんだった。

「なんや、あんたやったんか。下向いとってわからんかったわ」

「そつちこそ、店ここだったんですね」

「言うたやろ願いの橋近くで店出すって」

そう言われれば船から降りた時言っていたな。しかし俺は、ここの地理に詳しくはないからあんま考えてなかった。

「あと来るの遅いわ」

「いや行くつもりでしたって」

「ジミー殿お知り合いですか？」

「うん？ あんた連れがおったんか」

……しまった。やばいよ、このパターン。

「うーん、誰やあ……って、その鎧リユミエールんところ」

「はい、自分は栄えあるリユミエール聖騎士団の団長シャルロット・フェニヤであります

！」

……思ったけど、シャルロットさんって結構ホイホイ名乗るよね。それいいの？

「ほお、あんたが団長はんやったか……と言うか、あんたジミーって」

訝しみ俺を見るカルティエラさんに対して俺は、シャルロットさんに見えない角度で顔を強張らせながら「シ——ッ!!」と指で黙っているようジェスチャーを送った。それを見て一瞬ポカンとしてすぐさま何時もの様にニンマリと笑った。わっはっは、商人って本人の気持ち表情だけで読み取るの巧いね。二日前ぐらいに同じ状況ありましたけどね、ちくしょう!!

「にしししし、あつとそう言えば挨拶まだやったわ、リュミエールの団長はん。ウチ風読みの相場師カルティエラ言います」

「なんと！ あの風読み殿でありましたか」

「にしししし、リュミエール聖国では、何度か商売させてもらいましたわ」

「はい、自分は直接お会いできませんでしたがお噂はかねがねお聞きしていました。しかし、まさかジミー殿とお知り合いとは」

「そうそう、ウチとジミーはんめっちゃ仲良いんですわ、もう良いお客さんでなく」

すんごい笑み。すつごく笑ってるよこの人。

「ジミー殿はシェロカルテ殿と言い商人のお知り合いが多いのですね」

「うん、まあ色々入り用な事があつたりしたりなんかしちゃつたりして」
「どつちでありますか」

まさか一時俺の船に居たなんて言えんから誤魔化すほかない。せめてもう半日後会えてたら良かったんだか、おのれ。

「んで、あんた何悩んどつたん？」

「今言つた通り、〃知り合いの女性陣〃に土産でも買おうと思つてですな」

「なるほどそれでか……どーせ、アクセサリーじゃ色々重いかなどか思つとつたんちゃうんか？」

「すげえ、よくわかりましたね」

「顔に出とるわ」

またかよつ!! 何なんだよ俺の顔はつ!! お気持ち伝言板でもついでなのか!!

「別に気にせんでええと思うけどな、あんたの〃知り合い〃ウチも知つとるけど、そう気にせえへんやろ」

「そう言われりやそうなんだけども……」

「よつほど悩むんやつたら適当な銘菓人数分買った方が無難やつて。後にも残らず食つて腹ん中に消えて終わりや」

むむ、確かにそうだ。食い物か……いや、しかし今俺達同じ場所にいるのにアウギユ

ステの銘菓買って喜ばれるのか？

「それでも悩むんやったら、もう全部買いなはれや」

「うーん……」

俺って優柔不断の時あるなあ……どうしようか。

「うごうごと、よう悩むやつちゃ……ああ、せやった」

「どうかしましたか？」

「あつと……団長はん、ちよつとジミーはんと個人的な商売の話したいさかい、ちよつと

コイツお借りします」

「え？ ああ、別にいいですが」

「ほな！」

「あ、ちよつと!？」

突然カルテイラさんが俺の腕を引っ張り、そのまま強引に店の裏に連れていかれた。

「なんすか、なんなんすか？」

「今、ジミーにや用無いねん」

「おつと？ ……なんかありましたか？」

「あんた、帝国がアウギユステに来とるって知つとるか？」

おつとその話があくまさかここでその話出るとは……。シャルロッテさんは、特に聞

き耳を立てる様子も無かった。話しても大丈夫だろう。

「その事なら、丁度昨日帝国の部隊とかち合いました」

「あつちやあくあんたまた」

何が「また」なんですかねえ？

「そう言う反応やめて下さいよ、別に戦ったわけでもないですし」

「甘いつ！　そう言う考えが後々面倒な事を余計呼び寄せる事になるんやで！」

「うぐっ！」

言わないでくれ、わかってる。俺にもわかってるし自覚はあるんだ。けど、希望を持ちたいのです。

「休暇中この話するんも悪いかな思ったけど、意味無かったな。リュミエール関係だけでも既にトラブルに巻き込まれたみたいやし。な、苦労人の団長はん？」

うるせいやい。

「ともかく、帝国の兵隊さんらなんぞ面倒な事しよるらしいから気を付けた方がええで？　知ってるやろうけど、あいつら前もアウギユステで碌でも無い事やらかしたさかい」

「勿論、なんせ当事者のリヴァイアサンから聞いてますからね……まあ忠告ありがとうございます。一先ず今日中に面倒事は済ませれるはずなんで、そのあと様子見て行動し

ます」

「島は離れんの？」

「そりゃあ、離れられるなら離れますけどね、なんかヤバそうなら適当にお節介でもしますよ」

そう言うときカルティラさんは、また一段と明るい笑みを浮かべた。

「人のええやつちゃ」

「別に、海とか荒らされるとバカンス出来ないからですよ」

「そかそかくにしししし」

私はわかつてるよ、って顔して笑うんだから、んもー、調子狂うなー。

だが帝国が来てる事は、もう街で噂になつていふ事だ。これは、今頃奔走してもらつてゐる皆も何か情報を掴んでるだろう。確かに一騒動……いや、もつと何か面倒な予感がするな。

「ちよつと土産買うの後にします。バタバタしそうだし、別の準備した方がよさそうですから」

「ん、なら買う時はウチんとこで頼むで。アウギステ銘菓も仕入れたるさかい」

「……買わないと？」

「ちよこつとウチの口が軽くなるかもしれへんな〜丁度今、にしししし」

この野郎！

■ ■ ■
七 降臨

団長がカルテイラと出会う少し前、アウギユステへと一隻の騎空艇が近づいていた。所々がボロボロになってはいるがそれでも悠然と空を飛ぶその姿は、間違いない。ジータ達が乗るグランサイファーであった。

「な、なんとかここまで来れたぜ……」

操舵士であるラカムが、舵を握りながらも疲れ果てた様子で呟いた。

「ああ、全くだぜ……」

それに答えたのは、傍に立つ眼帯を付けた一人の騎空士。名をオイゲン、歳は50とラカム達と比べると上だが、騎空士としての腕に衰えを見せる事は無い。以前起きたアウギユステでの事件を切欠に、事件を解決してくれた彼女への礼と己の目的のためにジータの騎空団へと加わった。

ベテラン騎空士の彼には、凄まじい強さを誇るジータも助けられている。彼女も騎空士としては、未だ素人。島を巡る中で必要な多くの事を教えられ日々成長している。

「あの、なんだあ……お兄ちゃん分不足か？ まさか、嬢ちゃんの無意識の力つてのがこ

「ここまでヤバイもんだとはなあ……」

そんな彼も、この日起きたあの「お兄ちゃん分不足による偶発的トラブルの発生と天候悪化現象」には、驚きと恐怖を感じた。

「結局あの後も上に何も無いのに滝の様な水が降り、砂も無いのに砂嵐、魔物の群れが壁の様に襲来……あとは」

「何処かの島の破片が高速で横切ったよ……」

「あれな……あんな破片、そもそもあの大きさで浮力を失わずあんな高速で動ける破片なんて俺も長い事空にいたが見た事ねえぜ」

「あれは、マジでヤバかった……まともにぶつかりやグランサイファーの横っ腹に大穴開いちまったよ」

「ああ、だがそこはお前と嬢ちゃんのおかげで乗り切れたな」

何故か現れた高速移動する破片、それを巧みに巨体のグランサイファーを動かしかわすラカム、そして避けきれない破片を吹き飛ばすジータの二人で全ての危機を乗り切る事が出来た。

「ビィの話じゃ、とりあえず島で落ち着いて飯でも食えば多少は良くなるらしいとさ」
「多少でしかもらしい、なのか」

「気持ちの問題だそうだから、とにかくリラックスさせる必要があるらしいぜ？ ホー

ムシツク的な奴らしいからな」

「わかるような、わからないような……」

つまりそれは、今までの災難がジータの心象風景であるようなもの、一見穏やかそうに見えるジータだが今彼女の心は、無意識に荒れていると言う事なのだろうか。そこまで「お兄ちゃん」に会いたいのか、とオイゲンは思った。

(……だが、家族の様なものなら、そうなのかもな。あいつも、心ん中じゃあそうだったのかもしれねえ……)

一方で何か思う所があつたのか、空のどこかを見つめるオイゲン。

「どうしたオイゲン?」

「いやなに、ちよいとお嬢ちゃんの気持ち分かるようなきがしてな……」

「へー? なら何すりやあいつを落ち着けられるかわかるか?」

「決まつてるだろ、家族……お兄ちゃんに会わせないとな」

「そりゃわかつてるんだって……」

ビイから聞いた唯一と言える解決策、お兄ちゃんに会わせる。それがすぐ無理だから頭を悩ませているのだとラカムは訴えるが、オイゲンは妙に神妙であつた。

「ん? オイゲン」

「ああ、見えて来たな」

暗くなりそうであつた雰囲気消したのは、視界に見え始めた青い島。それを確認するとオイゲンは、ラカムの傍を離れ船内への入り口を開けた。

「おーい、お前等!! アウギュステが見えて来たぜえ!!」

そのまま大きく声を上げて船内に居る乗員へ向かい叫んだ。彼の良く通る逞しい声は、グランサイファーの中を巡りそして彼女の耳へと届く。

「は——いつ!!」

オイゲンに負けぬ一際大きな返事が船の奥から聞こえて来ると同時にドタバタ騒がしい音と共に誰かが駆けて来る音がした。オイゲンは、その音を聞いて思わず苦笑した。そして、直ぐに自分の横を金髪の少女が素早く横切つて行く。

「んもーっ!! ジータ待ちなさいってえっ!! まだ部屋の片づけ済んで無いでしょおーっ!!」

「たくよう……さっきの騒動で船内荒れ放題だつてのに……」

「はわわ……ま、待つてくださあーい……」

遅れて聞こえて来る仲間の声。結局どんな事があつてもいつも通りなのだと思つと、オイゲンはこの騎空団の仲間、そしてその団長が頼もしく感じられた。

「見えたっ!!」

「おいつ!! 前も言ったが航行中は、あぶねえからそこ登んなっ!!」

「あ、ごめーんっ!!」

グランサイファアの船首へ上り遠くに見えるアウギユステを見てはしやぐ少女を怒鳴るラカム。彼女は、謝りながら船首を降りると今度は、オイゲンの元へ駆け寄った。

「ねね! オイゲンさん! 前はあんまりゆつくり出来なかつたから、ミザレアの街案内して!」

「おおいぜ! 知り合いがやってる美味しい飯屋紹介してやるよ!」

「やったあ!!」

どんな事でも感情を一杯に表す少女を見てオイゲンは、どんなに強かろうが、どんな風に思われようが彼女は、兄と慕う者と離れば寂しくなり、どんな事でも一生懸命な年相応の少女なのだ実感した。

(こんな風に、あいつと過こしてやればよかつたんだよなあ……)

誰を思つてか、自分が自ら手放してしまった可能性を考える。そんなオイゲンの思いを知る事も無い少女は、今度はいつの間にかラカムの隣にまで来ていた。

「早く着かないかなー」

「おいおい、あんな事があつてグランサイファアも本調子じゃねえんだ。島が見えたとは言え、焦らせないでくれよ?」

「えへへ、ごめんね」

「はっ！ なんだあ？ えらい上機嫌だな？」

ラカムに言われると少女は、はにかみつつ明るく答えた。

「なんかね、すっごい良い事ありそうな予感するの！ だから、なんだか楽しみなんだ
！」

【ジータと愉快な仲間たち団】、団長ジータ。

アウギステ上陸まで、あとわずか。

逃走経路無し

一 橋に願いを

「せっかくやし願いの橋ぐらい見てったらどうや？丁度もう少しで日没やから」

カルテイラさんに自分の店での商品購入をほぼ無理やり約束させられた俺は、去り際にこのように言われた。

アウギユステでの移動は、主に船で行われるのは、もうわかり切った事である。そしてここを訪れる人の中には、水の上を進む船を珍しがる者もあり、観光用の船もまたミザレアの観光資源である事もシャルロットさんとの街巡りで良く知った。そう言った水路を跨ぐ橋は、この街に幾つもあるがそれらの中に通称「願いの橋」と呼ばれる橋がある。ここの橋は位置の関係から日没時、他の橋よりもその姿が美しく照らされ「その時に橋の下をくぐれば、願いが叶う」と言われている。

勧められては、興味が湧く。俺もシャルロットさんも二人その橋へと向かった。

「これであります」

どの橋の事か分からぬ俺がキョロキョロとしてしているとシャルロットさんが指さして教えてくれる。そこには、建物を繋ぎ他の橋に比べて特に観光客が集まる橋があった。

「これが、願いの橋ですか」

似た橋は、その奥にまだいくつか続いている。だがこの橋は、ここにある事が重要だった。

「特に造りや装飾が目立つわけでは無く、この場所にある事で沈みゆく日がこの橋を美しくし、願いの橋と呼ばれる所以。何ともロマンチックでありますな」

この街が建てられる中でここが観光名所として有名に成ると誰も考えはしなかったろう。ただ偶然にこの日没の日が綺麗に当たる場所に一つの橋が出来た。ただそれだけだったはずだ。

それが今では、誰がそう言ったのか願いの橋と呼ばれ多く人間を魅了していた。恋人が出来ますようにとか、病気が治りますようにとか、大金が手に入りますようにとか、そう言った願い全てをこの橋は、多くの人間から願われたろう。それが叶ったのかは、本人しか知らないが。

「せっかくだから願い事しますよね？」

「それは勿論」

願いを叶えるには、日没に合わせて下を通るらしい。また橋の下には、水路を跨ぐ別

の小さな橋があるのでそこを通ればいいのか？けどもう多くの人があるのでそのタイミングを狙ってかその場所に集まっていた。行けなくもないが中々の混雑だ。

「さて、並んでもいいけど……お？」

水路を見るとゴンドラが何隻かあった。なるほど、観光用のゴンドラ、しかも丁度空きの一隻が見えた。

「こりゃいいや、シャルロットさん船で潜りましようよ。後一隻とられる前に！」

「うわっ!」

バツとシャルロットさんを抱き上げ走る。今度は、山賊担ぎでは無くただの抱っこで抱えゴンドラへと走った。幸い他の人達は、日没のタイミングを気にして橋の方を見ているか、そもそも観光船はもう無いだろうと思つたようだ。俺は、飛び乗る様にゴンドラに乗った。勢いが出たせいで、ゴンドラが少し揺れて船頭のおっちゃんが驚いてしまった。

「おいおい、もつとゆつくり乗りなよ兄ちゃん」

「ごめんねおっちゃん、この船空き？」

「ああ、二人かい？」

「そ、頼むよ」

「あいよ、そこ座んな」

しかし慣れた様子でおっちゃんは、俺達をゴンドラの腰掛けの木に座る様に言つて舵を握り立ち上がった。

「はい、シャルロットさんはこっちなね」

「おとと……!」

抱えたままのシャルロットさんを、隣に下す。だが急に抱き上げたせいで彼女も驚いてしまったようだ。ごめんね。

「ジミー殿!前もそうでしたがもう少し抱き上げ方と言うものを考えるであります!」

「いや、急がないと思つて」

抱えやすかつたし。言わんけど。

「確かに前の抱え方よりはマシではありますが今のは、まるで子供の様ではありませんか!」

「すみません、咄嗟だったんです」

体格的に一番ベストの抱え方だったんです。言わんけど。

「そもそも、女性を軽々しく抱き上げると言うのは、いかななものかと思ひます。デリカシーと言うものを知るべきであります!」

「はい、以後気を付けます!」

本当すみません、子供抱える気持ちでした。

「まったく、まったくもう」

「ハハハッ！なんだい兄ちゃん、そっちの嬢ちゃんは妹かい？」

「んなあ!!」

プンスコしているシャルロットさんだが、今までのやり取りを見ていたおっちゃん
が、ゲラゲラと笑いながら聞くとシャルロットさんがよりプンスコした。

「妹ではありません！」

「おっと、そうなのかい？」

「おっちゃん、この人ハーヴィンだよ」

「ん？ああつ!!こりやすまねえ!!」

俺がシャルロットさんの種族名を言うと、直ぐに合点がいったらしく頭を手でパチリ
と叩きながら謝罪した。

「ハーヴィンとはな、つてことたあ姉ちゃんの方が上だったか」

「そうであります……まったく」

「すまねえ、すまねえ。ハーヴィンは、商人でなら見かけはするが、客となるとあんまり
来なくつてな。しかも女の方は、特に見ねえから直ぐわからねえんだ。悪かった」

なるほどだ。おっちゃんの言う事も確かだろう。それにハーヴィンだと言われただ
けで直ぐ理解するだけ良い方かも知れない。シャルロットさんに聞いた話だと、同じ状

況でそう言う種族だと言ってもただの子供と信じて疑わない者もいるそうだからな。

「お詫びってわけじゃねえが、丁度もう少いで願いの橋が特に輝く時だ。一番良いタイミングで潜ってやるよ。それが目当てだろ？」

「もち、頼むね」

「任せな！」

何とも豪快な船頭だ。袖を巻くって見える二の腕も長い事舵を扱ったために筋肉がみっちりしてる。嵐が来ても船を動かせそうな男だ。

さて、船頭への頼もしさを感じた所で、俺はシャルロットさんの機嫌を取るとしよう。

「妹って……娘とかよりはマシですが……」

「ほら、シャルロットさんって。俺が悪かったから機嫌直してくださいよ」

「むむむ、しかし納得いかないであります」

「まあまあ、ここはそんな事がもう無くなるよう願掛けしましょうって。お願いするんでしょ？」

「むう……確かに、お願いのタイミングを逃しては、面白くありません」

「そうそう」

多少気持ちも落ち着いたようだ。ホツとしたのでゴンドラに揺られ周りの街を見る。水路をゴンドラで進むのは、初めてだ。

「おや、橋の上にも人が大勢いる」

「おおっ！本当であります」

いつの間にか願いの橋には、大勢の人が並んで沈む夕日の方向を見ていた。そこに収まらない人は、別の所からも夕日を見ている。

「凄い人だなあ」

「団体客なんて珍しくねえからな。それに普段は、別の名所に行く客もこの時間を狙って集まるのさ。この水路は、特に日の光を遮るものが少ないからな。橋の上から夕日を見るのにもうってつけってわけさ」

ゆっくりと船を進めながら、おっちゃんが説明してくれる。この人にとっては、見慣れた光景なのだろう。

「ほれ、カップルが多いだろ？」

「あー……確かに」

言われてみると、集まる人達の殆どは、若い男女のペアで行動してる。種族も様々に、肩を寄せ合い手を繋ぎ互いに離れようとしない。

「まあ、こう言う所だからな。一生一緒に居ようとか結婚しようとかなんて告白の場所でもある訳よ。見てるこっちが痒くなるぜ」

とか言いながら楽しそうなおっちゃんである。年取ると若いカップル見て楽しそう

にするものなのだろうか？カップルを見ていて微笑ましいと思う事は、無くは無いの
でそういう事かなあ。

「そして……見てみな。これがミザレアで一番綺麗な夕日だぜ」

言われ後ろを振り向くと、今まさに太陽が沈もうとしていた。その光景に思わず息を
呑む。

「確かに、これは夕日だけでも見に来るわけだわ……」

「ええ、美しいであります……」

遮蔽物の無い街中から見える夕焼け。赤く染まる空の中で揺れる太陽が、沈み消えて
いく。ザンクティンゼルでも見ていた太陽と同じ太陽なのに、何故こんなにも違うのだ
ろう。どちらが良いと言うわけでは無い、ただザンクティンゼルと違う夕日の美しさが
確かにあった。

「さあそろそろだ。夕日に見惚れて橋を潜り終わる前に願い事は決まったかい？」

願いの橋の下、その目前へと近づくとおっちゃんが妙にニコニコ笑いながら聞いて来
る。さて願い事であるが、願うだけならタダだ。一個だけなんて誰が言った？

第一に、借金返済。これは俺の努力次第でもあるが、偶然大金が舞い込むとかそう言
うのをちよつと期待する。

第二に、団員達が真面目になる事。と言うか、ティアマト達（笑）レンジャーと、ラ

ムレッタ筆頭年上のくせにダメダメな女性達が心入れ替える事を願う。

第三に、今後出会う仲間がいるなら素敵な出会いでありますように、そしてその人が常識癒し枠である事だ。

さて、シャルロットさんの方の願い事は、聞くまでも無いだろう。身長的事、これ以外ある？

「じゃ、お願いしますか？」

「はい、お願いするであります」

「あいよ、そいじゃしつかり祈りな」

おっちゃんが一段と強く舵を漕ぐとゴンドラがぐんと進んだ。俺とシャルロットさんは、夕日を見ながら自分の願いを願い祈った。祈りの作法なんてのも無いので、ただ強く念じる。そして、早過ぎず遅過ぎ無い速度でゴンドラは、願いの橋の下へと入り、ほんの数秒で潜り抜けて行った。

橋を潜り終わり、横を見ると手を合わせて目を強くつむって願い続けるシャルロットさんがいる。どれだけ願ってるんだと思いつつそれを見守ると、ゴンドラが橋から数メートル離れた所でやっと目を開けて俺と顔を合わせた。

「えらい熱心でしたね」

「むう、どうせジミー殿は自分の願い事をわかってるでしょう。からかわないでほしい

であります」

そう上目使い＋ふくれっ面で睨まないでください。可愛いだけだから、俺にクリティカルだから。

「からかっちゃいけませんよ。ただそんだけ強く願うなら願う事の一つや二つ、叶うだろうなって思っただけです」

「……そう思うでありますか？」

「思いますよ。叶わないと困る願う事、俺もしましたし」

「なんでありますか、それは？」

「秘密です」

「あ、ズルいであります！」

「シャルロットさんは、自分から悩み打ち明けましたからねー、俺は態々自分でいいませーん」

「……ジミー殿は、ジミー殿はまったたく!!」

「あがつ?! わき、脇腹は、やめっ! おうっ?!」

結局からかってしまい怒ったシャルロットさんが俺の脇腹を小突いて来る。小突くってか、連打してる……あと普通に痛いっ?! 騎士団長だよ、貴方普段鍛えてる騎士団長、あいたたたたっ!?

「ふんっ！ふんっ！」

「がっ!?そ、そこ、肋骨です、ろ、肋骨が……あわあぁーっ!?」

俺の悲鳴がミザレアに響き、日は沈み夜が来た。

二 「ジータが迫り」「リュミエール騎士団が迫る」つまり（団長達が）ハサミ討ちの形になるな…

『神の怒りか悪戯か!?突如、アウギユステに降り注ぐ大豪雨ツ!!』

これは、アウギユステ史に残る局地的大雨に関して書かれたある広報誌の一文である。アウギユステでの雨は、比較的珍しいと言えまして歴史に残るような大雨は、滅多にない事であった。

某年某月某日、雨が降る様子など一切感じさせない晴天であった。だが夕日が沈み夜を迎えた数十分後の事、突如として凄まじい水量の雨が降り注いだのだ。時間にして約1時間半。更に降り続けば水路で水が流れ滞る筈の無いミザレアであっても街の一部は、浸水したであろう程の猛烈な大雨であった。

大急ぎで外で店を開いている商人達は、商品を雨から護ろうと騒ぎ出し観光客達も大慌てであった。

そして、この雨が降る前にアウギユステには、一隻の騎空艇が到着していた。

「なんでだあああつ?!」

雨の中、ミザレアの街を走る団体がある。先頭を金髪の少女が走り、その後ろを複数の男女が色々と呼びながら走っている。

間違いなく、ジータ達であった。

「街に入った途端降ったぞ?! 前見えないぐらいの雨がぶええつ?!」

「ラ、ラカムあまり喋るな……つ! 雨が、口に入って……つ!!」

ジータ達一行は、何とかアウギユステへとたどり着きグランサイファーを海へと無事着水させた。そして予定より遅れたものの、夜のミザレアでまずは、食事でもしようかと話しながら街の中へと入った。その瞬間にこの雨が降り出したのだ。

「つて言うか、こりややつぱ……お嬢ちゃんのあれだろ」

「だ、だろうぜえ……うう、オイラ目を開けれねえよう……」

「ビイ君、私のマントに……」

小さな体のビイには、この猛烈な雨は、飛行するのに相当負担があるらしくカタリナに抱かれマントで護られていた。

「あーんっ! せつかく髪の毛もセットしたのにー!!」

「やれやれ、何処かで乾かさないとね」

悲鳴を上げる小さな少女と弱った様子の女性。薄い褐色と金色のツインテールの少女は、ジータにとつてずつと一緒であったビイを除きルリア、カタリナ、ラカムに続いて仲間となった少女イオ。ジータがバルツ公国へと立寄り初めての依頼を解決、そしてまた帝国の暗躍を砕きイオの師匠を助けそれが切欠であった。

もう一人の黒髪の女性は、ユグドラシル本体がいるルーマシー群島でジータが出会った謎多き女性ロゼッタ。ユグドラシルと帝国がらみのいざこざの末に一行の仲間になった。

「あはは、雨すごーい！」

「笑ってる場合じゃありませんよおっ！」

そして一行の先頭を笑いながら走り雨を楽しむ少女、それを必死に追いかける青色の少女二人。【ジータと愉快な仲間たち団】団長ジータと彼女がザンクティンゼルで助けた少女ルリアの二人であった。

「うう〜どこも雨宿りの人でいっぱいですう……」

「急な事だからな、皆も一斉に屋根のある所へ走ったのだろう……っ！」

先程から一行は、雨を防げる場所を探しているがどこもかしこも既に人で溢れてしまっている。船に戻るにも既に距離がありどうしようもない状況が続いていた。

「しかたねえ、俺の知ってる宿に行くぞ。あそこなら入れるはずだ」

「だが、宿でそんな簡単に入れるのか？」

「有名ホテルでもねえし、街の奥の方だからな。観光客もそういねえさ。まあちと遠いがもうこんだけ濡れちまうともう大して関係ねえだろ」

「確かにね。それに仮に途中で止んでも宿ならタオルとか貸して貰えるかもしれないわ」

「決まりだな、ついて来な！」

「よし、レッツゴー！」

「ジータそつちじゃねえ!!」

この中で一番ミザレアの地理に詳しいのは、出身者であるオイゲンである。皆は、オイゲンの言う宿へと向かい駆け出した。

また、一方で――。

「これは、凄い雨ですね……」

街の中を歩く鎧の集団、この日アウギユステへと着いたりユミエール聖騎士団の団員達である。鎧姿の集団だが物々しい雰囲気は無くましてこの雨とあつて誰も気にしてはいなかった。

「まさか、こんな雨がアウギユステで降るとは……」

「通り雨とは思いますが、それにこう混んでは雨宿りも出来ませんね」

鎧の隙間から中に入り込む水に参った様子の隊員達だがバウタオーダは、ただ一人涼しい顔をしていた。

「いえ、必要ありません。仮に空いていても他の方達に譲りなさい」

「それは、勿論」

我先に雨を除けようと軒先に逃げる考えなど浮かぶ事も無くバウタオーダは、ズンズンと足を進めていた。他の団員達も同様の考えであるがしかし彼ほど忍耐強くは無かったようだ。

「ここではなく、街の奥の安い宿街でなら体を休められるかもしれませんが……」

「ふむ……」

部下の一人の言葉を聞いて少し考えるバウタオーダ。自分達の騎空艇がある場所からは、もう既に離れてしまった事とその宿街は、丁度帰り道に近い事を思い出す。

「……そうですね、船に戻るついで行って見ましようか」

鎧の隙間から進入する滝の様な水が彼らの体温と気力を奪った。これもまた鍛錬だと割り切れるバウタオーダだが、団員達の疲れを感じ取り船へと戻る前に濡れた体を乾かせる場所を探すぐらいはするべきかと考えた。

「各々雨で視界が悪いですから、住民の方達にぶつからないよう注意なさい。困っている方が居たら助けるように」

「了解ですー！」

突然の雨の中慌て戸惑う人々の中には、足を滑らせこける者、人とぶつかり転倒するものが後を絶たない。彼らはそんな人達を助けながら進んでいった。

■ ■
三 二人のアウギユステ

ゴンドラのおつちゃんは、俺達を希望の場所で降ろしてくれろと言うので混雑している願いの橋から離れた場所で降ろしてもらった。去り際おつちゃんに「あんたらお似合いだぜ、大変だろうが頑張れよ」と言われる。何の事か分からず二人揃って首をかしげた。

日は落ち綺麗な夕日ももう見えず夜が訪れる中、後はコーデリアさん達の待ち合わせ場所で向かうだけになる。いよいよ正念場だと意気込む俺だった。だがしかし――。

「なんじゃあ、こりやああぁー……っ!？」

突如の大雨っ!! 凄まじき豪雨、何これ本当どうなってるのっ!?

「雨ってレベルじゃねーぞっ!?! 滝だよ、滝いっ!!」

「んぐぐうっ!?! ま、前が見えないでありますう……っ!?!」

叩きつける雨でジツとしてられないが雨から逃げるために動く余計に雨がきつい。

どうしろと言うのか。雨宿りをしたいが軒下は、もう満員。俺達が入る余地は無い。結局逃げ場を求めて走り回る。

「い、今どこを走ってるかもわからねえ……っ!？」

「なんだか、入り組んだ場所へ来てしまったようではありません……っ!？」

走り回っている内にまったく道がわからない所へと出てしまった。自分の宿に向かっていた筈だがどこかで道を間違えたようだ。そのせいでどんどん俺達は、見知らぬ道へと迷い込んだ。店や建物の軒先は無理だ。商店の中もほぼ埋まりきってる。流石に民家に無理言つて入る気も無いので、走っている場所が宿街周辺と信じて入り口が空いている場所を必死に探す。

ちなみにシャルロットさんは、今俺に抱えられている。突然の激しい雨に俺達以外の人も慌てて走っているので人混みに飲まれ逸れると不味いためしようがなく抱えさせてもらった。本日二度目であるがこうしないとマジで逸れたり走るとシャルロットさんが追いつけなくなるのでしかたない。

「……あ、ああ! あつたっ!」

雨で遮られる視界の中ぼんやりと見えるピンク系の明かりが見える建物。だいぶ入り組んだ場所に来たからか逃げ込む人も居ない。もうあそこしかないだろう。雨で脚を取られながらも建物の軒先へ滑り込む。一先ずこれで雨からは、逃げられた。

「あくあく……助かった……」

「うぐう……あ、頭が重いであります……な、何故……」

抱えていたシャルロットさんを床に降ろすとフラフラと足取りが悪い。まさか移動中に酔ったかと思つたが直ぐに原因がわかつた。

「冠に水溜まっていますよ」

「なんとおっ!？」

水で濡れてすつかり髪との間に隙間の無くなった冠内にタツプリと水が溜まっている。

「水を捨てなくては……」

「あ、急に持ち上げると——」

「ふぎやつ!？」

俺が制止する前に「そのまま」冠を上を持ち上げたシャルロットさん。当然溜まっていた水は、垂直に落下。2、3リットル程の水が頭上から思いつきりぶちまけられた。元からびしょ濡れだが、更に濡れてしまい服全部が水を吸っちゃったなこれは。

「ふ、ふええ……」

「焦るからですよ」

「ふ、不甲斐無い……自分が情けないであります……」

長い髪も水を吸ってしまいさぞ重い事だろう。それに俺もだが体中濡れてしまつて酷く寒い。体を乾かして暖めたいなあ……。

「……宿だよ、ここつて？」

録に確認せずに飛び込んだが確か宿らしき看板だったはずだ。ずっと軒先で立っているわけにもいかなないので入り口から中を覗く。するとそんなに広くは無いフロントで一人座るばあさんと目が合った。

「お客さんかい？」

「あ、はい。雨降つてきちやつて……」

「知ってるよ……なら休憩だね。ただ生憎うちは、今改装中でね。使えるのは、一部屋だけさ」

「改装中？雨のせいか、そう言った説明のある看板も見当たらなかつたのだが。」

「入つてよかつたの？」

「かまわないよ、今日の工事終わつて暇で扉開けてただけだよ。部屋も問題ないからね」
ふむ、どうしようかと思つたがそう言う事なら……宿の主人が良いって言ふんだし。

「シャルロットさん、一部屋開いてるらしいんで取り合えず入りますか？俺と一緒に申し訳ないですけど」

「い、いえ自分は、気にしません……それに、うう、髪を乾かしたいので、あう、顔に張

り付くであります」

真上から一気に濡れたせいで均等に長い髪が広がり顔に張り付いてしまい、パツと見どつちが前か分からない事になってるシャルロットさん。シユールだ。

「……んっふ」

「ジミー殿、今笑いませんでしたかっ!？」

「わらつてないっすよ、っふうっ」

「笑つてるでありますっ!?!顔見えませんが絶対笑つてるでありますっ!?!」

わはは、と誤魔化し笑いを上げながらフロントに行く。

「一人いくら?」

「知らないよ」

4000ルピぐらいと予想して財布を取りだしたのだが思わぬ言葉に二人揃ってずっこけた。

「おいおい、そうはいかないでしょ。休憩つたつて部屋使うんだぜ」

「こんな雨で困つてる小僧と小娘から金とりやしないよ」

小僧と小娘って……。

「自分は小娘では……いえ、その前にお金を払わないわけにはいかないであります」

「いいんだよ別に。明日には、内装全部引っぺがしちまう部屋なんだから、好きに使い

な」

こういう時の“ばあさん”って生き物は、頑固なものだ。なんでこういう時は、大人しくその厚意を受け取って置く方がいいだろう。実際事情が事情だ。明日工事で壊す部屋なら、確かに勝手に使えと言う気にもなるだろう。結局厚意に甘えさせてもらう。

「んじゃ、鍵貰います」

「はいよ。タオルとかは、備え付けのまだ残ってるから勝手に使いな。雨止むまで好きにだけ居ていいからね」

「どもつす」

階段を上り廊下に出ると確かに部屋の殆どは、扉も外され改装中である事がよくわかる。二階の一番端の部屋、鍵の番号を確認して部屋を開けた。だがその先に、信じられない光景が俺達を待ち受けていた。

「…………え？」

「…………え？」

超蛍光の極彩色、気が休まらない部屋が俺たちを迎えた。……要は全体的に“どちゃくそピンク”だったのだ。

「ド、ドドドドッ!？」

「ドッピンクッ!？」

俺達二人の驚きの声が部屋に響いた。

■ 四 包围完了

「オヤジいるかあ!」

「うおっ!」

飛び込むように入ってくる団体にある宿屋のオヤジは、驚き声を上げた。突然の雨で予約客も無いこの日、中心街や有名ホテルの並ぶ表通りに比べ観光客が多くない裏通りにある自分の宿に突然の雨とは言え行き成り駆け込んでくる者が居ると思わなかった。

「あーやっど雨から逃げられたわ」

「煙草が湿気ちまったぜ……」

だが飛び込んできた団体と先頭にいる男を見て思わず笑った。

「なんだオイゲン、帰って来たのかよ?」

「おう、久しぶりだなっ!」

以前起きたアウギユステでの騒動の際騎空団へと入団、アウギユステを発った馴染みの男オイゲンが現れオヤジは、驚きつつも喜んだ。

「今日はどうしたよ? あん時の騎空団も全員引き連れて」

「どうしたもねえぜ、この雨だよ！何処もかしこも満員だからここなら閑古鳥鳴いてると思つて駆け込んだのさ」

「余計な事言うなつて！」

確かにこの宿は、客がいない。宿街と言うがその中でも格安の古い宿が集まる宿街でミザレアの観光地としての場所からは、外れた場所にあり立地が悪いため、大抵暇なのだ。それでも宿を続ける者がいるのは、なんだかんだで安い値段目当ての客が定期的に来るからだろう。

「どうせ部屋空いてるだろ、雨止むまで使わせてくれねえか？」

「まあかまわねえよ、7人か？好きな部屋使え」

オヤジは、適当に握った部屋の鍵を受付に置いた。

「おじさん、お金いくら？」

「別にいらねえよ」

ジータが料金を払おうとするがそれをオヤジは、すつぱりと断つた。

「ええ、悪いよおじさん」

「いいんだよ。あんたらには、前のアウギユステでの騒動で助けられたんだ。このぐらゐの礼はさせてくれ」

帝国によるアウギユステの水神にして星晶獣リヴァイアサンが暴走させられた時、島

崩壊の危機を防いだのは、他ならぬジータである。島で起きた異変が星晶獣リヴァイアサンの暴走に原因があるとルリアが感じ取ってすぐさま行動を起こし最悪の事態になる前に暴走を治めた事は、アウギュステの住民も聞き及んでいた。

「おじさん……ありがとうございますっ！」

その事を理由にされては、無理に料金を払う事もはばかられジータは、深々とお辞儀をして礼を言った。

「それじゃ、部屋へ行きましょうか。イオちゃんは、私とね。髪乾かさないとね？」

「うん、ありがとロゼッタ」

「それじゃあビィ君は私と……」

「いや、普通にジータと一緒にだよ……と言うか、ジータとルリアは一緒の部屋使うから3人でいいじゃねーか」

「む、それは確かに……」

各々部屋の鍵を受け取り移動していく。唯一の男性陣ラカム、オイゲンは、必然的に同室になった。

「それじゃあオイゲン、俺あ先部屋行ってるぜ」

「ああ……ところでオヤジ、ばあさんの宿なんか感じ変わったが、ばあさんなんかあったのか？」

ラカムを先に行かせると、オイゲンはこの宿の隣に立つ全体的にピンク色の宿の外装が剥がされている事が気になり聞いた。そこで働く老婆とは、昔からの知り合いのため心配にもなったのだ。

「いや、ただ改装するつてだけだ。普通の宿にするつてよ。もうあのまま続ける気も無いつてさ」

「ははっ、そりやそうだ。あんな宿使うような奴、もうここいらじゃいねえしな」

「アウギユステが今ほど栄えて無いぐらいだったからな、あそこ出来たのは」

「寧ろよく今まで営業できたと思うぜ……それじゃな」

「ああ、ゆっくりしてきな」

知り合いの老婆の事も聞けたので、オイゲンも部屋に向かった。

——また、同時に。

「親切な方が居て助かりましたね隊長……」

「ええ、本当に」

そのジータ達が入った宿、改装中の宿を挟みさらに隣の小さな宿に騎士団の団体が入っていた。大雨から逃れられて彼等もまたホッと息をつきつつ、雨で濡れてしまい、中は蒸れる兜を脱ぐ。

「騎士の皆様もこの雨で大変でしたでしょうに」

「ええ、アウギユステでは珍しい規模の雨ですから我々も驚きました」

「本当にねえ」

小さな宿の主人であるおっとりとした婦人が突然の客人バウタオーダ率いるリュミエール聖騎士団の部隊の面々を宿に入れて雨宿りをさせていた。店の表を歩いていた。ずぶ濡れの騎士団を見て声をかけて宿の中に招いたのだ。

「雨が止むまでどうぞごゆっくりしていただくさいね。今スープを温めてますから」
「これは……何から何まで、真にかたじけない」

優しい女主人の心遣いに感謝しつつ体を休めるバウタオーダ達。このようにして、見事団長とシャルロットの二人を囲う包囲網は、完成されたのだ。

■ 誤

（な、何と言う事だ……っ!?!）

この大雨の中、一人の少年が雨に濡れる事も気にせず路地の影から、はつきりと団長とシャルロットの二名が一つの宿へと消えて行くのを見た。他ならぬ若き帝国兵ユーリである。そしてユーリは、もう一つはつきりと見たのだ。二人が入って行った宿、その宿の名を。ペンキも剥げ落ち読みづらくなっているがじっと見ればその名が「ホテル

メイク・ラブ・ギユステ」である事がわかった

(う、噂に聞いたが……これはいわゆるラブホテ……つ、つまりあの二人は、あの中で……ば、馬鹿野郎、俺っ!?)

一瞬不埒な考えが浮かび、ユーリは雑念を払うため降り続ける雨で頭を冷やした。

(だ、だがあの中に入って行つたのは、間違いない……騙す様子も無く、シャルロッテ・フェニヤも普通に入つて行つた……だ、だとすると、まさかっ!?)

“雨宿りのため”、“間違えて入つた”。それぞれの可能性を考えるよりも若きユーリは、ちよつぱりHな妄想が頭の隅にちらつき冷静さを奪う。そして最後には。

(あの二人……デキているのかっ!?)

本人達、特に団長が聞いたら雄たけびと共に否定しそうだが残念ながらこの誤解を解く人間は、この場にはいなかった。

このようにして、新たな誤解と面倒事が帝国の部隊へと情報として持ち帰られたのである。

今がどん底なら、あとは上がるだけだ

■ ■
一 待ち人來ず

■ ■
アウギユステを襲う激しい雨。住民達が慌てる中この事態に頭を悩ませる者達があ
る宿にいた。

「来ねえなあ、相棒のやつ」

宿の談話室で既にここに居る筈の二名の人物。「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイ
くんマン&均衡少女Z O Y」の団長と彼が連れてくる手はずであるシャルロット騎士団
長、その二人が未だ現れぬ事に星晶戦隊（以下略）の面々は、ある種の不安を覚えてい
た。

「この様な大雨であるから遅れていても不思議ではないが……」

「彼の場合、そこからのトラブルコンボが考えられるねえ」

突然の嵐の様な大雨が二人の到着が遅れている理由である事は、ほぼ間違いないと考
えているコーディアだがフィラソピラは、そこからのトラブル発生に懸念を抱いてい

た。

「帝国の事もある。主殿がトラブルに巻き込まれるとなると更に厄介な事態に発展しかねんぞ」

「フアンダナア・・・(´・ω´、)`」

「団長は、一度巻き込まれるとそこから加速度的に状況が悪化するからなあ」

「マ、何時モノ事ダナ」

団長のトラブルと苦労体質を心配する星晶戦隊の面々。一方で一人ティアマトは、のんびりと購入したワインを飲みながら外を眺めていた。

「ティアマト、お前は緊張感と言うのをだな……」

「心配シタ所デ状況ハ変ワランダロ。コノ雨ハ、多分モウスグ止ム。ソシタラ何人カデ、アイツヲ探シニ行ケバイイ」

窓から見える天気の様子から風を司る星晶獣の彼女は、それとなくこの天気の変化を読み取っていた。

(明ラカニ不自然ナ天候ナノガ気ニナルガ……)

またこの雨があまりにも突発的であり何者かによる魔術か何かを利用したものであるのかと疑う。だがアウギユステ全域で特殊な術が使われた気配は感じない。あるいは、星晶獣の仕業であるかも疑った。

(微力ニ星晶ノ力ヲ感ジルガ……海カラカ？リヴァイアサン、デハナイナ。ナンダ、コレハ)

押さえ込められた様な気配。星晶の力には違いなかったが現状この様な雨を起こせるほどの力は、感じられなかった。

「……ナンダ？」

そしてそんな事を考えていたティアマトを周りの面子が意外そうな顔で見ていた。

「にや、ティアマトが真面目な顔してるにや〜と思つて……」

「珍しいな……俺が団に入ってから見たことが無い様な表情だ」

「雨でも降るんじゃないのかア〜？」

「もう降つてるわよ……」

ボロクソ、異常な天候について考えただけでこれである。

「才前等ナア……」

「それとも腹痛かい？」

「やっぱり、おへそを出す服は、冷えると思うです」

「違ウツ!!」

しかしこれも普段の行いの所為である。(笑)筆頭星晶獣の名は伊達ではない。

「まあ、実際の所彼女の言うとおりか。彼も宿には、向かつていたはずだ。この周辺にい

るかもしれない、雨が弱まったら私とブリジールで彼を探しに行こう」
「ふ、二人で……いいの？」

「入れ違いでも困るからね。二人でも見つからないようなら一度戻り人数を増やすよ」
ティアマトの言うとおり雨が直ぐ止む事を願いながらコーデリアは、外を眺めた。

二 ピンクの空間

「ここは、元はラブホテルだね。もう普通の宿屋にしようと思って改装中なのさ」

現在改装中、その名を「ホテル メイク・ラブ・ギユステ」と言う宿で俺とシャルロットさんは、ドツピンクな部屋に通され慌てて引き返して主人のばあさんに詰め寄った。その際に帰ってきた答えがこれである。

いや通すなよ、未成年を。と、思わないでもないがもうラブホとしては、営業を終えているのと説明のとおり改装中なので未成年が見たり使っても問題の無い物しか残っていないので、「大丈夫だよ」だそうだ。

大丈夫じゃない、大問題だ。

「後言い忘れてたけど、給湯器は止めて無いから一応風呂使えるよ。好きにしな」
風呂まであったんかい。というか使わねえよ。シャルロットさんいるんだぞ。

しかし依然として外は大雨、心なしか勢いが増している気さえする。今更ここを出るといふわけにも行かないか。

「シャルロツテさん、この部屋なんだけど」

「お、おお……これは、なんとも大きな……あつ！」

フロントから戻ると、ポインポイン、とベッドの上を軽く跳ねてる子供、と言うかシャルロツテさんがいた。

「何してんすか……」

「あ、いやその……お、大きなベッドだったので、つい」

そうですか、ついですか。なら仕方ないね。ただ今の光景を俺は、心の癒し宝箱へとしまいこんだ。

「そ、それでジミー殿この宿ですが」

「ああ、うん。その事だけど、実はその……ラブホテルだったらしくて」

「ラブ、ホテ……?」

「ええ、だからどうしようかと思っ——」

「ラブホテル、愛の宿とは、またロマンチックですね。自分こう言う所は、初めてであります！」

「……ええ？」

「ベッドの天井なんて鏡であります。変な装飾ですね」

「あー……」

「しかし殆どがピンク色とは、気が休まりませんが宿としてどうなのでしょう？ それともこう言うのが主流だったりするのでありますか？」

そ、そうきたかあゝツ。

待ってくれよ、シャルロットさんって確か今歳が24だろ？ 知らないのか、ラブホッ!? ザンクティンゼルのド田舎にいた俺でも何となく知ってるぞ、その存在と利用目的いや、使った事はねーけどさ。と言うか部屋の雰囲気と語感でわからないのか。

「それにしても大きいベッドであります……シーツもピンク、不思議です」

「あはは、そうっすね……んはは」

こ、これは言うべきなのか？ いやだがここで説明すると俺の立場が……女性にラブホテルについて説明する男……いやいや、ちよつとこれは。

「おっと、そうでした。タオルで髪を拭かねば」

「あ、ああ……そうですね。タオルあるはずですけど」

出入り口の傍に「バスルーム」と書かれた扉がある。タオルがあるとすればここか。何となく嫌な予感を感じつつ扉を開ける。

「ほらやつぱりー」

「どうしましたか……おお、これは!？」

少し広めのバスルーム。そこは、ピンクの空間と打って変わって浅い蒼の光が空間を満たし浴槽まで蒼色に光っていた。力の入れどころおおっ!!

「ああこれは……ジミー殿っ!!」

「はい?」

「あ、あわあわのヤツですっ!!」

シャルロットさんが浴槽の隣にある説明書きを見つけ興奮しながら指差した。そこには「本浴槽は、噴流式の切り替え可。ご自由にお楽しみください」とあった。丁度浴槽に入ると腰辺りに程よい勢いのあるジェット噴流が当たるマッサージ風呂である。また凝った風呂を作ったもんである。結構いいやつだし多分改装後もこれは残すだろうな。

「こ、これが噂の……」

えらい興味ありげだなこの人。使いたいの? いやいや、こんな状況で、しかも男である俺がいてそんな事思えど口に出したりなんてすまい。

「は、入ってみたい……」

「言うのかよっ!!？」

「はっ!？」

しまった声に出してしまつたつ!!

「じ、自分声に出てましたか？」

「え、ええまあ割とハッキリ……」

「わわ、うわあ……は、はずかしいでありますう〜つ！」

その場で顔を両手で覆つて屈みこむシャルロットさん。耳まで真つ赤である。ただこう言つちやなんだが自分の事を割と独り言で言うきらいがある気がしますぜ。

「そんなに憧れてるんですか……」

「えつとその、重ねてお恥ずかしいのですが……以前大人の女性としての魅せ方を少し本で調べた事がありました」

んな事調べてたんかい。騎士団の仕事どうしたあんた……と言うのは、最早いまさらか。

「それで、こう言つた風呂の事が書かれておりました……大人の女性としては、憧れが」大人の女性としては、なんて事自分で言う尚更大人の女性から遠ざかる気がしますよ俺は。大人の女性への憧れの像が10代前半で止まってないかこの人。つて言うかステレオタイプ？

さてさて、しかしどうすればいいの？俺さつきからどうすればいいのかしか考えて……いや、日頃からそんな事ばかり考えてる気がする。いやいや、それよりも今の事

だが入りたいんだろなあ、この人は……。

「そんな入りたくないならちよつと入りますか？ 部屋いると気まずいだろうから、俺フロントにでも行つてばあさんと適当に時間つぶしますよ」

「い、いえいえっ！ そのような、自分のわがままでジミー殿にご迷惑を」

「はは、ご迷惑だつて。別に構いやしませんよ。迷惑も何も今更だし、俺も散々迷惑かけましたからね」

「いや、そのような事は……」

「無くはないでしょ？」

「……そう言われると、そんな気が」

片手に担いだりからかったり、片手で担いだり、からかったり、片手で担いで放り投げたり。よくよく考えると俺は、出会つて五日の間に豪い事しまくつてるな、名のある騎士団長に。

「まあ雨で冷えたらうし、入らないかはともかくシャワーぐらいはしたらいいですよ」

「それは、確かに冷えましたが」

「鍵も掛けといていいですよ、適当に戻るんで開けてくれればいいんで」

俺がいるとまた押し問答になる。迷惑だの、そうじゃないだの、時間の無駄で面倒くさい。とつと部屋をでればあさんと世間話でもしようと思つた。だがかし。

「お、お待ちくださいっ！」

「グエツ!!」

服の裾をつかまれグエツてなった。

「なぐつ、なんすかあつ!?!」

「た、確かに入りたいかと問われれば自分は、この憧れのあわあわのマッサージのお風呂に入りたくてあります」

「じゃ、じゃあやつば俺は外に」

「しかし、私と同様に雨に濡れたジミー殿を部屋の外に出そうなんて思いません」

「いや、それだと」

「だから別に……部屋を出る事はありません。居ていいであります」

ええー……、今回、そう言う展開なんすか神様……。

■ 三 火消要因

■ 現在改装中のラブホテルの左右には、今それぞれ「ジータと愉快な仲間たち団」とパウターダ率いるリュミエル聖騎士団の部隊が休憩している。もちろんそんな事を団長も、シャルロットも、ましてジータとパウターダも知らない。それぞれが突然の

大雨に濡れて冷えた体をそれぞれの宿で乾かし温めていた。

「温かい……スープ、ごちそうさまでした。大変美味でした」

「ほほほ、ただのスープに大袈裟ですよ」

「いえいえ、本当に助かりました」

宿の談話室で談笑を楽しみ、差し出された暖かなスープを飲むバウタオーダ達。具も少ない薄味のスープであったが、雨で冷えた体には、この上ない温かさであった。隊長、雨の勢いが収まってきました」

天気の様子を見ていた部下の一人がバウタオーダの元へと来て報告する。言われてみると雨音がだいぶ収まってきた事にバウタオーダも気がついた。程なくしてこの雨は、止むだろう。

「そのようですね。各々何時でも出れるように準備をしておきなさい」

「はっ！」

「ご婦人、これは少ないですが今回のお礼です」

バウタオーダは、おもむろにルピ硬貨を手渡した。少ないと言うがそれなりの量である。それを見た婦人は、少し驚くと微笑みと共にそれをバウタオーダへと返した。

「お礼を貰うためにやったのではありませんので」

「いえ本当に助かりました。どうか受け取ってください」

「私は、宿の商売以外でお金を取る気はありませんよ。何時かまたアウギユステに来たら泊まって行って下さい。そのお金は、その時にでも」

やんわりと手に戻された硬貨を見てパウタオーダは、困ったように笑いながらそれを懐へとしまった。

「わかりました。必ずまた来ます」

「そうしてください、お待ちしていますよ」

二人の会話が終ると共に雨脚が更に弱まっていった。それは、平穩の訪れと思えながら、しかし新たな騒動が始まる。『嵐の前の静けさ』の訪れなのであった。

四 核弾頭

「さっぱりしたあつ!!」

上下インナーのみで妙に元気な少女、ジータが宿の部屋で声を上げていた。

「コラ、ジータはしたないぞ」

「えへへ、ごめん」

女として如何なものかと思える格好のジータをカタリナが注意する。他の仲間と部屋を別れたジータ、ビィ、ルリア、カタリナの三人と一匹。濡れた体を宿の小さいなが

らもお湯の出るシャワーで洗い温め気分がだいぶすっきりした様子であった。

「あ、見てください！雨の様子が」

カタリナに頭を拭いてもらっているルリアが窓の外を指さす。ジータ達が外を見ると先ほどに比べてだいぶ雨の勢いが弱まっていた。それを見てジータとルリアは、純粹に喜んでいるが一方でビイとカタリナは、心底ホツとし同時に不安であった。

「ビイ君、これは……」

「多分だけど、シャワーして気持ちすっきりしたから落ち着きが出てきたってことだと
思うぜ」

誰の気持ちがあすっきりしたかは、言うまでもなくジータの事であった。そもそもが雨の原因もジータである事は間違いない。表に現れない気持ちの変化がこの天気に見れていた。

「このまましばらく落ち着いてくれるといいのだが」

「どうだろうなあ……オイラも正直どうすればいいのかわからねえし」

「一先ず外を歩ける程度に雨が収まるか止むかしたら美味しいものを食べよう。それでも気持ちは多少変化するはずだ」

「それがいいな、一気に感情を変化させるような事すると何が起こるかわからねえし……つても、そもそもそんな方法今あるわけないけどな」

キヤイキヤイと窓の外を眺めながら、ギユステで何を食べるか、どこで遊ぼうか等を語り合うジータとルリアを見る。今ばかりは、年相応の二人の様子に癒されつつも、謎の不安を覚えるカタリナであった。

■ 五 火薬庫および着火要因

……俺は、何してんだろう。

「お湯張りしましたよ」

「で、では……いざっー!」

シャルロットさんが、湯のたつぷり張った浴槽にあるジェット噴流を生み出すスイッチを押した。すると浴槽内に勢い良く噴流が起き水中がキメ細かい泡で溢れていった。

「す、すごいであります! ブクブクであります!」

「そつすね」

もう一度言う、俺は何してんだろう。

はしやぐシャルロットさん、もう何を考えればいいかわからない俺。なんでこうなつた? いんや、わかつてるさ、俺がシャルロットさんの部屋に居ていい発言を聞いて断り切れなかったのが悪いんだ。

「じゃあ、俺部屋で休んでますから」

「あ、わかりました。その……申し訳ありません」

「いいつすよ。バスローブもこっちの籠にありますよね？ごゆっくりどうぞ……」

とつとと浴室から出ていく。そしてちゃんと浴室の鍵を閉めてもらった。お互いのためにである。それを確認すると、俺は一人では大きすぎるベッドに横たわった。

もう一度だけ言う、俺何やってんだらう。

本来ならコーデリアさん達と合流して「正義審問」も終わっていてもおかしくない時間だ。それなのに俺ときたら間違っただけとは言え改装前のラブホでリュミエール聖騎士団の騎士団長のバスタイムが終るのを待っている。

馬鹿なの？どうすりゃこんな事態になるのさ。ルナルさんの好きな絵物語でもそうそうねえよこんな展開。

……考えても無駄だよね、知ってる知ってる。まあボオくつとして休むとするよ俺は。

「お、おおっ!？」

「……」

「うわ、す、水流が腰に……うひゃあっ!？」

「……」

「んひいつ!? け、結構くすぐった……うわあ、あは、あはははっ!!」

あの人はもおおおつ!! 聞こえてるっつーの!! 気まずいわ、気まずすぎるわ!!

声が取まるまでマジ気まずかったわ。延々と続いた気がしたわこの野郎畜生め。だがやつとシャルロットさんが噴流の勢いにも慣れたのか声も聞こえなくなると、俺のほうも多少落ち着くことができた。

色々、この間に宿から出たの事を考える。もちろんコーデリアさん達との合流が最優先であるが間違ってもこの宿から出て行くところを誰かに見られるわけにはいかない。もう既に俺達がとつてる宿で集合しているはずだからありえないがティアマトにでも見られた日には、死ぬまでからかわれる。見知らぬ誰かに見られたとしても恥ずかしいのに冗談ではない。

それにシャルロットさん、彼女のような高名な騎士団長がラブホへの出入りなんて見られちゃとんでもない事になる。ちゃんとラブホの事を説明出来なかった俺も悪いが……。

やはり理想的退出は、人目に付かぬタイミングを狙う他ない。幸いにもすでに外は、夜。暗がりには紛ればわからないはずだ。この雨も降りだし方からして長く続く雨では、ないと思う。狙え絶妙な逃げ時を、俺っ!!

などと勝手に一人決心していた俺であったが、気合と共に顔を上げた瞬間に浴室と

ベッドルームを仕切っている壁——それが一瞬にして奇麗な透明ガラスへと変化し、ありのままの姿のシャルロットさんと目と目が合う展開は、本当に予想できるはずは、無かったのである。

「きやああああああああああああつ!?!」

「ぎやああああああああああああつ!?!」

俺が、俺が何をしたっていうんだよつ!?!

六 「そういや、ガラスの事言うの忘れてたね」

「殺してください」

「ジミー殿、顔を上げてくださいっ!」

「殺してください」

「ジミー殿、じ、自分はその……気にしてないであります。だから顔を」

「殺して奉り候……」

「ジミー殿、言葉使いが変でありますっ!?!」

殺して……もう表を歩けない俺を誰か、殺してくれ……。

「お願いですから、もうそんなに謝らず……」

「それ以外に俺に出来る事は、無い」

全空一申し訳ない気持ちの表れ、土下座。俺は、今土下座以外するべき事は無い。あのわけがない。婦女子の裸を偶然とは言え見てしまう。しかも入浴直後の、シャルロツテさんの……。

被告人俺氏、有罪確定、満場一致。

「そもそも、ジミー殿を部屋に居て良いと言ったのは自分ですし、それにあの事も自分が……」

シャルロツテさんは、未だ赤みの抜けきれぬ顔で俺を土下座の体勢から戻そうとする。

突如の壁の透明化、と言うより実はガラスだったのだが……。ようは、ラブホ特有のサービスであった。ガラスと特殊な加工がされた魔法結晶を組み合わせた世にも不思議な「一押しですつきりクリアガラス（いやあくんエツティ Ver.）、工業の島バルツで物好きな職人が開発した色々用途が限られてくる阿呆な発明であった。

浴室に設置されたそれは、浴室内からのみ壁モードと透明ガラスモードの切り替えが出来る頭悪い仕様である。誰に聞いたって？ばあさんだよ。「言うの忘れてたよ、ごめんね」だって。この野郎。俺の知ってるばあさんってのは、こんな人ばっかか……。

それでそのスイッチを見つけたシャルロツテさんが、興味本位で押してみたらあんな

事になってしまった。と言うしだい。

そしてこの事で必然的にラブホの事が結局シャルロットさんにもバレた。と言うか、説明せざるをえなくなった。透明になるガラス壁とか、誤魔化し切れないから。それでラブホの説明を聞いた時、暫し何の事かわかつていなかったようだったが、「つまり男女のですね——」と露骨な説明をしたあたりで顔が爆発したように赤くなりベッドに潜り込んでしまった。

俺が潜りたいよ、もう穴があつたら入りたいよ。何が悲しくて年上の女性にラブホの使用目的の説明をせねばならんと言うのか。拷問だよ、辱めだよ、地獄だよ。

そしてその後は、今に至る、怒涛の土下座だよ。

「俺は、こんな事をして、どう詫びれば……」

「だ、だからもういいであります……気にしてないですから。と言うか、あまり謝られると、自分としても複雑と言うか……」

だ、だってそれ以外に俺どうすればいいのか、わからないし……。

「ジミー殿、確かにその……自分も見られてしまった事は、恥ずかしいであります。今も言った通りジミー殿を部屋に居て良いと言ったのも、勝手にあのガラスのスイッチを入れたのも自分ですから……そう、事故！これは、事故であります！」

「事故、ですか……」

「そうです、不運な事故です。だからどうかもう顔を上げてください」

床に擦り付けていた俺の頭を、シャルロットさんが優しくその小さな手で持ち上げる。その時、俺を許し微笑みを浮かべるシャルロットさんの顔から後光が見えたような気がする。

「ありがとう……ありがとう……」

「泣くほどでありますか?！」

泣くほどだよっ! 人生終わったと思っただからな俺はっ!? 衛兵に突き出されて前科付く覚悟もしたんだぞ!!

「はい、それじゃあ……もう今まで通りであります!」

「はい……はい……ありがとう……」

「それはもういいであります」

あ、はい。けど心の中では唱えときます、ありがとうえ。

結果的に、シャルロットさんは、冷えた体を温めれた(事故によって羞恥心からも体が熱くなったが……)。その点は、せめて良かったと思いたい。一方で俺は、心底肝が冷えたが。

さて、兎にも角にも場が落ち着いたところで新たな問題である。問題と言うか、試練と言うか、シャルロットさんにラブホの事が知られた以上、さらに空気が気まずい事に

なった。さつきまでは、ただ大きいベッドという認識のベッドも、人間二人が入って動いても問題ない大きさと言う事を知ってしまったシャルロットさんは、ずつと顔真っ赤です。だから俺らそろって部屋の隅にある大き目ソファーに並んで座ってる。なんだからなあ。

「……なんと言うか、申し訳ございませんでした」

「はい？」

ふいにシャルロットさんが謝りだした。なんでじやい、俺の方がまだ謝り足りないぐらいだぞ。

「何がっすか？」

「今回と言いなんだか自分が案内する場所で次々とトラブルに巻き込まれたような気がして……申し訳ない」

違います。

違います。

それ、違います。

多分それ原因俺です。俺のほうがトラブル呼んでます。貴女じゃないです。そもそも俺がトラブルを呼んだ結果、貴女と出会ってます。

「それシャルロットさん関係ないと思えますよ」

「けれど、自分もつと冷静に対応できていたら、今回もこんな事には……」

対応できるかあ？確かにラブホ知らんと言うのは、予想外だったが、知ってようが結果は、変わらなかつたと思う。そもそもここに入った時点でダメだつたはずだ。

「大人としてジミー殿よりもつと上手く対処するべき時、自分は慌ててしまいました。こんな事では、大人のレディを名乗る事は、出来ません……」

あ、そこなのねシヨックなのは。

「はあ……いいですか、シャルロットさん。そんな悩みは、不要です、いりません」

「え？」

「ポイしちやいなさい」

「ポイって……」

いいんだよ、ポイしちやって。

「大人かどうかなんて、勝手に成ってるもんなんです。誰が決めるでも、自分が決めるでもなくいつの間にか成つとるのです。成りたくなくてもなるのです、考えても無駄です」

「し、しかし」

「それに、大人なら冷静に対処できるみたいなのは、妄想です」

「妄想っ!？」

「そうです、妄想、ファンタジーです。世の大人は、殆どが子供と変わりません。精々子供の時より大人しくなっただけで、基本的にみんな図体大きいだけの子供なんです」

「ジ、ジミー殿？」

「いい年して馬鹿みたいに酒飲んで所かまわず吐く人がいます。人の困る顔を見たいがために無理難題を投げかける意地悪な人がいます。自制と言うものが無かったせいで四六時中笑い続ける人もいるし、しょっちゅう凶器を振り回してる人に、如何わしい妄想しかしない人もいます」

「ジミー殿、ちよつと」

「人の金を勝手に使い込む奴等に、悉く自分の尻を蹴ってくれと言ってくる阿呆に、笑顔で借金上乘せしてくる人もいて、死地へ笑顔で放り投げるクソババアも……」

「ジミー殿、しつかりっ！なんか目が変です！」

「ハッ!？」

い、いかんいかん、ダメな大人の例を挙げてたらちよつと暴走した……。

「ジミー殿、なんだか苦勞をされてるようですが、大丈夫でありますか？」

「い、いや……俺の事はいいんですよ。要はですね、クソみたいな大人を見てきた俺に言わせればですね、シャルロットさんはよっほど大人です」

「そ、そうでしょうか」

「まあ、ぶっちゃけ面倒くさいんで、もうそんな事で悩むのやめてどうぞ」
「いつきがいい加減な答えになったであります……」

仕方ないじゃん、本当に面倒なんだもん。

「だってしようがないですよ。ラブホについて知らなかったのも、大人とか関係無しに知らなかっただけですし、大人だからって冷静な対応できないって、自分の裸見られて冷静に対処できる人なんてそうそうおりやしませんって」

「それは、まあそうかもしれないませんが……」

「それに自分の悩みってのは、自分で答えを見つける事が難しいもんです」
「と言うと?」

「自分で同じ悩み延々悩んでて答えなんて見つかるわけ無いじゃないですか。一人で悩むって言うのは、宝探して宝の場所を知ってる人が居るのにその人無視してたった一か所しか探さないのと一緒です。宝のない場所を掘り続けるだけっす」

「わかるような、わからないような……」

仕方ないじゃん、俺こう言う例え苦手なんだから……。

「要は何一人でグダグダしてるのかって話ですよ。騎士団長としての立場や、大人だとか、身長の事込みで悩む事が有るなら尚更一緒に答えを探してくれる人探しましょう。シャルロッテさんの納得できる答えって言う宝を知ってる人はいますよ」

「……そんな人が、いるでしょうか」

「いますよ、幾らでも。騎士団の仲間にもいるだろうし。なんせ空は広いです、から……」

「ジミー殿？」

「いや、なんかすんません……今の忘れて下さい……」

なんて言うか……何熱弁してんの俺。こんな偉そうな事言えるような人間じゃないじゃん、馬鹿かつ!!状況考えろよ、今さつき偶然で、許されたとは言え裸見てしまった様な人間だぞ俺は、急に恥ずかしくなってきた。

「偉そうなこと言いましたけど、たいして俺も分かってないんで、すんません」

「……いえ、忘れないであります」

「え？」

「ジミー殿の言葉、少し考えさせられました。自分は、一人で悩みすぎていたかもしれないかもしれません」

えええ、真に受けちゃったよ……やばいじゃん、クツソ恥ずかしいなあ、俺の馬鹿っ!!ほんとティアマトとかいなくてよかった、いたと思うとマジ寒気がするわ。

ああ、てかもう無理間が持たない。早く部屋出たい、宿出たい、今日を終えたい!!

そんな必死の願いが通じたのか、ずっと聞こえていた激しい雨の音が徐々に、徐々に

小さく弱くなっていった。それに気が付いた時の俺ときたら嬉しくて勢い良く立ち上がったってしまったね。

「雨弱まってきたみたいですよ」

「あ、本当であります」

大振りが小雨へと移り、窓に叩きつけられる雨粒もポツポツと数えられる程度になっていく。降るのも突然なら、止むのも突然だったな。

「……出ますか」

「そうでありますね」

なんとも不思議な雰囲気の中、そそくさと宿を出る準備をして部屋を出ていく俺達。だが内心俺は、やっとこの空気から脱する事ができるとルンルン気分であった。

フロントではあさんに礼を言うと「改装したらまた来なよ」と言われる。ちよつとは考えておのがあの風呂の壁だけは、何とかしとけよマジで。

さて、そして今日の本題。

「シャルロツテさん、実は来てほしい場所があります」

「来てほしい?」

「ええ、ちよつと用事で……もう夜になってるのに申し訳ないですけど、ここの近くのはずなので」

「かまわないですが、どんな用事がありますか？」

「いきやわかります」

「はあ、そうでありますか」

流石にもう何も今日トラブルが起きることはあるまい。とつととコーデリアさん達の待つ俺らの宿に行ってしまう。ひどいロスを食らったからな。帝国関係の事もあ
るから、もうのんびりしてられない。扉を開けて外へ出る。

「それじゃあ行きますか」

「我々も戻りますよ」

「行こうかみんな！」

……ん？

なんか、宿から出たら声が重なった。両サイド？他の宿の客か？

「ん？」

「おや？」

「あれ？」

………ん？

「え？」

「え？」

「え?」

え?

七 え?

ちよちよ、ちよま……嘘だろ、嘘だろ嘘だろ嘘だろ嘘だろおおおっ!?信じねえぞ、冗談じゃねえぞ、夢だ、これは夢、悪夢?!まっつてほんと、まっつてっ!?今左から聞こえた声ってめつちや聞き覚えある声だったよねっ?!いや、違いますよ、違うよ絶対!!そんな偶然……トラブルの極み、あるわけないっ!!

「ま、まさか、ババ、バウタオーダ殿」

「……シャルロット、団長?」

あつはつはつはっ!!こっちはこっちでなんかあれだけど、まて深呼吸……落ち着こう、まだ顔は見えない、目は合わせてない。見なければ確率は二つ、アイツがいるかないかの二つ。そうそしてきつといない、アイツが偶然俺が雨宿りで逃げ込んだラブホの隣の建物から現れるとかそんな事はないです、無いったらないっ!!

「……お兄ちゃん?」

「兄貴……?」

聞き覚ええええーっ!!二つの声に聞き覚ええつ!?覚えありすぎるっ!!

「ひ、人違い、じゃよ」

「うーん、お兄ちゃんっぽい幸薄オーラを感じるけど……」

「どこで判断してんだテメエっ!!……あ」

「ほーら、やつぱりっ!」

思わず向いてしまった。顔を合わせてしまった。夏の太陽、満開の花とも思えるような、夜だと言うのに輝いて見えるその笑顔。傍らに寄り添うように飛んでいる小さなドラゴン。間違いようが無かった。

「よ、よう……ジータ、ビィ。おひさ」

間違いなく、俺より先にザンクティンゼルを旅立った妹分で幼馴染であるジータとその相棒のビィだった。

「ほ、本当に兄貴なのか?」

「おう……元気そうだなビィ」

「あ、兄貴!本当に兄貴だっ!」

「嬢ちゃんどうした?えらい元気な声が聞こえたが……おっ?」

ジータの後ろから見知らぬ男女がゾロゾロと現れた。ただ二人の少女と女性、確かカタリナと言う騎士とジータが助けたと言うルリアだったはず。

「んだあ、この事態は？」

「シャルロット団長……貴方は、このようなところで何を？」

「いや、それはその……」

「お兄ちゃん、すつごい偶然っ!!偶然?運命っ!?!つて言うか本当に空に出てたんだね!」

「兄貴い、助かった……オイラほんと、今日なんかもうダメかと思つて……っ!!」

「お、おうそうか……大変だな」

「いつの間にか姿を消したと思つたら、まさかアウギユステで出会うなんて」

「で、ですからそれは」

「本当に騎空団始めたの?いつ頃?その子つて仲間なの?」

「兄貴、なんでもいいからジータに兄貴グッズを上げてくれよおっ!もう前のクツシヨ

ンとかじゃ無理なんだ」

「あ、うん……ちよつと、今はそのまづいつて言うか」

「いや、ほんとどう言う事態だよっ!」

ジータの仲間と思われる髭の兄ちゃんが叫ぶ。お気持ちお察しします。俺もそう思うし、助けてほしい。

「てかこの小僧、この宿から出てきたのか?」

そしてもう一人のおっさんが、わざわざ言わんでいい事言つた。言わんでいい事言つ

たッ!!

「お兄ちゃん、隣の宿だったんだね？知ってれば呼んだのに〜」

「あははくそうだねえ、ところでジータ、ちよつと場所を移したいんだけど」

「ねえねえどんな部屋だった？私達雨宿りでね、この宿にお世話になったんだけど、そっちの、宿、は……」

【ホテル メイク・ラブ・ギユステ】、ジータの瞳にバツチリ入る。他の皆もつられて見ちやうね。まあ見るよね。

「こ、こここれって、あれよね」

「ええ、つまりそう言う宿ね」

杖持った少女が顔真っ赤にしてて、隣の女性は微笑ましそうに俺とシャルロツテさんを見てる。

「シャルロツテ団長、まさか貴方……」

「誤解です、バウタオーダ殿!？」

シャルロツテさんの方も大変そうだが、それどころじゃない。俺の第六感が告げている。「逃げろ」と。



八 お年頃爆発

——この瞬間、極めて短期間の内フアータ・グランデ全域で歴史上今までに無い同時多発異常現象が発生した。

ポート・ブリーズでは、ティアマト（真）の力を凌駕する突風が吹き荒れ、バルツでは、死火山と思われていた火山が突如噴火、アウギユステでは、ある筈の無い間欠泉が各所で吹き出しリヴアイアサンが火傷した。それ以外の島々でも地震、雷、雹、嵐と異常気象のオンパレードであった。だが奇跡的に死傷者は、全く居なかった。むしろそれ等の現象は、最終的に島にとってプラスに働いた。

突風によって途中動力が故障し空の底へ落下しかけていた騎空艇数隻が奇跡的に島へと運ばれ助かり、バルツでは新しい火山の熱を使つての工場が作られた。アウギユステの間欠泉は、すぐにシエロカルテがその土地を買い取り、海と温泉が楽しめるリゾート地に改造。それ以外の場所でも同様の結果をもたらした。

果たしてこの異常現象の原因は、なんであったのか後の学者達は、頭を悩ませた。ただの偶然か、それとも星晶獣の力か……あらゆる可能性を考えても答えが出る事はなかった。そして、この時。空の底へと通じる巨塔でも異変が起きていた事を、誰も知る由は無かつたのである——。

九 弱P・弱P・↓・弱K・強P

時間になっても現れない団長とシャルロット騎士団長を探しにブリジールとともに小雨になったのを見計らい外に二人を捜しに出た。おそらく二人は、近くまで来ていると考えてあまり広い範囲を探さずにいると案の定覚えのある声が聞こえてきた。そして、同時に複数人の騒がしい声。

やはり、トラブルに巻き込まれたのか……呆れながらも、彼らしい展開に思わず笑ってしまったが、声の聞こえる所に付いた瞬間には、その笑みは消えた。

まずその状況、コーデリアからみて左からリユミエール聖騎士団の部隊が揃っていた。しかもその隊長は、コーデリアも知っている男パウターだ。この時点でコーデリアも混乱してしまう事態だ。そして次に一番右に居た少女を中心とした集団。一見ただの少女と思えるが明らかに他の纏う空気が違う。何よりもその二つの団体に挟まれ心底困り切っている見知った二人。こうなった過程が想像できない構図であった。

「脱兎ッ!!」

「あっ!!兄貴っ!?!」

そして、唐突に彼が、団長が本気で逃げ出したのだ。一人の少女の元から、普段コーデリアが知る限り見た事がない本気で必死な表情である団長が逃げ出していた。だが

さらに驚くべきは、その団長に一瞬にして追いついたその少女であった。

「にがさない」

「あ」

何時の間にも移動したのか、目に追えぬ速度だった。団長が遅かったのではない、彼女が異常だった。そしてその声が聞こえた次の瞬間、瞬きする間もない時間で団長は見るも無残、ボロボロになって地に伏せていたのだ。

そして、その時、コーデリアがみたのは、修羅の後ろ姿であった。

「あ、兄貴いいーっ！？」

「……あ、いけないっ!! っいい!？」

一匹、団の仲間に居る黒いドラゴンもどきに少し似た子ドラゴン叫ぶ。他の者達も慌てて倒れ伏す団長の元に駆け寄った。

「ジミー殿おっ!？」

「つい、じゃねえよジータアツ!？」

「お嬢ちゃん、ついにヤツちまったのかっ!？」

「おい、あの坊主ヤバいんじゃないかっ!？」

「ヒ、ヒールツ!! 誰かヒールできる人っ!! あ、私だっ!？」

「……あ? 大きな羽が、ばっさばっさしている……あっはは……ああ、大きい! 星晶獣か

なあ？いや、違う。違うな。星晶獣はもつとこう……ゆるキャラっぽいもんなつ」

「い、いけません！かなり意識が混濁していますっ!!誰か、医者をつ!!」

「……暑っ苦しいなあ？ウリエル？うーん……星晶獣なのかな？……おい、誰なんですか。ねえ！」

「しつかりするでありますジミー殿っ!!誰と会話してるでありますか!?!」

「え？……これは、星晶獣の気配？」

「いえ、これは……まさか、天司達が干渉してきてると言うの……？」

「ルリア、ロゼツタ、何に関心しているんだっ!?!」

「しつかりしてくれ、兄貴っ!!兄貴いいーっ!!」

果たしてどう言う事があって、こんな事になったのか。コーデリアもブリジールも団長の元に駆け寄る事も忘れ呆然と立ち尽くし、わからずにいたのであった。

騒動の夜が明け、騒動の朝が来る

■ 一 天司の誘惑

……うん？

な、なんだ、ここ……俺は……。

「あ？ なんだあお前？」

え？ おお？ なんだ、突然目の前に筋肉モリモリモッチョマンが……いや、あんたが誰だよ。

「人間か？ つかしいな……なんでただの人間が俺に干渉してるんだ？」

「知らんですよ、と言うか誰ですかあんた」

「ああ？ 知らねえで来たのかよ……いや、ちよつと待て、お前確か」

マッチョマンが行き成り俺の顔をじっくりと観察し始めた。暑苦しいなあ、もうちよつと離れてくれよ。

「おおっ!! そうか、お前あの小僧じゃねえか!!」

「どの小僧ですかね」

「おお、おお……ほんと地味な顔してやがる。まじで気が付かなかったぜ、ハハッ!!」
失礼だなこの筋肉。

「つんだよ、行き成り来るんじゃねえよ、もつと後に来ると思ってたのによ……ちよつと待ってる、あいつら呼んでくるから」

「ねえ、ちよつと……話聞いて、聞いて……てないね、行っちゃった……」

マッチョマンは、俺を放置してまるで風に消えるようにして去っていった。俺はと言おうと、何故か体の自由が利かない。と言うか俺の体の感覚が薄い……どうなってるんだらうか。

そもそも、俺は何をしていた？ ここに来る前に、俺は……そういや……そうだ、ラブホから出てきてジータと再会してその後……。ああ、そうかジータにやられたんだ……。く、くそ……ジータあの野郎、状況が酷いからってあんなのあるか。一瞬で意識刈り取られたぞ。どう言う動きだよ、まるで気がつかなかった。

「よお、待たせたな!」

「わおっ!」

また急にあのマッチョマンが現れた。しかも今度は、人数増えてる。

「あら、本当に来てたのね?」

「なんと……人の身のままで我々へ干渉したと言うのか」

「ふむ……奇怪な」

「待て待て待て……勝手に話進めないで、あんたら何なの？　ここは何処よ？」

突然増えた男女、どうも雰囲気が見事あるのだが、ティアマト達と似た奴だろうか。

「この男、どうやら意図せず現れたようだ……肉体が一時的に休止し、その精神のみが我らの次元へと干渉したか」

「待って、俺どうなってるの？」

それって死んでない？　え？　ここあの世なん？　ジータに殺されちゃったのか？

ほぼ無実の罪で？

「安心していいわ、あなたは今眠っているようなもの。ただ偶然にその魂が私達の元に現れたの」

安心できる気がしないんですが。召されてない？　魂が分離してるって、それ召され

てない？

「いや、そう言われても……そもそも、あんたらほんと誰？　なんか羽生えてるし人じゃ

ないでしょうけども」

「あたりめえだ、俺達は人じゃねえ」

「世を司る四大元素、それを司るのが私達」

「空を管理すべく生み出されたシステム、空の島々の浮力を生み出すのも我らが役目」
「我ら四大元素を司りし者、四大天司」

急に何言ってるんだこいつら、痛々しい……しかし、なるほど、大体わかった。

「つまり、めつちや凄いや星晶獣って事ね。Ok、把握」

「ざっくりまとめやがったな」

「まあ大体あつてるけどね」

はいはい、またこう言う展開ね。もう星晶関係は、正直胃もたれ気味。飽きたよもう。

気絶してても俺ってこんな事に巻き込まれちゃうんだね、こんちくしょう。

「しっかし、実際に間近で見えみると、お前ホント地味だな」

「二度目だな。初対面でクソ失礼だよ、アンタ」

「ガハハッ！ 威勢良いじゃねえか坊主！ いっちよ喧嘩すつか？」

「お断りします」

この筋肉マンからフェザー臭を感じる。あれと似たタイプだ多分。

「……所でさっきから俺の事知ってる感じだけどなんで？」

確かに初対面だよな？ ああ、ゾーイの時もこんな風だった。相手側が一方的に俺の

事知って妙に危険視したり敵対視するんだ。いつもそう。

「無論。貴様の異常性は、我ら天司も危険視していた。あの少女共々な」

「……あの少女って、まさか」

「貴方を気絶させたあの子よ」

「またジータか……」

あいつ関わるとほんと碌な事にならねえな。

「何時かは干渉する必要があると我ら、いや天司長も考えていた」

「まだ天司いるんすか……」

「我々を束ねる天司の長だ。今もどこかでこの様子を見られている」

つまり普段から俺達、ひいては空の住民達は、天司達に見られてるわけね。

「プライベートの侵害っすよ」

「そういうレベルの話じゃないんだけど……」

「大体俺のどこが危険なんすかあー、ジータはともかく俺なんて人畜無害の少年ですよ」

「お前だけの問題ではない、お前が引き寄せる事象が危険なのだ」

くっそ、一気に身に覚えのある話になりやがった。

「それに星晶獣8体殆ど一人で倒した上にそいつら全員仲間にしといてそんな言い訳通るかって」

「うぐう」

本当に俺の事を見てたらしいなこいつ等、いやーんな感じ。

「と言うか貴方達の行動で空に異変が起き続けでちよつと私達でも困ってるんだけど。さつきもパンデモニウムの方で、何かの封印解かれたようだしちよつとは加減してね？」

「いや、知りませんよそんなの……なんすか、パンデモって」

「空と地を結ぶ塔よ、魔物と星晶獣が封印されてる場所でもある。詳しくはその内わかるわ」

「そらトンデモニウムですわ」

「……下らん」

言わないでニヒルさん、言つといてなんだが俺も無いと思つた。

「それだけでは無い。貴様と少女の行動によつて、運命の流れが崩れ新たな可能性が生まれた。それによつてあの島に今危機が迫っている」

“あの島”ってアウギユステの事か？ やはりあの島で何かが起きてるのか。大凡帝国関係の事だろう。

「アウギユステが危険なんですか？」

「このままではね」

「……それを聞かされちゃ、寝てる場合じゃねえな……」

「ほお？ 急に闘志を溢れさせたな」

当然である。このまま帝国の好き勝手させる気は無い。

「俺はまだアウギユステのビーチでバカンスしてないんだ」

「……所詮は、人間。俗物であつたか」

うるさいぞなんかニヒルな人。

「はっはっはっ!! いいではないか、戦う理由などそれぞれだ」

「この子のこう言う所が見てて飽きないのよね」

「やっぱ一発喧嘩してえな。良い喧嘩できそうだけ」

嫌だっつってんだろこの筋肉。

「駄目よ、そろそろ彼目が覚めるもの」

「そうだ。手合わせできるのならば、我とてそうしたいが今回は、時間が足りぬ」

「時間あつたらする気だつたんかい」

「無論、貴様とは良い戦いが期待できる」

なるほどねー四大天司の内二人は、基本脳筋か。特に筋肉の方。

「これが俺達の空司つてるとか、ちよつとシヨックなんすけど。ただの喧嘩好きじゃん」

「まあまあ、普段はちゃんと仕事してるのよ」

「……あれと一緒にするな」

星晶獣つてのは、こんなのばつかなんだな。天司（笑）。ははっ、わらっちゃう。

「さて、そろそろね」

一番まともそうな天司の彼女がそう言うと、俺の意識がフワフワし始めた。

「貴方の肉体が目覚めますわ。また会いましょう」

「なるべく会いたくないっす」

「そう言うなよ、俺はウリエル、土の天司だ。次こそ喧嘩しようぜ！」

「我はミカエル、火の天司。カオスを体現せし少年よ、次は手合わせ願おう」

「私はガブリエル、水の天司。もしかしたら、すぐ会うかもね」

「……ラファエル、風の天司。人の子よ、さらばだ」

それぞれが妙に興味深な事をいいやがった。言いたい放題だな、天司。

「君と会える日を楽しみにしているよ」

……うん？ 今のは？ 四人とも違う声、あれ……だれ、だ……。

■ 二 死ぬかと思っただぜ!!

「……き、……あ、に……っ！」

「……ん、ううくん？」

「……ちよう！ だん、ちよ……っ!!」

なんか、声が聞こえる。全部知った声だけど、あれ？

「意しき……が、もど……」

「きが……だん、ち……おい……っ！」

うるさいな、分かったから、今日覚ますから……。何かわけわからん奴等に絡まれて大変だったんだ、少し待て。

「イイ加減、起キロ」

「ぼはあっ!？」

突如腹部への打撃イっ!? て、てめえ!! 今のは、ティアマトだなっ!?

「こ、こんのクソ星晶獣（笑）!! なんつう起こし方しやがるっ!？」

「私、団長ナラコノグライ平気ツテ信ジテタワ」

「ワザとらしい言い方するな気持ちわりいな!？」

「兄貴、目を覚まし——」

「お兄ちゃん起きたあっ!!」

「ぬごおほおっ!？」

「兄貴いーっ!？」

ま、また腹部への衝撃がっ!!

「兄貴しっかりしろおっ!!」

「ジータツ!? 目を覚ましたばかりなのに、そんな腰の入ったタツクルするヤツがあるかっ!!」

「あつ、ごめんっ!!」

「お、おおお……ごおお……うぼああ……」

「ほら見ろ、えらい疼き方しちまつてる……落ち着け坊主、呼吸整えろ」

髭の兄ちゃんが親切にしてくれる。ありがてえ、ありがてえ……。

「あ、ありがとうございます……」

「かまわねえよ、ジータが悪かったな」

「いえ、いいつす。慣れてるんで」

「そうか……お前が、本当にアイツの兄貴だったんだな」

あれあれ? 一気にこの人の俺を見る目が哀れみへと変わったんだけど何故かなあ? いや、やっぱ言わなくていい。分かってる、パイ辺りに聞いたか。そうか、初対面でも哀れまれるぐらいにジータは、この騎空団で無茶苦茶してるんだね。

さて、周りを見渡すとコーデリアさんと星晶戦隊に、ジータとその仲間らしき人達が揃っている。ここは、エンゼラの俺の部屋か。何でここに……まあいいや、とりあえず今の状況が知りたい。

「それで? あの後何があったんすか? 他のやつらは?」

「ああ、それは私から説明しよう」

ああ、コーディリアさん。なんかこの人がいるとそれだけで安心できるな。もう全部任せたい。よっしゃ、聞こ聞こ。

「まず君が彼女の攻撃を受けてずっと気絶し眠っていた」

「ジータの攻撃を受けてって時点で、もうわけわかんないよね」

「ご、ごめんね？」

おう、素直に謝れるのはいい事だぞ。

「その後意識が朦朧とし程なく完全に意識を失った君を、私達がエンゼラへと運んだ。外傷は、少なくともほぼ全ての攻撃……と言っても、私は果たしてどれ程の連撃を入れられたのか分からなかったが、それらは全てが衝撃となって君の体内へ正確、的確に放たれた」

「大体千発ぐらいだったと思うけど……」

一瞬で千撃か、鬼神かなにかかよ。流石ザンクティンゼルのリーサルウエポン、スパーザンクティンゼル人。

「そうか、また強くなったなジータ」

「そ、そう？ えへへ」

「ジータ、多分褒められてないぞ」

お、カタリナさんだっけ？ わかってるねえ、ただの皮肉だよ。

「急ぎ治療が必要だったけど、イオ君……ジータ団長の仲間の少女がヒールをかけてくれて最悪の事態は、免れたよ」

「イオ？」

「私ね」

杖を持ったツイインテールの少女が軽く手を上げていた。

「そうか、君が助けてくれたか。ありがとうえ」

「お礼なんていいわ、当然の事よ」

あ、この子良い子だ。俺わかる、うちの団に欲しい。主に癒しとツツコミ要因で。

「その後直ぐに私達は、リュミエール聖騎士団とも合流を果たしたのだ」

「あ、そうだそうだ。シャルロットさん、それになんか知り合いつぼかった人達いたな。

あの人達は？」

「今君が目を覚ましたと知らせに——」

「ジミー殿っ!？」

ばばんつと扉が開いて飛び込んできたのは、丁度話題に出したシャルロットさん、そして後ろからは、体の大きなドラフの騎士が着いてきた。部屋の密度が狭くなる。

「ああ、本当に目を覚まされたのでありますね！」

「やあシャルロットさん、ご心配おかけしました。うちの船にいたんすね」

「はい、ジミー殿の目が覚めるまではと。他の騎士団の皆は、バウタオーダ殿が乗って来た船に居ますが……う、うう……しかしあの後、ジミー殿がうわ言でわけのわからぬ事を吹き、呼吸まで止まりかけた時は、もうダメかと……」

「待って、俺呼吸止まっただの？」

「ちよつとクリティカルしちゃったみたいで……」

ちよつとじゃねえよ、ジータ？ 天司との接触が、ほぼ天に召される5秒前じゃん。やっぱ魂召されかけてるじゃん。

「何とか無事なようですね。安心しました」

「貴方は？」

「自分は、リュミエール聖騎士団の部隊長をしておりますバウタオーダと申します。以後お見知りおきを」

おお、丁寧な人だ。やはりリュミエール関係は、癖強くとも基本皆常識人だな。しかもうちの団に慣れた所為で男性の常識人は、珍しいと思ってしまうな。

「シャルロット団長も来たので、話を戻そうか。色々と確認したい事も山積みであったが、我々は、まず君の治療を優先してエンゼラへ運んだ。宿とも思ったが、エンゼラには、エリクシールもあつたからね」

「何せ君とシャルロット殿がその……ああ言う宿から出て来たものだから、皆混乱して
いてな。尤も直後のジータの暴走である程度冷静になったのだが」

皆が冷静になるために俺は、犠牲になったんですかね。

「すまなかつた坊主。俺が余計な事言つたせいで嬢ちゃんを混乱させたみてえだ」

髭のおつさんが申し訳なさそうに頭を下げる。ああ、あんただったな態々俺がラブホ
から出て来た事言つたの。まあいいや、誰でも気になるわあんな状況。仕方ない仕方な
い。

「いいつすよ。ありやしかたねえつすわ」

「そうか？ すまねえな」

「まあその事は、シャルロットさんとあなた達がお世話になった宿の主人が事情を説明
してくれたから誤解は解けてるわ、安心して」

ロンゲのお姉さんが説明してくれた。ところでこの人からユグドラシルと近い雰囲気
を感じる。と言うか、星晶獣なんじゃないのあんた？ なんて言いそうになるが、そ
れを察したのかそつと人差し指が口に添えられた。意味深な微笑と共に。まだ言う
なって事ね、はい了解です。

「船でエリクシールを君に飲ませたら、直ぐに容態が落ち着いた。流石は、秘薬と言うと
ころか、それとも君の回復力によるものか……ともあれ、無事でよかつた。気絶してい

たのは、1時間程度だと思うよ」

「1時間か、まああの攻撃受けて1時間の気絶ですんだと思うとします」

「結構本気で攻撃したんだけど、お兄ちゃん凄いな！ 前より丈夫になってる！」

前より強くなつてるとかじゃないんだね？ 丈夫になつてなんだね？

「なんだろうな……俺、少し涙が……」

「オイラもだよ、ラカム……」

泣くな泣くな、こんな事で。泣かれると、俺も泣きたくなる。

「宿に居た者達には、ブリジールに頼み既にこの事を伝えてある。この騎空団の事を説明するのに象徴であり、生き証人でもあるティアマト達には、先に来てもらったが、他の者達も、もう少ししたら来るだろう」

「状況がややこしくなるだけじゃないですかね？」

「とは言え、話さないわけにも行かないからね。今後の事もある」

確かに。リュミエール案件だけでなく、まさかのジータとの再会は、ある意味非常事態だ。今後の展開がまるで読めなくなつてしまった。しかも帝国関係の問題まで控えている。

ああ、こんなはずじゃなかった。俺のアウトギユステバカンス。

三 幼馴染三日会わざれば刮目して見よ

「あ、そうだ！ 私達の紹介遅れちゃったね！」

不意にジータがパチンと両手を叩き、明るく話し出した。流れぶつちぎりやがったな。いいけどさ、どの道聞く事だから。

「ルリアとカタリナは、ザンクティンゼルでも会ったよね？」

「おう、よく覚えてるわ。怒涛の展開だったな」

「あの時は、何かと迷惑をかけた」

「す、すみませんでした」

「いいのいいの、全部帝国が悪いの」

何時かそのツケ払わしてやるからな……。

「それでその後仲間になったのがこちらっ!!」

「なんだその紹介……たく。俺は、ラカム。お前の事は、ビィからよく聞いてるぜ」

「そりゃ、なんともお恥ずかしい」

「いや、お前が苦労して来たって言うのがよくわかったぜ……」

「ラカムは、特にジータの被害が多くてよ……それにオイラも助けられてるんだけども」

「そうか、多分この人が『ジータと愉快な仲間たち団』でのかなり重要なポジションと

見た。押さえ役と何かしらのトラブル被害を受ける要因か……。

「で、次に仲間になったのがイオツ！」

「ま、さつき挨拶はしたけどね。よろしく」

「いや、改めてヒールありがとうございます」

「はいはい、もういいから」

スカウトしたい、ぜひこの常識&癒し&ツツコミ要因をスカウトしたい。

「そして次がこちらっ！」

「おう、俺は、オイゲンってんだ。まあ、見た通りの爺だよ」

「爺ってか、老熟の騎空士って感じですね」

「ほう？ 分かるかい？」

「そう言う人間を知ってるんで」

元氣かなばあさん。まあ、間違い無く元氣だろうけど。ジータも元氣だぞ、ばあさん。俺を殺しかけるぐらいには。

「でっ!!」

「最後に私ね。私は、ロゼッタ。きつと今後もお世話になるわ、よろしくね」

「……ああ、確かにそんな気がします」

「ふふ、長いお付き合いになりそうね？」

これは、間違いなく星晶獣だな。しかもユグドラシルの事知ってるなこれは。なんせ、部屋の隅にいるユグドラシルがメツチャニコニコだからな。

「……で、ジータは、何でそんなテンション高いわけ？」

「自慢の仲間を紹介したので!!」

「そうですか……」

めつちや懐いてるな、ジータが仲間皆に。一つ保護者の様なポジションでも会った俺としては、改めて挨拶をせねばなるまい。

「俺の幼馴染が、大変ご迷惑をお掛けしていると思いますが、今後とも何卒よろしくお願
いいたします」

「あーっ!! 何その言い方っ!? 私いっつも頑張ってるんだよ!?!」

「頑張るから大変なんだよなあ……」

俺がそう言うのと、ジータの後ろに居る【ジータと愉快な仲間たち団】の面々が激しく頷いていた。ほんと、いつもご苦労おかけします。ほんとすんません、俺の幼馴染が……。

「だが噂で聞いちやいたが、お前の騎空団も無茶苦茶だぜ。何なんだその、このお……なんだあ……こいつ等は?」

そう言うってラカムさんが俺の仲間達、と言うか（笑）共を指さした。

「ほんと、なんなんでしょうね？」

「いやいや!! お前がそれ言うのかよっ!!」

「エンゼラで待つてたら、ティアマト達が現れて最初びっくりしました!」

「宿デ待ツテタラ、エンゼラニ来イト言ワレタ。折角ワイン飲ンデタノニ」

「お前つて、俺が大変な時本当に暢気してるよね」

「シヨウガナイダロ、ソツチノ状況ナンテ知ランノダカラ」

もう普段通りだし。お客来てんのに部屋のソファで寝っ転がってんじやないの、はしたない。

「星晶獣が居るとは、噂で聞いてはいたがまさかティアマト達だったとは思わなかったぞ」

「いや、予想できるわけじゃないでしょこんな面子」

イオちゃん、よくわかってるねえ。団長である俺ですら何でこうなったのかわからな
いんだから、他の人がわかるわけない。

「それで、こいつらつて俺達の知ってるティアマトつて事でいいの? そこら辺は、
まったく聞いてないんだけどよ」

「どうなんでしょうか……私達の出会つて来たティアマトやコロツサスとは、少し雰囲気
気が違う気がします。シユヴァリエとセレストは、そもそも姿も違いますし」

「ほぼ同じ存在と想ってくれて構わん」

「わ、私達は……島々を守護したり……あと何か、色々してる本体から分かれた、断片みたいな存在だから……」

「ミンナ（*・ω・） オチャト、オカシイル？」

コロツサスがなにやらお茶やお菓子を準備していたらしい。居ないと思つたらそんな事を……ティアマトも見習えこの野郎。

「このコロツサス見て、あのコロツサスと殆ど一緒の存在とか想像付かないんだけど」

「ナンカ（*・ω・） ゴメンネ」

「あ、別に責めてる訳じゃないのよ？」

直ぐ打ち解けるコロツサス。流石癒し粹一号、見た目とのギャップが凄い。

「ところで、リヴァイアサンはいねえのか？ 流れる的に居てもおかしくねえけど」

「アイツ今この島のリヴァイアサンと海満喫してます」

「あいつ、そう言うタイプなのか……」

「本当なら、談話室か個室の生け簀に居るんですけどね」

「それ、本当にリヴァイアサンの事か？」

「残念ながら」

「マジかよ」

聞けばオイゲンさんは、アウギユステに住んでいたらしい。更にラカムさんは、ポト・ブリーズ、イオちゃん、バルツとマグナシックスの半分が【ジータと愉快な仲間たち団】の誰かが居た島の守護だったり何か関係のある奴らだ。そう思うと、このゆるキヤラ化を見ると複雑だろう。

「ロゼッタさんは、あんまユグドラシル見ても驚きませんね」

「この子は、あんまりかわんないからね。元からこんな感じなのよ」

「――！」

元からか……確かルーマシー群島だったか、本体があるのつて。つまり、そこにいけばもう一体のユグドラシルがいる……。おいおい、パラダイスやんけ。その内行こう。

さて、全員を把握したところでいい加減状況を進めていかないといけない。色々滞ってる状態だからな。さあ、話を進め――。

「へいへい、へくいくつ!! 団長お無事かあくつ!!」

「うわあつ!? 突然何よ!」

扉がまた突然開いたと思つたら、ハレゼナが突撃をかけてきた。イオちゃんが驚いてしまったが、その次からまた更に知つた奴らが現れる。

「うえつぷ……だ、だんちようきゅん、死にかけたつて、ほんとヴオツ!! ……うえつぷ、うええつ!!」

「お、おい大丈夫かこのねえちゃん!? って、酒くさっ!?」

「団長!! 団長を一瞬で倒したって言う少女と語り合いたいんだがっ!!」

「み、皆さん行き成り部屋に入っては駄目です! 慌てちゃ駄目です! まだ団長さんも、安静に……うわあっ!?」

「なはははははっ!! だ、だんちよう、大丈夫はははははっ!! ひひ、ひひひひひひひひっ!!」

「おいおい、なんかやべえのが、何人かいるぞ……」

「おお、色んな人が集まつてるねえ……ねえねえ、そこの貴方? お一つ問うね」

「え、私? 何々?」

「ぜえ……あ、あんまり走らせ無いでよ……急な移動は、勘弁だわ……」

「こ、この者達は、一体……」

「団長、はむ……あの少女がいると、あむむ……聞いたが本当かい? 均衡大丈夫?」

「な、なんだか一杯来たであります!」

「いよう、相棒目え覚ましたな」

「うわあっ!! なんだあ、こいつっ!」

「よう、オリジナル、ここで会う事になるとはな……」

どったんぱったん大騒ぎ。メンバー殆どが俺の部屋に入ってきてやがった。一応は、団

長室なので普通の個室より広いけど、限度がある。

ラムレッダ、吐くなら部屋出る。フェザー君、うるさい部屋出て。ルドさん、深呼吸して部屋出ようか。フィラソピラ、問うな問うな部屋出て。ルナールさん、無理しないで部屋出て。ゾーイ、均衡崩れてないからその片手の菓子パン食うかしまうかしろ、部屋出て。B・ビー、表出る。

「お前から一回部屋から出ろオオツ!!」

狭ああいつ!!

■ 四 あーあ、出会っちまったか

ぎゆうぎゆう詰め状態になった俺の部屋から、エンゼラで一番広い食堂に移動した。俺の部屋の大きさ考えろ、そもそもジータ達だけでも狭かったのに。

とりあえずグループごとに座ってもらい、順々に話をつける事にする。もう夜も遅いのでとつとと今日の事を終わらせたい。

人数も多いので、コロツサスとセレスト、ブリジールさん達がせつせとお茶とお茶菓子を用意してる。関心である。ティアマト？ 呑み損ねたとか言ってたワインを隅で一人優雅に飲んでる。あいつ……。

「兄貴、このオイラの偽者誰なんだよっ!？」

「偽者とは、言ってくれなせ。お前とオイラは、光と影の様なもの。どちらも違い、どちらも同じだ」

「わ、わけのわからねえ事言いやがって……」

さて、俺の目の前では、机の上に座ったビイとB・ビイが言い合っている。俺が恐れていた光景が今、目の前にある。

「ビイ、気持ちは察するが基本無視しておけ。黒いナマモノとでも思えば、気にならん」
「いやいや気になるって!？」

「黒いナマモノとは、ひでえな相棒。オイラはビイだぜ」

「それは無い」

「ねえよっ!!」

「うむ」

俺とビイがB・ビイの台詞を否定していたら、ちゃっかりカタリナさんも頷いていた。

「まあ、真面目な話するとティアマトとかみたいだな奴だ。勝手にお前の姿をモデルにしたらしいが、似ても似つかねえパチもんだよ」

「真面目な話なのにふざけた話だなそりゃあ」

ラカムさんもすっかり呆れてしまっている。だが正しい反応だ。プロバハの話し

たつてよくわからないだろうから、今回は省略する。

「オイラは、ブラック・ビー、相棒や他のやつ等からは、B・ビーって呼ばれてる。よろしく頼むぜオリジナル」

「そのオリジナルって呼び方やめろお!! オイラは、ビーって名前があるんでい!!」

「そうか、そりゃ悪かったな。ほれ、詫びと言つちやなんだがリングゴ食うか?」

「リングゴ?!」

ああ、ビーがリングゴであつさり買収された。チョロ過ぎだぞ、ビー!!

「お前もリングゴ好きなのか?」

「そりやお前をモデルにした存在だからな、リングゴも好きだし多少差異はあれど、共通点はあるさ。まあ、食えよ良いリングゴだぜ」

「な、なんだよ、お前結構良い奴だな……うめえ!!」

くそ、B・ビーの奴あつという間にビーを手懐けやがった。やはり仮にもビーをモデルにしただけはある。相手の事をよくわかつてやがる。

「けど結構可愛いよね、B・ビー!」

「おつ? オイラの可愛さがわかるかいジータ」

「うん、なんか独特の良さがある!」

「むぎゆうおつ!」

ああ、ジータがB・ビイを抱きしめ……抱き潰したっ!! いいぞもつと潰せっ!!

「おおっ!! お前もトカゲがラブライって思うかア?」

「うんうん、なんか癖になる感じッ!」

「だよな、だよなっ!! クレ〜ジ〜でラブライだよなあっ!! ……うん? けど、そっ
ちのトカゲも超ラブライ!!」

「げっ!」

「抱きしめていいよ?」

「マジでっ!! やったぜ〜っ!!」

「ま、待てよ! オイラが良くねえよっ!」

「きやつはあっ!!」

「ぎゃああっ!」

「私もぎゆうっ!!」

「ぐあわああっ!」

「はわっ!! ビイさんとB・ビイさんが大変な事に!!」

……うん、よし。

「良い具合に状況を混乱させる奴が固まった所で、こっちは話を進めましょう」
「こいつ、相当場慣れしてるな……」

「あの状況をもう意にも介してねえ」

ジータを相手にしてる貴方達も似た感じだと思っよ。

「本来ならうちの団の連中全員を紹介する所ですが面倒なので省略します」

「雑だぞ団長!？」

「ちや、ちゃんと……しようか、うえぶ……してほし、おぶつ!？」

数名からブーイングが来るが無視する。大人しくしてろ、忙しいんだから。あとラムレツダは、いい加減トイレでも行って吐くもん吐け。

「と言うか、大体見たままの奴らなんで察してください」

「お、おう……ほんと、大変そうだな」

ほんとにね、ははっ!!

「で、話を進めさせてもらいますが……ジータ関係の方ですが、島を発つ時に彼女に俺の使ってた毛布とクッションの新しいのをあげておきます」

「助かる……まさか、あんな事になるとは、思わなくてな」

「まあ、あれは知ってても防ぐのは無理です。俺もザンクティンゼルで初めて経験した時は、もう駄目だと思いました」

お兄ちゃん分不足による突発性偶発的異常現象……発動するたび名称がパワーアップしてる気がするが、今は横に置いておく。あの現象が一人の人間が起したものと果た

して誰が思うだろう。その原因のある意味一端である俺としては、責任感じちゃう。

「ジータに兄離れをさせようと思つた事もありましたが……」

「あれは、もう無理だろ……お前さんとあつた事も無い俺達にも、何かとお前さんの話をするからな」

「空に旅立つてるわけだから依存してる訳じゃないけど、相当よねあれつて」

曰く、最高のお兄ちゃん、最強のお兄ちゃん、全空一の主夫……そんな話を良くするらしい。恥ずかしいなもう。ただ、最後おかしいね？　なんだよ主夫つて。あと最強つて言うけど、俺ジータに一瞬で気絶させられたんだが、それは。

「それと、俺のクツキーとかのレシピも教えるんで、たまに作つてあげてください」

「それは助かる。君の味とは違うかもしれないが、気休めにはなるだろう。私がしつかりと——」

「私が作るからっ!!」

「イ、イオ？」

かなり必死な形相でイオちゃんが身を乗り出してカタリナさんの言葉を遮ってきた。それ以外のラカムさん達メンバーも、戦慄の表情をしている。

「そう言うのは、私が作るから!」

「し、しかし私もたまには」

「いいから!! 私がやるから!!」

あ、これはアレですね……カタリナさん、つまりそういう事ですね。

「……イオちゃん、後でレシピ書いた紙あげるね」

「うん……なんか、ごめん」

「いいよ……そっちも大変だね」

言葉は少なく、それでも俺とイオちゃんは、何か通じ合えた気がした。一方で、カタリナさんは、一人わけがわからないと言う表情のままだった。ジータだけがこの団の問題と言うわけじゃなさそうだな。

「心なしか、ビィよりモチモチしてるね、B・ビィって!」

「あ、相棒……たすけ、たす……」

「こっちのトカゲは、ラブリー! あっちは、クレ〜ジ〜!」

「あに、き……たす、た……」

……ほんと、どいつもこいつも……はあ。

■
五 アウギユステの今日は土砂降りだった

■
「で、次ね次。リュミエール案件」

「なんだか、蔑ろな扱いであります」

「しゃーないっすよ、事態が事態だから」

いい加減ヤバイビィとB・ビィは、カタリナさんに任せた。俺は、こつちのリユミエール案件を勧めないと駄目なので。

「俺の方の事情って何処まで聞きました?」

「……コーデリア殿からある程度。あの『星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y』の団長であると言う事と、今回の事は」

「そっか……騙してごめんなさい」

「あ、いえ。そちらにも事情があるようでしたし、ジミー殿が謝る事では……あ、ジミーは偽名でしたか」

「まあそうですけど、好きにどうぞ」

「そ、そうでありますか?」

「そうそう。最初は気に入らなかつたけど、シャルロツテさんなら悪い気しないからね。愛称みたいな感じでどうぞ」

「そ、そう言う事なら……実を言うなら、ほんの数日でしたがジミー殿の呼び方に慣れてしまつて……」

「あはは、ところで本名ですがね——」

「……では、団長の呼び名も決まったところでいいかね？」

「え？ あ、そつすね」

あれ？　なんかコーデリアさんからちよい不機嫌オーラを感じたが……気のせいかな？　あと、俺の名前、名前……まあ、あとでいいか。

「えつと、パウタオーダさんも今回お騒がせしてすみませんでした。なんでも任務の途中だとか」

「いえ、お気になさらず大丈夫です。運命の悪戯の様なものでしょう」

良い人だなあ。本当に良い人だなああ!!

「それで、本題ですけど……まあ、これは俺の関われる事は無いけども、コーデリアさんの任務ですけどどうします？　場所移してやりますか？」

「……」

「コーデリアちゃん……」

本来ならもう終えている任務だ。【正義審問】、シャルロットさんに正義を問い質し、リユミエール聖騎士団に恥じぬ人物かの判断。遊撃部としてのコーデリアさんの仕事。シャルロットさんは、神妙な面持ちでコーデリアさんの言葉を待ち、ブリジールさん、パウタオーダさんも緊張した様子で見守る。

「……いや、今はよそう」

コーデリアさんは、小さく首を振った。

「……コーデリアちゃん？」

「今日は、あまりに状況が混乱し過ぎている。我々には、休息が必要だ。明日、また改めて貴方に正義を問わせてもらう。リュミエール聖騎士団、遊撃部として」

「……わかりました。全ては、自分が起した事であります。逃げも隠れもしません」

「その言葉、信じさせていただく。ならば明日改めてこの船で会いましょう」

「はい」

「……終わった？ 終わったね。持ち越し、明日で解決です。ね、もう今日は休もう、みんな休みましょう!! 終了、解散っ!!」

ジータ達も落ち着いた？ そっちどうなってるの？

——その瞬間、彼が目にしたものは、利き手を軸にして高速回転し、地面へと叩きつけられるフェザーの姿であった。それは、樽の机を使い繰り広げられていた小さな腕相撲大会。団長達の話し合いの間、せっかくだからとフェザーがジータとやりたいと申し出て行われたその催しであった。ただの腕相撲、その筈であった——

「ぐわああああ——ッ!!」

「フェザーくんっ!?!」

ジータの方を見たらいつの間にか開かれていた腕相撲大会で、フェザー君が叫び声を

上げながら床に沈んでいった。相手はジータでした。

「ジータやりすぎだっ!」

「だ、だって彼が本気でやれって言うから……」

「加減しなさい、莫迦!」

「ひ、ひどいっ!」

ほんの数分目を離れた隙にどういう事態だっ! フィラソピラさん、回復っ!!

「フェザー君しつかりしろ!!」

「だ、団長……へへ、本気でやっただけだな……彼女、すごいぜ……」

「何と言う無茶をっ!!」

「け、けど……俺は、満足だ……次は、必ず俺が……勝つて見せる、ぜ……」

「フェザー君っ!?! フェザーくんっ!?!」

腕相撲だよね!?! 普通に腕相撲してたんだよね!?! なんて真っ白に燃え尽きてるのっ!?! ちよつと、フェザー君っ!?! しつかりしろおっ!!

「ジータっ!! 俺以外と何か競う時は、力の加減上手くしろって言ったろっ!?!」

「お、お兄ちゃんの丈夫さに慣れちゃって……てへ」

「つまり、団長の異常な打たれ強さは、ジータによって、さながら鉄を打つ様に鍛えられたんだね」

「むう、私は主殿に打たれたいが……主に鞭で」

うるさいぞシヴアリエ!! 喜んじやうからやりたくないが、ほんとぶった叩いてやりたいな、この野郎!!

「主にケツ狙いで頼むっ!!」

うるせえ!

「だ、大丈夫かにや……フエザ、うえ……うぶうっ!!」

うわああつ!? ラムレッダ、なんで態々吐きそうなタイミングで俺に寄り掛かるっ!?

「てか、なんで一度スッキリしとかなかったラムレッダっ!?!」

「い、一度スッキリはしたにや……けど、さつき腕相撲見ながら、また飲んで、ぼおっ!?!」

「わあ、馬鹿馬鹿っ!?! 桶、だれか桶っ!?!」

「オイ、団長」

ええい、よりによってティアマトかっ!!

「なんだっ!?!」

「モウ用事スنداナラ、私ハ部屋戻ルゾ」

「勝手に戻つとれええ——っ!!」

今は、それよりも桶を……なに、もう桶じや無理!? どんだけ飲んでんだお前はっ!!

トイレか、我慢できんのか!? 良いか、吐くなよっ!? 俺につかまるのは良いが吐くなよっ!! 絶対だぞ!!

「なはっ!? なははっ!! ほひいひひっ!? あ、やば……いひっ!! あはーははっ!!」

「お、おい! この姉ちゃん笑いが止まらなくなったぞ!」

「~~~~!!」

「あらあら……どうやらユグドラシルが言うには、発作らしいわ」

「いや、どう言う発作だよっ!!」

ラカムさんや、オイゲンさんの言う通りだわ。初見じゃわけわからんからナルドさんの発作。

「セレスト! 【安楽】で軽く気絶させとけ!!」

「う、うん……」

「ぎゃああああっ!」

悲鳴!?! 今度はなんだっ!?

「なんだ、お前は体変形できねえのか?」

「で、出来るわけねえだろっ!!」

「B・ビイの体はどうなってるんだ……」

マチヨビイかよっ!? お前ジータから解放されたと思ったらなに勝手に変身してんだ!!

「それキモイからいきなり知らん人……てか、ビイやカタリナさんに見せるな馬鹿っ!!」
「キモイとか言うなよ傷つくな」

勝手に傷ついてろ、そもそもダイヤモンドコーティングの心で掠り傷一つねえクセに!!

「あははははっ!! お兄ちゃんの仲間の人ってみんな楽しい人ばっかだね!」

「ああ、そうだな全く飽きないよ畜生めっ!!」

「ご、ごめんにや……だんちよ、きゅ……ヴおえっ!?!」

ああ、待つてろ、ラムレッタ!! 今トイレ連れてくから!!

「……ジミー殿の騎空団は、いつもこうなのでありますか?」

「今回は、ジータ団長もいるせいもあるが……大凡こうです」

「団長は、いつも苦労してるです」

「……気の毒に」

シャルロットテさん達に色々言われてるがそれどころじゃない、今は収集を、この場の収集を……桶、桶も一応くれええっ!! 早くっ、ああ——っ!?!

六 驚き!? 正義の聖騎士団長に情夫の影? 若い燕が、アウギユステの空に飛ぶ

アウギユステ、普段人気の全く無いの某所。そこには、帝国の紋章が刻まれたテントが幾つか設営されていた。ここで活動し始めた帝国部隊の野営地である。その中にある指揮官用のテントに、二人の男がいた。

「……それは、本当か?」

「はいっ! この目で確かに」

一日別行動を行っていた帝国の若き兵士ユーリ。彼は、降り続ける雨の中、ラブホテルへと消えていく調査対象であったリユミエル聖騎士団騎士団長であるシャルロツテ・フェニヤについての報告を行っていた。

「あのシャルロツテ・フェニヤが、そのようなホテルに……」

「自分も目を疑いましたが、雨の中とは言え互いに嫌がる素振りも見せないために……もしやと思い」

「ううむ」

部下であるユーリの報告を聞いた隊長は、まさかこんな報告が来るとは思わず非常に悩んでしまった。一応は、ユーリの報告に間違いはない。確かに二人は、嫌がる素振りも見せずに宿の主人に勧められるがまま宿へと入った。その時点でどんな宿であるの

かに気が付いていなかった点を除いてだが。

しかしこんな報告、ともすれば一大スキャンダルである。自分一人でどうにか出来る内容でも無く、そもそも本国に報告するような事でも無い。とんでもない情報を手に入ってしまったと隊長は、頭を抱えた。

「……あの少年の身元は、わかるか？」

「いえ、それまでは……ただ、あまり良い噂は、聞きませんでした」

「……よし、わかった。この事は、一先ず俺とお前で止めておけ」

「よろしいのですか？」

「ああ、少なくともこの時点でシャルロツテ・フェニヤが我々の邪魔をする意思が無い事は確かと思う」

100%とは言えないが、夜若い男とラブホテルに行くような状況で帝国の暗躍にいちやもんを付けるような人間が居るとは、あまり思えない。だが、警戒も怠らないのがくせ者揃いの部隊を束ねるこの隊長である。

「万が一と言う事もある。明日日本隊も到着し行動を起こす際、その後彼女が我々の邪魔をするようであれば、この情報が利用できるかもしれない」

「……まさか、人質として男を捕えるのですか!？」

「馬鹿を言うな!」

ユーリの言葉に隊長は、強く一喝した。

「そんな外道の手は使わん。とは言え、正々堂々とも言い難いがな……」

「と、言う」と

「うむ、どう言う事情か知らぬが、宿へ入ったのは確かだ。しかもラブホテル、この事をちらつかせるだけで相手は、多少動揺するだろう。見られていたと言う事にな」

「な、なるほど」

「まあそんな事態にならぬ事が一番だがな。ユーリ、今日はご苦労だった。明日に備えてもう休んでおけ」

「はっ!! 失礼いたしますっ!!」

敬礼し挨拶を終えると、ユーリはテントから出て行き兵達の共有テントへと戻っていった。一人残った隊長はと言うと、一つ大きなため息を吐いた。

(まさかこの様な事態になるとはな……シヤルロット・フェニヤも、どう言った事情か知らぬが、迂闊なものだ)

だがそれもまだ年若い女の行動と思えば、不思議と可愛げのあるように思えた。とは言え一つの騎士団を率いる騎士団長としての立場を考えれば、まず“迂闊”と思つてしまつてもしょうがないだろう。

また、もう一つ。例の少年の事。

(彼がシャルロット・フェニヤのただの情夫と言う事は……いや、無いな。アレが情夫？
馬鹿々々しい……)

一度のみの邂逅、その時の少年の戦士としての片鱗をこの隊長は、僅かに感じ取っていた。今になって調査すべきは、シャルロット・フェニヤではなく、あの少年の方であったかもしれない……そう思わずにはいられなかった。

(……明日は、荒れるかも知れんな)

今はまだ穏やかなアウギユステの海の音に耳を傾け、隊長は一人明日の混乱を予感していた。

アウギユステ大騒動開幕

■ ■
一 アウギユステの一番長い日

この日、アウギユステには、多くの思惑が交差した。

シエロカルテに新しく開いた店に招待されて来た「ジータと愉快的仲間たち団」。任務で偶然訪れたリュミエール聖騎士団の部隊。これもまた偶然にアウギユステへ自分の願いを叶えるための鍵を探しに来たリュミエール聖騎士団団長。自分達の任務を全うしようとする帝国軍。

そして、ただ純粹に遊びに来ただけのはずだった「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女ZOY」、その団長。

始まる帝国軍の計画、迫る帝国本隊。正義が問われる時が近づくと、リュミエール聖騎士団団長シャルロット・フェニヤ。表面上明るくふるまうも、兄と慕う男にまつわる不穏な噂についてのタイミングで確認するか実際は、悩んでいたジータ。怒涛のトラブルの連続、不安と疲れと胃痛に悩む団長。

そして、まだまだ彼を襲う異常事態は続く。それは、ジータとの再会から一夜明けての事、彼の下にシエロカルテが訪ねて来る事で始まる。

■ 二 帝国狩りの一日が始まる

「帝国が動き出した？」

「はい、そうなんですよ」

今朝、シエロカルテさんによつて俺の元に舞い込んできた報告に俺は眩暈を感じた。結局宿に戻らずそのままエンゼラで皆休んでいたが、朝になって行き成りエンゼラを訪ねて来たので何かと思つたら案の定面倒な報告であつた。

「……それをなんで俺に？」

「うふふ、団長さんは、帝国の動向を気にされていたようだったので」

「まあ、確かに気にしてましたけどね」

あの謎空間での事、天司とか言う何時かまたトラブルの種になりそうな奴らの話から近々帝国が動くとは思っていたが昨日の今日でこれかい。コーデリアさん達の問題を解決するのが今日だつて言うのに……せめてリユミエール案件解決してからにしてくれよ帝国の野郎。

しかしそうなると、コーデリアさんとブリジールさんには、ちよつと話を通しておかないといけないな。リュミエール聖国って一応帝国との関係は、友好関係って事になってるらしいし。

「——と言う話が今朝あった」

「早速面倒が始マツタナ」

うるさい（笑）。

「で、今日はどうするんだい団長？」

さて、フィラソピラさんに言われて考える。しかし考えた所でどうすればいいのだ？ 帝国も動きを見せたとは言え大々的な行動に出たわけでもなく、奴らの部隊の居場所も分からない。その上この後エンゼラでは、シャルロットさんと、バウタオーダさんとその部下達が来る事になってる。ジータは、ジータでまた会いに来ると昨日宣言して戻って行ったからその内顔を出しに来るだろう。俺も何かと忙しいのだ。

「……ゾーイ」

「何だい団長？」

「例の均衡センサー、だっけ？あれって反応してる？」

「……うむ、かなり来てる」

そっかーかなり来てるかー……つまり何か起きる事は、間違いないと。

「ちなみに島崩壊レベルだ」

「ガチじゃねえか」

知らぬ間にとんでもねえ事態になりかけてるじゃん。

「安心していい、あくまで予想であつて当然回避可能だ。君やあの少女が動けばほぼ問題なく解決だろう」

「まるで安心できねえよ」

どの道俺が苦勞する未来しか見えねえのですがそれはどうなんですかね。

「……シャルロットさんって、もう直ぐ来ますよね?」

「そのようになつてゐるが」

「じゃあ、とにかくそれが終つてから考えましょう。そもそも俺が帝国について難しく考える必要も無いわけなんです。状況に合わせて行動します」

「つまり行き当たりばつたりだにや〜」

「結局いつも通りだなと言ふ事だな、主よ」

うるさい二日酔いの酔っぱらいにドM（笑）め。俺に冴えた行動方針を求めらんじやない。

「ただ宿には、もう戻れないだろうから引き払わんとなあ……残りの宿泊分もキャンセルしよう。各自宿に置いてきた荷物もあるだろうから、それだけ回収しに行こうか」

島崩壊の可能性あるのに俺のやる事って結局こんないつも通りなんだな……くそ、シユバリエの言う事が否定できないじゃないか。

「……てか、妙に皆冷静だよね」

ゾーイの島崩壊の可能性を聞いてもあんま皆焦った様子がない。

「いや、勿論驚いたにゃ」

「ただゾーイが安心していいとも言ってるしなー」

「それに、君がいるからね」

いやいや、暢気に言わないでよ。俺がいるからって何さ。

「いやいや、中々重要な事だよこれは」

「はい！団長さんが居ると、何となく大丈夫だと思えます！」

「んははっ!!た、たしかに、ひひっ!!君が居れば、問題も勝手に……あはははっ！解決してそ、うははっ!」

「団長ならよお?そんな問題ぶっ壊しちゃうだろうしなあ〜!」

「ま、確かにそんな感じするわよね」

ねえ、何このトラブルへ対する俺への妙な信頼の高さ?仲間になってあんま日にちも

経って無いハレゼナとルナル先生まで……まるで誇れないんですが。俺に何を求めてるんですかね？

「諦メロ、才前ノ積ミ重ネタ信頼ノヨウナモノダ」

「こんな信頼いらん……」

■
三 つす！

■
結局宿への荷物回収班は、俺とコロツサスとゾーイにB・ビイとフィラソピラさんになった。フィラソピラさんは、いざと言う時クリユプトンで飛んで船まで連絡に行けるので来てもらった。後の面子は、お留守番じゃ。

「しかしお前ら、買い込んだな……」

「ほっとんどがティアマトやラムレッダの荷物だぜ？」

「お前もリンゴ買い込んだくせに」

「そりや必需品ってやつだけ相棒」

「嘘つけ嗜好品だろ、星晶獣だから飯食わなくても死なねえくせに」

「楽しみつてのは、生きるのに必要なんだぜ」

人数が居るのもあるが女性陣の荷物が多し。前のティアマト散財惨劇事件があつて

特に気をつけさせたので値段は抑えられたようだが買った物の物量は、結局多くなつたようだ。

「ラムレッダがお酒を多く買っていったね。お酒ってそんなに美味しいのかい？」

聞くな聞くな、未成年の俺に。それと興味があるようだが、そうそう飲むもんじゃないぞゾーイ。

「おやおや、また困つた顔をしているねえ、团长さん」

「……フィラソピラさん、最近俺の困り顔見るの日課になつてませんか？」

「いやあ、君の困つた顔がかわいいからなあ、仕方ない、仕方ない」

「仕方なくないです」

「あはっ。その顔も可愛いね……おつと？」

ふよふよ浮いていたクリュプトンが急に止まつた。フィラソピラさんの興味が離れた所にある露店へと向いたようだ。

「どうしました？」

「うんちよつとね……」

「ああ、あそこの店お菓子屋ですか？欲しいんですか？」

「あーうん、いや別にどうしても欲しいとかじゃないんだよ？ただやつぱり頭使うと甘いものを求めるからねえ……船にあるお菓子も少なくなつてきたなあつて思ったから」

「この人お菓子が好きなのを子供っぽいと思うのか妙に否定する時があるな。

「買って来ていいですよ。待ってますから」

「……いいのかい？」

「露店のお菓子ならそう高いもんでもないでしょ。どうぞ、ここに居ますんで」

「そ、そうかい？じゃあ、ちよつと選んでくるね……あはっ」

そしてフィラソピラさんは、嬉しそうにクリユプトンを回しながら店に向かっていった。犬の尻尾だな、クリユプトン。

「しかしコロツサスは、来てもらって正解だったわ」

「二モツハ（o・w・b）マカセテ」

片手でかなりの荷物を持てるコロツサス、両手を使えば俺達の荷物の殆どを運んでしまえる。仮にお菓子の荷物が増えても苦ではない。

だが山のような荷物を両手で抱えて歩く星晶獣、難点があるとすれば街中で目立つ事なのだが不本意ながら俺は、徐々にこう言った状況に慣れつつある。少なくともロリコンだとか変態とか言われるよりマシと思ってしまうようになってしまった。

「けど前見え辛いだろうから気をつけ」

「(。ω。、)ワアッ!」

「っす!?!」

「てえ……つて言おうと思っただけだ」

言い切る前に前から走ってきた誰かとぶつかってしまっただけだ。

「あらら、やっちゃった……」

「ワワ（；ω；*）ゴ、ゴメンナサイ!!」

「あいたた……いい、いえ自分の方こそ申し訳な……うわあ!? なんすかあんなつ!!」

まあ驚くよね。ぶつかった相手が巨大な黒鉄鎧の巨人なら。省エネモードでも3m ちよいあるからなコロツサス。

「気にせんでいいよ。見た目怖いがめっちゃいい奴だから」

「いや、そう言う意味で驚いたわけじゃないっすけど」

「怪我は？」

「あ、はい大丈夫っす」

埃を払いながら立ち上がるのは、鎧を纏った少女だった。まだ小さい、ジータより年下だろうか。しかし鎧は、中々に立派な物だ。一般人が着るような鎧じゃない。アウギユステの傭兵? こんな少女が……いや、しかしジータの様な例外も……ああ、いやアレは例外過ぎるな。例えで出すもんじゃない。

「人通り多い所で走るもんじゃないぜ」

「す、すみませんっす。人を探してたので」

「連れでもいるのかい？」

「いえ、自分はある騎空団を探してるっす。アウギユステに来るって言う話聞いたんで急いで追いかけて来たっす」

なんだそりや。熱心なファンかなんかか？騎空団の追っかけなんて聞いたこともねえや。

「そうだ、お兄さん知らないっすか？【ジータと愉快的仲間たち団】って言う結構有名な騎空団なんっすけど」

Oh……。

「相棒のやつ白目向きやがった」

「えっ!?!ど、どうしたっすか!?!」

「ふむ、ジータの名前が出て少しまいったようだね」

「連日だからな。相当きてるぜ」

おいおいおい、何だっつてんだ。あいつは、こんな少女にまで追われるような事したのかよ。いやあいつ自身が追われるのは、まあいいとしても何で俺のところに来るかなああ……。

「じ、自分なんか不味い事言っただっすか？」

「……いい、気にしないで。それでジータね、はいはい知ってるよ」

「マジっすか!？」

「マジっすよ。何君、関係者？」

「では無いっす……まだ」

まだってなんだまだって。関係者になる気なのか、態々ジータと。正気の沙汰じゃないぞ。

「あの騎空団に、自分憧れてる人がいるっす!だからどうしても会いたくて追っかけて来たっす!」

「ジータでは無いのか……まあいいや。あとで会う事になってるからついて来ていいよ」

「いいっすか!？」と言うか、お兄さん知り合いだったんすか!？」

「まあね……」

知り合いどころの話ではないのだが……それを今話す気にもならん。

「自分、フアラって言うっす!お兄さん案内よろしくお願いしますっす!」

元気な子だねえ。こんな鎧着てるより野原走り回ってる方が性に合ってるようなのに。

「フアラちゃんね、それじゃあ俺の船まで——」

「お前、フアラか？」

「え？」

……壮絶に嫌な予感がする。

「フアラ、やっぱりフアラじゃないか?！」

突然、一人の帝国兵が現れた。声からしてまだ若そうに思えるが、確かに帝国兵だ。

「だ、誰っすかあんた?」

「俺だよ……ほらっ!」

「え、ああつ?!あんたユーリじゃないっすかっ!」

突如現れた帝国兵が兜を取って見せた姿は、年若き少年であった。

■ ■ ■ 四 噂のツケ

「……コロツサス、B・ビィ、嫌な予感がする。何時でも逃げられるように」

「ウン（、ω・ゝ・ゝ）」

「あいよ、相棒」

突然の帝国兵の登場。念には念を、いざと言う時のために小声で指示を出しておく。

「ユーリ、あんたこんな所で何してるっすか?」

「それは、こっちの台詞だっ!お前居なくなっと思ったたら脱走兵扱いになっって驚いたんだぞ!」

「えっ!?だ、脱走兵っ!」

「おいおい、なんだよこの不穏な会話はよう。ムクムク俺の目の前で帝国関係の面倒な問題が出来上がってつてる様なきがすつぞ。」

「あつれく可笑しいつすねえ?確かに自分、辞表出して来たはずなんすけど」

「お前、ちゃんと書いて出したんだろうな?」

「勿論!先輩に会いに行くつて書いて置いておいたつす!」

「お前馬鹿なんじゃないかっ!」

うん、馬鹿なんじゃないかな?

「そんな辞表通るわけないだろっ!?!なんだ先輩に会いに行くつて!?!そもそも置いてきたつて直接提出してこなかったのか!?!」

「け、けど先輩に会いたいつて思つたらもう居ても立つても居られなくなつて、辞表出しに行つたら誰も居なかつたし」

「お、お前つてやつは……普段は、真面目なのになんでこういう時は、ほんと……」

……これ、俺達に気づいてない?気づいてないね。よし、逃げよう。フアラちゃんには悪いが逃げよう。ヤバイヤバイ、これ以上ここに居るとほんと不味い気がする。総員、静かに速やかに、結構急いで退散だつ!!

「第一誰だこの男は?」

ああー……っ!! 駄目だったっ!! 気づかれた。

「あ、あつしは、通りすがりの名も無き通行人でやんすよ……っ?」

「なんだその露骨な誤魔化し方は……いや、待てその顔見た事がある気が?」

なんだと……っ? しまった、こいつあの場に居た奴、珊瑚礁に居た部隊の一人か!? や、やばい、何とか逃げなくては。突破口をつ。

「ああっ!! 貴様、シャルロット・フェニヤとラブホテルに入った男っ!!」

「そつちかよっ!!」

と言うか、見てたのかよっ!! 何でじゃ!! くっそ怖いな、ストーカーかこいつはっ!!

「き、貴様シャルロット・フェニヤと言う女性がありながら、白昼堂々アラにまで手を

……」

「えっ!! 自分今ピンチっすか!!」

「なわけあるかっ!!」

何だよシャルロットさんと言う女性がありながらって、そう言う関係じゃ無いよっ!!

よしんば友達だよ!! あと真に受けるなよアラちゃん!!

「おのれ……帝国に刃向うのでなければ手出しはしないつもりだったが、貴様の様な外道捨て置くわけには行かない!!」

「捨て置きよっ!! 何にもしてないぞ俺はっ!!」

「ユ、ユーリちよつと落ちつくつす。多分、このお兄さん普通のお兄さんつすよ？」
そうだよ、何処にでもいる普通の男だよ、一般人だよ!!

一般人だよ!!

「いいや、フアラはあれを見てないからそう言えるんだ!!何よりこの男、既にアウギユステでは、よからぬ噂が溢れているっ!!」

「溢れてんのっ!!」

何時の間にだよっ!!誰だよ、噂の発信源はっ!!

駄目だ、噂が明かない……気は進まないがこのユーリ少年を気絶させてでも逃げるしか無いぞ。

「ユーリ、急に走り出して何をやっているっ!!」

「あ、隊長!!」

増えよつたっ!!嘘だろ、何でこのタイミングでゾロゾロ帝国兵が集まって来るんだよ!!

「おうおう、相棒。えらい威勢の良いのが集まってきやがったぜ?」

「ああそうだね。団長周辺の均衡率が崩れてきているから、トラブルが集約され始めてるようだ」

ねえゾーイ?何その均衡率って?しかも俺周りの均衡率が崩れてるって何?

「昨日のジータとの再会で一気に崩れたらしいね。まあ、元から崩壊気味だったけど……うーん、驚いた」

俺もだよ……。

「むっ！この男は……いや、それよりもこの集団は」

「隊長、こいつあのシャルロット・フェニヤと共に居た男です！」

「なにつ!? た、確かによく見るとあの時の小僧だ……うむ、確かこんな顔だったな」

何だよ、確かつて。はつきり覚えとけよ、割と一触即発のシーンだったろ。

「むむ、まさか我々が帝国軍の本隊が来るまでにアウギユステ市内での活動が円滑になるように作戦を開始した直後にこの様な場面に出くわすとは……」

「話すな話すな、そんな重要な事……」

この隊長大丈夫かよ。結構しつかりしてると思ってたんだが。そして来るのか、帝国軍本隊。

「どうする相棒？ すっかり囲まれたぜ？」

「……急な展開で対応が遅れちゃったよ」

とりあえずもう追加は無いね？ 来ない？ だったら対応するよ？ いいね？ 誰に聞くと
いうわけじゃないが、もう余計な事は無いと信じる。

「……帝国の隊長さん、なんかこのユーリ君って方は、誤解してるらしいけど別に俺何か

やましい事しようってわけじゃなくてね？ただこのフアラって子が困ってるから手助けをだね」

「そ、そうっす。ただ偶然会っただけっす」

「そうか……だが小僧その娘は、脱走兵として手配されている。そして貴様は、我々の作戦中に会おうのは、二度目だな。偶然かどうかしつかりと確認せねばならん。あの時は、見逃したが今回は、我々と共に来てもらおうか」

「や、やっぱり自分脱走兵扱いなんっすね……」

「捕らえますか隊長？」

「まあ待て。小僧、聞くがその後ろにいる者達は、何者だ？」

聞くよね、そりゃ聞くよね……。

「……俺の知り合いですか？」

「お前の知り合いには、3 m以上ある自律した鎧と空飛ぶ黒いトカゲもどきがいるのか？」

お望みとあれば似たのをあと5体用意できるぜ。このやろう。

「いや、そうか……貴様、あの『星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y』の団長だな？」

げえええーっ!? バレた!?

「本当ですか隊長!？」

「この小僧が、まさか!？」

「いんや、俺あ聞いた事があるべ……」

「知っているのか、ハーパーっ!？」

「んだあ、あんの星晶戦隊(以下略)の団長つてのは、周りがおっそろしいほど強くつて、星晶獣までいるつてのに団長本人は、ビックリするほど地味な少年つて話だあ」

「そうだ。そこの鎧の巨人、ドラフと言うわけでもあるまい……そして、その妙な黒いナマモノ。女の方も怪しいものだ……最後に印象の薄い少年。最早間違いないあるまい」

間違いつて言いたい……っ!!くそ、言いたいのに。

「お、お兄さん泣いてるっすか?」

「……泣いて、ないやい」

「気にするな少女よ、団長にとつては何時もどおりなんだ」

ゾーイ、悲しい事実を告げなくていいです。ほら、ファアラちゃんの顔が哀れみに満ちてきている。

「さて、尚更貴様達を逃がす事は、出来なくなつたな」

「へえ? オイラ達相手にやる気かよ?」

コロッサス、B・ビー、ゾーイから殺気が出てくる。

「……俺、街中で暴れる気なんて無いんだけど」

「安心しろ、我々もそのつもりだ」

「じゃ、どうするんです？争い事は嫌いだけど、捕まる気も無いんですけど」

「いいや。お前は、自ら捕まってくれるだろう。そう、今我々の周りには、野次馬がそれなりの数集まっている。この意味がわかるか？」

「は？何言って……」

「大人しくしなければ貴様のよからぬ噂諸々と昨日のシャルロット・フェニヤとの事を大声で今広めさせてもらう!!」

「な、なにいいいっ!？」

「こ、この野郎!!とんでもねえ、とんでもねえ事を……っ!？」

「き、きったねえ……」

「卑怯も承知の上、悪く思うな。我々の部隊だけでその星晶獣を相手に出来るとは思わん。まして貴様が噂どおりならば星晶獣を従える事が出来る男だ。正攻法で勝てるとは、到底思えん」

「うぐ……俺の自身の事ながら反論できん」

「一本取られたな相棒」

「馬鹿、感心してる場合かよ……」

うぐぐ、街中じゃなくてしかも他の人が居なけりや大技で一網打尽なんだがなあ……。これ以上変な噂流れさせるわけにいかないし……。

「……わかったよ。大人しくするよ」

両手を挙げて降参のポーズ。

「(・ω・) イイノ？」

「いいわもう……それに今あの噂流されるとシャルロッテさんも困っちゃうからな」

「な、なんかごめんなさいっす」

「いいよ、君の所為じゃないから」

「よし！では、こいつらを連れ一度砦へと戻るぞ！」

「サーツ！イエスツ！サーツ！」

そして俺達は、暑苦しい帝国の部隊に拘束されてしまい連行されたのである。運んでいた荷物ごと。あんた達荷物も持つてくのはいいけど中身見るんじゃないよ？特にルナール先生の奴。後悔するから。

「あらら……これは……」

……後頼むよ、フィラソピラさん。



五 主人公捕まる

「お兄ちゃん来たよーっ!!」

エンゼラに乗り込みながら大声を上げジータ一行が現れた時、彼女を迎えるはずだった男の声は、無かった。

「む？来たなジータ団長」

「あれシユヴアリエ？お兄ちゃんいないの？」

「うむ実はな……だが丁度良い、少々面倒な事になっていてな」

「おいおい、お前らの少々って本当に少々レベルか？」

ラカムの指摘にシユヴアリエから特に反論は無かった。

「それを判断するのは、お前達だ……昨日と同じ食堂に来てくれ。詳しく話す」

「おいおいこりや、ラカムの予想が当たりそうだけ」

「みてえだな……」

わけがわからぬままエンゼラの食堂に通されたジータ達。そこには、団長とコロツサス、B・ビー、ゾーイを除いた星晶戦隊（以下略）のメンバー、そしてシャルロット・フェニヤとパウタオード達リユミエール聖騎士団メンバーが揃っていた。

「ジータ殿も来たでありますか？」

「シャルロットさん、これどうかしたの？」

「それが、自分もバウタオーダ殿達も先ほど着いたばかりで……」

「どうも明るい話をしようと言う雰囲気ではないなこれは」

「は、はい……とつてもピリピリしてます」

「みんな、集まったね」

緊張した雰囲気の中カタリナとルリアだけでなく「ジータと愉快的仲間たち団」の面々は、冷や汗を垂らす。そんな中フヨフヨと現れたのは、クリュプトンに乗ったフィラソピラだった。

「あ、独楽の姉ちゃん……フィラソピラだっけ？ どうしたんだよう、兄貴の姿もねえし」
「うーん……ちよつと困った事になってねえ。実は、団長なんだけどね……帝国に捕まっちゃって」

「……ええ？」

——この時、ほんの一瞬であつたが全空で異常な浮力変動が起こつた。異常に浮力が増えた島、減つた島があり本来であれば島の危機であつたものの1秒にも満たない時間での変化だったために「今ちよつと揺れた？」程度で収まり一部を除いて気がつかれる事は、殆ど無かつた——

「落ち着いてジータ団長。彼普通に無事だから」

「あ……うん、落ち着いてるよ？」

(い、今なんかやばかったような)

(はわわ……ジータから、異常な気配がありましたあ……)

ビィヤルリアがジータの不穏な気配に気がつきながらあえてその事は、追求しなかった。聞くのが怖かったからだ。

「私と団長が宿の荷物を回収しに行つてからなんだけど——」

フィラソピラは、団長が連れて行かれた状況を話した。一人お菓子を買いに行つていたために難を逃れた彼女は、クリユプトンを大急ぎで飛ばしエンゼラへと戻りこの事を伝える事ができた。

「団長きゅん……とことん運が無いにやあ……」

「既にロリコン、巨乳好きの変態の噂が流れてるわけよね。その上ハーヴィンを宿に連れ込んだなんて言われてちやあねえ……」

「んふふ……め、名実共にロリコ、ははっ!! あはははははははっ!?!」

「主は、自分自身を人質にされたか……まあ主ならば捕まる方を選ぶだろうな」

身内の何とも言えない評価を聞きながらジータ以外の【ジータと愉快な仲間たち団】達は、団長の安否を心配し同時に彼の運の悪さを哀れんだ。

一方で彼が捕らえられる原因の一端となつてしまったシャルロッテはと言うとシヨックで顔を青くしていた。

「ジミー殿が……自分の所為で……」

「シヤ、シヤルロット団長、お気を確かに」

「これは……また正義審問どころでは無くなってしまったな。ファイラソピラ殿、それで団長は？」

「後をつけたかったけど……私じゃクリュプトンが目立つからね、どこかの基地か何かに連れてかれたようだけれど」

「状況から、直ぐに彼らに対して危害を加えると言うわけでもないでしょう……とは言えあまり時間をかける事もできませんね」

バウタオダの言う通り帝国兵達は、団長達が自分達の作戦を邪魔をしないために連れて行った面が強い。また偶然にもその場で出会った元帝国兵フアラの存在もあって精々形式通りの尋問を行う程度だろう。だが時間が経つてしまえばその保証もない。

「うう……誰か都合よくお兄さん達の行方知ってる人とかいないでしょうか……」

都合のいい人物が現れる事を考えるルリアだがビイは、そんな人間が居るわけがないとため息を吐いた。

「そんな都合のいい奴いるわけ」

「いるでつ、ここに一人な!!」

「うわあつ!?だ、誰だあつ!」

扉を開けて入り込んできたのは、背中に太鼓を背負ったエルーン、商人カルテイラであつた。

■ 六 うちが来るのがちよいと早すぎたかいな？ 自慢やないけど、うちは1000mを5秒フラットで走れるんや

■ 「あれ、カルテイラさんです？」

「まいど、風読みの相場師カルテイラちゃんとの登場やで〜」

エンゼラに現れたエルーンの商人カルテイラ。彼女の登場にジータ達は、驚いた様子だが彼女を知る面々は、特に彼女が現れた事自体に驚く事は無かつた。

「カルテイラ殿？ そうか、ジミー殿の知り合いと言う事は、貴女もこの団の事をご存知だつたのですね」

「せやせや。あん時は、どうも」

「しかしカルテイラ殿、ジミー殿の居場所をご存知なのでありますか？」

「勿論知つとるで。せやから来たわけやし……よつと！」

不意に彼女は、下げた大袋から大きな地図を取り出した。図面は、アウギユステのものであつた。

「仕入れであつちこつち行つとる時、なあくんか知つた顔の奴らが帝国兵に連れてかれてるんの見かけて、こらどうせまた面倒事に巻き込まれたんやろなあーつて思つてちよつちよおくつと後つけといたわ。そつしたら案の定帝国の奴らの基地に連れてかれとるから、ああこりやあんさん達にお知らせせんとなあゝつて事で現れた次第や！」

「す、すごいわね貴女、普通しないでしょ帝国兵見かけて後つけるつて」

「あの団長には、助けてもろたさかい、当然のこつちや」

「へえ、そうだったのね」

「それになあお嬢ちゃん……商人はな、度胸が必要やねん」

「いや商人関係ないでしょ今は」

「イオの指摘を無視してカルティラは、取り出した地図のある部分を丸で囲つた。」

「おいおい……こりやカルナ砦じゃねえか？」

「オイゲン知つてんのか？」

「ああ、ここは帝国軍の拠点なんだよ。嬢ちゃん達が前の戦争収めてくれたから使われなくなつたと思つたが……今回また使い始めやがつたみてえだな」

「アウギユステでの帝国の軍事拠点か……間違ひなく彼らは、ここにゐるな」

「行こうつ!!今すぐ!!」

「待つた待つたつ!?!ジータ、ステイツ!!」

「まだ話し終わってねえって!!」

声を上げて今にも飛び出しそうなジータをイオとビィが抑える。

「けど早くしないとお兄ちゃんが危ないかもしれないよっ!」

「落ち着けジータッ! お前の攻撃受けて1時間気絶しただけで済む奴がそうそう危険な事になるか!」

「それは……うーっ! うーっ!!」

「あ、言い返せなくて膨れてる」

どうしようもない感情に振り回され頬を膨らませてしまいうジータ。一人の人間が連れ去られたと言うのに最初の緊張感が四散して行っている。

「実際ソウ心配スル事ハ無イ。アイツハ、星晶獣ノ攻撃ヲ生身デ受ケテモ死ナン」

「何を根拠にそんな」

「いや主は、実際我々マグナシックスの合体攻撃【ファイナルダイナミックマグナスベシャル】を受けてもピンピンしてたからな」

「す、凄い嫌がってたから……さ、最後麻痺掛けられてたよね……」

「――」

「……ユグドラシルが同意してるなら、本当のようね」

「兄貴……ザンクティンゼルで何やらされてたんだ……」

自分の知らぬ所で地獄すら生ぬるい特訓で星晶獣6体の攻撃に嫌がりながらも曝された事をビィは知らないが、今はただこの場にいぬ彼のために涙を流した。

「……とところで、質問なんだけど」

ここで今まで黙っていたルナルが手を上げた。

「フィラソピラ、貴方達が回収してたはずの私達の荷物だけど、どうしたの?」

「ああ、あれは帝国兵が団長達と一緒に運んでいったよ」

「ぜ、全部?」

「うん、全部」

この事を聞いた時、ルナルを筆頭に、ラムレッダ、ティアマトに激震が走る。

「全部?!?わ、私のお宝本も?!」

「わ、私のおしゃけも?!」

「私ノ服トアクセサリーモカツ!」

比較的危機感がなく温かった星晶戦隊（以下略）の面々であったがここに来てこの三名の熱い闘志が灯った。

「は、初めて他の島で買った耽美本を……おのれ、帝国っ!!」

「アウギユステ産の青い海を彷彿とさせる爽やかな飲み心地を表現したあの銘酒とあの銘酒、それにあの銘酒も……お、おによれえく帝国うっ!!」

「小遣イ少ナクサレタカラ、何トカ考エテ買ツタ私ノ服ヲ……オノオオレエツ!! 帝国ウウツ!!」

「あんた達……そう言う反応は、団長さん攫われた時に見せなさいよ」

団長へ自分の荷物、と言う現実。イオも他の面々も帝国に連れ去られた上にこんな扱いの団長に同情した。本人が知ったら泣きはしないが非常に複雑な表情を見せただろう。

「攻め込むわよ、貴方達っ!! 私達の荷物を助けるわ!!」

「団長殿をだろう……」

「ぬおおおっ!! 私のおしゃげ、待っててにやあっ!!」

「待ってるのは、団長ね、団長」

「帝国ノ奴等……私ノ服二手出シシタラ許サンカラナツ!!」

「だからそう言うのは、あの坊主に対してだな……」

「そうかつ!! つまり帝国の奴等と語り合えばいいわけだなっ!!」

「お前は、今まで静かだったのに方針が戦う方向になったとたん元気になりやがったな

……」

「ひゃっはーっ!! 盛り上がってきたなあ〜? 壊天刃おもおく血に飢えてるぜえ〜っ

!!」

「うひゃあっ!!?じよ、嬢ちゃんその物騒なもんしまつてくれよう!」

「あははっ!!か、彼がいないと……うひひひ、ひひいっ!!いつも以上に収しゆ、うが、つか、つかつかないひひいーっ!!ぶはあっ!!だはーあははははっ!!」

「ほんと、そうみたいね……」

一気に興奮気味になった星晶戦隊（以下略）とジータ達。普段からジータ一人でもお手上げ状態のカタリナ達にとってこの事態は、最早ツツコミを入れる事が唯一とれる手段であった。

「各自武器を持ちなさいっ!!敵の場所はわかっているわっ!!準備出来次第出発よっ!!」

「ル、ルナル先生が……も、燃えている……」

「ええ……今の私は、〃攻め〃のルナルよっ!!」

「おお……っ!」

さながらカチコミである。手には、いつの間にもやら握りしめる愛用のペンを持ちルナルの封印されし魔眼がいつも以上に疼いた。

「ジータ団長、貴女も力を貸してちょうだいっ!!私の本、と団長を助けるために!!」

「最初に本って言ったぞこの姉ちゃんっ!!」

「やらいでかーっ!!私頑張って帝国ぶっ潰すっ!!」

「ジ、ジータ?あんまお前は頑張ん無くていいと思うぜオイラ」

「頑張るっ!!」

「はわわ、まったく聞いてません……」

今ここに、一方の代表者不在のままに星晶戦隊（以下略）と【ジータと愉快的仲間たち団】の共同戦線が組まれた。最早アウギユステでの帝国の命運は、決まったようなものだがそんな事を帝国兵達は勿論知る事は無かった。そして捕まってしまった団長もフィラソピラがいるので「その内助けに来るだろうし大人しくしてつか」程度に考えていたのだが、流石にこんな集団がこんなテンションで押し寄せる事態までは、想定していなかっただろう。

七 正義の選択

「はっ!?!」

そしてここで置いてけぼり状態であったシャルロットが我に返る。

「じ、自分もジミー殿救出に向かうであります!!」

団長が捕らえられた原因である【アウギユステラブホ事件】。当事者である本人として団長を放っておく事は、到底できなかつた。

「いや、リュミエール聖騎士団の団長が来るんは、まずいんとちやうか?」

しかしここでカルテイラからシャルロット、およびリュミエール聖騎士団の団長救出作戦参加に疑問がでる。

「リュミエール聖国って帝国と友好関係やったろ。前の時は、小競り合い一步手前で済んだみたいやけど今回本格的にシャルロット団長はんが出てくると帝国も無視でけへんで？」

「うん？つてことは、リュミエール聖騎士団のコーディネリアにブリジールも不参加になるぜ？」

フェザーの何気ない言葉にコーディネリアとブリジールが怪訝な顔を見せた。

「待ちたまえ。確かにリュミエール聖国は、帝国と友好関係にあるが今回は、状況が状況だ」

「そ、そうです！団長さんのピンチにじっとなんてしてられないです！」

団長（コロツサス、ゾーイ、B・ビイの星晶獣3体付属）が本当にピンチであるかは、実際の所団員達も疑問である。

「……一応、話シテオクガナ。アイツ、今回ノ事ガ終ツタラオ前等二人退団スルヨウニ言ウツモリダツタカラナ」

先ほどの激しい怒りをいつの間にか消してティアマトが意外な事を告げた。その言葉にコーディネリアとブリジールの二人は、思わず狼狽えた。

「それは、どう言う……」

「シャルロットト出会ツタ次ノ日ダツタカ、アイツ一人デオ前達ニ退団ヲドウ告ゲルカツテ悩ンデタカラ相談ニノツタ」

「ティアマトに相談だと……主、悪い物でも食ったか……？」

「ウルサイ」

「ぐえ」

驚愕した様子の子のシユヴアリエに不服そうなティアマトは、一発張り手を繰り出した。

「こう言うのは、主にやってほしいんだが……」

「ウルサイ……トモカク考エテミロ、ソモソモオ前達ハ、騎士団長ヲ探スタメニ入団シタダロウ。今回ノ件デ殆ド目的ハ達成サレテイルンダ。アイツガオ前達ノ今後ノ事ヲ考エルノモ当然ダロウ」

「それは、そうだが……」

「ソレニ今ココニハ、リュミエール聖騎士団団長ガイルンダ。オ前達ガ来ルカドウカハ、ソノ騎士団長ト話シ合エ。騎士団長本人ガ来ルカモ含メテナ」

カルテイラ、そしてティアマトの言う事は、尤もであった。コーデリア達が本格的に帝国と争う事になると間違いなくリュミエール聖国へその事が帝国から知らされる。同時に帝国側からは、その事に関しての抗議が行われるのは間違いなく、まして騎士団

長シヤルロット・フェニヤがいたとなると一度の抗議だけでは、済まないかもしれない。コーデリア達の周りでは、重苦しい雰囲気が出てきた。今彼女達は、自分の気持ちと騎士団としての立場の板挟みになっているのだ。ただ一人、バウタオーダは、じつと彼女達を見つめ成り行きを見守っていた。

「私達ハ、準備ヲ終エタラ直グニ出ル。モウ一ツ言ツテオクト、オ前達二人トソコノ騎士団長ガ来ナクトモアイツ等ヲ助ケル分ニ問題ハ無イ。ジータノ団モイルカラナ。ソレヲ踏マエテ良ク考エテオクンダナ。行クゾ、オ前等」

「う、うん……テイ、ティアマトが、結構まともだあ……」

「ウルサイ」

「あう」

セレストに言われた言葉も不服だったのかティアマトは、張り手を一発はなった。

「ドウセ、遅カレ早カレアイツガ言ウ事ニナツタ事ダ。リュミエール聖国ハ、気ママナ騎士団ト違ウ一ツノ国、簡單ニ参加サセラレン」

「た、確かに……そうだね……」

「ソレニアイツデモコノ状況ナラ話シタハズダ。ドウセ、コーデリア達ノ立場ノ方ヲ優先スルダロウカラナ」

「テイ、ティアマトって……地味に、団長の事……理解してるよね……」

「コレデモ、最初ノ仲間ナンデナ」

その時のティアマトは、少し誇らしげな表情であった。

「よし！それじゃあ私達も一旦グランサイファーに戻って準備しよう！」

「皆攻めか……へへ、こりや腕が鳴るぜ」

「人数は、多いが……楽なのかどうかわからねえなあ、今回ばかりは」

「なんせ兄貴が関わるからなあ……いつも以上に予想付かねえよ……」

ジータ達も慌ただしく出てゆきラカムやビィは、平和的とは言わないまでも問題がこれ以上大きくならない事を祈った。

こうして、それぞれが各々必要な準備に取りかかる。

「自分は……」

シャルロット達、リュミエール聖騎士団を残して。だが、シャルロット・フェニヤの瞳には、既に確かな決意が灯っていた。

踊る大騎空団

■ ■
一 私（助け）待つわ

帝国兵の隊長にシャルロットさんとの過ち（誤解）をネタに脅され仕方なく捕まってしまった俺は、帝国がアウギユステで使用している軍事拠点である砦に連れてこられた。帝国兵は、皆忙しいのか尋問らしい尋問は後にされて俺達は、砦地下にある地下牢へと入れられた。省エネモードのコロッサスは、かなりギリギリだがよく入ったもんだ。

今俺の両手には、冷たい鉄の枷がはめられている。如何にも囚われた人間スタイルである。しかも特別製の枷で無理やり外そうとしたりするとビリビリくる嚴重なやつ。なおこの枷がはめられたのは、俺だけである。他の奴らは、普通の枷。こうなつたのも呆れた理由で悲しくなる。

「おめえ、こんなんどうすりゃ拘束なんてできつぺ？」

「マア……（・ω・）セイシヨウジユウデスカラ」

これコロツサスをどうすればいいか困ってしまった帝国兵とコロツサスの会話ね。

「困ったな……対星晶獣用の装備は、本隊が持っているものだけだしなあ」

「ナンカ（；・ω・）ゴメンネ」

「いやお前が気にするな……しかし形ばかりでも一応は、拘束しないとなあ」

「なんもしないって看板持たせとくべか？」

「うーん、そうするか？」

「駄目に決まってるだろ……」

何だよこの会話ってなる。元帝国兵のフアラちゃんも呆れた様子だ。

何より惚けた感じの兵二名に頭を抱えるのは、俺達を見つけたあの少年ユーリ君。彼自身もどうしたものか悩んでいるが周りが緩い所為で余計に悩んでしまっているようだ。何となく親近感が湧いた。だから俺は、始終あーでもない、こうでもないとお口とお口と困った様子の兵を見かねて思わず「もう俺を人質って事にしときなさいよ……」と呆れて助言をしてしまう。結局「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y」の団長である俺をきつ／＼／＼／＼くビリビリの枷で拘束。しかも鍵を持ってある人間の意思一つでもビリツとくるので「変な事したら団長が大変だぞ」と言う事にした。これで一応は、コロツサスとゾーイにB・ビイの行動を防ぐ事が出来たと思いい帝国兵は、ホクホク気分だった。

「なんか……すまんな」

「気にすんなって」

捕らえた敵のアドバイスで喜ぶ仲間を見て複雑な心境のユーリ君であった。

「それで俺達は、これからどうなるの？」

「俺達の作戦が終わるまでは、ここで大人しくしてもらおう。それが終われば護送だ。その時は、星晶獣用の拘束具もあるからな」

「自分もつすか!？」

「そもそも脱走兵として手配されてるんだから当然だろう」

「と、とほほつす……」

しよんぼり項垂れるファラちゃんは、何処と無く子犬的雰囲気が出ている。まあ先輩とやらを追いかけて来たのだから忠犬っぽくもあるか。

「ユーリッ！」

その時、牢に通じる階段からユーリ君を呼ぶ声がした。さっきの部隊の仲間だろう。

「ジツク、どうした？」

「ポンメルン大尉が到着された」

「大尉が？ 思ったより早いな」

「ああ、直ぐにでも作戦開始だ。ともかく急げよ」

戻っていく帝国兵。どうやら事態がより進み出したらしい。

「それじゃ俺は、作戦に戻るが……当然見張りはある。可笑しな真似は止すんだな」

俺達を牢屋に詰め込んでやる事終えて去ろうとするユーリ君。だがその前に聞いておきたい事がある。しかし扉が完全な鉄格子じゃなくて重い鉄の扉に小さな格子窓があるだけなんで見え辛い。

「なあなあ、ねえちよつとユーリ君！」

「ユ、ユーリ君？急に君付けかよ……」

気にするな。それ以外呼び方思いつかないから。

「それで、なんだ？急いでるんだから手短にな」

「あのさ、今回の帝国の作戦ってアウギユステの島が沈んだりとかやばい事してる？」

「はあっ!？」

俺の質問に驚くユーリ君。ついでにフアラちゃんも結構驚いた様子だった。もつと回りくどく聞いても良いんだけどどうせ答えられないだろうからね。揺さぶるつもりでドストレート直球投げ。

「お前何馬鹿な事……そもそも部外者のお前に作戦内容を答えられる訳が無いだろう
！」

「まあそうなんだけどさ……ただ前帝国がアウギユステで戦争してた時なんかは、海で

結構エグイ事したらしいじゃん？」

「そ、それは……」

「今回も何してるか知らないけど……なーんか嫌な感じするからね。俺こう言う勘当たるんだ」

本当に、実に、真に遺憾ながら俺の嫌な予感、ほぼ100%当たる。まったくもって不本意であるが。

「……今も言ったが答える必要は無い」

「ま、そだよね」

「だが……俺は、帝国兵として誇りがある。戦いを避ける事は、出来ないかもしれないが……無関係の人間を巻き込むような真似は、決してしない」

「本当かねえ」

「ああ、帝国の正義にかけてな」

そう言つてユーリ君は、行つてしまった。自身満々に「帝国の正義」と言つたけれど生憎俺は、それこそが信用ならないと思つてるのだ。その正義とやらに幼馴染殺されてるんですよ。まあ数百倍強くなつて生き返つたけども……それとこれとは、話別なん

で。
あと一応俺も無関係の人間だつたと思うのですがそれは……。

「はあくもういいや、疲れた」

俺はそのまま固い牢の床に寝そべった。せめて藁でもいいから欲しいもんだ。

「お兄さん……すみませんっす。自分と居たせいでこんな事に」

「気にしなくていいよ。運が悪かっただけさ」

そう本当に運が悪かったただけだ。そして俺は、何時も運が悪い。何故でしょうねえ？

ははは。

「で、どうするんだい団長？」

「必要なら枷全部外してやるぜ？」

「いつ!? そ、そんな事でできるっすか!？」

「はいはい、声小さくねフアラちゃん」

B・ビイの発言に驚くフアラちゃんを大人しくさせる。見張りに聞かれると面倒にな

る。一応牢の奥で小声で話す。

B・ビイの言う通りこの程度の枷は、簡単に破れる。確かにビリッと来るが俺にとつてはそれだけだ。普通なら気絶するようなビリビリだろうが強烈な麻痺や帯電訓練を施された俺を舐めてはいけない。なので脱出も反撃も簡単だ。彼等が勝手にこれで俺達を拘束出来たと思っただけである。

「まあ今は、待ちだわな」

「待ちつすか?」

「こそ、待ち。彼、ユーリ君は、かなり帝国に対して信頼があるようだけど多分今回も帝国の奴ら馬鹿な事してるよ」

「だろ?なあ。そもそも海岸や珊瑚礁での作戦だけじゃなく市街地まで出てきてるわけだろ?ありやなんかしてるぜ」

「恐らくだが星晶獣関係だろう。帝国が行動を開始してからか一つの星晶獣らしき反応が活発化している」

「タダチヨット(—ω—)ヨワツテルカンジ?」

「やっぱそうか。ゾーイ達が言うならほぼ間違いないんだろ?なあ。コロツサスの言う弱ってる感じと言うのが気になるがそれも帝国の所為なんだろう。」

「あいつら対星晶獣用がどうの言ってたな。捕まえる気か?」

「出来ない事も無いだろう。理に反する力を使えばの話だが」

「ティアマト達も一度は、帝国の手によって暴走させられている。やろうと思えば出来るって事か。」

「そうなつてくるとそう時間もかからないで騒ぎが起こるな。その時に動くとするか」

「多分今頃フィラソピラがティアマト達にこの事知らせてるだろうから派手になるぜ」

B・ビーよ、お前は何楽しそうにしてるんだ?俺は、どうしようもないから状況を受

け入れてるけど本来俺は、アウギユステのバカンス中なんだぜ？バカンス六日目を牢屋で過ごすとは、思わなかったよ。

だがここまで来ては、考えを変えるしかない。

「帝国の拠点に来れたのは、むしろラツキーだったかもしれない。ティアマト達が来たら内と外から攻められる。ついでにアウギユステでの企みも潰すかあ」

「だな！」

「皆の荷物も回収しないとイケないしな」

「アトデバシヨ（*・ω・）シラベナイトネ」

あれ失くすとティアマトの辺りがうるさいだろうからな。しっかり回収させてもらわんといかん。

「お、お兄さん達って……何者つすか？」

俺達の会話を聞いて驚いたままだったフアラちゃんが困惑した様子で聞いてきた。ついで感覚で帝国の企みを潰そうとしてるので困惑するのも無理ないか。

しかし何者か……こう言う質問ってちよつといいな。始終印象無茶苦茶だしここは、ちよいと格好良く決めていきたい所だ。「見ての通りのただの騎空士さ……」なーんて悪くないんじゃない？

「見ての通りの」

「幸薄い地味な男だよ」

「おい」

B・ビィに重要な所を台無しにされた。

「あー……」

「おい」

フアラちゃん？あーじゃないよ何納得してるのかね？

「まったく……じゃあ俺寝てるわ。なんかあつたら起こしてね……」

「うん、わかった」

精々一、二時間つてところかな。果報かどうかは、不明だが寝て待つとする。ぐー。

■ 二 帝国の者達

「隊長！こちらは、異常ありません!!」

「よし!!」

「隊長、あちらで村の役員会議を開く時間だからあまり騒がしくすると抗議があまりました!!」

「うむ！貴様ら！役場近くでの活動は、なるべく静かに行えつ!!」

「サーツ！イエスツ！サーツ！」

「隊長！飼い犬が迷子になって泣いている子供が作戦範囲に侵入しましたっ!!」

「よしっ！貴様ら！その子供は、速やかに家に戻して邪魔な犬も見つけ次第回収して家に帰しておけっ!!」

「サーツ！イエスツ！サーツ！」

湾岸部に近い村で活動するユーリの隊。団長達を捕らえた後に直ぐ帝国の本隊と合流。その本隊が重要な作戦を行っている間邪魔が入らないようにするのがユーリ達の任務だった。

そんな中ユーリは、一人散漫とした気持ちであった。本隊が行っている任務をユーリは、全て知っている訳ではない。ただ一つ「艦上物資の確保」についての話を聞いた程度であった。

(そもそも物資確保の任務で何故星晶獣用の装備を……今回の作戦は、星晶獣が関わるのか？ただの物資確保に何故……)

団長達を牢に入れた後彼らの指揮を執る人物ボンメルン大尉が現れる。今回のアウギユステでの作戦全てを指揮するボンメルンは、詳しい作戦内容をユーリ達には、告げる事無く急ぎ作戦が開始されたのである。

ボンメルン等本隊の兵達全ての装備は、明らかに物資確保の任務に当たるにしては、

過剰と思えるものであった。それだけであれば如何なる状況でも対応出来る様になる。だがそれに加えて彼らは、今回の作戦のために対星晶獣用の装備が配備されていたと言うのである。

岩を発つ前に団長から言われた「鳥が沈む」と言う話が頭を過ぎった。ただの物資確保であればその様な事態になるはずは無い。だが星晶獣が絡むとなれば話は別である。何か自分の知らない所で異常な事が行われているのではないか？ 具体的な作戦内容を知らされていない事に対する僅かな不信任感が彼の中に芽生える。だが彼は、それを直ぐに追い払った。

（俺達には、教えられない重要な作戦と言うだけだ……何を疑う事があるユーリ。今は、任務に集中しろ）

その疑惑は、ただの雑念だと決め失くすよう努力する。それも帝国を信じるが故である。

「ユーリっ！」

「はっ!？」

不意に隊長に呼ばれ驚く。急ぎ振り返ると直ぐ近くにまで隊長が近づいていた。

「貴様……なにをぼーつとしてている！」

「も、申し訳ありませんっ！今すぐ配置に戻りますっ！」

「馬鹿者っ！聞いていなかったのか！先程作戦が完了した。既に撤収の作業が始まって
いるー！」

「えっ!?!」

しまった、とユーリは思った。あまりに考え事に集中してしまい隊長の指令まで聞き
逃していた。幼稚な失態を恥じて先程のまでの自分を殴ってやりたい気持ちになった。

「砦を出てからどうも様子がおかしいが……あの小僧に何か言われたか？」

「え？あ、いえそ、そのような……」

凶星であった。思わずしどろもどろになる。

「嘘の苦手な奴だ。そう言う所も父親によく似ている」

「それは……その……」

この隊長が自分の父と古くからの馴染みである事は、ユーリはよく知っている。ユー
リの父もまた帝国軍人であったが最近事故で亡くなった。彼の父を知る人間の多くが
その死を惜しみ隊長もその一人であった。隊長の声に亡き友を懐かしむような感情が
あったのは、ユーリの気のせいでは無いだろう。

「大方作戦に対しての疑問を持ったな？」

「うっ」

自分の様子からそこまでを察する隊長に驚きながらユーリは、どう誤魔化すか考え

る。しかしその様子すら隊長は、面白そうに見ていた。

「よせよせ、貴様に上手い言い訳が出来るものか」

「うぐ……」

「……いいかユーリ」

からかう様な口調から一転し隊長の言葉が強くなる。兜のスリットから見える視線にユーリは、緊張して固まった。

「貴様が帝国軍人であるならば作戦に一切の疑問を持つな」

「は、はいっ！」

「今は、ただ任務に集中しろ。我々は、大尉から任された任務を行う。それだけだ」

「りよ、了解しました」

「……ユーリよ、軍に入隊し暫く経つがお前は、まだまだ若い。上の行いに疑問を持ちそれが正しいのかと思う事もあるだろう。それは、人間として当然の事だ」

「ですが……自分は、帝国軍人です」

「……それがわかつているならば、これ以上俺から言う事は無い」

軍人であると言う事。それは、実に厳しい環境に身を置き続ける事である。不安、疑問、恐れ、それら感情を殺し軍人として任務を全うする。そうである事は、いまだ若きユーリには、難しい事であった。

「第一貴様のように真直ぐな奴が悩んだ所で意味などあるまい」

「た、隊長お……それは、あんまりです」

「馬鹿者落ち込むな。それに貴様は、うじうじ悩むより動いてる方が性に合っている」

「確かに、そうです……」

隊長の言う通りであった。そもそも自分は、座学も嫌いでは無いがそれ以上に体を動かす事の方が向いていたから兵士となれたのだとユーリは思い出した。

（そうだ。今は、ただ任務に集中しろ……仮に星晶獣が関係しているとしても

早々島が沈むような事にはならない。事実今も無事作戦は、終了したじゃないか）

先程までの考えは、団長の言葉で生まれた雑念、気の迷い程度の事。今度こそ気持ち切りかえてユーリ達は、一時自分達の基地であるカルナ砦へと戻って行った。

自分達に迫る星晶獣など比較にならない脅威に気がつかず、既に砦の中にもその脅威と同等の存在を招いている事も知らずに――。

■ 三 大怪獣ジータゴン

カルナ砦に到着したユーリ達は、直ぐにアウギユステを発つための準備を始めた。今回の任務のために持って来た荷物をまとめ全て船に運ばなければならぬ。一部上官

を除いて殆どの兵達が慌しく動いていた。

「結局今右手に入れたって言う『物資』ってなんだったんだべ？」

「いんや知らん。ただ水源がどうのって大尉の部隊の奴が話してるのを聞いたけどな」

「つて事は、海水でも汲んだべか？」

「あんなしよっぱいもんあつても仕方ないだろ。塩抜くのも大変なんだぞ」

「おい、お前ら……」

だが中には、この様に雑談をしながら働く者もいる。ユーリの仲間であるジックとハーパーは、今までもこの様な暢気な雰囲気の仕事をして来た。それに毎度同僚のユーリは、悩まされている。

「時間が無いんだ。口じゃなくて手を動かせ」

「わかつてるさユーリ。けど気にならないか？星晶獣用の装備まで持ち出した作戦つて」

「俺あ気になってしょうがねえべ」

「そりや気にもなるさ……だが考えた所で俺達にそれを知る権利も無いだろ」

先程隊長に言われた事を思い出し同様の事をジック等二人に話す。同時に作戦について考えていたのが自分だけではなかった事に少し安堵していた。

「俺達は、軍人だ。上の方針に従うだけだ。さあ、今はとにかく荷物を運べ」

「やれやれユーリは真面目だべ」

「全くだ……とところでユーリ、あの捕まえた奴らはどうしたんだ？」

「ああ、あいつらか」

ジツクに言われ今も地下牢で大人しくしている団長達の事を思い出す。彼らもこの後護送しなければならぬ。コロツサスのような面倒な者もいるが本隊が持つて来た星晶獣用装備の予備を使えば拘束が出来ると言う話だった。

「この後牢屋から出してつれて行く。特に問題も無かったようだが……油断も出来ん」

「そりゃあもし本当にあの『星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z〇Y』の団長と仲間って言うならなあ」

「アイツの弱み握ってなかったら捕まえる事も出来なかったらうなあ」

「まあ大人しくしてるならただ地味な男と謎の空飛ぶ黒トカゲと褐色の少女に黒い自立型鎧、オマケに脱走兵だから大丈夫だべ」

「全体的に大丈夫な要素が見当たらないんだが……」

何処までも樂觀的な仲間に頭を抱えるのは、この隊に入隊してからと言うもの日常茶飯事である。呆れた様子を隠す事無くユーリが、いい加減仕事に戻れと言おうとした時であった。

「うっ!？」

「ぬわっ!？」

「な、なんだべっ!？」

突如、外から強烈な爆発が起こる。砦全体に響くような轟音が鳴り砦全体を文字通り揺るがした。

「な、なんだべ、うわおおっ!？」

そして更に再び轟音。そしてまた轟音。砦中の兵達の慌てふためく声が聞こえる。どう考えても異常事態である。

「向こうからかっ!!」

「あ、ユーリっ!？」

「お前達も来いっ！敵襲かもしれないんだぞっ!」

轟音は、砦城門側の外部から聞こえた。ユーリ等は、急ぎそちらへと向かい走った。案の定城門前では、兵達が集い出し方々から指示が飛んでいた。その指示を出す者の中に隊長の姿を見つける。

「隊長っ!!」

「む、来たかお前達」

「これは、何事ですか？」

「奇襲だ」

「きしゆ、うおおっ!!」

奇襲ですか?と聞き返そうとした途端またあの轟音が鳴り響いた。今度は、先程よりも距離が近づいている。

「この攻撃は、一体……アウギユステの軍ですか?」

「いや敵の構成も所属も不明、とにかく此方に向かっている事だけは確かだ。既に迎撃を行つてはいるが……」

「来たぞーっ!!」

誰かが強く叫ぶ。その叫びの直ぐ後にあの轟音が鳴り響く。だが今度は、轟音だけではなかった。

「レギンレイヴツ!!」

凄まじき獣が咆哮の如き少女の叫び。

「ウエポンバーストツ!レギンレイヴツ!」

「だあああっ!?!」

爆発と思われたのは、大地を切り上げ吹き荒れる幾重の閃光。

「ウエポンバーストツ!!レギンレイヴツ!!」

「ちよ、ちよやめあああっ!?!」

幾人の帝国兵をさも塵芥の如く振り払い迫る者。

「ウエポンバーストツ!!!レギンレイヴツ!!!」

「おんぎやあああああああああああつ!!」

例え万の兵が揃おうとも――

「総員抜刀用意、我々も迎え撃つぞ」

今の彼女を止める術無し。

「駄目ですつ!止めきれませんつ!!」

「門から離れる、吹き飛ばされるぞおーつ!!」

「ウエポンバーストツ!!!レギンレイヴツ!!!」

「わあああーっ!!?!」

砦城門を吹き飛ばしついに彼女は、現れた。

「ウエポンバーストツ!レギンレ――」

「はわわつ?!ジータ、ストップストップですーっ?!」

また次の攻撃が来るかと思つた時少女を留めるように別の少女が現れた。攻撃の手が止み舞い上がった土煙が腫れていく。そこに現れたのは、獣からそのまま剥いだような毛皮を頭から被つた少女の姿であつた。

「お兄ちゃんを返せつ!!」

こうして少女の咆哮がこの日の戦いの開始となつたのだ。

■ 四 E プロトタイプ（フル強化） ■

ユーリ達の前に現れたのは、間違いないようにも無くあのジータであった。だが彼女の事を詳しく知らないユーリ達は、突如異常な女が自分達を蹴散らしに現れたとしか思えない。

「ウーガルルルッ！」

「わー待て待てッ!! ジータ落ち着けっ!!」

手に持った剣を振り回すジータ。それを後から追いついたラカムが羽交い絞めにして抑える。

「行き成り大技連発する奴があるかっ!?! 砦が崩れちまうぞっ!!」

「大丈夫っ! ちゃんと手加減したからっ!!」

「そう言う問題じゃねえっての!」

「兄貴が捕まってるんだってばっ! 何処に捕まってるのかわからねえんだから、ちよつとでも崩れたりするとやべえだろっ!」

見た目ただの少女のジータであるが彼女を必死に抑えるラカムの存在など無いかのようにはスタスタ突き進む。ビイもジータの進撃を止めようとするが小さなビイとラカ

ム一人の力では、最早彼女を止める事は出来ないのだ。

「なんでベルセルク装備なんて着たのよっ!？」

「気合が違うよっ!!」

「暴走してるだけでしょっ!!」

イオもまた小さな体で必死に前からジータを押し留める。ジータは、普段着ている軽装の鎧とは、全く別の装備「ベルセルク」を纏っていた。オオカミの毛皮を頭から被り黒色の鎧で身を護るその姿は、見る者に威圧感を与える。狂戦士、ジータの様子からもその名が相応しいように思えるが別にこの装備自体に装着者を狂暴にさせる呪いの様な効果は、一切無い。このジータの尋常ではない言動は、ただの「ノリ」である。

この場にはいない団長、そして彼女と旅を共にして来た仲間、よく知っているがジータは、着る衣装、装備によって性格が大きく変わる傾向がある。決して多重人格と言うわけでは無く、「ノリ」でそうなるのだ。今回もそうである。愛すべき兄の奪還のために気合十分にこのベルセルク装備を纏って来たのだが――。

「ウーッ!ガウガウッ!」

「だーっ!狂犬かお前はっ!？」

帝国もまさかこんなてんやわんやの襲撃者が来るとは、予想もしなかつただろう。

「うなー!帝国っ!!お兄ちゃんを返しなさいっ!!」

「だ、だめですーっ！ちよつと待って下さいーいっ！」

「な、何なんだこの集団は……」

誰から見ても異常な状況である。たった一人の少女にここに居た帝国兵の多くが瞬く間に倒されてしまったのだ。訳のわからぬ事を叫びながら此方へと近づくと少女に兵達が無理を感じるのも無理は無いだろう。

「何者だ貴様達は！……ここがエルステ帝国の砦と知っての事かっ!？」

だがここで前に出るのは、隊長であった。尋常ならぬジータの剣幕に一切怯まず堂々と前へと進み出た。

「このー！また悪い事してるんでしょっ!?!今から私がぶっ潰してやるんだからねーっ!!」

「ジータ待て、頼むから……」

「ウガーツ！」

「ちよつと今から向こうの隊長と話すから……」

「ウー……」

今度は、カタリナもジータを抑えて何とか後ろに下げさせた。

「やつと下がったか……」

「貴様……もしか、カタリナ中尉か？」

現れた途端疲れた様子のカタリナを見た隊長は、意外そうな反応を見せた。元帝国兵であるカタリナは、高い実力と忠義で知られ何よりも麗しいその容姿もあいまってその名は、広く知られていた。そんな彼女も帝国で囚われていたルリアを連れて逃げてジータと出会ったのである。

彼女ほどの人物が脱走兵となるとは誰もが思いもしない事であった。当然彼女は、軍の重要機密とされていた「ルリア」を連れ去った者として指名手配されている。隊長もまさかそのカタリナにこんな状況で出会う事になるとは、思いもしなかったであろう。

そして今帝国内でカタリナが所属する騎空団の存在は、最も危険視される存在になっていた。

「そうか、貴様達【ジータと愉快な仲間たち団】かつ!？」

「如何にもそうだーっ!!」

驚愕する隊長、その言葉を聞きどよめく兵達。

【ジータと愉快な仲間たち団】、帝国が各地で活動をする度現れては、悉く邪魔をして作戦部隊も肝心の作戦そのものもほぼ物理的に壊滅、崩壊させる騎空団。一部では、最早悪魔の集団とまで言われていた。

「あ、あれが…… “帝国絶対殺すウーマン” ……っ!？」

「飛竜の船で現れる」ザンクティンゼルの悪魔……っ!!」
「し、失礼なーっ! 誰が悪魔よっ!？」

ジータは、悪魔呼ばわりされ憤慨しているがラカムとイオは、あまり否定する事ができなかつた。

「まあ帝国を庇うわけじゃねえが……たまに気の毒に思うぐらいコテンパンにされてるしなあ」

「オーバーキルも甚だしいわよね」

「二人までっ!？」

今までも「帝国? よし潰そうかつ!!」と笑顔を見せて殆ど剣一つで毎度毎度帝国の部隊を壊滅させているのでその呼び名と扱いにラカム達でさえ納得してしまった。

「あと毎度の事だが【ジータと愉快な仲間たち団】の名前が出ると一気に雰囲気緩むよな」

「もうこれは、どうしようも無いわよね」

「そ、そんな事無いもんっ! スーパーでベリグなイカした名前だよっ!」

「ねえよ」

「無いわよ」

「そ、そんなあ〜」

やはり仲間からも散々なネーミングセンスのジータであった。しょんぼジータ。

「まさか襲撃者が貴様達とは……一体何処で作戦が漏れた……」

「お前達今日奇妙な集団を捕まえただろう」

「……まさか奴らを知っているのか？」

「やはりか……彼は、彼女の家族、と言ったところかな。お前達も厄介な人物を捕らえてしまったな」

「なんと……まさかあの悪魔の関係者だったとは……」

「ウガーツ！だから私悪魔じゃないもんっ!!」

「ステイツステイツ！まだまだだっまだだっ！」

今にも飛びかかりそうなジータをラカム、ビィ、イオが必死に抑える。

「そう言う事だ。彼女が本格的に暴走する前に悪いが彼らを返して貰おうか」

「いいや……要求を呑む事は出来ないな」

「その通りですネエ」

「貴様はっ!？」

隊長の言葉に続いて現れたのは、顔を横に向かせたままジータ達を見下す男。カタリナ達にとっても最早見慣れたこの男は――。

「あ、あぁーっ！貴方は……」

「騒々しいと思つて急いで来てみれば……やっぱり貴方達でしたか」

「帝国のヒゲの人っ!!」

「ポンメルンツ!!自分を殺した相手なのだから、いい加減名前覚えなさい、この田舎娘っ!!」

「ならそつちも田舎娘とかいわないでっ!!」

「婦女子が品も無く叫ぶんじゃありませんヨオ!まつたく……」

帝国軍大尉ポンメルン。他ならぬジータ殺害を行った人物であり今作戦の総指揮を執る男。ジータ達にとつては、いつも通りのやり取りを済ませるとポンメルンは、一息咳ばらいをして話を続ける。

「彼が今言つた通り捕らえた者をみすみす渡すなんてできるわけ無いですネエ」

「我々もはいそうですかと言うわけにいかん。彼は、彼女の家族だ。帝国に渡す事は出来ないな」

「ふん……そう言うと思つてましたヨオ。ま、いいでしょう……本来は、別の目的で使う予定でしたが貴方達にぶつけるのもいいでしょう」

ポンメルンは、不敵に笑うと怪しく光る宝石を取り出した。その禍々しい力にジータ達は、見覚えがあつた。

「あれは、魔晶かっ!!」

「待っててください！あの魔晶から星晶獣の気配が……」

「本当かルリアツ!？」

「はい、かなり大きな力を感じますっ!」

「やはりその小娘は、気が付きますか……さあ御覧なさいっ!!苦勞して捕まえた星晶獣【ポセイドン】をおおっ!!」

ポンメルンが魔晶の力を解き放つと眩い光を放ちその光の中から巨大な力が溢れ形を作り出してゆく。

「ぬう……汚れ、た……力で……この、水神をツ!!」

「あれが、ポセイドンツ!？」

現れた巨大な姿。矛を持つ偉丈夫は、水の星晶獣ポセイドン。その姿にルリア達だけでなく帝国兵の多くも驚きをあらわにした。

(本当に星晶獣を……これを捕まえるための作戦だったのかっ!)

姿を見せたポセイドンにユーリも驚きを隠せなかった。この事で自分の抱いていた不安が再び出てくるのを感じた。

「やっぱり帝国の奴等悪さしてやがったんだなっ!？」

「ポセイドン……かなり強く縛られていますっ!」

今この星晶獣は、魔晶の力によって縛られ支配されていた。自らの意思を持ちながら

体の自由を奪われ今ポセイドンは、帝国の兵器と化していた。ポセイドンも明らかに今己を縛り蝕む力に抵抗しようとしていた。

「これほどの力を持った星晶獣……帝国に渡すわけにはいかんっ！」

「はいっ！ジータ、ポセイドンを解放しましょうっ!!」

「うしやあああっ!!」

「……解放だからな？魔晶を壊すんだからな？この意味わかってるよなっ!!」

「大丈夫、うまくやるっ!!」

「も、もう少しハッキリ言った方が良いんじゃないんでしょうか？手加減しろって……」

「ダメだ……普段でさえ言って聞く奴じゃねえし……」

ベルセルクジータに若干の不安を感じつつ彼女に任せるしかない。ビイは、もう諦めの境地であった。ルリアは、だんだんポセイドンの方が心配になってきていた。

「ええい、いつもいつも緊張感の無い……しかし暢気な事言っただけでこれまでですネエ！さあ、行きなさいポセイドンッ!!あの小娘達を蹴散らすんですヨオ！」

「ぐううっ!!我に……命令……ッ!!水神を、愚弄……っ!!この、縛りを……解かねば

……ッ！」

「我々もやるぞ、総員隊列を組めっ!!奴等をこれ以上進ませるなあっ!!」

ポセイドンだけではなく、帝国兵達も武器を構えて突撃を開始する。カタリナ達もそ

れを迎え撃つ。

「来るぞっ！ルリア、ビィ君下がれッ！ラカムっ!!」

「今だいけっ！ゴーゴーゴー！」

「ウガガーツ!!」

対してついに荒ぶる狂戦士を解き放つラカム。武器をブンブン振り回しながら野獣の如くジータは、ポセイドンへと突撃していった。

「ああ、その貴方達っ！」

「はっ！」

開始された戦い、その中でボンメルンは、自身もジータ達へ向かおうとしていたユリと隊長に慌てて声をかけた。

「貴方達は、例の捕らえたと言う小僧と星晶獣の方へ行きなさい」

「よろしいのですか？少しでもこちらに手を回すべきでは……」

「いいえ此方は、ポセイドンと我々で何とかします。それよりもあの小娘の仲間が全員いないのが気になりますネエ」

幾度となくジータ達と戦って来たボンメルンは、今この場にジータの騎空団の全員が居ない事を知っていた。

「それは……」

「こちらは、陽動の可能性がりますネエ。急ぎなさい、これ以上奴等をいい気にさせてはなりませんヨオ！」

「なるほど……よし、お前達ついて来いっ！」

「サーツ！イエスツ！サーツ！」

ポンメルンの命を受け隊長、ユーリ等部隊は、この場を離れ急ぎ団長達が捕らえられている地下牢方面へと向かった。この動きをカタリナ達も気が付いた。

「今何人かの兵がここを離れた……気が付かれたかもしれないな」

「いやこれだけ派手にやったんだ。偶然だが星晶獣もこっちに引き付けられた。陽動としては、まあ十分だろ」

「後は、別動隊に任せましょう。それにロゼッタ達なら平気よ。私達は、ジータの討ち漏らしの相手ね」

「討ち漏らしが出るかどうかもわからんがな……」

「又ガアー……ッ!!ウエポンバーストツ!!レギンレイヴツ!!」

「ぐううおっ!!?……この、力は……ッ！」

「ぎゃああああっ!!」

何処からそんな力が湧くと言うのか、奥義を連発していくジータの攻撃は、ポセイドンどころか帝国兵も巻き込み、敵が一人とてカタリナ達の方に来ない。おかげでこう

やって話し合う余裕があるのだが気合を入れて来た手前複雑な気持ちである。

開始早々に独り舞台と化した砦内部での戦いを見ながらラカム達は、自分達と同時に行動を開始した者達の事を考えた。

■ 五 脱出

——ジータ達が攻め込んだのとほぼ同時刻。カルナ砦、地下牢。

「……騒がしくなるとは、思ったけどさあ」

冷たい石畳で寝転んでいたが砦全体を揺るがす振動を感じて体を起した。コロツサス達も眠っていたようだが音で起きたようだ。

「いくら何でも騒がしくなりすぎだわ。何起こってんだ上では」

「ジータも来たんじゃないのか?」

「はあ、やつばそれかねえ……」

フィラソピラさんがティアマト達に知らせたとしたらそれも十分考えられる。だとするとこの砦は、あとどれほど持つかわからないな。奴ほど加減を知らん女は、世の中そういない。本人は手加減したつもりでもこんな砦じゃ泥で作られたのかと思うぐらい簡単に崩れかねん。

「しゃーねー皆逃げっぞ。生き埋めになりたくないからな。とりあえず牢屋出よう。その後荷物の場所確認して帝国が島で何してるか調べる。やばそうならそれをぶっ潰す」
「つまり行き当たりばったりって事だな相棒!!」

「何時も通りだな团长」

「イキオイニ（ー、ω、ー）マカセルンダネ」

はい、そう言う言い方しなーい。

「それじゃあ……ふんっ!!」

「ほ、本当に取ったっす……」

手首をクイツと捻ると俺の手を塞いでいたビリビリの枷がバツキリ折れた。ビリツと来たが「ほーん、で？」程度でしたね。もう俺の体普通の人間には、戻れないのかもしれない……。

「それじゃあ私達も……はあっ!」

「オラアツ!」

ゾーイも謎。パワーで枷を吹き飛ばしB・ビイは、マチヨビイになるとやつぱり枷が吹き飛んだ。

「うわ、キモツ!?!」

「ひでえな嬢ちゃん」

そしてB・ビイを見たフアラちゃんがメツチャ引いた。わかるよその気持ち。

「見苦しいものを見せてごめんね。はい、手出して」

「あ、はいっす……ところでアレって」

「気にしちや駄目」

言及するだけ無駄だ。しかも後一回変身を残している事実。多分教えたらフアラちゃんまた本気で引くぞ。

「ふんっ！」

「おわっ」

フアラちゃんの鉄枷も手刀で断つ。

これでここで出来る準備は、終了。後は、牢からおさらばするだけ。

「それじゃあ……出ますかあ」

「けど牢の鍵は、どうやって……」

「こうします……コロッサス頼む」

「カシコマツ（、・ω・）!!」

ここでコロッサス、鉄の扉に手を突き出してドーンッ!!見事に扉だけが吹っ飛んでいった。

「うおおおっ!?!な、なんだあ!?!」

「ドモー(。ゝω。ノ)」

「あつ!!お、お前ら何してっ!!」

見張りの兵が吹き飛んで行つた扉に驚いていたが牢から現れたコロツサスを見て俺達の脱走に慌てて気がつき宝石の様な物を取り出す。それこそ俺の手にはめられていた枷のビリビリを起こすキーでもあつた。

「ば、馬鹿な事を……貴様達大人しくしないとそいつの枷から電流流すぞっ!!」

「枷つてこれ?」

「……あれ?」

俺が壊れて真つ二つの枷を見せると兵隊さんは、ぼかんとしてそれを見た。ちよい火花散つてるけど間違いなく俺の手にはめられていた枷ですね(過去形)。

「あ、それだねえ……」

「ですよね。ごめんなさい壊しちゃつた」

「壊しちゃつたら……しようがないかあ……」

「そう言うわけなんで、ちよつと寝てな兄ちゃん、オラアツ!!」

「ぎゃひんっ!!」

ここでユラリと現れたマチョビイが有無を言わさず兵の兄さんを拳で気絶させた。申し訳ねえ。

「さてと……誰か来る様子も無し、か」

先程から何度も鳴り響く轟音と兵達の慌しい声。他の見張りも居たはずなのだが、気が絶させた奴にこの場を任せて様子を見に行っただのか……よほどの事態らしいな。そちらに気が向いてしまっているようだ。

「……それにしてもこの音……まるで砲撃だぜ。上で何が起こってるんだ？」

ワンテンポ挿み轟音、間、轟音、間、轟音……を繰り返している。助けとは思うのが誰だこんな無茶苦茶な攻撃続けてるやつ。ティアマトか？その内砦が崩れてもおかしくなさそうだぞこれ。

それにもう一つ気になる事。

「さつきから妙に頭ん中でざわついてるだけだ……これ、星晶獣の気配か？」

「そのようだ」

懐かしいと言うかなんとと言うか……ザンクティンゼルに居た頃ティアマト達星晶獣がポンポン現れるたびに感じたあの感覚だ。ティアマト達に関しては、慣れてしまったがこの感じは、初めての奴だ。さつき行き成りボンつと出てきやがったな。

「帝国は、マジで星晶獣捕まえたか……ただこの感じだとほつとくと暴走しかねないぞ」

「つまり島の危機ってやつだな相棒。ゾーイの予感的中だぜ」

「比較的リヴァイアサンに近い力っぽいな……水系かあ厄介だな」

「な、なんか自分の理解が追いつかない状況が続いてるっす」

「ごめんねフアラちゃん。正直説明する暇もないんだよね。しかしリヴァイアサンの奴は、一体何してるんだ……まさかまだバカンスしてるわけじゃないよな？俺たちの状況は、一応以前連絡だけはしたがそれっきりで船にも宿にも戻ってこなかった……まああいつなりに考えてるだろう。(笑)のメンバーだがティアマトよかよっぽど思慮深い奴だし。」

「そうこう言いながら地下牢から砦一階へと続く扉前。」

「出れば何時兵と出くわしても可笑しくないな……」

「フアラちゃんを逃がすにしてもこの状況では、まだ難しいな。一人にしてしまっても危険だし連れていくしかないか。」

「フアラちゃん。俺達の都合で悪いけどもうちょいついて来て。その変わり絶対守るから」

「だ、大丈夫っす！元とは言えこれでも自分帝国兵だったんっすよ！自分の身を守るぐらいいは、問題ないっす！」

「そいつあ頼もしい」

「気合十分だね。しかし今は、コロッサスやパイ、それと武器の取り出しが自由なゾーイを除いて捕まった時俺含め当然武器を没収されている。俺は、無手でも問題無いが」

フアラちゃんは、そうはいかない。基本は、コロツサスに守らせよう。

「じゃあ、それじゃ行くぞー！」

俺が気合を入れて扉を開ける。まずは、星晶獣の気配を辿ろうかと思ったその時である。

「あ、お前達っ!?!」

なんか早速見つかつた。嘘やん。

「あーあー相棒の運の悪さが極まってきてるぜ」

「うるさい」

「あ、ユーリっすよ!?!」

俺達を発見したのは、あのユーリ君の部隊だつた。

「フアラ、お前達どうやって牢を出たんだっ!?!」

「いや、それはその……」

「大尉の予感は、当たつたか……いや、仲間がいる様子は無いな。お前達、油断するなっ！増援が来る事も考えられる！」

「ハッ!!」

「ま、待て待てっ！何もそんな行き成り剣を抜かんでも」

「悪いが話し合う暇はないっ！貴様達を大尉達の元に向かわせるわけにもいかないの

だっ!!」

あーあー皆さん気合十分って感じっすね。この野郎、やるしかねえか。

「今回は、前のような手段が使える!!総員腹をくくれ、相手はあの星晶戦隊(以下略)だっ!!生半可な気持ちでは、死ぬかもしれないぞ」

「サーツッ!イエスツッ!サーツッ!」

サーツッ!イエスツッ!サーツッ!じゃねえよ、誰が殺すか。なんだ死ぬかもしれないって、俺の事を何だと思ってるんだ。どんな扱いだよ。

「行くぞ、総員かか——」

「エリアルクラスターツッ!!」

「ぎゃああああああああっ!!」

……正に今俺達に襲い掛かろうとしていた帝国の部隊だったのだが壁を吹き飛ばして出てきた紫の奔流に飲まれて皆一瞬で更に壁を壊して奥の方へ吹っ飛んだ。

えー?ここは、俺が迎え撃つ場面じゃないのか?「くるぞ、構えろっ!」ぐらいの台詞があつてしかるべきシーンじゃないの?勝手に終わっちゃったよ。しかも今の技あいつじゃん。

「私ノ服ウウウツッ!!」

「おしやけえっ!!」

「お宝本んっ!!」

ほら見ろ、煙が晴れて奥から現れた（笑）筆頭星晶獣ティアマト様のご登場だ。しかも続けて酔いどれと色々拗らせ作家が現れた。

「おーおー何時も通りの展開だぜ」

「うん、団長が居ればこそその展開だな」

「コレナラ（・ω・）アンシンダネ」

何が何時も通りなんだB・ビー。ゾーイ、俺が居ればこそってどう言う意味かな？ コロツサス？何安心してるの？

「あら？団長じゃない」

「あ、本当にや」

「ン？オオ、才前達ココニ居タノカ。自力デ脱出シタンダナ」

そして何だその感動も何も無い感想は、道端で偶然会った感覚かお前等。一応は、捕らわれの身だったんだぞ。

「居たのか、じゃねーよ馬鹿。もうちよつとでお前の攻撃に巻き込まれそうだったわ」

「才前ナラ平気ダロ」

平気なわけあるか馬鹿野郎、こっちはアラちゃんもいるんだぞ。この野郎。後俺でも普通に痛いっつーの。

「普通痛いじゃ済まないと思うっす……」

「こいつもう一般的普通から逸脱してんだ。言ってやらねえでくれお嬢ちゃん」

うるせいやい。しょうがねえだろこいつらの攻撃受けすぎて体が慣れちゃったんだから。あとその原因の一つがお前だと言う事を忘れるなB・ビィ。

「まあ助けに来てくれたようだし感謝するわ。お前等だけ？」

「まさか、全員で来たわ」

「全員……やっぱジータも来たのか？」

「いいえ、だから『全員』よ」

「そりやどう言う……」

「ティアマト殿、もっと慎重にっ！ジータ殿達の陽動が無駄になりますっ!!」

ティアマト達に続いて小さな影が近づいてきた。ティアマトの攻撃でできた瓦礫を上って現れた彼女は、もしや……。

「シャルロットさん？」

「……え？」

王冠を被った小さな聖騎士団長の姿。ここ数日一緒に居たその姿を見間違いは無い。

「あ、ああっ!?ジミー殿っ!」

「だ、団長さんですっ！無事なようですっ!!」

「そのようだね……安心したよ」

彼女だけじゃない、ブリジールさん、コーデリアさん……そして後から俺の仲間達が続く。

帝国相手の喧嘩。俺にとっては、まさかのリュミエール組の参戦だった。

カルナ砦最後の日

一 憧れた姿

シャルロット・フエニヤは、雪降り積もるとある島で生まれ育った。雪が降り積もる事以外は、至つて平凡な島であつた。

一年を通して雪で覆われる村では、外出する機会はそう多くない。仕事で家を出る男衆を除いて殆どの女性には、縫い仕事等の家事を行つていた。そんな島で生まれ育つたシャルロットも他のハーヴィン同様に細かい作業が得意な少女だつた。剣など握つた事も無かつたのだ。そんな彼女がハーヴィン族初のリュミエール聖騎士団の騎士団長と成れたのは、そんな幼い頃の経験が切欠であつた。

村に多くの魔物が出没するようになり多くの住民が怪我をした。だがハーヴィンしかない村では、まともな魔物の撃退を出来るような大人は居なかつたのだ。このままでは、死人も出てしまうだろう。皆が魔物に怯えるしかない時に現れたのは、魔物に怯える住民の事を聞いたリュミエール聖騎士団の騎士達であつた。

彼等は住民達を助けるために雪深き島へと訪れた。現れた騎士達の冴えわたる剣技は、瞬く間に魔物の群れを倒していった。その事に住民皆が感謝した事は、言うまでもない。何かお礼を、そう言う住民の申し出も断った彼らは、「ただ正義を為しただけ故」と言つて去つて行つた。

その姿に幼きシャルロッテは、憧れを抱いた。初めて島を出てみたいと思つた。彼らのような騎士になりたいと本気で思つた。勉強で使つた筆を捨て剣を握つた。

リュミエール聖騎士団へ入つた時、ハーヴィン族である事で笑われる事もあつた。商売の勉強だけをしていればいいと言われる事もあつた。だが彼女は、決して諦めはしなかつた。どんな事を言われようとかまわなかつた。本当に嫌なのは、諦めてしまう事。

彼女をそこまで動かしたのは、リュミエール聖騎士団への憧れだけか。否、それはあの時の騎士達の姿。騎士達の生き様がそうさせた。「正義を為す」と言う言葉が彼女に強い影響を与えたのだ。

だからこそリュミエール聖騎士団のモットー「清く、正しく、高潔に」、その言葉通りにある事が彼女にとっての正義。

故に成つたのだ。誰よりもそのモットーを実践してきたからこそ彼女は、リュミエール聖騎士団、歴代最強にして史上初のハーヴィンの騎士団長に成つたのである。

■ ■ 二 正義の歩み

【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y】と【ジータと愉快な仲間たち団】が共同で団長&荷物の奪還のために動き出した時、コーディリア達リユミエール聖騎士団の者達は、自らの立場故に懊悩していた。

団長が囚われたのは、帝国軍の部隊である。そこからの奪還となると帝国との衝突は、避けられない。ジータに至っては、端から帝国を潰す気である。完全に戦闘態勢だった。

だがシャルロット達リユミエール聖騎士団は、エルステ帝国との関係上今奪還作戦への参加が非常に難しかった。友好関係であるエルステ帝国とリユミエール聖騎士団、しかもその代表たる騎士団長が帝国の軍事基地へ乗り込んだとあっては、大きな問題になる事は明白であった。

更にティアマトに言われた「来ル必要ハ無イ」と言う言葉。悪気があつての言葉ではない。ティアマト達星晶獣五体（捕まったコロツサス、ゾーイ、B・ビイも含め八体）とその仲間、そしてジータ達。果たしてこれ以上の戦力が必要であろうか？誰もが思う事である。何よりリユミエール聖国の事を考えての発言であった。

確かにその通りである。星晶戦隊（以下略）の仲間として行動を共にしたコーディネリアとブリジールは、嫌と言うほどその事がわかる。仮に自分達が団長奪還に参加しなくともテイアマト達は、見事団長を取り戻すだろう。それは間違いないと自信を持っている。

そして、シャルロッテと出会ってから団長が考えていたと言うコーディネリア達の今後について。コーディネリアの目的である「正義審問」は、未だ完了していないが既にその殆どの目的を果たしたコーディネリアとブリジール。団を抜け元の騎士団の一員としての生活に戻るのには、至極当然の事と言えた。それを思えば尚更奪還作戦に参加する意味は無いだろう。

しかし、それでいいのであろうか？

前へも後ろへも進む事の出来ないもどかしさをコーディネリアは感じた。ブリジールも同様の気持ちである。

とるべき行動、言うべき言葉のどちらも見つからない状態が更に続こうとした時彼女達の下へと現れる者達がいた。

「バ、バウタオーダ隊長っ!!」

バウタオーダの名を叫びながらコーディネリア達がいるエンゼラの食堂に駆け込んで来たのは、バウタオーダの部下達であった。

「何事でありますか？」

「シャルロット団長も……これは、丁度いい所へ！エルステ帝国に関して報告がっ！」

「掴めましたか……続けなさい」

「はっ！先程ルネーレ村付近での帝国軍が活動を開始ッ！その後星晶獣と思しきものを捕獲した事が確認されましたっ！現在は撤収作業中、恐らくは拠点へと戻ると思われま
すっ！」

「星晶獣ですか……これは、少々状況が厄介になりますね」

部下達の報告を聞いてパウタオーダは、帝国の行動の速さとその目的であった星晶獣の存在に危機感を覚える。一方でいつの間にか調査されていた帝国軍の動きに関してシャルロットは、驚いた様子であった。

「パウタオーダ殿、彼らに帝国を調査させたのでありますか？」

「昨夜シャルロット団長達と出会った後、帝国軍の事を聞いて私も気になる所がありまして……少し探りを入れておりました。結果は聞いての通りです」

星晶獣。あまりに世俗に染まった星晶獣（笑）達に慣れつつあったコーデリア達であるが、そもそも星晶獣と言う存在とは人知の及ばぬ領域の存在である。間違っても浪費癖の所為で団長に常に怒られる風の化身でも、DMを拗らせすぎればケツを蹴つてもらおうとする光の聖騎士であつたり、謎の空飛ぶ二回変身を残した黒いトカゲの様な存

在ではない。それは、正に神であり島一つ容易く落とせるような存在なのだ。本当である。

その一つが、帝国の手に落ちた。

「さてこれは……どうしたものか」

「バウタオーダ隊長、帝国が星晶獣を保持しているのは、ほぼ間違いありません。今我々の戦力では、手の出しようも……」

「いえ、そもそもこれ以上関わってしまったら帝国とリユミエール聖国との関係をこじれさせる事になります。これ以上の介入は、危険と思われます……」

二人の騎士団員が遠慮がちに話す。彼らの心配は、何も間違つてはいない。軍事大国として急成長したエルステ帝国と事を構えるのは、リユミエール聖国に限らず殆どの国が「如何にも不味い」と断ずる行いである。

「何を迷う必要がありますか？」

だが彼らの言葉に異を唱えたのは、シャルロットだった。

「シヤ、シャルロット団長？」

「今ジミー殿は、帝国に囚われ助けを待っているであります。罪無き者が囚われ、それを探らえた者達は、星晶獣と言う存在まで手に入れ尚も不穏な行動を続けている。放つておくべき事では無いであります」

「し、しかしご存知の通りリュミエール聖国は、帝国とは友好関係にあります。よりにもよってシャルロッテ団長が出られては、どんな混乱が起きるか……」

「ならば自分は、リュミエール聖騎士団を辞めるだけであります」

彼女の言葉に誰もが息を呑んだ。

「な、なにを言うのですかシャルロッテ団長?!」

「自分がリュミエール聖騎士団を辞めてしまえば、自分はただのシャルロッテ・フェニヤであります」

「お待ちくださいシャルロッテ団長!!」

突然のシャルロッテの言葉に狼狽える団員達。コーデリアは、今にも飛び出して行きそうなシャルロッテを止める。

「それはあまりにも軽率つ！誉れあるリュミエール聖騎士団の団長ともあろう方が安易に騎士団を辞めるなどっ!!」

「しかしジミー殿が囚われたのは、他ならぬ自分と行動し弱みを握られたため。あの件が無ければジミー殿は、問題なく逃げたはずであります。囚われた原因を作っておきながら「彼は、団長は、強いから心配ない」など言っている事が出て来ますよるか?」

「そ、それは……」

「とは言え……ティアマト殿が言った事も然り。それにこれは、自分のわがまま。皆は船で待っているように。行くのは自分一人で結構であります」

「そう言う事ではありません！」

「コーデリア殿、リュミエール聖騎士団団長の名……それを捨てる事が簡単ではない事は、無論自分もわかつていいるであります」

しかし、とシャルロットは続ける。

「その名が為すべき正義を阻むのなら……自分は、その名も、リュミエール聖騎士団としての地位も、全て捨てましょう」

正に「まさか」、であった。

この場にいるリュミエール聖騎士団の者達全ては、シャルロットの事をリュミエール聖騎士団の団長としてこれ以上無い人物とと思っている。尊敬している。憧れていると言っても過言では無いだろう。

ブリジールがそうだ。かつてのシャルロットが聖騎士の姿に憧れたようにシャルロットも彼女の憧れとなっている。

そのシャルロットが「まさか」行き成り騎士団長としての立場を全て捨てるなどと言うとは、誰もが予想しなかった。

「そう言うのではないかと思っていました」

ただ一人、バウタオーダを除いて。

「バウタオーダ殿……」

「貴女は、誰よりもリユミエール聖騎士団の正義を信じ実践してみせて来た。だからこそ私は、貴女が騎士団長に相応しいと思った。そして今でも思っているのです」

バウタオーダは、リユミエール聖騎士団の中でシャルロットの右腕とも言っている存在であった。少なくともこの場にいる誰よりもシャルロットの事を知っている。それは、間違いない。

「私も同じ立場、状況でもそうするでしょう」

「バ、バウタオーダ隊長、貴方までそんな……」

「貴方達、何を迷う必要がありますか」

団員達を見るバウタオーダの瞳には、一切の迷いが無かった。疑念も躊躇も無い真直ぐな意思が籠っていた。

「我々は、正義を信じ実践する者。そうであるべき者。我ら誉れ高きリユミエール聖騎士団」

「……清く」

バウタオーダの言葉にコーデリアが続けた。

それは、自然と出て来た言葉だった。そしてその言葉には、まだ続くべき言葉がある。

「た、正しくっ!」

ブリジールが気づき続けた。

もう皆がわかった。思い出したと言わなければならない。最後の言葉は、自分達も言うべき言葉だと。胸を張って言うべき言葉なのだ。

「高潔にっ!」

誰もが声をそろえて叫んだ。リュミエール聖騎士団のモットー「清く、正しく、高潔に」——誰がその言葉を掲げたのか、誰がそうであろうとしたのか、かつてリュミエール聖国を興し正義の騎士団を立ち上げた者達の意志、それがリュミエール聖騎士団にとつての支え。

「たとえ望んで掴んだ地位を辞す事になろうと、最後までそうある事出来ずして、リュミエール聖騎士団の名は語れないであります」

シャルロットの表情は、誰よりも誇り高き騎士のものであった。

■ 三 来ちゃった（テヘペロコッソ）

■ 「まあ、そんなわけで自分もジミー殿救出へと同行したわけであります」

「そんなわけであーた……」

まるで説明になって……ない事はないが、待つてくれ。

マジか、この人俺とコロツサス達助けるために帝国に喧嘩売りに来たのかよ。正気？いや嬉しいよ？けど自力で牢屋から出てしまった手前その……申し訳ねえって言うかさ……よしんば俺がもうちよつと牢屋に居たら颯爽と現れるシャルロットさんって構図が……駄目だあんな状態のティアマトが居るからどの道空気が緩みそうだ。

あ、ダメ……ほんと申し訳ない。

「ほんと……申し訳ない……ごめんなさい」

「そ、そんな床に沈みそうな程謝らないで下さい。自分は何も後悔していないであります」

「コーデリアさんにブリジールさんも……なんかすんません」

「気にしないでくれたまえ、シャルロット団長の言葉で私も決心がついた。そもそも来る事を悩んだ自分が恥ずかしいよ。君への恩義は、計り知れないと言うのに……私はここへ来る事を躊躇ってしまった」

「自分もです……団長さんには、ゴブリンの巢で助けてもらったです。なのに自分は、団長さんを助ける事を悩んでしまいましたです……面目無いです……」

「いやいや躊躇っていいと思うよ。悩んで当然と思うよ。皆めっちゃ努力して入った騎士団じゃんそりや悩むよ。」

「馬鹿。ソウイウ時ハ、謝罪ヨリ言ウベキ言葉ガアルダロ、馬鹿」

な、なんだよティアマトの奴らしくもない正論を……あと馬鹿つて二回言ったね。二回も言うなよ、馬鹿つて言う方が馬鹿なんだからな馬鹿野郎、この野郎。

「助けに来てくれて、ありがとうございます」

実際マジ感謝である。こんな道を歩けば棒に当たってその棒が倒れてトラブルになつて、そこから更にドミノ倒しの如く始まるトラブルばかりに遭う俺のために来てるなんて……。

「今も言ったように気にしないでくれたまえ。私は……私達は、君の騎空団の仲間なのだから」

「ですー」

ほんつ、ほんと……ああ、本当にこの二人仲間になつてくれてよかった。こっちが感謝しても足りないぐらいだ。最早ユグドラシル達だけでは、癒しパワーが不足気味だった中での加入。この二人居なかつたら俺の胃は崩壊の一途を辿ったかもしれない。

「お前らもサンキューな」

「オマエ……」

「団長きゅん」

「団長……」

へへ……なんだかんだで皆来てくれたんだからな。やっぱなんて言うのか仲間って大切じゃん？

「ソレヨリモ私達ノ荷物ハ何処ダツ!？」

「あたしのお酒はっ!？」

「私の本っ!!」

「感動を返せ」

それよりって何だそれよりって！俺の純粋な気持ちを弄んだなっ!?

「ちったーお前ら俺の心配しろよっ!？」

「才前ガソウ簡単ニ死ヌタマカ」

「信頼の証にや」

「で、本はっ!？」

「俺はそろそろ誰か強い奴と語り合いたいぜっ!!」

こ、こいつら……。駄目だ。今の状態のこいつらに期待するだけ無駄だったんだ。

「テイ、ティアマト達は……。ああだけど、ちゃんと……。し、心配は、した……。よ?」

「——!」

一方これですよ。この天使達。天司で無く天使。ユグドラシルなんか頭撫でてくれた。死にそう(歓喜)。

「うひっ！あははっ！も、もちろん私もし、いっ！しん、心配は、し、した……したよ、うはははっ!!」

「ケケケツ！怪我無くて良かったなあ〜団長おっ!!」

「こっちは……真面目なのにキャラが濃すぎる例である。けど感謝。」

「団長……」

「ああ、フィラソピラさん。助け呼んでくれてありがとうございます」

「ううん……一人だけ逃げちゃって、ごめんね団長」

「いいっすよ。助けに来てくれたんだから」

「……あは。無事って信じてたよ」

「どもっす」

実際彼女が居てくれたおかげで、あの時ユーリ君達と無用な戦いを避ける判断を取れた。助けを呼んでくれると俺も信じてたし。何よりも身に覚えはあるが全くの誤解の噂を広められずに済んだのだ。

後でお菓子買ってあげます。

「で、そろそろ俺達も話に入っていいかい、坊主？」

ここで会話のインターセプト、俺達のやり取りを見守り待っていらったオイゲンさんとロゼッタさん。

「すみません、オイゲンさん達もありがとうございます」

「なあに気にすんな。うちの団長の兄貴を助けねえ訳にはいかねえさ」

「それに帝国も放置できないからね」

「まあ、確かに……ジータ達とは、別行動なんですわ」

「嬢ちゃん達には、陽動を頼んだのさ。俺とロゼツタは、別働隊の先導みたいなものだ。俺あウギユステの人間だからな。戦争中もこの砦は、帝国の拠点ってんである程度知ってたんでな」

「成るほど。てか、ジータに陽動ねえ」

「これ以上無い役割だろ？」

間違いないわ。あんな来たら誰だつてそっち注目するからな。案の定殆どの兵がそちらに向かったわけだが。あれの場合陽動&主力&最終兵器と言う最早訳の分からない存在であるがまあいいだろう。

「そう言えばバウタオーダさん達は？」

「バウタオーダ殿には、別の任務を与えたであります。星晶獣が絡んでいる故どの様な被害が出るのかわからない以上は、この砦周辺に島の住民が近づくのを止めるのと安全の確保を頼んだであります」

「あーやっぱ星晶獣来たかあ……」

「今ジータ団長が足止めしてくれているよ」

成るほどね。依然続くこの轟音は、ジータ大暴れの証拠か……よし、そのまま倒していいぞジータ。俺には一切の面倒を残さないでくれ。後腐れなくどうぞ。

「それで坊主達の無事は確認できたわけだが……直ぐにジータと合流するかい？」
「俺が決めていいんすか？」

「かまわないわよ。一番どうすべきか判断できるのは、きつと貴方でしょうから」

そりゃ過大評価つてもんだぜロゼツタさん。だが決めて良いと言うならそうさせてもらおうとしようかな。

「とにかく荷物確保しないとなあ、あいつらが荒れるんでそっち優先します」

「そんな気がしたわ」

本当ならジータの方へ加勢しに行くと言うのが普通と言うか、王道と言うか、なんと言うか……まあ俺以上に「大丈夫だろ」とか言われるような奴だ。むしろ星晶獣の方が哀れだ。ジータ相手って時点でお察し下さいだからな。実はあいつが星晶獣なんじゃないかって思うぞ俺は。

「さてと……そうなるど荷物はどこに保管したかだが」

「おーい相棒、こっち来てみるー！」

どうやって俺達の荷物を探そうか考えてたらB・ビイに呼ばれた。いつの間にかティ

アマトが吹つ飛ばした瓦礫の傍にいる。

「どした？」

「荷物探すには、丁度良い奴がいるぜ！」

そう言うB・ビイの足元には、他の隊員達とは離れた場所で気絶しているユーリ君がいたのであつた。

四 若き義勇の夢

ユーリと言う少年は、熱く真面目で真直ぐな男であつた。その気質は、今は亡き彼の父から受け継いだものだった。

彼の父は、帝国の軍人であつた。男は、真直ぐで正義感に溢れていた。仲間からも「前は、まったく暑苦しい男だ」と言われながらも上司も部下も関係なく男は慕われていた。男の持つ人柄とかつて小国であつたとある国エルステを現在の「エルステ帝国」へと押し上げた軍への熱い思いがそうさせたのだ。

ユーリは、そんな父が誇らしかった。幼心で既にこの父の様になろうと決めていた。誰にでも誇れる帝国軍人、それが小さきユーリの夢だった。

稚児が逞しい少年へと成つた時彼は、迷う事無く帝国軍の門を叩いた。そこで待つて

いたのは、厳しい訓練の連続であった。何度挫折そうになったか分からない。だがその訓練を耐え抜き見事彼は、帝国軍人へと成ったのである。

その事を我が事のように喜んだのは、他ならぬ彼の父であった。

軍への入隊が叶った事を知らせに来たユーリを強く抱き「よくやった」と労った。ただ一言であつたがその言葉を聞いたユーリは、初めて夢を叶えた実感を得た。

そして父は、ユーリへと一振りの剣を渡した。入隊祝いのため父が密かに用意されていたものだった。

剣を扱う帝国兵の殆どが持つそれは、派手さも無く名工による作でも無い平凡な幅広の剣。だがそれは、多くの兵にとつて始まりの剣でもある。扱いやすく最も信頼され激しい戦場を共にする事が出来る剣だ。父もまたこの剣を手にして帝国兵となつたのだ。

重い。手に持ったその剣その物ではない、父より渡されたその想いが剣を通してユーリへと伝わった。それは、あまりにも重かつた。

だが父は、ユーリの震える手を握り共に剣を握った。

「まだお前は、始まつたばかりだ」

帝国軍人となる事がユーリの夢だった。だが帝国軍へ入隊した今その夢は、どうなつたのか？父に言われてユーリは、気がついた。まだ終わっていないのだ。

「夢など一つの通過点でしかない。どんな夢も追い求めれば何時しか叶う。そして人

は、また新たな夢を追う。ユーリ、お前の新しい夢はなんだ？」

ユーリは、父の真直ぐな瞳に負け無い様な真直ぐの瞳を向け返した。

「親父、俺は——」

若きユーリは、父になんと答えたのであろうか。だがこの時の答えを “夢を見る” ユーリが思い出す事は無かった。

「ユーリ、起きるっすっ!!」

「起きろユーリ君っ!!ユーリ君、ユーリくうんっ!!」

「ドケ、手ツ取り早く済マセル」

「あ、ティアマト待っ!!」

「オラアツ!!」

「ぐおおほおおっ!!」

「ユーリイイイツ!!」

「ティアマト馬鹿野郎ツ!!」

「グボツ!?!」

唐突に襲つて来た腹部への衝撃によって、彼は懐かしき夢の続きをこの時見ることは無かったのであった。

五 カルナ砦「早く荷物を探せえーっ！もう、何時崩れるかわからん、間に合わなくなってもしらんぞおーっ!!」

■ 「それで悪いんだけどさ、俺達の荷物の場所教えてくれないかな」

「唐突過ぎるぞお前達っ!?!」

ティアマトの攻撃で吹き飛ばされ気絶し、ティアマトの攻撃で無理やり起こされたユーリ君。俺も同じ様に起こされた事があつたが、彼は普通の人間である。自分で言うのもあれだが、気絶した人間を起こすのに一々腹を殴るな星晶獣（笑）。

「いや本当唐突なの重々承知で頼むよ」

「そんな突然言われて良いと言えるかっ！それと隊長達はどうしたっ!?!」

「あー……あっち?」

俺が指差す方向には、壁ぶち抜いて瓦礫の山になった部屋が続き更にその奥には、ぶっ倒れているユーリ君の仲間達の姿があつた。

「た、隊長っ!?!」

「気絶はしてるけど、大した怪我は無かつたよ……。一応回復魔法もかけておいたからね」

流石に瓦礫に埋もれたままは、いくらなんでも可哀想なので掘り起こしておいた。そ

れでも怪我が無いのは、流石に鍛えている証だな。ユーリ君もほっとしたようだ。

「まあそう時間経たんでも気がつくでしょ。じゃあ俺達の荷物なんだけど場所教えてもらっていいかな？はよししないと何時この砦壊れるかわかったもんじゃないし」

「な、何を言ってるんだお前、そう簡単にこの砦が……」

「星晶獣、見たんでしょ？」

俺が星晶獣と言うフレーズを出すとユーリ君が言葉に詰まった。

「よくまあ使おうと思ったなあ、こんな砦内で……星晶獣からしたら砂の城だよ？」

「それは……」

「まあ俺達も早く荷物回収してそっち解決しちやいたいんだよね」

「ユーリ、私からもお願いするっす」

かつて同僚でもあったファラちゃんにも説得に加わってもらおう。

「ファラお前まで……」

「お兄さん達も荷物を持って帰らないといけないようだし……本当に星晶獣が出てるなら何とかしないとイケないっすよ。あと……」

「あと……」

「正直このままじゃ後ろの人達が、何しでかすかわからないっす……」

そう言うファラちゃんの後ろには、今にもユーリ君から無理やり荷物の場所を聞きだ

そうとする星晶獣（笑）達の姿がっ!!

「オウオウ、マタ痛イ目ミタクナカツタラ荷物ノ場所吐イテモラオウカツ!!」

「あたしのお酒が一本でも割れてたらただじゃおかにやい……!!」

「私の本をこんな海の傍に置いとけないのよ……湿気つちやうでしよっ!!」

「お前中々鍛えてるな……一段落したら語り合わないか!」

「うひひ、ひひっ!!相手が悪かったね……うふっ!しゃ、喋っておいた方が、みの、あははっ!!みのためだとおひひひっ!!」

「おい、ルドミリア。笑うなら銃下ろせ、銃口ブレップレのまま構えんの止めろ。オイラまた撃たれるかと冷や冷やするぜ」

「ケヒヒッ!!壊天刃の錆びになりてえ〜のかあ〜んっ!」

「どうどう皆、落ち着いて」

B・ビイとゾーイが抑えてくれてるが何だこいつ等落ち着き無き過ぎ案件ですよ。特にティアマト、酔いどれ、耽美の三人に至っては、これ以上怒らせるとどうなるか想像も付かない。最悪嵐が起こりゲロが舞い上がり耽美絵師の叫びが響き渡るだろう。地獄かな。

「ちなみに後ろに居る奴らの内八体は、かなりやばい星晶獣だ。恐ろしいだろう?俺も恐ろしい」

「な、なんなんだよお前は……」

「そう聞かれると見たとおりの騎空団としか」

「情報量が多すぎるんだよっ！騎空団を名乗るなら少しは纏まりを持ってよっ！」

ぐうの音もでねえや。

「くそっ……仕方ない……俺は、場所を言うだけだぞ」

「それで十分！」

とにかく今は後ろのあいつ等を大人しくさせたい。その為にはまず荷物だ。なんだか我ながら情けない仲間達だ。

「じゃあ行くぞユーリ君！」

「……はっ？俺も行くのかっ!？」

「君いないと砦内の部屋わからねえもん」

「ああ、それもそうか……ああ、もうわかったよっ!!案内だけだからなっ!!」

嫌々ながら協力してくれる事になったユーリ君。良かったこれで荷物を早く回収できる。

「それじゃあ荷物を回収した後は、速やかにコロツサス達で荷物の運搬を開始。俺とB・ビー、それと戦力が欲しいからゾーイに……後は、戦いたい奴ついて来い。それでジータの方行って星晶獣ボコるぞ」

「星晶獣に対してボコるって言い方初めて聞いたぜ……」

「けど既にジータがそうしてるわよね」

「そーいやそーうだったな……」

オイゲンさんの気持ちもわかるが出来てしまうのだからしょうがない。まあジータがボコボコにして終わってるならそれでいいや、俺が楽になるだけだからね。そしてなるべくそーうなっついていて欲しいと願う。

■ 楽がしたいのだ、俺は。

■ 六 ジータ「レギンレイヴ！」 ポセイドン「ぬおおおっ!!」 カルナ砦「ぐわああ

ああっ!!」

■ 一 瞬可哀想な星晶獣の叫びが聞こえた気がしたが気のせいだろう。そして砦がドンドン崩れ出してるんですが……。

「オイゲンさん……ジータって俺達がここに居るってわかってるんですかね……」

「どうなんだろうなあ……」

あいつこのまま砦壊して俺達生き埋めにするつもりか？それでもジータは、ピンピンしてそうだが……。

「これが『帝国絶対殺すウーマン』……『ザンクティンゼルの悪魔』の力なのか……」
ユーリ君がえらい物騒な名称呟いた。え、何あいつそんな風に呼ばれてんの？ おいおい………凄いな納得だわ。

「ただだけジータが帝国から恐れられてるかわかるなあ」

「悉く帝国ボコボコにしてるからな嬢ちゃんは」

「帝国スレイヤーと呼ばれるのも遠くなさそうねえ」

「お前ら俺が居るんだから、そう言う話しないで欲しいんだがつ!？」

おっと、そう言えばユーリ君は帝国兵だった。ごめんごめん。

「まったく……ほら、着いたぞ。この部屋の中だ」

そしてそうこうしてる間に目当ての部屋へとたどり着く。途中他の帝国兵に出会う事も無く無事たどり着く事が出来た。その点は、ユーリ君が「こんな所下手に誰かに見られては、俺まで脱走兵かと疑われてしまうからな……」と念を入れたようだ。

「おめえさん……もしかしてここは、会議室か何かじゃねえのか？」

たどり着いた扉の前で意外そうにオイゲンさんが話す。確かに倉庫とかそんな感じじゃなかった。

「確かにここは、会議に使われる部屋だ。本来押収した品は、嚴重に保管されるがあの星晶戦隊（以下略）の荷物と言う事で皆で確認する事になってだな」

「まさか荷物の中見たんじやないでしょうねっ!？」

ユーリ君の話した事にぐつと食いついたのは、ルナール先生である。どんな本買ったんだか……まあ、「あんな」本だろうけども。

「い、いや結局作戦が開始されて、確認作業は行われなかったらしい。だから部屋にそのまま置いてある」

「そう……ならいいのよ」

「誰もあたしのお酒飲んで無いよね？」

「誰が飲むか勤務中につ!!」

おうもつと言ってやれユーリ君。そいつ普通に戦闘中にも飲むアル中なんだよ。言っただけ言っただけ。

「ほんと、なん何だよこいつ等は……あ、待てよ……しまった」

「どしたの?」

「そう言えば鍵が閉められてた……」

そりやそうか。会議室と言うなら大事な書類とかあるだろうしな。

「鍵か……誰が持つてるの?」

「隊長や大尉達だが今からでは

「鍵ナンカイラン」

「は？お前ちよつと待」

「フンツ!!」

「ああつ!?!」

ユーリ君が鍵を使って開けようとしてくれたのだがその前にティアマトが力尽くで開けてしまった。無残、扉はそのまま千切れるように外れてしまった。やはり星晶獣、人間と違い華奢な見た目でも力がダンチだ。

「お、お前なんて事するんだっ!?!」

「安心シロ、ドウセ砦ゴト崩レテ無クナル」

「何にも安心できないぞっ!?!」

ごめん、本当ごめんユーリ君。後でなんか奢るから。

「む、アレじゃないか主殿」

シュヴァリエの指差す先には、机と床に詰まれた見覚えのある荷物。

「私ノ服ウーツ!」

「お酒ーツ!」

「本ーツ!!」

「……まああの三人は、放つて置くとして……うん、特に荒らされた感じもないな。うっし、それなら予定通り運び出す。コロツサス、大きい荷物は頼んだ」

「(*・ω・)ゞ カシコマツ!!」

一刻も早くこの場を立ち去らねばならない。さつきから砦の揺れが収まる気配が無いのだ。あのジータと星晶獣が戦ってまだ崩れてないだけでも奇跡的とも言える。

「に、荷物ははははっ!可能なら一まと、まとめにひひっ!!まと、まとめたほうがあはははっ!!」

「はいはい、一つに纏めた方がいいって言いたいのね?」

「そ、そうそうふふっ!!ふっぶうーっ!!」

ルドさん今日も絶好調だなあ……。

「――」

「ユグドラシル?」

「ユグドラシルが荷物をまとめるって言うてるわ。薦で絡ませてまとめるようね」

「――!」

「そりゃいいや。頼むよ」

「――!」

ぴしつと軽い敬礼をするユグドラシル。可愛すぎか。

「ジミー殿、これをつ!」

急にシャルロットさんに呼ばれる。なにやらコーデリアさんと共に机の上の書類を

調べていたらしい。彼女の手には、数枚の書類がある。

「あ、お前達何勝手に書類をつ!!」

「黙ってる小僧」

「んがっ!!」

当然ユーリ君が怒ってしまふ。だがそれをシユヴァリエが、四本の手でガッツリホルドして止めた。

「団長、少し不味いかもしれない」

「何がありましたか?」

「ともかくこれを見て欲しいであります」

「うーん?」

「こ、こらっ!!見るんじゃない、そこまで許したつもりは無いんだぞ!!」

ユーリ君には悪いのだが取りあえず見させてもらう。シャルロットさん達の焦った様子からそれなり以上の内容だろう。

『『星晶獣ポセイドン捕縛作戦書』ね……』

……うん、まあそうだろうとは思ったけどさあ。

「ユーリ君さ……君これ読んだ事あるの?」

「そ、それは本来大尉クラスのみが閲覧できる資料だ。会議で使われたのがそのまま

だったが、そもそも俺の様な兵には配られない重要書類なんだよ」

「じゃあ読んでみ」

「な、何で今……」

「いいか、ほら」

シユヴァリエに押さえられたユーリ君に手に持っていた書類を渡す。開放された彼は、訝しげなままにその書類を受け取り書類を読み始めた。そしてその表情は、見る見るうちに青ざめた。

「坊主どうかしたのかい？」

「今回帝国がどう言う目的だったかわかりましたよ。それとやっぱりヤバイ作戦だったって言うのがね」

「ヤバイ、ねえ……何が書いてあったんだ？」

「今ジータが戦ってる星晶獣、ポセイドンって言うらしいっすけどね……水を司る星晶獣で戦艦の給水器官に使うつもりだったみたいですね」

「あらまあ……星晶獣をなんだと思ってるのかしらね」

言葉に力こもってますねえロゼッタさん。

「そこでそのポセイドンってのが、捕まえるのはともかく……かなあくりそいつプライドが高いってんで怒らせると最悪島が沈むんで、そんな時は放置してさっさと逃げろって

算段みたいですね」

「なるほどな……帝国らしいと言えばらしい作戦だぜ。自分達以外の犠牲を考えちゃいねえ」

「嘘だ……」

オイゲンさんが納得した所でユーリ君が書類を手から落とし呟いた。

「これじゃあ始めから島を犠牲にするような作戦じゃないか……」

「そう言うつもりだったんじゃない?」

「違う、そんな馬鹿な事……」

「なあ坊主……ユーリつつつたか? おめえさん、えらく帝国を信奉してるようだがよ……これが帝国のやり方だよ。前の時もそうさ、リヴァイアサンを暴走させて島の海を腐らせやがった。うちの団長達が来たお陰で被害は、食い止められたがよ……来なきやもつと酷い事になったさ。それこそ島が沈んだらうよ……」

オイゲンさんの話に言葉を失うユーリ君。以前あつたと言うアウギステと帝国の戦争の話は彼も知っていたようだが、そこまでとは思わなかったらしい。

「それじゃあ……俺は、何のために……親父や俺が信じた帝国は……帝国の正義はっ?」

「親父さん?」

「ユーリの親父さんも帝国軍人なんすよ」

「あ、なーる」

フアラちゃん知っていたらしく教えてくれた。だがユーリ君は、暗い表情のままだった。

「……親父は、死んだよ。この前事故でな」

「え？」

「俺も任務中で……突然聞かされたんだ……」

「そ、そうだったんすか……惜しい人を亡くしたつすね……」

「いや、お互い軍人である以上覚悟はしていたさ……その時俺は、親父の分も帝国軍として立派に生きて行くって決めたんだ……だがこれが帝国のやり方なのか?! 親父は、最後まで帝国の正義を信じていたはずだ……それがこんな、ちくしょうっ!! ちくしょうっ!!」

怒りの行き場を求めてユーリ君が机の上の物や床においてある家具を滅茶苦茶に殴りけり飛ばした。彼はかなり帝国を信じていた様子だった。この怒りも尤もだろう。俺も他の皆も止めはしなかった。

「はいユーリ君、その辺でストツプね」

「う、ううっ!!」

「さて星晶獣の方は、ジータが倒しちまってくるといいんだけど……オイゲンさん、

ジータって今まで星晶獣相手だと苦戦ってありました？」

「そうだな……苦戦らしい苦戦はねえが、逃げの一手を取られるとちと苦手な節はあったな」

「最終的には追い詰めて倒すけどね」

まあそんな所か……ポセイドンって奴の強さに関しては、気配から大体察するにガチ本気のやる気MAXマグナ程では無いようだが、中々の強さであるのは間違いない。

「……状況次第では、まだまだ終わりそうも無いな」

「バウタオーダ殿達を住民がいる場所へ待機させて正解でした……。これは、予断を許さない状況であります」

「……ゆるせねえっ!!」

バンツと机を叩く音。まだユーリ君の怒りは収まらないようだ。

「エルステは、腐ってやがる……無関係な人間を巻き込んで、何が正義だっ!!」

「まあ責任者居るわけだから細部は、直接聞いとくのもいいかもな……」

「責任者……そうだ大尉、いやポンメルンツ!!確かめない……ポンメルン、あの野郎っ！どう言う心算でこの作戦を……許せねえっ!!」

「あわわ、ユーリがプツツンしたっす……」

怒れる男ユーリ君。彼の怒りは留まる事を知らず今にも飛び出しそうだ。だがどう

せ目的は一緒になったのだから共に行こうじゃないか。

「そのポンメ？だかつて大尉は、今ジータが戦つてるようだしユーリ君一緒に来るかい？」

「ああ……あの野郎！どんな理由があろうと、一度ぶんぐらねえと俺の気がすまねえっ!!」

「団長、荷物何時でも運び出せるよ」

フィラソピラさんに言われて荷物回収班を見ると、もうバラバラだった荷物が綺麗に一括りに縛られていた。成るほどこれならば、省エネから通常形態に戻ったコロツサス一人で一気に運び出せる。

「ユグドラシルが……薦で縛ってくれたから……か、かなり頑丈になったよ」

「グツジヨブ、ユグドラシルッ！」

「——!!」

「よし、コロツサス達荷物班は、至急碁から脱出して荷物を安全な場所へ置いてからまた合流してくれ。俺とB・ビィ、ゾーイに後戦いたい奴らは、全員着いて来い!!」

「よっしやあつ!!拳が唸るぜえ!!」

「我々も行くでありますっ！」

「よし、行くぞ皆っ!!」

気合十分にティアマトが壊した扉から出ようとす。

が、ここで俺は、異常な既視感を感じる。いや、既視感と言うか確実にこの展開ついさつきやってる。気合十分に扉を出るって言う展開……あ、やばいつて思った時点でもう遅いのが俺の人生。

「レギンレイヴツ!!」

「ぐぬおおおっ!!」

「のぎやああああっ!!」

「ジミー殿おおおーっ!!」

「ジータ、今誰か巻き込んだぞっ!!」

「え、嘘っ!!」

「やべえ、坊主が海に落ちたぞっ!!」

「ああ、ポセイドンが逃げてきますう!!」

突如響いたジータの叫びと同時に壁突き破って俺に突撃してきた褐色の巨体。そのまま巨体とそれを押し出す閃光は、俺を巻き込みそのまま俺ごと岩を崩しながら巨体と俺を海へと吹き飛ばして言った。

俺は海のしよっぱさを初めて知った。

激突だよ全員集合!

■ ■
一 塩辛いのは、涙じゃない。

一瞬途切れた意識を復活させた時最初に感じたのは、口の中に広がる強い塩辛さだった。単純に塩を口に入れたのとは、全く違う多くの物が混じった塩辛さ。それは、俺にとっては初めての経験だった。

目を開くと痛かった。水に包まれる感覚から初めてこれが海だと気がついた。そして滅茶苦茶息が苦しい事にも気がつい——。

「(ジ)ばがばっ!!ばばあーぶばあっはああー……っ!」

自分が窒息寸前であるのに気がついた俺は、大急ぎで水面へと泳ぎ顔を出して息を吸う。酸素を一気に取り込み意識がはつきりしてきた。自分が今海にいてどうしてそうなったかとも思いつく。

(ジ、ジータア……あんのじゃじゃ馬あ!!)

どうせ後先考えず大技を使い続けたんだろう。それに押し出されまくったポセイド

ンが運悪く俺を巻き込みそして吹き飛んだ……そしてボチャンかい。

俺人生初の海がこんな形でいいんですね。本当はバカンスでのんびり泳いだりして体験するはずだった海……俺の海……。

(いや、それよりも皆、シャルロツテさん達はっ！)

自分以外の仲間を心配した途端背後から轟音が鳴り響いた。非常に嫌な予感がしたが恐る恐る振り返る。

そこには、俺とポセイドンを吹き飛ばした時に出来た大穴が原因となり、一気にバランスが崩れたカルナ砦が崩れ落ちる姿がっ！！

「み、みんなぁー……っ!!」

あんまりな一日は、まだまだ終わらない。

■ ニ カルナ砦 「あばよ、ダチ公!!」

■ 無残にも崩れ落ちるカルナ砦。いつの間にか消えたポセイドンも気になるが、それよりもシャルロツテさん達が先だ。大急ぎで海から上がって瓦礫となってしまう砦に向かう。

「シャルロツテさぁーんっ!!? コーデリアさぁーんっ!! ユーリくうーんっ!!」

叫んで呼ぶが返事が無い。ティアマトとかは……まあ間違はなく平気だろうが、他の皆が心配だ。

「居たら返事し、ぶろおばあっ!?!」

「!?!」

瓦礫を掻き分けて探そうと思ったら突如地面が瓦礫ごと盛り上がり出してそのまま俺を吹き飛ばした。顎がクツツいてえ。

「お、相棒無事だったか」

「うぐぐ……おま、B・ビー?」

「おう。ユグドラシル、傍に相棒がいる。気をつけてな」

「!?!」

瓦礫を持ち上げ盛り上がったドーム状の地面、その隙間からB・ビーが顔を除かせていた。何かと思って見たらそれは、ユグドラシルが地面をドーム状にして固めたものだった。

「ユグドラシル……無事だったか、あたたっ」

「!?!」

「いい、いい大丈夫。瓦礫の上じゃ俺が何処かなんてわからなかったら」

ユグドラシルが申し訳なさそうにしているが、これはあまり責められないな。何故な

ら彼女が作ったドームの下には、シャルロツテさんやコーディネリアさん達、そしてジータ達が護られていたのだ。

「兄貴ーっ！」

「おにいちやんっ！」

「ようビィにジータ……」

「ジミー殿無事でありましたかっ！」

「海に吹き飛ばされた時は、どうしようかと思つたが……流石嬢ちゃんの兄貴だな」

まあ溺れかけましたがね。

「まったく、ジータには何時も驚かされる……」

「あれ、先輩？」

「ん？ああ！フアラじゃないかっ!？」

「せ、せんぱーいっ!!会いたかつたつすーっ!!」

そして此方では、謎の感動の再会が……。

「……まあいいや皆無事で何よりって事で」

「オウ、荷物モ無事ダゾ」

「もう荷物は、いいつつーの……怪我とかも無いよね？」

「ええ、咄嗟にユグドラシルが全員護ってくれたわ」

「そのようで……それにしても、まあ……これは、酷い……」

本当に瓦礫の山になった砦。ジータの戦闘開始からあらゆる場所が壊されたのだろう。最後の一撃は、本当に致命的だったようだ。

「流石お兄ちゃんっ! どうなるかと思っただけど無事でよかったあ!」

「よかったあ……じゃねえわ馬鹿野郎このやろうっ! お前はもうちよつと周りを考えて戦いなさいよ!」

「あいたっ!?!」

「おお、拳骨」

「定番ね」

なああくにあっけらかんとしてんだこのじゃじゃ馬はっ!!

「見ろこの惨状をっ!?! ポセイドンは逃げてそして俺を吹き飛ばし、砦は崩壊して俺は吹き飛ばされたっ!!」

「二度言っただな……」

「ええ、二度言っただわ……」

言うとも二度でも三度でも、ラカムさんにイオちゃんよ。

「助けに来てくれたのは感謝するが、助けるはずの俺を海に吹き飛ばすとはどう言うつもりじゃあっ!?!」

「だ、だってお兄ちゃんが何処にいるかなんてわからなかったし！」

「なおの事闇雲に破壊活動するんじゃないやねーっ!!」

「にやああああーっ!?!」

「おお……拳骨ぐりぐり」

「ジータでも流石に痛いようね……」

「嬢ちゃんと坊主の力関係が良くわからねえなあ……」

「単純な力ではジータで、幼馴染、兄妹……まあ家族としての関係は、彼が上と言う事ね」

「なんか懐かしいなあ……ザンクティンゼルじゃあ、日常茶飯事だった光景だぜ」

「これが日常か……大変だったんだな」

「まあな……」

「成敗ツ!!」

「ほぎやつ!?!」

留めに拳のなんか少しでっばてる部分の骨でゴオウリツ!と頭を捻り折檻終わり。

愚か者めが。

「さて……ユーリ君は？」

「ハ、ハ、ハだ」

ユグドラシルに護られた中には、当然ユーリ君もいる。驚いた様子で座り込んだまま

だった。

「あはは……なんてこった、本当に砦が崩れちまった」

「悪かったね。うちのじゃじゃ馬が……」

「……いや、ある意味清々したよ。ここまで派手にやられちゃあな。それにもう俺は……」

「あー………そういやあ帝国兵の奴らは、無事かな」

「帝国兵………そうだ隊長っ!?!」

「あ、やっべ」

まいったな………そういやユーリ君のところの隊長さん放置したままだった。他の帝国兵もこれで放置と言うのも幾らなんでも気の毒だしなあ。救助した方がいいかね。

「だあっ!?!な、何事だこれはっ!」

「し、死ぬかと思っただべっ!?!」

「あ、隊長っ!?!」

「むっ!ユーリかっ!」

とか思ってたら離れた所の瓦礫が崩れて中からユーリ君の隊長さんや他の仲間の帝国兵が現れた。いやそれ以外にも多くの帝国兵達がワラワラと瓦礫から出て来た。

「………帝国兵って丈夫だな」

「なんだか、によきによき生えてくるねえ団長」

「ははっ！はた、畑の野菜みたいひっ！あははっ！」

これなら大丈夫そうかなあと思っている。最後に一人髭の男が瓦礫から出て来た。

「ぜ、ぜーっ！ぜー……っ！ま、まったく……とんでも無い娘ですネエ……っ！」

「ああ、髭の人っ!!」

「髭の人？」

そのまんまじゃねえか。

「この田舎娘っ!!幾らなんでもやりすぎですヨオーツ!!」

「そ、それは……いやそっちが先に星晶獣なんかを使うからいけないんじゃないっ!!」

「だからって自分の仲間も居るのに皆ごと吹き飛ばす奴がいますかあっ!!」

おいジータ、お前今敵にドツ正論言われてるぞ。

「しかもポセイドンには、逃げられて……何時も何時も余計な真似を。しかもアレでは、

魔晶のコントロールも外れたようですしネエ……まったく忌々しい」

「イオちゃん、あの髭って誰？」

「帝国のポンメルンって奴よ。すっごく嫌な奴」

「そこっ！聞こえてますヨオ!?!」

おっと失敗。と言うかコイツだったんかユーリ君の言っていた大尉のポンメって。

「それだけじゃねえぜ兄貴っ!あの野郎がザンクティンゼルでジータを一度殺したんだっ!!」

「……ほう」

それはそれは……。そうでしたか、こいつがねえ、そうですかそうですか。

「おたくがあの時、ザンクティンゼルで暴れた帝国軍の司令官つてわけね」

「ううん?なんですか、貴方は?」

「こいつの兄貴みたいなもの」

「自慢のお兄ちゃんだぞ、このやろーっ!!」

「ふうむ?ああ、そうですか……。貴方があの星晶なんたらとか言うふざけた騎空団の団長ですか」

「ふざけた騎空団の点は否定出来ないのが悔しいが、態々言うなこの野郎」

「ふんっ!そこの田舎娘の兄貴分を気取ってるだけあつてか、礼儀知らずですいぶんと野暮つたい顔の男ですネエ」

「なんだとこのポメポメヒゲ太郎っ!」

「なんでお前が先に怒るのジータ」

「どうどう、落ち着け。はいはい、どうどう。」

「まあ俺の顔はどうでもいいよ。いや、良くはないが……。まあそれで一応は、妹分を一度

は殺してくれちゃったあんたに文句の一つも言いたいわけよ。後そこまで冴えない顔じゃねえよ」

「何を言い出すかと思えば……その娘が死んだのは、我々帝国の研究成果であるその青の小娘を庇い立てたからですネエ。自業自得ですヨオ。文句を言うなら死んでしまう様な事に巻き込んだその小娘と裏切り者に言いなさい」

ポンメは高圧的にルリアちゃんとカタリナさんを指差した。気に食わん奴だなあ。

「そ、そんな」

「気にしないのルリアちゃん。しかし、ポンメこの野郎……」

「ポ、ポンメってこの小僧……っ」

「言うに事欠いて責任を他人に押し付けるとは、しかもこんな小さい子に……恥を知れっ！バーカバーカ！」

「だまらっしやいっ！小さい子だとお？違いますネエ……それは、*“兵器”*ですヨオ！星晶獣を操る術を持つ者がただの人間？馬鹿馬鹿しいっ！島一つ容易く落とせる力を与える存在は、我々帝国が管理すべきなのですネエ！」

「……冗談じゃねえ、ふざけるポンメルンっ！」

ポンメの言葉を聞いて叫んだのは、ユーリ君だった。突然ポンメに対して反発する彼に仲間の帝国兵達が慌てている。

「なんですか? 貴方何処の部隊の者ですっ!」

「馬鹿者っ!?! ユーリ貴様一体何をっ!」

「離してくれ隊長!」

「ユーリッ!?!」

激しい剣幕のユーリを見てただ事ではないと察した隊長が、彼の肩を掴み止めようとするが、彼はそれを振り払いポンメルンへと向かっていく。

「帝国が管理だど? そのためにこの島を危険に曝してそんな事をよくものうのと……ポセイドンの制御が利かなけりやそのまま自分達だけ逃げるつもりだったくせに偉そうにっ!!」

「ユーリ、お前まさか作戦の細部を……」

「正義なんて事を言いながら自分達以外の犠牲を考えちゃいねえっ!! この島の住民が犠牲になってしまうような作戦の何処に正義があるっ!?! 何故だポンメルンツ!! なんてこんな作戦を実行したっ!!」

「貴様……」

仲間達の制止も無視しポンメに詰め寄るユーリ君。怒りを露にしたポンメだったが彼の顔を見て表情が変わった。

「お前あの男の息子ですか……」

「あの男……親父を知ってるのかっ!？」

「成るほど、これは……はーっはっはっ!」

「何がおかしいっ!？」

「これが笑わずに居られますかっ! 貴方は、何も知らない愚か者……誰がこの作戦を考えたかも知らず、よくもまあ私に向かいそこまで咆えるものですネエ?」

「な、なにを……」

「まだわかりませんか? 今回の作戦立案者……」

「ポンメルン大尉っ!?! それは、その事を彼にはっ!!」

ユーリ君の隊長が咄嗟にポンメを止めようとしたがそれを聞き入れずポンメの奴は、言葉を続けた。

「それは、貴方の父親ですネエ」

「……親父が?」

その言葉は、ユーリ君にとってつらい現実だった。

■ 三 ぶれない志

ポンメルンから告げられた言葉にユーリは、その場で立ち尽くした。にわかに信じられなかったのだ。

「親父が？ば、馬鹿を言うな、そんな嘘をつ！」

「グヒヤヒヤヒヤツ！嘘なものですか、真正正銘この作戦の発案者は、貴方の父親ですネエー！」

「嘘だつ！親父がこんな危険な作戦を……」

「ふんつ！確かに……あの男は、ポセイドンの危険性に気がつき途中で作戦の中止を求めましたネエ……」

その場に居たのか、ユーリの父親とは見知った仲だったのか。ポンメルンは、苦々しい表情を浮かべ、その場面を回想した。

「最悪島が崩壊する可能性に気がついたあの男は、直ぐに作戦の中止を求めましたが、しかし相手は、あのフュリアス將軍閣下。あの方が一度決めた作戦を覆す等ありえないのは、奴も知っていたでしょうに……」

「フュリアスだと……」

フュリアス。ハーヴィン族のエルステ帝国の少将である男。

ハーヴィン特有の幼い容姿と裏腹に、その残酷極まりない性格から帝国内でも兵達から恐れられ、彼の怒りを買ひ、あるいは戯れで屠られた者は、身内であつても少なく

い。

「帝国上層部の決定に楯突けば、お終いなんですヨオ。特にあのフュリアス將軍閣下は……私の言葉に聞く耳など持ちませんからネエ」

「まさか、親父は……事故じゃなかったのか、親父は殺されたつて言うのかっ!」

「コホンツ……無駄話は、ここまでですネエ!」

「ぐうっ!」

ユーリ君の問いには、肯定も否定もせずポンメルンは、突如ユーリ君を突き飛ばした。

「貴様っ!」

「小僧、お前はもう立派な反逆者ですネエ! その裏切り者共々始末したいところですが……ポセイドンが我々の制御を離れた今、奴が何をするかはお前の父親が危惧したとおりですネエ?」

「ポセイドンが……まさかっ!」

「船は別の所にありますが無時でも逃げれる状態、我々はさっさと逃げさせてもらいますネエ! お前達、撤収ですネエ!」

「ま、待ちやがれっ!」

逃げようとするポンメルン達、ユーリは他には目もくれずポンメルンに向かい拳を振りかざして殴りかかった。

「この愚か者、ですネエ!!」

「ぐうっ!!」

だが拳がポンメルンに当たる直前、ポンメルンの体から怪しいオーラが立ち込めたかと思うと、ポンメルンはユーリの拳を容易く受け止めて見せた。

それを見たルリアが叫ぶ。

「あれは、魔晶の力っ!」

「いかん、君離れるんだっ!!」

その力に覚えがあつたカタリナ達は、ユーリに向かって叫んだ。ユーリもポンメルンの異常を見て離れようとするが想像以上の力がポンメルンの腕に集まる。握られた自身の拳が動かなかつた。

「やれやれ……原因の一つを作つたのは、お前の父親……それなのにこれ以上私を追いかけて何の意味があると言うのですかねエ?」

「知れた事っ!たとえ親父がこの作戦を考えたとしても、親父は過ちに気づいてそれを止めようとした……っ!!それを知りながらこんな作戦を実行したあんたが許せねえんだよっ!!だから俺が、俺が止めないと駄目なんだ、息子の俺がっ!親父の出来なかつた事をやらないと駄目なんだよっ!」

「青二才がああっ!!」

「ぐおああっ!!」

「ユーリッ?!」

怒りのままにポンメルンが握っていたユーリの拳ごとユーリを持ち上げて放り投げた。そしてポンメルンの身を纏うオーラがより強いものへと変化するとその場には、巨大な鎧に身を包む——あるいは、鎧に取り込まれたかのような姿のポンメルンが居た。その禍々しい姿と力に驚くユーリ。

「死に急ぐとは、本当に救いようのない小僧ですネエ?」

「そ、その姿は……」

「驚いたか、これぞ帝国の魔晶技術力の結晶!ですネエーッ!」

「人の姿をこんな風に変えて……帝国は、何処まで腐ってやがるっ!」

「ばああかあめえっ!!民の犠牲だ親父だと青臭い事を……っ!帝国の正義とは、帝国そのものっ!帝国の繁栄こそが正義ですネエ!」

「それが正義であるものかよっ!」

「黙りなさいっ!小童があっ!!」

「ユーリ危ないっす!」

「ちいつ!?くそ……脚がっ!」

ポンメルンが巨大な武器を持ちユーリへと迫った。逃げようとしたユーリだが、瓦礫

に脚を取られてしまう。

「反逆者には、慈悲など無いっ！ですネエツ!!」

「ぐっ!?!」

ユーリへと凶刃が迫った。最早ここまでかど覚悟を決めるユーリであったがその前に躍り出る小さな影があつた。

「はあっ!」

「むうっ!?!」

ユーリとポンメルン、両者の間にポンメルンの攻撃を遮るように障壁が展開された。ポンメルンの攻撃もそれに弾かれる。鉄を叩いたような強烈な反動を受けて自身も後退する。

「貴様はっ!?!」

「少年、よくぞ言いました」

蒼の剣を握りユーリの前に立っていたのは、シャルロットだった。

■ 四 正義の者達

ポンメルンの攻撃からユーリを護ったシャルロット。攻撃を防いだ障壁も彼女が展

開させたものだった。

「見事です少年、最後までよく正しき事を貫きました。貴殿は、正しく義勇の兵つわものであります」

「シャルロット・フェニヤ、あんた……」

「少年、さあ立ち上がりたまえ」

「脚は大丈夫ですか？フィラソピラさんに治療をしてもらおうです！」

「あんた達……す、すまない」

シャルロットだけではない、コーデリアとブリジールがユーリを護るように集まり彼を立ち上がらせた。シャルロットはそのまま、愛剣クラウ・ソラスを構えた。

「貴様等あ……その鎧リュミエル聖騎士団の者ですネエ？」

「如何にも、自分は誉れ高きリュミエル聖国を建国せしリュミエル聖騎士団、その騎士団長シャルロット・フェニヤであります！」

「騎士団長？まったく何なんですかネエ、田舎娘にその裏切り者、愚か者の周りに羽虫のような鬱陶しく愚か者が集まっただけ……エルステ帝国とリュミエル聖国の関係を知らぬとは言わせませんヨオ!?我々に手を出してどうなるかわかっているのですかっ!?!」

「承知の上でありますっ！我々は、「清く、正しく、高潔に」をモットーとするリュミエー

ル聖騎士団っ！お前達のような正義無き悪を見過ごす事は出来ないでありますっ！」

「ほざけっ！精々私に手を出した事を後悔するがいいっ!!」

次の標的をシャルロツテへと変えてポンメルンが巨大な刃を振りかざした。

「くらええ！」

「なんのっ！」

振り下ろされた巨大な刃は、瓦礫と地面を抉る。強烈な攻撃、しかしシャルロツテは当たたる寸前に素早く体を躲した。

「ちいつ！小娘風情があっ!!」

「小娘と侮ると痛い目を見ますよっ！はああっ!!」

「ぐおおっ!?!」

大振りの攻撃を放ち体勢を戻すのに遅れが出たポンメルンへと、シャルロツテはクラウ・ソラスを振るい蒼い光波を放った。盾で防御したポンメルンであったがその攻撃の勢いに負けて吹き飛ばされた。

「それに、自分は小娘ではありませんっ！自分は、リュミエール聖騎士団団長……」

「お、おのれえ！」

「シャルロツテ・フェニヤ、大人の女性でありますっ!!」

「があああっ!?!」

シャルロットが再びクラウ・ソラスを振るうと凄まじい連激を放った。小さな体から繰り出されているとは思えぬその攻撃に見るもの全てが舌を巻いた。

「つ、つええ……あの王冠の姉ちゃんすげえや」

「リユミエール聖騎士団団長の名は、伊達では無いと言うことか……魔晶で強化されたポンメルンをあそこまで」

あの姿のポンメルンと闘った事があるビー達は、特にその凄さに息を呑んだ。

「いかん、大尉を援護しろっ!」

「おっとそうはいかねえぜっ!」

「うおっ!」

ポンメルンの危機に帝国兵達が武器を手に持つが、四方から銃弾が飛んできて彼らの前進を阻止した。

「悪いが加勢は無理だぜ?」

「撤収って言われたんだから逃げとけよ帝国兵!」

「あははっ!ひ、開けた場所なら……ひひっ!被害は、すくなく済みそうだ……うふふっ!!」

オイゲン、ラカム、そしてルドミアアの三人が帝国兵達に向かって銃口を構えていた。

「やっと語り合えるな帝国兵っ!存分に語り合おうぜえっ!!」

「うおおっ!?!」

そして今度は別方向から雷光を迸らせたフェザーが飛び出し帝国兵へと殴りかかった。そして帝国兵達に向かっていくのは、彼だけではない。

「うえっぷ……お酒は無事だったけど、团长きゅん攫ったのはやつぱ許せないにやあつとー!」

回収した酒を既に飲みだした酔いどれラムレッダ、彼女の酒瓶が鉄兜を凹ませ。

「いよつと……さあ、グルグルつと行くよ、クリユプトンツ」

回転独楽が突き飛ばし。

「さあ、ブリジール! 騎空団での特訓の成果を見せてくれたまえっ!」

「勿論ですっ! とことん張り切るですっ!」

二対の蒼剣が悪を振り払い。

「オラオラア! 全員まとめてえくサヨナラバイバイの時間だあく!」

形を持った残虐の武器が鎧兜を粉碎し。

「甲冑男子……けど、あんた達じゃあ駄目ね。制作意欲がわかないわ」

紙面から溢れる百鬼夜行が兵を呑む。

その猛攻に帝国兵達は、逃げ惑う。

「た、隊長っ!?! こいつら無茶苦茶だべっ!」

「星晶獣じゃない奴も強すぎますっ!!」

「狼狽えるなっ!陣形を整えろっ!隙を作り大尉を援護するんだっ!」

「させねえっ!」

「むっ!?!」

慌てる部下へと指示を出す隊長、その元に切り込んで来たのはユーリだった。だがそれに気が付いた隊長は、素早く剣を抜き攻撃を止めた。

「ユーリかっ!」

「隊長、あんたの相手は俺がするっ!」

「隊長!?!」

「お前達は、大尉を援護するんだ!こっちは俺がやる!」

ユーリの気迫は、並々ならぬものであった。受け止めた剣から隊長は、ユーリのその感情の溢れを感じ取った。それに応えるように剣を構えその切っ先をユーリへと向ける。だが何を思ったのか隊長は、直ぐに構えを解いた。

「……すまなかつたな、ユーリ」

「え?」

不意に隊長は、ユーリに対して詫びの言葉を述べた。反撃が返ってくると思ったユーリは、突然の事に驚く。

「と、突然何をっ!」

「言うべき事を言わねば……お前とは戦えぬと思った」

「言うべき事だど?」

「……あいつの事は、全てを知っていた訳ではない……だが今回の作戦について奴が関わっていたのは、亡くなる少し前本人から聞いていた」

「そ、それじゃあ隊長は……」

「將軍閣下との事は知らんが……あいつが何かに悩んでいた事は、知っていた。聞いても答えなかったが……無理にでも聞き出すべきだった。知っていれば、將軍閣下の元へ向かうのを止めれたはずだった」

「……謝らないで下さい隊長」

辛そうな隊長の言葉を聞き父の姿を思い出すユーリ。

「父は自分の行動に後悔は無かったはずですが……それに隊長に話さなかったのは、最悪の事を考えて巻き込む事を恐れたからのはず」

「そうであろうさ……そう言う奴だ。あの男は……」

「隊長……」

「だが、ユーリッ!」

隊長は、気合を入れなおし剣をユーリへと向けた。

「俺はエルステ帝国部隊長ガルストンツ！俺は依然そうである事を選ぶっ！ユーリ、若きユーリツ！お前は どうするっ!?」

「俺は……俺はっ!!」

ユーリは、隊長ガルストンに応えるように剣を構えた。

「俺は、自分の正しいと思う正義を信じますっ！正義を武器とせず、それを背負い戦うっ！親父がそうであつたように、あんたが教えてくれたようにっ!!だから、俺はあんた達と戦うんだ！親父が信じた帝国が、これ以上悪にならないようにっ!」

「ならばもう言葉は不要っ！来いッ!」

「言われずともおおっ!!」

ぶつかり合うユーリとガルストン。ついに始まった帝国軍VS星晶戦隊（以下略）&ジータ団と言う混沌極まる戦いの場。

「すげえや！兄貴の仲間達も皆つえーじやねえか!」

「はい！皆さん凄いです!」

ビィとルリアが星晶戦隊（以下略）の実力を初めて目の当たりにして、その活躍に興奮し歓声を挙げる。

「よし、私達も加勢だっ！行くぞ!」

「ええ、私達だって負けてられないわっ!」

「やつと先輩に会えたんすから、自分も先輩に良い所みせるつす!」

「悪い子達には、お灸をすえないとね」

自分達も彼等に続けとカタリナ達が飛び出した。それを見てティアマト達が満足げに肯いていた。

「ウム、コノ程度ノ相手ナラ余裕ダロウ」

「だな……つてっ!?お前らは行かねえのかよっ!」

ティアマト始め星晶獣組は、普通にルリア達の傍で観戦していた事に気が付きビイが驚きツツコンだ。

「ソウハ言ウガ、イランダロ」

「うん、これ以上場に入ると収集着かなくなるからな。均衡が崩れる」

「そ、そう言われるとそうだけどう」

「てか、省エネモードでもオイラ達星晶獣7体暴れるとここら辺吹き飛ばせ?」

「――」

「ま、前も……ゴブリンの巢で、は、張り切り過ぎて……巢ごと、吹き飛ばしちやったしね……」

「アノトキハ（・ω・）ゴメンネ」

「主殿の指示も無い、それにお前達も護らねばな」

「あ、ありがとうございます」

そんな具合にマグナシックスによるボディガードがついたルリアとビィ。こんな最強な身辺警護が全空史上あつたであろうか。

一方で人数で勝るにも関わらず形勢が不利となりだした事へ苛立ちを募らせるのは、シャルロットを相手にするポンメルンである。

「お、おのれえ有象無象共めえ……っ!!田舎娘だけでなく、何故こう何時も、何時も、いつもお……っ!!どうして邪魔ばかり入るのですかネエツ!!」

「知れた事!世に悪の栄えた試しなし!それが世の習いでありますっ!」

「キィ……ッ!生意気ですネエツ!!」

更にぶつかり合おうとするポンメルンとシャルロット。この激しい戦い、果たして決着は何時であろうかと言う展開であつたのだが――。

「ジミー殿、ジータ殿今ですっ!!」

「うっしっ!合わせるジータ!」

「りようかーいっ!」

「んなッ!」

シャルロットへと向かつて突進をかけたポンメルンの両脇から隙をついて突如現れた団長とジータ。完全にシャルロットへ気を取られていたポンメルンは、視界外か

ら現れた二人に気が付くのが遅れてしまう。

「ふんッ!」

「おんどりやああつ!」

「げぼらあつ!」

「た、大尉いいーっ!」

凄まじい速度と勢いでポンメルンへと接近した両者は、渾身の力を籠めて肘打ちと拳を叩き込んだ。団長はもとより星晶獣ポセイドンすら圧倒したジータ達両者の攻撃が、ポンメルンを包む鎧をあえて壊さぬように放たれ完全に凹ませた。そしてそのまま内部のポンメルンは押しつぶされ、その衝撃がダイレクトに伝わり大ダメージを食らう。

「た、たた大変だあー!鎧が瓢箪みたいになってるぞっ!」

「大尉の鎧めっちゃくびれとるべっ!」

「あばばば……っ!」

「泡吹いてるうーっ!」

「で、で……deathネエ……」

白目をむいたポンメルン。体を包んでいた鎧も霧となり消えてゆき魔晶の力が途切れた事を示した。慌てた部下達は、戦いの手を止めて急ぎ倒れるポンメルンを回収しに向かう。

「おっしや、一発入れたった」

「いえーい！」

「いえーい」

団長とジータは、見事に攻撃が入り二人仲良くハイタッチを交わした。特に団長は、ジータの仇とあつて満足気だった。

「見たか！お兄ちゃんと私のザンクティンゼルコンビのツープラトン！名付けて「ウルトラダイナマイト超絶すっごいカッコいいスタイリッシュアタック」だっ！」

「ダッサ」

「がーんっ!？」

その実力だけでなく壊滅的なネーミングセンスも披露し団長に辛辣な言葉を貰ったジータ。そして倒れるポンメルンを見てユーリと剣を交えていたガルストンは、引き際を覚った。

「大尉が……これまでだな」

「ま、待てっ!？」

「甘いぞっ！」

「ぐうっ！」

ガルストンは、ユーリの剣を弾くと同時に脚を払い彼の態勢を崩した。尻餅をつき倒

れたユーリから離れて行く。

「ユーリ、今は去らせてもらおう！お前達、撤収だっ！大尉をつれて逃げるぞっ！」

「了解ッ！大尉お気を確かにつ！」

「んごご……この小童どもお……っ！」

「おん？」

部下に回収されたポンメルンは、引きずられるように運ばれていたが僅かに意識を回復させると忌々し気に団長達を睨んだ。

「おいおい、すげえな……あの攻撃食らって意識保てるって……」

「だ、だまらっしや……い……この小僧……！冴えないその顔、覚えました……です、ネエ……あへえ」

「ああ、大尉っ！」

「撤収、撤収だあーっ！」

「あいあい、さいならあゝ」

今度こそ完全に意識を失ったポンメルン。帝国兵達は、ポンメルンを回収し逃げていった。それを呑気に手を振って見送る団長。

こうして帝国との衝突は、両騎空団団長によるツープラトン【ウルトラダイナマイト超絶すっごいスタイリッシュアタック】が決まり手となって終わったのであった。

■ 五 激おこポセポセドン丸 ■

慌しくポンメを回収して逃げて行く帝国兵達。実に見事な逃げっぷりである。

「なーんか、何時も台風みたいな奴等ね……」

「まあ帰ってくれるならそれに越した事ないわね。今重要なのは、逃げたポセイドンの方よ」

俺もイオちゃん達も逃げる帝国兵達を追おうとはせずにその場は見逃した。海へ姿を消したポセイドンの存在も気になるし出来ればそっちを優先したい。

「しかし、ふふふ……聞いたかお前等？」

「なんだよ、相棒？ 気持ちわりい顔して」

「ポンメの奴、俺の顔覚えてたよ。うひひ、初めて言われたかも」

「あーうん、良かったな」

なんだよその哀れんだ目は……。やんのかこら。

しかしまあ、今はポセイドンだな。

「さつき俺諸共海吹き飛ばされたけど……すぐ姿消したな」

「海と同化したようね。水の星晶獣なら当然出来る事だわ」

「ジータの攻撃で既に魔晶の支配から解放されたはずだが……ルリア」

「はい……けど」

ルリアちゃんが意識を集中させる。彼女の不思議パワーでポセイドンの動向を探っているようだ。

「まだすごく怒っている感じがします……それに、私達を……いいえ、ユーリさんを見る？」

「俺を？」

ルリアの言葉を不思議に思うユーリ君。見てる、と言う事は近くにいるのか？確かに気配は感じるが……。

「ルリアちゃん、まだポセイドン近くだよね」

「え、はい遠くには感じないですけど……」

「んー……うん、よし」

手っ取り早く方針を決めたい。これは直で聞く方が良いですねえ。

「おーいポセイドン聞いてるかあーっ！」

「え!？」

海と同化してんなら海に向かって叫べば聞こえんだろ。大声で海へと向かい呼びかける。

「魔晶つてのが壊れたんならもう自由のはずだろー！人間のいざこざ巻き込んで悪かったけどあんまり怒らんでくれーっ！」

とこちらの要望を伝える。すると直ぐに海の水面が波立ち徐々にその水が巨漢の形を成していく。

「あ、ポセイドンですっ！」

「聞こえたぞ、人の子よ」

ほどなくして、俺達の目の前に再び水神ポセイドンがその姿を見せた。

「ああ、聞いてくれたんだ。それで……やっぱ怒ってますかね」

「愚問っ！貴様達は、水神を愚弄したっ！」

いや俺等ってか帝国軍なんですがね……まあそこら辺関係無いか星晶獣には。人間一括り、みんな平等に許さぬ系男子。

「我を支配した穢れた力、先の戦いで既にそれは失われた……しかし水神への愚行、断じて許さぬっ！」

「いやあ勘弁して欲しいなあって……」

「諄いっ！」

うーん、聞く耳持たぬマンだったか……。その怒りは、尤もなのだが正直面倒なタイプの星晶獣だな。喋りも古風だし。

「神は裁くつ！我を愚弄せし者達、この島を奈落へと葬ろうつ！」

「ま、待つてくれ！この島の人達は、関係ないだろうつ！」

ポセイドンの島落とし宣言を聞いてユーリ君が声を荒げる。ポセイドンはと言うと、声を上げたユーリ君をジッと睨みつけた。

「知っているぞ、その身に流れる血を。我を顕現至らしめた者の子よ！その身は、水神の鉢が穿つ！」

「俺の血だつて……まさか、親父の事をつ！そうか、だから俺を……つ！」

水神ポセイドン、恨み忘れず親子末代&人間全部島ごと沈める宣言。帝国が悪いのは変らないが、いくら何でもプライド高すぎるだろ。頭に血が上り過ぎているでしょう。

しかし船の水道に組み込まれそうになったわけだしなあ……ザンクティンゼルの時、リヴァイアサンに洗濯とか流れるプールさせた俺はあんま強く言えないが……。

「神に汚点は無い、神の汚点を知る者は悉く無へ帰す！」

「よせ！親父はもう居ない……だがあんたの恨みは、俺が受け止める！だから無関係の人間を巻き込むのは、やめてくれポセイドン！」

「謝罪だど!?愚行つ！神は裁くのだ！」

ポセイドンの意志は強く怒りボルテージがみるみる上昇していく。それに呼応する

ように周りの海水が騒めき、そのまま先程のポセイドンのように形を成していった。だが今回は、数が多い。それぞれの形は、海に済む魔物の姿をしていた。

「気を付けてくださいっ！ポセイドンの力で海から魔物が生み出されてます」

「チツ！面倒ナ奴」

「下がれ青の少女よ！帝国兵よりも数が多いっ！」

数十体の魔物を生み出すとポセイドンは、また海へと消えていく。

「待てポセイドン！」

「傷ついたこの身は、じきに癒える。その時が屈辱を晴らす時だ……」

「待て！」

ユーリ君が追おうとするが直ぐにポセイドンは、その姿を海へと同化し消してしまふ。こうなると追跡は困難だな。

「ユーリ君、取り合えず魔物倒すぞ！」

「くそ……了解だ」

魔物達の強さは、そう強いわけじゃあない。俺達なら直ぐに終わるが足止めとしては十分な数残していきやがったな。置き土産としては、大盤振る舞いだけぢくしよう。

だが待つてるよポセイドン。アウギユステを沈めさせたりはさせねえ。どうせ沈めるなら、俺のバカンスのためにお前の怒りを鎮めさせてもらうぜ。この野郎。

帝・国・魂

■ 一 来ないぞ、ポセイドン！

「ほれ、水や。飲みや」

「あざっす」

机に置かれたコップに注がれている水を一気にあおる。溺れて多量に飲み込んだ海水で焼けたようになっていた俺の喉が癒されていくのがわかる。

「おかわりお願いします」

「はいはい、ちよつと待つとれ」

「こちら、軽いお食事も用意しておりますので、ご自由にどうぞ」

飲み切ったコップをカルテイラさんがお盆にのせて回収していく。シエロさんまで一口サイズのサンドウィッチやらを用意して机に置いていく。

唐突にカルテイラさんやシエロさんがいるし、しかも場所はアウギユステのビーチにある海の家。

今や見るも無残に崩壊したただの瓦礫の山となったカルナ砦。そこから離れた場所にある観光地「ベネーラ・ビーチ」に建つそれは、シエロさんが最近オープンさせたと言
う。

そして少し前まで帝国と星晶獣ポセイドンとぶつかり合っていた俺達が、ここに居るのは単純な理由。ポセイドン待ちである。

「傷癒えるまでつて……何時だよっ!? じきにとか言ったじゃん、どんだけ時間かかってるんだっ! 砦からビーチまでの移動だつて結構な時間だぞ!? 途中来るか用心してたのにとんだ拍子抜けだよ!」

こんな傷直ぐ治るし、待ってるオラ（意識）と言つて消えたポセイドン。やつの襲来に備えてカルナ砦から移動して、途中バウタオーダさん達とも合流した俺達だが、待てど暮らせど野郎こやしねえ。何でかわからず困っていたら、何処から現れたのかシエロさんとカルテイラさんのお二人。事情を知っていた二人は、一度体を休めろと言つて俺達をこの海の家に連れてきた。

「いやはや〜お元気そうで何よりです〜。帝国に連れてかれたとカルテイラさんから聞いた時は、とつても心配しましたよ〜」

「あ、どうもご心配をかけてしまい……カルテイラさんも俺の場所を皆に教えてくれた
そうで」

「見捨ててもおけんやろ。気になって近くまで来たけど、結局難儀な事になっとるなあ……」

ほんとにね。本当は来て欲しくないけど来なきや困る星晶獣。放っておくと何しでかすかわからんからな。

「これは、奴が想像した以上にジータによる攻撃の傷が深かったようだな」

「ぱぱつと治せよ星晶獣……」

「いやいや主殿、星晶獣とは言え想定以上の深手を負えば立ち直りも遅くなると思うものだ。しかも相手はあのジータ、あいつも耐えたほうだぞ」

「あ、後から来るタイプのこと……痛みだったんだね……うう……」

セレストの例えを聞いて、俺の脳裏にポセイドンが海の底で打ち身に悶える姿が浮かんだ。

「まあふおのほかげで、ふあたし達も休息ふお取れているのだし……はむ、いいじゃないかふあんちよう」

口いつぱいにサンドウィッチを入れたゾーイが話すが、何言ってるかわからん。まず口の中の物を無くしてから喋りなさい。かわいいけど。

「しかしそろそろ来てもおかしくは無い……ルリア」

「はい、ポセイドンの気配は徐々に強くなっています」

ルリアちゃんはそう言うが、流石にそろそろ来てくれないと拍子抜けと言うか、いい加減にしろってなる。

「それで、相棒。實際来たらどう相手するんだ？」

「それな」

正直な話あいつ倒す事は、そう難しい事じゃない。一度直接話してハッキリわかったが。ポセイドンの強さは、決して弱くは無いがマグナガチ勢よりは低い。比較対象がおかしい点に目を瞑ったとしても星晶戦隊動員した場合勝率は、殆ど10割いつてるだろう。

そしてぶつちやけ、ジータ居るし。

だが問題が一つ。

「魔物出し続けてんだよなあ……」

ポセイドンが海に消えて以降海岸から魔物が現れ出した。明らかにポセイドンが生み出した魔物達で一部観光地では、パニックが起こってしまった。ここベネーラビーチもその一つ。一等地であるベネーラビーチに建つシエロさんの海の家に客が俺達以外いないのはそれが理由だった。

直ぐにアウギユステ軍が動き魔物を駆除し住民と観光客は無事であったが、海からはまだまだ魔物が現れている。それらは軍が相手をしているが海から生まれる魔物の数

は無尽蔵と言っていい。何時かはこちらが倒れる。

海の家周辺に現れたのは、俺達で殲滅した。だがこのままでは島中が魔物で溢れちまう。

「思ツタヨリ傷ノ治リ遅クテ焦ツタカ……時間稼ギダナ」

「それに戦う時も魔物を出してくるだろ。ジータや俺達に対して一体で戦うわけねえし。あつちもジータのヤバさは、身に染みて分かつたろうからな」

「ヤバさつてなにさっ!? 失礼な!」

ははは、ほざけ小娘。

「俺ごとポセイドン吹き飛ばしたの忘れんな」

「ふがつ! は、鼻はちゅままないでえ〜!」

星晶獣ごと助けに来た人間巻き込み事故する奴がヤバく無いとはいわせねえからな。

「なんかあんな感じのジータって新鮮」

「俺達じゃああは出来ねえしな」

「オイラは、あつちの方が馴染みあるけどな。ジータの奴普段は無茶苦茶だけど、基本的
に兄貴には頭が上がりねえんだ」

「兄は強いつてか……」

「その兄は、一回ジータに瞬殺されたけどね……」

「イオ、それは言つてやるな」

聞こえてんですけどねえ、ラカムさん……。

「話し戻すけど……魔物の大群が来ると厄介だ。とにかく被害の拡大は避けたいですね。物量で押してくる可能性があるからなあ。なんせ野郎の手駒の元は海水だ。殆どが海のアウギユステじゃあ、この島全部が敵になったようなもんだ」

「となると……魔物の相手をするにしろ、ポセイドンをとつと倒す。これだな」
「まあそうつすね」

オイゲンさんの言うとおり、結局のところポセイドンをいかに早く倒せるかだ。

「ここだけじゃなく島の海岸への住民の接近を防ぎたいな。そこは……シヤルロツテさん」

「はい、それは引き続きバウタオーダ殿に頼みます。バウタオーダ殿？」

「もちろんです。軍と連携し住民、観光客の安全はこちらで護りましょう」

「よし、それならこつちに集中できる……」

戦いの場は、こつちで誘導したい。場所によつては、人口の多い場所への被害をかなり減らせる。幸いポセイドンもこちらを意識している。と言うよりも、ユーリ君という少年をだが。

「てなわけで、ユーリ君」

「なんだ？」

「君には重大な役目を与えよう」

「は？」

「ポセイドンとの決戦。そのとどめは、君に任す」

「……は？」

俺の言葉に固まるユーリ君、そして直ぐに再起動。

「ちよ、ちよつと待て！ あんたは、何でそう突然なんだ！」

「嫌だった？」

「嫌とか以前にそんな簡単に決めていいのか!？」

「簡単じゃないさ、むしろ君が最後やらないとだめなんだよ」

「俺が？」

「星晶獣って面倒な奴らでさ……一回戦うつてなるとまず戦いは避けられない。逃げられないし、面倒だし、痛いし、怖いし、良い事なんてありやしない。けど避けられない以上、そこには何かしら意味がある」

意味の無い星晶獣なんて居ない。あんなふざけたティアマト達も存在する意味がある。理由がある。世を司るモノ、概念その物の存在達。神に等しい彼らと剣を交えると
言う事は、過程はどうあれ相応の理由がある。

……あつたはずなんだよなあ、ザンクティンゼル修行時代。そう思わないとやってられん。

「ぶつちやけ俺とジータならそう難しく無くポセイドンは倒せるよ。けど今回の戦いは、それじゃ意味無い。君達親子とポセイドンの因縁、それを君が断つんだ。それが君にも、ポセイドンにも必要な事だからね」

「あんた……」

「それにポンメに息巻いてたじゃないか、親父さんの出来なかつた事をやらないと、つて
「さ」

「……そう、だよな」

携えたままの剣を握る手に力が入るユーリ君。やる気が伝わるぜ、少年。

「……迷いが消えたよ。俺は、俺の信じる正義をなす。これ以上帝国が悪にならないため」

「そうそう、がんばれ男の子！」

決意を新たにするユーリ君の言葉を聞いて、俺も他の皆も納得したようだ。

「よし、その意気だぜ坊主っ！」

「ユーリだけじゃないっす！ 自分もがんばるっすよ！」

「そうと決まれば行動だ。流石にポセイドンも傷治つたら」

シエロさん達の用意してくれた食事でごっちの体力もかなり回復した。あとは決戦である。あと待たせた事も文句言いたい。

意気揚々と武器を取り海の家を出た。俺は再びここへ戻る。勿論バカンスでだ。今日ですつきり全部片付けて例え一日であろうと俺は遊ぶ、絶対にだ。

ところで……なんか忘れてる気がするんだが、気のせいだろうか？

■ ■
二 いっけなぁーい、遅刻、遅刻う！

ポセイドンとの決戦の地に選んだのは、市街地から離れたとある沿岸部。ここなら星晶獣が暴れても被害が少ない。アウギユステ軍の協力によつて一般人の完全退去が行われ、一等地のベネーラビーチ程で無いにしろ通常なら観光客の姿が見えるこの場所も、すっかり人気がなくなっている。

「おいこら、ポセイドンッ！」

大声で海に向かって呼びかけると海面がざわつき出す。

「来ます！ ポセイドンです！」

ルリアちゃんが叫ぶ。ほどなくしてポセイドンがその巨体を現した。

「待たせるな。水神は既に癒えた」

「待たせるな、じゃねーよ!? こつちが待ったわ! 馬鹿か!」

思わず怒鳴るとポセイDONは、ばつが悪そうに眼をそらした。

「じきに癒えるとか言つて、お前どんだけ時間かかってんだよつ!? そつち海に消えてお前かれこれ3時間だぞつ!? そら癒えるよ3時間も休めば星晶獣!! 夕方じゃねーかもう! あと数時間もすれば夜だわつ!!」

数回時間置いて海に声をかけたが反応が無かつた時は、流石にキレたぞおい。しかも待つてる間も増え続ける魔物の相手もして……この野郎。

「……悪かつた」

「わかればいい」

さすがに悪いと思つたのか、ポセイDONも視線をそらしたままだが謝罪した。こつちも休んだ以上これ以上は言うまい。

「なあ、あいつつて何で星晶獣相手にああも強気にでられるんだ……?」

「相棒は基本的に星晶獣もただの問題児の扱いだからな」

「星晶獣を問題児扱い……」

ラカムさんがB・ビイの説明に呆れている。そうさせたのは、お前達だぞB・ビイ。

「ここで仕切りなおし。」

「で、今も絶賛魔物生み出し中なわけだけでも……まだ怒つてる?」

「愚問、水神の怒りはこの程度では無い」

「ポセイドンツ！」

ユーリ君が前に出てきて叫ぶ。

「今となつては俺もお前も、話し合いで気が済むような話じゃない！ お前の怒り、俺が全部受け止める！ それが俺のやるべき事だ！」

「愚行っ！ 人の子が、水神に敵うと思うか！」

お前ジータ見ても同じ事言えんの？

まあしかし……久々に星晶獣と戦う事になるな。ザンクティンゼルでは、必ずマグナ戦前に逃げ出しては捕まり気絶させられたが今回はそうもいかない。

「裁きの時は今！ 水神が鉾の裁きを受けよっ！」

「きますー！」

ポセイドンが雄叫びを上げると、その身に海水が変化した巨大な海蛇を纏う。そして海面から次々と魔物が溢れ出てくる。かなりの規模、放っておくと数分でミザレアにまで押し寄せるような数だ。このまま物量で押して最後島を沈める気だろう。だがそうはさせせん。

「ひゃっは——っ!! 来たぜ、来たぜ大群だあっ!!」

「ティアマト達は後ろ下がれ！ 魔物を一匹も市街地に向かわせんな！」

「マツタク、星晶獣使イガ荒イ奴ダ」

「いいから働け！ 一々攻撃の規模がデカイお前らと混戦になると、こつちがヤバイんだよー！」

星晶獣と肩を並べて戦うには、何かと慣れと工夫がいる。俺は嫌々慣れてしまったが他の面子に同じ事をやれと言うのは酷だ。かといって星晶獣と言う強力な戦力を使わない手は無いだろう。控えにあいつらが居ると思えば、かなり安心して戦えるしな。

「あとコロツサスは無理すんなよ！ 水系苦手だろー！」

「ゴメン（；・ω・）ミンナガンバツテ」

「大丈夫よ！ コロツサスは、後ろで私の活躍見ててよね！」

「イオチャン（*≧ω≦）ファイトツ!!」

魔物相手なら火属性コロツサスも問題無いんだが戦場が海である以上結構キツイだろう。後方支援の方頼むぜ。

「ルリア、ビィ君も下がっているんだ！」

「は、はいー！」

「私が君達を守るよ」

「パワー特化の実力見せてやるぜ、オリジナル！」

「お、おう……今ばかりはB・ビィのその見た目も頼もしいぜ」

非戦闘員のルリアちゃんとビイは、B・ビイとゾーイが護衛につく。これでまず大丈夫だろう。

「前には俺とジータ、それとシャルロットさんにユーリ君がでる！ それ以外は、援護と魔物の相手をお願いします！」

「任せとけ！ そっちには一体も行かせねえからよ！」

「団長達も、安心して語り合ってこいっ！」

頼もしい言葉だ。俺の後ろには、ジータ団と星晶戦隊（以下略）がいる。思う存分やるでしょう。

「ユグドラシル、頼むぜ」

「――！」

ユグドラシルには、俺達に土の加護を頼む。星晶獣の加護とは、俺達が持つ属性の力を大きく高める事が可能。土を守護するユグドラシルの土の加護は、俺達の土属性をブーストさせる。一人シャルロットさんは、水属性よりなので加護の力は少ないが元の実力が高いから大丈夫だ。

「こ、これは……すげえ、星晶獣の加護ってのはこんなにも力を高めるのか」

見た目には大きな変化はない。だが体に溢れる星晶の力をユーリ君は確実に感じている。

「ユーリ君、ユグドラシルの加護でかなり力が上がってるが過信は禁物だ。そもそも自力のブーストだから超人になったわけじゃないよ」

「わかってる。あんた達の足を引っ張るような事はしないっ!」

「ならOK。シャルロットさんもジータも頼みます。目的は単純、ポセイドンをぶっ飛ばす!」

「了解であります!」

「任せて! ぶっ飛ばすの得意!」

「だろうね。ただ最後とどめは、ユーリ君がやる。俺達はそのお手伝いだ。気合入れてけよ、ユーリ君」

「言われなくても!」

「うっし、なら行くぞ!!」

まずは迫る魔物を蹴散らしてポセイドンに近づく。残りの魔物は皆が相手をしてくれる。

水神の鉢だろうがなんだろうが、そうやすやすと受ける気はないぞ。

■ 三 三者三様、思いは一つ

「シャルロットさん、右から頼みますー！」

「了解であります！」

シャルロット・フェニヤは、共に戦っている男を頼もしく感じた。

自分達の目の前には、褐色の巨人ポセイドンがいる。水の星晶獣、その巨体以上の鉾を持つ水神を前にしても不思議と恐怖は無かった。

リユミール聖騎士団団長としての自身の実力に自信があつた。だがそれ以上に、その男の存在が彼女に恐怖を抱かせなかつた。

大した装備がある訳では無い。軽装の安い鎧に、シエロカルテが用意してくれた土属性の剣一本。それだけが彼の武器だ。

にもかかわらず、彼は見事にポセイドンと渡り合っている。鉾より放たれる雷撃もものともせずに戦い立ち向かう。

一方で口では「ふざけんな」「いい加減にしろ」「殺す気か」と文句を叫び続けている。彼と出会ってまだ一週間も経っていない。だがあまりにも彼らしいと思つた。その短い期間でも、その愉快な男の人となりを知るには十分すぎた。まさか星晶獣を相手にしている中でこんな事を思うとは考えもしなかつた。

島の危機、そんな中でも星晶戦隊（以下略）団長は、何も変わらないままだつた。ただいつも通り文句を言いながら、自分がやるべき事を為す。きつと正義や悪など考えて

はいない。彼はただやるべきと思つた事をしている。そして、それは正しき事なのだ。「やはり、ジミー殿は心強いであります！」

「そうですかい、つと！」

共に戦つて気持ちのいい人物だった。この戦いを終えたなら、リュミエール聖騎士団へまた誘おう。シャルロツテ・フェニヤは強く思った。

「ユーリ君、避けろっ！」

「うおっ!？」

ポセイドンがその切っ先に雷撃を纏わせ、巨大な鉾をユーリ達へと向け放つ。団長に言われて咄嗟に迫る鉾から距離を取る。

「油断しちゃだめだ！　いくら加護あつても、直撃受ければただじゃ済まないぞ！」

「す、すまない」

「動きをよく見るんだ！　威力は凄まじいが野郎は基本大振りの攻撃だ！　よく見ているらば避ける事は難しくない！」

「わ、わかつた！」

ユーリは、少し前まで敵であつた男に強い畏怖の念を持った。

星晶獣ポセイドンを相手にまるで怯む様子も無く男は立ち向かう。また共に戦うジータも異常な強さを発揮しているが、彼もまた人間としての強さを超えているとしか

思えなかった。

言うなれば、星晶獣——人ならざる者に対しての戦闘プロフェツショナル。通常人間が星晶獣に対してまともに戦おうなどと思ひもしない。帝国の様に訓練を積んで装備を整えた部隊が揃つて初めて對抗できるかどうかなのだ。だが男は、星晶戦隊（以下略）団長は、それを殆ど個人でやれる実力があるのだ。

同時に星晶獣との戦いに慣れていない自分を上手くカバーしている事にも気が付いていた。自分一人では例えユグドラシルの加護があつたとしても、とてもここまで戦う事は出来なかつたらう。

「親父の資料に奴は津波も起こせるとあつた！ 注意してくれ！」

「了解っ！」

ポセイドンを相手にしながらも、ユーリは一人の戦士として今ここで彼と共に戦える事を誇りに思つた。

「ジータ、加減間違えて島壊すなよ！」

「そこまでやらないよっ!？」

ジータは失礼な事を言う兄へ憤慨した。

思えば自分が兄と慕う男は、何かと自分へ失礼な事を平気で言う男だと思つた。

確かに自分はちよつと手加減が苦手で周りからは無茶するなど文句を言われる。兄

にも昔から怒られる。だが島を壊すほどの事をうっかりやりはしない。精々数キロメートル地面を抉り吹き飛ばす程度だとジータは考える。

とは言え、今は初めて兄と肩を並べて戦っている事への喜びが強かった。

幼少の頃から団長は、ジータの事を実の妹の様に可愛がった。『実の』と言う所にジータとしては若干の不満があるのだが、今は横に置くべき悩みである。

ともあれ姿をくらました両親に代わって世話を焼いてくれた兄へ感謝と愛情、あらゆる念を覚える。そんなジータだがやはり空に旅立つ時には、果たして彼を旅へと誘うべきか悩んだ。勿論本心は共にについて来て欲しかった。隣に彼がいらないと言う事が怖くもあつたのだ。

未だ両親が帰らぬ彼女にとつて、家族はビイと彼だけだった。父が自分の前から姿を消したように、自分も兄から離れる事が辛かった。しかし旅立ちの前夜、夢の中嘗て交わした約束を思い出す。

どちらが先にイスタルシアへ着くか。幼い約束は、その時になって遂に意味を持つた。

次の日、「イスタルシアへ行く」と宣言して彼女はルリア達と共に旅立った。長い空の旅の中、また会う事を信じて。

流星に数か月経ってから、自分達に負けず劣らず無茶苦茶な騎空団を立ち上げた兄と

あんな状況で再会するとは彼女も思いもしなかった事であったが、旅の間に募らせた兄への想いを大いに発散させる事が出来た。

「ちゃんと言う事聞けよ！ 頼りにしてんだからな！」

「こつちだつて、頼りにしてる！」

いつか見た共に空を行く姿。それを今重ねて兄と共に戦う。

■ ■
四 誰か忘れてませんか？

今の所悪くない流れだ。

ポセイドンの強さは、こちらが予想した通りだ。やはり同じ水系でもマジのリヴァイアサンマグナ程強く無い。とは言っても島を落とせる程の星晶獣、油断すれば此方も痛い目を見るだろう。ともかく後は上手く立ち回り続ければユーリ君が居ても問題は無いだろう。

「愚行っ！ 水神の力、この程度と思うかっ！」

と、思った途端にこれかよ！ やはり星晶獣、生半可な攻撃じゃ怯まないか。

「刮目せよ！ 水神たる我が怒り！ 我が力を！」

「ジミー殿、ご注意を！ ポセイドンの様子が変わりました！」

「集合、集合！ ユーリ君、ジータシャルロットさんの後ろに来いっ！」

ポセイドン周りの海面が勢いを増して盛り上がってきた。これはかなりデカイ攻撃が来るに違いない。

俺もユーリ君達もシャルロットさんの下に集まり防御体勢に入る。

「頼みますシャルロットさん！」

「了解であります！ しかし完璧には防ぎ切れません、余波にご注意をつ！」

「了解した！」

100%攻撃を防げる等早々やれる事ではない。例え半分でも星晶獣が放つ攻撃の勢いを削つてくれるなら十分過ぎる。

「受けよ、水神が力の奔流を！ 水底で、己の愚行を悔いるがいい！」

ポセイドンが咆えると盛り上がっていた海面がうねりを上げ津波へと変化する。そして一気に此方へと大きな津波が押し寄せてきた。

「いかん、これはきつそうだ」

波がでかすぎる。俺達が助かってても他の奴らが流されるだけじゃなく、最悪波が近くの市街地にまで届いてしまう。

「どうするんだ!？」

「障壁で勢い抑えられても残りが怖い……シャルロットさんで半分、俺とジータで半分

「やるぞー！」

「おっしやあー！」

「シャルロットさんは、そのまま障壁頼みます！」

「はい！ ケーニヒシルト!!」

シャルロットさんが左手を突き出すとその前方に蒼の障壁が張られる。それは魔晶とやらで強化したポンメの攻撃も防げる強度を誇る。

そして展開された障壁に向けて一気に津波が突撃した。

「くっ！ これは……想像以上に、重いっ！」

「俺が支える！」

「た、助かりますー！」

ポセイドンの生み出す津波に障壁ごと後ろへと押されるシャルロットさん。それをユーリ君がどっしりと構えて後ろから支える。ユグドラシルの加護を受けた今の彼ならば、それぐらいの事は出きる。

「いいぞユーリ君、ちよつとの辛抱だ！ 構えろジータ、重ねて行くぞー！」

「あいさー！」

「俺に合わせる、どっちかが強すぎても弱すぎても駄目だからな！」

「それってどのくらい？」

「六割半つ！」

「了解！」

まだまだ津波の勢いは強い。波は今障壁で二つに割れ出している。だがそれを全部吹き飛ばす。

「ドライブツ！」

「バーストオオツ！」

エッジ部分では無く、剣の腹ですくい上げるように剣圧を飛ばす。上手く俺とジータの剣圧が同調したらしい、二つ同時の剣圧が互いに真直ぐ前方へと進み波を巻き込み吹き飛ばしていく。

「なっ!? うぐおお——っ!？」

そしてそのまま波と一緒にポセイドンへと直撃。ポセイドンを後方へと吹き飛ばした。

「す、すげえ……全部吹き飛ばしちまった」

「ふう……ジミー殿、ジータ殿流石であります」

「シャルロットさんにユーリ君もありがとうね。上手く行って良かったよ。ちよい加減ずれると波の方向が変わるだけで海に戻らねえからな」

どうしても押し返した波の反動があるが海岸までも行かないだろう。あのまま押し

寄せられるよりは遥かにいい。

「ほらほら、ちゃんと私も加減できたし！」

「はいはい」

「プー！ ちゃんと褒めてっ！」

「まだそう言う状況じゃないの」

「じゃあ、ポセイドンは……」

「まだまだ。ユーリ君、星晶獣はしぶといんだぜ？」

「オオオオオオツ!!」

「………ね？」

吹き飛ばされたポセイドン、カルナ砦の時と違い今度は即立ち上がる。ダメージは与えたがまだまだ動けるようだ。いかにも偉丈夫な見た目どおりかなり打たれ強いな。

「愚行を………我は、退かぬ！」

「だろうね………皆、気合入れ直してけ。星晶獣との戦いは、相手が倒れる寸前が怖いんだ」

「あんた、流石に慣れてるな」

「真に遺憾ながらな」

星晶獣8体と戦いもすれば慣れざるをえないよそりやあね。

「例え私の鋒を払い、波を砕こうとわが身は不滅！ 裁きは下す！」

「怒りは尤もだが、その矛先つてもんを考えろ！ アウギユステの人達は関係無いってのー！」

「水神の怒り、神の神罰！ それは人の子全てに下す！ 神は裁くのだ！」

「だーめだ……いよいよ頭に血が上りすぎてる」

問答で如何にか出来るとは勿論思っちゃ無いが頑固な事だ。

「体力は削れてる。隙が出来たら全員で大技叩き込む……それで決めれるはずだ」

「となると、ポセイドンへ接近する事になるぞ。大丈夫なのか？」

「簡単とは言えないけどね。そこはまあ……気合だよ」

「急に根性論かよ……」

「そうなつて来るんだよ、星晶獣との戦いつて……あーめんどくさ」

下手すると運要素もあつて、マジどうしようもない時もあるんだからな。気合でどうにかなる余地があるだけまだマシだ。

「オオッ！」

「うおつと、やばっ!? 何かしてくるぞっ！」

「全員、息の根を止めてくれよう！」

「ちよ、ガボッ!？」

「ジミーど、ウゴボボツ?!」

ポセイドンが鉾を振るうと突如俺達の足下の海面が膨らみ全身を包み込んだ。急な事に俺もシャルロットさん達も対応できず包み込まれてしまった。

(これは、ちよつと……やばいつ!)

これはただの水じゃない。異常な弾力のある水球は、いくもがいても水をかくのみで意味が無く脱出が出来ない。物理的な水では無く星晶獣の力で生み出された特殊な水の牢獄か。剣を振るっても同様で、中身がかき回されるだけ。さっきの様に吹き飛ばす事が出来ない。

シャルロットさんとユーリ君も息ができずもがいている。

「ンガアババツ!! アツババツ!! ボツババ、バベエエツ!!」

……ジータは狂ったように暴れているが意味が無いようだ。物理的な手段での解除が出来ないじゃないか……。

「最早容赦せぬ! 貴様等もろとも、島を葬ってくれるっ!」

そしてポセイドンの野郎はなんか鉾に力込め出してるしいつ! 島もろともとか言ってるしいつ!! と言うか、容赦なんて最初からなかったでしょ!!

ヤ、ヤバイ……! 体が自由なら防げ無い事も無いが、このままだと島がヤバイ!

全部が崩壊しないとしても、この一帯が吹き飛んでしまう。そうなったらいくらジータ

が居てもどうしようもない！

「人の子等に裁きをつ！」

「アツ（。ω。）タイヘンダツ!!」

俺達のピンチにコロツサス達が気が付き駆け出した。だが距離が遠い、このままでは間に合わない。

「おいおい、あれヤベエンじゃねえのか!？」

「……イヤ、大丈夫だ。アレヲ見ロ」

ポセイドンが完全に鉾をこちらに向けて投げる直前、海面下に巨大な姿が見えた。巨人ポセイドンよりも遥かに巨大なそれは、見覚えがあった。

「その身を穿つ！ 食らうがいいっ！」

『ガアアアアアアアツ!!』

「なっ!？」

まさにポセイドンが鉾を投げようとした瞬間、海中から突如巨大な物体がその身を現しポセイドンの身体へとグルグルと巻き付いて行った。そしてそんな事が出来るのは、アイツしかない。

「ぬうっ!？」

『小童が……我が守護するアウギユステ、みすみす墮とさせると思うか?』

威風堂々、威厳たっぷりにはポセイドンに言い放つのは、我が団星晶獣（笑）第二位リヴァイアサン・マグナだった。

……ただお前、なんか赤くね？

五 赤いギャラ〇スの類似品

超ひつさびさに姿を見せたリヴァイアサン。かなりピンチのタイミングで現れてポセイドンの動きを封じてくれた。そして何故か奴の身体が異様に赤い。殆ど朱色だった。夕日が原因では無いだろう。

「貴様、リヴァイアサンか……っ!？」

『如何にも、我も貴様を知っている。同じ島、水の星晶獣ポセイドン。尤も姿を互いに姿を見せたのは初めてか』

マグナ形態のリヴァイアサンの力は、例えばポセイドン程の大星晶獣であってもそう簡単に破れない。銚こそ手放していないが奴の身体のきしむ音がここまで聞こえる。

「ボボバ、ガババツ!!」

だがそれよりもこっちを助けて欲しい。俺だけでなくユーリ君達も窒息しそうなのだ。

『暴れるな、今開放してやる』

「ガバ……ッ!？」

水球の中でもがいていたら更にもう一体のリヴァイアサンが目の前にあらわれた。こちらは、この島のリヴァイアサンか。

『ふんっ!』

「ごはあ……っ! ぜーっ! あ、くっそ鼻に……水が……」

「ぶはあっ!!」

「げほ、げほ……っ!」

「あだあっ!」

リヴァイアサンが唸ると俺達を包んでいた水がはじけ飛んだ。飲んでしまった水を吐き出し必死に空気を吸う俺達。一人暴れ続けてたジータが解放されたのと同時に地面に叩きつけられていた。

「た、助かりました……」

「まったくだ……ありがとよ、リヴァイアサン。ただ来るの遅いぜ」

『すまぬ。だがこつちも何かとあつてな……先日海であちらの我と休んでいたら、何故か間欠泉が吹き出し大変だったのだ。我は大丈夫だったが、あちらの方は全身に熱湯を浴びてしまつてな……動くに動けなんだ』

「……もしかしてあいつの体のが赤いのって」

『うむ』

問 欠泉って……アウギユステでそんな場所あるのか？ そんな異常な事早々起きるはず……。

「あ」

「げほ、げほ……え、なにお兄ちゃん？」

あ、あん時か!? ラブホ事件!? あり得る、ジータのアレの所為なら十分に可能性がある……っ！

『敏感肌に熱湯直撃で死ぬかと思ったぞ……おかげで未だにヒリヒリして、私の身体が火照りが取れぬわあっ！』

「な、なにをおおっ!？」

なんかウチのリヴァイアサンがポセイドン締め付けながら吠えてる。

熱湯浴びて赤い体のリヴァイアサン。こんな事ってある……？

「褐色マツチヨの星晶獣が海辺でがんじがらめ……ふむ」

「ル、ルナル先生……インスピレーションが……」

「……後でじっくり考えましょう!」

「うん……!」

……あの二人、たぶんろくでも無い世話してるな。距離あるから聞こえないけど。

『人に利用された怒りは我もわかる。だがこの島を沈めさせるわけにはいかぬな』

「リヴァイアサン！ 貴様ほどの星晶獣が人に服従するかっ！」

『服従ではない、彼らは仲間だ。そしてここは私の故郷。そして愛しき者達の住処。護る理由は充分だ。貴様も水神を名乗るならば少しは慈悲を持って、貴様を汚した罪人はこ

こにはおらぬ』

「愚行っ！ 神の怒りは無慈悲！ リヴァイアサン、たとえ貴様相手でも我は引かぬっ
！」

『ぬうっ！』

ポセイドンが手に持ったままだった鉾に雷を纏わせリヴァイアサンの顎へと突き出す。咄嗟にそれを避けたリヴァイアサンだがその際体が緩みポセイドンが抜け出した。

『顕現間もない小童が……』

「おい、リヴァイアサン！」

『すまん、放してしまつた』

「いやそれはいいよ。ただもう時間をかける気も無い。野郎に一気に接近してトドメを入れたい……頼めるか？」

『容易い事よ……』

「させぬっ！」

ポセイドンが俺達の行動を阻止しようと再び鉾を構えたが、リヴァイアサンが余裕の態度のまま鼻で笑ってた。

『ふん……ついでに見せてやろう。我の新しき力をな』

「は？」

『カアアアアツ!!』

なんかリヴァイアサンが吠えたかと思うと、ポセイドンの周りに幾つもの水柱が立ちだした。

……てか、熱っ!? ここまで熱いつ!? 何これ、熱湯じゃねーか!?

「オオオツ!? こ、これは……ぐああっ!?!」

『体の色が変わっただけと思っただか? 偶然だが我に“熱”の力が新たに宿った……炎は無理だが熱だけならばコロツサスにも負けぬ。例えポセイドンでも、四方から熱湯を浴びせられては苦しかりう?』

割とえげつない事するなコイツ……。そして熱湯を浴びて熱湯を操る術を得たとか無茶苦茶だなお前。

「だがチャンスだ! 奴の動きが止まった。頼むぞリヴァイアサンズ!」

『一纏めか……まあいい、行くぞ!』

『我らの波を堪能しろ』

リヴァイアサン達が力を籠めると俺達の立つ浅瀬に水が集まり一気にポセイドンまで筋の様に四つの水流が放たれた。

「ジミー殿これは？」

「速攻でポセイドンに近づける……最高速の水の道！ 乗りますよシャルロットさん、

ユーリ君、ジータ！」

「こ、これに乗るってのか!?!」

リヴァイアサン達に制御されている波の道、強い水流の勢いにユーリ君が多少怖気づいてしまう。

『安心しろ、沈まぬように我らが運んでやる。お前達の動きに合わせる』

「うだうだしてる暇も無い、まあやらなきや俺が倒しちゃうけど?」

「……誰がやらないって言ったよ!」

発破をかけたら闘志をむき出しに乗り出す。若いって素晴らしい。

「シャルロットさんも」

「何時でも! 星晶獣との戦い、元より無茶など承知の上であります!」

「ジータは……聞くまでもねえか」

「何でも来い!」

ならばやる事は一つ、迷う暇なし！

「行くぞおっ！」

俺が最初に水流へと飛び乗った。普通なら沈むはずだがリヴァイアサンの力を受けて水の中に体が沈む事なく俺はそのまま水流の上を滑るように移動した。そして次々ユーリ君達も飛び乗る。

「おつとと、乗れたであります……！」

「全員準備はOKか！」

「問題無いっ！」

「全員全力全開だっ！ ユグドラシルの加護の力出し切るぞ！」

「りようかーい！」

走るより遥かに早い速度でポセイドンへと接近する。向こうもそれに気が付き熱湯で焼かれた体を何とか動かし鉾を握る。

「まだ……まだだっ！ まだ我は倒れぬっ！」

「いいや、倒すね！ 俺達がな！」

鉾を突き出せば届く距離、ポセイドンが俺に向かって鉾を突き刺して来たが、俺を運ぶ水流は生き物のように動きそれを避けた。そしてそのままポセイドンの右側へと回り込む。

「最初は俺だっ！」

戦っている最中に奥義を放つための力は十分に溜まった。後はそれを立て続けに放つのみ。

「くらえや、渾身の地烈斬!!」

「ぐううっ!?!」

大地を割く程の力を込めた斬撃、これでポセイドンの脚を完全に止める。膝はつかないがグツと奴の体を揺らしバランスを崩せた。

俺はそのままポセイドンから離れるが、間を置かずに俺が乗った水流とすれ違うのはシャルロットさんを乗せた水流だ。

「二番手は自分が!」

「頼みます!」

バトンタツチ!

「小癩……っ!」

「星晶獣ポセイドン、貴方の怒りを罪なき民達に向けさせるわけにはいきません!」

「人の子が、水神に意見を……っ!」

ポセイドンが怒りを込め鉾でシャルロットさんを薙ぎ払おうとする。だが自分が鉾が当たる直前に左手のバックラー自体に障壁を纏わせ瞬間的に巨大な盾を作り出す。

「ケーニヒシルト！」

「ぬぐうツ!？」

流星に体格差があり打ち弾く事は出来ないが、迫る鋒の勢いを利用し障壁にぶつける
と巧みに別方向へと“流し”てみせた。十分凄すぎる技術と度胸だ。

「剣の誓いを今こそ！ ノーブル・エクスキューション！」

「ガアアツ!？」

攻撃を逸らされ隙が生まれたポセイドンの胴体に向かい、青色の閃光がシャルロツテ
さんの愛剣、リュミエール聖騎士団団長の証であるクラウ・ソラスより凄まじい勢いで
放たれた。直撃を受けてたまらずポセイドンも仰け反りもだえる。

「次、ジータ殿！」

「まっかせてっ！」

また更にシャルロツテさんの水流とジータの水流がすれ違いバトンタッチ。手に握
る剣に並々ならぬ力を込めたジータがポセイドンの後方から迫る。

「き、貴様等あ……っ!!」

「喧嘩する相手間違えちゃだめだよポセイドン！ そう言うの八つ当たりって言うんだ
からね！」

「愚行……！ 水神を侮辱するか！」

「これはお説教って言うの！　星晶獣だからって容赦しないから！　頭冷やしなさい、レギンレイブ！」

「ガハ………ツ!?!」

背中へ強烈な一撃を食らいエビ反りになるポセイドン。その顔は空を仰ぐ形になる。そしてポセイドンは視線の先に自身の頭上を行く一筋の水流を見た。

「最後だ！　バツチリ決めろユーリ君っ！」

「任せろおおっ!!」

俺の声に伝えてユーリ君が水流から飛び降りポセイドンへとむかいダイブする。全身に土属性のオーラを纏いユグドラシルの加護の力を最大まで高めている。

「貴様あ………っ!!」

「ポセイドンツ!!」

ユーリ君から溢れる力を感じてついにポセイドンが両手で鉾を持ち横に構え咄嗟に防御の体勢をとった。だがユーリ君はそれにかまわず自由落下の速度でポセイドンへと迫って行った。

「ユーリ殿！　貴殿の想いを乗せてっ！」

「ユーリ君！　迷わずぶかませえっ！」

「そうだユーリ君、やっちまえええっ!!」

シャルロットさん、ジータ、そして俺も叫んだ。

これが最後の攻撃。

この戦いは彼によつて終わらせる。

六 絆

「まだお前は、始まったばかりだ」

帝国軍へと見事入る事が出来た時、父と夢を語り合つた時の言葉。

ユーリはまるで走馬灯の様にその時の言葉を思い出していた。

憧れの父の姿、帝国軍人、それとなる事がユーリの夢だった。だが帝国軍へ入隊した今その夢は終えた。

では、今は――。

「夢など一つの通過点でしかない。どんな夢も追い求めれば何時しか叶う。そして人は、また新たな夢を追う。ユーリ、お前の新しい夢はなんだ？」

真剣な父の眼差しは、今でもよく覚えている。軍属の者としてでなく、父としての言葉だった。

しばし言葉に詰まったユーリだったが、ある想いが芽生えた。それは夢と言って良い

息子としての想い。

「親父、俺は——俺は、親父と何時か一緒に戦いたい」

それを聞いたユーリの父は、一瞬目を見開き驚いた様子だったが直ぐはにかみながら軽く、撫でるようにユーリの頭を叩いた。

「ならば強くなれ！　俺は強いぞ！　その俺の背中を任せられるぐらいには成ってもらわんとなっ！」

期待を込めた言葉を受けてユーリには新しい夢が出来た。

——今、その父はいない。

だが、彼の手には剣があった。亡き父より送られた剣が。

（親父、俺は……親父がやろうとした事を、やれなかつた事をやり遂げる！　親父が信じた正義をつ！　だから……だから親父！）

彼にとつて誰よりも偉大な父は、何よりも大きな勇気をユーリへと与えた。

（俺と一緒に戦ってくれっ!!）

一際剣が輝いた時、ユーリはついにポセイドンへと刃を振り下ろした。

「又オオオオツ!!」

「これが俺の、『俺達』の……帝国魂だあああつ!!」

ユーリの攻撃を鈍で受け止めたポセイドン。だがユグドラシルの加護、それだけでは

無い大きな力を纏ったユーリの一撃はポセイドンの鉾を二つに切り、その勢いのまま縦一文字にポセイドンを切り裂いた。

この場には、団長達による激しい三つの攻撃エネルギーが蓄積されていた。そして四つ目、ユーリの攻撃によってそのエネルギーは一気に解放される。

「弾けるっ！ デイアストロフィズムツ！！」

「グッ!? ガアアアア——ッ!?」

ポセイドンを巻き込み土属性の攻撃エネルギーが激しく炸裂した。海面だけでなく海底、大地を巻き上げる強烈な爆発。鉾が折れ、力を消耗していたポセイドンにそれを防ぐ術は無く、そして爆発が止む。

奥義連続攻撃によって生まれる連鎖反応チェーンバースト。それが終わった時、激しい爆発によって海底が姿を見せ、その中心には額当ても真つ二つとなり大地へと落ち、満身創痕となり膝をつくポセイドンの姿があった。

七 暁に終える

「ぜっはー……っ！ はーっ！ ……ああっ！」

全ての力を出し切ったユーリ君が剣を支えにして立っている。俺が急いで彼の元に

駆け寄ると、後ろで魔物達の相手をしていた皆も急いで駆けつけた。

「やったのか兄貴!？」

「多分な……それより、イオちゃん！ ユーリ君にヒール頼む！」

「了解、任せて！」

星晶獣の加護を受けてそれを一気に使えば、例え鍛えた兵士でもかなり反動がある。特に彼は最後の攻撃で自身の力も全て出し切ったのだ。体力気力共にもう空っぽだろう。

「大丈夫？」

「あ、ああ……大丈夫だ……なんとかな」

イオちゃんのヒールを受けてなんとか体力だけは僅かに回復されたユーリ君。支えさえあれば歩く事が出来るようだ。

「ポセイドンは……」

「……安心してください、ポセイドンの怒りが鎮まって行くのを感じます」

ルリアちゃんがポセイドンの意志を感じ取り告げる。それに応える様に膝をついたままポセイドンが顔を上げた。

「膝を、つかせるか……この水神に……。見事だ……人の子よ……」

「ポセイドン……」

「人の子よ……貴様に免じよう。裁きはここで下すまい。だが……」

「わかっているさ……。二度とあんたを人間のエゴに巻き込んだりしない……」

「ならばよい……」

ユーリ君の言葉を聞いて満足したのか、ポセイドンは安らかな表情を浮かべて光と
なつて消えていく。そしてその断片が、ルリアちゃんの中へと消えて行つた。

「……もう、大丈夫です。ポセイドンは、私の中で静かに眠っています」

「そつか……ああ、終わったあああつ！」

ルリアちゃんの前を歩いてどつと疲れが溢れて来た。思わずその場に倒れ込む。

「なつがい一日だった……帝国に捕まり、ジータに砦とポセイドン諸共吹き飛ばされ、海
で溺れて、さつきも何だかんだで死にかけて……」

俺のアウギウステバカンス計画……。

「マア無事荷物モ戻ツタ。良シトシヨウ」

「勝手に良しにすんな」

ティアマトめ……張り倒したいがそんな気力は無い。

「お兄ちゃん、お疲れ」

「ジミー殿、今日はゆつくりとお休みください」

「二人も……お疲れ様……」

明日も明日でやる事がある。今日はもう帰って寝よう。
つまり……俺は疲れたのである。

終わりの前夜、続く苦勞

■ 一 終えてアウギユステ

■ 星晶獣ポセイドンによる被害は、「ジータと愉快な仲間たち団」、「星晶戦隊マグナシックス」とB・ビイクンマン&均衡少女Z.O.Y.の二つの騎空団、そしてリュミエール聖騎士団によって防がれた。

ポセイドンによって呼び出された魔物の群れによって負傷者は出たものの死亡者無し。戦闘能力の高い星晶獣が怒りに任せ島を破壊しようとした状況を考えれば奇跡的な結果と言える。

海より現れた魔物の被害は、市街地よりも沿岸部周辺にある村、観光地であるビーチなどに多く見られ荒らされた場所の復興作業が急ぎ進められている。これもまた両騎空団の活躍によりかなり被害が抑えられたため、復興完了もそう遠くないだろう。

今回のエルステ帝国の行いによって危うくアウギユステは消滅の危機に直面した。無事防がれたものの、帝国による大きな被害が今回で二度目である事を鑑みてアウギユ

ステは、今後更に強くエルステ帝国に対して警戒する事になる。また島の一部地域には、帝国軍の駐留区域が以前から存在していたが、必要最低限、政治的対話が可能なだけを残しその範囲も大幅に縮小された。

大海のアウギステ、そこは全空から見ても有数の水の島。今回の事件を受けさらに水系統の星晶獣の存在の恐ろしさ、そして偉大さを人々は知った。何よりもポセイドンの動きを止めに現れた巨大な星晶獣リヴァイアサンの姿。海の如く青いはずの姿を赤く染め上げ現れたその巨体は、はるか遠くの村からも見る事ができた。

アウギステを沈めんとするポセイドンへ怒り現れた姿と言われ、元よりリヴァイアサンへの信仰が深いアウギステで更に信仰が深まったと言う。真実は間欠泉による火傷なのだが、ギステの住民がそれを知る事は無いだろう。ポセイドンを止めに現れたのは事実なので、態々それを訂正する者もない。

結局のところ、星晶獣が暴れたにもかかわらずアウギステは日常を取り戻したのであった。

■ 二 一夜明けて

■ 泥のように眠って一夜明け、俺は再びシエロさんの海の家にみんな揃って訪れた。昨

日の騒動でここも少なからず被害が出ているので多少は店の修理を手伝おうと思つての事である。

「すみません、態々手伝つてもらつて〜」

「いいつすよ。早く直つてもらわないと次来る時俺が遊べないんで」

ポセイドンと戦う前に現れた魔物は片づけたが、その後現れた魔物の襲撃に遭つた様でアウギステ軍とバウタオーダさん達リユミエール聖騎士団の別動隊が頑張つてくれたが海の家の床や壁やらがボロボロになつていた。

「——?」

「そうそう、そのぐらい。なるべく丈夫なので」

「——!」

「そうそれ。ありがとね」

俺達の仕事はそれを直す事。ユグドラシルにいい具合の木を生み出してもらつてその場で伐採する。即木材に加工してそれを使う。

「コレドコニ（・ω・）ハコベバイイ?」

「あつちの棧橋とコテージ用、あれも直すからそこ。オイゲンさん達がやつてるから運んどいて」

「（*・・・）ゞデシ」

コロツサスが張り切って多量の木材を運んでいく。海の家と言うが宿泊施設も完備されたシエロさんの海の家。海上に浮かぶコテージが幾つもありポセイドンの起した津波の影響があつて全滅は免れたが数棟傾いてしまった。あちらは傾きを直したり補強で済むのでコロツサスがいれば問題ないだろう。また海の家とここを訪れる騎空艇を結ぶ棧橋も壊れたのでそこも直す。

しかし店の方は特にキッチン周りの被害が問題だ。ここは主に木材以外が使われているので俺達で直せない。厨房の裏の壁に大穴が開いているのだが、ここは仕方なく臨時で今の所木板で塞ぐだけである。実に不格好だがその内ちゃんと直すだろう。ようは営業に問題がなければいいのである。

「ふんふん！ ふん！」

「はい、ごくろうさん。ジータ次はこのサイズで切つといて」

ユグドラシルが生み出した木をその場で切り出すのは、力有り余るジータの役割である。

「むう……あたしも釘打つたりしたい……」

「ジータ、お前は釘打つな。壁が吹き飛ばす」

「吹き飛ばないよっ!?!」

「いやジータだと店ごと吹き飛ばすんじゃないかねえのか?」

「言える」

「ビィまでっ!？」

飽きたのかさつきからジータがどうにか自分も釘打ち作業に参加したそうにしてる。だがこいつに迂闊に大工仕事させると最悪店その物が消えて無くなるのでやらせない。大人しく木材加工してなさい

「プイプイプー……」

「オラ、膨れてねえで次切ってくれ。床だけは先に塞がないとなんだからな」

「はーい……」

やれやれ、どう頑張っても細かい仕事出来ないと言うのに……いい加減向き不向きと言うのを理解してくれ。

「団長、次はどこを打つ!」

「出入口終ったの?」

「おう!」

「なら客室の床見ておいて。あそこも壊れてるなら張りなおすから。こっちは俺達でやる」

「おう! 釘打ちも語り合いだぜ!」

「それはねえよ」

フエザー君は元気だなあ。ジータと違い加減と言うものをまだ知っているので板張り、釘打ちを任せられる。

「オイ！」

「あー？」

屋根からティアマトの急かすような声が聞こえてきた。

「屋根ノ木材マダカ！」

「そろそろ隙間埋めちまいたいんだけどよ！」

「このままじゃ雨入っちゃまうぜえ〜？」

「待ってる、今作ってる」

店の屋根にはティアマトとB・ビー、ハレゼナ達がいる。穴の開いた屋根を閉じる作業を飛べる奴と体が小柄で軽い奴に任せた。屋根は板以外にヤシの葉やらを敷き詰めた物もある。これもユグドラシルに頼んで作り出してもらい俺達で加工して直ぐ使う。

「隙間作んなよー、雨一滴入れるわけにいかねえんだから」

「ワカツテル、イイカラ次ヨコセ」

できた材料をポイポイ上に投げてティアマト達に投げ渡す。

このような具合に海の家の修復は急ピッチで進められる。幸いにも水回り、配管や調理用のコンロ等は無事なので床や壁の修理で済むのはよかった。この調子で修理が進

めば明日には営業再開できるとシエロさんは言う。俺はもう明日帰るけどね……。

「ジミー殿！」

「おや？」

床に板打つてたらシャルロットさんが現れた。バウタオーダさん、そしてコーデリアさんにブリジールさんもいる。

昨日戦いの後リユミエール組は、一時シャルロットさんと合流していたが無事来てくれたようだ。

「どうもです」

「昨日の事でお疲れでしょうに、もう復旧作業でありますか」

「リユミエール聖騎士団の人達も、人助けに方々駆け回ってるそうじゃないですか」

「困る者あれば駆けつける。それがリユミエール聖騎士団であります！」

えっへんと胸を張るシャルロットさん。かわいい。

「しかし……はたから見ると何と言うか……そう言う業者かと思いました」

バウタオーダさんが感心したように、また呆れたように話す。

その場で木材加工をして、即修理作業に移る我々を見てそう思うのも無理はないかもしれない。

「まあうちって何でも屋みたいな所あるからなあ」

「こんな技術を何処で？」

「故郷じゃ若いのが少ないんで村でも何かと任せられて……大工の手伝いやら、特にユグドラシルとかが来て今みたいな事出来るようになったもんで尚更……」

「団長さんって出来ない事とことん無いですか？」

「いや、さあ……出来ないこと態々しないんで自分じゃなんとも……」

「団長職、戦闘、剪定、料理、掃除、資金管理、団員の世話……あれ、団長さん休んでるです？」

アウギユステ滞在はその休みのはずだったんですよ。

「何でもでき過ぎるのも困りものだね、団長」

「まったくもって……」

それこそ『よろず屋』である。

「まあ出来ないより良いでありますよ。ところで……全員揃っているわけじゃないのですか？」

「ああはい」

この場にはいない面子は、ほかの用事で街に行かせた。ラムレッダなんかはそもそも酔ってるのでここでの作業には向かない。彼女とフィラソピラさん、ゾーイ、ルドさん、ルナル先生達はアウギユステを出る時のための買い出し任務だ。こちらも重要な仕

事である。

あと何故かラカムさんがエンゼラを見たいと言って操舵担当のセレストを連れて抜けている。どうもセレストがラカムさんにエンゼラについて聞きたい事があるようで彼女からお願ひしたらしい。操舵士と言う話だから気になる事でもあるのだろうか。

「みんなー、そこら辺で休憩しましょっ！」

「せんぱーい！ 食事の用意できたっすー！」

「ご飯沢山ありますよー！」

「飯も食わんと力でんでー」

元気な声が聞こえてそちらを向くと、大皿を持ったイオちゃん、フアラちゃん、ルリアちゃん、カルテイラさん、そして……。

「団長殿！ 休憩にいたしましょう！」

■ やたら爽やかなユーリ君がいた。

■ 三 決別ではなく、旅立ち

ポセイドンとの戦いを終え、力を使い果たし疲れ切ったユーリ君。俺に肩を支えられて移動していた時の事。

「ポセイドンを降したか……」

「あんたは……」

俺達の前にたつた一人、帝国兵の男が現れた。男は他の帝国兵と違う鎧を身に着けた男、ユーリ君の部隊の隊長だった。

皆が警戒したが彼から戦いの意思を感じなかったため治める。

「一人つすか？」

「ああ……俺一人だ」

「帝国は皆逃げたと思いましたが」

「俺だけは残った。ポセイドンとお前達の戦いを報告せねばならないからな」

「下手すりゃ巻き込まれて死ぬと思わなかったんすか？」

「任務で死ぬならばそれまでだ。軍人とはそう言うもの……任務で、ならばな」

「た、隊長……？」

俺と隊長さんの会話に気が付いたのか、何とか自分の力で立ち上がるユーリ君。

「何故、ここに……」

「裏切者の始末、と言えば納得するか？」

堂々と言ったなあ、まあ言い方から冗談つてのはわかるが。

「そうか……もう帝国軍人じゃないもんな」

「ああそうだ。お前はポンメルン大尉に逆らい危害を加えた。その時点で除隊、名実ともに裏切者、反逆者と言うわけだ」

「た、隊長さんユーリは……っ!」

「フアラちゃん」

ユーリ君の事を庇おうとしたフアラちゃんを止める。不安そうにしているが何も言わず首を横に振る。今はただ見守るのが良い。ユーリ君にとってそれが良い。

「……」

「後悔しているか?」

「まさか」

ユーリ君は清々しい顔で応える。

「あの時あの選択をしなきゃ……それこそ後悔したはずです」

「そうか……」

「ただジツクとハーパー、あいつらともう馬鹿やれないのは寂しいかな……」

「ふっ……お前達はいつも一緒に組んでいたからな。大抵はお前がまとめ役だった」

「組ませたのは隊長ですよ」

「お前ならあの二人をまとめる事が出来ると信じていたからだ。おかげで俺の負担が減った。それも今日までだが……」

「隊長……」

「ユーリ、兜をよこせ」

隊長さんは手を差し出してユーリ君の兜を渡すように言った。彼の兜はポセイドンとの決着と同時に壊れ今はユーリ君が手に持っている。

「ポセイドンとの戦いしかと見届けた。あれほどの戦いだ。裏切者の兵一人死んだ事にしても誰も疑問に思わない……」

「隊長あんた……」

この隊長さん、本当に帝国軍人なのだろうか。あまりに気持ちのいい人間過ぎる。ポシメとは大違いだ。

「……隊長。最後に、この兜を渡す前に俺の我が儘を許してください、誇りある帝国軍人として……最後のケジメをつけます！」

「ふん……とことん面倒事が好きな奴だ！ いいだろう、最後まで見届けてやる！ それが隊長としてやれる最後の事だ！」

「ありがとうございます……！」

壊れた兜を無理やりかぶりユーリ君が突然俺と向かい合った。

「团长……頼みがある」

「……んあ、俺？」

「ああ……俺を、俺をあんたの騎空団に入れてくれないかっ!?」

「え?」

話の流れが俺に向いた。

「都合のいい事を言ってるのはわかってる! 俺はあんたにとんでもない迷惑をかけてしまった……! ああ雨の日、ラブホテルでの事と言い、街での誤解と言い……っ!」

それはもう言うなユーリ君、もうラブホテル事件は忘れたいんだから。

「なのにあんたは、俺とポセイドンが因縁を断ち切るための決着をつける助けをしてくれた。その時わかったんだ! 帝国を止める事が出来るのは、あんた達しかないとい!」

多分ジータ一人いればいいと思います。

「だが俺自身も強く無きやいけないんだ……これ以上帝国に悪事を働かせないために、帝国を悪にしないために……そのために、あんた達の団に入りたいたいんだ! 今より強くなるために!」

ま、眩しい……っ! ユーリ君の若さと青春力が俺に突き刺さるっ!

「だから……今は!」

そして何かと思つたらなんとユーリ君は剣を構えた。

「団長、俺を殴れっ!」

「おい、死ぬぞ」

冷静な言葉がB・ビーから漏れていた。

「俺は今一度この帝国の兜をかぶってあんたと戦う……きつとあんた相手じゃ無事じゃあ済まないだろう……そして帝国兵としての俺は死ぬっ！」

「いや、ユーリ君……君今満身創痍……」

「さあ！ 全力で来い、手加減無用だ！」

ええー……。いやユーリ君が仲間になるの自体は一向に構わないんだけどさ。むしろ欲しい。かなり真面目な戦士枠。しかも男性。ロリコン疑惑を払拭できる人材だ。

だからってねえ……。全身ボロボロのユーリ君を殴るって……。多分手加減すると怒るよなあ……。

「お兄ちゃん、嫌なら変わろうか？」

「ユーリ君殺す気か」

「殺さないよ!？」

ダメだ。ジータにだけはやらせられん。手加減を知らない全空N01のこいつにだけはダメだ。

「……わかった。気合い入れるユーリ君」

「ああ！」

こうなつてはしかたない。それに俺も男だ。若い魂に応えぬわけにもいかん。ただ
こう言うのつてフェザー君とかの役目と思う。

「齒あくしばれええっ！」

「うおおおっ!!」

俺に向かつて突進して来たユーリ君。形だけのものではない、完全な殺気をもつた本
気の剣、だからこそ俺も応えた。

「ふんっ！」

「——っ!?!」

彼の剣を避けてからの右フック。手応えはあつた……だからこそ「しまった！」と
思った。兜は首から反動で吹き飛びユーリ君も地面に倒れ伏した。やばいと思ひ駆け
寄ろうとしたが、ユーリ君が呻きながら地面から立ち上がろうとする意志があつた。思
わず立ち止まった。

「くう……ぐうっ！」

そして、ユーリ君はついに立ち上がる。口からは血を流し、頬は腫れている。それを
見て隊長さんが深く唸り領いた。

「満足したか」

「はい……燃え尽きました」

「そうか……」

隊長さんが地面へと落ちたユーリ君の兜を拾い上げた。

「団長殿、此度の事済まなかつた。そして……ユーリを頼む。兵として、教えられる事は全て教えたつもりだ。きつと君の力になるはずだ」

「ああ……あんたも、そのなんだ……こう言うのも変だけど、頑張れよ」

「ふっ……そうだな。頑張るとしよう」

「隊長……」

「……ユーリ、強くなれ！ お前は若い、だからこそまだまだ強くなる。俺よりも、お前の父よりも必ずな！ 鍛錬を休むなよ！ 去らばだ！」

そう言つて隊長さんは静かに去つて行つた。その背中が、俺からも大きく見えた。そしてユーリ君にとつては、もつと大きな……まるで父の様な。

「隊長……！ 今まで、お世話に……お世話に、なりましたっ!!」

深く、深く頭を下げる。隊長さんの姿が見えなくなるまで、ユーリ君はずつと頭を下げていた。彼の頬を伝う熱いものは、もつとしよっぱいアウギユステの海に消えた。

そんな事が有り入団を果たしたユーリ君。ともあれ死闘&俺のパンチで重症だったのだがイオちゃんやフィラソピラさん達による早めのヒールを受けて一日寝たら元気になっていた。若いってすごいね。

とは言っても無理はさせられない、だがどうか自分も復旧作業を手伝おうとする彼には昼飯の調理任務を与えてイオちゃん達についていかせたのである。

「どもども、ありがとね」

「この程度！ 部隊でも野營での食事をよく任せられました。次は何をしますか！」

「あー……取り敢えずユーリ君は休んでなさい」

「この爽やかボーイめ。」

「私達じゃあんまり力仕事出来ないからね。このぐらいやらないとね」

「はい！ 皆でサンドウィッチも作ったんですよ！」

「うちもやれる事言うたら食い物用意するぐらいやからな」

想像したよりも沢山の料理が机に並べられる。しかしこっちも人数が多いのとフェザー君なんか良く食うので問題なく消えていくだろう。

「カタリナ先輩、これ自分の作ったやつす！ どうぞ食べてくださいっす！」

「ああ、ありがとフアラ」

子犬かな？ いやフアラちゃんです。彼女の言っていた「先輩」とやらがあのカタリナさんとわかった昨日から彼女はずっとカタリナさんにつきつきり、と言うか後ろからついていく。尻尾があればブンブン振り回しているだろう。

しかし食い物を用意してくれるのは大変助かる。朝から初めて丁度昼時、腹減った。

「シャルロットさん達も一緒に。話したい事もありますし」
「よろしいのでありますか？」

「さつき椅子も机も直したんで休む分には問題ないですよ」
「本当にジミー殿、何でも屋であります……」

それはもういいつす。

四 【正義審問】

「やれやれ、オイラ喉カラカラだぜえ……」

「オリジナル、リングがあるぜ食うか？」

「ああ、サンキューB・ビー……つてえ！ だからオリジナルつて言うなって！」
……ふむ。

「あうああくなんだあ……髪がごわごわつてするう」

「ふむ、潮風の所為だな。海ではどうしてもな」

「むううくなんか気持ち悪い……」

「帽子を被つて予防もできるけどね。ハレゼナちゃんは帽子あるけど、髪が長いから潮風受けちゃったのね」

「髪ヲ結ンデオケ。潮風ヲ受ケル面積ヲ減ラセル。後デケアモシテヤル」

「先輩、後で自分も先輩の髪のをケアするっすよ！」

「いやフアラ、気持ちはありがたいが、それは自分でやるよ」

「ケヒ……海って不思議なんだなあ、ヒヒッ！」

うむ。

「え、コロツサスあなた今どうやって食べたの？」

「ン? (* * — ω ·) コレヲコウ……パクッテ」

「口……に入れたの? え、口?」

「なー! 思うよなー! うちも船と一緒に飯食つとる時ずつと不思議やったんや!

何度見ても鎧に消えてるようにしか見えへんし! そのくせパクパクモグモグ咀嚼音

聞こえるってどうなつとるん!」

「チャント (* * ω ·) カマナイトネ」

「そもそもどう消化しとんのや……」

「……まあ、星晶獣だしね。考えても無駄か」

ふむふむ。

「リヴァイアサン……マグナだったか? お前さん、体まだ真つ赤だが平気なのか?」

『今日一日海で冷やせば流石に治る……力を得たのはいいが、やはり我は海の青でなけ

ればな』

「ははは、ちげえねえ！ 赤も悪くねえが、アウギユステの守護神の色とは違うわなっ
！」

ふーむ……。

「では、お湯が枯れる様子は無いと〜？」

『うむ。何がどうなってるのか我にも分らぬがな、何でか間欠泉は出続けてる。人の出入りはまず無い場所だ。ただ魔物が多いぞ？』

「そうですか、温泉付き海の家二号店を建てたいのですが……専用のビーチを作るので魔物を寄せ付けないようにしてもらう事は出来ないでしょうか？」

『まあ間欠泉の所為で迂闊に近づけないところだったからな。人の手で整備して自由にできるスペースをくれると言うのなら構わんが……ビーチコンセプトの要望は出すぞ？』

「それは勿論です。可能な限りそちらの要望には応えさせていただきます。なにせ、アウギユステの守り神なのですから〜」

『……何と言うか、凄いなハーヴィンの商人よ。我を相手に平然と商談つて』

用意された食事を食いながら休息時間での団欒中。……うん、なんか皆それぞれ濃い話してるなあ。特にシエロさん。

「団長殿、自分はもう動いても問題ないと思うのですが」

「ユーリ君、ヒールかけたと言っても全快じゃないんだからね。少し休んでなさい」

「しかし……」

「動きたいなら飯食った後軽く語り合うか？ 腹ごなしに」

「拳か……自分は剣以外はあまり……」

「やめなさいっての」

「この二人性格の組み合わせが良すぎる。良くも悪くも……。どつちも真直ぐストイックだからほつとくとずつと語り合つてそうだ。拳で。」

「あとその敬語辞めて。昨日まで割とタメだったじゃん、歳もそう違わないのに」

「いえー！ もう自分は星晶戦隊（以下略）の団員、それも新参者！ そう言うわけにはいきませんー！」

「いや、違和感がさあ……」

「……徐々に戻すか。ティアマト達の相手してたら段々素も出るだろ。」

「お兄ちゃん、はいあーん！」

「……それとだね」

「あーん！」

「さつきからギターは、何しぐえうっ」

「あーん!!」

「はわわ、ジータ！ お兄さんのほっぺにサンドウィッチ押し付けちゃだめですー！」

先ほどから執拗に俺の口の前にサンドウィッチやらクッキーやらを突き出して来るジータ。やだよ、あーんなんて、しないよ俺。

「むー！ ザンクティンゼルじゃ何時もやってたじゃん！」

「してねえよ」

「してた！」

「してねえつつの」

「してたもん！」

「だから、してねえつつの……してたのは」

「はむっ！」

「逆だつつーの」

「はわわ!? ぎゃ、逆あーんです！」

皿から一個小ぶりのサンドウィッチを手を取って大口開けてるジータの口に放り込んだ。一瞬驚いた様子のジータだったが直ぐに満足したのかニコニコして大人しくなった。

「はあ……ああ、すみません。それで……」

話をリユミエール組に移したかったのでジータ達との会話を切り上げたのだが、ふとコーデリアさんを見ると俺を見ながら口を開けていた。あまり見せない表情なので呆気にとられていると、途端にコーデリアさんはワタワタと顔を赤くした。

「コーデリアさん？」

「……あ、ああつ！ いや、その……う、うんっ！ 昨日の疲れが残ったのか、はしたないのだが、欠伸を少々……いや申し訳ない」

「大丈夫でありますか、コーデリア殿？」

「ご心配無く、もう大丈夫です……ええ、ええ」

うーん？ なんかあんま見ない反応だが……。まあ本人が大丈夫って言うならいいけども。それに俺も色々話したい事がある。そっち優先、まずリユミエール聖騎士団の件に関しては聞いておきたい。

「昨日の今日ですけど……シャルロットさんの事ですが、どうなりそうですかね」

「まあなんとも……それこそ一日しか経ってないので自分からも詳しくは」

「ですよねえ……」

結局帝国との戦いに参加させてしまったシャルロットさん。恐らくポンメの方から既に帝国本国にその事が伝えられ、直ぐにリユミエール聖国にも伝わるだろう。そうなら何度とも言われたように現状友好的な関係であった二国は対立、最悪アウギユステの

様に戦争なんて事も有り得る。帝国は手が早いからな。

そうなつてしまえばリユミエール聖騎士団団長のシャルロットさんの立場も危うい。本人はそれも承知でもう団長職を辞する気満々のようで俺が困る。

「改めて、ほんと申し訳なかつたです！」

「いえいえ！ もうそれは終わった話、頭を上げてください！」

深々と頭を下げるとシャルロットさんは、ワタワタと慌てて俺の頭を上げさせる。しかし何度でも謝罪しとかなないと気が済まぬのもう何度か謝つとく。

「それで、コーデリアさんの……その、【正義審問】の方は」

「それはね……」

やおらコーデリアさんは立ち上がる。それを見てシャルロットさんも立ちあがりクラウ・ソラスを引き抜き皆に見えるように掲げて見せた。俺が驚き絶句していると、コーデリアさんは雄々しく言い放った。

「聖王陛下の偉大なる御名の下、リユミエール聖騎士団が【正義審問】に則り改めて、神妙に貴君に問わん」

「……」

「貴君にとりて、正義とは何ぞや。その碧き剣に誓い、返答なされよ」

……え、今ここでするんすか!? と、思うがとても言える雰囲気じゃない。二人は元

よりブリジールさん、バウタオーダさんも真剣な面持ちで見守っている。思わず姿勢を正してしまった。

「自分にとつて、正義とは……」

迷いの無い表情でシャルロットさんが口を開いた。

シャルロットさんの「正義」との出会い、故郷で出会い命を助けられたリユミエール聖騎士団の騎士。そこから生まれた正義への憧れ、そして熱意。それを彼女は粛々と語る。思わず周りの面々も会話を止めて耳を傾けた。

「あの時の騎士達の姿は……今でも強く覚えております。あの出会いが自分の正義の歩みの始まりでした。あの方達のように、次は自分が誰かを守れる者になろうと……そう強く思いました。そんな気持ちですが、ただ雪降り積もる故郷で多くのハーヴェイン同様商いを学ぶだけだった自分を変えたであります。ペンを剣へと持ち替えて、挫けそうになっても只管に……きつと皆にも知ってほしかったからであります。助けてもらった時の嬉しき、感謝……そして感動を。自分があの騎士達の姿を見てそう感じたように、自分もあの騎士達のように正義を信じていれば、誰かが自分を見て同じ思いを感じるはずだと……。そう、繋がるのであります。助け合いの輪は、途切れる事無く……初めは小さく細い正義の想いも、幾つも紡ぎあい大きな輪となって広がるのであります。ここに居る皆が正に、昨日あの場で一丸となりポセイドンへと立ち向ったように」

かつてと今、そしてこれからの事。それらを思いながらシャルロットさんが話す。見た目通りの少女の様に、年相応の女性を思わせ、偉大な騎士の威厳を持つて。

「だからこれからも、自分は清く、正しく、高潔に……自分の信じる正義を貫くであります。今回の事でリュミエール聖騎士団にいられなくなっても、その信念が変わる事はないのであります。立場や力が正義なのでは無い、正義とは……常に尊き御心と共にあるものでありますから」

俺の中の全空の住民が総立ち、スタンディングオベーションしている……。こ、こんな素晴らしい人を俺を助けに来たせいで騎士団辞めさせるなんて出来ない。この人は騎士であるべきだ。シャルロットさんのためにも、他のリュミエール聖騎士団の騎士のためにも。

「貴君の正義、しかと拝聴した」

そしてコーデリアさんは、その場で頭を垂れ忠誠の形をとった。

「貴方は清廉を忘れてなどいない。我らリュミエール聖騎士団が誇る団長殿にほかありません」

「コーデリアちゃん……っ」

コーデリアの言葉を聞いてブリジールさんが感極まって目に涙を浮かべている。

「これは……つまり、あれですかね？ シャルロットさんにはお咎めは……」

「咎めるべき事も無き者をどう咎められようか。清廉潔白とは正にこの事。本国へもあのまま伝えるだけだよ」

「……うん、ならよかった」

緊張の糸が切れ椅子にズブズブと沈むように腰を深くした。他の面々も同様に長く深いため息やらをついていた。

「う、うう……シャルロット殿！ 貴方の言葉、深く感銘を受けました！ 帝国の正義を盲目的に信じていたのが恥ずかしい……っ！ 隊長にも正義を振りかざすものではないと度々言われ、自分もそうあるべきと思いつつ、やはり帝国軍人としての誇りが……」

「俺の心にも強く響いたぜあんたの言葉……っ！ どうだ、もつと熱くなるために語り合わないかっ!？」

「ストツプストツプ、二人とも君熱くなるな」

えらい感動したのかユーリ君が男泣きに熱く語っている。フェザー君は瞳に炎を宿して拳を握る。暑苦しいよう、もう水でもかけてやろうかな。

「しかし驚いた……突然始めるんだもの」

「はい、私もびっくりしました……」

「すまない団長殿、そして皆も」

「実は……自分が希望した事なのであります」

照れくさそうにしながらも、シャルロットさんがどうして行き成り【正義審問】をここで始めたのかを話し出した。

「昨日の戦いを経て、皆がどれほど素晴らしい方達なのかを学びました。だから自分の正義の志を知ってほしかった……そしてジミー殿には、見届けてほしかったのであります」

「……そつすか」

一週間程度で妙に信頼を得てしまったものだ……。まったくもって、まったくもって……まったくもって……。なんにも、言葉が浮かばんわ。ちくしょう、嬉しいじゃんか。「だけどリュミエール聖国には、当然昨日の報せが行くだろう？ 大丈夫なのかい？」

俺も先ほどから心配している事をオイゲンさんが代わりに聞いてくれた。

「それに関しては、何とかして見せよう。リュミエール聖騎士団遊撃部、最後の切り札としてシャルロット団長の潔白を証明して見せるよ」

「自分もとことんシャルロット団長は間違った事をしてないと証明するです！」

「ええ、私も部下達も力になります。皆最後は迷う事無く昨日の作戦に参加したのです。それに島の危機を知った上に見過ごしたとあれば、それこそリュミエール聖騎士団のモットーに反します」

「コーデリア殿、ブリジール殿、それにバウタオーダ殿も……。み、皆自分の様な団長のた

めに……」

なんと美しき騎士団の結束であろうか。清く、正しく、高潔に。それをモットーとする騎士団と言うのはやはり本物だ。力になれるかわからないが、俺だって協力を惜しまないぞ！

「まあ、身長を伸ばしたい……と言う理由だけは報告するのに抵抗がありますが」

「はうあつ!？」

あ、そこはもう聞いたんですね。なんか連日の騒動で有耶無耶になっていた気がしたが流石にシャルロットさんも話したか。

「まああくまで目的は『部隊視察のための国外活動』と『自己修練』。その点を強く上手く強調し報告すればなんとかなるだろう」

「偶然にも我々の部隊がいたので部隊視察の点は嘘になりません。我々も視察を受けた事を証明すればいいでしょう。とは言えそれで誉れ高きリユミエール聖騎士団の団長職を休みがちになっては困りますね」

「けど自分もとことん気持ちわかります。ハーヴィンだどことん困る事多いです」

「うあうあうう……」

反論の余地が無いシャルロットさんは、耳を小さな手で塞ぎながらワタワタとしていた。カワイイかよ……。そして先程までの感動的な雰囲気は四散霧消した。尤も嫌な

空気じゃない、何と云うか緩い居心地がいい感じだ。

「おーい！ 坊主いるかあつ!？」

和んでいたら店の外からラカムさんの声がした。セレストを連れてエンゼラから戻ってきたのか。しかしどうも俺を呼んでいるようだった。飲みかけのコップを置いてラカムさんの所へと向かう。

「どうした、んす……か……?」

「あ、ああ」

「おう……うぎゆう……ううっ!」

ラカムさんとセレストのそばに行くと、非常に気まずそうなラカムさんと涙を流し嗚咽するセレストがいた。

なに、え? どゆこと?

「あーなんだ……前はゆっくり見れなかったが改めてエンゼラ見せてもらったよ。中古って聞いたけど悪くねえ、良い船だった」

「……そりゃよかった」

「う、うう……うじゅ……おうう……っ!」

「ただ、な……そのー」

最初にエンゼラの事を褒めてくれるのだが、とにかく隣の泣き続けるセレストが不穩

すぎて気になる。

超絶ウルトラ嫌な予感がした。

「……なんかありました？」

「ああ、そのな……落ち着いて聞いて欲しいんだけどよ」

「はい……」

「エンゼラなんだが……このままじゃ、最悪飛べなくなるぞ」

「……は？」

「ごめんなささいいゝゝゝゝつ!!」

衝撃的な言葉が聞こえた気がした途端セレストがその場で座り込んで泣き叫んだ。

え？

「……え？」

え？

■ 五 飛べねえ船は、ただの船

■

「竜骨に数か所深い亀裂が入ってた。このままずっと飛ばしてれば最悪空中で分解しちまう」

「あー……」

「他の場所にも亀裂、破損が多い。まだ確認できてねえが海面より下、ようは水中に被害が多そうだな。見えねえ場所だから気が付かなかったんだな。こっちはまだ小さな傷だが、それだつてその内大事故につながるかもしれないねえ」

「あー……」

「でだな」

「あー……」

「……聞いてるか？」

「あー……」

「あーダメだ。相棒放心しちまつてる」

「ジミー殿……なんと、声をかけていいのか……」

「兄貴……」

あー……。

「マツタク……イイカゲンニシロツ！」

「ギャバンツ!?!」

は、腹に激痛が……っ!?

「ソロソロ現実ニ戻レ」

「テイ、ティアマトか……何時もながら、もうちよつと優しいやり方にしろ……」

「イイカラ、話ヲチャント聞イテロ」

あー……仕方ない、現実を見よう……。

「すみません、一応話は耳に入ってます」

「そうか……まあ気持ちはわかる。突然だからな」

「ようは、つまり……エンゼラに割と深刻な傷が沢山あつて……」

「早く直さねば、エンゼラは崩壊する、か……」

「ソ（；ω；*）ソソナア」

「——！」

そう、エンゼラがやばい。マジでヤバイ。

どうも昨日戦いが終つて帰つてからどうも違和感を感じたセレストが、今日改めて操舵士であるラカムさんに相談して色々と確認してもらつたら判明した。

「陸から見た感じ、傷自体は古くなかつた。騎空艇の停留地区だから海底に岩やサンゴ礁はねえ、あつても取り除かれてるはずだ。だから擦つたつてわけでもねえだろうな。第一ぶつかつてりや誰か気が付いたはずだ」

「となると原因はなんでしようか……」

「いろいろ考えられるが、劣化で限界が来たのか、着水時に衝撃が入つて今になって亀裂

飛ばす事が出来ないため、特に傷が酷いとされる船底部をラカムさんでも詳しく調べる事が出来ない。そのため海に浮かべたままで水中からリヴァイアサンに問題の傷を確認してもらった。

『言われた箇所を水中から確認したが……確かに幾つか亀裂があった。その操舵士の言う通り岩やなんかでの傷ではないな』

「やっぱり私のせいだあああ——っ!!」

『落ち着け……』

かなり情緒不安定になったセレストがまた泣いてしまった。リヴァイアサンは呆れた様子である。

『着水時の衝撃と言う話もあるが、我はそうも思えぬ』

「するってーと?」

『エンゼラは元々アウギユステの様な水の豊富な島向きの船だ。水の加護もされて調査船としても動いていたと言う話もある。それだけに丈夫な船だ。それに中古ではあるがよろず屋の手でレストアもされていた』

「はい、中古とは言えお客様に不良品なんて売るわけにはいきませんから」

俺に船を売ってくれた（厳密には、ばあさんが手配したのだが……）シエロさんもエンゼラの異常とあって話に混ざってくれている。

「団長さんに下した際は、殆ど新品同様だったはずですよ」

『ああ、それは間違いない。あの日我々も隅まで確認したからな。だから多少着水に失敗したとしてもあそこまで一気に傷は入らんはずだ』

「……要は？」

『あれは魔物の仕業だ。それも無数のな』

「魔物なあ？」

リヴァイアサンの見解を聞いてオイゲンさんが怪訝な表情を浮かべた。

「ここは騎空艇の停留許可がある地区だぜ？ エンゼラぐらいの船に傷をつけれる魔物は出ないはずなんだがなあ」

「そもそも魔物が人も居ねえ船を襲うかあ？」

『無論知っている。だが忘れたか、昨日は事情が違った事を……』

「……もしかしてだけど」

「あ！ ポセイドンですか!？」

ルリアちゃんが気が付いたらしい。そうだ、昨日はポセイドンの手によってアウギユステ中の海から海水を元に魔物が生み出され続けていた。その出現場所はバラバラ、だからこそ早急な解決が望まれたのだ。

『野生の魔物と違ってあれはただ島に被害を出す目的で生み出された魔物だ。手あたり

次第暴れて船に被害が出てても不思議じゃない。水中に入った部分に深刻な傷が多いのも、水生の魔物がいたからだろう。ここ周辺で魔物が暴れてなかったか軍に確認を取れ、おそらく相当数の魔物が居たはずだ」

「だとしても、ピンポイントにエンゼラだけが狙われたのは……」

『そこはお前の運の無さだ』

OH……。

「そ、そのだな……傷は深いが何も直せねえってわけじゃねえからな？　そう落ち込むなよ」

「……修理ってどこで」

「アウギユステにも腕の良い職人はいるから、俺知り合いで良きや紹介してやってもいいが……」

「しかしこれは……いつそ再レストアか、オーバーホールさせてから強化した方がよろしいかもしれませんね……」

「確かにな。お前さんの騎空団つてのは他と違って異質過ぎつからなあ……星晶獣8体の旅に耐えられる船つてなるとこのまま普通に修理してはい終わり、つてわけにもいかねえかもしれねえ」

「それにですね、団長さんの事です、今後また仲間が増えると思いますから……お部

屋や設備の拡張工事もおススメ致します〜」

ラカムさん達による意見がどんどん出てくる中、その意見に確かに……と、思う一方で俺には最大の懸念がある。

「それってお値段は……」

「まあ、そりゃ……安くはねえよ」

「修理にしてもこの傷の数では……どうしても、それなりのお値段になるかと……」

「あ、お兄ちゃんしつかり!？」

「兄貴いーっ!？」

「膝から落ちて行ったな……」

「燃え尽きてるわね……かわいそうに……」

カタリナさん達の声がまるで遠くから聞こえてくようだ。

それなりのお値段、お値段……何ということだ。ここに来て出費を強いられる事になるとは……。今回のごたごたではあまり金を使わなかったと安心したのに……。

な、何とか金を使わない手は……あ！

「そうだ、ユグドラシルに海の家みたいに補強してもらおうのはっ!？」

「——!」

こ、これは妙案ではないでしょうか!？ ユグドラシルもそれだ! っで感じて同調し

てくれた。

「いや、止めた方が良いと思うぜ」

「え」

「!?!」

「今日みたいな海の家の修復とか陸の上の建造物なら問題はねえが、騎空艇つてのは想像以上にデリケートだ。翼、装甲、装飾に至るまで全部含めて上手く飛ぶように考えられている。星晶獣とは言え素人が下手に手を加えると余計に危険だ。流石にお前も騎空艇の知識は無いだろ？ もし弄つて重量のバランス崩すと横転する可能性もある」

「私もおススメは出来ないわね。そもそもユグドラシルは土系統でも大地よりの星晶獣、木や蔦を生み出してもいるけど、あれはどちらかと言うと遊びが入ってるから……命にかかわる騎空艇の修理は止めた方が良いわ」

「なんて……こつた……」

「!?!」

「ああ、また倒れた」

「今度は膝が折れたように……」

ユグドラシルが慰めてくれてるが、そんな声も聞こえないようだ……。出費……。修理費用だけでも厳しいのに、改修ともなると……。借金……。

「もう団長きゆんの精神がボロボロにや……」

「ここに来て彼にとつてはあまりに酷な出来事だねえ」

「は、はひひ……さ、流石に笑いもおき……うひっ!」

「漏れとる漏れとる、ルドはんしつかり笑つとるで」

「こんな、馬鹿な話……そんな……。どうしてこんな目に……。どうして、どうして……
どうして?」

「ポセイドン、あの野郎……」

「お、相棒が再起動した」

「そうか、ポセイドンの生み出した魔物が原因か……。魔物はもう居ない、だがポセイ
ドンはいる。あいつかなり屈強な体つきだったな……」

「……ルリアちゃん」

「はわっ!? はい、なんでしよう!?!」

「確かポセイドンの断片が君の中に入ったよね? それを経由して本体を呼び出せない
かな?」

「え、今ですか!?!」

「うん、今」

「で、出来なくはないですけど、どうして……」

「まあまあ、別に物騒な事しようってわけじゃないよ……ただね、ちよつと話し合いをねえ」

「だ、団長……」

ルリアちゃんにお願いしていたら、後ろから先程まで泣いていたはずのセレストに声を掛けられる。ベールで見えにくいが目元はまだ赤い。

「わ、私も……ちよつと言いたい事がある、から……一緒に……」

「そうかそうか……」

「うん……エ、エンゼラは、私達の船だし……ちよつと……激おこ、です……」

だろうねえ、操舵担当の分エンゼラへの思い入れも強いだろう。

「そう言うわけでルリアちゃん」

「お、お願い……ね」

「あ、はい……それじゃあ、一応」

怯えなくていいよルリアちゃん、大丈夫、大丈夫怒ってないよ？

ルリアちゃんが海に向かって集中すると、直ぐに反応は無かったが徐々に海面がざわつきだし昨日の様にあの偉丈夫、星晶獣ポセイドンが現れた。間違いなく本体だ。

「人の子よ、声は聞こえた……まさか、また呼び出されるとは思わなかったぞ。何用だ？」

「え、えっと……」

「おう、ポセイドン……用があるのは俺。ちよつとこつち来て」

「む、貴様は……ぬおおつ!? きさま、なにを……っ!」

「いいから、いいから」

「お、おのれ、貴様っ!? 再び水神を愚弄する、か……やめよ、ひっばるなっ!」

「い、いいからいいから……ほら、あつちに行こう、ね……」

「なっ!? 貴様昨日いた星晶獣の一体か……っ! 貴様までなにを……お、おお!? な、

なんだこの力は……っ!」

「さあさあ」

「ほらほら」

「ぬ、ぬおおおーっ!」

あそこに丁度いいヤシの林があるね。そうだね、話し合いに丁度いいね。人気も無いしね。行こうね、さあどんどん行こうね……。

「怒ってるなあ……兄貴のやつ……」

「だ、大丈夫なのでしょうか? もしまたポセイドンが島を破壊しようとしたら……」

「案ずるなユーリよ、主殿は強い……こと星晶獣に関してはな」

「セレストもついているからね。団長に任せておくとしよう」

「コノ展開ハモウ慣レタ。多分何時モ通りニ終ル」

「ポセイドンも可哀そうな奴だぜ……怒るにしても無差別にならなけりやこんな事には
ならなかつたろうになあ」

さあさあ……どんどん、奥に行こうねえ……。

オレ達のソラは、何時もお祭り騒ぎ

■ 一 海の家で働く、海からの使者

「それじゃあ、今日からよろしくお願いいたしますね〜」

「……」

「返事」

「……よろしく頼む」

シエロさんの挨拶に無言を貫こうとしたポセイドン、横に立つ俺が一言急かすと極めて不本意そうな顔のままだが返事を返した。

場所は再びシエロさんの海の家、そこで俺達はその新人従業員の挨拶に立ち会っている。この新しい従業員は、ドラフよりも屈強な肉体を持ち、健康的に焼けた肌、爽やかな薄い青色を含んだ灰色の髪を持つ男……つまりポセイドンである。

「なぜ水神である我がこのような……」

「おめーが怒りに任せて島沈めようとしたからだろうが、大人しく労働に従事せい」

「元を辿ればあの帝国の愚行が原因ではないか……」

「お前それ昨日散々俺達がお前にいったセリフだつーの。ちゃんとそれで怒り鎮めてればこうもならなかったんだよ……お前も、エンゼラも……くそう」

「おのれ……、貴様ぐらいだ……星晶獣を脅してこんな事させるのは……」

「脅すとか言うな、ちゃんと話し合いだったろ」

「首を縦に振らねば命を奪われるのを話し合いとは言わぬ！」

「……ふ、ふふ……星晶獣は、死なないよ……ただ星晶獣だろうと、アンデッドになるから……わ、私の眷属になるだけ……一生ね……」

「なおの事理不尽ではないかあ……っ！」

己に降りかかった不幸に身を震わせるポセイドン。だが不幸なら負けてねえぞ……誇る事でもねえがな。

エンゼラは既にオイゲンさんに紹介してもらったアウギユステの職人さんに修理してもらっている。暫く飛ぶ事が出来るようにしてもらおう程度で上手く行けば今日の内には終わるはずとのこと。だが最終的にもっと本格的な設備がある島へ行つて改修、強化を行う。逐一修理して騙し騙し使うよりも一気に強化した方が安全で安く済むとシエロさん達と話し合った結果である。安く済むと言っても船の改修作業だ。それなりの値段になる。そこでポセイドンだ。

あの後俺とセレスト主導による実に穏やかな「話し合い」を経てポセイドンはシエロさんの海の家で従業員として働かせる事に成功した。大丈夫、話し合いです。セレストは何もしてないよ。大丈夫、大丈夫。

そしてそこで稼いだ給料をシエロさんを通じてエンゼラの修理費用に全て回す事にする。ついでに海を家の修理費も出させる。どうせ星晶獣だから金なんて使わねえだろ。ティアマトじゃあるまいし。

どの道騎空団の金庫からも金は出さないといけない。今回の修理費もすでに払った。ええ、ええ……結構なお値段でしたよ、ええまつたく。この時点でシエロさんに金額の相談と借金をする。エンゼラ改修はほぼ決定事項となつたのでその分もう金は借りた。シエロカルテ金融は無利息、しかも返済期限無しである。であるのだが、逃げられない。絶対に。THE・神出鬼没のシエロさん、たとえ同じ島に居たとして此方が先に島を発つても次の島に既にいるような人。勿論踏み倒す気など無いが、怖すぎである。万が一この人の気が変わるかと思うとぞつとする。利息無くとも俺の首輪は強く締まってゆくのである。きつと色んな依頼をまた頼まれるのだろうなあ、あつはつは！

そしてエンゼラ強化案について、ガロンゾ島へ行くべきだとシエロさん、そしてラカムさんにも言われる。ガロンゾと言う島はファータ・グランデ空域で随一の造船の島であると話を聞いた。そこでなら希望通りの船に仕上がるはずだとも教えてくれた。

「そう言うわけだ。お前にはバリバリ働いて貰うからなあ……」

「エ、エンゼラの……強化改修分……少なくとも、その分は出してもらわないと、ね……ふひ」

「ぐう……な、情けない……」

ちなみに万が一ポセイドンが暴れる様な事があったらリヴァイアサンからリヴァイアサン（笑）へと連絡が即入る。それがわかった時点でポセイドンを俺は消し飛ばす。たとえ姿を暗まそうが見つけ出して消し飛ばす。絶対に消し飛ばす。

「……お前って、何と言うか……ジータと違う意味で無茶苦茶だな」

「俺は俺の胃に優しくない奴は許さないのです」

「そうかい……」

ラカムさんは何とコメントをしていいのかわからない様子だった。

「シャツのサイズは大丈夫でしょうか、一応大き目のサイズを揃えましたがる」

「問題はない。要用であればもう少し我自身のサイズを変える」

上半身裸で腰巻きのみ、このままじゃいくら海の男らしくとも従業員としては公序良俗に反する。なので如何にも南国っぽい服（南国なんてアウギユステ以外に、俺は大して知らないが）を支給され着てるポセイドン。サイズは星晶戦隊の省エネよろしく、縮んでいるがそれでも2メートル近い。更に見た目が良いので妙に似合ってる。アウ

ギユステで見かけたサーファーっぽい。俺もしたかったなあ、波乗り……。
〈似合っているぞ、ポセイドン。立派な従業員だ〉

「黙れ、リヴァイアサン……」

「従業員、水デモ注イデ貫オウカ」

「ふんっ！」

「ブギャンツ!!」

「愚行、調子に乗るな」

「辛ツ!! 塩ツカラツ! ハ、鼻入ツタツ!!」

ティアマトの馬鹿が調子に乗ったら水は水でも海水を顔面に食らっていた。従業員にあるまじき行為、だがティアマトだからな。うむ、許そう。

「馬鹿は放っておくとして、今日からしつかりやれ。海の家 of 修復作業も残っているからまずそれだ。お前が生み出した魔物が壊したんだからな、責任取れ」

「水神たる我が……こんな陋劣な……」

「オラアツ！」

「ぐほおっ!!」

「立派なお仕事陋劣とか言ってるんなポセイドン! 世の大工さんに謝れっ! 馬鹿っ
!」

「そ、そーだそーだ……！ あ、謝れ……！」

「き、貴様……鳩尾に……っ!! その上、ここまで我に……ダメージを……っ!!」

今日中に労働のノウハウ叩きこむからな。俺の借金返済のために働いて貰う。

「ある意味空で一番星晶獣に強い男だな……」

「ザンクティンゼルじゃオイラ達全員で星晶獣に対して最初のハードルを馬鹿みたいに上げたからな。ポセイドンもそれなり以上の大星晶獣だが、相棒にとっちゃ所詮(笑)扱いだよ。子供を躱ける感じだな」

「まったく、昨日の死闘が馬鹿みたいだぜ……。ジータと言いつつ魔境か何かなのか、ザンクティンゼルって島は……」

「ジータと兄貴が例外なんだよ、ラカム……」

「わかってるよ、言っただけだ……」

ジータと同列にしないでくれビィ、俺はあんな底も天井も見えない強さじゃない。

■ 二 最終夜のお祭り騒ぎ

「そつすそつす、そうやってムラ無く炒めるっす」

「……むう」

「あ、まだキャベツ入れちゃダメっす！　それは最後っす！」
「何故だ」

「キャベツは直ぐに火が通るから、早く入れると炒め過ぎになるっす。肉、それで火の通りにくい野菜の順っすよ！」

「ふむ……」

厨房から聞こえるファラちゃんと言とポセイドンの声。時間は夜、海の家は見事運営可能にまで復旧した。ポセイドンにもガンガン働かせたのでよりハイペースに進んだ。朝から頑張った甲斐があっただぜ。

すべてが終ってからシエロさんが俺達全員にお礼だと言って店で食事を出してくれらることになった。昼の様にルリアちゃん達も調理に参加し、ポセイドンも今後厨房に入る事があるので料理上手なファラちゃんの監修で練習中。更に本来の従業員も呼んでの本格的な海の家メニューが可能な限り机に並んだ。

そんなわけで、もうどんちゃん騒ぎだ。うちの団だけじゃなく、ジータのとことシャルロットさん達も全員集合なのだから当然だ。うちの星晶戦隊の中には、ジータんとこの面々面と関わりのあるやつもいる。と言うかセレストを除いたマグナシックスは、ほぼ関りがある。そこらへんもあつて話が弾むのだろう。

おいフェザー君にユーリ君、ルリアちゃんとゾーイと大食い張り合うな、見えない

のかあの積み重なった皿の山。

そして、重要なのだがシエロさんはこの料理に関して――。

「団長さんは今までお忙しかったですからね。ゆつくり気楽にお食事を楽しむ事も出来なかつたと思いますので」

だつてさ。ありがてえ……、これが海の家の料理か……。俺の知らない食い物が沢山あるなあ。やつぱシエロさんは天使だつたんだね。

「首輪の紐きつうなつてもそれ言えるんか？」

「それはそれ、これはこれ」

「調子のええ奴」

この食事を目の前にしてそれは些細な問題だよカルテイラさん。まあ、實際些細ではないが……この食事は「お札」なのでお代は無し、その事を思えば……思えば……つ!!

「おう、おお……つ！」

「だあーっ！ 突然泣くなやつ！ びっくりするやろ、もおーっ！」

「アウギユステでは、今度こそ……借金は増えないと思つたんすよお……つ！」

「ええい、泣くのやめいっ！」

「あうっ!？」

頭をハリセンで叩かれ涙が引つ込んだ。

「男が借金増えたぐらいで何時までもメソメソすな！ 慣れっこやろ！」

「慣れたくねえ……」

「たくもお……あ、それならええ話あるで！」

「いい話い〜？」

「あんた、金銭方面に強いアドバイザーの一人でも団に雇わんか？」

「え？」

「んっふふ……ちよお〜どなあ？ 今回の騒ぎの影響でアウギユステの屋台引き上げる事にしたから色々島巡りしたいっちゆう、カワイイ商人がいるんやけどなあ〜？」

「……それって」

「何かと金銭以外でも、うまあ〜くフオロー出来る美少女エールの商人やけどなあ〜、シエロはん相手にも足下みられへんでえ？」

シエロさん、相手にも……だと？

「やあ〜誰かに必要にされたらついて行くかもしれへんなあ〜」

「……カルテイラさん」

「おうっ!？」

がっしりと両手を掴む。離さんぞ、絶対に離さんぞ。

「貴方が必要だから、俺の団に来てください」

「ちよ、その誘い方はちよつと、予想外……あんた、あ、あかんで……」

「俺と、一緒に、来てくださいっ!」

「わ、わあーっ!! わかった、わかった! 行くから手え離しいーっ!」

「嘘とか無しですからねっ!」

「こんなつまらん嘘言わんわっ! だ、だからはよ……手え……っ!」

「常識、ツツコミ、交渉人粹来た……っ!」

天を仰いでガツツポーズ! アウギユステで別れてもう合流は無いと思っていたので諦めていたが、実の所カルティライさんがいた間の旅は実に過ごしやすかった。何かとハッキリ、キツパリツツコミを入れてくれる人間は居てくれると助かる。

「たく……そんな気無い癖に妙な事しよる。あーもー顔熱……っ!」

「仲間にする気はありますよっ!」

「そう言う意味ちやう、あほたれっ!」

「あだっ!」

「部屋は前使わせてもらったとこでええから、明日からまた使わせてもらおうでっ!」

なんかカルティライさんが怒って行ってしまった。

「何に怒ったんだ……」

「どうしたんだ団長？」

「ああ、フェザー君……ユーリ君は？」

「途中で顔が青くなつてトイレに行つたぜ！」

言わんこつちやねえ。フェザー君の乗りに毒されるの早すぎるぞユーリ君。

「で、どうしたんだ！」

「いや、なんかカルティラさんが改めて仲間になってくれたんだけど、手握つたら怒つて行つちやつて」

「なるほど……多分拳で語り合えば気持ちに通じあつて怒つた理由がわかるぜ！」

「それは絶対不正解なのはわかる」

まあいいか、仲間になつてくれたんだし。

「……ふん！」

「あでつ!! な、なに……え、ジータ？」

「ふん、ふん！」

「ちよ、何つ!! 突ぜ、いつてえつ!! ジ、ジータ膝小僧蹴るのやめ、やめつ！」

「ふんふんふん！」

「あだだつ!!」

な、なんなんだコイツ突然!? いきなりそばに現れたと思つたら的確に俺の膝小僧

をつ！

「……」

「あ、コ、コーディネアさん、いだった!? ちよ、たす、助けて……っ!」

「……あはは!」

「あははっ!?!」

え、なんか笑って去って行っただけでコーディネアさん!? ちよ、どゆこと!? どう

言う反応なのあれ!?

「ふん! ふんふん!」

「いのででっ!? や、やめーっ!?!」

膝小僧が、膝小僧がああっ!?!

■

三 聖騎士団、裏の顔

■

団長が無意識にカルテイラに対して誑しっぷりを発揮し、彼女を惑わしているのを見て何となく不愉快になったコーディネアは、同じく不機嫌になったジータに膝小僧を執拗に蹴られ続ける団長に助けを求められるも「あはは」と笑ってその場を去ってしまう。

(まったく……我ながらなんと大人気ない)

ざわつく心を静めるために夜風に当たりに行く。騒がしい団欒の中から離れ海の家の外へ。外にも観光客が寛ぐ事が出来るスペースはある。その中で彼女はビーチパラスルと共に並ぶビーチベッドを見つめる。本来は横になるところであるが、今はただそつとそこに腰かけた。

(甲冑を脱いでいるとは言え、本来なら水着でも着て横になりたいものだがね)

宴の席でまで甲冑に身を包む事は無く、それらは船に置いてきた。だがそれでも騎士として必要最低限の武器を携帯しシンプルで凡そ女性らしいとも言えない服のまま、あまり常夏のビーチで過ごす格好ではなかった。だが夜の海から優しく吹いてくる夜風に当たり、昨日と打って変わって静かで穏やかな波の音に耳を傾けるとざわついた心も幾分か落ち着いてきた。

それでも彼女の心の中では、未だ治まらぬ思いがある。

(明日、団長達はここを発つ。私もバウタオーダ殿の船に乗ってリュミエール聖国へ戻りシャルロッテ団長に関しての報告を済ませねばいけない。だがその後は……)

ついに終えた【正義審問】。その結果、つまりいかにシャルロッテ・フェニヤが未だ変わらざりリュミエール聖騎士団の団長として相応しいかの報告にコーデリアは戻る必要がある。それで彼女の任務は完全に終わるのだ。

そしてその後はどうなるか。恐らく新たな任務を任せられリュミエール聖騎士団内部

で騎士としての志を忘れた者を告発、肅清する日々へと戻る。それこそが、リュミエール聖騎士団遊撃部最後の切り札である彼女の役目。

だが彼女自身の想いは――。

(……願わくは、彼と共にまだ旅をしたい)

あの日悪の姦計によつてゴブリンの巢へと取り残され、危うくブリジールと共にゴブリン共に鬨り殺しに遭う寸前、颯爽とは言い難いが頼もしくも普段通りに現れたのは团长だった。我ながら単純だとコーデリアは自傷気味に笑う。だがそれは騎士団に身を置く者として許されぬ思い。

(まるで恋物語の少女のようだ。こんな事で私が悩む事になるとは思わなかったが)

止む事のない団欒の声。あの中にもう自分が入れないかと思うと酷く寂しい思いになる。彼だけではない、あの団の仲間全員といふ時間はとても楽しかった。遊撃部のエースとして受ける重圧、容姿端麗な男装の麗人である事への期待。騎空団の中ではそんな物は一切なかった。

だが我が儘が許されるはずもなく、彼女自身もう諦めるべき事だとわかつていた。

(そうとも、今生の別れでも無いのだ……それに一時の夢と思えばまだ)

その様に彼女が全てを割り切ろうと思った時であった。

「実に良い夜ですなあ」

(なっ!?)

「おっと、そのままそのまま。振り向かずに」

不意に後ろから声を掛けられた。知らぬ声、団員のものでジータやその仲間達のものででもない。咄嗟に腰にかけた護身用の短剣に手を伸ばしたがそれよりも早くに肩に手を置かれ止められた。

(肩に手を置かれただけで……動かぬっ！ それだけではない、一切気配を感じさせなかった……っ！)

振り向く事さえできず、相手の顔も見えない。声からして男であるようだが、それ以外の事がわからない。団長達のいる所からは少し距離があった。助けを呼ぶか——コーディネリアは緊張した様子であるが、後ろから聞こえる声はとても穏やかで落ち着いたものだった。

「ご安心ください、貴方に危害を加える気はありません……リユミエール聖騎士団のコーディネリア・ガーネットさんですね？」

「……何の事だい？」

「ああ、隠さなくて結構。念のため確認をただただ、私もリユミエール聖騎士団の者です……遊撃部、最後の切札のお噂はかねがね」

「ならば名と所属、階級を名乗りましたまえ」

「申し訳ございませんが軽々しく言う事は出来ません。それは貴方も同じでしょう?」

男の言う事は当然だった。向こうは既に自分の事を知っているようであるが、遊撃部である彼女も自身の所属を軽々しく口にする事は無い。だがつまり、それは男も遊撃部関係者である事を予想させた。

「……何が目的か」

「そう緊張なさらず。ただ指令を伝えに来ただけです」

「指令だと?」

「そうです。貴方とブリジール殿への」

「ブリジールにも?」

「ふっふっふ……見せていただきましたよ。【正義審問】、実に見事でした。私もシャル

ロットテ団長殿の言葉、心に響きました」

「見ていたのか……しかし、一体どこから」

「ほっほ、それは秘密です……さて実は【正義審問】を終えたならば渡すように頼まれて

いた指令があります。貴方達は彼の騎空団へと引き続き同行して頂きたい」

（【正義審問】を終えたなら……? 遊撃部のトップは予想していたと言うのか、ここで

【正義審問】を終える事を……?）

相手の穏やかな口調と裏腹にコーデリアの緊張は高まった。更に男の謎が深まる。

「彼の騎空団……星晶戦隊の事か」

「ええ、今回の事で更にその異常さが際立った騎空団、帝国にも目を付けられあの騎空団は更に騒動の種になる事でしょう。生半可な団員ではあの騎空団に所属するどころか後を追う事もできない。しかし幸いにも貴方とブリジール殿はあの騎空団へ在籍していた。既に勝手は知っているはず」

「確かにその通りだが……」

「そして目的ですが……貴方があの騎空団にいる事で更に炙り出す事が出来るかもしれませんが」

「炙り出すだと……？ もしや」

「ご想像の通りかと。以前貴方とあの少年の手で改めて捕らえられた男から更に情報を得ました」

コーデリアの脳裏に自分を恨みブリジール諸共亡き者にしようとした元リユミエール聖騎士団の裏切者の姿が浮かぶ。

「残念ですが……やはり団内で奴と通じていた者は少なくなさそうです。奴が捕らえられたと知って姿を暗ました者が出ております。そして、その中には帝国とも通じている者がいた可能性が出てきました」

「なんと……それでは」

「はい、貴方にはそれらの裏切者を捕らえて頂きたいのです。どうやら、あの少年の下へはそう言った騒動も集まるようですからなあ」

本人が居たら泣いて否定したろう。しかし実際そう言った騒動が集まるので結局否定しきれず泣くだけになる。コーデリアはそんな光景が容易に想像できてしまった。そしてそれと同時に――。

（彼と、まだ旅を続けられるのか……）

不謹慎と思いつつもまだ彼らと共にいる事が出来ると思いその事を喜んでしまった

「意中なのは、あの少年ですか？」

「うっ……！ な、なにをつっ！」

「いやいや、失礼致しました。微笑ましいもので思わず」

「く、くう……っ！」

言葉の通り、微笑ましそうに笑う声が聞こえる。コーデリアは凶星であるゆえに赤面し言葉に詰まる。

「さて、あまり時間をかける事もできません。こちらを」

後ろから肩越しに二つの封筒を差し出された。それを受け取り表を見ると確かにリユミエール聖騎士団が頻繁に使用する封蝋が押されていた。

「指令の詳細はそちらに」

「もう一通の方は？」

「シャルロット団長へとお渡しください、あの方にも炙り出しに協力していただくので」「シャルロット団長にも？ ではまさか……」

「ふっふっふ……実に愉快な騎空団ですなあ。どうせなら愉快なのが良い、あの騎空団でなら辛き道のりも愉快なものへと変わるでしょう」

「……ああ、確かにその通りだよ」

大変な事ばかりだった。普通の騎空団、それどころかリユミエール聖騎士団でもここまで連続して騒動が起きる事は無い。それも星晶獣もからむ大騒動。なのにどうしてか、それすらも愉快に終わらせる。それがあの団長なのだ。

「さて貴方もあの輪の中へ戻られると良い。宴は楽しんでこそ」

「貴殿は？」

「私は消えるとしましょう、何かと忙しい身ですので……今回の【正義審問】については、こちらで処理しておきます。それではまた何時か」

「あ、待ちたまえ……っ！」

後ろから気配が消えて急ぎ振り返った。だがそこには誰もおらず痕跡すらなかった。まるで初めから居なかったかのよう。

（全てを見透かしたような語り口……そして気配一つ感じさせない技術、遊撃部関係者

だとしても、かなりの腕前……何者だったのだろうか)

リユニエール聖騎士団裏の顔とも言われる遊撃部、その全貌は遊撃部に所属する団員でも知る者は少ない。遊撃部、最後の切り札と言われ【正義審問】において絶対的信頼を持つコーデリアでさえも自身へと指示を出す者達の顔を知らぬ。

(遊撃部の上の者である可能性もある、か……)

考えても答えは出ない。今は言われたようにあの騒がしくも愉快な輪の中に戻るとしよう、そう思いつつコーデリアの足取りは先程と違い軽やかになり戻って言った。

そして、そんなコーデリアを見送る視線。

(ふむ、どうやら彼の騎空団との邂逅は、彼女……いえ、彼女達に想像以上の影響を与えたようですねえ)

夜の闇にまぎれる鋭い視線、その気配に気付いた者は果たして何人であろうか……。

(どうやら、あの少年と少女は私の存在に気がついたようですね……)

戯れる団長とジータ、二人はまるでこの闇に隠れる者に気が付いていない様に見えるが、ハッキリとこの存在に殺気を放っていた。

(まるで歴戦の古竜を目の前にしたような威圧感、しかし敵意は無い、が……ふ、ふふ、老骨ながら中々に心揺さ振られるものだ。滾りますなあ……)

額には冷や汗、そして口には笑みを。

(しかしザンクティンゼル、やはりあの島ですか……ふふ、まったく恐ろしい弟子を育てましたなあ)

その者は満足したのか、今度こそそこから去って行く。気配も、痕跡も、音も、闇へと溶けた。

■ 四 キミとオレと

「……消えたな」

「うん」

何やら遠くから殺気をぶつけられたので少し意識を向けたら、そう経たずに気配は消えた。ジータも気が付いていたようで同様の事をしたようだ。

「まあ明らかな敵意は無かったから誰かの関係者かな……まあいいや」
「そだね」

そんな事よかコーデリアさんに見捨てられ俺の膝小僧のダメージが加速した。いい加減膝小僧が粉碎しかねないのでジータを何とか宥めて止めさせた。

「っーんっ!」

「で、まだ拗ねてんだな……」

「つんつーんっ!」

「それじゃあ怒ってる理由わからねえんだけどさ……」

「つんつんつーんっ!」

「……あとそれ口で言うのやめろ、馬鹿みたいだから」

「ひどいっ!?!」

拗ねてますアピールで自分でつーんっ! とか言うなよ。子供か……ああ、子供だったな。所詮十代の若造だ。俺もだけど。

「お兄ちゃんが私に優しくくないよう……」

「お前が俺に厳しいんだよ、いい加減機嫌直せ」

海にせり出したテラスでお二人用のベンチソファアに座る。隣のジータは未だに不機嫌気味だがさつきよりはマシになった。横に置かれた机に料理を並べ、それを食わせたりして機嫌をとった。

「食べ物なんかで懐柔されないもーん」

「じゃあこのかき氷とやらはいらんな」

「かき氷?」

「氷を砕いて甘〜いシロップとフルーツをトッピングした南国らしいスイーツだが、いらないなら俺一人で食うとする」

「わ、わ！ 何それ素敵、美味しそう!? いる、欲しいですごめんなさい!」

ちよろいぜ。一匙すくってジータの口に運ぶと文字通り食いついて来たので成功である。ついでに俺も食べる。

「冷たあ〜い! 甘〜い!」

「うむ、美味しい」

ただ氷を砕いてシロップをかけただけだと言うのに何と言う美味しさだろうか。これは真似したい……魔法で氷生み出せば出来るな。シロップさえ買えば、いやシロップも作れるからなるべく安くして……いける。

「もう一口頂戴!」

「はいはい、ほら」

「あむ!」

出して食う、俺も食う。出して食う、俺も食う。それを繰り返す。シャクリシャクリと互いに食い続けていたのだが……。

「はうわっ!?!」

「おのおっ!?!」

突然の頭痛が俺達を襲う! こ、これは……シエロさんにかき氷貰う時に「気を付けないと頭が痛くなりますから」と言われたやつか!? は、初体験くあだだっ!!

俺とジータは暫し揃って頭を押さえて唸った。痛みが引いて落ち着くとお互いに顔を見合わせる。

「は、ははは！」

「ふふ、あははは！」

なんでかとてもおかしな気持ちになった。今度は二人揃ってルドさんの様に意味もなく笑ってしまった。

「あーおかしいっ！　なんかお兄ちゃんとかんな風にするの久しぶり！」

「確かにな」

「ザンクティンゼルは？　変わってない？」

「少なくとも星晶戦隊が揃っちゃった以外は普段通りだったよ」

「あのおばあさんは？」

「……普段通りだったよ」

「そっか、私おばあさんとよく遊んでもらったからなあ。今度挨拶行きたいなあ」

そうしてやれ、絶対喜ぶから。

考えてみれば、こいつが異常に強いのもあのばあさんが原因の一つか。俺と過ごす以外だとばあさんと遊んでたようだからな。主に組み手で。それで自然と強くなったか……。

「ばあさんとともに張り合えるのは、お前ぐらいだよ……俺はもう嫌だ」

「お兄ちゃんおばあさんに鍛えられたの？」

「強制的にな」

「あはは！ 強制だつて！ どうせ滅茶苦茶嫌がつたんでしょ？」

嫌に決まってるんだろ、なんど死にかけたと思つてんだ。

「けど別に大変じゃなかったけどなあ、私一緒に組み手で遊んでもらつても楽しかったし」

「ジータ、そこで組み手で『遊んで』とか『楽しい』とか言う言葉が出る時点でおかしいことに気が付いて。」

「とんだ空の暴れん坊になつちまつたなあ……」

「あ、暴れん坊つてなにさ!？」

「暴れん坊だろ実際」

「あ、あばあば……うぐぐつ！ そ、そう言うお兄ちゃんだつて空じゃ噂のロリコンで年上の巨乳好きの変態さんじゃん！」

「ぐあああつ?!」

身に覚え無死つ!!

「どういう事なの、ロリコンで年上ポイント好きつて!? 矛盾の固まりじゃん!？」

「俺がしるかあああつ！ 事実無根！ 清廉潔白！ 荒唐無稽！ 身に覚え一切ありません！」

「火の無い所に煙は立たない！」

「火がねえんだよ！ と言うか、非がねえんだよ！」

何だこの会話っ！

「それになあ！ ユーリ君仲間にしたからその噂も消えていく定め！ 見とれよ、俺がいかにもノーマルか教えたるからな！」

「それはそうとして、私も結構ポインですが、どうかっ!？」

「お前ほんと馬鹿なんじゃないか!？」

「どうかっ!？」

うるせえ!!

■ 五 キミとオレのソラ

■ ジータとクソみたいな会話を繰り広げ続けたのだが、俺は不思議と辟易するどころか興が乗ってしまい次々口から色んな言葉が溢れてきた。ジータも先程不機嫌であった事など忘れたようで、互いに言葉が止む事が無い。

「それで、スタン君って言うエルーンの男の子とお姫様を助けたの！」

「ほーん、お姫様ねえ」

「他にも七曜の騎士って人達とも戦ったんだけど強かったんだあ！ おばあさんよりはまあ普通だけど」

「比較対象う〜」

「それとジュエルリゾートって所があつてね、賭け事の船なんだけどすごい金ぴかで驚いちゃったの」

「賭けかあ……」

俺より先にザンクティンゼルを旅立ったジータの話は奇想天外なものばかり。巡る島の数も遥かに多く、起きる事件も更に多い。どれもこれもが大事件、俺も負けてないがやはりジータの格は違う。

「俺は細々としか移動できてないからなあ……」

「その分仲間増えてるから楽しそう」

「まあ楽しいっちゃ楽しいが……」

それに対して苦勞が、苦勞がなあ……。

「しかしよくそんだけ島を巡ったもんだ」

「お兄ちゃんもどんどん行くといいよ。バルツとか行きなよ面白いから」

「だなあ、コロツサスにも里帰りさせてえし」

まあその前にガロンゾなんですがね！

「ああー……しかし何か月経ったやら、長いんだか短いんだか」

「あつという間だったからねえ。私も未だに実感あんまり無いや」

「まあ、ほんとにあつと言う間だ。本当に……」

運命の日、帝国の襲撃から始まったジータと俺の旅の始り。

「帝国が攻めて来て」

「ルリアとカタリナさんが来て」

「そしてたらお前は旅に出て……」

そして俺も、旅に出た。

まだまだ話す事が沢山ある。マグナシックスとB・ビー、それにゾーイを仲間にして、ラムレッダを引き取る羽目になって、フェザー君が押しかけてきて、コーデリアさんにブリジールさんを助けて、カルテイラさんに色々助けてもらって、ルドさんに驚いて、ハレゼナを保護して、ルナル先生はセレストと仲良くなった。

ジータと会ったら俺は何を話そうと思っていたのか。仲間の事もそう、旅の話もそう、だけど俺は、もっと別の――。

「……ああ、そうか」

「どしたのお兄ちゃん？」

「なあ……ジータ」

「俺、お前に言わなきやいけなかつたんだ……」

「え？」

「帝国が来た日、お前が森に落ちたルリアちゃんを見つけ、家を飛び出したのを直ぐに追うべきだった。どこか……楽観的だったんだと思う。お前だと、その……大丈夫なんじゃないかって」

そしてその結果があれだ。俺が武器を手にジータを迎えに行くと、森から戻って来たジータは体こそ蘇生したが服はボロボロ、血まみれのまま。仰天したね。ゾンビでも来たかと思つたよ。

「けど一遍死んだって言うし、訳わかんないし、生き返ってるし」

「今それ言うの？」

「だってよ……あの時全部が急すぎて、お前直ぐ旅に出ちやうし……何にも言うべき事言えてないからさ……」

「そかな？」

「そうだよ、俺言いたい事山ほどあつたんだよ。いつも言つてたろ、後先考えず行動するなって……森に行く時は俺と一緒に……注意しても聞かないから、だからお前、あ

んな…………お前」

馬鹿野郎、そうじゃないだろう俺。

「違う、違うんだよ…………これじゃない、俺が言いたかったのはさ…………だからつまり…………」

「…………」

「ああ…………だから、なんだろうな、ようは…………そう、本当はあの時言うべき事だったんだ。そう、だからさ…………ああ、ああ…………」

「…………お兄ちゃん」

「…………ごめんなあ。俺、いつも傍に居たのに…………！ 肝心な時、一緒に居なくて…………！」

「お兄ちゃん」

「痛かったよなあ、怖かったよなあ…………！ お前、昔っからやんちゃなくせに、よく泣くし

…………そのくせ、人一倍おせっかいで…………だから、俺が何時も…………何時も…………！ なのに

…………俺…………！」

「お兄ちゃん」

「俺…………お兄ちゃんなのに…………お前を、護ってやれなかった…………！」

「お兄ちゃん！」

「ううっ」

不意に視界が暗くなった。そして体中が暖かくなる。

「言いたかつたのつて、そんな事？」

「うるせえ……そんな事つてなんだ。ずっと心配させるなつて言つてたろ。死ぬ奴があるか……謝る事も出来ないと思つたんだ……」

「気にしなくていいのに」

「馬鹿、気にするに、決まつてんだろ……ずっと一緒だつたんだぞ……」

「そうだね。そう、ずっと一緒だつたもんね。私がお兄ちゃんつて呼ぶようになって、ずっと一緒だつた」

一緒だつた。そうだと思つてた。けど今は違う。いつも隣にいた奴は、無限に広がる空を駆けている。そして俺も場所は違つても、同じ空を飛ぶ。

「ねえ、お兄ちゃん」

「なんだよ……」

「私、生きてるよ」

わかつてる。喧しいほどの心臓の音が聞こえるんだ。

「私の声、聞こえるでしょ」

聞こえてる。もう聞き飽きた声だ。

「私、またお兄ちゃんとお話してるよ」

そうだな。また話してる。馬鹿みたいな話をまた。

「だから泣かないで」

「泣いてねえし……海水だから、これ」

「海入って無いのに」

「うるへえ」

「……暖かいね、お兄ちゃん」

お前の方が暖かい。

「……話、聞かせてくれ。お前が見た空の景色、教えてくれ」

「うん、まだ一杯話したい事あるんだ。他にも色んな所に行ったから、お兄ちゃんに聞いて欲しいな」

「ああ……ああ……、聞かせてくれ……まだ、聞き足りないからさ……俺もまだ話したいんだ」

「うん」

もうずっと隣にはいないけど、ただ生きていてくれてれば良い。離れても空は繋がっている。と今強く思えた。

■ 六 赤と黒

「……なあ、オリジナル」

「だからビイだったの……なんだよ？」

「お兄ちゃんだ幼馴染だとか、そうは言ってもまだまだ子供なんだよな、どっちも」

「……ああ、そうだなあ」

「ビイ、そっちも頑張れよ」

「そっちも、兄貴の事助けてやってくれよ」

七 船出

「団長殿！ 積み荷の確認A班終了いたしました！」

「ご苦労さん、ユーリ君。あとそんな形式ばって言わなくてもいいよ」

「あ、いや……やはりこちらの方が慣れてるので」

「適当に崩しな、ここはもう軍じゃないよ。じゃあB班の手伝い頼む」

「了解であります！」

「おい」

次の日、エンゼラで積み荷のチェックを行いアウギユステを発つ準備中。なんとか予定通り出発できそうだ。

昨日のエンゼラ破損事件で長い足止めが危ぶまれたのだが、オイゲンさんがアウギユステの知り合いの騎空艇の職人に声をかけた所、島中から腕利きが集まり一夜にして飛べるまで修復された。流星に完全な修復とまではいかないが、それでも次の目的地となったガロンゾにまでは問題無く飛べるとシエロさんにまで太鼓判を押された。

なんでまたこんな腕利きが集まったのか不思議だったのだが、この人達は以前もジータに島を護られかなり恩があつたようで、今回また島を救つたジータとオイゲンさんに頼まれ、島を護るために戦つた男の船を直さぬわけにはいかねい、とどンドン集まつたらしい。

しかも、しかもである！ 修理費を既に払つていたのだが戻つた。戻つたのだ！ なんか払つた時の物をそのまんま返された。

こんないい仕事してもらつて無料と言うわけにいかない、職人の方達に流星に必要な分は受け取つてくれと言いに行つたら「アウギユステを助けてくれたお礼だ」と言われてしまつた。そう言う事言うタイプの間人は、絶対にもう金を受け取らない。困つてしまつたのだがここはありがたく返つてきたお金のありがたみを感じる事にした。

「団長、カルティラさん達の部屋開けておいたよ」

「ありがとうございます、フィラソピラさん。多分カルティラさん達もそろそろ来るんで。あ、それと申し訳無いんですけど、そろそろ出るってジータの所にちよいと連絡頼

みます」

「了解だよ」

フィラソピラさんが、クルクルとクリュプトンを回して飛んで行く。ジータ達はこことは少し離れた場所に騎空艇「グランサイファー」を泊めている。彼女達も今日発つらしいので、向こうも準備中でここに居ない。

「今度は一緒に島を発つ、か」

昨日の事はまったく恥ずかしい事をした。言うべき事とつと言えばいいだろうに、ジータに慰められるとは。おかげで他の面々にも見られたみたいだし、まったく俺もまだである。別に泣いてねえけどね、泣いては。本当だ。泣いてねえ。

「別に恥ずかしい事ねえよ」

「……B・ビィ、心を読むな」

「そりや失敬」

こいつは相変わらずだ。読心術なのか、それとも星晶獸的パワーなのか。

「ただ相棒、本当に恥ずかしい事なんかねえよ」

「そうかい」

「幼馴染で、妹みたいな奴があんな事になりや誰だつて動揺する。むしろ相棒は気丈過

ぎゃんぜ」

「気丈なわけあるか、狼狽えまくったわ」

「それでもねえよ。何とか押し止めてたんだ。相棒は溜め込む節あるからなあ、駄目だぜ。そう言うのは」

「……何が言いたんだよ」

「ジータはいねえが相棒には仲間がいる。オイラもティアマト達もいるんだ。頼れよ、皆相棒を信頼してるんだ」

「こいつ本当にB・ビー？ 本体のプロバハさん来てないですかねえ。」

「言われなくても……いつも頼ってるよ。お前もティアマト達も、仲間なんだからさ」
「そか……わかってりやいいんだよ」

「ま、ここは感謝しておく。あと別に泣きそうになつてねえから。空を見上げたのは天気を確認してるだけです。泣いてねえから。ほんとほんと。」

「マア、ツタク、オ前ハ素直ジャナイナア？」

「うおおつ!! ティ、ティアマト!!」

「ヌルつと背中に現れるなビビるから!!」

「ホレホレ、私ニモ甘エテ良インダゾオ？」

「やめろ引つ付くなっ!!? 甘えるなんて話してねえだろ!!」

「ケケケ、ドウシタドウシタ? 何時モノ威勢ガ無イゾウ?」

こ、このクソ星晶獣（笑）が……っ！

「いい加減にしろ」

「グエツ!？」

シユヴァリエか？ どうやら拳骨でティアマトを倒したらしいな。助かった。

「まだ仕事があるんだ。主殿の邪魔してるんじゃない」

「グオツ！ ヒ、引キズルナ……ッ！」

「助かったシユヴァリエ、ありがとう」

「ああ……それと主殿」

「なんだ？」

「先ほどのB・ビィの言葉、あれは我ら皆の総意だ。頼ってくれていい、我らは仲間なのだからな」

あ、ちよつと天気確認します。

「そうかそうか、しかし今日は晴天だー」

「それは良かったよ……後助けた札にケツを」

「はよ行けや」

台無しだよ、もうお天気確認する必要消滅したわ。

シユヴァリエは笑いながらティアマトを引きずり去って行った。出発前だと言うの

に疲れるなあ。

「ジミー殿ー！」

「今きたでー！」

「お、来たみたいだぜ相棒！」

外から俺を呼ぶ声がある。ジミーと呼ぶ人は一人だけだ。

「シャルロットさん、どもです！ 今行きます！ B・ビー、コーデリアさん達呼んでくれ」

「あいよ」

エンゼラの外に荷物を持ったシャルロットさん、カルテイラさん、そしてバウタオーダさんとリュミエール聖騎士団の人達がいた。駆け足で外に出て迎えに行く。

「遅れてしまい申し訳ありません、少し準備に手間取りました」

「いえいえ、こつちも丁度終わったんで」

「カルテイラ殿も荷物を持っていただいて申し訳ございません」

「ええて、ええて。仲間になるんや、助け合いな」

「カルテイラさん、部屋開けといたんで」

「おおきに！ 前と一緒にどこやる？ 荷物置いて来るわ」

「うーす」

そう言つてカルテイラさんが相変わらず沢山の荷物を背負つてエンゼラへと入つて行つた。それと入れ替わる様にコーディアさんとブリジールさんが急ぎ足で現れた。

「シャルロット団長、お待たせしました。申し訳ありません、積み荷のチェックをしていただいたもので」

「いえお気になさらず、態々申し訳ない」

「シャ、シャルロット団長と一緒にの旅……とことん夢のようです！」

なんか昨日宴会の後、コーディアさんが俺とシャルロットさん等リユミエール聖騎士団関係者を集め新たな指令が届いたと話があつた。小難しい事もあつたが、要約すると裏切者が逃げたっぽいんで、シャルロット団長と協力して捕まえてね」って感じ。

つまりシャルロットさん、加入であります。

「急だわなあ、ユーリ君にカルテイラさん、加入ラツシユかよ」

「なあに、仲間が増えるのは良い事だよ団長」

「はいです！ それにシャルロット団長が仲間になるならとことん百人力です！」

「ふふ、ブリジール殿大袈裟であります。それにこの騎空団ではそちらが先輩、何かと助けていただくと思いますが、よろしく願ひするであります」

「あわわ、私がシャルロット団長に……と、とことん頑張りますです！」

ブリジールさんが色々てんぱっているなあ。全くハーヴィンが並んでいちやいちや

と、和むじゃねえか！

「俺としてはコーデリアさんとブリジールさんがまだ一緒に居れる事も嬉しいですよ」

「ふっ、こちらこそありがとう団長。貴君と旅を続けれる事に感謝を」

「自分もまだまだこの騎空団で頑張るです！」

ほんとこの二人の脱退は痛いからな。嬉しい限りだ。

「団長殿、シャルロット団長達の事、よろしくお願いいたします」

バウタオーダさんとその部下の人達が俺に向かい頭を下げた。バウタオーダさん達はこちらへの同行は無く、この後も本来の任務を終えてリユミール聖国へと帰国する。

「貴方なら安心して任せる事が出来ます」

「いえ、恐縮です」

「むう、何だか子供の旅立ちを見守られてるような……」

「心情としてはそんなところじゃないっすか？」

「失敬なっ!？」

はっはっは、怒ってポコポコ叩いても痛く……痛く……。

「シャルロットさん、的確に膝小僧を狙わないで!?! 昨日のまだ痛いの!」

「ふん、ふん!」

「あでで！ シャ、シャルロットさん、俺に遠慮無くなってないっ!」

「今更遠慮する仲ですか、ふん！ ふん！」

「あ、ああっ!! 膝小僧が、膝小僧がああ！」

ダメージが加速していく?!

「どうやら、大丈夫そうですね。この騎空団でなら、気兼ねなく任務に集中できるでしょう」

「ああその通りだバウタオーダ殿。それだけじゃない、この騎空団は愉快でしょうが面白いのだよ」

「とことん楽しい事ばかりです！」

「そのようですね。私も縁があれば加わりたいものだ」

ねえ皆さん!? 和んでないでシャルロットさん止めてくれませんかね!?

「お兄ちゃんあ——んっ！」

「ふん、ふ……っ! おや?」

不意に聞こえたジータの声にシャルロットさんのポカポカパンチが止まった。ナイスだぞジータ!

「こつちも準備できたあーっ!」

ジータはグランサイファアの甲板に居た。グランサイファアからフィラソピラさん

がエンゼラに飛び移っている。目が合ったので手を振って置く。お疲れさんです。

グランサイファーは空では無く、海の上を進んでこちらの方に来てくれたらしい。しかしジータはここから離れていると言うのによく聞こえる声だ。

さて。どうやら、全ての準備が整ったようだ。

「それじゃあバウタオーダさん、俺達はここで。また機会があれば会いましょう」
「バウタオーダ殿、何かと心配をかけて申し訳ございませんでした。しかし今度からはジミー殿の団に居るので大丈夫です」

「ええ、我々も任務で会う事があるかも知れません。その時はよろしく頼みます」
バウタオーダさん達と別れの挨拶を済ませエンゼラに乗り込む。

「セレスト、大丈夫そうか？」

「う、うん……大丈夫、ガロンゾまでは……絶対に無傷で行く」

セレストが珍しく燃えている。今回の事で操舵士（厳密には違うのだが）としての意識がより高まったらしい。ラカムさんからも色々アドバイスを貰っていたので、今後の旅はより良い船旅になるだろう。

そして船が動き出す。水上をグランサイファーと並行して進む。

「バウタオーダ殿おお——っ！」

シャルロットさんがこちらを見送り続けるバウタオーダさん達に向かって叫んだ。

「我ら、リユミエール聖騎士団！」

「清くっ！」

「正しくっ！」

離れて行くバウタオーダさん達に聞こえる様に、シャルロットさん、そしてコーデリアさんとブリジールさんが叫んだ。その声は確かに届き、バウタオーダさん達はその場で背を正し叫ぶ。

「高潔につ！」

正義の誓いもまた、空の下繋がっている。彼女達には、正義と言う強い絆がある。「行ってくるでありますっ！」

■ 八 さあ行こう、空の果て

■ アウギユステの海から二隻の船が飛び立つ。

蒼穹を思わせる蒼、竜の様な姿のグランサイファー。

大海を行く大魚を思わせるエンゼラ。

それらを見送るのは、正義の騎士団、島の者達、そして島の守り神リヴァイアサン。二隻はしばし並び飛ぶ。

騎空団の仲間達が皆甲板へと並び、互いに手を振り、互いの船旅の無事を祈る。

中でも一際大きく手を振る二人。

「ジータアア——ッ！」

「お兄ちゃああ——んっ！」

船と船、それぞれから二人が叫ぶ。

「また会おうなあ——っ！」

「また会おうねえ——っ！」

次は何時会うのだろう。

次は何を話すのだろう。

別れはやはり寂しくもあり、されど、きつとまた会えると二人はわかった。この空が繋がっているかぎり、二人を分かつものは無い。

雄大なる青き空は、見守り続ける。

彼の者達に、幸多からんことを。

■ 終らない

■ なお今回の事で、シエロカルテの海の家で働く事になったポセイドンであるが、その

容姿から「イケメンマツチヨの店員」として話題を呼び女性客を獲得。さらに水の星晶獣としての力を活かしライフガードとしても活躍。更にまた本人が案外料理にハマリ色々作る内、ポセイドン提案によるアウギユステの海鮮丼、通称【ポセイ丼】が大ヒットした。

そしてユーリを仲間にした事で多少は緩和されると思った「ロリコン、年上巨乳好き」の噂だったが、趣味で男を追加したと言う方向に受け取られてしまい「ロリコン、年上巨乳好きでしかもホモの可能性が微レ存」と言う噂が追加されるだけに終わる。

「なんでじゃあああ——っ!？」

彼の者に、幸? 多からんことを。

合掌。

少し違う空編 I

スープが冷めない距離ぐらいズレた空

■
一 もしかしての空

「はわわ！で、出ました！」

「でけえな。だが星晶獣じゃあねえ、話も通じないようだし……ルリアちゃん、ビイト下がって。ビィ、ルリアちゃんを頼むぞ」

「任せろ！」

「カタリナさん、デイスペルマウントお願いします！」

「了解した！」

とある島、その奥地の洞窟で数人の人間達が巨大なドラゴンを相手に立ち回っていた。天井に空いた僅かな穴から差し込む光しか自分達を照らす光源が無い中、この者達は10メートルはあろう体長のドラゴンを相手にする。

「ラカムさん、閃光弾っ！ 野郎目が弱い！」

「了解だっ！ 全員目閉じとけよ、食らえっ！」

「GUGAA!？」

ドラゴンと言うが、その異型の化け物は暗い洞窟に生息する怪物。通常のドラゴンと比べると遙かに手ごわい相手。

「GAAAA!!」

「これは、瘴気のブレスかつ?!」

「ゲホッ！ くっさ……!! けどデイスperlマウント頼んで正解っ！ イオちゃん、アイスで腕を凍らせてやれ！」

「任せてよっ！ それ！」

「GUGYAA!？」

しかしこの者達は臆する事無くそのドラゴンへと立ち向かう。

「いいぞ、怯んだ！ オイゲンさん、野郎の頭にデカいの頼みます！」

「あいよつと！」

「Gua！」

ドラゴンはわけがわからなかった。自分より遙かに小さな二足歩行の生物が、ドラゴンのブレスすら恐れず向かってくる事が。

「ロゼッタさん！ あいつの足を止めて下さいっ！」

「任せてちょうだい」

四肢を突然現れた茨で固定され、身動きが取れなくなるドラゴン。地面へと倒れそしてその視線の先に見たのだ。

「仕上げだ！ やつちまえジータ」

「任せてお兄ちゃんっ！」

一振りの剣を構え閃光を放つ少女の姿を。

「食らええ!!」

「あ、馬鹿！ それじゃ、威力が大き、ぎやあああーっ!?」

「あ、兄貴いいーっ!?」

「お、おにいさああーっ!?」

「やばい、今ので天井が崩れたぞ!」

「地面に穴も開いたわ!」

「坊主が落ちたぞ!!」

「い、いかん塞がれる！」

「不味いわ、この先は魔物の巣よっ！」

「ご、ごめーんっ！ おにいちゃあああーっ!?」

それと自分ごと攻撃の餌食になった少年の姿を。

■ 二 まあ然程変わることなし

目を覚ますとグランサイファアの自分の部屋に戻っていた。どうやら「何時も通り」に無事？ 助けられたらしい。

「あだだっ！」

「あ、兄貴目が覚めたかつ!？」

ベッドから身を起こそうとすると体中に激痛が走る。痛みにもがくと、これまた何時も通り俺にとつての相棒、赤い子竜のビイが俺の無事を確認した。

「……今日はどのぐらい？」

「あ、ああ……大体2時弱間寝てたぜ」

「前より短いな」

「あ、兄貴が強くなったんだよ、きつと」

「丈夫になっただけなんだよなあ……」

「ご、ごめん」

「謝るなビイ、虚しいから」

揃ってため息を吐く。もう「俺一人だけの身」ではないと言うのに、あの娘は全く学

習せん奴だ。まことに遺憾である。

「そう言えばルリアちゃんは？」

「兄貴がうなされて汗が酷くつてさ。今タオル変えに……」

　　ビイがそう言うのと扉が開いた。手に水を入れた桶を持って入ってきたのは、蒼い髪を伸ばす少女ルリアちゃんだった。

「ビイさん、戻りまし……あ、お兄さんっ！」

「おつす」

「よかった目を覚ましたんですね！」

「今丁度ね」

「ルリア戻ってきたし、オイラ皆に知らせに行くぜ」

「ああ、頼むわ」

　　ビイがふよふよ浮いて部屋から出て行くと俺とルリアちゃんだけになった。

「悪いねえ、何時も、あちち……」

「あ、無理しないで下さい！まだ治ってないんですから」

　　体には湿布やらが貼られている。打ち身や打撲は後引いてヒールでも治り辛いからなあ。

「ヒールってイオちゃん？」

「はい、直ぐに使ってくださいましたよ」

「後でお礼言わんとな」

毎度毎度迷惑をかけて申し訳ない。

「ルリアちゃんもごめんね……何時も危ない目にあわせて」

「そ、そんな事無いです！」

「ジータも前よりは巻き込み事故減ったんだけど」

「それは、その……ジ、ジータもお兄さんが大丈夫だって信じてるからああ言う風に、つまり、えっと……」

「……やめよう、ルリアちゃん」

「はい……すみません」

謝るなルリアちゃん、君は悪くないから。悪いのは。

「お兄ちゃん起きたっ!? さっきはごめ、ぐえっ!?」

「おう、反省会じゃ」

こいつなんで。

■ 三 キミの名は？

今からもう何ヶ月も前の事。それは突然起きた。

俺が住む小さな島ザンクティンゼル。田舎と言うのに相応しいその島には、俺が住む村以外に村と言う村は無く森が広がるぐらいの島。俺はそこで生まれた。

過疎気味の島には若い者は少ない、俺と同年代の奴も多いとは言えない中で俺には幼馴染の少女が居る。少し歳は下だが俺がまだ小僧だった時に島に越してきた子供、名前をジータと言った。

歳が比較的近い事に加え、家が隣だったので自然と俺はジータの親に代わり面倒を見る事があった。その時から俺は彼女にお兄ちゃんと呼ばれるようになる。またジータと共にいる子竜ビイもまたこの時からの付き合いで、俺の事を兄貴と慕ってくれている。

そしてある日、ジータの親父さんが行き成り旅立った。突然の事に驚いていたのだが親父さんは元騎空士と言うので何か目的があったのだろう。

だが困った事にジータは一人親、母親の方は俺は行方不明と聞いており親父さんは多くをジータにも語っていない。なのに父親の旅立ちである。おい娘どうすんだ、と思っただけが一切を俺に任されてしまった。おやおや？

まあ俺の方からも日頃「面倒見ますよ」とは言ったよ？ だが全部任せられるとはな。

それはともかく、それから更に彼女は俺の家に入り浸るようになる。そうでなければ

村に住むあるばあさんに剣や弓の稽古をつけられていた。本人は遊びのようだったが、まさかあんな化け物級になるなんて……。

まあこつちもともかくとして、そんな日々が続くと思つたある日運命の日が訪れる。

普段どおりの一日が始まると思つた日の朝、空に巨大な戦艦が見えたのだ。行商等の騎空艇が稀に来る程度のザンクテインゼルであんな戦艦を見た事が無い俺達住民は驚いた。だが更に突如として戦艦の脇で爆発が起きる。そしてその中で戦艦から何かが墮ちるのが見えた。

人かどうかはその時点でわからなかったのだが、ジータがそれを見つけて駆け出した。それを見て俺もまた慌てて彼女を追つた。きつとここで急ぎ追わなかったら、運命も変わったかもしれない。

途中ジータとビィと逸れた俺が森の中で見つけたのは、意識を失っていた少女だった。その子こそがルリアちゃんだ。カワイイ。

幸い怪我は無く気を失っているだけだった。声をかけると意識が戻りルリアと言う名を告げる。だがどうしたのか聞いてもどうも要領を得ない。少なくとも空に未だ浮かんだままだった戦艦と関わりがあるのは確かだった。

どうも嫌な予感がした俺は、ジータ達の事を気にしつつもルリアちゃんを連れてその場から急ぎ逃げ出した。こう言う時の悪い予感と言うのは、この頃から常に当たる事が

多く俺は実に嫌だった。そして案の定その予感はある。

森でルリアちゃんの手を引いて走る中、戦艦から降りて来たと思われる兵達と出会う。だがルリアちゃんを保護しに来た親切な人達には見えない。向こうは問答無用でルリアちゃんを渡せと言うので、理由を尋ねると秘密の一点張り。怪我をしてるかもしれないからせめて治療ぐらいさせてくれと言うと、なんと剣を抜かれてしまう。

現地の村人Aである俺に向かって剣を抜くとはただ事ではない、いよいよもつてこの兵隊が信用できないので此方も相応の対応を取った。ジータ程じゃあないが俺も彼女に強制的につき合わされたばあさんとの組み手のせいでそれなり以上に強くなっていた。武器は無いが無手でも十分対応できる。途中剣は奪わせてもらったが。

そうこうしていると兵が集まり出してしまい、面倒だなあ、と思つたら此方にも援軍現る。冷気を込めた剣撃を放つ女騎士カタリナさんが現れた。

助力に感謝するとカタリナさんは自らをルリアちゃんの保護者と名乗り、逆にルリアちゃんを助けた事を感謝された。

カタリナさんからここに来ているのがエルステとか言う帝国の軍と言う事を聞き、なんでまたルリアちゃん達がそんな軍から逃げてるのか気になったのだが、俺がその疑問を口にする事を状況が許さなかった。

何時の間にやら島に散っていた兵が全て集まり俺達を取り囲んだのだ。そして部隊

の指揮官ポンメルンと言う髭野郎が現れるとやはりルリアちゃんを引き渡せと言う。行き成り出てきて上から目線の嫌な奴だと憎まれ口をたたいた。ポンメの奴が帝国を敵に回す気かと怒っていたが、いたいけな少女を無理やり攫うのを見てはどちらに付くか明白である。

もつと言うなら俺はカワイイ方の味方なのだ。そう言い放つと更にポンメは激高した。

ポンメの実力はわからなかったが、周りの兵隊は有象無象であった。日頃ジータを相手にしている方がきつい、その事を思えば軽い軽い——と高を括っていたらヒュドラと言う多頭の竜のような化け物を呼ばれてしまう。

流星にこれは不味い、魔物は精々ウィンドラビットのような小動物系しか相手をした事が無い。巨大な体軀に怯んだが後ろにはルリアちゃんがいる。確かに見ず知らずの少女だが、ここでルリアちゃん達を差し出して命は助けてくださいとポンメに言うは真つ平ごめんだ。

村にはあの化け物じみたばあさんもいる。そしてジータもいる。時間を稼げばルリアちゃんとカタリナさんは助かるだろう。

目の前の相手は、多頭の化物であっても正しく怪物であるドラゴンそのものではない。デカイ蛇のあつまり、そう思う様にして覚悟を決める。

——まあ、負けましたがね。

頭三つ切り落とすまでは頑張ったのだが、ついに俺は力尽き負けてしまう。口から吐くヒュドラの炎に腕を焼かれ動きを止めた隙に奴の鋭い爪で体を引き裂かれてしまった。

一気に裂けたので痛みを感じる暇も無い。血が噴出すのを感じつつ、ルリアちゃんとカタリナさんが俺を呼ぶ声が聞こえ、そして森の反対側から現れたジータとビィ、二人と顔があつた。

その時消え行く意識の中でヒュドラは、見事ジータに倒されると確信。最後に一言ポンメに対して「ざまあみろ」と呟き俺は死んだ。

■ 四 穏やかな心もちながら激しい怒りによつて目覚めた伝説の戦士

「いいでしょう！ 貴方も殺してさし上げますヨオ！ あの小僧のように、ですネエ！」
「あの小僧のようにな？ ……お兄ちゃんのことか ……お兄ちゃんのことか——！！！！」

と、言う会話があつたのか不明だが大体こんな事があつたらしい。

あつたらしいと言うのは、俺死んでたから見てないのでビィやルリアちゃんから聞いて

た話から想像するしかないからである。

しかし死んでたとしても話しも聞けないはずなのだが、そこは奇跡が起きたとしかいえない。

何故なら俺は生き返ったからだ。

ポンメにざまあ(笑)と呟いて完全に意識が消えた俺だったのだが、ふと肉体の感覚が戻るのがわかった。それは死の空間ではなく、夢の中。そうか、俺は眠っているのだと理解すると遠くから俺を呼ぶ声があった。だがあまりにもうるさい。夢の中で言うのも可笑しな話だが、耳が壊れるよううるささで「お兄ちゃん」と連呼され思わず飛び起きた。

完全に意識を回復させた俺は自宅のベッドで目を覚ました。周りにはルリアちゃん、カタリナさん、そして涙を浮かべるジータとビイがいた。

死んだはずなのにどういう事？ とカタリナさんに聞くと、ルリアちゃんの不思議な力で生き返ったというのだ。確かに、すっかり傷も塞がり焼かれた腕も戻っている。こりや助かつちやつたなあ、と暢気に考えてたらとところがどっこい自体はそう甘くない。俺の命はルリアちゃんと共有する事で助かったのだ。つまり今俺とルリアちゃんは運命共同体、二人で一つの命を持っている事になる。

これはとんでもない事だ。こんな俺なんかと命を共有しちゃってどうするんだと

言ったら、そっちかい！ と皆に突っ込みを食らった。ルリアちゃんには、怒ってないのか？ と聞かれたのだが……普通にポンメ達の方が悪いしあつちに怒つとるわい。ルリアちゃん？ 怒ってないよ、俺はカワイイ子に甘いのです。

さて更に問題がでる。ルリアちゃんと命を共有した事で俺達は余り離れ離れになれなくなった。だがルリアちゃん達は帝国に追われている身なのにで一箇所にはおれない。つまり俺はザンクティンゼルを出なければならぬのだ。

まあいいけどね。と言ったらルリアちゃんとカタリナさんがずつこけた。あんまりにも軽く言い過ぎたらしい。ジータはゲラゲラ笑ってたが。

ルリアちゃんを助けると決めたのも自分で選んだ事だ。それで死んで生き返って空の旅に出る事になるなら、それは自分で望んだようなものだからな。そう言うジータが突然自分も行くと言い出した。俺もルリアちゃん達もビックリしたが、俺と離れるのが嫌なのが主でそして「イスタルシアに行く約束」を出される。

昔ジータの両親が続けて姿を消して暫く経った時、二人で空の果てにあると言うイスタルシアと言う島へ行く事を約束した事がある。子供の約束だったのだが、彼女は本気だったようでルリアちゃん達とそこを目指すのだと言う。結局ジータとビイも一緒に旅に出る事になった。

ザンクティンゼルを発つ時皆に見送られカタリナさんが乗って来た小さな騎空艇で

出発、クソ狭い中無理やり詰め込み旅に出た。

その後は色んな島を巡る事になる。重量オーバーとカタリナさんの操舵技術の低さからポート・ブリーズ諸島へ墜落、そこで俺達は操舵士ラカムさんと出会う。ラカムさんを仲間にし騎空艇グランサイファーを手に入れた俺達は、半ば成り行きで騎空団を結成。団長をジータ、副団長を俺にして騎空団〔私とお兄ちゃんと愉快な仲間たち団〕は結成された。

この名前に関してはもう何も語りたくない。ジータ以外の皆で猛烈に反対したのだが、最後は団長権限とジータのゴリ押し（物理）で決定された。

団名の事はともかく、次に俺達は騎空団として初の依頼を受けて火の国、火山の島バルツ公国へとやってくる。その大公さんを見つける仕事だが大公さんを見つける前に、その弟子であると言う少女イオちゃんとの出会った。

その後師匠である大公さんを探すため、成り行きであったがイオちゃんと力を合わせてちよつと病んでた大公さんを保護、その後イオちゃんは俺達の仲間になった。

実に助かった。カワイイ上に常識人だ。これでよりジータへのストツパーが増えたため俺の負担が減った。

次に訪れたのは海の島アウギユステ。そこでは帝国と戦争中で折角の海だというのにゆつくりも出来なかった。

そんな中でアウギユステに雇われている傭兵達を束ねる男オイゲンさんと出会った。俺達はオイゲンさんと協力し、帝国を追い出し海を取り戻した。そしてオイゲンさんもこれで仲間となった。

そして最後、俺達は森の島ルーマシー群島で謎の女性ロゼッタさんと出会った。俺達はこちらまで帝国と何度かやりあっており、中でも黒騎士を名乗る子連れ騎士と夫婦漫才師とは浅はかならぬ因縁が出来た。その関係でルーマシーに来たのだが、そこで出会ったロゼッタさんは色々を知っているようで俺達と旅を共にすることになった。

その後も俺達は帝国との戦いを繰り返しながら騎空団としても精力的に活動した。とくに団長であるジータが報酬の値段に関わらず、誰かが困っていると知っては依頼を受けてくるので休む暇は無い。尤も反対する気も無い、それにその甲斐あって多くの島々には、俺達の友人が大勢増えていった。騎空団の仲間にもそなっていないが、助けが必要なら何時でも声をかけてくれと言う人が多く、そして誰もが空でも屈指の実力者ばかりだ。

しかし旅の中で困る事は勿論ある。むしろそっちの方が多いいのではないかと思う。団長であるジータが奔放であるために、副団長であり昔からストッパーとして苦労した俺は空でも変わらずなのだ。特に戦闘においてジータは無類の力を発揮するが、同時に俺が最も苦労する時だ。

俺の死を目の当たりにしたジータは、怒りを爆発させその戦士としての才能を覚醒させた。以前からばあさんとの鍛錬で異常な強さを持っていたが、それが加速し現在負けなしである。神とも言われる星晶獣すら基本ワンパンKOなのだからどうしようもない。そんなジータは昔から手加減が苦手でやりすぎる事があるのだが、それに決まって巻き込まれる者がいる。

そう、俺だ。

■ 五 どうあがいても

■ 「派手な！ 威力の！ 攻撃は！ 無しって！ 言ったでしょうが!?!」

「い、痛いっ！ 痛い痛いっ!?!」

「これで何回目だと思っとるんだ!?!」

「いたたたっ!?!」

「俺は今ルリアちゃんと命共有してるから、絶対に死ねないってわかってるだろ!?!」

「け、けどお兄ちゃんその日のうちに回復してピンピンしてるじゃん、いったああいつ!?!」

「お前の攻撃で無駄に丈夫になったんだよ!」

膝の上に横たわらせたジータのケツを叩く。とにかく叩く、叩いて叩いて叩きまくる。

こいつに悪気が無いのはしっている。ジータはそう言う娘だ。手加減できず派手な攻撃を撃つたせいで巻き込まれたときもあるし、予め後ろに下がって攻撃させても偶然ジータの攻撃で地面が崩落して死に掛けたときもある。遺跡や洞窟なんかじゃ天井が崩れる、床が崩れるのは当たり前。魔物の巣に行けば想定以上の魔物が居る事が多くジータが範囲攻撃して俺が巻き込まれた。

ジータが直接悪いわけじゃない例もあるが、それにしてもジータの攻撃での負傷が多すぎ問題。なので一度だけグランサイファーに俺とルリアちゃんが残って他のメンバーだけで依頼を受けた事があったのだが、ビィやカタリナさん達だけではジータの縦が上手く出来ず大変な目に遭ったらしい。その日ビィ始め仲間達に申し訳ないが一緒に来てくれとボロボロの姿で頼まれ首を縦に振らずにはおえなかった。

ともかく幾つかはジータが気を付けてれば回避できた事故である。そのため日頃大技を撃つ際は注意しろと言うのだがどうしても失敗する事がある。今回洞窟に住み着いた瘴気を放つドラゴン討伐と言う仕事で、洞窟と言う狭い空間での戦いだつた。そのため派手な攻撃は禁じていたのだが最後の最後にジータが派手にやった。

洞窟が崩れ穴が開き、そこに堕ちた俺は魔物の巣窟となっていた地下で一人救援が来

るまで戦い続けた。ジータ達が来た時俺は丁度全ての魔物を倒しきり安心して気絶した。

「お、お兄さん。それぐらいで許してあげて下さい。ちよつと可哀想ですう……」

「駄目だ！ あと100回は叩く！」

「お尻割れちやうよっ!？」

「生まれた時から割れてるだろ！」

「んきやあああっ!？」

果たして今まで何度ジータのケツを叩いただろうか。ザンクティンゼルに居た頃から悪戯やらするのでその度怒ってはこうやって折檻したものだ。

森にある祠に悪戯しようとした時は、かなり本気で止めたからな。何祀ってるか知らんが罰当たりな事しちやいかん。

「ルリア、ここは彼に任せておこう」

「で、でも」

「何時もの事よルリアちゃん。一先ず今日もお兄さんが無事……かはともかく、生き延びた事を喜びましょう」

「ロゼツタさん……そ、そうです、ね？ それじゃあ」

「あ、待つて皆!! お兄ちゃん止めてっ！」

「すまねえな嬢ちゃん、今日も指示を聞けなかった方が悪いって事で」

「大人しく怒られときな。じゃ」

「そ、そんなっ！」

「よそ見しないっ！」

「いったああっ!!」

「兄貴、まあ程ほどにな？」

「ジータ、後でお尻冷やしてあげるからねー」

「ま、待ってーっ！ あいたああーっ!!」

少なくとも、これが今の日常だ。

六 副団長は苦労性

【私とお兄ちゃんと愉快的仲間たち団】での日常と言うのは極めて多忙である。と言うのも副団長である俺は、ある意味で団長のジータ以上に仕事が多いのだ。と言うのもジータには書類整理などの事務仕事は碌に出来ないからであって、彼女の役割は体を動かす仕事だけである。

俺はと言うと、依頼の書類やら団の財布の管理やら物資のリスト製作に団員の役割分

担を決めたりと仕事部屋代わりに使う食堂で日々を過ごす。

「またここで仕事をしていたのか」

次の島で行う予定の依頼に関しての書類を作っていると、休息に来たのかカタリナさんに声をかけられた。

「ええ、もうここでないと仕事できないんで」

「君用の書斎があると言うのになあ」

「まあ慣れですよ慣れ」

食堂の端にある窓際が俺の定位置。グランサイファーはでかい騎空艇なので、別に食堂でなくとも割り振られた部屋はあるのだが広い机に何時でも休憩できるここが落ち着くので結局何時も食堂で仕事をしている。船の大ききの割りに少ない団員は、食堂に来る事が多くそのため騒がしいわけでも寂しくなる事もそんなにない。

「どれ、なら私がコーヒーでも淹れてあげよう」

「……コーヒー、ですか」

カタリナさんの言葉を聞き、目を細める。

「こ、今度は大丈夫だぞ？ 前のような失敗はしない！」

「……コーヒー・ビネガー事件」

「うっ！」

蘇る忌々しき記憶。まだ騎空団を立ち上げて直ぐの時のこと、カタリナさんが似たような状況で俺にコーヒーを淹れてくれた事がある。その時コーヒーは黒い色と程遠い紫色となり、異常な異臭を発していた。恐る恐る舌先で味見した時俺の意識が吹き飛んだ。意識を回復させてから何を混ぜたか追及したらどうやら「酢」を混ぜたらしい。何かと聞いたが「酸味が欲しかった」としかカタリナさんは言わなかった。だがそれだけでコーヒーは紫色に変貌しない。恐らく他にも「ナニ」かが混入したらしく俺は一日再起不能になった。混入物については現在も不明である。

つまりカタリナさんは料理全般が壊滅的だったのだ。その日から俺には「カタリナさんの調理補正係」と言う肩書きが追加された。

この人は無意識なのかありえない食材を組み合わせようとする。一度出来た料理をグランサイファアの先つちよに設置したら魔物が避けて通っていった。魔物避けにはもってこいですね、と言ったらカタリナさんはその場で膝をついて落ち込んでいた。

そして未だカタリナさんの料理下手は改善されていない。微塵もない。強烈な異臭を放つグラタン、無味無臭のステーキ、蛍光色のスープを泳ぐ新生物、この人は一体厨房でナニをしているのだろうか？そして自分の料理を味見させてもわかっていない節もある。味音痴でもあるらしい。少なくとも現在俺の許可なしで固形物の調理はさせていない。コーヒーのような液体の調理ですら駄目なのだ。

「……まあいいです。試しに一杯頼みます」

「そ、そうか！ よし待っている、美味しい一杯を淹れてあげよう！」

本人のやる気だけは十分なのだ。失敗を知ったの成長もある。俺が許可するとカタリナさんが張り切って厨房へと入って行く。俺はそつと胃薬を用意し、念の為書類一式は全部片付けておいた。

結論を言うと、出て来たコーヒ―は透明になっていた。わけわからん。あと胃薬さんありがとう、でした。

■ 七 ラカムウウウ!!!

騎空団で俺の次によくジータの被害を受ける人が居る。

一人はビィ。ザンクティンゼルで俺と同じぐらいジータと一緒に居る子竜。その分彼女に振り回される割合は大きい。

そしてもう一人、ラカムさんだ。

「よし、ジータ！ 今のうちに攻撃しろ！」

「了解ラカム！」

「ラ、ラカムさんっ!? いけない、火器の火薬が」

「なっ!? 何時の間にこぼれてっ!」

「ジータ、ストツ」

「とりやああ!!」

「グワアアアアア!」

「ラカムウウウ!!」

「ラカムさあああんツ!」

と云う流れ。

俺も大概だがラカムさんもかなり酷い目に遭う。何故か知らないが爆発オチが多いのも謎だ。携帯している火器の火薬、その場にあつた火薬、偶然生成された火薬、偶然転がってきた爆発物等々、例を挙げ出すと切りがない。ラカムさんは火薬関係を引き寄せる体質なのだろうか。

そんな事もあつてラカムさんの体の頑丈さは俺に次いで丈夫だ。しかし俺もそうだがラカムさんはその事を知つても苦笑するだけだった。

「今月に入つて5回目だ。通算だと50回を超えたよ。だんだん慣れてきた……」

「ラカムさん……」

「不思議と死ぬこともねえし、騎空士やつてんなら丈夫に越した事はねえんだけどよ」

「ラカム……」

「お前らはザンクティンゼルでジータの相手してたらしいけど、苦勞してたんだなあ……」

「ここまでの苦勞はしてな……いや、まあどっこいどっこい？」

「とりあえず何か食いましょう」

「そうだな……」

「オイラも腹減っちゃまったぜ」

そうして俺とビィ、ラカムさんは立ち寄った居酒屋で飯を食う。

俺達【ジータ被害者同盟】、定期的な飲み会を欠かさぬのである。

八 癒し

「それじゃあ……はい、今日の内に船まで。はい、はい、よろしくお願いします」

立ち寄った島の商人に物資の搬入を頼む。空の旅をするのには物資の補給が欠かせない。色々な物が必要だが、特に食料と水をうっかり切らしてしまえば目も当てられない。水は飲料水だけでなく生活用水の確保もある。魔法で水を生み出せない事もないがそれも限度がある。どうしても必要なのだ。

これらの物資補給も俺が主に担当する。勿論俺だけがずっとやっているわけではな

いい。手伝いが必要になれば、手の空いている仲間を呼んだり予め予定をあわせておく事も
もある。

「終わった？」

「うん、悪いね待たせて」

「いいわよ別に」

今日はイオちゃんに手伝いを頼んだ。物資の発注だけなら俺一人でいいのだが、今日は発注をするまでもない物資を買って帰るのでそれを手伝ってもらおう。

「次に常備薬が少し減ったからその買い物と、その他生活用品だね」

「お風呂の石鹸減ってたもんね」

「それに書類整理用のファイルとか欲しいんだよね」

必要ない書類は燃やして捨てるのだが、取引での書類や依頼での契約書等今後必要になる可能性がある物は嚴重に保管してる。そろそろ整理しないと混ざってしまい後々混乱してしまう。ジータがガンガン依頼を受けるので書類が溜まる一方なのだ。

「書齋の書類が溜まり出したからなあ」

「書齋って言うか倉庫じゃないあんなの」

あんなの呼ばわりとはあんまりである。まあ、事実なのだが。

仕事を食堂でしてしまうので、割り振られた仕事部屋は殆ど書類などをしまうだけの

部屋と化している。

「今度整理手伝つてくれない？」

「別にいいけど……私何が大事な奴なのかわかんないわよ？」

「へーきへーき、捨てといてって奴処分してくれればいいから」

「まあそれぐらいならかまわないけどさ」

イオちゃんは実に良い子だ。バルツで初めて出会った時から良い子なのはわかっていたが、仲間になってこの子の存在が俺の心と胃に一時の安寧を齎したと言っても過言ではない。

「じゃあ予めお礼を兼ねて何か奢ろうか」

「え、いいの？」

「いいよ、どうせ早く帰る理由もないし」

なので俺はイオちゃんに甘い。自覚してまーす。

「何がいい？ 甘いもんでもいいけど」

「あー……えつと、それじゃあ」

俺が希望を尋ねるとイオちゃんは急に恥じらしいの表情を浮かべ、チラチラと俺を見ながら口を開いた。

「どうせなら、私お兄さんの作った料理がいいな」

「俺の?」

「うん、お兄さんの料理美味しいし、それなら皆で食べれるでしょ? やつぱり美味しい物は皆で食べたいじゃない」

天使かな?

「そうだね、じゃあ必要な物買って食材も買おうか。リクエストある?」

「何でも良いの? なら、オムライス! 前作ってくれた切り込み入れると広がる奴ね」

「OK、了解しました」

平和万歳である。

■ 九 おやつさん

「昔はよお……お父さん、お父さんって言って抱っこもさせてくれたんだよ」

「はあ、なるほど」

「何時ぐらいだったんだろうなあ……あんな風になっちゃったのは……」

夜食堂で仕事してたらオイゲンさんが夜酒を飲みたに現れた。眠れないのと飲みたい気分だったかららしいが、オイゲンさんの一人酒と言うのは珍しい。結果的に俺が居たから一人ではないが。

せつかくだから休息ついでに一緒に飲むことにした。カウンター席で俺がバーテンになって軽いつまみと酒を注ぐ。尤も俺はまだ未成年なので酒は飲めないからオレんジジュースであるが。

「かわいいもんでな、親に似て美人になるぞーって思ってたんだ。ああ、親って女房の方で」

「わかつてますよ」

普段オイゲンさんは大人数で賑やかに飲んで、そして酔う。普段の人柄どおりに誰かにからみ、酒を勧めて飲む。

しかし今のオイゲンさんは、そんな様子ではなく淡々と古い思い出を語っていた。

「どういう道を進むのもあいつの自由さ。例え実の親でもそれを止める権利はねえ……」
「けどよ、間違ってる事を止める。これは親の義務だ。違うか？」

「ええ、その通りですよ」

「そうだろお？ だから俺あよお……」

珍しく酷い酔い方をしている。

以前七曜の騎士の一人である黒騎士と言う者と幾度か交戦した事がある。七曜の騎士とはこの空の世界で、圧倒的な力を誇る色を冠した騎士達の事をさす。「化け物」とまて言われる騎士達。実を言うとその内二人と交戦したのだがその一人が黒騎士である。

兜で顔を隠していたが、声と仕草から女性である事はわかっていた。そして彼女がオイゲンさんの娘さんである事も後にオイゲンさんの口から語られた。

「一緒に居てやれなかったからな、やっぱりなあ……」

「ええ、ええ」

「寂しい思いをさせちまったから、ちゃんと話してえんだ」

「そうですね」

「思えばよお、親らしい事なんてなんにもしてやれなかったからなあ……」

黒騎士との因縁はアウギユステで出会った事に始まる。それを知ってオイゲンさんは仲間になった。俺達とくれば娘である黒騎士とまた会えると思っただからだ。

「母親が先に逝っちまって娘一人、それなのに俺は相変わらずあっちこっちフラフラとよお……駄目な親父だぜ……」

「そう自分を責めず」

「うう……アポロオ……ううーん……」

「……………オイゲンさん？」

声をかけたが聞こえて来たのは静かな寝息だった。

（風邪ひいちまうぜ、親父さん）

今すぐ無理に移動させる事もないと思い、常備しているブランケットを肩から羽織らせておく。そのままコップを片付け、再び事務仕事へと戻る。

親が居なくとも、子は環境しだいで色んな風に育つ。優等生になったり、不良になったり、やんちゃになったり、泣き虫になったり。

ジータは親と過ごす時間は短かったがザンクティンゼルのキハイゼル村で過ごした。あそこでは全員が家族の様なもの。それによつて今のジータの性格が出来上がった。

黒騎士はどうだったのだろうか。彼女は多くを語らない。

子を育てる難しさ、育てられる難しさ。親の苦悩、子の苦悩。あまり交わるものではないそれらが、最後は丸く収まる事を願わずにはいられない。

十 JK

■ グランサイファアのとある一室。そこに俺とロゼッタさん、二人だけがいた。

■ 少しの照明、籠る熱気、そして部屋を漂う甘い香り――。

■ そんな空間で台の上に横たわるロゼッタさんに俺は手を伸ばした。

「ここにですか？」

「あ、そう……んっ！ そこ、いいわ」

「もうちよつと下やりますよ」

「あつ！　そこ、あ、ああ……っ！」

「痛かったら言つて下さい、もつと押し込みます」

「うああつ！　そ、それは……ああ、ああつ！　あああ……っ！」

「あんた達、なにしてんのよっ!？」

突如部屋の扉が勢い良く開かれ現れたイオちゃん。驚いて俺とロゼッタさんが顔を上げる。

「イオちゃん？」

「あら、どうしたの？」

「あ、あれ？」

照明を調整して明るくすると、入り口でポカンとしているイオちゃんがいた。

「ロ、ロゼッタ？　お兄さんも……何してるの？」

「何って……」

「見ての通り、マッサージよ」

寝台の上につつ伏せになっているロゼッタさん、普段も流石大人と言うのか色気を魅せるような服装をしているが、今この人は背中だけを露にしている。

「マ、マッサージ？」

「うふふ……イオちゃん、何してるとおもったのかしら？」

「な、なななっ!? べ、別になんにも変な事想像してなんかないわよっ!」

(変な事?)

二人の言う事がよくわからなかったが、イオちゃんは何かしら勘違いをしたらしい。

「ロゼッタさんに頼まれてさ、よくやってるんだ」

「前から？」

「そう、腰や肩をいた」

「リラックスのためよ」

食い気味にかぶせられる。

「え、いや前腰いた」

「気分転換よ」

「肩も」

「リラクゼーションよ」

寝そべってるから顔は見えないがやたらキメ顔で言われている気がする。まあ本人がそう言うならいいけど。

「と言う事で、気分転換のマッサージです」

「彼上手なのよ。以前マッサージ関連の本を手に入れて、それ通り試しにやってみてもらっ

「たら次の日の気分が違うのよね。流石飲み込みの早さはジータちゃんに負けない人ね」
「素人つすよ俺」

「いえ、もうなんなら店開いてもいいレベルよ」

「そうだろうか。自分じゃ実感はない」

「ふーん、あれ？ この部屋いい香りする？」

「リラックス効果のあるアロマを焚いてるんだよ。前シャオさんとジャスマンさんに会ったから、薬草とか香料のアドバイス貰ってさ。俺オリジナルブレンドです」

「そうなんだ……お兄さんって、なんて言うかいつも凝り性よね。広いうえに深く」
「褒められていると言う事でよろしいのでしようかねえ。若干表情に呆れがはいってますが。」

「……だとしても、あんな声、廊下まで聞こえるから抑えてよ」

「うふふ、ごめんなさいね」

「お兄さんも止めなさいよね！」

「何が？」

「……そうか、ジータとの生活で感覚が……ご、ごめんなさい、今のは忘れて」

え、まってなんか気になるんだけど。ちよつとイオちゃん？俺なんか感覚狂ってるの？ねえ、ちよつと。

「そうだ良かったらイオちゃんもどうかしら」

「え、私!？」

「やってみるとわかるわよ」

「わ、わかるって……な、何が」

「うふふ……声、抑えるのって大変なのよ」

「はわわっ!？」

イオちゃんがルリアちゃんの口癖言ってる。

「私ももう終わるし……どう?」

「けど、私そんな背中とか……恥ずかしいし」

「腕とか脚もできるけど?」

「え、そうなの?」

「ただイオちゃん子供だからなあ、痛いかくすぐりたいだけかもよ?」

「むっ!」

「むっ!」

あれ、むっ!が二つ重なっ——。

「あだだっ!?!」

「私もまだ若いわよ」

「子ども扱いたくないで！」

「ダ、ダブルで膝小僧を……っ！」

ロゼッタさん、態々茨で膝小僧狙わんでも。イオちゃんも腰の入った蹴りやめて……。

「いいわ、見てなさい！ ぜんぜんくすぐったく無いって所見せてあげるわ！ マッ

サージぐらい楽しいめなきや大人のレディじゃないもん！」

「あ、そう……いたた」

「背中お願い！」

まあ本人がやってほしいって言うならいいけどさ。

その後ロゼッタさんと変わってイオちゃんのマッサージしてみました。結局くすぐったがって無理でした。

「次こそは絶対マッサージするんだからね！」

そう宣言してイオちゃんは部屋から飛び出していった。

それを俺とロゼッタさんは微笑ましく見送った。

■ 十一 ルリアノート

騎空団の旅と言うのは険しくもあり、楽しくもある。危険な依頼を受け強大な魔物や星晶獣と戦う事もあれば、立ち寄った島で多くの出会いを通じて思い出を作る事もある。俺はとくにそう言った事を日記の様な形には残すことは無い。思い出があれば良いとセンチメンタルになるわけでもない。その時を思い出せるような物を幾つか部屋に飾る程度。

しかしルリアちゃんは一冊のノートに思い出を綴っている。ポート・ブリーズでカタリナさんに買って貰ったピンクのノートを彼女は気に入り、島々で出会った人々の事、そこでの出来事、星晶獣の事、はては手に入れた武器の事まで書き記す。

「そろそろ頁が少ないんじゃない?」

「えへへ、いっぱい書きました!」

ハードカバーの分厚いノートだったが、今はもう残り数ページだ。日頃ルリアちゃんがいかにノートを書いているかよくわかる。

「次も同じデザインの買おうか。シエロさんに頼めば手に入るでしょ」

「はい! ありがとうございます!」

ルリアちゃんは自身の記憶が無い。帝国で星晶獣を操る“兵器”として研究されていた彼女だが、カタリナさんと出会いそして俺達と出会った。帝国での事は覚えてもいないし、態々思い出すことも無い。

そんな彼女だからこそノートへと綴る思い出は、何よりの宝なのだろう。

(しかし……)

俺の横で笑顔でノートを書くルリアちゃん、ふとその中身を覗き見る。

(差が凄いな)

彼女の書く文章は特徴的だ。彼女自身の感性で書かれた人物や武器、星晶獣の説明文は妙に壮大であつたり、第三者目線であつたり、明らかに文体が他と違つたり実に自由だつた。

一方で遊びで絵も描かれているのだが、歳相応？　なのか（ルリアちゃんの正確な年齢はわからない）幼い絵が描かれている。その中にはジータ、ビィ、カタリナさん達。そして俺もいる……いる？

「ねえルリアちゃん、この絵のこいつって……」

「はいお兄さんですー！」

何となくぼやあつとした表情、表情？　そして何となくもやあつともした顔つき、顔？　幽霊かなんかの絵でも描いたんじゃないかと思うほどに印象が薄くされた人物の絵がそこあつた。他の人物が色が5色ぐらいあるのに、俺3色ぐらいしかないのですがそれは。

そつか、これ俺か。俺こんな顔してるのかルリアちゃん。

「……うん、上手だね」

「わーい！ありがとうございます！」

何も言うまい。ルリアちゃんカワイイから別に良いや。

ルリアちゃんの頭を撫でておく。

「えへへへ」

うん、カワイイからいいです。

甲板で二人並んで優しい風を感じつつ俺達はイスタルシアを目指す。今日も空は平和である。

■ 夢？

「おう、相棒おはよ……どうした、顔色わりいぞ？」

「おうB・ビィ……なんか、変な夢見た」

「悪夢か？」

「俺がジータの騎空団に居て、お前らない世界でジータに振り回される夢」

「お、おおう……で、どうだった？」

「あつちの俺とは、いい酒飲めそうだと思った……まだ飲めねえけど」

「そうか……まあ、頑張れ」

「まあ、ただ」

「うん？」

「悪くは無かったよ」

スーパージャンクティンゼル人の軌跡Ⅱ

樽の騎空団

一 とある島の小さな騒動

フアータ・グランデ空域にあるとある小さな島。主にヒューマン、エルーン、ドラフが共存する村が一つあり、山には木々深く茂る。凶暴な魔物は少なく騎空艇を泊めやすい開けた平原もあり、そのため騎空艇で立ち寄りやすく住民達も明るく穏やかであるため騎空士の間では骨休め等で丁度良いと評判であった。

人だけではなく、それこそ長旅で疲労する船を休ませるために――。

「はあ……」

そんな平和な島のある村、そこにある飯屋。

店主であるヒューマンの男性が店の椅子に座つてため息を吐いていた。明るく穏やかであると言う評判に反して浮かない表情。そして客一人いないがらんとした寂しい店内が彼の心の中を表しているようだった。

時間は昼時、本来ならば肉体労働者達が腹を空かせ暖簾をくぐり、店内は客の声で賑やかになっていいるはずだった。

何故こんなにも客が居ないのか。店の味が落ちたのか？ それとも定休日？ そのどれでもなく、店主は自分一人ではどうしようもない辛い現実に直面した。落ち込む事しか出来ずにいたのだ。

「こんちわー」

店主が一人落ち込んでいると、店の暖簾をくぐって入って来る者達がいた。店に客が来るのは当たり前であるが、店主がその来店に驚き顔を上げた。

「……飯食えます？」

「あ、ああ……」

見ない顔が並んでいた。ゾロゾロと入ってきた者達。何の集団であろうか、店主はわからずにいた。妙にそれぞれのキャラクターが濃い。鎧姿の騎士団とも思ったが、シスター服のドラフにやたらと大荷物のエールン、独楽に乗って移動するハーヴィン。そして謎の黒いナマモノ？ だがその先頭にいるのは妙に印象が薄いと言うべきか、地味と言うべきか、なんとも説明に困る少年であった。

「旅の方達かな？」

「ええ、ガロンゾ行く途中なんですよ。休憩で立ち寄ったんですけど」

「そうか……いや、すまない。たしかにここは食堂だが、今まともな料理が出せないんだ」

申し訳なきような店主の言葉に少年は首を傾げた。

「今日定休日ですか？」

「いや、そう言うわけではないんだ。だが今の私には君達を歓迎するための料理が出せないんだよ」

「うん？」

ここで少年は自分達他に客が居ない事に気が付く。それだけではない、料理の香りも無いのだ。昼休みとしても食堂で食材の香り一つしない事に少年は疑問を持った。そしてもう一つ。

「……村に活気が無い事と何か関係が？」

「ああその通りだよ」

少年は自分達が訪れた村に子供の遊ぶ声も、働く大人達の姿も見なかった事に気付いた。

「悪い事は言わない、直ぐに村を出た方がいい」

「何故かね店主？」

店主の忠告ともとれる言葉を聞き、少年の仲間である騎士の一人が問いかけた。

「訳は言えないんだ……とにかくこの村の事は忘れてくれ」

「そう言われてもなあ、明らかに困った様子ですけども……あの、俺達これでも騎空団でして、何か困り事であれば解決しますよ」

「騎空団……?」

一瞬店主は騎空団と言う言葉を聞いて何かを思案したが直ぐに首を横に振った。

「いや、よそう……迷惑をかける事になる」

「なんでい、なんでい。何か知らねえけどよう、話すだけ話してくれてもいいんじゃないかおっちゃん」

「……今喋ったのはこのトカゲかね?」

宙に浮く黒いナマモノ、存在自体が異質だったのだがそれが人語を話すのを見て店主も目を丸くした。

「オイラはトカゲじゃねえぜ」

「そ、それはすまなかつた」

「それで? 何があつたんだよ」

「何かは知りませんが、力になるであります」

「ははは、ありがとうねお嬢ちゃん。けど君のように小さな子ではとても……」

「小さな子……っ!? いや、ここはぐつと堪えて」

何やらハーヴェインの騎士がワナワナと震えているが店主がそれに気が付くことは無い。

「ともかく村を出なさい、きつと直ぐに——」

店主が何かを言おうとした時、外から絹を裂く女性の悲鳴が木霊した。

「なんだあつ!?!」

「しまった、もう来たのか! 君達、店から出てはいけない! 奴らが来たんだ!」

店主が慌てて店の扉に鍵をかけた。そして怯えた様子で店の奥へと引つ込んでゆく。

「君達もこつちへ!」

「……団長殿、これは」

「うーん……」

「早く!」

店主が店の奥の部屋に飛び込むと少年達にも来るように呼び掛けた。すると少年は何かに辟易した様子でため息を吐いた。

「とりあえず様子見で。はい、皆こつち」

そして直ぐに少年は店主の言葉に従い他の仲間と共に店の奥へと入って行った。さて何事であろうか、少年が部屋の扉の隙間から外を覗いた。

「けっ! しけてやがるぜ、もうこれぐらいしかねえ」

「まあいいじゃねえか、野郎ども引き上げだあつ！」

「また来るからなあ！ 次はもつと金と食い物を貯めておけよつ！」

店の前を通り過ぎていく集団。ヒューマン、ドラフ混成の荒くれ達。店の奥でも聞こえる下品な叫び声。それは明らかに善良な市民に害をなす存在だった。荒くれ達の叫び声に震える店主を見て少年は顔をしかめた。

「なるほどねえ」

説明を受けるまでもなく、少年は全てを察した。それはこの場にいる仲間達もそうであつた。

二 陋劣なる者共

その村に奴らが現れたのは一月程前の事であつた。

騎空士達の評判通り穏やかなその島に、その日一隻の船が降り立つた。村の反対側に降りた船に村の者達が気が付く事はなく、ましてその船に乗っている者達がどれ程下劣な者達であるかなど知る由も無かつた。

そして船が来てから平和な村に悲鳴が響くのにそうかからなかつた。

船に乗っていた数十人の荒くれ達、奴らは近頃ファータ・グランデ空域で活動する盗

賊団であった。島から島を移動しては略奪を繰り返す。どこで手に入れたのか盗賊団にしては出来の良い、素早く小回りの利く騎空艇で空の番人である秩序の騎空団からも逃れ、自分達より弱い物だけを狙う。正に絵に描いたような悪党であった。

この盗賊団が来てからと言うもの平和な島の暮らしは一変した。盗賊団は村の反対側にある山に泊めた船をアジトにして定期的に村へと略奪をしに現れる。金、食料、酒を奪い山へと去る。それも一度に奪うのではなく何度かに分けて奪う。そして奪う量を徐々に増やして行き最後には村にある物全てを奪う、それがこの盗賊団の常套手段だった。

真綿で首を絞めるように、じわじわと弱者から奪う。略奪以上にこの盗賊達は奪われるだけの弱者が更に弱ってゆき、もうやめてくれと自分達に許しを請う姿を見る事こそが目的なのだ。

そして運悪く、新たな標的となったのがこの村だったのだ。

■ ■
三 だが島にはやつらが来た

「はあ、やつぱりそうでしたか」

あの後少年達は店主の案内で村の村長の家へと訪れた。そこでは店主と同じく酷く

落ち込んだ様子の村長から話を聞いていた少年達。一月前から現れた盗賊団に苦しめられ、食堂で料理もまともに出せない村の現状を聞き少年は特に顔色を変えていないが他の面々、特に騎士の姿をした者達は怒りを露わにしていた。そして同時に疑問を感じてもいた。

「助けを呼ばなかったのは何故ですか？ この島からなら他の島に連絡をするのはそう難しくはないはずですが」

鎧を着た少年が疑問を口にする、やはり村長は落ち込んだまま首を横に振った。

「疑問は尤もです。ですがあいつらは、ただの盗賊団ではないのです」

「と言うと？」

「奴らは恐ろしい魔物を一匹飼っています。それもただの魔物ではない。あれが暴れてしまえば村一つ簡単に無くなってしまおうでしょう」

「なるほどねえ、つまり報復が怖いって事か」

「情けない話ですが正にその通りです……。助けの報せが届いたところで村が無くなつては意味がない。助けを呼んだと分かれば奴らは自棄になって魔物を使い村を焼き払うでしょう」

「だが村だけならまだいい……。村には老人や女子供が多いから、その者達まで犠牲になると思うと……」

村長と店主の言葉に少年達も納得した。見た所この村に戦えるものはいない。店主の言う通り老人や女子供が多く、数少ない若い男達で組織されたちよつとした自警団がいる程度。盗賊数人でさえ相手にできず、まして魔物が出てくるとなるとどうしようもなかった。

「あなた達もどうかこの事は忘れて下さい。大人しくしていれば何時かは奴等も去つていくでしょう」

大人しくしていれば去っていく、果たしてそうであろうか？ 少年は村長の言葉通りにはならないだろうと感じた。何故なら相手は弱者を矜る事を楽しむだけの盗賊なのだから。

「おいこらあつ!!」

「ひい!?!」

不意に外でまたあの品の無い大声が聞こえてきた。村長が悲鳴を上げる。

「そ、そんな……どうしてまた!?! 今日にはもう来ないはずなのに!」

店主と少年達も外の様子を慌てて見ると、帰ったと思つたあの荒くれ達が全員揃つて村の住人を捕まえていた。

「外に一隻船が泊まつてるがありやあなんだ!?! まさか助けを呼んだんじゃあねえだろうなあ!?!」

「し、知らないっ！ 俺達は何もっ！」

「惚けるんじゃねえっ！」

「ぐえっ!？」

もう今日は盗賊達が来ないと思いい外に出ていたために捕らえられた男性が暴力を振るわれていた。

「船……やべ、俺達の」

「見つかつてしまったのか……皆さん、私の部屋に隠れて！ 奴らに見つかったら貴方達にも迷惑が」

「あ、いやそれはいいです」

自分の部屋へ少年達を匿おうとする村長。だが少年がそれを遮った。

「ひーふーみーよー……つと、結構おるな。で、どうすんの？」

「如何するもなにも、俺達の船の所為だし」

「では団長殿」

「まあそう人数要らないよ」

少年が軽く頷くとすぐさま甲冑の騎士達を先頭にして少年の仲間達が数人を残し外へと飛び出して行った。突然の事に村長が驚く。

「何をつ！ 外には奴等がっ!？」

「まあまあ、村長さん達外出ないでね。B・ビイ達は二人守ってて」
「おうよ、任せとけよ！」

そして最後に少年も外へと飛び出した。店主がそれを引き留めようとするが残った少年の仲間止められる。

「何をするんだ、このままでは彼等が！」

「安心しいおっちゃん、言うたやろ？ ウチら騎空団やつて」

「ただの盗賊程度じゃあの面子に勝てないわよ」

焦った様子も無く慣れた様子で話す彼等の言葉を店主も村長も俄に信じられずにいた。しかし自分達では何も出来ない事を何よりも二人自身が知っていた。二人はただ狼狽え外へ出て行つた少年達を見守るしかできなかった。

■ 四 ヒヤツハーツ!!

「知らねえ知らねえとお惚け決め込みやがって、それならあの船の奴等はどこだ!? こ
こから見える船でこの村に来ねえわけねえだろ！」

「知らないんだ！ あ、あの船も今日来てまだそう経ってないんだよ！」

「まさか匿ってるんじゃないかな!?」

「ひいつ!!」

鋭利なナイフを捕まえた男性の首元へと近づける。喉に僅かに触れたナイフの冷たさを感じ男性は悲鳴を上げるしかできない。しかし誰も彼を助けない。助ける事が出来ずにいる。恐ろしさで動けずにいたのだ。

最早神頼みで助かる事を願うしかない男性は恐怖で目を閉じた。

「お兄さん達、船の持ち主をお探し?」

「ああん?」

「俺達がそうだぜ!!」

「ぶぎやあつ!!」

出し抜けに後ろから声をかけられ荒くれが振り向いた。すると自分に声をかけた者とは別の声がして、同時に顔面に凄まじい勢いで拳が叩き込まれ男性を捕らえていた荒くれは遠くへと吹き飛ばされる。

「な、なななつ!!」

「俺の拳でお前等の根性叩き直してやるぜ! さあ、語り合おう!!」

「な、なんだあ!!? こいつはあ!!?」

拳を構えて叫ぶ少年の登場に荒くれ達が慌てる。

「今の内に、さあ早く建物の中に」

「あ、ああすまないっ！」

もう一人現れた少年が解放された男性を急ぎ建物に入るよう促すと、男性は感謝しつつ近くの建物の中へと駆け込んでいった。

「やれやれ、盗賊なんてやめりゃあ良いのに……流行ってんのかね？」

「どうせなら拳で語り合おうぜ！」

「いや、それもどうなんだろうか……」

「な、なんだってんだこいつ等？」

何やら疲れた感じの地味な少年、そしてやたら暑苦しい少年。何者かは知らないが自分達に楯突く馬鹿な奴等だと荒くれ達は思った。

「だが船の持ち主って言うなら都合がいいぜ。船には戻らせねえ、助けを呼ばれると厄介だからよお」

「あ、そつすか」

「それじゃあ語り合うか!？」

「話聞いてんのか!？」

怯えるでもない薄い反応、そして拳を構えたままの少年達。荒くれ達は「もしかしたら俺達の方こそ、ヤバいのに絡まれたんじゃないのか？」と思い始めた。

「何だってんだ……まあいい、お前等痛めつけるぞ！ 多少はやるようだが数じゃこつ

ちが上だ!」

この中でもリーダー格と思われる男が叫ぶと、他の荒くれ達はそれぞれが剣や銃を手に取り戦闘態勢に入った。

「まあそうなるよね」

「さ、さつきからなんだその薄い反応はよお……っ!　ぶ、ぶっ殺してやるっ!」

「うう~~~~~んにやああっ!」

「だぼおっ!」

荒くれの悲鳴、今度は何だと荒くれリーダーが声の方を向くと、頭を巨大な酒瓶で殴打され倒れる仲間の一人が居た。

「ういっせつかくお店でお酒が飲めると思ったのに、まったく許せないにやあっ!」

少しひびの入った酒瓶を持ちながら目の据わったシフター服のドラフ。

「お、おい大じょうほっげええっ!」

「おっとと……クリュプトンの回転が速すぎたね」

また悲鳴。次は別の一人が空から降ってきた巨大な独楽にぶつかり吹き飛ばされていた。

「こ、独楽ああ!?!　何で独楽が空から、あひんっ!?!」

「よそ見る暇があるのかね?」

続けて一人が一撃で昏睡させられた。倒れた荒くれの背後には、眉目秀麗な騎士がいた。

「こ、これはもしかして、不味い展開なのか?」

「その通りだ外道っ!」

「ぐほえっ!?!」

今度は甲冑姿の少年が鞘に入ったままの剣で思い切り荒くれの一人を叩きのめす。

「あ、あわわ……次から次へと、まさか今度は俺っ!?!」

「そうであります!」

「ひえ……っ!?! って、あら?」

目の前でどンドン倒されて行く仲間を見て慌てふためく荒くれの一人。行き成り呼ばれて悲鳴を上げるが、声の方を向いても姿が無い。いや、ふと視線を落とせば確かに居た。

「な、なんだ子供じゃねえか……」

「むむっ!?!」

「ガキが舐めやがって、痛い目見させてやるぜ!」

「ガ、ガキ……うぐぐっ!! てやああっ!」

「あいつたあ!?!」

小さな騎士の逆鱗に触れたのであろう、一際強烈な一撃をくらって荒くれの一人がまた地面へと倒れた。

「まったく失礼極まりないでありますっ！」

「まあまあ、落ち着いて」

「プリンでありますっ！」

怒れる騎士を少年がなだめる。さて全滅とまではまだなっていないが、すっかり出鼻を挫かれ腰の引けた盗賊達。暫し「どうしよう……」と情けなく顔を見合わせ、結局倒れた仲間を回収して逃げて行った。

「お、覚えてろよっ!!」

「はいはい」

ありきたりな捨て台詞を吐いて逃げて行く盗賊に呆れた様子で、シツシツ、と手を払う少年。

「なんて安い台詞。あれだね、何で悪党っていうのは揃いも揃っておんなじ台詞なんだか」

「あ、あんた達」

すっかり盗賊の姿も見えなくなつてからまだまだまだ怯えた様子で先程捕まっていた男性が現れた。他にもおどおどとして村長やら店主やら村の人間があつまる。

「あ、こりや申し訳ない。俺達が来たせいでご迷惑を」

「い、いやそれはいいんだ。助けてもらったのだから、だが君達早く逃げなさい」

「へえ？」

「やつらはまだまだ仲間がいる。それに魔物も……きつと全員で報復に来るぞ」

「そうだ。急げば助かる。貴方達はお強いようだが、あの人数にしかも魔物相手では無事ではすまないよ」

この村の人間は良い人しかいないのだなあ、と少年は暢気に思った。

「いや、そうもいかないですよ」

「そももいかないって君……一体どうするつもりかね？」

「悪党懲らしめるのは初めてじゃないんで、まあここは一つ俺達騎空団に任せてくれませんかね」

なんとも見た目は頼りない少年に言われたものかと悩む村長であったが、しかし先程少年の仲間達の活躍を見て「もしかして……」と希望も抱いていた。少年達を逃がしても村は無事ではすまないかもしれない。

ならば彼らに賭けてみるか、ついに村長は盗賊が来てから初めて誰かに助けを求めたのだ。



五 防衛戦という名の盗賊殲滅戦

盗賊を撃退して少し経った頃、村の山側に面した所に一人の少年を中心として仲間達が集まっていた。

「ふ、ふひひっ！ そ、そろそろ……うふふっ！ 来るんじや、無いかなひひひっ！」
「ケヒヒ、来やがれえ〜有象無象どもお〜ひやははっ！」

笑いながら銃と物騒な武器を持つ二人。ここだけ見ると盗賊には無い別の空恐ろしさがある。

「……あ、来た」

どこか疲れた様子の少年がぼーっと山を見ていたと思うと、何かに気がついて呟いた。それを聞いて自由にしていた他の面々も武器を手にとつて山の方を見た。

程なくして山側からあの品の無い叫び声がより大人数のものとなって聞こえてくる。荒くれ達の乱暴な足音もドスドス鳴り響きその姿が見えた。

「うるせえー……」

「あの手の輩は声を張り上げるのだけは一人前だな」

「そうやって住民を怯えさせるとは……許せねえっ！」

思わず耳を塞ぐ少年にハッキリと見下した様子で意見を言う騎士、そしてただ只管に

内の正義の心を燃やす若者。

少年達の目の前にズラリと並んだ盗賊団。恐らく全員で来たのだろう。ヒューマン、ドラフで構成された盗賊達はニヤニヤと今から甚振るつもり少年達を見た。

「団長殿、例の魔物が居ないようです」

「あー……こりゃあ控えてるな」

村長達から聞いた盗賊団が戦力としていっていると言う魔物、それらしい存在がいない事から恐らく最後の切り札として控えていると予想した。そして集団の中から一人取り分け屈強なドラフの男が前に出て来た。

「お前らかあ？　うちのが世話になったって言うのはよお？」

「そう言うあんたは？」

「オレアここの頭やつてるもんだ。どんな奴かと思えば、情けねえ……とんだうらなり野郎じゃねえか」

頭を名乗る男は少年を見てニヤついた顔を更にニヤつかせて少年の事を嘲笑した。

「いや頭、周りの奴らがやばいんです」

「じゃああの坊主は何だよ？」

「いやよくわかりやせん」

好き勝手な事を言う盗賊達に少年は別に怒るでもなく「やれやれ」とため息を吐いていた。

「はあ……まあ俺の事はいいよ。あんたら何楽しくて盗賊してるか知らないけど、止めときなよこんな事」

「ああん!？」

「悪い事なんて続かないよ?」

「このガキ、状況わかってんのか?」

こめかみをピクピクとさせ苛立ちを隠さない盗賊の頭。後ろに控える4、50人以上は居るであろう手下達を指して脅しをかける。

「お前らがどれ程つええか知らねえけどなあ! 勝てると思ってんのかこの人数に!？」

「ああん!？」

「まあ負けるつもりも無いけど」

「こ、こいつ……頭どうかしてんのか?」

大勢の盗賊達を見て怯えるどころか「早く帰りたい」感を隠す気も無い少年について頭もキレた。

「誠意でもみせりや許してやったものを……かまうこたあねえ、全員ぶつ殺せ!!」

頭が叫ぶと一斉に盗賊達が少年達に向かい襲い掛かった。全員が雄叫びと共に突進

し、劍、ナイフ、銃、棍棒、それら凶器を使い数に物を言わせて少年達の息の根を止めようとする。

しかし――。

「ふんっ!」

瞬間、まるで埃が軽い風で舞い上げられるようにして盗賊達が吹き飛んだ。集団前方の数十人が吹き飛ばされたと思えば、呻き声を上げて盗賊頭の後方へとボタバタ落ちていった。

「…………え?」

ものの数秒で馬鹿な奴らと思つた少年達を倒せると思つていた。そのはずだったが頭が後ろを振り向くと「あいつた〜」意識朦朧のまま情けない声を出して倒れる手下達がいいた。

「何の信念も無い拳で俺達を倒せると思つたのかっ!」

「あんた達を倒して、奪つた村のお酒を返してもらうにやっ!」

「匪賊にかける容赦など無い、覚悟したまえ」

「あは、あはははっ!! 私も元山賊だが…………いひっ! や、やり方つてもものがあるだろうに、ひひっ! ははははっ!」

「怖いこわあ〜い盗賊さん達いい〜? 今からサヨナラバイバイの時間だぜえーっ!」

「悪を討ち罪無き民を護る、これこそ騎士の本懐であります！」

「外道を許すわけにはいかない！ 俺はお前達を倒す！」

舞い上がった土埃が晴れると、そこには武器を構える少年達がいる。

「何だ、何しやがった!？」

「いや普通に皆でふっ飛ばしたただけどね。まあ団員皆強いから……こんな酔払いでも」

「にやひっ?! ひ、酷いにや団長きゅんっ?!」

何がなにやらわからない。頭は酷く混乱していた。偶然だろうか？ いやそうに違いない、きつとまぐれだ。根拠の無い事を自分に言い聞かせる。

「しよ、正面からは駄目だ、お前ら囲んで袋にしろ！」

「へ、へいっ！」

一先ず正面から向かつてはまた吹き飛ばされて終わりかもしれない。頭は多少考えて相手をとり囲んでから攻撃するように指示を出した。

「おやおや、向こうはまだやる気のようにだよ団長？」

「面倒な人達……来る奴適当に相手してやって」

「了解だ！ 存分に語り合おうぜっ！」

二つの集団がぶつかり合い、状況が一気に乱戦へと移り変わる。一人に対して二人以

上で襲い掛かる盗賊達。しかし所詮盗賊は盗賊でしかない、長く盗賊として活動していたかもしれないが統率された動きとは程遠い。我武者羅に向かつてくる荒くれに對して少年達は微塵も恐怖を感じてはいない。

劍で、拳で、銃で、酒瓶で——近寄り襲い掛かればあつという間に返り討ち。投げ飛ばされ、放り投げられ、吹き飛ばされる。盗賊頭の後ろには倒れた盗賊達の山が出来つつあった。

これは如何にも不味い。このままでは全滅してしまう。ついに盗賊頭の腦裏に最悪の結末が浮かんだ。

(だ、だがまで俺達には「アレ」がある)

しかしここで心を落ち着けた。腐つても長く荒くれ共を束ねてきた盗賊頭、よくも悪くも諦めが悪い。

「人質だ！ 人質をとれ！」

「わ、わかりやした！」

何人か腰の引けた手下に村に入り住民を捕らえる様に指示を出す。確かにそうすれば奴らも手出しできないと手下も素直に思ったのか、集団から離れて村へと侵入した。

「団長、何人か村に入ったぜ！」

「やると思った。護衛頼んで正解だったな」

侵入に気付いた少年達だったが慌てるでもなく、追うでもない。問題無し、完全に脅威を感じていなかったのだ。

六 前門の均衡少女、後門のマグナシックス&B・ビイ＋α

村への侵入に気が付いていながらあえて無視をした少年達。その事を知らず侵入した手下達は追っ手が無い事に気をよくした。

「へ、へへっ！ あいつらあれで手一杯らしいぜ！ 追ってこねえ！」
「今のうちに女かガキを捕まえるんだ！」

始め適当に家に押し入って人質を捕まえてやろうと考えていた手下達。勢い良く一軒の民家の扉を開けたが不思議な事に誰もいない。気配すらなかった。

「いい、いねえぞ?!」
「こつちもだ！」

神隠しにでもあったのではないかと思うほど誰一人居ない。幾らなんでもこれはおかしい、手下達はオロオロするばかりである。

だが一人「あ！」と声を上げて指差した。他の者もその方向を見ると、一人の人影が建物の影へと駆ける姿が見えた。「やはりまだ村人がいたのだ」と安心したと同時にム

クムクと加虐心が湧き上がった。つまり村人は自分達の目を盗み隠れ潜んでいたと言ふことだ。これでコケにされたような気持ちになり苛立っていた手下達は「待て待て！」と怒号を上げて影を追った。逃げた人影が細身で女に見えた事がより荒くれ達を興奮させた。

建物の影に逃げた人物を追うと、そこは袋小路であつた。奥には一人佇む少女と思われ人物が居た。

「やつぱり居やがった。袋の鼠だな、ぎやは！ 手間かけさせやがってよ、人質にする前に甚振ってやろうか？」

「馬鹿、頭が待ってるんだよ！ 急ぐぞ！」

「わ、わかつてるよ……おら、小娘来てもらうぞ！ 他のやつ等も何処に逃げたか教えてもらうぜ！」

ドラフの荒くれが少女に近づき華奢な二の腕を掴み引き寄せようとする。
「うっ!？」

だがどうした事か動かない、自分の手が掴んでいるのは間違いなく小さな少女の。そのはずなのにまるで巨木でも掴んでいるかのように微動だにしない。

「おい何してるんだ!？」

「ちが、何だこいつ……っ!？」

仲間達からふざけているのかと思われ思わず否定する。だがその瞬間――。

「お前達はこの島の均衡を崩す」

「おふっ!？」

視界が反転し少女を掴んでいたドラフは、一瞬で地面へと叩きつけられた。

「んなっ!？」

「お前達は巨悪ではない。だが悪であるお前達はこの島の人達を困らせる。私はそれが許せない。だから、戦う」

手下達へと振り向きながら何処からともなく剣を取り出し二匹のワイバーンを生み出した褐色の少女。異質、あまりの異常さに咄嗟に男達は逃げ出そうとした。

「馬鹿メガ」

「うげえっぶう!？」

振り向き駆け出した一人が突風で吹き飛ばされた。今度は何だ!? そう思う前に視界に飛び込んだ光景に皆愕然とした。

「いらっしやあゝい」

にこつと笑うハリセンを持ったエルーン。だが荒くれ達は彼女に驚いたのではない。彼女の後ろに控える圧倒的な存在に足が動かなくなつたのだ。

「ワルイコトシチャ（・ω・）ダメデシヨッ!」

〈どうする、大した人数じゃないぞ〉

「――！」

「セレストがいれば【安楽】で一発だが、いま奴はエンゼラだから」

「いいから片付けるわよ。村に入ったのこれで全部なんだから」

「はいです！　こんな方達を許してはリユミエール聖騎士団の名折れです！」

「そうだねえ、手早くやって団長と合流しようか」

「さてお前等？　覚悟はいいかよ、死にたい奴からそこに並びなあ！」

魔物ではない。あれは普通人では到底かなわぬ存在。荒くれ達は悟った。袋の鼠なのは俺達の方だったのだと。

七 最近噂の騎空団

村に入った手下達が戻らぬ事に再度苛立ち始める盗賊頭。もう自分達の戦力は残り僅かである。せめてあの地味な少年一人でも殺せばいいものの、傷一つ付ける事が出来ず積み重なるのはやられて気絶した盗賊達の山のみ。

「何だっつてんだ……こいつらは、どうして勝てねえ!?　人数だっつてこつちが勝ってた、いやまだ勝ってる！　数で潰して終わるはずなんだよ！」

「数だけに頼った戦いの勝ちなんて続かないってば」

「せめて戦略と言うものを学ぶべきだったな盗賊！」

「うるせえ！ お前等みたいなのはなあ、人質さえいりやあ何もできねえんだ！ 人質

さえ居ればよお！」

「ふーん？」

しかしその肝心の人質が居ない。村に入った手下はまだかと焦りを隠せなくなった盗賊頭。手下頼みで人質待ち、未だ自分自ら戦っていないところから盗賊団を纏める事が出来ても所詮その程度の男である事が既に伺える。

最悪自分一人でも逃げ出そうかと考え出した時、村の方から現れる複数の人影が見えた。焦った盗賊頭はそれが村に入った手下だとすっかり信じ込む。

「ほ、ほら見る逆転だ！ 人質、人質だぞ！ さあお前等武器を捨てろ！ じゃねえと……じゃねえと……」

碌に人質の存在を確かめもせず強気になった盗賊頭だったが、現れた人影が近づき明らかに人の物ではないシルエツトが幾つも見え、そしてその存在にゴミの様に運ばれる気絶した手下達に気が付くと言葉がどンドン尻すぼみになっていった。

「オウ、コツチハ終ワツタ」

「あいゞ苦勞さん」

「まるで手応えの無い連中だったぜ」

「マチヨビイ形態のお前で手応えある奴なんて存在するんですかねえ？」

「それじゃあ主殿、褒美にケツを」

「蹴らん」

3頭の竜を従えるように現れた女性。黒鉄鎧の巨人。海蛇を思わせる水神。大地と緑を愛する少女。あらゆる武器をその四つの手で操る聖騎士。筋肉ムキムキマツチョマンの黒いナマモノ。

「なん、なんで……人質は……」

「悪いね……って言うのもおかしいか。まああんたらが卑怯な事すると思っただんで村の人皆避難してもらったよ」

「避難って、どこに……そんな場所」

「あそこ」

少年が何でもないようにある場所を指さした。呆然としたままの盗賊頭がそちらを向くと、自分達が居る場所から離れた空に一隻の船が浮いている事に気が付いた。

「お前等の、船に……っ!!」

盗賊頭の心に若干のヒビが入り折れそうになる。だが同時にもう訳が分からない状況が彼を自棄にさせた。

「ちくしょう、ちくしょう!! もうやってられるか! 村の奴等全員殺してやるっ!!」

そういうや否や盗賊頭は一つの笛を取り出した。そしてそれを思いつきり、吹き鳴らす。美しくもなければ風情も何もないただの雑音の様な笛の根が島全体へと広がっていく。

「おいおいおいおい! なんだあれえ! 結構ラブリイな奴じゃねえかあ!?!」

「……なるほど、魔物ねえ」

笛の根に應えるように、山の方から激しい咆哮が響いた。少年達が山の方を見ると唸り声を上げて一体の巨体が木々を吹き飛ばしながら山から飛び発った。

「ありやドラゴンかつ! まだ語り合った事ないんだよな!」

「フェザー一応オイラドラゴンなだけだよ? 前組手したよな?」

「それどころじゃないだろう……あのドラゴン、エンゼラへと向かっている」

騎士の一人が言う通り山から飛び立った巨大なドラゴンは、真つすぐに空に浮かぶ少年達の騎空艇へと飛んで行った。

「どうだあ!?! あれが俺の切り札だつ! 空に避難させたのは失敗だったな小僧! あそこじゃ助けにも行けねえだろ!!」

「笛で指示を出したようでありませんが」

「くふふっ！ ド、ドラゴンなんて魔物、普通ははははっ!! 捕獲どころか、ちよ、調教も出来ないはずなのだが……あはははっ!!」

「ただの盗賊の戦力じゃないな。まあ考えるのは後だ」

「このままではドラゴンは船に取り付き避難させた村人諸共船を沈めてしまうだろう。

「団長殿が行かなくても、セレスト殿が何とかするのでは？」

「いや今操舵中だからそっちに集中させたい、俺やるわ。B・ビー頼む」

「あいよ」

少年ムキムキマッチョの黒い謎生物に声をかけると、それに応えたマッチョマンが少年を持ち上げた。

「な、何する気だよお前ら……!?!? ば、馬鹿か？ 追いついた所で空なんだぞ!!」

「馬鹿はあんたにやあ、盗賊の親分さん」

「はあ!?!」

「知らないようだけど、あたし達の団長きゅんは……とおお……つても、強いんだにやあ」

千鳥足のドラフが言っても酔払いの戯言に聞こえるだろう。だがそれは事実なのである。

「いくぜ、舌噛むなよっ!」

「おうさ」

「だおらあ……ッ!!」

マツチヨマンが叫ぶと少年をまるで砲丸投げのように放り投げた。すると少年は正しく砲丸のようにドラゴンの元へと凄まじい勢いで跳んでいく。そして空中で体勢を変え跳躍の勢いをこらし、丁度ドラゴンの目の前にくるタイミングで剣を構え現れる。ドラゴンも突如現れた人間に対し僅かに動揺を見せた。

「ただでさえ無理できないエンゼラだつてのに……近づくんじゃねえつての」

少年が何か言うが人の言葉などドラゴンが解するわけもない。「餌が自ら来た」程度に考えその大口を開け少年を飲み込もうとする。

船の甲板には避難していた村人の何人かが居た。今にも食われそうな少年を見て皆が悲鳴を上げる。

「盗賊の駒なんて柄じゃねえだろ? 野生にお帰りっ!!」

落下するよりも素早く、ドラゴンの口が迫る中でも冷静に少年は構えた剣を振りぬいた。

その瞬間、ドラゴンのもものよりも激しい咆哮に似た轟音を鳴らしながら、凄まじい衝撃波がドラゴンを飲み込んだ。そして錐揉み回転しながらドラゴンは抵抗する事も出ず、「ギャオンッ!」とどこか気の毒な叫びを上げつつそのまま島から何処かへと吹き

飛んで行った。

「……ん、うまくいった」

少年は衝撃波の反動を利用して後方で飛んでいた騎空艇へと飛び乗った。村人達はドラゴンに食われてしまうと思った少年が危なげなく船に降り立ったのを見て啞然とし、同じ光景を地上から見ていた盗賊頭と残った手下達は呆然と口を開けていた。

「気の毒なドラゴンね」

「死んではいけないだろう、どこかの島で人と関わりなく生きてくれればいいのだがね」

「……何なんだよ」

ドラゴンが吹き飛んで行った方向を見て雑談をする面々。そんな中で呆然としたままの盗賊頭はすっかり覇気は無くなり、戦う意思はもう微塵も感じられなくなっていた。

「何なんだよお前等はよお……。全員強すぎるにも程があるじゃねえか……。明らかに寄せ集めみたいな面子でまとまりのある騎士団でも、軍人でもねえのに……。なんだ。ドラゴンもどつか吹き飛ばされて、わけわかんねえ……」

「知らないのではありませんか？」

「はっ。」

小さな騎士が自慢げに。

「聞いたことは無いかな? 強い集団に、地味な……ああいや、控えめな印象の少年」
麗しい騎士が誇らしげに。

「オイラ達星晶獣を引き連れた騎空団」

黒い子竜? が楽し気に。

「……おまえら、まさかあつ!?!」

最近噂の騎空団。それは二つ存在する。

一つは異常なほどの強さを誇る一人の少女が団長の「ジータと愉快な仲間たち団」。そしてもう一つの噂の団。「ジータと愉快な仲間たち団」の団長同様に異常な強さを誇る地味な少年が団長であり、複数の星晶獣を従えると言われる騎空団。

「まさかの【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y】かああつ!?!」
「その通りだぜえ!!」

【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y】。その活躍もさることながら、頭の可笑しい団名でも有名な騎空団。

「……団名のせいで、全然オチがしまらんやんけつ!!」

基本的にシリアスは似合わない騎空団である。



八 目指せガロンゾへの道

偶然立ち寄った島でまた騒動に巻き込まれてしまった。巻き込まれたのか首を突っ込んだのか少し判断に困るが、まあどちらでもいいか。

俺達星晶戦隊（以下略）は、少し前に起きたアウギユステでの帝国とポセイドンによる大騒動を解決した後仲間も増やし船作りの盛んな島ガロンゾを目指す。アウギユステでポセイドンが生み出した魔物のせいでポロポロにされた俺達の騎空艇エンゼラを本格的に修理するにはガロンゾへ行くしかないからだ。

アウギユステの職人さんにガロンゾまでは問題無い程度の修理をしてもらったが、それでも長旅でエンゼラの船体も疲労していく。用心して途中船を泊められる島があれば船を泊め、休み休み船をチェックしながら移動していた。

そんな中でこの盗賊団騒ぎだ。平和で過ごしやすい島と聞いたのだがなあ。まあ村の人達を助けられたから良しとしよう。

「さあ出来たぞお！」

「うおおっ？ いいんすかこんなに？」

「当たり前だ！ あんたら村の救世主だよ！ 奪われた食料も全部取り戻せたんだ。これでやっと俺も料理人として腕を振るえるつてもんよ！」

俺達の目の前にズラリと肉と山菜を主に使用した料理が並んだ。最初に出会った時

とはテンションがまったく違う飯屋の親父さんがガンガン料理を作っては並べていく。

「俺の、いいや村の皆の気持ちだ！ 金は気にしないでじゃんじゃん食ってくれ！ ああ、それにこれもな」

「おほ〜！ これってもしかして……」

「村で作った酒だ！ 他の島の酒に比べるとちとクセがあるがどうだい？」

「勿論いただくにやあ！」

ああ酔払いが案の定。

「まったく……まあ御厚意に感謝して。お前等あんま羽目外し過ぎるなよ」

「よし食うぞ団長！」

「マズ乾杯ダゾ！ 私ニモ酒ヲ！」

「はむ、はむはむ、はむっ！」

「うおおおっ!! ゴーイ、お前手加減しろ！ オイラ達の分が消えるっ!!」

ねえ聞いてる君達？

「ふひい……お、終わったよ」

あ、セレストが来た。

「どうだった？」

「う、うん……大丈夫だった。何かされる前にドラゴンは居なくなっただし……き、傷一つ

無いよ」

今日特に見せ場も無くそれでいて地味に活躍したセレスト。盗賊団全員と戦う事になるのはわかり切っていたので村人をエンゼラにのせて空中に避難させる案も彼女の提案である。

アウギユステでの一見以来エンゼラに対して思い入れが増したらしいセレストは、島で船を休ませる度に念入りに船のチェックをしている。アウギユステの職人さんに簡単な船の修理方法のイロハを教えてもらい、それを忘れないように彼女はいつも気にしているのだ。

「ガロンゾまではこのペースだと2週間つてところかな」

「問題が無ければ、だがね」

「おや?」

机にコトリと料理が置かれ置いた人物を見るとコーデリアさんだった。

「ふっ! ふぬぬっ!」

それと両手を掲げて料理を乗せた皿を頑張つて乗せようとするシャルロットさんもいた。

「どうも」

「あわ……うぐぐ、面目ない」

危なっかしいのでひよいと皿を机に乗せると、シャルロッテさんは若干悔しそうだったがそのままコーデリアさんと共に椅子に腰かけた。

「料理を確保しておいたよ」

「どもつす。相変わらずゾーイめっちゃ食ってんなあ」

「すごい食欲でありますなあ」

ペースが速いわけじゃないが食う量がとにかく多いゾーイ。見てるだけで腹が膨れる。

「さて今後の事だが団長、明日島を発つとして次の停泊予定はどうでしょうか？」

「そつすねえ……とりあえずただガロンゾ目指すんじゃ金が無くなるんで、適当に依頼受けるためにシエロさんと会おうと思います」

「どこかで落ち合う予定があるのでありますか？」

「いやあの人なら連絡しなくてもひよっこり現れますよ。呼んでなくても現れるんだもの」

……いないよね？ 思わず辺りを見渡してしまった。

「ポセイドンの収入が入る予定でも何あるかわかりませんからね。金はあっても困らんです」

「い、今は無くて困ってるしね……」

はいそれは言わないでねセレスト。

「それと今日の盗賊団だがね」

「ああ、はいはい」

切り札でもあつたドラゴンを俺に吹っ飛ばされた盗賊団は、すっかり戦う気無くし投降した。逃げるにしてもこっちは星晶獣が居て奴等の船に戻つたところで撃ち落とされて終わりである。マグナシックスに包囲されたら誰だつてそうするわ。

今はユグドラシルに頼み、何時かの元リユミエール聖騎士団の犯罪者スタイルで全員村の外で首だけ出して埋めてある。その上セレストの安楽で死んではいないがほぼ覚めない眠りにについているのでまず逃げる心配は無い。

ただ人数が人数なので村に置いておく事も出来ない。村の人も人の生首を見ていたくはないだろう。しょうがないので明日エンゼラの空き倉庫にでも詰め込んで別の島の警備隊か犯罪者の取り締まりをしていると言う秩序の騎空団にでも引き渡す。盗賊団が使つてた船は更に後日回収してもらえばいいだろう。

「んで、あの笛だけど」

「魔晶でしたか？ 帝国の技術とは恐ろしいものであります」

盗賊の親分がドラゴンを操つた際に使用した笛。一見して普通の笛だったが、よくよく調べると装飾の様にして禍々しい力が封じられた魔晶が取り付けられていた。アウ

ギユステであのヒゲの大尉ポンメルンが使用し異常な力を発揮した物と同じ、帝国によつて生み出された魔の宝石。ポンメルンが魔晶でポセイドンを操ったように、その力であの親分はドラゴンを従えていたらしい。

「偶然手に入れたつて言つてましたね」

「嘘か真かまだ何とも言えないがね。少なくとも魔晶技術の産物が出回っている可能性があるわけだ」

「あのような物が空に広がれば戦の原因ともなりましょう。そうすれば罪なき民が涙を流す事になる。やはり今の帝国は危険であります」

魔晶の笛はゾーイの手で嚴重に封印され魔物を操る力は無くなった。今はただの笛である。均衡を護る彼女としても魔晶技術は忌むべき物であるようだ。

「アウギユステでの件と言い帝国の動きが各地で更に活発化している。ガロンゾへ行くまでもだが、着いてからも油断は出来ないね」

「俺も向こうからすりやお尋ね者だしなあ……」

ばつちり真正面から戦つてポンメルン率いる部隊の作戦を失敗に追い込んだ俺達。ユーリ君も仲間になつていたので恐らく【ジータと愉快な仲間たち団】と共に反逆者を連れた帝国に反抗する者として手配されているだろう。

「ガロンゾ行くにも苦勞するわあ……イスタルシアは遠いねえ」

「ふふ、遙か遠き幻でもある星の島。そう簡単にはいけないさ」

確かにその通りか。なにも物見遊山でイスタルシア目指しているわけでもない。急げ急げと言つてたどり着ける場所でもない。せめて道中楽しまないとな。

「にやはああくくくつ！ こ、これは?! 確かにクセのある味でありながら、甘い木の実の風味が山の緑を彷彿とさせ目を閉じればまるで大自然の中に居るかのよう思わせる!! 同時に夏から秋、季節の移り変わりの情景すら浮かぶつ！ す、素晴らしいお酒にやあー!」

「親父モウ一杯ダツ!」

〈我も頼む〉

「あいよ! いやしかし飲むねえ姉さん達!」

……あいつらは人生そのものが常に楽しそうだなあ。

「どこ行つても騒がしい奴等……」

「ふふ、賑やかでいいじゃないか」

「元気なのは良い事でありますよ」

「まあ否定はしないけども……ガロンゾ着くまでにまた仲間とか増えんのかねえ」

「ふ、増えるんじゃないかな? ……団長の事だから、た、多分また濃い人が加わるよ

……きつと」

濃い人かあ……。

「エンゼラの部屋とかも増やした方が良いのかなあ、出来れば修理だけで終わらせたいんだけど……」

「わ、私はしておいた方が……いいと思う」

「よろず屋殿やラカム殿達も仰つていたように、妥協せずそれなりの改修を行った方がいいと思うであります」

「私達みたいに……せ、星晶獣が仲間になる可能性も、あるかも、だし……」

これ以上うう？ 無い無い、それは無い。ティアマト達じゃないんだから、星晶獣がこの空にどれだけ居るか知らんが出会ったからってそんなホイホイ仲間になる星晶獣がいてたまるかい。

それとも空から偶然降ってくるってか？ あっはっは、まっさかあ。

「そう言う事言う……ホイホイ出てくるよ？」

「そんなまさか」

マジトーンで言わないでセレスト。否定しきれなくなるから。

「コーデリア殿、この団でこのパターンはどう言う感じでありますか？」

「大抵こう時は、団長の希望する展開と逆の事が起きます」

「なるほど」

なるほど、じゃないよシャルロットさん？

「無いから！ いいし！ もうガロンゾ行くまでに仲間増えない方に賭けるよ俺！」

「ああ……だ、団長そんな事言う……っ！」

大丈夫だし！

絶対、大丈夫だし……っ！！

■ 九 待ち受ける者達

空で噂の騎空団。彼らの行く先にはまだ見ぬ出会いが溢れている。

「ねえメドウシアナ、次はどんな奴等を驚かしてやろうかしら？」

「グウウ」

「そうね、私達星晶獣を見ればどんな奴だつて腰を抜かして驚くわっ！」

少年にとつてそれは不運か幸運か。

「ねえねえ、マリィ？ 次はこの遺跡なんてどうかなあ？ 殆ど調査されてないって場

所で、すっごいスリリングだと思っただけだよあ」

「……ねえカルバ？ 遺跡に行くのは良いんだけど、肝心の目的は宝よね？」

「あはは、何言ってるのさマリィ！ 勿論スリルにきまつてるじゃん！」

「パスッ！ 私はパスッ！」

「いいからいいからあく。一緒にスリル味わおうぜえく？」

「いやーっ！ あたしはお宝が欲しいんであつて罨は避けたいのよっ！」

尤も少年にとつて幸か不幸かに関わらず胃痛とトラブルの種は増えるだろう。

「それで？ ちなみに遺跡には何かがあるつて言うの？」

「うーん、なんか昔の錬金術に関して何かがあるとかないとか」

「はつきりしないわねえ……」

「まあまあ、スリルがあれば良いじゃない！」

「よかないわよっ！」

そして空の旅はそれも楽しんでこそである。

トリプルフェイト 魔蛇とトレジャーハンターと(前編)

一 ゆるやかな一時

小さな島での盗賊騒動であったが、無事盗賊団を全員秩序の騎空団に引渡しやるべき事は全て終えた。後はあちらのお仕事だ。最近こちら辺を騒がしてた盗賊団だったらしいので報奨金も出た。やったぜ。

そんなこんなの後、一路ガロンゾへ向かう。道中また休み休みになるが確実に船はガロンゾへと進んでいる。アウギユステからは幾つかの島々を通る事になるバルツ、アルピオンと言った有名な島もあるが、今回はそちらには寄らず現在エンゼラは深い森の島ルーマシー群島付近を飛行中である。

「緑しかねえな」

「緑だなあ、団長」

近づきつつあるルーマシー群島、もう甲板から見える森林をゾーイと共に眺める。

ルーマシー群島はその殆どを木々に覆われた島。気候の変化が少ないためにこの

木々が枯れる事は無い。鬱蒼とした森林からは、船からでも強い湿気を感じる。

「端に見えるのが騎空艇停留所か」

「ユグドラシルの話じゃあ、そう言うのは確か島西側に集中しているそうだよ」

「出身者居て助かった」

森と大地の島。ここには星晶獣ユグドラシルが眠る。うちのユグドラシル・マグナの本体だ。リヴァイアサンに続けて軽い里帰りである。

「必要な補給品もそう無いから、停泊は一日だけでいいや」

「だとすれば後数回島を経由してガロンゾだな」

「その前にシエロさんに会いたいけどね」

ガロンゾ到着前に幾つか依頼でも受けて金がほしい。修理か改修かまだ決めてないが、どの道エンゼラの事で金がいるのだ。

「とは言えユグドラシルの本体には会つとききたいよな」

「そうだな。彼女達は普段本体とのリンクをあえて切っているから、お互いの状況や旅の話もしたいだろう」

ティアマトもリヴァイアサンもそうであるが、マグナシックスは皆各島にいる本体と意識共有のリンクを切っている。理由はそれぞれの旅を楽しむため。ティアマトを見ているとよくわかるが、最早マグナ達は独立した自我を持ち始めている。コロツサスも

イオちゃんに聞いたが、あんな謎の感情表現方法（しかも表現豊か）はとらない。これはゾーイとB・ビイが言うには俺が与えた影響らしいのだが身に覚えがありませんなあ。

まあざつくり言うくとプライバシーを護るためにリンクを切っているのだ。緊急事態であれば一方が強制的にリンクを繋げられる通称「緊急リンク」があるらしいので問題にはならない。

「さてと、そろそろ停泊準備だ」

宿は取らずそのまま船で寝るが、停泊施設がある以上停泊申請は必要だ。その後もエンジンゼラの調子を確認したりする事がそれなりにある。ゾーイとの談笑もいいが俺もそろそろ戻るとしよう。

「それじゃあ船内に」

「ベックシユエーイツ!!」

「おや?」

このクシヤミは……何と言う酷いクシヤミ、これはティアマトか。甲板では腹巻巻くか、上着羽織りなさいってのにお腹冷やしても知らないよ。それにあいつクシヤミすると軽い辻風を起こすから困る。以前フィラソピラさんは、それで墜落して俺の顔面に落ちた。

「きやあつ!! 何よこの風えー……っ!!」

「そうそう、こんな感じで——。」

「おい、ふぎけんな、ぐべえっ!!」

「あ、しまった……!!」

「おお、団長が踏み潰されてしまった……」

「ぐ、ぐぐぐ……っ!!」

「あ、けど割と頑張っている」

「何だというのだ。子供一人分ぐらいの重量が俺の上に。くそいてえ。」

「ア……スマーン、マタヤツテシマッタ」

「あ、あの（笑）野郎……お、おいあんた大丈夫か?」

「アタシは……あ、ちよつと待った! メドウシアナ、ストッププツ!! まだ駄目えっ!!」

「あん?」

「ガアアツ!!」

「のおおおおおおー……っ!!」

「きやあああつ!!」

「こ、今度はなんだっ!! 明らかにでかい重量の物が船に乗ってぎやああつ!!」

「せ、船内放送……!! なんか、船のバランスが……ひえっ! 崩れたから、皆何かに掴

「まっつてえ〜っ！」

船内各所の伝声管（星晶パワーでの音響アップ済み）からセレストの慌てた声が聞こえてくる。

「グワア……」

「大丈夫メドウシアナ!? アナタも風に煽られたのね！」

「この野郎、貴様の仕業かあ!? なんて事しやがるっ!?」

「きやあつ!? ア、アタシじゃないわよ!? ちよつと、掴まないでよ!」

「団長何かに掴まらないと……あ」

「あ」

「え?」

船がまたグラリと揺れて突然の浮遊感。

なるほど、これは浮いてますねえ……。と言うか落ちてますねえ……。

「いや、まだだっ!!」

甲板の柵を咄嗟に掴む。やったぜ、ギリギリセーフ。

「ブションッ!!」

「うおっ!」

「あ、馬鹿今離したら」

突然の強風。と言うか、クシヤミ。

「オオウ……スマン」

ああ、やつぱり君だったんだねティアマト。うふふ、許さん。

「ふざけんなああああーっ!？」

「いやあああつ!?! なんでアタシまでええーっ!?!」

あああああーっ!?!

■ ニ フェイトエピソード 誇り高き蛇姫（笑）

■ 星晶獣と言う存在は、嘗てあった覇空戦争で空の世界へとやって来た星の民が、空の世界にある「概念」や「力」そのものを兵器として作り上げた存在である。基本的に星の民にしか従わず、覇空戦争で猛威を振るったその存在は人々に恐れられた。

しかしそれも古の時代の事。覇空戦争も厳密な開戦、終戦時期も不明の過去である。生み出された星晶獣達は、星晶の形となり眠り、ある者は島へと根付き神と崇められ、ある者はその強大な力を天災の如くふるい、ある者は人と共に生きた。

そしてその中で見たものを石へと変えてしまう魔眼を持つ者がいる。巨大な魔蛇メ

ドウシアナを従えた少女は名をメドゥーサと言った。

覇空戦争を終えた後の星晶獣はある意味で自由である。先述の通り崇められる者もいれば、恐れられる者も居る。メドゥーサはどうであろうか？ 彼女は星晶獣としてただ奔放に生きていた。星晶獣としての誇りを持つ彼女は、つまり星晶獣とは人々に畏れ崇められる存在と思つている。そして星晶獣として相応しい力を見せ付けければ、人々は確かに彼女を畏れた。何より家族とも言える愛おしい魔蛇メドゥシアナの存在は正しく彼女が星晶獣である事を物語つた。

メドゥーサはメドゥシアナに乗つて空を移動している時に騎空艇を見つけると悪戯心から、船に飛び乗り人々を驚かした。星晶獣である自分をみて慌てふためく人間を見るのは気分が良かった。稀に無謀にもメドゥーサに剣を向ける人間も居るが、そう言つた輩は一瞬で石となつてしまう。尤も人を驚かせたりするのが好きなだけで殺す気は無く、適当に戻して去つていくが。

この日もメドゥーサは手頃の騎空艇を見つけてまた人間を驚かせてやろうかと思つた。暫しルーマシー群島で過ごしていた彼女にとって丁度いい暇つぶしであったのだ。

そう思つてメドゥシアナに乗つて何時ものように騎空艇へと乗り込もうとした。そして何時も通り脅かしてやろうと悪戯小僧のように「にしっ！」と笑つていた。

だが突然吹いた辻風。それに煽られ本来華麗に甲板へ着地する予定が狂う。着地地

点はずれて甲板に居た少年の頭にそのまま尻から着地してしまう。そして続けて降りようとしていたメドウシアナも風に煽られ墜落。その重量で船はバランスを崩し大きく傾いて少年と少女は哀れルーマシーの深き森の中へと墜落していった。

「あんたの所為よ!？」 何で私まで落ちなきやならないのよっ!」

「いや、俺の所為じゃないと思うんだ」

「なによ!! アタシの所為だっけ言うの!？」

「そうは言っていないじゃん……」

何か彼女に言えるかといえば、運が無かった、これに尽きる。

■ 三 出合いは突然、なお日常茶飯事

突然エンゼラ、と言うか俺に落ちて来てそのままティアマトのクシヤミに吹き飛ばされ俺と共にルーマシーのどこぞへと落下した少女。幸いどちらも擦り傷程度で済んだ……済んでしまうのか俺。明らかに4〜50mはあったんだが……。

「くっそティアマトの奴、あとでぶちのめす……。だいぶ風で流されたな……。エンゼラが見えねえ」

「ちよつと聞いているの!？」

「待て待て、今色々確認しなきゃなんだから」

一方でこの少女もかすり傷で済んでるのは何でじゃい、って普通はなるのだが。

「誇り高き星晶獣であるアタシがよりにもよってこんな事で落ちるなんてえっ!」

と、先程から自分の正体を隠そうともしない。なるほど、星晶獣であるならかすり傷で済むだろう。雰囲気でわかってしまうので疑う気も無い。

「おい、星晶獣ならそのぐらいの怪我平気だよな? お前飛べたりしないの?」

「何でアタシがあんたの言う事を聞かなきゃならないのよ? アタシは誇り高き」

「はいはい、それはいいから。飛べるならエンゼラ、さっきの船行つて助け呼んで来てくれよ」

「……」

「うん?」

突然黙ったな。

「嫌よ。アタシは人間の頼みなんて聞いてあげない」

「……飛べねーの?」

「と、飛べないとは言ってないでしょっ!」

「じゃあ助け呼んでよ」

「だ、だからあんたの頼みなんて」

「飛べないんだ？」

「飛べるわよっ！ メドウシアナが居ればアタシだつて!!」

「メドウシアナ？」

「あ」

なるほどさつきのデカイ何かがそうか。

「ならしゃーないか。狼煙でも上げるかな……火種どうすつかな、最近魔法使つて無し杖も無いのに火出るかな？」

「ちよ、ちよつとっ！ あんたアタシの事役立たずとも思つてないでしょうねっ!」

「思つてない、思つてない」

「目を見て言いなさいよ、目をつ!!」

煩いなあ。なんとも見たため通りの少女だ。

「じゃあ君何が出来るの？」

「え？ あ、ふふーんっ！ 聞いて驚きなさい！ アタシはメドウーサ、全てを石にする

魔眼を持つ誇り高き星晶獣よっ!」

「石かあ」

「ふふーんっ!」

「まあ今はいららないかな」

「んなあつ!？」

と言うか普段から別に石はいらない。

「何よその薄い反応はっ!？」

「いや今そう言うのいいんで……もうちよつとこの状況を打開できる能力無い?」

「それは、その……えつと」

「無いのね」

「無いなんて言っていないでしょっ!？ なんだったらこの一帯全部石に変えて場所知らせてやるわよっ!!」

「やめなさいよ、自然破壊だぞ」

誰もそこまですろとは言っていない。

「それにね、アタシは別に平気なのよ。メドウシアナが助けに来てくれるんだから!」

「さっきのデカイ奴?」

「そうよ! メドウシアナならアタシを見付けるなんてわけないんだからね!」

そりや助かる。少なくともこの子と行動を共にすればエンゼラからの助けが来る可能性がある。

「じゃあ大人しく待つか……っておいおい」

「何よ?」

座って助けでも待とうと思つたらメドウーサとやらが勝手に何処かへと行こうとしていた。

「何処行くんだよ」

「あんたには関係ないでしょ」

「いやあるつつーの。そのメドウシアナ？ とか言うの待ちなんだから、お前に消えられると俺が困る」

「あんたが困つたとしてアタシは困らないわよ」

「そんな事言うなよ……それに道なんてわからんだろうに」

「勝手に決め付けないで。アタシはこの事なんて自分の庭のように知ってるわ」

「あれま、そうなの？」

「そうよ、ずっとルーマシーで過ごしてたんだから」

なるほど土地勘はあると。

「人の居る所に案内とか頼めない？」

「だーかーらー！ 何でアタシがあんたの頼みを聞かないよ！ 第一あんたさつきから生意気よっ！ 愚かな人間の癖にアタシが怖くないわけ!？」

「怖いって言われてもなあ」

小柄の少女がプリプリ怒つても、その……カワイイだけですなあ。

「別に怖くはねえなあ」

「あんたさっきの話聞いてたの!? アタシは全てを石に変える魔眼を持つメドゥーサよっ!! あんたなんか簡単に石に変えれちゃうのよっ!」

「あ、自分弱体回復系各種持つてるんで……」

「きいいーっ!! ほ、ほんとに生意気っ!」

あはは、地団太踏んであら。弱体気にしてたら騎空士なんて出来ないですよ。デイスベル、クリアオールは必須ですぜ。

「あと悪いけど俺星晶獣に慣れててさ、あんま人型だと特に怖くないって言うか……」
「星晶獣に慣れてるって何よっ!! 嘘言わないでよ、普通慣れないでしょっ!」

「だよな、普通慣れないよな」

「なんであんたが同意するのよっ!」

君もエンゼラ来たら理由わかるよ……。

「わけわかんない! ほんと何なのよあんたっ!? 言つとくけど石化出来なくなつたつてね、あんたを殺すぐらい容易いのよっ!」

そう言うやメドゥーサの長い光沢を放つ白髪が、ゴワゴワとうねり出すと髪が纏まり3匹の蛇となった。

「さあどうかしら? アタシはこんな事だつて出来るのよ? 絞め殺すのも噛み殺すの

もわけないの、ほらほら怖いでしょ？ さあ畏れなさい愚かな人間よ!!」

カワイイけど、若干ドヤ顔なのがムカつくな。だがこの感じ……はっはくん、なるほどね。割と（笑）側の星晶獣なんですネこの子。ちくしようめ。

「胃痛の予感がする。こうしてくれるわ」

「わあ!?! な、何するのよ、やめなさいっ!?!」

生意気な娘はこうしてくれる。うりやうりや。

「ふっ、蛇の三つ編みだ」

「ああっ!?! 髪が全部後ろで編まれた!?!」

メドゥーサの長い髪を全部編み編みにしてやったぜ。蛇になった髪も編みこんだが、蛇が若干苦しそうだ。

「ほーどーきーなーさーいーよーっ!!」

「わははははっ! ほざけ小娘」

「むきーっ! しかも結び方が巧いのが余計に腹たつうっ!!」

「幼馴染にせがまれ何年も髪の手入れをやらされた俺を舐めるなよ」

「幼馴染って誰よ!?!」

全空一の暴れん坊の女の子です。

「まあおふざけはここまでだ。悪いけど一緒に居てもらおうぞ」

我ながら悪党みたいな台詞だなあ。

「うう……厄日だわ、星晶獣である私が何でこんな……」

「人間だろうと星晶獣だろうと運の悪い時はある」

「あんたに星晶獣の何がわかるのよお……」

まあ色々とわかってるつもりだよ。普通の人間よりは。

メドゥーサも大人しくなったので、今度こそ腰でも落ち着けようと思ったのであるが。

「……なんか音、っていうか声聞こえない？」

「はあ？ 突然何よ」

「いや人と言うか獣の音が」

「うーん？」

俺に言われてメドゥーサも耳を澄ます。気のせいと思ったが、確かに聞こえる。森の奥から俺たちに向かってくる獣、いや魔物の叫び声が――。

「おいおい、ぎっけんなっ!!」

奥から姿を見せた声の主「達」。それは数が把握出来ない程の魔物の群れであった。

四 Green Forest 止まらずに、ひたすら行け！

突然津波の如く押し寄せてきた魔物の群れ。それは弱肉強食の行列であった。

ラビット系の草食魔物を狙うラウンドウルフの群れ。そしてそのラウンドウルフを狙って追って来たマンイーターの群れ。獲物を求めた群れが更なる上位者の獲物になるうとしている状況。自然界とは実に厳しいものなのだ。

「何で俺達の方にくるんだああああーっ!?」

「いやああーっ!?」

そんな自然の厳しさを身をもつて今俺達は体験している。

全力ダッシュで走る俺達。迫る魔物達。さつきから右へ左へ走ろうがきっちり魔物達はついてくる。なんだろうねこの状況。

「こ、この野郎っ! こっち来るんじゃねえっ!! くらえ【エーテルブラスト】!!」

剣は落ちる時に無くした。仕方なく無手で魔法を発動させる。魔術媒体が無いので威力は落ちるが、魔物程度なら大丈夫のはず。

「G A A A a a a a !!」

「おぎやあぁーっ!? ぜんぜん減ってないっ!!」

だいぶ吹き飛ばしたと思ったが全く減ってなかった。むしろ今で俺達の方に魔物達の意識が向いてしまった。

「余計な事してるんじゃないわよっ!? 馬鹿なの!？」

「うるせい! ならお前なんとかせい!」

「ふんだ! 見てなさいよ、偉大なる星晶獣の力っ!! お前達みんな石になっちゃえ!」
メドゥーサの瞳が怪しく光る。するとその光を浴びた魔物達が瞬く間にカチコチの石に変わった。ううむ、疑ってはいなかったが確かにこれは凄い。

「おいおい、やるじゃんお前っ!!」

「ふふんっ! これがアタシの」

「GUOOOO!!」

「実りよ、くよ……!」

石化した魔物。間違いなく石化している。のだが、しかしその後ろからまた波のように魔物が溢れかえった。

「ちよ、ちよつとふぎけないでよっ!? 石になれ!」

「GUGYAAAAA!!」

「い、石にっ!」

「GAAAAA!!」

もう何度か魔眼を使用したようだが、結局先頭の魔物が石になってその後ろからウジャウジャと魔物が溢れかえった。

「駄目じゃんっ!!」

「う、うっさいわね! 数が多すぎるのよ!」

結局再び逃走開始。泣けてくるね。

「お前めっちゃ自信満々だったじゃん!? 頑張れよもうちよつと!」

「簡単に言うんじゃないわよ、これ連発するの疲れんのよっ!! ドライアイになったらどうしてくれるのよっ!!」

「そんな場合かよ! もうメドウ子だつ! お前なんてメドウ子つて呼んでやる!」

「な、なんて事言うのよっ!! ちゃんとメドウーサつて言いなさい!」

「うっせ、うっせっ!」

「きいいーっ! この馬鹿人間!」

「はぁー! 馬鹿って言った方が馬鹿なんですうーっ!」

「じゃあやっぱりあんたが馬鹿じゃないのっ!!」

「……」

「あ……うきいいいーっ!! 生意気、生意気いいいーっ!!」

わははは、星晶獣だから何年生きてるか知らんが精神年齢は所詮見た目通りの小娘よっ!!

「やはりお前も星晶獣（笑）だったようだなあ! 誇り高き星晶獣と言っても、俺の目は

誤魔化せんぞ！」

「星晶獣（笑）って何よ、馬鹿にしてんのっ!?」

してるんだよ。

「てかメドウ子、俺達今どこ走ってんだ!? 詳しいんだろ!!」

「メドウ子って言うな!! もうアタシにもわからないわよ! 似た景色の中無茶苦茶に

走り回ってんだから!」

くそう、土地勘あるメドウ子でも駄目かつ! もう周りは緑緑のド緑地帯。似た木々が茂る所為で同じ場所をグルグル走ってるかと思うぐらいだ。せめて魔物達から身を隠せる所があれば。

「あ、あれ見なさいっ!」

すると突然メドウ子がある方向を指差す。何とした事か、そこには古びれているものの立派な遺跡があるではないか!

「何と言う光明っ! おい逃げるぞ、あんな数相手してられるか!」

「言われなくっても!」

必死に走って滑り込む。入り口が人間に合わせたのでマンイーターの様な大型は入って来れない。小型中型の魔物は何匹かついて来るが、入り口が狭いのでそう数も多くない。足で蹴って何とか追い出す。

「おら、こつちくんな！ おい、もつと奥行くぞ！」

「アタシに命令しないでよ！」

そういいながら二人で遺跡の奥へと逃げる。まだ諦めてないのかマンイーター共が入り口をガリガリしてゐるから出るに切れん。

「あいつらが諦めるまで何処かに身を隠すぞ。メドウ子、この遺跡は知ってるのか？」

「知らない」

「知らないって、あーた……」

「そんな事言われても知らないものは知らないわよ。暫くルーマシーに居たからって全部の遺跡なんて把握してないわ。まあ殆どは知ってるけど」

ふふーん、と胸を張っているが俺は今この遺跡について知りたいのである。

しかしメドウ子でも知らない遺跡となると途端に不安になってきた。遺跡と言えども毘である。実際本当に「遺跡Ⅱ毘」なのかは知らないがそんなイメージがある。これは不用意な行動は避けたい。

それにしても暗い。ちよつと奥に入っただけでもう外の光りが届かなくなった。しかたなくパチンと指を鳴らし指先に火を灯す。魔法の応用である。杖も無いためマツチ程度の小さな火だが、松明もない中で明かりの無い遺跡を注意深く移動するにはこれしかない。

「あら、あんた器用なのね」

「星晶獣様に褒めて頂き光荣ですねぇ」

「あんたそれ本気で思っていないでしょ」

そのとおりだよ。

「にしても相当古いこの遺跡……」

「ルーマシーにある遺跡なんて皆大昔のよ。なんだつたら霸空戦争時代のもあるわ」

「100年以上まえじゃねえか、いや下手すると数千年……」

「まあその殆どは壊れてるかしてるわよ。大樹に埋もれて姿を消した物も少なくないわ。殆どが手付かずのままだね。尤も愚かな人間が下手に遺跡に手を出せば……」

「出せば？」

「遺跡に食われるのがオチよ」

食われる、とはまた言いえて妙である。浪漫と宝を求めて命を落とした者は数え切れないだろう。そして俺達もまたその遺跡の腹の中に居る。

「おお怖い怖い。お前のとこのメドウシアナはまだ来ないのかね」

「勿論探してはいるはずよ。ただアタシ達もあちこち走り回ったから……」

少し自信無さげに話すメドウ子。今更ながらこんな事になるなんて予想外だったんだらう。俺もだけど。

「そう心配するなよ、ちゃんと助けくるって」

「だ、だれが心配なんて！ それにあんたに慰められたくないわよ！ 馬鹿人間の癖に！」

「おう、生意気言うのはこの口かおらあ〜？」

「ふげっ!!」

馬鹿人間と言われむかついたので、空いてる方の手でメドウ子の口を引っ張ってやる。

「にやにしゆるのよ、このおお〜！」

「んげっ!!」

そしてたらメドウ子まで俺の口を引っ張る。と言うか両手どころか解けた髪の毛の蛇まで総動員して顔を引っ張りやがる。

「ふがが……っ！ それは、卑怯だぞ!!」

「あはは、なんてマヌケ面かしら！ あんたにはお似合いよ！」

「んだとこの野郎っ！」

「ふぐっ!!」

片手と言う圧倒的不利な状況ではあるが、負けてなるものか。

「んがががっ!!」

「ふぎぎいいいっ!!」

真つ暗な遺跡の中で小さな明かりを頼りに喧嘩する男と星晶獣。しかも見た目はいい歳した男が少女と喧嘩してる風にしが見えない。その点我ながら情けないが、しかしこいつは星晶獣である。遠慮は不要!

だが果てして何時までも続くかに思われたこの不毛な争いも終わる事になる。

「ふが……? おい、待て」

「あによ、降参する気になつたかしら?」

「誰がするか、だけど待て。今なんか変な音がした」

「変な音?」

お互い相手を掴んでいた手を放し耳を澄ます。どうも気のせいでもなく地下から聞こえるようだ。

「音つてか声かこれ?」

「ええー、また魔物じゃないでしょうね」

「いやこれもしかして人の声かもしれない」

トレジャーハンターか? 俺達よりも先に遺跡に飛び込んだ誰かが居たのだろうか。

「ねえこれ足跡じゃないの?」

「うん?」

メドウ子に言われて数歩先の床を照らす。確かにそこには明らかに人間の靴による足跡があった。

「足跡、かなり新しいな……それも二人分だ」

「馬鹿ねたった二人で遺跡に入るなんて。死に行くようなものじゃない」

「馬鹿なのか自信があるのか……なんにしても今の声の主はこの二人かもな」

足跡はまだ続いている。地下から小さくとも声が響いて聞こえたので深く潜ったのだろうか。

「真つすぐ進んでる。迷いが無い……かなり慣れてるな」

「助けに行くわけ？」

「いや助けを求められたわけでもないしな……む？」

今気づいたがこの足跡、中央を通らず壁際を進んでる。唐突に、用心するように。

「ふーん、まあアタシも別に興味なんて無いけどね」

「あ、待てメドウ子！」

「え？」

メドウ子が一步踏み出す。そこで俺は猛烈に嫌な予感がした。露骨に足跡が方向を変えすぎているからだ。そしてその予感が当たっていると証明するようにメドウ子踏み出した足の下から「カチリ」と何かの音がした。

「え、今の音何？」

「お、……」

こんな遺跡で不穏なスイッチ。道を避けている足跡。それが意味するものは――。

「あ」

「あ」

突然の浮遊感本日二回目。ふっと足元を見ると、通路がパツカリと開いていた。勿論俺達は仲良く落下する事になる。

「ふざけんなあああああーっ!!」

「いやあああつ!!」 なんでまたこんな目にいいーっ!!」

もういやだ、こんな展開。

■ 五 クロスフェイト ドタバタトレジャーハンターズ

■ 若干15歳、マリーと言う少女は若くしてトレジャーハンターとして身を立てる少女である。火器にも精通し、魔物相手でも負けない度胸がある。そして幾つもの危険を切り抜け、お宝を手にして来た。

一方カルバ。こちらもまた腕利きのトレジャーハンターである。マリーよりもトレ

ジャーハンターとしての経験は長い。特に彼女は罠に関してプロフェッショナルであった。ありとあらゆる罠を見抜き解除する技能を持ち、多くの同業者からも頼られる事は多い。マリーもその一人。カルバの事を知った彼女は、手付かずの危険な遺跡に入るためにカルバと手を組んだ。

そのマリーとカルバが手を組んだとなれば、これは中々に凄いコンビだぞ、一部同業者からはそう噂されたのであるが……。

「うそでしょおおおーっ!!」

「よくある罠だよねえ、まあ悪くも無いけどさあ」

「罠に良いも悪いもあるかーっ!!」

二人は只管に走っていた。遺跡の通路内を只管に走る。何故走るかと言うと、後ろから通路を埋めるほどの大岩が転がり迫っていたからだ。坂道を激しく転がるその大岩は、容易く人間など轢き潰してしまうだろう。

「あそこに罠あるなら言つてよ!! スイッチ押しちゃったじゃないの!」

「いや〜言う前にマリー押しちゃうからさあ」

「あんた明らかに言おうか悩んだ顔してたじゃない!」

「いやあく押ししたら押しただで面白いかなって」

「あんたほんとぶっ飛ばすわよっ!」

二人のコンビ、厳密にはカルバには致命的な欠点があった。

確かにカルバは罠のプロフェッショナルである。彼女に見抜けぬ罠はそうそう無いだろう。だからこそ多くのトレジャーハンターは彼女に同行を頼む事が有るのだ。

だが彼女と共に遺跡に潜つた者は、再び彼女と共に遺跡に行こうとは思わぬ。皆が言う「命が幾つあつても足りない」と。何故なら彼女は、ハラハラドキドキ、命の危険大歓迎、極度のスリルジャンキーなのである。

罠を見抜いた彼女はそれがありきたりでつまらない物であれば、落胆したように解除する。だがもしも彼女が強い興味を持つような空前絶後、前代未聞、死亡必至の罠であつたなら——彼女は間違いなく敢えて罠にかかる。

相応しい装備、技術、知識を持つが故に出来る遊び。あるいは生き方。カルバはそれほどにスリルが大好きなのだ。

しかし本人が好きなのは構わぬが、組んだ相手はたまつたものではない。なんせ罠を解除して欲しいから呼んだと言うのに自ら罠にかかるのである。これではあまりにも意味が無い。しかし最終的に遺跡から生還できはするので文句も言いにくい。だが中には人の良い彼女を騙して遺跡や島に置き去りにする輩もいる。だがそこはベテラントレジャーハンター、最も価値のあるお宝を手にしてちやつかり脱出する。

運の良さもまた、彼女がスリルに惹かれる理由かもしれない。

さてそんなスリルジャンキーであるカルバを、他のトレジャーハンター同様に罠の解除を期待して雇ったのがマリーである。

結果は案の定。罠のプロと聞いたはずが罠に「かかる」プロだった。これに落胆の意思を隠さないマリーであったが、実の所二人での仕事は初めてではない。

まさかの罠大好き人間であったカルバに落胆したマリーであったものの、やはり罠のプロである事は間違いなかった。罠に積極的にかかるうとする点さえ、そこにさえ目を瞑れば……そう思ったマリーはお宝と言う実を取った。やはりお宝は魅力である。

それとカルバの人柄もマリーとよく合ったのだろう。なんだかんだで女性トレジャーハンターコンビ、一方が苦労性になるがその実力は確かであった。

「やめときゃよかった、やめときゃよかったあーっ!! 次の仕事前の肩慣らしって言うから適当な遺跡と思ったのにいいーっ!!」

「だから適当な遺跡だったじゃん？ いい具合に罠のある」

「基準っ!!」

尤も文句を言わないわけではない。むしろ文句しかない。

「おっと？ あれは行き止まりだねえ」

「え、っ!?!」

カルバが焦った様子も無く衝撃の事実を口にした。マリーの視線の先、そこは確かに

袋小路、そして後ろの大岩。デッドエンドである。

「あたしの人生終了？　こんなところで……？」

「いや少し天井低いから岩引つかかるよ？　とりあえず滑り込もうか」

確かに行き止まりの手前の天井は今走る通路よりも低くなっていた。その意図は不明だが少なくともこのまま岩に潰されはしないだろう。

「ひえっ!？」

「とおーう!」

必死に駆け抜け行き止まりまで来ると、岩が激しい音を立てて天井にぶつかり止まった。

「た、助かった……」

「んく？　あ、いやこれ助かってないよ」

「何でっ!？」

「ほら見てみ、天井」

カルバが岩が引つかかっている天井を指さす。驚くべき事に二人のいる場所の天井が徐々に徐々に下がってきていた。

「うそ……」

「どっこい現実。これ岩から逃げれてもここで潰される系だねえ」

「潰される系だねえ……じゃないわよ!? どうするのよ!?!」

「岩と通路の隙間はちよい無理かあ……まあ、こういう時は何かしら隠し通路があるつてえ」

「なら暢気しないで探しなさいよ!」

「さてさて、隠し通路を見つけるのが先か、潰されるのが先か……ハラハラするぜえ」
「楽しんでんじゃないわよ!?!」

「マリーも必死に通路らしきものを見つけようとする。壁や床の隙間から空気の流れ、空洞なども無いか探す。しかし探せど探せどそれらしいものは見つからない。天井はもう直ぐ二人の頭にまで届く。

「いやあーっ!? どうすればいいのよー!?!」

「あらら、これはまずいかな?」

「はっ!? ば、爆弾で岩を……」

「それ位置的に私らも死ぬぜ?」

「打つ手無しじゃない!!」

襲い掛かる理不尽に思わず怒りのマリーパンチを壁に打つ。するとここで奇跡が起こる。マリーパンチが放たれた壁の石がガコリと動く。

「え? 今のつて」

「お、もしかして」

そしてその動作を合図に今度は床が動く。

「はえ？」

「おっと」

床はガコンと斜めに下がりそのまま二人は坂道を転がっていく。

「きゃああっ!!」

「おう、おうこれは連鎖トラップかなあ!!」

ジグザグになっている坂をボールのようにゴロゴロと落ちていく二人。圧死は免れたがこれはこれでつらい。そしてお尻やらが痛くなつて来た所でポイツと穴から吐き出される。

「あいたっ!!」

「おっと」

「あでっ!!」

「きゃあっ!!」

先程よりも更に地下へと落ち、打ち付けたお尻を摩るマリー。

「なんて酷い毘っ!!」

「まあまあ、結構楽しかったからいいじゃん」

「だからよかないっての!」

「いったあー……ケツ打った……」

「あーんもう! 体中埃まみれじゃない!」

「……埃高き星晶獣」

「あんた石になりたいの!?!」

「ははは、ベールベール」

「やーめーなーさーいーよー! ああ、もう本当に魔眼弾かれてるし!? アタシの魔眼

防ぐってあんたどんだけよっ!」

危機を脱して一転、僅かに和やかなムードに移る四人。

「……ん?」

「あれ?」

ここでやっとマリーと増えた二人組みが互いを認識した。

■

六 すつとこどっこい四人組

■

「誰よあんた達つ!?!」

いつの間にか増えていた人数に驚きを隠せないマリー。一方増えた方は、どこかのん

びりしていた。

「あ、俺は通りすがりの者です。こっちは星晶獣（笑）のメドウ子」

「メドウーサツ!! メドウ子じゃない!」

「いや意味わかんないわよ」

まるで情報が無い自己紹介をされてしまいマリーも呆れるほかない。そもそも遺跡内部で通りすぎる人間がいるだろうか。

（星晶獣？ ただの女の子にしか見えないじゃない）

少年の紹介にあった少女も星晶獣と言うが、一見してただの少女だ。どんな二人組なのかマリーには見当がつかなかった。

「あんた達トレジャーハンター?」

「違うよ、俺はただの騎空士。ちよつと色々あつて二人で魔物から逃げててき、遺跡に入ったらこいつが落とし穴発動させちやつて」

「うるさいわね、事故よ事故」

「そりやお気の毒ね」

「そっちは?」

「こっちも罫で落っこちちゃったの」

「あれまあ」

服についた埃を払いながら立ち上がり、辺りを見渡す少年。

「相変わらず位置も不明の通路か。やだねえ、出口が遠くなる一方だよ」

「そだねー。ハラハラして楽しいよね！」

「……楽しい？」

「こそ、スリル最高！」

少年がマリーに視線を向ける。マリーは諦めた様子で首を横に振って、それを見た少年は色々と察する。

「それよりあんた達、この誇り高き星晶獣であるメドウーサが名乗ったのよ？ そっちも名乗りなさい」

「……ねえこの子本当に星晶獣？ ただの子供にしか見えないけど」

「失礼ね!？」

「うーん……メドウ子、ほれこれに魔眼」

少年は懐から一本のナイフを取り出すとそれをメドウ子と呼ぶ少女の目の前で持つ。

「あんたが仕切るんじゃない！ ふんっ！」

文句を言いつつ少女が気合を入れると一瞬で金属のナイフは石へと姿を変えた。

「うわ、本当だ!？」

「おーう、こりゃ本物だ！ 凄いね私星晶獣って始めてみた！」

「ふふーん！　そうでしょう、凄いのよアタシは！　さあ畏れなさい愚かな人間共よ！」

「あーうん、悪かったわ。あたしはマリィ、トレジャーハンターよ」

「私はカルバ、自分もトレジャーハンターなんだ」

「むふふ」

一定の尊敬の念(?)を集めたメデューサは、特に無い胸を張った。

「まあ何あるかわからんからナイフは元に戻すけどね。ほい、クリアオール」

「あ、こらー！」

少年がナイフに向かって呪文を唱えると、石へと変えられたナイフが元の姿に戻った。

「あんたそう言う事するとアタシの力が疑われちゃうじゃないの！　と言うか何でそんな簡単に戻せるのよ、魔眼の石化なんて普通戻らないのよ!?!」

「弱体回復系を極めてこそ、空での危険は減るのだ」

不本意だったらしくその場で地団太をふむメデューサ。ともかくメデューサは異能力を持つている事がわかった。

だがここでカルバがある事に気がつく。

「あ、メドウ子ちゃんそこ踏んじゃ」

「メドウ子じゃないっ！」

メドウーサは反論しながら一際強く床を踏んだ。するとそのまま足が床に沈む。いや沈むのではなく、床の一部が下がったのだ。同時にカチャリとまた怪しげな音がした。

「カチャリ？」

「おい、ふぎけんなメドウ子……」

「カルバ、これって……」

「うーん、さてさてどんなのが来るかなあ！」

「喜んでんじゃないわよ！」

冷や汗を流す二人、うろたえる一人、ワクワクしてる一人。そして夫々にとつて今日一日何度も聞き、うんざりとする様な背後からの轟音。恐る恐る振り向くマリーと少年。魔物ではない、大岩でもない。通路を突き進む圧倒的な質量。それは――。

「総員走れええーっ！」

「いやあーっ!？」

「ア、・アタシの所為じゃないからねえーっ!？」

「おほーっ! こりや凄いなええ！」

遺跡への侵入者を文字通り「洗い流そう」とする存在。それはただただ多量の「水」であった。

「もういやだああーっ!!」

少年の叫びは、遺跡の中に響くのみである。

トリプルフェイト 魔蛇とトレジャーハンターと（後編）

■
一 エンゼラにて

「もう、駄目だぞこんなことしちや」

「グウウ……」

「わかっているならいいんだ。星晶獣だからって好き勝手しちやあ駄目だ」

ルーマシー群島の数少ない騎空艇停留所に止められたエンゼラの甲板。そこで巨大な蛇がゾーイに対して頭をたれていた。いたく反省した様子の大蛇は、名をメドウシアナと言った。

突如としてエンゼラに不時着した星晶獣メドゥーサ。その分身、あるいは眷属、または家族——メドゥーサと言う少女に可愛がられている魔蛇メドウシアナ。彼（？）自身も強力な魔眼と星晶獣としての力を秘めているが、流星に空の調停者が相手では戦おうとも思わない。格の違いははつきりと本能で感じた。

「さて君の主人だが場所はわかるかい？ 彼女の傍に恐らく私達の団長もいるのだが」

「グウ」

「そうか……正確にはわからないが、遠ざかっているのはわかるんだね。団長がいるかなあ、きつと何かトラブルでも起こっているのだろう」

心配しつつ危機感を感じさせない様子でゾーイは話す。

「よおゾーイ、戻ったぜ」

「やあB・ビィ。どうだった？」

B・ビィやコーデリア達がゾーイの元に集まる。皆船の停泊許可を取るついでに船から落ちた団長達の情報を聞きに言ったのだ。

「それらしい目撃情報はねえな。ティアマトのクシヤミで流されて、落ちたのは島の特に森の深い場所だ。ルーマシーじゃ人が住むような場所じゃねえし、観測所から見つかり辛い場所だしな」

「一応島の者で捜索隊を出すかと聞かれたが……」

「が？」

「断ったよ。と言うよりも、現在星晶獣とセットになつてる“あの”団長を捜索しようとするとなんか起こるかわからない。こう言った事に慣れてる我々が探すほか無い」

コーデリアの判断も尤もだとゾーイは頷いた。まだ日は高い、探すならなるべく早い方がいいだろう。

「メドウーサと言う少女は、近くにさえいければこのメドウシアナがわかる。あとはそこまでどう行くかだが」

「――！」

団長達の搜索方法を話し合おうとすると、一人ユグドラシルが力強く手を挙げた。

「ユグドラシル？ 何か案があるのかい」

「――！」

身振り手振り意思を伝えるユグドラシル。声は無いが星晶的パワーでの意思疎通を可能にするユグドラシルの意志はしっかりと皆に伝わった。

「なるほど、確かにそれが一番か……よろしい、ならば搜索班と船での待機組を分けよう」

「ならば自分は残るであります。自分はルーマシーの様な深い森には不慣れですゆえ……それに先程の揺れで船内も荒れましたから、エンゼラの損傷を確認いたします」

「シャルロット団長が残るのなら自分も残るです！」

「頼みますシャルロット団長、ブリジール。では皆集まってくれ！ ユグドラシルを筆頭に搜索隊を募る！ 二次遭難は避けたい、森林での活動が不慣れな者はエンゼラで待機だ！」

着々と進む団長搜索作戦。アウギユステでも捕まり救出作戦が行われたと言うのに、

いつも悲惨な目に遭う団長であった。

■ ■
ニ 水だけでスツキリ（命が）落ちる

「水がああ！ 水がああああつ?!」

「いやあー!? あんたなんて事してくれんのよ、メドウ子!」

「メドウ子つて言うんじゃないわよ！ アタシの所為じゃないもん!!」

「凄いな、ルーマシーでこんだけの水量集めるのつてどんな仕掛けだろう。単純だけど、強力な罠だよねえ」

「感心してる場合かあー!?!」

走る走る、また走る。もう今日だけで足パンパンになるんじゃないかって思うぐらい走る。遺跡で出会ったトレジャーハンターのマリーちゃんとカルバさんを連れて、俺達は後方から迫りくる多量の水から逃げまくる。魔物から逃げ遺跡に落ちたと思ったら、この有り様だよ。俺が何をしようのか。

「あ、あんた魔法でもいいから吹き飛ばせないの!?!」

「杖も無しで出来るか！ 第一あんな量の水吹き飛ばす魔法こんな狭い通路じゃ通路事吹き飛ばつーの!!」

「何よ役立たずね！」

「んだとこの野郎っ!？」

こいつ罫のスイツチ押ししておいて反省しない所か俺を役立たずと申したか。

「お前遺跡脱出したら覚えとれよ！」

「ふうんだ！ あんたは置き去りでアタシだけ脱出してやるわよ！」

「あああーんっ!？」

「あんたら横で喧嘩しないでよ！」

マリーちゃんに怒られてしまった。ごめんなさい。

「カルバ何とかならないの!？」

「こういう時はね、行き止まりじゃ無い事を祈って走るのみだよ」

「運任せじゃない!？」

「スリル満点だぜ？」

「そんなのいらぬのよー！」

だめだ、あつちも当てにならなそうさ。迫る大量の水、何か打つ手は……。

「ふふふ……今度こそアタシの力を見せる時が来たようね！」

「くっそー、どうすればいいんだ！」

「散々馬鹿にしてくれたけど、今度ばかりはあんたも」

「杖があれば水魔法を使ったのに！」

「聞きなさいよっ!？」

なんだこの小娘。

「何ですかね星晶獣（笑）？」

「（笑） って言うんじやない！ アタシに任せなさいつてのよ！」

「ちよつと、大丈夫なの星晶獣（笑）!？」

「危ないよ星晶獣（笑） ちゃん」

「何であんた達まで（笑） って言いだすのよ!？」

「いや、なんかしつくり来たから」

「うぎぎい！ み、見てなさいよ！ アタシは星晶獣（笑） なんかじやないのよ！」

顔を真っ赤にさせてメドウ子が水に向かつて魔眼を発動させた。すると俺たちへと

向かつていた多量の水がドンドン灰色の石へと変わっていく。

「お、おおっ!？ これいいんじゃない！ いけるんじゃないの!？」

「やったあ！ 頑張れメドウ子ちゃん！」

「ぬああ！ メドウ子じゃない！」

反論しながら気合を入れてメドウ子はまだまだ水を石へと変えて見せた。そしてこのまま水は全て石へと変わるのかと思われた。

「あ、これやばいかもだよ」

「え？」

「ほら」

カルバさんが石になった水を指差す。すると恐るべき事に石にヒビが走りそこから水が漏れ出していた。

「な、なんつう水圧だ!? ルーマシー中の水でも集めたのかよっ!」

「うう……も、もう目が痛い!」

「ああメドウ子頑張れ、今目を閉じるとやばい!」

「頑張つてメドウ子ちゃん!!」

「メ、メドウ子じゃ……あー! もう無理ッ!」

パチリ、とメドウ子が目をついに閉じてしまった。魔眼の光は消え、そして石となっていた水は砕け、後ろから再び多量の水が溢れかえった。

「ぎゃああああー!」 状況悪化したああ!」

迫る水＋瓦礫。地獄の様な組み合わせと質量が俺達へと再び襲い掛かった。心なしか勢いも増してないだろうか。

「お前無理なら止めとけよ!」 こんでもない事になっちゃったじゃねーか!」

「うっさい、アタシも頑張つたのよ!」

「結果が伴ってないじゃない！」

「うるさい、うるさい、うるさあーいっ！」

メドウ子本人もプライドが傷ついたのか、それともまだ目が痛いのか知らないが涙目で叫んでいる。

「あ、分かれ道だよ」

「はあ!？」

迫るY字の分かれ道。こんな状況でそんな事まで選択せねばならんのか。

「ど、どっち行けばいい!？」

「さてこればかりはわからないなあ」

「右、右にしなさい！ アタシの勘がそう言ってるわ！」

「皆（笑）が右って言ったぞ！」

「なら左ね！」

「ゴーゴー！」

「なんでよっ!？」

思わず左へ曲がる俺とマリーちゃん達。ただ一人メドウ子が右へと曲がった。

「あ、メドウ子!？」

「見てなさいよ！ 絶対右が正解って教えてやるんだからね！」

追いかけてようと思ったが、もう今更引き返せない。それに分かれ道で水流も別れたが、少なくなつた気配はない。やはり走り続けねばならない。

「大丈夫なのあの子!？」

「あれでも星晶獣だ、そうそう死にやせんよ！ それより俺達も大丈夫かこつち！」

「あ、二人ともジャンプ！」

「うえい!？」

「うわあ！」

カルバさんに言われ咄嗟にジャンプ。すると俺達の足元がパカッと開きチラリと穴のそこに剣山の様な床が見えた。

「ふぎ、ふぎけんな！ 死ぬぞあんなん!？」

「やっぱ右が正解だったの!？」

「違うよ、これ多分どっち選んでもなんかトラップあるぜ。ほら左よつて！」

「ちくしよーっ!!」

縦一列になつて通路左側に寄る。すると右側から槍が飛び出して来たがギリギリ刺さらない。その後もカルバさんの指示でなんとかダッシュしつつもトラップを避けていく。

「抜けたあ！」

「あーあー結構楽しかったんだけど終わりかあ」

「楽しくないわよ！」

「あ、あんた達！」

「おう、メドウ子やっぱり無事だった……んっふ！」

トラップ地帯の通路を駆け抜けると、どうやら分かれ道の反対側とも合流したらしい。ただの嫌がらせの様な分かれ道である。そのため反対側に走ったメドウ子が姿を見せたのだが。

「うははは！ くっそボロボロじゃねーか！」

「うるさい！ ちょっと油断しただけよ！」

メドウ子の姿は恐らく全ての罠に引つかかったのだろう。埃やらゴミやらで髪はボサボサ、服も所々破けていた。

「強がつて単独行動するからだ、ぷぷーっ」

「黙りなさい噛みつくわよ！」

「あ、こらやめろ！ 走りながら蛇出すな！」

「合流して直ぐ喧嘩するんじゃないわよ！」

またマリーちゃんに怒られてしまった。申し訳ねえ。

「もーほんと無理、限界！ 何時まで走ればいいのよ!？」

「おっと、皆あれ見て」

「次は何よ!？」

カルバさんがそう言う事言うとまた変なトラップがある気がする。もうどんなトラップが来ても驚かぬえぞ。

「あれって出口じゃない?」

「出口!？」

我々の走る先、そこには光の灯る通路の終わりが見えた。

「けど私達まだ地下よ!」 出口つてもどこに通じてるか」

「少なくともこのまま水に飲まれずに済む! 駆け抜けるお!」

出口は一つ、後ろには迫る水。迷う暇は無い。出た先が安全である事を祈り俺達は皆その出口を飛び出した。

「よっしや、出……たあああああつ!？」

「うえええ——つ!？」

よしんば運が悪くとも、トラップがある程度と考えていた。だがその考えは甘かった。俺達が飛び出した先、そこには床は続いていなかった。

「いやああーっ!？」 今日何度目よ落ちるのお!？」

「無理無理、これ死んじゃうーっ!！」

「あー……私の冒険もここまでかー……」

「縁起でもねえ事言うな!」

トレジャーハンター二人に漂う諦めムード。だがこの空間の底らしき場所がろうじて見えた、あとは着地方法だ。

「二人とも失礼つ!!」

「え? きゃあ!」

「うおつと?」

左手でかなり無理やりにマリーちゃんとかルバさん二人の首根つこを掴み上げる。

「メドウ子、お前背中引っ付いてろ!」

「しょうがないわね!」

メドウ子が嫌々髪の毛を蛇にして俺にまきつける。背中にしがみ付いたのを確認してから、後ろから流れてきた水に混じるメドウ子の作った瓦礫を蹴って別の瓦礫へと跳び移る。

「ちよ、ちよつと! どうする気なの!」

「口閉じてないと、舌かむぞマリーちゃん!」

「う、うん!」

地面にそのまま激突すると、もうなんか最近普通じゃなくなっちゃった俺と星晶獣

であるメドウ子はともかく、マリーちゃん達二人がやばい。しかも先に底につくと上から来る瓦礫に潰される。なので水で押し出されバラバラと降る瓦礫に跳び移りつつ壁へと向かう。

「ふんぬっ！」

壁へ近づくと右手で懐からナイフを取り出しそれを思い切り突き刺す。後は両足で踏ん張りつつ何とか勢いを殺していくだけで。

「それ大丈夫!? ナイフ折れちゃうんじゃないの!?!」

「これはミスリル製だ! そうそう折れやしない!」

軽くて丈夫と名高いミスリル製。とは言え俺含め四人、三人は女の子だがそれでもナイフにかかる負荷は相当だ。なんとか折れない事を祈りつつ、ガリガリと壁を降下していく。頼むぞミスリルナイフ（売却価格50ルピ）!

「あ、あと何メートルぐらいだあ!?!」

「多分2、30メートル!」

「うっおーっ!! このままじゃ、靴が擦れて焼けちゃう!」

「うわああ!?! う、後ろ後ろ!?!」

マリーちゃんが悲鳴を上げた。はつと後ろを振り向くと、水に押されたのかそれとも瓦礫同士でぶつかり弾き出されたのかわからないが、一つ大きな瓦礫がこちらに向かつ

て飛んで来た。

「くっあーっ!! ぎけんなーっ!! お前ら皆つかまつてるおーっ!!」

「きゃああーっ!?!」

まだ床にまで距離があつたがこのままでは瓦礫と激突する。飛び降りても瓦礫の距離が思つたより近い、こうなつては手段は一つ、壁を蹴つて瓦礫へと跳ぶ。

「無双疾風脚!」

利き手で二人を掴んでいる今、一番威力がある攻撃が出来るのは両足のみ。瓦礫に渾身の跳び蹴りをかまして木っ端みじんにする。

「うひよお! すごいねえ貴方!」

「まだ助かつてない! 重ねて失礼!」

「うわ!?!」

地面まで10メートル切つた。右手の二人を両脇で抱え直して覚悟を決める。

「結構衝撃来るから覚悟しとけよ!」

二人から返事が来る前に地面へと着地。二人を抱えて背中にはメドウ子がいるので受身も取れず着地の衝撃が両足からダイレクトに伝わる。

「きゃあ!」

「あいた!」

森に落ちた時と違って木や草のクツションは無い、古いただの石畳だ。これはかなりきた。思わず腕が緩んで二人を落としてしまう。

「ぬああああー……っ！ きっつ……！」

「ちよつと大丈夫！ 足折れたんじゃないの!？」

「いや……骨は平気……めっちゃ痺れてるだけ……」

「骨は平気なんだ。貴方凄く鍛えてるんだねえ」

感心されても嬉しいと思えないのは、鍛えられた経緯と方法の所為に違いない。

「もう降りろよメドウ子……あとお前軽過ぎない？ ちゃんと飯食ってんの?」

「余計なお世話よ!」

よいしょ、と背中から降りるメドウ子。音叉のように震える足の骨がそろそろ落ち着いて来た。

辺りを見渡す。かなり広い空間だ。流れ出た水は溜まる事無く広がって行き瓦礫はそこら中に転がっていった。

「さあて、どこだいここは……」

「遺跡の最下層つてところかな。かなり降りたし」

「出口は?」

「それはこれから探すだねえ」

ルンロンとカルバさんが歩き出す。また新しい罠が出てくる事を期待しているようだ。俺とメドウ子とマリーちゃんは、顔を見合したため息を吐いた。

■ 三 古の記憶

再度小さな炎を魔法で生み出し詮索を行う。俺達が落ちた空間は、だだっ広い空間に石柱が建つシンプルな造り。少なくとも罠で来た人間を即始末する様な場所ではないようだ。

「広すぎる……明かりがこれじゃ心許ない」

「もっとデカイ火出しなさいよ」

「杖ねーつつたろ。杖無しじゃ出力調整上手く出来ないから最悪この空間焼け溶けてマグマになる」

「ええ……あんた、ちよつとおかしいんじゃないの?」

メドウ子ドン引くんじゃねえ、その表情やめろコラ。俺だってこんな不安定に魔法おぼえたく無かったよ。ばあさんによる詰め込み式で素手での攻撃魔法だけは少し不安定なんだよ。杖あればほぼ完璧だけど。

「ねえ、こっち来てみて」

メドウ子とうごうごしているとかルバさんと呼ばれる。言われて行ってみると壁から一部飛び出た塔楼台のような場所があった。

「これは？」

「窪み見てごらんよ。油がある」

光で照らした場所には、黒光りする油が溜まっておりそれが細い溝を通って何処かへと向かっていった。

「……本当だ。乾ききつてない、まだ使えるな」

「なにかの仕掛けで循環してるのかもね。君のその火使ってみて」

「大丈夫なんですかこれ？」

「大丈夫大丈夫、罨じゃないよ」

俺に罨に関しての知識はない。初対面だがここはトレジャーハンターと言う彼女の知識を信じて火を油につけた。すると一気に火は油に広がりそのまま溝を通ってゆく。その火の流れは瞬間にこの広い空間を照らしていった。

「この照明だったのか……」

全貌が明らかになつた空間。一部しか見えなかつた石柱は規則正しく並んでいた。寶石や黄金は無いが、石柱に彫られた装飾は荘厳であつた。その事からここがこの遺跡内でも重要な場所である事がうかがえる。

「まさか畏じやなきや来られないって事はないだろう」

「そうね。必ず出入り口があるはずよ。カルバあたし達は向こう探しましょ」

「オーケー」

「んじや俺とメドウ子であつちか」

「しようがないわね……」

明るくなった事で詮索しやすくなった。一先ず効率重視で二手に分かれる事にする。途中メドウ子と小さな言い争いをしたりど突きあいながら出入り口を探す。

だが同時にこの空間にある壁に彫られた模様にも俺は興味を持った。始めはただの模様にししか見えなかったのだが、よくよく見ると文字にも見えたのだ。

「これってさ、昔の文字かなんかなのかね」

「あー……そうね確かそう。相当前よ。100年以上前じゃないかしら。多分アタシが生まれた直後」

「それって覇空戦争時代じゃねえか」

「そうなるわね」

とんでもない発見だ。この遺跡の価値がぐんと上がった気がする。お宝と言うよりも歴史的な価値がある。覇空戦争時代の遺物はろくに残ってないのだ。

「古い文字か。俺達の文字と似てると言えば似てるが……駄目だ読めねえ。掠れてるし

形式が違う」

「あんた興味あるの？」

「まあ歴史や文化には多少興味があつてな」

「ふーん」

そつけないような声を出すとメドウ子はジツと壁の文字を見ていた。だがしつかりと視線は動いている。

「……え、なにお前読めんの？」

「多少ね。神話を記してるものよ。バハムート云々とかそう言う奴」

バハムート、俺達の世界では創造と破壊を司る神、畏怖と敬意を抱く偉大なる竜とされる。されるのだが明らかにそのバハムートと関係ありまくりなプロバハ改めB・ビイがうちに居るため全く崇める気が起きない。まあ元から俺は無宗教者だが。それにはつきりと関係性を聞いたわけではないのだ。まあなんか関係あるだろ。プロトバハムートなんて名前だし無い方がおかしい。

しかしそのバハムートについての記述とは尚更貴重な遺跡だ。神話ではこの空の世界を作った神が引き裂かれ生まれた方割れがバハムートと言われる。それに関してはある程度現在も伝わっているが、口頭伝承が多く歴史的な遺物は少ない。これはしかるべき研究者に教えるべき事かもしれない。

「他にはなんかあるのか？ 神話以外で」

「そうねえ、これ星晶獣に関してかしら？ 殆ど文字が消えてるけど……其れは、歴史を

制する……何かしら、これ」

「歴史を制する？ どう言うこつた」

「知らないわよ。比喩なのかなんなのか」

メドウ子にもわからないなら、俺にもわかる訳が無い。恐らくこの遺跡を作ったのは
覇空戦争で戦っていた空の民、これも後に伝える歴史と言うよりも日記のような感じでは
ないだろうか。ここからの解明は研究者にでも任せればいいか。

「ねえ、こつち！ デカい扉あつたわ！」

「おつと、あつちでも発見か」

丁度その時マリーちゃんの声が聞こえた。反対側からだつたので急いで駆けつける。
そこにあつた巨大な扉は出入り口と言うよりか何かをしまふ宝物庫の扉のようだつた。

「デカ……ほかに出入口らしきものは？」

「無かつたわ、今の所この扉だけ」

「そうか。しかし……これは如何にも」

「お宝ありそうよね！」

「かもかもだね」

「さあ開けるわよカルバー！」

露骨に宝物あります感を出している扉の前にマリーちゃんのテンションが上がっている。帰りの道も不明なのに現金なものだ。

扉を開けようとする二人を横目に俺はふっと立ち止まり辺りを見渡す。メドウ子もまた同様に辺りを警戒していた。

「……なーんかいるな」

「あんたもわかる？」

「姿は見えないけどな。何だと思う？」

「魔物でしょ」

「だろうね」

こちらを伺うような気配がある。どこからかじつと見つめられているような。

「これ鍵かかっている？」

「無いわね、罨も無い感じだしとりあえず開けてみましょう」

先に扉に向かった二人が取っ手に手をやって大きな扉を開けようとした時、俺達四人の背後から、モリモリと巨大な影が現れた。そしてそれは巨大な拳を振るい俺達をつぶそうとした。

「M O O o o o o !!」

「え、ちよつと!？」

「うおつと!」

咄嗟に攻撃を避ける。マリーちゃんもカルバさんも無事避けていた。

突然現れた巨体、どうやらゴーレムの一種のようだ。砂や泥を集め体にしたクレイ
ゴーレムってやつか。

「何よコイツ!？」

「まあどう考えても番人だよな。扉を開けようとしたら出てきたわけだし」

「番人……って事はやつぱり」

「ここはお宝あるかもしれないって事だね」

「よつしや! とつとと倒すわよカルバ!」

やる気あるうー。

マリーちゃんのお金マークに見えるぞ。

「バンバンつとね!」

「くらえ! お宝のためにー!」

二人が銃を魔物に向かって撃ちまくる。凶体はデカイので外れる事は無い。放たれた弾丸は全て魔物に命中した。

「やったか!」

「それやってないやつだよ、カルバさん」

そして案の定元気もりもりのゴーレム。受けた弾丸を体の中から砂と一緒に排出、同時に銃弾で空いた穴も塞がれた。

「ぜ、全然効いてない!？」

「こりや倒すのは難しいかもね……」

パワーは巨体に見合って十分、そして耐久力と再生力もあり。確かに手強い、普通の騎空士やトレジャーハンターなら手間取る相手だ。

だがしかし。

「体が殆ど砂だな」

「ええ、砂ね」

「特に特殊な魔力防御もない」

「本当にただの砂ね」

「ああ、つまり……へへ」

「うふふ……」

「あんたら二人は何呑気に笑ってんのよ!？」

失敬。思わず笑みがこぼれてしまった。

「さてとつとと帰りたいし出て来て早速で悪いがコイツには退場願おう。メドウ子わ

かってるよな」

「命令は聞かないわよ」

「俺偉大な星晶獣メドウーサの良いところ見てみたいな」

「……しよーがないわねえー！ 見てなさいよ、この偉大なる星晶獣の力を！」

ちよろいぜ。

メドウ子がやる気になった所で、ゴーレムが今度は外さなんとやわんばかりにこちらを睨み拳を振り上げる。

だがすまんなゴーレム、この場にメドウ子が居た時点でお前は詰みだったのだ。

■ 四 石化↓奥義発動↓粉碎↓ゴーレム「アア、(出番)オワツタ……！」

■ 本来ならある程度描写されるべき戦闘が不思議と文章に例えたら一行で済んだ気がする。

「ねえ、なんかアタシの活躍が一切目立った気がしないんだけど……」

そんな事無いよメドウ子。大丈夫、俺は知っている。お前が一瞬でゴーレムを石像へと変えた活躍を……言葉にすると地味だな。

まあそんなわけで俺達の目の前には石化して即俺が放った壊龍伏衝撃で木端微塵に

砕け散って再生も出来なくなった哀れな元ゴーレムの残骸があった。

「しかし武器無いからとは言え素手は疲れる。こう言うのはフェザー君のポジションだ
ぜ」

「誰よそいつ」

「俺の仲間」

「ふーん」

明らかに興味ねえなこの蛇娘。聞くなよ。

「あんた達……さつき瓦礫蹴り飛ばしたのと言い、何者なのよほんと」

あっけなく倒されたゴーレムの残骸を見て呆れた様子のマリーちゃん。何者なのか
と言われてもなあ。

「ただの騎空士です。ええ、ほんと普通の」

「アタシは誇り高き！」

「ああ、もういいから。聞いたあたしが悪かったわ」

多分碌に情報増えないとわかって話を切り上げたなマリーちゃん。だが俺はせめて
言い続けたい、どんな苦しい訓練を強制的に行われたとしても俺の心はまだ一般人なの
だと。

「それじゃあ普通の騎空士さん、悪いんだけどこの扉開けてくれる？ 結構重いのよ」

「まあそれぐらいいいけど」

確かに扉の大きさは結構なものだ。か弱い少女、では無いがマリーちゃんの細腕では骨が折れるだろう。押戸の様なので少し力を込めて押し込む。するとガコつと音を鳴らして扉が一気に開いて行った。

開かれた扉からは、眩い光が溢れかえった。思わず目を閉じてしまふ、それほど眩しい光。それは全て宝物庫へとしまわれていた金銀財宝が発する光であった。

「や、やったー！ お宝、お宝よー！」

「すごいねえー！ これはかなりあるよー！」

溢れかえるような財宝に向かって二人が突撃した。金色の海に潜り、宝石を手で掬う。これ全部換金したらいくらになるのだろうか……。数百万、いやもつといくか？だとすれば……船の修繕、借金返済……ゴクリツ。

「あんな視線が不純なんだけど……」

「そんな事ないよー」

これは純粋な願いだから、純粋に金が欲しいだけです。何故なら金が必要だから。

せめてティアマトが無駄に使い込んだ分ぐらいは取り戻したいと思うのは不純ではないはずだ。なのでトレジャーハンター二人に偶然とは言え多少なり協力した事への謝礼を要求するのも間違っていないはずなのだ。きつとそうだ。なので「ちよいと、お

「いくら何でもこれは無理だっ！」

「あーんっ！ メドウシアナアアーツ!!」

「いやああああ！ あたしこんな所で死にたくなーい！」

「あーあー、もつとスリル味わいたかったなあ……」

瓦礫を蹴つて登つても足場が無いから意味がない。全く想定外の事態でフック付きチエーンもロープ無い、無い無い尽くしで打つ手なし。

嗚呼、俺に翼があつたなら……。

「ジータと星晶獣に振り回されるだけの一生だった……うぐおっ!!」

全てを諦め空の底へと落ちる事を受け入れた瞬間。鳩尾に激しい衝撃が走り激しくむせる。

「な、なん……げふっ！ なにがどうした！」

慌てて辺りを見渡す。そして直ぐ俺の視線がもう動いていない、落下が止まっている事に気が付いた。体が固定されている。島の底から伸びる木の根っこ、それが俺と他の三人をしつかりを掴み上げていた。

「こ、これってどういう事？ またあんた何かしたの？」

「いやこれは……まさか」

マリーちゃんが俺の仕業と思ったようだが、俺は木の根っこを操るような真似は出来

ない。それは星晶獣の様な者の仕業だ。そして直ぐ。

「――！」

鈴を鳴らすような声が聞こえた。フワフワと俺達の目の前に、ドレスを着飾ったゆるふわ系星晶獣が現れる。そして遠くから近づく巨大な蛇の姿も。

「ああ、メドウシアナ！来てくれるって信じてたわ！」

「ガアアアアーツ！」

メドウ子と大蛇が喜びの声を上げた。そして近づく巨大な蛇の背には、見知った姿もあつた。

「おい、無事か相棒！」

「間一髪だったな」

「――！」

手を振るユグドラシルにコーデリアさん達。あそこにユグドラシルが居ると言う事は、目の前に居る一緒の姿形をした星晶獣の正体も直ぐにわかる。

「ああ、君は……この島のユグドラシルだね」

「――！」

俺の問いにニツコリと微笑んで見せた彼女を見て、どうやら俺達はとにかく助かったのだとわかった。

■ 五 団長帰還 ■

「いやあーほんと助かった。ありがとうユグドラシル」

「――！」

ニコニコ笑うユグドラシル×2の頭をこれでもかと言うぐらいナデナデする。ああー癒されるうー。

エンゼラ食堂でやつと腰を落ち着けられた。半日程走り回ったからな。疲れた疲れた。た。

遺跡からの空中落下から危機一髪、ルーマシー群島にいるユグドラシル本体の手によって落下から助けられた俺達。そしてその直後に続けて現れた巨大な蛇メドウシアナ。俺達はこのメドウシアナの背に乗せてもらい無事帰還する事が出来た。

俺達がエンゼラから落下してティアマトのクシヤミの強風で姿が見えなくなつて直ぐ、コーデリアさん達によつて俺達の捜索が行われる事になった。一方で俺とメドウシアナと言えば落ちて直ぐに魔物の群れに襲われ激しく移動、更に遺跡に入ってからあつちへこつちへと移動するのでこれを見つけるのは容易では無い。

ところがどっこい、俺には頼もしき仲間がいた。冷静で的確な判断力で俺が既にトラ

ブルに巻き込まれたであろう事を察したコーデリアさんは、闇雲に探そうとせずユグドラシルの提案もあつてこの島で文字通り根を張っているユグドラシル本体に協力を頼む事にした。

緊急用のリンクを繋げユグドラシルは本体と連絡を取り直ぐに島中の状況を確認。俺達の位置を確認した後メドウ子の位置を把握しやすいメドウシアナを連れて助けに来てくれたのだ。

今回ばかりは……いや、わりとしょっちゅうであるがとにかく死を覚悟した。なんせ空の底へと落ちるのだ。全くの未知、なんならイスタルシア並みに謎に包まれている空の底。あのままだったら間違いなく死んでいたらう。

後で聞いて分かった話だが、どうもあの遺跡周辺の地盤が緩んでいたらしい。そんな中で俺達が大暴れしたもんだから崩落したとの事。厄日だぜ。

「島に来て早々どころか、上陸する前から面倒事ばつかに巻き込まれるなあ自分」
「まったくだよ、冗談じゃないよちくせう」

呆れた表情でカルテイラさんに言われたくない事を言われた。もう落下はこりこりだよ。

「なんにしても無事で何よりだった。君の事だから死にはしないとだったが、万が一があつては困るからね」

「ご心配おかけしました」

「良いんだよ、君が無事ならば」

コーデリアさんホント良い人だなあ。

ちなみに俺とメドウ子を吹き飛ばしたティアマトは、現在マストにロープで縛りあげて吊るしてある。顔には「私は、団長をクシャミで吹き飛ばしました」と書いた紙を張り付けておいた。いい加減クシャミで辻風起こす癖を治させるべきだろう。

「で、あそこの二人やけど……」

「う、うう……お宝、お宝が……」

そして食堂の隅で落ち込んでいるのはマリーちゃんである。トレジャーハンター二人もそのままエンゼラに招待した。偶然の出会いだが色々あったので休んで行くよう言ったのだ。しかし遺跡の崩落は、当然あの宝物庫にあった財宝も巻き込んだ。マリーちゃんは空の底へと消えて行ったお宝への未練が激しいようだった。

「マリーちゃんそう落ち込まず、命あつての物種と言うし気落ちしなさんな」

「命も大切だけどお宝も大切！ あのお宝の量見たでしょ!!? あれだけあれば二人、いえあなたとメドウ子含めた四人で分けても相当な額だったわ!」

「だろうね、俺だつて欲しかったよ。欲しかったよ……欲しかったよ!」

「まあまあマリー、お兄さんの言う通りだよ!」

「だつてえ、だつてカルバア〜」

「それにいく……ほい！」

ゴソゴソと胸元をまさぐったカルバさん。何を取り出すのかと思つたら、ひよっこりと谷間から拳程はある宝石が出て来た。と言うかしまう場所……。

「あ、あんたこれ!?!」

「いやー死ぬかどうかだつたけど、もしかしたらと思つて一番良い奴取つといたんだよねー。いやはや大正解だつたね。これ一つでも換金すれば苦勞の元取れるぜ〜?」

「はーこら凄いわ、確かに相当の価値あるで」

「でしょ」

シエロさんと一位二位を争う商人カルテイラさんのお墨付きが出た。これはもう間違ひなく凄いな宝石だろう。

「カ、カルバ……やつぱりあんた最高の相棒だわー!」

ここで熱いマリーちゃんハグ。うーむ、カルバさんなんと抜け目ない。あの状況で宝石を取つておこうとは生粋のトレジャーハンターと言う事か。

ところで宝石換金の際俺にも少し……。

「ちよつと馬鹿人間!」

「うおつ!?!」

突然食堂の扉を開けてメドウ子がかけこんできた。なんだってんだ、大事な話しようとしたのに。

「入室と同時に馬鹿人間とは失礼な。で、どした?」

「どしたじゃないわよ! どうなってるのよこの船、星晶獣だらけじゃない?」

当然のようにいるメドウ子。まあ一応ね、今回の事の原因でもあるし。連れてきましてよ、ええ。

「来る時説明したじゃん」

「冗談と思うでしょあんな与太話! 普通あり得ないわよ、星晶獣8体仲間にしてるなんてー!」

「知り合い含めるならアウギユステにもいるぞ。海の家でバイトさせて資金源にしてる」

「あんたほんと馬鹿なんじゃないの!?!」

「コラ、馬鹿馬鹿言うもんじゃない」

「あいた!?!」

ギャンギャン騒ぐメドウ子を後ろから来たゾーイが一発拳骨を落とした。ただポコリとまるで痛そうではない。

「あにするのよ!?!」

「誇り高き星晶獣を自称するならそんな騒ぐものではないよメデューサ」

「そうそう。あとあんまこの騎空団の事気にしても意味ねえぜ。なんせ相棒が団長だからな！」

「だ、だって……と言うかあんた空の調停者でしょ!? そっちの黒いのは、小さいけど黒銀の竜だし! 知ってるんだからねあんた達の事。なんだってこんな馬鹿人間と一緒にいるのよ」

「オイラ相棒に負けたからな。なら仲間になるしかねえよな!」

果たしてそうでしょうか、俺は疑問ですよB・ビィ。

「私もだ。団長は私を下したからね。ならば仲間になろうと思った」

「く、下したって嘘でしょ? 黒銀の翼に均衡の調停者は星晶獣の中でも特殊な存在じゃない、そんなのと戦って無事で済むはずが……」

「やっぱそう思う? 俺もそう思ったんだよね。プロトバハムート戦は特に。あと別に無事じゃ無いぞ、普通に数日気絶したから。死ぬかと思ったからね。」

「気絶ですむあたり主殿は既に常人ではないな」

『全くだ。いい加減認めろ』

うるせい（笑）二名、いつの間に来やがった。

「あーもうワラワラと星晶獣がまた……星晶獣バーゲンセールじゃないんだから、どう

なってるのよ本当にもう！」

「ほんとにな」

「なんであんたが同意するのよ！」

そう言うな、バーゲンセールって言うなら何人か売って追い出したるかまったく。

「いやあく相変わらず賑やかですねぇ」

「ええほんとに全く……」

「うぶぶ」

「……ん？」

ん？

■ 六 出たぞ！神出鬼没の商人！

「うおおっ!! シェ、シェロさん!! い、何時の間につ!？」

「どうもくお邪魔します」

まるで違和感無くいつの間にか隣に座っていた見知った商人シェロカルテさん。いやほんと何時の間に現れたんだ。

「团长！ そう言えばよろず屋がさつき訪ねて来たから通しといたぜ！」

「え、あ、おう」

「じゃ、そう言う事で！ 俺はユーリと鍛錬して語り合ってくるぜ！」

突然食堂入り口から顔をのぞかせそう言うだけ行って去って行ったフェザー君。うーん、君だったかフェザー君。別に通すのは構わないが、一緒に来るか先に報告して欲しかったな。

「ちよつと、誰よこのハーヴィン？」

メドウ子がシエロさんを指さして聞いて来る。人を指さすんじゃない。

「どうも初めまして。私シエロカルテと申します」

「なんでもやってる商人さんでな。俺もお世話になつてる」

ええそりやあもう、大変お世話に……。

「貴方が星晶獣メドウーサさんですか。ルーマシー周辺で目撃情報が多いのでお噂は聞いておりますよ。なんでも大変凄い力をお持ちだそうで」

「あらわかる？ そう、アタシは誇り高き星晶獣メドウーサ、全てを石に変える魔眼を持ちし者！」

「それは素晴らしい！ 流石星晶獣ですね」

「ふふーん！」

「ではこちら御近付きの印にいかがですか？」

シエロさんが徐に背負つたりリュックから缶を一つ取り出しそれをメドウ子へと差し出した。

「何よこれ？」

「温暖な島で採れた柑橘系を使用したクッキーです。島の名物で柑橘の爽やかな甘みと酸味が美味しいと評判なんですよ」

「へ、へえ……まあアタシそんなお菓子には興味ないけど、けど差し出すって言うなら貰つてあげましょ！」

嘘つけ釘付けじゃねえか視線。食いたいんだろお菓子お前。髪の毛の蛇までガン見じゃねえかよ。

しかしすげえなシエロさん、直ぐにメドウ子の性格を把握して丸め込みやがった。やはりとんでもねえ商人だ。リヴァイアサン（本体）と商談したり、俺の提案とは言えポセイドンを働かせる事に躊躇が無いだけはある。

メドウ子はさつそくクッキーを取り出し一枚口へと運んだ。

「……美味しい！」

メドウ子が太陽の様な笑みを浮かべて叫んだ。見た目はカワイイ少女の笑顔、これには俺達もニッコリ。

「そりゃ良かったな」

「お口に合ったようであんまり安心しました〜」

「え、あ……ふん！ 愚かな人間が作った物にしてはまあまあね！」

思わず美味しいと叫んだ事の照れ隠しのつもりらしい、顔を朱色に染めながらも憎まれ口をたたく。

「そうかいそうかい、ならあのメドウシアナつてのにも分けてやったらどうだ。甲板に居るんだろ」

「い、言われなくてもそうするわよ！ ふんだ！」

そう言つてメドウ子はクツキーの缶を持って目に見えてご機嫌な足取で去つて行つた。子犬かな？

さて騒がしいのが居なくなつたので話を進めるとする。

「それで、なんででしょうか。突然現れたのはこの際良いとして」

「話が早くて助かりますう〜。まずは今回は災難でしたねえ、ご無事で何よりでした〜」
今回も「災難でした。」

「ありがとうございます。良いか悪いのか、慣れちまいましたけど」

「それはそれは〜ああ、それで要件なのですが、実は一つ依頼をお願いしたく〜」

ふむ、実の所シエロさんとは一度会つてガロンゾ行く前に依頼を貰いたかつたところだ。都合は良いがなんとも絶妙なタイミングで何時も現れるな。俺の依頼を求める気

配を感じ取った可能性もある。シエロさんならあり得る事だ。

「どんな依頼ですか？」

「ある島にある遺跡の調査なんですわ〜」

んんん　〜〜〜っ！　本当に絶妙なタイミングで来たなあ。

「俺が今日遺跡で死ぬような目に遭ったの知って持つてきました？」

「いえいえ、全くの偶然ですよ〜」

「ほんまかいな」

カルティラさんも呆れた様子だった。

「まあ話は聞きますけど、どんな遺跡ですか？」

「手付かずのとある遺跡でして、どうやら古の錬金術に関しての資料が眠っているのではないかと言われてる場所なんですよ〜」

「錬金術……ねえ、それってもしかして」

俺達の話聞いていたマリーちゃんが思い当たる事があったのか、一枚の地図を取り出し俺達に見せた。

「この島の事？」

「おやあ？　そうですね、まさにこの島の遺跡ですが、ご存知なのですか？」

「ここはあたし達も噂で聞いて、今度行こうと思つてた所なのよ」

「なるほどそうでしたかあ、ただ今回は遺跡の調査ギルドから受けた正式な依頼でして。私の判断でなるべく信頼のある騎空団に依頼して欲しいと言われてまして。もうトレジャーハンター個人による遺跡調査は受け付けられていないですよ。」

「ええ、そんなあ!? 手付かずの遺跡で色んなお宝あるかも知れないのに!」

「申し訳ございません、こればかりはこちらではどうする事も出来ないのです。」

マリーちゃん、あんた宝石一応手に入ったんだからそこまで落ち込むなよ。

「いやいや、マリー。一つ手が残ってるよ?」

「カルバ?」

落ち込むマリーちゃんに先程の様に元気づけるのかと思ったらニヤリと笑いつつ俺を見た。

「要はよろず屋さんから依頼を受けた騎空団なら調査で遺跡に入れるって事だよ」

待って。

「待って」

「あ、なるほど!」

「待って」

待って。

ええ? 何今回そう言う奴? こう言う流れの奴なの?

「ね、ね！ お兄さん、あたし達仲間に入れない？ 自分で言うのもなんだけど、トレジャーハンターとしての腕も確かだし足手纏いにはならないわよ！」

「私もこれでトラップのプロフェッショナルだぜ？ 役に立つと思うなあ、特にその依頼なんかじゃさ」

「カルバさんは遺跡でスリル味わいたいだけでしょ……」

「それもあるかなー」

絶対それだけが目的だろ。今日一日でもうわかってんだぞ。

「依頼を受けるのは大丈夫です。ただお二人さんは待て、突然すぎるから判断できん」
「それって何時もの事じゃねえか相棒」

「やかましいB・ビィ、ほいほい仲間増やしたら節操のない騎空団と思われるだろ」

「今更やなあ」

「今更とか言わないでカルテイラさん。それに調査依頼であつて遺跡潜つても別に宝を持つて帰れるわけじゃあ」

「あ、それでしたら報酬に含まれていますよ〜？」

あつさりと俺の意見が覆された。

「……そうなんつすか？」

「もし錬金術の資料などがあつた場合、当然そちらは調査ギルドに渡しますが単純な宝

石類であれば報酬として渡してかまわないと。目的は錬金術の資料の方が重要らしいですねぇ〜」

「よしっ！」

ああ……！ 状況がマリーちゃん達側に傾いた。

「け、けどなあ、これ以上うちを大所帯にするのも」

「……ねえねえ、お兄さん」

「うん？」

「今回あたし達結構助けてもらったし、この宝石売ったお金はお兄さんを含めて三等分しようと思うんだけど」

その話今出すう〜？

「お、おう……いやまあ、その別に偶然だからね、成り行きって言うかそんなお礼を期待してたわけじゃないしね？」

さつき此方から話を振ろうとした時は何てこと無かったのに、いざ向こうから話を振られると強く出れない。

「まあまあそう言わないで、カルバもいいでしょ？」

「そうだねーなんだかんだお兄さんいなきやお宝どころか死んでた可能性もあるしなあ」

「いやそうかもしれないけど……いやしかし……ねえ、カルティラさん」

「ここは交渉上手なカルティラさんに投げよう、そう思つて話を振つたのだがカルティラさんはジツとマリリーちゃんの持っている宝石を見ていた。」

「カ、カルティラさん？」

「……団長はん、まあ一応話すけどな」

「あ、うん」

「今回あのメドウ子とメドウシアナつちゆう星晶獣がエンゼラのバランス傾かした所為で船内の備品が結構やられとつてな」

「……え？」

「壊れて使い物にならんくなつた備品の補給で結構な額になるんや」

「え？」

「あと外装はともかく、衝撃で船内の配管とかも少し……まあ幸い設備の整つて無いこの島でも直せる範囲やけども……金はかかる」

「え？」

「そんでな、この宝石なら売値三等分でも十分賄えるわけや」

「Oh……」

「まあ判断は任せるわ。あとあんた等その宝石売る時はうちに任し、いっちゃんたこう

売れるように交渉したるさかい」

ああそんな、そんな事が……そんな。

俺は恐る恐る、二人のトレジャーハンターを見た。二人は実に素晴らしくニンマリと微笑んでいた。その手には、今俺が一番欲しい物が握られている。

俺は取り合えず、メドウ子とティアマトのお尻をペンペンすると決めた。

■ ■
七 ある夫婦漫才師

一人の団長が災難に打ちひしがれる中、ルーマシー群島とは離れた場所で移動する戦艦にその二人は居た。

「なんだろうねえ、急な呼び出しってさあ。僕もう休んでたのに」

「うるさい、雇い主が来いと言うんだ。行くしかないだろ」

「けどさあく予定つてものがああるじやない色々」と

「お前に予定なんて無いだろう……」

「あるある！ これでも色々考えてるんだから、今日の予定に明日の予定、それに明後日明々後日！」

「つまり予定無し of 予定なんだろ」

「ひつどいなあ、スツルム殿!」

赤髪のドラフ、青髪のエルーン。あの団長に「流れの夫婦漫才師」とアウギユステで言われた二人組み、スツルムとドラフの二人であった。

「で、真面目な話なんだと思う? 急な話って」

「さあな、聞けばわかる」

「心構えしたかったんだけどなあ」

「安心しろ、お前は心構えが必要なほど繊細な奴じゃない」

「再度酷いなあ……」

「おふざけは終わりだ」

艦内通路を歩いていた二人は、ある扉の前で止まる。他の扉よりも豪華な装飾が見られ、如何にも艦の指揮官クラスがいるのがわかる。そして、傭兵である二人にとっては雇い主の部屋。

スツルムが扉をノックする。少し間をおいて部屋の中から「入れ」と短く返事があった。それを確認してから二人は戸を開けて中に入る。

「急ですまないな、少し聞きたい事があった」

部屋の奥の書斎机には漆黒の鎧を身に纏った人物がいた。室内であつても兜を外すことも無い。それでも兜に籠った声から女性である事だけはうかがえる。

「いいえ、それで何か？」

「お前達は以前アウギユステで、あの騎空団の団長に会ったと言ったな？」

「ああ、あの少年のことですか」

スツルムは直ぐにあの騎空団の団長の事を思い出した。この場合の「あの」とは「ああ、あのややこしい騎空団の、問題児ばかりの、苦労人の……」と言う呆れやら哀れみやらを含んだ「あの」である。最近しよつちゅう言われる言い方である。

「彼がどうかしましたか？」

「……奴はあのジータと蒼の少女の知り合いと聞いている。しかも星晶獣を8体も引き連れている様な奴だ。少し気になってな」

「まあ最近の活躍は目覚ましいものがあるよねえ。活動して一年も経ってない騎空団の戦歴じゃないよ。しつかり帝国と喧嘩してるし」

「その事もあってな……帝国に仇なす騎空団だと各所で声が上がって私の所まで話がある。無視してもいいが多少は体裁も気にせねばならぬぞ。報告は受けたが奴等と接触したと言うお前達に少し話を聞きたかった。アウギユステでは星晶獣との決戦も見たのだろうか？」

「見ましたよ、当然安全な場所からですけど」

「あれはジータと同質の男です。ただ鍛えた騎空士のレベルじゃない、星晶獣を前に恐

れる様子も無い」

本人が聞いたら「いや普通に怖いし、嫌なんですすがそれは」とか言いそうだ。

「本来なら自ら帝国に喧嘩を売るような真似はしないでしょう。今回は成り行きによるものが大きかった。本人はとにかく戦いを避けたい性格だったので」

「ただ本人が望まずトラブルが近づいてくるって感じがなく、そもそも仲間の星晶獣もトラブルの連続で仲間になつたらしいし？　今頃また星晶獣の仲間増やしてるんじゃないのかな」

「そんな簡単に星晶獣を仲間にされてたまるか。帝国でさえポセイドン一体を捕まえるのに周到な計画と準備を必要としたんだぞ」

「どうかなく？　彼ってそう言うのと引き合いやすいつて言うか、引き寄せる性格なんだと思うよ？　僕達の予想なんて簡単に覆しちゃうだろうねえ」

ドラंकは実に楽しそうに話した。スツルムはと言うとそんなドラंकに頭を痛めながら「ケツに刺してやろうか」と剣に手を伸ばしたが雇い主の前とあつて一端手を引つ込めた。

「しかし面白い子だったよねえ、それになんだかんだでスツルム殿も結構楽しんでたよね。アウギユステでの密猟者との追っかけっ子！」

「うるさい」

「いってえ!？」

やはり剣を手を取って躊躇いなくケツを指した。冷めた表情のスツルムにケツを押さえて飛び上るドラंक。そんな二人をみて特に何も言わない騎士の様子から、彼女も二人のこのやり取りをよく知っているのだろう。

「失礼しました。ともかく此方から態々関わらなければ、向こうもこちらは気にしないでしょう」

「此方も関わる気は無い、一々ジャータのようなイレギュラーを相手に出来んからな」

「それでも念のため用心した方がいいかと、少しでも関わってしまったら向こうが望もうが望ままいがズルズルと関わる事になります。あれはそう言う星の元に生まれた輩です」

「……それが聞けただけでも良かったよ」

全空広しと言えど異例の大星晶獣8体を仲間にし、更にそれら星晶獣をタイマンで下せる戦闘能力を持つ団長。話だけ聞いたら星晶獣以上に化物である。誰が好き好んでこんな輩と関わるのだろうか。

「では戻ってくれていい、態々わるかった」

「いえ仕事ですから、では」

軽く頭を下げて二人は部屋を出た。ドラंकは出て直ぐに背伸びをして体の関節を

鳴らした。

「いやあく息の詰まる空間って苦手、早く部屋戻って休もうかなあ」

「……お前はもうちよつと息を詰まらせるぐらいが丁度良いんだ」

「あはは、酷いねえ。ところでスツルム殿、この艦って次何処向かってるんだっけ？」

「もう忘れたのか……帝国本国と秩序の騎空団の間できな臭い動きがあつて、それに備えて装備の補給をする話だったろう」

「だってここ最近忙しくってド忘れしちゃつてさあ。で、どこだっけか？」

相方の恍けた様子に呆れながらスツルムは自分達が乗る戦艦の行き先を告げた。

「私達はガロンゾに行く」

少年は知る事になる。この世には、蒼の少女と同じ神秘を秘めた少女が居る事を。そしてその少女と共に居る漆黒の騎士の事を。

胃痛が止む事は無し。

こんにちはわ、メドウ子

■
■
一 ルーマシー・グツバイ

ルーマシーでメドウ子が原因で壊れた備品を補給してエンゼラを軽く修理した俺達は、シエロさんからの遺跡調査の依頼を受け目的の島へと旅立つ事になった。

一夜を過ごしルーマシーを発つ。もとより一日の滞在であったので予定通りではあるのだが、別れを惜しむ者が二名。

「――！」

「――！」

「――！」

甲板で話し込む瓜二つの星晶獣。ユグドラシル・マグナとユグドラシル本体である。ただ二人が話しているだけなのに何でこんなな和むのか。ぱつと見そっくりな姉妹が別れを惜しんでるようだ。

本来ならもっとゆっくりさせてやりたいところだったが、出来ればエンゼラの本格的

修理のため早めにガロンゾへと行きたい。申し訳ないが今回はこれでお別れだ。

「ありがとうな、こっちのユグドラシル。お前のおかげで助かったよ」

「――！」

「ああ、また来るよ。なんかお土産もって来てやるからな」

「――！」

ああなんて眩しい太陽の様な笑顔。ユグドラシルが居ると言うだけでルーマシーに永住したい。

最後にまた来るからとユグドラシル二人が約束を交わし抱き合い、エンゼラがルーマシー群島を発つ。少しすると森の中から通常形態の巨大なユグドラシルが現れ手を振っていたので手を振り返す。きつと島の住人は驚いたろう。

「さて目的の島はガロンゾへのルート上だ。まっすぐ進めるな。到着は明後日つてところだろ」

「恐らくそれを知っていてシエロカルテ殿は、団長殿へ依頼を持って来たのだと思います」

「だろうね。報酬もそれなりだ、俺が断る事は考えてなかったなこれは」

「なんと言うべきか、抜け目が無いというのか……」

「だから信頼できるんだけどもな」

ユーリ君も今後シエロさんとの付き合いが長くなるだろう。覚えておくといい、あの人はこつちが必要とする情報と依頼を予め知っている。情報源は知らんが。

「さ、遺跡調査の計画を練ろう。今回の様な事になりたくないからな。準備は怠りたくない」

「同感です。じゃあ会議室へ」

「いや食堂でいいよ」

「え、あ？　しよ、食堂ですか？」

エンゼラには勿論会議室はある。なんなら第一第二と複数ある。だが会議室使う程の事も普段起きないので物置となりつつあった。もつと言うなら計画立てる前にトラブルが起きるのでそもそも使う機会がなかったのだが……。

「使うのに荷物片付けなきゃだし、食堂なら場所も広いし、なんか食いながら話せるから」

「そ、そうですか」

「そうそう。ここは軍じゃないから、あんま肩肘張らないようにね。そいじや行こう」

生真面目なユーリ君には徐々にここのやり方に慣れてもらう。そして常識人として俺の胃を護る役割を自然に任せていきたい。

「そう言えばあの星晶獣の娘、メドゥーサでしたか？　あの後姿を消しましたね」

「ああクッキー食べてご機嫌だったな」

シエロさんにクッキー貰ってメドウシアナと一緒にハムハムしてた姿は中々に癒された。黙ってれば可愛いものだ。その後満足したのか知らん間に居なくなっていたが、まあ心配せずとも元気にやつてるだろう。

そして廊下を移動しつつ手の空いてる人に食堂へ集合する様声をかけようかと考えていたら、突如俺の腋を小さな影が走り抜けた。

「うお、なんだっ!？」

「子供?」

小柄な影はあつと言う間に曲がり角を曲がり姿を消した。子供のように見えたが、うちの団にハーヴィン族はいてもあんな子供はいなかったはずだが。

「いや待てよ、あの白髪……まさか」

「ウオラアツ! 待ちやがれあつ!」

「逃がさないぜえ!」

「ヒヤツハー! 追い込んでやるぜえ〜!」

「つて、おいおい今度は何だ」

そして続けて後ろからB・ビー(マチョビイ)とフェザー君、ハレゼナがバタバタと通り過ぎていった。

「な、何事でしょうか？」

「いや、全然わからん。わからんが、さっきの後姿……まあ追うぞユーリ君」
「了解です！」

どうも面倒な予感がする。あの後姿も激しく見覚えがあった。具体的に昨日であつたあいつ。ユーリ君と共に後を追つて廊下の突き当りへと向かう。

「密航者めおとなしくしろあつ！ 三人に勝てるわけねえだらつ！」

「やめなさいよ、勝つわよアタシは！」

突き当りでは、マチヨビイ達がドツタンバッタン大騒ぎして少女を取り押さえていた。そして取り押さえられていた少女と目が会うと、彼女は俺に助けを求めてきた。

「あ、あんた!? ちょっと、こいつら何とかしてよつ!!」

「……お前なんでいんの?」

紐でグルグル巻きにされていたのは、誇り高き星晶獣（笑）であるメドウス改めメドウ子だつた。

■ ニ こいつは、^{ヘビ}蛇だぜ

捕縛されたメドウ子をそのまま食堂へと連行。皆集めてから作戦会議ついでにこい

つについて話し合う事になった。

「あらま、本当にメドウ子じゃない」

「メドウ子ちゃん昨日ぶりー」

「メドウ子って呼ぶなってばー!」

昨日なし崩しに仲間（任期不定）に加わったマリーちゃんとカルバさん。

「こいつ何時の間にか食糧庫でオイラのリンゴ食ってやがったんだよ。許せん」

「鼠かお前は……」

「だ、だつて中に入ったら迷っちゃって……部屋に入ったら、リンゴとか置いてあつたら、美味しそうだったし」

それはお前のために置いてあるんじゃないやねえ。空の旅じゃ貴重な食糧だぞ、勝手に食うな。

「そもそもお前帰ったんじゃないのかよ。昨日いつの間にか居なくなつてたじゃん」

「そ、それは……」

「あとメドウシアナはどうした?」

「団長」

食堂に遅れてゾーイとティアマトが現れた。傍らには小さく縮んだメドウシアナの姿もあつた。

「あ、メドウシアナ!?」

「いつの間にか船底の陰に隠れていたよ。上から見ると普通にはみ出してたけどね。一応隠れてるつもりだったらしい」

「見ツケタラ大人シクナツタガナ」

「ガア……」

省エネモードでも人間ほどもある巨大な蛇であるが、頭を垂れながら這ってくる姿はなんだかカワイイものがあった。

「んで、訳を聞こうか密航者？」

「あ、あうあう……」

この感じだと本人は見つかるとは露程も思つてなかったらしいな。じやなきやここの言葉に詰まるとは思えん。言い訳一つも考えてなかったのかこいつは。

「ガア……」

「アア? ソウナノカ?」

「あ、こらメドウシアナ!」

「どした、そいつ何か言ったのか?」

「昨日楽シカツタカラ、コツソリツイテ来タツテサ」

一気に場の空気が和んだ気がした。

「お前……」

「違うわよ!? メドウシアナいい加減な事言わないで!」

「ガアー、グア、グロロ……」

「あーなるほどな。昨日マリー達が仲間になったって後で聞いて、タイミング逃したから自分もついて来たいって言い損ねたんだと」

「ちよつと!」

「どんどん皆の視線が生易しくなっていた。」

「ようは寂しかったのね、この子」

『まあ星晶獣とは孤独でもある。どこか島に根付こうが大体は眠りにつくから誰かと交流するでもない。そう言う感情を抱くのが居ても不思議ではないだろう』

「ちよ、ちよつと気持ちわかる……私も決まった島に居るわけじゃなかったし……何時も、一人ふらふらしてたから……結構寂しかった」

「……ボクもわかる。だ、団長と会えるまでずっと一人だったし。壊天刃だけが安心だったから」

「ヒトリボツチハ（o・ω・o）サミシイモンネ」

「勝手に話進めないでよ!」

「だんだんと可哀そうな子扱いされだしたメドウ子が憤慨している。」

「別に寂しいわけでもないし、独りぼっちでも無いっ！ アタシにはメドウシアナもいるんだからね！ ただちよつと……あれよ、アタシが行ってあげたらその馬鹿人間が嬉しいだろうと思っただけよっ！」

「なんでじゃい」

何で俺が嬉しいなんて話になるのだ。別に嬉しくねえぞ。

「嬉しいでしょーが、普通星晶獣が仲間になるって言ったら!? 泣いて喜びなさいよ！」

「あ、うちもう星晶獣8体いてですね」

「何なのよもう、この騎空団っ!!」

何なんだろうね。

「さてどうするね団長？ 君の判断次第だが」

「なんだかこのまま追い出すのも可哀そうであります」

「可哀そうとか言わないでよ!？」

「ただ言っ出てくような感じでもないであれ」

「そうだなあ……」

星晶獣とは言え精神年齢Ⅱ見た目の少女を仲間にするのもなんだかなあ。扱い難しそう。それに星晶獣がいる時点でおかしいのにこれ以上増えては最早過剰戦力どころの話ではない。俺は何を目指してると言うのだ。いや、イスタルシアだけでもさ。

「……しかたない。まあついて来たいなら来いよ」

「別について来たいとは言つてないでしょっ！　ただあんたがアタシに来て欲しそうだから来てあげたんであつて！」

「わかつたわかつた。嬉しい、嬉しい」

「はぷっ！　あ、頭なでるなー！　髪乱れちゃうでしょー！」

これ以上騒がれてもかなわん。適当に大人しくさせるために髪をワシヤワシヤしてやる。メドウ子がウガウガしてるがもう無視しよう。

ふとメドウシアナと目が合った。蛇ゆえに表情は変わらないが、不思議と彼（彼女？）は俺に対して「この子を頼みます」と言わんばかりに深く頭を下げた。

保護者かな？

■ 三 誇り高き星晶獣メドウサちゃん朝

■ なんやかんやあつて「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女ZOY」へと入団を果たしたメドウーサ。本人は「頼まれたから入団した」スタンスを崩す気が無いので偉そうにしてるが、なんだか一部団員からの視線が生暖かい、優しいものを含んでいゝ事には若干の不満があつた。

それはともかく個室も与えられたメドゥーサは、そのベッドで一夜を過ごしながら新鮮な気持ちで新たな一日を迎えた。

「……ルーマシーの森じゃないわ」

ここ数十年ルーマシー群島で過ごしていたメドゥーサは日々森の木々をベッドにし、またメドゥシアナに包まれての就寝が主だった。それが一転しフカフカのベッドで寝たのだから気持ちもフワつく。

「ンガア〜……」

「おはようメドゥシアナ」

個室の真ん中でとぐろを巻いて眠るメドゥシアナ。省エネモードでもこの大きさの蛇が寝ていると威圧感があった。それでもメドゥーサは愛しい家族の頭を抱き寄せた。

ここでキョロキョロ辺りを見渡す。昨日割り当てられたばかりの個室には、まだ何も私物の無いスッキリとした装いだ。当然遊べるようなものも無い。そして彼女は退屈が大嫌いだ。

「……よし、メドゥシアナ」

「グア？」

「探検するわよー！」

なので彼女はまだまだよく知らないエンゼラ船内を探検する事に決めたのだ。

まだ寝ぼけ眼のメドウシアナを引き連れて、エンゼラ探検へと繰り出したメドウーサ。彼女が今いる場所は個室の並ぶ廊下だ。空き部屋は多いがメドウーサの周りの部屋はもう団員達の部屋となつている。ラムレッダ、フェザー、フィラソピラと名札が書かれており、仲間になつた順に部屋が割り振られたのが良くわかる。

ここで人間のプライバシーと言う事に疎く、己が星晶獣であるが故に我が道を行くメドウーサは何か面白いものは無いかとかまわず他人の部屋を覗こうと思ひドアノブに手を伸ばした。だが扉には鍵がかかつていたため中に入る事は出来なかつた。

「なによ、生意気にも鍵付き？」

そう言えば自分の部屋にも鍵が付いていた事を思い出す。これは団長の意向で個室には全て鍵をつけたためであり、女性団員が多くなりやはり男女互いに気にする事もあつたろうとエンゼラで各個人のパーソナルスペースになり得る部屋には鍵をつけてもらつたのだ。

扉だけを見てもつまらない事この上ないのでとつと移動しようとするメドウーサであつたが、ある扉の前の名札を見て足を止める。

「リヴァイアサン……」

しつかりとその名札には「リヴァイアサン」と書かれていた。メドウーサはなんだか呆れてしまう。星晶獣である自分が仲間になる時、まず個室の希望を聞いてきた団長に

対し不思議な男だと思ったが、まさか非人型であるリヴァイアサンにまで個室があるとは思わなかった。

何となくメドゥシアナと似た体形のリヴァイアサンがどんな部屋にいるのか気になったが鍵がかかっているからと思いきそのまま通り過ぎようとした。だがふいにリヴァイアサンの部屋の扉が僅かに開くのが見えた。ほんの数センチだが風か何かで開いたらしい。それを見て鍵がかかっている事を知ったメドゥーサは、もしかしたら鍵を閉め忘れたのかもと考えた。相手が星晶獣であるならメドゥーサも用心するらしく、軽くノックをして反応が無い事を確認すると扉を開けて中を覗き込んだ。

「い、いないわね?」

「ガアー」

中にはリヴァイアサンはいなかった。どうやら鍵を閉めずに部屋を出たらしい。

扉から顔をのぞかせたまままで部屋を見渡す。広さは自分の部屋と同じぐらいだった。だが家具らしい家具は無く、代わりに透明なガラスで出来た水槽が部屋の半分を占めていた。水槽には珊瑚が幾つか並べられており、窓から入る太陽光にキラキラと反射する水が美しく、思わずメドゥーサも「わ、綺麗」と声に出した。

『何をしている』

「うわあ……っ?! あいだっ?!」

水槽に見惚れていたら後ろから声をかけられ、驚き仰け反ると反動で扉が閉まり首を扉と壁に挟んでしまった。

「あ、い、っだあ、ー、ー、ーっ!? く、首があー、ー、ーっ!!」

「グ、グガア……!」

『本当に何をしてるのだ……まったく』

廊下で首を抑えてのた打ち回るメドウーサを心配しオロオロするメドウシアナ。そして彼女に声をかけた部屋の主リヴァイアサンは、一人コントを繰り広げるメドウーサに呆れていた。

「きゅ、急に声かけないでよ!」

『誰かが自分の部屋を覗いていたなら誰だつて声をかける』

「うぐ……!」

『それで何の用だこんな朝から』

「えつと……その」

そう聞かれ言葉に詰まった。普通の人間相手なら強い態度でいられるが相手はリヴァイアサンだ。流石にそのまま「特に理由も無いけど部屋を覗き込んだ」とは言いにくい。だがリヴァイアサンはそんなメドウーサを見て「ふん」と鼻で笑った。

『まあ大方部屋の扉が開いてたから何となく覗いたとかその辺だろう』

「わかってんのなら聞かないでよ!」

リヴァイアサンはお見通しであった。

『部屋に見られて困るようなものは無い。見て行きたいなら見て行け』

「え、いいの?」

『水槽が見たいのだろうか?』

「あう……」

凶星だった。キラキラと光る水槽が実の所メドウサは気になっていた。

「じゃあ……ちよつとだけ見て行つてあげる」

『そうか』

なんでそつちが上から目線なのか、と言う点には特にリヴァイアサンはツツコミを入れなかった。

改めてリヴァイアサンに招かれ部屋に入ると入り口から見る以上に水槽が大きいと思えた。そしてきつききは気がつかなかつたが、唯一木製チェストがある以外に家具は無い。水槽とチェストのみの部屋だった。

「これ特注よね? ふつうこんな水槽騎空艇に置かないでしょ」

『エンゼラが水に強い騎空艇だからな。水槽や生簀の設置が容易で助かつた。ここと食堂と談話室に大水槽と生簀がある』

「これ床抜けない？ 相当重いと思うけど」

『そこは当然補強させた。ガラスも水圧に耐えられる強化ガラスだ』

「あんたのためだけに？」

『まあそんな所だ。特に部屋の水槽は落ち着くための空間だからな。やはり水中は良く寝れる。ただ元々は談話室の生簀を使っていたが、自分で金を稼いで作らせた』

元々は談話室に生簀があるのみだった。ザンクティンゼルでも使っていた生簀であつたが、これが個室に入らなかつたのだ。後にリヴァイアサンが個室にも生簀か水槽設置の要望を団長に出したところ、「ザンクティンゼルから使っていた生簀の維持費は出してやるけど、新しい水槽や生簀の設置と維持費は自分で稼げ」と言われリヴァイアサンは素直にそうする事にした。ここが同じ星晶獣（笑）でもティアマトと違うところだろう。現在部屋の水槽と食堂の水槽の維持はリヴァイアサンが行っている。

『部屋と談話室の物は完全に寛ぐために置いた。だが食堂の水槽は違ってな』
「そう言えばあそこの普通に水槽だったわね」

メドゥーサは昨日捕らえられた時に食堂内に大きな水槽があるのを見た。慌ただしい中でも印象に残る岩や珊瑚が敷かれ熱帯魚が泳ぐ大水槽だった。

「けどあれ確かに大きいけど、あんた今の大きさでも入らないでしょ？ 普通に魚泳ぎまくってたし」

『……ガラス水槽を購入する時よろず屋に相談をしたんだがな、話す内に普通のアクアリウムをやってみたくなってしまつてな。普通に観賞魚用の水槽を買つてしまつた』
なんじゃそりや、言葉にしなくともメドゥーサとメドゥシアナの目はそう語つていた。

『今では如何にアウギユステの海を再現するかが実に面白くてな……色々試行錯誤している。この珊瑚も水槽に入れようと思つたがいざ入れると何か違つてな……結局個室のインテリアにした』

「もうただの趣味じゃないの……」

『いや趣味も馬鹿には出来んぞメドゥーサ。我ら星晶獣、永い年月の中趣味を持つと言うのも大事だと我は知つた。アクアリウム、良いものだ……』

リヴァイアサンから余生を満喫しだす初老の男の様な雰囲気を感じ取つたメドゥーサは複雑な顔を浮かべた。

自然その物が形を得たとも言える星晶獣リヴァイアサン、それが人工的な水槽でアウギユステの自然を再現しようとするのはどうなのだろうか。どこか矛盾の様なものを孕んでいる気がするが言葉にできずモヤモヤとした気持ちだがメドゥーサにはあつた。

『今も朝の水温チェックをしてきたところだな。メドゥーサ、アクアリウムはいいぞ……お前もどうだ？ 海水なら我がきつちりと調整してやる。手軽な小型水槽もある

ぞ』

「あ、うん……今度話聞くわ」

明らかに面倒な話になりそうな気配を察し、メドゥーサは生返事を返してそそくさと部屋を後にした。それでも後ろから「もう少しいいではないか」「食堂寄ったら水槽見て後で感想聞かせろ」とリヴァイアサンの言葉が聞こえてきた。

■ 四 ■
■ そうだ、操舵室へ行こう

リヴァイアサンの露骨な趣味布教活動から逃げ出したメドゥーサは居住区画を抜け出して廊下をうろうろとしていた。

「えつと……甲板出るのってどっちだっけ？」

入り組んでいるわけではないのだが慣れないエンゼラの内部にメドゥーサは少し混乱していた。それでもなんとか通路に張られている案内板を頼りにしながら左へ右へ、上へ下へと移動していると途中【操舵室】と書かれた扉の前に出た。

「ここが操舵室だったのね」

「ガア？」

「ちよつと気になるかも、行きましょメドゥシアナ」

好奇心から今回も軽くノックをするものの、返事を待つ事なく彼女はズカズカと入っていった。

「誰か居るのー?」

「うひ……!?! だ、誰……?」

返事する間もなく突然入ってきたメドゥーサに驚き裏返った声を上げたのはセレストだった。椅子に座りながらローテーブルに置かれたティーセットで紅茶を入れている最中だった。

「ああ、あんただったの」

「ノ、ノックするなら返事待つてよ……」

「あんた声小さいからどうせ聞こえないわよ」

「ひ、酷い……」

あんまりな言い方にガツクリと項垂れるセレストに構わずメドゥーサは操舵室の中を歩き回る。室内中央には舵があり、それを中心に可能な限り後方にまで透明度の高いガラス窓張られており、船内であつても視認性を高め操舵のしやすさを追求しているのがわかる。

「星晶獣が騎空艇の操舵ねえ……」

「えへへ……」

「褒めたわけじゃ……まあいいわ。それで操舵つてどうやってんのよ？」

「え？ それは……こう、フワツと浮かせてギューンつと飛ばして」

「何一つ伝わらないんだけど」

手を騎空艇に見立ててセレストが説明するが言いたい事は何一つ伝わらなかった。

「うーん……こ、言葉で伝えるのは……む、難しいよう」

「その舵使うんでしょ、それ説明できないの？」

「わ、私普通の操舵士と違って星晶獣的なアレで船動かしてるから……」

「星晶獣的なアレ」

星晶獣的なアレ、とセレストは言う。同じ星晶獣であるメドゥーサだから何となく理解できるが、普通の人間にはピンと来ないだろう。具体的な説明は難しい、とにかく星晶獣的なアレ、なのだから。

「う、うん……だからこの舵は微調整とか、緊急時に使うの」

「あそう。それで普段は優雅にお茶飲みながら景色楽しんでるわけ？」

「ち、違うよう……！」

メドゥーサの言い方にプリプリと怒りながら反論するセレスト。生憎全く怖くはない。

「こ、これは朝の目覚ましに……毎朝飲むの……。そ、それに航行中って結構気を使うん

だよ……魔物とかも居るし、はぐれ小島との接触の危険性とか……」

「あー悪かったわよ。ごめんごめん」

セレストが如何に操舵に気を使っているかを熱弁し始めた事で先程のリヴァイアサンを思い出したメドウサは、咄嗟に謝罪して何とか話を区切る事にした。

「……あれ？　けど夜とかどうするのよ。あんた休み無しなの？」

人間にとつての生活基盤である「衣食住」をそのまま彼女達星晶獣に当てはめる事は出来ない。“眠る”と言っても生命としての睡眠、星晶獣として活動を休止する睡眠とは別だ。そして生命としての睡眠を指す場合、星晶獣は睡眠をせずの活動は不可能ではない。かと言って睡眠をとれば気分的にも良いため、眠るかどうかは星晶獣本人の気分しだいだ。

だがこの星晶戦隊の星晶獣達、何れも大なり小なりすっかり俗に染まった星晶獣であった。こうなると程度はあれど「飯も食いたい、遊びたい、寝たい」と普通の人間と同様の欲求を持つようになった。ティアマトが特に顕著である。

「え、えつとね……出力一定に保てば、私の力と合わせて殆ど自動操縦にできるの……だ、だから別にここに居る必要はそこまでなくて……朝昼晩それぞれ高度とか航路を目視チェックしたら基本自由だから……ここに居たり、夜は寝たり、この後も朝ごはん食べるよ」

「……地味に凄い事してないあんた？」

「い、今まで騎空艇の姿で放浪するの慣れてたから……わりと簡単、かな……？」

「ふーん？」

「……空から急に星晶獣でも降ってこない限り避けれるよ……」

「わ、悪かったわよう」

「……も、もう止めてよね」

急にマジトーンで呟かれてしまいメドゥーサも冷や汗を流した。テイアマトのクシャミも原因の一つとは言え、着地を失敗して墜落したのは事実。なのでその事を言われると流石のメドゥーサもぼつが悪い。ここは退散することを選ぶ。

「そ、それじゃあ……邪魔して悪かったわ」

「う、ううん……あんまりここの人来ないから……ま、また来てもいいよ」

「気が向いたらね。ああつとそうだわ、こつから甲板つて何処から行けばいいのか教えてくれる？」

「甲板？ えつとね、そこ出て直ぐ右の階段下りたら直ぐ出れるよ」

「ありがと。それじゃあね」

軽く手を振って部屋を出るとセレストも同じように手を振ってメドゥーサを見送った。

■ 五 うるせえい奴 ■

甲板へと移動したメドゥーサが目にしたのは暑苦しい光景だった。

「朝一番の運動は目が覚めるぜ！」

「ええ、今日も実に爽やかな朝です」

甲板でフェザーとユーリが二人組手をして汗を流している。少年二人が爽やかに言葉で語り合い、拳でも語り合う。格闘家であるフェザーの拳を受け、普段は剣での戦闘を行うユーリも見事に対応していた。

「ユーリは拳での闘いもいけるな！」

「そうですか？ 白兵戦での訓練で剣以外の戦いも鍛えましたが、拳での闘いは不慣れです」

「いいやお前は筋が良いぜ！ 俺の拳がもつと語り合いたいと疼いてくる！」

暑苦しいなあ……とメドゥーサは顔をしかめ思った。

「朝からうるさい奴等ね」

「む、お前はメドゥーサ」

横から声をかけてきたメドゥーサにユーリが気が付き拳を止める。それに合わせて

フエザーも動きを止めた。

「メドウ子おはよう！ いい朝だな！」

「メドウ子じゃない！ ちゃんとメドウーサって呼びなさい！」

「そうか悪かった！ ところでお前も拳で語り合わないか！」

「やらないわよ、朝からそんな面倒な事」

「そうか！ じゃあ昼ならどうだ！」

「朝以外ならいいって事じゃない！」

まったく声量の落ちないフエザーにうんざりしながらメドウーサは彼から距離を取った。わざとらしく耳を塞いでみたが、フエザーの方は特に気にした様子は無い。と言うよりもわかっていなかった。

「それでどうしたんだ。俺達に何か用か？」

「別に。ただ起きたから船内探検してるだけよ」

「ああなるほどな。昨日迷ってたものな」

「うるさい！ 昨日の事ぶり返さないでよ！」

B・ビー達に取り押さえられた経験は早く忘れてしまいたい過去だった。

「確かにエンゼラは広い。軍の戦艦に比べれば小振りだが、それでも騎空団として活動できる騎空艇だからな。俺も船に乗った時はまず部屋の配置を覚えたよ」

仲間になってからユーリは部屋の配置を覚えるだけでなく、エンゼラの基本スペックまでも記憶した。いざと言う時新米団員で若輩者である自分が他の団員の足手纏いにならぬよう、臨機応変に行動できるように心掛けての事だった。

「生真面目ねえ」

「当然の事だ」

自信をもって答えるユーリ。これは軍属生活で染みついたと言うよりも、生まれついで生真面目さであった。

「それで甲板に居るのあんた達だけ？」

「そうだが？」

「なんだ、つまんないの」

「失礼な星晶獣だなお前……」

自分達には全く興味が無い様子を隠しもしないメドゥーサにユーリは呆れた。

「なら拳で語り合おうぜ！ それならつまらなくない！」

「やらないってば」

そしてフェザーは変わらなかった。

ここに居ても暑苦しい男と、生真面目な男しかいないと思えば船内に戻ろうかと思つたメドゥーサであったが、そのまゝに船内から一人出てくるのが見えた。

「お前等そろそろ朝飯だぞー」

それは寝癖をそのままにしている団長だった。

「あ、馬鹿人間」

「んあメドウ子？　なんだここいたのか。部屋に居ないからもう帰ったと思ったよ」

「そんなわけないでしょ!？」

「それと馬鹿人間じゃねえから」

「うっさい、うっさい！」

「お前がうるさいよ……」

団長を見た途端彼に駆け寄るメドウーサに対して冗談を言う団長。メドウーサはそれに怒りながら彼を馬鹿人間呼ばわり。小さな拳を振るうが団長はそれを全部手で軽く受け止めた。

「……メドウーサ、あいつ団長殿に懐いてるな」

「そうなのか？」

「絶対本人は認めないでしょうけど、あれは多分懐いてます。それもかなり」

「そうか……仲が良いのは良い事だな！」

仲が良いかと言われるとユーリは疑問であつたが、少なくとも懐いているのであれば敵対する事はないだろうと思つた。ポセイドンの件もあつてか、未だ星晶戦隊（以下略）

に馴染みきっていないユーリは人智の及ばぬ星晶獣にはそれなりに警戒心を抱いていた。

「この……!! よけるなあ!」

「ふはは、小賢しいわ」

「くそう! この、このお!」

だがまるで生意気な子供と男が戯れているだけの様な光景を見ると、そんな警戒心も薄れていくのをユーリ自身も感じた。

「ユーリ君達も適当に食堂来いよー」

「了解しました。汗を拭いてから向かいます」

「団長! 食事もいいがその前に朝の拳の語り合いをしないか!」

「お断りします」

こちらにも慣れた様子でフェザーの誘いを断り、団長はメドゥーサの相手をしながら船内に戻って行く。一方メドゥーサもすっかり船内探検の事を忘れ団長に付きまとう事にしたようだった。

「お前探したんだからな。エンゼラの中慣れてないんだから勝手に動き回るなよ」

「うっさいわねえ、どうしようがアタシの勝手よ……隙あり!」

「あ、お前また髪を蛇に……いつてえ!! てめえ、顔……顔を嘯ませるな!! 両頬引っ張

るなつて、あだだだだつ!」

「ほほほ! ざまあ見なさい! このまま愉快的な面白顔にしてやるわ!」

「こ、この野郎……これでもくらえい!」

「ふがつ!? 鼻、鼻を抓……っ!? やめ、やめにやしやいよっ!!」

「そつちが止めろやあ……!」

「そつちこそお!」

二人の喧嘩の声は船内に入つても暫し聞こえた。食堂に着くまで二人は不毛な争いを続けるだろう。

「懐いてるなあ……」

そしてしみじみと、ユーリは二人を見送った。

■ 六 みんなで食べよう

■ なんかフェザー君達と戯れていたメドウ子を回収して食堂へと到着。もう殆どの団員が揃っていた。

「うりやうりや」

「やめいやめい」

そしてメドウ子は相変わらず俺にちよっかいをかけていた。

「食堂では暴れんな」

「あ、こちら！」

割れ物注意、ここには皿やコップがあるのだ。暴れるメドウ子の両脇に手を通してそのまま持ち上げる。

「おーろーせー！」

「大人しくするならな」

「ダンチョウ（・ω・）オハヨー」

俺達に気が付いて厨房から愛用エプロンを巻いたコロツサスのそのそと現れる。すっかりエンゼラの調理担当だなあ。

「おうおはよう」

「メデューサモオハヨウ（*・ω・*）ゴハンデキテルヨ」

「……あんたが作ってるの？」

エプロン姿のコロツサスを見て俺に抱えられたままのメドウ子が不思議そうな顔をしていた。ちよつと気持ちが変わらなくてもない。

「ソダヨ（@・・・ω・）v」

「コロツサスの飯は美味いんだぞ。お前も食べばわかる」

「リヴァイアサンと言いつレレストと言いつ、あんた達程の星晶獣がなんて庶民的な……」
「これで驚くなメドウ子、あれを見てみる」

メドウ子を抱えたままで方向転換。その視線の先には食堂の机に突つ伏するドラフと星晶獣がいた。

「んにゃあゝゝ……あ、頭痛い……」

「頭ガ……グラグラ、スル……」

「お二人とも、お水持つてきたです」

「にゃあ、ありがと……プリちゃん……」

「……コレ、「クリアオール」で治せナイダロウカ……」

「状態異常じゃないから無理じゃないかな。そんな事言つてないで自制心を持つことだねえ」

「ウ、オ、オ……」

それはブリジールさんとフィラソピラさんに看病されているラムレッダとティアマトの二人であつた。

「……何あれ」

「昨日酒飲み過ぎてダウンしてる二人だ。自制の利かない我が騎空団筆頭ダメ団員と筆頭星晶獣（笑）の情けない姿よ……」

「星晶獣（笑）……（笑）ってそう言う……」

同じ星晶獣としてティアマトの姿には思う所があるのだろう。哀れみか呆れか、何とも言えない感情がメドウ子から生まれているのがわかる。

「メドウ子、うちの騎空団は基本自由だがあんまふざけるとお前の扱いはあそこの星晶獣（笑）と同等かそれ以下になるからな」

「絶対いや」

「ガァー」

めつちや気持ち籠ってる。たまらずメドウシアナまで応えてるし。そんな嫌か……嫌だろうなあ。

「はい、じゃあもう大人しくしとけよ」

「……わかったわよ」

どうやら余程ティアマトの姿が報えたらしい。素直に返事をしたのでメドウ子を下す。ティアマトも偶には役に立つようだ。反面教師としてだがな。

「それじゃあ飯食うか」

「あれ、料理どこにあんの？」

「それ説明しようと思ってお前探したんだよ」

うちの騎空団は簡単なビツフェ形式である。最初の頃は普通に飯作って配ってたが

一人前一々配膳するのが手間なのでもう自由に食い物取ってもらう形にした。人数分調理して長テーブルに並べるだけなのでその方がコロツサスも楽だ。

「好きなもん取って食べばいい」

「キョウハネ（*、ω、）ハムエッグトソーセージガルヨ」

「それにポタージュスープに各種トーストもある」

「おやコーデリアさん」

頭に三角巾を巻いたコーデリアさんが厨房から出てきた。

「コロツサスの手伝いですか？」

「普段から調理を任せてしまっているしね。だが彼は手際が良い、殆ど手伝う事は無かったよ」

「ウウン！（。？ω？。）スゴクタスカッタヨ！」

「そうかい？ そう言ってもらえると嬉しいよ」

まあコーデリアさんの料理普通に美味いからな。コロツサスとコーデリアさん二人に感謝して朝食を食うとしよう。

「あとその三角巾カワイイっすね」

「ああ、前アウギユステだね。時間がある時に買ったんだ。少し私には愛らし過ぎたと思っただが」

「いえいえ、カワイイし似合ってますよ」

「そうか……ありがとう」

「……何故突然後ろ向きに？」

「気にしないでくれたまえ、少しくしゃみが出そうになっただけさ」

くしゃみか、なら仕方ないな。しかしあの三角巾いいな、今度俺も買おうかな……なんかペンギンっぽいキャラがプリントされてたけど、なにかのキャラクターだろうか。カワイイ物は俺の癒しなのだ。お金に余裕が出たらもっと色々……いや今は考えないでおこう。

「さーで、飯だ飯。自分で装えるよなメドゥ子」

「馬鹿にしないでよ！ 出来るに決まってるでしょ！」

「はいはい」

だがメドゥ子はコロコロころがるソーセイジに苦戦。どうも道具を使い慣れていないようだ。トングの様な簡単な物も使い方が危なっかしい。結局俺が皿に装う事になる。しっかりメドゥシアナの分もある。

「人の道具の使い方慣れような」

「うぬぬ……」

「ガウ」

悔しそうにするメドウ子をメドウシアナが慰めていた。

「あ、団長おはよー」

「おはー」

「おう?」

適当な席に着こうとしたら既に座っていたマリーちゃんとカルバさんに呼ばれた。丁度いいのでそのまま二人の前の席に座る。

「二人ともおはようさん」

「メドウ子ちゃんもおはよー」

「メドウ子じゃない!」

メドウ子と呼ばれカルバさんに吠えるメドウ子。だが怖くない。しかし二人とも若い女の子のわりにソーセージを結構皿に盛っているなあ。

「二人とも結構食うねえ」

「トレジャーハンターは体力必要だからねえ。タンパク質、タンパク質」

「あと想像したより美味しそうだったからね。騎空団の食事って何て言うか……もつと雑なイメージあつただけだ」

「そう言う所もあるんじゃない? うちはコロツサスが料理好きで手抜かないからさ」

ユグドラシルハウス時代からの調理担当を舐めてはいけない。まあ別に誰も舐め

ちやいないけどさ。

「ほいじやいただきます」

冷める前に食ってしまおうとトーストにハムエッグを乗せる。俺は別々よりもこの食い方が好きである。

「……………」

「んあ？」

口を開けて食おうとしたらメドウ子がじつと俺を見ていた。なんだなんだ、食い辛いぞコラ。

「どしたメドウ子」

「……………これって乗せた方が良いの？」

そう言つてメドウ子がトーストとハムエッグを指さした。

なるほど、こいつ知識としては多分トーストの様な一般的食事を知ってるが実際に食つた事は無いな。星晶獣だしあり得る話だ。実際ティアマト達もそうであつたのだから。

「メドウ子ちゃん、自分の好きなように食べればいいよ」

「これ乗せたのは俺が好きだからな。別々でもソーセージとでも、なんならスープに浸しても……………まあトーストではやらんかもだが」

「ふーん……」

メドウ子は少し考えると俺と同じようにしてハムエッグをトーストに乗せた。どうやら俺と同じスタイルで行くようだ。

「そいじゃ改めて、いただきます」

「い、いただきます」

そして同時にパクリと一口。とろりとした黄身が流れ出すとトーストと絡み塩味に濃厚さが加わる。

「うむ、黄身が半熟でたまらん！」

「団長って黄身半熟派なのね」

「私はちよい固いの好きかなー」

卵は単品でも良し、どんな料理でも使える優秀な子なのだ。硬かろうが柔らかかだろうが美味しい、それが卵。ニワトリさんありがとう。

「どうだメドウ子、美味しいか？」

横に居るメドウ子に料理の感想を聞くと返事は無い。何故なら彼女は答える事が出来なかつたからだ。何故ならば――。

「ハム、ハムハム……！」

目を輝かせてもしやもしやトーストを食べていたからである。

夢中だ、夢中である。虜になつていると言つてもいいのではないだろうか。皿にはポロポロ欠片やらをこぼしているが気が付いていない。俺もマリーちゃん達もその様子を見守り食い終わるのを待った。

そして程なくしてパンの耳まで食べ切ったメドウ子は一言。

「美味しい！」

それは満面の笑みであった。

「そうか……良かったな」

「え？ ……あ、いやまあまあね！」

それ前もやっただろ。誤魔化すの下手糞か。

「美味しいなら素直に美味いつて言っとけ。コロツサスも喜ぶ」

「んもーメドウ子あんた食べてる時可愛いんだー」

「なんか癒されちゃったねえ」

「う、うるさい！」

ははは、恥ずかしいのか顔赤くしてらあ。

「ほれ、口の周り汚れてるぞ、黄身塗れじゃねーか」

「うぐっ！ は、早く言いなさいよ！」

更に顔を赤くしてメドウ子が布巾で口を拭く。拭くのだがどうも綺麗にならない、ど

んどん汚れが広がっているような気さえする。

「ああもう、貸せ布巾。見てられん」

「んぐ！　ちよ、自分で拭けるわよ!？」

「いいから、口閉じてろ」

「や、やめ……!!　むううー……!!」

ああ昔のジータを思い出す。あいつも自分で拭かせると汚れが広がったよなあ……
なんか事あるごとに俺昔を懐かしんでるなあ。やだなあ、まだそんな歳じゃないのに。

「あはは、なんか二人とも兄妹みたいだねえ」

「偉大な星晶獣も形無しねえ」

「むーっ！　うむーっ!？」

「動くなつてーの、もう終わっから!」

まあアイツはここまで暴れんかったけどな。

しかしこれからメドウ子を人間の生活に慣らせないといけない。久々の星晶獣新メンバー加入に色々と考えさせられる。それ以外にもシエロさんから受けた依頼もやらねばならない。落ち着いてガロンゾに行く事はどうも出来なさそうだ。

「ガアアア」

そしてメドウ子の隣でポタージュスープを舌でチロチロ舐めていたメドウシアナが、

不意に俺に「ご迷惑をおかけします」と言わんばかりにまた頭を下げた気がした。
保護者かな？

世界一可愛い謎の美少女 前編

一 遺跡調査

慌しいメドウ子加入から早々に俺達はシエロさんから請負った依頼のために、とある島へとエンゼラを停泊させた。そこまで大きい島ではなく、一言で言ってしまうと「普通の島」である。ザンクティンゼルとどっこいどっこいかもしれない。いやそれでもザンクティンゼルよりかは大きいか。

「小さな島ねえ、こんな所に何があるんだか」

「そう言う事言うなメドウ子。正式な依頼なんだから」

「人間って面倒ね。こうやってせこせこ働くんだから」

「星晶獣と違ってね、人間ってのは働いて金を得てそれで飯を食うんだ」

「ふーん」

こいつ何時も「ふーん」って言うな。興味有るのか無いのかようわからん返事しやがってからに。

「騎空団に入った以上やる事はやってもらう、星晶獣だろうとな。今日はお前も団員として連れてくんだから頼むぞ」

「任せなさいっての、偉大なる星晶獣の力見せてやるわ!」

それももう殆どダメな前振りじゃないですかー、やだー。

まあメドウ子には大して期待はしないでおこう。今回の場合依頼でメドウ子を迎えてきた場合どうなるかと言う確認の方が重要なのだ。

「相棒、準備出来たぜ」

「あいよ」

必要な荷物を持って船を降りる。だが依頼で言われた遺跡には直接は行かない。船が停められる場所から遺跡までは距離があり中間地点に宿泊できるような村はない。そのためまずは船から移動して拠点を作る必要がある。

船を無人にするわけにもいかないの、調査メンバーは俺とB・ビィにゾーイ、マグナシックスからコロツサスとセレスト、そしてルナル先生と新人のメドウ子、最後トレジャーハンターのマリーちゃんとカルバさんの九名以外は待機組だ。

「荷物多い依頼はコロツサスいると助かるわほんと」

「マカセテ! (o・w・b)」

食料やらの荷物は殆どコロツサスが運んでくれるので非常に楽だ。コロツサス一人

で五人分の荷物は軽く運べる。

「私エンゼラ待機がよかったわ……」

「悪いけどルナル先生も頑張ってもらいます」

「けどわたし向いてないでしょ、調査なんか」

「いやなんか文献とか遺物のスケッチ記録残す時なんか居ると助かるなあつて」

「まあその位ならやるけど……それで目的の遺跡つてのはどんな遺跡なのよ？」

「ルーマシーの程の規模じゃないらしい。それでも最近発見されたから詳しい事は不明だそうで……調査専門ギルドからシエロさん通して騎空団に調査依頼つて妙な話だけども」

「それでこの騎空団に依頼が来るんじゃないやあきつと碌な依頼じゃないわね」

「不穏な事言わんで下さいよルナル先生……」

「前回ルーマシーでの遺跡ほど酷い事にはならないと信じてるんだから俺……」。

「真面目な話調査ギルドで手を出し辛い理由があるつて事ね」

「れ、錬金術が関わってるつて……よろず屋さん、言つてたね」

「錬金術か……」

「婆さんのしごきで錬金術のイロハまで叩き込まれたので、簡単なポーション生成ぐらいなら俺でも出来る。だがそれだけである。婆さんでも基本は知っているようだった

が専門ではなかったようだ。「そのうち良い師が見つかるだろうね」と言われたが別に期待もしていないし、そんな人が居たとして弟子になる気も無い。

ここでカルバさんが何か思い当たったのか手を叩く。

「確か錬金術って何か組織あったよね？ ヘルなたらって言う」

「ああ、なんか在ったわね。あたしもよく知らないけど、もしかしたらそこ争ったのか
も」

「争う……ってギルドと錬金術師が？」

「たまにあるのよ、調査ギルドみたいに歴史調査を専門にする組織と、錬金術師達のように独自の調査をする組織のぶつかり合い」

「それ普通共同調査とかしない？」

「勿論するところもあるわよ。ただ錬金術師達って偏屈なの多いらしいのよ、だから遺跡での成果を独占したいのかも」

「つまりギルドとしては錬金術師達が勝手に遺跡掘り返さない内に、どこぞの騎空団に依頼出して得れる情報だけでも手に入れとこうって事かな」

「で、そのどこぞの騎空団が俺達、と……」

予想でしかないがそんな気がする。

なんだろうなあ、これってまた面倒な事に……いやしない！ 嫌な予感なんてしない

！ 大丈夫、きつとただちよつと調査するぐらいで終わる！ 精々魔物が出る程度で終わる。間違つても面倒な仲間が増える事もない、妙な組織が来たりそれ関係のトラブルに巻き込まれたりなんて無いさ！ 嘘さ！きつと……そう、そうに違い無いんだ……。

「団長前向きに考えようとして、だんだん後ろ向きになつてゐるわよ」

「ルナル先生、なんでわかるんすか……」

「顔、考えてる事全部出てゐるわよ」

またかい、俺よ……。

■ ニ フェイトエピソード 1000年以上前から世界一可愛い

■ 遙か、遙か遠い過去の事。現在「覇空戦争」と呼ばれる大戦が起こる更に前、ある島に体の弱い少年が居た。

病を患う彼は大人達から見放され刻一刻と死を待つのみだった。だが本人はそれを拒む。自分を見捨てた大人への反発か、生への渴望か、あるいは幼い身でありながら潜在的な「探究心」がそうさせたのか。いずれにしても、ひたすらに彼は生きる事を選んだのだ。

常人とは思えぬ頭脳、そして果てしない努力の末に彼は病を克服——否、病に苦しめ

られた肉体を放棄し新たなる肉体を得た。

これこそが今尚空で受け継がれる人の業「鍊金術」の興りであった。

そして時は流れ今、遙か時を超えフータ・グランデのとある島で一人の鍊金術師が目覚めた。

「……………どう言うことだ、これは」

“彼女”はただ一人呆然としながら呟いた。自分の周りはボロボロになった建造物、人の気配は無い。廃墟となったその建物の中に彼女は一人いる。だが彼女は何故ここに自分が居るのか、その事に対して戸惑ったのではない。何故自分は、今日覚めたのか？　と言う事が疑問だったのだ。

(この風化具合、かなり時間が経ったようだな…………)

彼女は自分のいる建物の内部を歩き回る。この場所は辛うじて建物である事はわかる程度にまで風化していた。天井には穴が開き、日の光が入り込む。柱は崩れ落ち、木製の扉などは完全に壊れていた。

(この場には誰もいねえ……………だとしたら自然に封印が解けた？　いいやちげえな、いくらあの若造共でもそんな雑な“封印”をするわけがねえ)

一見して可憐なうら若き少女である彼女は、とある理由からこの地に封印されていた。それは気の遠くなるような時間であり、その間彼女に出来る事は無い。ただ眠るよ

うな感覚を感じる程度だったろう。

それが今になって解き放たれた。これは彼女にとつても予想外であり、何か自分にとつて理解しがたい。何か“が起こった事は確かだと彼女は考える。だから自分は今ここで目を覚ましたのだと。その“何か”とは何であろうか？

(幸運だとしても言うのか？　前兆も無く急に、何故このタイムリングで偶然封印が緩んだ。外的要因があつたはずだが……封印が解けるような強い要因、島の浮力変動、術式に綻びが生まれる程の天変地異が連続で起きた？　だがそんな規模の異変そうそう連続で起きるはずはねえし……ちっ！　流石に材料がすくねえな、こりや考えるだけ無駄だな)

今この答えは出ない、そう判断し彼女はこの事は一度横に置く。すると彼女は目覚めた時に携えていた一冊の本を手に取り意識を集中させた。すると奇妙な事に彼女の周りの空気がざわめきだす。

(……よし、起きたばかりだが力は鈍ってねえ……流石オレ様だけぞ)

何かを確認できた事に納得できたのか、彼女は本を閉じる。

(しかし、無人の状態で偶然封印が解けたとしか言えねえ状況とはな。流石にこれは予想してなかつたぞ。まあラッキーつて事で今は済ませておくとするか。さて……？　ただけ時間が経つたのやら。馬鹿共に見つかる前にとつと島出て、まずは今の空を調

べねえとなあ)

彼女は早々にこの辛気臭い廃墟を後にして、島からどう移動するのか等様々な事を思案する。如何なる理由かは不明であるが、彼女はいまここにただ一人であり頼れる伝手も無い。それでも「どうにかできる」と言う自信が彼女からは溢れているのだが、しかし協力者と言う者は居て困るものではない。

「……おいおい、ここかよ遺跡って?」

「い、遺跡って言うか……は、廃墟?」

「こりゃスリルどころかお宝も期待できないかもね」

「ええー無駄足じゃない!」

突然聞こえてきた複数の声に咄嗟に彼女は身を隠した。物陰から声のした方を覗くと、とある集団が廃墟内に現れた。

「事前情報が少なかったとは言えこれかー。罨も無いんじゃないやー」

「罨よりもお宝でしょ! 金貨一枚もないわけ!」

「まあ広さはあるからなんかあるんじゃないかね。ここをキャンプ地とする、それから建物内を探るとしよう」

「キャンプかあ、ご飯は何を作るんだい団長」

「ゾーイ? ご飯もいいけど先ず調査ね?」

「わかつている。頑張ろう」

妙な集団だった。女が多いかと思えば妙な黒いナマモノもいる。それと明らかに人じゃない存在もいた。

（何者だアイツら？ 調査とか言ってたが、こんな廃墟の調査に来たのか？）

彼女にはここに価値がある様な物は何も無い事を知っている。だが建物が廃墟と化する時の流れの中でそう勘違いされたのだろうと理解した。

（あと一人地味な男がいるな……まあいい、天佑神助つてやつだ。あいつらを利用するでしょう）

一人集団の中に騙されやすそうな男が居る事を確認すると、彼女はニヤリと笑った。

これが自称「世界一可愛い美少女」と、他称「全空一しっちゃかめっちゃか」な少年の出会いである。

■ 三 ある意味お宝

歩きたどり着いた目的の遺跡であるが俺達は肩透かしにも似た感覚を味わっている。遺跡と聞いていたが、目の前にあるのは廃墟と言っているいい場所だった。遺跡も廃墟も一緒のように思われるが、これははつきりと廃墟と言える。壁は崩れ屋根は落ち、柱は倒

れボロボロの建築物と言った風だ。

「古い時代によくある建築様式だね。教会とか集会所とか……そういう場所だったんじゃないかな」

カルバさんの見解としてはつまり一般的な建物、と言う事らしい。それでもはつきりと断定はできない以上、調査を依頼された俺達としてはこの調査を行う必要がある。しかし廃墟と言う事でテンションが落ちたトレジャーハンター二人であるが、それでも大きな建物であるのは間違いない。それにここに錬金術関係の資料があると予想された以上何かがある可能性がある。

「ねえルナル先生、これ宝石類があれば報酬にしていって話だったけど」

「これはアレね。そもそも宝石の類が無いだろうって思ったからそう依頼出したわね」

「やっぱそうかなあ……」

「チョット（・ω・）ザンネンだね」

エンゼラ修復に当てたかったんだけどなあ。これは余り期待しないでおう。

「ルナル先生はこの外観とか内部のスケッチをして置いてください。調査資料として提出しますんで。セレストはルナル先生の補助と護衛な」

「わかったわ」

「りよ、了解……」

「マリーちゃんとカルバさんは予定通り調査頼みます」

「了解、もうあんま気が乗らないけどね」

「畏ないかなあ……」

「無くていいのよ!」

「コロッサスとゾーイはキャンプ番頼む。魔物が荒さんとも限らんからな。暗くなる前には切り上げようと思うから、食事の準備もお願い」

「(＊・ω・)ゞカシコマー!」

「了解だ団長」

「んでB・ビィとメドウ子にメドウシアナは俺と調査な」

「おうよ」

「むー……」

「なんだメドウ子?」

「そしてメドウ子が省エネのメドウシアナに寝そべりつつ顔を膨らませてた。何だコイツ。」

「つまんない! 魔物も出ないし、ぜんっぜんアタシの活躍ないじゃないのよ!」

「魔物は出なくて良いの。それに今から調査の仕事だ」

「そんなの面白くない!」

「我がまま言わない、ほれいくぞー」

「あ、こらっ！ 引つ張るなあー！」

我がままメドウ子を掴んで建物内部奥へ入る。入り口付近はボロボロであるが、奥のほうはまだ無事なようである。辛うじて壁や屋根が残っている。だが当然人が居ないので明かりはない。壊れた壁や屋根から入る僅かな明かりが頼りだ。

「さて何だろうなあ……」

「生活の跡もねえし、あまり使われなかったのかもしれないなあ」

フヨフヨと浮かんでB・ビイが辺りを見渡すが何も無い。椅子だとか机だとか、家具らしいものの残骸一つなかった。

「隠し部屋とかあるんじゃないか？」

「どうだかな。メドウ子の意見は？」

「知らないわよ」

メドウ子はつまらなそうに足で瓦礫を蹴ったりしている。仕事しろ馬鹿。

「マリーちゃん達、そっちはー？」

「なんもないよー」

「部屋とか全部まだ見てないからハッキリ言えないけど、これほんとただの廃墟かもしれないわ」

隣の部屋からは、二人の明らかに気落ちした返事が返ってきた。

「俺達奥見てみるからこっち頼むね」

「はい」

建物はまだ奥があった。何も無いくせに無駄に広い。仕方なく成果を求めて俺達は奥へ奥へ、瓦礫を踏み超えてすすむ。すると建物の一角にドーム状の空間がある事に気付く。

「おい相棒、こりやあ奇妙な場所だぜ」

「何かしらこれ、星晶獣じゃないみたいだけど」

「ガアア………」

不思議な事にこの空間に入ってから妙な空気になった。B・ビイもメドウ子もメドウシアナでさえも身構えている。

「お宝じゃないが、これは……」

奇妙な力が働いた様な気配、と言うより働いていたと言うべきだろうか？ 力がだんだん薄れていつているような感じがする。さっきまでここに何かあったような気配だ。何かあったとしたら、出遅れて何処かの盗掘者や錬金術師が先に貴重品を漁ってしまったのか。その可能性を考えていたが、ドームの下にある祭壇の様な場所に人が一人倒れているのが見えた。

「おいおい、何だってこんな所に……」

慌てて駆け寄るとそれはまだ小さな少女だった。廃墟に場違いにも小奇麗な服に身を包んだ少女。気を失っているのだろうか、目は閉じているが息はある。

「……他には誰も居ないな」

「ああ間違いいねえ。オイラ達だけだぜ」

辺りを見渡しても俺達以外他に人は居ない。一人でこんな場所に来たとしても言うのか？

「何かしらねこの人間」

「わからんが放置してわけにはいかんだろ。とりあえず保護しよう……うん？」

少女の傍に一本杖が落ちていた。手にとつて見ると十字型の杖に蛇が巻きついたような装飾だった。

(唯一のお宝らしい物かね)

杖をベルトに固定してから俺は少女を抱え一先ずキャンプへと戻る事にした。お宝でなく女の子が見つかるとは、これはなんだか面倒な事になりそうだ。

■ 四 団長、遺跡に美少女が!?

調査を切り上げてキャンプへと戻った俺達は、一先ず保護した少女の安否を確認した。呼吸も脈拍も正常。苦しんでいる様子も無く、ただ眠っているようだった。

廃墟に少女と言う違和感は拭えないが、彼女の世話をセレストにまかせ他の面々で彼女についての事を夕食として煮込みつつあるシチューを囲みながら話し合う。

「地図で確認したけど近くに村は無いわ。一番近くても大人で半日はかかる距離だし、こんな子供が一人で来ると思えないけど」

マリーちゃんが広げた地図を指さし説明する。この廃墟の周辺には村は無く確かに人里離れた廃墟だ。ますます謎が深まる。

「明日の引き上げで、どっか村によって行方不明とかの子供が居ないか調べよう」

「シンパイダナア（o・w・）」

どこかの村に預けるかシエロさんに頼んで親を探してもらうかしないといけないなあ。

「まあ遺跡調査はもう終わりってことで良い。目ぼしい貴重品や錬金術関係資料は無かったけど、ルナル先生にスケッチ資料描いてもらったからそれを提出って事でいいだろう」

「あーがっかり。最初話聞いた時は期待できたんだけどなあ」

「まあこう言う事もあるよねえ」

トレジャーハンターコンビはすっかり脱力してる。彼女達にとっては無駄足もいとこころだろう。

「まあ依頼報酬は出るんでそれだけは救いかな」

報酬だけでもそれなりに良い値段だった。今回はそれで良しとするしかない。

そしてそろそろ鍋が煮えてきたので話に切をつけ夕食を取ろうと思ったのだが、テントから出てきたセレストの声で中断された。

「だ、団長……!」

「どしたセレスト?」

「あ、あの子……目を覚ましたよ」

「なんと!」

それは朗報である。意識が戻るのなら一安心だ。俺も皆も立ち上がりテントに向かう。

「失礼、入るよ」

「はい☆」

テントに入る前に声をかけたのだが、妙に調子の高い返事が返ってきた。奇妙に思いつつ中に入ると、簡易ベッドに腰かけるあの少女がにこやかに笑って出迎えた。

「……えつと」

「あ、ねえねえ☆ お兄さんが助けてくれたの？」

「あ、うんそうだけど」

「ありがとーっ☆ 急に悪いオジサン達に攫われて、こんな所に連れてこられちゃったの……とつても、とつても怖かったあ〜っ！」

何だろう、表情がコロコロ変わってテンションが妙に高い。それになんだこの違和感、目を覚ました彼女と対峙した途端奇妙な違和感が膨らむ。

それと君言葉なんか独得だね、まるで星が散りばめられてるみたいだ。

「君は人攫いに遭ったのかい？」

「そうなのお☆ こことは全然別の島で暮らしてたんだけどお、行き成り眠らされちゃって……」

「そうかあ、気の毒になあ」

「わあっ☆ お姉ちゃん、ありがとお！」

ゾーイがよしよしと少女の頭を撫でている。それに安心したのか、少女はうつとりと……うつとり？ うん、なんでかしらんがうつとりとした表情を浮かべていた。

「なーんか変な人間ねえ」

「ガアアア」

「きやあっ☆ なあに、おつきい蛇がいるう！」

おっとメドウ子はともかくメドウシアナの見た目は、少女の寝起きにはきつかったかもしれない。

「安心してくれていいよ、この蛇……メドウシアナって言うんだけど、大人しくて良い奴だから」

「ほんとお？」

「グアアア」

「わっ☆ 本当だあ、お利口さんだね！」

そうだよ、と言うようにメドウシアナが頭を降った。素直で良い子だ。

「ちよつと、何であんたがメドウシアナの紹介すんのよ!? アタシのメドウシアナなんだからね！」

「誰でもいいだろ紹介ぐらい」

「よかないの！ 第一メドウシアナ紹介するならアタシも紹介しなさいよ馬鹿人間！」

「人前で馬鹿人間呼ばわりすなこの野郎」

「あだっ!？」

ちよい強くデコピンをすると、メドウ子が仰け反った。

「あははっ☆ 変な子だねっ！」

「なっ!?! 誰が変な子よ!?!」

「いやメドウ子ちゃん結構変だと思うよ」

「そうね、メドウ子は結構変よ」

「あんたら石になりたいのっ!?!」

カルバさんとマリーちゃんに向かって蛇の様にシャーッ! と威嚇するメドウ子であるが、全くもって怖くない。ほんところ言う小動物系の姿は可愛いものになあ。

「いい人間の小娘! アタシはねえ、石化の魔眼を持つ誇り高き星晶獣メドウーサなのよ! あんたのような愚かな人間とは違う偉大な存在なのよ!」

こいつ初対面の子供に向かってなに意地になってんだ。

「……ほお?」

あれ、今少女の様子が……気のせいかな?

「貴方達、目が覚めたばかりの子が居るのに騒がないの」

ルナール先生が騒ぐ俺達を見かねて注意する。確かに狭いテントで騒ぎすぎたな。いかんいかん。

「そうだ、体の調子がいいなら食事はとれそうかな? 丁度食事が出来ただけど」

「いいの? 実はとってもお腹がすいちゃってるの」

「いいよ、シチューだから食べやすいはずだ。それじゃあ、えつと……ああ、君名前聞いていい?」

うっかり名前も聞かずに話していた。このままでは名無しの少女である。

「そうだった、まだ名乗ってなかったねっ☆ あかね、名前はカリオストロって言うの。お兄さん達、よろしくね☆」

五 自己主張すごーい

■ 廃墟で見つけた少女・カリオストロ。目を覚ましてから食事を共にしながら色々と話を聞いた。何故遺跡に居るかは目が覚めた時に話した通り、人攫いに遭い連れ去られたかららしい。犯人らしき人間が居ないのが気になるが、それを被害者であるカリオストロちゃんに聞いても意味はないだろう。

「カリオストロちゃんは何処の島に居たんだい？」

「えっとねえ……お兄さん、何か地図とかあるう？ 出来ればおつきな、地図がいいな

あ」

「大きい？ ああ、空域全体図の方ね。あるよ、はいこれ」

「ありがとっ☆」

俺から地図を受けとった彼女は、地図を広げると妙にそれをじっくりと眺めた。地図が好きなのだろうか。渋い子だな。

「……なるほどなあ」

「うん？ どうかした」

「ううん大丈夫☆ カリオストロねえ、この島に居たの！」

彼女は地図上の一つの島を指差した。

「行けない距離じゃないが完全に反対方向だな。悪いカリオストロちゃん、俺達の船で送ってたけど無理そうだ」

「お船？ お兄さん達お船持つてるの？」

「ああそうだよ。俺達騎空団なんだ」

「そいつが一応団長なんだぜ。地味だけどな」

「張つ倒すぞB・ビィ。カリオストロちゃんは船に興味あるのかい？」

「うんっ☆」

可愛らしいポーズをとって笑顔で答えるカリオストロちゃん。うーむ子供らしい反応、なのだが本当になんだろう……違和感が更に膨らむ。

「それじゃあどこかの島まで君を送るよ。そこからは、俺の知り合いで頼りになる人が居るから、その人に頼んでお家まで送ってもらおうね」

「はーい☆ 何から何まで、ありがとお兄さん！」

彼女はお礼を言いながら俺の腕に抱きついてきた。

「こちらこちら、急に来ると危ないから」

「えへへっ☆ ごめんなさーい☆」

「やれやれ」

妙にくつついて来るが、甘えたい盛りなのかね。歳相応と言えばいいのか、しかし彼女歳幾つなんだろう、二桁は入ってるだろうけども。

「……相棒、お前どうした？」

「んは？ 何が？」

「いやだつて、お前……反応が普通過ぎじゃんか」

B・ビーが信じられないものを見るように言う。何だと言うのだろう、普通なのは良い事じゃないか。

「……そう言えばそうね。団長、彼女見てなにも思わないの？」

「いや、ルナール先生も何言ってるんすか？」

「ア、ヤツパリ（・ω・）ミンナモオモツタ？」

「さ、さつきから……団長、普通すぎるよね……」

「ああ違和感はそれかあ……私も不思議だったんだ」

「お前等もか……」

「コロッサス達までなんだって言うんだ。俺が普通じゃいかんのか。」

「ねえねえ、何が変なの？あたしは普通に見えるけど」

「ああそうか、マリ―達は入団したばっかだからな。相棒はそりやあもう可愛い女に弱い」

「誤解与える言い方するな！」

「お前そう言う事言う奴いるから妙な噂広まるんだからな！ 迂闊に言うんじゃないよ馬鹿野郎！」

「えーやだー、団長つてば女好きなのー？」

「えーちよつと幻滅かもかもー？」

「ほら見ろこうやって揶揄うやつ出る!!」

「あつはつはつは！ 馬鹿人間どころか、とんだ変態野郎だったわけね！」

「なんだと、この野郎！」

「きやー！ 触らないでよ変態！」

「うるせえ、馬鹿野郎！」

ほんつと直ぐに調子乗るなこの小娘星晶獣!!

「まーたじゃれ合ってるわ……」

「メドウ子ちゃんも懲りないねえ。それでB・ビィ、団長が普通の反応なのがおかしいのって？」

「なんて言うかなあ、相棒って露骨に可愛いもん見るとこれまた露骨な反応みせんの。白目向いたり硬直したり」

「わかりやす過ぎか!？」

「心労と胃痛による反動なのね。こんな私のおねだりできえ反応したのに」

「ルナールが仲間になる時にしたと言う話だったね。けれど私はルナールも可愛いともうよ。だから団長も反応したのだろう」

「あ、ありがとゾーイ……ただあんま言わないで、恥ずかしいから」

「き、基本団長は……ハーヴェインに弱いね……何かとね……ふひ」

「だからロリコン団長とか言われるんだよな」

「あんたロリコンなの!？」

「ちげえ馬鹿っ!! B・ビー、お前ほんと余計な事言うんじゃねえ!」

あと露骨に引くんじゃねえメドウ子てめえ!!

「まあだからよ、カリオストロに抱きつかれたりしてんのに反応普通過ぎてちよつと不思議だよ。もうちよつと露骨な反応すると思ったんだけどよ」

「ね……だ、団長の好みどんぴしゃと思っただけど……」

「あーもーお前らしい加減にせい! カリオストロちゃんも困っちゃうでしょ!」

暴れるメドウ子を抑えて怒鳴る。このままでは俺が本当にロリコン扱いされかねな

い。こんな小さな子がいるのに変な話しないでくれ。

「……ねえねえ☆ お兄さん」

「ん、ああごめんねカリオストロちゃん、何かな?」

「カリオストロ、かわいくないの?」

え、それ聞くの? ええーマジでー……。

「いやいや、カリオストロちゃん今のはこの黒いナマモノの戯言だから……」

「いいから早く……こ・た・え・て・ねっ☆」

ちよつと何この威圧感、子供の出せるものじゃないよこれ、ねえ!? そんな威圧するような質問ですかね!?

「ま、まあそりや可愛い……でしょ?」

「なあくんではつきり言わないのかな?」

「いやいや、ほんと勘弁して……!」

様子がおかしいカリオストロちゃんに思わず後ろに下がる。座ったままだったのでなんとも情けない格好だが、向こうは構わず俺に迫ってくるので体勢を立て直す事ができない。

「可愛い、可愛いから!」

「心が籠ってないぞっ☆」

「か、可愛いよ!」

「もつと、もおーと☆」

「可愛い! カリオストロちゃん可愛いよーっ!」

「もう一声え〜☆」

「あーもう、可愛い! カリオストロちゃん可愛い、世界一可愛いよっ!」

「あはっ☆ そうだよ、世界で一番可愛いのは、カリオストロなんだよ☆」

ええー……何この子こ言うタイプなの? ちよつと意外すぎるでしょ……。

「うわあ……子供に向かつて必死に可愛いって叫んでるわ、あの馬鹿人間」

「言つてやるなメドウ子、相棒も必死だ」

うるせえ星晶獣(笑)!

結局その後も可愛いと何度も言わされ、一生分可愛いと叫んだら満足したのかカリオストロちゃんは再び眠りについた。

疲れた……。

六 正体

一夜明けカリオストロちゃんと言う少女以外には何も見つけられなかった俺達は、最

早用も無くなった廃墟を後にする。

途中島にある村にカリオストロちゃんを預けると言う話も出たのだが、カリオストロちゃん本人の希望でエンゼラで別の島まで贈る事になった。

「船までは結構距離あるから疲れたら言つてね」

「はい☆」

「コロツサス、カリオストロちゃんもし疲れたら肩にでも乗せてあげて」

「(*´ω´) イイヨ！」

帰り道で足場の悪い林の中に入る。子供のカリオストロちゃんには辛いかもしれないので気にしておく。

だが荷物が増えるかと思つた帰りだったが、物的成果が無かつたおかげと言うのもおかしいが、食料を食つたのもあつてむしろ軽くなった。行きの時よりも少し気楽に足を進める事が出来るだろう。

「何だつてアタシが荷物持ちなんて……」

そしてぶつぶつ文句言いながら荷物を背負うのはメドウ子である。

「行きの時お前メドウシアナに任せて何も運ばなかつた。帰りぐらい運びなさい」

「おーもーいー！」

「嘘言うなお前一人分の寝袋程度しか入つてねえんだから。それともその程度の量持て

ないぐらい軟弱な星晶獣なのかお前は」

「ぬぐぐう……………」

軟弱だと認めるのが嫌なのか恨めしい形相で俺を睨むメドウ子だが、もうそれ以上何も言う事はなかった。

「…………お兄さんの仲間って面白い人が沢山なんだね」

メドウ子とのやり取りを見て、カリオストロちゃんはその言う。だがこいつらを面白い、で済ませていいのだろうか。うつとおしいだけの奴もいるのだが、初見じゃ面白いと思うのかね。

「まあ愉快な奴らだけどね」

「それとメドウ子ちゃん達が星晶獣って本当？」

「本当だよ。そのメドウ子と言い威厳の“い”の字もありやせんけども」

「あるでしょ!？」

ねーよ。

「…………星晶獣が騎空団の仲間になるのは普通なの？」

ははは、何を言うやら。

「ぜつつつたい、普通じゃないよ」

「普通じゃあねーな」

「普通ではないだろうね」

「フツウジャ（。ーωー）ナイヨネ」

「ふ、普通じゃ……無い、よ……ふひ」

「普通なわけないじゃない」

「ガアア」

「普通ではないわね」

「普通じゃないでしょ」

「普通じゃあないよねー」

「そ、そうなんだ……ふーん」

俺だけでなく他のメンバーまで次々と否定するのでカリオストロちゃんがちよつと引いてた。

「と言うかおかしいわよ、コイツの騎空艇星晶獣8体いんのよ」

「お前が入団したから9体だ。メドウシアナ含めるなら10体……」

「キィ！」

「カア！」

「団長、デイ達を忘れてるよ」

「ああごめんごめん、デイとリイも……あとニル達もいるから15体？」

「普通に考えて頭おかしいわよここ」

お前もその頭おかしい騎空団の一人なのだぞメドウ子。

「……ふーん」

「……カリオストロちゃん、どしたの?」

「ん、なんでもないよ☆」

……この子一瞬雰囲気が変わるよな。昨日は気のせいと思っただが、今は流石に気のせいではないぞ。

そもそも発見された状況が可笑しい、一夜過ごし浮かんでくる違和感だけではない疑問の数々。果たしてこの少女の正体は何者なのか。廃墟の中に一人眠らされていた少女。攫われたとして身代金目的なのか? 小奇麗な衣類から裕福そうな印象も確かにあるが、だとして気になるのは犯人は何処へ消えたのか。

「……ねえあんた」

「うん? なあに、メドウ子ちゃん☆」

「メドウ子つて言うんじゃない!」

不意にメドウ子がカリオストロちゃんに話しかけた。変な事言うんじゃないだろうな。

「気になったんだけど、あんたそれ大事そうに持つてるわね」

「この本の事？」

カリオストロちゃんは手で抱える大きな本を見せた。彼女を発見した時から腕にしつかりと抱えていた本だ。特に聞かなかつたが小さな手には大きすぎるハードカバー。装飾までつけられ、明らかに彼女程の年頃の少女が読むような本でもまして持ち歩くような本ではない。

「そうよ、何の本なの？」

「これはパパに貰った本なの☆」

「えらい分厚い本読むのねあんたつて。ちよつと見せてよ」

「ええ？　メドウ子ちゃんにわかるかなあ？」

「馬鹿にすんじゃないわよ!?　貸しなさい!　悠久を生きる偉大な星晶獣の知識を聞いて驚くがいいわ!」

「あ、コラメドウ子乱暴な事するんじゃないよ!」

半ば奪い取るようにメドウ子がカリオストロちゃんから本を奪い、パラパラと頁を捲つていった。視線は動いているが頁を捲る速度が速すぎる気がするぞメドウ子。

「……………」

「…………メドウ子、内容わかつたのか？」

「……………まああれよ!　愚かな人間の考える事を態々説明する必要もないわよね

「！」

はいはい、知ってた知ってた。どーせそんなこったろうと思いましたがよ。

そもそも星晶獣だから何でも知ってるなんて言うのが間違いなんだよ。基本的に星晶獣なんて霸空戦争終わってから殆ど寝てるんだから。メドウ子にいたっては多分騎空艇にちよつかいかけるだけだったんじゃないのこいつ？

「ほれ満足したら返してあげなさい」

「ちゃんとわかっているんだからね！ 勘違いするんじゃないわよ!!」

「わかったわかった」

「ガアア〜……」

メドウ子はプリプリしてメドウシアナが哀れむような表情をしている。表情からお察しである。

このままメドウ子に本持たせると汚しそうなので取り上げる。人様の本なのだからはよ返しなさい。

「ごめんねカリオストロちゃん、メドウ子のわがまま聞いてもらって」

「ううん☆ 気にしなくていいよ!」

「はは……カリオストロちゃんは大人だなあ、こんな分厚い本も読めるなんて勤勉でもある、し……」

開いたままであったため、ふと視界に入ってきた本の一页。おびただしい文字の羅列、記号、図、術式——間違ひなく子供の読む本ではない。だが問題はそこではない。

「あれ、どうしたのお兄さん？」

「……カリオストロちゃん、君は『錬金術』の心得があるのかい？」

俺が口から出した言葉に反応し、カリオストロちゃんの表情が変わる。笑みは消えていた。他の皆も錬金術と聞いて驚いた様子だ。

「……お兄さん、それが『読める』の？」

「一般人が見たらミミズが這うような文字だ。実際メドウ子もわからなかつたらうよ」
「だからわかっているっての!!」

隣でメドウ子が咆えてるが無視する。

「だがこれはこれで正解だ。これを術式だと知っていれば自ずと意味を理解できる」

「ほおう？」

「それも信じられないほど高度で精密な術式、君みたいな子供が出来る業じゃないなあ……ただの子供ならだけど」

ザンクティンゼルのばあさんの言葉を思い出す。

『錬金術ってのはねえ、卑金属を貴金属へと変える業と言われている。けどそれは錬金術師にとっては副産物の様なもの。彼らの究極の目的はこの世の解明、あるいは離脱

……私達が生きるこの世界、つまり物質と言う領域を飛び出して全てを知り尽くしたいのさ』

『とんだ欲張り連中だ』

『フェフェフェ……間違いないね。私も熱心な錬金術師と会った事はあるけど、仲良くなるうとは思わなかったね』

『けどそいつらはどうやって全てを知るつもりなのさ？ 人の命は有限だぜ？』

『言つたろう、物理を飛び越えるよね。肉体と言う物質に縛られなくなれば永遠に存在できるだろう？ 尤も今それを出来る錬金術師はいない。けどただ一人、嘗て錬金術を興した開祖は成功したと言われている。いいかい？ 錬金術覚える以上は記憶しておきな、開祖の名前は——』

錬金術なんて久しく使つてなかったから忘れてたが、今ハッキリと思い出した。

「カリオストロ、錬金術の開祖の名前だ」

「ふーん？ カリオストロと同じ名前だね」

「ああそうだ、偶然……普通そう思うよ。普通はね？ 偶然君はカリオストロで偶然君

は錬金術の心得のある少女」

「そうそう☆ ぜーんぶ偶然だよ？」

「ただ俺は異常な偶然にばかり遭う」

これをただ名前の一致と言う偶然で終わらせるには、俺の身に今まで起きて来たトラブル経験上樂觀的過ぎる。

「それに……この複雑極まる術式、まったく驚いた。こりや人体練成の手順じゃないのか？ 心得があるとしても普通子供はこんなもん興味持たねえよ」

「……詳しいねえ、お兄さん」

「言つとくが俺は錬金術師じゃねえよ。知識だけしこたま詰め込んでるが、俺に出来る事は精々ポーション生成だけさ。返すぜ」

閉じた本をカリオストロへと投げ返す。慌てた様子もなく彼女はそれを受け取った。

「君をただの子供と思うのは止めるよ。確証はないが断言していい、君は錬金術師だ。それもただの錬金術師じゃないな」

俺がそう言うのと暫し無表情であった彼女は急に笑みを浮かべた。だがそれは少女の笑いではない。

「オレ様とした事がどうやら……考えが甘かったようだなあ。普通この本を読んで内容を理解できる奴なんていねえと思っただんだが……」

「だからメドウ子にも読ませた？」

「ああそうだ。星晶獣だとしても、よっぽど錬金術に精通してなきや意味も分からねえだろうぜ」

「よかったなメドウ子、わからなくても普通だよ」

「うるさいー！」

わはは、涙目でやんの。

「尤も今じゃあ魔術と錬金術の発動媒体みてえなもんだ、中身はオレ様にやあもう必要もねえ。なんせ全部頭に入ってるんだからなあ？」

「……お前は何者だい？」

「とつくにわかつてんじやねえのか、坊主？」

「こいつ、やっぱりそうなのか？ 正直 “そつち” は半信半疑だったんだが。」

「だ、団長この子なんなの？ 全然雰囲気違うんだけど」

「マリーちゃん下がってて。敵じゃないけどね……今の所だけど」

もし “本物” だとするとコイツは下手な星晶獣よりもやっかいかもしれない。だがそうだとすれば、昨日の感じていた違和感や遺跡であった力の残魂の理由が見えてくる。

「開祖カリオストロは死んでる。そもそも1000年近く前の人物だから当然だ」

「ああそうだなあ」

「だが “彼” が錬金術師の中で唯一、開祖だからこそ到達できた領域に居たのなら話は別だ。錬金術ってのはそういう業なんだろう？」

「ポーション生成しか出来ないって言う割に良く知ってるじゃねえか？」

「知識だけは詰めたつて言ったろ。それでどうなんだ？　そもそも俺達に近づいた目的は——」

目的は何かと言いつつ終わろうとした時、俺とB・ビー達は一斉に身構え武器を構えた。目の前の少女が臨戦態勢に入ったから？　違う、これは更に別の集団から向けられた殺気だ。

「……どうもややこしい事になりそうだけ」

「そろらしいな坊主」

カリオストロも俺達同様に殺気に対して身構えた。

どうやら林の中木々に紛れて近づいて来たらしい。カリオストロに気取られ油断したかな。既に周囲を囲まれている。

「出て来いよ、もう居るのはわかってんだ」

俺が呼び掛けると返事は無いが、代わりに木の陰から一人男が姿を見せる。

「どうも、お初お目にかかります」

出てきた男は如何にも胡散臭い表情と話口で、俺が特に嫌いな感じのタイプだった。そんな男を見て俺は今回の依頼を受けた事を少し後悔した。

世界一可愛い謎の美少女 後編

一 襲撃！ キャラ名と混ぜって名前ややこしい錬金術学会

木の陰から姿を見せたのはヒューマンの男。フラスコやらの実験器具がマントに隠れてはいるが、腰にホルスターがあるのが見えた。服装から見てこいつも錬金術師だろう。

「突然失礼、貴方達に追いつくので必死でしたので」

「白々しい……あんた錬金術師でしょ、何か用すすかね？」

「おつしやる通り、自分はヘルメス錬金術学会所属のしがない錬金術師。そして貴方は、あの遺跡調査を任された騎空団の者ですね？」

「だとしたら何ですかね？」

「ああやはり……いやはや、あの調査ギルドにも困ったものだ。あれほどここの調査は我々に任せれば良いと言ったのに、騎空団に依頼を出してまで成果を欲しがるとは」

男はワザとらしく芝居がかった調子で話す。本当に面倒なタイプだな、話が進まないじゃないかこの野郎。

「それで何すかね？ 要件言つて欲しいんですけど」

「あつと失敬。実はあの遺跡で得た成果ですが……どうでしょう、我々に渡して下さいませんか？」

案の定と言うか予想通りと言うのか……ありきたりな台詞言いだしたな。

「何で？」

「調査ギルドに報告したところで意味などありません。あそこは所詮歴史調査と骨董品に現を抜かす歴史マニアの集まりです。錬金術のことは我々錬金術師に任せるのが最良とは思いませんか？」

「調査ギルドの事は知らんけど、騎空団として依頼を受けた以上無理な話なんだがね」

「ええ、ええそうでしょう、ごもつともです。若いのに真面目で結構だ。ならどうでしょう、我々の方もただで渡せと言うつもりはありません。依頼料以上の謝礼は用意します。どうですか？」

「どうですか？ じゃねえんだよなあ……。金は欲しいがこんな話にのつてまで欲しいとは思わん。」

「そもそもあの遺跡にはなんもありやしませんでしたよ。交渉したつて無駄です、渡す

もんが無いんだから」

「いいえ、ありますよ。そこにね」

爬虫類の様にねつとりとした視線を向けながら男はカリオストロを指差した。

「なにになに？ 行き成り来たと思っただら幼女誘拐ですか？」

「やーんっ☆ お兄さんこわいよお〜」

カリオストロがまた少女ムーブで俺に抱きよって来た。

「誤魔化さなくて結構ですよ。その方の正体は既に知っています」

「……だつてさ」

「ちっ！」

めっっちゃ舌打ちしたね今あんた。

「……そっちは初めからこの島に何があるのか知ってたわけね」

「そう言う事です。そして我々としてはその方に自由になられると大変困るのですよ」

「仮に引き渡したらどうなるのさ」

「勿論謝礼を」

「違うっての。引き渡した後、カリオストロをどうするかって話」

「錬金術師ではない貴方には関わりの無い事ですよ」

「誤魔化すんじゃないよ」

「……」

「で、どうなんだ？」

あまり見ていたくない男の目を見ながら回答を待つ。男は目を細め俺とカリオストロを見ていた。

「貴方もカリオストロ殿と話をしてわかったかも知れませんが……その方は奔放すぎる。我々錬金術師としては、自由すぎるカリオストロ殿を放っておく事は出来ないのですよ」

「それで俺達に金つかませてまで手に入れたいとはねえ。どうせ口止め料込みなんだろう？ 大方自由を奪うかして自分らの都合が良い様にしようってか？」

「まさかそんな……ただ眠っていてもらうだけです」

「ねむるう？ 封印の間違いじゃねえのかあ？」

不愉快な気持ちを隠さずカリオストロが吐き捨てながら言った。

「お前らにとつて都合が悪いからと封印される身にもなりやがれ。あん時は『あいつ』の直系子孫まで担ぎ出して来たんで一度は封印されてやったがなあ……だが数百年ぶりに自由になったんだ。また封印されてたまるかよ」

「いいえ捕まってもらいますよ。開祖カリオストロ！」

男が叫ぶと隠れていた男の部下と思われる者達がゾロゾロと数十名現れた。見た所

錬金術師ではなく、傭兵かヘルメス錬金術学会所属の戦士かなにかだろう。

「ほーう？ 数ばかりは揃えたみたいだな」

「万が一貴方が目覚めた事を考えての事です。当然戦力は必要、だが封印が解かれ間も無い今まだ本調子ではないでしょう、大人しくしてもらいますよ！」

「……またこれだよ、薄々面倒な事だろうと思っただけだよ……ほんつと！ めんどくさい案件だなーっ！」

実に腹立たしい、何と言う状況だろうか。不平不満は尽きないが剣を取り構えるとB・ビー達も戦闘態勢へと入った。

「なんだ坊主、お前オレ様につくのか？」

「あんたがマジに開祖カリオストロだとして、どういう人間かしらんが少なくともヘルメス錬金術学会には義理も何も無いの！」

「ヘルメス錬金術学会だ。間違いないでいただきたい」

「そりや悪うございしました」

所属学会を間違えられプライドが傷ついたのか男は少し怒気を含む声を上げた。

「貴方達、剣を収めなさい。貴方達に我々と開祖の事は関係ないでしょう。それともこの数に勝てるでもっ？」

「そうとも言えんよ、一応騎空団として依頼はきっちり完遂したいんだ」

「やれやれ……物分りの悪い」

「あとな錬金術師さんよ、おたく俺達を知らないで来たの？」

「はい？ 何を言ってるのですか？」

俺の言う言葉の意味を男は理解できていない。それはつまり俺達、この騎空団を知らなかったと言う事だろう。

「いやもういいつす。その反応でわかったから。さして下調べもせずに来たわけね」

「道理で妙に余裕そうなわけだけ。相棒は地味だからしゃーねーけど、オイラ達見ても余裕そうだから用心したが憂いだっとな」

「地味言うんじゃねいB・ビィ」

「……これって任せていいの？ あたし対人戦闘は苦手よ」

「安心しろマリィ、我々がついているよ」

「ダイジョウブ（☆・ω・）ノ ボクタチニマカセテ！」

「ど、どんな騎空団に依頼が出たか……調べればよかったのにね……」

慢心ゆえの無用心、楽勝ムードが漂い出した俺達を見て男はこめかみに血管が浮き出していた。

「……小僧共が舐めやがってっ！ お前達！ 最優先は開祖カリオストロ、他の奴等は殺してもかまわん！」

男の号令と共に武装した男達が一斉に俺達へと襲い掛かってきた。

「本性現しやがったな、腐れ錬金術師！」

性格が変わり果てた錬金術師。だが相手がいかにも悪党然としてくれるなら此方も戦いやすい。戦いにおいて複雑な事情や状況は一番面倒な事になる。相手が悪党、シンブルなのが一番だ。

「どうすんだ坊主？ オレ様についたの後悔するか？」

「馬鹿言うんじゃねえやい。それと勘違いすんな、俺はあんたについたんじゃない」

「あん？」

「あんたを護つてやるんだ。成り行きだろうとな」

「……へっ！ ガキが生意気言うじゃねえか！」

ガキで結構、これでもまだまだ10代の少年でいたいんだ。

さて敵の数は木々にまぎれて正確には把握できないが30以上だろうか。まあ多いといえば多い、カリオストロ一人を捕まえるには過剰なんじゃないのかと思うぐらいだ。

「だが相手が悪かったな……メドウ子！」

「何よ？」

「待望の見せ場だぞ」

見せ場、と言われてメドウ子が迫る男共を見て目を輝かせた。

「……つまり、暴れていいわけ？」

「思う存分な。あいつらに偉大なる星晶獣の力って奴を見せ付けてやれ！」

「……つくろしよおおー！ーがないわねえ!! いいあんた達、しつかりと目に焼き付けなさい！ この誇り高き星晶獣メドウーサ様の大活躍をねっ！ メドウシアナ！」

「ガアアアア!!」

メドウ子がメドウシアナを呼ぶと雄叫びを上げてメドウシアナ（省エネ）が瞬く間にメドウシアナ（通常）へと変身。身の丈数十メートルはあろう魔蛇メドウシアナが光臨した。

対して俺達に向かっていた男達は驚き足を止めた。突然現れたその巨大な存在に圧倒されたのだ。

「よく聞きなさい愚かな人間達よ！ アタシは誇り高き星晶獣メドウーサ！ 何人たりとも石化の魔眼から逃れる事はできないのよ！」

メドウシアナの頭部から叫び名乗り挙げるメドウ子。彼女の髪の毛もうねり幾つもの蛇が生まれる。

「アタシに刃向った事を後悔するがいいわ！」

別にお前に刃向ったわけでもないんだけどね。

■ ■
二 カチン、コチン

錬金術師の男は困惑した。目の前で起きた出来事が信じられなかった。

「どう見たっ！　これがアタシの実力よ！」

「おーすげーすげー。これなら指名手配犯とかの捕獲で役立つな」

学会で雇っている傭兵達数十名、錬金術師に対しての訓練も行ってきた精鋭でもあった。だがその精鋭達の殆どは男の目の前で体を石へと変えられてしまっていた。

「た、助けてくれえ!？」

「おかあちやーんっ!？」

「なんでい、無口でプロ傭兵気取りが一気に安いセリフ言うようになったな。オイラ達が出る幕もねえや」

「今日はメドウ子の初依頼だからな。このまま不完全燃焼も悪いし花持たせよう」

「あ、あんた助けてくれよ！　俺達は金で雇われてるだけなんだ！」

「だろうと思つたよ。適当に解除してやるから大人しくしてな」

「はっ！　流石は星晶獣つかか？　ちいせえくせに中々やるじゃねえか」

「当たり前でしょ！　アタシを誰だと思つてんのよ！」

石化した男達は一見すると助かる見込みも無さそうな状況だが、メドウ子は器用な事に彼らの鎧や服のみを石化させた。そのため今彼らは口で許しを請うことが唯一出来る事だろう。

「じゅ、術師殿！ これは想定外です！」

「星晶獣が居るなんて話聞いていませんっ!？」

「わ、わかつている！」

無事な者も男を含めて五名程になった。始めは30人を越える戦力だったはずがあつという間に居なくなってしまった。

（せ、星晶獣だとお!?! なんだってそんなのが居るんだ!?! 遺跡調査を受けただけの騎空団と聞いただけなのに……こんな、星晶獣が居る騎空団なんて……星晶獣の、星晶獣の居る、騎空団?）

「あ」と男は間の抜けた声を出した。

騎空団の団長である少年に「俺達を知らないで来たの?」と言われた。何の事かわからなかったが今思い出した。近頃噂のヤバイ奴等、団員に星晶獣を抱える騎空団。所詮噂だと本気にしていなかったあの話を。

「嘘だろ……本当に居たのか!?!」
【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z O Y】!？」

「何だ知ってたのか？」

長い長い騎空団の名前を叫ぶ。少年の反応は肯定であった。

「お前らそんな名前の騎空団だったのかよ……」

「うるへー！ 俺だつて反対したんだよ！」

「団長なんだろうお前、何負けてんだよ」

「喧しい！」

そして判明した騎空団名にカリオストロが軽く引いていた。

「じよ、冗談ではない！ だとすれば、そのやつ等も星晶獣！？ て、撤退だ！」

「あ、ええっ!? 術師殿お待ちを!?!」

「お、置いてかないで下されえ！」

圧倒的不利、勝てる見込み0%。敗北を悟った錬金術師は一目散に逃げ出した。スタコラと逃げていく姿は、最初に見せていた余裕そうな雰囲気を感じさせない情けない後姿であった。

「ああん……? 馬鹿共が、逃がすと思つてんのか? おい坊主、昨日オレ様と一緒に

拾つた杖よこしな！」

「杖? ああ、これのこと？」

カリオストロに言われ団長がベルトに固定していた杖を手渡す。それを受け取ると

カリオストロは杖を掲げてみせた。

「お前も長い事封印されたから暴れたいだろう？ 出て来いウロボロスッ！」

カリオストロが叫ぶ。すると掲げられた杖の周りに光の粒子の様な物が集まり、杖に巻きついていった蛇の装飾が動き出したかと思うと、巨大な蛇の怪物となって飛び出してきた。

「うお、なんだこれ！」

「この杖はただの杖じゃねえ、オレ様が作り上げた最高傑作の一つ。そしてそれに封じられていたのがこのウロボロスだ！」

「ただの蛇の串焼き杖じゃなかったのか！」

「んなわけあるかっ！ お前そんな風に思ってたのか!？」

「ちよつと、あんたメドウシアナの事真似しないでよ！」

「真似じゃねえよ！ 調子狂う奴等だな……まあいい、行けウロボロス！」

「ギシャアアアッ!!」

「ひえっ!!? な、なんだあ!？」

カリオストロに命じられたウロボロスは雄叫びを上げ逃げる男達へと向かった。メドウシアナ程ではないが巨大な怪物と言つていい存在であるウロボロスが後ろから迫っている事に気がついた男達は悲鳴を上げる。

「寝てて腹も減ってるだろうウロボロス? ……そいつら食べちゃっていいぞっ☆」

「駄目に決まってんだろ!? 後で依頼の妨害しに来た犯人として突き出すんだから、殺しは駄目!」

「ええー、駄目え〜?」

「駄目っ!!」

「ちいっ!! ならしかたねえなあ……ウロボロス!」

カリオストロの命を受けあつと言う間に男達へ追いついたウロボロスはその長い胴体を円状にして男達の周りをグルグルと回り出した。特殊な力が働き男達はそこから身動きが取れなくなる。

「カ、カリオストロ様! おやめ下さい!」

「おいおい今更カリオストロ様だあ? そりゃちよつと調子が良すぎるんじゃないやねえのか?」

「そ、それは……っ!」

「あとてめえ……さつきオレ様に向かって「まだ本調子ではない」とか言つたよな……ククッ! だいたいなあ? 本調子なら今からお前ら全員どうなると思う、ええ?」

「ひ、ひいっ!」

「あはっ☆ 冗談だよ、えへへ! ……お前ら坊主に感謝しろよ、今回はお仕置きで済ま

せてやるからなあ！」

カリオストロが手に持った本を広げ意識を集中させた。ウロボロスの回転が早まり魔術とは違う力の本流が生まれだす。

「これが、真理の一撃だ！ アルス・マグナ！」

ウロボロスの激しい回転と共に急激に収縮、そのまま力場が破裂を起こし眩い閃光が走る。一瞬の事に男達は悲鳴を上げる間もなく意識を失った。

「はっ！ 開祖直々の錬金術だ。てめえも錬金術師の端くれなら、見れてうれしいだろお？」

「気失ってますけど」

「ああん？ 手加減してやったのに情けねえガキ共だぜ」

目を回す錬金術師を見て呆れた様子のカリオストロ。

石化した傭兵が多いが死傷者は一切出さなまま、一先ずは錬金術師の襲撃を団長達はやり過ごしたのだった。

■ 三 可愛い証明

あの後かなりの手間だったが石化した傭兵も気絶した錬金術師もまとめてエンゼラ

に運び込み、再度全員メドウ子に頼み死なない程度に石化させた。ガロンゾへと行く前に空の風紀員である秩序の騎空団にでも引き渡す。犯罪者と言われると微妙だが、正式な依頼を受けた騎空団の妨害と言う事で預ける事はできるだろう。

そして最大の問題はいつも最後に残るのである。

「それで結局コイツってなんなの？」

エンゼラの食堂でメドウ子が聞いてくる。彼女の目の前には再び可憐な少女に戻ったカリオストロが可愛らしくジュースを飲んでた。

「ええ〜？ カリオストロはカリオストロだよ☆」

「そう言う事言ってるんじゃないわよ！」

「まああの一連の流れでわかっちゃいるんだけどさ……どうなの团长？」

「マリーちゃんも半信半疑と言う様子で聞いてくる。まあ普通は信じられん無いようだろう。」

「この人は間違いなくカリオストロ、錬金術の開祖カリオストロだよ。今の錬金術師のレベルなんて俺はよう知らないけど、こんなレベルの錬金術師がそう居てたまるか。逆に開祖って言われた方が納得だよ」

「ほう？ 坊主見る目あるじゃねえか」

「そりやどうも」

カリオストロは俺の隣に陣取っている。可愛い少女と開祖の狂気に満ちた表情がコロコロ変わる存在が隣に居るのは気が休まらん。

「私も錬金術に関しては何人だが、歴史上の人物として開祖カリオストロの名は知っている。しかし錬金術師開祖カリオストロは1000年以上前の人物だろうか？」

流石コーディネリアさんだ。錬金術なんて有名そうであるニツチでマニアック極まる分野だ。名前を知っているだけでも十分ですよ。

「ああその通り、オレ様が生まれたのはもう1000年以上前の事さ。だが数百年前、オレ様も油断してな……あの廃墟の中に封印されちゃったんだよ」

「くふふっ！ そ、それにしたって……ひひひっ！ あはは！ 封印時点で相当の高齢のはず、君ははははっ!! どう見ても少女、ぶはははははっ!?!」

「……おい、こいつ」

「あ、あのルドミアさんは持病でこうなってます。申し訳ありませんが、とことん気にしないで上げてほしいです」

ブリジルさんの説明を受けつつも、爆笑しながら話しかけるルドさんに流石のカリオストロも困惑していた。

「ま、まあ言いたい事はわかるからいいけどよ……オレ様は錬金術の開祖にして錬金術を極めた存在だ。延命なんてわけねえよ」

「何と……鍊金術とはそこまでの業を可能にしていたのか」

ユーリ君が鍊金術のもたらす神秘とも言える業に驚いている。今現在の空で百年以上の延命を可能にする魔術の類は存在していない。だが遙か過去、そして目の前に居る存在はそれを可能にしたと言う事だ。

「……まあその所為で封印されたわけだけどな」

「どう言う事でありますか？」

「長く生きるつてのは、想像するより良い事ばかりじゃねえのさ。むしろ敵が増えるばかりでな。あの学会の奴等もそう、オレ様が長く生き過ぎると都合が悪いんだよ。理由は……くそ下らねえ事さ、話す気にもならねえ」

1000年以上を生きる鍊金術師。その内の数百年は封印を施されていたと言うが、封印に関して疑問がある。

「あのタイミングで封印を解いたのはなんでだ？ あの廃墟にあった力の残魂は俺達が到着するほんの少し前に封印が解けた名残だ。まさか俺達が来るのを知っていたわけじゃないだろ？」

「それはオレ様が知りてえよ」

「え？」

「封印が解けたのは全くの偶然だ。あの日目を覚ましたら偶然お前らが来たんだ。だか

「最初はお前等利用して、適当な島まで運んでもらおうと思ったんだけどな」

「それで取り入りやすいように美少女気取ってたわけね？」

「違うよ团长さん？　気取って、じゃなくて正真正銘美少女なのっ☆」

「はいはい、わかったわかった。」

「じゃあなんで封印解けたんだろうな」

「さあな……まあ封印の術式が緩むほどの天変地異が連続して起こればあり得なくもねえ。だがそんな規模の事、1000年に一度あるかないかだ。ましてそれが連続でなんて……」

「あ」

「……あつたのか？」

「強力な術式が緩むほどの天変地異の連続、そして比較的最近に……。」

「アレかあー……」

「あれだな相棒」

「間違イナイナ」

「まあアレだろうなあ」

『あの時か……』

「おいおい、何だってんだ？」

もうほぼ間違いないけどまたアイツが関わるのか。

「まだ一月経ってないけどさ、前俺の幼馴染が滅茶苦茶機嫌悪くなって天変地異起こしたんだよ」

「頭大丈夫か坊主？」

「その反応は当然だが傷つくぜ」

突発性お兄ちゃん分不足による天変地異……あれちがったか？ もう何起きても驚かないような現象だからなアレ。重要なのはお兄ちゃん不足であるところだし。

「確か各島であり得ない異常気象が連続したよな。俺気絶してたから知らないけど」

「ああその通りだ団長。私の均衡センサーによれば雷、雹、嵐、火山噴火と間欠泉の放出島の浮力変動が一日で連続したよ」

「待って、あれそんなレベルでやばかったの？ 俺詳しくは分かってないんだけど」

「まあ無事だから特に言わなかったよ」

「あれアンタ達の所為だったの!? ルーマシー群島で行き成り雹が降って怪我したんだからね!」

「俺の所為じゃねえよ」

地味に身内に被害が出ていたのか、と言うか浮力変動って一歩間違えば空の世界壊滅じゃねえか。

「……お前の幼馴染って人間か？」

「人間なんだよなあ……」

きつと今も強くなっているのだろうか、全空一の暴れん坊。ビィとラカムさんの身が心配である。

「だが本当なら封印が解けるのも納得だぜ……ある意味お前の幼馴染とやりに感謝しなきゃいけないえな」

「会いたきやその内合わせてやるよ、見た目普通の女の子だけだな」

だがジータとカリオストロ、果たして会わせていいものか。とんでもない化学反応を起こさなきゃいいけど。

「ちよつといいかね？」

話も終わりそうな気配が出て来た時、コーデリアさんの高らかな声が響いた。

「どうしました？」

「最後に疑問がある。錬金術開祖カリオストロだが……たしか男性と記憶しているのだがね」

その瞬間この場に居る皆の視線が一斉にカリオストロへと向いた。コーデリアさんやっぱり知ってたか。開祖カリオストロ、そうだ確かに“彼”は歴史では男性として知られている。話題に出すの嫌で黙っていたが、まあ知ってるなら気になるよね。

「ねえカルバ……ちよつと今日一日でわけわかんない事実の連続過ぎて、あたし混乱しそうなんだけど」

「私もだよマリー……」

「男が女で、女が男……これは哲学かなあ」

きつと哲学ではないよフィラソピラさん。

「……んもーっ☆ 何言ってるのコーデリアさん、カリオストロは可愛い女の子だぞ？」

「ホムンクルスだろ」

俺が「ホムンクルス」と言うとかリオストロが凄まじい形相で睨んで来た。

「あんたの本に載ってた人体錬成、あれは文字通り人間を人工的に錬金術で生み出す業だったな」

「ホムンクルス……あれは伝説の存在と思ったが、可能なのかい？」

「くっそ面倒で難しい上に、現在じゃやる意味が殆ど無いんでやろうと思う奴が居ないけど、理論自体は確立してますよ。正にここにいるカリオストロの手によつてね。錬金術の参考書にも話だけは出てきたのを覚えてます。興味ないから忘れてたけど」

「……お前本当にポーシオン生成しか出来ねえのか？」

「出来ねえよ、俺は錬金術師になる気はないからな」

信じられるか？ あのはあさんポーシオン生成させるだけを目的で錬金術参考書5

0冊持つてきてそれ三日で無理矢理読破させたんだぞ。もう知識だけなら負けん。代償として一日寝込んだがな！ しかも面倒な上に買う方が早い時があるんで現状意味ねえ。

「意味がないとはどういう意味でありますか？」

「仮にホムンクルスが出来たとしてそれは肉体が出来ただけ、そこにあるのは人の形をしていてもただの肉塊なんです。肉体を動かすための魂が無きや意味が無いわけですよ。錬金術で物質をどうこう出来たとして、“生きてる”って言うレベルの魂なんて非物質を生み出したり移動したりなんて普通は出来ませんよ……一人を除けばね」

皆がまじまじとカリオストロを観た。言い方は悪いが珍獣を見るような視線だ。

「本当によくわかってるじゃねえか坊主。ああその通り、オレ様がいた時代でもホムンクルスが作れたとしても、殆どの錬金術師共は魂の創造と移動は出来なかった。だが天才のオレ様は別だ」

「先ほど話していた延命の方法とは、肉体の維持では無く肉体の創造、ホムンクルスを、別の肉体を作って……自分の魂を入れ替えたと言う事だったのか……」

「そっだよっ☆」

果たしてこの「美少女」の肉体は何体目なんだろうね？ 聞く気にはならんが。

「けどにやあ〜？ なんでまた、美少女なんて作ったにや？」

「ばーかわかんねえのか、この酔っぱらいが」

「ひ、ひどいじゃー!」

いやラムレッダはこんな時ぐらいは酒を置け。

「長い時代を生きるんだ……だったら美少女が一番だろお?」

いや、それは違うと思いますが……。

「ああ、この完璧な美少女ボディ……我ながらほればれする、何しても可愛いんだぜ? 一挙手一投足全て可愛い、昨日そこの星晶獣、ゾーイだったな? そいつに頭を撫でてもらった時のオレ様を見たかあ?」

「あの時? 慰めてもらった時だよな?」

「そうだよ……怯えるオレ様が撫でられてる姿……さいつこーに可愛かっただろう?」

お前……あの時妙にうっとりしてたのって自分にうっとりしてたのかよ。

「とんでもないナルシストやな自分」

「ナルシストじゃねえ、オレ様が世界で一番可愛いのは決定事項だ」

「そう言うんをナルシスト言うんやで」

カルテイラさんのツツコミも聞く耳持たずである。カリオスト口は自分に酔いしれていた。

「けど成程だぜ。これで相棒がカリオスト口に反応しなかったのにも納得だ」

「中身が男ダカラ本能的二見タ目ガ可愛イ少女デモ反応シナカッタノカ」

「癒し守備範囲は広く、それでいてストレスに苛まれ続けた主殿にとって、カリオストロの可愛いは露骨過ぎたわけだな……」

「ほらーこう言う話になる。だからホムンクルスの話題出す気にならなかつたんだよ。」

「……おいちよつと待て」

「ところで隣のカリオストロの顔が滅茶怖いんすけどねえ。」

「この可愛いオレ様が露骨すぎるだあつ!? てめえ坊主、昨日オレ様の事可愛いって言っただろ!? ありやあ嘘だったのか、ああんつ!?」

「ちよちよちよつ!? なんすか行き成り!」

「オレ様はっ! 世界で一番! 可愛いんだよ!」

「おいおい、こいつマジか……。」

「露骨だろうが何だろうが、可愛いだろう!」

「そ、そこは人それぞれの好みもあるから!」

「知った事かよつ! 坊主!」

「な、なんすか?」

「いいか、見とけよ!」

カリオストロは突然席を立ち、俺の目の前にへと移動した。そしてそのままピースサインを決めた謎のポーズをとったかと思うと険しい表情を一変させる。

「……………えへっ☆」

……………え？

「え、はい？」

「……………どうだ？」

「どうって……………」

突然立ち上がったと思ったたら妙なポーズを決めただけの様な…………。

「えっと、何を言えればいいのか……………」

「可愛いだろうがっ!!」

「あ、それ!？」

「それ以外何があんだよ!」

知らねーよ! 何なのこの開祖、ただの馬鹿なんじゃないのか!?

「あぁーはい、まあ可愛いんじゃない?」

「そんな適当な返事をするんじゃないやねえ! 何にも感じねえのかお前は!？」

「知らねえよ、んもおーっ! いいでしょうが俺一人ぐらい反応薄くつてもーっ!」

「よくねえんだよ!! このオレ様が可愛くないなんて事あってたまるかっ!」

「別に可愛くないとは言つてねえだろ！」

「心が籠つて無いんだよ！」

「だつてお前中身男じゃねえかよっ!? 無理だよ可愛いなんて心から思うの！」

「ちげえ、オレ様は身も心も世界で一番可愛い美少女なんだよ！」

「だーもう、言つてる事無茶苦茶だよコイツ！」

「そもそもあんた年齢的にも爺どころじゃねえだろ!? あんたなんざカリおっさんで十分だこの野郎！」

「んだと、このクソガキがあゝゝゝっ!?」

カリおっさんが怒声をあげて俺に飛び掛かつて来やがった、猿かおのれはこの野郎!?

「訂正しやがれ! 誰がおっさんだこの野郎!？」

「うるせえ放せこいつ!？」

「やめたまえカリオスト口殿っ! 団長は少し特殊なんだ！」

「特殊つて何すかコーデリアさんっ!？」

「関係あるか! 第一こんな美少女と密着して興奮一つしねえのかお前はっ!？」

「だから男だろあんたっ!？」

「うるせえ、好きなんだろお!? こういう女の子がさあゝ!!」

「別に女の子が好きつてわけじゃねえ!」

「お前ホモかよお!？」

「ちげえよ馬鹿野郎っ!？」

■ 四 可愛いカリオストロを仲間にできてうれしいでしょ（威圧）

カリおっさんとの口論と取っ組み合いは、コーデリアさん達によって何とか落ち着きを取り戻す。主に俺の顔に引つかき傷が多く残ったが……。とりあえずおっさん呼びは控えるでしょう。奴の逆鱗に触れてしまう。

「とんでもねえ開祖だぜ……自分の趣味で美少女ボディ作って生きながらえてるなんてよ……」

「全く反応する気配のないめえの方がおかしいっての」

そんな事はありません、少なくともあんたの方が色んな次元でおいしい。

「あーもう終わり、疲れたよ俺は。カリおっさ……」

「あ、あ、っ!？」

「……カリオストロは部屋貸してやるから大人しくしてな。次の島着いたら好きにすりゃいいから」

「あん？ 何言ってるんだ坊主」

「何って……おいおい、あんたこの後どうする気にいるんだよ。他の島に行くとか言ってたんだからそうするんじゃないのか？」

「馬鹿、お前等はもうオレ様匿って学会の連中と戦ったんだぞ？ 関わらないで済むと思ってるのか？」

……え？

「それは、どう言う……」

「今回捕まえた錬金術師を突き出したところで学会連中はオレ様の復活なんて直ぐわかる。そうなりやオレ様を匿ったお前らだって狙われるんだよ」

「いやそれは……」

「なーらー……オレ様が居る方と居ない方、どっちが良いと思う団長さんよ？ 錬金術師の集団が攻めて来るかもしれねえんだぜ。しかも今度は星晶獣対応策も練ってくるだろうなあ？」

「確かにそうだけでも……」

「なら錬金術師の一人でも仲間にいた方が良いと思わねえか？」

「そら、まあそうだろうけど……」

「だったら決まりだねっ☆ よろしくね、団長さん！」

まだ俺はOKなんて言っていないのに彼女の中では仲間に入るのは決定事項らしい。

ニコニコと笑いながら密着してくる。

「離れる暑苦しい」

「ちっ！ やっぱり無反応かよ……まあいい、そのうち骨抜きにしてやるからな」

ならないよ絶対！ なに勝手に変な目標立ててんだこの似非美少女錬金術師。

「よーしっ☆ それじゃあ世界で一番可愛いカリオストロが仲間になるんだもん、団名もあんな長つたらしいクソダサイのじゃなくて【世界で一番可愛いカリオストロと下僕達】に改名だよっ☆」

「ぞけんな」

「んがっ!」

言うに事欠いて下僕とはなんだ、下僕とはこの野郎！

「て、てめえ坊主！ 口引つ張るんじゃねえ！ この体に傷ついたらどうしてくれんだっ!」

「錬金術で直せつだろ!」

「そう言う問題じゃねえ！ 可愛いオレ様の身体に傷なんてつけれるか!」

「ちよつとあんた、この誇り高き星晶獣メドウーサを差し置いて勝手に団名変えるんじゃないわよ! ここは【誇り高き星晶獣メドウーサとメドウシアナの手下達】に決まってるでしょ!」

「それもねーよ、馬鹿野郎!!」

カリオストロの言葉に触発されたのかメドウ子が口論と取っ組み合いに加わってきやがった。やっと話が終わると思っただらこれかよ!

「団名改名ト聞イテハ黙ッテハイラレンナ……【美しきティアマトの風】ヲ認メテモラオウカー!」

『いいや、次こそは我の案を飲んでもらうぞ』

「そう言う話だったらオイラも参加するぜ!」

「……よくわからないが、みんなで語り合うんだな! 俺も加わるぜえっ!」

心の底から面倒なメンバーが参加してきやがった。

「もう勘弁ならねえッ! てめえらその気なら表出やがれ! 今度こそ騎空団【グランブルー】にするからなっ!!」

その後俺達は何時かの様に完全に泥仕合となった醜い争いを行い、全員同時に倒れる事になる。そのため団名は変更されずただ色物団員が増えるのみとなった。

こんなんで俺は無事ガロンゾに、いやガロンゾの後もやっていけるのか不安で仕方なかった。

五 (笑)と癒しの星晶獣が8体(+α)いて、割と吐く大酒飲みのだらふと、格闘馬

鹿と、回る哲学者と、イケメン騎士と、頑張り騎士と、名の知れた商人相場師と、始終笑い続けるキノコキチハンターと、歩く天災のファツションクレージーと、腐女子絵師と、ちびっ子騎士団長に生真面目ナイトと、世界で一番可愛い錬金術師様がいるアツトホームで団長の胃痛が耐えない騎空団です

■
とある島の酒場、そこで噂話をする男達。

「なあ聞いたか？ 星晶戦隊（以下略）に仲間増えたつてよ」

「今度はどんな濃い奴だよ」

空のどこかで騒ぎがあると必ず変な仲間が増えている。それが噂の騎空団「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y」。そんな騎空団の噂は、多くの人間の興味を誘う。

「なんかデカい蛇と蛇つぼい女の子に、かなりの美少女つて聞いたぞ」

「蛇つぼいってなんだよ？」

「いや実際に見たわけじゃねえが、とにかく蛇つぼいらしい」

「……好きなのかな、そう言うの」

「かもな」

「いやそれよりも美少女も追加か……これはロリ疑惑が深まるな」

「ただもう別の噂だと美少女なんだがな……男って可能性があるとか」

「うっそだろ!?! お前そうなると……」

男の一人がゴクリと唾を飲み込んだ。

「ああ、前ハーヴィンが仲間になったのと男性団員が増えた事、そして例の【ジータと愉快な仲間たち団】との関係等のあらゆる噂を総合するとだ……あそこの団長は「ロリコンの年上巨乳好きで、幼馴染属性のホモの可能性がある女装っ子好きのケモナー」って事になる」

「すげえな、いやあくまで噂だけだよ」

「そうあくまで噂だ」

だが噂だとしても、凄まじく濃い面子が仲間になった事は間違いない。どこまでが真実でどこまでが嘘か……本人が聞いたら泣きながら「全部嘘に決まってるだろ!」と言う事だろう。

「しかも前帝国ともやりあったって話じゃねえか」

「全くすげえ奴等だぜ。早々出来るような事じゃねえ」

「更に見逃せねえな、あの騎空団の活躍がよ」

「ああ全くだぜ……」

どこか遠くを見る様にする男達。滅多にいない騎空団の活躍が羨ましいような、気の毒なような、色々な思いが彼らの中にはあった。

「……俺やっぱあそこの団長と友達になつてこうかな……」

「……お前」

エルステ帝国とも戦い、人々への話題のネタ提供的にも八面六臂の大活躍(?)の騎空団の噂は、例えば根も葉もない話としても空に住む多くの人間にとって中々のエンターテイメントであつた。

そしてこの噂を聞いた団長は泣いた。

出会いのガロンゾ編

ガロンゾで出会おうぞ

一 衣類の洗濯を

晴天である。空に船を遮る雲は無く、燦々と輝く太陽が俺達を照らし、穏やかな風が俺達の旅を後押しする。

なんと気分がいい天気であろうか。文句なしに快晴、思わずスキップしたくなるほどだ。そしてこんな天気の中エンゼラの甲板には、俺達の服がズラリと干されていた。

「うむ、こんな日は洗濯に限る」

まだ騎空団を立ち上げてから一年も経っていないのだが、あれよあれよと団の人数も増えに増え、それに比例し洗濯物の量はかなり増えた。まあ元が調査騎空艇であったエンゼラには割りとしつかりした洗濯設備があるので助かっている。

「フィラソピラ、これお願いね」

「任せてー」

ルナール先生から手渡される洗濯物を受け取り、クリュプトンを飛ばしマストの柱に張られた洗濯紐に吊して行く。紐は何本も張られており、一番上の紐は飛ばないとかけられないのだ。

「明日にはガロンゾやからな、船も修理出すし洗濯すませんと溜まったままになつてまうわ」

カルティラさんの言う通り明日には目的地のガロンゾへと到着するだろう。そうすれば念願の船の修理を……。

「金、金が飛ぶ……」

「急に落ち込むなや」

現在の借金は300万ルピを超えている。船の修理状況によつては更に上乗せされる可能性もある。

「言うても金も溜まりつつあるさかい、返済もそうとうないで」

「……そうかなあ」

「せやせや」

エンゼラ内に幾つかある金庫の中には「返済用手出し厳禁」の最もセキュリティを厳しくした金庫がある。それに入れてあるお金は文字通り借金返済のためのお金なので、溜まっているように見えて無い様な物。無茶振りとも言える依頼をこなすおかげ

で、生活費とかに当てるお金は困らない程度はあるがもし油断して、何時ぞやのティアマトの起こした【宴会音楽団員】事件の様な事がある場合……。

「ヒエエツ!？」

「急に叫ぶなやつ!？」

い、いかん……ナイーブになりすぎた。

「俺はガロンゾで何も起きないよう祈るほか無いのか……」

「神頼みならほれ……そこに」

「あん、なんだよ?」

カルティラさんが丁度通りかかったB・ビィを指差した。神頼み……まあ星晶獣は神

様とか言われちゃいるがね。

「まるで御利益無さそうだな」

「言つといてなんやけど、うちもそう思うわ」

「呼び止めといて突然失礼だな」

うちで御利益有りそうな星晶獣はゾーイとコロツサスにユグドラシルぐらいだ。セレストはまあ、あいつ死の星晶獣だから御利益って言うのも変だし、他はむしろ厄介事持つてきそうで祈る気にならない。

「ねえねえ、団長さん☆」

神は死んだ、とか考えてたら露骨なぶりっ子が来た。

「どしたの、カリおっさん」

「おっさんじゃねえ！」

だがその仮面は簡単にはげる。

「いいか、団長？ 命が惜しかったら“おっさん”だけはやめろ？ OK？」

「OKおっさん」

「うゝうゝうゝゝゝんゝ っ！ もうカリオスト口怒ったぞ☆」

青筋立てながら笑顔でウロボロス召喚するんじゃねえ。

「甘いわっ！」

「ギシエエツ！」

「あ、てめえ!？」

錬金術師の開祖が生み出した怪物だろうが、ちよつとでかい蛇みたいなもんなんだよ。グルグル巻きにしてくれるわ。

「ギ、ギシャエ……」

「うわあっ!?! こ、こいつ蝶結びにっ!？」

こちとらでかい蛇の様な奴の相手は何度もやっとするのだ。今更このぐらいの相手屁じゃないっての。

「それで何か用つすか？」

「こいつ何事も無かつたように……」

「慣れつすよ。それで？」

「慣れつてお前……まあいい、昨日貰つた本と新聞だが読みきつたんでな。追加よこせ」

「えつ？ あれ読みきつたんすか？」

おつさんが我が団ではよくあるなし崩し入団をしてから直ぐに要望として「現在の空の情勢がわかる資料をよこせ」と言われた。気の遠くなるような時間を封印されていたので、彼……いや彼女？ は現在の情勢には全くの無知であった。

それに関しては「なるほど」と思ったので素直に船にあつた世界史の本やら、たまに買つておいた新聞やらを集めて渡したのだが、10冊どころじゃなかつたのでまさか読みきるとは思わなかつた。

「オレ様を誰だと思つてんだ。あの程度の量なんざ直ぐに読める」

「追加つてもなあ……もうあれ以外うちの船には無いよ。新聞だつて古いのは捨てるし、あれでも基本的な情報は載つてたし十分じゃないの？」

「知識つてのはあつて困るもんじゃねえんだよ」

「そうだけどさあ」

「だが無いならしかたねえ。次に行くつて言う島で適当に本とか買うとするよ」

「……金はどうするのさ」

「買って☆」

ふざける。

「冗談だよ。そんなこえー顔すんな」

「言つとくけど、俺に金銭の話で冗談は通じんぞ」

「うちの団長は既に300万以上借金こさえとるでな」

「何してんだよお前……」

何もしてないんだよ俺は……。

「本買う金ぐらい自分で用意できる。適当なもん売れば幾つか買えるだろ」

「あんた売れる様な物なんてあったか？」

「あんだよ、こう言うのとかな」

そう言うとおっさんは、腰のホルスターから妙な液体が入ったプラスチックを取り出した。妙にタツプンタツプン言つてて気持ちが悪い。

「……何それ？」

「滋養強壮、眠気も吹き飛ぶカリオストロ特性ポーションだ」

「いつの間に……」

「昨日ちよちよいと部屋でな。名付けて【紅い牡牛】」

商品名まで考えてやがる。心底どうでもいいが、しかしやる事が早い。流石開祖と言ったところか。

「効果はオレ様が保証する。欲しい奴は絶対買うぜ」

「……副作用とか無いだろうね」

「あるわけねえだろ、オレ様が作ったんだ。なんなら試すか、一本でピンピンバリバリだぞ?」

「謹んでお断り」

何さその効果音、俺は実験体か? 冗談じゃないぜ。

「売るのは良いけど売る前に素材教えてくれよ。昔と違って今だと違法になつてる物もあるかもしれないんだから」

「あー……まあ大丈夫だろ」

「不安な返事やめて」

錬金術師開祖のポジション、それをわかっていれば喉から手が出るほど欲しい奴は幾らでもいるんだろうな。態々そのネームバリユーを利用させる気もする気も無いけども。例の学会連中関係で絶対面倒になるから。

「なんにしても程々にしてくれよ」

「わかつてるよ」

新たな仲間の唯我独尊系錬金術師。彼女の扱い方法をこれから知っていかねばならない。メドウ子一人の追加でも面倒だと言うのに、連続して入団したちびっ子二人はなんだってこう面倒な性格なのだか……。

どうせなら大人しくて素直で純粋に可愛いちびっ子が良かった……。

「そう言う事考えるからロリコン言われるんだよ相棒」

「心を読むんじゃねえ！」

「顔に出てんだよ」

ほんといい加減にしろ俺の表情筋！

■

ニ 来たぜ、ガロンゾ！ 居るじゃん、帝国！

■

船造りの島ガロンゾ。世間の騎空艇の殆どが、空を旅する以上何時かこの小さな島に世話になると言う。そして遠目にでも見える数多のクレーン群は、この島が如何に造船に力を入れているかがわかる。

「あんな小さな島でえらい数の船が入渠してるぜ」

「ガロンゾも立派になつたもんだな」

「おっさんの頃はどうかだったのさ？」

「おっさんじゃ……はあ、もういい。オレ様の頃も造船技術はそれなりにあつたさ。あそこまでじゃなかつたけどな」

「意外つすか?」

「別にそうは思わねえよ。封印も長かつたし技術の発展ぐらい想定の範囲だ。むしろ小国のエルステが軍事国家になつて勢力伸ばしてる方が意外だぜ。王国も帝国になつてるし」

「エルステは驚異的な軍事改革が国を変えたのです。カリオスト口殿が慣れ親しんだ時代の面影は無いでしょう」

エルステ軍人であつたユーリ君が少し自慢気に補足する。既に帝国のやり方に反発し袂を分かつた彼だが、エルステ帝国の真の良さと言うのも知っているのだろう。だからこそ彼は軍へと入つたのだから。

「軍事改革ねえ」

「それだけじゃねえぜえ? エルステの科学力はサイツコクにクレ〜ジ〜だよなあ!」

独特な何時もの口調で現れたのはハレゼナ。殆ど気にするような事も無かつたが、仲間になる時生まれはエルステだと話は聞いていた。

「そう言えばハレゼナ殿もエルステの出身でしたね」

「ケヒヒ……で、でも僕が居たのはスラム街だったから、怖くて出てつたけどね……」

「……確かにエルステでも未だ貧富の差はあります。軍への入隊希望者の中にもスラム出身者は少なくありませんでした。軍事国家となったエルステで軍に入れば、一定の生活は保障されますから」

「急速な発展の闇つてやつだな。あんな田舎の小国が十年も経たず大帝国になったんだから当然だろうぜ」

「そこは色々あつたんじやない？ あとそれ外で絶対言わないでよ。万が一帝国兵に聞かれると絶対喧嘩売られたと思われるから」

「そんな輩はあゝ……返り討ちだぞ☆」

「このおっさんの生き方は平和主義の俺と相容れぬとわかる。」

「俺ら前帝国と一悶着あつたんで、暫く帝国との面倒は勘弁です。やめてくださいよ」
「星の島行こうと本気で考えてる男が情けない事言つてんじやねえよ。帝国の一つや二つ蹴散らしてやる気概持ちやがれ」

「無茶言うなよ……俺の旅に困難はあつても、面倒はお呼びじやないので」

「情けねえ」

うるさいよ。俺の人生の生き方は俺が決めるのだ。

「そんな主殿に悪い知らせだ」

突然後ろからシュヴァリエが嫌な事言いながら現れた。聞きたくない、心底聞きたく

ない。

「……けど聞かないと駄目だよな」

「無論」

「……何？」

「島のドックに帝国の戦艦が見える」

「Oh……」

シユヴァリエが指差す方向を見る。確かに島のドックの一つに一隻巨大な戦艦が見えた。船体に見える特徴から帝国の戦艦である事が確かにわかる。

「嘘やん……」

「まあ造船の島ですので……当然帝国も利用する事はありますが」

ユーリ君の言う通り帝国だって自国だけで船の製造、修理を行っているわけじゃないだろう。航行途中の補給や修理に立ち寄る事があっても不思議ではない。不思議ではないがしかし、だがしかしこのタイミングである。

「緊急会議を行うっ！　ユーリ君、全員食堂集めて！」

「了解しましたっ！」

そんなわけでガロンゾ到着なのだが、船から下りる前に団員全員集めて緊急会議を開く事とした。こんなん打ち合わせとかなないと、絶対なんかトラブル事が目に見えてい

る。なお今の時点でトラブルとか言う気はない、言いたくも無い。きつとまだ大丈夫。

「帝国の船……一隻だけなのかい？」

「見た所。ただ結構デカイです」

「戦艦と言うならば偶然補給に訪れたと言うところか……」

コーデリアさんの言うとおりこれは偶然だと俺も思う。だが帝国軍がガロンゾに居る事には変わりない。

「間違いなくアウギユステの騒動で俺達は帝国に目をつけられてるよなあ」

「アウギユステに居たのはあのポンメルンです。あの男なら情報は既に広く帝国で共有されているでしょう。悔しいですが、帝国の軍人として優秀であったのは確かでしたから……」

苦々しい表情を浮かべるユーリ君。ある意味であのヒゲのポンメが原因で彼は帝国を離れた。俺にとってもジータを殺した憎い奴であるもの、あれでも多くの部下を率いるエルステ軍の将校だ。少なくともただの愚物とは言えないだろう。敵とは言え認めるべき点は彼も認めているようだ。

「かと言って船修理しないわけにいかないからな。なんとかやり過ごすぞ」

「エンゼラの修理中は目立つ行動は控えるべきでありますな」

「加入したばかりのマリーちゃん達、それにメドウ子とおっさんの存在は知られてない

だろうけど、他は面が割れてる可能性があるから特に注意してくれ」

『我等は面が割れる以前の問題だな』

露骨に星晶獣なやつ等、実際困る。どうすりゃいいんだつーの。

「……リヴァイアサン達は落ち着くまで滞在中泊まる宿から出ない事」

『致し方なしか……』

「ウチ団長に付き添って船大工と待ち合わせてるシエロはんに会うさかい、そんな時に話聞いとくわ。あんだけのごつい船や、どつちかに聞けば帝国兵の動向もちつとは探れるやろ」

「出来れば船のドックも離れてるといいけどなあ」

「なんにしてもあんま向こうと行動範囲被らん様に気いつけてや」

現状これが精一杯か。一先ず船下りて宿に入ろう。団員は暫くは宿で待機しててもらう他無いな。

「面倒になりませんように……」

「ならないと思うか相棒？」

うるせい。

■
三 夫婦漫才スツルム&ドラック ガロンゾ公演

■
団長達が帝国の戦艦に対して危機感を持っているほぼ同時刻。正しくその戦艦内で二人の男女が話しこんでいた。

「だからさあくちよつと、ほんのちよつとの間でいいの！」

「駄目だ」

「少しだけだつてばあー！」

「駄目なのは駄目だ」

子供のように騒いでいるのは、青髪のエルードランク。そして彼を冷たくあしらっているのは、赤毛のドラフスツルム。何時か団長がアウギユステで出会ったあの傭兵コンビであった。

艦内の通路で騒ぐドランク。何人かの帝国兵がその様子を見ては「またか」と言った反応を見せて通り過ぎていく。ドランクはその事を知ってか知らずか気にした様子は無く、それに対してスツルムは非常に不本意そうであった。

「いいじゃないじゃない、少しぐらい外で遊ぼうよお〜！」

そしてきつと、スツルムが一番不本意で腹立たしいのは、このドランクが駄駄をこねている理由だろう。

「補給が終了するまで艦内で待機するよう言われているんだ。そんな理由で外出出来る

か」

「それは帝国兵の人達への待機命令であつて、僕らは傭兵であつて帝国兵じゃないんだからさあ」

「帝国に雇われてる以上そつちにあわせろ」

「やだね、真面目え。駄目駄目、僕もう何日も船の中で飽きたよ……遊ぶとまでは言わないから、外食ぐらいしたいよ僕は」

「我慢しろ馬鹿」

実際に彼女達は数日間戦艦内で待機し続けている。特にその間やる事は無く、ハツキリ言つて暇であつた。しかしそこは傭兵を生業にする者、スツルムはその時間を耐える事を苦と思う事は無い。なんであればもつと過酷な状況で耐え凌いだ事だつてあるのだ。

一方ドラंक、彼はそこまで我慢強くなかつた。当然彼とて傭兵として生き抜いて来た確かな実力があり、だからこそスツルムもコンビを組んで居るのだが今回の様なフリーの時間をどう使うかに関して二人は過ごし方で衝突する事がある。

「そもそも僕達やる事ある？ 艦の補給も整備も帝国兵にガロンゾの男衆がやつちやうじゃない？」

「だとしても私達が遊んでいい理由になるか」

「許可貰おうよお。大丈夫だって、一日ぐらい平気だってばあ……」

「くどく」

けんもほろろ、スツルムの態度も意志も変わる事無くドラंकはガツクリと項垂れるばかりであった。

(んもう、いやだなあ……スツルム殿ってほんと真面目だもん。少しはガス抜きしないと僕まいつちやうよ)

内心勝手な事を言うドラंकであるが、それでもスツルムが良しとしない以上それに従う程度には弁えているようだ。しかしこれ以上駄駄をこねてはまた尻を刺されるのは確実だろうと諦めようと思ったのであるが――。

「んんに居たか」

不意に聞きなれた声に呼びかけられた。声の主を見てふざけた様子を崩していなかったドラंकも僅かに背を正した。にやけた表情がそのままなのは流石と言うべきであろうか。

「どうかしましたか」

スツルムが真剣な様子で話す。相手は彼女達のクライアント、漆黒の鎧に身を包んだ黒騎士であった。

「……場所を変える」

「了解です」

辺りに帝国兵が行き来している事を見て黒騎士は軽く首を振って使われていない倉庫を示した。何かを察したスツルムは今は何も聞かずただ黒騎士の後を追った。

倉庫の中に誰も居ない事を確認してから入る様子も見られる事は無く、三人は中へと入り込む。

「それで、何か？」

「すまんが急用だ」

「何々、もしかしてやばめな感じですか？」

騎士の僅かに焦りを含んだ言い方にドラランクが反応した。

「……『人形』が船から消えた」

「ワオ」

そして返ってきた答えを聞いてドラランクはかなり驚いた様子で一言のみ発した。スツルムもまた表情を強張らせた。

「消えた、と言うのは……まさか侵入者が？」

「いや、正確には街に出て行った、らしい」

「らしいと言うと？」

「これを見ろ」

騎士は一枚紙を取り出し二人へと差し出した。そこには拙い文字で「お腹すいた、いい匂いしたから食べに行きます」とだけ書かれていた。その内容に二人は少し肩の力が抜けた。しかし黒騎士の方はと言うと、今にもその紙を引き裂かんばかりの怒気を発していた。

「人形の奴、前の事で味を占めたようだ……」

「前のつて言う……ああ、ルーマシーでしたっけ？」

「ジータのやつ等か……」

この場にいない星晶戦隊（以下略）の団長であるが、ここでまたあのジータが関係する事柄が起きる。きつと今頃悪寒に襲われているだろう。

「きつく躡けたつもりだがあの人形め……！ ルーマシーでの一件以来勝手な行動が目立つっ！」

「ジータから変な影響を受けたようですね……」

「まったくだ……」

「前部屋から勝手に逃げだしたんでしたっけ？」

「ご丁寧に鍵を開けてな……外側からしか解錠できないはずの鍵を！ いつの間にあんな技術身に着けたんだあいつは！」

「ジータが教えたんじゃないですかね？」

「あの小娘があ……っ!」

黒騎士にとつてジータとその“人形”との出会いは、非常に悪い影響が残つたらしい。兜の中から歯ぎしりが聞こえてくるほどに怒っている。

「第一兵も何をしていたのか、案山子か何かかアイツらはっ!! 小さな子供とは言え船から居なくなつたのを誰一人気付いてないと言うのはどう言う事だっ!」

「まあまあ黒騎士殿、声抑えて抑えて」

怒りのあまり声が大きくなりだした黒騎士を諫めるドラंक。同時に「気が付かなかつたのはあなたも……」と内心想いつつ流石にそれは口に出さない。

「ようは……僕らにあの子の搜索をお願いしたいってわけですか?」

「そう言う事だ。文面から満足したら帰つては来るだろうが、あれを一人放つておくわけにもいかん。本来なら私が行くべきなのだが、少し艦長と今後について決めておきたい事がある。立場上あまり後回しに出来ん」

「そりやそうか、何ならこの船どころか帝国本国でも偉いんだからやる事盛り沢山、立場つて良し悪しですね」

「うるさい、ドラंक」

「いつてえっ!」

調子が戻りだしたドラंकを鬱陶しく思ったのか、スツルムはやおら剣を引き抜き自

然な動作でドラランクの尻を突き刺した。尻を押さえて飛び跳ねるドラランクを無視しスツルムは黒騎士と話を続けた。

「兵達を捜索には出さないのですか？ 子供とは言え彼女は……」

「ここはルーマシーの様に人気のない島でも無ければ、アウギユステの様に広い島の一人で溢れ返る島じゃない。小さくかつ人口が密集するガロンゾだ。更に船大工の職人衆は仕事上中立だが我々帝国を敵視する者も少ないとも言えん。帝国軍の兵が大人数動いては要らぬ衝突を起こす可能性がある」

それもそうかとスツルムは納得した。島に立ち寄った軍人がガロンゾの商業地区を出歩く事自体は珍しい事も無いが、スツルム達を雇ったのは黒騎士——エルステ帝国である。

傷ついた船を直し、旅を見送るこのガロンゾと言う島の特性から、例えエルステ帝国の船でもガロンゾの職人達は黙々と仕事をこなす。それでも侵略行為を堂々行うエルステと言う国に対して不快感を持つ者は多いだろう。そんなエルステの兵達が大勢ガロンゾ島内で捜索活動を行えば、大なり小なりの衝突が予想された。帝国としても繋がりを持つていたい造船の島との衝突は避けたいのが本音である。

「そう言う事でしたら直ぐに」

「ああ、私も手が空き次第探しに向かう」

「しかしお忙しいのでは？」

「立場があるとは言え私はずっと動かんわけにはいかんだろう。さつきはああ言ったが、この船も無能ばかりではない。後の仕事を任せざるぐらいの人員はいる」

本人がそう言うならこれ以上雇われの身である自分が口を出すことは無い。スツルムはただ領き黒騎士から受けた依頼を実行するのみである。

「狭い島とは言え入り組んだ島だ。人形の身体で隠れられると見つけにくい」

「確かに……ひとまず“子供”の搜索と言う形で探っておきます」

「くれぐれも頼んだ。……まったく、あいつはどれ程言い付ければ……あんな女の影響など……碌な事にならん……」

倉庫から出ると黒騎士は何かブツブツと呟きながら去って行った。その疲れた後ろ姿をスツルムは気の毒そうに見送る。

「あれがジータと関わった者の背中か……」

「何時かの団長君と同じ空気出てるよね」

「あいつか……」

THE・全空一ジータに振り回される男。アウギユステで出会ったあの少年の姿を思い出す二人。宿の窓辺でため息を吐き悩んでいた苦労性の権化の様な少年を思い浮かべると、確かに今の黒騎士と同じ――。

「いや、あいつの方がなんか辛そうだったな」

「確かに」

抱えたストレス量も全空一かも知れない少年を思い、哀れに思った二人であった。

■ 四 船を直すなら、なるべく安く、お手軽に済ませたいと思うのであります

■ 帝国の存在に胃痛を感じ、更に謎の悪寒も感じた俺であるが、ともかくガロンゾまで来た目的であるエンゼラの修理を終わらせなければならぬ。団員の殆どは宿に行かせて、俺とカルテイラさん、それと操舵担当のセレストの三人でシエロさんと合流する。

「お待ちしております」

集合場所に居たシエロさんは笑顔で俺達を出迎えた。

以前カリオスト口の居た遺跡調査を終えた後、シエロさんには依頼達成の報告ついでにガロンゾでの事を話し合ったのだが、その時船大工や修理中の宿の手配は任せて欲しいと改めて言われた。ガロンゾが初めての俺は、正直どの大工が良い大工かは俺もわからないのでその辺は任すことにしていたのだ。

「どうも、早速なんですが大工の手配ってどうなってます?」

「そちらに関しては既に終えております。腕の良い方を紹介いたしますね」

「そりや頼もしいや」

「エンゼラの状況は既に話しておりますので、細かい調整は直接会ってからにしましょう」

シエロさんが大工に合わせてくれると言う事で、その船大工が待つ工房へと付いて行く。道中島のドックからは騎空艇が出入りしている。他の島では見られないその様子から、この島全体が騎空艇の造船から修理までを請け負っている事がよくわかる。

そんなドックの中で一際存在感を放つのは島中央にある巨大なドックであった。単純に「でかいな」と思っていたのだがシエロさんの向かう方向がそのドックである事に気付き少し驚く。

「カルテイラさん、あのでかいドックって」

「あれか？ あれはガロンゾの中央船渠やで。クレーン群に並んでガロンゾの象徴の一つやな」

「流石知ってますね」

「うちは何度も商談で来た事あるでな」

「す、すごい……でかいね、団長……」

今船は入って無いが、エンゼラよりもはるかに大きな騎空艇でもすつぽり入る大きさ、セレストもその規模に驚いている。だがまさかあそこで世話になるのだろうか。そ

の事に関して聞く間もなくシエロさんはスタスタとその中央船渠の傍にある工房でと入って行った。こうなると取り合えず付いて行くしかない。

「いらつしや……ああ、よろず屋さん！」

「どうもくお約束していたお客様を連れてきました〜」

「あ、なるほど。それじゃあ少しお待ちください、直ぐ親方呼んできますんで！」

工房で忙しく働くヒューマンの青年がシエロさんに気付くと急ぎ奥へと走って行った。二人の会話を聞く限りどうやら俺達の事もある程度話してあるようだ。程なくして奥から年配のドラフの男が一人のつそりと現れた。

「待つてたよよろず屋。そっちが今回の？」

「ええそうです。団長さん、こちらが今回エンゼラの修理等を全て請け負ってくれる親方さんですよ〜」

「どうも、今回は宜しくお願い致します」

手を差し出すとドラフの親方さんもその大きな手で握り返してくれる。船大工らしいゴツゴツと固くそれでいて繊細さを感じる手だった。

「こちらこそよろしく。大変だったそうだな、よろず屋から事情はあらかた聞いている。竜骨までやられたとは災難だったな」

「いやまったく……」

「だがガロンゾに來たならもう心配いらねえ。バツチリ直してやるからな」

親方は俺の肩を両手でガツツリ掴み、その燃えるような瞳を向けながら話す。自らの仕事への自信と信念が言葉でなく、その瞳で感じられた。

「はーシエロはんの紹介つて言うからもしかしてつて思うたけど、やつぱあんさんやつたんか」

「おつと本当にカルテイラもいたのか？ カルテシスターズが揃うなんて久しぶりじゃねえのか？」

「やめーやその言い方！ いつの話しとねん！」

何やら親方さんとカルテイラさんが言いあつてゐる。喧嘩では無く久しぶりに会つた知り合いの他愛無い言いあいと言う感じだ。

「なになに、カルテイラさん知り合い？」

「さつき商談に來た事あるゆうたやろ？ そんな時の商売相手の一人がこの親方や」

「よろず屋とこいつが駆け出しの頃からの付き合いよ。今でも船のパーツやらで頼ることあるぜ」

「カルテシスターズつて？」

「二人駆け出しの時のコンビ名よ、こいつら二人は何時と一緒にであら」

「それはええから！ 自分の若い時の話他人から聞きとうないわ！」

カルティラさんが赤面しながら親方の話を止めさせようと巨体を押し返す。もっともカルティラさんの細腕ではまるで動く気配はない。

「二人の知り合いって言うなら尚更安心だ」

「おうよ、大船に乗ったつもりでない！」

「わ、私からも……お、お願いします……エンゼラはもう、私達の家だから……」

「こつちの嬢ちゃんは？」

「うちの操舵担当です」

「ほう？ いや成る程な、その事も聞いている。あんた星晶獣の操舵士なんだってな」

「せ、正確には……星晶獣の力で動かしてるから操舵士とは違うけど……」

「方法はどうかあれ船動かしてんだ。あんたもう立派な操舵士だよ」

「そ、そうかな……えへ、えへへ……」

親方に褒められセレストが赤面している。カワイイなこの野郎。

「さあ早速仕事だ！ まずは破損具合を確認してどうするか決めよう。お前等ついてこい！」

親方の声に工房に居た若い衆全員が「応！」と大きな声で答えた。

その後すぐにエンゼラへと戻り親方達は船の隅々までを見て回った。俺が考えていたよりかなり大げさな規模で彼らはエンゼラの検査を行った。問題の竜骨だけでなく、

船の内部まで調べ機関室の調子やらマストの歪みやら、ど素人の俺では口も手も出しようがないレベルだった。

調査自体はすぐに終わる。かなりの人数が動いたのであつという間だった。そんな短い時間であつても、修理するにあたつてまとめられた書類は何十枚にもなつた。その書類を見せられながら俺達は親方から修理の方針の説明を受ける。

「アウギユステで応急処置はしたつて話だが、あつちの職人もいい腕してるぜ。よくガロンゾまで持たせてくれたもんだ」

出だしはそのように始まり何処をどのようにして直すかと言う話へと移る。

とにかく竜骨に関しては無理な補強をこれ以上すると、そこから更にヒビが入りかねないのでそっくりそのまま交換と言う事になる。新品同様の状態にされていたとは言え、エンゼラ自体が中古船と言う事もある。或いは俺達が乗るようになってから出来た目に見えないヒビや劣化もあつたろう。それらが積み重なり、そしてポセイドンの生み出した魔物の襲撃がトドメとなつたわけだ。

「それで補強でなしに竜骨の交換となると、どうしても船をバラす必要がある。そうすると設備フル稼働で若い奴等総動員したとして……早くて一月かかるな」

「二月ですか……まあしかたないか」

一回船バラして戻すんだからそのぐらいはかかるだろう。むしろもつと時間かかる

とと思っていたぐらいだ。

「それで……船は修理だけって事でいいのかい？」

「あー……それなんすよねえ」

アウギユステでラカムさん達とも相談をしたが、ただ修理するだけで終わるよりも今後の目的に合わせて改修するの有りだと言うアドバイスを貰っている。それに関しては自分でも惹かれるものがある。

「どの道バラしちゃうわけだからな。やるなら派手にやっちゃうのもいいと思うぜ」

「どうすつかねえ……おススメの改修プランってありますか？」

「おススメってわけじゃねえが……この船は他の騎空艇よりもプロペラで大きな推進力を得てる。俺なら船尾のプロペラを一基追加、それに合わせてマストもとっかえて帆をデかく、それで最大速度に機動力も上がるし燃費も良くなる」

「なるほど……」

「それ以外となると内部ぐらいだな。広くしたいならついでに船体大きくしてやるぜ」

「あー……どうしよ」

おススメプランは非常に魅力的だ。確かにその改修内容は十分にありである。むしろしたいぐらいだ。だがしかし。

「それってお値段どのぐらいに……」

「値段なあ。まあただ竜骨変えるなら……このぐらいだな」

「ふむ」

パパつと親方は見積もりを紙に書き、それを見せる。これはまだ予想通り、まだ大丈夫。

「んで、改修するって言うなら……このぐらいか」

「んがっ!？」

「ここでもバーンとお値段が上がる。事前にシエロさんから借りた値段を軽く上回った。

「コーれーはー……」

「プロペラとマストに帆の^{セイル}手配と装着だからな。まあこのぐらいにはなる」

「つすよねえく……」

「幸い機材の当てはあるからな。どっちにしても工期は対して変わらねえよ」

「変わるの値段ぐらいか……カルテイラさんどう思います?」

「値段も妥当、特にこの見積もりに関して意見無いわ。あとは団長はんがどうしたいかや」

「わ、私も判断は任せる……エンゼラが良くなるなら、嬉しいし」

俺の判断かあ。困っちゃうよなあ、ここう言う判断……。

「そりゃ改修するならした方が良いだろうけどさあ」

「あ、あとね……絶対仲間は増えるから……こ、個室とか増やして置くといいと思う」

「……ふえるかなあ？」

「増えるよ、絶対」

「まあ増えるやろなあ」

二人とも同意見なのね……。いやさ、増えるのは良いのよ増えるのは。ただその増える仲間がね。最近もメドウ子と言いかリオストロと言いさあ、我が道を行く子達ばかりだしなあ……あんな面子がこれ以上増えるとか……そんなの……。

「……船広くないといかんわ」

万が一ティアマトやらカリオストロの様な奴が増えた場合、個室どころかそいつらを集める居間の様な空間が必要だ。要は娯楽室。あまり想像したくないが俺は船の改修を決めた。

「決めました。今話したプラン通りでお願いします」

「いいのかい？」

「ええ、大丈夫です」

値段に関しては払えない事は無い。前々から溜めていた返済用の金と今回修理用に前借してたものを合わせれば大丈夫だろう。普段俺に足りない思い切りは今發揮すべきた。

「あいわかった！　なら今日からその方向で動く。船の方はこっちでドックに運んでいいなっ。」

「出来るならお願いしていいですか？」

「ああかわまんぜ。それと内部の改修は後日また打ち合わせたい。団員の意見もまとめおいてくれ」

「了解しました。団員の荷物とかも降ろさないとですからね」

「頼むで、親方はん、仕事次第じゃキツチリ値切らせてもらうで？」

「はははっ！　昔はともかく今のお前相手じゃ負けちまうよ！　そうならないようにしかりやらせてもらうぜ！」

「にしししく、期待してるで」

最後にもう一度力強い握手を交わし今日は解散する。この人達なら任せても何も心配はないだろう。お値段以外の事は。

「シエロさんも今回はありがとうございます」

「いえいえ、他ならぬ団長さんの頼みですから」

「ただ借金返すのはまた先になりそうです……ポセイドンの方はどうですか？」

「前様子を見に行つた時はしっかり働いていましたよ。お客さんにも受けてる様子なので大丈夫かと」

客に受けとんのかいアイツ。アウギユステ沈めようとした褐色マツチヨの星晶獣なのに、世の中わからんな。

「最近アルバイトの方達とも打ち解けているので私も安心してますよ」

「あいつそんな打ち解けれる程社交性ありました？」

「と言うよりも、アルバイトで雇ったエルーンの三人組なんですが、その方達の方からポセイドンさんとコミュニケーションをとってくれたので。あれはよい切欠でしたねえ」

そりやまた物好きな奴らもいたもんだ。まあポセイドンが働いてくれるならそれでいい。奴の稼ぎがこちらにくるなら助かるからな。

「そう言えばシエロさん、島に来る時帝国の船が見えたんですが」

「やはり気付きましたか」

「あんなだけ派手な戦艦誰でも気が付くわ。それでシエロはんの事や、ある程度事情はしつとるんやろ？」

「えつとですな、あの帝国の戦艦ですがまた事情が複雑でして」

シエロさんにしてはめずらしく言いよどむ。聞くのが怖くなってきたなあ……。

「乗っているのは帝国でもかなりのポジションの方でして、私も一応知り合いなんですよ」

「そうなんすか……」

「団長さんとしては関わりたくないでしょうけど……団長さんですからねえ」
ねえシエロさん、それどう言う意味ですかね？」

「もつと言うならジータさんともお知り合いでして」

「う……っ!? い、胃痛が唐突につ!」

「ああ……だ、団長が……っ!」

「気の毒なやつちゃ……」

ま、またジータ……ガロンゾでも奴の影響が来るか。

「一応補給目的だそうなので、船の傍に行かなければ帝国兵と会う事はないかと」

「そうします……」

宿戻って他の奴等にも言い聞かせとかないといけないな。帝国の船が居なくなるまでは大人しくしておかないと。

「まあ団長さんは印象が地味ですので、案外気付かれないうちかもしれませんね」

「あーそれあるな、ただの一般人と思つて素通りされそうや、めっちゃ想像できる」

「た、確かに……んふふ」

あはは、好き勝手言つてる。俺泣いちゃうぞー。

■ 五 エンゼラ改修計画、そして！

「えーてなわけで、エンゼラは大々的に改修。新たな設備の追加や部屋の拡張を行うので希望を募りたいと思うのだが……」

俺がそう言ったその瞬間、宿の食堂に集まった団員全員が一斉に手を上げた。

「こう言う時だけ反応が良いのが気になるが……まず手前のティアマトから」

「ワインセラー設置ヲ」

「却下」

「オイッ!？」

それは設備の拡張に含まれません。個人的な趣味の設備です。

「イイダロ別ニ！　ワインセラー欲シインダーツ！」

「酒の保存場所は食堂にあるだろ！」

「モット広イノガイイーツ！」

「駄目っ！」

「ケチツ！　地味ツ！　変態、ロリコ……ッ!？」

言い切る前に拳骨。頭部からタンコブを生やしてティアマトはそのまま机へと突っ伏した。

「他！」

「んにゃ！」

「……はい、ラムレッダ」

あんま聞きたくない。

「団長きゅん、ワインセラーは小さな個人用もあるにゃ！」

「自分で買いなさいっ!!」

「にゃひっ!? は、はひごめんにゃさいっ！」

この酒キチ共めが……、小遣い減らしてやろうか。

「主、プレイ用の部屋を作れば気兼ねなく主もこつち側に」

「行かねーよ馬鹿野郎！」

DM星晶獣めが。部屋で勝手にやってる馬鹿野郎。

「訂正、訂正する。希望は団の活動に必要なものを優先。個人的な趣味の設備等は後で聞くから。では改めて……希望があるものー」

再度問いかけると明らかに挙手数が減っていた。お前等と言う奴は……。

「……じゃあ今度も手前から。ユーリ君」

「はっ！ 僭越ながらトレーニングルームの設置を進言いたします」

「トレーニングルームか……」

「はい！ 普段甲板でフェザー殿やB・ビー殿と組手等を行っておりますが、やはり専用の設備があると良いかと思ひまして」

「俺もそれに賛成だぜ！ 組手だけじゃなく、トレーニング器具の置けるような部屋があれば助かるからな！」

「自分も賛成であります。剣の素振りや模擬戦は室内の方が安全ですゆえ」

この提案は肉体派達からの賛同を得ていた。いいねいいね、そう言うの待ってたよ。確かに騎空団の船にある設備としておかしい設備ではない。

「ん、なら候補に入れるわ」

「ありがとうございます！」

「ほんと元氣ね君。他ある？」

「はい☆」

次に手を上げたのはまさかのカリオストロだった。最近仲間になったのに堂々と手上げるなこのおっさんは。

「何ですかおっさん？」

「カリオストロね、実験室作って欲しいなあ〜って☆」

「実験室う？」

なんだなんだ、錬金術師っぽいもの要求してきたなこいつ。

「それ団に何かメリツトがあんの？」

「この流れでメリツトなきや言わねえよ。今日話したポーションの事覚えてるな？」

「ああアレ？ なにさ、もう売りに行つたの？」

「お前が出てる間に済ませたよ」

「行動早いね。んで、どうなつたの？」

「んふふ……こくれ☆」

不敵に笑つたかと思うとカリオスト口は徐に机の上にドツシリとした袋を取り出した。中からはジャラジャラと魅力的な音がする。

「ま、まさかあんたこれ」

「これなら欲しい本買つてもお釣り来るよね☆」

マ、マジか？ こいつポーション売つてこんなに稼ぎやがったのか。

「こ、これつて一本の売値？」

「そうだよ。カリオスト口が」おねだり「したら喜んで買い取つてくれたよ☆」

それ非合法な手段じゃないよね？ ちゃんとした取り引きだったんだよね？

「まあこれでちゃんとした設備ありや更に元手も抑えて量産化できる。オレ様も欲しいもんがあるからな。出来たもんはまた売るつもりだが、売上金は当然団にも寄付してやる」

「ほ、ほーん？ あそー？ なんか悪いっすねえ」

「うふ、お世話になるんだから当然だよ☆」

「あはーははは……そうね、まあうん……じゃあ、はい候補にしとくわ」

「やったあ☆ ありがとね、団長さん！」

「……団長、あんた」

言わないでくれカルテイラさん。ただでさえ金使う事になったんだから。団長としての判断です。言わないで、わかって。

「えー……それじゃあ次は」

二つ案が出た所で次の案を聞くがここで挙手する者が居なくなる。本当に殆ど趣味のために手を上げてたのかお前達……。

「二ついいかしら」

「はいルナル先生？」

「個室はともかく、そもそもエンゼラって部屋余りがちだったじゃない。船の規模に対して団員少ないし」

「そう言われると、そうだったな」

「なら優先するのは今ある調理場とか浴室だとか団員全員が使う設備を良くするとかにした方が良くわよ。この船使ってた前の騎空団だか調査団かに合わせての設計なんだ

から、これを機にこの団に合わせた間取りにした方が良いわ。特にうち星晶獣何体もいるんだから。いくら省エネでもせまいでしょ」

「た、確かに」

「コロッサスとか主な調理担当だけど厨房せまいんじゃない？」

「ウ、ウン（・ω・）ナレチャツテタケド」

「ならアタシも！ メドウシアナも小さくなってるけど、実際あの個室せまいから息苦しいわよ」

『まあそういう話なら我もそうなる』

省エネでもある程度の巨体になつてしまうメンバーからの意見がでる。なんかお互い慣れていたせいか、特に気にしていなかったがこれは問題だ。

「トレーニングや実験目的の設備は部屋の配置とか間取り決めないとだけど、それ以外設備の追加つて話なら多目的の大部屋とかを幾つか追加して、あとから使いたい人に合わせて設備だけ導入すればいいんじゃないの？」

はえーこの絵師めっちゃ有能や無いですか。凄い真つ当な意見出してくれた。

「何ルナル先生、めっちゃ考えてるじゃん」

「まあ私模様替えとか好きだから……無駄に間取りとか考えちゃうのよね」

そんな趣味あつたんかい。だがその意見は大いに助かる。

「だったら全体的に通路や扉に間取りの拡張つてところか。他の皆もそう言う感じでしょう思う」

「いいんじゃないかしら？ まああたし達は新参だから特に意見言う気も無いけど」

「実際それで問題は無いんじゃないかな。星晶獣に合わせるといいのはいい考えだと思う」

マリーちゃんにコーデリアさんも良いだろうと言う。気絶してるティアマトは無視し、他の面々からの反対も特に問題なく賛同を得た。今この場でこれ以上の意見はもう出ないだろう。

「ではエンゼラ改修計画会議は終了」

「と、言う事は团长きゅん」

「飯食おう。腹減ったわ」

ここは宿の食堂、シエロさんに手配してもらって泊まる事になったシエロさんの経営するよろず屋系列の宿である。談話室が無いんでここで会議させてもらったが、飯も食わず部屋に戻るなんてできん。しかし広い食堂なうえに、他の客もいて賑やかなので俺達が騒いでも問題なかったのは助かった。

さて会議は比較的早く終わったが、朝から面倒な事が続いて俺も皆も腹が減った。通りがかったウェイトレスに声をかけ注文をお願いする。

「すみません、この日替わり定食一つお願いします。お前等も食いたいの頼んでけ、高いの以外な」

「ケチ臭イ奴ダ」

「うお、なんでいティアマト復活してたのかよ」

「星晶獸舐メルナ、私ハコノプレート・ランチ」

「オイラはリングゴな」

『なら我は——』

この調子で各々が好きな物を注文していく。エルーンのウエイトレスは一切聞き逃すことなくそれを伝票に書いて行く。かつてウエイトレスとして働いていたラムレッタとはえらい違いだ。こいつは伝票取る前に酒飲んで吐いてたからな。

「カリオスト口はあく、このホイップ・パンケーキお願いしま〜す☆」

「飯じゃねえのかよ」

「こう言うのがウケ良いんだよ。美少女とパンケーキだぞ」

「何時の間にそんな知識仕入れてんだが……他はいいか？ 欲しい物あれば言えよ」

「私……この、揚げチキンの盛り合わせプレート、食べてみたい」

「いい、いい。取り合えず頼め」

「……いいの？」

「いいから、注文待たせちゃう」

「じゃあ……これと、ビーフシチューも……」

「はい、ホイップ・パンケーキ、それと揚げチキンの盛り合わせプレートとビーフシチュー、以上ですね！ それでは出来上がり次第お持ちいたしますのでお待ちください！」

ウエイトレスはハキハキと答えて注文を厨房へと届けに行った。よしよし、あとは飯が来るのを待つばかり……。

「……ちよい待て、今なんか知らない声聞こえた」

「ソウカ？」

「いや記憶違いだろ？ 人間の脳にはよくあることさ」

「そのネタはもういいB・ビィ。いやマジでなんか一人人数が多い気も……そうだ最後に揚げチキン頼んだやつ誰だ？」

拭えない疑問を解決するため急ぎ確認を取る。皆が顔を見合わせ手を上げないと思っていると、俺のすぐ隣で手を上げる者が一人。

「……私が頼んだ」

「ああ、なんだお前が……おま、おまえ………君誰えっ!？」

何時の間にか俺の隣に席にも座らず立っている一人の少女がいた。滅茶苦茶驚いた

わ、ほんといつの間に現れたこの子。

「いやほんと誰だよ。君どうしたの？」

「私……？」

ねこのぬいぐるみを持った無表情の少女は首をかしげながら俺を見る。しまった、可愛いぞ。

「そう君。迷子かな？ 親御さんは」

「迷子、じゃない……」

「そうなのかい？」

「うん……私、私は……」

「どうしたのかな」

「……ぐう」

彼女が何か言う前に彼女のお腹が返事をした。それに対して特に恥じらう様子は無く、彼女はお腹を摩りながらじつと俺を見つめそして口を開く。

「おなか、すいた……」

謎の少女は腹ペコキヤラだった。

安心してから来る苦勞

一 彼女は何処へ消えた

ガロンゾはナウタ地区、人工物の多いガロンゾでも緑の並木道が残る地区である。そこをスツルムとドラランクの二人が早足で進む。武装したスツルムに魔法の道具を纏うドラランクの二人だが、あらゆる騎空艇が寄航するガロンゾでその事を気にする者は例え市街区であつても多くは無かつた。

「駄目だね、それらしい目撃情報何もないか」

「ルートのには来ている筈なんだが……」

「もう移動したかもしれないね」

二人がナウタ地区まで来たのは、傭兵である二人を雇ったクライアントである黒騎士から依頼である。姿を消した「人形」を探すように言われ、彼女達は二人島は小さくも人の多いガロンゾへと足を踏み入れた。

「黒い洋服と猫のぬいぐるみを持った少女……一度見ればわかりそうだな」

「まあ言われないと案外気がつかないもんじゃないかな。色んな種族や騎空団が来るから珍しい事もないだろうし」

あらゆる騎空団が立ち寄るガロンゾ。如何に小さな島と言えど多種多様な騎空士とその関係者が集まるためか、二人が目的とする人物の特徴を道行く人に話しても見た者は居ないと言う。

「そうなるのとドック方面に戻ったか、フェアベル市街区か」

「あの子の足だと移動できてそれが限界かな。お腹すいてるみたいだしね」

「そう言えば……あいつ金は持っていたか？」

「いんや、確か持つてないよ。黒騎士殿が『人形に金など必要ない』って言ってたし」

表情を業とらしく険しいものにして、ドラंकが声色を黒騎士のものに寄せて話す。特徴はつかんでいるが、本人からしたら不愉快なのは間違いないだろう。

「……その真似、絶対本人の前でやるなよ」

「やらないよ、僕も命が惜しいんだから」

「しかし金も無いのに、どう飯を食うつもりだったんだか」

「行き当たりばったりなのもジータちゃんの影響かな」

「本当にろくな影響がないなあいつ」

原因の一端を作った蒼空の問題児の事を怨むスツルム。

「どうする、あと数刻で夜だ。二手に分かれるか？」

「そうだね……それじゃあ一端分かれようか。僕ファバルの方行くから、スツルム殿ドック周辺お願い」

「わかった。もしかしたら自分で船に戻る場合もある。何も成果が無ければ一度船に戻れ」

「りようかい、りようかい」

効率を考え二人は反対方向へと走り出す。搜索対象が変な事に巻き込まれては、彼らだけでなく最悪帝国にまで影響が及ぶ。それ程に黒騎士の言う「人形」は重要な存在だった。

目的の「人形」——あるいは「少女」とも呼ばれる存在。それは果てして今何処にいるのか。

黒い服を着て、猫のぬいぐるみを持った少女——。

「おなか……すいた……」

「ねえ、君それ以外言えないの？」

■ 実は既にややこしき極まる騎空団に保護されていたとは、この時二人も黒騎士も思いもしなかった。

■ ニ 謎のハラペコ少女

宿の食堂で料理を注文していたら突然俺の横に立っていた少女。先程から小さな体は空腹のためにグウグウ音が鳴っている。

「えつと……君は誰かな？ 親御さんは？」

「いない……一人で来た」

「一人つて、ガロンゾの子かい？」

「……違う」

『……貴様、やはりっ!?!』

ここで突如リヴァイアサンが驚愕の声を上げた。奴はあまり声を荒げないので珍しい。

「何だよ知り合い？」

『こやつはアウギユステで本体が……いや、あの時はまだ意識もリンクしていたな。とにかくジータが私の暴走を止めた時、その小娘に我が力の一端を吸われたのだ!』

「——!!」

今度はユグドラシルまでが騒ぎだした。どうも他のマグナシックスの面々も様子がおかしい。

「オモイダシタ！　（。ω。、）バルツデモイタヨ！」

「ソウ言ワレルト、ポート・ブリーズデモ氣配ヲ感ジタヨウナ……ナカッタヨウナ」

「我等との接点はないが……そうかこの娘が」

「た、確かに……ルリアちゃんと、雰囲気似てる……ね」

「あれ……リヴァイアサン？」

『今氣付いたのか小娘が……』

「……ユグドラシル達もいる？」

驚き騒ぐマグナシックスを見て少女はキョトンとしていた。可愛いな。

いやしかし、この混沌としたマグナシックスと知り合いと言う事は極めて嫌な予感がする。彼らと知り合い、それ即ちジータとの関係が疑われる。

「にや〜……これは既に始まつてるにや」

「みたいやな。団長負の連鎖開始の合図や」

「あはっ！　わ、私達も腹を括って置いたほうがよさそ、うははっ!!」

「ガロンゾでもものんびり出来そうもないわね……ネーム書き溜めたかつたんだけど」

やめろおい！　まだトラブルと決まったわけじゃねえ！　ただの迷子の可能性だつてあるだろ！

『いやハッキリ言つとくがこいつとジータの関係はバツチリある。人違いでも無い、も

う逃げられんぞ』

「ぐああああ……っ!」

「ああ、团长殿しつかり!」

胃痛が、胃痛があ……っ!

「!」

『ユグドラシルの言う通り、こいつがここに居るといふ事はあの帝国の船には奴が……黒騎士がいる』

「黒騎士だっ!」

リヴァイアサンが言う七曜の騎士と言う単語にユーリ君がかなり驚いた様子で、思わず席から立ち上がった。

「まさかエルステ帝国の最高顧問がっ!」

「さ、最高顧問……?」

「はい、エルステ帝国は帝政ではありますが、実質的な支配者は七曜の騎士の一人、黒を司る黒騎士が治めていると……末端だった自分は直接見たこともありませんが」

「はいはい、なるほど? そんな帝国の超トップがこの子の保護者だと……」

「だが暫し待て。」

「まず……七曜の騎士ってなに?」

「知らないのかい団長？ 彼らは世界で最も力を持つ個人の集団だよ」

フィラソピラさんが教えてくれるがどうもピンと来ない。ザンクティンゼルじゃあそんな話全然聞かなかったからなあ。

「およそ個人が持つとは思えぬ力を持つ者達であります。全てが規格外であるが故に化け物」とまで言われる存在であります」

「シャルロットさんも知ってたんだ」

「リュミエール聖騎士団団長として当然であります。まあ自分も直接会った事はありませんが」

「……そういや、アウギユステでジータが緋色の何とかって騎士と戦ったとか言ってたな。割と普通とか言ってたけど」

そう言うとうとジータを知っている面々は不意に顔を背けた。マリーちゃんやメドウ子達新参メンバーはその理由がわからない様子だが。

「なんにしても、これは不味い……その黒騎士とか言う奴が保護者だと、最悪このままかち合っちゃおう」

「どうする相棒、早めに船に帰すか？」

「それしかねえよ……えつとだね、お嬢ちゃん」

「……違う」

お嬢ちゃん、と呼ぶと表情は変わっていないが気持ちムツとした感情を込めて彼女は俺を見つめた。

「私は、オルキス……こっちは、ねこのねこ」

両手でねこのぬいぐるみを抱き上げそれを見せながら自己紹介。わー偉いねー、自分で挨拶できるんだー可愛い。

「ねこのねこ……」

「まんまやな」

うるさいぞ君達、オルキスちゃんがそう言うのだからそうなんだよ。

「うんうん、オルキスちゃんかー。えっと、それでだね……オルキスちゃん、君はエルステ帝国の船に乗ってたのかな？」

「そう……」

「そうか、そうか、んー……なら申し訳ないけど船に戻らないと、そのくね？ 俺達がちよつと困つちやうと言うか」

「お待たせしましたっ！ 揚げチキンの盛り合わせプレートとビーフシチューです！」

船にお帰り、と言おうとしたらウェイトレスが登場。しかもよりにもよつてオルキスちゃんが注文してしまった料理が先に届いた。

なんでだよ、明らかに時間かかるだろ揚げチキンとかビーフシチューって！

「あ、えっとこれなんですけど」

「あれ？ お子様の席がありませんね。直ぐ椅子お持ちしますね！」

「え、あちよつと待つ」

「よつと！ お嬢ちゃん、この椅子でいいかな？」

「大丈夫……」

「はい！ それじゃあ残りの注文も出来上がり次第おもちしまーす！」

流れるようにするべき作業をして去っていきやがった。活舌もよく笑顔も素敵、なんと素晴らしいウエイトレス、何と言うウエイトレスの鑑。だがそのバイタリテイ今いら
ない。

「あのねオルキスちゃん、席にまでついてほんと悪いんだけど船に戻ってほしいんだが

……」

「……」

「あの……」

「……食べちゃ、駄目？」

ん、ん、つう、ー……っ!!

「お兄さん幾らでもたべさせちゃうぞーっ！ おかわりも可！」

「やった……」

「オイ、意志弱スギルゾ」

うるさい、料理来ちやつたんだからもうしようがないでしょ！ お腹すいてるんだから食べさせないと可哀そうじゃん！

「飯食つてから帰そうが、今すぐ帰そうがもうかわんないからいいんだ」

「相棒ちよろすぎるぜ」

「成る程、団長が可愛いのに甘いつてこういう事」

「確かにカリオストロの時とは明らかに反応ちがうねー」

やかましいトレジャーハンターコンビ。お前達このつぶらな瞳が裏切れると言うのか？ 飯を食わず帰れと言えるのか？ いや、言えない。

「どうしてオレ様の時がそう言う反応じゃねーんだ……っ！」

「……なんか面白くない！」

そしてなんちやつて美少女とメドウ子が荒れてる。

「どう考えてもオレ様の方が可愛いだろー！」

「カ、カリオストロさん、そんな子供相手に張り合わなくても……それにオルキスちゃんのことん可愛いらしいです」

「別に可愛くないとは言わねーよ。けどな……あいつの反応が気に入らねえ！ あれはオレ様との初対面であるべき反応だろうがっ!!」

「養殖と天然物の違いじゃねーのか？」

「んだとこのトカゲ!？」

「オイラはトカゲじゃねーぜ」

「カリオストロさん、やめっ!？」 とことん落ち着いてえ〜!」

「B・ビイも余計な事を言うのを辞めたまえ」

「へへ、わりい」

なんかカリオストロとB・ビイが言い合ってるし、ブリジールさんが必死にカリオストロを抑えてる。B・ビイはコーディアさんに怒られてら。

「お前も飯食っていいなんて言われたからって残るなっ! 子供なんだからちった警戒心つてもんを持ちやがれ!」

「駄目だった……………」

「駄目じゃないよー。ちよつとおっさーん、オルキスちゃんイジメないで下さいよー」

「こ、こんの野郎……………実験台にしてやろうか……………! 第一帝国もなんだってこんな小娘戦艦に乗せて……………あん?」

今にも嘔みついて来そうなおっさんだったが、不意に動きを止めて何を思ってたかオルキスちゃんをじつと見続ける。絵面だけなら美少女二人が見つめ合っているのだが……………。

「こいつ……」

「どしたんすか？」

「……いや、なんでもねえ」

するとおっさんは先程までの剣幕が嘘の様に大人しくなり席に着いた。それでも依然としてオルキスちゃんの気にしてる様子。

「ちよつと馬鹿人間！　なんだってそんな人間の子供に甘いのよ！　アタシには厳しいくせにー！」

おっさんが大人しくなったと思つたら、今度はこつちのおチビが突っかかってきやがった。

「これ、メドウ子。騒がないの」

「うるさい！　あんたアタシと最初会つた時も生意気だしなんかズルいじゃない！　アタシとその能面女と何が違うのよ！」

「ズルいつてなんだ、ズルいつて……能面とか人に向かって失礼だぞお前。それに初対面の頃は変わらんかつたら」

「全然違うわよ！」

吠えるな吠えるな、幾ら賑やかな食堂でも限度があるんだから。

「……はむ、はむ……この子も、星晶獣？」

オルキスちゃんが揚げチキンをモグモグしながらメドウ子を見て聞いて来た。お行儀悪いから食べながら喋っちゃだめだよ。……しかしまあ動じないなこの子。

「へー馬鹿人間と違ってアタシの凄さに気が付いたのかしら？　そう！　アタシは誇り高き星しよ」

「お待たせしましたー！　お料理お持ち致しましたー！」

「ちよつとつ!？」

メドウ子が名乗り口上を言い終える前に、料理を乗せたワゴンカーを引いてウエイトレスが現れた。このウエイトレス元気が良いと思つたが、もしかして単純に空気読まないだけなんじゃないだろうか。

「席付けメドウ子、料理冷めちやうし後で話聞いてやるから」

「うぬぬく……お、覚えときなさい、この愚かな人間！」

「はむはむ、はむはむ……」

「聞きなさいよつ!？」

オルキスちゃんのご飯に夢中だった。

メドウ子はプリプリしてるが無視、俺は立ち上がりコーデリアさんのそばに移動する。

「コーデリアさん」

「うむ、この後の事だろう?」

「ええ。ああ言いました。が帝国の子です。飯食って満足して自分で戻ってくれるなら良いですが……妙な事にならなければいいけど」

「まったくだよ。それに団長、あの子リヴァイアサンの力を吸い取ったと言ったが」
「ええ、まあ普通の子供って事は無いでしょう」

カリオストロも何か気にしていた様子だった。落ち着いた頃にでも聞くとして、今は余り関わらない方が得策だろう。

「……お兄さん」

「うん、なんだいオルキスちゃん?」

「おかわり……」

「あ、おかわりね……ああ、おかわりおかわり……えっ!? もう食ったの!?!」

確か揚げチキンとビーフシチューだけでも子供には多いと思っていたのだが。驚いて皿を見ると、食べ残し一つなくまるで何も入っていなかったような皿がそこにあった。

「さつき……おかわり可、って」

「あ、うん……言ったよ。言ったけど、君食べるね……」

「食べ盛り……じゅるり……」

「そう、それは……いい事だね」

確かに一度お代わり可と宣言した以上食べさせねばなるまい。だが彼女にメニューを手渡しつつ、俺は猛烈に嫌な予感がしていたのであった。

■ 三 蒼空を渡るため

中央船渠、エンゼラにて――。

「親方っ！ 船体の固定完了しましたーっ！」

「よーしっ！ 明日積み荷を降ろしたら直ぐにバラす！ 準備だけはしておけよっ！」

「了解しましたっ！」

中央船渠内に固定された騎空艇エンゼラ。「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y」の船。ザンクティンゼルから始まる旅を経て、今暫しその体を休めるためガロンゾへとたどり着く。

「しかし良い船ですね親方。中古とは思えないですよ」

「ああ、そうだな」

「よろず屋さんよほど入念にレストアさせてたんですね」

「馬鹿、それだけじゃねえよ」

親方は固定されたエンゼラの船体をその手で撫でる。

「あの団長さん達はな、決して丁寧な使い方とは言えねえがそれでも船を仲間と思ってるんだよ。それに船が応えてるんだ」

エンゼラは飛べる。その役割を終えるにはまだ早すぎる。

「コイツの意志が伝わるようだ。まだ自分は飛べるとな」

「親方は船と喋れるんですね」

「お前もそれぐらい分かる様になりな。でなけりや一生半人前だ」

「きつついなあ……何時になるんだか」

「お前が船が好きならそう遠くねえだろうよ。さあ今日はあがれ、夜のやつ等も来る頃だ」

ガロンゾの工場やドックから明かりが消える事はない。彼らは一日中船を造り直し続ける。朝から働いた者は帰路につき、それに変わり夜別の職人達が仕事につく。

「なにせ星晶獣が乗る船だ。生半可な改修じゃいけねえ、明日から忙しいぞ」

「親方は？」

「俺はやる事残ってた。あともう少し船を見とく」

「そう言つてまた工場に泊まる気でしょ？　ほんと親方は船が好きなんだものな。家に帰らないって奥さんが愚痴るわけだよ」

「いいから帰れつての!」

「ひやつ!?! お、おさきでーす!」

金槌を振り上げると若い船大工は荷物を掴み取つて飛び出していった。それを見送つてから親方はエンゼラの外装を見て周り甲板へと上がる。船内にはまだ団長達の私物が残るため入る事はない。

(ここ)の床かなり磨耗してるな。だが古くない、あの団長達が使い出してから出来たもんだ)

床、手すり、あらゆる場所には人が生活した後が残る。それを彼はじっくりと観察する。中には人がつけれない様な不思議な傷や痕跡がある。

(這つた様な跡……星晶獸か、なんかデカイのが居るとか言つていたな。こつちのだけえ足跡は鎧か何かか? 床材が重量に負けて凹んでやがる)

この船の乗員が如何に特殊であるか、それを彼は直接見る事無く生活の後だけで感じ取つていた。

(なるほど、これは益々手が抜けねえ。使い始めて一年も経つてねえのにこの状態だ……確かに星晶獸が何体も居るんじや通常より劣化も早くなる。船体を広くと言つたが、どのみち星晶獸に合わせて拡張する必要があつたな)

団長達が仲間と話して提案されていたコロッサス等の星晶獸に合わせてのエンゼラ

拡張計画。長年船に関わってきた男は、それを船を見ただけで同様の答えを導き出す。(可能なら床材やなんかも取り替えてえが、値段の事も相談しねえといけねえし、まず床材をどうするか……思つたより大きな作業になるかも知れねえなこりや)

不可能な作業ではない、だがその作業をどう進めるべきか。彼は悩んだ。職人として下手な仕事は出来ない、この船をどう再び空へと飛ばしてやるかが重要だった。

「本当に良い船だね」

不意に船を繋ぐ連絡通路から歳若い少年の声が聞こえた。声から自身の弟子では無いと直ぐに気付く部外者と思つた彼は身を乗り出して叫ぶ。

「おい誰だ！　ここは関係者以外立ち入り禁止だぞ！」

「ああ、申し訳ない。余りに良い船だったから」

「いいから船から離れ……なんだよ、お前だったのか坊主」

眼下の通路に居たのは三つ編みに編んだ白髪を揺らし、装飾を施されたオールを持つ一人の少年。

親方はこの少年の姿を知っていた。彼は以前このガロンゾに立ち寄つた一隻の船、蒼の飛竜を模したその船を直すのに協力した事がある。その時にこの少年とその船を直し知り合つたのだ。

知り合いとわかり親方は甲板から少年の下へと降りて行く。

「最近見ないと思ったが、何処に行つてたんだ？」

「僕は島と契約しているわけじゃないからね、色々と巡つてたのさ。ところで親方さん、お願いがあるのだけれど」

「なんだ、お前さんの頼みなら聞いてやるよ」

「ありがとう。それでこれを見て欲しいんだけど」

「うん？ ……おい、おいすげえなこりや」

そう言う少年は親方に一本の小さな木材を差し出した。それを親方が受け取りマジマジと見て驚く。

「とんでもなく硬い、だが極めてしなやかだ。加工しやすい上に丈夫、こんな良い木材どうした」

「これは『純粹』な物じゃないんだけどね……ただそれに近しい物さ。この船の修理に使えるんじゃないかな」

「ああこりやあ申し分ねえ。だが量が要る。騎空艇一隻造るぐらいは必要かも知れねえ、そんな当てがあるのか」

「まあね、本人達はよくわかつてないけど手に入る手段を既に持つてるのさ」

「そりやどういう意味だ？」

「なに、明日にはわかるよ」

少年の言っている意味がわからず親方は首をかしげ、少年は静かに微笑んだ。

■ 四 一人漫談ドラंक

もう日が傾き少しすれば夜が訪れる。そんな時間ドラंकは疲れた様子で市街区を歩いていった。

（なんかそれっぽい子を見たって情報があつたけど……それつきり。何処行つたのさもし）

数時間前、外で遊びたいと駄々をこねたドラंक。念願の外であるが遊ぶ事も食事をする事も許されない緊急任務である。せつかく尻を刺してくる相棒も別行動だと言うのに、自由に行動する事が出来ずつかれきっていた。

（もう戻ろうかな。スツルム殿も船に戻つてる頃だろうし、僕一人彷徨つても意味ないよねこれ）

任務を放棄するわけではないが、これ以上市街を歩き回つても成果らしい成果は得られないと考え出したドラंक。一先ずスツルム、また黒騎士とも合流し大人しく少女——オルキスの帰還を待つか、再度捜索に出るべきと考えその足を停留所へと向けた。

（あつといい匂い。すきっ腹にこれはきついね）

市街の中は賑わい活気で溢れる。酒屋に食堂が立ち並び仕事を終えた職人達に騎空士達の飲んで騒ぐ声に混じり、出来立ての料理の臭いがドラランクの鼻をくすぐり、空っぽの胃袋を撫でた。

(こつそり食べようかな、けどバレるとまずいよね。お尻5回は刺されるよきつと)

恨めしそうに店員の掛け声と共に運ばれる出来立ての料理を見ては歩くドラランク。だんだん足取りも重くなる。せめて直ぐ食べれるパンの一つでも買って食べようかと思ひある食堂へと視線をむける。

(うっはあ！ すっごいなあれ)

窓から見たのは、山のように積み重なった皿。優に10人前は超えているだろう。いや、皿その物でもかい。最早どれ程の量をその腹に収めた想像も付かない。興味がわいたドラランクはその大食漢を一目見てやろうと宿に併設されていたその食堂へと入り覗き込んだ。

(さてどんな人かな。ドラフかそれともヒューマンか……ハーヴィンだったらもう見た目ボールみたいになってんじゃないかな)

ニマニマと笑みを浮かべ目当ての人物を探す。ドラランクだけでなく食堂の客もその圧倒的食欲に歓声すら上げていた。客達が取り囲んでいるのがあの皿の山を築いた主

であろう。人を掻き分けドリンクがその主を覗き込んだ。

(はてさて、どーな―た―……)

「おかわり……」

「まだ食うのっ!? オルキスちゃん、もう手持ち厳しいんだけどっ!?」

「まだ……いける。……ぐっ」

「静かな中にある確かな自信!? だけど俺の財布に自信がないんだよ!? これ以上は

……ぐあっ!?」

「ジミー殿!」

「ま、まただっ! な、何でだ、体が……うごかなぎぎぎ!?」

「お姉さん、これ……追加……」

「はーい!」

「ま、待てウエイトレスさん、キャンセル、キャンセル……ふぎいっ!」

「オイ、才前ラ財布ノ中今イクラダ……」

「まあ払え無い事はないが……これは……」

『なぜか我らも追加注文を止めれんな……』

「あの体の何処に入ってるのよ、可笑しいでしょこれ……」

全く状況が飲み込めない展開、そして凄まじく知った顔が揃っていた。

「おい、兄ちゃん平気か？ いきなりこけたけど」

「だ、大丈夫です。すみませんね、ちよつと驚いて」

想像もなかった光景を目の当たりにしたドラंकはその場でズッコケ、果たしてどうしたものか非常に悩むのだった。

■ 五 皿の枚数一枚が二枚、二枚が四枚、四枚が八枚……

積み重なる皿の枚数が20枚を越えた時、不味いとは思ったのだ。これはきつと不味いパターンだと。

しかし極めて奇妙な事に俺が彼女を制止しようとする、何故か俺の体が動かなくなつた。他の団員に止めてもらおうとしたが、何故かそれも不可能だった。そんな俺達の身に起きた異変お構いなしに、そして無慈悲にオルキスちゃんは追加を注文し続けた。

その我が道を行く姿に思わず大空の暴れん坊、幼馴染みTHEジータを思い出してしまった。

「ジミー殿しつかり!？」

「やつぱりだ……体がまったく動かない……っ!」

「お姉さん、これも……追加」

「かしこまりー!」

「てめえウエイトレス!? 状況わかってオーダー受けてんのかっ!」

オルキスちゃんの注文を阻止しようとして体が硬直、シャルロットさんが心配してくれるが未だ体は動かずオルキスちゃんは注文してウエイトレスはオーダーをとる。

「……ケブツ」

「あつ! 今ゲツプ、ゲツプしたねオルキスちゃん!? いい加減お腹膨れたでしょ!」

「……もうちよい、いけそう」

「行かなくていいよっ! やめよう、お腹破裂しちゃうから!」

「……破裂はいやだ」

「ね、よし! やめ、終了! ウエイトレスさん、今のキャンセル……や、やった言えた、止めれるぞっ! 聞いているウエイトレスさん、中止ストップ閉廷解散終わりっ!!」

「えー?」

「えーじゃねえよっ! あんたほんとなんなのっ!」

「このウエイトレスが悪魔に見えてきた。」

「会計いくらあつ!」

「かしこまりました。ではお会計12万8670ルピになります!」

「ズガボガンツ!？」

「ああ、団長が意味不明な叫びをあげて倒れたにやつ!？」

「そりやぶつ倒れるわよ……」

じゅ、じゅじゅじゅじゅにま……はっせんろっぴやぴやほげほげ……。

お、俺達団員だけで3万と少し。人数もいるからそれはしようがない。だがオルキスちゃんはたった一人で9万ルピ近く食ったってのか……。

「この子との会計分けて払います！ そっちの方領収書は【エルステ帝国黒騎士】でお願いしますー！」

「かしこまりました！」

「こいつエルステ最高顧問当てに領収書書かせよった」

「払わせる気なんだね団長」

「払わせる気なんだ……」

うるさい、払わせるんだよ何が何でも！

「あ、ところでお客様って【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z O Y】の方達ですよね？」

「そうだけどなにさ……」

俺が星晶戦隊（以下略）である事を肯定すると、周りに集まっていたギャラリーの人

間違までもぎわついた。

「マジか、あれが噂の」

「どおりで……」

「【ジータと愉快な仲間たち団】とも協力関係とかいう……」

「あの地味な少年が例の……」

「ああ、例の」

「ああ、あの例の」

「例のやつ」

「例の団長」

「例の地味」

あんたらその「例の」ってなんだコラ、何となく予想着くのが腹立つぞコラ。

「やつぱり！ オーナー、えつとシエロカルテさんから聞いております。こちらのお値段借金の方に追加する事もできますのでご安心ください！」

「出来ないよ!!? 何を安心しろってんだ！ 今払うわ畜生この野郎馬鹿野郎っ！」

借金に入るんじゃ今払おうが後払おうが同じじゃい。

「ねえお嬢ちゃん、これだけの量食べたお客様が初めてだから名前聞いて良い？ 記念

で店に残すから」

「……オルキス、ケップ……」

「オルキスですね、じゃあ後で簡単だけど表彰もあげるから！」

「やった……」

勝手にウエイトレスが話を続けてる。なんなんだよこのウエイトレスは、グイグイ来すぎだろ何者だよ一体。シエロさんの店人ってこんななの？ シエロさんの影響なのこれ？

「それとこちら食後のドリンクサービスです。好きなお飲み物一点ご注文下さい！」

「サービスね……はは」

9万近くの出費が無ければ素直に喜べたよ……。

「あーもーあーもー……とんだ出費だよ。絶対払わせるけど」

「お兄さん……ごちそうさまでした」

相変わらずの無表情、だけど気持ちが強くと伝わる。そして可愛いんだよなあ……可愛い無罪。

その後俺達はサービスドリンクを飲みながらなんとか落ち着きを取り戻す。

「で、この痛い出費はどうする気や団長？ 本気で帝国に払わせるんか？」

そこだよカルテイヤさん。流石に奢るほどの値段じゃないんだよ。

「普通なら保護者に払ってもらおうのが筋ってもんだ」

「ただ相手帝国のお偉いさんやろ」

「あの戦艦に乗り込んで黒騎士に会う事は不可能でしょう。我々はアウギユステの一件で間違いなく手配されていますから船に近づくのすら困難です」

「ユーリの言う事は尤もだが、それ以前にこの子の食べた食事代を払わせるために会えるとは到底思えないよ」

ユーリ君とコーデリアさんの言う通りだ。正論過ぎてこれ以上何も言えん。

「どーすつかなあ……最悪乗り込んでもいいんだけど」

「この団長金払わずのために帝国戦艦に乗り込む事を考えてる……」

「団長って見た目地味で大人しそうなくせに、割と発想クレイジーだね」

うるさいよトレジャーハンターズ。金の問題なきや誰が好きでかかわるかよ。

そして金をどうするか話し合っていると袖をクイクイとオルキスちゃんに引かれる。

「お金、払えない……?」

「いやいや、そこは大丈夫だよ。オルキスちゃんは気にしなくていいから」

「……(ぐ)めんなさい」

今更ながら好き放題食った事に罪悪感を覚えたのだろうか。オルキスちゃんは俯いてしまった。うん、謝れるのは良い事だぞ。

「八分目で止めれなかった……」

「飯にあの量だと八分目でも相当な量な件」

「お金、無いけど……私宝物ならある……」

お宝、とオルキスちゃんが言うのとマリーちゃんが「お宝っ!？」と食い気味に反応していた。お宝大好きか。

「宝物?」

「……えつとね、綺麗な石とか枝とか、あとドングリとかそれと」

「うん、オルキスちゃん。それは大事にしておこうか」

まあ確かにお宝だわ。この子ぐらいの歳の子供はそう言うの集めるからな。コラそこ、マリーちゃん、露骨にがっかりしないの。

「あとオルキスちゃん、ドングリは放っておくと虫沸くから気をつけなさい」

「うん……同じ事言われた」

「同じ事? 誰にだい」

「……ジータ」

おつふう。極力話題に出さなかつたやつふう。

「ジータに言われたの?」

「ルーマシー群島で一緒に遊んで、ドングリとか枝とか集めた……楽しかった」

「——」

ユグドラシルがオルキスちゃんの話は間違いないと言う。二人は以前ルーマシー群島で偶然出会い、そのまま意気投合。ルリアちゃんも交えてルーマシーの大自然を満喫してたとかなんとか。

「昔ジータがドングリ集めて虫湧かせて怒った時あったけど……人に助言できる程度に経験が活かされたと思うべきか」

「しかしあらゆる場面で登場しますねジータ殿は」

「あたし会った事ないけど、なんか面倒そうなのは伝わるわ」

ユーリ君の言う通りあいつってあらゆる所で何か活躍しては、俺にトラブルが巡ってきている気がする。そしてマリーちゃん、よくわかってますね。その通りだぞー。

「ジータやルリアにね、色々教えてもらった……楽しい遊びとか、美味しい料理とか……」
「あいつも色々知ってはいるからな。特に遊びとかに關しては」

「それに……大切な仲間と、大好きなお兄ちゃんの話」

「んっぐう……っ!!」

あの小娘、そんな紹介を。

「……ジータの言ってたお兄ちゃん……お兄さんの事だったんだね」

「ジミー殿は本当にジータ殿に好かれてるでありますな」

「彼女懐きすぎて天変地異起こすけどね」

「また腕相撲のリベンジをしたいぜ！」

やめて、なんか恥ずかしいからやめてみんな……。

「聞キマシタ奥様、大好キナ、デスツテヨ」

「相棒隅に置けねえなあ」

「黙れい！」

「こいつらが言うのと特に腹立つなこの（笑）共。今はオルキスちゃんの話聞いてんだよ。

「あー……うん、まあそうだったか」

「うん、初めて友達出来た……楽しかった」

「だろうね。居れば楽しいし助かるし頼もしいからな友人つてのは」

「ジータ達と……初めて自分以外の誰かと遊んだ……一人より凄く楽しかった」

「アイツ一人いれば友達百人分やかましいしな」

「……今日も、初めてだった」

「今日？」

「こんなに沢山……誰かとお飯食べるの、初めてだった」

「……そっか、初めてか」

本気でこの子の環境が気になってきた。帝国の船に居る時点で普通じゃないがちやんと年頃の子供らしく過ごせてるのか？ 虐待とか受けてないよね、体も痩せてるし

ちやんと食べて……たな目の前で。

まあ食事に關してはともかく特殊な環境下に居る事は確かだろう。リヴァイアサンの言う通り黒騎士とか言う帝国のお偉いさんの保護下と言うなら酷い環境ではないと思いたいのだが。

「……オルキスちゃん、このあと如何するんだい？」

「……この後？」

「そう。君の船……帝国の戦艦に戻るのかい？」

質問すると彼女は黙ってしまった。ただ視線は俺の目を逸らすことはなく、何か深く考えている様子だった。

「もし帝国にいて辛いなら」

「ううん……大丈夫」

「……本当かい？」

「うん……」

平気そうではなかった。だが酷く辛そうとかそんな風でも無い。彼女なりに帝国に戻る理由があるように思えた。

「ジータにも言われた……一緒に行くこうかって。けど……私はアポロの傍にいたいから……」

「アポロ？」

「アポロは、黒騎士の……あ」

あ、つて君まさか……。

「それ黒騎士の本来？」

「……違う、けど秘密」

そうか秘密じゃしようがないな。

「うっかりちゃんやな」

「うっかりオルキスだにや」

やめろ、スルーしてあげなさい。

「君がそう言うなら止めないよ」

「……ありがとう」

「いいよ別に」

「……お兄さん」

オルキスちゃんは不意に俺の手を握る。小さな手からは確かな温もりを感じた。

「オルキスちゃん？」

「……ジータとルリアに教えてもらった。…… “よろしく” つてすると友達だつて

……」

なるほど。あの二人の事だ、俺の知らないようなオルキスちゃんの事情も知っててか
つグイグイと友達になっただろう。

そして彼女と友情を育むのはやぶさかでない。

「そうか……それじゃあよろしく、オルキスちゃん」

「……よろしく、お兄さん」

これで友達。彼女は帝国の人間、俺は騎空士。それでもよろしくしたので、俺達はお
う友達。

「馬鹿人間がデレデレしてる」

「ドストライクゾーンは10代前後ってところか……」

「やかましい!」

デレデレなんかしとらんわメドウ子! それとおっさんは何分析してんだ! いい
感じの流れだったんだから、いい感じに終わらせてくれよちくしょうめっ!!

六 ここで終われば綺麗なオチ?

飲み物も飲み終えて、オルキスは船に戻ると言った。彼らもジータの事などで話し込
んでいたの、何時の間にかもう日が沈み夜の時間となっていた。

なお黒騎士宛の領收書だがオルキスに託しても自分達の存在を知らしてしまふのと同時に、そもそも有耶無耶にされる可能性があつたため「何時か直に会つて直接請求してやる」と団長は静かに決意した。

「道は覚えてるんだね？」

「大丈夫……あつちの……違つた。そつちの方……」

「団長さん、自分とことん心配です……」

「俺もつすブリジュールさん。近くまで送らなくていいの？」

「平気……ばつちり、ぐつ……」

自信ばかりは満々にオルキスは答えてみせた。

「わからなかつたら誰か人に道を……いや、知らない人間は怖いしな……えつと、お店の人とかに道聞くんだよ？ 表歩いてる人の中には外から来たチンピラもいるから、なるべく職人さんとかガロンゾの人に聞く事。お菓子とかに釣られて付いてつちやだめだよ？ それと」

「おとんかおのれはっ!？」

「あだっ!」

過剰に心配する団長に対しカルテイラが、小粋に音を鳴らしハリセンで頭を叩き突つ込む。

「オルキスはあんたの娘ちやうで」

「だ、だつて心配になるんですよ」

「……団長のこう言う所がジータをあそこまで懐かせたんじやないかしらね」

「め、面倒見良すぎちやうよね……」

「む、むむう……」

ルナルとセレストに言われ言葉を詰まらせる団長。何か思い出の中で思い当たる事があったのだろう。

「さてオルキス、我々と出会った事だが暫くは黒騎士に言わないでくれると助かるのだがね」

「……うん、言わない」

「そうか、助かるよ」

団長に変わりコーデリアがオルキスに自分達の事を帝国軍に話さないように頼んでいる。何時かは明るみになる事かもしれないが、せめてガロンゾに居る間だけは帝国との面倒を避けたいためだ。所詮子供の口約束、しかし団長もコーデリアもオルキスは嘘をつかないだろうと信じていた。

「それじゃあ……帰る」

「ああ、また会おうね」

「……また、会える?」

「会えるともさ、俺達はもう友達だ。友達なら会って当然だろう? 立場上難しいかも知れなくても、絶対に会えるよ。ジータ達だつてそう思つてる」

団長に言われオルキスは胸が暖かくなるのを感じた。それが何故かわからなかったが、しかし決して悪い気持ちでは無かつた。

そして同時に懐かしさすら覚えた。まるで遙か昔にも感じたような、孤独ではない暖かさを。

「それに今修理中だけどそれが終つたら俺達の船にも乗せてあげるよ、楽しみは多い方が良い」

「お兄さん達の船……?」

「そう、戦艦程デカくは無いが自慢の船さ」

「……いいの?」

「ああ、約束だ。」

「約束……楽しみ、増えた……」

オルキスは歩き出す。自分が戻るべき場所へと。共にいるべき人の元へと。

それを宿の玄関で見送る団長達。団長はオルキスが人とぶつかつてコケやしないかと未だハラハラしている。そんな時不意にオルキスがふりかえり皆を見て軽く手を

振った。

「……またね」

小さな声だったがその声は皆が聞こえた。そしてオルキスは人込みの中へと消えて行った。

「なによあの子、笑えるじゃない」

メデューサが意外そうに言う。彼女だけでなく皆も意外だったろう。ずっと無表情であったオルキスが、確か今微笑みを浮かべ手を振ったのだ。

『私の力を吸った時はもつと無感情だったが……ジータ達との出会いが何かを変えたか』

「かなりラブリくな子だったなあ〜！ もつと話したかったぜえ〜」

「しかし黒騎士って奴もあれだな、星晶獣の力を制御するなんてルリアと同じ力持つ奴を保護下に置くななんて、一体どう言う関係だろうなあ。なあ相棒」

「……」

「……相棒どした？」

返事が無い団長。B・ビーが不思議に思い回り込んで見る。すると団長は静かに感涙の涙を流していた。

「めっちゃ可愛かった……」

「相棒、おめえ……」

割とマジ泣きでオルキスの「またね」に感動していた団長。

日頃のストレスが原因としても、少女の「またね」一つで膨大な癒しを得て涙を流す団長の姿に流石のB・ビイも引いた。だが彼のストレスの原因の一つがB・ビイである点を完全に棚に上げている。

その後この反応を不服に思ったカリオストロとメデューサらにからまれる団長の姿があつた。

一方で団長達と別れたオルキス。トコトコと歩いていたが突如目の前に一人の男が現れた。だがオルキスは慌てる事無くその人物の名を呼んだ。

「ドラंक……?」

「どうも、お姫様。なんちゃってね」

おどけた様子で現れたのはドラंकだった。

「やつと見つけたよ、駄目じゃないの、勝手にいなくなつてさあ」

「書置き、置いて来た……」

「あんなんじやダメに決まつてるでしょ。君の立場つて言うのもあるんだからあ」

「……ごめんなさい」

「僕よりも黒騎士殿にどう謝るか考えておいた方が良くと思うな」

「……怒ってた？」

ドラランクは顔をわざとらしく怒りの表情へと変えてみせる。

「かな〜りおかんむり」

「おう……こまった」

「困ったのはこつち。時間もこんな遅くなつて、スツルム殿にも怒られるなこりや〜」

「……うう」

「そんな顔してもだ〜め。僕も一緒に謝つてあげるから、さつて帰ろうか〜」

船に戻つてから怒られる事を想像したのか、オルキスは手に持ったねこで顔を隠して怯えた声を出した。見た目相応の仕草に和みつつドラランクは彼女をつれて戦艦へと戻つてゆく。

「それで脱走した一日、どうだったのかな？」

「……楽しかった」

「そうか、まあそれはそれで良かったね。誰かお友達でも出来たのかな〜」

「……別に」

「ふ〜ん……？ まあ取り合えず帰ろうね」

ドラランクは団長達が泊まる宿を見た。

（悪いけど……彼らがこの島にいることばかりは流石に言わないと不味いんだよね〜こ

れはさ。まあ君と出会った事は誤魔化せるから言わないで上げるよ)

一部始終を見ていたドラंकにオルキスの嘘は通じない。星晶戦隊(以下略)がこの島に居る事は黒騎士に報告せざるを得ないだろう。だがオルキスが彼らと出会っていかどうかは誤魔化しようがある。オルキス捜索中に星晶戦隊(以下略)が居る事に気が付き、その後街で彼女を保護したと言う流れであれば不自然でもないだろう。

なんであれ黒騎士の激しい雷がオルキスに落ちるのは避けられないだろう。そしてドラंकもまたスツルムにこんな時間まで報告も無く帰らなかつた事に対して嫌味を言われるに違いない。

ドラंकとオルキスの両者の足取りは重かつた。

七 サヨナラと思うじゃん？

オルキスちゃんと出会い別れた次の日の事。俺は再度エンゼラ改修に関しての打ち合わせをしに中央船渠へと向こう事になっていた。皆と話し合つた改修案は全て書面にまとめあるので、打ち合わせもスムーズに進むはずだ。

宿の部屋で待ち合わせは必要な書類と荷物をまとめ替えていたら、扉をノックする音が聞こえる。

「どなたー？」

「宿の者です、お休みの所申し訳ございません。お客様に御用があると言う方がお見えです」

「俺にですか？」

「はい、急用との事ですが」

誰であろうか？ この島で約束事があるのはシエロさんと造船の親方さんぐらいなのだが……しかも急用とは。

「この後用事で直ぐ出ないとなんですが……」

「そうですか、ですがその……」

「おい、変れ」

「え、あつ！ こ、困りますお客様!? 待合室でお待ちいただくように言っただけではありませんか！」

「いいからどけ、急務なのだ」

「ちよつと強引だね」

「しようがないだろ、状況が状況だ」

……なんか記憶にある声が二つあるな。人数は三人、一人は知らない声だ。

「帝国の者だ。出て来ないなら相応の手段で入る事になる」

うっそだろ。

「……宿の人に迷惑かけんなよ」

「それなら早く扉を開けろ。こちらにも用があるのは貴様だけだ」

「待つてろ……いま開ける」

急な訪問者の正体がわからないが、帝国を名乗る以上逃げれんし捨て置けんな。ごねてしまえば宿にも迷惑がかかる。

嫌な予感がしつつも鍵を開け恐る恐る扉をあけた。そこには狼狽える宿の従業員、そして三人の男女に一人の少女。

多分今俺は凄い嫌そうな顔してる。

「……そう言う組み合わせだったわけ？」

「いや、実はそう言う組み合わせだったんだな、これがさあ」

「別に騙す気は無かったがな」

にやけた表情のエルーンはアウギユステで出会ったドラंकさん、そして隣には赤毛のドラフのスツルムさんの二人。

「……ごめんなさい」

ねこのぬいぐるみで顔を隠し謝罪するのはもう暫く会う事も無いと思つた少女オルクスちゃん。そして俺の目の前にいるのは漆黒の鎧を着こんだ人物。

「つまり……あんたが黒騎士って人？」

「そう言う貴様は星晶戦隊（以下略）の団長だな？」

ガロンゾで一番会いたくない人に会わなくて済むかと思った次の日、何があつたか知らないが、俺は一番会いたくない人と出会った。

ちくせう。

些細な約束、大きなトラブル

■ 一 まただよ（泣）

宿の一室、ガロンゾで俺が泊まっている部屋。シエロさんが気を利かせてくれたのか、俺一人の個室である。ユーリ君が仲間になる前とかじゃあ宿で泊まる時は大抵数少ない男性団員のフェザー君とB・ビィなんかと同室だったりしたのでちよつと新鮮であった。

そして今回特に個室であつて助かっている。数分前に現れた突然の来訪者に対して比較的対応しやすいからだ。

「お茶とかいりますか？」

「いらん」

目の前に座るのは物々しい漆黒の甲冑を纏った騎士。

「あ、じゃあ僕貰おうかな、何あるの？」

「部屋の備え付けですけど紅茶とコーヒーなら」

「なら紅茶ホットに砂糖多目でお願ひね〜」

「厚かましいなこの人」

「ドラंक……」

「あ、スツルム殿っ！ ごめん、ごめんって剣は抜かないでっ!」

アウギユステで出会った愉快な二人。

「オルキスちゃんには飲み物とクツキーを上げよう」

「……ありがとう」

そして昨日出会って別れたばかりのオルキスちゃんの四人がいる。

「ちよつとちよつと、露骨な鼻唄じゃないのそれ〜?」

「うるさいですよ。俺は可愛い者の味方なのだ」

「あ、そんな事言っちゃう〜? じゃあ聞くけどうちのスツルム殿が可愛くないとでも

〜?」

「うちのつてなんだ!」

ドラंकさんが横に座るスツルムさんを指して言う。ふむん……。

「百理ある。スツルムさん、クツキーを上げます」

「ああすまん……つてお前も悪乗りするんじゃない!」

「んで、その流れで僕にもクツキーを」

「……はんっ!」

「え、鼻で笑われた!」

寝言は寝て言うものだよドラックさん。

「……いい加減話を進めたいのだが?」

「あ、ごめんなさいね。場の空気を和ませないと胃痛がするんで」

「そう構えるな。貴様等と一戦交える気など無い」

「そうは言うけど気が気じゃないんで。当然知ってるだろうけど、アウギユステじゃ俺達帝国とやりあってるんで」

「無論知っている。だが今その事はどうでもいい。本来なら貴様ののような輩と関わる気など無かったのだ」

「その言い方も引つかかるなあ」

親方さんにシエロさん達と待ち合わせていたのに突如現れた帝国の最重要人物黒騎士とその一行。宿の人にシエロさんへ待ち合わせに遅れると事情も合わせて伝えてもらおうよう頼んだが、しかし早くこの場を切り抜けてしまいたい。目的はまだ不明だがこの人達が現れてからと言うもの胃がキリキリしてしょうがない。オルキスちゃんが唯一この空間で癒しである。

また大ききになると宿に迷惑になってしまうため、他の団員は部屋で待機してもらっ

ている。ユーリ君は元帝国兵とあつて黒騎士の登場には動揺を隠せていなかったが、今頃シャルロットさん達に落ち着かせられてるだろう。

「しかしまあ、帝国のお偉いさんがこんな少人数で来るとはな。青毛の兄ちゃん達はポディーガードつてわけかい？」

「まあそんな所かな」

「……おい、この黒いのは何だ？」

「あんま気にせんで下さい」

「そうは行くか、どういう存在なんだこの……なんだこれは？」

スツルムさんが部屋に普通にいるB・ビィに困惑している。確かに初見ではようわからんトカゲみたいな黒いナモノだからなこいつ。

「と言うかマジ何時の間に入ってきたお前」

「大した事してねえよ、隙間からこうヌルツとよ」

「わかった、もういい。言わんでいい」

勘弁してくれ。お前ただでさえスピード特化とかマチョビィ以外にも変身形態あんのに、更に不定形生物感出さんでくれ。

「相棒が後れを取るとは思わねえが、誰かは傍にいねえと不味いだろ？ こつちもポディーガードみてえなもんさ」

「……なんなら追い出しますが」

「別にかまわん」

「だとよ相棒」

「……どうも。それでご用件は？」

「うむ、先ずは先日は“人形”が世話になった。その件は礼を言っておこう」
「人形？」

昨日の件と言うとオルキスちゃんの事しかない、黒騎士の言う人形とは明らかにオルキスちゃんの事だった。

「その言い方は無いんじゃない？」

「……これは我々の問題だ。詮索は不要」

黒騎士の言い方に不快感を覚えるが、オルキスちゃんを見ると彼女は特に気にせず俺の上げたクツキーをポリポリ食べている。可愛い。この可愛さが自然と出ているなら、今の優先順位はクツキーと言う事か……一応本人も“人形”呼びに関しては気にしていないのだろう。気に食わないが、一応横に置くとする。

「まあこつちも成り行きだ。気にしなくていいですよ。それで本題は？ まさかエルステ帝国のお偉いさんがお礼言いに来ただけなわけないでしょ？」

「よくわかってるな。ならば単刀直入に言うが、貴様昨日この人形と何か契約をしたか

？」

「は？ 契約？」

唐突になんであろうか。話が見えない。

「生憎俺は信頼してるよろず屋以外とは契約とかしない主義でして。判子もサインもしてないですよ？」

「……言い方を変えようか。何かこの人形と約束事をしなかったか？」

「約束？」

契約でなく約束か。そう言われると何かあったような。

「アレじゃねえのか相棒？」

「アレ？」

「ほら、嬢ちゃんの帰り際にエンゼラに乗せるとか話したろ」

「……ああ、その事かっ！」

最初に契約とか言うからもつと真面目なものかとおもったわ。

「したした、確かにしましたけども……それが何か？」

「……そうか、貴様ガロンゾは初めてか？」

「はい？ あ、まあそうですけど……それと何か関係があるんすかね？」

「大いにある、まったく忌々しい……」

ええ、忌々しいとか言われましても……。

「星晶獣を従えてる貴様なら、各島々で星晶獣が契約を行い眠りにつく事があるのは知っているな？」

「まあ、知ってますが」

「それはこのガロンゾでも例外ではない」

はっは〜ん？ もしかしてまた星晶獣がらみ案件？

「このガロンゾではある星晶獣が島と契約を結び存在している。その存在がこの島を造船の島として栄えさせている」

「……その星晶獣の名は？ 何を司ってるんです？」

「星晶獣の名はミスラ、奴は『契約』を司る星晶獣だ」

ほらね。

胃痛がストレスでマツハなんだが。

■ ニ ほら、団長余計な約束した！

■

黒騎士から告げられた星晶獣の存在。名をミスラ、契約を司る星晶獣。もう暫し出会う事もないと思ったオルキスちゃんやドラクさん達と再会した理由がこの星晶獣の

所為であった。

「ミスラは絶対遵守の契約を行わせる。このガロンゾが他の島以上に船の取引が行われるのはこの力が所以だ」

「……商談の契約が一方的に破棄される事も、どちらかの都合がいい様に歪められる事もないから」

「その通り。だからこそ我々帝国もこの島との繋がりを持ち、慎重な対応を行っている」シャルロットさん達のリユミエール聖国に関しては身内の事だが、帝国が他の国とどう言う関係を維持してるかは興味はない。今はミスラのことだ。

「この島で書類など必要無い。ミスラが存在する以上口約束で十分なのだからな」
「そして、昨日交わした俺とオルキスちゃんの約束も……」

「そう、貴様は軽い気持ちだったろうがミスラにそんな事は関係ない。両者が果たすべき約束を結べば奴の力は及ぶ」

融通が利かない星晶獣だ。いやしかし星晶獣とは融通が利かんもんか、役割を決められて作られたのだから。

「ただ船に載せる約束なわけだけど……結局何が不味い状況なんです？」

「ただ乗せるだけで済むなら今すぐお前らの船につれてかせる」

「そりやそうだ……それじゃあ一体」

「……人形」

黒騎士に呼ばれクツキーを味わっていたオルキスちゃんは若干名残惜しそうに食べるのを止めた。

「……約束、私をお兄さんの船に乗せる」

「ああそうだったね。全然それはかまわないよ」

「船に乗せる…… 船の修理が終わったら乗せる」約束……」

「……え？」

ちよつと待つてくれよ、まさかそこが強調されるの？　そこが重要なのか？　そこがポイントなの？

「実はさく昨日僕らの船も補給すんで、さあ動かそうつて時にトラブル！　艦がうんともすんとも言わないんだよね」

「島の職人に見せたが動力に異常は無い。故障一つ無い状態で何故か一切動かかん」

「機材トラブルでも人的要因じゃない……つくまくりく、何かこの島に船が縛られる原因があるつてわけ。そこでここはガロンゾ、理由があるとすればミスラの存在を疑うのは当然だよね？」

「そして何か原因があるとすれば昨日脱走したこいつだ。色々原因を探る中で偶然こいつが船を降りたら途端にエンジンが入った」

「じゃあこの子は何をしたのかわかる？ そうだった一っただけ団長君、君と約束をした。君達の船が直つたら乗せるって言う約束をね」

「お腹痛い」

ドリンクさん達の説明を聞くほどに胃痛がした。思わず口に出してしまった。けどお腹痛い。

「あんた俺達とオルキスちゃんが会つてたの見たの？」

「まあね、君に気付かれないようにするの大変だったよ」

「……昨日お前がその事を直ぐに言わないから原因を探るのが遅れたんだ。そう言う事は直ぐ報告しろ」

「だって絶対面倒になりそうだからさ。だって団長君だよ？」

「だって」って何だよ。だって。って。

「オルキスちゃんも秘密にしたがつてたし、特にこっちが不利になるような話したわけじゃないさそうだったからね。あ、いやけど約束事にまでは気が回らなかったのは僕のミスか、いやごめんねスツルム殿」

「……ふん」

「いってえっ!？」

こんな場面でもドリンクさんがスツルムさんに尻を剣で刺されている。

「……単に俺の船に乗せると言う約束ではなく、*“修理された船に乗せる”*約束として契約が結ばれた、と」

「そう言う事だ。しかも何時何処で乗せるかは含まれずに、ただそれだけが貴様と人形の間で契約された。曖昧な約束のくせに融通のきかん内容でな。貴様の船が修理されて人形を乗せるまで我々はこの島に釘付けだ」

「まあこの子を置いてけば船は動くけど、当然そんなわけにはいかないからね、あいたた……」

完全に失言だった。ガロンゾに関して知らなすぎ過ぎた。子供と交わした些細な約束のつもりがこんな事態になってしまうとは。

「……B・ビィ、悪いんだけど宿の人に頼んで湯冷まし一杯貰ってきてくんない？」
「わかった、待ってる」

喉が渇くが冷たいのも熱いのも飲めん。温いの、胃に優しいの欲しい。

「聞くがその修理中の船が直るのは何時だ？」

「今日打ち合わせの予定で、ただ前話した感じじゃ早くて一月って話でしたけど……早くたって話だから、もっとかかると思います」

「……長すぎる」

「バラしてからの改修なんで、もうそう言う風に話し進めてるし」

「本当に……余計な約束事を……」

悪いとは思うがそんな事言われてもなあ。俺マジでミスラの事知らんかったし。けどこのままと言うわけにもいかないよな。帝国のトップとこの島で微妙な関係を保つ必要が出てしまう。

「……オルキスちゃんって、星晶獣呼べるんだっけ？」

「呼べるよ……？」

「じゃあミスラって今呼び出せる？」

「貴様……一体何をやる気だ？」

俺が突然ミスラ呼び出して欲しいと言うので黒騎士さんがいぶかしんでいる。

「いや呼び出して俺達に働いてる絶対遵守の拘束を破棄させようかと」

「馬鹿な、無意識に働きかけて行かう力だ。不可能だ」

「やってみなくちゃわからんです。それで、どうだろうオルキスちゃん？」

「……ごめんなさい……ミスラの場合今よくわからない……」

ふーむ、もうちよつと強い気配とか無いと駄目か。距離も近づかないと呼び出せそうに無い。

「相棒、湯冷まし貰ってきたぜ」

どうやってミスラを呼び出そうか考えていたら、丁度良いタイミングでB・ビーが

戻ってきた。蛇の道は蛇、星晶獣には星晶獣。

「サンキューB・ビィ。そんでついでで悪いんだが、お前この島の星晶獣の事わかるか？」

「ミスラの事か？ オイラも詳しくはねえけど」

「お前の方で呼び出したり出来ねえ？」

「あー……まあ出来なくはねえよ、多少手間だけど」

「じゃあ省エネ状態にして連れて来てくれ。無理ならこつちから行くわ。なるだけ早く」

「話し合いか？」

「そりや向こうしだい」

「オツケ、ちよつと待ってろ」

戻って直ぐだがB・ビィは窓から何処かへと飛んでいった。多分星晶獣的に話し合いがしやすい場所に移動したんだろう。

「貴様……本気でミスラに契約を破棄させる気か？」

「じゃないと俺達まで面倒ですもん、やれる事はやりますよ俺は」

「……ごめんなさい」

「あつとオルキスちゃんは気にしないの。こんな事なんて予想できないんだから。それ

に君との約束を破るわけじゃないよ、態々絶対遵守なんざせんでも俺は君との約束は守るし」

「……うん、ありがとう」

あ、ちよつと胃痛和らいだ。可愛いは最高の胃薬、はつきりわかんだね。

「しかしミスラ……そうか、昨日オルキスちゃんの『お代わり』を止められなかったのも、その力が働いたわけね」

俺が不用意に「お代わり可」などと言ったものだから、それが契約とみなされたわけだ。両者合意でお代わりを止めないとあれが延々と続くわけか。そうか、そうか成る程ね……。

「……今思い出した。黒騎士さん」

「なんだ？」

「昨日さあ……オルキスちゃんめつちや飯食ったんすよ。そりやもう、食堂に表彰飾るぐらいに」

「あれ凄かったねあく結局何人分だったの？」

そこも見てたのかよドラंकさん。

「20人以上は食ったよ……それで黒騎士さん、此方をどうぞ」

「これは……」

スツと机の上に一枚の紙を差し出す。それは「9万3070ルピ」と書かれた領収書であった。

「なんだ……これは……」

「オルキスちゃんが食った分の値段」

「……宛名が黒騎士と書いてあるのは」

「保護者があんたって仲間から聞いたんで」

「……食べたのか」

「食ったんすよ」

黒騎士さんの視線が横に座るオルキスちゃんに向いた。彼女は膝に置いていたぬいぐるみ「ねこ」を持ち上げ顔を隠した。可愛い。

「聞いてないぞ、人形」

「……にやー」

「おい」

「……ごめんなさい」

すまんオルキスちゃん、けど今言つとかなないと9万はきつい。

■

三 ミスラ、ミミスラ、ミミミスラ

黒騎士さんはちゃんと領収書を受け取った。しかもなつてこつた、即払いである。

9万ルピポんとくれたぜ！

「今回の事と言ひ、なんか申し訳ねつす」

「かまわん、こつちに關しては此方の落ち度だ」

「これで昨日の出費は無し、非常に助かつた。

「よしんば1万、2万……いや2万は無し、1万なら出してもいいけど9万は無理」

「だとしても良くその場では払つたな貴様」

「絶対あんたに払わせるつもりだつたんで」

「……私を七曜の騎士と知つてそれか」

「七曜の騎士と知つたから払わせるんだよなあ」

まさか帝国トップで空に名立たる騎士様が金が無いと言ふ事も無いだろうし、払わんと言ふ事もなからうと言ふ判断。

流石帝国トップの騎士様だ。財布力がダンチだぜ！

「あと余計な事かもしれないけどさ、オルキスちゃんに財布ぐらい持たせなよ。何万も持たせるとは言わんけど、これじゃお出かけしてサンドウィッチも買えやしない」

「……考えておこう」

小さい頃からお金の使い方は教えておくべきである。

「相棒戻ったぜ」

窓から出て行つたB・ビイが今度は扉から歸つてきた。割と早かつたな。

「あいお歸り、んでミスラは？」

「連れてきたぜ、ほい」

「はい？」

B・ビイが突然俺の手にテイスローサーほどの歯車を渡してきた。ただそれは普通の歯車ではなく、緑の宝石が中央にはまり、それを軸に天秤がつけられた歯車である。

「……えつと、B・ビイこの歯車はなに？」

「だから、そいつ」

「はい？」

「ミミミー」

「うおっ!？」

わけがわからないでいると今度は手に持った歯車が謎の鳴き声を発したと思えば、突如回転し出し宙に浮き出した。ギリギリと音を鳴らし、天秤がユラユラと揺れている。

「……ん、んっ? B・ビイこーちーらーはー」

「おう、こちらミスラ（省エネ）さん」

「ミミミミミ」

そんな存在が俺達の目の前でクルクル回転してた。しかも今度は縦軸回転である。天秤がめっちゃ振り回されてる。

「ミミミ、ミスラ〜」

「……黒騎士さん、こいつも自分でミスラって言ってます」

「ああ……その、ようだな」

「……可愛い」

「ミミミ」

しかし省エネにしたって省エネ過ぎない？ 元の形態知らんけど。あとなんかコロコロしてるミスラ省エネとオルキスちゃんが戯れてて可愛い。

「……まあ良いや、星晶獣だし」

「君この事態それだけで済ますんだね」

済ますともドラंकさん、だって星晶獣だし。気にしても意味無いから。

「さて、それじゃあミスラ？ 急に呼び出して悪いんだけど話し聞いてちようだいな」

「ミミ？」

「ちよつとき、お前の力で俺とこの子、オルキスちゃんとの間に契約が交わされちゃって困ってるの、なんて言うか妙な所で約束されちゃってさ」

「ミーン……」

「そう、こつちの人達が島から出れないわけよ。それでさあ、なんとか出来ないかね？
可能なら破棄したいんだけど」

「ミッ！」

「駄目、無理？ あーじゃあちよつと融通きかせてくれるだけでも嬉しいんだけど。せめて場所と日時は自由にさせてくれない？」

「ミミミンツッ！」

「無理？ どうしても？」

「ミミミンツッ！」

「自分でも無意識でやってるから無理？ 厳しい？ あーならとりあえず飛べるようにして乗せる方向で」

「ミくミミンツッ！」

「え、応急処置の船でもだめ？」

「ミン、ミン、ミミミンツッ！」

「完全修理？ 昨日決めた計画通りの改修後じゃないと駄目って、いや、そこそこお前
さく」

「スツルム殿、言っちゃ何だけど団長君が小さい歯車と真面目に会話して交渉してる光

景って、これ傍から見るとすっごい愉快だね〜」

「なら言つてやるな……」

ほんとだよ、何なら変わつてくれるのかこの野郎め。

「ミスラ、ミミスラ、ミミミスラッ!」

「……あつそ、わかつたよ。お前つて早口みたいに喋るのね」

「おい、ミスラなんと言つた?」

「あれ、わからなかつたです?」

「わかつてたまるか。傍目からでは怪音発する歯車と会話してるだけだ」

「え、嘘でしょ?」

「いや僕達もなんだかさつぱりだつたよ?」

「……私は、わかるけど」

うっそだろ、ミスラの言葉わかつてるの俺とオルキスちゃんだけ? てつきり星晶獣

あるあるネタの謎発声でも意思疎通可の力が働いていると思つたのに。

「相棒はオイラ達濃い星晶獣と一緒に過ぎて、リスニング方式で自然と人語を喋れない星晶獣の言葉を理解できるようになつてんだ」

「待つてB・ビー、俺そんな事知らん」

「苦勞の賜物だぜ」

いらんそんな賜物。

「……まあ結論としては無理だそうですよ」

「だろうな、元から期待はしてない。ミスラの力はそう言うものだ」

「自分でもどうにも出来ない力なんて使ってからに、こいつめー」

「ミミミ〜！」

八つ当たりには浮いてるミスラを突いてクルクルと回転させてやる。しかしミスラの声は思いの外楽しそうだった。

「結局船に乗せるしかないか」

「……そちらも特に期待していたわけではない。契約の内容が重要だったのだ。確認もせず迂闊な行動をすればよけいに面倒になる」

「まかり間違つて団長君の船を壊したりなんかすれば眼も当てられないよ。契約は残ってるのにそれを果たす手段も無くなって、ガロンゾから一生出る事が出来なくなんだからさ〜」

万が一にもそんな事あれば俺もそっちの戦艦墮としますがね。ただじゃおかない。

しかし、さて困つたと頭を悩ませる。結局の所船の改修終了を待つしかないのだが、親方さんに頼んで工期を速めてもらう事が出来ればまだいいが、きつとそれは難しいだろう。

どうしたものかと悩んでいると、再び部屋の扉をノックする音がした。

「どなたー？」

「度々申し訳ございません。宿の者ですが」

外からは黒騎士さん達を連れてきた宿の従業員の声でした。

「何かありました？」

「実は先程頼まれた伝言をシエロカルテさんに伝えた所、是非お話をしたいのでドックまで来て欲しいと申されまして」

「えっと、まだちよつと立て込んでるですが」

「それが、シエロカルテさんが今回お困りの事で力になれるだろうと……」

シエロさんの言う今回お困りの事ってミスラ関係だよな。わかってた……わけでは無いだろうけど、ちよつと怖いぞ。用意良すぎない？

「それともし来れるなら団員の、ユグドラシル様をお連れするようにと」

「ユグドラシルを？」

シエロさんが彼女を指名してくるあたりに、これが単なる思い付きではない考え合つての事だと言うのがうかがえる。

現状船の改修を待つ身、どうなるかはわからないが話を聞かない手は無いだろう。

「黒騎士さん、俺は船の所に行こうと思いますが」

「……ならば我々も同行する。他人事でもないのにな」

「良いんですか？ 助かりますけど」

「勘違いするな。わかっているだろうが事態が事態だからだ。本来敵対こそすれど貴様らと馴れ合うつもりはない」

「わかっていますよ。じゃあ決まりつすね。B・ビー、ユグドラシル呼んで来てくれ。それと船の話し合いになるからカルテイラさんも」

「了解だぜ」

少なくともここで意味なく、うんうん無駄に唸り悩む必要は無くなった。その事で気が少し楽になった。

■ 四 船を生む

シエロさんに呼ばれゾロゾロと俺はB・ビー、ユグドラシル、カルテイラさん。そして黒騎士さんご一行を引き連れてエンゼラのある中央船渠へと向かった。

何度見てもデカイと言う感想が浮かぶ中央船渠、そして昨日見た時と違うのは遠目からでもわかる場所に俺達の船であるエンゼラが固定されている事だろう。

「……あれが、エンゼラ？」

「うん……綺麗な船……」

「ミニミン」

ユグドラシルとオルキスちゃんが手を繋いで遠くに見えるエンゼラを見て話してる。オルキスちゃんの傍にはなんかついて来たミスラまでいる。凄いぞ、あそこだけ癒しが凄い……何と言うか、凄い。

そんな彼女達を眺めていたいが、俺はと言うと隣で歩くカルテイラさんの御小言を聞いている。

「あんだだけ嫌がった帝国呼ぶ原因を自分で作るなんてなあ……」

「はい……」

「そんで今日、よくもまあこんなややこしい話にできるわ」

「……すんません」

「もう一種の才能やで。息吸うだけでトラブル呼び寄せとるんと違うか自分？」

「違うと思いたい……」

道中カルテイラさんに嫌味とは言わないが、流石に色々と今回の事で言われてしまふ。俺が交わした約束が原因なので申し開きもできない。

「……………」

「おん？ どないしたん嬢ちゃん？」

オルキスちゃんがかルティラさんの袖を引いて会話を遮った。

「……お兄さんは、悪くないよ……苛めないで……」

あああああああ——っ!!

「ちよつと、ちよつとお前、ねえ聞いたB・ビィ？ この……このもう……天使なんじゃないのかなこの子？」

「落ち着け相棒、なんか気持ち悪いから」

「気持ち悪いとはなにかっ！ わからないのかオルキスちゃんの可愛さが！ もうウチのティアマトとかとトレードしたいよ！ 引き取りたいよ！」

「お前にとっての癒しなら既にユグドラシル達がいるだろ？」

「——？」

「うん、ユグドラシルお前は俺の癒しだ。間違いない。が」

「が？」

「ストレス源が多いんだよお……っ!!」

そしてお前もそうじゃないB・ビィ。

「アホらしい会話……んーとなあ嬢ちゃん？ 別に苛めてるんと違うで？」

「そうなの……？」

「せやせや、ウチらの間柄ならこんぐらいの言い合い日常茶飯事つちゅーことや」

「……んー？」

「にししししっ！ まだよーわからんか、まあその内わかるわ！ 友達ぎようさん作つてみればな！」

「友達……沢山……」

友達と言うフレーズを聞いてオルキスちゃんが気持ちワクワクしているように見える。

「……ほん、ほんとっ！ ……オルキスちゃんかわ……っ！ 可愛いもう……っ！」

「うんうん、わかったわかった。わかったから団長君、B・ビー君も言つてたけど落ち着こうね〜」

「……ジータよりはまともと聞いたが、貴様も大概だな」

俺がオルキスちゃんの際限無き癒し力ちからに涙していると、黒騎士さんが滅茶苦茶呆れた様子で呟いた。

「比較対象が可笑しいのと思うのですが。あと俺について聞いたつて、まさか変な噂じゃないでしょうね」

「貴様が幼女趣味の犯罪者予備軍と言う噂か？」

兜付けててもわかるぞ、笑つてるな。それも心底馬鹿にした笑みで。

「噂だから、根も葉もない噂だから！ 信じてるんじゃないでしょうね、七曜の騎士とも

あろう方が!? 最近まで七曜の騎士とか知らなかったけども」

「どうだかな、この人形に現を抜かす所を見れば強ち嘘でもなからう?」

「ふふふ普通だし、ノーマルだし!? 可愛いもの可愛いと思つて何が悪いか! と言うか何時も一緒にいるあんたにはわからないのかオルキスちゃんあの癒し力ちからが!」

「下らん」

く、下らん? 下らんときたよこれまたしかし。

「こ、こつちはやれ私物を買ひ込む星晶獣、やれ酒飲んで吐くドラフ、やれ船壊しかけたちみつこ星晶獣、やれ唯我独尊錬金術師だのに日々胃を痛め辛い思いをしてると言うのに、こんな良い子とずっと居ておいて下らんとつ!」

「ああ下らんな」

「ぎぎぎぎ……!」

「……本当に下らん……彼女ならば、もつと笑えたのだ」

「ん、彼女?」

「……気にするな、ただの戯言だ」

それつきり黒騎士は黙ってしまった。きつと追求しても返事すらしないだろう。しかし小声だったが確かに聞こえた言葉。彼女とはオルキスちゃんを指しているように思ったが、黒騎士さんの言葉からはもつと違う人間を意味するような印象がある。

まあ帝国の人って言うのが複雑だが、この人も色々大変なんだろうな。

ちよつと微妙な空気になった所でシエロさん達が待つ工房の入り口へとついた。中に入ると相変わらず忙しそうな職人達があり、道具を手にしては騎空艇へと向かい、戻ってきては騎空艇の設計図と睨みあう。彼らに休む暇は無く、そして彼らにとつてこれは生き甲斐なのだろう。

「団長さ〜ん」

そして毎度御馴染み、あの声が出た。

「シエロさんお待ちせ」

「いえいえ〜。団長さんの事ですから仕方ない事です〜」

うーん、素直に喜べないぞーう。

「黒騎士さん達もどうも〜」

「相変わらず何処にでも現れるやつだ」

「ふふふ〜。騎空士居るところよろず屋あり、ですよ〜」

あ、普通に知り合い合いなんですな二人とも。まあそりやそうか、昨日聞いた時もシエロさん知ってる感じだったしな。

「よう来たな坊主」

「ああ、親方さん。どうもすみません此方の都合でお待ちさせて」

「かまわねえよ、待つてる間に色々話してたからな」

「話?」

「エンゼラの改修計画だよ。良い木材が手に入るかもしれないでな」

良い木材か。エンゼラに使われるのなら俺にとっても悪い話ではない。しかし良い物となると当然だがお金がかかる。

「おつちゃん、ええ木材はええけどそれなんぼ? 知つての通りうちの騎空団貧乏やさかい、あんま出せへんよ」

「いや元手はかからん、らしい」

「らしい、て……なんのこつちや?」

「あー俺もよくわからんのだ。詳しくはよろず屋とあいつに聞いてくれ」

「あいつ?」

「そうでした。実は団長さんに会って欲しい方がいるんですよ」

えー、また新キャラですか?」

「まあシエロさんの紹介ですから大丈夫と思うけど……まさか星晶獣なんてオチじゃないでしょうね?」

「おやご存知でしたか? 実はそうなんですよ」

「ぐ……っ!?!」

「ミツ!？」

「……お兄さんが倒れた」

「一つの島で二体目の星晶獣と来て胃痛がマツハしたみてえだ」

「ぼちぼち胃も限界やな」

「なんかもう、気の毒通り越して面白いな団長君」

「だから言つてやるなドラク……」

なんてえこつた……一回の騒動で複数の星晶獣が出てくるのはザンクティンゼル以来じゃねーか。

「ご安心下さいい。決して団長さんの思うような星晶獣ではありませんから」

「……ほんとですか？」

「本当ですよ。今回の事できつと力になってくれるはずですよ。ノアさくん」

シエロさんが何方かの名前を呼ぶ。すると工房の奥から気まずそうな顔をした少年が現れた。

「えーと……なんか会い辛い印象与えちゃったようだね」

「……なるほど、星晶獣だ」

「へえ、わかるのかい？」

「嫌つて程に。だいぶ抑えてるから近づくまでわかんなかったけど、あんた間違いない」

星晶獣だ」

「あはは、凄いな君。噂通り星晶獣の事をよくわかってる」

「変な噂じゃ無い事を祈るよ」

「変な？」

「いや何でもない。まあ力に成ってくれるなら星晶獣でも歓迎だ」

「ありがとう。僕はノア、微力ながら君達の力に成ろう」

握手をして挨拶を交わす。話してみればなんて事は無い、星晶獣である事を除けば普通の少年だった。

オールを持った儂げな雰囲気星晶獣ノア。間違はなく星晶獣だが形態としてはゾーイと同じ、それかジータのところ居たロゼッタさんの様な感じ。可能な限り星晶獣としての力を抑え人として溶け込んでいる状態だからまず普通の人間に星晶獣と気付かれる事は無いだろう。

「人形、どうなのだ」

「……うん、星晶獣」

「そうか」

「その君も……なるほどね」

少年はオルキスちゃんを見ると何かに納得したように頷いた。カリおっさんと言い

オルキスちゃんから何を感じ取ったのだろうか。まさか星晶獣と言う事もないだろう、彼女からはそんな気配は微塵も感じない。

「何に納得したか知らんが我々の事は良い」

「そうかい？　なら早速話を進めようか」

「ミンツ！」

「おや、ミスラまで来たのかい？」

「流れだね。今回の事で呼び出したのさ」

「へえ？　ミスラの力を如何にかしようとなんて思いきったね」

「無理だったけどな」

「だろうね。けど呼び出しただけでも凄いよ」

ミスラとも知り合いらしい、つまりガロンゾに居る事が多い星晶獣と言う事か。

「しかしここでまた星晶獣の追加かく、君はあれかい？　星晶獣の不思議パワーであつという間に船を直してくれたりとかするのかな？」

「はは、期待されてるなあ。けど申し訳ないのだけど、あつという間とはいかないかな」

ドラランクさんの質問にノアは申し訳なきそうに答えた。俺もちよつと期待してたので、内心「あらそうなの？」と思つてしまう。

「ただ力に成れるのは間違いないと自負してるよ」

「となると……あんたは何の星晶獣なんだい？」

俺がそう聞けばノアは誇らしげに答えてみせた。

「僕はね、艇造りの星晶獣なんだ」

そのノアの自信に満ちた答えを聞いて、俺はエンゼラはきつと素晴らしい復活を遂げるだろうと確信したのである。

アイキヤンフライは強引に

一 Noah!

些細な約束から起きたトラブル。それを解決するために俺は急ぎエンゼラを直せるように尽力せねばならない。そうでなければ、このトラブルが原因で出会ったエルステ帝国最高顧問である黒騎士さんと顔を合わせ続けることとなる。

黒騎士さんはこちらに手出しをするつもりは無いと言う。多分本当であろうと俺は思う。この人から俺に対して敵意も殺意も何も感じないのだ。それでもこの人は帝国の人間、奇妙で微妙な関係が続くのは避けたい。

そして自らを艇造りの星晶獣と名乗る少年ノア。シエロさんの紹介で知り合った彼の力を借り、俺達はエンゼラを復活させる事となった。

「ノア、貴様が艇造りの星晶獣であるのは頼もしい限りだが、どう我らの力に成るといふのだ？」

黒騎士さんはノアの事をまだ完全に信用はしていないらしく、訝しく思いながらも彼

に尋ねた。

「まあやる事は単純だよ。結局ミスラの約束通り艇を直せばいいのだからね」

「その時間がかかり過ぎるから往生しているのだ」

「わかっているよ。僕の力でも流石に一瞬で魔法のように……とはいかないけど、かなり時間は短縮できるはずだよ。その為には君達の協力も必要だけどね」

「俺達の？　けど俺も他の団員も造船に関しちゃ素人だぜ？」

「それは知ってるよ。必要なのは……これだよ」

そう言つてノアは懐から一本の木材を取り出して俺達に見せる。

「それは？」

「僕が選んだ生まれ変わるエンゼラに相応しい木材さ」

「こいつの言う事は間違いないねえよ。強度と加工のしやすさどれをとつても優秀だ」

親方さんが太鼓判を押す木材。試しに手にとつて見せてもらう。確かに肌触りも良く強靱だ。湿気にも強そうだしあらゆる環境に負けないだろう。

そして同時に俺はこの木材の肌触りに覚えがあつた。

「これって……まさか」

「やっぱり気がついたかい？」

「なんや団長、その木の事知つとるんか？」

「ああ……これ多分ユグドラシルが生み出す木と一緒だ」

懐かしき我が家ユグドラシルハウス。そしてアウギユステで海の家修理に使用した木材。それは全てユグドラシルの生み出したものだ。

「ユグドラシル」

「――！」

「ん、サンキュ」

試しにユグドラシルが一本同様の物を生み出してみせる。ノアの持つサンプルと違い生み出されてそのままだが、その木の質は一切変わらない。

「ほらな、完全に同じ。ほいこっち返すわ」

「成る程……ノア、てめえ昨日当てがあるって言ってたのはこの事だったわけか」

「そう、団長さんの所にユグドラシルが居るのは知ってたからね」

返したサンプルを仕舞いながらノアは話を続けた。

「星晶獣が複数体乗る船だ。普通の木材じゃ何時かまた限界が来るよ」

「星晶獣が乗るなら、星晶獣が作る材料でか……アウギユステでユグドラシルによるエンゼラ補強はお勧めされなかつたけど、材料の提供って言う事なら問題も無いわけね。けどノア、あんたこのサンプルはどこで」

「ルーマシーでユグドラシルに貰ったのさ」

「ルーマシーで？ ユグドラシルって本体の方だよな」

「そう。丁度君達が立ち寄った少し後になるね」

俺達がメドウ子と出会って大騒ぎした後で来たのか。タイミングとしてはカリおっさんと出会ってる頃だろうか。

「協力って言うのはこの事か。俺達、と言うよりもユグドラシルの力を借りたいと」

「そう言うこと。船体を構成する材料はこれが一番だ。ただ木の質や形に關しての注文も複雑になるし、それにかかなりの量が要るから大変かもしれないけれど……」

「うん、頑張れるようだね」

ノアの言葉にユグドラシルは自信満々と言った様子で答えた。アウギユステで船に關しては素人である事と、土系統の星晶獣として木々を生み出す事が出来ても彼女はどちらかと言えば大地系の星晶獣であるためロゼッタさんから補強する事を止められた事を気にしていたらしい。何時に無く気合が溢れている。

「俺達としてもこんな良い素材で船を造れるんだ。滅多に無い機会だからな、願ってもねえ事だぜ」

「せやったら今日は船の積荷なんかを降ろすとして……直ぐに始めるんか？」

「ああ、のんびりもしてられないようだからな。島のドックを帝国のデカイ戦艦がずつ

と居座るなんて事になるとこつちも面倒な事になるからよ」

「原因は我々の所為では無いがな」

「わーてるよ。ただこつちもドック一つ占領されちゃ困るって話だ。何処かの国がやたらと戦争起こすもんで、次から次へと壊れた船が運ばれるもんでな」

「そうか、ならばさぞ懐は潤うだろう」

「けっ!」

「……ふんっ」

「どうも親方さんの黒騎士さん、と言うよりも帝国に対しての当りが強い。エルステ帝
国最高顧問と親方さんも知っているはずだ。まるで怯えた様子も無く何と言う度胸で
あろうか。だがこちらも流石と言うか、黒騎士さんも負けずに皮肉を皮肉で返した。」

「えつと……ああ、そうだこれ。団員から出た改修案の要望書です」

「おっ? もうまとまったか」

「昨日話し合つて決めたエンゼラ改修案を纏めた書類を手渡す。親方さんは直ぐにパ
ラパラと捲り目を通した。」

「……成る程」

「どうでしょうか?」

「やる分には問題は無い。通路や扉の拡張なんかも必要とは俺も考えていた。設備に関

しても大丈夫だろう。何に使う事になるか分からないなら、巧く設置して多目的に使える部屋を多目にしてやる。それとこの「実験室」ってのは？」

「錬金術の実験室です。仲間に錬金術師が居てそれなりの設備が欲しいって言うもんで」

「錬金術か……畑違いだな。その錬金術師の仲間には後で詳しく話を聞く事にする。どんな機材を取り寄せればいいのかわからねえからな。あともうおめえらの荷物も降ろしちゃいたい、この後とか大丈夫か？」

「大丈夫ですよ。なら荷物降ろす時に連れてきますから、必要機材についてはその時に」

「ああ、準備して待つてるぜ」

荷物を降ろすなら全員連れてくる必要がある。特にリヴァイアサンの水槽とか手間がかかる。さらに言うならルナル先生の私物は御本人じゃなきゃとても任せられん。

「話は終わりだな」

一先ず船についての方針が決まったのを聞き黒騎士さんが早々に立ち去ろうとする。

「あ、もう船戻りますか？」

「これ以上付き合う必要はあるまい。急かした所でミスラが納得しなければ意味も無い。船の修理が終わるまで我々に来れる事など無いのだからな」

「まあそつすけど」

「そのの星晶獣の力で時期が早まるならそれでいい。帰るぞ人形」
「……………うん」

言うだけ言って帰って行く黒騎士さん。その後をオルキスちゃんがトコトコと付いて行き、ドラंकさん達もその後について行った。

「いつやあゝ荒つぽい事にならなくてよかったよね。それじゃあねえ、団長君」

「……………まあ頑張れよ」

「お兄さん……………またね……………」

それぞれが別れの挨拶を言って去って行く。ドラंकさんは適当だし、スツルムさんはなんか憐れんだ視線だし。

「けどオルキスちゃん可愛い……………尊い……………っ」

「坊主なに泣いてんだ……………?」

「あんま気にせんといて。うちの団長ちよつとストレスで色々拗らせてん」

「拗らせに拗らせて、もうわけわかんねえしな」

「……………若いのに苦労してんだな」

「あはは……………何と言うか、噂通りだね」

■ 面倒だから何も言うまい。だがB・ペイ、おまえがわけわかんねえとか言うな。

二 星晶獣界限で有名になりつつあるアイツ

■ 割りとすんなり別れた黒騎士さん達。一方で俺達はその事を気にする暇も無く宿へととんぼ返りである。

宿に待つ団員達をそのまま連れてまたエンゼラへと戻らないとならない。今日もまたやる事は多いぞ。

「ミニミニーン」

「おいミスラ、俺の頭の上で回るなよ」

「ミニミン」

「回り心地良いつて……どう言う心地なのそれって？　と言うかちよつと旋毛に擦れてくすぐったいんだよ」

「ミンツッ！」

「こら回転率上げんなっ!？」

「はははっ！　なんだか懐かれていますね団長君」

何故か俺の頭上に入ったミスラ。帰りずつとそこを定位置としている。

そして更に何故か付いてきてるノア。あんた仕事せんでいいの？

「僕の仕事は造る事だからね。まだ暇なのさ」

「あそう。俺としちややる事やってくれんなら文句ないけどさ」

「それに君とももう少し話をしたかったからね」

「俺と？」

「かの有名な星晶戦隊（以下略）、その団長。星晶獣界限じゃあ有名になりつつあるからね」

嫌な界限だな。

「嫌な界限だな」

「君考えてる事そのまま言ってない？」

思わず言っちゃったよ。ちくしょう。

「なんだよもく星晶獣界限って」

「まあ読んで字の如くかな。僕のように一か所に留まらない星晶獣は結構人の噂に敏感だからね。人型なら人間達の生活に溶け込めるから尚更さ」

「工房でも聞いたけど変な噂じゃないだろうね？」

「あー……所詮噂と言えはそれまでだけどね」

その反応、碌な噂じゃないなーこの野郎ー。

「べ、別に噂を信じてるわけじゃないさ。ただやっぱり気になってね。君の事は以前から知っていたから」

「はい？ 以前からって言うのは？」

「以前にジータから君の事は聞いたのさ」

「ほげげ」

「団長がまた奇声発しとる」

「もう条件反射みたいになつてんな相棒」

うるさいよ。

「え、ちよ……何お前ジータとも会つてんの？」

「もう結構前だよ。その頃はまだ君達は空に出てないはずさ。あの時もガロンゾでね——」

ノアが言うにはジータ達は俺がまだザンクティンゼルにいる頃に彼女達が乗る騎空艇グランサイファーが壊れたため直すためにガロンゾに来たらしい。

ノアはかつてあのグランサイファーを造った星晶獣でもあった。うーむ驚き。そして彼はラカムさんとも知り合いでラカムさんが子供の頃に出会っていたそうだ。その二人が昔交わした約束が原因でその時もミスラ関係で面倒な事があったらしいが、無事彼女達は旅立ちグランサイファーも修復されたと言う。そしてその修復に加わったのがノアだった。

「星晶獣の僕があまり人間達の作業に参加するのは憚られるんだけどね。最初はグラン

サイファアの修復作業もそつと陰ながら参加するつもりだったんだけど、ジータが船大工の人達に僕の事教えちゃったんだ」

「あいつ色々お構いなしだからなあ」

「それでもう普通に参加しちやつてさ。けどあんな事今までなかったから新鮮な気持ちで楽しかったよ。それ以来どこか行つて面白い材料見つけては持つてきたりしてるんだ」

「それで今回はメイド・イン・ユグドラシルのあれを」

「そうそう。それで話を戻すけどガロンゾでジータと旅の話聞かせてもらったんだ。グランサイファアの辿つた旅も気になったからね。けど後半は殆ど君の話になったよ。よっぽど好かれてるんだね」

「あいつはもー！ なんなのあいつは、んもーっ！」

「わー団長照れとるー」

「相棒顔真つ赤ー」

「ミミーン」

「――？――！――」

うるせえよ、いじめっ子かお前等は!! 泣くぞ!? あとユグドラシル、よくわかつてないなら参加しなくていいから!

「暫くして君達の騎空団の噂を聞いてね。ジータの話す通りの人物が星晶獣を仲間にして騎空団を立ち上げたなんて聞けば僕じゃなくても興味が湧かないわけない。しかも船をやられたって聞いたから、会ってみるには良い機会と思ったんだ」

「そうですかい。それで船直してくれるんならありがたい話だわ」

「グランサイファーと違ったやり甲斐があるよ。たぶんこの空で一番星晶獣が乗ってる船だからね」

団発足時点で人間が俺一人だからな。もう色々とおかしい騎空団である。順調(?)に人間の仲間も増えたが問題児も多い。

泣けるぜ。

「それで俺と会ってどう思った？」

「聞いた通り。ジータだけじゃなく星晶獣が好くのがわかるよ。君には不思議な縁があるようだ」

「要らんなあ、そんな要素」

「いいじゃないか。きつと悪いものじゃないよ」

「そう思えた事はあまり無いのだがね」

「縁とはそう言うものさ。誰もが“不思議な縁”と言う様に、正しくそれは不思議に満ちているからね。良いか悪いかなんて直ぐわからないよ」

確かに俺の周りの人達は「不思議な縁」で出会って来た。マグナシックスしかり、ラムレッタダから始まる旅立ってからの仲間達しかり。

「強い縁を持つ人間は今までも歴史に名を残した。きつと君もそうなるだろう。そしてエンゼラにこれからも乗り続けるならば、きつとあの船もまた歴史に名を残す」

「どうだかね」

「いや、これは断言してもいいよ。君は後世に名を残す。君の仲間達と、そしてジータと共にね」

何とも言えないワンセットだな。ジータが名を残すのは俺も断言できるが、俺は残ってもジータのオマケだと思う。と言うかあまり名を残したくない。どんな逸話と共に残るかわかったもんじやない。

「なに？ お前はその見届け人にでもなりたいわけ？」

「そうだね、何せ僕は星晶獣だから。この身は不滅と言って良い、時間は余りある」

「……まさかうちの団に入ろうとか考えてないだろうね」

「ははっ、それもよさそうだ。けど遠慮しておくよ。僕は次に機会があればグランサイファーに乗ろうと思っっているからね」

それを聞いてちよっぴりホツとする。ノアは俺が知る中でも特にまともな星晶獣であるが、よほどの理由が無ければやはり星晶獣を自ら迎え入れる気にはならない。

「それに僕が加わらなくても誰か他の星晶獣が仲間になるさ」

「不吉な事言わないでくれる?」

「君不吉とまで言うかい?」

言うともさ、ええ言うともさ。

「お前ね、うちの星晶獣の数わかってるでしょ? 9体だよ9体? それに星晶獣のお

前ならわかるだろうが自らの魔力だとかで竜だとか呼び出す奴もいんのよ。それいれ
たら15体よ15体? わかるこの異常な数? 星晶獣15体ってなにっ!? 誰だそ
んな騎空団立ち上げたのは、馬鹿かあっ!? 俺だよちくしょう!!」

「落ち着かんかアホたれ」

「あだっ!」

パツシーンツッ! とやたら良い音が俺の頭部から響いた。カルティラさんのハリセ
ンが炸裂した証拠である。絶妙な痛さが俺を冷静にさせる。

「あたた……」

「あんななあ、あんま街中で怒鳴るなや。ただでさえ存在が浮いて……はおらんなあ。

あんま目立たんし」

「相棒は叫んでやつと一般人程度に存在感がでるかかってとこだよな」

んん、んんんっ? これ泣くとこ、それとも怒るとこ?

「ミシユー」

「――！」

「ミススー！」

「――！」

はいそこ、〃楽しそうな騎空団だね〃とか聞かない。ユグドラシルも全面的に肯定しないで、ミスラ来ちやうから。増えちやうから星晶獣、16体目来ちやうから。人間と星晶獣の団員バランスが崩れちやうから。

「ここまでミスラに好かれるとはね。やっぱり君は面白いな」

「やめて……自覚したくないの」

「もうしてるんじゃないかな？」

悪戯っぽくも悪意無きノアの笑みが俺の心を抉る。

「けれど気を付けた方が良いのも確かだね。先も言った通り君は一部の星晶獣にも存在が知られつつある。それが良き縁としても何かしらの衝突は避けられないだろうから」

「嫌だなあ……俺なんかほつとけばいいだろうに、暇なのかよそいつら」

「うーん、言い得て妙と言うか……確かに暇なんだと思うよ」

「暇なのかよっ！」

「ほら僕らって覇空戦争終わってお役御免になってるからさ。しかも主たる星の民も居

ない。まだ僕のように人の生活に馴染める星晶獣はともかく、正直力を持つて余しているのも多いよ。だから超自然的な能力を持つ星晶獣は戯れで天災を起こしたりするし、強い人間がいれば興味を抱くわけさ。まさしく君やジータの様な人間にね」

ほつといてくれとしか感想は出てこない。強い力を持つて余す事でフラストレーションが溜まる事は理解出来るが、もつと穏便な方法で人と関わってほしいものである。

「なんにしろ気を付けて。ガロンゾには僕やミスラ以外にも星晶獣が現れる事がある」

「そりゃあ嫌な事聞いた……。けどまあ今日一日で既にミスラにお前も来たんだ。ザンクテインゼルじゃあるまいし、続けて三休目の登場なんて早々ありはしねえよ」

「相棒、そう言う事言うと『案の定』になっちませ」

「……いいや！ そんなことないね！ 俺は一月エンゼラが直るのを楽しみにのんびりと過ごし——」

言葉を続けて言おうとした瞬間であった。奇妙な浮遊感。一瞬何が起きたかわからず、両肩を掴まれる感触と、啞然として俺を見上げる眼下のカルテイラさん達。

「へ？」

「見つけたぞヒトの子よっ！」

「……はあ。」

そして頭上と言うか、俺を掴み上げている存在。翼を生やした少女。

あ、星晶獣ですかそうですね、とんやかんやでこんな状況に順応してる俺の脳。だけれども、嗚呼だけれども理解しつつも認めたくないこの状況。

「ちよ、ま……ちよ、え？」

「今すぐ主の力を確かめたいが、ここではちと場所が悪い。場を移すぞ！」

なんか勝手に楽しそうにしてる星晶獣。何か言わねばならぬ、言わねばならぬ。そう思い俺はカルティラさんに向かい咄嗟に叫んだ。

「エ、エンゼラの事は任せ、んぎゃああ——つ!？」

「あ、あいぼおお——つ!？」

「団長が攫われたあ——つ!？」

激しく羽ばたき、急加速、猛スピードで飛行する星晶獣。遠くなっていくカルティラさん達の声。果たして俺は無事エンゼラの改修を見届ける事が出来るのか。酷く不安になってきた。

■ 三 鳥だ！ 騎空艇だ！ いや、〔星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y〕団長だ！

■ エンゼラの改修に関して状況を把握した黒騎士達は、既に帝国の戦艦前に戻ってい

た。

ドランク達に関しては気が楽そうな表情だが、黒騎士は兜で表情こそ見えないが疲れた様子はありありとわかる。

「まあなんとか島を出る方法がわかって良かったね。それに争い事も無く終わる、うんうんやっぱり平和が一番だよね」

「気楽に言うな。結局は足止めを食らっている事に変わらない」

「あはは、まあ確かに一月って言うのは長いかなあ？ まあ僕らに何が出来るでも無し、のんびり待つしかないねえ」

ドランクとスツルムは黒騎士に雇われた傭兵である。彼らはここで足止めを食らおうとそう困る事は無いだろう。

だが黒騎士は違う。黒騎士はエルステ帝国最高顧問、多くの仕事があるのだ。呑気にガロンゾ滞在をしている暇は無く、これから戦艦に居る兵達にも色々と説明をしなければならなかった。

また帝国兵の中には任務で他の島に行く者も多い。それらの兵までここで足止めさせるわけにいかず、一先ず他の帝国の戦艦と連絡をとり移動する必要がある者は別の騎空艇で移動させねばならない。

「余分な仕事を増やしてくれたものだ……」

「…………ごめんなさい」

「今後私の許可が無ければ部屋を出る事も船からを降りる事も許さん。人形らしく部屋でじっとしている」

「…………うん」

辛辣な口調で黒騎士注意されるオルキス。彼女はふつと黒騎士を見てから少し顔を逸らし返事をした。

「…………目を見て返事をしろ、目を」

「…………うん」

「………………」

そしてまた若干逸らして返事をした。よほど脱走と冒険に味を占めたようだ。黒騎士の鎧がカタカタと怒りが原因で震えるのをドラंक達は気付いていた。

一体何時からこの少女はこんな風になってしまったのか。以前は大人しすぎるそれこそ人形のような少女だった。黒騎士に反抗的な態度など微塵も見せなかった。

原因は考えるまでも無くジータである。たった数時間の交流が彼女を変えた。更にガロンゾでの団長との出会い。それらが明らかにオルキスを更に変えつつあった。良くも悪くも。

これにはドラंकも苦笑い。

「こつちを向かんかあ……つ！」

「うぎぎぎ……つ」

ドラंकとスツルムの目の前で頑なに黒騎士と顔を合わせようとしないオルキス、それをなんとか自分の方に向かせようと両手で頬を挟み込んでオルキスの顔を動かそうとする黒騎士。黒騎士はすっかり意地になっているが、オルキスはなんだか楽しそう
だ。

実は一番変わりつつあるのはオルキスではなく黒騎士の方かも知れない、と言うか親子かな？ とドラंकは思ったが口にしない。場を乱す事に定評がある彼も明らか
な藪蛇は避けたいのだ。

「よほど団長君達といたのが楽しかったんだねえ」

「困った事にな。今回の事が全てあの小僧が原因とは言わんが……それでも余計な事を
してくれた」

「あはは、彼が聞いたらすつごい微妙な顔で否定しそうだねえ、色々」と

「そう言うお前も、えらくアイツの事気に入ったようだな？」

スツルムに言われドラंकは「わかる？」とニマニマわざとらしく笑う。

「ほら僕って退屈なの苦手だからさあ。団長君みたいに何か愉快的な騒動巻き起こす
人って好きなんだよねえ〜！」

「それこそあいつは否定しそうな理由だな。好きで騒動起こしてない、と」

「だろうね。けど偶然とかそう言う事で起こる騒動が一番楽しいんだよ。予想も想像もつかないスペクタクル！ 彼はそう言う星の下に生まれたんだよ、きつと」

「それも泣いて否定しそうだな……」

「だね。なんだつたらもう変なトラブルに巻き込まれてたりしてさ」

「流石にさつき別れたばかりでそんな……うん？」

「どしたのツルム殿？」

「いや、何か騒がしいようだが……」

何か騒がしい声が遠くから聞こえてくる。声が聞こえる方向を見ると、何やら大工や騎空士達が慌しくしていた。

「何かトラブルか？」

「うくんどうだろう……あ、ちよつとお兄さん！」

「はい？」

どうもただ事ではないと思いドラックが自分達の傍を通り過ぎようとした一人の青年を呼び止めた。

「急に騒がしいけど、何かあったの？」

「ああ、実は誰かが巨大な魔物か何かに攫われたらしくてな。今警備や騎空士の奴等が

それを追おうと小型艇を緊急発進させてるんだ」

「小型艇と言う事は空に逃げられたのか？」

「そう、あつ！ あれだ、見えるかあの羽の奴に一人攫われたんだ！」

青年が指を指した方向を二人は見上げた。そして空を見上げると巨大な羽を羽ばたかせる影が見えた。

「鳥か？」と思った。それにしてもデカイ。青年の言う通り魔物だろうかと思ったが直ぐにその巨大な影が掴むモノに目が行って驚く。

「まさか、おい……あれ……」

「うっはあ……ははは、マジかよ団長君っ!？」

「……どうした？」

ドランクが大きく叫びオルキスと格闘していた黒騎士も様子のおかしい二人に気が付いた。

「ちよちよ、あれ見て下さいよ〜！」

「何を騒いで……」

「……空？」

今度はドランクが慌てた様子で黒騎士に空を見るように言った。わけがわからず黒騎士は空を見上げ、黒騎士の手から解放されたオルキスもつられて空を見た。

そして二人の視線に飛び込んで来たのは――。

「は、放せえ――っ!!」

「これ、暴れるでない。上手く飛べぬではないか! 今落ちると空の底じゃぞ!」

「お、お前もう島の外に!? ふ、ふせけ、ぎやああつ!? 風が、風がああ――っ!」
 「むう、今日は横風が強いとう」

羽を生やす少女に捕らわれ、ここまで聞こえる程の大声で叫び、ガロンゾの外へと飛んでいく星晶戦隊（以下略）の団長の姿があつた。そして距離は遠いが団長もまた自分を見て啞然とする黒騎士達に気付いた。

「あ、くろ……黒騎士さああ――んっ!? た、たすけ、のわあああ――っ!」
 「さあ行くぞヒトの子よ! こまいのが追つて来よつた。振り切るからここからはスピードアップじゃ! 人も少ない遊たたくぶのに相応しい場所を探すとしよう!」
 「い、い――や、あ、あ、あ――っ!」

呆然としてそれを見る事しかできない黒騎士達。言葉が出ないとはこの事であろうか、まるで彼の置かれた状況がわからない。数十分前に別れた男が、今度は星晶獣と思われる何者かに攫われ島の外へと猛スピードで飛んで行った。何をどうすればそんな事になるのか。まさにドラंकが言つた通り「想像もつかない」である。

だがただ一人オルクス、彼女は飛んで行った団長を見て一言。

「お兄さん……楽しそう……?」

と、見当違いな事を言った。

■ 四 うちの団じや日常茶飯事だぜ!

「団長がまた攫われた?」

「(; . . ω . .) ニカイメ……」

「何ヤツテルンダ、アイツハ……」

宿の待合室、そこで急ぎ宿に戻ったカルテイラから団長誘拐の事を聞かされたコーデリア達は心配すればいいのか呆れればいいのかわからない反応を見せていた。

その反応を見てノアもまた微妙な表情を浮かべていた。

「彼って前も攫われたの?」

「一度帝国軍に捕まった事が有ってね。その時は状況が状況であつたが……」

「今回は星晶獣が直接攫つて行つたのよね?」

「そうだね。あれは確か……ガルーダだつたかな」

ルナールの問いにノアが答えた。

「ガロンゾ近辺で何度か見た事はあるよ。風の星晶獣で少女の姿で翼を生やしているか

ら間違いないと思うけど……」

「けど星晶獣となればそんな姿の者はいくらでもいそうだねえ」

「今その正体は議論しても意味無いだろう。相手の目的も不明だが、重要なのは団長が星晶獣に連れ去られたことだ」

フィラソピラ達が団長を攫った星晶獣の正体に関して話し合うが、コーディアの言う通りその正体は今議論する意味はない。

良くも悪くも慣れた団員達は焦る様子を見せないのは流石と言うべきか。

「団長さんの行方は何処でしょうか、とことん心配です……」

「ウチ等が報告する前に島の警備やらの人等が小型艇で追ってくれたみたいやけどな」

「その言い方では無駄だったようだね……」

「速度上げた星晶獣があつと言う間に振り切ったそうや。搜索は継続中らしいけど期待せん方がええやろなあ」

「オイラも追いかけたが撒かれちゃったからな。ただの騎空艇で追えるわけねえよ。オイラの追跡を交わすとは中々の星晶獣だぜ」

「例のスピード特化にはならなかったの？」

団員の間でも稀に話題に出てくるB・ビー第三の形態“スピード特化”。見た事は無いが如何にも追跡向きな名前から、変身しなかったのかとマリーは疑問に思った。

「あれ相棒に人口の多い場所じゃ絶対使うなって言われてんだ」

「けど緊急時じゃないの」

「そうなんだけどよう、あれ持続力ねえから島の外だと分が悪いんだよ。それにあの形態スピードの制御が難しいからどんだだけパワー抑えても初速でソニックブーム起きて狭い島内じやかなり被害が出ちまう」

「うん、団長が止めろって言うのわかったわ。絶対止めてよね」

悲惨な光景を想像してマリイも冷や汗をタラリと流す。うつかり使えば周辺の民家は吹き飛び、離れていても窓ガラスなどが粉碎されただろう。万が一そうなれば賠償金その他諸々が発生、それを考え団長は自分の許可が無い限りスピード特化の使用は禁止させていた。

「まあ大体でも気配は追えてるから無理に追う必要も無いと思つてな」

「けれど、団長殿は無事なのでありますか……?」

「その点は平気だろ、相棒だし」

「うむ、今私の均衡センサーでも気配を探ってるが団長は無事だろう。団長だしな」

「正直放ツテオイテモ帰ツテキソウダカラナ」

「そ、そうでありますか」

ゾーイが真剣な表情で団長と星晶獣の気配を探った。表情は真剣そのものであるが、

彼女の均衡センサー（アホ毛）がピコピコ動いているのでギャップが凄まじい。

しかし真剣に心配するシャルロッテに対してB・バイ達二人の団長への妙な信頼がコメントに困るコーデリア。実際シャルロッテより付き合いの長いコーデリアも「多分大丈夫なのだろうなあ……」と内心思ってしまった。

「それで彼が向かった場所は？」

コーデリアが訊ねるとB・バイとゾーイがムムムーンと力を込めた。ゾーイは更に均衡センサー（アホ毛）が跳ね動く。

「うん、これは……ルーマシー方面、それよりも西寄りにむかっているようだ。途切れ途切れだが追える」

「ガルーダの奴人気のない場所を探しているようだったからな、そこからルート予想もつくぜ」

「人気の無い……この周辺はガロンゾがある関係で騎空艇の行き来の多い地域のはずだが」

多くの騎空艇が修理のために訪れるガロンゾ。当然その周りの航路も多くの騎空艇が行き交う事になり、自然と航路上にある島は人が定住するようになり、無人島の様な島も無い。

「……も、もしかして」

「何かわかるのかい、セレスト？」

ルーマシー方面と言う事を聞いてセレストが何か思い当たる様子を見せた。皆の視線がセレストへと集まる。

「せ、星晶獣の持久力でここから行ける無人島だと、多分……」

「多分？」

「……わ、私が前居た島、かも……」

セレストが居た島。だがそう聞いてピンとくる者は多くなかった。マグナシックスの面々は唯一思い当たる島がる。

「前居タ……トラモント島ノ事カ？」

「う、うん……居たのは本体の方の事だけどね」

「トラモント……ああ、聞いた事があるねえ。確か数十年前から立ち入る事が出来なくなつたと聞いているけど」

ファイラソピラがトラモントと聞いて初めてその島の事を思い出した。

「深い霧に包まれて騎空艇の出入りが不可能になつて、もう名も忘れられた島……その霧つてセレストが原因だったのかい？」

「う、うん……ちよつと、色々とありまして……」

「こいつ島の人間全員ゾンビにしたんだよ」

「うあわんっ!? い、言わないでよシユヴァリエエ〜っ!」

申し訳なさそうに縮こまるセレスト。マグナシックスの面々は本体の方が何かしら面倒を起こしているが、彼女の「死を奪う」能力を考えればその中でも取り分けて島に齎した被害は大きい。

「酷い事するのねあんた」

「言わないでえ〜……」

冷めた視線をメドゥーサに向けてその視線から逃げるように悶えるセレスト。初耳の団員は割りとドン引きであった。

「い、今はもうジータが解決したもん……そりや、私が悪かったけど……」

「セレストの過去はともかく、その可能性が高いわけか」

「う、うん……人なんていないし、船の行き来も無いから……か、確証は無いけど……」

「確証は無くとも方角的に可能性があるならば行く必要がある」

「けどどうやって行くのよ? エンゼラ修理中でバラす準備しちやっただでしょ? そ

もそもミスラの契約でエンゼラも島から出れないじゃない」

「ミスラ……」

メドゥーサの指摘は尤もで、既にエンゼラはドッグに固定され、後は積荷を降ろすだけの段階だ。しかもミスラの契約により改修前でオルキスを欠いた状態のエンゼラは

空を飛べない。ミスラも申し訳無さそうに回っている。

こうなると出費になってしまいが何処かの騎空団に依頼を出し、島まで連れて行ってもらおうよう頼むべきか。そう誰もが考えた時そつとセレストが手を上げる。

「ほ、方法はあるよ……」

「何かいい案があるのかね？」

「う、うん……わ、私が皆を運ぶ……」

「セレストが？」

皆がセレストの言う意味が理解できなかつた。だがゾーイが「成る程」と手をポンと叩く。

「確かにセレストなら我々全員でも運べるな」

「え、え？　ちよつとどう言う事よ？」

「ルナルル、聞いてないか？　セレストは元々『騎空艇型』の星晶獣なんだよ」

「あつ！」

ゾーイに言われルナルルは思い出した。以前セレストと耽美物を通じ交流するようになった時、彼女もセレストの過去について多少聞いていた。セレストの通常形態は、本来騎空艇の姿——それも幽霊船の様な姿と聞いていたのだ。

「確かに聞いたけど……あなた、それ私達も乗せられるような姿だったのね」

「そうなの……エ、エンゼラに乗ってるから特に言う必要なくて……」

セレストの意外（？）な正体と特技がわかり団長追跡の目処が立った。後はそれに全員で行くかどうかであった。

「団長最後の叫びが、エンゼラを頼む、と言う事だからな」

「自分が攫われてるって言うのに咄嗟の言葉が船の事か……坊主らしいっちゃらしいのか？ よくわからねえがな。しかし積荷を降ろせば作業は出来る以上そつちも済ませたいな」

「……カリオスト口殿の言う通りか。ここは救出班とガロンゾ待機班で別けよう」

本来なら全員で行くべきなのだが、団長がエンゼラを頼むと言う言葉もある。

それに誰も星晶獣一体のために団長が死にそうになるヴィジョンが浮かばないのだ。ある意味団長への安心と信頼が有った。半面不幸な目に遭うヴィジョンは幾らでも浮かぶのが悲しいところであるが。

ではどの様に班分けをするか、とコーディネアが話を進めようとしたところで思わぬ訪問者が現れた。

「その話、我々にも聞かせてもらおうか」

「……貴殿は」

ふいにかげられた声にコーディネアが振り向くと、そこには帰ったはずの黒騎士達が

立っていた。

「やつほく皆さん。また来ちゃいました〜」

「来ちゃったってあんた……自分等もう出来る事ないゆうて、ほんのさつき別れたばっかやん。どないしたんや」

「どうしたはこちらの台詞だ」

「……さつき空の彼方に消え行く団長を見た」

スツルムがそう言うど皆「あ〜」と何とも言えない顔になる。

「我が目を疑ったぞ……数十分前に別れたばかりの男が星晶獣と思しき存在に攫われ空を飛んで行く光景はな」

「うーん、返す言葉も無いな!」

「元気に言うんじゃねえよフェザー」

呆れかえる黒騎士の言葉に答えるフェザー。B・ビィが思わず突っ込むが実際返す言葉は無い。

「それで気になり急ぎ状況を聞きに来たが……救出には向かうのだな?」

「当然だ。団長を放つては置けない」

「……だろうな。ならこの二人を連れていけ」

「なに?」

何を言うのかと思えば黒騎士は徐にドラックとスツルムの二人を指差し連れて行けという。予想だにしなかったその提案にコーデリア達は目を見開き驚いた。

「どういう事かね？」

「話の最後は聞こえた。救出班と別けるのだろうか？ 人数を分散するならば、戦力はあつて損は無いはずだ」

「確かにそうだが……」

「当然ただ善意で言うのではない、我々もあの男に何かあれば困ると言うだけだ。ミスラの契約上人形とあの男、契約した両者が揃っている必要があるからな」

帝国の最高顧問の言葉にコーデリアは裏を探ろうとした。何か思惑があるのか？

しかしそう言った意図は感じられない。本人が言うように善意ではなく、ただ自分達も困るからと言う理由での考えであろうとわかった。

「……いいだろう」

仮に思惑があるにしろ、頑なに断る理由も無かった。コーデリアは右手を黒騎士へと差し出す。

「その申し出受けさせてもらおう」

「うむ」

そして両者は手を結んだ。

両者の間にはつきとした信用は無くとも、ただ団長と言う人物を助けるために予想外の共闘が始まろうとしていた。

その一方で――。

「うむむ、案外人一人運ぶのは疲れるのう……手が痺れてきたぞ」

「怖い事言うなっ!!? 離すなよ、絶対離すなよ!」

「おっ? それは妾も知っておる。確か“フリ”と言うものじゃったな!」

「フリじゃねえマジで言ってるんだよ!」

団長は極めてスリリングな空の旅を強いられているのだった。

ガロンゾ帰還への道 編

団長とは落ちるもの

一 快適じゃない空の旅

夕焼けの中を飛ぶ一体の星晶獣がいた。両手で一人の人間を掴み上げ、傍目から見ると非常に危なっかしい飛行を行っている。

「日が沈んできちゃったよ。すっかり夕暮れじゃないか……」

「嘆くな嘆くなヒトの子よ。今は空の旅を楽しむがよいぞ」

「おめえの所為でこんな思いしてんだよ……」

星晶獣に掴まれたまま疲れ切った表情を浮かべるのは「星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y」の団長である。ガロンゾで攫われ一気に島から離脱してそのまま空を移動している。

「途中何度も落ちるかと思っただんだぞ……気が休まらんわ」

「心配いらん、決して離さぬ」

「嘘つけ!! 途中疲れたとか言って片手持ちにしたところか、何度も放り投げたろっ!!」
「はて、そうじゃったかのう〜?」

「い、この野郎……っ!」

現在彼は両腕を掴まれたままで運ばれている状態だった。ひとたび突風が吹きでもすれば、哀れ空の底へと落下して行く事になりかねない。

しかもこの星晶獣、途中団長が話した通り片手持ちで団長を運んだり、休憩と称して団長を放り投げた後両手を休め再キャッチなどやりたい放題していた。当然、団長の気が休まる暇は無かった。

「それといい加減聞けど……お前誰なのよ?」

あまりの突然の事であったのと、ガロンゾからかなりの距離を高速で飛行したために風圧をもろに受けて喋れない状況が続く、更に道中落ちそうになったりを繰り返したために聞き逃した星晶獣の正体。やっと落ち着いたのかそれを聞く事が出来た。

「言ってなかったかの?」

「ねーよ、言ってるねーよ」

「ほほ、すまぬすまぬ! お主を見つけて昂つての! 今こそ名乗ろう、わらわこそ光り輝く神鳥ガルーダじゃ!」

「知らんっ!」

「のじゃ!？」

力強く否定されるとは思わなかったのか、ガルードは結構ショックを受けた。

「し、知らぬのか? 結構色んな島で祀られれると思うのじゃが……」

「知らんもんは知らんわ! 人攫いする様な星晶獣なんぞ知るか!」

「ひ、人聞きの悪い事言うでない! ちよつと遊びに誘っただけじゃ!」

「こんなアグレッシブなお誘いあつてたまるか!? 人攫いだよ、誘拐だよ、神隠しかよつ!？」

「うぬぬ〜っ! そ、そう言われるとなんかそんな気がして来たぞ……」

今更自分の行為が人から見て乱暴極まる行為と思ひ出すガルード。そんな姿を見て

「こんなのしかないのか、星晶獣……」と団長が思うのも無理はない。

「……まあよい! どの道やる事はかわらんからの!」

「おいこら」

だがガルード、ここで反省を放棄。

「ふざけんなてめーっ!?! 星晶獣だからって何でも許されると思うなよ!?!」

「ほほほっ! よいぞよいぞ、星晶獣に対しても変わらぬその豪気な性格が実によいっ

! 噂通りの男じゃ!」

「うるせいっ! 陸着いたら覚悟しとけよこの野郎、てめー畜生この野郎っ!?!」

「ほーれ、見えてきたぞっ!」

「聞けえーっ!」

馬耳東風極まるガルダ。彼女にはもう目的地である島しか見えていない。

文句を言いつつも団長はガルダの言う人の居ない島を見た。そこはルーマシー程ではないが、木々が茂り自然豊かに見えるがどこか陰々とした雰囲気があった。

「何だあの島……」

「年中霧で覆われる小さな島じゃよ。数十年前から更に霧が濃くなつて出入りが難しかったが、最近その霧も晴れ出入りがしやすくなつたんじゃ。あそこにはもう人はおらん」

「人が居なきやなんなんだよ?」

「決まつておろうっ! わらわと遊んでもらうぞ!」

「お断りします!」

「なんでじゃ!」

ガルダはまたショックを受けた。冷静に考えれば理由もわかりそうなものであるが、彼女はそこら辺を察する気配は無い。

「遊ぶつて言うけど戦うつもりだろお前っ! 無理やり連れ去られたうえに何だつて星晶獣と戦わにやならんのだっ!」

「少しぐらい良いではないかっ!」

「嫌に決まってるだろ馬鹿野郎!」

「もうわらわは永い時の中力を持って余して、暇で暇でしようがないのじゃ! そんな中で主の様な男が現れてみよ、遊びたくなるじゃろう!」

「ならんわボケツ!」 他の星晶獣でも相手してろ!」

「他の星晶獣は殆ど島で寝てるか、役目を優先してわらわの相手なんぞしてくれん奴ばかりなのじゃ……誰もわらわと遊んでくれぬ。世の中、世知辛いのじゃ……」

「さみしんぼかっ!」 いや、ちよつと可哀想だが……とにかく戦うのはごめんだっ! 俺は平和主義なのっ!!」

「いやーじゃー! 遊びたいのじゃーっ!」

「わがままかっ!」

間違つて落ちれば空の底なので、团长も本気で抵抗が出来ず、二人騒ぎながらそれでもガルーダは飛ぶ事を続け着々と島へと近づく。

いやだいやだのいやいや合戦。しかし奇妙な状態の二人が島に近づくと、突如として濃霧が二人を覆った。

「あん? なんだ、これ……突然出て来たぞ?」

「むむむう? おかしいのう、霧はもう晴れたはずじゃが……」

自分達を包み込む深い靄に戸惑う二人。だがもう島の上空と言う所でガルードダが何かに気が付いた。

「なんと、これは……っ!? い、いかんっ!」

「なにっ!? 今度は何だっ!?」

「これはただの霧ではない!」

「うおっ!」

言うが早いかガルードダは身を振りその霧の中から逃れようと高速で飛翔した。

「な、なんだってんだよーっ!?」

「この霧は『死の瘴気』じゃっ! 長居すれば身が朽ちるぞっ!」

「はあぁーっ!? ふざけ、早く逃げろよっ!」

「じゃから今逃げとるじゃろっ!」

ガルードダは必死に羽ばたき瘴気から逃れようとするが、何時までも霧から脱出できる気配が無い。それどころか瘴気が濃くなる一方だった。

「なんつー瘴気だよっ!? もう先が見えねえ!」

「この規模、そして肌で感じる程の死の気配……こんな濃い瘴気を出せるのは、あ奴しかおらぬっ!」

「聞きたかないがその『あ奴』って星晶獣かっ!」

「そうじゃー！」

「くそつたれえ——っ！」

凄まじい形相で悪態をつく団長。しかし今のガルードに彼を気にする暇もなく、両手で掴むので精一杯だった。

「あ奴め何故この島に瘴気を……もうこの島に人など居らぬだろうに」

「それよりこのままじゃ不味いぞ！ 俺なんかもう具合悪くなってきた気がす……つておいガルード前まええええ——っ！」

「のじゃっ！」

団長が前方を指さし叫び、ガルードが前方を向きなおすと瘴気の中から巨大な影が現れた。二人を圧倒するその巨大な影の中で、怪しく輝く紫色の光を団長は見逃さなかった。

「なんじゃあこりやあぁーっ！」

「馬鹿なっ!! なんじゃこの大きさは！ あ奴一体何が……っ！」

「ウ、ウウ……ウヌアアア——ッ!!」

だが怪しい光に構う暇は無く、突然現れたその巨体に驚く二人。すると影は苦しそうな雄叫びを上げながら手を振りかざした。瘴気を掻き分け現れたその手に肉は無く、今にも朽ちそうな骨だった。

「しま……っ!?!」

ガルルーダが咄嗟に身をよじる。だがそれよりも早くその影が伸ばした手でガルルーダを振り払った。巨大な手で瘴気ごとかき回すように振り払われたガルルーダは態勢を立て直す事が出来ず、強風に飛ばされた木の葉の様に飛ばされてしまう。

「のじゃあああ——っ!?!」

「ぬわああ——ッ!?!」

吹き飛ばぶ中ガルルーダはついに両手を緩めてしまい団長はガルルーダから離れ、別々の方
向に飛ばされていく。

吹き飛ばされたガルルーダ、そして何処ぞへと落ちて行く人間。それを見ると影は呻き
声を上げながらも、徐々に瘴気と共に姿を消していった。

■ ニ セレスト出航

——翌日、早朝ガロンゾ島。

島の栈橋に島の住民も、職人すら見たことが無いような騎空艇が一隻泊まっていた。
朝日に照らされる中であつてもその艇は異様な存在感を放っていた。

“不吉”。そう誰もが思った。

「話には聞いてたけど……確かに幽霊船ね」

そんな艇を見ていたのはルナールと星晶戦隊（以下略）の面々である。彼女が艇を見て思わず幽霊船と言ってしまう程にそれはおどろおどろしい外観だった。彼女だけでなく、他の団員も同様の事を思った。

折れ曲がったマスト、爛れた様に船体にぶら下がるロープに帆、所々剥がれ落ちた船体、そして破れた気嚢はまるで怪しく笑う顔のようで、中からは目の様な光りが発せられている。

誰が見ても「飛ぶわけが無い」と思うだろうが、しかしこの艇は飛ぶのだ。見た目は問題ではない。何故ならこの艇は、艇であつて艇ではない。

「み、見た目は固定されちゃつてるから……き、気味悪くて、ごめんね」

当たり一帯に響く声。それは艇から発せられた。

「あ、こつちこそごめんセレスト。けど何と言うか……雰囲気あつて私は好きよ？　また今度機会あればデッサンさせてよ」

「そ、そう？　えへへ、いいよ……」

照れた様子を見せる艇。それは間違いなくセレストの声だった。

これはセレスト本来の姿、あるいは通常の形態と言ふべきなのは不明だが、このセレストは空を漂う幽霊船である。普段団内での姿はマグナ形態を省エネにしたもの、星

晶獣としての年季は艇の姿の方が長いのだ。

ガルーダに突如攫われた団長が、ガロンゾから嘗てセレストが身を置いていた小さな島トラモント島方面へと移動した事がわかり、急ぎ残された団員は救助隊を結成。アウギユステとルーマシー群島を合わせれば団長救出作戦は3度目であった。

またエンゼラがミスラの契約で現在航行不可のため、移動手段として自ら艇となり移動する事を提案したのはセレストだった。

「すまないセレスト、君に負担をかけてしまう事になるが」

「だ、大丈夫……伊達に星晶獣じゃないもん……」

「ああ、頼らせてもらおうよ」

一人艇として団員を乗せ移動する事になるセレストを氣遣うコーディネリア。だがセレストは普段通り気弱な返事ながら自信を込めて言った。

「コーディネリア殿」

「こつち終わったでー!!」

セレストと話すコーディネリアの元に、シャルロツテとカルテイラが駆け寄ってきた。

二人ともコーディネリアに頼まれセレストへと乗せる積荷のチェックを他の団員と行っていた。

通常ならリユミエール聖騎士団団長であるシャルロツテがコーディネリア達に指示を出

すのが筋であるが、星晶戦隊（以下略）での経験はコーデリアが上である。その事を踏まえシャルロットテから、コーデリアに自分を含め団員に指示を出すように進言した。

始め騎士団の団長であるシャルロットテに指示を出すことに抵抗があつたコーデリアであつたが、救出に必要な物資の手配にその他諸々の作業を行う内に気にする暇は無くなつた。

「お二人とも、ありがとうございます」

「指示通りちゃんと一週間は余裕なぐらい食料と水入れといたで。結局準備で出発は一日伸びてもうたけどな」

「仕方あるまい、なにせ急だから」

「ゆーて、トラモント島が目的地なら物資多すぎるぐらいやけど」

「普通ならばね。ただそこに団長がいるか今も不明だ。それに団長だから……」

「まー仮に首尾よく救助できてもなー……、帰りの道中トラブル巻き込まれて帰るのが遅くなりそうやもんな。まあ空路上に物資補給できる島もあるし大丈夫やろ」

「後は出発するだけであります」

「ほな、こちらはこつちでエンゼラの作業続けとくわ」

「よろしく頼む。直ぐ戻れるか不明だからね」

団長救出にあたり、団員はガロンゾ待機と救出班で分かれる事になる。攫われる間

際、エンゼラを頼むと叫んだ団長の意志を汲んでの事であった。

救出班にはコーデリアを中心として、ティアマト、コロツサス、シユヴァリエ、B・ビィ、ゾーイ、メドウーサ&メドウシアナ、シャルロット、ハレゼナ、カリオストロ、フェザー、ルドミアリアと戦鬪面を充実させた。

待機班はカルテイラを中心としてリヴァイアサン、ユグドラシル、マリィ、カルバ、ラムレッタ、ユーリ、フィラソピラ、ブリジール、ルナールの面々が残る。

本来ならリヴァイアサン、ユグドラシルは救出班へと入るべきだが、エンゼラから降ろす彼個人所有の水槽と、それに入っている生体の管理にリヴァイアサンが残る必要がある、またユグドラシルはノアと共にエンゼラ強化のための大仕事が待っていた。

また主に戦鬪員であるユーリだが、リヴァイアサンとは別で人間の男手が必要になる場合を考え、フェザーに団長救出を任せ一人男性メンバーとして残る事を決めた。

「カルテイラ殿が残るのであれば、後の事が安心して任せれる」
「任せとき！ 親方のおっちゃんとかく作業進めとくわ」

早くて一月、エンゼラの改修作業の日程だが、ノアとユグドラシルの二大星晶獣が作業に加わる事でそれがどう変わるかは不明である。それでも団員は皆二人と船大工達の手腕に期待を寄せた。

「物見遊山にでも行くつもりか貴様等。話が済んだのなら行け」

「出たで空気読まん奴が」

最後の打ち合わせを行っていたコーデリア達の傍に黒騎士とそれについて来たオルキス達が現れる。

「色々段取りつちゅーもんがあんねん」

「もう乗船の準備も終えているのだろう。悠長にしている暇もあるまい」

「嫌味なやつちゃ！」

「まあまあ、カルテイラ殿落ち着く出あります」

プリプリと怒るカルテイラを宥めるシャルロット。そんな二人を見てコーデリアは苦笑した。

「黒騎士殿、これが我々のやり方なのだよ」

「自分達の団長が攫われていると言うのに暢気なものだな」

「だからこそだよ。あの団長の事だ……更に面倒な事になつていいる可能性がある。心に余裕を持つて行動せねば対処できないのだよ」

「……難儀な騎空団だ」

「なに、慣れると案外楽しいものだよ」

コーデリアは愉快そうだが黒騎士はそれを理解できない。黒騎士からすればはつきり言つて面倒な騎空団としか思えなかつた。聞けばこの団の仲間達は、殆どが自ら仲間

に加わったと言う。その点も黒騎士にとって理解しがたい事だった。

「お兄さんとの旅……楽しい?」

「ああ、飽きる暇が無い」

「そう……」

一方オルキスは黒騎士とは反対にこの団のあり方が羨ましそうであった。コーデリアから話を聞き無表情なのはかわらないが、楽しそうにしているオルキスを見て黒騎士は面白くなさそうにしていた。

そんな黒騎士の傍にシャルロットが近づく。

「黒騎士殿、今回は協力していただき感謝いたします」

「リュミエール聖国の騎士団長か……先にも話したが、あくまで利害の一致だ」

「それでもあります」

「……」

黒騎士とシャルロットが乗船のためかけられたタラップを見る。そこにはドラクとスツルムの二人が居た。

「あはは〜! まさかセレストに乗る事になるなんてね〜!」

「笑ってる場合か……本当に大丈夫なんだろうな」

「う〜ん、大丈夫なんじゃないの?」

「いい加減な事を……」

お気楽なドランクに辟易した様子でついていくスツルム。団長救出のため、ミスラの契約関係で無関係とも言えない黒騎士は二人の同行を提案した。

帝国からの人員と言う事もあり団員内でも抵抗が無いわけではなかったが、黒騎士が言うには二人は以前トラumont島にジータとともに立ち寄った事があると言う。そうであるなら確かに頼りになる戦力であった。また団長がトラumont島にいるか不明な今、何が起こるかわからない団長救出と言う作戦に人数がいて困る事も無い。意外なほどスムーズに二人の同行が決まった。

「スツルムに関して心配は無い。ドランクは……あんな男だが決して無能ではない。精々こき使つてやれ」

「ならば遠慮なく。それと、我々が島を離れている間でありませんが」
「わかつている。ガロンゾに居る間お前達の団に手出しなどせん」

ミスラの契約で帝国軍はこの島に残る事を強制されている。シャルロット達も自分達が離れている間、残った仲間の事についての心配は当然あった。それでもそこまでの不安は無い。そもそも今ガロンゾで帝国が星晶戦隊（以下略）に手を出すメリットは無く、更にリヴァイアサンとユグドラシル二体の星晶獣が居る。黒騎士の手元にはルリアと同様、星晶獣を従える力を持ったオルキスがいるが、流石に大星晶獣二体相手にはそ

の力も巧く発動は出来ない。

「その言葉、ミスラを介した契約として受け取らせてもらっても？」

「ミーン？」

黒騎士達の周りには、暢気そうなミスラ（省エネ）がクルクルと漂っていた。

「それでいい、ガロンゾでやり合う意味が無い。ただし全ての事が終わるまでだ。艇が直り、あの団長と人形が約束を果たせば帝国は貴様達を狙う」

「こちらもそれでかまいません。少なくともガロンゾの皆はこれで安心であります」

言質どころではない、ミスラを介した以上書類も要らない絶対の契約である。これで団長とオルキスの約束が終わるまでと限定的であるが、ガロンゾ内での星晶戦隊（以下略）の安全が保障された。

「もう話は済んだろう。いい加減出発しろ」

「そうでありますね。コーディネリア殿」

「ああ、ではオルキス。行ってくるよ」

「うん……お兄さん、待ってる……」

すっかり意気投合しているオルキスとコーディネリア達。黒騎士も呆れ返っていた。

コーディネリアとシャルロツテがセレストに乗り込むと、待機組も艇の外でセレスト達を見送るために並ぶ。そしてタラップが外され、いよいよ出発であった。

「皆出發だ！ 乗り遅れたものは居ないな！」

「チエツクカンリヨウ（*・ω・）ゞ イツデモオーケー！」

「よし、セレスト頼む！」

「りよ、了解……っ！」

セレストの気嚢内部の光りがより強く輝いた。そして船体からは紫色の霧すら漂い出してきた。辺りには珍しい艇（セレスト）が見れる言う事で野次馬も多かったが、どよめきが起きて皆が慌てて逃げだした。

「ちよちよ、ちよつとあんた！ この霧大丈夫なんでしょうねっ!？」

「だ、大丈夫……強い瘴気じゃなくて、ただの霧だから……は、張り切ると出ちゃうの……」

急に湧き出した霧に驚くメドゥーサ。セレストは問題無いと言うが視覚的にやはり恐ろしさが勝る。

「ひひっ！ ま、まあ本当に毒性も無さそうだし、あははーっ！ 色だけが怪しい霧と思

えば、あは、はははは——っ!？」

「コイツが言うと言得力無いな」

まるで霧の所為で可笑しくなったのかと思ってしまう程に笑うルドミリアを見て呆れるシユヴァリエ。しかし彼女はこれで通常運転である。

「団長おらんでも騒がしい面子には違いないな……、まあ頼もしいのも間違いないか。ほな頼むでー！」

「団長きゆんのこと任せたにやあ〜っ！」

「任されたっ！ では行つてくる！」

霧をもうもうと出しながらセレストがガロンゾを出航する。待機組が手を振つて見送る。互いの声が聞こえないようになると、待機組も自分達の仕事に取り掛かる事になった。

「さあ〜て、うちらものんびりは出来へんで！ 先ずはエンゼラから積荷おろさなあかん、皆キバリやあ！」

「——！！」

カルテイラの掛け声にユグドラシルが一際元気に反応した。彼女は特にエンゼラの改修で今日から頑張らねばならない。気合がみなぎっていた。

「そういうえば、シエロカルテ殿は見送りに来られませんでしたね」

そんな中でふとユーリがこの場に居そうで居なかつた人物の事を思い出した。

シエロカルテは昨日団長が攫われた事を直ぐに知つた。そして救出部隊が結成されたと知るや、誰よりも早く食料等物資の都合をつけてくれた。そして彼女と団長の繋がり（主に借金）を考えれば、この場においてもおかしくはない。だからこそ見送りに居な

い事をユーリは意外に感じた。

「うーん？　そう言えば昨日物資の用意をしてもらっている時、団長の行き先がトラモント方面って知って何か思い出したように考えてたねえ」

「……シエロはん、またなんで企んどるなあ」

フィラソピラの話聞きシエロカルテの友人として、そして商人の勘でシエロカルテが既にガロンゾに居ない事を察したカルテイラ。シエロカルテの目的、それはどこの騎空団も相手にしないつまらない依頼か、相手に出来ないややこしい依頼か、あるいは見るに見かねた厄介な人物の押し付けか、はたまた全部か。

果たして団長達がなんのトラブルも無く戻れるのか。「無理やろなあ」とカルテイラはもう自信を無くしていた。

■ 三 フェイトエピソード 幽霊少女が見た地味な流星

その島が「トラモント島」と人々に呼ばれたのは、もう何十年も前になる

霧が多いその島には小さな村が一つあり、その住民は大らかで懐が深く当時その島を知る騎空士達の間では人気の休息地であった。

しかしある時その島の霧が一層濃くなりだし、ついには出入りが不可能になるほど霧

が島を覆い包んだ。艇も、人も、何もかもがトラモント島に近づく事も、逆に島から出る事も出来なくなつた。そして何時しか人々の記憶からトラモントの名は廃れ、当時を知るもの以外からはただ「霧に包まれた島」とだけ呼ばれるようになった。

その霧の島にあのジータが立ち寄つたのが数ヶ月前になる。団長達と同様、とある戦いで傷ついた騎空艇グランサイファーを修理する為にガロンゾへ向かう航行中の出来事だつた。

彼女達は来る者を拒むはずの深い霧に飲み込まれこの島へと迷い込む。それもまた星の導きであつたのか、ジータ達はこの島が霧で覆われる原因を作つた星晶獣の存在を知り、そしてその星晶獣に囚われた島の人々と出会う。

その星晶獣こそが死を司る星晶獣セレストであつた。

セレストは何者かに呼び寄せられるようにしてこの島へとたどり着いた。そして島中の生き物から悉く死を奪つたのである。そうして死を奪われた住民達はゾンビ、或いは幽霊となり肉体が死を迎えた後も現世に存在し続けた。

セレストの力によつて島から脱出出来なくなつたジータ達は、セレストを倒す事を決め立ち上がる。そして見事セレストを倒し、セレストに囚われた人々を救つたジータ達は、無事に島を発ち再び旅を続けた。島に残る一人の幽霊少女に見送られながら。

その幽霊少女は名をフェリと言つた。島の丘にある館に住む彼女は、セレストの束縛

から解放されながらも現世へと残り続けた。なぜ成仏する事なく現世に留まれたのか、本人も理由はわからない。しかし自分にはまだやる事があるのだと運命を感じ彼女はそれを受け入れた。

ジータ達と共に島を出て旅をすると言う話も出たが、しかし彼女はそれを断った。彼女には生き別れた妹が居たが、その妹が島に帰ってくるかもしれないと思うと島を離れられなかった。幽霊の自分と違い年老いていても、或いは既に亡くなっている、その魂は家族の眠る故郷である島に帰ると信じて。

また彼女も島の外への魅力を感じたが、しかし旅立つにしても急であった。幽霊である以上荷物は無いが、それ以上に心の準備が必要だ。そんなフェリの意志を汲んだジータは、再会を約束しグランサイファーを飛ばし旅立った。

そうしてこの島は、フェリ以外には魔物が居るだけの無人島となった。今でも思い出したようにゾンビが墓から出てくるがそれはセレストとは関係ないただの魔物ゾンビである。意志の疎通も難しいようなら退治し、思い出の残る村を荒らされないように過ごしていた。

そんなある日の事、島をまた霧が覆うようになった。島本来の霧ではなく、セレストの時の様な異常な霧——それもより死を濃厚にした、恐ろしい瘴気が。

異常を感じたフェリは、今の家族とも言える幽霊の動物達と共に館に避難した。霧は

島の外周を覆いだし、やはりセレストと同様に島を孤立させようとしていた。「またセレストが現れたのか？」とフェリは思った。セレストは死を奪える星晶獣、自身の死を奪い復活する事もありえた。しかし直ぐにその考えは否定された。

霧の中に恐ろしい巨大な影が見えた。影だけでハッキリと姿は見えず、ただ霧の中からはその影が発しているらしい呻き声だけが聞こえた。

セレストではない、この霧を生み出しているのはあの影だ。そして影の正体は、間違はなく星晶獣だろう、そうフェリは確信した。家族を怯えさせるその影を退治してやりたかったが、いかんせん相手が強大すぎた。直接戦わなくても分かるほどに、影が発する異様な死の気配が凄まじかったのだ。

二日、三日……時間ばかりが過ぎ、フェリは焦った。恐ろしい事に影が発する瘴気が島を蝕み出したのだ。瘴気の浸食速度は徐々にではあるが、その影響は明らかであった。無機物有機物問わずあらゆる物が崩壊し出したのだ。

最早猶予も無い、放っておけば遠からず島は崩壊するだろう。だが霧が晴れたとは言え元からろくに騎空艇が立ち寄る事の無い島である。島には小型艇すらない、助けを呼ぶ事も逃げ出す事も不可能だった。

己の無力さを悔やみ一方で家族には大丈夫だと声をかける。しかし彼女もまた不安であった。島が崩壊した時、幽霊である自分と家族がどうなるのか想像も付かない。死

を振りまく瘴気、それを最早受け入れるしかないのか。

晴れぬ瘴気を館から不安げに眺めていた時、空を覆う霧の中から高速で落下してくる何かがあった。それが人間である事に気がついたのは、館付近の墓地に落下する直前だった。

暫し唾然として、我に帰ったフェリは慌てて館を飛び出した。急いで墓地に駆けつけると幾つかの墓が吹き飛び、小さなクレーターが出来上がっている。その中央には、大の字の様な間抜けなポーズで倒れている少年の姿があった。

死んでいると思ったが息はあった。しかも殆ど外傷が無い、ただ気を失っているだけだった。かなり激しく落下していたので、無傷な事に疑問を感じたが放置するわけにもいかない。急いで少年を担ぎフェリは館へと戻った。

そしてこの少年こそが島を覆う瘴気と言う暗雲を払う光となる事を、フェリはこの時知るよしも無かった。

■ 四 おっとり系天司

フワフワとした感覚、それでいて体の自由があまり利かない。これには覚えが有った。そう、これは確かアウギュステでの記憶……ジータに瞬殺されたあの日の夜の夢

……。

「あら、おはよう。つて、ここで言うのも可笑しいわね」

ふーっ！ 夢じゃねえぜ！

羽毛の様な髪に、さりげなく際どい服装の女性。確かガブリエルとか言う天司……
だったか。

「あんたが居るつて事は俺つてまた死にかけてるのか……」

「そうみたいね。何時もみたいに空を観察したらあなたが現れて驚いたわあ」

「と言うかなに、俺つて死にかけるとここに転送されるシステムなの？」

「なんでかしらねえ」

俺が知るか。

「それと厳密には意識が飛んで通常なら死んでておかしくも無い状態つて言うだけで、
死にかけてるわけじゃないわ」

「それ一般的に死にかけてるつて言いません？」

「だって貴方死にそうに無いもの」

あんま嬉しくねえ！

「……はあ、それとあの筋肉達磨とかの人は居ないんですね」

「ウリエル達の話？ 一応呼べるけど、呼びましようか？」

「遠慮、絶対面倒なんで」

「うふふ、それがいいかもね。ウリエルにミカエルつたら、貴方と戦いたくて仕方ないみたいだし」

聞きたくなかったなその情報。

「しかし今度は死の瘴気に吞まれたのね。腐り落ちもせず、ただ気絶だけなんて……人の身で本当によく無事だったわね」

「……星晶獣の凄い人にそんな事言われてしまった。聞きますけど、俺ってまだ人間ですよね。まだ」

念のため『まだ』と言う部分を強調しておいた。

「そうね……確かに戦闘力が飛びぬけはいるけど、貴方は普通の人間だわ。修練のみでヒトの力を越えた存在なんて空の世界じゃ珍しくは無いし……その点は安心していいわよ」

安心していいのかそれ。

「それよりも普通過ぎて逆にすごいわよ。もう普通、ほんと凄い普通なもの、全体的に普通で本当に普通だから」

「あんま普通、普通言わないでくれますか?」

まあ良い、一応俺はいつの間にか人外になっていたとかではないらしい。ばあさんに

秘密裏に改造されてたんじやないかと最近不安だったからな。

「それで相変わらず大変そうだけど、仲間も増えてるし旅は順調？」

「順調ではないと思いますがね……増える仲間も仲間だし」

「うふふ、そう言わないの。みんな良い人そうじやない、きつとあなたの助けになるわよ」

「それも否定はしないけどさあ」

「確かに人数も増えると大変だろうけど、大切になさいな。これからも増えて行くだろうから」

「増えるかなあ……」

「増えるわよ。その方が私も見てて楽しいし」

楽しいと申したかこの天司。

「あなたの暇つぶしの為に騎空団やってんじやないんだけど」

「うふふ、ごめんなさいね。けど楽しそうなんだもの」

「あつそ……」

「うふふ……あら？ そろそろね」

ガブリエルがそう言うのと俺の体がまた更にフワフワしてきた。現実の俺が目覚まそうとしているのだろう。だが意識を失う瞬間を覚えていないので、どんな状況で目を

覚ますのかわからん。ぶっちゃけ怖い。

「そんな不安そうな顔しないで。貴方なら大丈夫よ」

「本当かなあ……」

「大丈夫、貴方はあのジータちゃんの攻撃にも耐えれた子なんだから」

あ、急に大丈夫な気がして来た。いやジータの時が決して無事であつたわけではないが。

「それじゃあね。また会いましょう」

「出来れば会いたくないっす。死に掛けるのは御免なんで」

「うーん……そうもいかないかもね。貴方には色々頼みたい事あるし。そろそろパンデモニウムがねえ」

「ねえ、去り際に不穏な事言うの辞めてくれませんか？ 冗談ですよ、天司ジョークです

よね!」

「まあ貴方なら頼まなくても勝手に関わってくれそうね。その時はよろしくお願いねえ」

「ちよ、それどう言う——」

ガブリエルの言う事の意図を聞く前に、一気に体が落ちていくような感覚が襲ってきた。そして視界が暗転していった。

■ 五 死ぬかと思つたぜっ！

「どう言うことーっ!？」

「ふええっ!？」

「……おう?」

ガブリエルに言い切れなかつた台詞を起き上がりながら勢いで叫ぶ。どうやら現実に戻ってきたらしい。辺りを見渡すとどうやら何処かの家の中に居るようで、その家主と思われるエルーンの少女がビクビクしながら俺を見ている。どう考えても今の叫び声で驚かせてしまったなこれは。

「えつと……あは、ははは。申し訳ない。ちよつと夢見が悪くて……」

「あ、ああ……そうか。いや目が覚めたなら良いんだが」

少し苦しい言い訳を言つてしまった。まあ嘘ではないのだ。あそこが現実でないのなら、夢みたいなものだし。そして悪夢とまでは言わないが、いい夢ではない。

「んで……重ねて申し訳ないのだけれど、この状況を教えてくれると嬉しいんだけども」
「そうだな。まずここは私の家だ。貴方が近くの墓地に落ちてきたから連れてきたんだ」

「落ちて……また落ちたのか俺」

「よく落ちるのか？」

「不本意ながら」

海やら遺跡やらで何度も落ちてる。いい加減にして欲しいぜ。しかも墓地に落下、普通ならそのまま埋葬ルートである。縁起でもねえぜ！

「急に落ちてきたから驚いたよ……旅人だつてまともに来ない島で、まさか人が落ちてくるなんて」

「いやお恥ずかしい。もうどこからどう話せばいいか分からない事情があつて」

星晶獣に攫われてここまで来て、また星晶獣っぽい奴に襲われて落っこちた。うーむ、信じてもらえる気がしないぞう。

「まあ落ちる時はどうなるかと思つたけど運がいいや。人が居るところに落ちれたんだからな」

「……いや、残念だが運が良いとはいえないな」

「はい？ そらまた何で」

「もう……この島は終わるかもしれないからな」

「は？」

その後俺は彼女、フェリちゃんから色々と詳しい話を聞いた。

現在この島、トラモント島は恐ろしき霧——死の瘴気が蔓延している。その影響で島は蝕まれ崩壊を始めていると言うのだ。話を聞く限り霧の中に見えた巨大な影が原因であるのは間違いないが、フェリちゃんにはそれを止める手立ては無く困っていたらしい。

そんな中俺が空から落下してきたわけだ。島が大変な時に落ちてきてしまい悪い気がする。しかも館にまで運んでもらい介抱までしてくれるとはなんと良い子だろうか。しかも落下ダメージもあるが、拉致による疲れの所為なのか俺は一日寝てたらしい。前回の時と言いどうも天司空間（仮称）は現実と比べて時間の流れおかしいな。数十分に満たない時間が現実では数時間から一日と幅がある。

「だがまあいったな、そんな事になってたのか」

館の窓から外を見れば島の全てをあの瘴気が覆い尽くしていた。あの何かに突っ込んでいたと思うと今更ながら寒気がした。

「小型艇の一つでもあればいいんだが、残念ながらそんな物はなくてな。貴方一人だけでも逃げる事ができれば良かったんだけど」

「フェリちゃんは気にしなくていいよ。そもそも俺を連れてきた奴が悪い」

「そう言えば貴方はどうやってここまで？ 騎空艇のような物は見えなかったが」

「んー……端的に言うと、星晶獣に攫われて」

「え？」

「んで、あの霧の中の星晶獣に襲われておっこった」

「は？」

はいはい、そう言う反応になるよね。知ってた知ってた。そういうヤグルーダの奴どうしたんだろう。俺と一緒に吹き飛ばされたが。

「あのさ、俺の他に翼の生えた女の子居なかった？ そいつ俺を拉致った星晶獣なんだけどどっか吹き飛ばされたみたいでさ」

「え、いや……貴方以外には誰も見てないが。本当なのか？ 星晶獣に攫われたって」「自分でも嘘であつてほしいと思うわ。まあ知らないならいいよ、別に知り合つて一日の間柄だし」

奴も星晶獣だ。最後まで元気に「のじやのじや」言つてたし、早々死にはせんだろう。「そういえば館の下に村が見えたけど……他の人は？ この館の中もフェリちゃん以外には誰も居ないようだけど」

「それは……」

俺の質問に対してフェリちゃんは言いあぐねていた。

島がこんな事態と言うのに、村の様子は窓から見た限りでも家々の明かりは消え人の気配も無い。運命を悟り諦め家で見つとしているわけでもなく、全く人間の姿がないの

だ。謎の瘴気だけでなくこの島にはまだ秘密があるらしい。

しかし不思議なことに俺は、この島に関して妙な既視感を抱いていた。当然来た事はない。なのに何故かこの島の事を知っているような気がした。

不思議な既視感に頭を悩ませていると、部屋の扉の方から「キュイキュイ」「キュイキュイ」と動物の様な鳴き声が出た。

「ありや?」

「あつ!? だ、駄目じゃないかお前達つ!」

扉の方を見ればそこには犬の様な、ウサギの様な、それと丸い何かの姿をした青白く発光する謎の小動物がいた。それを見て慌てたフェリちゃんとその動物達を隠すようにして、小声で叱りながら部屋から追い出そうとした。

「まだ入っちゃ駄目だつ!」

「!」

「知らない人間がお前達を見たら混乱するから、駄目と言ったのに!」

「!」

「わかった、後で遊んでやるから! だからほら良い子だから部屋の外に……あれ、ジジがない?」

「!」

「おやまあ、こつち来た」

「うわーっ!」

だがフェリちゃんの妨害をすり抜けたウサギの様な一体が既に俺の元に駆け寄っていた。謎ウサギはピョンピョンと跳ね回りながら俺の周りをグルグルと回っている。

「ジジっ! お前何時の間につ!」

「ちよつとフェリちゃん、何この子めちゃクソ可愛いんだけど。何もう可愛さ無限大じゃん」

「って、あれ……?」

「!」

「そうかそうか。君ジジって言うのか、いい名前だな」

「!」

「なに、背中を撫でろ? この野郎おゝむしろモフらせろ、おりやおりやつ!」

「!」

「ふええ!!? ふ、普通に会話してるーっ!」

驚愕の事実。俺、謎生物の言葉理解可能。

とは言えもう驚くと言う程でもないな、ミ斯拉の謎言語分かる時点でもう手遅れですわ。けどいい、この癒し生物をモフれるならそんな事どうでもいい。

なので驚愕してるのはフェリちゃん一人であつた。

「あ、貴方ジジの言葉がわかるのか?」

「あー……フイーリングって言うのかな、まあわかるよ。他の子も……その子がベツポ」

「――!」

「んでその角二本がフージー、一本角がニコラ。他はともかく、君達どう言う動物なん?」

「――」

「ははあ、自分でもよくわからんと。まあいいんだ、可愛いし。ところで君達もモフらせてくれたまへ」

俺が頼むとフージー達が俺の元へと押し寄せる。人懐っこさ極まりだ。

ああ……小動物っていいな、俺子犬とか飼うの結構憧れてたんだよね。ザンクティンゼルでもたまに小型の野良魔物モフってたけど、ジータの面倒で家で飼う程の暇も無かつたし。

うちの団にはニル達やデイ達と言う小型つちや小型な面子もいるが、あれを小動物のカテゴリに入れてはいけない。本体のティアマトとゾーイ抜きでも尋常じゃない戦闘能力を秘めたれっきとした星晶獣である。まあ彼らも十分可愛いし良い子たちだけどね。

なんにしても今はこの目の前の子達だ。ああもう可愛い。ガロンゾでものんびりできず、生きた心地のしなかつた空の旅、謎の天司空間。短期間で積もり積もったストレスが消えていく。

ジジ、君耳下撫でられるの好きだな。

ベツポ、もつとモフモフさせい。

フージー、ニコラ、めちやモチモチじゃん、揉ませろ。

「可愛さに、心清めるひたすらに。今だけは、モフらせてくれ君たちを……」

「な、なんなんだこの人は……」

フェリちゃんの困惑する声が聞こえたが、俺はただ無心にジジ達をモフモフし続けたのだった。

ゴーストがバスターズ

■ 一 癒しパワー注入完了

■ 謎生物のジジ達を思う存分モフリ倒して、疲れ果てていた俺の心もある程度回復した。

「なるほど、幽霊ねえ」

「ああ、私もベツポ達も皆幽霊だ」

まだ俺の膝の上に収まるジジを撫でながら、フェリちゃんがこの子達の正体を聞かされた。

己の正体は幽霊だとフェリちゃんは言う。普通ならば俄かに信じられぬ事だろう。目の前に居るのはほんの13歳の少女だ。しかしそれは生前の年齢、更にフェリちゃんは俺の目の前でその体を薄く透けて見せた。謎生物のベツポ達も青白く燃えるように光っている、いかにも幽霊らしい。

人間ではない存在には慣れている。疑ったわけではないが、なるほど確かに幽霊であ

る。驚いたら困るからと、俺の前にベツポ達を出さなかったのにも納得だ。なんにも驚いた様子の無い俺を見て逆にフェリちゃんの方が驚いたぐらいだったが。

「貴方は怖がらないんだな」

「幽霊よか怖いもん知ってるんでね」

「まあさんとか、B・ベイとかティアマト（金銭的）とか云々。

「まあ幽霊でもフェリちゃんぐらいの女の子なんて怖くないよ」

「女の子か、これでも貴方よりよっぽど生きて……と言う言い方も変だな。幽霊なのだから」

「見た目のウエイトが大きいよね。どうします？ 敬語の方がいいですかね」

「いや普通でいいよ。私もこの見た目での生活に馴染んだから」

「じゃあ遠慮なく」

了解を得たので堅苦しくなく話を進めさせてもらおう。

「しかしここがセレストの言ってた島とはね」

村に人が居ない理由、フェリちゃんが幽霊である理由。それは単純に死んでしまったからではなく、数十年前にこの島を襲った星晶獣によるもの。その星晶獣こそがセレストである。

村の様子を見た時の既視感は、セレストから既にこの島の事を話で聞いていたから

だった。セレストが「なんか呼ばれて……」と曖昧な理由で島中の人間達の死を奪ったのでゾンビやら幽霊やらになってしまったわけである。団にいるセレストではなく、便宜上俺達が本体と呼ぶ方のセレストが起こした災害であるが。

ともかくフェリちゃんもその時の被害者と言う事だ。セレストも反省してるので俺が責める事でもない。更に言うなら既に事件はジータの手で解決済みなのだ。よりによってジータである。はたして本体のセレストがただだけポコポコにされたのか……想像するのも恐ろしい。

つまりは今回もジータがちよこつと関係してると言うことだ。

「私も驚いたジータと知り合いと言うだけでなく、貴方の騎空団にセレストがいるなんて……」

「良い奴だよ。うちの団の貴重な癒しポジションでアイツがいるとこないじゃ大違い……居なくなりでもしたら、俺はどうなるか……」

「そ、そんなにか……」

万が一そうなるとマジでヤバイ事態になる。俺が余程深刻そうにしたからか、フェリちゃんは結構引いてた。

「まあ俺の騎空団の事は良いんだ。今は……」

膝のジジを床に降ろす。ちよつと不満そうだったのが逆に可愛い。

ジジのもつと構えオーラを受けつつも、俺は館の窓から空を見る。俺とガルータが来た時に比べたら少し落ち着きを見せているが、島の上空には相変わらず気味の悪い霧が覆っていた。

「異常な瘴気の発生は俺とガルータが来た事への防衛本能つてところか。普段はただ霧を発生させるだけで島を蝕めるわけだ」

落ち着いていようがこの霧は深い。日の光すら殆ど遮れる濃霧、時間の感覚がおかしくなりそうだ。

「セレストの時も酷かったがまだ良かった。なんやかんやで皆普通に暮らしてたからな。だがこれじゃ……なぶり殺しだ」

「まあな」

ガルータの言う「死の瘴気」、その事からあの巨大な影はセレストと似た能力を持つてるのだろう。だがセレストは死を奪うがああ影は死そのものを振りまく。司る概念が同じでもやってる事は大きく違うな。質の悪さでは今回の方が上か。

「唯一幸いなのは皆が既に解放されていた事だ。こんな目に遭わずに済んだ。改めてジータには感謝しないと」

フェリちゃん以外の島民は、ジータの手でセレストが倒された際に奪われていた死が元に戻り成仏している。そのために村には誰もいないのだ。

なお何故フェリちゃんが残ったのかは不明との事。

だが幽霊であるフェリちゃんがああ死の瘴気に吞まれ、蝕まれ続けた時どうなるのか。あまり考えたくはない。しかしフェリちゃんはもう諦めているのか辛そうに笑う。

「……本当に申し訳ない。貴方だけでも逃がせる方法があればよかつたのに」

そして本当に申し訳なさそうに俺に謝る。この子は何一つ悪くないと言うのに。良い子か。

「気にしなくていいってば」

「だがこんなのあんまりじゃないか。ここに来た理由は……よくわからないが、偶然来た島でこんな事に巻き込まれるなんて」

「巻き込まれるのは慣れてるよ」

我が人生九割巻き込まれ事故である。

「まあ、上手い事助けが来るつてのは希望的観測だな」

「……やはり、もう諦めるほか」

「馬鹿言うんじゃないの」

「え？」

こんな所で死を待つのならなんざ御免蒙る。エンゼラの方も心配だし、オルキスちゃんと黒騎士さんにも迷惑が掛かってしまう。彼女達は帝国ではあるが、人様に迷惑をかける

のはよろしくない。

「フェリちゃん、館か村には武器とかある？ 落ちた時剣とか無くしちゃったんだよね」

「武器？ そりやまあ無くはないが」

「じゃあ片っ端から集めるか、使えるのも限られそうだしな……」

「いや、待て待てっ!? あ、貴方を言ってるんだ!」

俺が妙にやる気を見せているからか、フェリちゃんが慌てている。

「まさかアレと戦う気か!？」

「そうだけど」

「馬鹿な、あんなのに立ち向かうなんて無謀すぎるっ!」

「まあ俺もやりたかないけどさ。こればかりは頑張らないと死ぬし」

「頑張ってどうにかなる問題じゃない! 相手は死そのもの、セレストとはわけが違う

! あれは死を振りまく化物なんだぞ!」

「化物じゃない、星晶獣だ」

「そうだ星晶獣だ! ……え?」

「星晶獣なら……まあ大丈夫かな」

「え、いや……いやいやっ!? むしろその方が危険なんじゃあ!」

「その筈なんだけどなあ……駄目だなあ、感覚麻痺してんだ俺……はあく……」

「あ、ちよつと待て！ 急に落ち込みながら出てくなくなつてば、おいつてばっ！」

フラフラと館から出て行く俺の後をフェリちゃんやジジ達が追いかけてくる。しかも、彼女の気持ちもわかる。きっと俺つてば変人極まって見えるんだろうな。と言うか変人なんだろうなあ……。

勝負するなら明日かな。先ず今日の内に準備をしないとイケない、彼女の文句は尽きないだろうが、まあ気乗りはしないかもだが手伝ってもらおうとしよう。

それに、ジータも護つた島を俺が護らないわけにいかんわな。

■ 二 ゆけゆけ、僕らのセレスト号!!

蒸気船の様に霧を発生させ蒼空を進む黒い幽霊船。その正体は星晶獣セレストである。

ガロンゾを経て一日、特にトラブルも無く彼女達は目的のトラモント島へと向かつていた。

「予定よりも早く着きそうだな」

「な、慣れた島だからね。ルートもバツチりだよ……居たのは本体だけ……あ、あの頃は同一個体みたいな状態だったし……」

「いや、大変だったよ。何度倒しても君復活するし」

「あ、あう……ごめん」

セレストの船内、比較的日の光りが多く入る個室でコーディアとドラック、そしてスツルムの三人が進路を確認しながらセレストと話す。一見して個室で独り言を話しているようだが、ちゃんとセレストの声が響いているので会話は成立する。セレストの声も船内全てでは無く、コーディア達にだけ向けて聞こえている。これも星晶獣的なアレを応用した不思議パワーなのかもしれない。

「ドラック、今一々前の事をぶり返すな……。それで、島には何時頃着きそうだ？」

「た、多分もう直ぐ島が見えるよ……」

「それは助かる。今の時間なら到着後に直ぐ団長を探索する事も出来るからね」

まだ日は高い、小さな島とは聞いているが日が沈んでしまえばたった一人の人間を探索するのは難しいだろう。まして団長が島に居るかもこの時点でコーディア達は知らないのだ。

「にしてもさあ、こんな形であの島に戻るなんてねえ。これってセレストにしたら里帰りになるのかなあ？」

「ど、どうだろう……別に私あの島で生まれたわけじゃないし」

「まそうだよ、アハハ！ あ、けどさあ、僕達の会ったセレストが今居るのってあの島

「なんでしょ?」

「う、うん……特に移動はしてないはず、ただ……」

「何かあったのかね?」

「す、少し前から意識のリンクが出来ないの……だ、団長の事聞きたかったのに……」

「マグナシックス達はやろうと思えば各島等に残る本体とリンクを繋ぎ簡単な通信を取る事が出来る。最早一個人としてプライバシーと言うものが芽生えたマグナシックスの面々は、普段リンクは断っているが緊急時は一方的につなげる様になっている。今がその時のはずなのだが、彼女は不安げに通信が出来ない事を告げた。」

「……島で何かあったか?」

「かもしれないね。いよいよ団長がいる可能性が高くなってきたな」

「判断基準はそこか……」

「混乱ある所、団長有り。と、我々は認識しているよ」

「相変わらず……気の毒な奴」

本人の知らぬところで哀れまれる団長。

「アンタ達ここに居たのね」

「おやメドウーサ」

団長がスツルムに哀れに思われている所でノックもせず扉を開けて入ってきたのは

メドゥーサだった。当然メドゥシアナも共にいる。

「何かあつたかい？」

「何も無いから来たのよ。暇すぎて死にそうだもん」

メドゥーサは非常につまらなそうな顔をした。エンゼラでなら多少娯楽のための道具があるが、セレストの船内にはそういった物は無い。彼女の様に飽きっぽい性格では、暇を潰すのも一苦勞だった。

「幽霊船にしたってなんか欲しいわよ」

「ご、ごめんね……、び、ビリヤード台ならあつたような……」

「確かにあつたわね。ボロボロで穴が増えてる台が。しかも端じやなくて台の中央に」

一度玉を突けば片つ端から落ちていくこと間違いなしのビリヤードである。ゲームにならない。

「あ……他の者とは遊んでみたのかい？」

ここでメドゥーサを無下にせず話を聞いてあげるのがコーデリアである。伊達に女性の扱いを学んでいない。

「他つてフェザーとかしか居ないじゃない。嫌よあんな暑苦しいの、どうせ語り合おうって言われるのがオチよ」

「……ゾーイは」

「なんか瞑想してた」

「シヤルロット団長は」

「ハレゼナと一緒に武器の手入れ」

「コロツサスは」

「持ち込んだ調理器具でお弁当作ってる」

トラモントで搜索活動になると空腹になるだろうからと、真面目な設備のないセレストの船内でもサンドウィッチなど切るだけで済む簡単な料理を作るコロツサス。団の台所をほぼ一手に任されるだけはある。心配りが出来ている。

だがこうなるとメドウーサの相手を出来る常識的メンバーがいらない。残ったメンバーはあまりメドウーサの相手には向いていない。

「……すまないメドウーサ、私には君の暇を潰せるような特技はないのだ」

「あると言われてもそれはそれで困るけど……」

すまなそうにするコーデリアであるが、メドウーサも大して期待していたわけでもない。仮にここで手品なりを急に披露されても反応に困るだろう。

「メドウ子ちゃん僕なら遊んでもいいよ?」

「メドウ子じゃないっ!」

「ええ?」 けど皆メドウ子って呼んでるよ?」

「許可した覚えは無いのよっ！ アタシは誇り高き星晶獣メドゥーサなの！」

「いいじゃんメドゥー子、親しみやすさあるしさあ」

「そう言うのは求めてないのっ!!」

遊ぶというよりドラムクに遊ばれているメドゥーサ。何処と無く微笑ましい光景だった。

「君の相手をして貰うためにも、早く団長を見つけなとな」

「ほんとよ……って違うっ！ なんてここで馬鹿人間が出るのよっ!!」

思わず同意してしまったが直ぐに顔を真っ赤にして否定するメドゥーサ。コーデリアはそれを見て愉快そうに笑う。

「団長にかまってもらっている時の君は実に楽しそうだったが？」

「か、勘違いしないでよっ!? アタシがあいつと遊んであげてるのよっ!!」

「そうか、そうか」

「あんた本当に分かってんのっ!？」

「まあまあ……さあ、直ぐにでも島が見えるはずだ。君も暇で居られなくなるぞ」

「ふんっ！ だといいいけどね」

ここに長居しても意味は無いとわかりメドゥーサが部屋から出ようとした。だが彼女がドアノブに手を伸ばすより先に勢いよく扉が開き哀れメドゥーサの顔面を強打した。

「ふぎやうつ!？」

「おい大変だ……むっ!」

「ああら、痛そう」

「鼻を打ったな」

部屋に飛び込んできたのはフェザーだった。内開きの扉を思い切り開いたのでメドウーサもそのまま扉に押し出され、ボールのようにコロコロ転がった。

扉を閉めて床で悶えるメドウーサとうるたえるメドウシアナにフェザーも気がついた。

「どうしたメドウー子! 受身の練習か!？」

「メドウー子じゃないし受身でもないっ! あんたが急に開けるから顔打ったじゃないのっ!」

「そうか……それは悪かったっ!」

急に開けると言うならメドウーサもそうであるが、自分の事は柵に上げるのがメドウーサである。フェザーもフェザーで暑苦しく謝罪した。

「それよりフェザー、何か緊急かね?」

「おっとそうだった! 今さっきトラモント島っぽい島が見えたんだけどな」

「え、あれ……う、嘘なんぞっ!」

フェザーが何かを言おうとすると、今度はセレストが驚いた様子で声を上げる。恐らく彼女もトラumontが見えたのだろうが、それにしても様子がおかしい事にコーデリアも気がつく。

「……何があつた？」

「さつきカリオストロが望遠鏡で……いや見たほうが早い！ とにかく来てくれ！」

そう言うのとフェザーは部屋から飛び出していった。そのただ事ではない様子にコーデリアも急ぎ追いかけた。

「ちよつと、置いてかないでよ!」

「シャー……」

一人放置されたメドウーサがプリプリしながら慌てて駆け出し、メドウシアナは「やれやれ」と言わんばかりに顔を振りながら主の後を追った。

■ 三 破れ! 死の瘴気!!

慌てて甲板へと出て来たコーデリア達。既に他の団員も甲板へと集まっていた。

「おう、来たな」

「B・ビイ状況は？」

「まあアレを見てみろよ、もう十分目視できるぜ」

B・ビィの指差す方向へと視線を向けるコーデリア達。セレストの進行方向にはトラumont島があるはずだった。

「何だアレは……本当にあそこがトラumont島なのか？」

「陰気臭いとは思ってたけど、そもそも島が見えないじゃないの」

だがコーデリアとメドウーサの目に飛び込んできたのは、島の形が分からないほどに広がりきつた霧。とても島には見えず、紫の巨大な雲が浮いていると言われたほうが納得できるほどだった。

「間違いねえよ、あそこはトラumont島だ。霧で島は殆ど見えねえがな」

「カリオスト口殿……」

望遠鏡を覗いた状態のカリオスト口が至って冷静に語る。

「霧の原因は不明、この距離じゃなんにもわからねえが……まあろくなもんじゃねえだろうよ。嫌な気配がプンプンするぜ」

「オイ、セレスト。オマエノ霧ジャナインダナ？」

「ち、違うよ……ジータに怒られてからアッチも大人しいはずだし……」

「にしたっておかしいねえ……第一セレストの時より霧濃いんじゃないのこれ？」

セレストが猛威を振るっていた時トラumont島に居たドラムクは、その時の状況を

知っている。セレストの出す霧も確かに濃い。今彼らに見えている霧はそれよりも更に濃い。

「むしろさあ……邪悪って感じ？ もっと直接的な恐ろしさを感じるけどねえ」

「おいセレスト、あつちの本体との連絡は出来ないのか？」

「だ、ダメ……さつきから試してるけど、やっぱり連絡つかない……」

スツルムに言われ再度リンクの接続を試すセレストだが、依然としてトラモント島のセレストとの通信は出来ずにいた。

「霧が邪魔をしているのか……」

「そう考えるのが妥当だな。いよいよもってただの霧じゃねえな……あん？ いや、ちよつと待て」

カリオスト口が何かに気が付いた。素早く望遠鏡の方向を変えた。

「霧の外に何かいるな……」

「何か？ 艇ではなく？」

「ああ、霧に……入ろうとしてるのか？ 弾かれてるようだが」

「私も良いかね？」

「ああ、あつちの方角だ」

カリオスト口が指を指したままコーデリアに望遠鏡を渡した。カリオスト口の言う

方向に向けてコーデリアも望遠鏡を覗き込んだ。レンズ越しに見えたのは、霧に突撃を繰り返す一体の異形の姿だった。

見た目は幼さが残る褐色の少女、そして背には翼が生えている。カルティラ達に聞いた星晶獣ガルーダと特徴が一致していた。

「B・ビィ、確認してくれ」

「おう」

コーデリアから投げ渡された望遠鏡でB・ビィが一体の星晶獣をみる。

B・ビィは深く頷く、間違い無かった。

「あいつだ。ガルーダ、間違いねえよ。相棒を攫ったやつだ」

「……ならば、団長もこの島にいる。と言う事、だが」

「ヨウスガ（ーわー） オカシイヨネ」

団長を攫ったガルーダが何故島に突撃をかけているのか？ 団長の姿が無いのは何故か？ 皆の中で疑問が生まれる。

「近づいて確認するしかないだろう。主殿の行方も聞かねばならん」

「大丈夫でありますか？ あの星晶獣が敵対する事もありますが……」

「十分ありえるがこちらでも戦闘員ばかり集めて来たんだ。仮に戦闘になっても問題なからう」

戦闘員とシユヴァリエは言うが星晶獣が7体いるのである。十分過剰だ。シャルロットも苦笑するばかりだ。

「まあ確かに……しかし油断なさらず」

「当然だな。セレスト、あいつの所に寄せろ。主について聞き出すぞ」

「りよ、了解……風が荒れてるから、皆何かに捕まつて……！」

セレストが進路をガルダの方向へと向けて飛ぶ。ガルダは一定の位置に陣取っていたらしく、移動しないために離れていた距離も直ぐに縮んだ。ガルダの傍に近づいていくと、彼女の力の影響なのか、周辺は強い風が吹き荒れていた。

その強風はセレストの船体を揺らし、団員達は吹き飛びそうになる。小柄なシャルロットやルドミアは艇が揺れるとそのまま体が宙に浮くほどで「ひゃあつ！」と悲鳴を上げた。それを微動だにしない重量級星晶獣のコロッサスがやんわりキャッチした。

「エイヤツ！（*・ω・）ノ キャッチツ！」

「あ、ありがとうございますコロッサス殿」

「こ、この風は、あははっ!!? ハ、ハーヴィンには厳しいなあ、あは、あはははあ——っ!!」

「うひいー！ 飛ばされちまうぜエ〜っ?! 暴風、強風スウ〜リリイ〜ングッ!!」
シャルロット達だけでなく、ハレゼナなど小柄な団員は皆コロッサスの体にしがみ付

いていた。

「何と言う風だ……っ！ 目を開けるのもやつとか……っ！」

「風ダケジャンナイ！ コノ霧自体モ荒狂ッテイルゾッ!!」

彼らに襲い掛かるのは暴風だけではない、島を覆う霧の中では稲妻が走り荒狂う。最早この一帯は嵐となっていた。

団員達がお互い文字通り手を取り合い飛ばされないようにする。それなりに巨大な騎空艇型のセレストが近づくのである。当然ガルダの方もセレストの存在に気が付いた。

「む、むむっ！ なんじゃお主達はっ！」

「突然すまない！ 星晶獣ガルダ殿とお見受けする！」

強風吹き荒れる中コーデリアがセレストの船体にしがみ付きながらガルダに向かい叫ぶ。

「如何にも妾こそ神鳥ガルダ！ 主らこのような所まで何用かつ?!」

「我々はあなたの連れ去った男の仲間です！」

「なに？ それはまことか？」

「そこに貴方が彼を連れ去った時共に居た者がいます！ 貴方と話がしたいっ！ もしこの風が貴方の起した風ならば、一度止めていただけませんか！」

「……よかろう！」

暫し思案したガルーダは手で空を払うと、吹き荒れていた暴風がピタリとやんだ。そしてガルーダはそのままセレストの甲板へと降り立つ。

「ふいー吹き飛ばされると思ったぜ」

「むむ？ お主だなあの時あの場にいたのは、その黒い体見覚えがあるぞ」

「ああそうだよ。よくもまあオイラの目の前で……まあいいや」

B・ビイに気がついたガルーダ。B・ビイも色々と言おうかと思ったが面倒になったのか言葉を飲み込んだ。

「風を止めて頂き感謝いたします」

「構わぬ、それで妾に何用じゃ？」

「無論団長の事です。あなたが攫った男は私達騎空団の団長、助けに向かわぬわけがない」

「ふむ……別に悪いようにするつもりは無かったがのう」

「だとしてもあれでは拉致です。それで団長は何処に？ それとこの霧ですが」

「……そうじゃのう、実を言えばちと面倒になっておる」

「面倒とは？」

「まずあの男はこの島に落ちた」

島に落ちた。と、聞いて誰も悲鳴を上げないのがやはりこの騎空団らしい。むしろ「やっぱり……」と言う雰囲気があった。

「島に降りようとした時にこの霧に阻まれてのう。その上別々に吹き飛ばされ妾だけ島の外に出てしまった」

「吹き飛ばされた……？ 一体何者に」

「見えぬか、アレが」

ガルーダは霧の中を指さした。

霧では依然として稲妻が走り轟音を上げていた。そしてコーデリア達は見た、稲妻が走る瞬間、光に照らされ巨大な影が浮かぶのを。

「あれは、まさか星晶獣！」

「うむ、暴走しておるがな。誰の声も届かぬ状態じゃ」

人型のシルエツトだけしか見えなかったが、それでもその巨大さはわかる。恐らく今のセレストとほぼ同じ大きさだろう。

「あれがこの島に霧を……」

「それもただの霧ではない。これは死の瘴気、蝕まれ続ければ身は朽ちてゆくのみじゃ」ガルーダの言葉を聞き、この霧が一層恐ろしい存在である事を知った一行。幾人かは

身を震わせた。

中でも一人ドラックが僅かに険しい表情を見せたが、それに気が付いたのは横に立つスツルムのみだった。

「……私の均衡センサーが強く反応している。ただの暴走ではないな。これはポセイドンの時と似ている」

場に似合わないゆるい見た目の均衡センサー、別名“アホ毛センサー”がピコピコと反応を示すゾーイ。

アウギユステでの事件、ポセイドンの名を聞きシャルロッテはあの時の出来事を思い出す。

「ポセイドン……だとするとこの暴走もしや」

「ああ、しかし今は確かめようもない、そこを考えるのは後だなあ」

「……ジミー殿はご無事なのでしようか」

「それは大丈夫じゃ、ほれ見てみよ」

死の瘴気蔓延する島で一人の団長の身を案じるシャルロッテだが、ガルーダがまた霧を指さすとあの巨大な影が暴れるように動いている。

「あれは……」

「何者かと戦っておるのだ。そして今この島であやつと戦うような者は一人しかおら

ぬ」

「……では、まさかつ！」

「そう、あの男は生きておる。噂通り大した奴じゃ、この状況の中でアレに挑むとは」

「団長が生きていると聞いて一堂安堵した。皆団長の事だから大丈夫だろうとは考えていたが、実際無事であると知るとどうしてもホツとする。

「こうなるとは思わなかったとは言え、ここに連れてきたのは他ならぬ妾じゃ、見て見ぬふりなど出来ぬ。故に手を貸そうと思ひ霧に入ろうとしたが入れなくてのう」

「それで面倒になっていると……」

「そう言う事じゃ。幾ら吹き飛ばせど直ぐに戻る。妾の風でも吹き飛ばせぬとはとんでもない霧じゃ。最早極厚の物理的な結界じゃなこれは」

「霧の結界を破らぬ事には団長の手助けも出来ないか……ガルーダ殿、この瘴気を生み出している星晶獣の正体はご存知か？」

「……直接話した事はそう無い。じゃがあ奴の存在は有名じゃ。なんせ不死の王とまで言われる星晶獣じゃからのう」

「不死の王……？ も、もしかして……っ！」

「不死の王、その名を聞きセレストが強く反応した。

「なんじゃ、この艇も星晶獣じゃったか？」

「あ、うん……わ、私セレストです……」

「セレスト？ おお、お主が不死の幽霊船！ 会うのは初めてじゃのう」

「あ、はい……は、初めまして、です……」

「してセレストや。主も不死の星晶獣、やはりあ奴の事は知っておったか」

「う、うん……不死の王ってリッチの事だよね」

「うむ、如何にも」

「セレスト、そのリッチと言う星晶獣はどんな星晶獣なんだ」

「あ、うん……えつとね、私もそこまで詳しいわけじゃないけど……」

コーデリアに言われ、セレストはリッチについて語りだす。

星晶獣リッチ、この星晶獣は特に島との契約は交わしてはいない。セレストほど移動型と言うわけでもなく、基本的な情報は少ないと言っている。

ただリッチはセレストと同じ死に強く関係する星晶獣、だからこそセレストはその存在を知っていた。だがガルーダのように他の星晶獣がリッチを知っていたのはその力の恐ろしさゆえだろう。

「わ、私は相手の死を奪って最終的に亡者にするけど、リッチは……最初から朽ちた亡者を生み出す……ほ、本当に屍にかえる力……命も、肉体も朽ちさせる……」

「似て非なる……いや、質の悪さではリッチが上か」

「問答無用で亡者にされるんだからねえ。まだ死を取り返せるセレストの時が可愛く思えるよねえ」

「冗談言っている場合か……それでどうするんだ。まさかここで眺めるだけとはいかないだろう」

島を襲ったのがリッチチであるとして、スツルムが言う様にこれからが問題だった。本当に団長がリッチチと戦っているのならば、助けに向かう必要がある。ではこの全てを拒む霧の決壊をどうするべきか。

「案ずるな。こういう時のために我らがいる」

「ここで声を上げたのはシユヴァリエであった。」

「シユヴァリエ、どうする気かね？」

「なに、やる事は単純だ。ガルーダ一体では無理かもしれないが、今この場には我らマグナシックスの四体にB・ビー、そしてゾーイとメドゥーサがいる。いくらでもやりようはある」

光の騎士の視線は、既に霧の中の戦場へと向けられていたのだった。

■ 四 戦いへ向かう者達

——セレスト突入開始から数時間前。

「仕方ないとは言え……まあ星晶獣相手にはちと心許ないな」

「争いなんて無い島だったからな。使えるのは狩猟用具とかぐらいだ」

俺とフェリちゃんの目の前には村と館中から一日かけてかき集めた武器がある。もつとも武器らしい武器などあまり無い。殆どが農作業のために作られた斧や鎌、それか狩猟用の弓に猟銃ばかりである。

「まあいいや。幸い使えないわけじゃないからね。持てるだけでもつてくかな」

「……なあ本当にやる気か？」

「何が？」

「アレと戦うと言う事だ」

フェリちゃんの言うアレと言うのは勿論今この島を滅ぼさんとしている星晶獣の事である。

「やらなきや死ぬからね。まだ体を朽ちさせるだけならクリアオールしまくって耐えて見せるけど、島が崩壊するとなると流石に無理」

「島が崩壊しなきや耐える気だったのか……いやそれよりも、こんな武器じゃまともに戦うなんて無謀だぞ」

「でもやらなきやさ」

「それは……そうだが……」

実際ろくな武器も無いが負ける気なんぞ無い。エンゼラの改修と借金の返済を済ませるまで死ぬ事など許されないのだ。

「アンデット系ならセレストで慣れてるし頑張ってみるさ。フェリちゃんはベツポ達と館に避難してて。相当騒がしくなるし危ないからね」

「……いや、私も行こう」

「こいつは驚き、意外な提案がフェリちゃんの口から飛び出した。

「この島は私の故郷だ。貴方が島を守るために戦うのに何故私がジツとしている事ができようか」

「いや……けど危ないよ」

「甘く見ないでほしいな。私だって何時ぞやのセレストとの戦いではジータと共に戦ったんだぞ」

「あれま、そうなの？」

「ベツポ達だって戦えるんだ。伊達に幽霊じゃないんだからな」

ちよつとドヤ顔であった。可愛いなこの子。

実際の所殆どジータの独壇場になっていたと思うが、仮にも星晶獣との戦いの場に参加していたと言うのなら自分の身を護るぐらいはできるだろう。

「……フェリちゃんは系統は？」

「光系統が得意だ」

「うんうん……まあアレはどう考えてもセレストと同じ闇系統、その点も有利か」

一方俺は系統以前にろくな武器も無いがね。俺のミスリルソードは空の底に落っこちたし。

「先ずは戦う場所だけ……。何処かにおびき寄せたいな。基本霧にまぎれて宙に浮いた状態だからこのままじゃ戦い辛い」

「……場所なら草原がある。そこがいいかもしれない」

「草原……結構原っぱな感じ？」

「多少木が生えている程度だ。この小さな島で派手な戦闘を行うならあそこがいいだろう」

「その代わり俺達も身を隠せないか……いや、この状況じゃ身を隠すもクソもないな。戦う以上多少の瘴気の汚染は覚悟の上だし」

「しかしどうするんだ？ あれは普段姿を消しているし態々私達の前に現れるだろうか」

「ちよつかいかければ来るんじゃないかな」

「そんな単純な……」

「いや案外単純なもんだよ。特に今あの星晶獣は暴走してると見た。だとすればまともな思考は出来てないだろうから、自分に対して敵意のある奴を追うはずだ」

あれの暴走の原因に心当たりがあるがそれは後だろう。戦う中でそれを解決できれば良しである。

「後は草原まで逃げて引き付けたいけど……これは正直わからんなあ。アレがどれくらい暴走しているのか……本能的に追うのを止めるかも知れない」

「他に作戦を考えるか？」

「いや武器も戦力も限られた状態じゃこれ以上案もでないよ。行き当たりばったり、俺っついてもそんなのよね……」

「な、なんだか大変なんだな」

本当に大変なんだよフェリちゃん。

「とにかく俺がアレを誘い出す。フェリちゃんは案内お願い」

「わかった。微力だとしても力に成って見せよう」

「ベツポ達も頼むぜ」

「——！」

「やる気みなぎってら、頼もしいね。そいじゃ行くとしよう」

とり合えず使えそうな武器を腰や背中に装着。果たしてこれで何処までやれるかわ

からんが、フェリちゃんのためにいっちょ頑張ってみるとしよう。

■ ■
五 ワ〇トでもホ〇ーマンでもないヤベー髑髏

トラモント島の端にある絶壁、名をデイスペラ絶壁と言うらしいが今はもうフェリちゃん以外にその名を知るのはいない。

島でも高台に位置する館から確認したところでは、今特に瘴気が濃くなっているのがここだった。つまり俺とガルードを襲ったあの星晶獣もここに居る可能性が高いと考えた。

「……」

「どうだ？」

「居るね。デカイ気配がある」

姿は見えていないが間違いなく星晶獣の気配だった。

「下がってて、まずは姿を見せてもらおうとするよ」

「わかった。気をつけてな」

フェリちゃんを後ろへと下げて村で見つけたマスキット銃を霧へと向ける。これだけではまだ気配は動かない。

「……そこかな」

なので一番気配が大きい位置へと一発打ち込む。

火薬の破裂音が響きわたり、銃弾は直ぐに霧の中へと消えた。しばし様子を伺うと巨大な影が霧の中から雄叫びを上げて空気を振動させながら現れだした。

「そら来たぞおっ！」

「で、でかい……っ!?!」

「オオ……ッ！ ヌウアアア……ッ！」

それはまるで苦しむかのようだった。巨大な体をよじらせ、肉無きその身を掻きまわり、島を滅ぼそうとしているはずのその星晶獣は今にも死んでしまいそうなほどにポロポロだった。

いや、事実死んでいるのかもしれない。その星晶獣はただの骨、とても『生きている』とは思えない髑髏そのものだったのだから。

「こ、これが星晶獣の正体……っ！」

「骨格標本にカツラと服着せたような見た目だな」

「思いの外暢気な感想っ!?!」

俺とガルーダを吹き飛ばした時見えた巨大な骨の腕は正しくコイツの腕だったわけだ。

「ふ、腐海にイイイ……アアアアツ!? 沈み、かわきに……ウガアア——ツ!!」
「うっ!？」

髑髏が叫ぶと俺達の周りに瘴気とは違う緑色をした霧状の物が湧き出した。それはあつと言う間に俺達の身を包み込んだ。

「ぺっぺっ……! ちくしょう……何だこれクツサツ!？」

「グウ……ッ!？」

この攻撃を受け無事である俺達を見て骸骨は唸った。臭いし精神的には無事ではないのだが、恐らく肉体的な異常が無いのに驚いたのだろう。

「ボール張つといて正解だったな……」

「全くだ。あれが無ければ今のでやられていたかもしれない」

セレストとの戦いで経験した初見殺し、最悪即詰むような状態異常。毒・腐敗・アンデッド、闇系でしかも見た目からしてこいつもアンデッド系の星晶獣、確実に多彩な状態異常付与を繰り出すと思ひ予めボールを展開しておいた。

これで状態異常の攻撃が得意なのは確定した。杖を振り改めて俺とフェリちゃんにもボールを展開する。村に収穫祭とかで使ってたと言う祭儀用の杖があつてよかった。

「だが姿を見せたな髑髏野郎。この島の瘴気消してもらうぞ」

「又ウウ……我は不、死の……不死の……グアア、又オオオオオツ! ……ガアアアアツ

!？」

「聞く耳はもたないか。やはり暴走しているのか」

「いや、多少の理性があるようだ……完全な暴走状態と思ったがこれは厄介だぞ」

暴走して野獣の如き状態ならある意味単純な攻撃が多くなるはずだが、初っ端から状態異常使ってきたり、言葉を話そうとするあたり多少なり思考しているはずだ。そうすると相手も戦略を立ててくる可能性がある。

そして髑髏の星晶獣は明らかな敵意を俺達に向け、瞳の無いはずの窪んだ眼窩を怪しく光らせた。

「こりゃあ疲れる戦いになりそうだ……」

希望的観測だとしても助けが来る事を願いたいね。

トラモントまるごと超決戦

■ 一 そんな装備で大丈夫か？

■ 「手前この野郎くらえっ！」

「ゴガアッ！」

「うおっとおーっ!？」

思い切り剣を振り下ろし骸骨野郎の腕を切りつけた。僅かに刃が入ったが髑髏野郎が腕を少し動かすと一瞬で碎け散ってしまった。

「駄目だ！ また折れたっ！」

「これを使えっ！ 次の剣だ！」

フェリちゃんから代わりの武器を投げ渡される。受け取るのと同時に、壊れた武器を捨てた。

戦っている相手との体格差は大きい、相手の掌に俺はスッポリ入るほどに。見た目は脆そうな髑髏、しかし奴は星晶獣だ。ならば武器が壊れると言うのは不思議ではない。

しかしこれはマズイ。

「ふんぬっ！」

「グガアアアアッ！」

「あぶっ!? って、また折れたあーっ!?」

野郎が手に持った杖を振り払う。咄嗟に身を屈めたが剣先が相手の杖にカスつてしまい、それだけで根元からポッキリ折れた。

「オオオ……ッ！ 不死の、王の力……アアアッ！」

「いかん、後退後退っ！ フェリちゃん下がって」

「うわわっ!?」

鬮腰が振るった杖を改めて掲げてる。すると交戦直後とほぼ同じ攻撃、周辺に緑の瘴気が巻き起こり爆発の如く破裂した。

「だああああ——っ!?」

「きやああーっ!?」

何とか直撃を避ける事ができたが衝撃で吹き飛ばされた。島の縁である絶壁で戦っているから危ない、そのうえ岩やらに体を打ち付けて痛いったらない。

「いつつ……フェリちゃん、こっちこっち！」

「わ、わかった……っ！」

しかし吹き飛ばされたお陰で相手との距離が開いた。幸い相手も俺達を見失ったらしい、この隙に岩陰に逃げ込む。

「ふいー……ちくしようめ、あいつ好き勝手暴れやがる！」

「つておい、貴方腕がつ!？」

「おんぎやあーつ!?! ク、クリアオール！」

フェリちゃんに言われ自分の腕を見ると皮膚が腐って爛れ落ちそうになっていた。どうやらベール効果が失われていたらしい。急いでクリアオールをかけてからヒールオールを使う。腐った肉体に血の気が戻り、みるみるうちに爛れた皮膚が戻った。ついでにベールも掛けなおす。

「あー危なかった……腐り落ちる所だった……」

「大丈夫か、結構爛れてたが」

「腕取れたとかじゃなきやどうにかなるさ……多分ね」

エリクシールがあればなおの事全快できるだろう。試したこともないし試したくも無い。

「しかしセレスト以上に腐らせてくるな」

今は懐かしき初マグナ……はティアマトだったが、セレストとの初戦。あの時もベールとクリアオールを駆使したが最終的にこっちが死ぬ前にごり押し戦法、物理で倒し

た。

「ごり押し、それが出来ればどれだけ楽だろうか。

「残りの武器は……」

「最後の剣、あと杖に斧とハンマー」

ほぼ島中から集めたと言つて良い武器だが殆ど壊れた。

初めに使つたマスケット銃は速攻で弾切れ。そもそも狩猟用に使われてた銃なんかじゃ星晶獣相手にダメージを与えられるわけが無い。しかも予備の弾以前に火薬すらなかった。数発撃てただけでも奇跡的である。まともな剣として見つけたスチールソードも次々と折れてしまった。

「この剣は無理だ。脆すぎてあれ相手じゃ攻撃の受けも流しも出来ん」

「だろうな……」

「ごり押しするには俺自身の実力も必要だが、同時にごり押しに耐えられる相応の武器がいる。今ここにある武器じゃ星晶獣相手へのごり押しに耐えれない。

「とりあえず杖メインに魔術攻撃か。それと斧とハンマー使うか……」

「全部持つと重くないか？」

「一々フェリちゃんに運んでもらうわけにいかんしね。まあ何とか立ち回るしかないよね……はあ」

ベルトに斧とハンマーを差し込む。最早武器と言うより農具や工具なのだが……作りが単純なぶん剣より丈夫だと信じたい。杖も杖で本来祭儀用のものだが、この際贅沢を言つてられん。

「しかし姿を現したのは良いがこっちの誘いに乗つてくれないぞ」

「露骨過ぎたかな……何時までも絶壁で戦えないし、何とか内側に移動したいけどなあ」
鬪體の奴は宙に浮いてる感じだし、この場所が自分にとつて有利と理解しているらしい。目障りな俺達を追うと言う事をまだしてこない。追うほどの脅威ではないと言う事だろうか。

「始めた以上撤退も出来ない。もっとおちよくつて追つてこさせるか」

「わかった。今度は私も前に出よう」

「気を付けて、幽霊とは言え状態異常の効果が無いわけじゃないから」

「ああ、そつちも気を付けて」

お互い別の方向から飛び出す。相手はまだこつちを見失っていた。自分で出した霧が視界を奪っているらしい。お粗末なミスだがやはり暴走してるのでそこまで気が回らなかつたようだ。

（気づかない内につ！）

最後のスチールソードを思い切り投げ飛ばす。かなり力を込めたので矢の如く進む

スチールソードは、髑髏の眼窩へと突き刺さった。

「ヌグアアツ!？」

「刺さって痛がつてゐるって事は眼球あんのか……？　まあいいや、おいこらこつちだ髑髏野郎っ！」

「ガ……ガアアア——ッ！」

髑髏が杖を振るうと周辺に紫の炎が湧き上がった。本物の炎と言うよりも、魂を燃やすようなそんな魔術的炎だろう。これもまともに受け続けるとよろしくない。

「あつちっ!?　ふざけっ、ケツ焼ける……っ！」

「ガ、ガガア……その身、朽ち……させ……ゲウウッ！」

「させるかっ！」

益々炎を出そうとした髑髏だが、俺にばかり気をとられ別方向から来たフェリちゃんには気が付かなかつた。

「くらえ、スペクトルパージッ!　はあっ！」

「オオツ!？」

フェリちゃん武器は「鞭」である。扱い悪さから滅多に武器として使われないが、彼女は見事にそれを武器として操る。

光系統の力が込められ振るわれた鞭は輝きを伴いながら生物の如くしなり、一瞬のう

ちに髑髏の身体に連撃を打ち込んでいった。

(巧い、想像より鞭を使い慣れてるっ！)

鞭ならではの高速での攻撃だ。セレストとの戦いに居たと言うのも納得できる。彼女の鞭はれつきとした武器だ。幽霊故幼い少女の容姿のまま長い時の中で培われた技術、それは鞭を手足のように操れるほどに熟練している。

「又ウウ……んしゃ……く……ギ、ギイ」

事実髑髏野郎にダメージが入った。その場しのぎの武器で戦う俺よりも、光系統の力が大きい彼女の攻撃の方がよく効いたろう。

「どんな理由があつてこの島に来たか知らないが、これ以上この島を好きにはさせないぞー！」

「又ウウウウウン……ッ！」

今まで後衛だったフェリちゃんが出て来た事で相手の俺達に対する認識が少し変わるのが分かった。フェリちゃんの攻撃がやはり効いたのだろう。

「これもくえ骨野郎！ シャイニングッ！」

「グガッ!？」

杖に魔力を集中。先端から光の力を放出する。魔術発動の媒体としてはギリギリ使役できるのは幸いだった。だが武器として作られた杖ではないために、魔力伝導効率が

極めて悪く通常の魔術よりも威力が落ちる。

「牽制に移るか。フェリちゃん、こつちで気を逸らさせる。フェリちゃんは隙見てガンガン攻撃してって！」

「了解した！」

こつから第二ラウンド開始と言うところか。凡そ相手の力も図れたが、まだまだ全てを見せてはいないだろう。運も味方につけてきたい心境である。

二 騒ぐ星晶獣

トラモント島をつつむ霧の外、団長を追って来たセレストが船首を島へとむけて待機する。その船首付近にはシュヴアリエ達星晶獣が集結していた。

「位置についたかお前達」

「(o・ω・) b バッチリ！」

「何時デモOKダ」

先頭に完全にマグナの姿となったコロツサスを配置、そしてその後ろにはシュヴアリエ達他の星晶獣が並ぶ。

「うし、ウォーミングアップ終了つと」

「リイ、デイ、頑張ろうな」

「ガルダ、あんた役に立つんでしょね？」

「そのような言い方は酷いぞメドゥーサよ。妾とて風の大星晶獣じゃ」

そしてその輪にガルダまで混ざり和気藹々した雰囲気があった。

「……これ大丈夫なのか？」

そんな星晶獣達をみて不安そうにするスツルム。シユヴァリエ発案の霧の結界突破方法、それは今居る星晶獣全員の力を一点に集めぶち破る力技であった。今から星晶獣達が行う事が不安でしようがないのである。

「オレ様達だけじゃ時間がかかる。ここは星晶獣に任せるのが手っ取り早いだろうさ」

「かもしれないが、どうもあの星晶獣達を見ると不安になる」

「気持ちにはわかるがあれでも大星晶獣だ。期待して待つこつたな」

団長に（笑）とまで言われる星晶獣、そんな面々を見てると如何しても不安になるスツルムであるが、そんな星晶獣（笑）にも慣れてきたカリオストロには心配な様子は無い。

「コロツサス、この作戦の要はお前だ。気合入れて頼むぞ」

「マカセテヨ（・、ω、——）」

「いいか！ この規模の霧を全て打ち払うのは難しいがセレストが通るための穴を穿つ

ことは我々がいれば可能だ。各々星晶パワー全開でいくぞ！」

「星晶パワーって……安っぽい言い方だな」

「分かりやすくいいんじゃない？　じゃあ僕達も下がろうか、近くじゃ危ないしね」
「神秘の星晶獣が自分で「星晶パワー」と言う謎ワード出している。スツルムは呆れながらドラंकと共にシュヴァリエ達から距離をとった。

「作戦開始だ。皆星晶パワーを開放しろ！」

「オイラ達の元気をコロツサスにい——ッ！」

（星晶パワーなのか元気なのか……）

シュヴァリエの号令にあわせB・ビィを始め皆がコロツサスに向かい両手を向ける。すると掌から輝かしいエネルギーがあふれ出しコロツサスへと集まっていた。

なおスツルムの胸中の指摘に誰かが気付くはずもない。

「パワー（●ω●*）キターッ!!」

漲る星晶パワー。コロツサスも激しく輝きだした。

「構えろコロツサス！」

「このメドゥーサ様が力分けてあげたんだから、失敗なんて許さないんだからね！」

「（・・・ω・・・）ウンッ！」

「よし、全力で進めセレストッ！」

「わ、わかった……と、とおっ！」

コロツサスが巨大な剣を構えると同時に少し気の抜けた、本人としては精一杯の雄叫びを上げながらセレストが進みだす。速度は最初から全速力、瞬く間にセレストは霧へと接触する事になる。

「(@・・・ω・・)クラエー！」

だが船首で大型化したコロツサス・マグナが剣を突き出して霧へと差し込む。瞬間、切っ先は僅かに沈むがコロツサス達を押し出そうと霧が激しく抵抗を始めた。

「霧がコロツサスの剣を押し返してるぞっ!？」

「やはりただの霧じゃねえ、オレ様達が脅威となると判断したんだ！ 全力で押し返してくるぜっ！」

後方で衝撃に耐える団員達。生き物のように蠢き押し返す霧に驚きながらも、コロツサスの力を信じて見守る。

一方コロツサスも霧とは思えぬ激しい抵抗感じていた。マグナシックスの中でも一番の怪力であるコロツサスが力の限り突きつけているが、巨大な壁に押し返されるような感覚を受けていた。

「ウウー! (・・ω<)カタイツ!？」

「耐えろコロツサス！ ティアマト、ガルーダ追い風を起せ！」

「言ワレナクトモ！」

「よかろう、鉄の巨人そして不死の艇よ！ 勝利への追い風を受けよ！」

ティアマトとガルダが空へ舞い上がり手をかざし風を起す。二体の風の大星晶獣が起した風は、強烈な追い風となりセレストを更に強く前進させた。

「あともう一息だ、パワーをコロツサスにつ！」

「いいですともっ！」

妙に気合の入った返事をするB・ベイが力を解放すると姿がマチヨビイへと変化、更にコロツサスへとパワーが注がれていく。

溢れ出る星晶パワー、漲るコロツサス、剣と右手が光って唸る。

「ウォーッ！（・・ω・）ボクノコノテガマツカニモエルト！」

コロツサスが一気に剣を突き刺し切り上げた。その瞬間、セレストの前方に広がる霧が二つに割れる。

「マダマダッ！（・・ω・）」

更にもう一振り、振り上げた剣を即座に真横へと切り払う。十文字型へと切り開かれた霧は、ガラスが割れるような音を上げ拡散した。

「アレが、コロツサス殿の次元断っ！」

雄々しくも鋭いコロツサスの剣技を目の当たりにしシャルロッテが驚嘆の声を上げ

た。

霧だけでなく、その周りの空間ごと切り開く次元を断つ剣は、見事道を切り開いた。

「今だ行けセレスト、突っ込めっ!!」

「う、うりゃあ——っ!」

セレストが開かれた穴へと突き進んで行く。

今霧の結界は破られたのだ。

■ 三 ホネホネバトル

「二掛けシャイニングッ!」

「スペクトルパージッ!」

「グウッ!」

二方向から魔法と鞭の攻撃をしかける。これをずっと繰り返していた。

骨の肉体にもヒビが走りだし、ダメージは確実に与えている。しかし相手は星晶獣、まともな装備も無い状態で二人だけの攻撃では決定打にはならない。

「脆そうな見た目の癖になんちゆうタフネスだよっ!」

「多少の誘い出しには乗ったが、これ以上移動する気配も無い。このままじゃ不味いぞ

！」

元から状況は不利ではあった。だがそれが更に不利な状態になってきた。承知の上であつたし、予想もしていたがしかしこれは厳しい。

「ウガアーツ！」

「おつとあぶねえ！」

俺に向かつて杖を持たない左手を振り下ろしてくる髑髏野郎。奴は見境なしに攻撃を行つてくる。毒の爆発、魔術、巨体に任せた叩き潰し。範囲攻撃以外の叩き潰しは基本俺しか狙わないので避けるのは難しくは無いのだが、それでもヒヤリとしてしまう。

「こいつ、これでもくらえい！」

「……ツ？」

「ああまたっ!？」

目の前来た骨の手に思い切り斧を叩き付けた。間接を狙ったのだが思いの外硬く、そのまま斧は鈍い音を断てて砕けてしまった。しかも相手は特に気にしていないのでダメージが通つてないらしい。

「……ぬううウウツ!？」

不意に奴が唸り空を見上げた。

霧の向こう側、即ち島の外。そちらを見て異常に警戒し始めた。星晶獣であるこいつ

が警戒すると言う事は、なにか強大な存在が近づいてきた事になる。思い当たる者が居るとすれば、何処かへと飛ばされたガルーダであろうか。

ガルーダかどうかは分からないが、何かが来た事は間違いない。奴が俺から視線をそらしている内に攻撃をしかける。

杖をベルトに差し込み代わりにハンマーを取り出して骨の拳を蹴って髑髏野郎の巨体を駆け上がる。

「この隙に！」

「おい、なにを!?!」

「どうせ壊れるってんなら、このハンマーあいつの頬に叩きつける！」

長期戦に使えないただのハンマーだが、もう使い捨てだと割り切って光系統の力を無理やり込めれば例え一発だけでも大きな一撃が期待できる。奴の歯の一本でも吹き飛ばしてやる。

外へ気を取られていた髑髏野郎が、自分の腕を駆けて上る俺に気がついた。奴は忌々しそうに唸った。きっと奴にとっては、羽虫が体に纏わりつくような感覚なのだろう。腕を振って振り払おうとするが舐めるんじゃないぞ、虫扱いするならとことん虫のように這い上がってやる。

「ふぬううううっ!!」

「ほ、本当に上ってる……!?!」

奴の肘から上はボロボロの衣類が垂れ下がっているの、それを掴んでガサガサと高速で上る。ちよつとフェリちゃんの引いた声が聞こえた気がするが気にしない。ゴキブリと言つてはいけない。

さらに何で残ってるかわからない、さり気無くロン毛の毛髪を掴み左頬の部分まで登りきる。しかし誰だつて顔の頬に虫が止まれば嫌なはずだ。こいつもそう、だから左手で俺を潰そうとする。

「そうはいくかよ!」

「ゴハ……ッ!?!」

「はっはーん、マヌケエーツ!」

左頬にいた俺を潰すために手を頬に叩きつけるが、その前に俺は垂れた髪をロープにし、そのまま勢いをつけて飛び反対側へと移動。野郎は自分の頬を叩くだけになった。(さて、一撃おみまいして……おや?)

目の前の頬をハンマーで砕いてやろうと思ったが、ふと奴の頭に乗る王冠に視線がいった。衣類はボロボロであるが、王冠だけは気合の入ったもので装飾も施されている。だがその中で一際激しく、そして怪しく紫色の光を発する宝石があるのがハッキリとわかる。

咄嗟に俺はまた髪の毛を登った。グングンと登り王冠の前にまで行きその宝石を見た。その輝きはガルーダから落ちた直前に見た光と同じ、そしてその光には見覚えがある。間違いなくそれは、アウギユステでポセイドンの自由を奪った魔の宝石、「魔晶」だった。

「またこいつが原因かあ——ッ!!」

渾身の力を込めハンマーを魔晶へと叩き付けた。火花の如く光が散り、甲高い音と共に僅かにヒビが入る。

「やったかー!」と思ったが魔晶が壊れるより先にハンマーが壊れた。更に魔晶にヒビが入るとそれに連動するように髑髏野郎が苦しみ出す。

「アアアアアア——ッ!?!」

「うお、落ち……っ?! やめろー!?!」

苦しむのはいいが暴れられると辛い、わかっちゃいたが足場が悪い。必死に髑髏野郎の髪の毛に掴まり振り落とされまいとしがみ付く。

「団長さん!?!」

「っ、杖! 杖を……っ!」

ベルトに差し込んでおいた杖を取って壊しそこなった魔晶を狙う。あれが暴走の原因としたら魔晶を壊せば大人しくなるはず。

「く、くそ……早く壊れろっ!」

だが壊れない、シャイニングだけでは駄目だ。エーテルブラストでもなんでも撃ち込みまくる。が、やはり威力が足りない。全然壊れない。

「団長さん、早く離れろ! 落ちてしまおうぞ!」

フェリちゃんの声が聞こえる。心配してくれているが、これを逃すとまた這い上がって魔晶を攻撃しないといけない。

今こいつは魔晶によって暴走してるのは間違いない。そしてこの状態で魔晶は弱点にもなる。攻撃された時にこいつは苦しんでいた。だからこそ次の攻撃を許さないだろう。俺がまた腕を登ろうとすれば何が何でもそれを阻止してくるはずだ。

「アアアア——ツ!? われは……われはああ……グウ……ツ! ガアアアアアツ!」

「暴れんじゃねえ! 魔晶から解放してやるってんだよ!」

ただでさえ壊れないのに更に暴れるので狙いが定まらない。範囲攻撃のエーテルブラストもろくに命中しない。こっちは落ちないようにするのも精一杯だ。

「(こ、このままじゃあ……っ!)」

圧倒的に攻撃力が足りない。これでは魔晶を壊すよりも先に俺が落ちてしまう。なにか決定的な力が、助けがほしいっ! 俺は心の中で叫んだ。

その時、俺の思いに応えるようにして突如空を覆う霧が開かれた。差し込む光、その光を背にして入り込んで来る巨大な一隻の艇。その騎空艇を俺は知っている。一度だけザンクティンゼルで見せてもらったセレストのもう一つの姿。

「突破ア——ッ！」

「ヤッター！（；・ω・）ノ」

聞こえてくるのはガロンゾに居るはずの者達の声。

「み、みんな!? 来てくれたのぐわあああああ——っ!?」

「ごがああああ——ッ!?」

「あいた——っ!?」

「やべえ、セレストがリツチに激突した!」

「あは、ははは!? で、出た目の前に星晶獣とは……うひひっ!?」

「オイ、リツチカラ何カ落ちタゾ?」

「ううくん? リツチの頭から……ヒヤッハー!? あれ、団長じゃねーかあーっ!?」

「のじゃー!? また落ちたのじゃ!?」

「だあー!? 救助救助!」

「い、いかん間に合わん!?」

「だ、団長さーんっ!?」

なんか色々聞こえてくる。フェリちゃんやんが崖から落ちていく俺を覗き込んで叫ぶ。だが無理、駄目、落ちる……これ何度目？

いいかげん飛翔術とか言う空飛ぶ術を練習するべきだった……後悔先に立たずと言う事か。無念。

「あでっ!？」

諦めムードを出していたら突然床に叩きつけられた。床？俺落ちてたじゃん、と思いきや立ち上がるとそこはボロボロになっている甲板。俺は騎空艇にいた。瘴気を発する幽霊船の上に。

「この艇は……!？」

「ま、間に合った……ぶ、無事……?？」

「彼女」と「彼女」とは殆ど同一の存在、まだこの島に残っている可能性は十分にあった。気配を感じなかったので探す事はしなかったが、やはりまだこのトラモント島にいたのだ。

「……こっちは、始めましてだな」

「う、うん……始めまして、こっちのセレストです……」

■ 頼もしい幽霊船が二隻揃った。

■ 四 不死の双艇

落ちた。完璧に空の底に。

突如霧を開いて現れたセレストが星晶獣に激突し、その星晶獣に掴まっていた団長が崖の下へと落ちていく時フェリは完全にそう思った。助かるわけが無いと。

崖の下を覗き込んだ。落ちていく団長が見えたが同時に団長の下からまた更に何かが見れるのが見えた。霧の中から生まれるように、湧き上がるように。その一隻の船は現れた。

「…………セレスト…………？」

俄かに信じられない光景だった。

崖の下から団長を乗せ浮上してくる不死の幽霊船。かつてこのトラモント島を襲った星晶獣。それが今、まるでこの島を救うかのように現れた。

フェリが唾然としてみると、セレストが船体を崖に横付けする。すると甲板から団長が走りフェリの所へと駆け寄ってきた。

「だ、団長さん無事か!？」

「おう、なんとか無事だわ」

「それはよかったが…………だが、この艇は…………」

「ど、どうも……お、お久しぶりです……」

「喋ったあ——っ!？」

目の間にあるセレストが普通に挨拶してきた。思わず叫ぶフェリ。まさかセレストが流暢……とは言い難いが、とにかく普通に話しかけて来るとは思いもしなかったので仕方が無い事だ。

「しゃべ、えっ!？ 喋れるのか!？」

「しゃ、喋れます……はい」

「今までどこに……」

「この……崖下にいたの……あ、あいつの力で押し込まれて……い、今まで身動き取れなかったんだ……」

「そう、なのか……しかし、こんな事が」

「フェリちゃん、これで驚いてちや切らないぜ」

「いやけどこれ……」

「気持ちはわかるが切り替えてこう、星晶獣との付き合い方はそういうもんだから」
「そういうものなのか……」

団長の言う事はあまり納得しがたい話だった。

「おーい、だんちよおお——っ!」

「あつちも来たか」

星晶戦隊（以下略）のセレストが団長達の元によってくる。セレストの甲板からはフェザーが身を乗り出し手を振っていた。セレストはと言うと、ぶつかつた衝撃の所為か若干ふら付いているが、なんとかトラumont島のセレストの前に止まる。すると艦首付近に団員の皆が集まつてきた。

「ジミー殿ご無事でありますかあー!?」

「シャルロットさん、どうも無事です。なんとかかね」

「落ちた時はどうなるかと思つたよ。無事でよかつた……」

「コーデリアさん……ご心配お掛けして申し訳ないです」

「ご、ごめんね……団長。ぜ、前方不注意だつた……」

「こつちも喋つたあ——ツ!?」

フェリリにとっては二体目のセレストになる星晶戦隊（以下略）のセレスト。それがサラリと喋りまた驚くフェリリ。

「ふええ……セレストが二体、しかも喋るなんて……」

「そう言うもん、そう言うもん」

「そ、そうなのかなあ……」

「あ、フェリリちゃん居たー!」

「ふえあつ?! ド、ドラクツ?!」

聞き覚えのある声があるとせばセレストから手を振るのはドラクだった。以前ジータと共にこの島で彼と出会っているフェリはまたも大いに驚いた。

「あれま本当だ? スツルムさんもいるし、こりやまたなんで?」

「黒騎士にお前の救助を手伝えと頼まれた。厄介事ばかり引き寄せるなお前は」

「あ、止めて言わないで……」

スツルムに痛いところを突かれ苦しむ団長。自覚してるがしたく無い狭間を生きる苦勞人である。

そして団長が胃痛を感じていると、フヨフヨとB・ビィが飛んできた。

「よう、案の定無事だったな相棒」

「案の定無事ってなんだよ……」

「気にすんなって、信頼の証よ。そんで、そのエルーンの嬢ちゃんは?」

「島で知り合った子、結構頼れる娘さん」

「団長、この……なんだ、この……なんだ?」

フェリは目の前に飛んで来たB・ビィの事を聞こうと思ったのだが、ドラゴンっぽいような、魔物っぽいような、されども人語を話す謎生物、その形容し難い風貌に言葉が続かない。

「いよう嬢ちゃん。オイラB・ビイってんだ」

「B・ビイ……ビイの親戚か何かなのか？」

「なんだ、オリジナルの事してんのかい？」

「気にするなフェリちゃん、これは黒いナマモノ程度の認識でいいよ」

「ひでえな相棒」

などと緩いやり取りがあつたが、現在彼らは戦闘中である。セレストに吹き飛ばされた星晶獣も無事なまま。その事を団長が思い出すは星晶獣が唸り声を上げ出してからだった。

「お、お……わ、我は……不死の……オオオ……っ!？」

「おつと不味い、乗れフェリちゃん！」

「うわわっ!？」

セレストと激突し地面に倒れていた星晶獣が唸り声をあげて起き上がろうとする。それを見て団長がフェリを引き寄せセレストへと乗せた。

「セレスト、離脱だ！ アイツから距離をとれ！」

「りよ、りようかい……!？」

「り、離脱……!？」

急速に浮上しセレスト達は雄たけびを上げ出した星晶獣から距離をとる。星晶獣は

苦しむような叫びを上げると、その周辺が怪しく輝いた。

「アアアアアアアア——ツ!!」

星晶獣の周りに紫の炎の様なものが見え、ボヤリと光るそれは炎にも見えるが、目と口のような黒い穴が見えるそれは、むしろ人魂と言うべき存在だった。そしてその人魂はギョロリと団長達を睨むと次々と襲い掛かってきた。

「(っ)いつら……っ!」

地の底から溢れるような人魂は弾丸のようにぶつかってくる。その船体の大きさに反しセレストも素早く動きそれをかわそうとするが、素早さでも数の多さでも勝る人魂は次々と船体へとぶつかっている。

「いて、いて……っ!」

「あいたたた……っ!」

とは言えセレスト達も大星晶獣、痛いようだがまだ「痛い程度」で済んでいた。人魂は団長達にも向かってきたが、彼らはそれぞれの武器でそれを迎え撃った。

「小ざかしいぜエ! だだだだだだだだっ!!」

「うわあっ!! 団長、B・ビイがなんかムキムキになって手からエネルギー弾をつ!!」

「無視して! 気にしちや駄目!」

B・ビイがマチョビイとなり手から気弾を連続発射して人魂を迎撃する。頼もしいと

言えば頼もしいが、初見のフェリには結構衝撃的な姿である。

「しかしいよいよ見境なくなってきたな！」

「あの星晶獣、一体どうしたんだ!?!」

「さつきセレストがぶつかって少し意識が戻ってる様子だった！ ただ中途半端に意識が戻った所為で自分が何してるかわかってないんだ！ このままじゃ收拾つかん！」

「セレストが言うにはリッチって言う不死の王って星晶獣だそうだけ」

「リッチねえ……！ 王って言うんだから本当は話の通じる星晶獣と思いたいが、今は暴走を止めんとな！ セレスト、あっちのセレストと並走してくれ！」

「う、うん……わかかった……」

団長に言われセレストがもう一体のセレストへと近づき、殆どピッタリ横並びで飛ぶ。それに気がついたコーデリアが甲板から団長へと声をかけた。

「団長！ ここからでは我々の手に負えない、どうする!?!」

「あの星晶獣を草原に追い込んで、そこで決着をつけます！」

「方法は?!?!」

「セレストに頑張ってもらおう！」

「わ、私達が……？ な、何すればいいの?」

「お前達二体であいつに再突撃をかける！」

「ええっ……!?!」

中々無茶な作戦を提案し出した団長にセレスト達が驚いた。

「あいつを島の草原まで追い込みたいんだ! ここじやまともに戦えない、この大きさのセレスト達なら十分あいつを挟んで押せるはずだ!」

「な、なるほどお……」

「無茶を承知で頼みたいが、いけるか?」

「い、いいよ……わ、私頑張るよ……」

「わ、私も……、これ以上好きにはさせないもん……!」

無茶な作戦ではある。しかしセレスト達はやる気十分だった。

「おっしや頼む! お前達なら暴走した骨相手に負けやしない!」

「う、うん……! て、てやあ……!」

「おりやあ……!」

「こ、こんなタイプだったのかセレストって……」

おろおろするフェリに誰も気付く事無く、気の抜ける叫びと共にセレスト達はリツチに向かい速度を上げていく。

「み、みんな……! 振り落とされないでね……!」

団員達は柵や柱にしがみ付き衝撃供える。そして直ぐに強い衝撃が走った。

「ゴオオオオオオオ—— ツ!？」

「お、大人しくして……!？」

「このまま……あ、そこまで……!？」

二体のセレストでリッチの胴体を挟むように衝突。そして止まる事無くリッチを島の内陸側へと押し込んでいった。

「ギ、ギギイ……ッ!!」

だがりリッチも当然抵抗する。左手で星晶戦隊（以下略）の団員達を叩き潰そうとした。

「そっち気をつけろっ!」

「俺に任せろっ!」

団長が叫ぶとそれにフェザーが応えた。甲板を走り振り下ろされる骨の拳へと向かった。

「アニメスブローツ!」

「ゴアアツ!？」

フェザーが蒼い稲妻を両手に纏わせ、思い切り甲板の床に叩きつける。彼の放ったエネルギーは地面を伝わり間欠泉の様に噴出した。それはリッチの拳を押し返し、そのまま反動で跳ね返りリッチの体勢が崩れる。するとそれを好機とみてセレスト達がより速度を上げた。

「このまま……！」

「そ、草原へ……っ！」

霧をかき分け突き進む。そしてついに二艘の幽霊船は、目的地へとたどり着いた。開けた草原、リッチの体力の低下が影響したのかそこだけは霧が僅かに晴れていた。

トラモント島で最後の戦場となる舞台。セレスト達は見事役目を果たして見せたのだ。

■ 五 総突撃

「ぐえーっほ、ごほっ!!」 だ、大丈夫かフェリちゃん!?

「な、なんとか……」

俺の無茶な作戦を見事成し遂げ、リッチを追い詰めてくれたセレスト達。だが半ば墜落するようにリッチを地面へと叩き落したので、そのままセレスト達も地面へと追突。乗っていた俺達も地面へとゴロゴロ落っこちてしまった。

「う、ううくん……う、動けないよう……」

「うおっ!!? そうだった、セレスト大丈夫か!?

「だ、大丈夫……だけど、ちよっと動けないかも……」

そしてセレストは地面にめり込んでしまい、動く事が出来なくなつた。

「わかつた、お前は良くやつてくれた。後は任せろ」

「う、うん……ごめんね」

「気にすんな」

「セレスト……何と言うか、その……ありがとう、これが終つたらゆつくり話したい」

「フェリちゃん……わ、わかつた。き、気をつけて……」

フェリちゃんとセレスト、複雑な一人と一体。彼女達の事も気になるが今はリッチだ。セレストにはジツとしているように言い、少し離れた団員達の所へと向かう。

コーデリアさん達もセレストから転げ落ち、地面へと降りていた。

「皆無事ですか？」

「ああ、団長も無事なようだね」

「たく……服が汚れちまつたぜ……」

「体より服の心配つすか、おっさん」

「おっさんじゃねえ！」

「おりゃー！ この馬鹿人間！」

「おごっ!?!」

「うわー!? 団長さんっ!?!」

背中走る衝撃、吹き飛ぶ俺、おろおろするフェリちゃん。俺を馬鹿と呼ぶ声からして犯人がメドウ子なのは間違いない。

「て、てめえメドウ子、なんて迷いの無いドロップキックを……!!? ってこら、背中乗るなっ!?!」

「あんたって本当バツカねえ〜っ! あんな〃のじやのじや〃言ってる星晶獣に攫われるなんて!」

「〃のじやのじや〃 ってなんじゃ?!」

メドウ子が背中にまとわりついていると、今度はガルダがあらわれた。と言うか何故いるガルダ。

「あんたの事よ、のじや子」

「のじや子!?!」

「おい、ちよつとお前等……」

「そ、その名前はあんまり過ぎるぞメドウーサ!?!」

「ふふーん、あんたにはそれで十分よ」

「おい、落ち着……」

「ぬくく……お主だつてメドウ子とか呼ばれておるくせに!」

「ちよ、あんた何時の間にその呼び方っ!?!」

「この人間殆どがお主の事メドウ子と呼んでおったからのう。によくっほっほっほ！
石化の魔眼を持つ星晶獣がメドウ子とは滑稽じゃのう！」

「こら、人の話……」

「むきーっ！ のじゃ子のじゃ子のじゃ子っ!!」

「メドウ子メドウ子メドウ子っ!!」

「……いい加減にせいっ!!」

「うぎゃっ!!」

「のじゃっ!!」

拳骨を一発ずつ。

「あにすんのよっ!!」

「なんでわらわまで……」

「こんな状況で喧嘩すんなスットコ星晶獣(笑)共っ！ ただでさえ混沌としてんのに面

倒を増やすんじゃない！」

「あんた助けに来たアタシに対して何よその言い方っ!!」

「状況を考えろとゆるーとるんだっ！ あれを見ろっ！」

俺が指さす先、そこには草原に落ちたリッチチがいる。こつちとは結構距離の離れた位置に落ちている。またセレストの活躍のおかげか体力を大分消耗したらしい、戦闘不能

にまではいかないが奴もそこから動けないようだ。それでも未だ健在である。

「まだ倒せてないんだから無駄なこととしてんじゃないの！」

「んもう！ だったらさっさと倒すわよっ！」

初めから俺はそうしたかったんだよ。

「団長」

「どしたゾーイ？」

「あの星晶獣……リツチの暴走の原因なんだが」

「やっばお前は気付いたか」

「と言う事は団長もか？」

「直接見た。あの王冠にはめられてる」

俺の言葉を聞いてゾーイは深く頷いた。リツチの王冠からは、相変わらず紫の光が輝いている。それはリツチ本来の意思とは関係無しに、その肉体は戦闘を続行すると言う事を意味する。

「あの光はまさか」

「そのまさかつす。ありや魔晶です」

「なんと……！」

魔晶と聞きシャルロツテさんが驚愕と同時に怒りを露わにした。この人はアウギユ

ステでポセイドンの暴走を目の当たりにしている。そしてその原因である帝国の非道なる行いも。

「魔晶、つまりリッチが暴走しているのは……」

「まだわかりませんが、帝国の方が関係してる可能性は大いにある訳すね……」

「ここで俺はジロリとスツルムさんとドラंकさんを睨んだ。

「ちよつとちよつと、怖い顔止めてよ团长君」

「言つとくが私達は知らん事だ。黒騎士なら多少事情を知つてるだろうがな」

「……ま、この場はいいですよ。お二人は助けに来てくれたわけだし」

仮に知つても口割らないだろうし、この二人は。じゃあスツルムさんの言うように黒騎士さんに——と、あの人には追求したところで、それこそちゃんとした答えが得れるかは不明だろう。どの道今はどうしようもない事だ。

「又ガアアア……ッ!？」

「むっ!？」

不意にリッチが身を起し叫ぶ。杖で体を支えている状態なので、動くのも精一杯なのかもしれない。だが奴の叫びに呼応して地面の所々が盛り上がり始めた。

「うげっ!？」

俺は思わず顔をしかめた。地面からは体が腐り骨の見える魔物達が次々現れ始めた

のだ。

「あ、あれは……あははっ！　ちよつとばかり、きつい光景だなあ、はは！　あはははっ！？」

「ちよつとどころじゃないぞ……」

「魔物ゾンビ軍団だねえ」

「ブリジールが居なくてよかったよ。彼女は怯えてしまうだろうからね」

ドランクさんの言う魔物ゾンビ軍団、正しくその言葉がピッタリだ。正直相手したくないぜ。

「この島に眠る魂を蘇らせたのか……!？」

「そのようだ。幽霊がいないゾンビオンリーなのをみると、セレストとは違う方法にも思えるけどね」

不死の王と言うなら、眷属として亡者やらを生み出し操るのも出来て不思議ではない。フェリちゃんにとっては見知った魔物が多いのだろう、だからこそその驚きは大きいはずだ。

しかしこの場面で魔物を生み出すという事は、リッチも余裕が無いと言うことだろう。

「露骨な時間稼ぎだな。体力を回復して逃げる気だろうか……」

そうはさせない。また霧に紛れられても面倒だ。

「シュヴァリエ、一度光の剣を試してくれ」

「了解した」

シュヴァリエの範囲攻撃光の剣。天から降り注ぐ光属性の剣の雨は、並みの魔物であれば一度で殲滅できるような攻撃だ。直ぐに彼女は魔物ゾンビ軍団とリッチにめがけ剣を降らせた。

霧で覆われる島の中でもその光は凄まじい。炎とは違う閃光の眩しさはゾンビ達を一瞬で消し去った。

「やったか!？」

「スツルム殿、その台詞は駄目だと思っただけど……あ」

「……野郎、なんつー方法で」

光の剣は確かに魔物ゾンビ軍団の殆どを消し去った。だがリッチは防御を固めていた。それもただ防衛したのではない、閃光が収まった時に現れたリッチの体は、無数のゾンビに覆われていたのだ。

ポロポロと剥がれるゾンビの中からは、殆ど無傷のリッチの姿があった。更には地面からは新たなゾンビが這い出して来る。減らしても切がないなこれは。

「肉の鎧とでも言う気かよ」

「なるほど、脆いが重ねればそれなりの壁になる。防御方法としてはこれ以上無いだろうぜ。鎧代わりのゾンビは次々生み出せるんだからな」

「だとしても見てて気分の悪い方法だ」

「それはオレ様も同感だ。効果は十分あってもスマートじゃねえ」

しかし範囲攻撃でまとめると言う手段が難しくなった。他の星晶獣達の強力な範囲攻撃をしたとしても、その分ゾンビの壁を厚くされるだけかもしれない。それ以上にこの島に与えるダメージが心配だ。

俺は島を破壊するために戦ってるのではない。それにリッチに聞しても、奴が魔晶で暴走したと判明した時点で目的は「討伐」ではなく「解放」となっている。

「みんな、手短にやる事言うぞ！ 全員で攻めて誰でもいいから魔晶をぶっ壊せ！ 既に俺が一撃を加えているからあともう少しで壊れるはずだからな！」

「えらい大雑把な作戦だなあ、おい？」

おっさんの言う通り大雑把ではある。しかし今は暢気に円陣組んで作戦立てる暇も無い。

「例え大雑把でも結果的にチームワークが生まれるからいいの」

「そうなるゾンビ軍団を相手にする事になるが、もう一度殲滅するか？」

「頼む。その後は一緒に突撃、ただし勝手な範囲攻撃は無しだ。俺達も巻き添えくらい

かねないし、ゾンビ減らした所で追加で数は戻るところが増え続けるだけだからな」

「了解した。ならば主殿、これを使え」

「うん？」

シユヴァリエが四つの内二本の腕を俺に差し出すと、彼女の掌が光だしそこから二つの物体が生まれた。それは徐々に明確な形を持ち、片方は剣、もう片方は戦斧となつて俺の手へと収まった。

「どうもまともな武器を使っていないようだったからな。ザンクティンゼルで与えたものと違い、完全に私の力のみで作り上げている」

「めっちゃいい武器じゃん!？」

シユヴァリエの光の剣よろしく、それと同じかそれ以上に輝かしい武器。名付けるならば、シユヴァリエソード・マグナ、シユヴァリエブージ・マグナと言ったところか。

「私の加護100%だ。主殿であれば二つ同時に扱えるだろう。存分に振るってくれ」

「ああ、ありがとうシユヴァリエ」

「礼なら尻を叩い」

「よし皆準備はいいかあつ!!」

「ううんっ！ 放置プレイ！」

「……ド、ドラंक。あれも星晶獣なのか？ なんか悶えてるけど」

「ごめんフェリちゃん、あれに関して僕達も詳しくないんだよねえ」

「と言うか聞くな。あれは関わりたくない」

おろおろしてるフェリちゃん、苦笑するドラंकさん、呆れるスツルムさん。きつとこんな星晶獣見なくなっただろう。

「シュヴァリエ、もう一発光の剣」

「なら尻をつ！」

「それはいいか」

「一発だけでいいから！ いや先つちよ、つま先だけ当てる感じでも——」

「いいからやれやあ!!」

「あつふう——ッ!!」

一発だけシュヴァリエのケツに蹴りを入れた。するとシュヴァリエはテンション高めの声を上げて再び天から剣が降り注いだ。またこの時ジツとリツチを見ると、光の剣が来ると分かった瞬間に奴は地面から生み出したゾンビを一瞬で身に纏っていた。意外にもゾンビを纏うのが素早い事に驚く。

しかし雑魚ゾンビはしつかり殲滅できている。それは良いのだが、心なしかさつきよりの威力が上がってる気さえた。もし尻を叩いた事が理由と言うなら、俺にとつてこんな悲しいバフ効果は無いだろう。

「……虚しい」

「ジ、ジミー殿気を落とさず」

「うん、ありがとうシャルロットさん。頑張る」

シャルロットさんの励ましが心に染みるぜ。そうだ、今俺に落ち込む暇はないのだ。空元気としてもやらねばならないこの状況。声を出して気合を入れよう。

「いくぞー!」

六 デッデッデデデデ! (カーン) デデデデ!

「どけどけえーいっ!」

「Guroro……!?!」

狼や小型の魔物ゾンビを蹴散らしていく。ゾンビだけあって体は脆いが、多少の攻撃ではすぐに起き上がってくる。なのでそれなりに力を込めて攻撃しないとイケない。魔物相手

であり、しかも相手は気味の悪いアンデッド。普通の人間では思い切りが足りず苦戦は必至だろう。しかしそこは元から遠慮も無いような仲間が殆どの我が逞しすぎる騎空団。

「ゾンビだろうと関係ないぜ、語り合いだああっ!!」

「コロツサスが先頭を進め! 巨体でゾンビ達を押し返すんだ!」

「(＊・ω・) トツゲキーツ!」

「尻の痛みが私を昂らせる……! 今の私を止めれると思うな!」

「ニル、薙ぎ払エツ! タービュランス!」

「あはははっ! み、みんな跳弾に注意し、うつく! ははははっ!」

「おひゃあー!? ちよちよ、ちよつとかすった!? 今弾が僕のお尻かすったよ!」

「お前の尻は丈夫だから平気だ」

「酷くないスツルム殿!」

「均衡を崩すその暴走、私達で止めてみせる」

「ヒヤアアツハアアツ!! てめえら、もう一度土にかえしてやるぜエ〜〜つ!!」

「こんだけ居るんだ。全員錬金素材にしても文句ねえだろお!」

「メドウ子、貴様の所為でまだ頭が痛いぞ!」

「うるさいわよ、のじゃ子!」

「お二人とも、喧嘩は後にするであります!!」

「オラオラオラツ!! ゾンビ共、全員ぶちのめしてやるぜえ——ツ!」

ゾンビの波を掻き分けて、と言うか吹き飛ばして、ガンガン突き進む。彼らはゾンビ

程度で足止めされる様子は無かった。と言うか度胸あり過ぎである。星晶獣達はわかるが、他の普通の（？）「面々も流石と言うべきか。

「てやああつ!!」

「Guo……!!」

そしてフェリちゃんもまた皆に負けていない。彼女も大分体力を消耗しているはずだが、鞭による攻撃の冴えは見事なまま。

「フェリちゃん無理しなくいいからな!」

「まさか! 私だってここからだ。行くぞみんな!」

「——!」

フェリちゃんの周りに青白い光が浮かび出した。それは徐々に形を作り、声を上げフェリちゃんと共に駆けていく。

「ははっ! 来たな、頼もしい奴らが!」

「ここからは、この子達も一緒だ!」

それは彼女の家族であるベツポ達。今までは姿を消していたが、ここからは本格参戦だ。

噛み付き、体当たり、引つ掻き。獣のような見た目の通り、ベツポ達の攻撃は野生的だ。しかしポジションとして「調教師」に当たるフェリちゃんの指示に従い、フェリ

ちゃんと見事な連携を見せている。

「へえく？ フェリちゃん、腕上げたねえ！」

「ジータ達と別れてから、私も遊んでただけじゃないさ！ いつか空に出る事を思っていたんだからな！」

「ドラंक、余所見してるな！」

「はいはいっと！ こんな時でも怖いねえ、スツルム殿はっ！」

水晶で魔術を発動しゾンビを吹き飛ばしながらドラंकさんが感心していた。きつと俺の知らないセレストとの戦いの時と比較しての事だろう。

「俺も負けてられんよな！」

シュヴァリエの生み出したためっちゃ良い武器はすこぶる調子が良い。かつてティアマトが勝手に俺の金で作った剣にコア埋め込んで生み出したティアマトブレード（仮）でさえ上等な部類に入るのだから当たり前である。これは光の大星晶獣が直々に生み出した武器、悪い物のはずが無い。

なにより今この状況、闇系統寄りのゾンビ達にこの光系統武器が有効なのは言うまでも無い。シュヴァリエソードで切れば、まるでバターを切る様にゾンビ達が切れていく。シュヴァリエブーヅで突けば、薄紙に針を通すように突き通す。同時にシュヴァリエの加護でゾンビ達は浄化され同じゾンビは立ち上がることは無い。

「凡庸武器縛りにおさらばした俺は止められんぞー!」

「ひやははーっ! 団長もテンションマックスだなあゝゝゝっ! サイツコゝにクレゝジゝだぜえゝっ!」

確かにテンションは上がってきた。近くにやはりテンションの高いハレゼナが居るのでそれに中てられたのかもしれない。

二人揃ってゾンビを切り倒し、なぎ倒し、吹き飛ばし、粉みじんになっている。多分この場で一番苛烈な二人だったのだろう、それは傍目から見ると結構な光景だったらしく……。

「戦神か何かか、あいつ等は……」

と、ドン引きのスツルムさんの声が聞こえた気がした。心外である。

だがドン引きしたのはスツルムさんだけではなかったようだ。守りを固めていたリッチが焦る様子を見せていた。生み出したゾンビ軍団相手にまるで怯みもせず突き進む集団に向こうもビビツたらしい。奴は杖を構えてまた人魂の大群を呼び出した。

「広域防御持ちは前に! 他は迎撃っ!」

「シエルターテンカイッ! (*・ω・) マエニゲルヨー!」

「皆後ろへっ! ケーニヒシルトッ!」

「行けッ! プライマルビット!」

マグナ形態のコロッサス自身が盾となり前に出る。更にシャルロットさんが障壁を展開、多くの人魂群を弾き飛ばす。

シユヴァリエも二体の球体ビットを使いなき払うように光線を放ち人魂の迎撃を行った。

しかし人魂の数も多い。リッチもこれ以上俺達に近づかれるのを本気で嫌がっているのだろう。奴は休む事無く人魂の召喚を続けた。しかし俺達とリッチとの距離は後10mも無い。

「もうちよいなんだがな……」

「ドウスルンダ？ コノママ奴ノ息切レヲ狙ツテモイイガ」

「それじゃ島が滅茶苦茶になっちまうよ。しゃーね、もつと攻めるか」

星晶獣相手にして迂闊に攻める事を止めると逆に付け込まれる。俺個人としては無難で堅実なのが好みだが今は攻めである。俺個人としては無

「突破するわ、誰か三人ぐらいついて来て！」

「攻めるなら俺も行くぜっ！」

「ならば、妾も行くこうっ！ 死霊の群れなど吹き飛ばしてみせようぞ！」

「私も行くぞ！」

フェザー君、ガルーダ、フェリちゃんの三人が声を上げた。ガルーダ以外は光系統が

得意な二人だ。丁度良いだろう。

「ゾンビと人魂の群れを突っ切る事になる。他は援護頼んだ！」

「ふ、ふふっ！ ま、任せてくれ……あははっ！」

「……ルドさんは援護は控えめで」

「この人が援護すると十中八九俺に向かってくる。」

「シュヴァリエ、三人にも加護を頼む！」

「うむ、我が加護にて勝利を」

星晶獣の加護を受け俺達の力をブーストさせる。使う武器によつてはその効果を更に高める事が出来る。今俺はシュヴァリエの生み出した武器を使用しているので加護効果は上がり、光系統得意のフェザー君とフェリちゃんの二人にもその恩恵がある。

「これが星晶獣の加護か……」

「体の底から力が漲ってくるぜ！」

フェリちゃんが少し加護の力に戸惑いを覚えている。そもそも星晶獣の加護が必要な戦いと言うものが頻繁に起こる方がおかしいので、普通経験できるような事でも無いのだ。

「コロツサス、前方に拡散レーザー」

「リョウカイ！」

????????
 ((・ ω ・))
 ?????????

クラエー！」

コロツサスの胸部から赤い光線が放たれ、主にリツチ前方のゾンビ群を焼き払った。
「よしやるぞ、呐喊だ！ 奴の暴走を止めるっ！」

鬨の声と共に、「レイジIIII」 「士気向上」 「オーラ」を発動。身と心に勢いをつけ、俺達は再び駆け出した。

■
七 ぶつちぎるぜ

■
先に前に飛び出したのはフェザーだった。彼は蒼雷を拳にまとわせて、稲妻の如く駆け抜けた。

「そんな拳じゃ俺を止められないぜええええっ!!」

駆ける、駆ける、駆ける。

殴る、殴る、殴る。

全力でゾンビの群れを抜けたフェザーは、団長の言った魔晶のあるリツチ頭部を目指した。

「団長さんもだが、彼も凄いな……私達も負けられない！」

「——！」

「フージー、ニコラはそっちの奴をっ！」

「――！」
フェザーの鬪志に火を付けられたのか、フェリの鞭さばきも力が入る。ベツポ達もゾンビ達を次々と倒していく。

集団の中から団長等4人が飛び出したのをリッチも気が付いていた。まるで矢の如く突き進む団長達をみて、ゾンビでは止められないとわかるとリッチは人魂の群れを先行したフェザーへと集中させた。

群れる魚群が一つの巨大魚に見えるように、人魂の群れは巨大な火球のようになりフェザーへと迫った。

「む、来るかっ!? だがいいぜ、迎え撃つてやるぜ！」

「えっ!? いや、あれは無理じゃないのか!?!」

「いいや、やってみせるぜ！」

避けようと思ったフェリだったが、フェザーが逃げようとせずにそれを迎え撃とうとしてギョツとした。火球の大きさは既に10mを越えていたのだ。

「ええい、無茶するでないっ！」

だが上空から急降下して来たガルーダがその前に躍り出る。

「おっと、なんだガルーダっ!?!」

「アレは妾にまかせい！」

神翼を羽ばたかせるとガルルーダの翼が発光しだし雷光を纏う。そしてそのまま羽を広げると一帯に雷が降り注いだ。

「全て吹き飛ばしてくれるわっ！」

ガルルーダが吼えると稲妻は一つへと収束し、稲妻の槍となり巨大な人魂に直撃する。強烈な一撃は人魂の内部でエネルギーが解き放たれ、集合体となっていた人魂は破裂していった。

「す、凄い！ 全部吹き飛んだぞ！」

「おおっ！ やるなあガルルーダ!!」

「むふふーんっ！ この程度容易いわ！」

「……グルルウウウオオオオッ！」

「ガルルーダ、ドヤってる場合か！ 全員避ける、薙ぎ払いだっ!!」

ガルルーダに人魂を吹き飛ばされたのを見るとリツチが杖を構えた。今までと違い両手で槍か戦斧のように持つそれを見て団長が叫ぶ。彼の言うようにリツチは杖を四人に向かい横薙ぎに振るった。それも一度では無く二度三度、四度と連続で振るう。杖が振るわれるとそれに伴い紫の炎も上がった。

「あちあちっ!!? こいつ、無茶苦茶だ！」

「いかん、また意識を吞まれ始めたかっ!! 破壊衝動に身を任せ、己を失いかけておるっ

！」

「このままでは島がっ！」

「全てを……オオオツ！ 一人残らず、亡者にイイイイツ!!」

「縦振りっ!? 避けるオオツ！」

最後に縦振り、最早鈍器と化した杖を地面へと叩きつけるとそこからまた多量の人魂が溢れかえった。

「いい加減くだいんだよおっ!!」

攻撃を避けた団長は、シユヴァリエソードとブージを交差させた。二つの武器に光の力が凝縮されていく。

「フェザー君、俺が援護するから奴の杖を登って頭目指せっ！」

「わかったぜっ!!」

団長の言葉を受けてフェザーは駆け出し、地面に叩きつけられた杖を上りだした。溢れかえる人魂は当然フェザーに襲い掛かる。

「させねえ！ いけ、光の剣っ！」

シユヴァリエソードとブージから大剣と二股の剣を模した四本の光の剣が放たれた。シユヴァリエのモノと違い、広範囲に降り注ぐものではない。しかし其々を大きく生み出し螺旋を描くようにしてそれを飛ばす。

（癖は前のシユヴァリエソードと似たものだ、やって見せるさ……い）

全てを自身の力で生み出した光の剣。本来はただ飛ばすだけであるが、団長はそれ以上にビットの様に操る。かなりの集中力と維持するための力が必要だが彼はそれを何とかやってみせた。

螺旋を描く剣はフェザーを追従し、彼の周りに来る人魂を切り払っていく。

「そうか、ならば妾も！」

ガルーダが翼を広げると無数の羽が飛び出す。一枚一枚が淡く輝きを放ち、一斉に動き出す。人魂に負けない数のガルーダの羽は其々が風の力を持ち、真空波を巻き起こして鋭利な刃と化した。その羽は次々と人魂を切り裂いた。

杖を駆け、腕を跳び、団長達の援護を受け閃光の如く駆けたフェザーはリッチの肩を蹴る。そしてその勢いのままにリッチの顔面へと迫る。

「グウウオオッ!!」

「リッチ、俺の拳を受けてみるおっ!!」

両手に溜め込んだ気合と言う名のエネルギー。先程セレストの甲板で放った時よりも強く、激しく、リッチの肉体に直接解き放つ。

「アニメスプロオオオッ!!」

地面からエネルギーを間欠泉のように放出させるフェザー奥義、アニメスブロー。対

象が立つ地面から放つ事が多いこの奥義であるが、しかし肉体に直接撃ち込まれた場合の威力もかなりのものとなる。攻撃エネルギーは自身の肉体に入り込むために、打ち込まれた時点で防御は不可能である。

遠くから見れば、リツチの頬が破裂したように見えたらう。事実その衝撃は星晶獣であるリツチの頬を破壊し幾つかの歯が口から吹き飛ぶ。

(魔晶は狙えなかったな。だが問題は無いぜッ!!)

フェザーの一撃は魔晶へは届かなかった。しかしリツチの体勢は大きく崩れ前のめりになる。

「今だフェリちゃん、頼むぞっ!!」

「わかった!」

フェザーの攻撃が成功したのを見ると、団長はシュヴァリエブージを両手で持ち、刃の部分は地面へと向けたまま斜め下へと構える。

フェリは下方へと構えられたシュヴァリエブージへと向かい跳躍、そして刃の付け根や柄の部分へと足をかけた。そして団長はそこからフェリが落ちるまえに一気にシュヴァリエブージを振り上げた。

「跳べええええええっ!!」

砲弾を撃ち出すように勢いよく。団長渾身の力を込めて打ち上げられたフェリは瞬

く間にリッチの王冠へと近づいた。

「オ、オオオツ!？」

「もう終わりだ。島の平和、取り戻させてもらおうっ!!」

突如現れたフェリに驚くりッチ。フェザーによる攻撃の反動で杖から手は離れていた。ゾンビのガードも間に合わない。

「お前達、目標はあの宝石だ!」

「——!」

「よし、行けっ! エーテライト・プロセクション!」

「——!!」

フェリの号令を受けるとベツポ達が光弾となってリッチへと飛び掛かった。リッチは咄嗟に両手でガードするが、ベツポ達はその両手の隙間を潜り抜ける。そしてベツポ達は一点王冠にある魔晶を目指した。

「——!!」

彼等のやる事は先にも行なったように強烈な体当たりである。しかし彼らは普通の生物でも魔物でもない、実態のなき幽霊である。単純な攻撃はそれだけに強力、そのベツポ達の攻撃は物理的な破壊だけでなく魔術的要素を持つ、それ故か衝突時の破壊エネルギーは一気に魔晶内へと浸透する。

団長が既に入れていたヒビが更に広がり、そこから小さな欠片が飛び散る。そしてこの時、団長から始まった奥義の連鎖チェインバースト反応が発動。

「これで終わりだっ！ アセンションッ!!」

「ゴガア……ッ！ ああッ！ ぐあああああ——ッ!」

天から魔晶に向かい激しい落雷がおこる。雷はリツチの全身を駆け巡り、そして最後に激しい閃光を伴い爆発を起こした。

闇を切り裂き浄化するかのような落雷を受け、魔晶は完全に砕け散り閃光の中に欠片も残さず消えて行った。

■ 八 骨の折れる戦い

「うわああーっ!」

「おっと、あぶねい」

「ぶぐっ!」

上から悲鳴と共にフェリちゃんが落ちてくる。まあ飛行能力が無いので当然である。位置を見極め、両手を広げて怪我の無いようにキャッチした。

「お疲れフェリちゃん」

「あ、ありがとう……」

「中々いい語り合いだったな!! もう一戦やりたいぐらいだぜ!」

「やれやれ、無茶ばかりする奴等じゃ。どうなつとるんじや、この騎空団は」

少し遅れてガルーダがフェザー君を両手で吊り下げながら降りて来た。

「こ、これで終わったんだな?」

「と思うけどね」

フェリちゃんが不安げにリッチを見上げた。奴の杖は地面へと落ち、リッチは完全に膝をつく。ポロ布の様であった衣類は焼け焦げ、骨の身体も黒く焼けた臭いを放っていた。空いている口からは煙も上がっていた。だいぶウエルダンに焼かれたらしい。もつとも奴に焼ける肉は無く、骨しかないが。

周りに沸いていたゾンビも人魂も消え失せ、魔晶の光も消え、今の所リッチから戦う意志は感じられない。

「……………はっ!」

「むっ!」

呻き声と共に光の消えていたリッチの眼窩に僅かに光が戻る。俺もフェリちゃん等も咄嗟に武器を構えた。だがリッチは動き出しはしたが攻撃をして来る様子はない。少し距離を取りながら様子を見る。

「おお……あああ……っ」

するとリツチの身体が煙を上げながら徐々に小さくなっていく。まるで石像が崩れる様にして幾つかの骨も崩れ去り地面へと積み上がる。

「し、死んだのか？」

消滅するようにも見えるその光景を見てフェリちゃんが俺に聞いて来た。

「いや星晶獣は死ぬと言う事は無いよ。ただ魔晶で得た力が消えているだけさ」

「そのようじゃ。あそこを見てみよ」

ガルードが指さす先。積み重なった骨の瓦礫の中には、4〜5 m程になったリツチの姿があった。人間から見れば十分でかいが、星晶獣と思えば小柄な方だろう。無茶な暴走で消耗も激しいだろう、実際リツチはそこから動こうとはしていない。星晶獣とは言葉限界はあると言う事だ。

「魔晶についても聞きたい事がある。落ち着いたら、あいつともお話だな」

後ろの方からはコーディリアさん達が手を振って駆け寄ってきている。一先ず、このトラモント島での騒動は終わったと思っていだろう。

なんであれ俺はもう疲れた。一度グツスリ眠りたいね。

信頼と実績の団長

一 晴れたトラモント

「いやはや……全く面目次第も無いわい」

広い居間、そこにあるソファで何人かの団員と共に寛ぐ。そこで机をはさみ目の前で髑髏が頭を垂れている。

いや、つまりこの髑髏は星晶獣 “不死の王” リッチであるのだが、なんとも今では大人身しいものだ。昨日の激戦が嘘のようである。

トラモントの草原で行われたリッチとの決戦の後、俺は殆ど力尽きているリッチを担いでフェリちゃんの屋敷へと皆で戻った。何で星晶獣を人間の俺が担がなきゃいかなかったのか。

幸いであつたのはフェリちゃんの家が屋敷であつた事。当然普通の家よか広いのでうちの団員を皆見ることが出来た。

もう俺も皆もヘトヘトだったのでその日は取り合えず休む。そして次の日に始まる

質問タイム。はいはい、懐かしいね。ザンクテインゼルじゃいつつもだったよ。マグナ倒して質問タイム。

とにかく何故魔晶で暴走していたかだ。その事を体力の回復したりリッチに聞くと、心底恥じながら奴は語り出した。

「もう大分前の事じゃ……ワシは帝国に捕らえられておった。いや、普通ならばそのよ
うな事……不死の王たる我が人間如きに……。しかしこれは言い訳よな。なんであれ
あの時は事情が違った。不思議な少女が奴らの中に居た。見た目はただの幼子よ。
じゃがその少女は奇妙な力を持つておった。その力でワシは捕らえられたのじゃよ。
油断よなあ……なに、蒼色の髪だったか？ ああ……確かにそうであったな。空のよう
な澄んだ蒼であった。よく覚えておる。ワシは暫しその少女に使われていたのだから
な。と言つても、帝国の者共こそがその少女を利用していたわけじゃが……。その娘は
ルリアと言うのか？ そうか……娘は帝国で名など呼ばれておらなんだ。人の世に疎
い星晶獣のワシが言うのも可笑しいが、酷い話ではないか、年頃の娘が物の様に扱われ
るなど。だからであろうなあ、彼女は心を閉ざしておるようであった。老婆心かもしれ
ぬ、じゃがなあ……あの娘の危うさは、星晶獣のワシも見ていて辛いものがあつた。だ
からと言うわけでもないが、そのルリアと言う少女に使役されるのは苦痛ではなかつ
た。だがその後ワシは少女の力から切り離され、情けないが帝国に拘束された。そして

あの魔晶とか言う忌々しい宝石を埋め込まれ……その後の事はよう覚えておらぬ……」
深い溜息を吐いてリツチは項垂れた。喋り方も相まって、見た目が羸體である事を除けばただの「おじいちゃん」のようになっていた。

リツチにとつては気がついたらトラモントで突然目が覚めたような感覚だったらしい。恐らくだが、帝国の何処かの実験施設で魔晶実験の被検体にされたのだろう。ポセイドンの事を考えれば、星晶獣の制御と兵器化が目的か。しかし帝国兵の姿が無くリツチが一人暴れまわっていた事を踏まえれば、実験は失敗したかしてリツチは暴走したままに逃走。この島に流れ着き暴走を続けた……と言う所か。

「島に居たセレストの気配に呼ばれたかもな」

「かも知れぬ。同じ闇、そして不死の星晶獣。何か引かれ合うものがあっても不思議ではない話じゃ」

しかしトラモントへ現れたリツチは依然として暴走を続け、ついに嘗てのセレスト以上の猛威を振るいセレストすら霧の結界で押さえつけた。ジータの解決したポート・ブリーズでの事件、ティアマトから始まる星晶獣への魔晶被害の一つだろう。フェリちゃんも言っていたが、住民の殆どが既に開放されていたのが幸이었다。

「何であれ、もう暴走は無いだろう。魔晶は砕ききった。あんたの中に欠片一つ残っちゃいない」

「感謝するヒトの子よ。あれは……酷く疲れる」
「だろいな」

無理やり体動かされてんだから星晶獣だつて辛かろうさ。

「オレ様としては、少しその魔晶を調べたかったがな」

カリおつさんが少し惜しそうにして話す。

「まさか使う気？ いらんでしょ、あんな物騒なもん」

「あたりまえだ。誰が使うかあんな歪んだもの。単純な興味だよ。星晶獣を制御下に置こうとする試みは昔も今も禁忌の域だ。帝国がどう魔晶を作ったか、それを調べただけさ」

「星晶獣を制御する試みは昔も？」

「しようとする馬鹿はいたぜ？ 成功はしなかったがな」

コーデリアさんの質問につまらなさそう答えたおつさん。

「そもそも星晶獣を制御できるのは『星の民』だけ。そう言う事になってる。よしんば霸王戦争後に星晶獣と人が何かしら関係を持つ事があったとしても、それは今も残るような崇拜か共存の関係だ。星の民じゃねえ俺達空の民が星晶獣を完全な制御下に置くなんて考えが間違いだ」

「ふふ、うちの団長の場合は……ははっ！ どうなんだろうね、くふふっ！」

ルドさんに笑いながら言われると、どうしても俺が可笑しい人間みたいだな……。

「みたい、じゃなくて可笑しいんだよ」

「……また表情筋が正直だった」

「一々考え読まれて落ち込むな。いいか？ 常識的に考えて覇空戦争の時含めても、星晶獣を完全対等な仲間として騎空団にこんだけ入団させてる人間居るわけねえだろ、正しく化け物集団だぞ」

「ケヒヒ、団長はクレージーだからなあっ！」

「まったくだよ。後にも先にもこんな奴生まれてこねえだろうぜ」

それって褒めてると思ってるの？ それとも変な奴って言われてるの？

「まあ今後魔晶を手に入れる機会があれば調べたいところだな。別に正義の味方ぶる訳じゃねえが、ありや存在するべきじゃねえ代物だ。調べりゃ対魔晶のカウンターぐらい作れるかも知れねえ」

「自分も同意見であります。あれによってアウギユステが多大な被害を受けました。あのような事を繰り返さすわけにはいきません」

正義感の強いシャルロットさんが強く頷いた。きつとこの場にはいないユーリ君がいても同様の反応を見せただろう。

魔晶の事は俺の使命と言うわけではないが、しかし気にしておくべき事だろう。

「でだ。魔晶の事はまあ今はいいとして……どうするフェリちゃん？」

俺の隣に座るフェリちゃんに顔を向ける。彼女は実に複雑そうな表情だった。

「どうする、って言われてもな」

「……お主は今この島唯一の住人だそうだな？」

フェリちゃんにリッチの先細った骨の人差し指を向けられる。

「う、うん」

「ならば如何なる言葉も受け入れよう。お主にはその権利がある。ワシはそれだけの事を仕出かした。星晶獣であり、まして不死の王であるワシはその存在が永遠、死して償うと言う事は出来ぬが償える限りの事はしよう」

「え、いやそれは……」

おろおろし始めるフェリちゃん。不安そうに俺を見てくる、カワイイ。

「別にフェリちゃんの思った事言えばいいよ。騒動のオチをつけるようなもんだし」

「……そうだな」

しばしフェリちゃんは考えた。リッチの言うように今この島の住民はフェリちゃんだけ。俺も島に居る方のセレストも結局は余所者だ。此度の騒動での被害について何か言う事が出来るのは彼女だけだ。

「……島は傷を負った。草木も枯れ、大地の実りも多く失われた。それは確かにリッチ

の所為だろう。けど、きつとそれはまた蘇る。全ては失われていない、なによりも島が無事ならまた元に戻る。枯れた草木も大地へと還り、何時か根を張り新たな芽を出すはずだ。それに……リツチ、もう貴方は島に害を為さないのだろうか？」

「無論」

「なら、それでいい……元々魔晶が原因の事、貴方も望んでやった事じゃない。私は皆が眠るこの島が無事なら、それ以上望む事はないから」

「……そうか」

フェリちゃんの言葉をリツチはしみじみと聞き入った。

「すまぬ、そして感謝する幽霊の少女よ」

「かまわないよ」

穏やかなものだ。不死の王と幽霊の少女、熾烈な戦いの後の話し合い、それがこうやって平和に終わる。話しのおちとしてはこれ以上無いだろう。

「終わったか相棒？」

「朝飯出来タゾ」

そんな空気を壊すようにひよっこり現れたB・ビィとティアマト。

まだ今日は始まったばかりだ。



ニ サア！（*、ω、） タベテミテヨツ！

「夕、タンコブ……出来てない？」

「だ、大丈夫だよ……もう、治ってるよ……」

ダイニングへ行くと隣り合って座るゴスロリと言うか黒衣の女性二人が互いの頭を見たり撫でたりしてる。と言うかセレスト達である。

「おう、怪我治ったのか？」

「あ、団長……うん……もう大丈夫」

「昨日は、ちよつと腫れたけど……平気、です……」

えへへー、とはにかむ二人。おいおい、カワイイ。

ちやつかり人型になっているセレスト・トラumont。別に彼女がマグナ化したわけではない。やろうと思えば出来たのかもしれないが、今はただ見た目をマグナっぽくしてるだけ。そもそも真のマグナ形態は戦闘態勢のデカイやつ、実際うちのセレストも普段は「見た目マグナ」なわけだ。

ともかく二人ともフェリちゃんの家に入るため人型になったわけである。

「オマタセ（*、ω、）デキテルヨ」

「いや、こつちこそ待たせて悪い」

既にテーブルに並ぶコロツサスによる朝食。メニューは良い意味で平凡、パンにコンソメスープにサラダとソーセージと卵焼き各種。朝食だねえ。

「わあ、凄くいい香りだ」

「いいね、匂いだけで目が冴えるぜ」

コロツサスの料理は見た目も良い、その出来にフェリちゃんも目を輝かしている。

「早く席着きなさいよ。あんた来ないと食べられないでしょ！」

「へいへい」

メドウ子が右側の空いた席をベシベシ叩きながら怒鳴る。そこに座れと言う事だろうから大人しく座っておく。

メドウ子の左側にはメドウシアナがいた。フェリちゃんの家が大きな館でよかった。大きなダイニングテーブルがあるおかげでメドウシアナのような異形型星晶獣も狭い思いをしないでいい。

「悪いね待たせて。じゃあ食いますかね」

「ヒヤツハー！ 飯だあ〜っ！」

「朝の筋トレで良い汗流したから腹減ったぜ！」

「昨日あれだけ戦っても……元気な事だな彼は」

「リュミエール聖騎士団でもここまでヴァイタリティ溢れる者はそういないであります

な」

「流石コロツサスだなあ。エンゼラでなくても美味しい料理が作れるんだから。ああ、美味しいなあ」

「フフフ（＾＾ω＾＾）アリガトウ」

俺が「食つてよし」した途端に皆がナイフとフォークを手にとった。

騎空団つてのは多分一般人より飯食うとは思うけど、うちは特に食う方なんだろうな。割と食に貪欲なところある気がする。ゾーイとか特に食事に対する関心は高い傾向がある。

「うむ？ このサラダ美味しいな。けどこのドレッシングは初めてだ」

「ソレネ（。・ω・。）ノキノミイレタノ」

「木の実か、ガロンゾから持ってきたのか？」

「ウウン（人・ω・*）チカクデミツケタノ」

どうやら朝早くに館の周辺を散歩して来た時にナツツ系の木の実を見つけたらしい。それはリツチの影響を奇跡的に免れた土地に残る恵みだった。砕かれた実の触感も良く、主張しすぎない風味がサラダの味を引き立てた。

他にもハーブ系の植物を見つけ料理に使用したとの事。

「しかし本当に美味しいな。本当に彼、コロツサスが作ったのか？」

「まあね。うちで一番調理巧いよ」

「イチバンハ（。・ー・ω）ダンチヨウデシヨ？」

「そうなのか？」

「まあ教えたのは俺だけだよ」

前もなんか似た話したな。主にコロツサスが好きで料理するようになってからはキツチンに立つ事はあまりない。俺は人の作った飯を食いたいのだ。

まあ教えた身としては、こうやってコロツサスが作った料理を美味しいと皆が言ってくれるのを見ると俺も嬉しいものである。

「それにしてもフェリちゃんつてば、ご飯普通に食べれたんだねえ」

「うん？ まあそうだが」

ドラंकクさんがモグモグと食事をするフェリちゃんを見ながら話し出した。

「前来た時なんて食事する暇無かったけどさあ、幽霊なのに不思議だねえ」

「まあ私も自分とベツポ達以外で食事する幽霊を見たことは無いな。自分でも不思議に思うよ」

「僕達が帰った後もちゃんと食事してたの？　なんか痩せてない？　この島じゃあお肉とかも無いだろうし大変じゃないかなあ？」

「実家の母親かお前は」

妙にフェリちゃんを気にするドラंकさんだった。スツルムさんも呆れているが、そこまで気にしていない様子だった。ドラंकさんがフェリちゃんを気にする理由を知っているのだろうか？

「だくつて心配じゃない。島の住民みんな居なくなつたから、フェリちゃん一人だったしさあ。今回の事も僕は不安で不安でたまらなかつたね。あとほら、同じ青毛仲間としてもね？」

そう言われるとドラंकさんとフェリちゃんの毛の色は殆ど同じだった。不思議なものである。

「ありがとう、ドラंक。けど大丈夫だ。食べなければ食べなくても生きてるられる……いや死んでるが、ともかく平気だよ」

「へく？ そうなんだねえ」

「それに幽霊で成長しない所為か、食べても特に太らないんだ。逆にこれ以上痩せた事もないよ」

フェリちゃんがそう言った瞬間この場にいる女性数名の動きが止まった。と言うか硬直してる。

「それに生身だとしても、この島で生活してれば自然の実りで十分だよ。体も動かすし、太りも痩せもしないさ」

「嫌味カッ！」

「ふええ!? な、なに!？」

「やめいティアマト。妬みなんてみつともない」

「……あいつ太つてたのか?」

「主殿の家に居た時に腹がな」

「シユヴァリエ、チクツテルンジャンナイ！」

スツルムさんにバレてティアマトが赤面している。だからあんな生活やめろと言っていたのになあ。

「星晶獣が太るなんてありえないんだがなあ」

「度を超えて怠惰だったんだろ」

「ホットケ！」

ゾーイとB・ビーにも呆れられる星晶獣（笑）。多分肉体が太った星晶獣ってほんとにこいつだけだったんだらうな。ある意味歴史的発見なのかもしれない。

「しかし、ワシもいいのかのう?」

（笑）について考えてたら、テーブルの端の席に遠慮がちに座っているリツチが呟いた。しつかり彼の分の朝食も並べられているのだから遠慮する必要は無いだらう。

「いいんじゃない別に?」

「軽いなあ団長さん……」

色々あったが終わった事だ。一々気にしてられんよ。飯食って忘れちまえ。

「人間の飯は食った事は？」

「無いな。そもそも『食事』をした事が無い」

「まあそうだろうね。しかし……食うとしても、それ消化できるのかね？」

「どうであろうなあ」

リツチは骨である。もう完璧骨の身体だ。消化器官なんてありやしない。普通に考えれば口に入れた途端そのまま床に落ちそうだし。

「パンから行ってみろよ。仮に零れても掃除できるから」

「ふむ……なら折角じゃ、ご相伴に与ろうかのう」

恐る恐るリツチがパンを取り一齧りしてみる。モグモグと咀嚼は出来ているようだ。そして次に一飲みする。

「……どう？」

「……うむ、問題ないようだ」

揃って床を見るが特に何も落ちてない。やはり星晶獣、不思議パワーが働き骨でも食事可のようだ。元から出来たのか、それとも今そうなったのかは知らんが。

「ふむ、これが食事か……よいのう、悪くない」

「そりや良かった」

「良い、うむうむ……実に良いものだ」

パンを少しずつ齧り、サラダや他の料理をじっくりと味わうリツチ。伊達に不死の王と言うわけじゃないようで、初めてながら食事をする姿は様になっている。

「ね、ねえ……これ、凄い美味しい……!」

「でしょ……コロッサスはね、ソーセージにも一工夫するの……ぜ、絶品だよ」

「わ、わわ……! お、美味しすぎるよう……」

一方で二人のセレストが「キヤー!」と言いながらなんかイチャイチャしてた。セレスト・トラumontもこれが初めての食事だ。カワイイかよ。

「全くじゃ! 実に良いのう食事と言うのは、舌が踊るようじゃ!」

と、和んでいると俺の肩をバンバン叩く奴がいる。

「わかった、わかったから……いつてっ!? わかったから、俺を叩くんじゃねえガルーダッ!」

隣に居る風の星晶獣。当たり前のようにいるガルーダ。俺としてはリツチ以上になんで居るんだ感ある。

「いいのう、ヒトの子はこんな良いものを味わっておったのか。妾感激なのじゃ」

「そうかい……」

こいつも食事は初めてだったようだ。静かに食べるリツチと違い、此方はガツガツムシヤムシヤと子供のように食べている。実に落ち着きが無い。

「つーか、なんでいんだよ」

「きゅ、急に辛辣な事言うのはやめよ。ちよつとショックじゃ」

自分で思つたより表情が鋭かつたのか、ガルーダは少し怯えていた。

「だって仲間外れは寂しいではないか」

「寂しん坊かよ」

「この食事が出来るなら寂しん坊で結構じゃ。ああ、美味しいのう美味しいのう」

モグモグ食うのは良いがみるみる内に口が汚れていく。無視できればどれだけいい

か、しかし気になる。隣の席だから余計に気になる。

「おいコラ、落ち着いて食え。口が汚れとるだろーが」

「む、本当か？」

「赤ん坊でももつと落ち着いて食うつての。ほれ、その布巾で拭きなさい」

「すまぬすまぬ。夢中になつてしまったのじゃ」

すまぬと言いながらニツコニコの笑みである。そして全く拭けていない。

「ぶふー！ あんたつてば綺麗に食事も出来ないのね」

「むっ！ なんじゃメドウーサ！」

そしてそんなガルーダにちよっかいをかけ出すのはメドウ子であった。

「神鳥なんて言ってる割に学が浅いわねえ？ アタシぐらいになると人間共の生活に馴染むぐらい簡単なんだから」

「ぐ、ぐぬぬ……」

「おほほほほ！ まあこれが星晶獣としての格の違いって奴かしらねえ！」

「うるさいメドウ子」

「メドウ子じゃない！」

俺を挟んで喧嘩すんじやないよ。落ち着いて食事できないじゃん。

「あとほれ、お前も布巾」

「なによ？」

「口周りと鼻の頭が汚れてる」

「うっ!？」

俺に指摘されメドウ子は酷く赤面し、急いで布巾で顔をふき取った。

「は、早く言いなさいそう言う事は!？」

「お前は人の事からかう前に自分の事省みなさいよ。メドウシアナを見習え、綺麗にスープを飲んでるじやないか」

「シヤア〜」

メドウ子の隣で静かに舌をチロチロと動かしスープを飲み、ソーセージは丸呑みしているメドウシアナ。と言うか普通に器用だなメドウシアナ。

「によほほほっ！ 妻よりも顔を汚してバカみたいじゃのう！ ほれほれ、まだ右頬に汚れが残っておるぞ？」

「ぐっ!!? う、うるさいわね！」

「確かに格が違うようじゃのう？ 妻のほうが上、と言う意味であるがなあー！ なーはっはっはー！」

「ぐうう~~~~っ！ この、のじゃ子のくせにっ！ 生意氣っ！」

「あいたーっ!!」

ついにメドウ子が髪の毛を蛇に変えガルーダに噛みついた。と言うか、俺を挟んで喧嘩するな。

「こ、この！ くらえストーンラジツト（羽一本）！」

「あつつっ!! 羽でチクチクするなあーっ！」

「おい、お前ら俺を挟んで喧嘩するな」

「このこのこの！」

「うりやうりやうりや！」

「いい加減に……」

「ウシャーー！」

「のじゃー！」

「……喝ツ!!」

「へぶっ!？」

「のじゃっ!？」

拳骨を振り下ろす。二人の頭が机へと沈んだ。

「あにすんのよっ!？」

「い、いたい のじゃあゝ……」

「厚意で休ませて貰つてる人の家で喧嘩すんなアホ共っ！」

「さ、先に意地悪したのはメドウ子ではないか！」

「のじゃ子が生意気なのよ！」

「メドウ子は一人を煽るんじゃない! のじゃ子も煽られたからって一々構うな！」

「のじゃ子っ!？ い、今お主ものじゃ子って言ったのじゃ!？」

「あんたはどっちの味方なのよ! くらえ馬鹿人間！」

「あだだっ! 頭噛むな、いっでっ!？ 膝小僧蹴るな馬鹿っ!？」

子供過ぎる。なんなんだこいつらは、迂闊にメドウ子の隣になんて座るんじゃないか。気が休まらない。

「……何やってるんだあいつらは」

「楽しそうでいいよねえ」

「嫁に逃げられて子育てに苦心する父親にも見えるがな」

「ドラंक、彼は何時もこうなのか？」

「さあ？ 多分そうだと思うよ」

そしてそんな俺達のやり取りをみてあきれ返るスツルムさんとドラंकさんが居た。あとドラंकさん、フェリちゃんにいい加減な事言わないで。

「……いや、誰が父親じゃあいつ！」

取り合えずこれだけは叫んでおいた。

三 団長は大変

メドウ子とのじゃ子はしこたま叱り付け、皿洗いを命じておいた。二人ともブツブツ文句を言っていたが、静かに拳を振り上げると大人しく従った。コロツサスも監視で入ってるし、取り合えず今はこれでよい。

そんな二人を除き殆どの団員とリピングへと移動、今後の話し合いを行う。折角平和になったトラモントであるが、のんびりしている事は出来ないからだ。

「ガロンゾから連れ去られて今日で四日だったけ？」

「そうなるね。状況を考えれば早く解決できたと思いたいが」

コーデリアさんの言うとおり、星晶獣に連れ去られて、島に落下して、暴走する星晶獣がいると言う人生で一度も遭遇しないであろう事が連続してる騒動が僅か三日ちよつとで解決できている。

「まあガルーダに関してトラモントを救えた、と言う事で攫った事はあんま責めんでおいてやるか」

「私としてもそこは感謝したいぐらいだ。貴方が落ちてこなければ、島は空の底へ滅び落ちていただろうから」

「ワシもそうじゃな。あのままでは暴走を続け何をするか分かったものではない。最悪空域規模で死を振りまき続けたであろうなあ」

ガルーダ本人の遊びたいと言う欲求のみで攫われた身としては思う所あるが、フェリちゃんにリツチの言葉を聞きいて取り合えず今は不満は横においておく事にした。

「それで……帰りの事だけれど、取り合えず明日には発とうと思うんだけどね」

俺がそう言うのと団員の多くは頷いた。

「急じゃないか？ もう少し休んでもいいんだぞ」

「ありがとうフェリちゃん。けどガロンゾに仲間待たせてるからね」

コーデリアさんに聞いた所カルティラさんを中心にエンゼラの方は作業を進めているとの事。あちらのメンバーで不安要素はラムレッタだけだ。それ以外は大丈夫だろう。戦力的な意味もあつたろうが、ティアマトとかを此方につれて来てくれたのは非常に助かった。

「うっかりティアマトなんかガロンゾに残った日には、金がどれだけ吹き飛ぶかわからん」

「失敬ナ。今ハ自重シテルダロ」

「どーだか、前どつかの島で物欲しそうにブランドの服見てたろ」

「我慢シタダロ！」

「つたりまえだ！ あれ30万ルピしたじゃねえか、あの後値段見て目玉飛び出るかと思つたわ！」

エンゼラ改修で更に借金増えるんだからな。数万だとしても買物勝手にした日にはマジで俺は何するかわからん。

「昨日か今日当たり、もうエンゼラはバラされてるかな」

「当然作業は開始してるだろうさ。相棒が攫われながらも頼んだ事だしな」

「ありがてえ話だよ」

きつとカルティラさんが仕切ってくれているだろう。問題児達が比較的こつちに集

まっているので、彼女のしきりなら問題は無いだろう。

「どんな艇になるか楽しみだよなあ。クレ〜ジ〜でラブリ〜な艇になると良いよなあ！」

「見た目は対して変わらんとちゃうけどさ」

ハレゼナ基準の「クレ〜ジ〜でラブリ〜」な艇になると一体どうなってしまうんだ。船首に巨大な壊天刃でも取り付ければいいのか？ 個人的に嫌いじゃないが、ちよつと物騒すぎるな。

「私達も戻れるなら早く戻りたい。時間をかけるとクライアントが不機嫌になる」

「あの人つてば時間とか厳しいからねえ。きつと待ち合わせで15分前には来てるタイプだよきつと〜」

「そうだよなあ、黒騎士さんなあ……」

黒騎士さんへの謝罪、と言うのもなんかおかしいが一応諸々迷惑かけた事への言葉も考えておかないといけない。たぶん俺の事をイライラしながら待っているだろう。あの人沸点低そうだからなあ。次合うの怖い。

「……そういやさ」

ふと……で疑問が浮かぶ。

「オルキスちゃん達はミスラの契約で外に出れないわけじゃん」

「そうだな」

「けどあくまでオルキスちゃんが出れないだけで、ドリンクさん達は問題なかったわけじゃん？」

「そうだねえ」

「じゃあ俺ってなんでガロンゾから出れてんだろう」

「……そういやそうだねえ」

「いや、それは契約内容を考えればわかる」

俺が疑問符を浮かべていると、おっさんがさりりと言った。

「するってーと？」

「重要なのはエンゼラにあの小娘を乗せるって言う事だ。ガロンゾに居る必要があるのは、エンゼラとオルキスの二つ、お前は特に重要じゃねえのよ」

「約束したの俺なんだけど……」

「ミスラの契約にも忘れられたんじゃないやねえのか？ 地味過ぎて」

「うるせい！」

「やーん☆ 団長さんおこった〜！」

「このおっさんのぶりっ子ほんと腹立つなちくしょうこの野郎。」

まあ俺が外に出れる理由はそこまで重要じゃない、ただ気になっただけだし。

「それじゃあ……今日は荷物纏めるぞ。明日またセレストに積み込むから」

「オイラ達の持つてきたのは、昨日の戦いで結構駄目になったけどな。幸い必要な量の食料は残ったけど、大した量じゃねえから直ぐ終わるぜ」

「その時は島の調査だ」

「調査？」

「リツチの瘴気が島のどこまで影響を与えたのか気になる。コロツサスが木の実を見つけた事もあるからな、案外無事な所が多いかも知れない」

霧で薄暗いが元々それなりに自然の実りが多い島のはずだ。死の瘴気の影響を受けた事で何処までの影響を受けたのか興味があった。星晶獣による被害のデータサンプルとして記録しておく意味もある。似た星晶獣に今後出会わないとも限らないからなあ。

「だったら私も手伝おう。積荷の準備もだが、島の全体はまだ見れてないんだ」

「ん、ありがとねフェリちゃん」

「こちらこそすまない、何から何まで」

「そう言う事でしたら、私もちよつとお願ひしたいことがありますねえ」

「そうですか、ならシエロさんも……ん？」

ハッと横を見る。凄く見覚えるのあるハーヴィン女性、けどこの島に居ないはずの商

人。と言うかシエロさんだった。

「う、お、わ、あ、あ、あ、あ、つ!? シエ、シエロさ、あつだああつ!?」

「うわー!? だ、団長さんがひっくり返って頭打ったつ!?」

「よろず屋殿!? い、何時の間にここに!?」

「はひーっ!? な、なんでここにヒヒヒッ!? あは、わはははっ!?」

「いかん!? 驚いた拍子にルドミリアが発作を!?」

「止めろとめろ〜! また引き付け起しちまうぜえ〜!」

「セレスト『安楽』だっ!」

「わ、わかった……! ほりやあく……!」

「あ、あはは……はは……ひひっ! わーはは!?」

「うええ!? き、効かないよお〜……!」

「安楽させられすぎて耐性ついてきやがったのか!?」

「奥の手だ! フェザー! やってやんなあ!」

「分かったぜB・ビィ! おっしやあ!」

「ごぼっほおおっ!? ほ、げほっ! ……いた、あいたた!? あだだ、はははははっ!?」

「こいつフェザーの一撃に耐えたぞ!?」

「ええい! 無駄に頑丈になったな!?」

「い、い、い、ひひひひっ!? 痛い、苦しい、いたくるしい、ははは!? あーははははっ!?」
 「む! すまねえルドミア! もう一撃で決める!」

「内臓やられるからもう打撃は止め! B・ビー、サブミッションで巧く落とせ!」
 「まかせろおあ!」

一瞬にしてこの場が混沌となる。元から混沌としてるとか言っではいけない。とにかくえらい騒ぎになった。

「のうお主等、人間とは皆こうなのか? ワシにはようわからぬ」

「……あれと一緒にするな」

「まあまあ、楽しそうでいいじゃない」

「楽しそうと言うわりに、团长はのた打ち回つとるがのう」

そして椅子に座ったまま、大騒ぎの俺達を見て益々呆れ返るスツルムさん達であった。

■ 四 神出鬼没・極

「ぶつけたのってこい?」

「いつつつ!? 馬鹿、メドウ子さわんなっ!? ちょっと腫れてんだよ!」

「なによー怪我の具合見てやってんのよ。大人しくしてなさいよー」

「ならそのにやけ面止めろ！ 説得力が無いわ！」

「こつちも腫れとるのう」

「おめーも止めんかのじゃ子!? ええい、散れお前ら！」

床に頭ぶつけた所がジンジンと痛む。それを知ったメドウ子とのじゃ子がニヤニヤしながら俺の後頭部をツンツンしてくる。

「いてて……で、ルドさんは？」

「速やかに意識落としたから綺麗に気絶してるぜ」

「綺麗にて……まあ無事なら良いけど」

離れたソファで安らかな顔で気絶してるルドさん。時たま気絶しながらも笑ってるのか、腹筋辺りがピクピクしてる。

「んで、ですねえ……」

「うふふ」

さっきの事態を巻き起こした方と向かい合う。

「なんで居るんすか、シエロさん」

神出鬼没のよろず屋。俺の人生ではある意味ジータに次いで影響力と存在感を持つ債権者様である。マジでなんでここにいるのか。

「いやあ、先ずはご無事で何よりです団長さん。団長さんにはこんな台詞ばかり言ってますねえ」

「ほんとにね……」

「それですねえ……私がここに居るのは団長さんが攫われた後直ぐここから近い島に移動しましてですねえ。それで昨日この島の霧が晴れたと言う知らせが入ったので今朝の内に島に移動し始めまして」

「で、今ついたと……」

「そう言う事です」

「そう言う事と言われても困る。俺が知りたいのはそう言う事じゃない。俺は来た理由を知りたいのだ。」

「来た方法はわかりましたけど……なんで居るんですか？ マジでびびったんすからね俺」

「急に申し訳ありませんでした。ただこちらもこの島の事が気になっていましたですね」

「この島って……え、トラモントの事知ってたんですか？」

「はい。以前からこの島でしか取れない農作物の取引を少々やってたんですよ」

「いやいや、以前からって……この島ゾンビしか居なかったんじゃ」

「勿論存じます。大雑把なところがありました。皆さん大らかでこちらも商談もしやすく大変良い方達でした。」

マジかこの人、ゾンビとも商談してたのかよ。流石星晶獣と商談する女。と言うか普通に出入りしてたのかよ。セレストの霧通過したのかシエロさん。

「知ってたフェリちゃん？」

「いや、私も初耳だ。私は館に引きこもってたから、村でどんな事があつたかは知らないし……」

フェリちゃんに確認を取るが彼女は知らないらしい。ただシエロさんが嘘を言うとは思えない。それとこの人の謎の移動方法を考えるとありえる話である。ほんと恐ろしいな。

「この島でしかない果実等が大変好評でして。住民の方達が去つてからも残った果実も独自のルートで入荷してたのですが、今回の騒動の煽りを受け入荷が困難になっていたんですよ。」

「リツチの結界か……」

「はい、入荷が途絶えた時点では原因が不明だったの………実を言えば何時か団長さんをお願いしようと思つていたんですが……うふふ、その必要はありませんでしたね。」

いつの間にか再び霧に包まれたトラモント島。その霧の濃さと厚さはセレストの比ではない。流石のシエロさんも出入りできず、目当ての果実も入手が不可能に。そこで折を見て俺達に依頼を出そうと思ったら俺がガルーダに攫われトラモントへ……。

タイミングずれてたら依頼料発生したのか。……いや、その時はトラモントの被害が手遅れになっていたはずだ。そうならなくて良かった、そう思うべきだ。

「その目当ての果実がある場所の確認をしたいので、島の調査をするならついて行きたいのですが」

「ああそう言う……いや、別にかまわないですよ」

なんだそんな事であったか。いやーこんなタイミングでこんな登場の仕方だから変な依頼を頼まれるのかと思ったじゃん。ビックリビックリ。

「それとですねえ」

「うっぷす」

思わず変な声が出た。

「まだなんか……」

「実は2つほど依頼を受けて欲しいんです」

「依頼で、俺達ガロンゾに帰らんといかんのですが……」

「はい、ですのでその道中に頼みたい依頼なんですよ」

まあ妙なタイミングで仕事持ってきたなあこの人も。

「エンゼラ直つてから……いえ、ガロンゾに帰つてからじゃ駄目なんですか？」

「駄目、と言うわけではないのですが……この辺りからガロンゾへ向かう騎空団で、お仕事を頼める騎空団を探していたらですねえ」

「丁度良い所に俺達が居たと？」

「はい」

それ本当に他にいなかったのかなあ。ガロンゾの仲間を思うとあまり乗気にはなれなかった。

「別にいいじゃねえか」

しかしここでおっさんが声を上げた。

「どうせ急いで戻つても艇の修理は出来てねえ。だったら今のうちに少しでも改修費用稼いでおけばいいだろ」

「いやまあ、けどそうは言うけどねえ……」

「オイラもカリオストロの意見には賛成だな」

「B・ビー、お前もか……」

「だつて相棒、今回の改修で使う金いくらよ？ 改修つてもエンジン点検やら諸々の

オーバーホールも兼てるし何やかんやで200万は越えたら」

「うっぐ……っ!？」

「一応借金返済用で100万ちよつとあるだろうけど、それも使うとしても借金は400万、下手すりゃ500万は超えるぜ。なあ、よろず屋？」

「ええ、そのようになるかとお〜」

「な? やつて損の仕事じゃねえよ」

「う、う〜む……」

「借金に関しては例によつて“催促無しのある時払い”ですの〜……あまり気にしすぎず、こう言つた依頼を受けていただけると、こちらとしても助かります〜」

「そう言われると弱いなあ俺つてば。実際催促無しはかなり助かつてるからなあ。しかしその借金の所為で首を横に触れないのも確か。いや、そもそも俺が自分でこさえた借金じゃないんだが……おのれ、ばあさんめ。」

「それにガロンゾ戻つて何の拍子に借金増えるかわからねえしな」

「お前怖い事言うな」

「背筋が凍るぜ。」

「……あんま道中長旅でもセレストに負担が……」

「わ、私は大丈夫だけど……だ、団長に任せるよ……?」

「え、あそう……そうかあ、そうなる。うーん」

セレストは頑張り屋だけど、無理なら無理って言う子だし本当に大丈夫なんだろうが……。

「そうだ、ドラंकさん達も早く帰らないと」

「あ、別に僕達の事は気にせずでオツケーだからねえ」

「さつきはああ言ったが、早いに越した事は無いと言うだけだ。一週間程度なら想定内、最終的にお前を連れ帰ればかまわん」

「おう……そつすか」

そうなる、ああ断り辛い断り辛い。

「……どんな依頼です？」

俺がそう聞くとシエロさんはすごいニンマリと太陽の様な輝きの笑みを浮かべた。

「こちら、ある島の小さな村から増えすぎた魔物の退治の依頼が有まして」

「それだけならよりもよって、このタイミングでウチに依頼持つて来ないですよ？」
自分でもって「よりもよって」なんて言っちゃう事に悲しさを覚える。

「やはり気がつきますか……実はですねえ、増えた魔物と言うのがどうも普通の増え方じゃない気がしまして……」

「……なんぞキナ臭さが？」

「私の勘としか、詳細は不明ですが……」

「まさか、また魔晶がらみでしょうか」

シャルロットさんが深刻そうに呟く。俺もその点は気になった。魔物の異常な発生と聞くと今回の事もあつて魔晶が絡んでいると思つてしまう。

「今回の様な事が他でも起こっているのか？」

「ここ一年でそう言う話は増えてきたよ。少し話したけど、アウギユステでも魔晶での騒動が二度あつたからね」

「そうか……私が知らない間に、世界は大変な事になつてるんだな」

魔晶で暴走したりリツチに島を襲われたフェリちゃんもまた魔晶での被害者とも言える。俺達の話を聞き、彼女の瞳には怒りと悲しみが浮かんでいるようだった。

「魔晶関係かは不明ですが……こちら不確定要素の多い依頼となりますので、そう言つた予想外な事に慣れた方に頼みたいと考えております」

「ジータの方は」

「今あちらも立て込んでまして、それとあまり時間をかけない方がいいかと思ひましてですね」

成る程、一応納得である。

こと魔物異常発生系に關して俺は碌な目に遭わん。だからこそ慣れてる。嫌だけでも慣れてる。本当に嫌だけでも。

「村の危機、でありますか」

「気になります?」

「うっ! まあ、やはり正義を謳う身としては」

「ですよね」

シャルロットさんがウズウズしてる。人の危機と聞いているのはジツとはしておれぬ性分の人であるなあとしみじみ思う。あとコーディアさんはそんなシャルロットさんを見て微笑み、俺に視線を移すと「よしなに」と言うように軽い目くばせを送った。

「……もう一つの依頼ってのは?」

「そちらはとある人と荷物の輸送ですねえ」

「輸送? いや構わないですが、そりやまた御使いじみた」

「そうですねえ。ただこちらは依頼を出した方がちよつと特別でしてえ」

「特別って言うとは?」

「こちら著名な服飾デザイナーさんなんです、自分のデザインした服が完成したので、完成品の確認等をしたいかあ」

「……その人が希望する移動日程と、島の位置関係から考えて魔物討伐依頼を終えた俺達が丁度いいんじゃないか、と?」

「うふふ、団長さんはご理解が早くて助かりますう」

むむん、すっごい嬉しそうに言われても複雑だぞう。うぎぎ。

「ちなみに依頼料はこのようになっております」

チラリとシエロさんが俺に依頼書類を見せた。そこに書かれている依頼の報奨金は、ひーふーみー……。

「結構いいつすね……」

「討伐依頼は不確定要素がある分と、デザイナーの方はかなりの著名人なので護衛を兼ねてこの金額になります」

なるほどそう来たか。

むこうはあらゆる依頼を多くの騎空団に紹介してきたプロ中のプロ。そのシエロさんの勘が「ちよつと怪しい依頼……」と思うのなら、本当にそうなのであろうと思う。

確かにおっさんやB・ビーの言う事も尤もではあった。ここは急ぎすぎずにガロンゾへと向かうとするかな。

「わかりました、依頼お受けします」

「そう言って頂けると信じてましたあ〜！」

ニコニコ笑顔のシエロさんと握手を交わす。

依頼を受けると言葉に出した以上切り替える。ガロンゾの皆には悪いが、きつとカルテイラさんを中心にして頑張ってくれているはずだろう。エンゼラの改修具合も楽し

みにしておくとする。

「ところで、そちらの……フェリさんと、リッチさんでしたか？」

「私？」

「む、ワシもか？」

「はい、少しご相談がありましたですね。島の調査後でかまいませんので、じっくりとお話したいのですよ」

そしてまた勝手に色々始めるシエロさんであった。

■ ■ 五 一方その頃

「ほれほれ、休んでる暇はねーぞっ！ 今日中にはバラしきるんだからな！」

ガロンゾ、中央船渠。そこで特に大きなドッグ内で船大工達の熱い叫びが飛び交う。

「親方、気囊とプロペラが届きましたっ！」

「よし、第4倉庫に置いておけっ！」

「この古い帆は」

「痛んでねえか調べとけ！ 痛んでんなら新しいの発注かけろ！」

あっちへこっちへと走り回る船大工達。その中心には、いまや半分は船体が無くなっ

たエンゼラがあった。

「仕事速いなあ、流石おっちゃんや」

そんな男達の仕事ぶりを少しはなれた所で見守るのはガロンゾ待機組のメンバー数名であった。

「見事にバラされてるわね」

「艇の解体作業つて初めて見たかもなあ」

マリーとカルバは船大工達の迫力に離れた所からも押され気味だった。

空の世界で騎空艇は珍しい物ではない。その修理や造船も同様であるが、しかしその作業がここまで間近に見れるのは、島全体が造船所と言つていいこのガロンゾぐらいだろう。

「ルナールも熱心だねえ」

「こう言う機会あんなないからね。背景で描く事あるかもだし」

独楽に乗ったままのフィラソピラが隣で熱心にスケッチを取るルナールを見る。ルナールは先程からスケッチブックにエンゼラの解体作業の様子を描き続けていた。

なおこの場にはいないラムレッダは二日酔いでダウン。その看病でブリジールが宿に残った。ユーリはカルティラ達の食事の買出し、そしてリヴァイアサンは撤去した水槽の仮置き場となっている貸し倉庫に付きっ切りだった。

「リヴァイアサンも好きよねえ。水槽移動してからずっと世話してるし」

「好きでやってるんだらうねえ。大変そうだけど、楽しそうだったし」

「細かい性格してるわよね。水温だの水質だの毎日ノートに取ってるって聞いたわよ私」

「あれどうやってノート書いてるんだらうね。ヒレしかないけど」

リヴァイアサンの不思議を感じるトレジャーハンター達。

そして彼女達がここにいる理由であるが、それはまた傍で話しこむユグドラシルとノアが理由であった。

「――?」

「そう、なるべく湾曲した形のも欲しいんだ。カーブした船体部分に使いたいから。出来そうかい?」

「――!」

「そうか、出来るんだね。よかった」

ノアは艇の模型を手に取りながらユグドラシルに色々と説明をしていた。これはユグドラシルが生み出す木材に関しての説明だった。

加工が容易で且つ頑丈なユグドラシルの生み出す世界樹。ただしその質は生み出す土壌にも左右されるため、ルーマシー原産に比べると幾らか質が落ちるものの、それで

も通常出回る木材に比べれば遥かに良質な材木となる。その元の木を生み出す際どこまで自由な形で作れるかをノアは確認したかったのだ。

始めから狂い無く真直ぐに伸びたもの、緩やかで理想的なカーブを描いたもの、それを生み出す事が可能であれば生み出す大きさによつては最小限の加工で済み、時間も大きく削減できる。

そんなやり取りに立ち会うために他の待機組の面々もここへと来たと言う事である。「あつちも熱心よね。必要とはわかるけど」

「できるなら団長が帰る前に改修終了の目処は立てたいところやからな。うちの方でもカリオストロご希望で発注かけた錬金術関係設備が予定より納入がはようなるって話やさかい、今の所ちよつとは余裕もてそうや」

「一月になるか、半分になるか、あるいは倍になるか。はてさて独楽が何度回るかな」

ふつとため息を吐く面々。そしてふとルナルがスケッチの手を止めて顔を上げた。「……団長さ、仲間増やしてきそうよね」

「あー」

その呟きを聞いて皆気の抜けた声を出した。

「何人ぐらい増えると思う?」

「増えるのは確定なのね……」

「マリーとカルバン時もこんな感じやったで。メドウ子含め「ああ、まーた団長が濃い仲間増やした」って皆思ったわ」

「いや、メドウ子と比べないでよ。あたし言うほど濃くないでしょキャラ」

「私もじゃない？」

「いや、カルバあんたは結構濃いわ」

「え〜？ そうかなあ」

星晶獣であるメドウーサと比べられては確かにマリーもたまったものではないう。だが彼女が自分で言うほどキャラは薄くない、むしろ一般的には濃いキャラに入らずだ。

「なんにしても、団長の事だから可愛い子なんか頼まれると弱いからねえ」

「あと押しの強い人にね」

「シエロはんも動いとるし、こら三人は固いやろな」

「おっ？ なになにに賭けようか」

「いいねえ。仲間三人でヒューマンの女性！」

「またハーヴィンと違うか？」

「ドラフと言う線も……」

「例のガルーダとかも」

本人が居ない事をいい事に好き勝手言う団員達。当然傍に居たノアにもその会話は聞こえていた。

「はは……何と言うか、自由だねえ」

あと団長さん気の毒だな。とも彼は思った。

「――！」

「星晶獣一体とエルーン女性三人……って、君も賭けるのかい？」

「――！」

そして普通に会話に混じるユグドラシルを見て、きつとこの団に入ると星晶獣もこうなってしまうのだなあ……としみじみと感じたノアであった。

飛び出せ、濃霧の島！

一 終わった後も大変

俺が攫われてから五日目、リツチとの決戦から二日目。リツチが倒れ霧が解除された今も、この島特有の霧が朝日の光を僅かに拒み、トラモント島の朝は少し暗い。それでも開放された清々しさは気分が良く、大きく深呼吸をする。口に入る空気は新鮮で嫌な臭いも無い綺麗なものだった。

「瘴気の霧自体は完全に消えたな」

「そのようじゃ」

俺の眩きに答えるのは隣に佇むリツチ。杖をついているがさすが星晶獣、すでに歩けるほどに回復した。その隣にはもう一人、マグナを模したセレスト・トラモントがいる。

「ワシが意識を失った時点で展開した瘴気は全て消失したようじゃのう」

「し、島の何処歩いても……もう、健康被害は起きないね……」

「健康被害とか言い方が生々し過ぎる」

昨日行われた被害調査。ただ毒と表現するのは生温い程の効果を持つトリツチの瘴気。それが残留していないかが主な確認であった。それと同時に腐り落ちた木々なんかは直ぐに燃やし僅かでも瘴気の毒素が残留している気配があれば焼却する。

またシエロさんの目的であったトラモント島特産果実等は全滅こそしていないが、主な畑と群生地がやられていた。残念ではあるが、時間が経てばまた数を増やしていくだろう。

しかし自ら気になってやったが、瘴気の残留毒性調査とか島の役所か業者の仕事みたいな事やってんなあ俺は。

「朽ちた木々に崩れた大地、決して被害も少なくないけども、これは不幸中の幸いと言えるのかね」

「お主が落ちてくるのがもう少し遅ければ手遅れであったろう。我が瘴気は死そのもの、それが残留しない時点で消えたのは正しく幸いであった。胸を張ってよい、お主はこの島を救った」

「あつそう、まあ、過程が過程だからか心境複雑だねえ」

「け、結果オーライ……だよ……!」

グツと両手を握り締め励ましてくれるセレスト・トラモント。カワイイ。

だが果たして誰かを助けるために、俺は毎度何か訳のわからないトラブルにでも巻き込まれんといかんのか。だとすると今後の不安が増すというものだ。

「それでリッチは暫く島残るって?」

「ああ、そうする事にした」

俺の問いにリッチは肯定する。今朝方何故かシエロさんから「リッチさんは島に残るので」と言われた。

「流石に疲れたからのう。特に何処の島で契約しているわけでもない、暫くここで腰を落ち着けるのも良いと思った」

「星晶獣の言う『暫く』ってどのくらい?」

「さてのう10年か50年か、あるいは数百年か。ワシが飽きるまでと言った方がいいかもしれん」

「まあそんなもんか」

明確な答えが聞けるとは思っていない、なんせリッチは星晶獣。人間五十年と誰か偉い人が言ったと言うが、永久を生きる星晶獣の感覚を知るには人間の一生は刹那より短い。

「わ、私も一人で寂しいから……は、話し相手、出来た……えへへ」

「ワシも退屈せんすむ」

「そりや良かった。まあ人が居るわけじゃないし、好きに療養しなさいな」

「……ふっ、ヒトの子にそんな事を言われるとはなあ」

そのように言いながらもリッチの声はどこか楽しそうだった。

「まあよろず屋の話通りであれば、退屈などする暇は無いか」

「シエロさんの？ そう言えば昨日話してたな。何かあったのか？」

「まあ後でわかる」

「う、うん……ちよつと、楽しみだね……」

何か俺の知らない所でまたシエロさんが動いている。リッチもセレスト・トラモントも笑っているのでも悪い事ではないのだろうが、どうも不安だなあ。

「それと、朝食食ってからフェリちゃん見なかったんだけど、なんか知ってる？」

「それも後でわかる」

「お、お楽しみ……だよ」

■ 気にした様子も無く答える二人。結局俺の不安が増したただけだった。

■ 二 奥義・なし崩し

■ 結局フェリちゃんはどこにいるのかわからないまま、俺はリッチ達と少し移動する。

ここは島の端にあるデイスペラ絶壁、セレスト・トラモントが潜んでいた場所。不規則に隆起した地面が作り出す絶壁は、一步近づくだけでも多くの人が思わず足が竦む事だろう。

そんなデイスペラ絶壁に横付けされているのは、セレスト・マグナの方の騎空艇形態。その周りには団員の皆がいる。

俺が気が付いたのか積み荷の確認作業をしていたコーデリアさんがよってきた。

「団長、積荷の確認が済んだよ」

「あ、はい。お疲れ様、ありがとです。風も無い、霧も薄い方だ。出るには丁度いいな」
「う、うん……問題なく、出航できるよ……」

絶好の出航日和。セレスト・マグナも騎空艇の姿なので表情は読めないが嬉しそうにしている。

相変わらずフェリちゃんの姿はみえない。とりあえずタラップを上りセレストに乗り込む。またこの場にはシエロさんもいる。途中依頼の目的地とは別の島までついでに送る事になったのだ。

「シエロさんも準備良いつすか？」

「大丈夫ですよ〜」

いつもニコニコよろず屋シエロカルテ。ある意味笑顔が武器の人だな。そう言う意

味でも商人向きだったのかもしれない。

「大丈夫とは思うけどみんな乗ったな？」

「点呼するか？」

「あー……じゃあ一応やるかね。セレストから」

「い、いち……！」

「2つ！」

と、セレスト、B・ビイと続いて皆が番号を言っていく。俺と助けに来てくれた救出部隊含め全16名。ドラंकさんとスツルムさんもよくきてくれたものだ。

「14！」

「15！」

「16！」

「はい、全員乗って——」

「じゅ、17」

「じゅーはち！」

「ん、む、くくくつ!? ちよつと待とうかあ!？」

しれつと混ざったけど、人数増えたねえ!?! 二人ほど増えてるねえ!?!

「つーかフェリちゃんじゃねーか!? どこいたの、てか何普通に混ざってんの!?!」

「あ、えっと、コロツサスの後ろに隠れて……」

「わらわもおるぞ！」

「おめーは後回しじゃい！」

「のじゃっ!?!」

なんかシヨックを受けたガルーダは無視して今はフェリちゃんだ。

「姿見せないと思つたら……」

「す、すまない……取り合えず乗つておいた方が良いと言われて」

「言われたつて誰に？」

「シエロカルテさんに」

「シエロさーんっ!?!」

「はい〜」

はい〜、じゃないんだよなあ。さっきより笑顔じゃないかこの人！

「いやあく昨日ちよつと団長さんの騎空団に入る気はあるかお話したら、案外乗り気になつていたので〜」

「なに少女唆してるんですか貴女は……」

「いいじゃありませんかあく。優秀な人材と思いますよお〜？ 幸い旅立つ準備も直ぐできると言う事でしたので〜」

「団長の俺抜きで話し進めてるこの人」

「話は早い方が良いですから」

「いや、団長は俺……」

「え、何々フェリちゃん来るの？ 歓迎するよ僕」

「お前はこの騎空団の人間じゃないだろ……」

何故か無関係のはずのドランクさんが喜びスツルムさんが呆れてる。

「てか急すぎる。相談してよ昨日の内に」

「そりゃ何時もの事だぜ相棒」

「段階踏ンダ仲間ノホウガ珍シイダロ」

うるさいぞお前達。それに慣れてはいけないんだよ、普通は段階踏むもんなのこうい
う事は。

「ごめんなさい、なし崩し入団方式が一番手っ取り早いからと」

「シエロさんっ!!」

もう誰がそれ言ったか分かってるからな。

「まあまあ、団長さん。一つフェリさんのお話を聞いてください」

そう言うのはね、昨日の内にするもんなの。もしかしなくても面白がつてやってるで
しよ貴女って人は、ちくせう。

「……なんか、心境の変化あったの？」

「うん……」

「先ず話を聞いてみる。この五日間、特にリツチ決戦と昨日で彼女の中で何かが変わったのだろうかそれが何かは分からない。彼女の言葉を聞かないと俺は何も言えない。」

「……私は以前から自分の役目を考えていた。セレストから開放されて、他のみんなは消えたのに、何故自分が残ったのか。ジータと別れてからそれを考えていたんだ。幽霊となっても存在する理由はなんなのか、結局答えは出なかつた……けど今回の事で一つ分かつたんだ。多分私の求める答えは、この空にあるんだって。ジータや貴方が星の島を目指すように、私も答えを求めて旅立つ時が来たんだと思つたんだ。流星のように降つてきた貴方が、きつとその切欠だつたんだと思う、だから今私は島を出るべきなんだ」

「フェリちゃん……」

「相棒やつぱは落ちてきたのかよ」

「流星の団長かあ」

「似合ワンナア」

「あいつって、何回ぐらい落ちたの？」

「主の落下回数と吹っ飛んだ回数はかなりだな。面倒で覚えていない」

「君達、今真面目な話なんだけどねえ!」

「まあまあジミー殿落ち着いて」

ちよつとジーンと来たのに台無しだよ。

「昨日までどうしようか悩んでいた……そうしたらシエロカルテさんが話を聞いてくれた。貴方の困ならきつと心配いららないからと」

「俺の評価高すぎない?」

「いえいえ、正当な評価ですよ」

そりゃありがたいこつて。

「けどそうか……誰かに言われたとかじゃなくて、フェリちゃんが来たいんだね?」

「ああ、そうだ。私が、空を見てみたい」

「……うちの団大変だよ? 今いる奴らと同じぐらい濃いメンバーがまだいるし」

「しょ、承知の上だ」

「そつか……じゃあ一つお願いがあるんだけどね」

「お願い?」

俺も別にフェリちゃんが仲間になる事を反対するわけじゃない。なんだつたら超ウェルカムである。常識人で癒し系エローン少女とか本当なら拒む理由無し、ただ不用

意に仲間に入つて大変な目に遭わないか心配だったただけだ。

「時々でいいからベツポ達をモフらせて」

「あ、それか」

フェリちゃんが来ると言う事は当然そのペットで家族の幽霊アニマルズがついて来る。あのコロコロ、モフモフした可愛い奴らが。

「この子達が良いならいつでも良いぞ、なあお前達」

「――！」

フェリちゃんが声をかけると姿を消していたベツポやジジが実体化、愛くるしい声を上げて俺へと擦り寄ってきた。

「あーもう可愛いなお前ら、ほんともう、なん、もう……！」

「これ馬鹿人間の方が籠絡されてない？」

「実際ソウナンジャナイカ」

「だが確かに……可愛いな」

（笑）共め、好き勝手いいなさる。あとコーデリアさん、いつしよにモフります？

「それではあ、フェリさんの同行はOKと言うことで」

「いいつすよ。勝手に話進められたのが驚いただけです。別にフェリちゃんが決めた事なら反対もしないよ」

「ありがとう、団長さん……」

「相棒決め顔してるけど、そいつら愛でながら言っても緩いだけだぞ」

「うるへい」

そう言いつつもベツポ達を撫でる手は止めない。はあーめつちやモチモチモフモフ……。今回の戦いのストレスが消えるようだ。

「エンゼラの拡張頼んで正解だったって事だな。フェリちゃんの部屋も用意しなきゃねえ」

「そんな気を使わなくても……必要な物さえあれば」

「遠慮しない、うちの団に入る以上不自由な思いさせられん」

しかし仲間になるのがフェリちゃんでよかった。こんな良い子そうそういないよ。いや、いない事はないか……俺の周りが可笑しいだけかもしれない。

「それじゃあ……いきますかね」

新たな仲間を迎えていざ!!

■ 三 さらにトラumont、また会う日ま「ちよちよちよつ!!」

「わらわはっ!?!」

フェリちゃんを迎えていざトラモントを出ようとしたが、そうはさせぬとばかりにのじゃ子が俺の前に飛び出してくる。

「くそ、有耶無耶にして出発し損ねた……」

「お主酷過ぎないか!? わらわも一緒に手え上げたじやろ!? 18人目え!」

手を上げながらぴよんこぴよんこと跳ねまわるのじゃ子。アピールしまくるので、放っておくと「のじゃのじゃのじゃのじゃ」と言い続けて残像を出しそうな勢いだ。

「落ち着けい」

「のじゃっ」

鬱陶しいので肩を押さえてジツとさせる。

「……はあ、それで何が目的ですかね? お見送りはあちらでお願いします」

「船外を指さすでない! わざとか、わざとなのか!? 流れ的にわらわも仲間に入る感

じのやつじやろ!」

「面倒な星晶獣はもういいよ」

「そうよそうよ、帰れのじゃ子」

「辛辣!?! お主星晶獣対しての評価酷過ぎではないか!? あとメドウ子もなんじゃ、混

ぎるな!」

気に食わないのかライバル意識でもあるのか知らないが、メドウ子が一緒にのじゃ子

を追い出そうとしてた。

だかのじゃ子のありさまをみかねてか、ゾーイとコロツサスが俺を落ち着かせに来た。

「団長、せめて話ぐらいしてやったらどうだろう」

「ムゲニスルノモ（・ω・） チョットカワイソウダヨ」

「ほれ、なんと心の広い星晶獣達じゃろう。お主も見習ったらどうじゃ」

「お前頼む立場でよくそんな強気でいられるな」

「むう、確かに……ならば頼むっ！ わらわも仲間に入れてくれ！」

「嫌だよ」

「のじゃあ!? 即答!?!」

俺のあまりの迷い無い即答に驚愕のガルーダであった。

「なんでじゃ、なんでじゃあく！ いいじゃろそこな幽霊娘も仲間になったんじゃし、ついでで仲間にしてくれたってえ！」

「ゆ、幽霊娘。いやそうだけでも……」

「ついでで星晶獣の仲間増やせるかよ。なんだそのスナック感覚」

「星晶獣が仲間なら頼もしいじゃろう!?!」

「もう9体いるんだよ」

「そ、そうじゃったな……なんなのだこの騎空団」

「俺が聞きてえ」

既に国家戦力超えてる勢いだよ。各国に目をつけられていると言われているが、それも冗談と言えない状況だからな。事実コーディアさんの話では、リュミエール聖国は俺達の動向気にしてゐるらしいからな。

「しかし困ったのう、これではわらわのアピールポイントが無いではないか」

「じゃあ諦めろよ、縁が無かつたって事で」

「そうよお呼びじゃないわよ」

「ぬう〜！ 意地悪言うな、メドウ子まで酷いぞ！」

ぷりぷりと「3」みたいな口で怒るのじゃ子、ちくしようちよつと可愛いな。

「今回の事で暴れて結構鬱憤も晴らせたろ？ なんだって俺んところ来たがるのさ」

「だつて楽しかつたし」

「子供か」

「本当だからしようがない。ただ崇拜されるだけでも飽いた。わらわもお主達と空で面白おかしく冒険したいのじゃー！」

「面白おかしくつてなんだよ。俺は真面目に旅してゐるんだけど」

「面白おかしいだろ？」

「面白オカシイナ」

くそ、B・ビイとティアマトは基本俺の意見を否定しやがる!

「楽しいからって自分からヒトと同行しようなんて、安い星晶獣なのねえ」

メドウ子が意地悪な顔をしてケラケラ笑う。それにのじゃ子がむっと顔を膨らませた。

「む! お主だつてこの騎空団におけるではないか!」

「アタシは仲間に“なつてやった”のよ。偉大なる星晶獣として、寛大な心をもつて付き合つてやつてるのよ」

「嘘つけ! 仲間になりたくて密航したお主に言われとうないわ!」

「はあっ!? あ、あんたそれ何で知つて……っ!?」

「昨日B・ビイに聞いた」

「黒トカゲエ!? あんたメドウシアナに食わすわよっ!?」

「シヤアツ!?」

まさかの情報源に大口を開け、蛇の如く舌をシャーと出すメドウ子。B・ビイは「怖い怖い」と煽っている。すっげー腹立つ顔してんな。

それとメドウシアナには食わすな、「ええ、食うんすかっ!?」みたいな顔してるし。嫌だろあんな正体不明の黒いナマモノ食うなんて。腹壊すぞ。

「ち、違うからね! アタシの方から顔出してやれば、その……コイツの方から仲間になってくれて言いだしやすいと思っただのよ! アタシはね、あれよ! 気を使っただけだよ!」

「じゃあ密航せず堂々とすればいいじゃろ」

「それは……、うーうーっ!!」

そのうーうー言うのを止めなさい。何故俺を見ながら言う。そして言葉の勝負じゃ弱すぎるぞこいつ。

「密航者仲間にするぐらいなら、わらわだっただけ仲間にしてくれて良いと思うんじゃが」

「うむう、それ言われるとな……」

「あと断つても追いかけるが」

「堂々とストーカー宣言やめい」

しかしコイツの事だから本気でするな。しかも空での移動だと並みの騎空艇じゃ簡単に追いつかれる。エンゼラの最高速度でも振り切るのは無理だな……。

チラリと仲間達を見る。

「あ、オイラ達は基本相棒の判断に任すから」

「右二同ジ」

「わ、私を仲間にするような君だ。はははっ! 任すほかないよ、はは、あははっ!!」

「自分らもお任せするであります」

B・ビィも他のメンバーは全員俺に任す方向らしい。ちよつと団長の権限強すぎませんかね? いや、むしろ団長に丸投げ過ぎじゃないか。それとも信頼の証なのか、そうなのか? そう思つて良いのか?

「……本当に仲間になりたい?」

「うむ!」

「わかつてると思うけど、遊びじゃないからね?」

「うむ!」

「団員としてお仕事してもらうけど?」

「任せよ!」

「人間の生活に馴染める?」

「まかせ……っ!? ど、努力する!」

そこで無理と言わず努力すると言う所は好感が持てる。

……しかしここは一つだけ俺も欲張つていいかもしれない。今回も頑張つたし、うん。

「……わかった、ついて来てよし」

「ほ、本当かつ!」

「良しと言った以上良いんだよ。……ただ」

「ただ？」

「一回でいいんだけどその羽。触っていいかな」

のじゃ子には背中に大きな翼と頭に小さな翼がある。実は攫われて以来、俺はとてもとてもそれが気になっていたのだ。すごく、柔らかさそうで。

「うん羽か？ 背中のか、頭のか？」

「触って問題ない方でいいけど」

「なら好きの方で良いぞ、仲間に入れるなら安い物じゃー！」

「ぐえっ!？」

気前のいい言葉を言いながら、突然腰辺りにタツクル気味に抱き着かれる。彼女としては羽を触りやすいようにしてくれたのだろうが……しかしそのまま腕が絞められ。

「腰があっ!？」

「ほれほれ、好きだけ愛でて良いぞ！」

「ぐええっ!？」 ちよ、ちよっと、いったん腕をゆるめ、おごおっ!？」

「あんたは!？」 なに変態みたいな要求してんのよ!？」

「メ、メドウ子、てめえ後ろからもぐえええっ!？」

「む、メドウ子なにをする!？」

「うるさい！ 離れろのじゃ子！」

俺の判断と翼を触りたい発言が気に障ったのか、メドウ子まで俺の背中から抱き、絞めめる。完全に両面ベアハッグになってる。二人とも見た目は少女だがしかし立派な星晶獣。その腕力は本気出せばドラフだって目ではない。

「ぬぬぬ！」

「むむむ！」

「うぐわあああつ!?!」

「わわ、メデューサ殿もガルーダ殿もストップでありますつ!?!」

「な、なんて力だ!?! ビクともしない！」

「ひゃあ！ 全然動かねえぜえ！」

「あ、あはははっ！ ス、スツルムさん達もてつだ、あはははっ！」

「……」

「あ、スツルム殿？ もう呆れて声も出ないって感じいく？」

「まあな、あと気の毒にも思ってる」

慌ててシャルロットさん達が助けに来てくれたが、両者それにも負けず俺の身体を引っ張り締め上げ続ける。あとスツルムさんになんか言われ、いやそれよか骨がボキボキ鳴ってるあああつ!?! 身が、身が出るうっ!?!

「ふええ、だ、団長さんがっ!？」

「うん、まあこうなるわな。相棒だしいつも通りだ」

「いつも通りなのか!？」

「ガルーダもいい筋してるな！ 後で語り合いを申し込むかな！」

「そう言う場合なのかっ!？」

「うむ、団長らしい均衡のとり方だ。両面ベアハッグ、いい具合に均衡がとれてる」

「とれてるのかっ!？」

「坊主はモフモフが好み、と」

「メモしてる場合なのか!？ ……いや、と言うか止めないのかあー!？」

「そうだな、よし頼むB・ビィ」

「うっしやおらああっ!!」

フェリちゃん怒涛のツツコミが聞こえてくる。

背骨の心配をしながらも、俺はフェリちゃんのこの団内でのポジションを覚った。

■ ■
四 さらにトラumont、また会う日まで！ Take : 2

「のじゃあ〜……っ!」

「いったあゝ……っ!」

甲板に座り込みながら頭のコぶを抑える星晶獣（笑）少女二人。俺を圧殺しかけた二人に俺の拳が落ちたのは言うまでもない。

「マジ身が出ると思った……」

「だ、大丈夫か?」

「うん、ありがとフェリちゃん……」

背中を摩つてくれるフェリちゃん。天使かな?

「いったいじゃないのよ!」

涙目のままメドウ子が文句を言ってきた。こつちが文句言いたい。

「こつちの方が死ぬ程痛かったっの!?! 背骨折れると思ったぞ!」

「あんたあの程度じゃ死にやしないわよ!」

「死ぬわ、死ぬ時は死ぬっての!?!」

「だ、駄目よ死んじやつ!」

「この会話どうしたいのお前はっ!?!」

「はいはい、そこまでだお前等」

あまりに内容の無い会話に飽き飽きしたのか、おっさんが小さくチョップをするジェスチャーをしながら俺達の間を割り込んで来た。

「これ以上話すなら取り合えず出発しろ。時間の無駄だ。ガルーダ、お前も何時まで座り込んでんだ」

「いたたじゃよお。喜びがあつと言う間に痛みが変わったぞい……」

まったくその通り過ぎる意見を言いながら、おっさんはのじや子を立ち上げさせた。涙を流しながらショボショボしてるのじや子。ワザとではないだろうが、こちらも背骨が悲鳴を上げたので流石に怒る。

「やつと出発か？」

「ド、ドツタンバツタン大騒ぎ……」

いつの間にか甲板に来てたりツチとセレスト。見送ろうと思つて待つて、見送る相手が船で大騒ぎしてたら待ちくたびれるだろうな。

「ああ、悪い悪い。もう出るから」

「お主船乗る前よりダメージ受けてないか？」

「背骨と腰がね……」

「お、おじいちゃんみたい……」

ちよつとまだ柵とかで体支えてる。こんな頼りない団長ですまねえな。

「うう……皆楽しそう……わ、私も混ざりたかったよう……」

「楽しくはねえんだが……まあすまん、ガロンゾ戻ったらなんか遊ぼう」

「う、うん……約束ね……えへへ」

足元からセレスト・マグナがいじけ気味の眩きが聞こえた。一人騎空艇のままである彼女は自分の身体で暴れる俺達の事を認識出来ているが、直接この輪に混ざる事は出来ない。基本彼女は寂しん坊、可愛い。

「やれやれ……じゃあもういいね？ 全員いるね？ シエロさんももう隠し事無いですね？」

「隠し事だなんて、元々何も隠してませんよお」

「言うべき事黙ってるのは世間で隠し事と言うのですよシエロさんや」

ちよつとムツとして言ったがシエロさんは「うふふ」と笑うだけ。敵わん。

いよいよ俺達が出発するとなつてリッチもセレスト・トラモントも改めて外へと降りた。甲板から見下ろし軽く手を振ると、リッチもセレスト・トラモントも同じように手を振った。

「汝らの旅路に祝福を」

「ま、また来てね……！」

「おーう、お土産持つて寄らせてもらうわ。そつちも元気だな。それじゃあセレスト、頼む！」

「りよ、了解……！」

ゆつくりとセレストが岸壁から離れていく。船首の方向を外へと向けて、そして徐々にスピードを上げていく。

振り向けばまだリッチ達が見えた。少しずつ、トラモント島の霧でその姿は薄く消えていく。

「そいじゃなー!」

もう一度、今度は大きめに手を振る。他の皆も並んで手を振る。多分もう声は届かない、しかしリッチ達も手を振り続けた。

俺の隣でフェリちゃんが誰より大きく手を振った。

「戻りたくなったら何時でも言ってね」

「ありがとう、けど大丈夫。今は新しい世界に……ワクワクしてるから」

「そっか……ならよかった」

「ああ、だから団長さん」

「うん?」

フェリちゃんが俺の目をジッと見る。視線を外さず、10代の少女の輝きを持つ瞳が柔らかく微笑みを浮かべたように感じた。

「これからよろしくな」

「ああ、よろしく」

リッチとセレストの姿はもう見えなかった。霧の覆う島が旅立つ俺達を見送り、俺達もまたその島の平和を願い旅立った。

■ 五 トラumont・シエロカルテランド計画

この時、団長は疲れもあつてか、リッチの言っていた「退屈などする暇は無い」と言う意味をシエロカルテに聞きそびれていた。

実はこの時からシエロカルテは特産の果実以外でトラumont島で利益を上げれる手段を提案、最後の住民であるフエリに許可を貰いセレスト・トラumont、更にリッチにまで協力を約束させる。そして密かにトラumont島に機材の搬入を開始。土地も整備されて行き、数か月後そこには島特有の暗い雰囲気を生かした小さなテーマパークが出来上がっていた。

忘れられた島はシエロカルテの手により再生したのだ。

島に残る民家、そしてセレストとリッチの手で生み出される本物のゾンビや幽霊。それらを駆使するホラー系アトラクションは、スリルを求めるカップルを中心に話題となった。

島への送迎を行う幽霊船セレスト・トラumont号の存在はさらなる話題を呼び、テー

マパークの主演でありマスコットであるゾンビの王様ネズミ、リッチーマウス”。その相方で影の薄い幽霊ネズミ、ジミーマウス”は「キモカワ系」として若い層に受け入れられていった。

そして後日この事を聞いた星晶戦隊（以下略）の団員達は影の薄いジミーマウスの事を聞いて盛上り、だが団長はジミーは偽名なので良いとして「影が薄い設定はいらねーだろっ!」酷く憤慨したとの事であった。

六 更に待ち受ける者達

濃霧と死が溢れる島を救い、再びガロンゾを目指す一行。

だが彼らの行く先、そこにはまだ平穩は無い。

「ほんとさあ今日も外禁とか、マジありえんてい（・・?・?）」

「まあしやーないんじやない? 魔物絶賛発生中じゃん? ガチめで危険な感じで」

「それはわかつてるけどお（ハ、ハ）」

「てか、外禁解除しても、やる事ない系じゃんウチら」

「ありますうゝ（#、）3、） 今度デートしよってびびが言ってくれたもん!」

「は? この前『もう別れるう!』って泣きついたじゃん!」

「それがさあゝ（＊、ω、） あの後お、ぴぴの方から『俺が悪かった』って言つて来たのおー!」

「マジかよちよろ過ぎるでしょ、てかおまえ ㄉㄉ じゃんそれじゃあ。あいつはダメ、絶対別れた方が良いつてば!」

「今度は大丈夫だもーんっ! あたしはぴぴを信じるう!」

「はあゝ（、π、） それも何回目つて話だしい……」

山に住まう少女は、平凡を抜け出し苦勞人の英雄ヒロイを知る事となる。

「ではこちらがご注文の服になります」

「おお、これは素晴らしい! ありがとうございます!」

「いえ、直接取りに来てくれて助かりました。今確認してご要望と違う所があればお直し致しますよ!」

「いえ、これでバッチリです! きつと彼女も気に入ってくれます」

「ふふ、結婚記念日のプレゼントでしたね」

「はい、結婚して暫く贅沢な服は大丈夫だと妻は言いますが、一着ぐらいこう言うのがあつてもいいと思つて。サプライズなんてやった事はないから、そこは不安ですが……」

「大丈夫! 旦那様のその気持ち、きつと奥様に伝わりますわ」

「ありがとうございます。そう言ってくれれば、私も勇気を貰えます」

「いえ、奥様によりしくお伝えください」

ハッピーエンド
大団円を望む者は、てんわやんわの騎空団を知って何を思うか。

「なに？ もっとデカいのも出せるのか？」

「――！」

「ユグドラシルの調子が良いなら、大木どころか工場埋まるぐらいの巨木も大丈夫そうだね」

「となると……もう一段規模を上げられるかもしれないねえな。よし、こうなりやとことんやるぞー！ 図面を見直す！ お前等は作業を続けろー！」

「ちよちよ、おつちゃん。良い船になるんわ分かるけど、ちゃんと予算内で納めてや」

「大丈夫だ！ ……多分な！」

「おい」

ガロンゾ、そこで熱狂する職人達。旅立ちの船は更なる成長を遂げようとする。

団長の想像を超える勢いでトラブルは坂道を転がり、誰にも止められることは無く、そして団長へと向かっていくのだ。

ギャルと青春の旅立ち 前編

■ 一 ■
それはさながら、バツイチ子持ちの男の背中

「それではここで」

「はい。どうもありがとうございます。依頼の方もよろしくお願いいたします。」

「ま、うまい事やつときます」

セレストから一人降りていくシエロさんを見送る。降りるのは彼女一人で、俺達はそのまま直ぐに移動となる。この島は依頼のきた目的の島ではないからだ。

「次の依頼はお渡しした資料にある通りです。おそらく次に会うのはガロンゾになると思います。」

「うい、そいじゃそん時はよろしくです」

「ではまた」

シエロさんが完全に降りたのを確認してセレストが島から離れて行く。シエロさん

に手を振って、彼女もその小さな手を振り返す。

「この島には降りぬのか？」

無事シエロさんを送れた事にホツとしているとトラモント島から仲間には押しかけた星晶獣ガルーダがトコトコと現れる。

「特に必要な物もないしな。今は受けた依頼を優先する」

「ふむ」

「あと……」

離れ行く島の方を見るとそこには島民の方達が集まっていた。皆一様にこちらを見上げていた。

どう考えてもセレストを見ている。

「まあ目立つからな。用無いなら早めの移動するに限る」

「ご、ごめんね……」

「気にするなセレスト」

どう見ても幽霊船のセレストが島に近づけば誰だって驚くだろう。シエロさんの事だからうまい事言っておいてくれるだろうが、これ以上ここで無駄に目立つ事は避けたい。

「午前中にシエロさん送れたから、依頼の島は予定より早めに島に着くだろうな」

「では今日の内に依頼完了か？」

「さてな。その時々だからなあ」

ルート的にはシエロさんの言うようにガロンゾに戻る“ついで”で寄れる。まあ都合よくそんな依頼を持ってきたものである。

「のう、ところで」

「あん？」

「あれ、どうにかならんか？」

のじゃ子がとある方向を指さした。そちらへと顔を向けると、船内入り口の物陰から顔をひよっこりと出しているメドウ子とメドウシアナがいた。

「むーッ！」

しかもなんか威嚇してた。まあ大して怖くないが。

「わらわが仲間になつてから、ずっとああなんじゃが」

「はあく……何してんだか」

面倒な奴だと思いつつながらメドウ子へと近づく。

「何してんだお前は……」

「ふんだ、アンタには用無いのよ」

「いいから、こつち来い」

「あ、コラっ！ 離せー！」

「シヤ〜」

物陰から出ようとしなないメドウ子を抱えて連れていく。暴れるメドウ子だが、一方メドウシアナは大人しくついて来る。

「言いたい事あるならハッキリ言う」

「むう」

抱えたメドウ子をのじや坊の前におろす。不服らしいメドウ子は頬をふくらませそのままだ。

「のうメドウ子、お主なにがそんなに不満なんじゃ？ わらわが仲間になってそんな不

味い事もあるまい」

「不味いとかそう言うんじゃなくて……うーうーっ！」

「そのうーうー言うのをやめなさい」

さてどうしたものか、俺としても仲間にした以上は団員同士の衝突は避けたい。問題があるのはメドウ子だけなのだが、星晶獣同士の不和など飛んでもない火種になりかねない。

しかしその不和の原因に予想がつかなくもない。大方トラモントでの煽り合戦の延長の様なものだろう。お互い見た目と精神年齢が近いので子供っぽい所が共通してい

る。似た者同士と言うか、同族嫌悪と言うのか……まあ、一回口喧嘩すると付き合いつらくなるタイプかな。特にメドウ子の方が。

「……メドウ子、不満は色々あるかも知れんが一応は団長である俺が入団を認めただ。俺の顔立てるつもりで機嫌治してくれ」

「ア、アタシは別にアンタの立場なんてどうでもいいもん」

「そうむきになつてくれるなよ。お前も先輩になるんだ」

「……せんばい？」

先輩と言う言葉を聞いてメドウ子の表情が少しかわる。どうもチャンスのようなのだ。

「そうだ。お前が入団してからの仲間では一応おっさんが居るけど、星晶獣の仲間は初めてだ。つまりお前は星晶獣団員としては先輩になるわけ」

「……ふうーん」

「な？ ここは先輩として、快く迎えてあげなさいって言う事。偉大なる星晶獣は寛大な心を持たんな」

「むう……」

果たしてどうだろうか。メドウ子も俺の言葉を反芻するように小さく唸っている。

「……んへへ」

するとちよつとキモイ笑い方しながらメドウ子が笑った。

「変な笑い方すんなよ」

「う、うっさい！」

メドウ子の右ストレート。だが軽く受け止める。ぽふり。

「ふんだ……まあアンタがそこまで言うなら認めてあげるわよ」

「ん、まあ仲良くしてやれ」

「馴れ合いはしないわよ！ いいのじゃ子？ 聞いたろうけどアタシはこの団じゃ先輩

なの、そこんところ理解しておきなさい！」

「え〜」

「え〜ってなによっ!？」

「だって大して加入時期変らんじやろ。しかも星晶獣同士、年齢差もさして無いのに」

「こう言うのはメリハリが大事なのよ！ ……たぶん！」

「別にいいでは無いかく。ほれほれ、仲良くしようではないかメドウ子よ〜」

「あ、コラ！ 引っ付くな、アンタ羽が暑っ苦しいのよー！」

……うむ、まあこれでよい。後は仲良く喧嘩しな。

「よう親父さん」

「誰がじゃい」

振り向くと、いつの間にかいたおっさんに親父呼ばわりされた。すげー顔がニヤつい

てる。

「この野郎」

「なんのっ！」

「む？」

ちよつとムカついたのでデコピンを食らわせようとしたが、ギリギリで頭を後ろに下げて指先を躲された。

「むう、やるなおっさん」

「伊達に天才名乗ってねえよ。あとオレ様は野郎でもおっさんでもねえ……天才美少女錬金じゆ」

「はいはい美少女美少女」

「聞けよっ!？」

聞き飽きた事はスルーに限る。

「たく……しかしまあ、子供二人の面倒は大変そうだな」

「うっせうっせ、俺の子供じゃねえから。親父でもねえ」

「ここ最近の俺のポジションと言うのが、団長よりも苦労人の子持ちバツイチ親父になりつつある気がしてならない。俺まだ18なんだぞ。」

「まあお前のポジションはどうでもいいけど」

「よかねい」

「それよか、依頼のメンバー選出すんだろ。今日中に島着くならもう決めるぞ」

「わかっとするわい。もう大体決めてるもんね」

「ほう？」

「取り合えずルドさんつれてく」

「大丈夫か？」

その大丈夫かは多分ルドさんを連れて行く事に対してと、ルドさんを選んだ俺に対しての言葉なんだろうな。

「山の中での依頼だからね。山賊だったルドさんが居てくれれば役立つ事もあると思うわけ」

「けどルドミリアだぞ」

「……不安はあるけど、団員に仕事を与えるのも団長の仕事と思ひまして」

「まあお前がそう思うならいいけどよ……気をつけるよ？」

そんなマジに言われると俺も困る。

結局何時も通り、俺は不安を拭えないままだった。

■
ニ すっげえ緑豊か！

■ 数時間後、遅れもなく依頼の島に到着する事ができた。

「何も無いなっ！」

フェザー君が叫ぶ。元気に叫ぶ様な事は不明だが、確かに何も無かった。しいて言うなら自然ならある。と言うか、山と少しの平原しかねえ。

船着場も無いのでセレストは島の縁にある平原に着陸した。

「見た所この周辺に村とかは無いようだね」

「シエロさんに貰った資料によれば、元々住民の少ない島のようにですね。その住民も殆ど山中で暮らすから、他の島との交流も少ないようです」

コーデリアさんと資料を確認していく。そこから分かる事は、ようは田舎であると言う事。比較的ザンクティンゼルと似た環境と言う事だ。

「地図の通りなら片道3時間ちよいつてところか」

日はまだ高い、村に行くだけなら十分だろう。サクサクと進めようではないか。

「依頼メンバー発表します。はい集合してー」

パンパンと手を叩いて皆を呼ぶ。

ここからは依頼メンバーを連れて残りはここで待機となる。多分全員行くほどの依頼ではないのと一々セレストから荷物を降ろし、セレストをマグナ形態にしてから全員

で移動と言うのは手間過ぎる。

「えーまず当然ですがドラंकさんとスツルムさんは待機組です」

「まあそうだろうな」

二人の任務は俺を連れ戻す事である。二人にとつては寄り道の様なこの依頼まで手
伝う義理はないだろう。

「僕は良いけどね手伝っても。待機してるだけって暇だしさあ〜」

「いいから大人しくしてろ」

「はーい」

少し不満そうなドラंकさんであるが、スツルムさんに睨まれ大人しく引き下がっ
た。

「で、B・ビィは何時も通り来るとして、攻撃と壁役にコロツサス」

「おうよ」

「オマカセ（∥。ω。）ノ」

「それと、ルドさんとおっさんも来てね」

「あはは！ わ、私もかいっ!？」

自分が指名されるとは思ってたのか、ルドさんは意外そうに返事をした。

「山の依頼だからさ。詳しいでしょ色々」

「ふふっ！ まあ、腐っても山賊だったからなあ！」

「まあそこら辺を期待してって事で」

「あは、はははっ！ こ、こんな状態の私でよければっ！ ははっ！」

「ん、頑張ってください」

「おい、オレ様はどういう理由だよ？ 別に山専門に詳しいわけじゃねえぞ」

「おっさん仲間になっってからちゃんと言頼にやっつてないでしょ。専門じゃなくつても知識はあるし、錬金術なら不測の事態でも結構応用利くし」

「そうかい。まあ別に嫌っつてわけじゃねえから良いけどよ……てか、おっさんじゃねえ!?」

はいはい、美少女美少女。

「あとこの依頼に意欲的だったシャルロットさんお願いします」

「お任せ下さい！」

「それとのじゃ子も来なさい」

「お、早速出番か？」

指名されてのじゃ子は目を輝かせた。

「取り合えず参加して騎空団の依頼と言うのを覚えなさいっつて言う事な。本当にただの魔物退治なら依頼入門編のようなもんだ」

「果たしてただの魔物退治かな相棒？」

「なんでお前が不敵そうなんだよ」

「この黒ナマモノめ。楽しんでないかこの野郎畜生。」

「ともかく必要なら活躍してもらおうから」

「うむ、任せい！」

「まあメンバーは以上、残りはここで待機しててね」

「私は参加しなくて良いのか？」

「のじゃ子と同様にトラモント島からの仲間であるフェリちゃん自分がメンバーに選ばれなかった理由を尋ねる。のじゃ子のように依頼体験をする事になると思ってたのだろう。」

「勿論ただの魔物退治である事を俺は祈ってるけど……本当にそう祈ってるけども！」

「実際何あるかわからない仕事になりそうだから今回はフェリちゃんは待機。次の時お願いな」

「そ、そうか……何時も大変だな」

「わかってくれる？」

「ははは……けど、そう言うことなら了解だ」

「うし、それじゃあ30分後出発！」

俺が声を上げれば各々準備のために行動を開始した。

必要な道具は既に揃えていた。コーディネリアさん達救出部隊がガロンゾから持ってきた積荷には、こう言った事態を見越してかキャンプ用の荷物やらもある。俺が如何なるトラブルに巻き込まれても良い様にと言う事であろう。

用意周到な準備にありがたい半面で理由が理由だけに複雑な気持ちになる。

ともあれ出発は問題無く俺達は山の中へと入って行った。

■ 三 フェイトエピソード ギャルと地味と騎空団と

この島の島民達は排他的というわけでもなく、どちらかと言うと協調的な人柄であるのだが、その殆どが山中の村で暮らすと言う環境ゆえに社交的という事も無かった。

だからであるのか、その島では独特な言葉が残る。つまりは「方言」である。方言自体は珍しい事ではないが、しかしこの島のものは他の島から来た人間が聞き取るには癖が強く、会話の半分を把握するのも難しい。

しかし若い住民にはそれとはまた別で独特の言葉が広まっている。

「え、そマ?」

「マジマジ、おおマジイ! ほんと信じらんない! ? (?、H?) ?」

「だってあんた、昨日デートの約束したとか言ってたじゃん」

「そうだけどお！　だってアタシみたんだもおん、バイト先で客にデレデレしてんのお！」

「いや、それ何回目って話し……」

山道の中、独特の口調で語り合う二人組。焼けた素肌のエルーンの女子が特に目立ち、どうやら彼女はもう一人のエルーンの愚痴を聞いているようだ。

「マジならそいつ、ほんとDS。かなりのアリエンティストだわ、つかもうビョーキじゃん」

「まじ意味！ 『俺にはお前だけ』とか素でパチこくとかさあ！　ああほんとティー……今けっこーデイオってる……。・（ノ、口、）」

「だからほんともう別れた方がいいって言ったじゃん（ノ、口、）」

若い者達の間で形成される言葉の特徴には「省略」がある。

所謂略語であるが、長い言葉を可能な限り略し、略す必要が無いと思われる言葉でさえも略す。それは文章として書く場合に時間の短縮にも繋がるが、言葉の会話の中での使用でも十分に意味はあり、略語を使う事で会話のテンポをよくし会話を弾ませる事が可能になる。だからか、彼女達のような若者の生み出す言葉には強く脳に残るテンポと語呂の良さがある。だからこそ広まり浸透する。

逆にその若者言葉を知ら無い人間にすれば、それは十分に方言、訛りである。やはり聞き取り意味を知る事は困難だろう。

とは言え、この二人の雰囲気からどんな会話であるかは凡そ想像は付くだろう。きつと犬も食わない話であるに違いない。

「はあ……外禁は解けないしい、ぴぴは浮気するしい……テンサゲ」

「テンサゲですむんかい（――▽――）」

友人の話に辟易した様子を見せるのは、焼けた肌のエルーン少女。名をクロエと言った。

彼女の友人がぴぴ（彼氏）との別れ話や痴話喧嘩を今に始まった事ではなく、件のぴぴと付き合いだした頃から何度も上がる話題だった。

そしてそのオチも同じ。どれだけ喧嘩して別れる宣言しても最後は元の鞘に収まる。それが常だった。

聞き飽きた話題ではあったものの、しかし今クロエはそんな話に耳を傾けるぐらいかやる事が無かった。

少し前から村の周辺で魔物が多く出るようになった。今までも畑を荒らすなどのトラブルはあったが、ここ最近は何人も襲うような魔物が現れるようになり村の住民達は魔物討伐の依頼を出しそれが解決するまで殆どの住民は、安全な場所以外には外出する事

を禁止されており、遊ぶ事もやる事も無い状態が続いていたのだ。

要は暇だったのだ。なので二人は村から少し離れた魔物の出ない場所に足を運んでみたものの、結局山中の自然しかない中でやはり暇である事を実感するだけに終わり、クロエに至っては友人の聞き飽きた別れ話を聞かされる羽目になったのである。

「とりあえずさあ、もう別れなつて」

「……そうする！　もう我慢の限界だもん！（Ⅲ　メ）」

（やつとかーい（ⅠⅤⅠ；））

別れ話が出る事9回目、しかし友人の口から我慢の限界と言う言葉が出る事は初であつた。心の中でツツコミを入れるクロエであつた。

「まあ今度のみほ奢つからさ、そこでじっくり話きたいげる」

「あーとんクロ丸う……あたし帰るけど、クロ丸は？」

「やる事ないから、もうちよいブラブラマターリして帰る」

「あそ、そじゃねー」

怒りも話せば収まるのか、友人は落ち着いた様子で帰って行つた。

クロエはそんな友人を見送り、クロエはのんびりと家に帰る事にした。早く戻つてもまた話の続きを聞かされそうな気がしたからだ。

（あたしも彼ピ欲しいなあ……（ⅠωⅠ））

現在複雑な状況ながらもなんやかんやで仲の良い？ 異性をもつ友人に多少なり羨望の眼差しを向ける。流石に友人のように浮気されただけ別れるだのは御免被るが、しかし彼氏が欲しいのは事実であつた。

若さとは出会いに憧れを抱かせる。

「う〜ん？」

ふとクロエは足元を見た。視線に入ってきた物が気になりしやがみそれを手に取つた。

(なんじゃらほい (*・ω・)ン?)

それは花だつた。太目の茎に小さめの花が咲き、薄く刃のような緑の葉が伸びるもの。クロエは見た事がなかった。

ただその花が落ちているだけならクロエも手には取らないだろう。彼女が気になつたのはその臭いだった。

実に強い——それは異臭とまでは言わないが、しかし強く鼻をついた。それが気になりクロエはその花を手にとつたのだ。

好奇心、それが彼女に花を拾わせた。

「Guuuuuuu……」

「はえ？」

その好奇心はギャルを殺すのか。

「G u u……」

「え、ちよま……魔物お、(。 ㇏。 ;) ノ!？」

木々の陰から現れたのは、狼型の魔物ラウンドウルフ。

餓えているのか、クロエを前にして酷く興奮している。口から涎をだらだらと垂らし、まだ日が昇る明るい時間であるにも関わらず爛々と輝く眼光はまさに飢えた獣。

「G U R U U u u u！」

「ひゃあっ!？」

野獣らしい唸り声は、それだけで簡単にクロエに尻餅をつかせた。

友人は先に帰ってしまったもう姿は見えない。魔物が現れず村に近い安全な場所とされていた場所であるが、しかし人気は無く助けを呼んでも人は来ない。そもそも怯えたクロエは声が出なくなっていた。

(や、これ……し、死ぬ……?)

「G U U u u……G A A A a a a！」

「ひ……ママっ!？」

ラウンドウルフが叫びクロエに飛びかかろうとし、しかし武器も持たず戦う術を知らぬクロエには目を閉じる事しかできなかつた。

その時である——。

「あああああああ——っ!？」

「G y a n!？」

「あだばあつ!？」

「……はえ?」

空から突然男が降ってきたのだ。それどころか、そのままラウンドウルフに激突、地面に転げ落ちた。ランドウルフも当たり所が悪く死んではないが、気絶したらしく地面の上で痙攣しており、男はその横で頭を押さえのた打ち回っている。

閉じていた目を開いて見たその光景にクロエは理解が追いつかなかつた。

「おーい、大丈夫かだんちよー!」

そして今度は空から少女の声が聞こえてきた。何かと思つて見上げてみれば、大きな翼を生やした少女がこちらに向かって降りてくる。

（え? ええくゞ(。D。、;)ゝ)

「こ、この馬鹿鳥! 死ぬかと思つたじゃねーか!」

「すまん、妙な臭いで鼻がかゆくなつた」

「だからつてクシヤミで手を離すな阿呆!」

「あだつ!？」

地面に降りたつた翼のある少女に、よろけながら立ち上がり拳骨を食らわす男。

「ジミー殿おおい!? 無事でありますかあー!?」

「相棒の事だから平気だろ」

「あはーはははは! み、見事に落ちたなあ! はは、ははは!!」

「坊主はもう高い所行かない方が良いんじゃないやねえか?」

「ボクモ (ーωー;) ソウオモウ」

そして曲がり角からは慌てた様子で走ってくるハーヴィンの少女、その後ろからは逆にのんびりした様子のこれもまた妙な団体。

「な、なんなの……これ……」

一言での説明が難しすぎる状況に、勢いで生きるギャルでも暫し呆然とするほかなかった。

■ 四 すつとこヒーロー空から落ちる

■ 依頼を受けた村を目指し山に入った俺達であつたが、ちよつと困つた事があつた。村に着かのである。

地図通りに進んでいるのは確かだつたのだが、想定より時間がかかつてしまった。確

かに貰った地図が妙に古いと思ったが、いい加減な測量で作ったのか知らないが明らかに地図上の距離と実際の距離が合わない。

そんなこんなで2時間ほど歩いた頃、のじや子が「周辺飛んで探すか?」と提案。こっちも疲れて来ていたのでそうしてくれと頼むと徐に俺の両手を掴みそのまま飛翔した。

飛んで探すかって俺込みの提案だったんかい! と、ツツコミを入れるが時既に遅し。地上からシャルロットさんの俺を心配そうに呼ぶ声があったが、もう諦めて上空から村を探す。まあ飛んだ甲斐あつてか、村は見つかった。思ったより自分達の居た場所から近く確かに村に向かっていた事に安心した時、のじや子が鼻をムズムズさせた。

どうしたかと聞いたなら「妙な臭いが……」と言ったかと思えば「えつきしつ!」と可愛げの無いクシヤミ。離される両手。そして落ちていく俺。

ああ、叫んだねふざけんなって。何度目だよこれ。

そんで地面に落ちると思ったら偶然居た魔物に衝突、頭打つてのた打ち回り降りて来たのじや子に拳骨を振り下ろし、慌てて駆けつけてきたシャルロットさんと合流し、そして――。

「いやあ……ほんと悪いねクロエちゃん……」

「別にいいって。てか、こつちこそあざますっ!」

浅黒く焼けた肌のエルーン少女、クロエと言うこの娘さんは俺が空から落つこちた時

ぶつかつた魔物に襲われていたらしい。

結果的に彼女を助けた俺は、驚かせた事を謝りながらも目的の村について話すと彼女の住む村と言う。そして助けてくれた札として案内を申し出てくれた。凄くいい子だ。

凄くいい子であるのは間違いないのだが……。

「もうマジMS5だつたわ、ちよこわかつたもん。てか、魔物ヤバ。あんなん増えてるとか鬼ヤバつしよ ((;(;;・ω・、))」

「まあ、そう聞いたから俺達……」

「そりゃ外禁出るわ。むりつしよ、アレ倒すとかそんなん。ふつーに死ぬる」

「や、まあ俺達」

「てか、おにーさん達こんな所までよく来たよねえ。ここなんも無いのに」

「お、おう」

「けど自然豊かつて言うか、緑はある的な。つかそれ以外なんも無いんだけど。あと空気がマイウーかな。ってんなことどーでもいいか。わら」

まあ良く喋ること喋ること。女三人寄れば何とやら、しかしこの子の場合一人で数人分良く喋る。あと言葉が独特でたまに言ってる意味が良くわからん。

「なんだか不思議な言葉使いの子であります」

「つか、よく見たら剣とか持つてるし、初見。てか銃もあんじゃない！　すげー！　けど

「わー！」

「ははは！ あ、危ないからさわつちやだめだ！ あは、あははっ！」

「この子もなに、翼はえてるとか。なにこれものほん？ 超バードじゃん、わら。どうなってるのこれ、さつきふつくに飛んでたし。ウケる」

「こりや、勝手に触るでない」

「こつちとかトカゲ飛んでる。わら」

「オイラはトカゲじゃねえぜ」

「しかも喋るしっ！ ウケる！ あゝ子供いる、しかも超カワ〜（ノ*⊠ω⊠*）ノ♪」

「あは☆ ありがと、おねえさん！」

「っーかこつちはデカア、（ゝ。ロ。）!？」

「コレデモ（〇。・ω・）チヂメタホウダヨ」

「ちよ、なにその喋り顔文字感パナイ！ ウケる！」

「クロエチャンモダヨ（・ω・）」

凄いいテンポで口を挟む暇が無い。あれやこれや、話題が尽きずよくまあこれだけ喋り続けられるなこの子。

「クロエちゃん、案内はありがたいんだけど、少し待ってもらっていい？」

「ん？ どして？」

「実は俺達は騎空士でね。君の村の長老さんから依頼があつて、魔物退治に来たんだよ」
「えっ!? マ(。 ㊦。 ; 三 ; ㊦。) ジ!？」

「うん、マジ」

「はあー! なにそれ超パナイじゃん! 魔物倒せるとかやばー!」

「パナ……?」

クロエちゃんの口から飛び出る言葉に始終シャルロットさんが首をかしげていた。
カワイイ。

ところでこの子の言う「やば」って言うのは、ポジティブな意味でよろしいのですかねえ。ここ最近うちの騎空団の噂がヤバイだのばかりで気になるのだが。

「ちよつとこの魔物を調べたくてね」

俺と衝突してまだ気絶したままのラウンドウルフを指差す。どうもこの一匹が気になつてしまったのだ。

「このクロエ殿を襲つていた魔物、ジミー殿は今回の依頼と関係はあると?」

「ちよ、クロエ殿だつて。殿とか初めて言われた。ウケる」

「どうですかね……クロエちゃん、ここら辺で増えたつて言う魔物はこいつらの事かな?」

「さあ? クロエそーゆーのよくわかんないから、魔物増えたとか大人が騒いでたけど、

どんな魔物かなんてご存じ無い系だし」

「そっか……どう思うおっさん？」

「ラウンドウルフ自体は珍しい魔物じゃねえ。水あつて獲物がいれば、どんな環境でも適応する奴らだ」

「えちよ、(。D。；)ノ!? この子急に雰囲気変わったんですけど!」

急に「オレ様」になるカリおっさんに驚くクロエちゃん。無理も無い。

「はははっ! た、確かにラウンドウルフは山の中でも生息してる! け、けれど、あはは! このラウンドウルフ、一体だけだっ!」

「そこなんだよ。ラウンドウルフは基本群れで行動する……雄つぼいし「あぶれ」か?」

たまに群れを形成する動物の中には、何かしらの理由で群れを追い出されたりする「あぶれ雄」が居ると聞いた事がある。

「かもしれないえが……」

「ふむ……」

気絶しているうちにラウンドウルフの身体を調べる。おっさんの言うとおり肉付きは悪くなく、重い身体を動かし観察する。

「わっ! ちよ、だいじよぶなん!」

「平気まだ目を覚ます気配は無い」

距離をとるクロエちゃんを安心させながらも観察を続ける。

頭部から背中に掛けて生えるタテガミ。身体のブチ模様。獲物を狩る為の前爪。一見してなんら珍しいことの無いラウンドウルフの雄である。しかし――。

「妙に毛が多いな」

おっさんがじつくりと観察しながら呟いた。確かに通常のラウンドウルフに比べると、その体毛の量が多いように思える。

「確かに……」

「みろこの首周り、あとはこの脚なんかは通常のラウンドウルフに比べて密集してる」
「何かおかしいのか?」

おっさんが感じる疑問。だがのじや子は何が気になるのかわからないようだった。

「当たり前だけど毛が多いって事は、大体が寒さをしのぐ目的があつてのこと。けれど今この島はこんな毛が必要な程寒くない」

「はは! な、なるほどだとすればこの体毛の量はおかしいな、ははははっ!」

「山ばかりのこの島でなら、標高のある場所は寒い時もあるだろうけど……」

「かと言つてこんな体毛が必要なほど寒くはねえ。むしろハンターであるラウンドウルフは、体毛が多いと狩りの時体温が上がり過ぎちまう。狩りの時に息切れが早いんじゃ

意味がねえ。寒い地域であればわかるが、今この島の環境じゃ暑くて辛いだけだ。仮に生え変わりがあっても早すぎる。なにより……この足裏」

おっさんがラウンドウルフの脚を持ちその足の裏を皆に見せる。そこには通常のラウンドウルフには見られない量の体毛があった。

「これは寒さを凌ぐため、それと雪への対策だ。これで寒さだけじゃなく、雪に脚を取られなくなる」

「なるほど……確かシャルロットさんって雪国出身ですよ？ その動物つてこんなんですか？」

「ええ、特別珍しいものでもありません。ラウンドウルフに限らずウインドラビットや他の魔物にも同様の特徴があります」

「しかも……このラウンドウルフはまだ成熟しきつてない子供だ」
「子供？ まさか……」

横たわるラウンドウルフは俺の知る大人のラウンドウルフと同じ、いやそれよりも少し大きいほどだ。これで子供と言うのは信じられない。

「いや、今調べて分かったが間違いない。これも雪国の……ノース・ヴァストで育つ魔物の特徴だ」

「ノース・ヴァスト、あの最北の」

以前旅立つにあたり「空の基本は知つとけ」と言われ、ばあさんから渡された本で知つたその名。ノース・ヴァスト、空域最北に位置する大陸。俺にとって今だ未知である。雪が当たり前のように降り積もる白銀の世界。

「その極限の環境がそうさせるのか、ノース・ヴァストでは魔物に限らず野生動物の大半は大型化する傾向がある。このラウンドウルフも身体の特徴から見ればその個体である可能性が高い」

「……だとすると、このラウンドウルフは亜種、それもノース・ヴァストないし寒い雪が降る島の種類。だが当然空を飛べないこいつが自力で来るはずもない」

「なら……考えられるのは一つなわけだな」

皆と視線を交わし辺りを見渡す。何の気配も無く、俺達以外はいない。

「え？　え？　なんかまだいる？」

「いや、心配しないでいいよ。多分気のせいだから……今のところはね」

不安げなクロエちゃんには適当に言っておく。

そのまま目を覚ました場合を考え、気絶しているラウンドウルフを持ってきたロープで脚を結び無力化する。

処理するにしてもクロエちゃんが居るし、あまり血生臭い所を見せたくは無い。

「待たせて悪いね、もう大丈夫」

「あ、もういい系?」

「いい系……? ああうん、大丈夫いいよ」

「うーい! そいじやこつちだから、ついて来てね(〇σ・v・)σ」

ラウンドウルフを担ぎクロエちゃんに続く。こいつは村で木か何かで檻を作つて一端置かせてもらおう。

「わははっ! む、村に着く前から色々起きるなあっ! はは、あははははっ!」

「てか、この人さつきから笑いすぎじゃん。ゲラなん?」

「ゲラ?」

「超笑う人」

「ああ、成る程。まあ気にしないであげて、キノコ食つてからこうらしいから」

「キノコ!? キノコとかそマ!? マジであんだそんな事。わら」

「そマ?」

「え? それマジつて意味だけど」

「略しすぎだろ……」

どう言う文化なんだろうなあ、こう言う若い子の言葉つてのは……。

その後直ぐ目的の村につく事が出来た。もう距離は近かったとは言え、クロエちゃんの家内もあつてスムーズにたどり着けたのはありがたい。

しかし案内中でも、のべつ喋りまくる彼女には圧倒された。

「とうちやくく。ここクロエの村ね。マジなんもないっしょ（ー、）ノ」

これは自虐ギャグなのだろうか。確かに目立った特長のある村ではない。良く言えば素朴と言ったふうであろう。

しかし素朴であれば我が故郷ザンクティンゼルも負けぬ。競う事ではないが。

「俺の出身地もこんなもんだつたよ。なんならもつとなんもねえ」

「へえ〜そうなんだ。あ、あそこ村長さんつち！」

村の中でも比較的大きな家を指差すクロエちゃん。村から来た依頼であるので、当然その代表者である村長には一度顔を顔合わせしておくのは通例であるのだが……。

「およ（＊・ーω・）ン？　なんか人集まつてるし」

村長宅の前に人だかりが出来ていた。この村の正確な人口は知らないが、村の規模を見た限り殆どの住民が来ているように見える。

ただ騒ぎになっていると言う感じではない。

「トラブル……って感じじゃねえようだな」

「ともかく話を聞きに行きましよう」

「そうですね」

シャルロツテさんの言うとおおり、ともかく話を聞かない事にはなにも分からない。俺

達もその人だかりに向かっていった。

「あ、おじさん。これなにかあったん？」

クロエちゃんは人だかりの中の知り合いの男性に声をかけ事情を聞き始めた。

「あんれ、クロエちゃん何処さ居だの？ お母さんが心配しつてうおお！ でつかあ！」

男性は振り向くと巨体のコロツサスに驚き後ずさった。

「ク、クロエちゃんこの人達は誰だべな？」

「えつとくさつき外で会った系？ 村来たいつて言うから案内してた。だいじよぶ、

だいじよぶチョーいい人達だから。それよりどしたんこれ？」

「あ、ああ……それがな魔物退治をすてぐれるつて言う人達来でくれたんだよ。嬉す

いことだねえ、こんな何もねえ村に態々おいでくださっただからなあ」

「え？ 魔物退治？」

「んだあ」

男性の言葉を聞いて目を丸くしたクロエちゃんは俺達を見た。一方俺達も目を丸く

している。

「むう団長よ、どうも可笑しな事になっておるようじやな」

「そのようだ……失礼、中に村長さんは？」

「いるよお？」

「そうですか……クロエちゃん、俺達村長さんに会うわ。ここまで案内ありがとうね」
「あ、うん。こちらこそどうもでした」

「コロツサス、ラウンドウルフ見といて。目を覚ますと面倒だから」

「マカセテd(。▽。d)」

「ルドさんもこつちで。話し合い中で発作起きるとあれなんで」

「うふふ！ そ、そうだな！ 悪いが、コロツサスと一緒にいさせてもらおうよ、ははは！」
「ん、せいじゃ……ちよつと失礼、通してください……」

クロエちゃんと別れ、面倒な予感を抱きつつも俺達は人だかりをぬって村長宅へと入っていった。

ギャルと青春の旅立ち 中編

■ ■
一 ギャルのお手柄

村長さんと顔を合わせた時、そこには5人の男が村長と話をしていた。動く鎧やら翼の生えた少女に（存在感も）浮いてる黒いナマモノ。向こうから見れば闖入者であると同時に不審者である俺達に、村長も男達もかなり驚いたようだった。

「あれま、あんだ達は？」

「村長さん、突然すみません。その……俺達よろず屋シエロカルテから魔物討伐の依頼を聞いて来た騎空団ですが」

「えっ!?! ああ、そじやつたか、こりや失礼を。いや申し訳ねえべ」

「あ、気にせず座つてて大丈夫ですから」

俺達の事を聞いて村長さんは更に驚き立ち上がるが、フラフラと杖をついている姿を見ると危なっかしい。

「それで、増えすぎた魔物の討伐と聞いて来たのですが……既に討伐隊がいるようで」

「あ、ああ……そのごとなんだがのう」

既に家に居た男性達を見ながら聞くと、村長さんはきまりが悪そうに口を開いた。

話を聞けば俺達が丁度島に降りて村を目指している頃にこの男達は現れたらしい。腕に覚えのある旅の傭兵団と言う事で、水や食料を山で確保しようとしてから道に迷いやつとの思いで村を発見し道を尋ねたという。そこで偶然魔物に困っていると話を聞き、ならば、と魔物討伐に名乗りを上げた。

それを聞いて喜んだ村長は、少し前に出していた依頼の事をすっかり忘れ彼らに魔物討伐を頼んだようだ。

「その……わ、悪いな坊主。どうも間が悪かった」

「ああ、いや気にしなくていいです。こう言う事もありますよ」

男達は5人中4人がヒューマン、そして一人が物静かなエルーンの男だった。傭兵のリーダーを名乗る者が謝罪してきたが、これは仕方ない事だと思うので特に気にはしない。だが不思議な事にこの男、妙に不安げに謝罪をして来た。

「しかし、その……また妙な騎空団が来たもんだな」

男は俺の後ろにいるガルダを見て冷や汗を浮かべていた。

「人、じゃねえよな？ あんたらなんて騎空団だい？」

「あー……【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y】って言うん

ですけど」

「ブウーツ!？」

我が騎空団だの団名を聞いたとたん男は勢いよく噴出した。この反応を見る限り俺達の事を知っているようだ。きつとろくでもない噂を聞いているに違いない。

「あ、あの星晶戦隊（以下略）!?! じゃ、じゃあその娘も……」

「如何にも! わらわこそ神鳥と呼ばれし星晶獣ガルーダ! 我が姿よく覚えておくが良いい!」

少し羽を広げ気取った調子で胸を張るのじゃ子である。まあ嘘ではないので偉ぶるのはいいが、俺にはありがたみは無い。さつき落とされたし。

「おお……こんな村にそんなありがてえ星晶獣様が来られるとは。ありがたや、ありがたや……」

「村長さん、こいつあんまご利益無いと思います」

「うむうむ、拝まれるのはやはり悪い気はしないの! お主あとで良い事あるかも知れんぞい!」

「お前仲間になる時に崇拝されんの飽きたとか言つてたじゃねえか」

メドウ子と言いい調子良い奴だなこいつは。

「星晶戦隊（以下略）、なんだってこんな依頼を……!」

こっちの傭兵のリーダーさんは俺達が来た事が信じられないらしい。確かにうちの騎空団の主戦力は星晶獣、普通ただの魔物増えたぐらいで星晶獣投入するわけが無い。なのでこの人の驚きはよくわかる。

「まあ色々と事情が……面倒なんであんま気にしないでいいですよ」

「き、気にしないってわけには……」

「するだけ損ですから。それより魔物がいる場所は把握されているんですか？」

「おお、そうじゃそうじゃ。魔物の巣窟は村の裏にあるでな」

村の裏と言っても山に囲まれたこの場所では森しかない。しかもこの島の森は開けた所であれば日も当たり見通しがきくのだが、山に挟まれるような場所では昼でも薄暗く見通しが悪くなる。そんな森に増えた魔物がたむろしているのであれば村人の不安も高まるだろう。

一刻も早く駆除すべきなのは間違いない。しかし一つ確認をする必要がある。

「お聞きしたいんですが、増えた魔物と言うのは狼型の魔物ですか？」

あのクロエちゃんを襲っていたラウンドウルフ、あれが今回増えた魔物なのかどうかだ。

「んだんだ、群れてそっこの中にあらわれつがら、そんりやあえれえ恐ろしくつてなあ。

村のみんな恐ろしいって怯えてよお、もお畑仕事もろくにできねんだ」

「そうですか……実はさつき村の女の子が一人襲われてまして」

「な、なんとっ!？」

村の住人が襲われたと知り村長が驚き声を上げ立ち上がるので、落ち着かせながら座らせる。

「いや俺達が助けたんで怪我は無いです。クロエちゃんつて子ですけど、安全な場所の
はずだったそうですが、一匹だけ現れてきたんですよね」

「そ、そうじゃったか。いやあ、えれえすまんのう……」

「いえいえ。それで気絶させて調べたんですが、どうも本来ここら辺には居ない種類で
……」

「ここには居ない……はてなあ、すまねんだけどもワシらそう言う事さっぱりでなあ」

「そうですか……」

「ああ、けんども……増えた魔物さ全部でつけえちゆう話だったなあ」

「デカイ?」

「んだ。ワシは見ておらんけんども、普通なら狼とおんなじぐれえの大きさなのに、熊み
てえにおっきいのを見たつて村のもの多くが言つとつたわ」

熊ほどにでかいとはまた妙である。ラウンドウルフは幾ら大きくなっても大型犬よ
り大きいぐらいのはず。しかし本当にノース・ヴァスト産のラウンドウルフである場

合、この話は本当なのかもしれない。

しかしクロエちゃんも不思議な言葉だったが、この村の人は鈍りが凄いな。クロエちゃんほど意味不明ではないが、なんか色々混ぜてるような気がする。

なんであれ、この島で起きた異変は妙にでかい魔物が増えた以外は無いと言う事か。

「そんなじゃ村の人も困ってるわけだし、さっさと魔物討伐しちやいますかね」

魔物に関しては村長からはこれ以上詳しい事は聞けないだろう。どこから来たか気になるのだが、とにかく魔物を討伐する事に決める。

「ちよ、ちよつと待ったっ!」

「え?」

だがここで何故かりーダーさんが慌てた様子で待ったをかけた。

「えーと、なにか?」

「あの、だな……あの程度の魔物討伐にお前達程の騎空団が行くまでもないと思うんだが……」

「はい?」

突然何を言い出すんだろうかこの人は。

「まあ確かに戦力的には過剰かもしれないけど、今は魔物を早く討伐できる方が」

「いや、それは……ああ! そうだ! 魔物の数は多いが俺達で対応できるような魔物

だ。奴らの巢に行くのは俺達だけで十分と思うんだよ！」

「しかし、そうは言っても……じゃあ共闘なんてどうです？ 一応提案しようと思っただけです」

別に正式に依頼を受けた俺達だけが依頼を実行しようとは思ってはいない。この人達も村長さんから頼まれたのだから。

「ま、まてまて！ 万が一村に魔物が来ることもあり得るだろ？ その時あんたらみたくに強いのが居れば村も安心だと思おうわけだよ！」

妙に必死に訴えかけるリーダーさん。他の仲間もどこか焦った様子だった。彼の言ってる事はわかるのだが、何を焦っているのだろうか。

「あと、あと……そう、今回の依頼の謝礼に関してもっ」

「……リーダー」

すると焦るリーダーを見て今まで沈黙を貫いていたエルーンの男が急に口を開き彼の話の止めた。

「そうまくし立てる事は無い。彼も困っている」

「お、おう……そうだったな」

「団長殿、すまなかつたな。納得できないかもしれないが、君達は一先ずこの村に残ってもらって良いか？ 村の少女が襲われたように、まだ把握出来ない魔物が居てそれが

村に来ることもあり得る。村の防衛も必要だ。それに依頼達成の金に関してはよろず屋とも話をする必要があるだろうが……先に依頼を受けたのはそちらだ。あまり心配しなくていい」

金の事を言われるとちよつと弱いのが俺。確かに気になる所ではある。しかしそこをあんま今追及しちゃうとなんか意地汚いといふかなんと言ふか。

「どうされますかジミー殿？」

「さてねえ……」

「まあ本人達がやる気ならいいんじゃないかねえのか？ 余程じゃなけりや後れを取るような魔物でもねえわけでしょう」

「そ、そうだ！ その不思議なトカゲの言う通りさ！」

「オイラはトカゲじゃねえぜ」

B・ビイがそう言うのと自分に都合がいい意見と思つたのか、リーダーさんが言葉をつづけた。

「あんなラウンドウルフ程度なら俺達だけで十分だぜ！」

「………ん？」

自信満々に答えるリーダー。そこで俺は非常に気になる言葉が彼から出て来たのに気がついた。

俺だけでなくおそろく気が付いたろうと思いきやシャルロットさんとおっさんに視線を向けると、彼女達は軽くなずいた。やはり気が付いたようだ。

「……わかりました。では魔物の方はそちらにお任せしますね」

「お、おお！ そうかい？」

「ええ、とにかく村の人達安心できるのなraidいので」

「わ、わかった！ 森の魔物は俺達に任せてくれ！」

「……リーダー、早くいくぞ」

「お、おうわかった。そ、それじゃあ村は頼むぜ！」

そう言つてリーダーの男は自信ありげに笑いながら仲間を引き連れて家を出て行つた。

「……」

「うん？」

だが一人エルーンの男だけは、最後まで俺の事をジツと睨むようにして見ながら家から出て行つた。初対面のはずだが何か俺に用でもあつたのだろうか。それとも顔になんかついてた？ やだなあ。

「おい団長、なに顔を気にしてんだ？」

「おっさん、俺の顔なんかついてない？」

「なんもねえよ、いつも通り地味な顔だ。安心しろ」

余計なお世話である。

「で、分かつてると思うけど」

「ああ、どう動く?」

「あの者達を追いますか?」

もし俺が今考えたとおりの事が起きていたと言うのなら、倒すべきは魔物ではなくなる。そしてきつとその倒すべき存在は恐らく。

「え、えつと……なんか他にあるんけ?」

俺達が急に深刻そうに話を始めたからか、村長さんがうろたえていた。あまり怯えさせたくは無いが、村人の安全は確保したい。

「村長さん、今から村の人達は家の外に出ないように言ってください」

「はあ? そりやまあかまわねえけんど……なんかおつかない事がおこるんかのお」

村の人間に被害が出る事を望まない村長さんから不安が強く伝わる。

「そうならないために俺達が来ました」

そう告げて俺達も村長の家を出ると、村に着いた時のような人だかりは無かったが、クロツサスとルドさん、そしてクロエちゃんはまだ残っていた。

「あれ? クロエちゃんまだいたんだね」

「あ、おにーさんおっく。話し終わってたん？」

「まあね」

「ねえねえ、さつき先に出て来た人らってなんだったん（ーωー？）」

「ああ、あれは……まあ傭兵らしいけどね」

「へえそうなんだ。つか、よーへー？ とかクロエ知らないけどさ。けどこの華の事知ってるかと思っただけだなあ」

そう言うときクロエちゃんはポケットから一本の華を取り出した。見た事の無い特別美しいとも言えない華だった。

「それは？」

「なんか拾ったんだけどお、あの人達ならこの華知ってると思つてえ」

「あは!? そ、それは……!」

その華を見てルドさんが引きつった笑いを上げながら驚いた声を出す。

普段ならその引きつった声は発作によるものと思うが、これは彼女の感情から来る引きつった声だった。

「ふふ! ちよ、ちよつといいかい？」

「え? 別にいいけど。はい」

「あははっ! あ、ありがとう!」

クロエちゃんが不思議そうに華を見てみると、ルドさんが笑いを堪えながら華を見せてくれと頼んだ。ルドさんは受け取った華を観察し、そしてその臭いを嗅ぐと「やはり」と呟き深く頷いた。

「何か？」

「ふ、ふふ！ この華は私が山賊だった頃見た事がある。とても希少な華で、高価で取引される事があるんだ！ ははは！」

「高く？ 特に綺麗と言う事も無さそうだけど」

「むしろ地味じやのう。しかし……この臭い？」

「あはは！ い、いやこれは観賞用じゃないんだ。これの価値は『香り』だよ！」

「香り？ 香水にでもするのでありますか？」

「それでもないんだ。ふふ！ こ、この香りは魔物が好む香りだね！ 『魔好華』なんて呼ばれる事もあるが、上手く使えば魔物を誘き出す罟や……一時的に魔物を従えるような事もできるんだよ。ははは！」

それを聞いて俺達は驚いた。そして危機感を同時に抱いた。

そんな華がある事も問題だが、なんだってそんな物がこの村の近くに『生えていた』のではなく『落ちて』いたのか。

「この島に自生する種類ではないんですか？」

「うふふ！　まずあり得ないなあ！　これは珍しい華だからねえ、もしここが自生地なら華目当ての人間の出入りが激しくなる。この島にそんな様子はないし、今まで話も聞いた事がないよ！　あは、ははははっ！」

「クロエちゃんこれをどこで？」

俺はクロエちゃんに詰め寄るようにして聞いた。

「え？　えつと、さつきおにーさん達に助けられた時……あっ!?　そう言えば、これ拾ってから襲われたっけ」

「おおそうじゃー！」

クロエちゃんが記憶を辿りその時の事を話すと、それに合わせてのじゃ子もまた何かを思い出したようだ。

「これさつき団長を落つことす直前に臭った香りじゃー！」

「……鼻が痒くなつたってやつか？」

「そうそう、微かに臭ったが間違いない。この臭いじゃよ」

「……これ星晶獣にも効くの？」

「知らぬがわらわは好かん。少し嗅いでも鼻がむず痒い」

「ボクモチョット（・ω・）　タエレナクモナイケド……」

のじゃ子とコロツサスはこの香りが苦手のようだ。と言うかコロツサス嗅覚つてど

こで感じてるの？ 謎だ。

しかし彼女がラウンドウルフに襲われた理由がこれでわかった。そしてラウンドウルフが一匹だけだったのも少しずつ理由が見えてきた。

「さっきの男達がこの華について知ってるかもと言ったな？ お前何でそう思った」

おつさんが鋭い視線をクロエちゃんに向けながら質問すると、彼女は少し自慢げに答えた。

「ん〜とね、あの人達からこの華とおんなじ香りしたからさあ、そんでなーんか気になつてえ」

「確かに香つたのか？」

「マジだつて、あたし香水とかけっこー拘つてるから、こーゆー匂いとかに敏感的な？」

もー自信ありまくりだし（ ・ ・ ・ ω ・ ・ ・ ）

「相棒、こりや決まりだな」

クロエちゃんの言葉を聞いてB・ビィが確信を持ったように言った。そして俺も強く頷く。

「ありがとうクロエちゃん。いい情報だった」

「およ？ クロエけっこーナイスだった系？」

「ばっちりね。後は俺達に任せて、君は絶対家から出ないように」

「あ、森の方行くん？」

「ああ、懲らしめないといけないやつ等が分かったんでね」

俺達は急ぎあの男達を追った。

そしてこの時、森の方へと走る俺達はワクワクした様子のクロエちゃんの視線に気がつく事は無かったのだ。

■ ■ ■
二 怪香の香る者達

村長の家から逃げるように出て行った傭兵達は森に入ると真直ぐにとある場所めざし走った。

リーダーの男は再び顔に焦りを見せ始め、後ろを気にしながら進んでいく。

「き、来てねえよな？」

「今のところ来てはねえようです」

部下の一人が後ろを確認して答えた。それを聞いて少しリーダーは安心したようだった。

そして森の特に薄暗いエリアに来ると、彼らは足を止めた。そこには数十人規模の野営地となっていた。日は高いが森が暗いために焚き火も焚かれている。

「あれ、リーダー？」

そこで作業をしていた男達が戻ってきたリーダーを見て不思議そうに首をかしげた。彼の事をリーダーと呼ぶ事から、彼らもまた男の仲間であろう。

「もう本番ですかい？　もう少し後かと思ったのに」

「それどころじゃねえ！　全員集めろ！」

「え？」

「いいから早くしろ！」

「へ、へい！」

激しい剣幕で怒鳴られ部下の一人は作業をしている他の部下達を集め、リーダーの前に集合させた。

「何事ですかいリーダー」

「も、もしかして逃げた一匹の事ですか？　それなら今華使って捕まえようと」

「もう遅いんだよ！」

部下の何人かが何かの弁明を言おうとしたが、リーダーは彼らを怒鳴り黙らせた。

「逃げた奴はもう捕獲されたっ！」

「え？　あの村のやつ等がですか!？」

「ちげえ馬鹿！　依頼受けた騎空団だ！」

「ええ!？」

騎空団と聞き部下の男達は驚きうろたえ出した。

「もうバレるのも時間の問題だ! 撤収だ!」

「い、今からですか!？」

「当たり前だ! 証拠残さず必要なもんだけもって逃げるぞ! 急げ!」

「へ、へい!」

バタバタと慌しく部下達は急ぎテントや荷物をたたみ纏め始めた。

肩で息をしながらそれを見ていたリーダーは、疲れ果てた様子で詰まれた荷物の傍にある檻を——その中にいる魔物ラウンドウルフ達を見た。

ラウンドウルフは中型の檻一つの中で3〜4匹づつ入れられ、全部で十二匹この場に居た。

「まさかこんな早く騎空団が来るとは……」

「当たり前だ愚か者」

「うっ!」

来るとは思わなかった騎空団の登場に不満を漏らすリーダーであったが、エルーンの男に強く責められると言葉を詰まらせた。

「だ、だってよう先生? この前もその前も上手くいったし……」

「こんな手が何度も通じるか。むしろよく今までこうならなかった」

「な、ならそう言ってくれりゃあ」

「止めておくと忠告は何度もした。それを聞かずに味を占めて繰り返したのはお前だ」

「そ、そうだけど」

「それになんだあの誤魔化し方は、余計な事まで喋りすぎだ」

「いやそれは、その……はああく」

途端に雰囲気弱々しいものとなり、肩を落とし後悔するリーダーと呼ばれる男。

男達は傭兵団と名乗ったが、実際の所はただの盗賊団である。もつとも人を傷つける様な事をした事が無い、と言えば聞こえは良いがただこの男達にそこまでの度胸が無いだけだ。全てがまともな仕事をする気にもならず、かと言って秩序の騎空団に捕まるのを恐れる半端者ばかりの寄せ集め、そのため彼らの仕事はケチな盗みばかりで、一番大きな仕事は夜の家人不在の家に忍び込んでの盗みが関の山だった。

だがある時、彼らは偶然にも珍品を扱う商人と出会い、魔物を従える事が出来るという触れ込みで魔好華と呼ばれる華を手に入れた。

そしてその効果は抜群であった。完璧に魔物を操れると言う訳ではなかったが、しかし魔物の注意を惹いたり動きを誘導するなどの事を調教師でもない男達でも出来てしまったのだ。

この効果の高さを見て男達が不穩な計画を思いつくのに時間はかからなかった。

魔物の売買を行う別の商人から魔物を数体買うと、男達はそれを主に小さな島の自衛手段の無い村の周辺に解き放った。そして村人に気がつかれないよう魔好華を使い魔物を誘導し村人の恐怖を煽り、ここぞと言うタイミングで自称旅の傭兵団を名乗って魔物討伐を引き受ける。そして村人の目の届かない所で再び魔好華を使い魔物を回収、さも自分達が魔物を倒したかのように振る舞い報酬を手に入れる。それがこの男達の常套手段と化していた。

だが一度二度成功したからと言ってこんな方法を取り続ける事は普通無い。当然魔物を解き放てばそれを問題視して騎空団なりに魔物討伐の依頼を出す村も現れるだろう。だが味を占めて調子に乗った男達は仲間を増やし、また魔物の数も増やし、そして愚かにも大した工夫もせず全く同じ方法で犯行を続けたのだ。

そうして案の定、今回彼らの犯行本番当日にもよってあの騎空団が現れた。

「一応聞きますけど……先生ならあいつらに勝てますか？」

「……」

リーダーに「先生」と呼ばれるエルーンの男。彼は腰に下げた二本の剣を触れながら考え。

「無理だな」

かなり呆気なく答えた。

「そ、そんなあ……」

「あの後家の外に居るでかい鎧を見ただろう。どうせあれも星晶獣だ。複数の星晶獣が居て勝てると思うほど自惚れちゃいない」

「で、ですよね……」

「しかし、本物の星晶戦隊（以下略）……だとしたら、敵わぬとしても……」

不意にエルーンの男はブツブツと声を小さく独り言を言い出した。急な変化にリーダーもギョツとする。

「ど、どうかしやしたか?」

「む? ああ、なんでも……それより逃げるならお前も準備を……」

溜息をつくばかりのリーダーを急かし逃げる準備をさせようとしたエルーンの男だったが、細く尖ったエルーン特有の耳を動かすと何かに気が付き剣を引き抜いた。

「ひえっ!?! ど、どうしました!?!」

「……どうやら遅かったらしい」

「え?」

エルーンの男が睨む先を見るリーダー。暗い森の中で最初は何が居るのかわからなかったが、しかし徐々に見えてくるその姿に戦慄した。

「あ、ああ……バ、バレて……た？」

「そのようだ」

最初に聞こえてきたのは女の異常な笑い声。そして次に見えたのは、暗がりに溶け込むような高熱を発する黒鉄の巨大な鎧、筋骨隆々な黒いナマモノ、闇を照らす蒼剣、本を手を持った不敵な笑みを浮かべた少女。

「や、やば逃げろっ！」

「あっ?!? おい、待て!!」

盗賊の何人かが驚き怯えながら自分達に近づく存在の反対方向へと向かい走った。しかし上空から何かが羽ばたく音が聞こえたかと思うと、それは男達の前に急降下し降り立つ。その時巻き起こった激しい風によって、逃げようとした者達はその場で尻をつき、ゴロゴロと転がり飛ばされた。

「うぎやっ！」

「な、なんだあっ?!」

「戯けめ、逃げれると思うか」

急降下の際閉じていた翼を徐々に広げ、そこから現れる褐色の少女。

「た、退路が……」

「ちっ……おい、金を貰った以上もう一蓮托生だ。指示に従ってやる」

「え、え？」

「戦うか逃げるか、選んだ方で動いてやると言ってるんだ」

そして最後に気だるそうな少年。

彼はこの場に居る盗賊達を確認し、そしてリーダーの男とエルーンの男を見て溜息をつきながら口を開いた。

「えーとですねえ……取り合えず、言訳あるなら聞きますが？」

まるで森に迷い込んだ一般人のように、この中で最も印象が薄い少年が、リーダーの目には一際恐ろしく見えた。

三 盗賊団最後っ屁

■ 案の定俺達が辿り着いた場所に居たのは、あの“自称”傭兵の男達。そしてこいつらの拠点と思われる場所には、中型の檻が置かれていた。その中でラウンドウルフ達がりなり声を上げ俺達を睨み付けていた。

「あ、あのだな。えつと……」

俺達を見てリーダーを名乗っていたおっさんは酷く狼狽していた。キョロキョロと視線は定まらず、隣に居るエルーンの男に対して助けを求めるような視線も向けてい

る。

「……盗賊団のアジトを見つけた」

「つて理由は通りませんよ」

「だろうな」

そんな口から出まかせて俺が騙されるなんて、エルーンの男は微塵も思っぢやいなかったらう。だったら剣を握ったままにしやしない。

「うふふ！ あ、案の定君達が、犯人……と言う事になるのかな？ はは、あははははつ！！」

「自分等で魔物を扇動してそれに怯える人間から英雄の振りして謝礼貰うなんざ、やるこことがちいせえなあ、おい？」

「つまらん方法を考えよる者達じゃのう」

「とんだマツチポンプだぜ」

「悪戯に人々を恐怖させ、その上金銭を騙し取るとはなんたる非義非道！ 許すわけにいかないでありますっ！」

「コンナコトシテ（・・・）ダレカケガシタラドウスルノツ！」

「ひいつ!!」

「リーダーどうしよう……っ!!」

「そ、そう言われたって……!」

臨戦態勢となつているB・ビー達に盗賊達は腰が引けていた。こそこそ魔物使つて楽して金稼いできた連中だから、肝の座つた奴等と思つてはいなかつたし、この中に複数星晶獣居ると知つている事も有るだろうが、なんとあまりに情けないものだ。

「何で俺達が怪しいと?」

エルーンの男がそう聞いて来た。時間稼ぎや誤魔化し等ではなく、単純に気になつたから聞いて来たと言ふ風だつた。

「その『盗賊』のリーダーさんが魔物退治に行く時『ラウンドウルフ』つて魔物の事を言つたからね」

「え、お、俺?」

怯えたままの男は自分の凡ミスに気がついていないようだつた。

「あん時俺達の捕まえたラウンドウルフは村長の家の外でコロツサスが見張つてた。窓からは見えないし、俺達は捕まえた魔物の名前は言つてない。なのにあんた態々あの時『ラウンドウルフ程度』だなんて言うからなんか変だなと思つてね」

「あ、あれは狼型の魔物と言つたから……」

「かも知れない。けど落ち着き無く冷や冷やしてたあんたが、ラウンドウルフの事を言う時だけは妙に自信を持つてた。怪しいでしょどう考えても。んで、別に予想間違つて

もごめんなさいすればいい程度の事だから追って来たわけ」

「だろうな……だから喋りすぎと言ったんだ」

「す、すいやせん……」

エルーンの男に睨まれリーダーの男は情けなく頭を下げた。

「魔好華、だっけ？ あんたらそんな華使つて悪い事するなんて、結構せこいと思うよ俺は」

「は、華の事まで……っ?!」

「落とされたのを拾われたようだな」

「なるほど、ありややつぱり落し物だったわけね……その所為で女の子が一人怖い思いましたんだからな。許さんぞまったく」

大方華は移動中に落つこととして、あのラウンドウルフもドサクサに逃げたか何かだろう。雑そうな奴等だし。

まったく腹立たしい。あんな華がなければクロエちゃんはラウンドウルフに襲われ恐ろしい思いをせずに済んだはずだ。

「んで、どうします？ こつちとしては大人しく捕まって村の人に謝ってくれればいいんだけど」

「あ、謝ったら全部キャラに……」

「んなわけあるか。秩序の騎空団行くに決まってるんだろ」

「だ、だよな……じよ、冗談だつて」

この男よく今まで盗賊なんてやって来れたな。

「当然抵抗するならそれなりの対応はしますよ……こいつらが」

「そこはしつかりと「俺が」とか言えよ相棒」

俺は後ろに居る主にB・ビイとコロツサス二名を指差した。

無駄な争いをさけ血を流さないよう視覚効果による相手の指揮低下を狙うならば、「こいつとは戦いたくない」感を強調するのがいい。誰だつてドラフよりも巨大な身の丈で更に大きな剣を持った黒鉄鎧の戦士と、筋肉モリモリマッチョマンの黒いトカゲっぽいナマモノを相手にしたくないだろう。

「ううっ」

「情けない声を出すんじゃない。お前が決める」

「せ、先生……」

どうすれば良いのか悩むリーダーにエルーンの男は静かに、しかし強く声をかけた。彼は以前として剣を抜いたまま何時でも戦えるようにしている。

こんな状況でありながら堂々として隙を見せない立ち方と姿勢を見て（強い人だな）と普通に俺は思った。実際の実力はわからないが、並の実力ではないはずであり武人系

の人間である事がわかる。

だからか、なんだってこんな盗賊団に居るのかも疑問に思う。

「GAU! GAU!」

その時唸り声を上げていたラウンドウルフ達がより激しく、興奮した様子で叫び吠え出した。

俺達を警戒して威嚇しているのかと思った。しかしラウンドウルフ達の注意は別の所に向いているように感じる。

「あは!? はは! この香り……!?!」

「ルドさん?」

「だ、団長! あは! 魔好華の香りだ!」

ルドさんに言われ注意して臭いを嗅いだ。すると確かに微かだがあの華、魔好華の臭いがした。それは俺達の後ろから臭い、何故ここでこの香りがするのか考えた時ハツとして後ろを振り振り向いた。そして木の物陰に隠れようとしている人物と目が合った。

「あ、ヤバ!?!」

「……クロエちゃん?」

そこには村に残っているはずのクロエちゃんがいた。

何故彼女がここに居るのかと俺が疑問を感じるよりも早く、同じく彼女の存在に気が

ついたリーダーの男は彼女が現れた事を好機とみたらしい。

「チャ、チャンスだ!!」

リーダーの男は咄嗟に傍のラウンドウルフの檻の格子扉を開いた。その中で咆えていたラウンドウルフ達は扉が開いた事に気がつき、更に大きく咆えてそこから飛び出し真直ぐに自分達の嗅覚を刺激する臭いを放つクロエちゃんの元に駆け出した。

檻から飛び出したラウンドウルフは四匹、かなり興奮している様子だった。だが何よりも、その巨体。檻の中で少し詰め状態だったために分かり辛かったが、明らかに俺達の知るラウンドウルフの体格ではない。あんなのがクロエちゃんのような少女に噛み付きでもすれば、ただではすまない。

「くそつたれ……!! おっさんっ!」

「距離がある、二体が限度だ!!」

「それでいい、後はこつちでやる!」

「自分もっ!」

俺とシャルロットテさんは咄嗟に駆け出した。同時におっさんが指を鳴らすと、鍊金術が発動し地面から槍が数本飛び出しラウンドウルフを二体巻き込み倒した。

「シャルロットテさん、投げますよっ!」

「うっ!? し、仕方ないであります、どうぞ!」

「うおりやつ!」

久々の必殺シャルロット砲。残った二体のうち一匹に向かいジャンプしたシャルロットさんを押し出すように投げる。

「やあああつ!!」

「GUGYA!?!」

剣を構え空中で自分を軸にして高速で縦回転したシャルロットさんは、そのままラウンドウルフへとぶつかり一匹を排除した。

あと残り一匹。

「GYAoooo!!」

「ひいやあつ!?!」

最後の一体がクロエちゃんに襲いかかろうとした。だがギリギリであったが、なんとか追いついた。

「させんつてーの!」

「GYA!?!」

ラウンドウルフとクロエちゃんとの距離が縮まっていたため、剣ではクロエちゃんに当たりかねなかったので右手を伸ばし、そのまま腕の籠手部分を噛ませる。

咄嗟に噛ませたが、しかしこのラウンドウルフを間近で改めて見て驚く。

(こいつ、デカ……過ぎねーかっ!?)

このラウンドウルフ、まったく普通のラウンドウルフとは違う。とにかく体格が通常のラウンドウルフの倍以上はあるのではないだろうか。

村長のいう通り最早狼と言うよりも熊である。今ここで納得がいった。最初島で見たあのラウンドウルフをおっさんは子供だと言ったがそれも納得である。あそこから成長していくなら、これ程の大きさになるのも理解できる。

無理矢理口に籠手を噛まされたラウンドウルフはうろたえはしたが、一方で噛む力はドンドン強まってゆき鉄の籠手も歪んでいくのが分かった。その咬合力は巨体に見合って凄まじく、恐らく軽装の鎧に使われる金属板程度には穴が開くだろう。

「いい加減にせいっ!!」

「GYAN……!?!」

此方も腕をくれてやる気もない。そのまま腕を振りまわし、近くにあった木の幹へとラウンドウルフを叩き付ける。ラウンドウルフは悲鳴を上げて気絶して俺の籠手から口を離して倒れた。

「あわわ……! なにこれ、やばたん……」

「クロエちゃん怪我無いか!?!」

「あ、はい……っか、ありがとうございますっ!」

尻餅をついてしまっている彼女を抱き起こし無傷である事を確認する。

本当ならなんでここに居るのか聞きたい所だが、しかし今そんな余裕は無いのが現状。

「このまま畳み掛けてやる、お前らやれ！」

「へ、へい!!」

盗賊のリーダーが急にそう叫ぶと懐から一個の瓶を取り出した。部下達も同様のものを取り出すと、奴等はそれを俺達に向かって投げつけてきた。

何か毒性の薬品かと思つたが、それは俺達の一歩手前に落ち中身の液体をぶちまける。だがそこに広がる液体から臭う香りに盗賊達の往生際の悪さを感じた。

「この臭い……しまったっ!」

それは記憶に新しい、先程クロエちゃんに嗅がせてもらったあの魔好華の臭いを強烈にしたようなものだった。

「多量の魔好華を煮詰めて作った香料だ! 今だお前ら、檻を全部開けっ!」

「わ、わかりやした!」

続けてリーダーと部下達は一齐に檻の扉を閉めていた門を引き抜き扉を開けた。そこからは無数の巨大ラウンドウルフの唸り声が出た。

奴等の鼻は既に俺達の方角から漂うこの臭いを感じ取っているはずだ。その所為か

かなり興奮している。

「うわあ!? い、一杯来たんですけどお!?」

「あいつら面倒な事をつ！ 来るぞみんなつ!!」

剣を引き抜き叫ぶ。それと同時に檻からラウンドウルフが次々と飛び出してきた。奴等は臭いにつられ飛び出し、そしてその先に居た俺達に目標を切り替えた。

「ちっ！ 雑魚の癖に小ざかしい真似しやがる！」

「迎え撃つぞ！ おっさんはシャルロットさんにルドさんとラウンドウルフの相手を
！」

「わははっ!! りよ、了解した！」

「盗賊達はどうする相棒！」

檻を開いた盗賊達はラウンドウルフに足止めを任せ、自分達は逃げようと四方八方へと走り出した。ラウンドウルフだけの相手をしていると盗賊達に逃げられる。ここは星晶獣組に盗賊は任せる事にした。

「そつちはお前とコロツサスとのじゃ子で捕まえろ！ 頼むぞB・ビー！」

「任せろあ!!」

「うわあ!? なんか形容し難いのがきたああ!?」

「ひいいいつ!? 人なのかトカゲなのかあ!?」

「オイラはトカゲじゃねえぜええ！ オドラアアアッ!!」

盗賊達は悲鳴を上げて逃げまわる。筋骨隆々のマチョビイがラウンドウルフを片手で払い除けながら自分達に迫るのだから気持ちはわかる。俺だって逃げるに違いない。

「GUAAAa!!」

「うひゃああ!!? おにーさん来てる来てるっ?」

「うおつと!」

「Gain!?!」

飛びかかって来たラウンドウルフを剣の腹で強く叩き落とす。傍にクロエちゃんが居るのであまり血生臭い戦いは見せたくない。

本来ならクロエちゃんはどこか物陰に隠れてもらうのがいいのだが、彼女からはまだ魔好華の香りが残っている。ラウンドウルフには直ぐ気がつかれるだろう。

「クロエちゃん俺から離れるなよ!」

「あ、はい! りよ!」

クロエちゃんを後ろへと下げ、迫るラウンドウルフを相手にしようと剣を構えようとした。

だがこの時俺達を取り囲むラウンドウルフの殺気の中から、一つ明確に俺へと殺気を放ち接近する気配を感じ取った。

「つつ!?!」

「ひゃああつ!?! なになになにに!?!」

迫るのは殺気、そして刃。

クロエちゃんを庇いながら剣で弾く。

「……これを防ぐか」

そこには並々ならぬ殺気と闘志を身にまとい、細身の剣を構えたあのエルーンの男がいた。

ギャルと青春の旅立ち 後編

一 その太刀は万を結ぶのか

レイピアの類と間違ふほどの細身の両刃剣。それを持つその男は、鋭い刃に勝らぬとも劣らぬ鋭い視線を目の前の団長へと向けた。

「……あんたは、逃げないんだね」

不意打ちの刃を弾き、僅かに冷や汗を流しながら団長は聞いた。この男はあの盗賊達とは違う。そう団長は最初この場で対峙した際に感じ取っていた。

「あの男はお前達に抵抗し逃げる事を選んだ。ならば俺は手を貸してやるだけだ」

「成る程、するとあんた用心棒ってわけか」

「そう言う事だ」

なんの前触れも無く、突如風が吹くようにして男は動いた。あまりに自然に、剣を突き構えで団長へと迫る。

団長は使い慣れたミスリルソード（以前トラモント島で紛失したため、今回の依頼の前にシエロカルテから購入した）の鏢近くにある丸い溝へと迫る剣を通し、そのまま横へと払い除ける。

（こいつは……っ）

「これも防ぐ……」

「ジミー殿!？」

ラウンドウルフではなく剣士の相手をしている団長に気がついたシャルロットは声を上げた。そのまま彼の所へと応援に向かおうと思っただが、しかし数体のラウンドウルフが前を塞ぐ。

「こっちは大丈夫！ シャルロットさん達はラウンドウルフを！」

「くっ！ りよ、了解であります！ 武運を！」

この状況でラウンドウルフが来る方が面倒になると考え、少しでも多くラウンドウルフを引き付けて貰うため団長はシャルロットの助けを断った。

「おにーさん後ろっ！」

「G A A a a!!」

ほんの一瞬シャルロットの方へと顔を向けたその隙に、ラウンドウルフが一頭二人へと飛びかかった。

「うっとおしいっ!!」

「Cya in!?!」

団長は今度は剣で叩かず左手で首を捻るように掴みとり、相手の飛びかかった勢いをそのままそのまま地面へと叩きつけた。頭部を地面に叩きつけられたラウンドウルフは子犬のような声を上げて気絶する。

「うわああ!?! ちよ、前前まええ〜っ!?!」

「シィッ!」

「うっ!?!」

クロエの悲鳴で団長は男がまた自分へと迫っている事に気がつく。ラウンドウルフに気を取られた隙に、かなりの速度で踏み込んできていた。団長は避けようと思ったが、後ろにクロエが居る事を思い出す。このままよければ最悪クロエに切っ先が向かう。

「づええええーいっ!!」

「むっ!?!」

団長は一端剣を離し、刃を避けながら重心を落としてタツクルのように男へと突っ込んだ。そして男の襟元をつかむとそのまま後方へと思い切り投げ飛ばす。

グルグルと回りながら男は投げ飛ばされた。だが何処かへと叩きつけられるよりも

前に、近くの木を蹴って勢いを殺し、そのまま地面へと着地した。

地面へ着地すると、男は鋭く団長を睨みつけた。

「……何故反撃しない?」

「はい?」

「先程から防ぐばかり、貴様の實力その程度では無いはずだ。何故剣で反撃しないのだ」
攻撃に対して剣を振るような反撃を行わない団長。その事を男は不思議に思った。
だが団長は辟易した様子で返事をする。

「あんたさあ……いやそれよりも、さつき用心棒だからあの盗賊達が逃げるのに手を貸すとか言ったよな」

「……ああ、そうだ」

「絶対嘘だろ」

「……」

嘘、と団長に言われ男は目を細めた。

「何が、嘘と?」

「剣に殺気がありすぎる。しかも態々俺の所に来て……用心棒なら盗賊を追ってるB・
ビー達に向かうはずなのに」

「……」

「もうこれ逃がすとか建前で、あんた自分が戦いたいだけだろ」

「違うか？」と最後に言われ男はクク……と喉を鳴らすように笑った。

「まったく……まったくその通りだ」

そして思いの外直ぐに彼は団長の言う事を認めた。

「おお、認めるんだ？」

「誤魔化す事でもないからな……そう、俺はただお前と剣を交わしたいと思った。それだけだ」

その答えを聞いて団長は酷く面倒臭そうに溜息を吐いた。

「フェザー君系か……バトルジャンキーめ」

「星晶戦隊、星晶獣を従える男の騎空団。星晶獣に勝る強さを持つ者、それを聞いて俺は剣を交わしたいと思った」

「従えてねえ、纏わり付かれてんの」

「俺はある剣の道場の生まれ、物心の付く頃から剣に触れて育ち、剣に誇りを持ち、剣士として戦い続けた」

「ちよつと、ねえ聞いてる？」

「俺は剣で負ける事を知らず、今まで剣を交えた者は数知れない。誰もが強く、誰もが剣豪と呼ぶに相応しかった。しかし、ある時俺は負けた。剣聖と呼ばれた男に挑み完膚な

きまでに、言い訳しようの無い敗北を喫した」

「おい、ねえって……」

「その強さに引かれ俺は自分を負かした相手に半ば無理やり弟子入りし、そして剣の腕を磨いた……」

「おーい？ 聞いてます？ ねえってば、おいこら」

「だが結局俺は師に勝つ事どころか引き分ける事すら出来ず、何時しか師は剣を捨て何処へと去った……以来俺は再び強者を求めたが、師ほど強き者にめぐり合う事が出来ず——」

男はベラベラと早口で語り続ける。自分がどんな人生を送り、いかに多くの強い者達と戦ったかを。

「うーわ、ウツザ。ここで自分語りとかないわー（。D。；）」

「本当に面倒なタイプだった……」

寡黙で武人肌と思つた男の意外な一面を垣間見た二人。二人とも男の話の内容も「心底どーでもいい」と言う感想しか出なかつた。

「——そして俺は盗賊団の用心棒として金を稼ぎ、そして強者との戦いを求め」

「ストップ、ストップ！ わかつた、わかつたからやめいっちゅーに！」

「むっ？」

いい加減うんざりして団長は大声を出して男の語りを中断させた。

「こっちはあんたの戦う動機とか生き様とかどうでもいいの」

「……そうか」

「いや、ちよつと落ち込むなよ鬱陶しいなあ」

「ナイーブかよ（；。 ㇿ）」

どうでもいいと言われ、エルーンの男は少し耳を垂れさせて落ち込んだ。

「強い奴と戦いたいなら、素直に何処ぞの道場なり行くか剣技大会にでも出りや良いだろうに。よりにもよってあんな盗賊の用心棒なんてしないでいいーだろ、情けない」

「……旅の中強者を求めるにも金は要る」

「そう言うところが情けないんだよ。」

団長は怒った様子で男を指差した。

「世の中理不尽な理由で借金抱えても頑張る奴がいるんだ。ほんとだぞ？　なのに良い大人が金のためとは言え、馬鹿な事で剣使ってんじゃないよ。腕はいいのに勿体無い」

そう指摘されるが男は鼻で笑い団長の言葉を否定した。

「馬鹿な事、か……だがお前と言う強者に出会えた。用心棒なぞに身を窶した甲斐があつたと言うものだ」

「性質の悪い奴だなあ」

恥じる事無く剣を構える男を見て、団長は呆れながらミスリルソードの剣先を男へと向けた。

「わかった、相手になつてやる」

初めて明確に団長が戦う意思を自分に向けた。その事に男は非常に満足げに不気味な笑みを浮かべた。

「そこなくては」

「ただし負けたら大人しく捕まれよ。それで、もうこんな事から足洗いな」

そう言うのと団長は腰から剣の鞘を外し、その中に剣を収めた。その行動に男も訝しげに睨む。

「何のつもりだ？」

「クロエちゃん、そこから動かないで」

「は、はい！」

既に戦いは終わったかのように鞘に剣を収めた団長。男の問いかけに直ぐ答えず、クロエにジツとしているように注意する。

「答えろ、何のつもりだ」

「戦う準備」

「……ふざけているのか？」

「いいや、マジでやってるよ。マジにあんた倒してやるつもりだ。さっきも言ったが、あんたのこれまでの事や戦う動機なんてどうでもいい。あんたは自分が戦いたいだけの理由であの盗賊達に加担した。おかげであの村の人達は魔物に怯えて、この子は遭う必要の無い怖い目に遭った」

団長は後ろに居るクロエの事を強く強調した。彼女がラウンドウルフに襲われた事が、彼にはとても許せない事だった。

「昔はどうか知らんけど、今のあんたは剣士でも何でも無い。自分勝手な、ただの悪い奴だ」

「……だとして、どうする?」

「決まってるだろ」

団長は剣を鞘に入れたまま、クロエを守るように前に出て上段の構えをとった。

「やっつけてやるよ」

「——!?!」

その瞬間、団長の纏う気配が変わった事に男は気がついた。

(隙が……見えて、消えてゆく……!?!)

初めての感覚だった。今まで「隙の無い相手」を見た事は幾らでもあった。だがこのような相手の隙が見え、そして消失していく、そのような感覚は感じた事はない。

(疑似餌の如く隙が「見える」……！　だが、しかし踏み込めない……なんだ、これは!?)

その隙を付けば確実に勝てるはず、そう思い攻撃を仕掛けそうになる。だがこれは明らかでない——疑似餌。

(剣を鞘に入れたのは何故だ？　居合いか？　いや……あの剣は比較的重い両刃剣、出来なくも無いがこの間合いでの居合いは難しいはず……あれも誘いか？　だとして、踏み込めば……！)

一気に踏み込み、そして剣を振るつたとして、男の脳裏には剣をはらわれそのまま斬られる光景が浮かぶ。斬り合いも不可能、一撃目でやはり防がれ負ける。疑似餌は自身の動きが予測されている証、どのような攻撃も対応出来ると言う団長の実力の表れ。

一度疑似餌にかかり釣り上げられれば、獲物の魚はもう何もする事は出来ない。

(しかし、踏み込まねばやはり負ける……！　……ならば、ならばこそ！)

男は突如、己の剣も腰の鞘に戻した。そしてそのまま、両手を交差させ腰にある二本の剣へと手を伸ばす。それを見て団長も僅かに反応する。

(今こそ打ってみせる。打ち合う事無く、必殺の一撃を……)

意を決し男は構えた。見えては消える隙と言う疑似餌、それに飛び込み自ら喰らい付く覚悟を決める。

餌に喰い付いたとて、釣り上げられなければよい。水にさえいけば、獲物である魚が勝る。その釣糸を引き、逆に水中へと引きずり込むのだ。

「方に及ぶ打ち合いを……一太刀で、結ぶっ！」

「——!？」

男は地面を蹴った。激しく、強烈に、筋力を最大にまで発揮し破裂音の様な音まで発し跳び出した。

男と団長、二人の距離は凡そ5 m弱。その距離を一気に埋める男の踏み込み。同時に男の腰から剣が引き抜かれ、閃光の如く刃が走る——。

「ぐがっ!？」

——かに思われた。男が剣を引き抜くよりも先に、何かが男の眉間を強く打ち叩いた。あまりの痛さに視界が霞む。それでも目を開き、何が起きたか状況を知ろうとした。

(さ……鞆?)

それは、鞆だった。革製の平らな、団長の使っていた剣の鞆。その鞆の先端部分が眉間へと直撃したのだ。

そして落下してゆく鞆を目で追うと、いつの間にか自分の目の前にいた団長と目が合った。

「おんどりやあ——っ!!」

「——!?!」

鳩尾に凄まじい衝撃が走る。抉りこむような、鋭い団長のストマックブローが男の腹を襲った。引き抜きかけた剣は地面へと零れ落ち、殴られた体内からは一気に空気が押し上げられ、嘔吐くような声を上げながら男はそのまま地面へ両膝をついた。

「が……がはっ!? おご……ご、拳!?!」

「いや、剣だけで戦うなんて言っつてねえもん」

子供の屁理屈の様な事を言われ、男は言葉を失った。その間に団長は落ちた鞘を拾い上げた。

「やれやれ、あんたが想像以上に早く踏み込んだの驚いたけど、そのおかげで随分威力上がったよ。いやあ、ラツキーラツキー」

（さ、鞘……剣を振り下ろして……飛ばしたのかっ!?!）

団長は男が踏み込むとほぼ同時に上段の構えから剣を思い切り振り下ろし、剣にはまっていた鞘を矢のように高速で撃ち出した。勢い良く踏み込んだ男がその迫る鞘に気が付いたのは、自身に衝突してからだった。

予想しなかった鞘の使い方に男は驚き、一方で団長はゆつたりと拾った鞘に剣を納めた。

「何故……斬らない……っ!?」

「馬鹿ちゃん、ただでさえ乱暴な場面なのにこれ以上剣で斬り合うなんて血生臭い事、年頃の子に見せられないでしょーが」

そう言って団長は後ろでポカんとしているクロエを指差した。

「は、反撃しなかったのも、始めから……少女の、ために……」

「当然でしょうが。まったく」

負けた。嘗て師と仰いだ者に負けて以来の敗北だった。剣で打ち合うどころか鞘と拳で負けたのだ。

剣士が戦いの場において、相手の出かたに惑わされ、師に及ばずとも同じ「奥義」を放とうとしたのに真剣を使われずに負けた。

（負けた……所詮、今の俺は……ただの「悪い奴」だったか……だが……）

ダメージが全身に巡り、男は地面に倒れていく。

（やはり……お前と出会う意義は、あった……ぞ……）

男はこの敗北を痛感しつつ、しかしこの敗北に清々しさすら感じながらその意識を手放した。



二 ギャル必殺!!

■ エルーンの男が気を失った事を確認して団長は辺りを見渡した。いつの間にか、あれほど居たラウンドウルフもカリオストロ達の手で倒され、盗賊達もB・ビー達にロープで縛り上げられていた。

「おう、終わったかよ」

「ん、そつちも？」

「凶体はデカいが所詮ラウンドウルフ。しかもろくに世話されてなかったんだろくな。直ぐにスタミナ切れて弱ってたよ」

カリオストロの言う通り、倒れるラウンドウルフの何体かは呼吸が荒くこれ以上動けない様子だった。調教師でも何でもないただの寄せ集めの盗賊達に真面な飼育など出来るはずも無かったのだろう。

「こいつらも気の毒になあ」

「元の故郷から見知らぬ地に無理やり連れて来られたわけでありまして……このラウンドウルフ達も被害者と言っていていいでしょう」

「こいつらが自分で捕まえられるわけねえから、誰からか買ったか……」

「ま、魔物を非合法で売買する奴らは、はは！ め、珍しくないかな……ははは！ きつと、そう言う奴らから買ったんだろう、あははははっ!!」

本来ここにいる筈の無い魔物達。おそらく慣れない環境に体調を崩したのも居た筈だ。盗賊達にとって、このラウンドウルフは使い捨ての道具と変わらなかつたのだから。

そんなラウンドウルフの境遇に団長もシャルロットも同情し、それが商売として裏で成り立つ事に怒りを感じていた。

「んで、その盗賊共の抵抗も微々たるものか」

「こいつら自体は戦いはからつきしだつたぜ、オイラ達相手にナイフ一本向けやしねえ」
「まつたく、気概の一つでも見せれば良いものを、本当に逃げ惑うばかりじゃつた」

盗賊達は紐でグルグル巻きにされ、何人かはコロツサスの巨大な手で纏めて握られ観念した様子で項垂れていた。確かに情けなさはあるが（相手がお前等じゃなあ）と団長は主にB・ビーを見て思った。

しかし拘束されている盗賊達を見て団長はある事に気が付く。

「ちよい待ち、リーダーの男がいねえぞ？」

あの弱腰の盗賊団のリーダーの姿が無かつた。紐で縛られた盗賊とコロツサスに握られている盗賊達の中にいないのである。

まさか混乱に乗じて上手く逃げたのかと思ひ、皆が慌てて辺りを見渡す。

「あつ!？」

そんな時クロエが驚いた声を上げた。皆が彼女の方を向くと、クロエは一体のラウンドウルフを指差していた。そしてその巨体の影からは、人の頭が少しはみ出していた。

「あ、しまっ!?!」

案の定それはあのリーダーの男だった。戦いが始まって直ぐ、身を低くして倒れたラウンドウルフの身体に隠れて少しづつ移動して逃げていたのだ。

「に、逃げっ!」

「こりや、待てい!」

「ひえっ!?!」

男は慌てて立ち上がり駆け出そうとしたが、一飛びしてガルーダが男の前に降り立つとまた慌てて踵を返した。

「イイカゲン（・・ω・）アキラメナサイ!」

「わああっ!?!」

しかし続けてコロツサスが現れ徐々に退路を塞がれていった。更にB・ビィ、カリオストロに団長が集まる。

「おうおう、往生際の悪い野郎だぜ」

「雑魚の癖にオレ様に手間掛けさせんじゃねーよ」

「ひえっ!?!」

「ねえ君達、俺達が悪党みたいな台詞吐くのやめてくれない?」

拳をポキポキと鳴らす謎生物と、錬金術を操る天才美少女錬金術師。その二人に凄まじく、男は悲鳴を上げた。

「う、うう……うわあっ!!」

「む、おい!?!」

そしていよいよ自棄になった男は急に逃げるでも無く、無防備なクロエへと飛びかかった。

「え!?!」

「こ、来い小娘め!」

彼はクロエを引き寄せて首に手を回し、彼女を盾にした。もう片方の手にはナイフを取り出しクロエに向けた。

「きゃあ!?!」

「あ、お前この野郎!?!」

「く、来るなよ! き、来たらこいつを刺すからな!?! ほんとだぞ!?!」

男なりに凄んで見せているようだが、しかし腰は引けナイフを持つ手も震えている。その様子から、男自身まともに人間を相手に喧嘩一つしたことも無いとよくわかる。

今更人質を取って逃げられるはずも無い、ただ意味も無い行動だ。団長達が初めて村で

出会った時、多少なりでも傭兵団のリーダーを演じていた時の堂々とした様子は微塵も無くなっていた。

「おいコラ！ これ以上その子を巻き込むんじゃないよ」

「う、うるさい！ 近づくなよ、こここ、こいつがどうなつても知らないからな！」

「はあ……」

自棄になり錯乱して男に対し団長も怒りを通り越して呆れるしかない。

しかし人質にされたクロエを早く助けねばならない。尤も人質を取ったのが先程のエルーンの男が相手であれば方法を考える必要があったが、相手はナイフ一本まともに扱えない男。団長であれば彼がナイフをクロエに突きつけるよりも早く、その手からナイフを払い飛ばしクロエを助ける事が出来るだろう。

しかしこの時。盗賊リーダーの男も、そして団長も予想していなかった事があった。

「……なんてゆーかさあ、マジいい加減にしておっさん」

クロエが怯えた様子も無く、突然喋り出したのだ。その事に男も団長もギョツと目を見開いた。

「は？ な、何だよ行き成り？」

「クロエ人質にしてさあ、今更どうする気つてゆー感じじゃん？ つか、まだ逃げられる気マンマンなん？ いやないから、普通におわつてんじやん。無理ゲーつしよ、見てな

「かったんおにーさん達の強さ？ ガチじゃんアレ」

「な、何言いい出してるんだよー！」

「っーかあく、一人だけそそくさ逃げるとか、マジありえないから！ こんな奴がママ達

困らせてたとか、超ぶざげんなって感じっ!!ゞ(、凸*)ノ彡」

「お、おい動くなつて！」

「ちよちよ、クロエちゃん危ないから!？」

クロエは徐々に大きく怒気を含んだ声をあげた。男も驚いたが、団長も驚き慌てて彼女を止めようとしたのだが。

「えいっ!!」

「あぎっ!？」

なんと今度は思い切り男の爪先を踵で思い切り踏みつけたのだ。クロエの靴はローファーであり、ハイヒールのようにその踵は特別尖っては無いものの、体重全てを乗せて急に踏みつけられた男は悲鳴を上げてナイフを手から落とした。

「魔物はふっーに怖いけどお、あんたはただキモイだけのおっさんだから！ 怖くも何ともないし(？凸)!! っか、いつまで手え伸ばしてんっつっのっ!？」

「げぶっ!？」

クロエは肘で男の腹部を強く打ち、そのまま押し出すとクルリと身を翻し男と向き

合った。そしてそのまま、男の顎に狙いを定め――。

「てえいつ!!」

「ぶっぎやあつ!?!」

実に見事な右のハイキック。顎に直撃したその一撃は、一発で男の脳天を揺らし一瞬で意識を奪った。糸の切れた人形のようにその場に倒れる男。クロエは「どーだ、見たかつ!」と胸を張った。

『成敗っ!』、なくんつつてねっ! こーゆーのゆつてみたかつたんだよねー! (人、3

、*) クロエ今超ヒーロームーブしてるんじゃないこれっ!」

「……お見事!」

あまりに見事な一撃に、思わず団長は声を上げる。

「にひっ! イェーイってねッ! (σ、∇、) σ♪」

その声に応え、躍然としてクロエはキメ顔で団長達に笑顔を向けた。

三 依頼達成

一つの村を襲った盗賊団による事件は、そいつらを倒す事で無事に解決する事ができた。

盗賊団のメンバーは一人残らず捕縛。盗賊達に利用されていたラウンドウルフも全て捕獲し、そして全ての騒動を起す要因と成った魔好華も臭いが漏れないよう念入りに箱へと入れて封をした。

俺達が盗賊達の拠点から盗賊団を縛り上げて戻って来たのを村の人達が見た時は酷く驚いていたが、今回の真相を話すと更に驚いていた。

盗賊団の奴等にはその場で村の皆に頭を下げさせた。元々が魔物頼りの弱気な男達だったため、彼等はすっかり反省した様子で素直に頭を下げ村の皆に謝罪した。

中でもあのリーダーの男であるが、以外にも一番反省の色が濃かった。彼はさめざめと泣きながら「こんな事していると星晶戦隊が来て酷い目に遭うって分かったよ。あんな女の子にも負けて、もう盗賊は懲り懲りだ……」との事。この様子ならもう悪事に手を染める事は無いだろう。しっかりと罪を償ってもらいたい。

また俺達はそのまま村長の御厚意で一日村に泊めて貰う事となった。

これが非常に助かった。なんせ行きに時間がかかった事と、単なる魔物討伐依頼では無くなったので、予定より時間がかかり結局日も暮れてしまった。そんな中でラウンドウルフと盗賊を全てセレストのいる場所まで運ぶのは大変難しい。そんな時に村長の方から泊まっていきなさいと言われたのだ。

それと、ある意味今回の主役であるクロエちゃんであるが、今回の事ではとても驚か

された。あの盗賊団のリーダーを一撃でノックアウトした蹴りは実に見事であり素直に感心した。

だがしかし、村に残るように言ったのに黙って後をつけて来た事に追求してみたところ「お願い！ ママにはオフレコで！（◇人へ；）」と言いつ出した。

何でも俺達の戦いに興味を持ち隠れて付いてきたらしい。当然誰にも言わず一人勝手にである。そんな事を聞いてはオフレコなどと言う訳にはいかない。

幸い今回の事で彼女に大きな怪我は無い。しかし運が悪ければ怪我では済まない状況だった。確かに男一人を倒した事にも見事な蹴りと感心こそしたが、それとこれとは話が別である。今後こういう事が無いようにしっかりと叱るべき人間が叱るべきなのだ。

何よりも方が一俺達が来るのが遅れ、あの盗賊団が予定通り仕事を働いていたらどうなつたろうか。きつと今回の様にクロエちゃんは“魔物退治に向かう傭兵団”の後を付けただろう。それはあまりに危険な行為だ。

「ごめんなさあーいっ!!。。。(。・皿。)。。」

そんな声が彼女の家の前を通ると聞こえてくる。家の中ではクロエちゃんが母親にしかたま怒られている事だろう。本人にしたらたまったものじゃないだろうが、その声を聞いて思わず失笑してしまう。多少気の毒に思えなくも無いが、しかし怒られるべき

事をした以上そのお叱りを受けるべきである。

そして俺はと言えば一人村の裏手に並んでいるラウンドウルフの檻の前に来た。全部で四つの中型の檻。その中でラウンドウルフは疲れ果てて眠りに付いている。俺の存在に気が付いてはいるだろうが、檻の目の前まで近づいても気にした様子はない。

盗賊団のメンバーは全員で11名。それに対してラウンドウルフは12頭。よくもまあ素人だけで大型のラウンドウルフを12頭も飼育しようと思つたものである。実際まともな飼育なんて出来てなかつたので、何頭かのラウンドウルフは慣れない環境で振り回された所為か酷く衰弱していた。巨体の割に無力化にそう手間取らなかつたのはこのためだった。逆のそのおかげでシャルロットさん達が本気で倒す前にスタミナが切れ無事だったとも言える。

檻の中にはクロエちゃんを襲つたあの子供も居た。他の巨体のラウンドウルフと並んでやつと子供に見える。檻に入れる際群れの中に親が居たらしく、ある一頭の傍から離れなくなり今は身を寄せて眠りに付いている。

体を休め眠るには狭い檻だ。一つの檻に詰められた姿を見ると悪いと思つてしまうが、村に在る間彼らを外に出すわけにはいかない。まだしばらくはこの狭い檻にいてもらわねばならない。

「あッ！ 居た！」

「ん?」

眠るラウンドウルフ達を眺めていると、後ろから声をかけられた。振り向けば涙目のクロエちゃんがいた。

「おやおや、かなり絞られた様子だ」

「ほんとそー! もうママ激おこ、超怖かった! つか、おにーさん酷くない!? ふつーにママにチクツたし!」

「当たり前でしょうが、君何したかわかってる? 冗談じゃなくて怪我じゃ済まない所だったんだからね」

「あう!? そ、それ言われると、そりゃクロエも悪かったけどおゝ……(人、)、」

ブーブー言いつつクロエちゃんは俺の隣に立った。この子もまあ悪い事をしたと分かっていようだ。反省してるなら俺から言う事は特に無い。

「んで、何してたの?」

「別に? ただこいつ等見てた」

「ふゝん?」

ぐつすりと眠るラウンドウルフ。魔物を怖がっていたクロエちゃんだが、眠りについていいる状態で見ると特に怖がる様子は無い。しゃがみ込んで眠るラウンドウルフの表情を観察していた。

「あ、寝てるとけっこーカワイイかも」

「でしょ」

「……この子達つてさあ、この後どーなるん？」

「まあ取り合えず盗賊達と一緒に秩序の騎空団引き渡す事になるね。俺達に出来るのはそこまで」

「そーなんだ。なんか、かわいそーだよ。あの悪い人達が連れて来たんでしょ？」

「そうだね。悪い人が悪い人から買ったんだ」

リーダーの男にラウンドウルフをどうやって手に入れたか聞いたが、案の定魔物の密売人から買ったと言った。特に珍しい種を扱う商人だったらしく、強くて丈夫と言って売られていたノース・ヴァスト産のラウンドウルフを言われるがままに購入したらしい。

「元の所帰れるとーね」

そのクロエちゃんの言葉はラウンドウルフへ向けられていた。

俺達に出来る事は限られている。クロエちゃんにも言ったように、このまま盗賊達を秩序の騎空団に引き渡す際このラウンドウルフ達も任す他無いだろう。ある意味で証拠品でもある。上手く彼らが動いてくれれば、このラウンドウルフ達を元の住処に戻してくれるかもしれない。今はそれを期待したい。

「……おにーさん達ってさ、今日みたいな事ってふっーなん？」

「うん？ 普通って言うのは……」

「だからあ、悪いひとら懲らしめるの。にちじよーさは……なんだっけ？」

「……日常茶飯事？」

「そーそれ！ エブリデイ的な感じ？」

エブリデイと来たか。しかし「懲らしめる」、まあそう言う仕事も結構しているか。毎日では無いが盗賊相手の戦いも初めてではない。帝国も悪い奴と言えそうだし、何時ぞやの錬金術師とのいざこざも似たようなものか。

「そうだね。ああ言った手合いの相手は初めてでは無いな」

「おおく!? (*。エ。*) マジそうなんだっ！」

俺が彼女の問いに肯定すると、途端に彼女は目を輝かせた。その輝きはプリンセスに憧れる少女とは少し違い、まるで少年が騎士に憧れるかのような輝きを放っている。

「なんだ、そう言う話興味あるの？」

「あるある！ 超興味あるからね！ 聞かせて聞かせて！」

「聞かせてって言われると、さて何から話そうか……うーむ、期待されるような話は出来ないかもだけど」

「なんでもOKだって！ あ、けどけど出来れば今日みたいな感じの話でよろしく」

「あー……じゃあ、別の島を襲ってた盗賊団倒した奴とかで」

「そー！ そーゆうやつツ！」

アウギユステを発つてから少し経った頃に捕らえた大規模な盗賊団の話を始めると、彼女は興奮して俺の話に聞き入った。

「数は今回より遥かに多い規模、奴らは村の人間を面白半分で脅して金品食料を奪うような奴等だった」

「えー!? (？、ω)？ なにそれヤバ、めつちや悪い奴じゃん！」

「まったくだよ、何が面白いんだかね。何より面倒だったのはアイツらドラゴンを従えていたんだよね」

「ドラゴンツ!? それ激ヤバっしょ!? ドラゴンって超デカイ空飛ぶってゆートカゲでしょ? クロエ本で知ってるし、あの火いー吹くってゆーやつじゃん！」

「そう、その火吹くやつ。まあ倒したけどね」

「倒したんだっ!? え、リアルに? それリアル? ドラゴンとか倒せるもんなん?」

いや、ドラゴン倒せるとかそれもうガチじゃんおにーさん！」

リアルとかガチとかの意味する所がよくわからないが、まあ話はお気に召したようので何よりだ。

その後もこの場には居ない仲間との出会いや、星晶獣との戦いなども少し話すと始終

クロエちゃんは俺の話に熱中していた。聞き上手と言うか、単純にここまで楽しんでもらえると俺もついつい色々話してしまおう。

「いーなあ、いーなあ（〃。3。〃）クロエも海見たいっ！」

「いい所だったよ。全然ゆつくり出来なかったけど。何時かちゃんとバカンスに行きたいよ」

俺が結局おじやんとなったアウギユステの事に思いを馳せると、クロエちゃんは「ならクロエも連れてってよ！」と身を乗り出して言った。「超行きたい、ギユステバカン スッ！」

「ははは、まあ機会があれば勿論。中々難しいけどね」

「やつぱさそう？ いや実際クロエも島出るのもキツイ感あるからね。他の島とかもう未知じゃんね」

「あー……わかるなあ。俺の島も結構田舎だったし」

「あつ！ つつても別にこの村嫌いみたいんじゃないからね？ ふっーに好きだから」
「勿論分かってるよ」

「そもそも人もあんま来ないしね。外の人とかおにーさんで久々に見たし……あつ！」
突然クロエちゃんは何かに気が付いたようで、手をポンと叩いた。

「そーじゃん、これピツカン来たっ（・▽！）☆」

「ピツカン？」

「そー！ おにーさんクロエの事仲間にしてよっ！」

「……………え？」

この流れ、この展開はもはや……………。

「突然、その……………クロエちゃんどうしたんだい？」

「だーかーらー（*≧≦）おにーさんって、きくうだん？ のだんちよーなんでしょ？」

んで、そのきくうだんに入ればクロエも色んな所に行ける的な？」

「ちよ、ちよちよちよ、ちよつと待ったクロエちゃん」

突然だ。まさかこの流れでこんな事言い出すとは思わなかった。

「あのー……………その、だね？ 勘違いしてるかもしれないけど、騎空団は別に物見遊山の旅行団体じゃないからさ」

「もち、わかってるってつば。今日みたいに悪い人やっついたり、魔物倒したりするんでしょっ？」

「そう。つまり危ないわけ。わかってるなら」

「まあー聞いてってば。流石にクロエもそこまでバカじゃないしっ！ 旅行気分で行こうなんて思わないって」

「だったら何で……………」

「あんね、今日おにーさんの事みて思ったの。おにーさんってば、いろいろレベチだわ（。D。）b マジで凄いつて思った。ガチでヒーローじゃんって！」

ヒーロー、そんな風に言われるのは柄じゃない気もする。

「クロエね、そー言うのに憧れてたんだ！（*≧ω≦）んで、おにーさんの活躍見て、クロエおにーさんみたいに成りたいって思ったのっ!!」

俺みたいに……は成らない方が良いと思うけどな。大変だから。

「……ヒーローねえ」

「そっ！（・・V・・）おにーさんについてって魔物とかと戦うじゃん？ したらクロエも強くなるじゃん？ したら魔物とか来てもママ達怯えずにすむじゃん？ つまりクロエがヒーローになれば万事オーケー的なのっ!!」

成るほどクロエちゃんの言い分は理解できた。確かにただの物見遊山で来る心算ではないようだ。むしろ彼女のヒーローへの憧れ、村の皆を助けたいと言う思いは確かに本物だと感じた。喋り方の所為か軽く聞こえるが、彼女の言葉には確かに強い意志があった。

しかし「それじゃあ来なよ」と簡単に言えるわけは無い。騎空団の旅は険しいのだ。彼女の様な一般人を簡単に入団させるわけには――。

（ルナールさんも一般人だよなあ……）

既に団員にただの絵師が居る事を思い出し頭を抱えた。いやしかし、最近セレストの加護のおかげか、絵を具現化する魔術的な戦闘も慣れて来ているし最早ただの絵師と言うには無理があるか。

(……考えたらカルティラさんもただの商人だった)

そう言えばまだ一般人が居た事を思い出した。まあ彼女もハリセンで魔物しばき倒すので、はたしてただの商人と言っていいかは微妙だが。何なんだろうちの騎空団。

いやいや、それよりも今はクロエちゃんだ。

「だめだめ、急な思いつきで連れてはいけないよ」

「えー(・ε・~~?~~?) ケチーッ！」

多分この場にB・ビイとか居たら「何時も思いつきで仲間増えてるじゃねえか」と指摘されるのだろう。だが今奴等は居ない、断るなら今の内だ。どっか島行く度無計画にほいほい仲間増やしちやいけないのだ。

「君散々お母さんに怒られたでしょう？ 騎空団の仕事は危ないの、危険なの。急に戦術を知らない子を無責任に連れてけません」

「戦えないママ達のために戦う方法勉強するんじゃない」

くそう、立派な事言いやがる。

「……いや、君のように若い子を危ない旅には」

「そーゆーけど、おにーさんクロエと対して歳違わないっしょ？　うち16」

「……18です」

「ほら」

そして俺の幼馴染の破壊神は17である。さして違いが無い。

「……お母さんに相談しなさい。許可出たら連れてつてあげる」

「そマツ!？」

「そマ……?　うん、まあとにかく親御さんには話しなさい。そうじゃないと連れてはいけません」

「オツケ、言質もーらいっ!!ゞ(≧▽≦*)ノ」　後でウソとか駄目だかんねっ!」

「はいはい」

「約束だからっ!　ウソだったら、ハリセンボン飲ますからねえー!」

クロエちゃんはそのまま家へと帰っていった。

咄嗟に親に言えと提案したが、今日あんな事があつたばかりだ。まず親は許可しないだろう。

若さの行動力は凄いと思いつながら、クロエちゃんに言われた様に自分もまだ十代である事を思い出し、少し落ち込みながら仲間の下に戻っていった。



四 親「おけまる」

「ママからオツケーでたあーっ!!ゞ (*、∨、*)ノ♪」

「——っ!？」

「ジミー殿!？」

翌朝、ラウンドウルフと盗賊達の護送準備をしていると、クロエちゃんがテンションマックスの笑顔で駆け寄ってきた。

予想だにしない結果に思わずその場でずっこけてしまい、シャルロットさんが驚いていた。

「え、許可でたって……マジで?」

「マジだつてばっ! ほら、もう準備も万端だからっ☆」

クロエちゃんは荷物の詰まった旅行鞆を見せる。明らかに数日の旅行で済まない大きさの鞆を見て、いよいよ本当だとわかり冷や汗を流す。

「あはははっ!! じゅ、準備は万端のようだなっ!」

「あーらら、相棒いい加減な約束したな」

「だ、だつてまさか許可出るなんて……」

「考えが甘いんだよ。お前の場合仲間になる話が出た時点で決定事項みたいなもんじゃ

ねーか」

おっさんの言葉に言い返せない自分がいる。

「ほー、お主新しい仲間になるのか？」

「そそ！ ガツちゃんも、よろぴく〜」

「クピポツ!? ガ、ガツちゃんってわらわの事かつ!?」

「そだよ、名前ガルーダだからガツちゃん！（*、▽、*）カワイイつしよ？」

「も、もうちよつと何とかならぬか？」

「え？ いいじゃんガツちゃん。カワイイって」

「……そうかのう？」

「そうだって！」

「そ、そうかのう！」

満更でもない表情ののじゃ子。俺が言えた義理ではないがちよろい星晶獣だ。

「まあ元ネタもフワフワ飛んでるし良いんじやねーか？ 鉄も食えれば完璧だ」

「何の事言ってるんだB・ビー？」

「気にすんな、別の特異点の事だ」

コイツ隙あらば謎の特異点の影響を受けた発言するな。そもそも特異点とかよく知らないが。

「ナカマガフエルノハ（ω、ω） イイコトダヨ」

「わーい、コロ助もサンキュッ！」

「コロ助……」

「一気にコロツケが好きそうになったな」

「ナリー（ω・ω・ω）」

ジータ程では無いが、その独特なネーミングセンスと澆刺さに気押される。

「……親御さんよく許可出したね」

「それな。いや〜クロエもお、あの後正直これオーケー出るとか無理くさくねっ？

って思ったけどお、クロエがママ達護れるぐらい強く成るって頑張って話したらあ、

最後いいよって言ってくれたわけ！（@・ω・ω）ノ」

「素晴らしい志ですクロエ殿。自分も騎士を志した時はまだ若く、皆を護りたいと言う

クロエ殿のお気持ち大変よくわかるであります」

「あは！ あんがと、シャルるん！（人・3・*）」

「シヤ、シャルるんっ！ ク、クロエ殿の言葉は本当に独特であります」

幼い日に騎士を志したシャルロットさんには、皆を護れるヒーローに成ろうとするク

ロエちゃんの気持ちはよくわかるようだ。

この場で彼女が嘘を言えるわけは無い。今は姿が見えないが、後できつとこの子の親

も来るはずだろう。つまり彼女の熱意が通じたと言う事だ。こうなってしまうと俺はもう何も言えない。

「改めて言うけど、大変だよ?」

「んもおくわかつてるってばっ! クロエちよおく頑張るからっp (*。v。、*) q
」

「……超頑張るの?」

「超ちよおく頑張るっ!」

「むう、超々頑張ると来たか……」

考えてみると、ある意味で我が騎空団の中でも仲間になる理由が一番真つ当な部類な気がする。自分だけじゃなくて、誰かのために強くなるうとする。

拳で語り合うだの、酔っ払いの押し付けだの、押しかけ錬金術師だの……。例を挙げれば挙げるほどクロエちゃんの良さが際立っている。比較対象が可笑しいのはわかっているが、実際の所クロエちゃんは言葉遣いが独特と言うだけで本当に良い子だ。だからこそ俺は不用意に危険が伴う騎空団に連れて行く事を渋ったわけであるが……。

「……わかった、来なさいクロエちゃん」

「おっ! ついにおにーさんもオツケーくれるっ?」

「ただし、旅の中でこれ以上は危ないと思ったら家に帰します」

「だいいじよぶっ！ そうならない様にいく、クロエおにーさん鍛えてもらおうもくんっ！

（○、▽、○）v」

「俺が鍛えるんかい」

「せいじやママ呼んで来るねえ☆ あ、荷物ここ置いとくけど、見ちや駄目だかんねえ
s（、・▽・）σ」

「見ない見ない、挨拶したいからお母さん呼んできなさい」

「はあ〜い」

家へと母親を呼びに戻るクロエちゃん。その背中を見ながら溜息が出る。

「16かあ……俺16の時何してたっけ……」

「何中年男性みたいな眩きしてんだよ」

クロエちゃんの若さを感じていると、不意におっさんに言われてドキリとする。

「そう聞こえた？」

「雰囲気相まって余計にな」

「ええ、やだなあ」

「で？ アイツと対して歳も違わないお前が懐かしんだ16の時は何してたんだ？」

「……」

一二年前、俺が16でジータが15か。何をしてたかと言えばザンクティンゼルでジータ

タの暴走を抑え、ビイとお互いを励ましあい、ジータの暴走を抑え、ビイとお互いを励ましあい、ジータの暴走を抑え、ビイとお互いを励ましあい——。

「ひええええっ!!」

「16のお前に何があつたんだよ……」

別に封印したい記憶と言うわけじゃない、ただ大変だったんだよ。その哀れむような表情は止めてくれ。

「おっさんもジータに会えばわかるさ……」

「……なんか身震いしてきた」

千年以上を生きる伝説の天才錬金術師に話を聞かせただけで身震いをさせる我が幼馴染。今は流石と思っておこう。

■ 五幕の内

「だからさ、ここをここにあってこうして、んでもって更にこの部分を繋げは更に船内の居住性が高がるし拡張作業が容易になると思うわけよ」

「それはいいね親方さん。それならここをこうして、あれして、もつとこーして更にあれすると……」

「おお！ そうすりやデッドスペースが無くなるなっ！」

「しかしこれだけ拡張すると重量が上がって今までと同じ航行能力を持たせるなら、推力がもつと必要になるよ」

「……なら動力強くしてプロペラ増やすか」

「それだね」

「それだね、ちやうわっ!!」

ガロンゾの大きな造船場内でハリセンの大きな音が響いた。

「あいたた……や、やあカルテイラさん。突然どうしたんだい？」

「どうしたもこうしたも無いわっ！」

ハリセンを手にしたガロンゾ待機組臨時リーダーカルテイラ。彼女は厚紙製のハリセンを手に持ってノアと船大工の親方を睨み付けていた。彼女は厚紙製のハリ

「ユグドラシルがぎょうさんええ木材作れるって知ってから、どーも変な熱の入り方し
とる思っとなつたけど、なんやこの設計図は!？」

バンツと机を叩きながらカルテイラはそこにある一枚の騎空艇設計図を指した。

そこには基礎となるエンゼラの姿が元々書かれていた——が、何度も書き加えられ今
そこあるのは多くのパーツが組み合わさり、なにやら物々しい姿となりつつあるエンゼ
ラの未来図が描かれていた。

「どー考えても大袈裟や！　なんやこのプロペラ大小含め十五基つて!?　ここの動力もなんで戦艦用動力とか書いてあるんや!？」

「い、いやあ……なんか盛り上がっちゃって」

「盛れる要素は盛ってみようかって話になってから……ねえ?」

「ねえ?　じゃないわ、アホか!?　それとあれえ!!」

カルティラは何時の間にか工場内に運ばれ、明らかにエンゼラに取り付けようとしている巨大で歪なパーツを指差した。

「あれはなんや!?　設計図にも書いてあるけども、何でエンゼラに角生えとんねん!？」

「まてカルティラ、それは角じゃねえ!」

「それは『騎空艇装着型浮遊障害物粉碎超大型回転衝角』だよ」

「……なんて?」

「『騎空艇装着型浮遊障害物粉碎超大型回転衝角』だよ」

「かいてん、しよーかく……?」

「その通り!　本来坑道なんかの岩なんかを粉碎掘削する掘削機械に搭載される回転刃だが、それを騎空艇用に大型化し船の衝角に当たる部分に換装、小型から中型の岩石等の浮遊障害物を押しつけ粉碎し突き進む……つまりドリルだっ!」

「元は障害物の多いダイダロイトベルト航行用に作られたものだけど、まあ使い道それ

以外無い上に船体のバランスも悪くなるし、そもそも装着できる騎空艇少ないからって結局殆ど使われず、その内の一つが親方の倉庫で埃被つてたらしくて」

「んで試しに持ってきた」

「ド阿呆ツ!!」

「あで!?!」

「あいたつ!?!」

怒鳴りながらももう一発、つつカルテイラはノアと親方にハリセンを振り下ろした。

「あれまあ、ほんとこれ凄い船になってるなあ」

「これももう武器積んだら殆ど戦艦じゃないのよ」

「それより性能はともかく、これほど詰め込むと色々と無理が出てくるような……」

「クリュプトンに似てるから、このドリルにはちよつと親近感わくけどね私」

「だとしても盛り過ぎね。まるつきり子供の発想じゃないの」

カルテイラについて来た待機組、マリーとカルバが設計図を呆れた様子で見っていた。

ユーリもその内容に呆れ、ルナールもまた呆れる。呆れまくりだった。

唯一フィラソピラはドリルに興味を示していたが、いかんせんそれは巨大すぎるため

あまり理解を得られない。

『まずどう考えても予算オーバーだぞ』

ここで水槽の世話を終えついできたリヴァイアサンも呆れながら話す。

もしこの設計図どおりのエンゼラが改修され組み上げられた場合、明らかに団長達の出せる予算を大きくオーバーする事になる。この場に団長がいたら声にならない悲鳴を上げただろう。

「いや勿論最終的には予算内に収める。これは試行錯誤の結果で描いた図であつて、あくまで『あつたらいいな』の状態だ。実際にやるわけじゃねえ」

「それにエンゼラの役割を考えたらこれ意味無いしね。ドリルとか普通にいらぬし」
「なら持つてくんなっ!!」

「そこは浪漫だ」

「うんうん」

「やかましいわ!!」

ようは親方はドリルをつけてみたかったのだ。

後々分かる事であるが、そもそもこの『騎空艇装着型浮遊障害物粉碎超大型回転衝角』の設計に関わつた幾人かの一人がこの親方であり、そして彼は普段も隙あらば騎空艇にドリルを装着させようと考える人であつた。

「けど真面目な話プロペラの追加はするよ。2、3基つて所かな。元の予定から追加案はあつたし、予想よりユグドラシルの頑張りで材料費抑えられるからね」

ハリセンに叩かれた頭を摩りながら、ノアは工場の外に作られた臨時の作業場で材料となる木材を生み出し続けるユグドラシルを見た。

「にやー! がんばれがんばれユグユグ〜!」

「——!」

「フアイトです! 自分とことん応援するです!」

「——!」

「ミンミン、ミミンミンツ!!」

「——!——!」

両手を掲げてモリモリ木材となる木を生やすユグドラシル、そしてその周りではラムレッダとブリジールがピョコピョコ跳ねながら応援し、ユグドラシルの頭上ではミスラ(省エネ)がクルクル二人の真似をして応援している。まるで豊穣を願う儀式のようだ。団長が居たらきつとブリジールとミスラを見て、クラリとその愛らしさにやられていただろう。ラムレッダはただの千鳥足にしか見えないのが悲しいところであった。

生み出されていく木々は作業員の手で伐採され、次々と加工場へと運ばれ直ぐに上質な木材となっていく。

良く寝て美味しいご飯を食べれば絶好調だと言うユグドラシルは、自分の力の見せ所だと張り切っていた。

「正直な話ありや想像以上だ。あんなペースでしかも自由な形で上質な木を作れるんだからな。明日中には必要な木材がそろうだろうし、早きや加工も済んじゃうだろうよ。そうなりや船体の組み立て自体も予定より大幅に短縮できるのは間違いないねえ」

「そりや結構やね。けど余計なもんはつけんといてや、特にドリル」

「けどかつこいいだろドリル」

「エンゼラには要らんつちゅーとるんや！ 倉庫戻しときつ!!」

「わーったよ。やれやれ、お前昔よりおっかなくなつたなあ」

「うっさいわー！」

過去の話をみられると恥ずかしいカルティラ。

「これ大丈夫なんだろうか……」

『既に予算内で収める契約はしている。ミスラが居る以上あの者達がどのような改修をしたとしても予算の心配は……まあ大丈夫であろうが……』

「果たしてエンゼラが原形とどめるのかしらね……」

「団長は居なくてある意味良かったのかもしれないねえ」

『居たら恐らく大丈夫と分かっていても諸々の事で胃をやられていたかもしれない』

「まあここに居なきや居ないで今も何処かで胃を痛くして居るでしょうねえ……」

「団長殿……御勞しい……」

案外少年の心を持っていた親方の仕事ぶりに冷や汗を流し、この場に居ぬ団長を哀れむ。

「……これ今頼んだら船内にスリリングなトラップエリアとか作れるかな」

「絶対止めなさい」

「ランダム落とし穴とか」

「止めなさい」

そして不穏な事を呟くカルバと真顔で止めるマリーであった。

ハピネスチャージの“瞬間” 前編

一 爛漫ギャルがやってきた

「てなわけで……新しく仲間になったクロエちゃんです」

「どもどもクロエでえくす＋。（＊、▽、）b。＋。 とりま、今日からこのきくうだんのメイトなんでえっ！ せえくいっばいがんばりまつ！ なわけで、よろによろりんっ☆」

コロッサスとB・ビー達が盗賊団とラウンドウルフの檻を運び込む中、俺はセレストの甲板に集まった待機組を前に新しい仲間となったクロエちゃんを紹介した。

仲間を増やして帰ってきた事と、その極めて特異なクロエちゃんのキャラクターを前にしてコーデリアさん達はしばし啞然としていた。

「あれ、なんかテンサゲ気味？ つかみ外した？ もっとテンアゲな挨拶した方が良かった？」

「いやただ面食らってるだけだから」

騎士でも戦士でも魔法使いでも、まして星晶獣でも無い一般人の少女である。先程までただの村人であった真正正銘ただの少女である。そりゃそんな娘が仲間になったとなれば誰だつてどう反応すればいいかわからないだろう。

「オマエナア……」

「何があればそんな小娘仲間にするのよ」

ティアマトとメドウ子が心底呆れた様子で俺を見る。やめろその視線、突き刺さるから。あとお前だつて小娘だぞメドウ子。

「え……クロエちゃんは我々騎空士の様に強くなり、心身共に鍛え立派なヒーローに成ると言う大変すばらしい志を持っており」

「デ、押しカケラレタノカ？」

ティアマトがヌツと俺に迫り追及。

「……お母さんと村の人達を護りたいと言う点も考慮して」

「んで、押しかけられたのね？」

メドウ子がヌツと俺に迫り追及。

「あーもうっ！ わかっているよ、そうだよっ！ 言うな、色々あったんだよっ！ コラ、腹突くなお前等っ!!」

「オラオラ」

「うりやうりや」

俺へ対しての批難、と言うより揶揄いの意味を込めてオラオラとティアマトとメドウ子が俺の腹を突いて来た。こそばゆいのでやめなさいお前達。

ともかく事の経緯も説明する。まあ盗賊倒してたらそれが切欠でヒーローに憧れ、母を安心させたいため、村の平和を護るため、自身を成長させるために騎空団に入りたいと言う少女が現れたと言う事である。

旅への同行も許可が出たわけだが、クロエちゃんの母曰く「娘は好奇心が高すぎて、今回の事といい不安があるが、ほっておいても飛び出しそうで、どうせ旅に出るなら団長さん達のような騎空団に任せた方がいっそ安心」と言う事で許可が下りた。

とにかく色々あり、そのあまりに真つ当な理由にまたも皆面を食らった。キャラクタールのギヤツプだなあ。

「ブリジールと気が合いそうだね」

「自分もそう感じました。きつと良き友に成ってくれると思うであります」

それは分かりますよコーデリアさん。なんとと言うか、根っこが似てる気がしますこの子とブリジールさんは。

「つかこの艇ヤバくね、(。▽。;)　こんなん初見ビビるわ、わら」

クロエちゃんはセレストを見て最初かなり驚いていた。どう言う騎空艇を想像して

いたかは不明だが、少なくともこんな幽霊船とは思いつかなかろう。

「この艇は臨時、本来使用してる騎空艇は修理中でね」

「へえ、そうなん？」

「セレストつて言うんだ。セレスト、挨拶しな」

「へ？」

「は、はあ、い……」

「うひゃああつ?!?! (一) (二) (三) 。 オ、オバケエ!?!」

俺がセレストに挨拶を頼むとクロエちゃんは一瞬何の事か理解できていなかった。だが直ぐ目の前で黒い霧が現れたかと思うと、そこに突如黒い喪服のゴスロリチックな女性が現れ驚き声を上げた。

「オ、オバケじゃないよう……」

「お、おにーさんこの人わ……?」

「こいつがセレスト。幽霊船の星晶獣なんだが……お前騎空艇のまま人型出せたの？」

「う、うん……団長達待つてる間暇で練習したら、出来た……ふへへ」

「はえー器用だねえ」

「あ、あくまで分身つてだけで、能力使えないし戦力にはならないけど……け、けどこ

れで艇の中でも、遊べるよ……ふひ」

確かに前自分の船内で俺達がわちやわちやしてるの見てるだけで暇そうだったからな。彼女なりに今の艇のままでも俺達と行動できるよう色々模索して頑張ったようだ。

「はえーすつごい。星晶獣ってなんでも有りなんだ……。(。ロ。;)」

「そうだけど……う、うちのマグナシックスが飛び切り可笑しいだけとも言……ふへ」
「そゆこと言わない」

俺が好きで色物中の色物ばかり仲間にしてるみたいになるだろうが。

「あと、さりげメンバーのレベル高いよね、わら。なに、おにーさん面食いなん？ クロエもおめがねに適った的なやつ？」

「んなわけないでしょう」

入団判断基準顔ってなんだよ。どこ目指してる騎空団だそれは。

「それとクロエちゃんのお母様が旅の途中食べてくれとお弁当を作ってくださいった。後で配るから、各々クロエちゃんと島のお母様に感謝していただくように」

「そう言うのは早く言いなさいよ！」

「丁度腹が減ったところだぜ！」

クロエ母お手製弁当の入るバスケットを見せるとハラペコメドウ子とフェザー君が駆け寄ってきた。食欲に正直な奴等である。

「ええい、食いもんと聞いた途端群がるなお前ら!! ちゃんと人数分在るから、いいから散れ! 食うのは出発してからだ!」

「ママのご飯超マイウくだからっ(▽、艸)♡ 味わって食べてちよっ!」

そう言ううとメドウ子は俺に向かって「ケチっ!」と悪態をつくが「うるせい」と返すと「シャー!」と威嚇してきた。ちよつと可愛いだけで怖くねえよこの野郎め。

「お前……一応ガロンゾ優先で向かってる事を忘れてないだろうな」

そんな光景を見て呑気してると思われたのか、スツルムさんが超俺を睨んでいた。本当に申し訳ない。

「騎空団として依頼を受けるなどは言わん。仕事もするのもかまわん。ガロンゾに戻れば良いからと、確かに私もそれは了承した。だが遊んで良いとは言っていないぞ……黒騎士が待ってるんだ」

「ぐうの音も出ねえや……」

「本当に大丈夫かこの騎空団は」

一応敵対関係のはずの帝国の(正確には帝国に雇われている)人に心配されてしまった。

「しっかしよく入団を許可したねえ団長君ってば。あ、僕ドリンクよくねえ」
「いや、あんたうちの団員みたいな挨拶するなよ」

「イエーイッ (≧▽≦*) ノ」 よろしく、ドラちゃんっ！」

「ドラंकだからドラちゃん……」

「髪も青いしな」

「何のことだB・ビー」

「いや、こつちの話だ」

またよくわからん何処かの世界の何か拾ってやがるなコイツ。もう無視だ無視。

「むふふ〜ドラちゃんだつてスツルム殿お」

「寄るな鬱陶しい……」

「スツルム殿もそう呼んでいいんだよ〜？」

「うるさい」

「いっでええっ!？」

そしてドラंकさんは尻を刺されていた。

■ ■ 二 秩序の人達

「そう言うわけで、村を騙して金手に入れてた盗賊団です」

「当たり前のように盗賊捕まえてくるね君は」

クロエちゃんをセレストに乗せて数時間後、とある島に立ち寄った俺達はそこ駐留している秩序の騎空団の人達にあの盗賊団を引き渡した。

「いやあ、何と言うか成り行きで……」

「君成り行きで何時も盗賊だけじゃなくて星晶獣とか倒してるって聞いたけど」

「まあ、色々ですすね……と言うか貴方もここに居たんですすね」

目の前にいるドラフの男性は秩序の騎空団に所属する騎空士であるが、以前から我が騎空団とも繋がりのある人物である。

島に立ち寄れば盗賊やら魔物やら帝国やら、あれやこれやの悪党に出会うものだからその度倒してはそいつらを秩序の騎空団に引き渡すのがお決まりのパターンとなりつつあり、その時よく俺が出会うのがこの人だった。

「俺も数日前に来たばかりだね。上司と一緒に各島にある秩序の騎空団の駐屯地なんかを見て回ってるのさ」

「前まで他の島の駐屯地勤務じゃありませんでしたか？」

「君と関わって仕事してたら出世しちやっつてね。視察される側から視察する側になったよ。今じゃ本島勤務さ」

この人と初めに出会ったのは、確か今回のように盗賊団を討伐してからその身柄を如何するか考えていた時、シエロさんから秩序の騎空団に引き渡すといいと教えられた時

だったはず。

その時はこの人も小さな島の駐屯地や、或いは任務で別の島への出張が多かった気がする。それがいつの間にか秩序の騎空団の本部がある島で勤務とは驚きだ。

「そうでしたか、まあ俺としては知った人が居てくれて助かりましたよ」

普段からただでさえ「あの星晶戦隊（以下略）」と頭に「あの」と色々含みのある言葉を頭に付けられてしまう騎空団。俺が現れる＝星晶獣が複数体いる事になるので、初対面の人は騎空団の名を聞くと必ず身構えてしまう。だから今回の様に知り合いであると非常に助かるのだ。

「それで、また仲間増やしたって？」

「ええまあ……」

「今度はどんな奴等さ」

彼はそう言うのと離れた所で俺とは別の盗賊団引渡し作業を行っている、或いは待機する他のメンバーを興味深そうに見た。そこには仲良さげに談笑するのじゃ子、フェリちゃん、クロエちゃんもいる。

「……星晶獣と幽霊と村娘ですかね」

「眩暈がしそうだね」

「実際しますよ」

気を抜けば寝込むと思う。

「しかもまた若い女の子じゃないか。こりやあ新しく変な噂流れるんじゃない?」

「嫌な事言わないで下さいよ、ある事無い事言われるの大変なんだから」

「ある事無い事って事は、一部本当なのかい?」

「そこは言葉の綾って奴ですよ」

誰が言い出すのだから、まったく参っちゃうよ。酷い噂ばかり、俺はロリコンじゃないぞう!

「そうそう、真面目な話をさせてもらおうとですね」

「お、なんだい行き成り?」

「既にお話した通り盗賊団の人達、魔物を魔好華って華で操る……って言うにはお粗末でしたが、とにかく自分達に有利に誘導してたんですけどね」

「魔好華な……あれも面倒な代物だよまったく。希少な華ではあるが、まあ手に入らないわけでもない、特に悪党はね。厄介なものだよ……それで、本題は?」

「魔晶の事なんですけど」

「……その事か」

魔晶と忌々しい物質の名を告げると、彼は忌々しそうに顔を歪めた。

「最初はこの魔物討伐も魔晶関係かと思ったんです。急に魔物が増えるって言うのが

引つかかって……結局原因は盗賊達と魔好華でしたが」

「なるほど、確かに魔晶による事件は増えてるからな」

「それと……今回依頼の前にちよつと色々ありまして」

「色々？」

「星晶獣が魔晶で暴走して島が滅びかけました」

トラモント島での事件を話すと、ゾツとした表情を浮かべて彼は息を飲んだ。

「おいおい……そんな話初耳だぞ」

「人の居ない島でしたからね。ただ最悪他の島も被害が出かねない状況でした」

「……話から察するに解決したんだね？」

「既に暴走も止めて魔晶も粉碎済みです」

「そうか……君は知らない所で大活躍だなあ」

「本当ならそんな活躍無いに越した事ないですけどね。でまあ、魔晶被害が増えてる気がするんですよ。何か情報ありますか？」

「そう言う事か、さてなあ……」

空の秩序を護る秩序の騎空団でもあの魔の宝石の事は把握している。エルステ帝国の昨今行き過ぎな侵略と平行してその被害は広まり、その存在も知られつつある。

「何せ帝国絡みだからな。俺達も手を出し辛い問題なんだ」

「あー……どうしても後手に回りますか」

「何とか出来ないか頑張っちゃいるが……こればかりはな」

大規模な騎空団である秩序の騎空団であつても、今や大帝國となりその軍事力を惜しみなく發揮しているエルステ帝國に大きくメスを入れるには多くの問題が立ちふさがり。なまじ帝國の悪行を知っている分もどかしい気持ちは俺より大きいだろう。

「分かりました。何か分かればまたお互いに」

「ああ、何かと此方からも頼むかもしれん」

「そんな時は報酬大目でお願ひします。それじゃあ、あの盜賊達とラウンドウルフ達の事頼みますね」

「ああ、任せてくれ」

別で手続きしてるコーデリアさん達の方も終わつただろう。話しを終えてそちらに戻ろうとしてふとある事を思い出す。

「もう一つ、盜賊の用心棒なんですがね」

「あのエルーンかい？」

「ええ、あの人かなり腕が立ちますよ。根は良いと思うんで、まあ良くしてやって下さい。そんだけっす」

「そうか……うん、なら気にはしておくよ」

「どもつす」

達人とも言えるあのエルーンの剣技。道を間違えなければ、きつと空に名立たる劍豪となつたらう。

尤も手遅れと言うわけでもない。あの男も、盗賊達もそうだが取り返しのつかない最後の一線はまだ越えていなかった。今後の更生に期待しつつ俺はこの場を去った。

■ ■
三 ファインディング・モニ

秩序の騎空団に所属するその男は、少し前から関わる事の増えた空で噂のヤバイ騎空団である星晶戦隊（以下略）の団長とその仲間を見送った。

彼らが連行して来た盗賊団と恐らく密輸されたノース・ヴァスト産ラウンドウルフの群れ。これらの事件を書類にまとめ、また別の島への護送などやる事多い。それらの仕事はこの島に駐留する秩序の騎空団所属の騎空士が行うが、中々捌くにはハードな内容になるだろう。

「どうした、難しい顔をしているぞ」

男が捌くのが難しい量の仕事を手伝つてやろうか考えていると不意に声をかけられた。その声を聞いて男はハツとして背筋を正した。

「こゝ、これはモニカ船団長補佐！ 失礼しました！」

少女と見紛う小柄な女性、金髪の髪を二つに結ったその人物は微笑み畏まる男を落着かせた。

「おいおい、別に失礼なんてしてはいないだろうに」

「は、いえ……な、なんと言いますか、つい」

「ははは！ まあ気にするな、こちらも急に声をかけたからな」

笑顔もまた少女の様に明るく笑う彼女に対し、男は酷く恐縮した面持ちであった。

男が恐縮するのも無理は無い事であった。彼女こそ男が先程団長に話した「上司」、秩序の騎空団第四騎空艇団所属、船団長補佐モニカ・ヴァイスヴィントその人であった。

モニカはケラケラと一頻り笑うと、縄を解かれ改めて冷たい手錠をはめられる盗賊団の面々を目にした。

「それにしても警邏任務の視察で出ている間に事件か？ にしても規模が大きいな。あの数の盗賊に魔物とは……いやに魔物の数が多いが」

「は、それが——」

男はモニカが出ている間にあつた出来事を説明した。星晶戦隊（以下略）が現れ、捕らえた盗賊団を引き渡しに来たと言うと、モニカは驚いた様子で建物内の窓を開けて空を見上げた。

「モニカ船団長補佐？」

「……あれか」

突然窓から身を乗り出すようにして外を見上げるモニカを不思議そうに男は見ているが、一方でモニカは丁度今空へと飛び立って行く瘴気を纏う幽霊船を見た。

「うーむ、惜しかったな。私も是非あの騎空団の団長と話をしたかったのだが」

「ああ、なるほどそうでしたか。すみません、もう少し引き止めれば良かったですね」
「なに仕方ない。次の機会を待つとしよう」

「しかしモニカ船団長補佐も彼らに興味が？」

「無論だろう、あの“星晶戦隊（以下略）”だぞ」

このモニカの言う“あの”とは、正しく団長の恐れている頭に付く“あの”であった。

「あんな噂の絶えない、話題性しかない騎空団今も昔もそういないぞ」

「まあそうでしょうねえ」

「ただまあ……興味本位ばかりとは言えんな」

「と言いますと？」

モニカは「ふーむ」と難しい顔をして唸った。

「あれだけの星晶獣達を団員として活動する騎空団だ。最早国家戦力に匹敵する力を

持っていると云つていい。秩序の騎空団として調べんわけにいくまい」

「ははあ……それはまあ、確かに。ですがそこまで心配する事は無いと思えますけど」
「ほう？ それは何故だ？」

「何故と言われると……」

男の脳裏に団長との付き合いの始まりと今までが浮かぶ。最初の出会いはまだあの騎空団が立ち上がって直ぐであり、「どうかしてる」と言われるあの名前すら決まつてなかつた時だ。

まだ男はある小さな島の駐屯地勤めの身分だった。そんな時現れた一人の少年、何かと思えば大規模な盗賊団を捕らえたので引き取つてくれと言う。青年とまでは言えない若さを残す少年、騎空士としてならば珍しいという事も無いが彼が自らを団長と名乗るものだから男は驚いた。

初めは悪戯とも思ったが、外に捕まえた盗賊団がいると言うので慌てて外に出てみれば、確かにコテンパンに倒され今回の盗賊団と同じくほとほと懲りた様子で縄で縛られた盗賊団は居た。

しかしそれよりも——その盗賊団を見張る竜を従える女性、巨大な黒鉄の鎧、四つ手の騎士、黒い筋骨隆々なトカゲのようなナマモノ達の存在に驚き危うく腰を抜かしそうになった。

以来団長は悪党を捕らえると秩序の騎空団を、特に顔見知りとなつた男を頼り交流もそれなりに増えていった。

その交流の中「あの星晶戦隊（以下略）と付き合いが一番長く、非常に優秀な団員」と言う話が何処からか本部へと渡り彼のスピード出世の助けとなつたのを団長は知らない。

そしてそんな交流の中で得た団長への印象は今回の事を含め「苦勞人で御人好しで、星晶獣に絡まれやすいトラブルメイカーで、そしてやはり苦勞人」と言うもの。

気の毒に思う事はあれども、とても危険人物には思えなかつた。

「……こればかりは口での説明が難しいですねえ」

「そうか。しかし貴公の人を見る目は信頼している。決しては悪い人物ではないのだからな」

「はい、それは間違いないです」

少なくとも団長が自ら好き好んで正義に反する行いをするとは思えない。決して長いとは言えない交流であるが、濃い付き合いの中団長の人柄を知つた男は、団長に関してその事だけは自信を持って言えた。

「ふむ、ますます会いたくなるな……いや、だがなあ」

「まだ何か？」

一応は納得した様子であったモニカだが、しかしまだ少し引つかりがあるようだった。

「各方面から『あの騎空団は、真に秩序乱さざる者達か』などと調査催促が来ている事を考えると興味本位だけではいかんと思つてな」

「あ、やっぱり来てますか、そう言う催促」

「うむ、特にあの噂だ。あれはいかん」

「あー……」

先程冗談で団長本人に噂が増えると言つたが、やはり幾つかの噂は彼にとつて大きな障害となつているようだった。

現状確認できる最も有名な噂の一つは「ロリコンの年上巨乳好きで、幼馴染属性のホモの可能性がある女装っ子好きのケモナー」と言う最早何がなにやら、支離滅裂、団長からすれば不名誉極まるものであった。勿論それが真実ではないと男は知っている。

「事実で無いにしても、ロリコンと言う噂が如何にも不味い」

「ですな……」

「これがただの騎空団の噂なら貴公や他の団員で調査すれば済むが、何せあの騎空団だからなあ」

「また仲間を増やしたので今や星晶獣を10体戦力に保有する騎空団ですから……私一

人の言葉ではそこまで信用は得られないでしょうし……やはり船団長、或いは「私だろろうな」

もしここでモニカと出会えていれば、こんなややこしい事にもならなかつただらう。こうして本人の与り知らぬ所で秩序の騎空団によいよ本格的に目をつけられ、またよりによつて船団長補佐にマークされた団長であつた。

■ 四 フェイトエピソード ハピネスチャージコルワ

世は移ろい、流行は変わる。今も昔も、若いも若きも、老若男女は自らを鮮やかに彩り飾り付ける。

特に熱心な者であれば、着る服をその時の最先端にしたいだらう。或いは何時の世も色あせない様な美しさを放つ物にしたいだらう。

既製品ではない、自らが望むお気に入り。世に一つの最高級。オーダーメイドの醍醐味。だとして誰に頼むのか？

ファータ・グランデ空域で著名なドレスデザイナー。名を上げていけば幾らか出てくるが、近頃特に著名であると言うのであれば、殆どの者の口からは「コルワ」の名が出てくるだらう。

若くして一流と言つても良い評価を受けるドレスデザイナー、彼女の作るドレスには不思議な魅力がある。ただ美しく着飾るのでもない、服に着られているのでもない、その人個人にピッタリと合った服。その服を着た者は言う。「幸せを後押ししてくれるような素敵な服だった」と。

そんなコルワは忙しい毎日を過ごす。ドレスのデザインは勿論の事、針子への指示や素材選びなど多忙である。時には自ら島を渡り依頼主の元へと足を運び出来る服を見てもらい最終的な調整などを行う。

仕事に一切の妥協を許さぬ姿勢、正に自他共に認めるプロフェッショナル。

そして今日コルワはまた仕事のために島を移動する。以前から頼まれていた服が完成したため依頼主の元へと届けに行くのだ。

信頼あるよろず屋より「丁度いい騎空団がいるので、その人達に送ってもらおうといい」と言われ、そのままよろず屋を介して頼んだ依頼、その約束の日。必要な荷物、そして何よりも重要な出来上がったドレスを持つて船着場へとやって来たコルワ。予定通りであるのならその騎空団がやってくる時間であったのだが――。

「おいおい、なんだあの騎空艇……」

「なんで飛べてんだよ……本当に騎空艇か？」

船着場に居る者達が俄かにざわつき出した。中には悲鳴に似た声を上げる者も居る。

コルワもまたそんな戸惑う群衆の一人であった。

船着場には様々な騎空艇が行き交うため、よほどの騎空艇が来ない限りここまでざわつく様な事にはならない。つまり「よほどの騎空艇」が現れたのだ。

飛んでいる事が不思議なほどロボロボの船体、そこから放たれる黒い瘴気。千切れ裂けた気囊からは瞳の様な光放ち、まるで黄泉の国から湧き出した怨霊の如き威圧感。

正しく幽霊船と呼ぶに相応しいその騎空艇は、ゆつくりと船着場へと横付けした。それを見てコルワは「まさか……」と思った。まさかあの騎空艇が約束の騎空団の艇ではないのか。

そして動きを止めた幽霊船から一人の地味な少年がひよっこりと降りてくる。そして彼は辺りを見渡し両手をメガホンのようにして口に当てて叫んだ。

「えー……本日御依頼のお約束のコルワ様おられますかー！」

結局あの艇が約束の騎空団だった。

■
五 Welcome to the ghost ship

「やー……驚いたわ。まさか幽霊船がお迎えに来るなんてねえ」

「いや驚かせて申し訳ないです」

セレスト船内の談話室、そこで一見ボロでも座り心地の良い椅子で寛ぐエルーン女性。著名なドレスデザイナーのコルワさん、今回の依頼のクライアントである。

約束の時間に待ち合わせの船着場に来たら幽霊船が来たのだからそれはもう驚いた事だろう。他の住人達も結構な騒動になっていたので彼女を艇に乗せたら早々に立ち去らせてもらった。

「うちの騎空艇今修理中でして、この艇は代理つてとところです」

「貴方代理で幽霊船使うのね」

「下手な艇より信用できますからね」

「えへ、えへへ……」

俺が信用できると言うのと床からヌツと霧の様なモノが溢れたかと思えば、マグナ型のセレストがはにかみ笑みを浮かべながら現れた。カワイイかよ。

「はあー本当に艇が星晶獣なのね」

「そ、そうです……はい」

「いやーよろず屋さんに信頼できる騎空団居るから頼んでおくとは言われたけど、まさかそれが星晶戦隊（以下略）とはねえ……」

コルワさんは俺達星晶戦隊（以下略）の事を既に知っていた。まあ知ってるのは不思議じゃない、それこそ「あれやこれや」嫌な噂が空を駆け巡ってるようだからな。ちく

しようめ。

「あと変なマスコットもいるし」

「聞いたか相棒、オイラもついにマスコット認識されたぜ」

「変な、な？　可愛い系じゃないからな？　後そもそもマスコットじゃないですコルワさん」

「二足歩行形態でフヨフヨ浮いてて “スツ” と水平移動できるビイモドキを俺は団のマスコットとは認めねえ。」

「それで、今回の依頼は移動と護衛と言う風に聞いてますか？」

「ええその通りよ。私がデザインして出来上がった服を確認しに行くからその間付き合ってほしいのよ。出来上がった服は今から行く島の仕立て屋さんが持つてるから」

「うん？　こう言うのつてよう、デザイナーの姉さんとこの工房なんかで全部仕上げるんじゃねえのか？」

「普段はそうね。けど今回は知り合いの仕立て屋さんと共同で作業してるの。ちよつとコラボしましたよつて話が出てね」

「ははあ、なるほど。そう言う事ですか」

「双子の仕立て屋さんなんだけど凄腕が良いのよ。いい具合に出来たつて連絡が来たから最後の調整に私も参加しに行くの。だからまあ護衛つて言うのは大袈裟かしら。」

けど普段より遠出になるし一応ね」

「なるほどです。こちらも依頼を受けた以上しつかり仕事します」

「ええ、頼りにさせてもらうわ」

こうして穏やかに俺はクライアントと談笑し依頼を始め――

「だんちよ、だんちよ〜っ！ クロエもコルワさんとお喋りしたい〜っ！（〃〃〃〃）

――られないんだなあこれが！

「クロエちゃん急に入ってこない！ あと依頼主さんの前で騒がないの！」

「だってコルワさんって言ったら、田舎民のクロエも知ってるちよ〜ゆ〜め〜なデザイ
ナーだよ！ こんな機会滅多にないもおん！ 島出て直ぐに会えるなんてヤツバア

ー！ クロエめっちゃ憧れてたんだあ〜☆（人、▽、〃）

「わかったわかった、だから落ち着き――」

「だんちよお〜！ メドウ子があ、メドウ子があ〜！」

「およ、ガツちゃん？」

閉まった扉がまた勢い良く開いたかと思うと、今度はのじゃ子が半泣きで駆け込んで
きた。

「ノックしてから入らんか！ なんだ一体!?!」

「メドウ子がわらわのクツキーとつたのじゃあ〜っ!!」

「ちよつとあんた!? 一々そいつにチクるんじゃない!」

ちくしよう、やつぱりメドウ子まで来やがった。

「うるさい! あれ最後の一枚じゃったのに!」

「だってあんたあの種類の全然食べなかつたじゃないの!」

「最後に食べようと取つといたんじゃない!」

「だから悪かつたつて言つてるでしょ!? それにおやつぐらい次の島で買えるでしょ!」

「わらわは、あの最後の一枚が食べたかつたのじゃー!」

「いっしょでしょーが、クツキーなんて!」

ぎやいぎやい言いながら突撃してきたメドウのじゃコンビ。しかも理由がしょぼい。

「あーもうっ! 静かに入れんのかお前らは!? 今コルワさんとお話中なのわかつてる!」

「だつてメドウ子が!」

「のじゃ子が!」

「一遍に喋るな!」

俺を挟んで叫ぶから鼓膜がどうにかかなりそうだ。

「別に気にしなくていいわよ。それよりなにこの二人可愛いわねえ。この騎空団こんな

可愛い女の子までいるの?」

「コルワさん甘やかしちゃ駄目。そう言うところいつら調子に乗るから」

「何をこの馬鹿人間!」

メドウ子が「シャー!」と俺に飛びかかってきたので、そのまま抱っこするように受け止め地面に下ろした。

「うー……! 生意気!」

「喧しいっての……クツキーってのは、コロツサスがおやつ用にガロンゾから持ってきたって言うクツキーアソートの缶だな? 次の島で似た奴あれば一缶買ってやるから機嫌直せのじゃ子」

「うう……」

「メドウ子も意地悪しなさんなって言ったでしょうが」

「んぐぐう……」

この二人、ちよつとは落ち着いたかと思つたがこの有様だよ。これは暫く喧嘩多そうだなあ。

「すみませんコルワさん。直ぐ追い出——」

「ソレデ、服ノオーダーメイドツテ今モ受付ケテルノカ?」

「んだあ——ツ!」

いつの間にか俺の座ってた椅子にティアマトが座りコルワさんを相手に何か話している。思わずずっこけてしまったじゃないか。

「ん〜……今はオーダー詰まってるから直ぐはちよつと」

「コルワさんいいです、そいつは相手しなくていいです。無視でいいですから」

「失礼ダナ！」

「こっちの台詞だわこいつめ！ お前隙間風になって部屋に侵入したな!? 扉から来い

扉からー！」

「チツ！ ケチ！」

「うるせえ！」

よりにもよって特に姦しいのが揃いつつある。このままではこの場が混沌としてしまふ！

「だ、団長いるか!？」

「あは、あはは！ あはーははははっ!？」

「よりにもよって!？」

扉がまた開いたと思ったら最悪な事に発作中のルドさんを連れだしたフェリちゃんが現れた。

「ご、ごめんなさい団長！ ルドミアさんと二人で喋ってたら急に発作を……わ、私

じゃ対処できないから他の人探してて……!」

「あははっ!! す、すまな……あは、あはーははっ! ごひゆ、ごふう——っ!!」

「ちい! 最近魔法と打撃が効かないから……ちよ、ちよつと待つてて下さいコルワさん! 直ぐ済ませますから、直ぐ! 直ぐなんで! えつと……セレスト、B・ビィあと頼む! それとクロエちゃん、居てもいいけどあんま失礼無い様にね!」

「りよ〜!ゞ(・▽・*)」

「メドウ子ものじゃ子も戻れ! ティアマトもだ!」

「なんでアタシ達だけ戻れなのよっ!」

「鼻屑ダツ!」

「つせい! ほらルドさんこっち、場所移すよ!」

「わ、私も……!」

「ひひ、うひーっ!! す、すまな……あははっ!! はあ——ツ?」

「どういう笑い方なのそれ!」

一先ずこの場で最も混乱を呼ぶ要因を連れて、俺は慌てて部屋を出て行ったのだった。

六 大体こう言う騎空団です

爆笑して痙攣するハーヴィンとオロオロするエルーンを連れて部屋を飛び出していった団長。それを見送りコルワは唾然としながら何処か興味深そうにしていた。

「噂には聞いたけど、大変そうねえあの団長さん」

「こ、これでも団員割いて行動してるから……普段は、もつと大変……」

ガロンゾに居る面子が揃えば更に彼の苦労は増すだろう。セレストは団長の胃が心配になるが、最近はむしろ強靱となつていような気がしないでもなかった。伊達にジータの幼馴染兼兄貴分をしていない。

「ふ、不安かもしれないけど依頼はちゃんとやるから……だ、団長は仕事はきっちりするよ……」

「別に不安なんて無いわ。あのよろず屋さんの紹介だもの。むしろちよつとワクワクしてるかも」

「ワクワク?」

以外にも好意的にこの状況を受け入れているコルワ。セレストは意外そうに首をかしげた。

「だってなんかインスピレーション湧きそうな環境じゃない? 刺激的って言うか、飽きる暇無さそうな感じだし」

「確かにな。まあ相棒にとっちゃ冗談じゃないだろうが、こんな旅も楽しいもんだぜ」

「アイツダツテ、楽シンデハイルダロウサ」

「おめえがそれ言う？」

いけしやあしやあと発言するティアマトにB・ビイも思わずツツコンだ。

「別二適当言ツテルワケジヤナイカラナ」

「まあ否定はしねえけどよ。色々理由はあつたが、相棒も自分で空の旅を選んだしな」

「な、懐かしいね……そんな前じゃないのに、ザンクティンゼルをエンゼラで旅立つたの

……」

「アイツノ借金生活ノ始マリダナ」

「いや、だからおめえがそれ言う？」

借金の原因としてはティアマトがかなり大きな要因となつてはいるが、それはもう今更であつた。最近こそ多少自制してはるようだが団長は油断せずティアマトには睨みをきかせていた。

「なになに、だんちよの思い出話い？（＊・ω・）クロエも気になるう☆ 聞かせて聞かせてえ〜！」

B・ビイ達がふと話し出したザンクティンゼルでの思いでにクロエが食いついた。

「そーいやおめえら、ガロンゾ以前の相棒の事しらねえしな」

「い、色々あったよね……ザンクティンゼルでも、アウギユステでも……」

「ふーん……ちよつと聞かせなさいよ」

「わらわも興味があるのう」

ザンクティンゼルでの鬼神の如き老婆による地獄のような特訓と、星晶獣マグナ6体とそれを超える星晶獣2体との激戦の日々。アウギユステに至るまでのドツタンバツタン大騒ぎな騎空団活動となし崩し仲間加入ラツシユ。まだ仲間になって日の浅いメンバーにとつてそれは興味深い話だった。さつきまでの喧嘩も忘れてメドゥーサ達もちやつかり椅子に座っている。

「才、聞ケ聞ケ。色々聞カセテヤル」

「デザイナーの姉ちゃんも聞いてきな」

「えつと……いいのかしら。団長さん嫌がらない？」

「いいよ、いいよ。減るもんじやなし」

「み、身内に敵がいる……」

何処まで話す気かは知らないが、まるで気にした様子のないB・ビイを見てこの場に居ない団長を気の毒に思うセレスト。しかし彼女も無理にB・ビイ達を止めないあたり、この雑談を楽しむにしているのだろう。あと止めても無駄と分かってもいる。「ごめんね、団長」と心の中で謝罪だけはしておいた。

「そ、そう言えばお茶出そうと思ってたんだ……コ、コルワさんは紅茶とコーヒーどっちがいい？」

「あら、別にそこまで気を使わなくていいのに」

「う、ううん……大事な依頼主でお客様だし……」

「そう？ なら……紅茶でお願ひしていいかしら」

「わ、わかった……少し、待ってて……」

給湯室に向かおうとするセレストだが、それを見てクロエがピツと手を上げた。

「あ！ じゃあクロエもお手伝い！」

「い、いいの？」

「んまあ新人だしねえ〜こんぐらいしなきゃっしょ！（*・ω―）b」

「あ、ありがと……じゃあ、一緒に来てね」

「りよー！」

そして部屋から出て行くセレストとクロエ。言葉使いは不思議だが、愛想のいい可愛い後輩が出来たなと思ひセレストは少しほっこりしていた。

「……楽しそうな騎空団じゃない」

そんなセレストを見送り相変わらずギヤイギヤイ可愛らしくも姦しいメドウ子達。それを見ていたコルワの興味は強くこの騎空団に惹かれていたのだった。

ハピネスチャージの“瞬間” 中編

■ ■
一 乙女トークに黒ナマモノ

紫にも似た濃霧と瘴気（無害）を放ち空を航行するセレスト。向かう先は今回の依頼人コルワさんの指定したとある島。そこで彼女が会う約束になっている仕立て屋さんがいると言う。

航路を確認して気が付いたのは、この島がまたなんと言うかうまい具合に丁度ガロンゾとそう離れてないと言う事だ。シエロさんがこの依頼を俺達に持ってきた理由がまた一つ分かった気がした。

「んでえ、その日ネイルとか服とかチョーこだわったんだけどお。イツメンで遊び行った時誰も気が付かないじゃんねえ〜」

「ええ？ 誰もってそれ酷いわねえ」

「女子友は気付いてくれたけど男は誰一人つてゆーね」

「ハア、ヤレヤレダナ。ソノ男共」

「まー気付かないってゆーのは百歩譲っていいけどさあ……けどマジイミフなのは、逆に服の駄目出しし始めるヤツね（、ㄩ、）！」

「うーわ、それなんか鬱陶しいわねえ」

「ほんとそー！ 『俺の趣味じゃないけど、良いと思うよ』とか言われたけど、いや知らんして。お前はクロエのなんなん？ ってなる。お前の好みで服選んでねーからってゆーね！ ○（*≡≡≡）○」

「なんじゃそれ、褒めるなら褒めるだけにすればいいじゃろうに」

「あー……そう言う人偶にいるのよ、ガルーダちゃん」

「じゃあいつそなんもゆーなってなるじゃん！」

「けどやっぱり一言無しもどーなの？ ってなるしねえ、気にされたい時もあるのよね」

「そ———！ もうほんそれなーって！」

「そ、そだね……」

……そして、何時の間にかコルワさんが滅茶苦茶馴染んでいる。

先程発作を起したルドさんをごうにかこうにか大人しくさせ、無駄に疲れて部屋に戻るところになっていた。

何時からここは女子会の会場になったんだ。幽霊船特有の暗さが吹き飛び、なんかこの部屋が妙に色めいている。

「……君達楽しそうなのね」

「あ、だんちよおかえり☆」

疲れた事を隠す事も出来ず声をかけるとクロエちゃんがニッコリ笑って返事をくれた。けど君直前までプリプリ怒ってたよね。切り替え凄いのね。ちよつと怖い。

「ル、ルドミリアどうだった……？」

「何とか気絶させた。今フェリちゃんとかオーディアさん達が看てる」

「難儀じゃのう、あの娘も」

うちの団来てから多少我慢できるように成った、とは本人の談である。反面発作を鎮めようとして色々してたらそれに耐性付き出したから結局厄介ではあるのだが。

「それでなんだい、みんなして楽しそうじゃないのさ。俺が大変だった時に……何話してたの」

「アンタの借金が如何に増えたかの話」

「ひでえ！」

あんまりにもあんまりな内容を話されていた事に悲鳴を上げた。

「お前ら俺が居ないのを良い事に何て事話してるんだ」

「ン、スマン」

「驚くほど謝罪が軽い」

さては微塵も悪いと思ってねえなオメー。

「若いのに大変なのね団長さん」

ほら見ろ、コルワさんに同情されてしまったぞ。何たる事だろうか。と言うかそこからどうして、あんな女子トークになるんだよ。

「いやあ、盛り上がりつつまっつてよう。オイラ達もどうしてあの話題に発展したか覚えてねえや」

「女子トークつてそんなもんだって、だんちよつ☆」

「いやB・ビィは女子じゃねえだろ」

その後も色々指摘したかったが、クロエちゃんの「大体そんなもん」で流された。解せぬ。

しかし俺もその後話しに混ざり話し込んでしまった。案外悪くない時間を過ごし、そんなこんなで俺達は目的の島へとついたのであった。

■ ニ きつと平和な依頼なんだろうなあ！（願望）

■ コルワさんの話す目的の島、そこ各島との交通の便は良く訪れる人は多い。人口もそれなり、自然もあり中々に大きな市街もある。雰囲気としてはポート・ブリーズが最

も近いだろう。

この島にコルワさんの知り合いと言う仕立て屋さんがいる。と言つても住んでいるのではない。向こうも今回の事でこの島に来て居るのだ。

「二応依頼内容には護衛が含まれているので我々も同行する。とは言え全員では多すぎるので、例によつて選抜メンバー発表するからみんな集合」

治安が悪い島でもないのでもそこまで過剰な戦力は必要ないだろう。なのでこんな依頼の時どうするかまだ分からないメンバーを選び、今後の仕事の割り振りを見極めてみるとする。

「先ずは前回お留守番だったフェリちゃん」

「つ、ついにか」

「緊張しなくていいよ、お使いたいな仕事だから」

「そーそー、気楽にやりなつて」

「いや、なんであんたが言うんだ」

ヘラヘラと話すドラंकさんだが、この人は団員でもなんでもない人間である。この人はフェリちゃんのなんなんだよ。

「分かった。けど迷惑をかけないように頑張るよ」

フンスッ！ と気合を入れているフェリちゃん。可愛さが溢れている。ストレスが

大分吹き飛んだ気がした。

「んで、次クロエちゃん」

「早速キター○○(△。○)(○○△。○)(○○△。)○ー!!」

「はいはい、落ち着いてねー」

クロエちゃんの名を出すと、彼女が超興奮していた。彼女を選んだ理由としてはクロエちゃんはコルワさんと打ち解けてるし、まず戦闘の無い依頼だから選んだ。最初の依頼としてはちようど良いだろう。

「次にコーデリアさん、フェリちゃん達のフォローをお願いします」

「ああ、任された」

安定と安心、信頼のコーデリアさん。セレストに残ってもらうのも考えたが、仲間になったばかりのフェリちゃんとクロエちゃんが居るため、今回の依頼では俺以外で仲間に気を配れる人が欲しかった。

「それとオマケでメドウ子も来なさい」

「オマケって何よっ!?!」

オマケはオマケである。それ以上でもそれ以下でもない。

「お前のじゃ子のクッキー食べちゃったでしょ。前お小遣い上げたしそれで依頼終わったら帰りにお前が自分で買いなさい」

「うぬぬうゝつ！」

言い返したいが本当の事で言い返せない表情だな。後ろでメドウシアナが呆れた様子で舌をチロチロしてた。

「後は留守番。ただ市街に行きたいなら別に出かけてもいいけど、艇には必ず何人かは残るように。セレストを珍しがって野次馬来るかもしれないけど上手く相手しておいてね」

「承知した。私は艇に残るとしよう」

「自分もそうします。後はお任せであります！」

ゾーイとシャルロットの返事を聞いてホツとする。他のメンバーが駄目と言う事じゃないが、この二人は特に信頼がおける。きつと問題は無いだろう。

「それと今回もスツルムさん達は自由にどうぞ」

「……それはいいが、お前一応私達が帝国側の人間と覚えてるか？」

「そりやあ勿論」

「……お前、私達に対してあんまりにも無用心じゃないか？」

そう言われると確かにそうなのだが、しかしそんな事言われてもあんま気にする事ではないからなあ。

「別にこの状況でお二人に何が出来るって話ですし、まあいいんですよそこらへんは」

「呑気な男だ……」

「まーまーいいじゃないのストルム殿。折角だからちよつと街みてこうよお」

「お前も気を緩めすぎるんじゃない」

「いつだあああ!？」

また尻を刺されるドラंकさん。この二人はある意味なんの心配も無いな。なんかあつてもドラंकさんが尻刺されるだけだし。

「それじゃあコルワさんお待たせしました。行きましようか」

「ええ、そう長くないけど残りもよろしく頼むわね」

先ずは双子の仕立て屋と言う人物に会いに行く。街の中で落ち合う約束なので直ぐに会えるだろう。

それではとつと会いに行きますかね。

■ 三 毎度お馴染み

市街のとある食堂、そこで目的の仕立て屋さんが居ると聞いて俺達は店内へと入る。店内はそれなりに混雑しており、雰囲気から観光客とかではなく島の住民が殆どだろう。普段の店の盛況さがわかる賑やかさだ。

またこんな時に使う店と言うのは、やはりと言うべきかシエロさんのよろず屋系列の店である。シエロさんの運営する店は騎空士の利用者も多く、食事以外では待ち合わせに利用する事で出来る。店の指定もシエロさんによるものらしい。流石ぬかりない。

「凄い賑わってるな……」

「ちよーわかるう〜！（人*、▽、）　こんな賑やかなのうちの村じや祭レベルだからね。マジ都会ヤツバア〜イ！」

「ゴチャゴチャして鬱陶しいだけよ、こんなの」

「んっもお〜、もつとアゲてこーよメドウ子ちつてばあ〜！」

「んなあ〜！　抱きつくな暑苦しいから！　てか、メドウ子たちは止めてよ!？」

フェリちゃんとかロエちゃんは食堂だけでなく街の人の多さに少し興奮気味だった。フェリちゃんはずっとトラモントで一人暮らし、クロエちゃんは小さな村で育ち外を知らなかった。だからその興奮も仕方の無い事だろう。

一方でメドウ子は騒がしいのが苦手なようだ。本人の方が普段騒がしいくせによく言うものである。お前はそこでクロエちゃんにかまわれてゆけ。

「結構余裕持ってつけたな」

「珍しくトラブルも無かったしな」

「珍しくは余計じゃい」

B・ビイの一言は余計だが、確かに珍しくトラブルも無く来れた。いや、別に普段ト
ラブルばかりと言うわけではないはずだ。そう言われたからそう思っただけで、そんな
事は無い筈なのである。

「……まあのおんびり待ちますかね」

「そうね。多分二人共まだ来てないと思うし」

そう言つて適当な席に着こうとした時、コルワさんの腕をポンポンと後ろから軽く叩
く小さな手が見えた。

「こちらですよ、コルワさん」

同時に不意に後ろから声をかけられ、少し驚いた俺達が後ろを向くとそこには小さな
二人のハーヴィンが居た。

「あ、あらごめんなさい二人共！ 先に着いてたのね……待たせちゃったかしら？」

「いえいえ、私達も今来たんですよ」

「後ろ姿が見えたので声をかけさせていただきました」

見知った様子の三人。コルワさんの様子からこの二人が約束をしていた仕立て屋さ
んだらう。

「どうも、みなさま。毎度お馴染み仕立て屋のララとロロです」

「今日はよろしくお願ひしますね」

「こちらこそ、よろしくね二人とも」

ララとロロ、そう名乗る二人のハーヴィン。赤と青の帽子に、揃いの大きなボタンを取り付けた双子の仕立て屋さん。

カワ……カワワ……カワカワ……。

「相棒あいぼー、すっかりしろ。焦点ずれてる」

「ハッ!？」

不意打ち気味のダブルハーヴィンに意識が飛びかけた。我ながら情けない動揺をってしまった。

「それで……そちらの方は【星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z〇Y】の団長さんですね」

青の帽子のロロさんが俺の方を向き態々あのクツソ長たらしいふざけた団名を言い切った。なんか申し訳ねえ。

「ええ、その団長です。それと次からは適当に略していいですよその団名」

「うふふ、じゃあそうしますね」

コロコロと笑うロロさんに一瞬意識がまた飛びかけた気がした。だが今は依頼の途中、仕事を疎かにしてはいけない。頭を振って気持ちを切り替える。

「俺達の事は知ってたんですね」

「シエロカルテさんから聞いていましたから」

「コルワさん連れてくる騎空団は知り合いだから信用できますと」

あの人はどんな依頼でも可能な限り関係者全体に細かく連絡をとっているが、そんな時間何時あるのだろうか。と言うか何時のまに連絡をしてたんだ。相変わらず色々謎である。

「今回は来て頂いて助かりました。実は私達からも少し頼みたい事があったので」

「頼みたい事？ 何か依頼ですか？」

「それは……」

「ララ様、ロロ様」

「うわあ!? だ、誰よコイツ!？」

ララさんが何かを話そうとすると、不意にヌツと横から二人の名を呼びながらエルーンの男が一人現れた。メドウ子が驚き声をあげるが、男は俺達にかまわずララさん達に話しかけた。

「そこから先はお屋敷で……」

「そうですね……すみませんみなさん。詳しくは場所を移してから話しますね」

「ちよつと面倒な事なので、落ち着いて話しましょう」

「えつと……それはいいんですが、そちらの方は？」

「私の事は気になさらず。皆様もこちらへ、表に馬車を用意してあります」
「馬車？」

俺とコルワさんは顔を見合し「なんでであろうか？」と同じように思ったのか首をかしげた。ララさん達について外に出ると、確かに大きめの馬車が待機していた。それも妙に派手と言うか、格式高そうな車体である。

「……ララさん、今からどこに向かうんですか？」

「行けばわかります。そこで色々とお話しますから」

何より可愛らしい笑みが途端に曇ったララとロロさんの雰囲気から、あまり呑気な頼み事ではないと感じ取れた。

どうも今回も簡単な依頼ではすまなそうな気配を俺は感じていた。

■ 四 爽やか系男子

島についてから待ち合わせ場所に移動して、また更に移動。ララさんロロさん達が宿泊している場所へと着いたのであるが、その意外な場所に啞然とした。

「え……なにコレ城？（； 皿、）」

一人クロエちゃんがこの場にいる皆の心中表す言葉を呟いた。

尤も「城」ではないだろう。これは「屋敷」だ。それでもデカイ。クロエちゃんが城と思うのもわかる。

「コルワさん、ここは……」

「服を注文したお客様のお屋敷ね」

「……何者です?」

「かなり有力な資産家さんとか」

初耳である。それなりの金持ちとは思っていたが、ここまでとは予想してなかった。

突然のお屋敷訪問に困惑していると、馬車から降りた俺達に気が付いたのか屋敷の中から一人エルーンの青年が駆け寄ってきた。

「やあララさん口口さん、おかえりなさい! 街の方では大丈夫でしたか?」

「ええ、なんの問題も……それより若様自らお迎えなんて、恐れ入ります」

「気にしないでください。それで、そちらの方達が?」

「はい、こちらがコルワさんと騎空団の皆様です」

「ああ、やはり! 初めまして、みなさん! お待ちしていましたよ!」

眩しい笑み。俺達一人一人と握手を交わすそのエルーン青年。彼は「一応」と付け加えてから、自分がこの屋敷の主人である事を告げる。

屋敷の主が今資産家であると聞いたばかりの俺は、もつと歳のいった人物を想像して

いた。だが出て来たのは爽やかな好青年であり皆意外そうにしていた。

「若様」、あるいは「若旦那」と呼ばれるこの人は、まだ若い身でありながらもこの屋敷の主人としてバリバリ働いているらしい。なんでも屋敷の先代主人であり若様の父が病で倒れ、その後療養のためこことは別の静かな別荘へと移り住んで以来、父の意向でこの屋敷と多くの事業を任されたと言う。そのため実質この人が今の屋敷の主人であるのだが、父が存命であり自分の歳も若く父ほど有能ではないと自ら話す若様は「主」と呼ばれることに抵抗があり、屋敷を継いだ今も多くの使用人に若様と呼ばれていると言う。

とは言え笑顔を絶やさず実に快活であり、同時に雅と言う言葉がよく似合う。本の世界から飛び出したようなその姿は輝いて見え、きつとこの場にルナルさんがいたらその美男子ぶりに取り乱すレベルで興奮したろう。こんど話してあげよう。

「私達は今ここで泊まらせて頂いてるんです」

そう口口さんが話す。最初はそんな予定はなかったようだが、これもこれから話す内容に関係があるのだろう。

若様は自ら案内を申し出て、俺達を屋敷内へと通して先導する。玄関から廊下至る所があまりに豪華絢爛、明らかに高価そうな壺やら絵やらが飾られており俺は戦々恐々であった。

「お前絶対に触るんじゃないぞ」

「なんでアタシだけに言うのよっ!？」

こいつが無邪気にうっかり手でも触れようものならどうなるか……。俺は特にメドウ子に強く念を押した。メドウ子は自分だけ嚴重注意されたのが納得いかないようだが、どう考えてもこいつだけが心配だ。

「すごいな……。見た事もない高価な品ばかりだ」

「いやいや……。ヤバイヤバイって……。ガチじゃん、ガチ貴族じゃん……。クロエお屋敷来ちゃったじゃん……。((。ω。))」

「そう怯える事はないよクロエ。これも空へ出た経験だ。よく見て記憶に留めておくといい」

フェリちゃんは礼儀正しいので気にはならない。ベツポ達も今は姿を消して大人しくしている。クロエちゃんは今は緊張して大人しいし、コーデリアさんは何の心配もいらない。多分この人は慣れてる側の人だ。

「メドウシアナも悪いがなるべく身を縮めてくれ……。俺の心臓に悪い」

「シャー」

こっちは素直である。良い子ね。

しかし建物の中だと言うのに目的の部屋まで結構歩く。やはり広い、この屋敷の敷地

だけでザンクティンゼルのキハイゼル村より広いんじゃないかここ。

「しかしこれは何が待ってるか……なあ相棒」

「お前は何時もトラブル起きると楽しそうだなあ……」

B・ビイの戯言は適当に返事しつつ、てくてく歩いてちよつとすると目的の部屋にたどり着いた。「中にどうぞ」と若様が扉を開き俺達を招き入れると、そこはやはり綺麗に整えられ美しい装飾品が並ぶ個室だった。

だがそんな部屋で一際俺達の目を惹いたのは、部屋の中央にたった一つ置かれた裸のままのマネキンだった。部屋の隅などではなく、一際目立つ部屋の中央にあるそれは間違つて置かれた訳ではないだろう。

「……騎空団に頼みたい事があつたと聞いていますが」

「ええ……」

いよいよ何か問題が起こつたと感じ、若様に問いかけると彼もまた深刻そうに唸り口を開いた。

「……実は、作つて貰つたドレスなのですが……それが盗まれたのです」

若様から告げられた内容を聞き、俺達はもとよりコルワさんに至つては驚愕のあまりか、雷に打たれたかのように整つたその顔を崩し口をあんぐりと開けていた。

五 消えたドレス

■ 若様から語られたのは、今回の依頼の中心であり、コルワさんとララさんロロさんによる特注ドレスが盗難に遭ったと言う事件。

事は数日前、俺達よりも早くこの島へと着いていたララさんとロロさん。自分達の荷物、そして出来上がったドレスを携え予約をしていた宿へと行った二人は、食事を取りに1時間ほど外出した。当然、荷物は必要な物以外部屋に置いたまま。

その後宿へと戻ると血相を変えた宿の主人が二人の部屋に物取りが入ったと告げた。

当然驚いた二人は慌てて部屋に戻ると、そこには既に呼ばれたこの島に駐在する秩序の騎空団団員数名がおり、中を見せてもらおうと案の定部屋の中は荒らされていた。荷物は酷く散らばり状況から物取りである事は間違いなかった。そしてこの時の被害がドレスの一点のみと言う点がわかりララさん達は、これが単なる物取りとは違い自分達とドレスを最初から狙った犯行ではないのかと考え若様へと連絡を取ったのだった。

「それで念のため二人は私の屋敷で急ぎ保護する事にしました。犯人に襲われなくても限らないですから」

一通りの事を語り終えた若様は、何も纏わなままのマネキンを見ると深くため息をついた。

「本当ならあそこには……美しいドレスがあるはずだった」

「……プレゼント、ですか？」

「はい、私の愛する人へ」

恥ずかしげも無くこんな台詞を言えるとは凄い人だな。だがこの落ち込みよう、この人もそれだけ気合を入れて今回ドレスを頼んだのだろう。

「もつともまだ恋人ではないんです。相手の気持ちも聞いてはいない……まだ、一方的な思いで……。けど今度屋敷でパーティーを開く事になったから、今日あのドレスを送りそれに誘おうと思っていたんだ。それと……一緒に私の思いも告げようと」

「それは……お気持ちお察しします」

察するに余りある若様の今の気持ち、コーデリアさんが同情の言葉を口にする。

実に腹立たしい事だ。よりにもよってそのような思いを乗せたドレスを盗むとは……果たしてそのような盗みをする輩は何者か。フェリちゃん達も険しい表情を浮かべる。

「酷い話だ……盗みと言うだけでも人の道に外れているのに……」

「つかドレスだけ狙うとか、犯人どんななん？ 手掛かりない系？」

「ああ、手は尽しているが中々……」

「……ゆるせんっ!!」

「うわあ!!? びっくりしたあ!!?」

突如大声をあげたのはコルワさんだった。その怒気を大いに含んだ声に俺も皆も驚き彼女から思わず一步距離を取る。

「二世一代の告白なのよ! 勝負時なの! 一大イベントなのよ! 恋が成就するかどうかって時にこの横槍はなにつ!!? 物語なら演出で済むでしようけどこれは現実よ、ノンフィクションよ、ただの犯罪行為よ! いいえ、演出にもなりやしないダレるだけの手抜き脚本よ! 誰よ考えたやつ!!?」

「お、落ちていてコルワさん! 脚本とか無いから!!?」

「第一私とララさん達のドレス盗んで如何する気なのよ……: 売る気!? 金に変えて好き勝手なんて冗談じゃないわよ! そんな事に使われるためにデザインしたんじゃないんだから! この人の気持ちもどうなるのよ!」

「あの、コルワさん落ちつ……:」

「いえ待って……:!! ドレスだけ狙ったとかそれつてもしかして若様の事知ってる?

若様の気持ちも!!? 本当に恋の妨害工作!!? どっちに、どっちによ!!?」

「どーしたのよコイツ……:」

「いや、わからん……:」

メドウ子がかかなり引いて俺の後ろに隠れている。星晶獣がドン引き、それほどまでに

今のコルワさんの様子は凄かった。

「こうしちやいらんないわ……こうなったら、団長さん！」

「え、はいなんですか?!? あ、ちよつと怖い、近いちか……ちよ、コルワさん目つき悪っ!!」

「おつと、ちよつと興奮しちゃったわね。顔筋が力んじやった」

ちよつと?!

「そんなことよりも！ 急いでドレスを取り戻すわよ！」

「……え、あつ?!? 俺がつすか?!」

「他に誰がいるのよ」

「いや、まあそうですけども」

「安心して、当然私も手伝うわ」

私も手伝うと言われてもなあ、それで一体何を安心しろと言うのか。俺が困惑し続けているとララさんが控えめに「あのく……」と俺に声をかけた。

「あ、なんでしようララさん」

「実は頼みたい事なんです……それこそドレスを探して欲しくて」

「Oh……」

どうやら始めからそう言う話だったようだ。

「申し訳ない団長さん、これは私から相談した事なんです」

「ララさんに続き若様が申し訳無きそうにして話し出す。」

「私も個人で動かせる人員で手掛かりを探っているけれど、中々その行方がつかめない今我々以外の力が必要だと悩んでいたんです……そんな私をみてララさん達に君達の事を聞いたんだ」

「あ、そう言うことですか」

「島について直ぐに申し訳ないのだけれど……どうでしょうか？ 勿論騎空団への依頼です。謝礼も十分に……だけれど、それ以上に私だけでなく、あのドレスを作ってくれたララさんやコルワさんのために力を貸してはくれないでしょうか」

「あー……まあいいですよ」

「ほ、本当ですか!？」

「俺が了承した事を意外に思ったのか、若様は喜びつつ驚いた様子だった。」

「別に断る理由もありませんしね。驚きはしましたが、俺達の元の依頼は、ドレスを届けるコルワさんの護衛”もある。コルワさんがやる気なら、まだ依頼は完了していない。コーデリアさん達もいいですよね？」

「何時も通りさ、団長である君の判断を信じよう」

「しよーがないわねえ……まあアンタがどうしてもって言うなら」

「だそうです。微力ながら力に成りますよ」

「聞きなさいよっ!」

意味も無い会話はスルーして若様の頼みをうける。

「お、おお……! ありがとう、感謝します!」

よほど嬉しかったのか、若様は俺の手を出会った時の挨拶より力強く握ると、ブンブン上下させて感謝の言葉を述べた。

「ま、まあ落ち着いて。それじゃあもつと詳しい話を——」

「そうと決まれば、行くわよ団長さん!」

「あ、い、っ!」

若様に更に詳しい話を聞こうとしたところ、横からコルワさんに腕をつかまれ引きずられてしまう。

「ま、まってコルワさん、まって!?! どこ行くの!?!」

「ジツとしても埒が明かないわ! 手がかりを探すのっ! ララさん達のいた宿を調べに行くわよ!」

「待って、ちょよ! 今から移動すんの!?! さっきここに来たばっかだ! ちょよ、うおおおっ!?! てか、力つよっ!?!」

「ワア〜オ(。D(;) コルワ姉張り切ってるう〜☆」

「いや、感心してる場合じゃないだろ！ 追うぞ！」

「ちよつと！ アタシを置いて行くじゃないわよ……！ ねえつてば……ま、待ちなさいよお——！」

「やれやれ……コルワ殿、中々に曲者か。場所も聞かずに……B・ビー追いかけて引き止めておいてくれたまえ」

「あいよ」

コルワさんの暴走に唾然としたままの若様達を残し引きずられて行く俺。そしてララさん達は、コルワさんが行くこうとしてる宿の場所を話してない事を思い出し、慌てて俺達の後を追ってくるのが見えた。

■ 実にてんやわんやであった。

■ 六 ドレスを追え!!

■ 島に着いたと思つたら、若様の屋敷に移動して、屋敷に着いたと思つたら即また市街へと逆戻りである。まったく落ち着きの無い依頼になつてしまったなあ。

「さあさあ団長さん！ 疲れてる場合じゃないわよ」

「元氣だなあ……」

若様から事件の事を聞いてからコルワさんが妙に張り切っている。そのアグレッシブさには参ってしまふほどだ。

「のんびりなんてしちゃいられないの！ このままじゃ若様の恋戦はバッドエンドを迎えてしまふわ……そんなの駄目よ駄目駄目よ！」

「恋戦で……」

「いい？ この世にバッドエンドは不要なの！ そんな物語お呼びじゃないわ！」

「物語って……人の人生ですが」

「人生だろうと物語だろうと幸せが一番でしょ？ ハッピーエンドがこの世の真理よ！」

その気持ちはわからんでも無いがこの人のハッピーエンドへの並々ならぬ思いは何なんだろうか。

「まあまあお二人共、それよりも宿に着きましたよ」

熱く自論を語るコルワさんに絡まれ続ける俺に苦笑しつつ声をかけるロロさん。若様はどうしても外せない仕事の集まりがあると言う事で別行動となり、ララさん達は俺達を追って一緒に来てくれた。

若様は「最後まで協力できなくて申し訳ない」と言っていたが本来の仕事も疎かにできないだろう。不安な事は俺達に任せておいてくれと言っておいた。

こうして二人が本来そのまま宿泊する予定であった宿へ来た俺達は、宿の主人に確認を取り被害に遭った個室へと入る。ただし調査にあたり秩序の騎空団の人間が立ち会う事が条件である。

「すみません、面倒おかけします」

「いやこちらこそすまない。我々が直ぐに犯人を捕えられればこうはならなかったのだが……」

立ち会う秩序の騎空団の団員は一人、ヒューマンの男性であった。

秩序の騎空団は大規模な取り締まり組織だが、自分達以外の人間の力を借りる事は珍しくはない。今回は特にこの島でも有数な資産家である若様からの頼みであるため、尚更すんなりと俺達による調査の許可が下りた。

「部屋は殆ど犯行当時のまま保存してある。許可なく物は触らないように、動かしたりもしないでくれ」

「わかったなメドウ子」

「だーかーらー！　なんでワタシだけに言うの!？」

理由は言うまでもないですよねえ？

それはさておきこの宿は物静かな街の裏通り側にある。部屋は至って普通の二人部屋、特に人が隠れたり出来るような小部屋も隙間も無く、裏通りに面した窓が一つ。

決定的な物的証拠は無く、しかし犯人と思われる足跡は見つかった。だがそれは島で一般的に流通する男性物の靴と思われ流通量が多く個人の特定は難しい。髪の毛や指紋など犯人個人を追えるようなモノも見当たらなかった。

「足跡の大きさから男と思われる、が唯一の証拠か」

「どうする相棒？ 調べるなら徹底的にやるけどよう」

徹底的つても既に秩序の騎空団やらの人達が既に徹底的に調べてるはずだ。俺は探偵ではないのだが……。

「……部屋の鍵はかかってたわけですよね？」

「はい、間違いないです」

外出時、間違いなく鍵はかかっていたと頷くララさん。この宿は外出の際に部屋の鍵を一時フロントに返却するため、戻った時に鍵を改めてフロントで貰っている事から閉め忘れと言う事は無いはずと言う。なお、フロントの帳面にも二人が外出し鍵を一時返却している事は記されていたので間違いないだろう。

部屋の木製扉は壊れており、ドアノブ側が裂けてこじ開けられた事がよくわかる。その事からも鍵は締まっていたのだろう。それなりの破壊音がしたはずだが、犯行当時にこの部屋の周りの部屋の宿泊客も外出しており、不審な音を聞いた別の階で洗濯の為にベッドのシーツ等を回収していた従業員が一人居ただけと言う。

部屋の窓の外は人気の無い裏通りであるため、目撃情報が無い事もありえなくはない。部屋の位置も二階、窓からの逃走も決して不可能ではないだろう。

不審な音、恐らく扉の破壊音を聞いたと言う洗濯物回収の従業員が駆けつけた時には既に犯人はおらず扉では無く窓から逃げたのではないかと秩序の騎空団の人は現在の線で調査中とのこと。目撃情報は無いが、唯一の犯人の痕跡と思われる足跡が窓のサッシ部分にもある事からそう考えたようである。

しかしオーダーメイドの女物のドレスを無理に袋に詰めたとしても、こんな所から逃げられるのだろうか。かなり目立つと思うのだが。

「うーん、わからん……」

「クロエバカだからこーゆーの無理い……（　・　ω　・　）」

「しかしこーこ以外を調べると言ってもな……」

フェリちゃんの言う通りこーこ以外で調べるような人も場所も無い。俺達はこの部屋から何かドレスを追う事が出来るヒントを見つけなければならぬのだ。

若様に見栄を切ったのは良いが、さてどうしたものであろうか。

「そう悲観ばかりする事は無い」

だが俺達が困っていると頼もしいイケメンの声がっ！

「コーデリアアさん？」

「状況は常に変わる。その変化の中一見失われたように見える手掛かりも、よくよく観察すれば見える事もある」

そう言うやコーデリアさんは、徐に部屋の扉へと移動して破壊されたドアノブ周りをよくよく観察しだす。

「……ふむ、ララ殿」

「はい？」

「くどくなつて申し訳ないが、間違ひなく鍵は閉めていたのだね？」

「え？ はい、それは間違ひなく」

「なるほど……そうか」

「何かわかりましたか？」

そう聞くとコーデリアさんは僅かに微笑み俺達に手招きをした。

不思議に思いながら期待感を持った俺達は、コーデリアさんの傍に近寄ると彼女は扉のある場所を指さした。

「この門を見たまえ」

「かんぬき……？（——ω——？）」

「鍵を閉めた時に扉をロックする所のこと」

「あ、なーる」

鍵を回すと飛び出る板状のパーツ、門の事を説明しその門をコーディネリアさんが指さしているところロエちゃんに言うのと彼女はしっかり理解したのか深く頷いた。

「そう、団長の言うようにこの扉の鍵のタイプは差し込んだ鍵を回転させ、そうする事で扉側にある門を壁側に引つ張り出してロックするわけだ」

「それが何かおかしいのか?」

フエリちゃんが指摘するようにその事はなんら不思議な事ではない。当たり前前の鍵の施錠機構である。

「私も門が出ている事は不思議に思わない。だが問題は……この門がそのまま綺麗に残っていると言う事だ。そこで……一つ聞きたいのだがよろしいかな?」

「うん? 答えられる事なら構わないけれど」

コーディネリアさんは秩序の騎空団の団員に何かを聞き始める。

「事件現場に来てからこの鍵の施錠の確認……と言うより、鍵穴を回したりと言う事や秩序の騎空団の人間かこの宿の人間は行ったのだろうか?」

「ふむ……? いや、確かそんな事はしてないはずだね」

「とすればやはりこの門は事件発生の時に飛び出ていたわけだ」

「だからそれが何が可笑しいって言うのよ?」

もったいぶるようなコーディネリアさんの言い方にメドウ子がプリプリと急かす。

「施錠のための門とは言え、無理な力が加われば曲がるか折れるかするはずだ。だと言うのにこの門は綺麗なままだ」

そこまで聞いて俺はハツとして一つの可能性を口にした。

「……侵入時、鍵は開いてた？」

だがそうなるならララさん達と宿側の鍵は締まっていたと言う主張が崩れてしまう。そう言うときコーデリアさんは「少し違う」と言った。

「鍵は締まっていたんだ。確かにね」

「それじゃあ一体……」

「つまり……一度誰かが開錠したんだよ」

「んな……っ!？」

コーデリアさんの発言に秩序の騎空団の人はかなり驚いた様子だった。いや、俺もB・ビー達も驚いている。

「まだ予想でしかないが……犯人はまず部屋へ来て周りに誰もいない事を確認する。そして何食わぬ顔で部屋の鍵を開けたんだ。そのまま部屋に侵入し急ぎ目当てのドレスを見つけ盗み出す。だが逃げだす際に扉を閉め、工具か何かで扉を壊したんだ。何者かが扉をこじ開け、盗みを働きそのまま窓から逃げたと思わせるために。だが門が綺麗なままと言う事は、うっかり鍵を閉めずに壊したのだろう。それに気が付いて慌てて鍵を

閉めなおしたんじゃないかな？ そのままでは一度鍵を開けた事がバレるからね」

え？ なにこの人凄い……。

スラスラと推理を語るコーデリアさんに感心すると言うか、唾然とする他ない俺達。扉を見ただけでそんな事までわかるのかこの人。

そう言えばこの人リユミエールの遊撃部で諜報とかもしてるとか話してたな……流石である。

「門が綺麗な状態である事から、犯人はこう言った盗みに不慣れな素人。だが盗む方法等の知恵を貸す協力者がいた可能性があるな」

「し、しかし……だとして一体誰が何のために……」

「それは直接確かめよう。秩序の騎空団の方から話を持って行った方がスムーズだろう。一つ頼めるだろうか？」

「あ、ああ……かまわないが、何をすればいいんだ？ その言い方じゃ誰かに話を聞くようだが」

「それは……真つ先にここに駆け付けたと言う唯一の人間、扉の破壊音を聞いた従業員だよ」

鋭く光るコーデリアさんの瞳。さながら名探偵。そんな彼女を見て俺は思った。

もう全部コーデリアさん一人でいいんじゃないかな？

七 黒騎士の憂鬱

一方、団長達がドレスを追ってわちやわちやしているその頃――

七曜の騎士、黒騎士は憂鬱だった。かれこれ30分、椅子に座り手を組んで軽く頭を抱えている。

場所はガロンゾ、そこに停泊する帝国戦艦、黒騎士執務室。資料書類が積み重なる中、一向に手は進んでいない。それほどに今黒騎士は憂鬱だった。

(……連絡が無い)

ガロンゾを離れる事が出来ない原因の一端。星晶戦隊(以下略)の団長が星晶獣に攫われ六日目。同行させたスツルムとドラंकからの連絡が無かった。

二人が島を発つ際に団長の確保が完了したら連絡を寄こすように言っていたのだが、その連絡が無い。まだ団長が確保出来て無いと言うことなのか、それともそんな余裕も無いと言う事なのか。

二人共腕の立つ傭兵であり、救助部隊中心メンバーである星晶戦隊(以下略)の面々の中には星晶獣も居るために、よほどの事態にならなければ二人の身に危険が迫るといふ事にはならないはずである。

ならばなぜ連絡は無いのか。二人の心配と言うよりも、単純に状況が知りたい黒騎士にとつては気になる事だった。

だが更に黒騎士の頭を悩ませる事は別にある。

(あいつらの艇も本当に大丈夫なのか……)

ガロンゾ釘付け状態の重要な要因、星晶戦隊(以下略)の騎空艇エンゼラであるが、部下からの報告で改修に向けての解体と必要な資材の調達が終わったとの連絡があった。

そこまで聞いた黒騎士は、思いの外早く進むエンゼラ改修作業にホッとしかけたが、次に部下から聞いた「職人の何人かが巨大なドリルをつけようとして揉めたらしい」だとか「戦艦クラスの機関を詰め込もうとした」とか「何時の間にか船内をダンジョン化させようとする仲間がいた」だとか「材料を生み出してる星晶獣が可愛かったです」などの訳のわからない報告にやはり頭を抱えた。最後の報告に至っては、最早単なる個人の感想である。その部下が怒られたのは言うまでもないだろう。

作業自体は無事(?)開始されたようであるが、しかし不安要素が多いに残る改修を考え胃痛すら感じ出す黒騎士。

団長の幻が現れ自身に「貴方も胃痛仲間だ」と笑顔で手招きをするような気すらしたが、元々その妙に地味な見た目の所為で幻の様な印象しかない事を思い出すと少し笑ってしまふ。

「……んっふ、ふふっ……むっ」

幻の団長が「ああ……」と霞の如く消える様を想像して更に失笑してしまう。その声は静かな執務室に広く響き、黒騎士は慌てて周りを見渡した。しかしここは自身の執務室、他に誰かがいるはずもない事を思い出したので平静を取り戻した黒騎士であったが、出入り口の方からカタリと物音が聞こえギョツとしてその方向を向いた。

「あ……」

そこには扉を少し開けその隙間から黒騎士を覗くオルキスの姿があった。

しばし、両者は無言となる。そして先に黒騎士が口を開いた。

「……人形、何時からそこに居た」

「……思い出し笑い？」

「違う、それより何時から」

「……笑って」

「ない」

「わら」

「ない、と言っている。それより何時から……いや待て、貴様どうしてここにいる。部屋の鍵は閉めた筈だ」

「……おや、おや、おや」

「おい、おい……おい待て、人形！ 待たんか！」

脱兎の如く逃げだしたオルキス、それを追う黒騎士。艦内に発令される「第3次人形捕縛作戦」開始の合図。駆ける帝国兵、怒鳴る黒騎士、追跡を交わすオルキス——ドラックとスツルムを欠いた状態のこの逃走劇は艦内で2時間続いた。

ここ最近の黒騎士の乗る戦艦で見られる日常であった。

ちなみにスツルム達からの連絡が無いのは、単にスツルムに連絡等を任されたドラックが手紙を出し忘れただけである。しめやかにドラックの尻に剣が刺さる事が決定した。

ハピネスチャージの“瞬間” 後編

■ 一 追及タイム

その宿は表通りにあるような高級ホテルとは違い、幾つかある主に素泊まり向きな小さな宿である。フロントの一階を含め3階建て。宿泊のための客室は二階から三階、部屋数は全部で十室しかない。

そして、宿の規模に見合った少ない従業員の中にその男は居た。

男は宿で主に洗濯仕事に従事している。毎日宿泊客が使い終わったベッドのシーツ等を回収しては洗濯し、そして部屋へと戻して整えるのが仕事。

なにか大きな売りがあるわけでも無い、しいて言うならば素泊まり故の宿泊料金の安さが魅力のただ寝泊まりが出来るだけの宿では、常に部屋が満室になる事は珍しく洗濯だけなら男一人でも仕事は十分に回る。

そんな男が今日も黙々と自分の仕事である洗濯作業を行っていると、突然見知らぬ男

女が現れた。

「ああ、あんたか、洗濯係の人って。探したよ」

平凡、地味と言って良い印象の青年。しかしよく顔を観察すれば若く見えるため、きつともう少し若い少年かもしれない。

それともう二人、灰色にも似た髪をなびかせる不機嫌そうな少女、それと蒼い髪のルーンの少女。

「君達、ここは従業員以外は」

「秩序の騎空団の人が呼んでるよ」

男は氷水を頭から被ったかと錯覚するほどにゾツとした。

「えっ？」

「上の階、あの……泥棒の入った部屋で待ってるから。俺達あんた呼んで来いって頼まれたの」

「な、なんで……」

「さあ？ まあ行つた方が良いんじゃないですか？」

きつと自分は今挙動不審だろう。そんな姿を見られたくはない。男は少年の脇を通り過ぎ、逃げる様に秩序の騎空団の団員が待つあの事件現場の部屋へと向かった。

自分は動揺を隠せていただろうか？ そう思いながら男は、オドオドと歩みを遅く進

むが向かう先は遠くなるばかりか近づく一方だった。

「おいおい、どこ行くんだ？」

そう声をかけられた時、男は空気を吸い込んで「ヒユウ——ツ」と声にならない悲鳴を上げた。いつの間にかあの部屋の前に来ていたが、動揺のあまり通り過ぎようとして部屋にいた秩序の騎空団の男に引き留められたのだ。

「大分顔色が悪いようだけれど、大丈夫かね？」

大丈夫、と答えてはみせた。だが実際は全く大丈夫ではない。心臓が破裂するんじゃないかという程にバクバクと音を立てて動くのが分かった。

顔には脂汗が流れ出し、視線もキョロキョロと落ち着きがない。

「そ、それより何の用でしょう？　自分は仕事が……」

「ああ、突然すまないね。ちよつと事件の事で聞きたい事が出来たんだ」

そら来たぞ、と自分が予想した通りの質問が来て身構えながら男は平静を保とうと心掛けた。

「じ、事件の事ならもう話しましたよね？」

「うむ」

「わ、私が扉の壊れる音を聞いて、それで駆けつけたらもぬけの殻で盗みがあったと主人に知らせに行った……そ、それで終わりですよ？　それ以上私が話せる事は何もありません」

「しませんよ」

「それは勿論聞いたよ」

「じゃ、じゃあ何を聞きたいって言うんですか？」

「それは——」

「それは私からお聞きしよう」

不意に部屋から一人、ぬらりと眉目秀麗な女性が現れた。よく見ると他に何人か見知らぬ人間が部屋に揃っている。

「へ、へえ？ この人達は？」

「彼らとはある騎空団の皆さんで、彼女はその団員のコーディネアさんと言う方だ」

「き、騎空団？ そんな人が一体……」

「まあ色々と理由はあるが、君に尋ねたいのは部屋の扉の事でね？」

部屋の扉。その言葉がコーディネアの口から出て来た時、男は一瞬視界が真っ白になるような気がした。

「と、扉ですか？」

「そう、この扉だが挟じ開けられたにしては不審な点があつてね」

落ち着け、まだバレていない。

男は自分に強く言い聞かせた。

「不審ですか？ わ、私にはどこも……ただ壊れた扉にしか」

「私もそう思ったのだがね。しかしどうもおかしいのだ」

「な、なにがおかしいのか……あはは、私にはさっぱり」

コーディアの視線を受けると心臓を掴まれたように感じる。呼吸が荒くならないように気を付ける。だが額から流れる脂汗は徐々に量を増やした。

「ちよっ!? (; 。 。) おにーさん顔色ヤバくね?」

その様子は露骨に表に現れたらしい。騎空団の一人と言う若い日に焼けたエルーンの少女は心配しながらギョツとしていた。

「だ、大丈夫……今日は少し具合が悪いだけだから……」

「いいえ、本当に顔色が悪いわ。大丈夫? このハンカチで汗を拭きなさいな」

顔色の悪さと汗の量、それを見て心配になったのもう一人騎空団の面々に交じるエルーンの女性の一人が男に一枚のハンカチを手渡した。

「こ、これはどうも……」

確かに自分でも汗を拭きたくてしようがなかった。男は断る事はせずに彼女から手渡されたハンカチを使い汗を拭く。

肌を伝う不快な滑りがなくなり、幾分か気分がスツとした気がした。

「それで、聞きたい事って言うのは扉の事だけですか？ な、なにも不審な事無いです

よ。ただ乱暴な泥棒が壊したんでしょう。鍵がかかっていたらそうするんじゃないですか?」

「ふむ、確かにそうだね」

「でしよう? はは、何かと思えば。こんな……いえ、勿論力に成れる事なら幾らでも協力しますけどね」

男はこれで話は終わったかと思いいここで話を切り上げ戻ろうとした。

「いや、まだ聞きたい事はあるんだ」

しかし直ぐコーデリアに呼び止められてしまう。

「ま、まだ何か?」

「実は君は唯一扉が壊される音を聞いている人間と言う事らしい。その音をね、詳しく教えてほしいんだ」

ジワリ、と額に脂汗がまた出て来た気がした。手に握ったままだったハンカチを使いもう一度汗を拭く。

だが今度は先ほどに比べてあまり気分が良くなならない。汗が止まらない。一気に不安が溢れ心を支配し出した。

「音って……こう、バキイっていうのかな……わかるでしよう? 木製の扉だから、木が割れるような音ですよ」

「かなり大きな？」

「ええ、そりゃあ……上の階にいた私も聞こえたわけですし。驚いて仕事中断して走ってきましたから」

「そんなに慌てたのかね？」

「そうですよ？ ベッドのシーツを回収してたんですけどね。籠置いて急いで下に降りましたよ」

「なるほど……それ程に大きな音で抉じ開けたのか。では当然扉もかなり壊れるわけだ」

「当然も何も……ほら、ドアノブの方までヒビが入って……」

コーデルリアがまったく何を言っているのかわからないが、男は扉の損傷が激しいドアノブ部分を指さし動きを止めた。

「……どうかしたかね？」

「い、いや。改めて見ると、なんて言うか……」

「うん？」

「あ、いや……あ？」

扉は確かに壊れている。幾つかの木片も飛び散っただろう。だが上の階に居る人間が聞こえる程の力で抉じ開けたにしては、実に軽微な損傷に見えた。

そして、何よりも鍵の門が――。

「しまっ——ッ!？」

しまった。口からその言葉が出来る前に男は口を閉じた。

下唇を噛んでしまい痛みが走るが、それにかまう暇はなかった。

「しまっ? ……なんだね?」

「…… “閉まつ” てた扉をね? こう、開けたんですよきつと、犯人は」

男は工具を持つ真似をして扉を開ける動作を試みさせた。

「それは?」

「へ?」

「扉を開けた道具、参考にだが……何だと思うね?」

「何ってそりゃあ……」

男の何も握っていない両手を指さすコーデリア。男はキョトンとして答えた。

「ボールですよ」

その時の男の声は、妙にはつきりとしていた。それを聞いてコーデリアは目を細める。

「……まるで、断定するように言うね」

「は……? あ、いや! 工具で挟じ開けたとは聞いてたから……そう言う時は、ボール

とかそう言うのでしょうか？ ……え？ いやいや、まさか……さつきから、なんですか
貴女……ちよつと、まさか私を疑つてるんですか!？」

コーデリアの視線は完全に自分を疑つてゐる。そう気付いた男の額はドツと更に汗
が流れ出した。ハンカチで拭いても止まらない。余計に不安が募る。

いや焦るな、まだ気づかれてない……男は更に平静を装つて見せようと努めた。しか
し心臓の鼓動が早くなるばかり。

早くこの場を去りたい気持ちで一杯だった。

「どんな騎空団の人か知らないけど……秩序の騎空団の人ならまだしも！ ……じよ、
冗談じゃない。洗濯も溜まつてるんです。戻らせてもらいますよ！」

無理やりかもしれないが部屋から遠ざかる。これ以上此処にしていると自らボロを出し
てしまう気がした。

「おつと、もうお帰り？」

だが仕事場へと戻ろうとすると前方から自分を呼びに現れた少年と少女がいた。し
かも自分の仕事道具として幾つかある洗濯回収用の大きな籠を持って。

「き、君それは……駄目じゃないか！ 仕事に使うんだよ！」

「宿の主人には許可貰いましたよ。それよりもこの籠、調べさせてもらいましたから」

「し、調べた……？」

しっかりと両手に手袋までつけ、余計な汚れが付かないようにした少年は今は空の籠の中から何かを取り出して見せた。

それは、十数センチ程の木片だった。

「この藁編みの籠ですけど、底の網目の隙間にね……食い込んでたんですよ、洗濯物で押し込まれたのかな？ これ、何だと思えます？」

「それは……それ、まさか」

「……確認しましょうか」

息が荒くなった男を無視し、少年はその木片を持ったまま部屋の扉に近づく。

この宿の客室の扉、それらは色で分けられていた。赤青黄の三色のみ共通にして、二階から「赤・青・黄・緑・茶」、三階が「赤・青・黄・白・黒」と並ぶ。数も少ない客室のためか「2（二階）の赤」や「3（三階）の白」の様に、番号ではなく色の方が分かりやすいと言う理由と主人の遊び心である。

ララ達が泊まった二階の部屋、そこは宿の従業員の間では「2の緑」と呼ばれる。そしてその緑の扉は、宿に一つだけしかない。

壊れた扉に少年が手に持った木片を近づけた。

「ああ、同じ色だ」

木片の表面は緑だった。全くの差異の無い同色。木の材質も同質に見える。

「それも、形がほら……もしかして丁度ここピッタリじゃないです？」

「わ、マジだつ！ ピツタンコじゃん☆」

「ちよ、ちよつと……！　だ、だから何だと……私の仕事道具からそれが出たからつて、そんな」

「……君は先ほど、扉の破壊音を聞いて仕事を中断して駆けつけたと話したね？」

「へ？」

扉の破片を見つけて盛上るエルーンの少女に文句を言おうとしたが、コーディネリアがスツと割り込んで話す。

「大きな破壊音、それを聞いて仕事を中断して駆けつけたと」

「い、言いましたよ？　それより彼等を止めて欲しいな……失礼ですよ！　急に、こんな

……犯人扱い」

「仕事を中断して……　籠を置いてから駆け付けた」とも話していたはずだが？」

ピタリ、と男は石像の様に動きを止めた。

「上の階にある筈の籠、その籠に何でその破片が挟まってたんだろうか？」

「それは……それは……」

「後ですわね」

コーディネリアと入れ替わるように少年がまた喋りだす。

「この宿、殆ど使っていない倉庫があるそうで……普段使いもしない工具やらなにやらを仕舞ってるそうですね。これも宿の主人に許可貰って見せてもらいましたけど……塗れで床まで真っ白でした」

「埃臭くって最悪だったわ……!」

「まあまあ、後で埃を掃ってあげるから」

宿の倉庫を見て来たと言う少年。男は倉庫と聞いた更にゾワリと背筋が凍る気がした。

「あの倉庫、今確認して来たら一個ボールが入ってるんですよ。宿の主人が言うには、数年使った記憶がないって言うようなボールでした。だからか凄く、分厚く埃かぶって……けふっ! まだ鼻に残ってる……」

「私達はボールには触らずにそのまま倉庫に置いてある。見ればわかるがそのボールにはハッキリと誰かが、それも極最近に……両手で握った後があった。宿の主人が使った記憶も無いと言う、乾いた布が軽くこすれる程度じゃ払えない程積もった埃の層にクツキリとね」

「それと、床の埃にも足跡があったわ。アタシ達とは違うのがね。サイズなんかも、この部屋で見つかったって言うのとアンタの靴とよく似てたわね」

少年と少女達がスラスラと語る事を否定しようとした。しかし、言葉が出ない。貰っ

たハンカチを握る力が強まる。

「……別の場所で、詳しく話を聞いても？」

秩序の騎空団の団員が男の肩に手を置いた。

ドツと——溜め込んで、塞き止めようとしていた感情が溢れ出した。

「頼まれたんだ……ッ!!」

男はその叫びをもっと早く言いたかったと、その時に気が付いた。

■ 二 推理終了、物理で解決へのカウントダウン

「あれで終わりじゃねえのかよ……!」

なんか宿の従業員の男が自供ししたのは良いのだが、どうも話がそれで終わるような事ではなくなってしまった。

そのため俺達は大急ぎで宿から別の場所へと移動している。

「なんかさつきまで作風と言うか世界観も変わってたな。なんだよ、あのなんちゃってミステリーは？ これはお気楽コメディじゃなかったのかよう」

「団長、B・ビィは何の事言ってるんだ？」

「気にしないでフェリちゃん。あいつしよっちゅう謎の怪電波拾ってんだ」

「でんぱ……？」

B・ビイの発言は無視。だがあの男が自供したおかげで状況が一気に動き出したのは間違いはない。

男はあの場合でヒンヒンと涙声になりながら自分のした事を話し出した。彼はある人物に頼まれ、自分が勤める宿に泊まったララさん達の持ってきたドレスを狙ったのだ。

二人が宿に来て部屋を一度出た時、いつも通り部屋の洗濯物回収の仕事をしているように見せ、そつと一時返却された「2の緑」の部屋の鍵を持ち出した。彼は仕事の関係上、鍵を持っている事は不思議じゃ無いため誰も気が付かなかった。そして洗濯回収籠には幾つかの洗濯物とその中にボールを潜ませそのまま彼は部屋へと向かい、誰もいない事を確認し鍵を開けた。

その後彼は部屋を物色。ドレスを見つけると衣類が入っていても不自然では無い洗濯回収籠へと詰め込んだ。窓を開けサッシに軽く足跡を付け部屋から退散しようとした。そして扉を壊し物取りに見せかけようとしたが、コーデリアさんの予想通り彼は鍵を閉めずに扉を破壊、慌てて閉めなおして逃げて行ったために無傷な門が飛び出たままとなった。

「一々詰めが甘い、ただの小心者、今まで犯罪行為なんてした事がないのも予想通りでしたね」

「遅かれ早かれ捕まったらうね。ボールの後処理もお粗末、仮に手の後を残さないように処理しても、埃の取れたキレイなボールが埃を被った倉庫に残るから誰かが気が付いたらう」

「しかし……借金の弱みとは」

「気の毒と言えばそうだが」

コーデリアさんも複雑そうだった。

男は借金の弱みがあり、それを理由に今回の盗みを働いたらしい。借金と聞いて俺の心もひっそりとダメージを受けた。

そしてその男が借金をした相手、そして盗みを強要した相手と言うのが――。

「別の商家の資産家さんとはね」

「しかも理由が若様への妬みか」

「狙った女性が一緒と知ってか……阿保らし」

この街でかなり強い影響力を持つ人物、それは今現在あの若様である。若く自らをまだまだ未熟と語る人だが、それでも今はリタイアした父の起こした数々の事業を引き継ぎ、大きな商会として続いている事を考えれば十分に敏腕だ。あの人はこの島に根付いたコミュニティを重視した、市民に親しまれる商売を心得ている。

そしてもう一人、街で強い影響力を持つ資産家がいる。元は小さな商家だったが、こ

こ数年で異様な成長を遂げ若様の商会に次ぐ程の商会となつてかなり羽振りがいいとか。

しかしその分こちらに関してはいはあまりいい噂は無いらしい。秩序の騎空団の人も、その商会の名が出た途端かなり嫌そうな顔をしていた。その男は若様と正反対に、比較的島の外との取引をメインとした商いを行う。ただその取引のルートが非常に怪しいらしく、不法に商品を取引しているのではないかと言われており、秩序の騎空団もそれを感じてずっと調査していたと言うのだ。

またその男は高利貸しも営んでいるようで、そのやり方が実にあくどいらしい。そのせいで何人もの人が島を出るはめになつたとか言う噂もあつた。

そしてどうやらその男は、若様が告白しようと思いを寄せているさる商家のご令嬢に同じく夢中だそうで、嫌がらせか告白の阻止のためかドレスを盗ませる事を考えたらしい。

男は丁度ララさん達の泊まる宿には、自分の所から金を借りた一人が働いている事を知つた。それこそ犯人の男であり、ちよつとした事で金を借りたのだが、それが何時の間にか尋常ではない額になつていたらしい。そして借金をネタに脅され仕方なく犯行に及んだと言う。

秩序の騎空団としても何とかしたい人物だそうだが、あくどい噂だけでは捕まえられ

ず、被害の届けも出ていないため中々捕らえる理由が見つからなかったらしい。届けが無いのも被害者が金を借りて後ろめたい気持ちもあったからか、脅されたのか。

なんであれどんな場所にも悪党は居るが、つまり今回はその悪徳商人がそう言う立ち位置と言う事だ。

「厄介なのは、その野郎は若様がコルワさんとララさん達に依頼を出してドレスを作つて貰つた事を知り、しかも宿泊する宿まで知るほどの情報網を持つてる事だ。多分若様が今日告白しようと思つてたのも知つてる可能性があるな……」

「なんて野暮な恋の妨害工作……そうこうしてる内に横から搔つ攫おうつて魂胆ね!? ゆるせん、ただじゃおかないわ悪徳男め!」

打倒悪徳男、ドレス奪還へと向けて燃えているコルワさん。

「しかし助かりました。まさか相手の気分を変えれるとは思いませんでしたよ」
「ちよつとだけよ。ほんのちよつぴり気分を操れるだけ」

犯人を追い詰める直前にコルワさんが話したのだが、彼女は自身の魔力を込めた糸を通した衣装、或いはハンカチの様なものを介して相手の気分を少し操れるとわかった。あの犯人の男の自供はこの人の「能力」が非常に重要だった。そこでさり気なく犯人の男にハンカチを与え、そこから彼の気分を「ちよつぴり」操つたのだ。良心の呵責、自己嫌悪——罪を犯した人間が持つ、負の感情を少しばかり強くした。そして男は耐え

切れずに自白したのである。

「ただこれ自白強要になりませんか？」

「ハッピーエンドのため致し方なし」

「おいおい」

「冗談よ！ 気分変えただけで嘘を言わせたわけじゃないし、秩序の騎空団の人にも許可貰つてから力使つたから平気。それよりも急ぐわよ！」

そんなわけで俺達は人込みをかき分け走っていた。

男の自供から盗みを強要した黒幕的存在を知った俺達は、今回を機にその悪徳男を捕えたいと考え応援を呼びに行つた秩序の騎空団の人とは一旦別れた。ララさん達も安全を考えて秩序の騎空団の人に付いて行つてもらつた。

急ぐ理由としては、その問題の男が今いると言う高級ホテル、そこでは今島に住む商人達が集まる懇親会が開かれようとしている。

そしてあの若様もその場へと向かつているのだ。彼が外せない約束と言っていたのは、その懇親会の事だった。おそらく噂の令嬢とやらもそこに居るのだろう。

「つか、ここまで急ぐひつよーあんのおくっ!! ((。 ;ノ)ノ」

「相手がどれだけ件の女性に夢中か知らないけど、同じ場所に若様がいる事が心配だ！ 情報に敏いようだから、あの犯人の男が捕まつた事も連絡が行つてるかもしれない。

欲深い馬鹿は焦ると何するかわからないのが厄介な所だからなあっ！」

素泊まりの宿と違い懇親会場のホテルは街で一番の高級ホテルだ。遠くからでもその屋根が見える。目印には丁度良いそのホテルも、いざ目指すと遠く感じる。

「この島に……着いてから……！　移動してばっかじゃないのっ！」

「頑張ろうメデューサ……！　もう少しだから！」

「んもお——ッ！　メドウシアナに乗ればこんな距離一瞬なのに——ッ！」

「こんな街中で通常形態のメドウシアナで移動できるか！　騒ぎになれば野郎を見失いかねないからな！」

騒ぐメドウ子にそれを宥めるフェリちゃん。街中を走り回るため、現在メドウシアナはメドウ子と一体化している。こいつの不満も今回ばかりはわかるが、しかしこうなつてしまった以上仕事として続けなければならないのが騎空団の辛い所。

街の人も騒がしい変わった集団が走っていると思つた事だろう。

「見えたぜ相棒、ホテルだ！」

B・ビイの指さす先には目的のホテル入り口があつた。遠目からでもわかつたが、入り口に高級そうな服を着た男女が集まり中に入つて行くのが見える。

「懇親会はまだ始まつてないか……！」

若様と令嬢は無事であると願いつつ、俺達はホテルの中へと飛び込んだ。ホテルの口

ビーは一般宿泊客と懇親会のメンバーでござった返している。

「懇親会の会場は……!」

「あ、だんちよ! あれあれ、多分あれそーじゃない!」

クロエちゃんが指さす方には、身なりの良い人間達だけが入って行く大広間への入り口があつた。入口脇には「――商会主催 懇親会 会場」と書かれている。その商会の名前は、秩序の騎空団の人から聞いた悪徳男が責任者の商会の名だ。そこで間違いないとわかり入口へと向かい中へと入ろうとした。

「あ、お待ちをお客様!」

「へ!?!」

だが直前でホテルの従業員に呼び止められてしまった。

「こちら本日特別なメンバーのみが参加する懇親会となっております。入場の際は招待状をお見せください」

「しよ、招待状!?!」

意外な所で足止めを食らう事になった。そんなもの当然持つてない。

「お、俺達秩序の騎空団に頼まれて来てるんだけど……この会場にいる人に用事があるんだ。今日の主催者の人に!」

「それは……でしたら何か確認のとれる物はお持ちですか?」

「ああ……つと、コルワさん！ あの、若様、あの人のえつと……商会の！」

「——商會】よつ！」

「そうそれ！ あの【——商會】の若様もここに居る筈だ！ 俺達あの人の依頼受けた騎空団でその用事でもあるんだよ！ その人呼んでくれれば確認できるから！」

「あの商會の……？ でしたら……あ、いえ申し訳ございません。【——商會】の方はまだいらつしやつていないので、もう少しお待ちいただいてからでよろしいでしょうか？」

「マジか……」

なんてこつた。ここに若様が居ないと言う事は、まだあちらは問題は起きてない筈だ。だが令嬢の方は……。

「おや、団長さんかい？」

なんとか中に入れないか、ここは交渉の上手いコーデリアさんに託そうかと思つた時、後ろから爽やかな声が聞こえた。

「……流石イケメンさん。登場のタイミングもわかつてる！」

「え？」

そこには状況を知らぬ若様の姿があつた。



三 懇親どころじゃない

偶然若様と合流できた俺達は会場内へと無事に入場。そしてすぐに【――商会】の會長である悪徳男が居ると言う控室に向かった。

「本当に、【――商会】の……あの人が？」

俺の横を早足で歩く若様は、不安と怒りと疑いの混じる複雑な表情を浮かべていた。

「ドレスを盗んだ男の言葉を信じるならですけどね」

「けどおゝあれってほぼ確定じゃね？ とくにパチこいてる感じ無かったし」

「俺もそう思うけどね」

クロエちゃんの言うように、ほぼその男が「黒」と思う。しかし確認もせず問答無用で「御用」にはできない。懇親会が始まってからでは無用な混乱も招く事になる。とにかく急ぎ確かめる必要がある。

若様は俺達の報告を聞いて、俄には信じられないと言った表情を浮かべたが、すぐに思い当たる節があるのか、一先ずその男に会う事になった。やはり悪い噂の話は若様達にも届いているのだろう。

ララさん達と現れ、若様の屋敷まで案内してくれたあのエルーンの御付の人も居たのだが、そちらは念のためにと例の令嬢の方へと向かってもらった。

「あの人の噂は色々があるが、ただの噂でしかないと思って……いや、思うようにしていた。どんな人であれ、小さな商家から大きく成長させた人だ。私も見習うべき所があると付き合ってきたが……」

「それが間違いとは思いませんが……まあそれこそ若造の俺が言うのも可笑しいですけど、世の中『噂通りの人』もいますよ。悲しいかな」

そして俺は噂通りではない。何時か払拭してやるからな、あんな噂。

「その男の屋敷には秩序の騎空団の人達が向かつてます。おそらく盗まれたドレスはそっちでしょうね。こっちにも直ぐ来るとは思うけれど、一応俺達で身柄を押さえておきたい」

まだドレス盗難の犯人逮捕の知らせが行って無い事を祈りながら進む。まだ廊下だが、そこから見ても分かるほどに控室が豪勢だ。流石高級ホテルである。

「つかここ控室なんだ……もうこの時点でうちの村の家軽く超えてんじゃん……」

「各国要人も利用するホテルだったはずだからね。一泊の素泊まりでも軽く数万はかかるよ」

「そマツ!? ク、クロエのお小遣いじゃ全然たりない……。(ム。ー。ー)」

コーデリアさん情報を聞いて仰天するクロエちゃん。俺もびっくりだよ。一生縁なんて無いなこれは。

「入れただけ運が良いと思うかね。そら、着いたぞ」

「ここがあああの男の控室ね！」

「うん、落ち着いて下さいねコルワさん？」

幾つも並ぶ控室の扉、その内の一つの前で立ち止まる。扉の表札、そこに挟まれた紙には中に居る人物の名前が書かれている。その名前は間違いなく、あの悪徳男の名前だった。

「私と呼ぼう。何度も話した事があるし、警戒されないはずだ」

「頼みます」

「うん、では……」

若様が扉の前に立ち、扉をノックした。そして凜とした表情で中の人物の名を呼ぶ。だが奇妙な事に返事がない。不思議に思った若様は、もう一度扉をノックして名を呼んだ。

「……おかしいな、席を外しているのかな？」

「どうするのよ？ まさか戻って来るのを待つなんて言わないわよね？」

「当たり前だ」

メドウ子の言うように、ここで大人しく待つなんてやってられん。

試しにドアノブを回すが鍵が掛かっていた。控室に貴重品を置く事もあるため、防犯

上外からでも施錠可能のようだ。まあ当然か、高級ホテルだし。

「ぶち破つてやろうか？」

「馬鹿言うなB・ビー。高級ホテルの扉だぞ、弁償にでもなつたら幾らするかわからん。フエリちゃん」

「なんだ？」

「ジジに頼み事、小柄で素早いからね」

俺がそう言うのと、フエリちゃんはニヤリと笑つた。

「そういう事か、任せろ。おいで、ジジ」

フエリちゃんがジジを呼ぶと、何も無い所から青白い炎があがり、それが徐々にウサギのような姿に変わる。

「おお!? そ、それは」

「彼女の家族ですよ。ジジ、頼み事あるんだけど頼めるか？」

「――！」

突然現れたその存在に若様が驚く。

ウサギのような幽霊ジジ、フエリちゃんのペットであり家族である幽霊の内の一匹。相変わらずモフモフ可愛い奴である。ああ、可愛い。

「この扉の中にこっそり入って中確認してくれ、幽霊で小柄なお前なら気付かれにくい。

もし人が居なきゃ教えに戻って、ついでに鍵も開けてくれ。多分中からなら鍵は要らな
いはずだ」

「――!」

「ま、また消えた!」

「ふむ、流石『幽霊』と言う事か」

器用に耳を曲げ、まるで「了解!」と言うようにアピールすると、ジジは姿を一旦消
していった。若様は再度驚き、その幽霊ならではの方法にコーデリアさんは感心してい
た。

そして数秒の後、ドアノブからカチャリと解錠音が聞こえた。すると扉が開くより先
に、俺達の目の前にジジが再び姿を現した。

「――!」

「お、ありがとな。それで中は」

「――!!」

ジジは慌てた様子で中の様子を簡潔に報告した。それを聞いて俺とフェリちゃん
は急いで扉を開けた。

「くそっ!?!」

「なによ、どうかしたの!?!」

「中はもぬけの殻だつてよ！ それよりも……！」

控え室へと入るとそこには既に誰も居なかった。そして部屋に置かれていた備品等が床に転がり荒らされている。

「こゝ、これは……！ 一体なにが!？」

「これは物取りじゃないな……争つた形跡がある」

ただその部屋の様子に驚く若様。だがコーデリアさんの行動は早く、床に落ちている何かを拾い上げた。それはチエーンが千切れ、壊れた女性物のネックレスであった。

「千切れて首から落ちたのだろう。誰かと争つて、その時に」

「女性が誰か居たつて事か」

「それは！」

悪徳男の控え室に落ちているそのネックレスを見て若様は悲鳴の様な声を上げた。

「知っているのですか？」

「彼女のだ……間違いはない、よく似合っていたから覚えている。パーティーではよく身に着けていたんだ」

「彼女つて……まさか……！」

「若様ッ！」

次に声を上げてエルーンの御付の人が駆け込んでいた。酷く慌てて息も荒いので

走ってきたのだろう。彼も部屋の様子を見てギョツとしていた。

「こ、これは……」

「わからない……それより、どうしたんだ？ 彼女の方は」

「そ、そうでした！ 実は姿が見えず【家】の方にお嬢様の居場所を聞いた所、【商会】の会長に少し前に呼ばれたと……！」

「そんな……!? では、彼女は！」

御付の人の話にショックを受ける若様。だがその直後、ホテルのロビーから人々の悲鳴が聞こえて来た。

「今の悲鳴は……」

「……令嬢も心配だが、一度ロビーに戻ろう」

令嬢の身も案じながら、コーディネアさんの提案を聞き俺達は急ぎ引き返していった。

■ 四 モンスター in the ホテル

■ 「た、助けてくれ！ 魔物が……！」

「G O A A a a !!」

「うわああつ?!」

団長達がロビーへと戻った時、その場にいる人間達はパニックに陥っていた。

行方をくらました男と令嬢、その二人を追うよりも先にロビーから聞こえた悲鳴。皆で戻ると、広いロビーには無数の魔物が溢れて人々を襲っていたのである。

「なんと言う事だ……こんな数の魔物がどうしてここに!?」

その光景に若様は困惑していた。街の中心地、しかもこのホテルのロビーでこれ程の魔物が現れるのは普通ではない。その事は団長達もわかっていた。

「次から次へと……くそ! 皆とにかくお客さんを助けるぞ! クロエちゃん、君は戦闘はまだ早いからフェリちゃんと一緒に居て! コルワさんも後ろに!」

「ですよねえ! つかマジ急に魔物相手は無理い! ってなわけであとよろ〜!」

「ごめん、お願いね!」

「フェリちゃん、ベツポ達呼び出してコルワさん達護つて!」

「承知した!」

団長達は逃げ惑う人をかき分け、暴れる魔物へと向かう。魔物達は明確な敵意を持つ団長達に気がついたのか、殆どが標的を団長達へと定め襲い掛かった。

「G U G A A a a a a!!」

「やかましいっ!」

「G Y A!?!」

ラウンドウルフに似た魔物が団長に飛びかかって来たが、団長は剣を引き抜く事もせずに拳で殴り飛ばす。その魔物は簡単に吹き飛び、壁に叩きつけられると霞のように消えていった。

「消えた……?」

「ダオラア——ッ!!」

団長は魔物を殴った時の感覚に違和感を覚えた。

近くでもB・ビイがマチヨビイへと姿を変え魔物達を殴り飛ばし、蹴り払い次々に倒していく。メデューサも爪で引つ掻いたり尻尾で魔物を振り払った。するとそれだけで魔物は、悲鳴と共に掻き消えた。

「何よこいつ等、なんか変な魔物ね」

「確かに……これは奇妙だね」

コーデリアが涼しい顔で剣を振るう、やはりそれだけで数体の魔物が倒され姿を消した。

「ただの魔物とは違う、倒れたとかじゃなくて消滅したって言うこの感じ……急に現れた事と言い、まさか誰かに召喚されたか？」

「団長さんっ!!」

魔物の正体と何処から現れたのかを考える団長であったが、突如若様が叫び自分達が

いる所より上の階、そこにいる二人の男女を指さした。

「あそこに――商会」の会長が！ 彼女も一緒に居る！」

その男は吹き抜け構造のロビーの三階にいた。無駄に豪華で似合わない趣味の悪いスーツを着る肥えた男、そしてその男が一人の女性を引つ張りながら走っていた。

魔物から逃げるような動きではなかった。何より女性は男から逃げようと抵抗しているように見える。抵抗する女性を無理やりに引つ張り連れて行く、魔物が人々を襲うこの状況であまりに不自然な動きだ。

「あの男、彼女に何をっ！」

「あ、ちよつと待つんだっ！」

「G U G A A a a a a a !」

「いつひやあっ!? なんかちよーこつち魔物来たんですけどおーつΣΣ(。D。 11
1)」

抵抗する令嬢の姿を見てジツとしている事が出来なかったのだろう。フェリの制止を聞かず一人若様は令嬢の元へと駆けだした。

フェリ達も追おうとしたが、それを遮るように多量の魔物がフェリ達の前に現れた。

「くそ、フェリちゃんはクロエちゃん達護るのを優先しつつ若様を追って！ 俺は先に

男の方に向かう！」

「す、すまない頼んだ！」

「B・ビィー！」

「シヤ、来いやあ!!」

団長はB・ビィに向かい駆け出した。団長の意図を即座に理解したB・ビィは、腰を低くして両手を組みレシーブの体勢に入った。

「頼むっ！」

「シヤオラア！ ズエアアツ！」

団長は片足をB・ビィの両手に乗せる。そして直ぐにB・ビィは団長を押し上げ、男のいる三階にまで放り上げた。

大きく跳躍した団長は、そのまま跳んでいくと三階フロアの吹き抜け部分にあるガラスフェンスの手すりを掴むと体を引き寄せ男と令嬢の前に降り立った。

突然目の前に現れた団長に、男は驚きその足を止めた。

「うおおっ!? な、なんだ貴様?！」

「あんた——商会」の会長で間違いないね? こんな状況だけど、まずそのお嬢さんを離してくれると嬉しいね」

団長が令嬢を指差すと、男は焦りながらも団長を睨み悪態をつきだした。

「そうか……貴様が報告にあつた騎空団だな!? ええい! あの役立たずの貧乏人め

……ワシの事は黙っていると言ったのに……！ 捕まったとてワシが牢から出してやったものを……！」

「その言い方、やっぱり若様のドレスを盗ませたのはアンタで間違いないってわけだ。随分とセコイ真似するねえ」

「うるさい、この娘は先にワシが目を付けていたのだ！ それなのに、あの若造が生意気にもドレスなどを……」

その男の自分勝手な言いように、団長は顔をしかめる。悪徳男と聞いていたが、それよりも下種と呼んだ方がしっくりくると感じていた。

「求愛するのは人の自由だけど、受ける側にも選ぶ自由があると思うね俺は」

「黙れ！ この『――商会』会長であるワシが可愛がつてやろうと言うのだ！ なのに、この娘それを断りよって！」

「やっぱりフラれてんじゃねえか!? 諦めときなさいよ、そこはさあ！」

「諦めるだど？ このワシは欲しいと思つた物は全て手に入れた！ ワシに手に入らない物など、あつてはならんのだ！」

「ふざけないで！」

男の言葉に耐えかねたのか、怒りの声を上げた令嬢。

「父も私も貴方の噂は聞いていましたが、それでも大きな商会である事から一定の信頼

を置いていました……！ しかし、ここまで腐りきっていたなんて！」

「黙れ小娘が、よくもこのワシに生意気な事を言えたものだな!? 貴様の家の事業に幾ら出資してやったと思っておる！」

「初めから私目当てだったのでしょう!？」

「愚かな、大人しくワシの寵愛を受ければ貴様の家もより繁栄したものを！」

「寵愛など言わないで、汚らわしい！」

「う……ッ!？」

令嬢は躊躇う事無く平手で脂ぎった男の頬を強く叩いた。

「こんな愚かな男と思いませんでした！ 誰が貴方の様な男に……！」

「この……!？」

頬を叩かれ汚いプライドに傷がついたのか、男は手を振り上げた。団長が咄嗟に駆け寄り男を止めようとしたが、それよりも先に男の後ろから一人の男性が現れ飛びかかった。

「止めろおおっ!？」

「ぬおおっ!？」

それは若様だった。普段出さないような猛スピードで階段を駆け上がった彼は、男の暴力から令嬢を護るために後ろから飛びかかり男の振り上げた手を掴みあげる。

「あ、貴方は!？」

「彼女への狼藉はこれ以上許さない!」

「ぐ、ぐう……! 貴様!？」

突然の乱入者に男も令嬢も驚いている。無謀とも取れるその行為、しかし果敢であると感じた団長は、これはチャンスと思いいこの隙にご令嬢を助けようとした。

「な、なめるなあ!」

「むっ!？」

だが男が叫ぶとその手に着けられた悪趣味な指輪が強烈な光を放ちだした。団長はその怪しい紫の光の正体を知っていた。

「あんた、なんでソレを!？」

「来い、魔物共!」

そして男が指輪の力に任せ叫び続けると、地面から湧き上がるようにして彼等の周りに複数の魔物が現れる。

「ま、魔物!?! 呼び出したというのか、何だこの力は……!」

「G U O O o o ! !」

「うわあっ!?!」

一体の魔物が若様に飛びかかる。そしてそのまま突き飛ばされると、ガラスフェンス

へと叩きつけられた。叩きつけられた衝撃でガラスが割れ、若様を突き飛ばした魔物はそのままロビー一階へと落ちて行ったが、若様はギリギリの所で無事だったフェンスの骨組みを両手で掴み三階からぶら下がった状態になった。

「やばっ!？」

「GYAUGYAU!!」

「だあーもう、邪魔臭い!」

手すりへと追いつ込まれた若様を助けようとした団長だが、召喚された全ての魔物が唸りを上げて団長を取り囲んだ。

「わ、私の事はいい! それより彼女を!」

「そうしたいのは山々だけど……こいつら、数ばっかり多い!」

若様は必死に落ちまいとしながらも、団長に自分より先に令嬢を助けるように言う。団長もそうしたかったが、押し寄せる魔物を相手に中々前へと進めずにいた。この数の魔物をまとめて吹き飛ばすような技を使ってしまえば、その衝撃で若様も落ちてしまうだろう。

「いけない、このままじゃ落ちてしまうわっ!」

「あんな小僧放っておけっ!」

「な……っ! こ、この人でなし! 離しなさい……このっ!」

「うっぐっ!?!」

今にも落ちてしまいそうな若様の姿を見て、令嬢は自分をつかむ男の手に勢いよく噛みついた。まさか噛みつかれるとは思わなかったのだろう、男は「ぎゃあ!?!」と悲鳴を上げて思わず令嬢を掴む手を離した。

手が離れると令嬢は一目散に若様の下へと向かい、その手を握り引つ張り上げようとした。

「頑張つて、今助けますから!」

「だ、駄目だ……! 貴女まで落ちてしまう……!」

「だからつて、放つてなんておけない!」

細身のエルーンとは言え成人した男子、令嬢もまた華奢なエルーンである。彼女も必死に若様を引つ張るが、どうしても力が足りない。

「あの小娘、もう許さん……!」

腕を噛みつかれた男は激高した。団長を襲わせていた魔物を操り、今度は令嬢達への方へと向かわせる。

「おいおいおい、馬鹿止めろつてば!?!」

自分から離れていく魔物を慌てて追いかける団長。

何体かの魔物を倒しながら集団を追い抜き、若様を引つ張る令嬢を護るように立つ。

「今手伝いますから……!!」

「G U A A A A !!」

「あーもう、ちった遠慮しろ!? 取り込み中だよ、わかんねえのか!?」

「G Y A O !」

「わかんねえよな、知ってたよちくしょう!」

団長も若様の腕を掴もうと腕を伸ばしたが、飛びかかって来た魔物を切り払うために腕を引いてしまう。その後も腕を伸ばそうとはするが、次から次へと飛びかかってくる魔物を切り払うので精一杯だった。

若様が掴んでいるガラスフェンスの骨組みは、それだけでは男性一人の体重を支えられるほど強度の強いものではない。令嬢に支えられている状態でもギリギリと鉄の曲がる音を上げ、そしてついに根元からポツキリと折れてしまった。

「ああっ!!」

「きゃあっ!!」

落下する若様。その手を握ったままの令嬢もまた引き摺られフェンスから落ちて行った。

「やっば……っ!!?」

魔物を切り払った団長が悲痛な声を上げてフェンスから外を覗き込んだ。落下する

二人の悲鳴が徐々に小さくなっていった。

この高さから落ちれば、最早無事では済まない。男は哀れな男女の末路を考えると自然と笑みが浮かんだ。

「ふふ……馬鹿な二人め、ワシに逆らうからだ」

「……あんたあ、本当に下種野郎だな」

「好きに言うがいい。勝つ事が正義よ！」

「勝つ事が？ 勝てば正義だと？ ……ハハハッ！ おっさん、本気で言ってるのかよそりゃ？」

団長は立ち上がると突然笑い出した。まだ魔物も残る中、急に笑う団長に男は「気でも狂ったか？」と思つた。

「負けると知つて狂つたか小僧？」

「まだ言つてる……負けるつて？ 俺が、いんや俺の仲間が？ 嫌がらせにドレスを盗ませ、その上魔晶頼りで自分じゃ何もできない、女性を無理やり攫おうとする小悪党に？ ……馬鹿言うなよ」

若様と令嬢が落ちた事で収まっていた男の怒りであつたが、それに再び火が付こうとしていた。団長の態度、特にその目が男は気に入らなかつた。

軽蔑、侮蔑、明らかに自分を下等な存在として見ているその目。それは酷く男のプラ

イドを傷つけた。

そして同時に団長の口から「魔晶」と言う言葉が出た事も気になっていた。

「小僧、魔晶を知っているのか？」

男は指にはめた指、それにはまる寶石を団長に見せつける。

「何かとトラブルあるとそれが原因だね。今回もそれが関わっているとわかってうんざりだよ。直ぐにぶっ壊してやる」

「負け惜しみを……あの男も女も死んだ。今すぐ貴様も同じ場所へ送って——」

「三つ、教えてやる」

団長へ一斉に魔物を向かわせようとした時、団長が指を三本立て腕を付き出した。

「はあん？ 小僧が、ワシに何を教えるってえ？」

「まず最初に、あんたは俺と俺達の事をわかってない。俺達が何者で、どんな騎空団かな。そこも調べて報告受けるべきだったな」

「……何を言ってる？」

「俺には頼れる仲間がいるって事だ。そして次に……だからこそ若様もお嬢さんも、しっかり「無事」だ」

「……たか。」

何を馬鹿な、と男は言おうとした。だがそれよりも先に自分を覆うように大きな影が

伸びて来た。男の位置からは、その影の正体は直ぐにわかった。わかったからこそ、動きを止め啞然とした。

「見つけたわよ、この……愚かな人間……!」

そして髪をうねらせ、少女は吼えた。

■
五 ハッピーコマンドー外伝 すごいよ!! コルワさん

「あんただったのねえ……! この……誇り高き星晶獣であるこのアタシに! 全てを石へと変える魔眼を持つこのアタシに! さんつつつざんつ! あっちこっち走る原因作つたのはっ!」

果たして身の丈幾つの怪物であろうか。少なくともロビーの一階から体を伸ばしてもまだ天井が低く思えるその身の丈。金色にも似た爛々と輝く異形の瞳が男を見下ろした。

巨大な魔蛇メドウシアナ。その頭部には、髪を蛇へと変え蠢かせ、ポンプンと怒り心のメデューサの姿。そしてその脇には、ポカンとした若様と令嬢の姿があった。

「グツジョブだメドウ子、メドウシアナ! よく咄嗟にメドウシアナ呼び出して二人を助けてくれた!」

「べ、別に……ただ急に上から落ちて来たし、ぶつかると嫌だからついでにメドウシアナに乗せたただけだからね！」

「それでもよくやった！」

やたらと和氣藹々な団長とメドウ子。男からすれば突然現れた怪物と親しげなわけのわからない少年の図だった。

二人はどう言う関係であるのか——いや、そんな事よりも今あの少女は自らを星晶獣と言ったか？ 男は「まさか……」と否定しつつも、その体はジワリと畏怖を確実に抱いていた。

視線を動かし周囲を確認した。まだ魔物はかなり残っていた。

「……か、かかれ魔物共！」

半ばやけくその叫びを上げて、男は魔物をメデューサへとけしかけた。

それに気が付いたメデューサは、不愉快そうな表情を浮かべると「ふんっ！」と鼻先であしらった。

「その程度の魔物操るぐらいで良い気になるんじゃないわよ、アンタ達全員石になりなさいっ！」

見開かれたのは石化の魔眼。魔晶の輝きよりも強く、その瞳より発せられる光に男はたじろぎ目を閉じた。

強い光を受けて目に痛みを感じながら、光が収まったのを感じ少し目を開く。
「げええっ!？」

目を開けて飛び込んで来た光景を見て悲鳴を上げる。自分の周りに風変わりな石像が置かれていた。愚かであるが多少なり賢しい面を持つ男は、直ぐにそれが自分の呼び出した魔物が石に変えられた姿だと理解した。一瞬でこの三階フロアに召喚した魔物全てが石へと変えられたのだ。その力を間近でみた男は、あの異様の娘は正しく星晶獣なのだとわかった。

「おっさん、三つ目教えてやる」

一度に全ての手駒を失い狼狽える男に向かい団長は告げる。

「『勝てば正義』? 違うね、それは自分を正当化したい悪党の言い方だ。だから俺はこう言うとするよ……『正義は勝つ』だ!」

「こゝの小僧……っ!？」

咄嗟に男は指輪を団長へ向けた。魔物は石になったが、男は無事であった。「自分を石に変えなかつた事を後悔しろ!」男は魔晶の力で魔物を呼ぶのではなく、その魔力を直接団長へと向けて放出し攻撃してやろうとした。

「ニコラー!」

「!」

「ぐわっ!？」

だが魔晶より魔力が放たれるよりも先に、男の腕に向かい青色の光弾が直撃した。男の腕は弾かれ痛みでしびれた。一体何が飛んできたのかと思えば、空中を青い光弾がクルクルと円を描いて飛んでいる。それは男から離れると、シユツと団長の傍へと近づいた。

「サンキュ、ニコラ。お手柄だぞ」

「——!」

素早い動きが収まると、それは球体のナニかへと変わる。生き物ではない、青白いそれはフェリのペットの内の一体、一本角のニコラだった。

そして団長達がいるフロアへと上がる階段から、フェリ達と一階フロアに残っていたB・ビー達が駆け上がった来た。

「すまない団長。魔物に手間取った! だがもう宿泊客の安全は確保できたぞ!」

「他の階の魔物も全部ぶっ飛ばしたぜ!」

「あとあとおもう秩序の騎空団の人等も来たからっ! 悪い人の手下みいゝんな捕まってるってさあ☆」

「……みたいね」

魔物の全滅、そしてクロエからの秩序の騎空団到着の報告。団長がフェンスから改め

て下を覗くと、ホテル玄関から秩序の騎空団と思われる騎空士達が突入して宿泊客達の避難誘導と、何名かの男達を捕えている姿が見えた。

「この分だと屋敷の方も押さえられたみたいだ。てなわけだし、終りみたいだからもう抵抗しない方が良いと思うなあ俺」

「だ、黙れ!!? 逃げるだけなら、勝つ必要は……あ、ああつ!?!」

限界まで魔晶の力を使い、魔物を呼び出せば逃げれるかもしれない。そう思った男だったが、魔晶を使おうと思った時自分の指にあるはずの感触がない事に気が付いた。そして慌てて確認すると自分の指にはまっているハズの魔晶の指輪が消えていた。

「探し物はこれ?」

「あ!?!」

団長が横に浮かぶニコラの角を指さす。そこには自分の指にあるはずの指輪がスツポリとはまっていた。

「さつきあんたにぶつかつたのは、これ奪うためだよ。さて、これでいよいよ抵抗する手段を失つたな。魔晶の無いあんたはただのおっさんだし」

団長の言う通り男にはもう抵抗する力は無い。男自身には魔法の才も、武術の心得も無い。全ては魔晶があつて出来た事だった。

「……………くそお!!」

「あ、逃げたっ（。ω。）！！！」

男はこのホテルの事をよく知っていた。今日の様に懇親会で使用する事も多く、普段からもパーティーなどで利用していた。ホテルの支配人ともよく話もしている。だからどこに避難用の非常階段があり、どの階段からなら素早く逃げられるかを知っていた。

一縷の望みをかけて逃げ出した男。だがその動きは酷く遅かった。男も不思議に思う程体が酷くだるく感じた。それでも逃げるため男は走る。

その諦めの悪さに関しては、団長は一種の尊敬を抱いたが、捕える事には変わらない。ため息を吐いて男の後を追おうとした。

「待ちなさい」

「つてえ、コルワさん!?!」

だが一人、団長よりも先に男の前に現れたのはコルワだった。

何時の間にかフェリから離れ、男の前に立ち塞がった。

「な、なんだこの女……!?! そこをどけいっ!?!」

「あぶっ!?! コルワさん逃げて!?!」

男はコルワの正体などどうでも良かった。ただ自分が逃げるのを邪魔しに現れた一人の女、その程度の存在と思ひ拳を振り上げて殴り掛かった。

特に体を鍛えていない肥えた中年男性であるが、それでも大人の男の力で顔でも殴ら

れば酷い怪我を負うかもしれない。団長がコルワに逃げる様に叫ぶが、何故かコルワは逃げようとしなかった。

その瞳はジツと自分へと拳を振り上げ迫る男を睨み、そして腕一本程の距離にまで男が近づくとスツと彼女も腕を上げ――。

「ハッピーエンドパンチッ!!」

「だぼらあぁっ!!」

一切の迷いなく男の顔面にその拳を叩き込んだ。

「ハッピーエンドパンチッ!!」

「ほう? 正確に人中狙ったな。中々いいパンチだぜ」

名前のわりに極めて暴力的な突然のパンチに驚く団長。その鋭い攻撃にむしろ感心するB・ビィ。

一同コルワのパンチに呆気にとられた。

「ほ、ほが……!!? ほがが……!!?」

「人の恋を邪魔するために、私とララさん達が若様の思いを込めて作ったドレスを盗ませて、それに飽き足らず嫌がる女性を無理やり攫う……そんな事が許されるとでも!!?」

「いいえ、許されないわ! だってそんなのバッドエンドじゃないの!!? それは私がこの世で一番大嫌いなものなのよ!!」

「なんだ、この女……！　む、無茶苦茶だ！」

「逃がさないって言ったでしょ！」

男を逃がさまいとコルワはなんと、石になった魔物を踏み台にして飛び上ると、男の正面から肩車の様に肩へと乗ると両足で男の頭を挟み込んだ。

「アレは、まさか——ッ!？」

「知ってるのかB・ベイ!？」

「所謂『幸せ投げ』！　だが、あの体勢から繰り出される技の威力はっ!!」

そして顔の雰囲気が変わったB・ベイと、それについて合わせてしまった团长。

B・ベイはコルワの今の体勢、その形がある技を繰り出すための最終段階だと知っていたのだ。

「や、やめ……!？」

「これで、とどめよお——っ!」

コルワは気合の叫びと共に自分の頭を振り子の錘に見立て、勢いよく後方へと倒れ込んだ。

それは一瞬であった。

コルワはそのまま地面へぶつかる事は無く、鋭く、美しく、正確に男の股をくぐり抜けた。それでも男の頭は挟んだまま、故に男もまたコルワの身体の回転に巻き込まれ

た。そして勢いそのままコルワは男の両足をとった。

「ニードルスレイダー——ッ!!」

「ほぎやあああああつ!!」

ニードルスレイダー、別名“コルワ式ウラカン・ラナ”。それは、ハッピーエンドの思いを込め相手の肩から股をくぐる回転の勢いで決めるエビ固めであり、込められた思いのわりに殺意の高いコルワの必殺技である。

「出たああつ! 相手を縫い針、自身を白糸に見立て針の穴を通るかのように相手の股を正確に潜り技を決めるその姿! 正しく“ニードル^針スレイダー^{糸通}”! ただのドレスデザイナーと思えない攻撃だあー!」

「……なんだこれ」

やたら熱中するB・ビー。技をかけるコルワ、関節を決められて悲鳴を上げる男。一気に場の雰囲気が変わり困惑する団長。

「ぎえええつ!? や、やめてくれえ——!?」

「人の恋路を邪魔するヤツは、星晶獣に踏まれて死んでしまえ!」

「ん、なに潰していいの?」

「駄目に決まってんだろ!? あれだよ、ことわざだよ、例えだからな!」

コルワの叫びに反応したメデューサを止める団長。彼が止めなければ彼女は男をメ

ドウシアナの下敷きにしただろう。

「お終いよ、これで無事に……ハッピーイエ——ンドッ！」
「げぼらあああつ!!」

団長達が色々言っている間にコルワは最後渾身のハッピーエンド力ちからを發揮。そこでついに男の意識が飛んだ。

コルワは自分の掴む男の両足から一切の力が抜けたのを感じると、彼女もまた力を抜いて立ち上がると、腕を掲げて高らかに叫んだ。

「イエスツ!! ハッピーイエ……エ——ンドッ!!」

「決まったああ——っ!」

「……なんだこれ?」

最後までコルワに持っていかれ、まとめられた事に団長は呆然とし続ける。どこから持ってきたのか、ゴングを鳴らしながら勝利者インタビューに向かうB・ビィを見ながら更に呟く。

「なんだこれ……?」

困惑する団長、しかし事件は解決したのであった。

またも、ガロンゾで出会おうぞ

一 後日談と続いてく話

一人の悪徳商人の起こした騒動も、何とかけりがつき一夜が明けた。

ドレス盗難から始まりホテルでの魔物の群れの出現など、その日一日の間に起きた騒動としては、かなり大きな騒ぎになってしまったが、しかし大きな怪我をした人間も出ずに終える事が出来たのは幸いである。

何時もの事とか言つてはいけないのだ。

コルワさんに必殺のニードルスレイダーを決められた悪徳漢は、「ほげほげ……」と呻き声を上げながら、担架に乗せられて秩序の騎空団に運ばれていった。その哀れな姿にちよつぱり同情しない事もないが、しかしやった事が事だけに結局は自業自得だろう。

そして問題のドレスだが、こちらは無事に男の屋敷より回収されたと聞かされた。ラさんが島に来た時に持っていた衣装カバンにしまわれたままの状態で保管されてい

たようで、ドレスその物は乱暴にはされておらず特に損傷はないそうだ。

しかし後の調査でわかったが、男はこのドレスを酷く忌々しく思っていたようで燃やしてしまう心算でもあったらしい。実はギリギリ危なかった。

ホテルはロビーを中心に滅茶苦茶になったが、営業再開は早いとされている。と言うのも若様が今回の事件で迷惑をかけたからと言って、すばやくホテルの支援に乗り出していた。

彼は全く悪くないのだが、若様は「良い悪いではなく、やるべき事をするだけだ」と言っている。「ノブレス・オブリージュ」とでも言えいいのか、あの捕まった男に爪の垢でも飲ませてやりたいものだ。

そして、そんな若様に本日改めて屋敷に呼ばれた。

場所は若様邸の応接間。色々終わってセレスト達の所に帰ろうかと思ったら若様に呼び止められ「是非今回助けてもらったお礼がしたい、明日まだ島にいるようなら食事でもご馳走したいから改めて屋敷へ来てくれ」と言われてしまう。しかもセレスト達も全員呼んでいいとまで言った。

今回の依頼料やらの話もあり、あと一日はいる予定であったので特に断る理由も無かった。なのでお言葉に甘え、今日皆で約束の時間に屋敷を訪問したら付き人の方が現れて「準備がもう少しで終わるから待っていてほしい」と言われ応接間へと通された。

応接間には俺とハレゼナ、B・ビィにゾーイ、それにコルワさんが居る。それ以外のメンバーは準備が終わるまで別の使用して良いと言われた娯楽室でのんびりしたり、何人かは手入れのされた庭をみに出かけたりと自由に過ごしていた。

「依頼料が貰えて更に食費も浮いた……うひひ」

「ひやはっ！ 団長が変な顔してるぜえ〜？」

ハレゼナが面白そうに俺を指差した。確かに思わず破顔したが、変な顔とはなにか。

「まあ相棒は金銭がらみだと、緩い表情筋が通常の三倍緩むからな」

「うむ、団長は実にわかりやすいな」

続けてB・ビィとゾーイにまで笑われる。真に遺憾である。

「ふんだ。ほっとけ」

「ほらほら、拗ねないの団長さん！」

「ぎゅえ」

わざとらしく拗ねて見せたら、後ろに立ったコルワさんが手を伸ばし俺の両頬を引っ張った。体を包み込む上等なソファアがやわらか過ぎるため上手く動けず、無抵抗のまま俺は両頬をムニムニと伸ばされてしまった。

「やめふえくらはいよ……」

「万事解決してハッピーエンドなんだから、暗い顔しないの！ 笑顔が一番、じゃなきや

せつかくのハッピーが逃げちやうわよ！」

俺が日頃トラブルに巻き込まれるのは、笑顔が足りない所為なのでしょかね。逃げないで俺のハッピー。

しかしコルワさんの言う事も一理ある。よくばあさんが「笑う門には福来る」と言っていたものだ。他ならぬばあさんの所為で笑えん自体になつてもいたが、精神衛生上よろしくないの思い出すのを今は止めておく。

「て言うか凄いわねこの頬つべた。凄い伸びるわ」

「やつぱり表情筋が柔らかいんだな」

「うるふあい、ふおーい」

「あはは、何言ってるかわからないなあ」

「うけけ！ のおくびのびら〜ブリー〜！」

「やふえんふあ」

ついにはハレゼナにまで頬をつままれ伸ばされ出してしまふ。

喋り難い事この上ないが、別に痛くはない。なんだか猫にじやれ付かれるような感覚を覚えていると、廊下からバタバタと誰かが走る音が聞こえた。

「おい、大変じゃあ！ すごいぞ、あつちの部屋に御馳走があつた。酒もあつたぞ！」

「アンタ達もそろそろこつちに……んっふっ!？」

バタバタと「メドウのじや」「コンビが部屋に駆け込んで着た。食事の用意ができた事を知らせに来たらしいが、部屋に入った瞬間コルワさん達にいじられ放題の俺の顔を見て笑い出した。

「あははっ！ なによそれ、変な顔ねえ！」

「ビヨンビヨンじゃっ！ ほっべがビヨンビヨンじゃっ！」

「うるへーふあ!? ふあらうなっ！」

「によほほっ！ 何言ってるかわからぬのうっ！」

「ちよつと、アタシも混ぜなさい！ もっと面白顔にしてやるからっ！」

「ふあがやろう!?!」

冗談ではない。メドウ子が同じ事しようとすると、絶対髪の毛を蛇にして噛み付いてくるからコルワさん達と違い結構痛いのだ。流石にそこまで好き勝手される覚えはない。両頬を引っ張るコルワさんとハレゼナの手を払い除けソファから立ち上がる。

「ウケケ！ モチモチが逃げた！」

「誰がモチモチどころ。よっぼどB・ビイの方がモチモチだろうが」

「ぼっか野郎!?! 余計な事言うな相棒！」

「ウヒツ！ イイグザクトリイ!! トカゲはさいっこおーにモツチモチだからなあ」

「！」

「ぎゃあ!? 最近は大人しかったのにおぐげええええつ!？」

「ケヒヒヒヒッ! ひっさびさにい〜ら〜ブリー〜!」

話をB・ビィに振った瞬間、ハレゼナはB・ビィへと抱きつき、もとい抱き潰しB・ビィはハレゼナの胸の中で蛙のような声をあげた。

「許せB・ビィ、俺の表情筋がこれ以上柔軟にならないためだ」

「微塵も悪いなんて思っていないでしょアンタ」

「さてな。それよりお前、ちゃんとのじゃ子にクッキーあげたか?」

「言われなくてもあげたわよ」

依頼前にのじゃ子が食べようと思っていたクッキーを食べてしまい、最早子供の喧嘩レベルの争いを起こしたメドウのじゃコンビ。今回の依頼の後、街でクッキーアソートをメドウ子自身に選ばせ、彼女の小遣いで買わせてのじゃ子に渡させた。

「むっふっふ! 名前書いたメモも張って、もう取られんようにしたからのっ! これからちよつとつつ食べるのじゃあ〜」

ご満悦の様子なのじゃ子。こっちも一先ずこれで落ち着いただろう。喧嘩が長引かずに済んだ事にほつとほつと、俺達は部屋を移動する。

そして所変わって場所は大広間。扉を開いてみるとそこには、今まで見た事の無いような料理が所狭しと並んでいるではないか。

「やあ皆さん！ お待たせして申し訳ない」

あまりの豪勢さに魂消していると、キツチリ決まった姿の若様が現れた。

「あ、いえこちらこそ呼んでいただいて……というか、そのこれは」

「いやあ、昨日の今日で用意出来たのは、これで精一杯ですけど……しかし味は保証しますし、もちろん分量もあります。お好きにだけ食べていってください！」

金持ちって凄、俺は改めてそう思った。

■ ニ おかわりもいいぞ！

「ひゃつは——ッ！ 取っても取ってもなくならネエ〜っ!!」

「あ、ああ……！ シュヴァリエ、また手一杯にお皿持つてる……ず、ずるい……！」

「はっはっは！ 戦いも食事も手数なのだよ！」

「俺も負けてられねえ！ まだまだ食うぜっ！」

ドンちゃん騒ぎである。

「はむはむはむ……っ！」

「やべえっ!? ゴーイが本気を出しやがった！」

「あは、あはははっ!? み、見る見るうちに皿の上の物が……くふふっ！ きえ、消えて

いく……くふっ!」

「ルドミリア殿、落ち着くであります!? 無理して食べると気管に入ってしまいます!」

ドンちゃん騒ぎである。

「酒ガウマア〜〜イツ!! オカワリ、モウ一杯ダツ!」

「ちよつとのじゃ子、そつちの方が肉多いじゃない! もうちよつと分けなさいよ!」

「他の取ってくればいいじゃろう!? 何故態々わらわのを奪おうとするんじやお主は!?!」

ドンちゃん騒ぎである。

「クロエチャン (*、ω、)っ ヤサイモタベナイトネ」

「あーとん、コロ助〜(人、3、*)」

「お、美味しい……こんなの、幽霊になる前も食べた事がない……」

こつちはちよつと平和である。

大広間での食事会、むしろその食事の量と質を見ると最早パーティーであるが、えらい大騒ぎだ。

ティアマトは酒を飲みまくり、ゾーイとフェザーが飯を食いまくり、ルドさんは痙攣し、メドウのじゃコンビは山盛りのミートボールスパゲティーを向かい合って取り合っている。

「まったく落ち着きのない奴らである」

「皿に多量に肉盛りながら言うなよ」

皿一杯にローストビーフを盛っていたら、おっさんに突っ込まれてしまった。

「いや、次何時こんな料理食えるかわからないし……」

「みみっちい事言うなよ。稼げよ、騎空団」

おっさんにからかわれ、ドスドスと腹を突かれた。痛いから止めろい。

「しかしガロンゾの皆に悪いなあ。俺達だけ美味しいもん食べちゃって」

「ラムレッタなんかは、酷く拗ねそうだね」

ティアマトなんかはワインをガブガブと飲んでる。その内ボトルで飲みだしそうな勢いだ。

俺はまだ酒は飲め無いし、特に魅力も感じないが、明らかに高級である事はわかる。コーデリアさんの言うとおり、この場に来れなかった事をラムレッタが知れば、かなり拗ねそうだ。

「その代わり僕達が参加してるわけだけどね。アハハッ！ ラッキーだねえ」

皿に盛った料理を頬張りニコニコなのはドラंकさん。あの二人もこの場に呼んである。彼等は別に仲間じゃないのだが、一時とはいえ行動を共にしている以上呼ばない訳にもいかないので呼んだ。

スツルムさんは「馴れ合いはしない」と遠慮していたが、ドラंकさんによる怒涛の説得（我侂とも言う）により彼女の方が折れた。尤もドラंकさんは、何度か尻を刺されたがね。

「はしやぎ過ぎだドラंक……」

「こういう場ははしやぐもんだつてスツルム殿おく。美味しい料理に美味しいお酒、騒ぐなつて言うのが無理な話だよお」

なんであればドラंकさんが一番楽しんでないだろうか。俺が言えた義理ではないが、もつと緊張感を持つべきじゃないのかこの人は。

「いえいえ、楽しんでただけにいるなら何よりですよ」

「若様の言うとおり！ ハッピーな場はハッピーな気分で過ぎないとねっ！」

そして幸せな人と愉快な人、若様とコルワさんの二人。

「こちらこそ、今日は改めて招待してもらつてありがとうございます。ほんと、こんな御馳走を……」

「気になさらず。あなた達がいなければ、私だけでなく彼女も無事ではなかったでしょう」

「そうだ。あの御令嬢ですけど具合の方は？」

「何も問題は無いそうです。念のため医者には診てもらつたそうですが、外傷も無く怪

しげな術にかかった様子も無かったですから」

「そうですか……そりゃあ良かった」

「ええ。しかし、魔晶でしたか……あの男は帝国と取引したと証言したらいいですね。今日秩序の騎空団から聞きました」

「うむう……」

悪徳男が持っていた魔晶。それは男が裏で帝国の人間と取引して手に入れたものであるらしい。奴の商売の一つである他島との取引のルートには、表に出ない裏ルート、すなわち帝国との関係があったわけだ。

古くから帝国と取引を行っていた島は多いが、昨今の帝国による過激な侵略行為を受けてその取引を取りやめるか規模を縮小する事も珍しくなくなっている。

そんな中でこの島と街の責任者や秩序の騎空団等に一切帝国との取引を報告しなかった男である。その取引の内容は、ろくなものではなかっただろう。

だが「よりにもよって」である。個人である魔晶を手に入れるとは思わなかった。以前ドラゴンを魔晶で従える盗賊団がいたが、奴らは偶然手に入れたと言っていた。だが今回の事である程度帝国と関係を持ち、かつ対価となる資金を持っている場合であれば、あの忌まわしい魔晶を比較的容易に手に入れる事が出来るとわかった。

卑しい盗賊の奴らにそんな取引が出来る伝手があるとは思えない。だが今回の男の

ように取引で手に入れた魔晶が更に別ルートに流れ、それを偶然に手に入れたのかしたのだろう。

一方で誰でも簡単に魔物を呼び出し魔術を使える魔晶であるが、その力を使う事に一切デメリットが無いわけが無い。

今回男に現れた症状に著しい体力低下と倦怠感がある。あの男はいい気になって魔晶を使い続けたが、その代償に体力や精神力を奪われていた。ただでさえ男は魔法に關しては“ど”の付く素人だ。魔晶から溢れる力の効率の良い絞り方を知らない。魔晶の力を純粹な自分の力と勘違いし、更に使い続けたためその代償は大きく、コルワさんの必殺技で受けた傷以上に魔晶が原因で暫く入院生活が続くそう。その時間を使い男の屋敷に借金を理由に無理やり雇われていた女性や、脅された人間達の救済活動も進んでいる。

もし今回のことが無ければ、男は魔晶を使い続けその身を滅ぼしただろう。体力を失い倒れるか、精神力を奪われ発狂するか……。

「……俺が考えても仕方ないか。魔晶も秩序の騎空団が回収した。後は秩序の騎空団に任せよう」

「そうしな。別にそれがお前の使命じゃあねーんだからな」

悶々として考えるのは俺の悪い癖だ。おっさんの言うように、俺には魔晶の問題を解

決する使命なんてない。強いて俺に使命があるとすれば、借金返済と悠々自適な生活を夢見てイスタルシアを目指す事だ。

もしまた魔晶の問題にぶつかるとなるようなら……何時も通りぶち壊すだけだろう。

「はいはい、難しい話はそこまで！ 貴方ももつと食事を楽しみましょう！」

「……そつすね。俺もまだ食い足りないし」

今はただこの賑やかな食事を楽しもう。

■ 三 我われはこの「流れ」を知っている！

事件から三日目の朝。事件は大変であったが、昨日の食事会も十分に楽しみ、依頼の支払いも結構な額だったので、なんやかんやでホクホク気分でいざガロンゾに帰る。帰るぞ、もういい加減。

「今回は助かりました」

「本当にありがとうございます」

船着場に姿を見せたのは、ララさんにロロさん、若様。そしてコルワさん。

「ドレスの方も無事で私達の仕事は終了です」

「色々と肩の荷が下りました」

ホツとした様子でララさん達。もう最初出会った時の様な緊張した様子は無かった。

「想定外の事ばかりでしたからね。ほんと、お疲れ様です」

「いえいえ、しかし団長さん達と会えたのは良かったです。噂通り、騒動起きても、早期解決ですね」

「ほほう？ 俺その噂は初耳だぞお」

なんだそのトラブル専門業者のキャッチコピーみたいな噂。うちの騎空団を何だと思ってるんだ世間は。ちくせう。

「お二人はこれから？」

「この島での仕事は終わりましたから、私達はこれから工房のある島に戻ります」

「団長さんには、今後何かと頼りにするかもしれませんが。よろず屋さんの繋がりで依頼も出しやすいですからね」

「さっきの噂はともかく、これでも騎空団ですからね。お仕事であればなんでもどうぞ。……なるべく星晶獣関係以外で」

「あはは、仕立てやの依頼で星晶獣が絡むとは思いませんけどね」
「で、ですよね」

自分で言っておいてなんだが、星晶獣やらの騒動が多すぎて変なこと言ってしまった。確かに仕立て屋からの依頼で星晶獣関係ってなんだよって話だし。

「まあ本当に何時でも連絡下さい。逆に俺の方から服に関して、お二人にお願いする事があるかもしれませんね」

「ふふ、ではその時はよろしくです」

うちは女性団員が多い、何かと相談させてもらう事もあるだろう。

「若様も今回はお疲れ様でした。暫くはまだ大変でしょうけど……頑張ってください」

「ありがとう。なに、この程度普段の仕事に比べればどうって事は無いさ」

「頼もしい言葉ですね」

「伊達に父の事業を継いだわけじゃないからね。また島に寄ってください、是非ゆつくりと空の話を聞きたい」

「こちらこそ是非」

この人はこれからあの御令嬢と深い繋がりを持つだろう。次にどんな関係になった二人を訪ねる事になるのか——きつとそれは、喜ばしい光景だろう。

「コルワさんも今回は色々とありがとうございました」

「こちらこそ、貴方達と組めてよかったわ。よろず屋さんに頼んで正解、運が良かったわ」

運が良かった……のかなあ？

自分に考えるのも空しいが、俺に來た依頼つてドタバタと始まりドタバタと終わるからなあ。それを運が言いか悪いかと言われると、実に微

妙な気持ちである。まあ本人がそう思ってるなら何も言うまい。

「それでコルワさんはこれからどうするんです？ ララさん達みたいに工房に帰りますか？」

「うーんとねえ……まあ最初はその心算だったんだーけーどー……ね？」

「……うん？」

なんだあ、その獲物を定めた獣の目は。なぜこつちを見るんだコルワさん。なんだ、この急な悪寒は。

「貴方達との旅って……とつても刺激的で面白そうだつて思うの！」

ちくしょう、この流れは身に覚えがある奴だ……。

■ 四 団長の帰還

団長がさらわれてから「九日目」の昼。宿の食堂で昼食を食べるカルテイラ、ブリール、ユーリ、マリーの四名。しかしその中でカルテイラは少し疲れている様子だった。

「カルテイラさん……だ、大丈夫ですか？」

「うん、平気や……ちよつとしんどいだけやから」

ブリジールに心配されながら、一杯の茶をすすり一応は大丈夫だと語る。傍目からはあまり大丈夫とは言えない気がするが、一応は大丈夫らしい。

団長がこの島から星晶獣（ガルーダ）にさらわれてからと言うもの、ガロンゾでの団のまとめ役は、彼女が全てを担当していると言っても過言ではなかった。

決して他のメンバーが頼りないわけではない。ブリジールは力仕事は向かないが真面目に仕事をこなしている。ユーリもまた生真面目で受けた指示を的確にこなす。マリーもなんやかんやで常識人だ。その他の面々は一癖二癖の曲者揃いであるが、団長救出へと向かったティアマトやメドゥーサ、ルドミア等の（笑）メンバーに比べたら大した事はない。

ただカルティラは不幸にもツツコミ気質だったのである。

目下ガロンゾの職人達とユグドラシルの活躍もあり、信じられない程の作業効率で進むエンゼラ改修作業。

だがその中で戦艦用エンジンの、プロペラ数十基だの、果てはドリルだのと魔改造とも言える計画を持ち出される度彼女はツツコんだ。

あるいは、「団長きゅんの無事を祈って断酒にゃー」と気合を入れたラムレッダが、気合を入れてその勢いそのまま普通に酒を飲んでしまいつつコんだ。

カルバがどさくさ紛れにこそそそと「エンゼラの不思議なダンジョン化計画」を実行

しようとしてるのを見つけてはツツコんだ。

仕舞いにはガロンゾの住民の他愛無い会話にまでツツコミを入れそうになった。

「申し訳ございません、自分のツツコミが不甲斐ないばかりに……っ！」

「自分もです……もつとカルティラさんのようにツツコミがとことん上手ければっ！」

「それそこまで悔しがる事？」

カルティラ一人に色々なストレスをかけてしまい、悔しさを表すユーリとブリジールであつたが、そんな二人をマリーは呆れて見ていた。

ブリジールは真面目だが如何せん濃いキャラにツツコミを入れるには弱い。ユーリも生真面目だが、その生真面目さがかえつてツツコミを弱くする。マリーはまだこの団に入つて長くないので、ツツコミに慣れていない。

結局大体のツツコミ業務はカルティラが行うことになる。正に休み無し、ノンストップツツコミガールの名を（したくもないが）欲しいままにするカルティラだった。

「まあティアマトとかいないし、まだ良いほうでしょ？ メドウ子とかも残つてたら、この四人でも足りないわよ」

「マリーの言う通りや。あの（笑）主要メンバーが救出部隊に組み込まれてほんま助かつた。そうや無かつたら、今頃うちはツツコミで過労死必至や……」

あの団長という存在は、（笑）達の起こす面倒や、自身が引き寄せるトラブルを一身に

引き受ける。だが今彼がない事で、メンバーを分けているとは言えその諸々の事を任されたカルテイラ。団長も頼りにするツツコミ常識枠ではあるが、しかしこの数日は如何せんツツコミ頻度が多すぎた。

つまりは、〃ツツコミ疲れ〃なのである。

早く帰つて来い団長、この苦勞を押し付——もとい、共に乗り越えるため、あとどうせ無事だろうけど、無事を祈りその帰りをカルテイラは待った。

その時である。

「みなさ〜ん。お揃いですかあ〜?」

聞きなれたよろず屋の声。皆が声のした方を見れば、やはりそこにはシエロカルテがいた。

「なんやシエロはん、借金の催促ならお断りやで」

「うふふ〜、違いますよお。カルテイラさん達にお知らせがありましたてすねえ〜」

「お知らせえ? またおつちやんがドリルでも持ち出したんかいな?」

「そうじゃありませんよお。実は先ほど島の入港管理の方から連絡がありましたてすねえ〜、ガロンゾに向かって〃瘴気を発する騎空艇が近づいている〃そうですよお〜」

「なんやて!?!」

「瘴気の騎空艇……つて事はっ!」

ユーリが声を上げ椅子から立ち上がる。空広しと言えども瘴気発する騎空艇など一つしかないだろう。それはただの騎空艇ではなく、彼等にとつてかけがえのない仲間である。

「もうそろそろ港に着く頃かと。他の団員の方にも既に連絡しましたから、もう港に向かつてると思いますよ〜」

「急ぐであんたら！ はよう、飯食べや！」

団長の帰還、それを聞きカルティラは急ぎ残りの昼食を口にかき込みだした。

「ええ!? まだ結構あるわよ!」

「残すと勿体無いやろ！ 冷めても味落ちるし今食ったら急いで港行くで!」

「み、水で流し込むか……」

「早食いは体に悪いと思うです……」

「あらら……では、私は先に港へ行きますので、焦らずにまた後で〜」

困った様子のシェロカルテは、一先ず先に港へと向かっていった。

カルティラ達は昼食を全て完食すると、重たい胃を抱えて走りシェロカルテより数十分遅れて港へとたどり着いた。

「勿体無い以前に……あんな、急いで食べちゃ……! どの道味なんてわからないじゃない……っ!」

「く、空腹時の訓練は経験したが……満腹で走るのは……キツイ……!」
「と、とことん……苦しいですう……」

「それでも……なんとか、間に合ったわ……!」

走ったのと胃の重さの所為で息を切らせる四名。既に港についていた他の仲間もフルテイラ達の下に近づいて来た。

「にやあ、これで皆揃ったみたいらにやあ」

「ラムレッタ殿、団長達は?」

「あーしよーこー、見てみるにやあ」

おそらく真昼間から飲んでいたラムレッタが空を指さした。その方を見れば、遠くからゆつくりと港に向かってくる一隻の艇、一体の星晶獣。瘴気を発し、飛んでいるのも不思議なボロボロの幽霊船。間違いなくセレストの姿だった。

『なんとか戻って来れたか』

「特に連絡も無かったけど……多分団長は確保出来たんでしょうね」

「無沙汰は無事の便りだねえ」

九分九厘団長が無事である事は確信していた面々。ファイラソピラの言うように特に便りも無かったが、だからこそ深刻な心配は誰もしてなかった。逆に下手に連絡でもあれば「あの団長でも対処出来ない問題なのか?」と余計心配になる。決して団長を疎か

にしたわけではない。

その一方、便りが無く苛立ちを募らせている人物が帝国の艇に居るのを、この時点では誰も気が付いていない。

そうこうしている間にセレストが寄航した。

セレストが船体を寄せた場所の周りには、ガロンゾの島民達が集まっていた。一週間前の出港の時、そのガロンゾで話題になった幽霊船の姿を見ようと集まっていた。

「仕方ないけど一々目立つわね……」

『当事者が目立たないあたり、最早あいつの宿命だな』

きつとこの場に居る人間の殆どは、幽霊船に注目して降りてくる団長の印象が残る事は無いのだろう。ルナールがそんな事を考えていると、セレスト昇降口が開きたラツプが降りた。そして直ぐ目の前の船体から響くような声が聞こえた。

「み、みんな……ただいま……」

「お帰りセレスト。大変だったわね」

「えへへ……大丈夫、団長も連れて帰ったよ」

艇の姿のまま話すセレストをルナールが労った。セレストが居なければ今回の救助作戦はもつと遅れていただろう。しかしまだセレストの役目は続いている。船内に居る連れ帰った仲間達を降ろすまでが彼女の仕事だ。

そして直ぐにタラップからその仲間達が降りてきた。

「ミンナ、（＊、▽、）ノ、タダイマア!」

「戻るのに九日か……体感ではもったかかった気もしたな」

「ソウダナ、九ヶ月グライカカツタキガスル」

「……? ティアマトとシユヴァリエは何の話してるんだ?」

「気にすんなゾーイ、メタイ話だから」

「あんたも良くわかんない答え言うんじゃないわよ」

コロツサス達星晶獣が。

「皆久しぶりだね」

「ヒヤツハーツ! カムバックだぜえくつ!」

「待たせたなみんなー! 团长連れ帰ったぞおーつ!」

「なんだか、非常にガロンゾが懐かしく思えます」

「あははっ! 無事に戻って来れてよか、うふっ! よかった、はははっ!!」

「おめえは落ち着け。また引き付け起こすぞ」

コーデリア達頼もしい団員が。

「やー疲れた疲れた。まずは戻って、直ぐ黒騎士殿に報告だねえ」

「報告の手紙は出したが、それなりに待たせたからな。小言の一つ二つは覚悟しておけ」

「手紙……ああ」

「……お前、まさか」

「待ってスツルム殿、話聞いて!? 違うの、わざとじゃな、いったああっ!?」

スツルムがドラランクの尻を刺しながら。

そして最後に――。

「やつと戻れた……」

疲れた様子の子の団長が姿を現した。

「団長はん、やっぱ無事やったな! たくもお、心配し――」

「うむ、出迎えご苦労じゃ!」

「誰や!?!」

団長に続き、悠々とガルーダが現れた。

「みんな、御行儀良くするんだぞ」

「――!」

「誰やっ!?!」

続けてフェリとジジ達が現れ。

「コンチャ〜ツスツ☆☆（〜∇・〜）ノシ! クロエちゃんです!」

「誰やっ!?!」

明るい様子でクロエが現れ。

「へえ、あの人達が残りの仲間なのね。楽しそうな人達じゃないの！」

「誰やつ!!? って、いい加減にせえーよ?」

「すんませ、へぶツ!!?」

最後の最後にコルワがゆったりと降りてきた。

思わずカルティラは、ハリセンを取り出し団長の頭を叩いたのであった。

■ 五 やあ (・ω・) ようこそ、星晶戦隊(以下略)へ。このテキーラはラムレツダのだから、気にしないで落ち着いて欲しい。うん、「また」なんだ。済まない。仏の顔もつて言うしね、謝って許してもらおうとも思っていない。でも、この新しい仲間達を見たとき、君は、きつと言葉では言い表せない「ときめき」みたいなものを感じてくれたと思う。殺伐とした世の中で、そういう気持ちを忘れないで欲しい。そう思っ
て、仲間に迎え入れたんだ。じゃあ、注文を聞こうか。

■ 「はい、はい……そういうわけで、その。別に最初から増やそうとか思ったわけじゃなくて、行き当たりばったりと言うか、なんと言うか……」

「つまり、何時も通りっちゅー事やな?」

「あ、はいそうです。 すんません」

ぞろぞろ見知らぬ面々を連れ帰って来たため、ガロンゾに書いて早々カルテイラさんにハリセンで叩かれてしまい、お説教と言うか小言と言うかまあ色々と言われてしまった。

「そら、犬も歩けば」なんて言うけども、あんた島移動するたび仲間増やしすぎやで」

「はい……」

「別に仲間増やすなゆーとるわけやないで？ 騎空団なら仲間が増えるのはむしろええ

事や。それにうちかて、まあ……半ば押しかけるように仲間になったわけやからな。人の事言えんのはわかっとする。せやけど……自分さらった星晶獣と幽霊の女の子、それに村娘と服飾デザイナー……なに、なんなんこのラインナップ？」

「返す言葉もございません……」

改めてあの面々の特徴を並べられると、本当にわっけわかんねえな。特に後半二人。

「まあ今後きいつけえや。犬なら当たるのは棒ですむかも知れんけど、あんたの場合棒やのーて、星晶獣にぶつからんやからな」

「ぐうの音もでねえ……」

けどそれ自分では気をつけようがないと思うのです。だって向こうから来るんだもん、こっちが避けてるのに。

どうなってるの？

そんな感じで俺がしょんぼりしていると、カルティラさんはため息を一度だけ吐いた。「ん、以上！ まあともかく無事で何より！」

そしてカルティラさんは、一転して笑みを浮かべた。それを見て俺もホツとする。

「はい、ご心配おかけしました」

「かまへん、かまへん。無事ならええねん、結局そこや」

「それにカルティラさんには、ガロンゾでの団員のまとめ役もしてもらって」

「特に面倒な奴らはそっち行かせたから、まあ何とかなつたわ」

そうカルティラさんが言うのと、「面倒とはなんだ!？」と何人かの（笑）達の抗議が聞こえるが無視する。そういうとこだぞ。

「しかしまあ、また妙な面子仲間にしてからに……星晶獣のガルーダと、幽霊の嬢ちゃんはまだあええわ。それで、あのクロエっちゅう嬢ちゃんは？」

「騎空士、と言うかヒーローに憧れてる子でして……親御さんにもよろしくされちゃつて」

「またそんな……いや、それよりコルワはんやって、あれが一番わけわからん」

「あ、やっぱり知ってましたか」

「当然や！ うちかて服を商品にする事だつてある。そうしとつたら自ずとその名を聞

くつちゅうもんや。そんだけ有名やで」

俺の後ろの方では、新しい仲間がガロンゾ待機組の仲間達と自己紹介をして交流していた。その中で微笑みを浮かべ語り合うコルワさんを見る。

昨日、結局あの後コルワさんは俺達の旅に同行する事を決めた。決めたと言ってもかなり急であつた。なんせ港で島を発つ直前である。

理由としては「面白そう」と言う一言に集約される。何かあの一連の事件での俺達の活躍を見て、同行すれば愉快で刺激的な旅が出来ると思つたらしい。その刺激が新しい服のアイディアになるのだとも言つていた。

だが流石に職業服飾デザイナーを団員には出来ない（既に絵師とかいる事は気にしない）。当然「無理です。つーか、危ないです」と断つたが、「部屋貸してくれば、自分の身は自分で守る」と言われる。「お仕事の方もあるだろうし……」と言うと「工房でしか仕事できないなんて二流よ。部屋さえあればOKよ」と言われる。

まったくしょうがないお嬢さんだぜ。と、俺が折れるのも仕方ないだろう。

決して、決してその後「部屋はレンタルするんだから、当然お金も払うわ」と言う言葉も聞いた所為じゃないですとも、ええ決して。

「どうせ、部屋借りるからお金払いますう、なーんて言われたんでコロつと許可したんやろ」

「俺の表情筋の馬鹿っ！」

思わず自分で自分の頬を叩く。カルティラさんはお見通しであった。無念。

「まー仲間にした事はええわ。まず宿で休めつて言いたいところやけど、あんまのんびりしてられんで」

「つすよねえ〜……こつち状況どうなつてます？」

「大きい問題は無し。ただエンゼラの方に行つて貰うのは当然として……あんた帝国の方どないするん？」

「ああ〜……」

「それについては私達も話がある」

カルティラさんが帝国の事を話し出すと、スツルムさんと尻を押さえたドラंकさんが寄つてきた。

「話？」

「この馬鹿が定期報告を忘れていた。このままだと話が面倒になる」

痛そうに尻を押さえているドラंकさんを見る。なるほど、うっかりドラंकさんであつたか。

「あつた事そのまんま言えばいいんじゃない？」

「さらわれた先で暴走した星晶獣と戦つて星晶獣と幽霊仲間にして盗賊団倒して村娘仲

間にした後悪党の騒動に巻き込まれてデザイナーを仲間にした経緯をか？」

「そのまんま言った方が混乱しそうやな」

ほんとにね。信じられますかね、これ九日間に起きた出来事なんですよ。驚きだね
まったく、あはは。

「せめて定期報告で小分けに情報を教えていけば混乱も少なくすんだんだが、なっ！」
「いつてええええっ!? スツルム殿ごめんでっ！」

たぶん普段より気持ち強く刺されたのだろう。ドラंकさんは、高く飛びはね悲鳴を
上げた。

「それで俺にどうしろと？」

「一緒に黒騎士に会ってくれればいい。ある意味説得力が増す」

「あの、あの……その説得力って、その、どう言う……」

「聞きたいか？」

「……聞きたくないです」

多分説明中あのハチャメチャな説明をされた時、相手も俺の存在を見れば「まあコイツだからなあ」と納得される流れにしたいのだろうが……認めたくない、俺は認めたくないぞうそんな流れ、くそうくそう。

などと考えているとふと此方に近づいてくる人の気配を感じる。敵意は無いがこの

感じ……一度覚えたら忘れないようにばあさんに叩き込まれた「強者」の気配。
「心配しなくても此方から来てやった」

黒色の鎧が噛み合い、鉄の音がする。兜の奥から見える視線は鋭く、怒りやら呆れやらが混ざり合う視線。そしてもう一人、ねこのぬいぐるみを抱えた女の子。

「行きといい帰りも突然だな貴様は……」

「……おにいさん、おかえりなさい……」

七曜の騎士は黒を名乗る黒騎士。そしてオルキスちゃん。

なんだかとっても久しぶりな二人を見て、この後また色々面倒が続きそうな気がする俺であった。

飛び立てエンゼラ 編

ガロンゾ、苦勞人が二人

■ ■
一 おひさしガロンゾ

「それで、もう一度聞くが……さらわれた先で魔晶で暴走した星晶獣と戦って、自分をさらった星晶獣と島で出会った幽霊娘を仲間にした後、よろず屋に頼まれた依頼を行いなから村娘を仲間にして、別の依頼で魔晶の事件が起きてまたもう一人仲間にして、やつとガロンゾに戻ってきた……と?」

ガロンゾに戻ってきた俺達の前に現れた黒騎士さんとオルキスちゃん。その後港から落ち着いて話せる場所として、俺達の宿へと移動した。そこで俺は黒騎士さんと対面して今回の事を話す。

「その通りなんだよなあ……」

「貴様冗談みたいな生き方しているな」

冗談であればどれほど良かった事だろうか。もう俺は一生分星晶獣に出会って苦勞してる。もうこんな事打ち止めだと信じたい。

「連絡もよこさず、何をしてるのかと思えば……」

「すみません、連絡をこいつに任せました私のミスです」

「だからそれは、あやま——いってえっ!? ごめんっさいっ!!」

黒騎士さんの傍で立って控える漫才コンビ、ではなくスツルムさんとドラंकさん。ドラंकさんは、任された連絡を怠った罪で尻を刺され続けていた。

「まあスツドラさん達も俺に巻き込まれて忙しかったのです」

「お前その略し方二度とするなよっ!」

スツルムさんに凄腕剣幕で怒られた。ドラंकさんと一纏めは嫌だったらしい。

「まあいい。なんであれ戻って来たのならそれでいい」

「いやあ、ご心配おかけして申し訳ない」

「貴様自身の心配などしていない。貴様が居なければ我々はガロンゾから出れんのだ」

わかっちゃいたが言い切られてしまった。絶対零度の視線が俺を突き刺す。

「当然ミ斯拉の契約は生きている。お前と違い、人形は島から出る事は適わず足止めは続いている。早々に艇の修理を済ませろ」

「俺に言われましても……」

「わかってる。ただ文句の一つも言いたいだけだ」

文句言っていないならこっちも色々言いたいのだが……。しかし切りがなさそうなので、ここはグツと言葉を飲み込んでおく。

「この後艇を確認はするのだろうか？」

「当然です。九日も不在だったんですからね。どうなってるか直に確認したい」

なにやらカルティラさんの言い方から妙な胸騒ぎを覚えなくてもないが、とにかく今日のうちにエンゼラの現状と改修日程の確認を済ませたい。通常であればまだまだ時間のかかる工程のはずなのだが……。

「この際なんでもかまわん、早く終わるようお前も何とかすることだな」

「ずいぶんと無茶言うなあ……」

「常日頃星晶獣相手にしている人間が何を言う。無茶でも可能にしてみろ」

したくてしてるんじゃないんだよ俺あ。

「過大評価つてもんじゃないかなあ。そりやまあ……俺に出来る事がありややるだけやってみますがね。俺だって困ってるわけだから」

「そうしろ。それと、だ……」

「はい？」

「いい加減その手を止めろ」

その手、とは俺の手である。俺の手は絶賛茶菓子に出したクツキーを手にとつては黒騎士さんの隣に座るオルキスちゃんの口へと運んでいた。

「はむはむはむ……」

「……駄目ですか？　かわいいですよ」

「そういう問題じゃない、餌付けるな。人形が調子に乗る」

胃に負担をかける内容の会話を癒し効果で緩和するため、オルキスちゃんにクツキーを食べさせていたが、やっぱり駄目だったようだ。

「あの小娘と出会ってから変な影響を受け、その上貴様に出会ってからもどんどん調子に乗っている。これ以上こいつに変な影響を与えるな」

「俺は近所に住む不良かなんかですか……」

ジータはともかく、俺はオルキスちゃんに飯おごつたぐらいしかしてないのですが、それだけで影響受けるってなにさ、多感な年頃にしても多感すぎやしないか。けど保護者が言うならしかたない。

「オルキスちゃん、あと包んで持って帰っていいよ」

「やった……」

オルキスちゃんは、小さなガッツポーズを見せた。可愛いなあ、このう。

「……貴様、そういう事をするからあんな噂が立つのではないか？」

「子供を愛でる事に貴賤は無いつ！」

「そう言うところだぞ」

「すごい深いため息をはかれた。黒騎士さんと出会ってから一番距離を遠く感じる言葉だった。」

「……我々はもう帰る。艇の件は早めに何とかしろ、次に会うのはそれからだ」

「あい、まあ自分もがんばります」

「戻るぞお前達」

黒騎士さんが立ち上がり部屋から出て行く。スツルムさん達も続き、帝国の戦艦へと戻る。

「んじゃまたね団長君、なんも手伝えないけど艇の修理が速く終わるよう応援はしとくからねえ〜」

「……まあ、なんだ。あまり気負うなよ。お前の場合余計面倒になる」

「お兄さん……またね」

スツルムさん達もそれぞれ言葉を残しさって行く。小さな手を振るオルキスちゃんのは姿は、即心のアルバムにしまう。

「一先ず帝国との面倒は、一時的であるが落ち着いたと言う事にしておこう。次はエンゼラの事なのだ。」

二 エンゼラ、Lv9にワープ進化するってよ

カルテイラさんから聞いたエンゼラの現状については「改修作業は順調だし、問題は無いがちよつと面倒にはなってる」と話す。これ俺が一番嫌いなパターンじゃないだろうか。

具体的な状況を聞いたが見た方が早いと言われ、カルテイラさん達と早速親方さん達とエンゼラのある中央船渠へと向かう。

「それで、修理中って言う艇はどんな騎空艇なのかしら？」

「エンゼラっだっけ？　なんか名前がカワイイ感じするう（㇇、艸）♡」

そして着いてくるのは新メンバー達。

「もうバラ組み直しでしたって話だからな、骨組みだけで外觀はわかんないかもよ」

「それなりに大きい艇なんだろう？」

「普通にどつかの騎空団が使ってた中古だからね。うちは星晶獣いるからそうでもないけど、普通なら数十人の騎空団には広すぎるぐらいだよ」

「だとしても広いのはうれしいのう」

今後乗る事になる艇を見ようと和気藹々と移動するフェリちゃん達。

そんな彼女達を見ながらも、俺は俺で妙な不安があつた。

「見た方が早い、つて言う状態つてなんなんですか」

「作業を止めず、同時に計画が二転三転してつちゅー感じやな。別に借金増えるとかそういう事は無いから安心しい」

「あつてたまるか」

300万を超える借金なのだ。日に日にシエロさんの笑みが増してゐる気がするこの頃、これ以上増えてたまるものか。

「強いて大きな問題つちゅうなら、巨大ドリルが取り付けられそうになつたのが一番のハイライトやな」

「何でっ!？」

「知らんわ。おつちやんに聞き」

ドリル? 何故にエンゼラにドリルを? ドリルは良いとしても、何故騎空艇にドリル?

「いいじゃねえか相棒。いつそドリルでもありやうちの騎空団らしいぜ」

「いいわけあるかっ!?! なんだドリル搭載型騎空艇つて!?! 予算オーバーだよっ!」

「そこか相棒」

一番はそこだよ馬鹿野郎。

「お腹痛い……引き返したくなってきた……」

「まあそれ以外はそんな心配せんでええつて。それよりあんた、誰よりもユグドラシルが一生懸命がんばつとる。その仕事ぶりはしつかり誉めたり」

俺達がガロンゾに到着した時、俺を迎えたユグドラシルは早々に作業へと戻った。何か使命感溢れる顔の癒し系頑張り屋晶獣は、今も俺達のために頑張っているのだ。

「なんかご褒美考えないとな」

「それがええわ」

ユグドラシルは食べるのは勿論だが、特に飲み物が好きだからな。なんか甘いノンアルコールのカクテルでも作ってあげるかな。

ユグドラシルへのご褒美をあれこれ考えながらエンゼラがある中央船渠内へ入った時、幾つも並ぶ修理や完成を待つ騎空艇の中最初に視界に入ってきたのは巨大な艇の骨組みだった。肋骨のように並ぶ騎空艇の骨組み。まだフレームだけの艇であるがその巨大さに圧倒される。

「大きい艇だなあ。完成すればさぞでかい艇になるだろうねえ」

「何他人事みたいにゆーとんねん」

「え？」

「これや、これ」

「ん？……これ？」

「そう、これや」

「……………え、これ!？」

カルティラさんが目の前の骨組みを指差した。最初何を言っているのかわからなかったが、場所と状況からこの目の前の骨組みこそがエンゼラであると察する。

「団長さん若いのに随分大きな騎空艇手に入れたのねえ」

そうコルワさんは感心しているが、しかしこれフレームからして俺の知ってるエンゼラじゃない気がするのですが……。

「いやいや、これ……え？ カルティラさん？」

「安心し、値段は変わらんから」

いやそれも重要だけど。重要だけでもね？

「俺が思ってたのより大きくなってるのがするんですが……」

「まあ船大工と星晶獣が無駄に本気出した結果やな。詳しくはあつちに聞き」

カルティラさんが指差す方向。そこには数段積まれた運搬用パレットの上になつころがりながら休憩する親方さんの姿があつた。

あちらも俺達に気がついたようで、ひよいと身軽に飛び起きると俺達の方へと駆け寄ってきた。

「無事だったか坊主！ よく戻ってきたなあ！」

ドラフらしい力強さで、バンバンと俺の肩を叩き親方さんは豪快に笑った。

三 艇を編むドラシル

「坊主がさらわれてから本格的になった改修作業を繰り返すうちに、もう色々と楽しくなっちゃってますな」

「船体自体の拡張性高めて、好みでアタッチメント追加できるようにとか考えちゃったよ」

「まあ実際にそうしたんだけどな！」

「しちゃったねえ」

あつはつは——と、笑う親方さんと久しぶりに出会う星晶獣ノア。

「いやいや、そんな暢気な。これもう改修じゃないでしょう。実質新造じゃないっすか」
職人の腕が疼いたのか、それとも艇造りの星晶獣の本能か知らないが、聞けば予定通りの作業を進め、そしてユグドラシルが本格的に作業へ参加してから色々予定を変えたり、手を加えだしたらしい。

ガタイの良い星晶獣が居るから通路とか部屋を大きくしようか——と言うのは、当初

の要望にも確かにあつたが、そこから「じゃあ船体もつとでかくするか」となり「いやまだデカくできるな」となつて「いやいや、これまだデカくできるな?」といつて「うーん、もう一声!」と言う流れがあつたそう。

エンゼラは中型騎空艇の中では、比較的小型の騎空艇になる。ジータ達の乗る騎空艇グランサイファーが凡そ200mで、エンゼラはその半分ぐらいだが目の前のエンゼラは、おそらく可住スペースとなる骨組みだけでも150mはあるように見える。これに気囊やプロペラが追加されると、ほぼグランサイファーと同等の大きさの騎空艇になるのではないだろうか。

改修つてレベルじゃねえぞ!

「気囊は何も問題は無いからそのまま使う。それで以前に話した通りプロペラは追加する。3基付けて計6基になる」

「重量は増すけどプロペラを増やして推進力増せばとんとつてところだね。主翼や他のマストも大きくするし」

「さいですか……」

やたらと輝く笑みの二人。楽しくて仕方が無い、と言つた風である。

「なんせ星晶獣の作り出した材木で作れるんだ。こんな面白いこたあねえ」

「ユグドラシルが大活躍だよ。彼女が居なきやここまで早く進んでない」

「と、べた褒めされるわが騎空団きつての癒し筆頭。頬を染め照れている、かわいい。木材の確保がこの敷地内で出来る上に質も最高級だ。この後の作業で床や壁なんかも取り付けるが、俺達の意図通りの木材作ってくれるんで、組み立ての時もむらの無いように接合できる。すげえもんだよ、まったく」

「この規模の改修になると、普通なら倍以上に値段が上がるよね」

「ヒエツ!？」

ノアが心底恐ろしい事を言った。途端に心臓が飛び跳ねる。

「安心して、君達の改修計画の契約は生きてる。値段が変わることは無い、これもユグドラシルのおかげだよ」

「つまえ、お前……ほん、ほんとそう言う洒落にならない冗談でもなあーっ！ お前ーっ！」

「はいはい、落ち着き団長」

「ノア、相棒は余計な出費には敏感だから勘弁してやってくれ」

「あはは……ごめんよ。脅かすつもりは無かったんだけど」

飛び出していないよね俺の心臓？ 床とか落ちてない？ マジで勘弁だぞ、俺の心臓は金銭関連の事となると簡単に止まりかねないからな。

「とは言え、この方法もユグドラシルが仲間に居る君達だからこそ……ある意味反則だね。これが当たり前になると面倒になるし」

「面倒？」

「団長、団長」

ノアの言う事に首を傾げると、ちよいちよいとカルテイラさんが俺の肩を突いた。

「よー考えてみ？ 木材に限らず『商品』ちゅーのは専門の問屋や小売業者が卸すもんや。それも木材なら木を植えた土地の所有者、その木を刈るとこ、加工するところ、卸すところ……色んな人間が関わるわけや。けどユグドラシルは別や、その作業殆どを一人で完結しとる。しかも最高級の材木を理想的な形でほぼ無尽蔵に生み出す。こんなのが当たり前になってみ、他の商人にしたらたまったもんやないで」

「な、なるほど……」

「まあ精々君達自身のためだけに使える手段だね。一つの騎空団が使う分には問題ないだろうし」

言われてみれば確かにその通りだ。実は内心ここまで褒められるユグドラシル産材木ならば、今後商売として売つても良いかなと密かな野望を抱いていたのだがそうもいかない。最悪客を取られた他の業者から恨まれる。

そして冷静に考えれば別に俺は木材・材木専門の業者になりたいわけではない。俺は

至つて普通の騎空団の団長なのである。この考えはもう捨てておこう。

「じゃあ……コルワさん達は何かご要望あります?」

「私達?」

要望を聞かれるとは思わなかったのか、エンゼラの完成予定図を見ていたコルワさん達がキョトンとした。

「今なら多少の要望は通るらしいんで」

ちらりと親方さんを見ると、肯定するように親方さんは頷いた。

「普通なら勘弁してほしいが、散々話が出た通り星晶獣の嬢ちゃんのを力を借りた今回は特別だ。元から人数のわりに部屋余ってるしな。限度はあるが部屋の位置だとか、間取りの変更なら今でも変えられるぜ」

「それなら……一つ被服室とかに出来る嬉しいのよ。仲間になる時には、部屋さえあれば、なんて言っておいて申し訳ないのだけれど、やつぱり専門の部屋があれば助かるから。もちろん道具とか必要な設備の費用は私が出すわ」

「あつ! んじゃあさくクロエ日の入る化粧部屋欲しい、(・▽・)ノ! やつぱメイクとかつてえ、暗い部屋じゃ無理、サゲ。クロエお日様リスペクトだから、わら」

「わ、私は特にないから。部屋をくれるだけでもありがたいし」

「わらわは美味しい物沢山食べたいのお」

「そういう事聞いてんじやないんだよ」

「のじゃっ!？」

食欲から来るただの願望を言った一名にはでこピンを食らわせておく。

「そのぐらいなら大丈夫だろう。たいした変更もしなくていい」

「拡張性高めておいた甲斐があつたね。やろうと思えば完成後も一部部屋の移動とか出来るし」

「あとドリルも付けれるぞ」

「ドリルはもうええつちゆうねんっ!？」

また、あははと笑う二人にツツコミを入れるカルテイラさん。きつと九日の不在の間、続いたやり取りなのだろうなあと俺は思った。

「……なんであれ、順調であるなら助かります。ドリルは別にいらなですけど」

「いらねえのか……良いんだがなあ、ドリル」

この人のドリル愛はなんなんだろうか。不恰好だろうに、どう考えてもエンゼラにドリルは。

「それじゃあ確認も出来たし俺達戻ります。残りの作業もどうかお願いします」

「いや、ちよつと待った」

これ以上俺達が居ても意味は無いだろうと思ひ、船渠を後にしようとしたが何故か親

方さんに引き止められる。

「何か？」

「一つ、気になることがある。お前らの騎空団で艇の修理が出来る奴はいるか？」

「艇の修理？」

突然の質問であつた。どう言う意図かわからないまま、俺は頭の中で騎空艇の修理が出来る人間を自然と検索するが特に思いつかない。強いて言うならばザンクティンゼルでは結構日曜大工をした俺と今造船に関りだしたユグドラシルだろうか。

「特に居ませんね。小さい家建てるぐらいなら俺出来ますけど」

「ほう？　じゃあやつぱりお前さん木を扱う心得が多少はあるつてわけだな？」

「……ん、ん？　まあ、はい……え？　やつぱり、つて……うえ？」

何故だろうか。親方さんの視線が爛々と輝き俺を見る。

「星晶獣の嬢ちゃんから聞いてな。一度お前さんと星晶獣の嬢ちゃんだけで艇の修理しようとしたんだつて？　それで、ちよつとばかり思いついたんだが……」

「あ、あの……なにを、何故肩に手を……」

「まあまあ、もうちよつと聞いてけや、な？」

助けを求めるようにカルティラさんとB・ビィに視線を向けると、どこか哀れむように「予想してたよ……」と言わんばかりの視線。慌ててユグドラシルを見ると、笑みを

浮かべて小さく手招きをしていた。

■ 四 ジョブチェンジ（ガテン系）

「え？ 団長残ってきたの？」

中央船渠から戻つて来たB・ビー達。だがその中に団長の姿は無かった。

宿でカルテイラ達を出迎えたメンバーは、団長の姿が見えない事からまたぞろさらわれでもしたのかと身構えたが、直ぐにカルテイラが「心配せんでええ」と落ち着かせる。

宿の部屋に集まり話を聞けば、団長はユグドラシルと共に中央船渠のエンゼラ改修ドッグへと残ってきたとの事。

なんでまた、とマリーは思った。

「あつちでなんかあつたの？」

「別になんも。団長にすれば面倒かもしれないけど、まあたいした事無いわ」

「その「たいした事無い事」ってのはなんだよ？」

カリオストロが先を急かす。するとカルテイラは思わず失笑した。

「今の団長は「船大工見習い」や」

「は？」

予想した答えではなかったのだろう。カリオストロだけでなく、他の団員も似たような反応を見せた。

「まあそう言う反応になるわな。おっちゃん急に言い出すもんで、うちも魂消たまげたわ」

「しかし何がどうしてそうなったでありますか……」

「理由としちやオイラ達の中に、艇の修理でできる奴がいなから」だ。応急処置は出来ても、長い移動に耐えられる様な修理技術を誰も持つてねえ」

「それで彼にその技術を？」

「ま、そーゆーこっちゃ」

実に急に決まった事だ。と、誰もが思う。しかし団長に関して言うならば、あらゆる事が何時も急に決まってるので珍しい事ではない。

「だとしても大丈夫でしょうか。改修の工期がどれ程かまだわかりませんが、船大工のような専門職の技術を短い期間で覚えられるのか……」

騎空艇は空の世界に無くてはならない移動手段であり、あるいは騎空団にとっての家、そして家族である。その騎空艇を作るこの世界の船大工とは、実に重要な仕事だ。そう簡単になれるものでもない。ユーリはそのような仕事を急に覚える事になった团长を心配した。

「大丈夫だろうか」

「一週間モアレバ腕ノ良イ船大工ニナツテルンジャナイカ？」

だがマグナシックス達ザンクティンゼルからのメンバーは特に心配していなかった。

「主殿は短期間での詰め込み式修行に関して天才的だ。主殿の師匠である人物が言っていたが、絶えず水を吸い続ける布と言っている。『技』と『知識』と言う名の水に漬ければその水を吸い上げる布、そう言う才能なんだ、あれは」

「使い続ける限り腕は衰えない所か上達する一方つてわけか……坊主も何だかんだで大概だな」

「本人は無茶ぶりばかりされると不満げだがな」

教えれば教えるほど面白いように技術を会得していくため、教えるのが好きな人間にとって団長は非常に魅力的だ。更にどんな無茶苦茶な注文も文句を言いながら、最終的に応えてしまうと言う団長の性分もあつてか余計にそんな人間が寄ってくるのもあるだろう。

「エンゼラに錬金術の研究室ができたなら教えてみるか……。面白い仕上がりになるかもしれないねえなあ」

「あ、あんまり無茶させないようにね……？」

「錬金術特化じゃないとは言え、あれだけの才能だ。ポーション作れる程度じゃ勿体ねえだろ？」

カリオストロもそんな人間の一人なのかもしれない。以前仲間になった時に聞いた「ポーションしか作れんし、錬金術師になる気は無い」と言う団長の発言、しかし磨けば団長は優秀（または愉快）な錬金術師になるだろうと彼女は考えている。

「なあに心配すんな……世界で一番可愛いカリオストロが、手取り足取り教えるんだから団長さんだつてうれいはずだもん☆」

他にも何か思いついたのかカリオストロは、可愛いくしかし邪悪とも取れる笑みを浮かべ、今後訪れる団長への更なる無茶ぶりに涙するセレストであった。

■ 五 一方その頃、団長は

「無茶振りの予感っ!？」

「急にどうしたのさ」

背筋に走った悪寒とも取れる何かに怯える。そんな挙動不審な俺を見てノアはちよつと引いていた。

「いや、何か追々面倒な事やらされそうな気がして……」

「君そんな事ばかりだねえ」

「言うな……」

こんな時の予感、特に悪い予感は大抵当たる。畜生め。

「それより、ほら。手が止まってるよ」

「わかつとるわい」

ノアに急かされ手を動かす。手に持つのは両刃鋸。それを使って木材を切っていく。なんだって俺がこんな事せにやならんのか。

「おかしいつ！ これは団長の仕事じゃないのではないかつ!？」

「当然のように仕事出来ちゃうからからじゃないかなあ」

木材加工を行いながら嘆いていると、その様子を見ていたノアが若干困った笑みを浮かべて言った。

「だって……やってみろって言うから」

「そこでやつちやうし、出来ちやうからなあ君は」

あはは、とノアは暢気に笑った。

カルテイラさん達を交えエンゼラの今後の話も終わって帰ろうかと思つた時、親方さんに引き止められた俺は「船大工の技覚えろ」と半ば強制的に残らされた。

訳が分からぬままに作業着に着替えさせられると、改めて親方さんに説明される。何かと思えば今後の旅で必要となる知識と技術を持つ人材がいけないと言う点を指摘された。

即ち艇の専門家。造船に携わる者が持つような専門知識と技である。

ただ木を打ちつけつなぎ合わせるような応急処置しか出来ないのでは、今後更に過激なメンバーが増える事が予想される旅にエンゼラがまた持たなくなるだろう——と言う、俺が居ない間改修作業に関わっていたユグドラシルの不安があつての提案であつた。

過激なメンバーが増える事は勘弁願いたいが、今後の旅に多くの困難がある事はほぼ間違いない。空の旅、騎空団の活動とはそう言うものである。

そこで誰にその知識と技術を覚えてもらうか。と言う話が、親方さんとノアとユグドラシルの三人の中で持ち上がったらしい。

一人目は本人の立候補もあり、まずはユグドラシルだつた。今回の改修で最初から関わり、木材の提供から加工にまで携わる人物改め星晶獣。必要な知識と技術を覚えれば、今度こそ生み出した木々を利用した船体の修理も可能になるだろう。そして後もう一人はそんな人材が欲しいとなつた時、ユグドラシルは真つ先に俺の名を上げたそうだ。なんでじやい。

曰く、短期で何でも覚えれる万能タイプなら団長がベストと言う厚い信頼によるものとかなんとか。

実際問題、騎空艇の修理がキツチリ出来る人間は必要だろう。そしてここでこのユグドラシルの提案である。それを聞いたB・ビィとカルティラさんも「確かに」と頷いて

俺に向かつて「フアイト！」とどこか軽しい激励を送つて歸つてしまつた。ちくしよめ。

そんな訳で俺は親方さん達の下で急遽船大工の修行である。無茶苦茶である。

行き成り本格的な作業に混ざるのではなく、簡単な木材の加工等をやらせてどの程度道具が扱えるかまづ様子を見ると言う事で俺は鉋やら鋸やらをさつきから使い続けている。

鉋をかけたなら、思いのほか上手くできてしまい、「お、団長さん上手いもんだね」と言われる。

次に釘打ち作業なんかに混ぜてもらつたが、またも思いのほか上手く出来てしまい「上手くやるねえ……たまげたなあ……」と言われる。

何あつさり出来てるんだ俺は……。

「己の器用さが恨めしい……」

「君の場合、文字通り器用『貧乏』になるのかな」

「貧乏はいらねえいっ！」

「おっ！ 坊主もうノルマ終わったのか？」

叫びと共に木を切り終わると、通りかかった親方さんが話しかけてきた。言われて気がつくが、今出来上がったものでノルマは達成している。諸々の感情をエネルギーにし

て作業してたら自分でも気がつかない内に終わってしまったらしい。

親方さんは俺が切り終えた木の山から一本材木を手持って切り目を観察した。

「ほうほう……切り目がこれでもかかってぐらい滑らかだ。マジで鋸でやったのか疑うレベルだ。いやあ星晶獣の嬢ちゃんもだつたが、坊主も想像以上だな。どの程度の腕か見ようと色々作業させたが、どれもこれもこなしやがる」

「あつはつは……何ですすかね。自分でもびっくりだな……」

「だがおもしれえな。短い間でもどんなもんになるか」

親方さんからザンクティンゼルのばあさんと似た何かを感じる。これは恐らく俺のような若造に技を仕込むのを楽しみにしてるタイプのあれだ。

「なんならお前さんだけで、小型の騎空艇ぐらい作れるようになってもいいかも知れねえなあ」

この親方さんは、俺に何を期待していると言うのか。俺はただの騎空団の団長である。メカニックでもアーキテクトでもない。

「だが覚えて損は無い知識だぜ？」

「そりゃ、まあそうですけども……」

「それに小型の騎空艇は中々面白いぞ。あれも立派な騎空艇だ。『走艇』なんか観るのも楽しいからな」

「走艇？」

「知らねえのか？ スカイレース用の小型騎空艇の事だ」

「スカイレース……」

エンゼラ以外の騎空艇にまともに乗ったことも無い俺なので、そんなレースがこの空にあるとは当然知らなかった。走艇と言うのも説明を受けるがあまり想像できない。

「ノアは知ってるの？」

「まあ一応。開催される公式レース全部見る程度には」

「普通にファンじゃねーか」

「そこはほら、僕艇造りの星晶獣だし」

それ関係ある？ と思わず言ってしまう。絶対個人的に好きただけだろう。

「世界各地でレースはあつて、年中どこかで盛り上がってるからね。島々を放浪してると、何かと観戦機会は多いのさ」

「あつそう」

「おつと興味無さげだな。一度観てみる、面白いから。特に年に一度のPSC！ あんな熱いレースは他にねえぜ！」

「あれは凄いな。走艇と人が正に一体となった何でもありのレース。僕も思わず熱くなるよ」

「噂じやあ今年マツディーが戻るとか聞くな」

「元チャンピオンがかい？ それはまた、荒れるレースになるね」

知ってるもの同士熱く語り合う二人。そして置いてかれる俺。まあ楽しそうで何よりである。

「まあレースつて言うなら熱狂する人も居るでしょうがね。興味も無いわけじゃないけど、俺あ今んとこ艇やら借金の事で頭一杯なもんで」

「そりやあ残念だ」

「もしその内観る機会があれば観ますよ。それより、やるなら次の作業教え——」

「そう言えば今年のPSCの賞金かなり凄いらしいね」

「それよそれっ！ 驚きの7億ルピッ！」

「なのんおつくッピ!？」

耳を貫く突然のお金の話、驚愕の億単位。自分の脳内が一気に“ルピ”で埋まるのがわかる。

「どうしたの団長さん。なんか凄い声出してたけど」

「……その賞金は、優勝賞金なのですか？」

「ああ、そうだけ？」

「優勝……7億……ッ！」

借金返済余裕どころでは無い……そんな額があつたらもう……もうっ！

「走艇ってお幾ら万ルピなのでしようかね!？」

「坊主が急に食い付いたぞ、しかも出場する気だ」

「――」

「ああ、お金が関わるから……」

ユグドラシルが控えめにノア達に耳打ちしている。内容は大体想像がつく。

「だが、質問に答えるなら……ピンキリだな。ただ記念にレースに出ますなんて言うなら数十万で済むが、上位入賞どころか、まともな勝負だつて出来ねえだろうよ」

「だね。勝負したいなら最低でも数百万の走艇買わないと」

「うぐ……っ。ハードル低い所で数百万……」

予想以上のお値段に驚く。普通の騎空艇買うより高くならないかもしかして。

「文字通り『走る』事を意識した騎空艇だからな。むしろ下手な騎空艇より値段かかるぜアレは」

「極力軽い特殊素材、空気抵抗を考慮したウイング、人によつては妨害用の攻撃のギミツクも入れるし……何よりエンジンだよ」

「機体に幾ら金つき込んでも悪いなんて事無い世界だからな。更にメカニックとか人件費もかかる。それこそ本当のプロになつてくると……エンジンだけで数千万、いや数

億

「この話無しで」

「食い付きも急なら諦めも急だな」

俺には縁のない話だったぜ。出場のための走艇買うだけでそんな金額かかるんじややつてられん。優勝の保証も無く、俺の場合最悪借金が膨れる結果になるだけだ。じゃあな、スカイレース。

「今は真面目に船大工の技を学ぶ事にします」

「言葉が出て来る経緯があれだが、その言葉自体は嬉しいぜ。さあ次の作業を覚えてもらうぞー！」

「――！」

ユグドラシルが「おーっ！」と両腕を上げて気合を入れていた。

スカイレースには縁が無さそうだが、俺には彼女の笑顔が見れるだけ幸運と言う事だろう。それに宿戻ったらフェリちゃん達がいる。また頼んでジジやニコラ達モフらせてもらおう。そう思えばやる気が出てくると言うものだ。

頑張れ、俺。

六 更に、一方その頃、苦勞騎士は

■ 団長達の帰還によって、多少なりとも不安と苛立ちが和らいだのを黒騎士は感じてた。根本的な解決には至っていないが、少なくとも来るはずの連絡が来ない苛立ちを感じなくて済む。

スツルムとドラंकは既に好きに休むように言つてあるが、恐らく連絡を怠つたドラंकへの説教は続いているだろう。どこからか尻を刺されたドラंकの悲鳴も聞こえてくる。悲鳴を聞いた帝国兵は「おつ！ やつてるね！」などと笑い、今ではその日に何度悲鳴が聞こえるかの賭けが行われるほどになつていた。

そのような帝国兵の風紀の乱れを知る事無く、黒騎士は執務室の椅子に座ると深く深くため息を吐いた。

悩みは残つているのだ。団長の事はもちろんだが、人形——オルキスの事。脱走癖がついたオルキスだが、黒騎士も常に傍に居る事は出来ない。そのため先日の脱走後部屋の警備を強化し常に扉の前に兵を置くようにした。

日に日にやんちゃ具合が加速するオルキスに黒騎士は頭を悩ました。

前までこんな風じゃなかったのに……と、最近同じような事ばかり黒騎士は考えている。見張りを強化した時など思わず「逃げれるなら逃げてみるがいい」と柄に無い挑発をしてしまった。しかも子供相手にである。そのため後で自己嫌悪に陥つたりもして

いた。

最近ではどこかパートナー不在気味の家庭で、子育てに悩む親の様な雰囲気さえ出している。それを本人も自覚しており、そんな家庭環境に覚えがあるのか余計に苛立っている。

それが原因でこの所帝国兵からは妙な印象を抱かれており、「最近、黒騎士様何て言うか、人間味出てきたよな」とか「ほつとけない感じしてきたよな」とか、更には「なんか実家のお袋思い出すんだよ……」「俺は姉貴かな」とか言われている。幸いにもまだ本人の耳には届いていない。

今にも「こつちにおいで」とまた団長の幻が苦労人ポジションへ誘いに現れそうだったが、幻影が現れるよりも先に執務室の扉をノックする音がした。

「入れ」

「はっ！ 失礼いたします！」

黒騎士の許可を得て部屋に入ったのは一人の帝国兵であった。鎧は他の帝国兵と同じであるが、彼は主に偵察で得た情報を黒騎士に報告する任を受けている。

「何があつた？」

「あの団長がまた妙な事を始めたため、一応ご報告に」

「……戻ってきて早々にっ」

もう暫く阿呆な報告は無いと思つていた矢先であつた。

「今度は何だ？　また星晶獣か？　次はどこに連れ去られた、アウギユステか？　バルツか？　それとも瘴流域でも越えたか？」

「あ、いえ。今回はそう言うものでは……」

「ではなんだ？」

「それが、どうも職人に誘われ自ら騎空艇の改修作業に加わるらしく……」

「……あいつが自分でか？」

「そのようです。率先して、と言うわけではなかつたようですが」

背もたれに背を当てるで呆れ返る。確かに半ば冗談で「何とかしてみろ」とは言つたが黒騎士もまさか本当に団長自ら改修作業に参加するとは考えていなかった。

「なんなんだか、あの男は……」

「いや、まつたく」

ともあれ自分には関係の無い話である、と黒騎士は呆れはしたが特に気にはしなかつた。何かあつたかは知らないが、それで改修が早く終わるのであれば悪い事ではないだろう——そう思う事とした。

「ご苦勞だつた。戻つていい」

これで少なくとも今日は気を休める事が出来るだろう。黒騎士は改めて椅子に腰を

落ち着かせた。

「ご報告します！ 人形殿が脱走いたしました！」

「——っ!？」

「ああ、危ない!？」

そして部屋に慌てて駆け込んできた二人目の兵の報告を聞き、そのまま後ろに倒れそうになる。だがそこは腐つても七曜の騎士、見事バランスを取って転倒を回避した。

「っう——っ!! 見張りは何をやっていた!？」

「そ、それが……家具を倒し大きな物音を立てた後、不審に思った見張りが鍵を開け中に入った瞬間死角から飛び出て鍵を奪い、見張りを部屋に閉じ込め自分はそのまま……!」

「脱獄王にでもなる気かあいつはっ!？」

「見張りの者には、ピースしながら「今日は前より頑張る」とだけ言い残しそのまま」

「何を頑張るだ、なにをっ!!」

「何をと、言うなら……」

「わ、我々との逃走劇でしょうか……」

「ふ、ふ……ふざけろっ!!」

「ですよねっ！ 申し訳ございませんっ!!」

恐らく黒騎士の挑発を受けての脱走だろう。馬鹿な挑発をしたのは自分であるため、黒騎士としては殆ど自身とオルキスに向けての怒号であったが、目の前の兵にしたらたまったものではない。

「艦の全出入口を封鎖しろ！ 窓も全てだ！ 奴が入り込めるような穴や隙間は全て見張れっ！」

「か、かしこまりました！」

「直ちに搜索してまいりますう——っ！」

怒り心頭の七曜の騎士に怯えた二人の兵は、身を寄せながら大慌てで部屋から飛び出していった。

そして艦内に発令される「第4次人形捕縛作戦」開始の合図。今日も帝国戦艦は平和であった。

もうぐ近所さんな関係

一 団長ガロンゾ帰還より数週間後。ある記者の手記、および作成された記事より

「ええ？ 取材つて、俺を……ですか？」

彼は意外そうに驚いていた。彼は我々が今回注目した人物。極めて控えめな印象を抱く少年。【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女ZOY】の団長であつた。

星晶戦隊（以下略）、その名が広まりだしたのは最近であるが、しかしこの名を知らぬ者は居ないのではないだろうか？ それ程にこの騎空団は異質とも言えた。

知らぬ者は居ない、と書いたがしかし基本情報を載せるのであれば、この騎空団はあまりに強く、そして多くの騒動の中心にいるとされ、その主要メンバーが星晶獣であると言う事だ。更に付け加えるならば、彼らより先に活動を始め名を轟かせた騎空団【ジータと愉快な仲間たち団】の団長と友好的な関係にあると言う事だろう。それだけでどれ程この騎空団が異質かお分かりいただけるのではないだろうか。

今その騎空団の団長である少年は、とある事情から我々の住まうガロンゾへと訪れ、さらに驚いた事にそこで大工に弟子入りを果たしている。

その不思議な噂を聞いた我々は、さっそく彼に取材の申し込みを行った。

「いや、取材つたって……俺なんか取材しても面白くないですよ」

そう話す団長であったが、今彼らの特集を組めば「ジータと愉快な仲間たち団」の特集と並んで「ハズレは無し」と同業者の間では言われている。勿論、特集を組めれば……であるが。

だが幸いに我々ガロンゾ島の小さな新聞社にも好機が訪れた。取材するにも追いつくのも一苦勞、しかし下手に近づけば星晶獣との戦いに巻き込まれると言われる彼らがガロンゾにいるのだ。これを逃す手はない。

星晶獣との戦いに巻き込まれる、と言うのは眉唾にとらえていたが、しかし実際彼は少し前に星晶獣に攫われ九日も姿を消している。それもあつて取材を申し込むのに時間がかかった。どうやら星晶獣を引き寄せると言う稀有な体質の噂は真実らしい。

我々は熱心な交渉の末、ついに取材許可を得た。

「いやあく俺なんか特集してもねえ。いや、まあいい感じに書いてくれれば、まあね、まあ……うん、嬉しいと言えば嬉しいけど、そりゃあね？　まあそこら辺、良い感じに、ね？」

取材の了承を得た時、彼は我々取材班を緊張した様子で見ている。短期間で幾つもの修羅場をくぐり、星晶獣を相手に何度も戦ったと言うが、しかしまだ年若い少年らしさを感じ取れた。その様子に我々取材陣は、ある種の安堵感を得た。

我々が住まうガロンゾにも島と契約した星晶獣ミスラがいるが、その存在は神そのものである。彼の存在失くして、このガロンゾは成り立たないだろう。

そんな存在と戦えると言う彼の事を噂で聞いていたので、こちらこそ緊張したものがそれは憂いであつたようだ。噂を鵜呑みにするならば、なんとも恐ろしい屈強な男を想像したものだ、しかし目の前に居たのは極めて控えめな少年だ。これは嬉しい誤算と言えよう。

後日よくよく噂を整理すれば、*「恐ろしく強い集団に混ざる極めて控えめな印象の少年」*の話も多々あり、その類の噂は信びよう性が高いと思えた。確かに彼は、極めて控えめな印象を抱かせる。また彼に関しての噂はそれに以外にも色んな噂があるが、列挙しだせば切りがないため何時か機会がある時にしたい。

さつそく次の日から取材は開始された。

まず記事にできる範囲で説明するならば、団長が船大工に弟子入りしその腕を振るっている理由は、彼が彼自身の騎空艇を修理するためとの事だ。

「まあ……面倒な事がちよつと前にありましてね。面倒な事態が面倒な方向に転がっ

て、面倒な集団が出てきて、面倒な集団が面倒な星晶獣を出してきて、その面倒な星晶獣の相手をしてたら、最終的に面倒な結果が残ったんです」

まるで要領を得ない説明であったが、星晶獣との戦いが多いとされるこの騎空団の事を考えれば全てを聞かずとも納得も出来る。激戦多き騎空団であれば、騎空艇もまた修羅場をくぐり翼が折れる事もあるう。

しかし彼はその折れた翼を再び羽ばたかせようと奮闘している。

「まあウチの騎空艇、エンゼラは家みたいなもんですから。今更新品買う気も無いですし、今後の事考えると造り直した方が良いつてアドバイスも貰ったんで……あとうちの面子に耐えられる騎空艇の新品買うと、お金が……うーん」

最後の方はあまり聞き取れなかったが、彼の騎空艇への愛情と取れる想いが感じられた。

その後彼は黙々と騎空艇「エンゼラ」の修理を始めた。

ガロンゾに住む者にとってなじみ深い騎空艇の建造過程。だがこの現場は何かが違うと我々は感じた。

——人が多いのだ

場所はガロンゾの誇る巨大船渠である中央船渠。人が多いのは当然であるが、今回は訳が違った。一隻の騎空艇を修理するために集まるにしては人が多すぎる。不思議に

思っていたが、ある事に気が付く。エンゼラの改修現場に複数の船大工の組が来ていたのだ。

一隻の騎空艇にこれ程複数の組が関わるのは珍しい。その真相を聞きに我々は総指揮を執っている人物を訪ねる。

「そりゃあ通常こんな新造レベルの改修数年単位で組み上げ完成させるさ。早くて一年、二年つてところだ。だが今回はあらゆる事が例外だ」

そう語るのはエンゼラの改修を担当する組の親方であった。彼は続けて語る。

「今回の艇の改修では、星晶獣の力が大きい。この艇、エンゼラを組み上げるためにこの場には二人の星晶獣がいる。一人は……ほれ、そこで方々指示出してる小僧さ。艇造りの星晶獣ノア。見た目は小僧だがすげえよな」

この場に似合わない華奢で色白の少年。見た目からは想像もできないが、彼もまたミスラと同じ星晶獣。名は星晶獣ノア、彼は的確に大工達へ指示を出していた。

本当に星晶獣を騎空団の仲間にしていたのか！取材班のメンバーは湧き上がったが、直ぐに親方に「違う」と言われた。彼は星晶獣であるが、親方の知り合いだったのだ。

「初めて出会ったのは、前に【ジータと愉快的仲間たち団】って騎空団が来た時だったが……いや、もしかしたらもっと以前にも出会ってたのかも知れねえ。艇に関わるなら、

どこかで……。なんにしても、ジータって団長さんが切欠で出会ったのさ。以降こんな感じてたまに手伝いに来たりする。あいつが居るだけで作業効率は格段に上がるのさ」艇造りの星晶獣と言つても、無から騎空艇を生み出すわけではない。彼とて独りでは何も出来ないが、しかし今ここには必要な物と人が全て揃っている。ノア氏の実力は十二分に発揮されている。そう親方は語る。

「それであつち、あのユグドラシルつて嬢ちゃん坊主の仲間の星晶獣な。あの嬢ちゃんが居なけりや、そもそもこの作業は始まらなかつた」

次に親方が指さした方向に視線を向ければ、屈強な大工達の中にノア氏以上に目立つ存在が居た。「可憐」と言う言葉が似合うその少女は、ユグドラシルと言う星晶獣だつた。

まさか彼女も星晶獣とは……。そう思わずにはいられない。眩しい笑顔振りまく彼女は、それだけで美しい。だからであろう、船大工達も傍を通る度彼女に挨拶をした。すると文字通り「鈴の音の様な声」と共に彼女は笑顔を向けてくれる。そうすると船大工達は喜び仕事へと向かつた。

男ばかりの仕事場に咲いた一輪の花、まさに彼女は今この作業現場のアイドルだつた。

「現を抜かされると困るが、あれで士気上がってるからな。まあ花も必要だろ」

親方の言うように彼女の笑みを受けた者達は、非常にやる気に満ちていた。元より島内外で「仕事一徹」のイメージがあり事実その通りの職人達であるが、そんな彼らが更にやる気に満ちて働くと言うのだから、いつそ恐ろしいとも言える。

だが彼女の美しさだけでこれ程の人数が集まるのか？ いやそもそも、彼女は何をするためにこの場に居るのか？ そんな疑問を口にする前に答えは訪れた。

笑顔を浮かべるばかりであった彼女が、ふと我々に顔を向けると「見ててくれ」と言うように頷きそして両手を広げ掲げた。何をするのかと思つたが、次の瞬間彼女の脚元からひよつこりとカワイイ木の芽が生えだした。我々はギョツと驚き呆然とするが、彼女は更に気合を入れるとそれは一気に成長しだす。うわあつ！ と取材班の一人が声を上げた。それはみるみる成長して、あつと言う間に一本の成熟した木となつたのだ。

「——！」

ふんすつ！ と、彼女は胸を張つた。まるで子供が親に褒めて貰いたい様にする姿に心奪われる。仕事の疲れや仕事柄不摂生になる生活でのストレスが吹き飛ぶかのようだった。

そう和んでいる間に彼女の生み出した木は男達の手で運ばれた。聞けば船の材料として加工するらしい。それを聞いて我々は驚くばかりだった。しかもその後彼女は、生み出した木や蔦を器用に動かし、形を整え船大工達の指示に従い騎空艇のパーツを繋

げたりと活躍する。

その活躍を見て「なるほど」と、ここで合点がいった。多くの船大工達が集まる理由は彼女と彼女の生み出す木や術だったのだ。

「星晶獣の生み出した木材が使えるって話を聞いて、他の組なんかからも「手伝うから触らせろ」って人手が集まりだしてる。あいつら暇なはずねえのに態々来るんだよ。まあ気持ちにはわかるさ、俺だって逆の立場ならそうしたさ」

船大工達は新しい技術に目がない。日夜新型騎空艇を造る事に奮闘するならば、星晶獣が生み出す木材と聞いて興奮しないと言う方が嘘であろう。そんな男達が何かと理由を付けて集まった。それが答えだったのだ。改めて星晶獣の力の凄さを目の当たりにし、ただ可憐であるだけではない彼女に畏怖の念を抱いた。

またそれによって彼女もまた助かってるらしい。船大工達からその仕事のいろはを学び、彼女自身の力で材木の加工等を出来るよう奮闘している。

だが別に彼女はノア氏のように艇造りの星晶獣と言うわけでは無い。そこである質問をした。

この仕事にやりがいを感じているのですか？ そう聞くと、彼女は勿論と答えた。

「――！」
彼女の声は正しく鈴の音の様な綺麗な音色そのもの。我々が話すような言葉ではな

い。だが不思議とその意味はわかる。念のため本人に確認を取りながら文章に起こさせてもらった。

彼女は今の騎空団が大好きなのだという。楽しい仲間と楽しい旅が出来る事が嬉しいと。そしてその旅で無くてはならなかったのが、騎空艇エンゼラであった。そのエンゼラが壊れた時、自分の力を使って修理する事も提案されたが、結局それは叶わず何もできなかったらしい。その事がとても悔しかった。だから今こうやってエンゼラを直す仕事に関われる事が嬉しいと言う。

何て素晴らしい、いや、なんと美しい心を持った星晶獣なのだろうか。取材班の中には、その穢れの無い心に触れ感動のあまり彼女を拝み出す者もあらわれた。

星晶獣なので拝むのもあながち間違いでは無く、そしてその気持ちもわかる。

団長にも後ほど話を聞くと、彼女の存在は団内でも非常に助かっていると云う。

「癒しですね。癖の強い団員が多い中で、彼女の様な存在は貴重です」

仲間になしようと直ぐに思ったのですか？

「直ぐに、と言うかうちの星晶獣達は仲間になる経緯が滅茶苦茶で……ただユグドラシルが仲間になる事に迷いはありませんでした。彼女だけではありませんが、癒しになる人が仲間になるのは決して悪い事ではありません」

なるほど、*癒し*がああ騎空団での活動で欠かせないと。

「はい」

そう答える彼の表情は真剣だった。この若さで団員をまとめると言う苦勞多い団長の身、色々とストレスも多い事だろう。

我々は彼だけでなく、他の人達にも彼女の評価を聞いてみた。

「ユグドラシルかい？ 勿論助かつてるよ。親方さんも言ったように、今回の改修は彼女ありきだからね。僕も艇造りの星晶獣としてやる気が出ると言うものさ」

「星晶獣の力を借りての仕事は何度も出来る事じゃねえ。これほど規模ならなおさらだ。同じ状況は二度はない、恐らくは今回限りの仕事になる。貴重な体験さ、しっかりと仕事させてもらうぜ」

「ユグドラシルは……時間があれば遊んでくれる……ルーマシーの森でも遊んでくれた……」

「良い子だよねえ。可愛いし団長君羨ましいよほんと。ところでここに猫のぬいぐるみ持った女の子来なかった？」

「呑気に答えてるんじゃないっ！」

「いったあっ!？」

話を聞いた全ての人々は彼女の事をべた褒めだった。

また通りすがりの少女とコメディアンらしきコンビも彼女の事を知っていたらしく

話を聞いた。大工達だけでなく、多くの人に好かれている事がうかがえる。

最後に彼女自身にエンゼラ改修に向けての意気込みを聞いてみた。

「！！」

「当然、あらゆる困難に立ち向かい仲間を護れる騎空艇にする事」、そう彼女は答えた。そして更に付け加える。

「仲間を護れると言う事は、その騎空艇も護れなければいけない。艇が無事であれば、仲間も無事であるのだから。空に住まい、空で生きる上で騎空艇は単なる移動手段では無く、もう一つの家として考えなければならぬ。それが星晶獣として、一つの土地で過ごすだけだった自分が旅に出て学んだ事の一つ。そしてその学んだ事を実践していきたい。自分にはそれが出来る術がある。これが仲間と艇を護る事に使えるなら、そうしていきたい」と。

今回の取材を通して、我々は雲の上の存在と思っていた星晶獣と言う存在の意外な一面を見る事が出来た。

崇められる神、悪戯に起きる天災の如き存在。あらゆる側面を持つ星晶獣であるが、しかし存外我々と星晶獣は深くわかり合えるのかもしれない。そんな希望を抱かせる取材であった。

なお、このメモの追記として書くが……今回の取材で当初の予定の団長氏の特集で

あったが、ほぼ取材の資料が星晶獣の彼女、ユグドラシルの事で埋まってしまった。再度取材は難しく彼にはそれとなく……記事内容が少し、ほんの少し変わる事を伝え取材料を多めに出す事にする。

■

二 以上、記者手記と『取材班は見た!! 中央船渠に可憐な星晶獣!!』その美しさはミドガルド級!!』(ガロンゾ島某新聞社発行紙)より抜粋

「おいおいおいおい」

ある夕刊を読み、そして机において思わずうろたえる。

なんか俺までエンゼラ改修の仕事に混ざる事になり、エンゼラの完成の目途がたち出した頃。ガロンゾのローカル新聞を発行する新聞社から取材をしたいと言う話が来た。お金も出るという話だったので、まあいいかと思つて取材を受けた。

そして更に日数が経ち、本日大工仕事の休みをもらいのんびり過ごし宿で夕食をとつていたら、食堂に俺が受けた取材の記事が載つた夕刊が既に置かれたので、皆で読むかと手に取つて広げたらこれである。

「俺の特集は?」

「これやろ」

「いや、特集……」

「ユグドラシルの？」

「俺のっ!!」

「ちゃんと出番あつたやん」

「あつたけども！ これもう完全ユグドラシルの特集じゃん！ まずタイトルに俺の存在無いよね!？」

予想外の記事内容に頭を抱える。そんな俺を見てカルティラさんは、あははと笑っていた。

「取材受ける話聞いた時からこんな予感したわ。まあ元気だし、取材料も予定より多く貰ったんやろ?」

「そりゃ貰いましたけどお……ああ、そうか。お金貰う時あの人達なんか申し訳なきそうだったのこう言う事か……」

取材陣の責任者が「記事の構成が少し変わりました」とえらくすまなそうに言いつつ、俺にお金を渡して来たあの時の顔。あの時は何も思わなかったが、記事が少しどころか大幅に変わった事を悪く思ったのか。

「言ってくれよお……」

「団長の出番もあるし、一応団長の取材つて言う所は嘘じゃないから言わなかったのか

もねー」

カルバさんの言うように俺の出番はある。だがあわよくば俺の本当の真面目な姿を特集してもらい、それによって空に広がりつつある碌でも無い噂を払拭しようと考えたのだが当てが外れた。

「あてこの『極めて控えめな印象』ってなんだよ?」

「言葉を選んだのだな」

「選ぶ必要ないよね、別に控えめな印象だけでいいよね、極めてとかいらないよね?」
しかも何度も出て来るよこのフレーズ! お気に入りか!」

「ある意味印象は残ってるぞ」

「印象が薄いと言う印象がなっ!! ちくせうっ!!」

頷きながら呟くシユヴァリエの言葉。まったく同意したくないぞこの野郎め。

「あはっ。団長さん、今とっても困った顔してるね」

「あっ!! また人の困った顔を肴にしてるな!」

「ふふふ、これはお酒でなくココアだけどね」

甘いココアを飲みながらフィラソピラさんは言う。

「ちくせう、何故にこんな事に……」

「相棒がのせられて取材OKしたからだろ」

「のせられたとか言うな！」

「目立つの嫌うくせに、特集を組みますって煽てられながら言われて調子に乗ったんだろどうせ」

「……ち、ちがうよ？」

「相変ワラズ、チヨロイナアオ前ハ」

「ちよろい言うなっ!？」

あとお前さつき記事呼んでゲラゲラ笑ってたなティアマトこの野郎。くそう、許さぬ。

「団長、読んだなら次見せてよ」

「あ、うん」

プリプリ怒っているとマリーちゃんに急かされ新聞を渡す。すると彼女はスラスラと素早く記事を読んだ。

「ふーん？ けど内容自体は良いんじゃない？」

そう、内容は悪くないのだ。むしろユグドラシルの特集として見るとむしろ良い。島のローカル新聞であるが、かなり作り込まれている。しかも「写真」入り。新聞にはセピア調で印刷され、微笑みを読者へと向けるユグドラシルの写真が載っていた。

「ほーう？ これが写真か。なるほどこりゃ面白いな」

当然写真は霸空戦争時代には無い技術だ。だからかカリおっさんが印刷されたユグドラシルの姿を興味深そうに見ていた。

「カメラって機械で撮ったものを、そっくりそのまま印刷出来るんだな？」

「らしいっすね」

「いいじゃねえか。欲しいな」

「なんでさ？」

「オレ様のカワイイ姿を残す手段の一つにするんだよ」

またかこの人は。ほんと自分大好きだな。

「鏡でも見てればいいでしょうに」

「それはそれだ。写真なら色んな衣装の姿を一枚ごとに残せる。一々着替えなくて済むから楽だぜ」

「あっそ……」

「だからあく団長さん？」

「はい？」

「カリオストロく、カメラ一台買って欲しいなあ☆」

「駄目です」

「即答かよ」

当たり前だ馬鹿野郎、見た目美少女め。

「ぶーっ☆ 買ってくれたらカリオストロの写真特別に団長さんに上げるのにくー！」

「いらんよそんなもん」

「そんなもんとはなんだっ!？」

「大体いくらすると思ってるんだ。写真印刷だつて最近出て来た技術だぞ。カメラだつて取材の時初めて見たんだからな俺」

「報道関係者が主に使っているものだね。リュミエール聖国でも騎士団広報で導入するか議題に上がる事があるよ」

「一応帝国でも軍で実用化されてますが、高価ですのでまだ一般に普及していると言う物では無いかと……」

コーデリアさんとユーリ君が言うように、カメラを個人で持つのはまだまだ稀だ。結構最近の技術だからな。新聞社の様な報道関係者でも全てが持っているわけじゃないし、そもそも商品として流通してるのを見た事がない。個人で所有してるとしたら、それは余程のマニアかなにかだ。

「ちっ！ ならしようがねえか。その内ポーション売った金で買う」

「そうしなさい」

個人の楽しみは個人で稼いだ金で買う。俺の金で買おうなんて言語道断なのだ。

「んにゃ?」 ところで団長きゅんは、写真撮られてなかったのかにゃ?」

「……………」

「にゃ?」

写真はユグドラシルの一枚のみ。不思議に思ったラムレッダだったが、俺がその写真の隅を指さすと、彼女だけでなく他の面々もジツと目を凝らして確認した。

「にゃあ〜……………も、もしか、この後姿が?」

「うん」

「この……………材木を運んでて顔の隠れた後姿が?」

「うん」

俺である。それが俺である。その上半身だけ写り込んで、肩に材木担いで移動してる顔の隠れた後姿の男が俺だ。以上、俺の写真終わり。

「あははっ! んはっ! こ、これは残ね……………ぶはっ! あはっ! はああ……………ッ

!! あ、あまり、気を落とさ……………ぶふうっ! ふ、ふふっ!」

「うーん、悪気無いのは分かるけどむかつくぞーう」

「ご、ごめ……………あひひっ! あはーっ!」

相変わらず常時発作気味のルドミリアさん。気を遣おうとしてるのはわかるが、発作のせいでもう無茶苦茶である。

「んもおく……そりやねえぜって感じだわ、んもお」

「ミミミンツ？」

「うむう……ミスラ旋毛で回るな、くすぐったいから……」

深いため息を吐いていたら頭部でクルクルする歯車があった。省エネミスラである。ホニヤホニヤ髪が舞い上がってむずがゆい。

「相棒を慰めてくれてんだよ」

「わかつてるよ。ありがとな、別にそこまで気にしてないから。だから旋毛はやめい」

「ミーン！」

納得したのかミスラはクルクル頭から退くとフラフラと俺の周りを漂っていた。ガロンゾに戻ってからと言うもの、ミスラは俺の周りを漂いながら偶に頭頂部でクルクルしてる。どうも気に入られてしまったらしい。

「それに、ユグドラシルの特集として出来も良いしな。これ以上もう言う気も無いよ」
新聞はクロエちゃん達の手に渡り、女性達で盛上っていた。

「ユグユグちよく写真映りいいじゃあくんっ！ やば、めっちゃかわっつ！（。≡▽≡）ノ」

「ちよつとぎこちなさが残ってるのがまた初々しいわあ」

「——！」

「ケケッ！ 照れてるのかあ〜？ そんなところもラブリイ〜だぜえ〜！」

「——！！」

ユグドラシルが女性陣にナデナデわちゃわちゃされていた。写真と言う物をよく理解していなかったのか、ユグドラシルは新聞に載っている自分を見て非常に驚き照れてしまっていた。

はあーカワイイ・オブ・カワイイですわ。不満も怒りも消え去ったね。

「そうやって可愛い何か見てスツキリする所がちよろいんだぞ相棒」

「聞こえんな」

「ところで团长殿。この……後半のインタビューの三人つて」

シャルロットさんがインタビューに答える通りすがりについて尋ねる。まあ考えるまでも無いだろう。

「あんま触れない様にしてたけど、まああの三人でしょう」

「やはり……」

『あちらもあちらで、毎度大変そうだな』

なんかガロンゾ帰って来てから「帝国戦艦がしょっちゅう騒がしい」とか「女の子が帝国兵と鬼ごっこしてるのを見た」と言う噂を聞いてはいたが、最近ではかなり脱走の技術が上がったようだ。

「来た……」

「あつ！ オルオルばんわーっ！」

「ばんわー……」

「オウ、モウ注文シテオイタゾ。ハンバーグステーキ大盛ダナ」

「ありがとう……」

そうこのように夕食時俺達の所に来てクロエちゃんと挨拶を交わして席に着き、ティアマトなりが既に彼女の注文を済ませておくのが当たり前になりつつある程度である。いやー自然自然！

「限度があるわっ!!」

「お兄さん……高血圧？」

「ちやうわい！」

また来たよこのお嬢ちゃんは。何度目だよガロンゾ帰ってから！

「オルキスちゃんまた脱走したの!?! 俺警備嚴重になつたつて聞いたよ!?!」

「うん……手強かつた……けど、まだ甘い……」

「手練れみたいな事言ってるよこの子！ どうしてこうなつた!?!」

『やはりジータとお前の影響か』

「俺を混ぜるな、俺を！」

リヴァイアサンの言うようにジータの影響はあるだろうが、俺がどんな影響を与えたと言うのか。万が一それが本当たと俺はまた黒騎士さんに小言を言われてしまうのだから勘弁して欲しい。

「と言うかマジで脱走じゃなくてだね……君が脱走して来ると、最近じゃあもう間違いない」

「おい」

「そうこうやって黒騎士さんが……うおおおっ!？」

後方に現れた気配、同時に殺気。咄嗟にフォークを二本掴み上げると、強烈な衝撃と金属がぶつかり合う音が食堂に響いた。

恐る恐る視線を上にとげると、フォークの隙間にガツチリ挟まりキラリと光る刃が俺の頭上にあつた。

「きよ、今日はお早いですね……」

「……」

「……アポロ」

笑み一つ浮かべず、刃を振り下ろした人物。兜のスリット越しでもわかる。黒騎士さんは疲れた目で俺を見ていた。



三 艇の完成まで会わないだろうとキツパリ言ったのに…… スマンありやウソだった

■ おい、の一言と共に大剣を振り下ろされた俺。そして振り下ろしたのはオルキスちゃん
の保護者黒騎士。

食堂内での唐突な抜刀であったために、一時騒然となったのだが店員とお客揃って俺と黒騎士さんを見るや「やっぱりあの二人だ」「仲いいねえ」「程ほどにしとけよおー」と非常に緩い反応であった。解せぬ。

「貴様……フオークで受け止めるか」

「わは……ははは。て、手加減してくれたから、かなあ？」

「そうかそうか、私は両断するつもりだったかな」

「ま、またまたあ……」

「……」

黙られてしまった。恐ろしいので何か喋って欲しい。

「ま、まあお座りになられたら……」

「……人形は？」

「あー……」

「お待たせしましたあー！　ハンバーグステーキ大盛り、お待たせお嬢ちゃん！」
「ん……ありがとう……」

そこに、と言おうとすると現れたあのテンション高い店員によつて運ばれてきたハンバーグステーキ大盛り。そして静かにテンションを上げるオルキスちゃん。

「……見ての通り今料理が来てまして」

「ちっ！」

「ひえっ!!」

黒騎士さんは強く舌打ちをすると、オルキスちゃんを睨む。マジ舌打ちだけでも怖いなこの人。

一方オルキスちゃんは特に怯えていない。熱々で肉汁溢れるハンバーグステーキ大盛が楽しみで気になっていないようだ。黒騎士さんはプルプルと震えていたが、諦めた様に俺が隣に用意した席に座った。

「……食ったら帰るぞ」

「ん……」

既に両手にナイフとフォークを握っているオルキスちゃん。説得は無駄と覚つたのか、黒騎士さんから諦めのオーラが出ていた。

「な、何か食べますか？」

「いらん」

「飲み物とか」

「いらん」

わかつてたけど話題を振ってみたが一言で断られる。

「えーと、その……今回はどうやって」

「……扉にな、鉄の格子窓を付けさせた」

「へ？」

せめてオルキスちゃんが今回どうやって脱走したのか聞こうとしたら、黒騎士さんは勝手に話し出した。

「こ、格子窓ですか？」

「お前が島に帰還した頃だ。その前に中の確認をしようとして扉を開けた所為で逃げられた。それで外から確認できるようにした」

「はあ、それでなんでまた……」

「格子を利用された。ベッドのシーツやカーテンを結んでロープにして重量のある家具と格子を結び、それを窓から投げ落としてその衝撃で格子ごと扉を外された」

「方法がガチじゃないですか」

小さな体でやる事が派手だ。あの子は何を目指してると言うのか。

「あれ？ けど見張りがいたんじや……」

「前の脱走時に睡眠効果のある薬を手に入れて、あのネコの人形の帽子に入れ隠し持っていたらしい。格子から散布したのか兵が扉の前で眠り込んでいた」

「君そんな方法どこで覚えたの」

とてもこんな少女が自力で思い付く方法ではない。そんな発想の元を確かめようとしたのだが……。

「もしもの時のためにつて……ジータが教えてくれた……」

「あのバカちゃんが……」

案の定だった。もしもつて何を想定して教えてるんだあの暴れん坊は。見ろ、黒騎士さんの俺を睨む視線がまるで針の様に刺さってるじゃないか。心なしか痛みすら感じ……かん、感じ。

「いや本当に痛い、いったつ!! く、黒騎士さん！ 貴方傾くと、いてつ!! 兜の角が刺さつて!! 顔に押し付けな、いたいってつ!!」

「知らんな」

「ちよ、角刺さないで！ あんたの兜幅あつてちよつと傾くだけで、あだだつ!! 頬が、頬がいた、んがががつ!!」

「はははっ！ 変な顔、変な顔よっ！」

「メドウ子でめえ笑ってんじや、んだだっ!」

「うわあーっ! く、黒騎士殿その辺で、その辺でストップでありますう!」

「だ、団長さんの顔が釣られた魚みたいになってるですっ!」

笑うメドウ子、慌てるシャルロットさん達、無言の黒騎士さん。ここ最近よく見る光景である。

黒騎士さんはある程度気が晴れたのか、俺の顔が修復不可になる前に兜の角を遠ざけてくれた。

「俺の顔のパーツズレてないよね……」

「ズレて気にするほどの顔じゃあるまい」

「ひ、ひでえや」

本気で悪いと思っていないのだろう。黒騎士さんの言葉に一切の罪悪感など無かった。

「トホホ……こう言うのはドラंकさんのポジションだよ」

「おお、そう言えばあの愉快的コンビは今日おらぬようじやのう?」

すっかりドラंकさん達を「愉快的コンビ」か「コメディアン」の様に認識してるのじゃ子であるが、俺もいまだにそんな気がしてる。

「あの二人は念のため別方面に人形を探しに行った。その内こちらに合流する」

「オルキスちゃんがこっちに居るのはほぼ間違いないと思っはいたんすね」

「場所と言うよりお前が居る所だ。平日だとしよつちゅう造船所に行くようになった」

「あー……」

「わかるか？ 最早日常的に帝国精鋭の兵達の追跡を躲し逃亡する子供相手に、この私まで出る事が当たり前になったこの異常な状況が」

「いやもう重々承知である。七曜の騎士が一人の少女に振り回され、宿の食堂に現れる日常なんてあつてたまるか。」

「そもそもこんな事態になったのは、俺が島にやつと戻れてちよつと経つてからである。それ以後彼女の脱走技術の向上力がそれはそれはそれは凄まじい。俺に会いに来てくれる、と言うなら確かに嬉しいのだが、おかげで黒騎士さんの俺への当たりが強い。」

「さ、最後はちゃんと帰るし」

「そもそも外出を禁止しているのだが？」

「睨まないでください。貴方庄あつて怖いから。」

「……それで、艇は何時出来上がる」

「ああ、それなら後一週間もあれば完成つす」

「やつとか……」

「そろそろエンゼラを預けて一月経とうとしている。親方さんの話では早くて一ヶ月はかかると言う話であつたが、ユグドラシルとノアの二大星晶獣。そしてその星晶獣の

神秘の術目当てに集まり手伝ってくれた職人達。そして自分で言うのもあれだが、俺自身がめっちゃ働いてる。

通常ではあり得ない速度での造船にガロンゾ島民達も注目してるとかなんとか。

「もう見た目も中身もほぼ完成。いやー俺も頑張った甲斐ありました」

「やって当然の事を自慢されてもな」

「対応が氷点下だ」

思わずしょんぼりである。

「まあ順調であるならかまわん。また星晶獣にでもさらわれようものなら……」

「あのあの……睨むだけで続き言わないの怖いのですが」

「なんかわからわまで妙な圧受け取るんじやが」

「おめえは相棒さらって事態面倒にした張本人だからだろ」

「それ言われると言い返せぬ……」

俺だけでなくのじゃ子もしょんぼり。

「ともかく最後まで気を抜くな。貴様は本当に油断すると面倒になる」

「帝国の人にまで言われるようになってしまった……」

「自覚してるだろう」

「はい……」

何も言い返せない。辛いのだ。

「ごちそうさま……」

そうこう話してる内にオルキスちゃんはハンバーグステーキ大盛を食べ終わっていた。すっかり綺麗に野菜もライスも全て初めから無かったかのように食べきっている。

「ほんまよう食うな嬢ちゃん」

「どこにしまわれてるんだか」

ハンバーグステーキは二人前の肉とサラダとライスのセットだった。見た目に反した大食い。カルティラさんとルナルさんが感心するやら呆れるやら。

「今更つすけど、この子元からこんな食べたんすか？」

「……元は別にそんなに食べてはいない。人形になつてから……」

「はい？」

「……なんでもない。多分お前と小娘のせいだ」

「ついに俺の方を先に原因としてあげましたね」

「ふんっ」

しかし突然こうなつたと言うなら、なにか切欠があつたのか？ 暴飲暴食は身体に悪いが、特に彼女の体調に異変がある様子も無い。まるで冬ごもり前のクマか何かが、冬ごもりと言う困難に立ち向かう準備として本能的に体力をつけているかのようだ。

しかし、いやまさか。こんな少女が何どんな困難に立ち向かうと言うのか。と言うかそんな困難があったとして、態々立ち向かう事なんざない。少女は少女らしく、或いは子供らしく、好きに遊び学び食べて良く寝ればいいのだ。使命があるとすればそれが一番である。困難なんざ無視すればいいのだ。

もつともその方針で育てたと言うか、俺が面倒見た一人が全空一の暴れん坊になっているので一概にそれが正しいとは言えないのが悲しい所。俺は嫌だぞオルキスちゃんはやたら強くなつて、星晶獣に顔色変えず戦いを挑むような子になるなんて。

「オルキスちゃん、程々に元気に育つんだよ」

「……? うん、わかった」

「貴様が親面をするな!」

「あいたつ!」

何か気に食わなかったのか、黒騎士さんに籠手着けたまま頭を叩かれた。普通に痛かった。

「食べたなら帰……」

「お待たせしましたあ! デザートのチョコバナナマウンテンパフェです!」

「わお……っ」

黒騎士さんが言い終わる前に現れる威勢の良い店員。そして置かれる30センチを

超える名の通りの山の様なパフェ。目をキラキラさせるオルキスちゃん。目を点にする俺と黒騎士さん。

「君何時の間に頼んだの？」

「ハンバーグステーキが来た時……」

「うーむ、素早い」

ふと横を見ると姿勢は変わらないが、体を震わせカタカタと鎧を鳴らす黒騎士さん。怒りのボルテージが上がるのが可視化されて見える気がした。

「あは、はは……ほら、えつと……ア、アイスがあつて食べないと溶けちゃうし」

「……貴様が毎度……毎度毎度甘やかすから……」

「えっ!? いや、俺は別に甘やかすとか」

「いいや、違うとは言わせんっ! 貴様はオルキスを甘やかし過ぎるっ!!」

「いやそれは……あれ? 今オルキスって」

「っあ!?! だ、黙れええっ!」

「うわあ——ッ!? た、たんまたんま! よくわからないけど、怒らないで黒騎士さ、ごえあつ!」

矢庭に黒騎士さんが立ち上がると、剣を抜かずに俺にヘッドロックを決めた。鎧がごちやごちやしててめちやくちや痛い。

「なんだあ、またあいつらか？」

「おいおい、飯食つてんだ決闘はご法度だぜ！」

「いや、今度は剣を抜いてねえ。ただの喧嘩みてえだ」

「んなにい！ 喧嘩だあ!？」

「見ろ坊主の団長が絞め技食らつてるぜ！」

「おい張れ張れっ！ “あの” 騎空団団長と七曜の騎士様の喧嘩だぜ!!」

「ひゅーっ！ こんなの滅多に観れねえぜっ!!」

今度は先ほどと違って大騒ぎになった。この宿に泊まるのは俺達のように船を修理に出している騎空士が多い。血の気の多い者もいるため、刃傷沙汰でさえなければ勢いに乗って賭けにする事も珍しくはない。珍しくは無いが慣れ過ぎだろこいつら。

「いかん頭に血が上っている!! 止めるぞ皆」

「しかたねえ！ おめえら相棒は頑丈だからあんま気にしなくていいッ！ とにかくかかれえ！」

「うおおおっ！ 七曜の騎士とも語り合いたかつたんだ！ 行くぜええええっ!!」

コーデリアさんが指示を出し、B・ビィがマツチヨになり、フェザー君が突っ込んで来た。それとB・ビィ、お前は許さん。

「まーたおっぱじめよった」

「やーね、直ぐ喧嘩なんて」

「参加するマリー？」

「馬鹿言っちゃやーよカルバ。私だつてまだ食べてる途中なの」

「ふふふっ！ わ、我々もこれによく慣れたものだな……っ！ ははははっ!!」

テーブルを既に動かし料理を護るカルテイラさん達。行動が素早いがもうちよつと俺の心配をしてほしい。

「やあー遅くなつてごめんごめん、ちよつと時間かか……なーにこれえっ!」

「あ、ドラंक！ 見ての通りだ、団長が黒騎士さんに……ふ、二人も止めるの手伝つてくれっ!」

「……はああ……っ」

そして遅れて現れたドラंकさんと状況を説明するフェリちゃん。深いため息を吐くスツルムさん。まったく当然の反応で申し訳ないぐらいだよ、はっはっはっ!

「つか、いい加減誰か止めつぐええええっ!!」

「ザンクティンゼルの奴はこんなばかりかあああああつ!!」

「お、俺はそこまで悪く、のぎやあああ——っ!」

今日も過ぎてくガロンゾでの日々。エンゼラ改修完了の前に俺がどうにかならないか不安ではない。

中央船渠からの止まぬ白煙に交じり、俺の悲鳴が木霊するのであった。

ミスター地味っ子

■
一 ザ・ニューエンゼラ!!

「気嚢内ガス充填完了しました」

「何時でもOKです!」

「よし……エンジン始動っ!」

「了解、エンジン始動っ!」

ガロンゾ島中央船渠に船大工の親方と男達の声が響く。固定用の降着装置と停泊用ワイヤーで繋がれたその艇は、まだ自力で宙には浮いていないがエンジンの始動と共に、後方のプロペラが回転を開始した。

「……どう思う?」

「いいね。安定してる……艇の機嫌もいい」

親方の隣に立つノアがプロペラの駆動音に耳を澄ませていた。

「ただまだ張切らせない方がいいかな。早く飛びたくてウズウズしてるけど、空回りするかもしれない」

「だろうな。おい出力どうなってる？」

「安定しています、プロペラの駆動共に異常ありません」

「ふむ……よし第一、第二固定アーム解除！」

「了解、アーム解除！」

船内の男達の合図を受けた男達が、徐々に艇を固定していた降着装置——アームをはずして行く。少しずつ、少しずつその船体が宙へと放たれていく。

「船体浮遊確認！ 姿勢安定しています！」

「プロペラの回転数下げろっ！ 浮かせたまま、位置をここで固定する。アーム全解除——！」

「了解！」

そしてついに全てのアームが外される。船渠と繋がるのは、一本のワイヤーのみ。プロペラの駆動音を船渠内に響かせ、艇が完全に宙へと浮いた。

「船体姿勢制御問題なし。位置固定されています」

「……よし、上手くいった」

問題なく浮遊し、殆ど揺れも無く姿勢を維持する艇に満足したのか親方は拳を握り小

さくガッツポーズをする。

「アームで再度固定後エンジンを切れ」

「了解！」

そして再度降着装置で船体が固定されると、プロペラは回転を止める。そして静かになった騎空艇から、ゾロゾロと満足げな親方達が降りて来る。

「どうですか」

それを出迎えたのは、団長とユグドラシルだった。二人と向き合った親方は、真剣な表情で一度船体を見上げ再度二人に顔を向けるとニツと笑う。

「成功だ」

「じゃあー！」

「ああ、これでこの艇は……エンゼラはまた空を飛べる」

「おお……っ！ やった、やったぜユグドラシルッ！」

「——！！」

親方の言葉を聞き二人はハイタッチを交わす。

巨大な騎空艇、彼らの目の前にあるのは生まれ変わったエンゼラだった。

「完成だああああ——ッ！！」

団長はその生まれ変わった姿を見て、大きく歓声を上げた。

■ 二 完成して歓声を上げたんですねえ〜 うぶぶ〜♪

俺の目の前には、世界一イカした騎空艇がある。世界一だ。間違いなく、誰がなんと
言おうと俺にとって世界一の騎空艇だ。

「皆さんありがとうございます……！」

「お前もだろ坊主！ 船内設備なんて殆どお前さんが組み上げてったじゃねえか！」

「親方さん達が指導してくれたおかげですよっ！」

「嬉しい事いうねえ！」

エンゼラ完成は、偏に彼ら船大工の力によるものだ。俺とユグドラシルだけでは到底
無理な作業だった。このガロンゾの職人が居てこそその完成だ。

「やったやん、団長！」

「コレデマタ旅ガ再開デキルワケダ」

エンゼラが固定されると、少し離れて様子を見ていたカルテイラさん達が駆け寄つて
きた。その中でポテポテと動きは遅いが、誰よりも興奮して駆け寄ってきたのはセレス
トだった。

「だ、団長……もうこれでエンゼラは完成なんだよね？ ま、また飛べるんだよね……」

？」

「ああそうだ。またエンゼラで旅ができる！」

「や、やった……！ やったあ……！」

「そうだ、やったんだ！」

「——！」

万歳三唱、喜びを声に出さずにはいられない。俺とセレストだけでなく、ユグドラシルも共に「万歳万歳！」と両手を挙げて叫びつつ、よくわからん小躍りすら踊ってしまふ。

「しかしついにか。団長、もう直ぐに出られるのか？」

「いや、流星に今すぐじゃない。まず搬出エリアに運んだ後セレストにもう一度試運転をしてもらう。それで問題なければ何時でも出発可能だけど、準備もあるし発つとしても明日……いや明後日かな」

「そうか。しかし、立派になったなあ」

「いいじゃん、いいじゃん！ ちよ〜イカしてるよ *、(*、▽、)ノ 見た感じお魚っぽいのも、なにげカワイイ系でウケる、わら！」

目を輝かせるのは俺達だけではない。ゾーイ達もまた新しい姿のエンゼラを見てワクワクしているようだった。

「ふふふ、凄いんだぞこの艇は。性能はもちろん、何せ単純に船体も大きくなくて積載量も上がり、船内の間取りも一から変更、全てが一新されたエンゼラの完成形……くう！
か、感激だ」

「ちよ、だんちよガチ泣き〜？」

思わず涙が零れるが、ここから団員皆喜ぶばかりではいられない。

「うむ！ さあみんな早速だけどやる事は沢山だぞ。搬出エリアに運んでから試運転の後、問題なければそのまま積荷を載せるわけだ。貸し倉庫にしまわせて貰った山のような私物や消耗品の買出しとか手分けしてやるんだからな」

「では積荷の搬入は私が指揮をとろう」

「せやったら買出しはうちやな」

それぞれの責任者をコーディリアさんとカルティラさんが立候補してくれた。この二人以上に任せて問題の無い人物はいないだろう。

「お願ひします。メンバーはお二人で決めてもらってかまいません」

「うむ、では早速動くでしょうか」

「カルティラさん、ティアマトとラムレッタよく見張つといてください。ドサクサ紛れに酒とか買い込む可能性があります」

「ん、任しとき」

「聞コエテルゾ！」

「うにや……否定できないのが辛いところにや……」

カルテイラさんが居れば問題児二人は大丈夫だろう。他にも問題児は居るのだが、まあきつと……うん、大丈夫さ。

「団長さ〜ん」

「おつとシエロさん」

独特の間延びした声。顔を見るまでもなくその人物がわかる。

「完成おめでとうございますう〜」

笑顔で拍手をしながら傍によつてきたのは、やはりシエロさんだった。

「いえいえ、シエロさんもありがとうございます」

「うふふ〜お役に立てたようで何よりですう〜」

今回の事ではシエロさんの存在も大きい。この人がガロンゾで親方さん達を紹介してくれたのだからありがたい話だ。

「ところでシエロさん、このタイミングの登場と言うのは……」

「さてさて〜、旅の再開に向けて色々入り用なのではと思ひまして〜」

「ううむ、やはり」

俺達が旅に必要な物資を買おうと相談し始めたら現れたな。流石である。

「相変わらず目敏いわあシエロはん」

「いえいえ、私もお役に立ちたいだけですよ」

シエロさんの登場のタイミングに呆れるカルテイラさん。しかしカルテイラさんに買出しを頼んだが、どの道シエロさんにも何かと相談をするのは間違いない事だ。それを見越しての登場だろう。ここは素直に頼らせてもらおうとする。

「カルテイラさんはシエロさんと消耗品とかの相談もお願いします」

「団長はんは？」

「俺も俺でやる事沢山ですよ。方々回ってお礼言ったり、挨拶したり。取り合えずは、一番報告しないといけない人には知らせに行きます」

「ははあ、なるほどな」

特に行き先は言っていないのだが、俺の表情から全てを察したカルテイラさんは頷き俺の肩を叩く。

「二人でいいのかよ？ オイラだけでも着いてくぜ？」

「いいよ、お前はこつち手伝ってくれ。軽く報告するだけだし、菓子折りでも買って兵隊さんに言付けして終わらすよ。それと他にも用事あるから遅くなるけど気にしないでいいんで」

「ふーん、まああんじよう気張りや。また乱闘騒ぎはごめんやからな」

「俺だつてごめんない」

また小言を言われるのは勘弁だと思いつつ、俺は中央船渠から離れ目的の艇を目指した。

■ ■ ■
三 伝言頼むだけだから、ヘーキヘーキ

艦内の通路を歩いている時、最近部下である兵達からの視線が妙だ——そう黒騎士は感じていた。

敬礼もする、挨拶も欠かさない、自分に対して態度が悪いわけでもなく、むしろ以前よりはきはきと挨拶するように思える。だが何か妙だった。

生暖かい視線、見守るような視線、そんな視線が多い。そして積極的に挨拶をされるようになった。軍属である以上上官、それも帝国の最高幹部である黒騎士に挨拶をするのは当然であるが、七曜の騎士である事と、寡黙で他者を遠ざける雰囲気を出していた黒騎士に対して兵達はなるべく関わろうとしなかった。

しかしここ最近——特にガロンゾに来てから何かが変わった。

不思議と生活と任務に支障は無いので特に原因を調べてはいない。そもそも足止めされている今、まともな任務も何も無いのが現状であるのも一つの要因かもしれない。

何であれその部下の妙な視線を一々注意する気も起きなかつたため黒騎士はその事を気にしないようにしていた。

実を言えば思い当たる節が無いでもなかつたが、それを考えると最近では頭を抱える事が増えるので極力思い出さないようにしている。決して“人形”と“地味な男”が原因じゃないはずだと言ひ聞かせる。

何の因果か関わりあつてしまつたあの男。少し前も頭に血がのぼり、らしくもない乱闘騒ぎを町の食堂でしてしまつた。あのジータにさえそこまで腹も立たなかつたと言ふのに、あの団長には久しく表に出す事のなかつた“素”を出してしまつたのが酷く悔しかつた。

「……………む？」

所用で執務室を出て必要な資料を取りに艦内通路を歩いていると、気づけば兵達で賑わう艦内の食堂前に来ていた。散漫としたつもりも無かつたが、疲れの所為か既に夕食の時間を過ぎている事を忘れていたらしい。

(……………少し入れるか)

基本的に黒騎士は兵達に混ざり食事を取る事は無い。主に下士官以下の者達が使用する食堂ではなく、将校以上の利用する別室か私室で食事を取る。黒騎士は特に私室での食事が多い。立場もあるが黒騎士自身が賑やかな食事を好まないのも理由であつた。

今は特に空腹は感じてはいなかったが、食事は取れる時に取っておくべきだろうと考えた。散漫とする気持ちも多少持ち直すだろう。黒騎士は部屋に食事を運ぶよう食堂担当の兵に声をかけようとした。

だがここでふと、やけに兵が多く賑やかな食堂を不思議に思った。食堂は開いているが、夕食のピークの時間は過ぎており普通ならこんな賑やかなはずは無い。

奇妙に感じていると、食堂から一人兵が出てきたので呼び止めた。

「おい、そのの」

「え？ あ、これは黒騎士様っ！」

兵は直ぐに背筋を伸ばし敬礼をした。

「崩してかまわん、それより妙に人が多いが何かあったか？」

「はっ！ それが今日は妙に定食の味が良いと話題になり、皆が食べようと一度に押し

寄せその所為か利用者の回転が遅くなったようです」

「なんだそれは……足止めされた状況で、新しい料理人など配属されていないだろうに」

「はあ、自分も詳しくは……ただ確かに美味しかったです。何と言うか、懐かしい実家の味を食べてるようで……」

料理の味を思い出したのか兵はノスタルジーに浸りだす。結局謎は解けず何か予感のした黒騎士は、食堂内で料理待ちの列に向かった。皆トレーを持ち今か今かと料理を

待っている。その列に並ぶ兵を見ていくと皆思い思いに話しこんでいる。

「いやあ、なんか楽しみだな」

「だな、皆幸せそうに食ってるもんな」

「うっわ、凄い列だねえ〜ほらほら、最後尾ここ並ぼう二人とも〜」

「急かすんじゃない」

「……楽しみ」

「そうだよねえ。僕も楽しみだよ〜」

「おいちよつと待て、その三人」

そしてそんな兵の中にさも当然のように混ざっていくオルキス、そしてドラंकとス

ツルムの二人がいた。

「あ、黒騎士殿こんばんは〜」

「……こんばんは」

「暢気に挨拶するな、何でここにいる」

「脱出成功……連勝中、バイバイ」

「ぐう……っ!」

片手でバイサインを見せるオルキス。黒騎士は奥歯をかみ締め冷静さを保とうとした。唯一まともなスツルムに視線を向ければ、彼女もまた目を閉じ軽く首を振る。

「……ドリンクと食堂に向かう最中、部屋の近くを通りかかった時に丁度脱走の成功後らしく、一人では不安なので付き添いを」

「それはもう見張りの兵が悔しそうに項垂れてましたよ。また負けたあーって」
「だから、今日はもうフリー……」

度重なる脱走とそれと共に上がるオルキスの脱走術の熟練度。このままでは兵達の無駄な労力を消費するだけと考えた黒騎士は、町の食堂での乱闘後オルキスの脱走に関して長い話し合いの下、一定のルールが決められる事になった。

一つ、勝敗(?)は部屋からの脱走の成否で決める。

二つ、脱走成功の時点で兵の無駄な搜索活動をやめる。

三つ、脱走成功の時点で艦内での常識的な範囲での自由行動は認めるが、外出は必ず二名以上の者を付き添いとして同行させる事(ドリンクとスツルムが望ましい)。

四つ、ルール三を破った場合、晩御飯抜き。

こんなお粗末な規則を真面目に決める事になってしまった事に黒騎士は酷く落ち込んだ。しかも晩飯抜きのルールが特に効果がある事に気づき更に落ち込んだ。

だがここで色々と言ったとしてもそれこそ無駄な体力を消費するだけなので、黒騎士はグツと言葉を飲み込んだ。

「……それで、貴様らも定食目当てか」

「そうそう。なんか評判らしいじゃないですか」

「理由を知ってるか？」

「詳しくは……体調不良でコックが数名休んでいるとかで、一人臨時で入ったとだけ聞きました」

「交代？ しかも一人が変わっただけで何が……」

ますます深まる食堂繁盛の謎。何故か嫌な予感が増した黒騎士は、トレーを持って皆と仲良く列に並ぶ理由も無いため、黒騎士は遠慮なく列の前の方へ歩いていく。

「……着いてく」

「ええ、せつかく並んだのに？」

「いいからお前も来い」

オルキスも何か予感があったのか、列に並んだ三人もまた黒騎士について行った。兵達も近くに来た黒騎士に気がつく、慌てて敬礼し道をあけていく。そして食堂の調理場にいる事情を知っていきそうなコックの一人に声をかけた。

「おい、交代したと言うコックはわかるか」

「はっ！ あちらの者です！」

コックは一人の男を指差した。後ろを向いているその男はものすごい勢いで野菜を刻み、肉を焼き、スープを煮込み、盛り合わせていく。恐ろしい事に殆ど一人で作業して

いた。まるで腕が増えたかのように見える程だった。

「いやあ凄い奴です。あんな器用な事出来る奴いるなんてしりませんでした。なんでこっちの勤務じゃないんでしょうね」

「……交代で入ったと聞いたが、あれは普段はなんの勤務についている」

「ええと、それは……あれ？　そういやなんだったかな？」

「確認していないのか……」

「も、申し訳ございません！　何せ一人抜けるだけでも忙しくって。い、今確認します！

「おい、その……名前もなんだっけか？　えっと、交代の！　お前普段どこの勤務だ！」

「コックに呼ばれ手を止めた男。すると男はフルフルと振るえ包丁を置くと振り向き叫んだ。」

「だからっ！　俺は部外者なんだってばっ!!」

「——ッ!？」

「あぶっ!？」

その声を聞き、その顔を見た瞬間眩暈を感じた黒騎士は思わず倒れそうになり、咄嗟にスツルムが黒騎士を支える。

「……お兄さん」

「はい? ……げええっ!」

オルキスが僅かに驚きながら手を振ると、それに気がついた彼は黒騎士達の姿を見て悲鳴を上げる。

「……何故、何故ここに居る……貴様」

「あは、あはは……」

言い訳しようの無い状況にその男——本来居るはずのない星晶戦隊(以下略)団長は、一気に滝のような汗を流し、この後滅茶苦茶怒られる事を悟った。

■ 四 星晶戦隊(以下略) 団長 “兼” 船大工見習い “兼” エルステ帝国戦艦食堂臨時
コック

「さ、最初は本当に伝言頼むだけで終わるつもりだったんですよう……本当なんですよ……うう……」

「ほうほう、そうかそうか……」

エプロンを脱ぎ、普段着に戻った俺は所変わってエルステ帝国戦艦は黒騎士さんの執務室いおり、その来客ソファで縮こまっていた。

目の前の黒騎士さんの口調は、口では理解してる風であるが明らかに口だけであり、

怒りをなんとか静めている風の喋り方だった。何度目かわからない絶対零度の視線が俺を射抜く。

「違うんです、ほんと戦艦に入ろうとか微塵も思っちゃいなかったんです……」

「よしよし……」

落ち込んでいたらオルキスちゃんが慰めてくれた。優しさが骨身に染みる。

「オルキスちゃん優しいなあ……」

「泣くな見苦しい」

「ひでえや……」

一方黒騎士さんはキツイ。しかしどちらかと言えば此方が普通の対応だろう。なんせ俺は無断で侵入した人間になるのだから。

「それで……? 私宛の伝言を頼みに来ただけの、部外者である、貴様が、何故、艦内の、食堂の、コックになってる? さあ、説明願おうか?」

俺を攻めるように、句読点が目に見えるような凄惨な区切り区切りに話す黒騎士さん。泣きたい。

「まあ状況を一から説明しなよ。理解できるか不明だけどさ」

「言い方が他人事だあ……」

「他人事だしね」

「くそう、くそう……っ！」

ドリンクさんのおちやらけた言い方に腹も立つが、実際他人事なところもあるだろう。言い返すに言い返せん。

「最初は今話した通り、普通に外の兵隊さんに話しかけて伝言を頼もうとしたんです。そしたらですぬ——」

時間を遡り二時間ほど前。帝国戦艦の近くにまで来た俺は、さて誰に声をかけようかと悩んでいた。戦艦の周りには、ぼつぼつと警備の兵隊さんがいる。

彼らも今艇を動かせない互いの事情を知ってはいるだろうが、一方で俺達は帝国に喧嘩売った騎空団。無駄に刺激させたくないので話しかけやすそうな人を探していた。

そんな訳で様子を探っていると、丁度俺が通り掛かった場所が戦艦の搬入口だったらしく、慌しく沢山の荷物を艇に積み込んでいた。木箱の印字を見るに食料のようだった。流石少なくとも数百の人数が乗る戦艦、消費される食料もそれ相応である。

などと暢気に考えてふと別の方を見れば、一箱積荷と同じ箱が置かれたままになっている。おや？　と思っていると、そのまま搬入口を閉めようとしていた。

これは積み忘れだとわかり、慌てて「積み忘れがあるよ！」と叫んだのだが、責任者らしき者から返ってきた返事は「悪いが持ってきてくれ！」と言うものだった。

俺がかよ！　と思ったが、あちらは俺の姿が見えずどうも俺を仲間の一人と勘違いし

てるらしかった。面倒だが一箱程度かまわなかなとも考え、またついでに黒騎士さんへの伝言も頼めるかと思ひ箱を艦内へと運んで行つた。

「すまないすまない、見落としてしまった」

「いえいえ。それで、お願いしたい事が——」

「それじゃあ、今日必要な分を調理場まで運ぶからな」

何とした事が、この時点で彼らはまだ俺を仲間の一人と勘違いしているらしかった。

「ここで嫌な予感がした俺は、慌てて誤解を解こうとする。」

「ちよ、ちよつと待つた！俺は帝国の兵じゃ」

「む？ お前鎧はどうした？」

「どうしたも何も」

「ああ、今日は非番か？ すまなかつたな、仕事をさせた」

「いやだから」

「だがお前も食う飯の材料だ。ついでだ、一箱程度やっていけ」

「ちがつ！」

「さあ時間も無いぞ！ ほれ、お前も早くしろ！」

「だから違つ!!? おい待て、お、押さないで、ちよまつ!!? ああつ！ うわあ——つ!!?」

と、次々と兵隊さん達が食材の箱を別の場所に運び出した。その流れに巻き込まれた俺は、手渡された箱を持ってそのまま何故かエルステ帝国の兵に混ざり食材を運び出す。何やってんだ俺はと思った。そして何故誰も不審に思わないのか不思議でならなかった。これでいいのかエルステ帝国兵。

そして次に調理場に食材を持って来た俺は、俺の存在が騒ぎにならない内に逃げ出そうとしたのだが、調理場に一着エプロンが落ちており誰か転ぶと危ないと思つてしまいそれを手に取つたのが運の尽き。

「見つけたよ、まったくここにいたのか」

「は？」

エプロンを持った瞬間、後ろから肩に手を置かれ話しかけられた。

「えつと、なんででしょうか？」

「なんだじゃねえって、お前だろ交代の臨時コック」

「……はい？」

「担当の奴等が体調崩したって聞いただろ」

当然聞いてるわけは無い。何故なら俺は帝国兵では無いからだ。

「さあさあ、もう直ぐ腹空かせたのが押し寄せてくるぞ。知ってるだろ、夕食ラツシユの凄さを」

知るわけが無い。何故なら俺は帝国兵では無いからだ。

「抜けた人数多くてまいったよ。非番のやつら代わりは嫌だと駄々こねたらしいが、一人でも任せられる奴がいて良かった」

任せられてはいない。何故なら俺は帝国兵では無いからだ。

「まった、まったまった！」

「ど、どうした突然？」

「あんた俺が誰かわかってんの!? 俺だよ……ってわからんか。あれだよ、星晶戦隊（以下略）の団長！ 聞いてんだろなんかしらさ!? もろ部外者だよ！ いや、なんなら敵だよ!!」

このままでは、またその場の勢いで面倒な事になる。騒ぎになるのを承知で自ら正体を明かすと、相手はポカンとした後なんとゲラゲラと笑い出した。

「はははっ！ おいおいおい馬鹿言うな。あの星晶戦隊（以下略）の団長がなんだつてこの調理場に居るんだよ」

「俺が聞きていっ!!」

「ほれほれ、サボろうたってそうはいかねえよ。エプロン着て準備しな！」

「違うつての！ 俺は星晶戦隊（以下略）の団長なんだ！」

「わかったわかった」

「わかつてねえじゃんっ！ く、黒騎士さんを呼んでくれ！ 俺を見ればわかるから！
ねえ聞いて……聞いている!? ねえつてば……本当っ！ 本当なんだよー！」

サボりの口実と思われ俺の言葉は無視された。そうして俺はなし崩しに臨時コックになり、本日のお任せ定食を任せられ、俺が運んできた材料でメニューを考え、休んだ人数分働き、これ以上面倒にならないよう祈りつつ調理を済ませたら逃げ出す決意で定食を作り続けたのだった。

「それで結局僕達に見つかったわけね」

「しかも妙に馴染んでる中だな」

ドラंकさん達の視線まで痛い。俺は何度人生でこんな呆れた視線を身に受ける事になるのだろうか。俺は何もしていないと言うのに。

「なし崩しでコックやってあんな行列作る奴があるか。見たかあの兵達の様子を。無駄に器用に料理作るものだから食堂一帯がノスタルジーに浸っていたぞ。騎空団の団長が定食で手軽にお袋の味を作るな、田舎の食堂か」

スツルムさんのツツコミが妙に具体的であった。

「……誰も気づかない帝国兵側にも問題あると思います」

「それは当然後で改善を徹底させる」

最早素通りと言って良い俺の意図せぬ侵入に黒騎士さんは、戦艦の兵達にもお怒りで

ある。警備がざると言うレベルでは無い、〃箆〃でももうちよつと細かい網目があるだろう。きつと後でしこたま怒られるに違いない。

「団長君だからって言うのもあるだろうけどね。普通はこうならないよ。君だからこそ不思議なその場の勢いでこう、あく……って感じ?」

ドラंकさんにすごく雑な理由を説明されて落ち込む。

「そんなフワツとした説明でこんな事になるんじゃないやたまったもんじゃねーですよ」

「こつちの台詞だ馬鹿者。まったくもって地味な顔だからな貴様は……ええい、もつと緊張感ある表情を出来んのか。そばに星晶獣が居なければ途端に影法師みたいになりおつて。だから正体明かしても冗談に思われるんだ」

「ほんと泣くよ俺えっ!」

相当お怒りなのはわかるが酷い言われようである。

「それとその菓子は何だ?」

「これは来る前に買って来た菓子折りで……」

「そんなのは話を聞けばわかる。そうではなく、何故既に人形が食ってる?」

「……おいしい」

既に開封されたビスケットの箱。黙々と食べるオルキスちゃん。

「いやあ……穴が開くぐらい箱見てるもんで……その、つい」

「……」

俺がそう言うと、黒騎士さんの鎧がカタカタと震え音がなりだす。俺知ってる、これ黒騎士さんが怒ってるやつ〜。

「……”ついで”、また”ついで”。貴様はそう言ってるやつを甘やかす！ 何度目だガロンゾで会ってるから!?!」

「ええ!? 話がぶり返した……っ! いや、けどですねっ」

「けども違うもあるか! お通しのようにほいほい菓子類出しおって、孫に会った田舎の爺か貴様っ!」

「ぎゃあ!? ぼ、暴力反対っ!?!」

立ち上がり俺に掴みかかろうとする黒騎士さん。黒騎士式鎧トゲトゲ・ヘッドロックの痛みを思い出し俺は悲鳴を上げて執務室の机の裏に逃げこむ。

「……やめて」

が、ここでまさかの救世主。オルキスちゃんが俺と黒騎士さんの間に立ちふさがった。

「どけ人形、もう我慢ならん……っ!」

「駄目……お客さんに乱暴はいけない……」

「客じゃない、侵入者だ」

「でも駄目」

なんと言う一触即発。オルキスちゃんと黒騎士さんの視線が空中でぶつかり火花が散る。これは不味いと思うが、何せ俺は不本意ながらこの状況を作った最大の原因である。下手に間に入ると更に黒騎士さんの怒りを爆発させかねない。

ドラंकさん達もどうしたものかと手を出しあぐねていると、オルキスちゃんは突として俺の上げたビスケットを一枚取り出すとそれを黒騎士さんの方へと向ける。その意図を俺も含めこの場に居る誰もがわからず啞然とする中、彼女は口を開いた。

「お腹が空くと……イライラする……」

その言葉は不思議と皆の心に響いた気がした。

■ 五 B・ビー「なんか相棒遅くね？」 ティアマト「飯デモ食ツテルンダロ」

■ オルキスちゃんによる、神のお告げの如く突拍子も無い言葉は、不思議とその場の混乱を収める事に成功した。

そしてその後どうしたかと言うと――。

「はむはむはむはむ……っ」

「うま、うんま〜っ!! なにこれ、ほんと美味しい……っ!!」

「……美味しい」

オルキスちゃんが一心不乱に食べる。ドリンクさんが叫んでいる。スツルムさんが味をかみ締めている。

「喜んで頂けてなによりだなあ。あははは……」

三人は飯を食っていた。

俺は再び飯を作っていた。

「つて、なんでだよっ！ これじゃあさつきと変わらないじゃないかっ!」

帝国戦艦食堂調理室。時間的には既に食堂は終わっており、大勢いた兵隊さん達の姿は無い。だがその中に俺と黒騎士さん達だけがあり、広い食堂の一角にオルキスちゃん達は座り、そこからカウンター越しに見える調理場で俺はまた飯を作っていた。

「貴様が面倒起こした所為で三人とも食事を取り損ねた。責任もって腹を満たしてやれ」

「好きで面倒起こしたんじゃないやい……!」

「黙って作れ」

材料も器具も好きに使って良いと言われ、半ば無理やり飯を作らされている。

「実の所この充実したキッチンの設備を使える事は楽しんで居るのだが、いかんせん『監視』がつくので気まづいったらない。」

「せめて座つてて下さいよ。黒騎士さん圧強いんだから、後ろ立たれちゃ無駄に緊張しちゃいますよ」

ドリンクさん達は席についているが、黒騎士さんは一人俺の後ろで手を組んで立っている。余計な事しないか見張っている、とのことだ。

「気にせず続けろ」

「いや気になるってば。座ればいいじゃないですが、別に毒入れるわけじゃない。黒騎士さんも食べるんですよ？」

「いらん、疲れて食欲など失せた」

気持ちわかるが、疲れてても軽くなんか食った方が良いと思うけどな俺は。経験談として。

「へいへい、そつすか……」

きつとこれ以上言つても無駄なので一先ず料理に集中する。既に火を消していたキッチンでは、大げさな料理は出来ない。しかしオルキスちゃんに残り物を暖めただけの料理など許容できる。なのであり合わせの材料を使う事になるが、一から調理する事を決めた。

水産の食材が少ないガロンゾで補給された食材となるので、必然的に野菜や肉系がメインになる。

先ほど三人に出したのは、俺によるミニサラダとザンクティンゼル風野菜のグラタンスープ。やる事は簡単、サラダは野菜を切つて盛り付け終わり。スープは残り物の野菜と肉を使い出汁をとつた簡単なブイヨン。具材には煮た際に溶けない程度に切つた野菜を鍋に入れ煮た後、切つたバゲットを浮かべてチーズをまぶしてオーブンに入れて焼く。

「トロトロのチーズとスープの染みたバゲットが合うよ〜っ!」

「野菜が多めだな」

「それはジータ向けに作つたからです」

「彼女の?」

「昔からジータの飯の面倒もみてたんですけどね。あいつ子供の時遊んで動いた分やたら肉ばっか食うから、こつち無駄なく食えるよう野菜取らせतんです。汁物出すと絶対飲みますからね」

「母親かお前は」

益々突つ込みのテンポと鋭さが増してくるスツルムさんである。

「さあさあ団長君、サラダにスープの次は何かなあ〜?」

「何気取りですかその喋りは……あゝ、次お待たせです」

ドランクさんに急かされ出した料理はジャガイモとベーコンのチーズ焼き。あと

さつき切ったバゲットの残り。

「中々ボリユーミーだね〜」

「ジャガイモ大量に有ったんでそれにしました。楽ですしね」

塩ゆでしたジャガイモとベーコン、その他ブイヨン作る時残した野菜を適当にグラタ
ン皿に入れてチーズをのせてオーブンで焼く、で終了。

「いよいよ家庭料理じみて来たな」

「事実家庭料理です。オーブンで焼くだけは楽なのだ」

手軽でボリユームがあり栄養もある。ザンクティンゼルなんか何も無い所で、基本自
給自足で暮らしているとこんな料理が多くなる。

「そして美味いっ！ 熱々ほくほくのジャガイモと糸を引くチーズが上手に絡み合うね
〜っ！ こりややみつひ、あふふっ!! あっっ！」

「ドラंकさん」

「あい？」

「食いながら喋らない」

一タリアクションがオーバーなドラंकさんに注意しておく。喋るなどは言わんが
口の中は空にして喋りなさい。

「いい歳して騒いで食わない。オルキスちゃんが真似したらどうするんですか」

「あく……僕今すごく親に怒られた気分」

「もつと怒られるといい」

「酷いなくスツルム殿。美味しいご飯食べれば嬉しくなるじゃないのさ。スツルム殿だってそうでしょ？ さっきのスープだってあつと言う間に食べちゃったしさ」

「うるさい……っ」

「あ、スツルムさんストップ」

スツルムさんが剣に手を伸ばした。ドラंकさんを刺す気だろう。だがちよつと待ったと制止する。

「食事中乱暴禁止。後でどうぞ」

「後で!? 団長君止めるならちやんと止めてよう!」

「……そうだな、後で刺す」

「予告されたよ!? 決定なのコレっ!」

「おいしい……」

注意はしたが調子の良いドラंकさんの事だから直らん。精々これからもスツルムさんにチクチク刺されるのだろう。

そしてそんなやり取りを気にしないオルキスちゃん。料理をした甲斐があったと言
うものだ。

「オルキスちゃん、飯の作り甲斐があるなあ」

「むふん……」

ほらほら可愛い。誇らしげにご飯を食べる子供の何と微笑ましい事でしょうかね。いくらでも作ってあげたいよ、おかわり作っちゃおうかな。

「……」

「いつてッ!？」

などと呑気に思っていたら、黒騎士さんに膝小僧を蹴られた。

「えっ? 蹴り……え、なんすか突然?」

「もつと作ってやりたいと思っっているな貴様」

「……流石七曜の騎士、人の心を読ん」

「顔を見ればわかる戯けめ」

ちくしよ俺の表情筋!!

「そういう所が甘いんだ貴様、可愛いなどと現を抜かす。人形の身体を肥えさす気か」

「はい……すみません……」

なんか身内以外にこうやって怒られる事少ないせいか、妙に黒騎士さんには頭が上がるらん。

ただあんなだけ食う割に、この子あんまり体型変わってないと思う。

「けどデザートでフレンチトースト作っちゃたんですけど」

「……文句を言いながらどうして手際よく作ってるんだ貴様は」

「いったっ!?! ちょ、蹴らないで……ちよつと、いたっ!?! 地味な痛さで蹴らないで、やめ……っ!?! 膝小僧はやめてちよーだい、つつうっ!?! つま先尖っていったっ!?!」

「スツルム殿、団長君が僕みたいになってるよ」

「自覚はあるのか」

「……おいしい」

剣を抜かないのは優しさと思いたい。

その後デザートも出して終了。やつと俺の役目も……いや、俺は別に帝国戦艦で飯を作る役目なんて無かったが、ともかく終わった。

なのでやつと本題に入れる。

「エンゼラ出来たので明後日には出ようかと思ってます」

「本題がオマケみたいだよ」

「この話に至るのにどれだけ時間くってるんだ」

漫才コンビに総ツツコミをくらう。

「結局一月ほど足止め食らったな」

「言わんで下さいよスツルムさん。艇バラしてほぼ新造レベルで組み立てたのに一月で

「済んだと思いたいんだから」

「普通ならな」

後には言わなくてもわかるな？　と言う視線を向けられる。目を背けたいけど自覚はあるから背けられない、ちくししよう。

「明後日出来るならそれでかまわん。特に予定の変更がないならば、明後日に人形を連れて行く」

「了解つす。予定変わりそうなら連絡入れます」

「その時は直接お前は来るな。面倒になる。よろず屋にでも頼め」

ひでえや。

「本題も済んだろう、もう帰れ。食堂の入り口に兵を呼んでいる。そいつに艦の出入り口まで連れて行ってもらえ」

「まるで出前みたいな扱いだあ……」

「結果的にそうだったね」

うるせえやい。

「まあマジ帰ります。予定より遅くなつたし。オルキスちゃん、ビスケット残ってるだろうけど、食べすぎちゃだめだからね。黒騎士さんに怒られるから、俺が」

「何か言ったか？」

「いつてっ!?!」

また軽く膝小僧を蹴られた。

「うん……程々にしとく。ごはん、ありがとう……おいしかった」

「それは何より」

「……懐かしい味がした。みんなで食べると、ごはんがおいしくて、それと懐かしい味がする……食べた事無い料理だけど……懐かしかった。私が……きつと私じゃないけど……みんなで食べるごはんがとっても懐かしいと思った」

「私じゃない……?」

「おい」

「うえ……っ!?!」

何か不思議な感想を言うなあと思っていたら、黒騎士さんに肩を掴まれた。しかもやたら強い力で。

「な、なにか?」

「いい加減帰れ。我々は別に“お友達”などでは無いのだからな」

「わかってるけども……」

「ならば帰れ。今すぐに」

何か急に鬼気迫るものを感じる。理由があるとすればオルキスちゃんの事か、俺に腹

を立てたか、俺に腹を立てたか、それか俺に腹を立てたか……いかん、思い当たる事が多い。

「そ、それじゃあこのへんで。また明後日に」

「はいはい、それじゃあまたね団長く〜ん」

「帰り道に星晶獣に攫われないようにしろ」

「ばいばい……」

ドラランクさん達は手を振ってくれたが、黒騎士さんは黙ったままだった。こちらをみようともしない。

なにか失敗したかなと思いつつ、下手な事言つて藪蛇にならぬうちに今度こそ俺は退散した。

戦艦を出た所でそう言えば、も一つ黒騎士さんに言う事があつたが言い損ねたのを思い出す。だがそちらは用事と言うわけでは無く、念のため一応メモ書きも残してあるので大丈夫だろう。

それよりも、帰つてからカルテイラさん達にどう言い訳しようか悩む。そちらの方が今の俺にとって問題だった。

六 美味しい食事は優しい記憶のアクセント

■
特に見送りもせず、団長が帰ったのを確認した黒騎士はため息を吐いた。

「お疲れですね〜」

「わかっているだろう……一々言うな」

ドランクの軽口に一応は返事を返しておくがこれ以上は答える気にはならない。そんな雰囲気を感じ取ったドランクはスツルムと目を合わせると、彼女も黙って頷いた。

「では部屋に戻ります」

「僕らオルキスちゃん部屋に送つときますね〜」

「……頼んだ」

「ほらほら、オルキスちゃん。お腹も膨れたし眠いでしょ、もう行こうか」

「うん……」

ドランク達は席から立ち上がるとオルキスを連れて食堂を後にする。食堂を出る前にオルキスは振り向き黒騎士を見た。

「おやすみなさい……アポロ」

その声は黒騎士も聞こえていた。だが返事は返さない。オルキスはその事に少し寂しそうにしていたが、直ぐにドランク達について行った。

(アポロ、か……姿も、声も同じと言うのに)

ついに一人食堂に残った黒騎士は、席に座るでもなくカウンターに軽く背を預けたまま鬱々としていた。

先程オルキスが団長に語った食事の感想。あの場に居た団長には、その他愛無い会話が黒騎士にとつてどれ程の意味を持つかわからなかった。特に「懐かしい味」と言う言葉を聞いてから黒騎士の心は波立っていた。

(郷愁の味……それだけで「人形」に彼女の記憶を見せたのか、あいつは)

まさかな、と黒騎士は思った。そして雑念を振り払う。

食堂で一人苛立つてもしかたない、自分も部屋に戻ろうと思った時黒騎士はふとドラック達の座っていた席にまだ皿がある事に気付いた。中身が乾燥しないよう丁寧に蓋までしてあり、その蓋を開けてみればつい先ほど作ったらしいサンドウィッチがあった。

更に何かと思えば一枚メモが置いてある。手に取って見ると見覚えの無い文字で書かれている内容に思わず顔をしかめる。

『少しは食べた方が良いと思ひ、やっぱり作っておきました。よければどうぞ』

クシヤリ、とメモを握りつぶした。メモの端にある名を見るまでも無く団長の置いてあったものだろう。文句を言いながらフレンチトーストまで作っていた男が、更に何時の間にこんな物をメモ付きで残したと言うのか。

お前は私の親ではない、と内心叫び苛立った。この場に団長が居ればまた蹴りの一つもいれたであろうが、もう既に姿の無い団長に苛立ちを募らせた。しかし出来上がっているサンドウィッチをもう一度見る。くだらない騒動で忘れていたが、そもそも自分も軽く何か食べようと初めは考えていたのを黒騎士は思い出した。

(これに私が気付かなければ、どうするつもりだったんだあいつは)

流石に捨てる事も無いだろう、そう考える事にした。しかし部屋に持つていき食べる気も起きず、黒騎士は自分でコップ一杯の水を注ぎ席に座ると黒騎士は兜を脱いだ。食堂の扉も閉まっている。誰もいない空間で、その姿を見る者はいない。

少しサンドウィッチを睨むと黒騎士は端のものから手に取って口に運んだ。なんの工夫も無いように見えるただのミックスサンド。味付けされた卵と、野菜と、ハム、それだけの具材。だからだろうか、質素なそのサンドウィッチを食べるとそれだけで懐かしく感じた。どこにでもあるようなその味は、不思議と懐かしい。

(……美味い)

空腹でたまらないわけでは無かったが、一口食べるとついつい次のものに手が伸びた。そして気が付けば皿には何も無かった。黒騎士自身も気が付かない内に全て食べてしまっていた。

(懐かしい味、か……)

サンドウィッチ自体になんら思い出はない。しかしその味は、黒騎士の古い思い出をじんわりと浮かび上がらせる。

その思い出には幸せがあった。その思い出には優しさが満ちていた。家族、友人が映るその思い出は美しかった。

しかし今の黒騎士にとってその美しさはなによりも残酷だった。しかし、それでも思い出は忘れられない。だからこそ、思い出す。

明後日、予定通りにエンゼラが飛ぶのならどうあっても団長に会う事になる。なにかしら嫌味と共に、サンドウィッチの礼ぐらいは言つてやろうと思った。

■ 七 何時も通り

「そりや遅うなる聞いてはいたけど、なんも連絡無しつちゅーのは感心せーへんで」
「はい……………もつともです……………」

「まあ団長はんの場合、なんぞ連絡あつたらあつたで心配になるけども……………それはそれとしてやつ！ どー転べば帝国戦艦の食堂で飯作るなんて展開になるんっ!? 出張コックかつ!?!」

「そんな俺が知りたいですよ……………っ!」

「ほん、ほんま……ほんまもう、行く先々で……もう星晶獣もびっくりやつ!!」

「タマゲタツ! ツテ感ジダナ」

「オーマイバハムーツ! ってやつだな。オイラびっくりっ!」

「うるせーよっ!?!」

一方団長はカルティラ達に怒られると言うより揶揄われていたのであった。

エンジョイ七転八起

一 旅立ちの契約

帝国戦艦食堂臨時コック騒動から二日目の朝。

カルテイラさん達に怒られるやらからかわれながらも、その後無事に諸々の用事を済ましてエンゼラへの物資搬入も無事完了した。

エンゼラは既に搬出用エリアに運ばれている。何時でも出発可能な中団員総出で物資の積み込み忘れ等の問題が無いかの最終チェックしている。同時に新しく出来たエンゼラ船内の間取りも覚えるための作業でもある。

一方で俺はと言うと、それらの作業を皆に任せ外である人物を待つ。

「そろそろ来るかな団長」

「時間通りならね」

一人にするとまた面倒を起こす（巻き込まれる）と言われ、俺一人には出来ないと皆

に言われてしまい、付き添いでゾーイも共にいる。言い返したかったがここ最近の事を思い返すと何も言えないのが辛いのだ。

「ミシミミン？」

「お前すつかりそこが定位置だねえ……」

そしてもう一人、と言うか一体。省エネミスラが俺の頭の上でクルクルしている。

「別に本体に戻っても良いんだぞ？ 最初は無理に呼び出したようなもんだつたし」

「ミンツ！」

「暇だし構わないって？ あそう暇……え、暇なの？」

「ミススン」

「いや、けど一応島と契約した星晶獣として役目があるとかさ」

「ミシミミンツ！」

「そう言うのは本体がやつてる？ そもそも能力が勝手に働くから別に意識してやる事がない……へ、へえ？ そうなの」

色々台無しな話を聞いてしまい、なにかガロンゾの人に申し訳ない気持ちになる。

「彼は最初から『省エネ』と言う形で呼び出したからな。基本は変わらないが、ティアマト達同様もう既に本体とは別の存在になりかけてる。ミスラと言う星晶獣としてのあり方も変わっているかもしれない」

「マジか」

「マジだよ」

さらりととんでもない事を言うなよ……。

「ティアマト達だつて同じようなものだよ。君は不思議と星晶獣の性質を変えちゃうからなあ」

「さらつと怖い事言うなよ」

「本当だから仕方ない、だからこそ私も一度君を討とうとした。放つて置いたら空の均衡が崩れてしまう」

「いや、さらつと言うなよ」

「まあ実際のところ、大きな異変があつても殆どの問題は君に来てるから大丈夫だったなあ」

「だから、さらつと言うなよっ!」

「あははは」

笑うな笑うな、ちくしよめ。それでは全て俺の自業自得のようなオチじゃないか。認めないぞ、俺は断じてそんなの認めんからな。

「ふむ……とところで団長。どうやら来たらしいな」

ゾーイはケラケラと笑うと一方を見て指を刺す。俺もそちらを見てみれば、ゾロゾロ

と物々しい集団がこちらへと向かっている。

甲冑に身を包んだ兵達が列をなし、その威圧感から周りの大工や騎空士達の殆どは距離をとった。兵隊さん達はエンゼラ前にまで来ると立ち止まり、そして道を開けた。割れて出来た兵隊達の道から四人俺達に向かってくる。

「時間どおりつすね」

「早く済ませたいだけだ」

「でしようね。おはようオルキスちゃん」

「おはよう……」

黒騎士さんご一行の到着。

■
二 「エルステ帝国・星晶戦隊（以下略）ガロンゾツアー御一行様」は団長と艇で飛んで解決の最後というわけだな

■
「しかしまあ、なにもこんな集団で来なくてもいいでしょうに」

現れたエルステ帝国御一行。武装した兵達を従えての登場に、この場にいる一般人は怯えを隠せないでいる。

「万が一を考えれば妥当な人数だ」

しかし黒騎士さんはこともなげに答えた。

「万が一ってなんすか、ちよいとばかり艇に乗るだけですよ」

「貴様が星晶獣にさらわれた場合対処できる」

「Oh……」

まさかの対策だった。

「当然それだけではない。今から我々は貴様の艇に乗る。しかし言ってしまうえば敵船だ。しかも貴様ら騎空団の騎空艇、そんな何が起こるかわからん艇に人形一人では乗せるわけにはいかん。貴様のように戦艦に乗り込んで気軽にコックやるのとは違うのだ」

決して気軽ではなかったよ。馬鹿言っちゃいけねえ。

「けどまさか全員乗るとか言わないですよね」

「付き添うのは私とドラック達だけだ。その間ここには兵達を置いていく」

「そりやよかった」

「だが連れて来た兵がこれで全てと思わん事だ」

「……ああ、やつぱりね」

下手な事したらどうなるかわかってるな？ と黒騎士さんの目は語る。大げさに見えるこの兵隊さんの数に圧倒されそちらにだけ注目してしまうが、既にガロンゾ各所に帝国兵が潜み配置についているだろう。実際さつきから俺への殺気が多い。混乱のバ

ランスが傾くのには敏感なゾーイの方も気づいているようだ。こりや黒騎士さんが到着する前から何処かしらに潜んでたな。

万が一俺達がおかしな行動をとった場合、潜んだ帝国兵に合図が送られるだろう。そうなると過激な帝国兵の事だから、果たして何しでかすかわからんな。ティアマト達を総動員すればどうにか出来るだろうが、無駄にガロンゾ内で面倒を起こしたくはない。なにより無関係の島民に迷惑がかかる。

「ふん……別に貴様が何かするとは思わん。そんな輩でない事もわかっているつもりだ。今言ったようにあくまで万が一に備えてだ。」

「万が一ねえ。まあ特別何かするわけじゃなし、なんも起きやしませんて」

「『説得力』って言葉を知ってるか？」

「さもありませんだなあ団長、あはは」

スツルムさんからキツイ言葉をもらう。ゾーイまで笑うんじやないやい、ちくせい。

「団長君の場合気を抜くと何起こるか分からないからね。星晶獣が現れるオチと魔物が襲来するオチと爆発オチとそれはもう色々とおチが用意されて」

「ねえよっ！ 少なくとも爆発オチはまだねえよっ!!」

「まだって事は、その内ある気はするんだな」

「な……ないよっ！」

「そこは自信もって否定しろ」

畜生、この夫婦漫才傭兵コンビめ……。好きかって言いやがる。くそう、くそう。

「それよかですわね……。どうだい、オルキスちゃん。俺達の騎空艇は」

「……うん、かつこいい」

「そうでしょ、そうでしょ！ いや、ほんと最高の騎空艇になったよ、うんうん！」

全てが最高だからね。もうこれ以上ない騎空艇なのだよ。

「借金した甲斐があつたというものだよ。俺も頑張つて木を切り、釘を打ち、鉋をかけ、それはそれは色々と」

「無駄話はいい。ミスラも居るなら最後に契約内容の確認をしろ」

俺が語り出すと黒騎士さんにはつきり話を切られた。余計な話だったかもしれないが、無駄といわれるとショックである。

「無駄……無駄……ひでえや」

「無駄なものは無駄だ。無駄無駄……いいから本題に入れ」

「わかりましたよう。えつと……それじゃあミスラ、確認するから聞いてくれな」

「ミンツ！」

「まず第一に修理完了のエンゼラが必要である事。そしてこれはもうクリアできてるね？」

「ミンツ！」

「よし。それで第二に、俺とオルキスちゃんが必要がある。そうだね？」

「ミンツ！」

「よしよし。それじゃあ最後、契約上の『乗る』は搭乗するだけを言う？」

「ミスッ！」

「違う……じゃあ、乗って空を飛行する事？」

「ミミミーミンツ！」

その通りと言わんばかりにミスラは大回転しだす。フィーヴァー状態だ。

「だそうです」

「……やはり会話が理解できん」

「団長君星晶獣専門通訳で食べてけそうだよね」

そんな面倒しかなさそうな仕事につく気は無い。

「ミンミース」

「あー……ただ搭乗時間の約束が無かったからか、そこらへんフワツとしてるから念のため十分以上乗っておいてくれだそうです。ガロンゾ一周ぐらいすれば大丈夫じゃないっすかね」

「……まあその程度ならいいだろう。早く済ますぞ」

「あいあい」

話はまとまった。まとまるような話でも無い気がするが、ともかくまとまった。あとはオルキスちゃん達とエンゼラに乗り、ガロンゾ一周の旅に出る。

ついに約束の日。俺と帝国をガロンゾに縛る契約を果たす日がついに訪れた。

■ ■ ■ 三 エンゼラクルーズ

「出港っ！」

俺の掛け声を合図にエンゼラが搬出エリアの船着場から離れ出した。

「よーしよしよし、いいぞいいぞ……っ！」

ゆっくりと艇が移動する。操縦するのは勿論セレストである。しかし今のエンゼラは改修された新エンゼラ。大きさも使い勝手も変化している。試験飛行は行っているが、慣れない内は慎重に動かさないといけない。搬出エリアからは作業員の人々が誘導を行い、障害物に当たらないようにしてくれている。

「そのままそのまま………よーしっ！」

そして無事搬出エリアの外に出る。場所も開けここまで出ればもう殆ど問題は無い。

離れていく船着場を見れば親方達やノアの姿がある。この後島には戻ってくるが、本格的に島外に出れたのを確認できて彼らも安心した様子だ。俺が問題ない事を示すように手を振ると、彼らもそれに応えた。

「ふう……ぶ、無事出れたよ……!」

エンゼラが外に出ると、近くの床から霧が上りそれが直ぐにセレストの姿に変わる。先ほどまで操舵室で集中していた彼女だが、一仕事終えてこちらに移動したらしい。

曰く星晶獣的なアレでエンゼラを操舵しているので、彼女は必ずしも操舵室に居る必要は無いためこのような芸当ができる。

船体隅々まで極めて薄く広く霧を這わせ、それで多くの情報を感知してるとも言っていた。

そのため操舵室は彼女にとって私室の一つ、あるいは集中して操舵を行う場合の儀式的空間となった。

「それじゃあ島から少し距離をとって一周しよう。焦らんでいいから」
「りよ、了解……っ! それじゃまた操舵室戻るね」

ふんすふんすとやる気みなぎる姿は頼もしき以上に可愛さに溢れるのである。

しかし無事出港できてよかった。またぞろ野良星晶獣でも現れようものならどうしようかと思つたが、この感じなら最後まで大丈夫そうだな。

「どうオルキスちゃん、乗り心地は」

「……いいね」

オルキスちゃんがいいねをしました。小さい手でサムズアップ。思わず俺もサムズアップ。

「それじゃあ、適当に時間潰しますかね」

「ゆるいなあ」

無事艇も上がったので、安心してるとドラंकさんにこんな事言われた。一番言われたくない人である。

「まあガロンゾ一周するだけですし」

「まあそうだけどさくけど空眺めるだけじゃ退屈じゃないの。どお、トランプでもする？」

「そんなの持ち歩いてるのかお前」

ドラंकさんが懐からトランプを取り出すとスツルムさんは呆れていた。懐から遊具が出てくる傭兵とは、これいかにである。

「まあまあ、退屈は人生の大敵だよスツルム殿お。それに有意義に時間を潰すのも仕事の内だしね。他にも折りたたみのボードゲームとか昔流行ったスピンドードとか」
「玩具ばかりじゃないか……っ！」

「いつてええつ!？」

次々出てくる玩具についてスツルムさんの剣がドラंकさんの尻に刺さった。

「なんじゃ、愉快な二人組みもおるではないか」

「誰が愉快な二人組みだ!」

二人の愉快なやり取りを見ていたら、甲板にのじゃ子とメドウ子が現れた。のじゃ子の発言にスツルムさんは憤慨している。

「そうかつかするでない。余計愉快になるぞ」

「むう……くそつ」

「やつほ、お久しぶりだねくメドウ子ちゃん」

「メドウ子じゃないつての!」

「まあまあ、それより二人ともどうした?」

なんだか見慣れた組み合わせになってきたメデュのじゃコンビ。二人揃って歩いてると、なんか仲良しの幼子が散歩してるみたいだ。

「艇中確認してんの。まだのじゃ子が間取り覚えられてないのよ……鳥頭だから、ププツ!」

「のつじゃ!? 誰が鳥頭じゃ! しかたないじゃろう、お主は前の船内知つとるから勝手も分かるじゃろうが、妾は最近来たばつかで艇に乗れたのもまだ二度目なんじゃ!」

「はいはい、喧嘩しない。煽らない、乗らない」

煽るメドウ子に乗るのがじゃ子。止めなきやずっと喧嘩しそう。けど結構二人でいる事が多い。せめて仲良く喧嘩しろ。

「……騒がしい星晶獣共だ」

姦しい二人に呆れる黒騎士さん。俺まで申し訳なくなってきた。

「騒がしくなっちゃったなあ……移動でもしますか」

「あ、中はいるの?」

「まあそれぐらいしか……食堂でもどうです? まだ料理作るには準備不足ですが、お

茶と茶菓子ぐらいなら出せますが」

「お菓子……っ」

俺の発言を聞いてオルキスちゃん目が輝いたのと同時に黒騎士さんが深く溜息をつき、そしてまた鎧が震え出した。

迂闊であつた。こ、これはいけない。

「い、いやいや、話の流れでね!! ね!! わかりますよね!! 別にオルキスちゃんを甘やかすとかじゃなくて、あくまで黒騎士さん達全員を持って成すためのものであつて、決して俺がオルキスちゃんにお菓子食べて欲しいとかじゃなくてですねっ!!」

「結果的に菓子類与えてる事に変わりないだろうが……っ!」

「ひえっ!？」

「我々は茶飲み友達ではないっ! いらん事をするなっ!」

「ひいっ! いえ、あの……大変ごもつともなんですけども、経緯はどうあれ一応艇に招いたわけですから何もしないのも失礼と言うか、気まずい気もしてですね」

「庶民感覚をこんな状況でだすなっ! ええい、まだ契約は完了しないのか!？」

「ミミーン」

黒騎士さんの怒号もなんのその、ミスラはふよふよ俺の周りをクルクル回り漂っている。

「の、乗ったばかりだからまだ駄目って言ってます……」

「どこまでも融通の利かん……っ」

「そ、そう言いましたも」

「第一貴様は会えば可愛いだの、元氣かだの、腹は減ったかだの、大した付き合ひも無かったくせに親戚か家族みたいにずけずけと」

「ですから、それは」

「あの娘、ジータに關してもそうだ。貴様のそう言う甘さがあんな風にしたんじやないのか?」

「ジ、ジータは關係ないでしょ!? それに、あれでも厳しく面倒見たつもりなのです」

「ならばどうしてああも無軌道な女に育つ。お前の怠慢ではないのか？」

「たた、たたた怠慢ですって!? お、お言葉ですけどね、あいつ子供の時から元々あんな感じなんですよっ!? 目を離せば子供の癖に手斧一本持つて森に突貫して魔物狩ろうとするわ、遊んでくれと言われて遊んだら3時間ぶっ続けで俺が鬼のままの鬼ごっこやらされるわ、星晶獣も真つ青の体力お化けですよ! そもそも両親不在の中で世話した身としては結構頑張った方と自分でも思うんですからね!」

「ふん……自分一人満足してるような育て方を自慢されてもな」

「カ、カチンときたよこれ……っ!? そりゃ幾らなんでも酷いんじゃないやありません!? 七曜の騎士とは言え……それ言ったら黒騎士さんだつてあれですよっ! オルキスちゃんとの脱走癖治せてないのは、黒騎士さんがちゃんと面倒見てないからなんじゃないんですかっ!」

「な……っ! なん、だと……貴様っ!」

「ああ言う我侬はねえ、構つてほしいからやるもんですよ。食事ぐらい一緒にとれば良いだろうに、そーゆー事しないからやんちゃになるんですよ!」

「貴様知つたような口をつ!!」

「そつちこそつ!!」

「ちよつとあんたらっ!!」

「んぎやあつ!？」

黒騎士さんと言い合いになったが、急にメドウ子が俺の頭を髪の毛の蛇で噛みついたため止められた。

「きゅ、急に噛みつくな馬鹿!？」

「うっさいわね。それよか先行っちゃったわよ」

「はあ? 先につて……」

「だから、あの子」

メドウ子が俺達の横に位置を指さした。そこには何もなく、一瞬何の事を言っているのかわからなかったが、しかしそこには確かオルキスちゃんが居たはずだった。

居たはず——過去形である。

「あれっ!？」

「……おい、人形はどこへ行った」

「さっきのじゃ子が先連れてっちゃったわよ」

「いやいや……何勝手に連れてってんの!?! てか止めるよ!?!」

「あんたら騒いでるし、アタシだって気が付くの遅れちゃったの! 気が付いたら扉入ってたのよ!」

どうやら俺達が言い争いをしてる最中、のじゃ子に連れられオルキスちゃんは甲板か

ら船内への扉に向かい既に中に入ったらしい。

「まあ艇の外には出ようが無いからまだ良いけどさあ……」

「……良いわけあるか」

「いったいっ!？」

ふと呟いた言葉が聞こえたらしく、黒騎士さんに頭をはたかれた。

「ううむ、移動したとすれば……食堂かなあ、話の流れ的に」

「……不本意だが食堂に向かうぞ。あれを放っておくとどうなるかわからん」

「まあ一人ではないようだけどね」

「もう一人がああ星晶獣ではな……」

オルキスちゃんが一人船内をウロチヨロしているわけではなく、一応のじゃ子も一緒についているのだが黒騎士さん達は安心できていない。そして俺も安心できない。

「確かに目を離してる時に面倒が起きてても嫌だ……案内します」

一先ず速足でオルキスちゃんを追って船内に入る。まったくもって気の休まらない契約完了日の始まりだ。

■ 四 のじゃつとオルキス探検隊

「……むう」

エンゼラ船内。通路のとある分かれ道、そこでガルーダは腕を組み唸った。

「はて、どつちじやつたかのう」

「……迷った？」

唸るガルーダの隣にはオルキスがいた。突然立ち止り首を傾げるガルーダを不思議そうに見ていた。

「む？ いや、迷ったわけではない。ちよつと通路の道順を忘れただけじゃ」

「……それ、迷ってる」

「いやいや、まだ迷つてはおらん。ちよびつと忘れただけじゃ。その証拠に……ほれ、思ひ出したぞ。食堂はあつちじゃ」

自身ありげに歩き出すガルーダ。それに対してオルキスは特に不安は無さそうであつた。何も言わずガルーダについて行き、見慣れぬ帝国戦艦以外の船内を興味深そうに見ていた。

スンスンと匂いを嗅ぐと出来たての新築の家と同じ匂いがした。

「およっ」

「わぷ」

しばし歩くとまたガルーダが立ち止まった。急に立ち止まるので、後ろからポテポテ

着いて来ていたオルキスは、そのままガルードダの背中の中身に包まれるようにぶつかってしまふ。

「おっと、すまぬな娘」

「……平気。あつたかい」

「によほほ、そうであろう。なにせ妾自慢の羽じゃからのう。ほれほれ」

「……ん、くすぐつたい」

オルキスの反応が面白かったのか、ガルードダは羽を動かし彼女の頬をコシヨコシヨとくすぐつてみせた。オルキスもくすぐつたそうに悶えるが、不快そうではなかった。

「それより……食堂？」

「おお、そうじゃったそうじゃった。それが食堂に向かつていたと思つたら」

ガルードダが目の前の扉を指さすと、そこには『大浴場』『小浴場』と表札があつた。

「……食堂？」

「風呂じゃ」

まったく違う目的地であつた。

「おかしいのう。どこで間違つたのか」

「さっきの道……？」

「かのう」

不思議そうに首を傾げる二人。

「誰かおらんかのう」

風呂場に入つては見たが、そこには誰も居なかつた。がらんとした脱衣場があるだけである。浴場の方を覗いても、湯のはられていない湯舟があるのみだつた。

「ま、おらんわな」

「広い……」

「大浴場じゃからな」

エンゼラは元々大浴場の一つがあるのみであつたが、今回の改修をうけ団長と主に女性陣の要望を受け更に広くした大浴場、そして小さな小浴場を設置させた。

コロツサスなど基本は男性として扱われるが、厳密に雌雄判別のつかない存在は除くとして男女比で女性が多くを占めるこの騎空団、入浴に關しての問題はそれなりにあり、特に大勢の女性が入浴する時間が長いため、数の少ない男性が待たされる場合があつた。

そのためまず大浴場を広くし小規模の浴場を設置。これによりどちらかの浴場に女性陣が入浴中であつても、男性陣もどちらかの風呂を使用する事ができるようにする。

しかも大浴場は浴場の位置を変えた事で実現した、職人拘りのスカイビュー仕様。当然普段はシャッターと窓で閉じており、開放感を味わいたい時や掃除で浴場の湿気を抜

きたい時等に窓を開けられるようにした。その事で過酷な騎空団の旅の中でも、伸び伸びとした時間を楽しめる。

「まあ風呂を楽しむのは今度じゃな。さて、道を戻るか」

しかしそんな自慢の浴場も今の二人には用も無い。このまま居ても仕方が無いので、ガルード達は早々に移動を再開した。

先程間違えたと思われる分かれ道を目指すのだが、今度はその分かれ道にたどり着かなくなつた。

「……さつきより、迷つた？」

「さてさて、そう断ずるには早計じゃ。近づいてる可能性だつて否めぬ」

何故か前向きなガルードである。オルキスもオルキスで特に気にしたそぶりは無い。そうして二人が食堂を再度目指したが、何故か中々食堂につかない。

実はこの時曖昧な記憶と勢いに任せガルードは道を選んでいった。「確か右から来たから、右じゃな！」と言つて来た方向、元の場所に戻るのであるなら本来左に曲がるべき通路を右に曲がるなどしてしまい、全く反対の方向へと進んで行つてしまつていたので、そんな事にガルードは気がついていない。ガルードが「おかしいのう、おかしいのう」と呟きながらポテポテ歩いてみると、またもとある通路でガルードが立ち止まつた。今度はオルキスもぶつかる事はなかつた。

「……食堂？」

「いや、食堂を指摘したはずが」

ガルードダが指を刺す。そこには表札に『トレーニングルーム』と書かれていた。

「おかしいのう、どこで間違えたのか」

「ずっと間違ってる……」

「によほほ、まあそういう事もあろう。さて、今度こそ誰おらぬか……」

先程と同じように中を覗いてみる。

広々とした室内は他の通路の白い白色が強いフロアリング張りの部屋。壁には大きな鏡も張られており、自身の動きを確認できるようにになっている。また様々なトレーニング器具もあり、それを見るだけでオルキスは体が鍛えられるような気分になった。

「むう、誰もおらぬか……およ？」

やはり誰も居ないかと思ったら、ガタガタとトレーニングルーム倉庫から物音が聞こえた。そしてその扉が開くと、中から大きな人型の模型を運ぶフェザーとユーリが現れた。

「くっ！ か、かなり重いなこれ……！」

「頑丈なのを注文したからな！」

「それで、こつちでいいんですか……っ！」

「ああ、動かして問題ない場所に置くからな！」

二人はその人型を重そうに運んでいた。

「おお、良いところにおった！」

「むっ？ その声はガルーダだな！」

「正解じゃ。ちよいと聞きたい事があつての」

「ちよ、ちよつと待つてくれ……これ置いてから聞くつ！」

フェザーは何時もの調子だが、ユーリはかなり辛そうに荷物を持っていた。二人はえつちらおつちらと進み、目的の場所にその荷物を置いた。

「ふう……想像より重かつた……」

「……何してたの？」

「うおっ!? な、なんだ……君も居たのか」

「うん……いた」

オルキスが汗をぬぐうユーリに声をかけると、オルキスが居ると思わなかつた彼はひどく驚いた。荷物を持つて後ろを向いていた彼は、彼女の存在に気が付けていなかった。

「あー……大声を上げてすまない。自分達は積み込んだ鍛錬用の器具をチエックしててな。一度は倉庫にしまったが、幾つかは出しておこうつて話になつたんだ」

「これも鍛錬用器具か？ みようちくりんな人形のようじゃが」

「これは『木人』だ」

「もくじん……？」

輪切りにした樽を重ねたような木製のボディにずた袋の頭部が付けられたそれは、確かに人型と言えば人型のシルエツトである。しかし体格に対し小さく覚束なく見える四つの脚とボディのスリット部分に装着された幾つかの盾と剣が、完全な人型とは言い難い印象を与える。

「訓練用の人形だ。色んな攻撃に耐え、調整しだいで色んな攻撃も繰り出せる。危険だから勿論剣は本物じゃない」

「俺が団長に頼んで買ってもらったんだ！ よろず屋に注文したら、特に頑丈で性能が良いのが手に入ったぜ！」

如何にもな人物が如何にもな物を買っている。二人はそう思った。

とは言えこの木人は格闘戦以外の模擬戦も可能であり、この騎空団の団員全員の戦闘スタイルに対応できるため、事実かなり高性能な木人であった。

「ただよろず屋殿が言うには、更に特別性とか……木人の調整を特別な人に頼んだらしい」

「団長が使えばわかるって話だったな」

その特別な人物が何者であるかフェザー達は聞かされていない。団長もまたそんな話すら聞いていない。もしも聞いていれば悪寒から即この木人を返却しただろう。きつとその内団長はまた酷い目に遭う。

しかしそんな事もオルキス達には関係の無いことだった。

「木人は今は良い、それより道を聞きたいんじや」

「道？」

「食堂を目指しておるのに何故かつかぬ」

「案内板は見たのか？」

「そんなのあつたか？」

「そりやああるだろう。少なくとも分かれ道にはちやんと書いてある」

「はて、見たような見てないような……のじやのじや」

「なるほど、ガルードは方向音痴だったか！」

「大声で言うでない。それに方向音痴では無い、この艇に慣れておらんだけじや！」

プリプリ怒るガルードであるが、フェザーは「あはは！」と笑うのみであつた。

「それで食堂か。ここを出て左に向かつて階段を二度上がって真つすぐ進んで直ぐだが

……案内するか？」

「いやいや、それがわかれば大丈夫じや。お主等も用事でここにおつたのじやろう。」

そつちを優先してもらつてかまわん」

「そうか？」

「うむうむ、流石にこれ以上道を間違えたりはせぬ。ではな」

「おう！　後で俺達も食堂に行くからな！」

ユーリの提案を断り、二人はまた部屋を出ると食堂を目指し歩き出した。

間もなくユーリの言つたとおりに進むと、確かに食堂に向けて近づいたようだった。一安心したガルーダであつたが、ふとオルキスが食堂の方向とは別の方を向いている事に気づいた。

「どうした娘？」

「……不思議にな匂いがする」

スンスン匂いを嗅ぐオルキスが気になっている通路を指さした。不思議な匂いと言われ、ガルーダも匂いを嗅いでみると、確かに不思議な匂いがする。しかしガルーダはこの通路の先になんの部屋があるか直ぐに思い出せない。

「食堂からではないな。料理の匂いではないようじゃ」

「……」

「あ、これ勝手に行くでない！」

匂いを嗅ぎつつオルキスがフラフラと歩き出し、慌ててガルーダが後を追つた。

二人は匂いに手繰り寄せられるようにして匂いの元に向かうとある部屋の前に来た。そこには『実験室』と表札にかかれていた。

「ああ、成程ここじゃったか。ここは錬金術の実験室じゃよ」

「錬金術……?」

「うむ、あの錬金術師の娘の実験室じゃ。もう使っておるとはな」

匂いの正体はカリオストロの実験室からのものだった。ガルーダがそれがわかるとスツキリしてついでに挨拶でもしておこうと思ったのか、扉をノックして中にいるカリオストロによびかけた。

「もし、おるか錬金術師の」

「あん……? その声、ガルーダか。なんの用だ?」

「なに不思議な匂いがしたからの。気になって見に来たんじゃ。入ってよいか?」

「ああ……まあかまわねえよ」

許可を得たので二人は実験室に入った。入ってみた部屋内は、まだ出来立てであるためか機材も資料もとても整っている。幾つかの資材はまだ梱包されたままのものもある。

「邪魔するぞ」

「おう……なんだよ、あの小娘もいんのか」

「います……」

入ってきたのが二人、そしてその片割れがオルキスであると気づきカリオストロは少し意外そうにした。

「何でまたここにいんだよ」

「うむ、食堂に行こうとしたが迷った!」

「胸張って言うなよ」

ついに開き直ったガルダは清々しいまでに迷子宣言をしていた。

「まあ安心せい、先程フェザーらに道を聞いてもう解決した」

「そうかい。そんじゃ何でここに来てんだよ」

「不思議な匂いがしたからのう。気になってきてしまった」

相変わらず不思議な匂いは実験室の中を漂っていた。不快な臭いではなかったが、不思議なとしか形容できない匂いである。

「なんで実験でもしておったか?」

「まだ設備は稼働させてねえよ。こりや薬品の匂いだ」

そう言つてカリオストロは、2リットルサイズの平底フラスコを手に取つて見せた。中には粘性のある緑の液体がタプタプと揺れている。

「さつき取り出して確認してたんだよ。換気させるの忘れてたな……」

「まさか変な薬じゃあるまいな」

「いんや、薬草から抽出した天然由来の無害な液体だ。何なら食品にも使えるぜ」
「甘そう……」

「おっと、こらこら」

食品にも使えると言う事と、匂いはどことなく甘い匂いでもあったので何となくオルキスは手を伸ばしたが、直ぐにカリオストロはフラスコを彼女から離れた。

「毒じゃねえが単体で飲むもんじゃねえよ。基本はポーシオン生成に使うもんであつて、匂いは良いが甘くもねえしハッキリ言つて不味いんだ」

「……美味しくないの？」

「原液だから……後悔するほど苦いぜ。いるか？」

悪戯つぼく笑うカリオストロ。苦いだけの液体を飲みたいなど思つてはいないので、オルキスはフルフルと嫌そうに顔を横に振つた。

「まあこの部屋で『美味い』もんは期待すんな」

「……わかつた、錬金術師おじさん」

「おいコラ」

極めて不名誉な呼び方をされカリオストロは静かに怒つた。

「美少女だろ!!? どつからどう見ても美少女だろうが!?!」

「けど……おにいさん、『おっさん』つて言つてる」

「あいつの真似をするなっ!! ……おい、おいガルードダ笑ってんじゃねえ!!」

何時もカリオストロの事をおっさん呼びしている団長の影響を受け、何となくおじさん呼びしたオルキス。当然カリオストロは立腹したが横では腹を抱えてガルードダが「のじゃのじゃ」笑っていた。

「……ふうっ。いいかなあ〜オルキスちゃん? カリオストロはおじさんじゃ無くてえ

〜、可愛い、かあわいい〜……っ! 美少女なんだよお☆」

「……美少女?」

「おうこら、なんで首傾げた?」

オルキスは別にカリオストロを馬鹿にしているのではない。自称で美少女を名乗る人間に慣れていないだけである。

「とにかく……っ! カリオストロは世界で一番可愛い美少女なのっ☆ だから、カリオストロの事は、カリオストロ “お姉ちゃん” って呼んでね☆」

「凶々しいのう」

「やーンガルードダったらひっどーい。……錬金素材にすっぞっ☆」

「本性が隠せておらんぞ」

伝説の錬金術師、生きる伝説、時を超え復活した天才。やろうと思えば星晶獣でさえ錬金素材に出来るだろう。決して冗談で脅していない凄みが彼女にはあった。

「わかった……お姉ちゃん」

「よーしっ☆ オルキスちゃんは偉いねえ！ どつかのお兄ちゃんにも見習って欲しい素直な良い子っ！」

素直にカリオストロの事をお姉ちゃんと呼ぶオルキスを褒めるカリオストロ。彼女を抱きしめ頭を撫でる。

するとまたも実験室の扉をノックする音がした。

「誰だー、別に入っていいぞ」

「どもーっす」

カリオストロが返事をする、扉が開き団長達が入ってきた。

「あくー！ 噂をすれば素直じゃないお兄さんだあく☆」

「出ぶりっ子やめい」

「出ぶりっ子ってなんだっ!？」

出会って早々ぶりっ子、縮めて出ぶりっ子。カリオストロの可愛いムーブは不発であつた。

「てかなんだよ素直じゃないお兄さんって……」

「ところで団長、揃ってどうしたんじゃ？」

「どうしたじゃないわ、バカチン」

「のじゃっ!？」

団長がガルーダに近づくと、軽めに彼女のでこピンで弾いた。

「一人勝手にオルキスちゃん連れてくんじやないよ。黒騎士さん達にも心配させて、俺焦っちゃったんだからな。食堂行ってもいないし」

「あんな通路たいして覚えてなかったくせに歩き回るんじやないわよ。無駄に探したじやないの」

「うにい……す、すまぬ」

「よし、勝手な行動はいかんが素直に謝れるのは良い事だぞ」

ヒリヒリするでこを押えながら涙目で謝るガルーダだった。

「んで……どうしますかね、食堂ならもう戻ればすぐだけど」

「……もう勝手にしろ」

これ以上何か言っても無駄と悟り、黒騎士はそれだけ言うど黙ってしまった。

結局その後、団長達は食堂でミスラの契約完了報告を待ちつつまったり過ごしたのであった。

■ 五 ミスラが契約の完了をお知らせいたします

なんやかんやで集まった団員達とお茶を飲み、ティアマトとラムレッダが「どうせだから酒でも飲むか」と言い出しそれを止めていたら丁度ガロンゾを一周、それと同時にミスラが「ミン、ミン、ミン、ミーンツ！」とチャイムの如く契約完了をお知らせ。なんだかホツとした俺と黒騎士さんは、喜ぶでもなく唯々安堵したため息を吐いた。

「ま、終わつてみれば早かつたような」

「わけあるか」

「ですよねー」

万事めでたく締めようと思つたが、黒騎士さんに食い気味に否定される。ごめんなさい。

「まあ無事に終わったのは本当じゃない？ また星晶獣攻めてきたとかは無かつたし良かったんじゃないかな」

「まつたくだ」

一応ドラंकさんとスツルムさんがフォローしてくれたが、またつて言われるとやはり複雑である。短期間に来すぎだよ星晶獣。

そんな複雑な心境になりつつもエンゼラは再びガロンゾへ。ただしこんどは搬出エリアではなく、通常の船着き場へと艇をつける。もう生まれ変わったエンゼラの旅立ちに問題は無い、これが終れば再び旅が始まる。

「……艇から降りたら敵同士なわけで」

「元からだ、勘違いするな」

降ろされたタラップ、その先には既に集まっていた親方達と帝国兵、そして先に降りた団員達。彼等が見守るのは、まだタラップを降りていない俺と黒騎士さん達。

「やだなあ、物騒なのって」

「……安心しろ。貴様が戻る前あのリュミエールの娘と約束している。全てが終るまで手出しはせん」

「そりやまあ安心だ」

船降りた瞬間七曜の騎士と決戦と言う事はなさそうだ。具体的な黒騎士さんの強さは知らんが、まあ大体わかる。話だけ聞くなり七曜の騎士とは、ジータだとかばあさん側の人間だ。あの二人、特にジータが強烈すぎるせいでなんか微妙な印象しかないがね。ジータなんか緋色とか言う人と「遊んだ」と表現してたし。絶対普通なら死ぬかどうか激戦必至の戦いだつたろうに。あの娘にとつて戦いは最早全て生か死ではなく、遊びか相手とわかり合う手段とになっているな。フェザー君系だ。今頃どこで大暴れしとるんだか。

「そもそも黒騎士さん達は俺達追うほど暇じゃないでしょ」

「その通りだ。誰かの所為で酷い足止めをくらったからな」

「おつと蕨蛇……」

だが流石にこの人の睨みにも慣れてきたぞ。もう体は震えたりしない。恐怖無効、ふはは。

「……オルキスちゃんも満足？」

「うん……」

お茶飲んでお菓子食べて、お茶飲んでお菓子食べて、お菓子食べて……そりや満足でしょう。

思えばこの子との出会いが、ガロンゾでの騒動の始まりだった。その後変な約束をしちやったり、ガルダにさらわれたり、リッチと戦ったり、フェリちゃん仲間にしたたり、クロエちゃん仲間にしたたり、コルワさん仲間にしたたり……濃い日々であった。

「いいかい、食べるのは程々に。運動もしっかりして、けど脱走は流石にもう控えて、だけど大いに遊んで、それで黒騎士さん達には迷惑をかけないように。あと食べ物につられて知らない人についてたりしちや駄目だからね。あとは」

「だから保護者面をするな」

「あいたつ！」

お別れと思うと寂しいのと心配なので思わず色々言ってしまったが、黒騎士さんに頭を叩かれた。

「最後までまったく、貴様と言う奴は……」

「し、しかしですねえ、やっぱり短い付き合ひとは言え心配しちゃうのですよ。黒騎士さんもしつかり頼みますよ。結局貴方がこの子の保護者なんだから」

「なるほど、貴様私がしつかりしてないと思ってるわけだな？」

「そう言うわけじゃ、んががっ?! いふあ、いふあいつす?!」

頬を抓られ引つ張られた。緩い表情筋が更に緩くなるからやめてくれい。

「……貴様に言われんでも面倒ぐらいみている。口出し無用だ」

「あい……って!」

頬を伸ばすだけ伸ばされ弾く様に手を離された。こねられた気分だ、俺はパン生地ではないぞう。

「降りるぞ、これ以上待たせても時間の無駄だ」

「そつすね」

奇妙な休戦から再度敵対する関係へのカウントダウン。タラップを降りれば、帝国とそれに喧嘩を売った騎空団。

「団長君とはまたその内会うんじゃないかな? 僕らなんか別件やプライベートで動くときもあるし案外近いうちにさ」

「なるべく関わりたくない」

陽気なドラंकさんと辛辣なスツルムさん。この愉快的コンビともお別れだ。

口数少ない黒騎士さんは、案外人間味のある人であったと思う。

オルキスちゃんは、何か不思議な謎が多いが、しかし結局のところまだ小さい女の子だった。

七曜の騎士と傭兵と子供。こんな面子がエルステ帝国の最高顧問と仲間達である。と、*「こんな面子」*呼ばわりをしては「お前らはどうなんだ」と言われそうだ。

エルステ帝国と言う国への認識が変わったわけではない。急進的で過激な侵略国家、幼馴染殺し……相変わらずそんな印象である。まあ生き返ったけどね、ジータ。

しかし帝国兵だったユーリ君との出会いは「帝国の人間」への印象を変えた。彼のような兵士もまた多い。彼の隊の隊長さんだつてそうだ。そしてなによりも先日、俺の作つた飯を食う兵隊さん達は楽しそうだった。飯を食う時人は正直だ。素の人柄が出る。だからこそやはり国を作る人間が全てそうでは無いとも確信できた。

楽しそうに食べるドラंकさん、味を噛み締めるスツルムさん、見てる方が気持ちよいくらいに食べるオルキスちゃん。

出会いも食事なら別れも食事。お茶会はまあいい思い出だろう。結局黒騎士さんは何にも口にしなかったが。

思えば黒騎士さんが何かを口にしているのを見ていない。そういう意味では、この人の

本当の人柄と言うのを俺は知らないままだ。だが生憎そんな機会は暫く無いだろう。

「……ところで、だ」

「はい？」

珍しく黒騎士さんの方から声をかけてきた。

「先日、私に食事を作って置いてったな」

「あ、ああアレですか。すみません、ついででやっぱり作っちゃって」

「私はいらんと言ったのにな」

「やあ、すみません……」

「……美味かったぞ」

「え？」

「……美味かった、と言ったんだ。それだけだ」

……俺今お礼言われた？ 黒騎士さんに？ え、初めてじゃないのこれ。ポジティブな言葉聞けたのこれ初めてじゃない？ おいおい、マジかおいおいおい。

「あはは……ま、なんやかんやで楽しかったつすよ」

「また貴様はそんな事を」

実際楽しかったと思う。大いに苦勞もしたが、しかしオルキスちゃんとの出会いは楽しかったのは間違いない。

このまま何も問題は起きず、そしてこの騒動は終わるのだ。最後に黒騎士さんからお礼の言葉も聞けて、これ以上無い騒動の終わりだ。楽しく終了、コルワさんの言うならハッピーエンド。万事それでよし、素晴らしいじゃないか。

黒騎士さん是不愉快そうにしたが、俺の呟きを聞いたオルキスちゃんが俺達の前に出てくると振り向いた。

「私も……私も、楽しかった……」

黒騎士さんが息を飲んだ。

彼女は笑っていた。それは人形のようなものではなく、間違いなく心の籠った少女の笑顔だった。

「あ……っ」

だが次の瞬間、タラップの段差を見誤ったのかオルキスちゃんの片足がタラップを一段ずり落ち全体のバランスを崩した。大きくのけぞった彼女の体は後ろへと引つ張られる。

咄嗟に動いたのは、俺と黒騎士さんだった。

「オルキスちゃんっ!?!」

「オルキスッ!!」

団員達と兵士達の悲鳴が聞こえる。

手を伸ばした。俺も、黒騎士さんも同時に左右からオルキスちゃんを掴もうとする。しかしその手は空を切った。

俺は「しまった！」と叫んだ。間に合わなかったのか——だがしかし、何かおかしい。手を掴み損ねたのなら、俺達の前にオルキスちゃんが居るべきだ。しかし何故か居ない。

走馬灯の如く時がゆつくりと進んでいる気がした。きつと黒騎士さんもだろう。お互い奇妙な感覚を感じながら、「後ろ」を見る。そこには見事バランスを取り直し誇らしげなオルキスちゃんの姿があった。

ああなんだ、俺達が手を掴み損ねたのではなく掴む相手が素早く体勢を立て直したから距離がずれて俺達の方が落ちてるのか。流石脱走常習犯、バランス力凄いね。なんであれオルキスちゃんは無事だ。いやあ、よかったよかった。あはは、はは……。

「よかないわああああ——ッ!？」

「貴様っ!?! 何故こつちに……ぐうっ!?!」

「あいだっ!?! あ、だだっ! いったっ!?! うぎっ!?! ぎやああああ——っ!?!」

落下中タラップにぶつかり、黒騎士さんと衝突。ゴロゴロと勢いを増し、あるいは段差でバウンドしつつ俺達はタラップを落ちていく。ガンガンと黒騎士さんの鎧がぶつかる音が聞こえる。そしてこんがらがった俺に鎧がぶつかりとても痛い。

「うおおおっ!! 相棒達が宝玉の如くっ!!」

「言うとする場合か! はよ止めんとっ! コロッサス受けとめッ!!」

「駄目だ間にあわっ!!」

B・ビー達の叫び声が聞こえたが、それどころではない。ある程度長いタラップも転げ落ちるのでは一瞬だ。助けようとしてくれたのだろうか、あつと言う間に俺達はタラップを落下しきつて地面に叩きつけられた。

「いつつう~~~~っ!! あいっただだ……っ! そ、そこかしこ打った。くっそ、むち打ちになりそう……」

「ジミー殿大丈夫であります……あ」

「あ、ああシャルロットさん……すんません大丈夫です……」

シャルロットさんが俺を呼んだ。心配そうな声で、その声はどこか危機感と焦りの両方が強く出ている。心配してくれているのだろうか。

「ああまだクラクラする……そ、そうだ黒騎士さん!? 黒騎士さんどこです、大丈夫ですか!」

「……だんちよ。下、下見てみ下」

「下……?」

「うん、下(・ω・)」

クロエちゃんが気の毒そうな声で言う。下、そういうえば先程から両手に妙な感触がある。地面に落ちたなら、もっと硬い床があるはずだ。しかしなんか全体的に柔らかい。特に両手にいたつては、かなり柔らかい。こんな感触は知らないが、不思議と落ち着く柔らかさ。なんだかずつと揉んでいたい……よう、な………。

「……………」

「……………え？」

下を見る。目が合った。

そこには見知らぬ女性が居た。茶髪のえらい美人さん……しかし、ああだがしかしその鋭い視線、それだけで俺を殺せそうなその視線を俺は知っている。

思わず動きを止めてしまう。が、そのまま体重の所為で両手が沈む——下の彼女の「双丘」に。

「え、あ………えつと………その、まさか………」

「あつちやあ………最後の最後にやつちやつたねえ、团长君」

「………確かに星晶獣の問題は無かったな。星晶獣、は」

後ろから慌てて降りて来たらしいドラंकさん達の哀れむ声が聞こえた。

辺りを見渡すと、タラップの上から俺達の位置にまで点々と黒い甲冑のパーツが転がっていた。

まだ確定じゃない、違うと言う可能性に賭けたい。偶然ここに居た女性にぶつかってしまったのだと、この俺が乗っかってる彼女は「彼女」ではないと。

「あの、あの……」

「……何時まで、そうしている？」

彼女が口を開いた。その絶対零度の声はもう間違えようは無く、俺の下に居たのは正しく黒騎士さんその人だった。

タラップを一緒に転げ落ち、その衝撃で何故か主に上半身の甲冑が外れ、何でか俺が覆いかぶさり、更にどうしてか俺に「ダブルビッグマウンテン」を掴まれた黒騎士さんだった。

黒騎士さんだった。

「すみません、直ぐどきますっ!!」

起立からの気をつけ。身動きをせず直立不動、汗をダラダラと流し俺は黒騎士さんの行動を待った。他の団員、帝国兵でさえ彼女の動きを待っている。

黒騎士さんは、俺が立ち上がるのを確認するとゆっくりと立ち上がった。

「……」

「あは、ははは……」

甲冑は無く、兜もない。だが素顔が露になった事で、その威圧感はむしろ増したかの

ようだった。

殺気、怒気、闘気、鎧を失い溢れる素のオーラ。それら全てがダイレクトに俺に向かう。

「……違うんです」

「それじゃダメメンズや……」

搾り出した俺の声は余りにも情けなく、そしてカルティラさんの言葉が心に突き刺さった。

■ 六 面倒事を終えてイスタルシアを目指す星晶戦隊（以下略）。疲れからか、不幸にも黒塗りの騎士に追突してしまう。団員をかばいすべての責任を負った団長に対し、七曜の騎士、黒騎士が言い渡した示談の条件とは……。

■ 「……何が、違うと？」

「いやその、ね？ えつと……そ、それよりも！ お、お怪我は……？」

「……そうだな、幸い鎧のおかげか特に無いな」

不思議と、黒騎士さんの声は落ち着いていた。むしろ冷静、静かに、安らかに喋っていた。そこまで怒ってないのかな？ と、俺は淡い希望を抱く。

「そ、それは、よかった……」

「ああ、まったく」

「お、お互い大きな怪我も無いし……」

「そうだな」

「オルキスちゃんも無事だし……」

「その通りだ」

「よ、よかったなあ」

「ああ、よかったなあ」

「で、ですよね、ねっ！ あは、あはは！ よかったよかった！」

「貴様に胸を揉みしだかれた以外はな」

駄目だ、怒ってます。当たり前だよ畜生。

「ちよ、あんたら……！ あの上司めっちゃ怒つとるで……な、なんとかし」

「無茶言うな……あんな黒騎士殿見たこと無いんだよ……っ！」

「と言うか素顔だつて初めてだよ……っ！」

「美しい……」

「罵りたい……」

「オイ、シユヴァリエツポイノガ居ルゾ」

「馬鹿者、一緒にするな。あれはまだ素人だ」

「何ノダヨ」

外野の会話も入ってこない。死刑宣告を受けたような気持ちで俺は立ち尽くすしかない。

「ち、ちが……っ!」

「だから何が違う? まさか何もしてないと言うつもりか?」

「それも、違いますけど……ますけどっ!」

「ではなんだ」

「ほ、ほら! お互いに咄嗟にね!? オルキスちゃん落ちそうだったし、勢いが、あれで……あれが、あれして……偶然、偶然なんです! ノーカウントツ! 悪気無くて、全然意図したとかそんな事無くて! だって鎧取れると思わないし、そもそもあの状況で狙ってあんな……だから、だから……」

「……………」

「あ、ああ……うわあ……」

もう……どうしようも、ない。

「すいません、許してください! なんでもしますから!」

「ミンツ!」

「あつ!! だんちよの阿保、余計な……っ!!」

俺が悲鳴のような謝罪を叫ぶと、ミスラが驚きカルテイラさんが怒鳴った。何故にそんなに驚くのかと思ったのだが、俺の言葉を聞いた黒騎士さんの笑みを見て悟る。

「ほう? 今なんでもすると言ったな?」

「……あ」

造船、そして契約の島ガロンゾ。うっかり約束命取り。その事を身をもつて知っていたはずの俺は、またもうっかり馬鹿をした。

慌ててミスラを見た。ミスラは酷く申し訳なさそうに「ミンミ……」と小さく声を上げ、スローペースに回りながら俺と黒騎士さんを見守っていた。

「どうやら……今の言葉はミスラにより契約として確と結ばれたようだな」

「そう、ですね」

そのミスラの反応が答えだった。俺が自らの失敗を覚っていると、黒騎士さんはそれはとてもとても愉快そうに俺の傍により耳元で囁きだした。

「なんでも、なんでもか……不用意だな、ここがガロンゾであると言うのに。まったく不用意だなあ若き団長よ」

「あの、もう少しはな……離れ」

「だがこちらには好都合だったぞ」

耳元で黒騎士さんが囁くと、吐息で耳を擦られる。だが俺はそのこそばゆさを気にする余裕は無かった。

「なあ……若き騎空団の団長よ。わかつているだろうが、お前達の艇と違い我が艦の乗員数は桁が違う」

「は、はい」

「当然ながら日々消費される物資等金額は馬鹿にならないわけだ。しかしそれはしつかりと計画を立て調整するわけだが……何の因果かこの約一月まったく無駄な金を使う羽目になった」

「はい……」

「であれば、だ。足止めの原因を作った奴にその金を請求するのは……至極当然の事と思わんか、ん？」

「そ、それは……っ!？」

止めてくれ、そう言おうとした。だがこれ以上口が開かない。既にミスラの力が働いているのだ。

「考えてみる、幾らだと思う？ 貴様も食堂で食事を作っているからわかるだろう。あれだけの人数、食費だけでも相当な値段だ。それ以外にも燃料と消耗品の補給、艇は動かさなくても金がかかるぞ。さて一体幾らになるだろうなあ……？」

「あ、あうあう……」

「……くく、くくくつ！ そんな顔をするな。なに、私も鬼ではない」

その時の黒騎士さんの優しい声。俺はその声を聴いて一瞬希望を持った。安心して笑みすら浮かべた。

「ほんの1千万程度払ってくればいい」

速攻希望は砕かれた。

七 アディオス黒騎士御一行

「团长君も気の毒にねえ」

「ああ」

「まさか最後にあんな……ねえ？」

「ああ」

遠ざかるガロンゾを見ながらドラंकは哀れんだ視線を島に送る。スツルムはそれに生返事を返す。

二人は帝国戦艦に乗っている。無事に契約は完了、戦艦は動き出しついに彼らは島を発つ事ができたのだった。

「もーちよつと加減しても良かったんじゃないのかなあ」

「……一連の事で何かと溜まってたんだろう」

「最後まで感じに終わると思っただけどねえ」

帝国の方から先にガロンゾを発った。約束通り団長達はなにも手出しをせずに。

だが実際のところ約束を抜きにしても、これ以上の厄介事を避けるためと言う意味が大きい。仮に団長達を捕らえたり戦いになろうものなら、それこそ星晶獣が乱入してもおかしくは無かった。

ガロンゾに立ち寄る、あるいは近くに顕現する事がある星晶獣は、なにもミスラやガルーダだけではないのだ。彼らが知らないだけで星晶獣は直ぐ傍にいる。

「一応あれで多少は胸がすいたと言うことか」

「胸揉まれて胸がすいたと」

「お、」

「おつと、うっかり」

本人に聞かれてもしたら切り捨てられるような発言であった。ドリンクは口に手を当ておどけてみせる。

「けど僕が見た感じ多少どころかかなりスッキリした感じだったよ。あの人結構Sっ気あるんじゃないの？」

「知るか……」

「けど大丈夫かねえ、団長君」

「よろず屋も力になるようだ。気の毒に思わないでもないが、結局あいつにとって何時も通りなんだろう、認めたくないだろうが……あれでもな」

「なんだろうね〜」

次に会う時、果たしてあの騎空団はどんな騎空団になっているのか。ドラंकはそれが楽しみに思えた。

「……柔らかかったのかな」

「……」

「いってええっ!? ちよ、無言ではやめ、ったあああっ!?!」

空にドラंकの悲鳴が木霊した。

一方で戦艦内、黒騎士の執務室。

「見たか? あの時のあの男の顔を。絶望してすっかり魂の抜けた腑抜けの顔をしていた」

「……かわいそうだった」

「かわいそう? 馬鹿を言うな、あれは正当な要求だ。あいつも異論を唱えていない」
「それ、ミスラが約束したから……」

「その通り、だからこそ正当なのだ。むしろあれだけで済ませただけ感謝して欲しいものだ」

珍しく、実に珍しく黒騎士がオルキスと普通に会話をしていた。

部屋の窓辺に立ち遠くのガロンゾを見る黒騎士は、既に甲冑を装着しなおして表情は見えないが声は僅かであるが普段より弾んでいるように感じられる。

「第一かわいそうと言うのなら、私はなんだ。あいつと貴様の所為で足止めをくらい、無駄な時間を過ごし、神経をすり減らし、最後にはあんな目に遭った。こちらの方が余程“かわいそう”だ。しかし……ああ愉快だ。実に愉快だ。なんであれば、もう少し虐めてやつてもよかつたな。くくく……あいつめ精々苦勞するがいい、それで胃痛で胃に穴が開いてしまえ」

大声で笑いこそしないが、黒騎士は愉快そうだった。また七曜の騎士とは思えない程度の低い罵倒を口にした。実に奇妙な空間だった。

「……そんなに揉まれたの……嫌だった?」

「それはもう言うな」

「……結構長く揉まれ」

「忘れろ」

「……どんな感じ」

「黙れ」

しかし流石にあの状況を思い出すのは嫌だったのか、普段通りの凄みを出してオルキスを黙らせた。しかしオルキスの方は特に怯えもしていない。

ふと自分の胸と黒騎士の胸を見比べた。もう甲冑で隠れているが、あの時見た胸のインパクトはオルキスにとっても中々大きいものだった。

「……まだ、成長途中」

「品のない事を言うな！」

また怒られたので今度はぬいぐるみのねこで顔を隠し誤魔化した。

だがそんな黒騎士の様子を見て、「なるほど」と顔を隠しながらオルキスは内心合点がいった。あれはつまり一般的に言う「照れ隠し」と言う奴なのだ。そしてこう言う反応をするのを一言で言うとなんであったかを彼女はふっと思いつく。

「……初心？」

「晩飯は要らないようだな」

「ごめんなさい……」

食事に関しての罰は何よりも堪える。オルキスは素直に謝罪した。

これ以上あの出来事に関しては話題に出さない方が良く、流石にオルキスも思った。しかしこれだけは言っておかねばならないと口を開く。

「…………あのね」

「今度はなんだ」

黒騎士はいい加減辟易した様子だったがオルキスは続けて話す。

「あの時……手を伸ばしてくれた……」

「…………まあ、な」

「…………お兄さんと、二人で……助けようとしてくれた。……名前も、呼んでくれた……」

「あれは……」

「だから、だからね……ありがとう、アポロ……」

アポロ——黒騎士の本名。その名をオルキスが呼ぶ事を黒騎士は快く思わない。彼女にとって深い理由あつての事ではある。そしてそれを承知でオルキスは、その名を呼んで彼女へ礼を言った。言うべきと感じたからだ。

黒騎士は、オルキスを見た。その顔を見て、声を聴いた。

（何もかも、そのままなのに……お前は彼女と違う。だと言うのに……）

人形とは、結局のところ人形でしかない。それに情を持つても何時か失うだろう。自ら手放す事もあるだろう。それを失くす事を強いられる事があるだろう。

だからこそ、彼女はオルキスを“人形”と呼ぶ。

「礼など……」

必要ない、そう続けようとした。だが言い切れなかった。

『食事ぐらい一緒にとれば良いだろうに』

団長との言い争いの時に言われた言葉が頭に浮かぶ。まるで自分を非難するような目をした彼の幻影が横に現れたようだった。軽く手を振ると幻影は消え、黒騎士はそのまま席に深く座り黙ってしまふ。

やはり、返事はないかとオルキスは寂しそうな顔をした。予想は出来た事、しようがないかと諦め彼女も椅子に座り直し、ねこを抱きしめ寂しさを紛らわそうとした。そこそ人形のように、ジツと動く事無く。

「……晩の事だな」

「え……？」

だが黒騎士が再び口を開いた。もう今日の内は彼女から話しかけられる事は無いと思つたためオルキスは驚いた。

「私室での食事を考えている……お前も来い」

「……えつと」

信じられなかった。黒騎士から、アポロからそんな言葉が出る事がオルキスには、とても信じられなかった。

しかし間違ひなく、確かに彼女はオルキスを食事に誘つたのだ。

「いいの……?」

「勘違いするな。目を離して面倒をされても困るだけだ。なんならドリンク達も呼べばいい……その代わり、今日は大人しくしている」

「えっと、あの……」

「もつとも、私との食事が嫌ならそれでいいが」

「そ、そんな事無い……っ！ 食べる、一緒に……食べる」

「……そうか」

部屋の空気は、穏やかだった。今度こそ言葉は切れて、会話は終わる。しかし、それは今だけの事。きつと夕食の時、ドリンク達二人を交えた四人が多少ぎこちなくも穏やかに食事をし、そして会話を弾ませるはずだろう。

消えた団長の幻影がまた現れ「それでいいんすよ」と頷いている。それはただ黒騎士が想像しただけに過ぎない幻影だ。

(……別に絆されたわけでは無いぞ)

もう一度手で幻影を掃う。「ああ……」と情けない声を上げてそれは消えた。

全空一奇天烈な騎空団とその団長の出会いは、黒騎士とその周りの関係を確実に変え始めた。



八 一千万ルピの男

■ 借金が、増えた。

「それでは、我々も島を発ちます」

「皆さま、本当にお世話になりました」

「なあに、俺達は仕事をしただけよ。礼を言われるような事じゃねえや」

借金が、また増えた。

「ユグドラシルも良かったな。色々勉強できて」

「——！」

借金が、更に増えた。

『ガルーダ、外はどうだった？』

「一回り飛んだが、先に出た帝国艦の姿も見えぬ。もう艇を出しても良い頃合いじやろうて」

「だな、ぼちぼち出航だぜ相棒」

借金が、更にまた増えた。

「……ねえ、やつぱりもう少し休ませてからでもいいんじゃない？」

「ああ気にしねえでくれノア。相棒何時もこうなんだよ」

「何時もなんだね……」

「まあ今回はちいとばかり、あれだったけどどう……ほれ相棒、しっかりしろ！ そろそろ島出るぞ」

借金が、借金が……ふわわ。

「あーもう鬱陶しいっ！ こうすりやいいのよっ！」

「ぎゃあっ!？」

突如頭に激痛が走る。と言うか噛まれてる。こ、この感じは知ってるぞ。

「あだだっ!？ メドウ子でめえ、なにしゃがででっ!？」

「腑抜けてるアンタが悪いんでしようが！ シャキツとしなさい、団長でしょ!？」

心ここにあらずであつた俺の意識を目覚めさせたのはメドウ子であつた。至極真つ当な事を言われハツとする。気付けば俺は他の団員達とエンゼラの前に立ち、そして周りには俺達を見送りに来たノアに親方さんや職人達、ガロンゾでお世話になった人々が集まつていた。

「そ、そうか黒騎士さん達と出航時間ずらして出るんだっけ。すみません、ちよつとポーつとして」

「気にすんな。むしろよくそれで済んだと思うぜ俺あ」

「普通の人間なら二、三日は寝込みそうだものね」

親方さんとノアがとても哀れんで俺を見ている。寝込めるなら寝込んでしまいたいが、そんな事では何も解決しないのが借金だ。

「シエロさんもほんとすみません……」

「いえいえ」

この場には当然シエロさんもいる。一連の事に最初からお世話になった人だ。そしてまた今回もお世話にと言うか、迷惑をかけてしまったと言うか……結局、今回も俺はシエロさんを頼るほか無かったのだ。

黒騎士さんに要求されたもの、慰謝料一千万ルピ。正直あの値段を告げられた時から俺の記憶は曖昧だ。慌ててカルティラさんが黒騎士さんに色々と言文を言い交渉を持ちかけたらしいが、既に俺の凡ミスでミスラの力が及んだ約束は、最早カルティラさんでもどうしようもない状態だった。

俺は黒騎士さんにどうあっても一千万払わないといけなくなった。しかもあの後黒騎士さんは、俺へとどめとばかりに「近日中にな」と言って去った。そうなるともう後は何時もの様に頼れるのはシエロさんしかいない。

放心状態でシエロさんと会い、事情を説明し、そしてシエロさんは驚いた様子でしかし俺を助けてくれると約束してくれた。

正直金を借りようとは思ってなかった。一千万、そんな金いくら借金だとしても出し

てくれるわけがない。そう思っていたが彼女は何時もの様に領き黒騎士さんに払うお金を立て替えてくれたのだ。

まったくもって嬉しい話、そう嬉しい話……。

「首輪がつよなつたわ」

「1千万の首輪か」

『最早拘束具だな』

「言うな……」

カルテイラさんに続いてシユヴァリエとリヴァイアサンが好き勝手言う。

わかっている。俺だってなんも嬉しい話じゃないって事はわかってるんだ。払えなかったら払えなかったで、黒騎士さんに何されるかわからんから確かに助かったのだが、結局ただ借金が増えただけだってわかってるんだ。

「気に病むな主殿。首輪をつけて戯れるのもいいぞ主殿」

「何の話してんだてめーは」

「うふふ、ご安心を团长さん。お金も何時もの様にある時払いで結構ですよ。こちらの方でもお役に立てる依頼を幾つか用意いたしますから」

それが逆に怖いのですが。その依頼って言うのも真面な依頼何だろうか。結構な額の金を稼ぐ以上楽な依頼が来るわけないのは承知だが……。

「詳しい事はまた後日にでも。それまでは今まで通りの依頼を紹介させていただきますねえ〜」

「それはそれで怖い」

今まで通りの依頼としても桁違いの魔物の群れだったり、盗賊団のアジト制圧だったり、星晶獣出てきたりするじゃん。

いやしかし、何であれ助かったのは事実。ほぼ二つ返事で1千万立て替えれたシエロさんの謎が益々深まったが、それは今は忘れよう。

「イスタルシアは遠退いたが、しかし俺は諦めんぞ！ 必ずや借金を無くし、重石を外し星の島を目指すのだっ！」

『旅の目的が滅茶苦茶だな』

「マア最初カラコンナンダツタシナ」

はい、うるさいよそこ（笑）二人。

「と言うわけで俺達は行きます。さしあたり既に請け負った依頼を消化して少しでも懐を豊かにします」

「そっか、何であれ君が元気そうで何よりだよ」

ノアはそう言ってくれる。そうだ、これは決して空元気ではない、頑張ろうと言う気合の表れなのです。

「坊主、苦勞も多いだろうがあんま一人で頑張りすぎるなよ。お前さんにや仲間も居るんだ」

「おやつさん……」

「金の事あ力にはなれねえが、艇の事なら話は別だ。困った事があれば何時でも来い。一緒に艇を仕上げた俺達だってもう仲間みてえなもんよ」

「そうだけ団長さんよ！ 困難なんてスパツと断ち切っちゃまいて！」

「鋸サム！」

「あんたの鑢がけ、最高だったよ」

「鑢のサンダ！」

「おめえの釘打ち……真っ直ぐで良かったぜ」

「釘打ちジョニーッ！」

「しよ、職人の皆さん二つ名持ちだったです」

「なんか意外ですね」

ブリジールさんとユーリ君が驚いている。彼女達は職人達と俺ほど付き合いは無かったから知らなかったか。みんな凄腕の木工達だぜ。

「サム達だけじゃねえ、俺達も同じ気持ちさ！」

「また一緒に仕事しようぜ！」

「顔出すだけでもいいからよー」

「金は貸せねえけど、飯ぐらい奢ってやるよー」

「み、みんなあ……ううっ！」

俺に船大工としてのいろはを教えてくれた人達。

陽気な鋸サムの鋸はまるでバターを切るように木材を切って見せた。

責任感のある鑪のサンダーが研磨した木材は、むらの無い完璧な仕上がりだった。

クールな釘打ちジョニーの釘打ちは正確無比で一寸の乱れも無かった。

厳しくも優しい親方さんは、何時も皆を見守りの確な指示を出した。

そうだ、俺はこの島に来て何かを失ってばかりではない。得たものも大きかったのだ。

新しい艇、新しい仲間、新しい出会い。それは確かに素晴らしいものだった。黒騎士さん、彼女達との出会いもまたきつと意味があるものだったはずだ。そうでなければ、きつと出会う事は無かった。黒騎士さんとも、オルキスちゃんとも……。

それでいい、今はとりあえず、それでいいのだ。

「ありがとうございます……っ！ 俺達行きます……皆さんが造ってくれた艇でっ！」

「ああ、何時でも来いよー」

「はい……また来ます、また会いに来ます！」

親方さんと握手を交わす。この大きな手を俺はきつと忘れない。

「団長さん」

そしてまたもう一人、忘れてはいけない一人。

「ノア、お前にも世話になったよな。最初は変に警戒して悪かったよ」

「いいんだよ。それよりもこれからの旅も気を付けて」

「ああ、ありがとう。ところで、そっちはこれからどこに？」

「そうだね。暫くガロンゾで休んで……また気の向くままにね。きつとまた会うだろうから、その時はよろしくね」

「こちらこそ」

彼とも握手を交わす。これでガロンゾでやるべき事は終わったのだ。

「さあ……行くのみんなっ！」

「おうよ！ 借金を返すためにな！」

「イスタルシア目指すんだよっ!!」

間違つてないけど間違つてる目標をB・ビーに言われ、みんな「あらら……」とずつこけなんだか場の締まらない旅立ちになってしまったのだった。

ひでえや。

■ 九（笑）と癒しの星晶獣が8体（+α）いて、吐く大酒飲みドラフトと、格闘馬鹿と、回る哲学者と、ちびっ子騎士団長にイケメン騎士と、頑張り騎士と、名の知れた商人相場師と、始終笑い続けるキノコキチハンターと、歩く天災のファッシュョンクレージーと、腐女子絵師と、生真面目ナイトと、スリルとお宝大好きコンビと、世界で一番可愛い錬金術師様に加えて、蛇っ子&のじゃ娘と、幽霊娘と、ギャルと、売れっ子デザイナーが加わった一行に何時の間にかついて来たマスコットの歯車のいるアットホームで団長の胃痛と借金が絶えない騎空団です

■ 「なあなあ聞いたかよ。新しい情報がない」

「星晶戦隊（以下略）だろ？」

「つて、なんだ知ってたか」

とある島のとある騎空士二人組。何時もの様に、平和にこの二人は世間話を始めた。

今日は情報を持ってきた相手に対し、もう一人も既に情報を得ていたらしく話を振った方は、少し残念そうであった。

「いんや、仲間増えたって言うのを聞いただけさ。詳しくわな」

「そうだったか。だがその通り、ちよつと前にな」

「確かあ……翼生やした幼女だっけか？」

「ああ、だからケモナーロリの疑惑が深まったぜ」

「それに加えてエルーンの女が三人だっけ？」

「そうそう。ただどうもその三人もただもんじゃねえとよ」

「てーと？」

二人は更に話し込む。ケモナーロリ疑惑も大概酷いが、それ以上にまたおかしい疑惑の情報が出て来る。

「一人は普通の女の子らしいが、どうも変な動物引き連れてるとかなんとか」

「ふーむ、獣好き……」

「もう一人は強いかは知らないが、ギヤルらしい」

「ほうギヤル……ギヤル？」

「最後は噂じゃあ売れっ子デザイナーのコレとか」

「なんでだよ」

「ほんとにな」

少女とギヤルも可笑しいが、何故服飾デザイナーが？　どんな情報を集めてもそれだけは未だはつきりとはわかっていなかった。

「あとな」

「まだいんのか!？」

「いや仲間つつーか……なんか団長の坊主の傍によく歯車が飛んで回つてるとかなんとか」

「……………なにそれ」

「いや、まったくの謎だわ」

ある時期から団長の周りで目撃される掌サイズの歯車。何故か宙を浮き、団長の周りをクルクルよくついて回っているらしい。

あまりに不思議な存在に、そつちに目が行つてあまり団長が認識されていないのだからそんな事を見る側は特に誰も気にしていなかった。

「つーかエルーン一気が増えたな」

「しかも女ぼっかな」

「……………あれか?」

「エルーン女性といやあ……………」

二人は直ぐにある事に思い当たつたらしく、顔を見合し同時に口を開く。

「腋ッ!」

「フェチッ!」

同じ意見であるとわかり、二人は大声で「Y E A A A H」と叫ぶと熱い握手とグータッ

手を交わした。

「いや、まああくまで噂である程度だけだな」

「噂で予想でしかねえよな」

「とは言えこれで巷での噂は「ロリコンの年上巨乳好きで、幼馴染属性のホモの可能性がある女装っ子好きの腋フェチケモノ」となるのか」

「笑うしかねえわっ！」

「それな！」

「……けどさ。腋、いいよな」

「お前……」

この様にしてまた奇天烈な噂を広めた団長。今日も今日とて「ジータと愉快的仲間たち団」と並んで世間の話題をさらったのである。

そして一方でそのジータ達であるが、彼女達もとある島とあるゴシップ記事の乗る大衆紙を偶然入手。そこには『噂の騎空団団長、七曜の騎士と乱痴気騒動!』と言う見出しと共に一部事実を交えつつもある事無い事、“あんな事”や“そんな事”が書かれており、それを見たジータの機嫌とオイゲンの表情が大変な事になった言う。

そして最後に、場所はエンゼラ錬金術実験室――。

(やっぱりな……)

日も沈みランプの明かりだけが部屋を照らす中、部屋の主カリオストロが薬品を回しその中に浮かぶ一本の糸から様々なデータを得てそれを紙に書き記す。そしてそこから一つの実験結果を導き出していった。

(最初にあつた時からなんか引つかかったが……オレ様が寝てる間に、こんな命が生まれたか)

得た結果に満足したのか、そのデータを全て記憶した彼女は用済みとばかりに紙を燃やし処分した。そして薬品から取り出した一本の糸——薄い灰色にも似た水色の髪の毛。

(部屋に來た時に一本だけ拝借したが、黙って女の髪を引っこ抜くなんて不躰だわな。すまねーなオルキス)

オルキスがこの実験室に現れた際、彼女の頭を撫でたカリオストロはさり気なく一本だけ気付かれないように髪の毛を拝借していた。しかし今はもうその髪にも興味を失い、先ほどと同じように燃やしてしまう。

(どうも気になって調べはしたが……わかってしまえばそれまでか。あの連中があの後この空の世界でどう生きて來たかなんて大して興味もねえしな。それよりも……星と空、二つが混ざるあいつと坊主が會つた。過去よかこれから、今後どうなるのか……そつちを知る方がおもしろえ)

時に関わり、時にはただ眺め行く末を観察する。それもまた一つの愉悦である。判明した事実を団長には隠し、カリオスト口は笑みを浮かべ実験室を後にしたのだった。

少し違う空編 Ⅱ

スープが冷めない距離ぐらいズレた空Ⅱ

■ 一 もしかしての空Ⅱ

少年老いや早く学なりがたし、あるいは、光陰矢の如し。あ、いや……ちよいと二つの意味は違うか。まあ誰が言っただかは知らんが。

ようは時間が経つのは早いもので、我ら「私とお兄ちゃんと愉快な仲間たち団」の旅も色々あつと言う間だ。

星晶獣倒しては俺が巻き添えになり、魔物を倒しては俺が巻き添えになり、悪党を倒しては俺が巻き添えになり、たまにラカムさんが巻き添えになり、そして意味も無い巻き添えがまた俺を襲う。

そんな日々を今日も俺は過ごし――。

「ひえええ――っ!?!」

「お、お兄さんどうしたんですか!?!」

とある島の港に寄港中。日々ジータの無茶や魔物や星晶獣等相手に立ち回る俺達騎空団にとつては、久々の休暇である。じゃあ体を休めるかと言うと中々そうもいかない。肉体労働ばかりが騎空団にあらず、俺には事務仕事がある。

物置状態の書齋で古い依頼の書類整理してたら依頼の時に起きた巻き添えの記憶がよみがえり思わず奇声を上げてしまった。

一緒に書類整理を手伝ってくれていたルリアちゃんが心配してくれる。申し訳ねえ。

「ああごめんよルリアちゃん。ちよつとトラウマが……」

「ま、またジータの事ですか……？」

「そうですねです」

「あはは……えつと」

流石付き合ひも長くなつたもので、ルリアちゃん直ぐにジータの事とわかつたようだ。だからこそ言葉に詰まるのが実にジータらしいと言うべきか。

「この依頼の時俺は吹き飛び、この依頼の時は落下し、こつちの依頼の時はラカムさんと共に爆発した……」

「えつと、えつと……はわわあ……」

「うん、ごめん。ただの愚痴なんだ。ほんとごめんよ」

「こんな会話も日常茶飯事。そして――」

「おにい——ちゃんっ!! 書類整理おわったあ——!?!」

「はわっ!?!」

「はい、ノックしようねー」

「あ、ごめんね?」

問答無用で書斎を開けて来るのは我らが団長ジータである。

「んで、どうしたジータ。まだ仕事は残つとるんだけど」

「それじゃ終わつてからで良いんだけど外で手合わせしない? もうちよいでトーマ

ンター極めれそうなんだけど」

「ねえ君つて仲間でトーマンターの技試そうとしてるの? え、なに? やだ怖い」

“苦しめる者”の名を冠するジョブトーマンター。特技は拷問。んなジョブを極めるための手合わせ相手に俺を選ぶな。

「お前あの装備着ると笑いなながら「爪を剥ぐ」つて言いだすからやだ」

「んもう! 相手次第だよ!」

「さらつと怖い事言うな」

「それにちゃんと手加減するに決まってるじゃん!」

「爪を剥ぐのに手加減もくそもあるか」

「そこはこう、先つちよだけ」

「余計にこえーよ!? なにお前もうトーマンターの気分入ってるの!？」

衣装変えるだけで簡単に性格が変えられるジータ。最悪武器を持つてるだけでもジョブの気分に入り込むので危険だ。

「むう〜……だってこんなのお兄ちゃんしか頼めないもん……」

「それは……あーまあ、うん」

それは確かに、である。間違つてラカムさんとか相手に選ばれても困る。

「別にしないとは言つてない。お前が強くなるのは悪い事じゃないからな」

「じゃあー!」

「今度な、相手は今度してやる。お前との組手は念入りな準備がいんだよ」

「なによおく星晶獣と戦うわけじゃなし」

「君相性次第じゃ星晶獣ワンパン出来ちゃうの自覚してる?」

普通居ないからねそんな人間。星晶獣相手にしてる時の俺とルリアちゃんの重要な役目ってお前のストッパーである事忘れないでくれ。手加減抜きでボコボコにされた時の星晶獣を吸収するルリアちゃんの申し訳なきような顔ときたらね、もうほんと申し訳ないって言う感じなんだから。

「とにかく組手は今度」

「ブーブー」

「子豚かお前は……いや、だが来たなら丁度良い……はいギター、君の役職を答えなさい」

「え!? や、役職って……あ、団長ですが!」

急に俺に問いかけられ驚いたギターだが一応直ぐに言えたようだ。

「はいその通り。君は団長なのです。この【私とお兄ちゃんと愉快な仲間たち団】の団長ね」

「むふふんっ!」

ええい、ドヤるな一々。

「んで、団の団長である以上君には相応な仕事があります。はい何でしょう」

「依頼を受けて困ってる人を助ける!」

「正解、だけでもう一つ」

「もう一つ? えっと……魔物を討伐する!」

「間違っちゃないが違う、もつと別」

「別? じゃあ……悪い人をボコボコにするっ!」

「違う……」

「星晶獣と戦う!」

「違う……っ!」

「帝国をボコボコにする！」

「違うっつーの、戦いから離れんか!? オールシーズンベルセルクかお前は! 書類だよ、書類! 事務仕事!」

「うげえ……」

俺が書齋机をバンバン叩くとジータは露骨に嫌そうな顔をした。

「それはお兄ちゃんがやってよお〜」

「今の今までやってたんだよ! ルリアちゃんアレをここに」

「は、はい!」

ルリアちゃんが書棚から多量の書類を持ってくる。重ねると手で持っているルリアちゃんの顔が半分隠れるほどだ。

「さあさあ見たまえよこの書類を」

「え、あの……お兄ちゃん、これは……」

「主にシエロさんに提出する団長印の必要な書類だ」

「ぜ、全部っ!?!」

「Exa c t l y」

そのとおりでございます

「うわわっ!」

書類の山が自分のものと分かるや否や、ジータは踵を返して部屋から出ようとしたが

そうはさせんぞこの小娘が。

「てめえ逃がさんぞ！」

「ひゃあ!？」

すぐさま首根つこを掴みあげる。

「お前いい加減この書類片付けろ！」

「や、やだあゝゝつ！ こ、今度やるからあ！」

「前もそう言つて結局やらんかつたらうが、ほんと事務仕事嫌いだなお前!? 書類読ん

で印押すだけなんだから今日やれ！」

「量がオカシイよ、量が!？」

「おのれが溜め込むからだろうがっ！」

「印押すだけならお兄ちゃんでもいいじゃん！」

「団長としての責任を果たせとゆーとるんじゃ！ 書類整理や筆記はやつてやるが、せ

めて最終確認ぐらいはやれ！」

「机に向かつてると頭痛くなるんだもん……」

「お前錬金術師のジョブ極めてるだろう!? 頭は良いんだからやりなさい！」

「錬金術は戦いで使うから飽きないけど、書類は頭使うから飽きるんだもんっ！」

「つべこべ言わねえでやるっ！ ルリアアちゃん、そこの椅子引いて！ こいつ座らせ

るっ!!」

「わ、わかりました!」

「んにやああ——っ!? 仕事させられる——っ!」

ジータを羽交い絞めにして仕事させようとドツタンバツタン大騒ぎ。ルリアちゃんは「はわわ」と右往左往。そんな中書齋の扉が今度は丁寧にもノックされるのが聞こえた。

「入ってどうぞー!」

「どうぞ、つて……何騒いでるのよあんた達……」

「兄貴大丈夫かよ」

入ってきたのはイオちゃんとい、そしてカタリナさんの三人だった。

「君達、何を狭い部屋で騒いでるんだ」

「カ、カタリナさん助けてえ!」

「あ、コラ逃げんな!」

三人が入ってきた事で気が緩んだ俺の隙を見てジータが逃走。素早くカタリナの後ろに隠れた。

「おいおい、何事だこれは」

「お兄ちゃんが私に仕事をさせようとしてっ!」

「……いや、なんで逃げてんのよジータ」

「ちゃんと仕事しようぜ」

「あれえ!」

まったく当たり前の事をさせようとした事を知り、イオちゃん達はジータを冷めた目で見た。

「ジータ……また書類溜めてんのかよ。前もそれで一夜漬けになつて泣いてたじゃねーか」

「だつて文字とにらめっこしてもつまらないんだもん……」

「生きる上で必要な要素殆ど戦いに割り振つた人間の末路みたいな事になつてるわね」

「イオちゃん辛辣だよつ!」

イオちゃんつて時々キツイ一言が出る事があるな。

「まったく……それで御三方は何用で?」

「そろそろ昼食の時間だから呼びにな。大分部屋に籠つてたろう?」

「今日はお昼お兄さん当番でしょ?」

「おっと」

そう言われてもう正午近い事に気がつく。書類の整理に集中しすぎたらしい。

「ごめんルリアちゃん、お腹空いたよね」

「いえ、全然だいじよ……」

大丈夫と言い切る前に小さなお腹から、グウと小さな音になる。あらら、と思わず漏らす。

「はうう……こ、これはあ、そのお」

「いいよいいよ、俺もお腹空いたからね。何作ろうかねえ」

そう言えば氷魔法で冷凍させた白身魚があつたな。やたらジャガイモもあるし、フライにして出すのも良いだろう。後はソーセージとトーストや目玉焼き作るか。

「それと手紙が届いていた。食堂のレターラックに入れてあるよ」

「そりやありがとうございます」

手紙は依頼書も来る場合も多いので重要だ。だがまずは腹を満たすのが優先である。ルリアちゃんを空腹のままには出来ぬ。

「せいじや飯作るかあ」

「わーい！」

「おう、露骨に喜んで誤魔化したつもりだろうが話は終わってねえからなジータ。飯食ったら書類整理だ」

「えっ!？」

え、じゃねえよ。

結局食堂に着くまでブーブー文句をたれるジータだった。

■ 二 お手紙書いたよ（by いろんな組織、集団、個人）

「ごちそうさまでしたー！」

「はい、お粗末様」

食事が終わり満足げなルリアちゃんを見て微笑む。本当に食事の作り甲斐がある子だ。

「美味かったぜ、相変わらずプロの店に負けねえ味だった」

「褒めすぎつすよ」

こちらも満足してくれたのか、オイゲンさんが褒めてくれる。

「それに今日はルリアちゃんも手伝ってくれたんですよ。ポテト担当です」

「えへへ、頑張って作りました！」

「オイラだつて頑張ったぜ！」

ポテトは切つて揚げるだけとは言え油断すると火傷が怖い。だが最近ルリアちゃんも料理の手伝いが慣れているので結構任せられるレベルになつてゐる。ビイも補助を買つて出てくれるので、コンビであればもう大丈夫だろう。

「さて、ではお手紙の確認でもしますかね」

団員が一堂に集まる場所と言う事で、食堂談話エリアにはレターラックを設置してある。その俺当てるの棚から束ねられた手紙や書類を取り出す。束ねてあるバンドを解き、差出人を確認すると殆どはシエロさんからの依頼関係の書類だった。手早くペーパーナイフで封を開けて中を確認する。

「シエロさん経由の依頼書と何人かは個人からの依頼か、急ぎの奴は無いな」

「依頼以外にも結構届いたのね。他は何が来てるの？」

依頼関係は後でジックリ読むため、レターラックの依頼の棚へと入れる。それでも何枚か手元に残る。興味があるのかイオちゃんが残った手紙についてたずねてきた。

「こっちは普通に手紙とかだね。これはランスロットさんからだ。近く寄るなら遊びに来て欲しいとき、ひよこ班の皆も会いたがってるよ」

「そういや、あいつらとも暫く会ってねえもんなあ」

「ひよこ達がジータと合同訓練してバテバテになってたのが懐かしいな」

「あんなの準備運動だよ」

テンションMAXで将来性あるひよこ相手にワクワク状態でクリユサオルになったお前と10本連続本気組手は準備ではなく本番と思うの俺。結局途中から俺やジークフリートさん達も混ざっての大乱闘と化したか。

「次こそはバテずに組手を終わるって頑張ってるってさ」

「嬢ちゃんを基準に頑張っちゃダメだろ」

オイゲンさんの言う通りである。

「アーサー君にも会いたいし、今度寄ってみようかね」

「それで他の手紙は？」

「えー……これはテレーズさんからデュエルの観戦招待状と食事の誘い、アンスリアさんからは舞の舞台の招待と食事の誘い、イルザさんからも新米の訓練相手になって欲しいって言うのと食事の誘い、シルヴァさんは銃をカスタムしたから調整のための模擬戦依頼と食事の誘いで——」

「誘われてばっかじゃないのっ!？」

飯の誘いばかりのためかイオちゃんちゃんが呆れて叫んだ。

「いやあくなんか悪いよねえ。レストランの予約とか面倒はあつちでしとくとか言われちゃうし」

「いや、そこじゃないわよ!？」

「うう……お、お兄さん人気者ですう……」

「お兄ちゃん駄目だよ！ 招待状とか訓練は口実だよ、狙われてるよ、手ぐすねを引かれてるよ、特にイルザさんとシルヴァさんは飢えた獣だよっ!？」

「お前二人に絶対言うなよそれ」

なんでか知らないがジータ達にやたら反発を食らった。カタリナさんも複雑そうな顔をしている。

「イルザさんなんかスイーツ巡りが趣味って聞いて御菓子作りに『組織』に遊びに行くから気に入られちゃうんだよ！ 迂闊だよ！」

「けど喜んでくれてるよ？」

「そりゃ喜ぶよ……っ!!」

「俺も色んな島の名物紹介してくれるから助かるんだよなあ。レシピ増えるし」

「この反応は反応であの人達が気の毒に思えるわね」

「坊主の奴ご近所付合い感覚としか思ってないからな」

ロゼッタさんとオイゲンさんもなんか言ってるが、密な付き合いは大切だ。イルザさん達『組織』には助けられもしている。持ちつ持たれつだ。

ジータはまだブツブツと言っただけ不満げだった。

「うぬぬ、安心できるような出来ないような……」

「何言ってるんだお前は……後はフライデーさんからはプレミアムフライデー金曜会議出席の案な……だから同僚になった覚えねえよ!？」

フライデーさんからの手紙を机に叩きつける。

「フライデーってあのエビの人じゃない……お兄さん、まだ付きまとわれてるの?」

「俺のハードワークを見過ごせないそうさ。原因であるジータに戦いを挑んでエビごとボコボコにされたのに懲りてないらしい……エビでどうにか出来んならしてみろっちゆーの。熱意とあの人の作るエビフライの美味さは認めるが。それと、シエテさんからは十天衆召集協力をお願い……自分でやれよ!？」

また思わず手紙を机に叩きつけてしまった。

「頭目だろうが、ただの騎空団に何頼んでんだあの人は!？」

「ただの騎空団って思われてないのよ」

「と言うか兄貴が頼られてんだよ。いっぺん十天衆の召集手伝ったら一度で全員集めちゃったろ」

「あれは……ソーンさんが「みんなでお茶会とかしたい……」って凄いいしょんぼりして言うから……」

あれ大変だったんだからな。元から集まり良い人や菓子や食いもんで釣れる人は良いが、それ以外の人集めんのは、それはそれは苦労した。特に武闘派勢だ。奴等には後日手合わせを確約させられ地獄を見た。もうもうやりたくない……。

「にしても相変わらずの人脈ね。それも騎空団宛でなくて、お兄さん宛て言うのがまたなんとも」

「うふふ、本当に人気者ね」

「何人かあんま嬉しくない差出人がいるけども……」

ロゼツタさんは褒めてくれてるのだろうが、フライデーさんからの手紙毎度過激な勧誘で締めくくられてるので疲れる。

「団の事務関係を全て君がやってるのを分かってるんだらうな」

「聞いたかジータ、お前が事務仕事を一切せんからだ」

「えへへ……」

プフープフーと下手糞な口笛で誤魔化すジータ。だが誤魔化せていない。

「後は……ああ、これヴィーラさんだ」

「ほうヴィーラから……」

差出人の名を読んだらカタリナさんが意外そうに反応した。

「私でなく君宛てとは珍しいじゃないか。何か用事かな？」

「いや、ただの手紙ですよ。前からよく手紙やり取りしてますから」

「ああ、そうなのか。前から……前から？」

「ええはい、前から」

何気なく話したのだがカタリナさんがギョツとして俺の方を見た。それどころか他の皆も俺の方を驚いた表情で見ている。

「な、何か？」

「いやいや、兄貴何時の間にあの姉ちゃんど手紙のやり取りしてたんだよ」

「何時の間につて……最初にアルビオン行つてからだけど」

「思いつきり最初じゃないの!？」

「あれ……言つてなかつたつけ？」

「き、聞いてないですよ！」

「ホントだよ初耳だよ寝耳に水だよ!？」

てつきり知つてると思つていたのだが、どうやら話そこねていたらしい。

「そりゃあ申し訳ない、別に隠すつもりはなかつたんだだけど」

「やあ別に責めるつもりはねえんだがよ。坊主、あの姉ちゃんに、その、なんだあ……酷

い目に遭わされてたろ」

「あの時は本当に申し訳なかつた……」

「いやカタリナさんの所為つてわけじゃないけども」

「それでよくまあ手紙なんてやり取りする気になつたつて思つたんだだけどよ」

「まあ……酷い目に遭つたつちやあいましたがつ……」

■ 思い起こすのは、この旅を始めて五つ目に立寄つた大きな島、城砦都市アルビオン。そこでの騒動のこと——。

三 出会った時から敵認定

まだ帝国とのいざこざが混迷極まる頃、一度帝国から和平を提案された事がある。その際話し合いの場になったのは城砦都市アルビオン。その島が大きな士官学校でもあり、カタリナさんもここの出の騎士であった。

ぶつちやけ帝国からの和平の提案なんぞなんにも信用してなかった。和平の赦免状も出たつちや出たがあんま意味無かつたし。まして相手はエルステ帝国少将のフュリアス、簡単に約束破りそう筆頭である。

それよかこの時の思い出として重要なのはヴィーラさんだろう。

ヴィーラ・リーリエ。アルビオン領主——今では頭に「元」がつく。

カタリナさんとヴィーラさんは、学生の時の先輩と後輩の関係になる。カタリナさんは、島に到着するまで自身がアルビオン出身と言う事を話していなかったもので、二人が知り合いである事に驚いたのと言うまでも無く、若くしてヴィーラさんが領主である事も驚いたものだ。

にこやかな笑みと柔らかな物腰が如何にも領主らしかった。だが今思えば、あの時からどうも光の消えたような瞳で俺は睨みつけられてた気がする。

帝国との話し合いなんかも立会人として一緒にいてくれたヴィーラさんは、城で何か

と世話をしてくれた。休む部屋を貸してくれただけでなく「ささやか」と言いながら立派な宴を開いてくれ、助かりもしたが何かと大変であった。

アルビオンの騎士達、他国の有力者達。本当に俺達のために開いてくれたのか疑ってしまうような面子がその宴に出席していた。

ジータと俺は、団長副団長としてそれらの面々への挨拶まわりが重要な仕事だった。この時から既に我々の騎空団は何かと話題にはなっていたので、どうしても「是非色々話を聞きたい」と言う人が多かったので苦労した。団の名が売れるのはうれしいものだが、その名がよりにもよって「私とお兄ちゃんと愉快的仲間たち団」と言うのだから気持ちは複雑である。

また途中ジータが飽きて何時の間にか姿を消してパイ達と飯を食っていたのは許さん。

何とか社交辞令飛び交うの嵐から解放された俺は、同じく有力者達との挨拶を終えたヴィーラさんとカタリナさん達に合流し改めて色々話をしたのだが――。

「ご苦労様です。副団長さん」

「すまない、面倒な事を任せてしまった」

「いいえ、二人にも積もる話があるでしょうし。それに、これでも副団長ですからね。今後の練習と思えば。とは言え……なんとも、慣れませぬね」

「いえ、大變御立派でしたよ」

これもまた社交辞令。流石に嘘ではないだろうが、こんな社交界とは無縁の俺が右往左往している姿は、6年も領主としての責務を果たしていたヴィーラさんから見れば子供みたいなものだったろう。

「お二人はお話は出来ましたか？」

「いやあ話は尽きないよ」

「お姉さまがアルピオンを発たれエルステ帝国の軍へ入られてから随分経ちましたから」

「6年か……あつと言う間に感じるが、やはり長いな」

「ええ、本当に……」

二人は大變親しい間柄だったと聞いた。離れていた6年の時を埋めるには、この立食の宴だけでは短すぎるだろう。二人の表情はしみじみとして再会を喜んでいる風に見えた。

だが一方で、カタリナさんには気まずそうな雰囲気があり、またヴィーラさんからは言葉では説明できない不穩な空気を事の時すでに感じていた。

「自分はカタリナさんの学生時代は知らないですけど、今と変わらなかつたんですか？」

「それはもう、学問と技能だけでなく礼儀作法に至るまで完璧で、総代として全ての学生

の憧れの的でした。勿論、私も……」

「うーむ、流石ですなあ」

「大袈裟だよ。ヴィーラだつて多くの生徒に慕われていたろう」

若い頃、という言い方は失礼か。しかし学生の頃から既に騎士として優秀であったカタリナさん、その時の華麗な活躍や生徒から憧れの視線を受ける姿は想像しやすい。

俺が深く頷いていると、カタリナさんは照れているのか困った様子だった。

「まあまあ、慕われてるつて良い事ですよ。カタリナさんの人柄の賜物つてやつですよ。自分も騎空団ではカタリナさんが居てくれて大変助かつてますからね」

「よしてくれ、こそばゆい」

「いやいや、本心ですよ。空の旅の最初の仲間がカタリナさんで良かったですよほんとに」

「き、君はまったく……恥ずかしげもなくそんな事を」

俺とビィとルリアちゃんだけでは、ジータの暴走を抑えるのにとんでもない苦勞を強いられたろう。常識人が居るつて言うのは本当に胃に優しい。

だがこの時俺は知らず知らず、ある意味いつも通り、思いつきり“地雷”を踏みつける発言をする。

「はは、まあ料理の腕前だけは何とかして欲しい所ですかね」

「うぐつ!?　　そ、それを今言うのか……」

「……ええ?」

料理の話をしたらヴィーラさんの瞳から完全に光が消えたのを今でも覚えている。

「料理……?」

「え?　　はい料理……あれ、カタリナさん学生の頃って」

「自炊する事も勿論あったが……そう言えば大抵ヴィーラが手伝ってくれた気が」

「ははあ……するってーと、カタリナさんその頃から既に」

「そんなことはっ!　　ない、とも言えないかも知れないが……」

「調味料は入れれば入れるだけ美味しくなるって思ってたんでしよう?」

「ぐぬっ!」

「一度の料理に香辛料の瓶空っぽにしたりもしたんでしょ」

「はうっ!」

「……副団長さん、あなた……お姉様に、料理の事……」

「ヴィーラさんも大変だったんじゃないっすか?」

「……いえ、そんな……ことは……」

「けどね頑張って特訓中なんですよカタリナさん。コーヒーだけなら百回淹れて一回は飲める液体が出来るようになりました」

「せめて飲めるコーヒーと言ってくれ!？」

「無味無臭蛍光色の液体をコーヒーと俺は認めない」

「うう……」

しかも同じ無味無臭蛍光色の液体が出来ても駄目な事がある。最悪の場合無味無臭蛍光色の液体が蠢き出すのだから手に負えない。一体全体何が起こってるんだあれは。

「いやぁー旅出て騎空艇手に入ってから食堂で結構な騒ぎになりましたね。先ず俺の意識が飛ん、どひえっ!？」

その時のヴィーラさんの瞳。光が消えただけではない、憎しみと怒り全てを鍋で煮込んで抽出したようなどす黒さを俺に向けていた。

「あ、あの……?」

「……この、程度の男が、そんな事……ズケズケと……お姉様に……しかも、特訓? お姉様と二人で料理を……私だけのお姉様と……?」

「えっと……すみません、何か気に障りましたか?」

「ヴィーラ?」

宴の音で聞き取れなかったが、俺を凝視したまま何かをブツブツと何か呟き出したヴィーラさんに思わず後退る。様子の変ったヴィーラさんを見てカタリナさんも不思議に思い声をかけた。するとヴィーラさんの瞳に光が戻ったかと思うと、表情がスツと

社交的な笑みに戻る。

「いえ……お二人の仲が大変……よろしい様で安心しただけです」

「いや、なんかめっちゃギリギリいってますけど」

安心したと言うなら歯軋りなんて聞こえない筈だ。

「チツ……!」

「舌打ち!」

「失礼……『羽虫』が一匹寄ってきたようでして。どうか、お気になさらず」

「はあ……そうですか?」

笑っちゃいるが笑ってない。その時のヴィーラさんの瞳は、光が戻っても憎悪の視線を俺に向けていたのだ。

■ 四 包丁を砥ぐ音が似合いそうな彼女

「あの時既に目をつけられてたんだろうなあ……」

「自分で踏み込めなかったカタリナのデリケートなところに、簡単に踏み込んだ貴方が許せなかったんでしょね」

「デ、デリケートなって……」

ロゼツタさんの言葉を聞き落ち込むカタリナさん。だが学生時代ヴィーラさんにとってもカタリナさんの料理は大きな問題だったろう。恐らくあの手この手で料理をさせないかして回避していたに違いない。憧れの先輩を傷つけない様に立ち回るのが彼女の気遣いだったのだろう。

だが俺は共に旅をする以上食に関して妥協はしない。

「気を使って黙っとくなんて俺には出来ないレベルですからねアレは。今度また特訓です」

「う、うむ……」

「だ、大丈夫だよカタリナ！ あの前コーヒー淹れた時は、ちゃんとコーヒーの色してたよー」

「ル、ルリア……！」

「味は火薬を混ぜたようなものでしたが」

「表現が酷いぞ!？」

だつて飲んだら口が破裂したのかと錯覚するほどの味と言うか痛みと言うか、形容しがたい何かと言うか……。少なくとも「コーヒー」を飲んだのなら、普通閥属性ダメージは受けない筈だ。

「しかし前より謎の生命を生み出すような事は減りましたから確実に進歩はしています

ね」

「チョコレートの時か……」

「アレは大変だったなあ……」

オイゲンさんとラカムさんが遠い目をする。

バレンタインと言うイベントで、騎空団の女性メンバーと共にカタリナさんがチョコレートを作った時、そのチョコレートが完全に自我を芽生えさせると言う事件が起こる。更には食品としての本能で、誰かに食べられようとする“事件へと発展した。

それらチョコレート群は、食品と思えぬ動きで人間の口に侵入し食品としての本懐を遂げようとする。そしてチョコレート、そもそも食品とは思えない味でそれを食してしまった人間は、まる一日寝込む事となる。なお最初の犠牲者はラカムさんだった。

カタリナさんの料理を辛うじて食べれる食欲の権化ルリアちゃんが居なければグラインサイファーは全滅していただろう。

「あ、あの時の事はもういいだろう……！ それよりヴィーラの事だ」

慌てて話の方向を修正するカタリナさんだった。

「まああの後もカタリナさん関係で結構大変でしたがね」

「はうあつ?!」

結局アルビオンの騒動はカタリナさんも重要人物なのだ。

あの宴では最後までヴィーラさんに睨まれていた。離れた場所においても視線の圧力と鋭さが凄い、心臓を刺し貫かれたような気分だった。

大変ではあったが楽しい宴から一転、生きた心地のしないまま宴を終えた俺はヴィーラさんの貸してくれた部屋で疲れから直ぐに眠る。

そして一夜が明けた時、アルビオンでの騒動がカタリナさんの失踪で幕を開けた。

『ここでお別れだ』と言う簡潔極まる言葉を手紙に残し、一夜にして姿を消したカタリナさん。その手紙を見つけたルリアちゃんとジータが慌てて俺の宿泊している部屋に突撃してきたの言うまでもない。

俺も驚き手紙を見たが、別れると言う事実以外は大したことは書かれていなかった。理由も無く、彼女は姿を消した。

状況から帝国が関係している予感もあったが、同時にヴィーラさんが何か知っているのではないかと皆は考えた。オイゲンさん達にはグランサイファーを任し、俺とジータ、ビイとイオちゃんともう一度ヴィーラさんに会いに行く事にした。

だがアルビオン兵達の対応が昨日とは一変し、文字通り門前払いを食らう。ヴィーラさんに伝言すら頼めなかった。その事にジータ達は憤慨するが、この対応がむしろヴィーラさんが何かを知っている可能性を高めていった。

そしてジータが「ちよつとヴィーラさんのとこ行つてくる」と言いながら奥義バース

トを発動させ何時の間にか手にベルセルク・オクスを持っていた時は肝が冷えた。慌ててビー達とジータを落ち着かせたのは言うまでもない。

「もう少しジータを引き留めるのが遅れていたら、アルビオンの被害は尋常では無かつただろう……」

「人を災害みたいに言わないでよ!?!」

「何時でも奥義撃てる状態で斧取り出しながら会いに行こうとする奴が何を言う」

「気合の表れだよ!」

あれは殺意の表れだと思います。

「その後も帝国は懲りずに兵器持ち出すわ、ヴィーラさんは病むわ、ヴィーラさんが変身するわ、俺が狙われるわ大変だったなあ……」

結局帝国の言う和平とはアルビオンの星晶獣シュヴァリエを手に入れるための口実、そのための和議。俺達の事は無罪放免にするが、見返りとしてシュヴァリエを顕現させるための依り代としてカタリナさんを必要としたのだ。

真の騎士のみを主と認め、それを依り代として顕現するシュヴァリエ。それは依り代となる騎士をアルビオンに縛る呪いでもあり、それこそがヴィーラさんが6年もの年月をアルビオンでのみ過ごした理由である。

領主であるヴィーラさんは、その時シュヴァリエを感じる事が出来ないと言ってい

た。ならばシユヴァリエを自分達が利用できるように顕現させるには、ヴィーラさんからカタリナさんにシユヴァリエを譲渡させ顕現させるのが丁度良いと帝国は考えた。

だがそう簡単にカタリナさんを諦めないジータと俺達がそんな理由を知っては、いよ和平もくそも無い。帝国には前日に受け取った赦免状を目の前で破き改めて喧嘩を売った。

一方でその計画に一枚噛むどころか、逆に帝国を利用してみせたのがヴィーラさんである。

こちらも目的は愛しのお姉様であるカタリナさんを手に入れるためであった。俺達とカタリナさんを引き離す手段として帝国を利用したのだ。愛は盲目とよく言ったものだ。あれは最早執念だ。

そして帝国にもヴィーラさんにも都合が良かったのは、カタリナさんがヴィーラさんに対して負い目があった事だった。

かつて新たな領主を決める決闘での最後の戦い、そこで戦ったのがカタリナさんとヴィーラさんだった。当時からヴィーラさんの実力も素晴らしかったが、それよりも高い実力を持つカタリナさんが領主に成ると誰もが思っていた。だがそこでカタリナさんは、島に縛られる事を拒み、試合で手を抜いてしまった。それはヴィーラさんにアルピオンの領主を押し付ける事に他ならない。この事は6年もの間尾を引く事となった。

案の定その事を話を出したらカタリナさんは、ヴィーラさんを助けるためシュヴァリエの譲渡を受け入れた。

そしてヴィーラさんは帝国の戦力も利用して俺達を追い出そうとするが、互いに利用しあっているような関係では、連携も何も無い。しかも帝国の指揮官は常時情緒不安定なフュリアスであるのに加え、奴は既に戦艦に退避済み。アルピオンの城内に残った帝国兵も右往左往するばかりでジータ一人に手も足も出ない。そんな帝国兵達に業を煮やした彼女は、ついに自ら俺達の排除に乗り出した。

帝国には領主であるものの騎士としては未熟で、最近ではシュヴァリエの事を感じられないと言っていたヴィーラさんであったのだが、実はしつかりシュヴァリエの主になつてた。未熟どころかシュヴァリエの力を引き出し、鎧までも変容させ半ば星晶獣と化したヴィーラさんの力は凄まじく、そして執拗に俺達を……と言うか俺を狙い追い回し力の限り暴れまわった。

「なんとしても俺だけは倒してやると言う意志の塊だったなあ……」

「あの勢いだけはジータに負けてなかったなあ」

「ちよつとビィ、それどう言う意味」

「暴走すると止まんねえって事」

「酷いっ!？」

だが確かにあの暴走具合は、ジータに通じるものはあった。燃料切れまで止まらない暴走特急高速艇、なお燃料はほぼ無限。そんな感じ。

「改めて思い出すととんでもねえ騒ぎだったなあ、ありやあ……」

「ええ、まったくとく……」

「またもオイゲンさんと俺は遠くを見た。騒動の本番、最も俺が苦勞し疲れた後半戦。シユヴァリエの力を引き出し怨嗟に吞まれ修羅と化したヴィーラさんとの鬼ごっこ——」

■ 五 鬼さんこちら、手のな……あ、いや、やつば来ないでっ!? やめて、ビットはやめ、あああああっ!?

■ 帝国とアルビオン兵の妨害を突破し、ヴィーラさんからカタリナさんにシユヴァリエを譲渡する儀式が行われている場へと乗り込んだ俺達。

ジータとルリアちゃんによる熱い説得が功を奏し、カタリナさんは考えを改めてくれた。とは言えヴィーラさんの事を諦めるのではなく、別の方法を探しヴィーラさんをアルビオンから解放し助けようと言う事なのだが、もうこの時点でヴィーラさんにとってアルビオンからの解放など興味はなく、最早彼女の目的はカタリナさんをアルビオンに

縛り付ける事、すなわち“カタリナさんの独占”であった。

彼女にとつて俺達は完全にカタリナさんとの仲を邪魔する目障りな存在、“羽虫”である。ヴィーラさんは喉が枯れる程俺達に向かい怨嗟の声を上げた。「お前達がいなければ」と。

だがこの時城外の空で待機していたエルステ帝国の戦艦が突如城に向かい砲撃を開始。戦艦内に内蔵されていた新兵器による強力な砲撃であった。

砲撃が直撃する前にジータと俺はフランクスを展開、それでも威力は消しきれず天井や壁が崩れる。ジータにルリアちゃんを任せ俺の方はヴィーラさんの方へと駆けだした。

突然の砲撃は流石に予想外であったのか、倒れていたヴィーラさんを抱き起すと驚いた様子だった。しかし直ぐに彼女が見た光景はルリアちゃんに駆け寄り無事を喜び合うカタリナさんの姿。そして自分を助ける“羽虫”の姿――。

「ちくしょうが、帝国の奴等問答無用かよ……ヴィーラさん大丈夫ですか!? 瓦礫頭とか当たってないっすよね!」

「……どうして、そこに居るのがあなたなのですか?」

「へ? あ、いえ俺は」

「何故お姉様があちら側なのですか……? どうして、隣にいるのがお姉様じゃないの

……っ!？」

「な、なにを……おがっ!？」

ヴィーラさんは俺の顔を掴むとそのまま床に叩きつけた。何が起きたのか俺は直ぐに理解できなかつた。

「な、にを……いだだだ!？」

「どうしてお前が! お前が! お前があ……!？」

「お……げ、がっ!?! ちょ、やめおごっ!?! いた、あいだ、いだだっ!?!」

彼女は人の握力とは思えない力で俺の顔を掴んだまま何度も床に俺の頭を叩きつけた。その時俺を見る瞳は、あのどす黒い瞳だった。

「私の横にいるのはお姉様じゃなければいけないの! 何故、何故お姉様があちら側なのですかっ!?! 何故私の隣がお前なの!?! どうして、どうして……!?!」

「あのっ! おげっ!?! せめ、て……手、はな……っ!?! ぎやばっ!?!」

「よせヴィーラ何をしている!?!」

カタリナさんがヴィーラさんの異常に気付いて叫ぶがその声もこの時のヴィーラさんには届いていない。

「あの時もそうだった、お姉様が助けてくれたのは私だった、私だけを助けてくれたのに……お姉様が私を救ってくれるはずだった!! お前は……お前はその思い出まで奪

うのっ!？」

「なにを言ってる……げぶっ!？」

「お前さえ……そう、そうよお前さえいなければ……! お姉様は私のお姉様のままだった! 私のためのお姉様! 私一人のお姉様だったのに……っ!! 何も知らないやつが、土足で私とお姉様の間に入った……っ!! お前がお姉様をおかしくした……っ!!」

「お、おかしく……なにを……!？」

「だまれええええええ——っ!!」

「あだだ!？」 頭摩つちや削れ、おげええ——っ!？」

床が凹んで来たと思っただら今度は思い切り床に顔を摩りつけながら、壁に向かって投げつけられた。毎度どこかに吹き飛ばされたりしているな俺ってば。

「危ないっ!？」

「兄貴い——!？」

だがジータ達が駆けつけ激突前に俺を受け止めてくれた。カタリナさんが氷魔法で床を凍らせ滑り込んでくれたのだ。

「無事か!？」

「へ、平気です……ただ、この状況は……っ!？」

助けてくれたのはありがたかったのだが、カタリナさんが俺を助けに来たのがまた不味かった。カタリナさんが俺を支えて立たせてくれたが、その姿を見たヴィーラさんの顔が更に歪み俺を睨みつけた。

「お姉様かヲ、離レロ……っ!!」

「めっっちゃヤバイ!!」

荒れ狂うヴィーラ・シュヴァリエとの戦闘開始であった。

■ 六 アオゾラノモトヤンデレノチニクルフヴィーラ

理性ある暴走、と言うと矛盾してるかもしれないが、あの時のヴィーラさんはそうとしか言いようがない状態だった。無差別ではなく、俺だけを確実に狙ってるのだ。「泣け! 叫べえっ! そして死ぬエツ!!」と叫び俺を追いかける姿は、もう星晶獣の力とか以前に恐ろしかった。二つのビットを利用した攻撃は確実に俺を追い詰めていくし、一時はあのジータでさえ寄せ付けない強さで俺を追い詰めて来たのだから意味が分からん。これが憎悪と愛の力とでも言うのか。死んだ時を除くなら、多分人生で一番身の危険を感じた時じゃないだろうか。

二体のビットを器用に足場にし、空中からも俺を追いかけるヴィーラさんの姿は恐怖

以外の何者でもない。しかもどこに隠れてもビットが俺を見つけ出し攻撃する。俺だ
けを攻撃するビットかよ!? と叫ばずにはいられなかった。

ちなみにこの騒ぎの最中、フュリアスの戦艦に随伴していた戦艦がヴィーラさんを目
標にしつつアルビオンに無差別攻撃を行ったが、俺を追いかけるヴィーラさんが俺ごと
葬ろうとして、帝国新兵器の砲撃も真つ青の砲撃を生身で行い呆気なく帝国艦は全滅し
た。

「どいつもこいつも邪魔ばかりを……!」

「別に俺は邪魔をしてるわけじゃ無いはずですが!」

「黙れ! お姉様の『大切』は私一人でいい……! お前も! あの^{ジータ}子も! あの^{ルリア}子も

! あのトカゲも要らない!! お前が消えればあの^{ルリア}子も消える! お前が居なければ
お姉様は私の傍に居てくれる! お姉様は私のモノになる! 私だけを見てくれる!

私の、私だけのっ!

「ワ、ワガママはあまり良くないと思います!!」

「喋るなあ——っ!!」

「ぎゃああああ——っ!」

よくあの形相の人相手にこんな間抜けな声上げて逃げ回れたと思う。時間にして2
0分程度だろうか、しかし当時の俺には長い長い20分だ。

グランサイファーからの援護、ついに本気になったジータ、カタリナさんの必死の説得が無ければ俺はどうなっていたかわからん。それでも心身ともにボロボロになったけど。

まあ結果的に俺も無事、つまりルリアちゃんも無事。カタリナさんも無事だしヴィーラさんもシュヴァリエの力をルリアちゃんが吸収した事で自由になれた。

終わり良ければ全て良し、つまりはそう言う事だ。

「んで、そんな風にマジで殺しにかかってきた相手と手紙のやり取りしてるわけかお前は。終わり良くたって普通良しとはならねえよ」

関心するようでも表情は呆れているラカムさん。俺もそう思うわ。

「まあヴィーラさんも正気に……正気？ うん、正気に戻ってから謝ってくれたから別に良いかって。俺は死にさえしななければルリアちゃんも無事だし」

「はあく大した奴だよほんと」

まあ俺の肉体の許容範囲超える大きいダメージでは、どうしてもダメージの一部がルリアちゃんにも反映されるのは申し訳ない。あの時も辛かったろう。

だがその肉体ダメージ許容範囲も日々成長してる。ジータの攻撃に巻き込まれたりする度に丈夫に……もとい強くなっている。そうすればルリアちゃんへ行く痛みも少なくなる。それは良い事だ。

だからってジータと積極的に行動したいかと言うとそんなわけは無い。巻き込み駄目、絶対。

「それで肝心の内容は聞いていいか？」

「大した事じゃないんで良いですよ。それこそあの時の騒動での被害の復興が全部落ち着いたって言う連絡ですね」

「ほーう？ そりゃ良い話じゃねえか」

ヴィーラさん本人の暴走での被害は主に俺だけだが、ほぼ同時に起きた帝国の介入による島への被害はそれなりにあり、島の中心である士官学校と生徒やそれ以外の住民の居住区の完全な復興にも時間を要した。だがそれももう終わり、島には元の平和が戻ったと言う事だろう。

「正式に領主の後任はまだ未定みたいですけど、今の所領主の不在はそこまで問題は無いみたいです」

領主を島へ縛り付ける事が因習と化した事が騒動の原因でもあった。ルリアちゃんがシユヴァリエを吸収した事でその性質は変化した。今ではヴィーラさん個人を気に入る、彼女の傍についている。今後は領主の事はもう少し慎重に決める事になるだろう。

騎士としての強さや高潔さは今後も問われるだろうが、島へ縛り付ける因習は断ち切

れたはずだ。

「今あの島ですべき事も終わったらしいし、その内合流したいそうです」

「そうか……島を出る決心がついたんだな」

アルビオンでの騒動の後ヴィーラさんも俺達の団に入る案もあったのだが、暫しアルビオンで復興を手伝いつつこれからについてゆっくり考えてみたいと言う本人の意志もあり返事はその内と言う事になった。

もつともその時カタリナさんに言った「必ずまた御会いしましょう」と言う強い意思の籠った台詞から仲間にならないと言う選択肢は初めから無かったようだ。

「来る事は間違いないとして、何時何処で合うかはまた追々決めますが……別にいいよなジータ？」

「え、私？」

お前意外に誰が居るんだよ。団長だぞ。

「団長の意志は確認しとかんといかんだろ。なんか手紙の事聞いたら不満そうだったし」

「ん〜そりゃ手紙の事は驚いたけど……ヴィーラさんが仲間になってくれたら私も嬉しいから勿論歓迎！」

「兄貴が良いならオイラ達も別にかまわねえよ」

特に反対意見も無いようなので大丈夫そうだ。合流の予定はまた決めるとする。下手にすぐ返事を出し何時でも良いと言うとあの人の事だから数日中に来てしまいそうだ。

「さあそれじゃあ午後の用事片付けるか」

「なら組手しよう！」

「違うわ阿呆！ 書類整理に決まってるんだろ!!」

「そ、そう言えば……や、やだあ！」

一時間程前の会話を思い出し顔を青くしたジータは慌てて席を立て逃げようとした。だがすかさずイオちゃんとかタリナさんがジータの両腕を掴み上げた。

「ジータいい加減仕事しなさい」

「彼ばかりに書類を任せてはいけないな」

「私も手伝うから頑張ろうジータ！」

「オイラも付き合ってやるからさ」

「あーんっ！ 味方がいないよう！」

「居ると思つたかたわけめが。さあ大人しく来い」

二人からジータを受け取り脇に抱えルリアちゃんとビィを引き連れて書齋に向かう。夕飯までには終わらせるつもりで頑張ってもらおう。出なければ明日も続ける。

「さつき来た書類にも目を通してもらおうからな」

「い——やあ——っ！」

結局ジータの往生際は、椅子に座らせるまで悪かった。

七 騎士の想い

「やれやれ、やっと行つたわ」

「ジータの奴書類仕事もやりやあ出来るのになあ」

「意図してるのかはわからねえが、ありやあ坊主に構って欲しくて怠けてるところあるな」

「さて、どっちかしらねえ」

連行された自分達の団長の姿を見送り好き勝手言うイオ達。そんな中カタリナは、一人アルビオンでの思い出を続けて思い返していた。

(……こんなに賑やかな場所に私が居れるのは、彼とジータ達のおかげだな)

アルビオンで別れを決意した時、彼女は直接その事を伝えず手紙に『ここでお別れだ』とだけ残した。そうした事は帝国の思惑も関係していたが、皆が知るようにはカタリナにとつての罪滅ぼしだった。

自分がルリアを帝国から連れ出し、無関係だった彼等を巻き込んでしまった事だけではない。本来であればアルビオンの領主となる筈だった自分が全てをヴィーラに押し付け、犠牲にしてしまったと言う事実、それがずっと心残りだった。

だからこそ、例えば共に空の果てに行くと言う約束を破る事になろうと、ジータ達とヴィーラの助けになるのならばそれで良かった。

しかしジータ達はそれを認めない。仲間が犠牲になる事は絶対に認められないお人好しの集まりが「私とお兄ちゃんと愉快な仲間たち団」と言う騎空団だ。それを知っていたからこそ、カタリナは手紙だけを残したのだ。一文字一文字、筆を進めるだけでも辛い手紙を。

だがその手紙を見ても彼等はカタリナを迎えに来た。その手紙こそがカタリナの迷いの表れと思つたから、納得が出来ないから。団を抜ける理由に、カタリナの意志を感じられなかったから。

「二人で勝手に決めるな」

シユヴァリエを顕現させ、領主であるヴィーラから譲渡するための儀式の場に現れた時、彼はそう叫んだ。

「ろくに相談もせず、自分一人犠牲になればいいと考える人が騎士なんて名乗れると思ふのかよ！ カタリナさんが本当に迷い無く選んだのはルリアちゃんを助けるって言

う道だったんだろうが！ それだけは後悔はなかったはずだ、間違いないやなかったと自信を持って言えるはずだ！ 罪滅ぼしだろうがなんだろうが、こんな方法ルリアちゃん一生笑わなくなるぞ！ そんなルリアちゃんが見たくてこの子を助けたのか、違うだろうっ!? こんな良い子泣かせるようなやり方俺は絶対許さんぞ！ それにカタリナさんだって一生傷ついてアルビオンに残る事になる！ ずっと今日の事を後悔する！ だってカタリナさん迷ってるじゃないか!? じゃなきやあんな手紙なんて残さない、迷いがないなら本当に黙って消えた筈だ！ そうだろうが!?」

ヴィーラが展開する結果に阻まれながら、彼は叫び続けた。彼だけじゃない、ジータもビイモルリアもカタリナに呼びかけ続けた。

「私達カタリナさんと会えて良かったと思ってるんだよ！ このままじゃイスタルシアに行つたって意味無いよ！」

「姐さんの居ないグランサイファーなんて寂しすぎるぜ！」

「そうだよカタリナ……！ 私、まだ……カタリナとお話したい事や見たい景色が沢山あるんだよ！」

阻まれても歩みを止める事は無かった。障壁は彼らを拒み、傷つける。だがあの場でカタリナを失う事こそが彼等にとって一番辛かった。

「特訓もまだ終わってないんだ……！ 俺は、俺はまだ……まだカタリナさんの淹れた

美味しいコーヒーを飲ませてもらってないっ！」

我武者羅に只管に、カタリナに対して思いつく限りの想いを籠めた言葉。自分を必要としてくれたあの叫び、それを忘れる事は無いだろうとカタリナは確信している。

今も自分はこの騎空団にいる。そしてヴィーラもまた自由になれた。

机には彼が淹れた食後のコーヒーがある。琥珀色のコーヒーはまだ湯気を漂わせていた。

特に高級な豆を使っているわけではない。産地に拘っているわけでもない。ドリツプの道具もよろず屋で安く買った物、全て一般家庭で見かけるものだ。それで淹れたコーヒーも、ありきたりで当たり前な普通のコーヒーだ。

だがその「当たり前」が味わえる事がカタリナは嬉しかった。この当たり前のコーヒーは、きつと彼にしかな淹れられない。だが同じように淹れているはずなのに、自分が淹れるコーヒーと一体何が違うのか、まだまだ首を捻る毎日だ。

(約束は守らないとな)

今度、美味しいコーヒーを淹れてあげよう——アルビオンで彼とそう約束をした。その約束が果たせるのが先か、イスタルシアに辿り着くのが先かなどと彼にはからかわれたいもした。

だがそんな日々も悪くない。まだ温かいコーヒーを飲みながら彼女は静かに微笑ん

だ。

■ 八 団長は副団長の夢を見るか

「あら、どうしたのよ馬鹿人間。朝っぱらから一人でコーヒーなんて淹れて」

「ん？ おう、メドウ子か」

「メドウ子じゃないっての」

早朝まだ誰も集まっていない食堂でコーヒーを淹れていたら、メドウ子が珍しくメドウシアナを連れず一人でひよっこり現れた。そのまま最早お決まりなやり取りをすると、彼女は厨房の前にあるカウンター席に座る。

「んで、どうしてコーヒー？ 朝食まで時間あるじゃない」

「いや、なんか変な夢見たんだよ」

「夢？」

「そう、前も似た夢見たんだけどさ、俺がお前等と仲間じゃなくて別の人達と騎空団やってる夢。そんなかでコーヒーの話題出てたから、なんか飲みたくなつた」

「……………ふーん」

夢の内容を話すとメドウ子は面白く無さそうな顔をした。

「別にお前等と騎空団やってるのが嫌ってわけじゃないから安心しろ」

「ちよ……っ!? なに言ってるのよ、そんな事一ミリも思ってるんか無いからね!」

「そうかい?」

「そうに決まってるでしょ! そ、それでアタシ達と出会わなかったあんたはどうだったのよ」

「別に変らねえよ。誰かに振り回されて、死にそうになって、けどなんとか生きての繰り返し」

「はんっ! 如何にもアンタらしいわね! 夢の中ぐらい良い思いすればいいでしょうに!」

「うるせいやい」

夢の中で良い思いしたって結局空しいだけなのだ。

「そーいやメドウシアナは?」

「まだ部屋で寝てるわ。昨日の依頼で疲れたみたいだから」

「そりやお疲れ様だ。こんどなんか美味しい物あげるか」

「ちよつと、アタシも頑張ったんだけど?」

そりやそうだ。メドウシアナとはコンビの二人、こいつもちゃんと仕事はしてる。

「それではお嬢様、コーヒーは如何でしょうか?」

「ぶふーっ！ なーに格好つけてるのよ、全然似合わないわよ」

「うるせー」

似合わないのは承知じゃい。

「で、いるか？ 昨日焼いたクッキーもあるぞ」

「貰うわ、目が覚めるようなのお願い」

「かしこまりましたお嬢様」

「んふ……っ！ もう、だから止めなさいそれ、笑うから！」

不思議な夢から覚めてみれば、いつも通り騒がしい星晶獣との朝が待っている。しかしどこか居心地の良い朝だった。

アナザーストーリー 年中行事ハッピーセット

■ 一 新年だよ！

雪が降り積もるとある島。まだ日も昇っていないと言うのに人々がガヤガヤとして移動している。

そんな中に俺達もいた。ゾロゾロと歩きながら口から白い息を吐く。

「寒い……っ！」

特にメドウ子が不満げに文句を言っていた。何時もの服装に加え防寒の上着を着てはいるのだがやっぱり蛇系だからか寒さに弱いのだろうか。

「なんだって年明けて早々こんな時間から移動なのよ！ 人間って馬鹿なんじゃないの!?」

「初日の出観るんだから仕方ないだろ……」

今俺達は年が明けてから最初の太陽、初日の出を見るために移動していた。

と言うのも少し遡ること一週間ほど前、ジータから手紙が届いた。

『みんなで初日の出観てから、そのまま初詣しようよ。一緒に送った“地図”の島まで来てね!』

手紙にはそう書かれていたのだが、「来てね」と言うか暗に「来い」と言われてる気がした。手紙から圧を感じる。

だが折角呼ばれたし、特に断る理由も無かったので俺達は今年の“恵方”を司る神社がある島へ訪れた。ただ島に行く時間の関係で到着したのは、結周年を跨いで深夜になつてしまい、のんびりすると夜が明けてしまうためエンゼラを島につけた後は、ジータとの合流は後にしてそのまま島で最も初日の出がよく見える場所へと移動する事にした。

騎空艇の停留所にグランサイファアの姿はあつたが、既に出かけた後だったので彼女達もここへ向かっているはずだ。俺達は目立つし多分向こうの方から気が付いてくれるだろう。

「第一日の出なんて明日観ようが明後日観ようが一緒じゃないの……揃いも揃って態々暗い時間から移動して……」

「寒いし嫌ならエンゼラ残つても良いって言っただろう」

「誰も行かないとは言つてないでしょ! アンタ達が行くから付き合つてやつてんの!」

「によほほ！ メドウ子は文句ばかりじゃのう」

ぶつくさ文句を言うメドウ子を見てのじや子がケラケラと笑っていた。

「ついて来た以上大人しくすればよいものを」

「うっさいわねえ……寒いんだから文句も言いたくなるわよ」

「情けないのう……」

「上着の上から羽で身体包んでるアンタに言われたくないわよ！」

のじや子は上着を着た上に更に自前の翼で身体を覆いヌクヌクしていた。その羽毛率100%の天然上着は、フカフカに膨れ彼女自身だけでなく仲間も虜にしていた。

「モコモコ☆ 手え入れるとめっさ温いんですけど（*´ω´）」

「なあクロエ、あんまり手を入れるとガルーダに迷惑が……」

「——！」

「——！」

「つて、あれえ!? フージー、ニコラまで!? 何時の間に、いやなに勝手に入り込んで!？」

「ほほほ、くるしゆうない。存分に温まるが良い」

「す、すまないガルーダ……」

クロエちゃんにフェリちゃん達とにこやかに談笑するのじや子。穏やかだ、日の出前に俺の心が浄化されるようだ。

「あいつ、調子良いんだから……星晶獣としての誇りつてもんが無いのかしらね」

「まあ良いじゃないか。それよかメドウ子、あんま寒いならこれ使え」

「……なによこれ？」

「俺の手袋」

エンゼラ出てから横であんま寒い寒い騒がれるとたまらん。

「な、なんでアンタの！」

「指先が冷えると余計寒く感じるんだよ。俺別に手袋無くて良いし。サイズ大きいけどあつたまりや問題無いだろう」

「そ、そう言う事じゃなくて……」

「良いから使え。他の参拝客いるんだからあんま騒ぐなよ」

手袋を押し付ける様に渡すと、メドウ子はそれを受け取り暫し悩んだようだが両手にはめた。やはり俺のサイズの手袋だからか、彼女の手には少しブカブカだ。

「どうだ？」

「……そりゃまあ、暖かいけど」

「そうか、ただやっぱデカいな。どうする、嫌ならいいけど」

「……別に、嫌じゃ……その、まあ……あれよ！」

「なによ？」

「だから……アンタにしては気を利かせたようだから？ 使ってあげなくもないわ！」
「……あそう」

よくわからんが満足気なので良いとしよう。

そうこうしてる内に目的の場所についたらしく、行列は立派な社のある場所で動きを止めていた。

「……のようですね」

「そのようだ。しかし立派な社じゃないか、人々がここを目指すのもわかる」

傍に立つコーデリアさんと共にこの島に来る人々の目的でもある社を見る。今年の恵方を司る神社、その境内には多くの人がワラワラとしていた。皆もここで初日の出を拝み、そしてこの神社で初詣をして行くに違いない。この中のどこかにジータ達もいるだろう。

「時に団長、貴君は恵方を司る神宮に来るのは初めてかい？」

「え？」

「物珍しそうにしていたからね」

どうやらキョロキョロとする田舎者つぼさが出ていたらしい。恥ずかしい限りだ。

「いやすまない、馬鹿にしたわけじゃないんだ。それに私自身こうやって来るのは初めてだからね」

「ありや、そうでしたか」

「知つての通り何かと忙しい身だったのでね。任務中気付いたら年が明けていたなんてざらだったよ」

「そりやまたお疲れ様ですな……」

「なんのそれも遊撃部に身を置く者の務め。とは言え、このように賑やかに新年を過ごせるのはとても喜ばしい事だ……ありがとう、団長殿」

「俺っすか？」

礼を言われる様な事を俺はしただろうか。身に覚えは無いのだが。

「こんな時間を過ごせるのは、偏に君と出会えたからだよ」

「そりや俺を持ち上げ過ぎじゃないですか？」

「事実さ、君でなければ……私は旅を共にしなかった」

「それって俺が監視対象だから？」

リユニミール聖国でも星晶獣をやたら引き連れてる俺達を危険視している……らしい。俺の旅に彼女が同行する理由の一つには、空の世界に混乱を起こしかねないリスクファクターである俺達の監視がある。正直気にした覚えはない。

「さて、どうかかな？」

彼女は微笑みを返し真意を答えなかった。その笑みに悪い気はしなかった。

「さあ、日の出までもうすぐだ。それまでに去年一年を振り返るのも良いんじゃないかな？」

「……確かに」

コーデリアさんに言われ、過ぎた一年を思い起こす。色々あった、濃いあの一年を――。

■ ■ ■ 二 バレンタインメモリーズ

相変わらず騒がしい一年だった。年越しの瞬間まで騒がしかったのだから、それはもう騒がしかった。始まりから最後まで騒がしい。

団員も増え、借金も増え、心労も増え――いや、決してそれだけではないのだが。楽しかった事だってあったのだ。本当である。

とは言え団員が増えた事で変わった事がある。年越し以外の年中行事をするようになったのだ。

それまでそのような行事を行わなかったわけでは無いのだが、基本的に大袈裟にせずささやかに行っていた。忙しいのと団員に年中行事に関して詳しい知識を持つ者が多くなかったからと言うのもある。

だが団員が増えたぶん行事に関しての知識を持つ者が増え、仕事の合間にそのための準備を出来る様になって来た。そのおかげで「バレンタイン」、「ハロウィン」、「クリスマス」などの行事に興味を抱き楽しむ事が出来たわけだ。

バレンタイン、これは年中行事と言うよりも、女性のためのお祭り——あえて気取った言い方をするなら女性による「恋のイベント」と言ったところか。

聖人の名が発祥だとかその起源には所説あるが、今やそれは形骸化している。この日に行われるのは、愛する者への愛の告白、また感謝の気持ちを込めてチョコレートを手渡す。そんな甘酸っぱい日なのだ。

そんなバレンタインが近づく中この時も俺はジータから手紙を貰った。

『もうすぐバレンタインだよお兄ちゃん。チョコ上げるから「地図」の島にまで来てね！』

手紙に書かれた内容はそれだけ。ただ「来てね」のところに「来いや」と言う念を感じ取りジータの視線すら感じた俺は、身の安全を優先し彼女の送ってきた地図が示す島へとエンゼラを向かわせた。

俺はこの時点でバレンタインの事は、名前を知ってる程度でよくわかって無かった。ザンクティンゼルでは、そもそもそんな習慣無かったし。

一方団員の女性陣の多くは、流星に詳しく色々話を聞けて基本的な情報は手に入れ

た。それがバレンタインが、恋のイベントであると言う事だ。

まあ最近じゃ色々やり方も意味も変わりつつあり、老若男女関わらずチョココレートや菓子類を送り合う日にもなっているらしい。クロエちゃん曰く「それ友チョコってヤツ☆ ダチトモにタンキュ〜ってチョコあげんの！」とのこと。要は同性の友達に感謝の念を込め、今度もよろしくと言う意味で送る祝い物と言う事でいいのだろう。が、そう言ったらクロエちゃんに「祝い物とか正月じゃん草。つか念込めるとかガチつてでだんちよウケる、わら☆」となんか笑われた。

あと愛だとか堅苦しい事抜きに送る「義理チョコ」と言うのもあるそう。友チョコもこれに含まれるのだろう。だから菓子類がよく売れるとカルティラさんは語った。そんな日に「予告チョコレート」をしたジータに一応感謝すればいいのだろうか。しかも態々会いに来てと言うのだから、中々に気合が入っているようだ。

また彼女が同封した地図には、このバレンタインの時期に女性が押し寄せる島、その名もチョコレイ島の位置が記されていた。あまりにそのまんまな島名を聞いて、俺はシエロさんが命名でもしたのか疑ってしまった。

団の女性陣もチョコレイ島に行った事は無かったらしく、名前からして甘い香り漂うその島への到着を皆楽しみをしていた。

そしてバレンタイン二日前、俺達はチョコレイ島へと着いた。そして俺達は目にする

事になる。

愛と情熱で心を燃やし、普段包丁ぐらいしか刃物を持ってなさそうな乙女達が、剣に槍に鈍器にあらゆる得物を手に取ってなんかチョコレートっぽい魔物を追いかけて倒していたのだ。

異様とも思えるその光景に啞然としている俺達の前にもチョコレートっぽい魔物が現れた。それに驚いたのと同時に「レギンレイヴツ!!」と聞き覚えのある声が出たと思ったら、凄まじい衝撃波と共に魔物と俺は吹き飛んだ。俺も、吹き飛んだ。俺も、だ。島の位置と季節の関係で島には結構な雪が積もっており、吹っ飛んだ俺はその中に頭から突っ込んだ。ユーリ君達の叫びが聞こえる。そして俺は俺を吹き飛ばした犯人はすぐ分かった。

「ごめんお兄ちゃん！　そこにチョコレートの精が居たから」

わけのわからん謝罪と理由を言いながらジータに雪から引きずり出された俺の周りには、何故かチョコレートの原料が散乱していた。

島に着いて早々謎の魔物が現れ、それごとジータに吹き飛ばされ、カカオに囲まれると言う自分の状況に混乱していると、ラカムさん達が慌てて駆けつけ状況を説明してくれた。

このチョコレイ島、なんでも稀有なカカオが取れる島であるのだがそのカカオは成長

すると俺の前に現れた魔物——チヨコレートの精に姿を変え島中を駆け巡るらしい。そしてそのチヨコレートの精を倒すと元の姿、すなわちカカオへと戻る。そうして手に入れたカカオを使い出来上がったチヨコレートには、「恋の魔法」がかかるとかなんとか。

俺達が見た歴戦の戦士が如き乙女達は、つまりそのカカオが目当てであつたのだ。だからつてあんな阿修羅をも凌駕しそうなものになるとは、バレンティン恐るべきである。

まあそんな話を先に島に来て聞いたジータは、島中のチヨコレートの精を狩り尽す勢いでカカオを集めていたらしい。そして俺も吹き飛ばされた。

だがその話を聞いたうちの団の女性陣もこの島のやり方に興味が湧いたらしく、自分達もチヨコレートを作ろうと言う話になった。

また更にジータの騎空団ともチヨコを送り合うのも良かろうと言う話も出たので、作るとしたら結構な量になる。そのためにはその分のカカオが必要だ。そこで俺達男性陣も材料集めを手伝う事になった。

とは言えだ、俺もチヨコレイ島に上陸してからと言うもの島中の甘い香りに興味が湧いてしまう。島には有名シヨコラティエが作ったチヨコレートも売られているが、せつかくカカオが姿を変え倒しさえ出来れば誰でも手に入れられる状況なのだ。

食うのも良いが作るのも良い。二日もあれば俺もチョココレートを作れるだろうと思いい、俺もまた作る側としてバレンタインを楽しむことにした。団長が団員に労いのチョココレートを上げてもらおうなのだ。

フエザー君達が各々チョココレートの精を狩りに行く中、俺は島の人里から離れた山や森にもチョココレートの精が居るのか気になった。なので島の管理者であるシヨコラティエに会って島の奥に行っても良いか聞いてから許可を貰い、俺は一人で島の奥へと向かった。

森や山には、やはりチョココレートの精が現れるとシヨコラティエは言っていた。だがそのチョココレートの精は他で現れる個体より強いらしく一筋縄ではいかないらしい。ただシヨコラティエの方には「噂の星晶戦隊（以下略）の団長さんなら大丈夫かしらね」と言われた。なんの噂かは気にしない。

そしてそこで出会ったのは、明らかに島の開けた所に居るチョココレートの精とは別物の存在。チョココレートの精が合体し巨大になった、ビッグなチョココレートの精であった。

チョココレートと思ってチョコツとでも甘く見てはいけない、チョコツと……チョココレートだけに——と、シエロさんみたいな事を言いそうになった。最近癖がうつつてる気がする。だが本当に甘く見てはいけない。

融合したチョコレートの精は、可愛らしい馬の玩具の様な姿になったのだが……やたらめつたら強かった。しかも二体出て来た。なんでだよ。

可愛い顔とちよつと色っぽい顔をした二体のチョコレートの精は、星晶獣とは違うのだろうかそれにしても強かった。一人で来なきや良かったと後悔した。

最終的になんとか倒せたが、別に古戦場に來たわけでも無いのに酷くボロボロになってしまった。その代わりたっぷり美味しいチョコレートが作れるだけのカカオが手に入った。そのため大量のカカオを担いで戻った俺を見て皆驚いていた。

俺の集めて来たカカオで十分すぎる量が集まり、そのまま女性陣はチョコレート作りに移った。張り切る彼女達は、イベントの主旨もあつて「男子禁制」と厨房に張り紙を張った。つまり「楽しみに待つてなさい」と言うわけだ。

だが俺は自分でチョコレートを作りたい。態々やたら強い巨大チョコレートの精を二体も倒したのだ。上質なカカオ豆もある、貰う権利より作る権利が欲しかった。だがエンゼラはメイン厨房もサブ厨房も女性陣が占領している。

そこで俺は島のショコラテイエさんに頼み、店の厨房を厚意で使わせて貰える事になった。

流石はチョココの島の有名ショコラテイエの厨房。チョコレートを作るのに特化したチョコレートのための厨房だ。しかもプロの菓子職人のアドバイザーも聞ける。俺もバ

レンタインの陽気につられ、鼻歌まじりにカカオからチョコレートを作っていた。

だがこの時シヨコラティエさんが面白そうに俺を見ていた。その意図を早いとこ聞いとけば良かったと後々後悔した。

そして後日――。

「お兄ちゃん、ハッピーバレンタイン！ このチョコレート、とにかく食べてみてよ！」
「ねえそう言うノリなの、バレンタインって？」

バレンタイン当日、朝からエンゼラに乗り込んできたジータがテンション高めにチョコを渡して来た。どちらかと言うと定食屋のノリだった。

だがやたら気前よく出されたチョコレートは、可愛くラッピングされておりしつかり乙女のイベント感を出していた。ちよつとホツとした。

その後他の女性陣からもチョコレートを頂ぐが、やはりジータのノリは彼女だけだった。まあノリが違うだけで濃い面子だったけどね。けど皆楽しそうでよかったよ。ハレゼナとか頑張って作ったチョコレートを興奮して見せて可愛かった。メドウ子やのじや子は、不慣れながらも頑張って作ったチョコレートを自慢げに見せて微笑ましい。

それにどのチョコレートもとても上手に出来ていて、そして、美味かった。

フェザー君にユーリ君達も喜んでた。ユーリ君に至っては、緊張してか噛み噛みでお礼を言うものだから、ティアマト達にからかわれていた。

そして俺も俺で用意した特性チョコレートを振舞った……のだが、それを見て女性陣が「何やってんだコイツ？」と言う顔で俺を見ていた。

「お兄さん、男の人は受け取る側でしょ……」

イオちゃんに呆れた様子で言われてしまった。

いやしかし、別に友チョコとかが有りなら俺とかが皆にチョコあげてもよろしいのではなからうか云々かんぬん——と、あれこれ言い訳をしたのだが「駄目やないけど、気合入れすぎや、どうなってんねんコレ」とカルテイラさんに言われてしまう。

俺がカルテイラさんにあげたのは、チョコレートでフレームと珠を作り、焼き菓子の串で珠を刺し実際に使える「ソロバン型チョコレート」である。それを説明したら「職人か!？」とハリセンで頭を叩かれてしまった。

確かにやり過ぎてしまったかも知れん。一度冷静に自分が作ったチョコを見てそう思った。

シヨコラテイエさんの厨房使わせてもらったからか、妙に気合が入ってしまい見た目も男性陣へ配るのも含め団員全員の個性に合わせたチョコレートにして、ラッピングもこつてしまった……。だって楽しかったんだもの。

それと一応チョコレートを受け取ってくれたロゼッタさんが凄く言いづらそうに話したのは、「ホワイトデー」と言う存在だった。

「あのね団長さん……一応、来月になったらホワイトデーって言う、男の子が女の子にチョコのお礼を渡す日があつてね……」

……来月頑張ればよかつたね！

■ 三 まいつたねこりや！

■ “お返し”の習慣を知らずチョコレートを作ってしまった俺だが、結局そんな俺のうっかりも「まあ団長らしいね」と言う事で笑って許してくれた。頑張った菓子も無駄にならずに済んだ。あつたけえ仲間ばかりで俺は嬉しい、嬉しいが、ホワイトデーは3倍返し”とか俺は知らない習慣だし、これからも一切認知しないからなティアマト。

それとシヨコラティエさんに改めてお礼を言いに行つたら、わりと直ぐに「ホワイトデーの事、黙つててごめんなさいね」と彼女は俺にそう言った。どうやら俺の勘違いをわかつていたらしい。厨房を貸してくれた時の笑みは、つまりそう言う事だったのだ。

言つてくれればよかつたのに、勿論そう言ったのだがシヨコラティエさんは、微笑み首を横に振つた。

「貴方が出会つたと言うチョコレートの精の集合体は、普通のチョコレートの精と違つて逃げたりせず、大勢の女性の元に向かい現れる事がございますわ。それがどうしてもは

わかりませんが……けれど私は、それはチョコレートの精が人の“想いの強さ”に惹かれるからだと思うんですの」

「想いの強さ？」

「ええ、一人一人の抱く想いの強さ。愛する恋人、愛する家族、そんな人達に美味しいチョコレートをあげたいって言う想いに惹かれると思いますの。チョコレートの精だつてもし食べられるなら、自分を一番必要としてくれる人に使つてほしいんじゃないかしら？ だからチョコレートの精は貴方の前に現れた。貴方が仲間の皆に美味しいチョコレートをあげたいって言う、想いの強さに惹かれて」

「やたら強くて襲われもしたんですが……」

「素直じゃないのかもしれないわ」

「なんじゃそりゃ」

「うふふ、けど貴方の想いを試そうとしたのかもしれないわね。勿論偶然かもしれない、けど私は貴方の気持ちは本物と思いましたわ。だつてあんなに楽しそうにチョコレートをやるんですもの。だからその想いに水を差すのは、無粋と言うものですわ」

なんか恥ずかしくなる答えを得てしまった。傍目からみたらルンルン気分だつたらしい。俺は旅の中表情だけじゃなく態度までわかりやすくなつてしまったようだ。

と言うかB・ビー連れてくんじゃなかった。全部聞かれたよ、ちくしよめ。

シヨコラテイエさんの話では、ホワイトデーは特にチョコレートにこだわる事はないらしい。どちらかと言うとクッキーや焼き菓子とかが主流だとか。どの道チョコレートは使うだろうからホワイトデーの時もアドバイス聞きたいからお世話になりますと挨拶をして俺達はチョコレイ島を発った。

そしてその翌月、今度はジータの方から俺達に会いに来てホワイトデーの菓子をせがむ。当然それを予想していた俺は、バレンタインより更にこだわり抜いた菓子を作り皆に配った。バレンタインで自らホワイトデーのハードルを爆上げしてしまった俺は、大いに苦労したがなんとか全員分菓子を作る事ができたのだ。

ホワイトデーが近づく中、再び俺はチョコレイ島に赴き数日シヨコラテイエさんに指導してもらった。その甲斐があつておかげでどれもこれも渾身の作である。チョコレートだけでなく、餡細工やビスケットも使用し組み上げたクリプトン型の菓子や、リユミエール聖騎士団をイメージした青い餡細工など、どれも団員をイメージした物であり反応も上々で俺も気分が良かった。

特に反応が良かったのは、ルナル先生とハレゼナだったな。

「ルナル先生、はいこれ」

「わ、私にも……!?!」

「そりやそうでしょ、バレンタイン貰ったし。美味しかったですよあれ」

「え、あ……うん、ありがとうええ!! え、はあ……!!?」だ、団長これ、え!!」

「うん、『ポポルサーガ』の本。前借りた事あるでしょ、だから一冊再現してみた」
「する普通!!? うわ、絵まで描いてあるっ!!?」

開いた本の台座はビスケット、そこから捲れるページは飴細工。模写に使用したインクはチョコレート。

シヨコラティエさんの下であらゆる菓子作りの手法を聞き、日々工夫を続けた結果の出来だ。当然味も良いので、目と舌で楽しめるようにした。最後にはシヨコラティエさんに「気が向いたらうちで働いてみない?」とか言われるぐらいにはなったのだ。

「食べるに食べれないわよこれ、もったいなさ過ぎて……」

「まあ好きに鑑賞したら食っちゃってよ。菓子だし。はい、ハレゼナはこれね」

「ヒヤツハアアツ!! んっだあこりやあ団長お——っ!! ま、まさかこれ!!」

「うん、小型『壊天刃型』のお菓子。ちゃんと刃も回るのだ」

「ちよ、ちよちよちよ超ラァ〜ブレイイ〜ツ!! スツゲエーなあ団長お——!!
サイツコーだぜえ!!」

「いやいやいや、どうなってるんだこれ……」

「パツと見これもチョコレートや飴細工で作ってるみてえだが……」

「兄貴相変わらず無駄に器用だよな」

「いや、器用とかそう言うレベルじゃないでしょこれ、凄すぎてちよつと引くわよ」
ラカムさん達には、感心されながらも若干引かれた。頑張り過ぎたようだった。まあ貰った人皆喜んでくれたからいいのだ。

あと当然フェザー君達にも友チョコ的なのを渡したのだが……。

「ユーリ君、これ受け取ってね」

「あ、ありがとうございます！」

「これもこだわりだぞ。君の剣と鎧をイメージしたんだ」

「こ、これは……！ 素晴らしいです団長殿！ ……あの、ところで団長殿」

「うん？」

「実は自分も……バレンタインの時も頂いてしまいましたし、その……これを、受け取っていただけませんか!？」

「……!! ……ッ!!」

「……うん、ありがとうユーリ君。あとルナル先生、何想像してるか知らないけど無言で拍手するの止めて」

「ん、ふつす……！ ね、ねえ団長、ちよ、ちよつと……こう……良い感じにユーリ君に近づけないかしら？ お菓子食べさせあたりとか」

「いやだよ」

「ル、ルナル先生……！　わ、私次の新刊のテーマ……き、決まったかもしれない……！」

ユーリ君達から返札を貰う俺達の様子を見ながらとんでもない速度でスケッチをするルナル先生が怖かった。しかもセレストもスケッチしてたし。

そんな一連の出来事だった。

■ ■ ■
四　楽しいバレンタインでしたね……

「バレンタインの時の君は愉快だったね」

バレンタインの時の事を思い出し話すと、コーデリアさんもその時の事を思い出したのかクスクスと笑った。

「私達がチョココレートを作っている間も何かしているとは思ったが、あんなに気合の入ったチョココレートを持つてくるのだからね。それはもう驚いたよ」

「なんかつい頑張っちゃうんですよね」

「あれは頑張り過ぎなの」

俺達の会話が聞こえたのか、マリーちゃんとカルバさんが会話に交じる。

「あたしが貰ったのなんて宝箱型な上にコインチョコ入りよ？　ホワイトデーなんて、

また宝箱かと思ったら開錠用に飴細工の鍵がセットになってるし、どう作るのよあんなん？」

「いやあ……なんか出来てしまつて」

「なんかで出来ちゃわないでよ。そりや嬉しかったけどさ」

「私もトラップチョコレート嬉しかったなあ」

「ああアレね……白黒のチョコブロック in ボンボンシヨコラ」

「そうそう、正しい順番でブロック分解しないと中心部のキャラメルソース入りチョコが割れて中身漏れちゃうやつ。中々面白かったぜ！ 美味しかったし！」

あれから一年近く経つのにちゃんと俺の作った菓子的事を覚えてくれている。マリーちゃんは呆れ半分だが、しかしその話を聞いていて俺は嬉しい気持ちになった。

「次に印象に残ってるのは……やっぱハロウィンかなあ」

「ハロウィンねえ……あれも確かに濃い一日だったわね」

思い出されるハロウインの事。マリーちゃん達も混ざり俺の回想はまた始まつた――

■ 五 ハロウィンメモリーズ

バレンタインもだがハロウインの時も楽しかったが大変だった……。あの時もジータに誘われたのだ。

俺達空の世界の住人は、住む島々が空域に点在し其々離れている事から季節感もバラバラであり、住民達の文化も違う事が多い。そのため空域で全体で共通する年中行事と言うのは、かなり限られてしまう。だがバレンタイン同様とある島を発祥としながらもその名前と習慣が広まりつつあるのがハロウインだった。

『来週ハロウインって言う楽しいお祭りがあるの。お兄ちゃんも一緒に楽しもうよ。ちやんと来てね!』

ハロウインが近づくある日、またもジータから届いた手紙には、簡潔にそう書かれていた。やはりこの時も「来てね」と言う可愛い文面から「いいから来い」と言うニュアンスを感じ取り、身の危険を感じ大人しく俺はジータの言う島へと艇を向けた。

ハロウインに関してこの時俺は全く知らなかった。ジータもザンクティンゼルを出てから知ったんだろう。と言うか手紙に書いとけよ、祭りの概要をよう。

そんなわけで俺“初”ハロウインだが、情報を団員の中で特に詳しかった、カルティラさん、コーデリアさん、おっさんの三人から集め挑む事になった。

それぞれの話を総合すると、菓子類のかき入れ時で変装がしやすく群衆にまぎれやすいのとか精霊の類が現れやすい時期、であるらしい。それぞれの分野が濃く出てし

まったのでよくわかったようなわからんような情報になってしまったが、とにかく大騒ぎな祭りで子供に菓子類を配るのはわかった。それを示すように手紙の最後に追伸で『お菓子を沢山用意しておくように!』と書かれていた。

用意するのは良いのだが理由を書いてない。何時もそうだあの御転婆め、説明がいつも不足してる。カルテイラさん達に聞かなかつたらどうなつていたか。

とは言え手紙書ききつて思い出したから急いで書いたのだろう、最初より文字が躍っている。

また祭りの島では、その一夜子供達は“お菓子ギャング”と化すらしいので、相当数用意した方が良いとのこと。もし菓子が無ければ恐るべき純粹無垢な子供による“いたずら”が待つという……。

しかし既製品の菓子では量を用意すると金がかかる。なので安く材料を多量に買ったカカオがまだ多量に残っていたのだ。これを使わない手はない。

俺とコロツサスは勿論、ザンクティンゼルからコロツサスに次いで多く調理係にもなっていたユグドラシルとセレスト、そしてコーデリアさんやブリジュールさん等の星晶戦隊（以下略）調理班フル動員であった。

皆の頑張りと俺もチョコレイ島での経験を活かした甲斐あって、大小様々色とりどり

種類豊富な菓子類が出来上がったのだが、島に着くまでの数日で数百キロは作ってしまった。我ながら夢中になり過ぎた。外に運ぶのに幾つ木箱まで用意しないといけない。菓子業者か俺は。

その中の幾つかは、エンゼラ食堂のオヤツコーナーに置いといた。多量の菓子を目の前にしてフィラソピラさんが目を輝かせていたからね。それに自分達でも食べたかったし。

だとしてもまだ多い。やはり作り過ぎだったが、まあ余ったら余ったである程度保存出来る様に作ったから大丈夫だろうと考えていた。

ところがどっこい、状況は俺の予想の斜め上に行く事になる。

ハロウィン当日団員達は、せっかくだからと各々仮装をしてハロウィン開催中の島に上陸し、この日のために用意した「ハロウィン仕様こだわりアカー」で菓子を運んで行く。と村に入った瞬間俺達目掛け子供の軍団が現れ突撃して来た。仮装して当社比ならぬ当団比更に愉快になった星晶戦隊メンバーが目立ってしまったのだ。

ニル達を出したハロウィン衣装のティアマト、自身の装甲にカボチャをイメージして装飾と塗装をしたコロツサス達。中でもコルワさん渾身の力作、妖艶なハロウィンドレスに身を包み演出で瘴気（無害）を出すセレストが月夜のハロウィンの雰囲気にあまりマッチし過ぎてしまい、子供だけでなく大人達まで集まってしまった。

えらく注目されてアワアワするセレスト、その姿を見てコルワさんも「やり過ぎたかもしれないわね!」とか自慢げに言っていた。いや似合ってるから別に良いんだけどね。

そのまま新手の菓子売りと思われた俺達。「売ってくれよ」と大人に頼まれ、「お菓子くれなきゃいたずらするぞ!」と子供に脅される。

思わぬ事態に狼狽えてしまったのだが、ここで生まれつきの商人カルティラさんが、爪弾くようにソロバン弾き、背負った太鼓打ち鳴らし、ハリセン振って千客万来呼び込んだ。

「こんだけ騒ぎになった以上売らな収まらんわ! せやけど逆にチャンスや、材料費分は売るで団長はん! 時間稼いどくさかい大急ぎで出店許可貰ってき!」

今からつすか!? と叫んだが、状況はそうする他なくなってしまうた。俺は慌てて祭の責任者と有って出店許可を貰う。

当然向こうも困惑したが、経緯を説明したら「初めてのハロウィンだそうだし、年に一度のお祭だから」と快く許可をくれた。

その後祭をのんびり楽しむ予定が一転お菓子売りの騎空団となった俺達。目立つ星晶戦隊達はあるだけで宣伝となり、他の団員も行列をさばくのに大活躍。お菓子は意図せずかなりの量を用意したので、道行く子供達には「試食」の名目で小分けにした焼き

菓子配つてハロウィンらしい事も出来たつちやあ出来た。一応ね

「どんどんリアカーから消えていくお菓子、中でも『チョコ菓子』は、話題を呼びみるみるうちに無くなった。」

そして何よりも大変だったのは、見事菓子を売りつくした後呆れた様子で現れたジータ達と出会つてからだつた。

「イオちゃん達に『何してんのよ』と心底呆れられる中、空になつたりアカーを見てジータが『……つまり今お兄ちゃんはお菓子の無い、『無防備』な状態なわけだね』とさりりと言つた。」

ジータの言つてる意味が直ぐにはわからなかつた。だがハロウィンの風習、配るべき菓子無き者の末路を思い出した俺は顔を青ざめさせその場から逃げた。

「あ、逃げた」

「追うよ、ルリアー！」

「え、あつ!?! は、はい!?!」

あの時の後ろから迫る追跡者の走る足音と「トリック・オア・トリートオオオ！」の叫び程恐ろしいものはない。

逃げながら後方のジータに向かい、菓子買うから待てと交渉を試みたがまるで聞かないなかつた。

「菓子なら用意してやるから待たんか!？」

「それも欲しいけど悪戯もしたい!!」

「盗賊かお前は!?! いや、待てその手に持つてるの……そのペンキどつから持つてきた

!?! 何に使う気だ!?!」

「トリイイイイックツ!!」

「だろろうな畜生め!!」

その後も追跡は続き更には俺を追う声が増えた。

「悪戯させろ——!」

「そうよ、大人しく捕まれ! アタシにもいたずらさせなさい——いッ!!」

「そうじゃそうじゃ——!」

「走り込みなら俺も負けないぜ——!」

何を思ったのかメドウ子にのじゃ子にフェザー君が混ざっていた。メドウ子とのじゃ子は、俺に問答無用に悪戯できると踏んで参加したのだろうが、フェザー君は一番意味を分かって無かった。

その後は……手心は加えてもらった。ほんのちよつぴりだけ。取り合えずペンキだけは、直ぐ落ちる奴にしてもらった。トホホ、である。

そんな俺の初ハロウィンだった。

六 楽しいハロウィンでしたね……

「あの時は中々の売上やったなあ」

ハロウィンの事を話していると、今度はカルティラさんも話に混ざった。

「かなり好評だったわね、あの店……リアカーだったけど」

「まあ露店やな」

マリーちゃんの言う様にあの時俺達は店を出すつもりは無かった。だから店と言え
るのは、ハロウィン仕様のリアカーのみ。それでもカルティラさんが居たので見事リア
カーでも店として機能した。

「村の人にも「是非来年も来なさい！」って言われちゃったからなあ」

「当然やるで！ 思いがけずの露店でアレだけ売れたんや、念入りに準備して挑めば
……にしししし……！」

今カルティラさんの頭には、きつと菓子類が売れに売れる光景が浮かんでるのだろ
う。俺もやる分には問題はない。それにカルティラさんの事だから抜かりはないだろ
うが、それでも皮算用にならない事を祈る。

「わ、私あんな服着たの初めてで……き、緊張したよう……」

「何言ってるのセレスト！ とつても似合ってたわよ。私の想像以上！」

「そ、そうかな……？」

「そうよ！ 今年はもつとオシャレするわよ。夏の水着も考えてあげるから楽しみにしてて頂戴ね！」

「み、水着……!? そ、それはあ……ひゃあ……！」

コルワさんに水着を作ると言われ、その姿を想像したのかセレストは、顔を真っ赤にした。真冬なのに暑そうにしている。まったく、可愛い奴め。

「それにしてもあの時のアンタの顔は傑作だったわね！」

「うるせいやい……」

「才前顔ガ地味ダカラ丁度良カッタンジャンイカ」

「うるせいやい！」

メドウ子がケラケラ笑うとティアマトまで来て俺をからかった。水性ペンキで顔に好き放題落書きされた俺の顔は、それはもう酷いものになってしまった。直ぐ落ちるペンキでよかった。次のハロウインはジータ用に用意しておこう……、もう悪戯は勘弁である。

「ハロウインが終わってから一気に時間が進んだ気がするなあ……」

「祭が終わったと思えば、年の瀬も目の前だからね。年末もだが、クリスマスも直ぐだつ

た」

「そうか、そう……クリスマスなあ」

コーデリアさんの言葉を聞いて思い出すクリスマスの出来事。あれは去年最後のちよつとした騒動だった――。

七 クリスマスメモリーズ

島の位置によって気温も季節もバラバラなファータ・グランデ空域でも、年の瀬が迫るとどこの島の気温も下がりだし、場所によっては雪が降り積もり、常冬の島でならより激しく雪が島を覆いだす。

そんな時期に開かれるのが祝いの日「クリスマス」。雪が降る季節に島で最も夜の長い「聖夜」を祝い家族が団欒する夜。この風習は恐らく年末年始に次いで空域の殆どで見られる行事だろう。

聖夜にはサンタクロースと呼ばれる白髭の老人が、トナカイが牽くソリに乗って世界中の眠る子供達へとプレゼントを配ると言われる。と言うか配ってる。

老聖人とも言われるサンタクロース、その存在の謎は多い。何処から着て何処へ帰るのか分からない。だが聖夜に良い子の元には必ずプレゼントがある。その事実がある

からこそ人々は、サンタクロースの存在を古より語り継ぎ、信じ、待ち望んだ。

発祥は不明だがそんな逸話が各地に伝わったからか、雪が降り積もるわけでは無いザンクティンゼルでも聖夜を祝う習慣はあった。何時からあるかはわからないが、少なくとも村の老人達の更の上の世代の時からこの習慣は根付いていたらしい。だからこの季節の村は賑わい、数少ない子供達は枕元にプレゼントが置かれるのを楽しみにする。

何よりもプレゼントを贈り贈られるのは、サンタクロースと子供だけではない。愛する人——家族、友人、恋人——その人達に感謝を込め、老いも若きもプレゼントを贈りあう。手作りする者、高価な品を買う者、形は其々でも思いは同じだろう。

そのためこの時期は、クリスマス商戦とも言われクリスマスに欠かせないプレゼントやパーティーグッズに御馳走を売る商人達があれやこれやと仕入れて売り出す。カルティラさんもこの時期大忙しであったのを覚えてる。まあ商人であるカルティラさんは、バレンタインもホワイトデーもハロウィンも大急ぎだったけど。

まあそんな事を行う聖夜だが、この時もまた俺はジータから手紙を貰う。

『もうすぐクリスマスだね。雪が降ってる島でパーティーして聖夜を皆でお祝いしよう！』

聖夜の日までに「地図」の島まで来てね！』

手紙にはそう書かれており、またしてもこの「来てね」に「来ないとわかってるよね？」と言う圧を感じ、気温のせいでは無く酷く身震いした俺は、大人しく地図の示す島

へ向かった。

ただ旅に出てから最初のクリスマス、俺もこれは良い機会だと思った。この時点で年の瀬、新年の足音も近くに聞こえる時期でザンクティンゼルとは違う意味本格的なクリスマスを俺は結構楽しみにしていた。

そしてある日の事、俺達は後日行かうパーティー用の食品やオーナメントを買っていたのだが、突然一人の老人が俺達を訪ねて来た。

「失礼、星晶戦隊（以下略）の方ですか？」

「はい？」

荷物を搬入している時に声をかけられ振り向くと、そこには立派な髭を腰にまで蓄え、赤い服を着たふつくらと優しい顔をした老人が立っていた。

「確かにそうですが、貴方は……あれ？」

「おや、君は……？」

お互い相手の顔を見てしばし記憶を手繰った。そう、俺達は何度か会っていたのだ。

「あつれ!!? え、ウソ!!? どうしてここに!」

「ああ、やはり君か! いやいや久しいのう」

「いや、ほんと! 今年はもう会えないもんだと」

「うむうむ」

「団長殿、お客様ですか！」

元気なユーリ君が俺達に気が付いて声をかける。その声を聴いてシャルロツテさん達他の団員も何人か集まってくる。

「ジミー殿、そちらのご老人とお知り合いでありますか？」

「そうそう、ザンクティンゼルからの付き合いでね」

「それじゃあ団長さんの故郷の方ですか？」

「いやいや違いますよ」

「はっはっは！」「ほっほっほ！」と笑う俺と老人。そんな俺達の様子に首をかしげるシャルロツテさん達。

「この人はサンタクロースだよ」

「……ん？」

「だからサンタさん」

「ほっほっほ……どうも皆さん、わしがサンタクロースじゃ」

俺がご老人——サンタさんの事を紹介するとこの場に集まった面々は、口をポカんと開けてサンタさんの事を見たのだった。

■

八 サンタクロースの正体は、サンタクロースでした

■
もう何年も前の事だ。俺はザンクティンゼルで聖夜を楽しみに待っていた。だが一つ問題があった。ジータが寝ないのだ。

「サンタさんに会おうの！」

そう言つてジータは、コーヒーを飲んだりしていた。彼女は聖夜の時こややつて何が何でも寝ようとしなない。寝ない、断固として寝ない。とにかくサンタクローズに会いたいと駄々をこねるのだ。

気持ちはわかる。サンタクローズに会いたいと思う子供は、空に溢れているだろう。皆聖夜の聖人に会いたいと思うに決まつてる。

が、しかしサンタクローズは“眠つた良い子”の下に現れプレゼントを置いていくのだ。このままでは、ジータはプレゼントを貰えない。それはよろしくない。

なので俺はこの時期になるとサンタクローズが来るであろう時間になるまでに、彼女と外で鬼ごっこ等で遊び抜き、疲れた体が冷えない内にビイと協力し風呂に入らせ、ホットミルクなど眠りを誘う食事を与え、聖夜の御馳走で腹が膨れたタイミグでフカフカのベッドに横にさせ、穏やかな子守唄を歌つてサンタクローズの事を適当に誤魔化し寝させる事が重要な仕事だった。

そしてこれら全てが終わる頃俺は、ジータ以上に疲れ果てジータの家から倒れそうに

なりつつも自室へと戻るのが恒例だった。

だがある年のクリスマス、その時もジータを眠らせる事には成功したのだが、俺自身は自分の家に戻る体力を失っていた。

疲れ果てた俺は、自室に戻らずジータの家のソファでグツタリとしていた。この時間となると聖夜とは言えここは田舎の小さな島、夜になれば子供でも当然皆寝静まる。そんな聖夜で両親不在の彼女の家は、とてもしんとしていた。一人と一匹が住むにはその家は広くそのため聖夜の静けさがより際立っていた。

自分の家に戻らないと——体を起こそうとしたが、ついに俺は限界が来てしまいそのままソファで眠りに落ちてしまった。だがソファに座ったままでの眠りは浅く俺は不意に聞こえた足音で目を覚ました。

「う、ううむ……ジ、ジータか……？」

「おやおや、起こしてしまったかのう？」

「……………誰ッ!？」

目の前に居たのは、赤い服に立派な白髭を蓄える老人だった。思わず叫ぶが、老人は焦らず騒がずそつと指を口にそえて「しー……」と言う。

「これこれ、大声を出してはジータちゃん起きてしまうぞ？」

「む……」

「ほっほっほ、一先ずプレゼントを置いてくるとしよう、少し待っていておくれ」

そう言うとその老人は、ゆったりと大きなプレゼント袋を担ぎジータの寝室へと入って行った。女子の寝室に侵入する老人、と言うとヤバイ感じだが俺は不思議と危機感を感じなかった。それは「この老人ならばそうして当然だ」と言う安心感を感じたからだ。これが俺達の初対面、サンタクローズとの出会いである――。

「――んで、その後俺ん家でちよつとお茶したのよ。したらサンタクローズって言うから、まあ驚いたよね」

「ジータちゃんは、尋常じゃなく気配に敏感でなあ。彼が遊んで眠らせないと家に入った瞬間ワシに気づいてしまうんじゃないよ。だから毎年助かっていたんじゃない」

「それ以来何度もジータが寝た後クリスマスマスに会ってさ。けど俺も島も出ちゃったし、今年は会えないと思ってたんだ、いやあ嬉しいな」

「……当たり前のように言うけどさ団長」

「うん？」

「この人が“サンタクローズ”？」

マリーちゃんがとてもサンタさんの事を怪しんでいたのは印象的だった。

「何処からどう見てもサンタさんだよ？」

「何処からどう見てもサンタだから怪しいのよ」

なんか尤もな事を言われてしまった。この時マリーちゃんだけでなく団員の中にサ
ンタさんの事を疑う人は少なくなかった。一方でサンタさんを目の前にして目を輝か
せる人もいる。

「ふわあ……！ ほ、本当にサンタクロース殿であります！」

「ほっほっほ……。シャルロットちゃんは……いや、もうシャルロット“さん”と言
うべきじゃない。うんうん、とても立派に成ったのう」

「じ、自分を知ってるでありますか!？」

「勿論じゃ。君が毎年ワシの事を待っていてくれたのをよく覚えておるよ。枕元にお礼
の手紙を書いて置いてくれた事もあったのう」

「か、感激でありますう……っ！」

「勿論他の人達も覚えておる。色んなプレゼントを用意してあげた……皆本当に立派に
成ったのう」

サンタさんは全ての子供の憧れ、そしてサンタさんにとってこの世界全ての子供達は
愛すべき友達。全ての子供を知っており、かつて子供だった人を覚えている。サンタさ
んを知らない人は居ない、そしてサンタさんが知らない人もいないのだ。

「……なんかまだ腑に落ちないけど、まあいいわ」

「ほっほっほ……騒がせて申し訳ないのうマリーちゃん」

「……あたし、まだ名前教えてない……」

「やっぱ本物なんだよマリー」

「ええ〜……」

「それよりサンタさん、今日はなんの御用ですか？ 会えるのは嬉しいけど、まだ聖夜に

は早いのに」

「うむ……実は折り入って君に頼みたい事があるんじゃない」

「頼み、ですか……？」

サンタさんが話し出したのは、ある島で困っている人達が居ると言う話だった。

その島は小さな雪の降る島なのだが、別に魔物などで困っているのではない。だがどうやらその島でのクリスマスが、極めて味気ないものになるかもしれないと言う問題が起こつていると言うのだ。

聖夜の御馳走に欠かせないのは、甘いケーキであるのは多くの島で共通している。その島でも勿論そうなのだが、小さくほぼ年中雪に覆われた島では農業が難しく小麦粉などの多くは輸輸入品に頼っている。なので特にケーキを作るような祝いの時期は、多めに小麦粉を持つてきてもらおう事が恒例なのだが、去年の冬の時期不運にも手に入った小麦粉などの数が少なくなつてしまったのだ。

原因はエルステ帝国によって空域内での情勢が混沌としていたためである。過激な

侵略を続けるエルステ帝国の活動圏内を避けるために各地の貿易ルートの状況は不安定となり、特に小さな島への輸出は不規則になっていた。

一応その島は一切自給自足が出来ないわけでも無く蓄えもあり生死に関わる事態では無かったのだが、御馳走を用意し聖夜を祝う余裕がなくなっていたのだ。

大人は勿論子供達は、聖夜に美味しいクリスマスケーキが無い事をとても残念がった。そしてそれを知ったサンタさんは、何とか出来ないかと悩み俺達を訪ねたのだ。

「しかしなんでまた俺達に？」

「この事をよろず屋さんに相談したら、君達を頼ると良いと言われたんじゃ」

「シエロさん……」

あの人はサンタさんとも知り合いだった。なんなんだあの人の。

しかし話は分かった。サンタさんらしい相談でどこか俺はホツとした。クリスマスが近づく中でサンタクロースの頼みを断る等誰が出来ようか。これは依頼ではない、俺はサンタさんの「頼み」を聞くことにした。

「つまりは、その島で無事クリスマスを祝えるように御馳走、特にケーキを用意してあげればいいわけっすね？」

「うむ、その通りじゃ。君達も聖夜の予定があつて申し訳ないのじゃが、どうじゃろう……頼めるかのう？」

「お任せあれ、俺とサンタさんの仲じゃないですか！」
「ありがとう！ 君達になら安心して頼める」

俺の返事を聞いてサンタさんはとても嬉しそうだった。

また頼みを受ける理由はもう一つあった。その件の島と言うのがジータが待ち合わせに指定した島だったからだ。

何故小さなその島で待ち合わせを？ 普通そう思うかもしれないが、その島はノース・ヴァスト程ではないがフータ・グランデ空域の北に位置しており、かと言って吹雪いたりもせず天候も安定しており美しく穏やかなホワイトクリスマスを過ごす事が出来るため、旅の最中に聖夜を迎える騎空団などがゆつくり落ち着いて聖夜を祝うため立ち寄る事がある。ザンクティンゼルの雪国版と言った感じだろう。

ジータはその話を聞き、そしてその時彼女と俺達が落ち合うのに丁度良い位置に島があったためにその島を待ち合わせの場所に指定したのだ。

サンタさんと出会ってから直ぐにその島へ移動した俺達は、島唯一の村に辿り着いた。既に村ではクリスマスマスに向けて飾りつけが行われていた。民家さえも煌びやかに装飾がされ、夜になれば魔法のランプでライトアップもされる気合の入れようである。

村自体は特別名所と言うわけでは無いが、それでも自分達も楽しく過ごすために、そしてこの特別な時期に村を訪れてくれた人のための飾りだ。

「先ずサンタさんの言っていた事の確認をしよう」と村長に会う事にした。急に訪ねた俺達を村長さんは、快く歓迎してくれた。そして直ぐに材料が足りない所為でケーキが作れないと噂で聞いたと言うととても驚いていた。

「な、何故その事を？」

「えっと、実は困ってる人達がいるから助けて欲しいって頼まれてまして。ちよつとお話を聞かせてもらえませんか？ まあお節介かもしれませんが、手助け出来る事があれば手を貸しますから」

「な、なんと……！」

手助けに来た事を話すと村長は更に驚いた。それもそうだろう、特にこの事はどこかへ依頼として出したわけでも無い。村長さんから見れば、俺達は風の噂で困ってる人が居ると聞いて助けに来たお人好し集団だろう。

だがお人好し、大いに結構である。

「この雪に覆われた島で聖夜は特別です。普段食べられない御馳走を用意して皆で楽しむ祭でもあります。特に子供はそれを楽しみにして……。村の子供達は、皆良い子ばかりでケーキが用意出来ないと知っても文句一つ言いません……。しかし、だからこそ辛いのです」

村長の家族にもお孫さんに小さな子供が居るらしく。その子の事を思うと申し訳な

い思いで胸が痛むと言う。

大人を不安にさせまいと我儘を言わないように努める子供、それを見て胸を痛める大人達。確かにサンタさんが不憫に思うのも無理はない。

「任せて下さい、ケーキは俺達が作りましょう」

俺は荒事は嫌いだがお菓子作りは大好きだ。……本業では無いが。

この為に材料はたっぷり買い込んだ。それにまだチョコレイ島のカカオ豆が残っていたのだ。やるなら盛大にやってやろう。俺達は行動を開始した。

■ 九 All I Want For Christmas Is……? ■

星晶戦隊（以下略）が島に来た後聖夜の日に現れたジータ達は、島に着いてから実に奇妙な光景を目にする事となった。

雪は積もり気温は寒いが降雪は無い聖夜、村の広場に大きなテントが立てられておりそこに村の住民が集まり寒さも忘れワイワイと賑やかに過ごしていたのだが、その中心の集団が見知った者達だったのだ。

「さーさーッ！ 世にも珍しい星晶獣の作った美味しいケーキやでえ！」

「と、特製チョコレートケーキもありますよ……」

景気よく住民達を呼ぶカルティエラ、その横でクリスマス衣装でモジモジとじつつ呼び込みをするフェリ。

「さあ、そこのお嬢さんもお一ついかがかな？」

「どれもとことん美味しいケーキばかりですっ！」

コーデリアとブリジールの二人がサンタとトナカイの衣装で切り分けたケーキを子供達へ配る。

「大人のみんにゃには、こっちのラム酒たっぷりのパウンドケーキもおススメだにゃー！……うひっく！」

「なんでもう酔ってんのよ!? まさかあんたつまみ食……いや、つまみ飲みしたんじやないでしょうね!？」

アルコール入りケーキの試食品を配る千鳥足で配るラムレッダとそれを慌てて追いかけるメドゥーサ。

「こちらにはケーキ以外のお食事も用意してあります! どうぞ食べて行って下さい！」

「タンセイコメテ (W、ω、W) ツクツタヨオ」

ユーリが大きな七面鳥の丸焼きを切り分け、残ったガラを使いコロツサスがスープを温める。

「うんっ！ とつても似合ってるわよ、まるでお姫様ね！ 聖夜にピッタリのドレスだわ！」

「こつちのおにーちゃんも、バッチリきまつてんねえー☆ 王子様みたいでちよーカッ
コいいよっ！」

コルワとクロエが村の子供達を特製の衣装で着飾ってあげている。

「おつとツ！ やるなお前達！ こつちも反撃だ——っ！」

「いよつと！ さあこつちのが胴体だ、そこにその頭乗せちまいな」

「飾りもあるから、みんなで色んな雪だるまをつくらう」

フェザーが村の子供達と雪玉を投げ合い、B・ビイとゾーイは子供達と雪だるまを作っている。

星晶戦隊（以下略）の団員達が全員総出で村の聖夜を祝っていたのだ。

「おいおい、こりや何事だよ……」

「ミンミンミン！ ミンミンミン！ ミンミンミンミンミン！」

「うん……？ うおっ!？」

「あ、ラカムさん」

村の賑わいに驚いていたラカムの耳に陽気な歌声（？）が聞こえて来た。何かと思いその声の方を見ると、そこにはソリ型リアカーを引いてるトナカイ衣装に赤鼻を付けた

団長と、彼の周りをクルクル回るサンタ坊を被ったミスラ、そしてソリ型リアカーに乗った聖夜の衣装に身を包んだカリオストロがいた。

「あ、兄貴？ それと、カリオストロ？」

「ようビイ久しぶり」

「ヤッホー、トカゲさん☆ メリークリスマス！」

「ミミーンミミミンミッ！」

「お、おう……ミスラも久しぶり。いやそれよりも、その格好」

「……余興だっておっさんに無理やり着せられた」

「カリオストロは、団長トナカイさんを従えるぶりていサンタさんだぞ☆」

「いや、そうじゃなくて」

「ほら、カリオストロの可愛さって最早それが世界にとってのクリスマスプレゼントみたいところあるから……ね☆」

「ね、でもなくてよう……」

「お兄ちゃん凄いい合ってるね！ カリオストロもとっても可愛いよ！」

「ジータお姉ちゃんありがとう！ カリオストロ嬉しい！」

「……俺は喜んでいいのだろうか。まあいいけど」

「それよりも坊主……こりや、何事だい？」

「ああ、これは——」

団長はジータ達にこの経緯を説明した。サンタクロースの事は誤魔化しながらも、聖夜を祝えない人達を助けに来たと言う事を言うと、ジータはそれに感動したのか自分達も手伝うと言いだした。

「このままみんなで聖夜のパーティーだよ！」

そうしてそのままジータ達も交えての大きな祭となった小さな島の聖夜のパーティー。その村始まって以来一番賑やかな聖夜のパーティーに誰もが喜び、子供達は疲れて眠ってしまうまではしやぎ倒した。

「ありがとうございました……。子供達もあんなに喜んで、なんとお礼を言つて良いか」子供達が眠る頃、村長だけじゃなく村の大人達に団長達はお礼を言われた。団長は「サンタクロースに成れたみたいで楽しかった」と言つて満足げに笑つた。

団長達はエンゼラにジータも連れて戻り、残りの聖夜の時間を食堂で二次会を開き過ぎす事にした。残つた料理を食べながら各々用意したプレゼントを交換したり、大人達は酒を飲んで賑やかに語り合う。

村でのパーティーにも負けない賑やかな様子を見てほほ笑む団長。少し疲れた彼は、食堂の窓際でホットココアを飲んでいると外から鈴の音が聞こえて来るのに気が付いた。

窓を開けて空を見上げてみれば、夜空を一台のソリが飛んでいくのが見える。すると

夜空からしんしんと雪が降り始めた。月の光がゆっくりと降りて来る真っ白な雪に反射し、まるで宝石が空から降ってくるようだった。

「わあ！ 雪、雪だよお兄ちゃん！」

それに気が付いたジータが団長の元に駆け寄った。他の団員達も同様に降り始めた雪をみてその光景に心奪われた。

きつとこれはサンタクロースからのプレゼントだろう、団長は直ぐにわかった。

「メリークリスマス」

ココアで乾杯の動作をしてこの日一番の功労者へ向け聖夜の祝いの言葉を告げる。また来年も会いましょう、そう思いを込めて。

■ 十 楽しいクリスマスでしたね……

クリスマスの事を思い出すと村の子供達の笑顔も頭に浮かんできた。あの笑顔を見ただけでサンタさんの頼みを聞いて良かったと思う。

しかし同時に去年の一年間を思い起こして気が付いた事がある。

「……なんか俺去年お菓子作ってばつかったな」

「何時でもお菓子専門店に開けるな相棒」

B・ビィにそう言われるが複雑な気持ちだ。忘れそうになるが俺は、星の島イスタルシアを目指しているのである。ちゃんとそう言う活動してるからね、ええちゃんと。別に全空一の菓子職人になろうとしているのではない。

「最近じゃ「お菓子作りは星晶戦隊（以下略）」とか噂で言われてるし……色んな島のイベントで料理出してくれとか屋台出店の依頼貰うけど、俺達お菓子屋じゃなくて騎空団だってわかってんのかな……」

「わかってんじゃねえの？ 騎空士もやってるお菓子屋みたいな感じで」

「お菓子も作ってる騎空士なんだよ！……いや、それも違うけど！」

俺は騎空士なんだ、誰が何を言おうと騎空士なんだ。

「だ、大丈夫だ団長。団長は何時も頑張ってるじゃないか。ちゃんと皆騎空士として団長を頼っているさ！」

「フェリちゃん……っ!!」

ほらこの騎空団の良心よ。B・ビィとは違うのだよ、B・ビィとは。

「まあアンタにお菓子作りの依頼が来てる事には変わらないけどね」

「言うなよ……」

メドウ子に指摘され直ぐに現実に戻された。

「まあ精々今年も腕を磨いてお菓子を作る事ね。アタシのためにつ！」

「あと妾のために！」

「このお菓子ギャング共め……！」

今年のハロウィン要注意人物だからなメドウのじゃコンビは。取り敢えずジータ共々真っ先にお菓子渡ししていたずらを封殺せねばなるまい。

「なら私も期待しておこうかな？」

「コーデリアさんまで……」

何やら嬉しそうなコーデリアさん。そんなにお菓子好きだっけ？

■ 十一 おめでとうございます

■ 過ぎた一年が妙にお菓子ばっか作っていた事を自覚していると、そろそろ日の出の時間となってきた。

「さてそろそろだ。日の出はあっちだからな」

「……人間共がみーんな同じ方向見てるわ。変なの」

俺達だけじゃなく、他の人達も日の出の瞬間を見逃さないように日の出の方角を向いている。メドウ子の言う通りそれはちよつと不思議な光景かも知れない。しかしこれも風物詩と言うものだ。

「人にとって新しい年の始まりを自覚できる良い機会なのだ」

「日の出見なくなつたつて新年は新年よ」

「そう言う事じゃないのさ」

星晶獣の感覚では、人の時間の感覚は刹那的だ。だから人が行う節目の行事と言うのが理解出来ないのかもしれない。

「お前も今の気持ちで日の出見たら今までとは違つて見えるんじゃないか？ 初めてだろう、こんな賑やかに新年迎えて日の出見るの？」

「そうじゃぞメドウ子。人の風習に従つて自然を楽しむと言うのも『風流』と言う物じゃ」

「そうかしら……」

「まあ見りやわかるさ……フウウ」

しかしメドウ子ほどじゃないが、確かに今日は底冷えする寒さだ。夜が明ければ多少は暖かくなるだろうが、艇に戻つたら暖かい飲み物を淹れよう。

「……何よアンタ、寒いのか？」

「あ？ いや寒いってわけじゃない、今日は冷えるなつて思つただけ」

「寒いんじゃないの、コレ返すわよ手袋」

「いいよ別に、辛いわけじゃないし」

「むう……」

ザンクティンゼルではあさんに弱体効果付与への耐性を付けるため“凍結”付与されたまま一日放置された事に比べれば何と云う事は無い。

だがメドウ子是不満げだった。すると彼女は、不意に片手の手袋を外すとその手で俺の片手を包むように握りしめ、そのまま俺の腕も包むように体を密着させた。

「……それじゃお前が手冷えるだろ」

「こ、こうすればアタシも暖も取れるし、アンタも冷たく無いでしょ」

「おいおい……」

「いいから！ ……大人しく握られなさい。アンタ達人間なんてね……あれよ、油断すると簡単に風邪ひいちゃうんだからね。アンタは、その……団長なんだから、それは困るでしょ……」

「……ん、わるい」

「謝らないでよ……馬鹿ね」

手袋で温まっていたのか、小さなメドウ子の手は思ったよりも暖かい。

「……では反対側は、私が温めよう」

「え？」

すると反対側に立つコーデリアさんが何を思ったのか、メドウ子と同じように空いて

いた俺のもう片方の手を握りしめ、そのまま俺の腕を包むように体を寄せた。

「……あの、コーデリアさん？」

「折角だから両方温めた方が良いだろう？」

「いや、そう言う事で無く……」

「ふふふ……君は暖かいな」

心なしか顔が赤く見えるが……まあ暖かいのは確かだ。その代わり両サイドから体を固定され身動き出来ん。

「団長殿！ あちらを！」

「おっ！」

俺が身動きが取れないでいると、ユージ君が興奮気味に空を指さした。周りの人達もそちらを見れば、夜の暗闇が徐々に晴れて行く。水平線から眩しい光が昇る。

朝日が昇る。新たな年最初の太陽、初日の出だ。

暦では年が明けたのはわかっていても、これを見るとやはり改めて新年を迎えられた喜びを感じた。

太陽の姿が半分以上出てくると周りでも歓声を上げる者、朝日を拝む者、人其々で色んな反応があつた。

「綺麗だねえ……」

「……そうね」

「おっ」

「あ、ちが!？」

眩しさに目を細めつつその神々しい光を浴びながら思わず言葉が漏れる。するとメドウ子もまた俺の言葉に答えてくれた。きつと思わず答えてしまったのだろう、俺が意外そうな顔を見ると、彼女は気恥ずかしいのか顔をブンブンと振った。

「ま、まあまあって言う意味だから!？ 勘違いしないように! いいっ!？」

「わかってるって……けど、来て良かったら?」

「……ふん」

それ以上は何も答えず、メドウ子は朝日を眺めていた。ただ意趣返しのもりなのか少し強く俺の手を握り絞めた。少し痛い。

しかしふと思う、この時間がどれ程平和で素晴らしい事なのかと。

俺の周りには、コーデリアさん達がいる。そしてティアマト達もいる。人ではない存在が俺の周りに当たり前のように集まり人と語らう。

星晶獣とは神秘の存在……のはずだ。俺はそんな印象もう微塵も無いが——しかしそれは星晶獣でも変われると言う事なのだろう。神秘も良いが共に生きる事が出来るのも悪くない、ティアマト達と出会ったからそう思える。口には出さんけど。

「今年も頑張るかあ……」

俺が嫌がってもどうせ新しい星晶獣がトラブルと共に来たりするだろう。妙な生い立ちや事情を抱えた人が仲間になったりするだろう。

なら新年の抱負は「頑張る」だ。諸々全て、俺に降りかかる災難全部まとめて頑張つて受け止める。そうする事にする。

まあ嫌なもんは嫌なので普通に弱音は吐く。俺だつて人間なんだい、弱音を吐いて何が悪い。

「さあて、そろそろジータと合りゆ——」

「おにい——ちゃんっ!! み——つけっ!!」

「げべらあ!?!」

「団長殿お——!?!」

「あ、兄貴い——!?!」

背中に突如衝撃が走る。俺が悲鳴を上げるとユーリ君とビィが叫ぶ。そして鋭く重い衝撃、背骨がどうにかなりそうなのこのタックルとこの声は間違いない。

「ジ、ジータ……人込みで背中にタックルは、危ないからやめなさい……」

「えへへ、ごめんね!」

返事だけは良いなこのリーサルウエポン。

両サイドからコーディネリアさん達に捕まれてなかったら倒れてたろう。偶然とは言え助かった。

「それよりもお兄ちゃん、初日の出すつごい綺麗だね！ ザンクティンゼルで観るのはまた違って見えるの！」

「そうだな、あたた……」

「兄貴平気か……？ 結構勢いあつたけど」

「ああ、なんとかかな……」

「んもう、ジータったらお兄さん見つけたからって走らないの！」

「なんか大型犬みたいだったな」

「犬扱いは酷いよラカム!？」

突撃して来たジータに遅れカタリナさん達も俺達と合流できた。一気に二つの騎空団が合流して、更に賑やかで大きな団体が変わる。

「やれやれ……それじゃあ初詣に行きますかね」

「うんうん、そうしようそうしよう！」

「初詣の後だけどうする？ 俺 “おせち” 用意してあるけどエンゼラ来るか？」

「良いの？」

「多めに作ったからな。そっちに予定が無ければ」

「いくいく！ 勿論行くよ！」

「それならこつちからも料理持参すつか」

「そりや良い。なら俺は酒でも持つてこうかね」

「おしやけなら幾らでも歓迎にや！」

「ラムレッタ殿、あまり新年から飲み過ぎはいけませんよ？」

「にはやは、シャルロットちゃんはお堅いにや。しえつかくのお正月なんらから、美味しいおしやけを飲みまくるのも立派な正月の風物詩い……」

「……………」

「にやあつ!? だ、団長きゆんがゴミを見るような目を!？」

「ラカムさんやオイゲンさんの話に乗っかり新年早々飲む気満々のラムレッタ。そしてそんな調子で吐きまくった去年一年。まるで学習していない。」

「……今年ラムレッタの酒代は、大幅に削る方向で」

「ぴにやあ!?! お、お許しを!?! ちゃんと自重しますにや、飲み過ぎにやいように頑張るからそれだけは、どうかそれだけはあゝ……!?!」

「それ去年何度も聞いたあ……」

「今度はほんとだから、ほんとのほんとにやあ! 鉄よりも固い決意だから、新年の抱負

だからあく！ だから、だからお許しをおく……！！」

腰にしがみ付くラムレッダを引き摺りながら皆で移動する。

どうせこう言ってもアルコールの香りを嗅いでしまえば、そのゴムの様に柔らかい鉄の決意”も簡単にブレブレにぶれるだろう。それはもうブレブレに。

まあオイゲンさん達も来るなら、禁酒の話題など野暮だろう。追加で肴を作った方が良いでしょうが、それと一緒にバケツを用意しておこう。被害は最小限に抑える。

「人間って愚かね〜」

「それもまた愛らしい人の一面かもしれんほう」

そんなラムレッダをメドウ子達は、呆れながらも生暖かい目で見守っていた。

「新年早々、こんな調子かあ……」

「はっはっは……私達らしい一年の始まりだね団長」

「そんな笑ってえ……」

「ふふ……改めて、新年おめでどう団長。今年もよろしく」

何時の間にやら日は更に昇り、朝日が俺達を照らす。その日の光を浴びながら団員達はこの後何を食べるか、何を飲むかとワイワイ賑やかだ。

確かにコーデリアさんの言う通り、俺達らしい一年が始まったのだ。ならば言おう、俺だけでなく、仲間皆に幸多い一年になるように祈りも込めて。

「新年、あけましておめでとございます」

スーパーザンクティンゼル人の軌跡 Ⅲ 怒りのジャングル

■ 一 運命の出会い（うほほい）

■ 獣の声、鳥の羽ばたき。草木の揺れる音、流れる大河。

■ ここはジャングル、鬱蒼と茂る熱帯のとある島。秘境と言われたこの地に、生態調査の依頼を受けたとある騎空団が立ち寄った。

■ 湿気が高く、真面な地図も無い熱帯の島。そんな島に上陸した騎空団の面々は、まず人の通れる道を探す事とした。

■ だが人の住まぬ自然の中、どうやって道を探るか。

■ 只管に道なき道を行き、新たに開拓する？

■ 悪戯に歩き、彷徨い続ける？

■ 否、この騎空団はただの騎空団ではない。

■ そう、この騎空団の団長は、ただの団長ではない。

「うほ、うほほ、うほうほ、ほほっ？」

『うほっ！ うほほうほほ、うっほほほほ、うほうほほ』

その男は人の子供ほどの体格をした黒い毛皮に覆われた生き物と奇妙な言語で会話をしていた。

まるで理解できない奇妙なもの、言語とすら言えない気もするその言葉で一人と一匹は会話をしているのだ。

「うほほい、ほほほっ！ うほ、うほほ！」

『うっほほ！ うほほー！』

「うほほ……うん、こっち行けば結構開けた道出れるつてさ」

「いや、意味分からないわよ」

何事もなかったかのように喋る少年、団長を見てマリーは呆れて呟いた。

■ 二 お困りならば星晶戦隊（以下略）

■ — 数日前、とある島。

「どうもみなさん、毎度おなじみよろず屋シエロちゃんですよ」

小さい島で魔物討伐の依頼を終えた俺達は、宿の食堂で休みながら依頼の報告と新し

い依頼の話をしてエロさんから聞いていた

人数だけなら多いとは言えないうちの騎空団だが、その殆どが星晶獣でありティアマトのニル達、ゾーイのデイとリイ、メドウ子とメドウシアナ等更に数がプラスされる上に省エネでもサイズがデカイので相変わらず食堂にいるだけで注目の的である。

と言うか何時もよく入れるなと思う。なんかコロツサスとか普通に扉潜れてるんだけど、そこらへん俺もよくわからん。

そんな風に目立ちながらもいつも通りシエロさんと仕事の話を続ける。

「今回のご依頼もお疲れ様でした。ご無事なようで何よりです」

今回はまあまあ普通の依頼だった。魔物を倒すだけでいいのだから。ただその数が洞窟埋め尽くす程とは思わなかったけど。

さて俺達とは言えば、飯を食いつつ新しい依頼の話を聞く。こちらは1千万と数百の借金を持つ身、依頼が終われば次の依頼とポンポンとこなしていきたい。

「ミンミー！」

「ミスラさんもお元気そうですねえ」

シエロさんと俺の間を楽しそうに飛び回っている歯車がいる。ミンミン元気な歯車は、ガロンゾにいた星晶獣ミスラ——の、省エネ個体である。

ガロンゾで修理したエンゼラに乗って旅立った俺達だが、当たり前のように俺の上でク

ルクル回りながら付いて来てた。ガロンゾ滞在中ずつとそばにいた所為で全然誰一人気が付かなかつたので驚いたもんだ。

何でついて来たのか聞いたら「楽しそうだったから」との事。省エネとは言え星晶獣ってそんな理由でほしいほい仲間になるもんだっけ？

あと省エネと言う現身と言うか独立した個体になった省エネミスラは、ガロンゾより他の島を見てみたいらしい。なおこの省エネミスラは、ガロンゾを離れても問題ないらしいが一方でミスラとしての能力も殆どないのだが、一回だけならミスラと同等の“契約”を行う事が出来なくもないらしい。ただし凄く疲れるからやりたくはないようだ。俺もそんな力使いたいとはあんま思わん。

つまるところ、今のミスラは“マスコット”のポジションとなつたわけである。

「討伐した魔物の数が確認され次第報酬を払わせていただきますね。それと討伐数が目標より多い場合、多少色を付けさせてもらいます」

「やったぜ」

「それで次の依頼のことですが、今回も色々とごさいますか……これなんてどうですか？」

そう言ってシエロさんさんが取り出した依頼書。それを受け取り俺は向かいに座るカルテイラさんに渡した。

「なになに……『島の生態調査依頼』？ なんやこれ、学者の仕事と違うん？」
「実はですね〜」

シエロさんが言うには、半年程前に発見されたとある島、その本格的調査計画が各分野の学者達によって練られているのだがどうしても島の情報が足りないと言う事でこんな依頼を学者達が出したらしい。

「しかも学者連中の同行者は無し、これうちらだけで調査せーちゆうことやろ？」

「そうですね〜。どちらかと言うと地図などを作成する情報が欲しいようですので」

「まあそれは分からんでもないけど……おつ？ 遺跡調査も込みなんか」

「遺跡？ ねえ、あたしにも見せて」

「ほい」

遺跡と聞いて興味を持ったマリーちゃんやカルティラさんから依頼書を受け取った。隣に座るカルバさんと一緒にその内容をまじまじと見る。

「本当だ、遺跡調査ってある……」

「島の発見者が騎空艇で島を外から観察した際、遺跡らしきものが見えたとの事です
〜」

「らしき、なんだね」

「島の気候の所為か日中も濃霧が出る事もあるようでして、正確には確認が取れていな

いようなんですよ。それとも一つお話がありましたですね〜」

「まだ？」

「こちらの依頼書なんですが〜」

新たに渡された依頼書、それを受け取り内容を確認する。依頼主は同じであった。

「……所属不明艦？」

「ええ、そのようで〜」

「団長」

眉をひそめた俺を見て、コーデリアさんが手を伸ばした。俺はそのまま依頼書を渡すと、コーデリアさんはそれ読み、周りの皆も覗き込んだ。

「最近になって武装した大型騎空艇を1度確認、所属不明、目的不明、交戦は無し……」
「つまり見たって事以外に情報ないじゃないの」

「武装した艇って……戦艦って事ですか？」

「そう思つてよろしいかと〜」

最近になって発見された島。無人であり、まだ人が上陸していないはずの自然ばかりの島の近くで何故戦艦が発見されたのか。

島の上陸調査のため外から情報を集めるために島の近くへ来ていた観測艇が発見したらしい。その戦艦は発見後直ぐに姿を消した。観測艇は小型で非武装であり追跡は

危険と判断した。そのためこれ以上の情報は無い。

「……どちらかと言うと、今後島を調査するための安全確保。生態調査なんかは、ついででって感じか」

学者達は島に行きたい、だがその島は情報のない前人未到の島。それだけならまだしも、謎の戦艦。学者達だけで上陸するには不安が多い。そこでどこぞの騎空団に事前調査と戦艦の脅威を確認してもらおうと言うのがこの依頼だ。

「学者連中が同行して万が一危険があると困るし、危険に慣れっこな騎空団にまずは任すわけね」

「どうでしょうか。実際のところまとめて一つの依頼と言う事になるのですが」

「なるほどね……数日以上以上の調査は確実、所属不明勢力との戦闘も考えられる内容だけでも」

「見返りはそれなりにあるな」

B・ビーのいう通り内容に見合った金が入る。それだけでも今の俺としては受ける価値はある。

「依頼者さんも依頼を受けた騎空団のリスクを踏まえて、もし遺跡調査の際に宝石類などを手に入れた場合それも報酬にして構わないとのことですよ」

「マジっ!?!」

「マジですよ〜」

シエロさんの補足情報にマリーちゃんが食いついた。

「ただ一度は歴史資料としての鑑定や調査はさせてもらおうそうですね〜。余程歴史的価値があつた場合は、報酬としてはお渡しできないとの事ですが……」

「オツケオツケ〜それで十分よ！ ようは儲けが出る分手に入れれば良し！ 団長この依頼受けましょ！」

「私も興味あるな。誰も入ってない遺跡とか気になるじゃん」

流石トレジャーハンター、食い付きが凄い。

「言われなくても受けるさ。こっちは頼もしいトレジャーハンターが二人もいるからね」

「そう来なくっちゃ！」

「ミミ〜ン！」

「お前はお留守番」

「ミ〜ン……」

「その代わりエンゼラに残った皆の手伝い頼むよ」

「ミンツ！ ミミミ〜ンツ！」

掌サイズの小さなミスラは、まだ外で本格的な依頼に連れてく気にはならない。しか

も今回は未開の島、何があるかわからない。

始め本人は不服そうだったがエンゼラでの仕事を頼んだらすっかりその気になって高速回転を始めた。ミスラの気分は回転の速さとそのキレでわかる。今は上機嫌だ。

「てなわけでシエロさん、依頼お受けします」

「ありがとうございませうでは、よろしくお願いしますね」

前人未到の島、謎の遺跡、所属不明の戦艦。

俺達は一路それらが待つ島へと向かい、上陸班とエンゼラでの待機と上空からの調査班に分かれ活動を開始したのだった。

三 それ行け探検隊

我ら「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z.O.Y.」。そして数百万の借金に最近一千万を上乗せされた団長の俺。

そんな俺達が依頼を受けて訪れたとある熱帯の島。まだ真面な調査が行われていない自然の残る島。あえて例を挙げるなら雰囲気としてはルーマシー群島に近いが、こちらには更に熱帯の気候だ。また土地も平坦でもなく結構な高低差がある。ルーマシーと比べても湿度が高く、比較的降水量も多い。だからか植物の種類もがらりと様子が変わ

る。

俺達はそんな島の生態調査と地図の作成に訪れたのだ。今後の調査のための先遣隊のようなものである。

島の大きさは大きいとは言えないが、生い茂る草木の所為か実際よりも広く感じる。山に近づき傾斜が出てくると、足の歩みも遅くなりがちだ。うかつに動けば直ぐに迷い帰れなくなるだろう。

その為に俺達は道に目印になるものを付け進んだ。木に印をつけ布を結んだり、木と木をロープで繋いだりと工夫し、同時に地図も作成する。

依頼のメンバーは俺とB・ビィ、そしてトレジャーハンター二人、土地的に相性の良さそうなユグドラシル、空を飛べるのじゃ子、荷物の運搬として体力のあるユーリ君とフェザー君、そして最後に調査のスケッチを残す記録係としてルナルさん。

残りのメンバーはエンゼラで待機しつつも、上空で島の観測調査を行う。

のじゃ子を連れて来たのは、上空での観測調査中のエンゼラを確認する目的もある。空を飛べる彼女なら、望遠鏡を持たせれば空から遠くのエンゼラを確認できる。向こうの位置が分かれば狼煙などで反対にこちらの位置も向こうに教えられる。

B・ビィも空は飛べるが、緊急事態があればエンゼラに飛んでいく一人と現地に残る一人、役割を分けられるからやはり飛行持ちは二人は欲しいものだ。

さて肝心なのは、体を休め安全を確保するためのキャンプ地の設置だ。何日かかかる依頼では、体を休められるのも重要な仕事。なるべく体を横に出来る場所を見つけたいたいと思いついていく。

「面白い植物が多いわね。虫や動物も、見た事無いやつばかり」

俺が背負う背負子に座るルナルさんが感心してスケッチをしている。背負われ揺れる山道なんかでも、スケッチをする手を止めてはいない。

「ルナルって動物とか詳しくかったの？」

「詳しいと言うか、仕事柄……魔物絵だけじゃなくて、動植物の図鑑の挿絵も描いてたから」

「へえ〜？ 結構色々描いてたんだね」

「生活の事もあったし、断る理由も無かったからね。だから私が描いてないって事は、図鑑にあんまり載ってないって事なのよ……自分で言うのもなんだけど」

マリーちゃんやカルバさんの質問に対してのルナルさんの答えは、魔物絵師として生計を立てていたルナルさんらしい理由だ。確かに魔物図鑑の絵師としては結構売れっ子の部類だったと言う。魔物以外の絵を描いても不思議ではない。

「それより団長、大丈夫？ ずっと背負ってもらってるけど」

「いえいえ、軽いもんですって。荷物だってユーリ君達も持ってくれてるし」

「部隊で荷物を持った移動は何時もの事です！」

「それに筋トレにもつてこいだぜ！」

上陸後ジャングル内を進むようになってからは、ルナルさんは特注の背負子に乗って移動する。そもそも体力の無い彼女を連れて行くか悩んだのだが、絵の心得があり調査報告用のスケッチに適任なのは彼女だ。

背負子に背負われての移動は、彼女がハーヴィンであるからこそ出来た手法だ。彼女自身たいして重くも無く、マチヨビイとユーリ君達が居れば荷物も分担できて特に俺に負担も無い。フェザー君なんか楽しんでる節がある。むしろこんな方法で移動してルナルさんになんか悪い気もした。

「こつちこそ無理言つて来てくれて助かりました。俺も絵は出来なくは無いけど、別の事に集中したいから」

「それはまあ……私も団員だし、島立ち寄る度趣味の事さしてもらつてるからその分頼まれたら可能な限り頑張りたいもの」

「ありがてえ」

まあそんな訳で特に大きな問題も無く進んでいた俺達。だがそんな時、俺達はこの島で運命的な出会いをした。

「あ、団長たんま」

カルバさんが何かの気配を感じ取って動きを止めた。何か獣の声が数メートル先から聞こえる。そつと背負子も下ろし、一同集まり小声で話す。

「魔物かのう?」

「かもしれないね。複数の気配がある」

「どんな魔物と思うね相棒」

「さてな。この島でまだ魔物とは遭遇してないが……むっ!」

やり過ぎすかどうか作戦を立てようとした時、気配の主達が動くのを感じた。同時に聞こえたのは、獣の悲鳴だった。

こちらに来る気配は無かったが何か不振に感じたため、俺達はそつと進み草を掻き分け声が聞こえた方を覗き込む。

「あれは……!」

「G a u G a u !」

そこに居たのはラウンドウルフ種と見られる魔物の群れ。それが一本の木を囲い、上に向かってほえている。俺達も上を見上げると、枝や葉に隠れ木にしがみついて震える子供の人影が見えた。

「まさか子供!? ここって無人島じゃないの!」

「それより助けよう!」

咄嗟に俺とユーリ君達は剣を引き抜き飛び出す。俺達に気がついたラウンドウルフ達は驚くが直ぐに俺達を敵と判断し飛び掛ってきた。

「ふんっ！」

「Gyan!?!」

「うおおりやああつっ！」

「Gyahin!?!」

群れとは言えいつかの盗賊団の時の様に数は多くなく、その強さもユーリ君とフェザー君だけでも対応できる程度。適当に戦うと適わないとみて直ぐにラウンドウルフ達は逃げ出して行った。

「妾達は出番無しじやな」

「無くて結構だよ星晶獣。さてと、あいつらは追っ払ったぞ！ もう降りて大丈夫だー！」

安全を確保して木の上に居る子供に呼びかける。俺達の声は聞こえたようだが、子供は怯えており返事もせず中々降りては来ない。

「参ったね。まさか降りれなくなっただか？」

「——！」

「うん？」

するとユグドラシルが自分に任せて欲しいと言うと地面からモコモコと木の根を生み出し上昇していく。どうやら根つ子のエレベーターで救助するつもりらしい。

「なるほど、それじゃあ頼むよ」

「――！」

自ら生み出した木の根のエレベーターに乗り、上昇していったユグドラシル。それを見送り暫し待つと頭上でユグドラシルの驚く声が聞こえた。

何か問題があったのかと不安になるが、それ以上特に困ったような声は聞こえない。一先ず待っていると、また徐々に根つ子が下がり出した。

「何かあったかの？」

「わからん、大事ではないようだけど……」

ハラハラとしつつ彼女が戻るのを待つと、ユグドラシルが子供を抱えている姿が見えた。なんだ大丈夫だったとホッと一息つくが、よくよく見れば彼女はどこか困り顔だった。

「おつかれさん、それより上で何があった……ええ？」

「――……」

地上に戻ったユグドラシルに上で何があったか聞こうとしたが、それよりも先に困った顔をしたユグドラシルが抱えている子供を俺達に見せた。

確かに人の姿には似ていた。だが全身が黒い毛に覆われており、顔付きも人のものは違う。そして極め付けにその“子供”は口を開くと一言。

『うほ』

そう話したのだった。

■ 四 大地の母性

「まさかゴリラとは……」

「本物なんて始めて見た」

ユグドラシルに抱きかかえられ安心した様子で眠る小さな“ゴリラ”の子供。その姿を見てユーリ君とマリーちゃんが少し興奮気味に話す。

ゴリラ。それはこの空に伝わる幻の動物。近年まで架空とまで言われた存在。発見数が極端に少なく、詳しい生態やどんな島にどれ程いるかすらハッキリとはしていない。

「しかし参ったね。ユグドラシルから離れないよ」

「すっかり安心してるな」

「……………」

ユグドラシルが子供を助けると、安心したのかゴリラの子供はそのまま彼女の胸で眠ってしまった。それに俺もユグドラシルも困ったのは言うまでもない。

近くに親が居るのではないかと思ひ探したが、その痕跡すら見つかからず困った俺達は一先ずゴリラの子供をユグドラシルに任せ先に進み、適当な場所でテントを張り一夜を過ごすことにした。

「怯えておつたからのう、そんな時現れたのがユグドラシルじゃ。種族は違えど土を司り穏やかな星晶獣であるユグドラシルに強く安心感を抱いたのじやろう」

「母性つてやつかね」
「かもしれぬ」

のじや子の言うのも分かる気がした。最早ユグドラシルの癒しは種族を超えているからな。俺だって同じ立場ならあなる。

「親と逸れたとかでしようけど……そりやあ怖かったでしょうね」

「ゴリラの大人はドラフかそれ以上の体軀を誇ると言いますが、やはりまだ子供のようですから」

マリーちゃん達もこの子供に同情している。

怪我をした様子も無いので本来ならこの子供は、俺達が保護するのではなく直ぐに逃がすべきだろう。野性の動物には野生の世界がある。過度な関わりは互いの為になら

ない。しかしこうもユグドラシルに懐いてはそれも今は難しい。

そしてそんな眠るゴリラの子供をスケッチしまくるのはルナールさん。無論俺が頼んだ。経緯はどうあれ貴重な動物との出会いと情報だ。報告書に書く価値がある。

「まさか本物のゴリラをスケッチする事になるなんてね」

「ルナールさんゴリラ知ってたんですか？」

「知ってるって言うか……魔物の挿絵の関係で野生動物の凶鑑の仕事受けた事あるのよ。んでその時に描いたの」

「じゃあ前に見てるの？」

「まさか」

マリーちゃんが驚くがルナールさんは首を横にふった。

「幻の動物だから資料なんてろくに無かったのよ。少ない目撃情報から描かれた荒いデッサンとか見て何とか描いたけど……まして子供の資料なんて無かったわ」

「……もしかしてルナール殿。その凶鑑って『秘境・珍獣図解』ですか？」

ルナールさんの話を聞いていたユーリ君が驚きながら質問した。

「え？ そうね……確かそんな名前の本だったわ」

「それ読んだ事があります！ 自分はあれでゴリラの事を知りまして、それ以外の珍獣の挿絵もまるで生きてるようで夢中になって読んでいました！ まさかルナール殿の

描かれた絵だったとは」

「そ、そう？ 前の仕事だけど……なんか恥ずかしいわね」

目をキラキラさせて語るユーリ君。男の子だなーと微笑ましく思う。凶鑑って読んで面白いわね。

「ともかく依頼と並行して仲間探しだな。可能なら途中で逃がす方向で」

「それがよかろう。犬猫と違って人が面倒を見れるものではあるまい」

「ユグドラシルは悪いけど、暫くその子頼むわ」

「――」

ユグドラシルは戸惑いながらも頷いた。優しい彼女も抱き着いて離れない子ゴリラを突き放せずにいるようだ。

まったく予想外の事態に困りつつも、俺達はジャングルで一夜を過ごした。

■ 五 TOGICゴリラ語検定A級

一夜明けて再びジャングルを進む俺達。出ては消える濃霧に道を阻まれながらもなんとか安全な道を選び、この先にあると言う遺跡を目指した。

時に上空からのじゃ子やB・ビーに遺跡の位置を確認してもらってはいるものの、濃

霧が出たりすると、どうしても進むペースはあまり早くは無い。

また同時にゴリラの仲間を探すがそちらも中々見つからずにいた。

『うほほ』

「~~~~~」

一方で当の子ゴリラは呑気なもので、ユグドラシルに抱き上げられながら楽しそう
だ。ユグドラシルも早くも慣れて来たのか、あやし方が上手くなっている気がする。

「ゴリ坊は呑気でいいもんだねえ」

「ゴリ坊って……」

「男の子みたいだったからな」

何となく子ゴリラをゴリ坊と呼ぶ事にした。マリーちゃんが呆れていたが、まあ仮で
もずつと子ゴリラと呼び続けるのはなんか疲れるので一応ね。

「けど改めてゴリラって本当に“うほうほ”話すのね」

「そう鳴くと言う話は凶鑑に載ってはいましたが、実際に聞いたりすると不思議な感じ
ですね」

ルナールさんとユーリ君がゴリ坊が発する不思議な鳴き声に感心している。“うほ
うほ”と言う獣の鳴き声、と言うよりもハッキリと“うほうほ”と聞き取れるためむし
ろ声の様にも聞こえる。

「鳴くと言いましたが、一応彼らは“う”と“ほ”とを巧みに組み合わせる意思疎通をはかると言います」

「うほうほ言ってるだけにしか聞こえないから、俺達にはさっぱりだな！」

あつはつはとフェザー君が笑う。君はそれ以前に話聞かない時あるからね、拳で語るから。

「しかしその話が本当なら鳴き声って言うよりも本当に言語の様なものかもしれないか」

「団長なんかわかつちやつたりしてね。星晶獣の言葉もわかつちやうんだから」

「確かに」

「何が確かにじゃい」

マリーちゃんとカルバさんからかう様に俺を指さす。いくら何でも野生動物の言葉まではわからん、と言うかわかつてたまるか。星晶獣は存在が神秘すぎて理屈不明でわかつちやうんだよ……俺からしたらもう神秘性もクソも無いが。

「冗談だつてば。いくら何でもね」

「当たり前だつての」

『うほほ?』

「ほら見ろ、ゴリ坊が何の話か気になって首を傾げてる」

「……ん？」

『うほほ、うほ？』

「いや、違う違う。別にお前がどうこうって話じゃないんだ。気にしないでいい」

「ん……んんっ？」

『うほほっ！ うっほほ、うっほほ！』

「そうそう……なんだ急にお喋りだなお前。なに？ 俺達が何処に向かっているか？ そ

れはこの先にうほっほうっほ、うほほ、うほほほ、うっほほほ」

「ちよーと待った、団長ちよつと待った」

「うほ？」

「うほ、じゃない！」

「あいてっ!？」

呼ばれたので返事をしたらマリーちゃんに膝小僧を蹴られてしまった。

「な、なにを……!？」

「いやいやこっちの台詞よ、何当たり前の様にゴリラと会話してるのよ」

「はっ。」

「……気付いてなかったの？」

「え、いや気付いてって……え？ 俺今喋ってた？」

困惑して皆の顔を見る。するとマリーちゃんだけで無く殆どのメンバーがギョツとして俺を見ていた。

「その……突然子ゴリラと会話を始めました」

「すごく自然に話し始めてたな！」

「しかも団長まで『うほうほ』言い出したね」

「……マジ？」

「うむ、言っておった」

「言ってたわね」

ユーリ君達が俺がゴリラ語を解し、更には話していたとまで言う。

その事が信じられずにいると、ユグドラシルに抱えられたままのゴリラ坊が俺の服の裾を引っ張ると子供らしい円らかな瞳を俺に向けた。

『うほほほ、うほほ？』

「あ、マジだ」

どうしたの、平気？ そうゴリラ坊は俺に語っている。はつきりとそう言っているのが理解できてしまった。しかも返事返そうと思えば自然と「うほほうほ（大丈夫）」と返事出来る事にも気が付いてしまった。

「マグナシックス式星晶獣言語ラーニングがまた活きたな相棒。知能の高い動物の『言

語”なら理解し話せるようになったみたいだ」

「嘘と思いたい」

何普通にゴリラ語解してるんだ俺は、星晶獣と意思疎通できるだけでも意味不明なのに。

「自分が人間なのか信じられなくなってきた……」

「安心しろ相棒、おめえは人間だよ」

「B・ビィ……」

「人間のままちよつとおかしいんだ」

「ちくしょうめ!!」

上げて落とされた。いや、そもそも上げられてすらいない気がする。だってこいつが原因なところあるし。

『うほうほ』

「良いんだゴリ坊……お前は何も悪くない……」

落ち込む俺をゴリ坊が慰めてくれる。その優しさが分かってしまうのは、とても嬉しいが今は複雑である。

六 密猟

「うほうほ、うほうほ？」

『うほうほ、うほうほ』

「うっほう、うっほう」

『うほうほう、うっほう！』

「ふむ……ここら辺は魔物も少ないから、通りやすいってさ」

「この団長ゴリラ語使いこなしてるわ……」

ゴリ坊との会話を呆れた様子でマリーちゃんが見ている。

「さっきまで落ち込んだのは何だったのよ」

「いやだって、依頼もあるしもう喋れるなら有効に使わないと」

「そうやって直ぐ順応しちゃうから人間離れが進むのよ」

「あ、やめて言わないで……」

全部借金が悪いんや。俺は悪くねえ。

「けれど実際に土地の人……いや、土地のゴリラに道を聞いたのは助かりましたね」

「土地のゴリラ」

「んっふ……ちよ、冷静に反復しないでよ、なんか笑っちゃうから」

ユーリ君の言う言葉が妙に可笑しく思わず眩いたらルナルさんのツボに入っ

まったようだ。

「もう……まあ歩きやすい道を教えてくれるからね。座ってる私が言うのもなんだけど、最初より振動無くて座り心地が良くなってるのよね」

「ゴリラは優しい」

「んっふ……っ！ し、しみじみ言わないでっつてば！」

ルナールさんはまたツボつてた。

しかしユーリ君が言うように実際助かっている。子供とは言えゴリ坊は俺達よりはるかにこの土地に詳しい。近づかない方がいい場所も分かっているので危険を避けて進む事もできる。

そして彼の言葉を理解できた事でゴリ坊——この島のゴリラ達の状況が少し見えてきた。

「見慣れない変な集団が来てゴリラ達を襲い出したってな」

『うほっ！』

ゴリ坊が言うには、元々彼らは俺達が目指す遺跡付近を幾つかの群れが縄張りとしていたらしい。そんな中突然現れた集団がゴリ坊達の仲間を襲い出したと言う。群れで抵抗するのもいたが、見た事も無い“動物”に怯んだ仲間は次々と捕らえられた。

そしてゴリ坊の親達は、ゴリ坊だけを逃がし囹となつて捕らえられたのだ。

「話を聞く限り密猟者と思いますが……」

「未調査であるはずの島に所属不明艦に密猟者。さて、いよいよきな臭くなってきたやがったよ」

「アブい感じが増してきたねえ」

「増さんでいいつつーの」

「こんな状況でも嬉しそうなのはカルバさんぐらいだ。」

「んで、どうすんのかなよ団長」

「何が？」

「ゴリちゃんに道教えてもらうのは良いけど、その後どうすんのかって事」

「どうするのか、と聞かれてもね。やる事と言えば依頼通りである。」

「そのまま遺跡の調査」

「それでいいの？」

「話整理する限りその密猟者達まだ遺跡付近にいる可能性があるからね。所属不明艦との関係も気になるしゴリラ達も心配だ」

「じゃあゴリラ助けるの？」

「放置してわけにもいかんよ。人の過ちは人が始末しないと。それに見なさいよ、このゴリ坊の円らな瞳を」

『うほ?』

小さなゴリラは、人の子供にも似た円らかな瞳をマリーちゃんに向けた。

「うう……穢れの無い瞳が」

「これ見たらほつとけんわ。俺達が育てるわけにもいかんし親助けないとな」

生態調査に遺跡の調査。また所属不明艦に密猟者。それに加えてゴリラ。何だかてんこ盛りな依頼になっちまったな。

何時もの事とは思うまい。

「団長、あそこ見てみろ!」

認めたくない日々のトラブルを頭から振り払っている、フェザー君が叫んで前方を指差した。俺達もそちらをジツと見てみれば、そこには巨大な遺跡がいつの間にか現れていた。

「いかんいかん、皆止まれ」

慌てて身を屈める。直ぐ気配を探るが、近くには誰もいないらしくホツとした。

「こんな傍にまで来てたのか」

「霧に森にで距離感狂ってたな」

まったくB・ビーの言うとおりで、ジャングルに立ち込める白い濃霧と木々に視界を遮られていたせい、俺とした事がこんな目の前に来るまで気がつかなかったらしい。

「しかし誰かがいる様子もありませんね」

「そのようだ。とは言え用心しよう、皆静かについてきて」

島の主の様に現れたその遺跡は、濃霧に飲まれどこか不気味に見える。木々に紛れ、壊れた石柱などに身を隠しながら遺跡の出入り口らしき所に近づく。

辺りを見渡しても誰も居ない。安全を確保した俺達は、遺跡の物陰に荷物を置き集合した。

「まず遺跡だけど、二人はどう思う?」

「かなり古いのは見ての通り。地上で確認できる建造物は、何かしらの祭事儀礼のためとってところかしらね」

「規模も大きいし、地下の方もあるね。多分そつちもかなりの規模じゃないかな」

「お宝も期待したいわね!」

トレジャーハンター二人の意見に頷く。最後の意見は流石と思う。

次にユリー君が律儀に手を上げてから口を開く。

「ざつと入り口周りを見ましたが、我々以外の足跡、それも明らかに大人数が活動した後があります」

「かなりの大荷物だったのか至る所に何か重い物を置いた跡があるぜ」

「ふーむ……」

ユーリ君とB・ビィの報告を受けて辺り見る。そして自分の立っている傍の遺跡の石畳の上を見ると、俺達以外で泥で出来た足跡が複数確かにあった。この島は濃霧だけでなく、突然の雨も多く湿った土や泥はそこら中にある。

「まだ乾いてないな。さつき移動したばっかかって感じか」

「足跡は遺跡の中へ向かつてますが……」

新しい大人数の足跡は全て遺跡の内部に向かい消えていった。

今この遺跡には果たして何人の人間がいるのか？ 十人やそこらではないだろう。

「のじゃ子、俺達はこのまま遺跡に行く。だが何あるかわからんから応援が欲しい。お前は遺跡の中じゃ飛び回れんだろうし、一度エンゼラに戻ってこの場所に艇ごとみんな連れて来てくれ」

「あいわかった。そちらも気をつけよ」

「あいよ」

返事と共にのじゃ子は飛び上がり、濃霧を割いてエンゼラへとむかった。彼女によって割かれた濃霧は、すぐに戻り飛び立った彼女の姿を遮っていく。

「あいつの速さなら30分もかからないだろう。必要な物だけ持って俺達も入るか」

「先導はあたしとカルバでやるわ」

「アブい罫なら任せてよね」

「任せるけど発動させない方針で」

「えええ」

「えええでなく」

経験からカルバさん達に任せるのが間違いないのだが、なんだか不安である。

「ほんと頼むよ。俺罨系相性悪いんだよ。罨があつたら直ぐに教え——」

「あ、そこ立つてるとやばいぜ?」

「キエエエエエ——つ!?!」

「団長どのお——つ!?!」

咄嗟に奇声を上げて体を後ろに反らせると、俺の眼前を鋭利な半月状の刃物が通り過ぎていった。それを見てユーリ君達が悲鳴を上げている。

「ヒューツ! さっすが団長凄いい反射速度。いやあえっぐい角度と速度の罨だったねえ

! あのまま立つてたら団長スパア——ツと下ろされてたぜ?」

「ぜ、じゃないのぜ!」

手刀を掌にトントンして真つ二つになる様を現しながら、一人テンション高めでニコニコなカルバさんに怒鳴る。思わず変な語尾がでる。

「へ、平気ですか団長殿!?! 結構かすって見えましたか!?!」

「平気……生きた心地はしないけど」

「いや、入り口から攻めるねこの遺跡。刃物系って大抵中層とかから本番なんだけど」
「本番ってなんだよ！　と言うかもっと早く教えてくれよ!？」

「いや、それがなあくんか変なんだよね」

「変って……なにが」

「ん〜……まあもつと罨見てけばわかるって。その罨はもう発動しないよ。さ、行く
う行こう!」

そう言うとかルバさんは遺跡に向かい出す。あんな恐ろしい罨を見てよくあんな笑
顔が出るものだ。

「不安だ……」

「初めて会った時覚えてるでしょ。カルバはああ言う奴、諦めて行きましよ」

「不安だ……」

マリーちゃんに慰められながら俺もまた遺跡の内部に入って行った。

七 Raiders Perfection

「あ、団長そこ踏まない方がいいぜ?」

「そゆこと早く言にぎやあつ!？」

「団長殿お——っ!？」

床の石畳を踏むと左右の壁から無数の針が飛び出し俺を刺殺しようとする。咄嗟に立ち止まり回避。

「おつとやばい、団長ジャンプ」

「ぬおわあああ——ッ!？」

「団長殿お——っ!？」

何処からかカチツと音がしたと思つたら、壁から仕込まれた矢が俺に向かい発射され必死に掴み取る。

「あ、これ駄目だ。団長右にずれて」

「アナああああ——ッ!？」

「団長殿お——っ!？」

地面が突然。パカリと割れれば、槍が仕込まれた落とし穴が現れ体半分が落つ。こちら危うく串刺しになりかける。

「カルバさんっ!?! さつきからワントンポ遅くないですかねえ!?!」

「無事ですか団長殿!」

「今引き上げてやるぞ!!」

針が、矢が、穴が、槍が——全ての罠が俺に襲い掛かる。俺に、襲い掛かる。俺ばつ

かである。その度ユーリ君が叫んでた。

なんとか脱落とし穴の淵に引つかかるポロボロの俺をユーリ君達が引き揚げてくれる。

「いやあ、ごめんね団長」

「カルバどうしたのよ。何時も罨に関してはまあ……あえてかかる節はあるけど、こんな風じゃないのに」

先程と違い申し訳なさそうなカルバさん。相棒であるマリーちゃんもカルバさんの不調とも言える様子を訝しんだ。

「うーん、入り口から変だなあ変だなあとは思ってたんだけどね。けど団長の尊い犠牲のおかげで謎は全て解けたぜ！」

「犠牲言うんじゃねえい！」

「こんなのってある？ 俺にしか罨発動しないなんてどう言う事だっただよ。なんて曰だ。」

「それで、俺の尊い犠牲で解けた謎ってのは？」

「うん、まあそこ見てよ」

カルバさんが壁にある魔物か何かを模した装飾を指さした。さっきまでの事があるので大分慎重にそこを見るが、一見してただの石壁の装飾である。

何の事やら分からずゴリ坊までも首をひねるが、しかしよくよく見ればその装飾と壁

の間僅かな隙間が空いており、その隙間には板状の鉄屑か何かが楔のようにねじ込まれているのが見えた。

「なんでえこりや？　ゴミにしちや不自然だな。それに遺跡のもんとは別に見えるぜ？」

「B・ビー正解！　これは遺跡とはなんの関係も無い外から持ち込んだ鉄屑だね。んで、この装飾は罨のスイッチになってるんだけど、それをここにねじ込んで罨の発動を防いでたつてこと」

「……先に入り込んだ奴等の痕跡か」

「だろうね。ただかなり強引で雑な方法だよ。一時的ならまだしも、ずっとこのままじゃ不味いよねえ」

不満げにそう言うとかルバさんは、僅かに飛び出たその鉄屑を突然引っこ抜こうとグリグリとします。

「ま、待てい！　それ抜いたらやばいんじゃない？……!?」

「まあ見てなって。ここは大丈夫だから……ね！」

グツと最後に力を込めて鉄片を引き抜いたカルバさん。すると同時にガコリと機械的に物が動く音がしたかと思えば通路の前方にある天井が轟音と共に床へと落ちた。どうやら「吊り天井」だったらしく分厚い板が岩盤が落ちただけなので道は塞がれて

はいないが、あの場にいたら床と天井のサンドウィッチになっていただろう。

「あくやっぱね」

「やっぱねって、なにが……」

「これ強引に罨の発動止めてるけどさ、解除はされてないんだよ。実際はスイッチ入ってるからなんかの拍子にズレたタイミングで罨が起動しちゃうんだね。今もスイッチいじってから起動までちよつと早かった。さつきから妙にズレるのその所為だね」

引き抜いた鉄片をポイと捨てるカルバさんは不満そうだった。

「半端にスイッチ入れといて罨が完全に発動する前に止めるなんてなあ。罨の醍醐味つてもんをわかってないね」

「罨の醍醐味ってなんだよ」

「そりゃスリルだぜ」

「きめ顔で言うなよう」

俺あさつきからそのスリルで死にかけとるんじやい。

「まあ原因は分かったから安心してよ。多分他の罨も手を加えてるだろうから、それに注意すれば事前に察知できるよ」

「そりゃ助かる」

「それに予想とズレたタイミングでの発動……つてのも中々乙かも」

「嬉しそうに言うなよう」

「あはは！ まあちやんと罨の解除はするから安心してよ」

「そうしてくれ……しかし細工の所為にしても、なんだって俺ばつかに発動するんだか」

「そこは君の運の悪さかな？」

「ちくしょうめ！」

その後カルバさんは、確かに先程と違い正確に罨を見つけ対処していった。そしてそれら全てに何者かの手が加えられていた。剣を罨の装置に差し込んで無理やり罨の発動を止めたり、ロープで大雑把に固定し停止させていたりなどやり方は単純で大雑把だ。

その殆どを危険と判断したカルバさんは、全ての細工を戻し罨を発動させて行つた。

「なあ、一々発動させる必要があるのか？」

その様子を見てフェザー君が疑問に思つたらしく、どうして立ち止まりながらも可能な限り罨を発動するのかカルバさんに聞いた。

「そりやどんな罨が見たいじゃん？」

「身も蓋もねえ」

あまりに素直すぎる理由に皆一様にずっこけた。

「あはは、勿論それだけじゃないよ。殆どの罨が半端にスイッチ入ってるから、解除しよ

うがないんだよね。それにねえ団長、罨の一番適した対処法って何だと思う？」

「それはまあ解除するのが一番だけど」

「じゃあ完全に無効化するには？」

「……ああ、なるほど。」一回発動させる”か”

「そゆこと！ 罨って基本時には一回限りの使い切りが多いんだ。余程高度な技術がないと連続して発動は出来ないからね」

ようは矢が飛び出るなら、矢を撃ち尽くさせる。槍が飛び出るなら、飛び出た槍を折つとく。そんな感じか。

「当然迂闊に発動させるわけにいかないのもあるけどね。何かしらの機構で再発動出来る落とし穴とか。ただそんなのも安全確保した上で発動させれば床と穴の境目をチヨークでマーキングしとけるからさ。あらかじめその位置に梯子掛けるとかも対処法として有かな。トレジャーハントは一方通行じゃない、帰りも考えないと」

「そりや尤もだ。罨の位置がわかるなら帰りも安心できる」

「カルバ、あんた結構考えてたのね……あたし見直したわ」

「あとやつぱ見たいじゃん？」

「今の撤回、何時も通りだわ」

「だってだってどんな罨かわからないなら体験してみたいじゃん！」

「はいはい……」

伊達にトレジャーハンターではないと感心しながらも、やはり何時も通りのスリルジャンキーぶりに呆れながらも頼もしさを感じた。

そんなカルバさんのおかげで大きな障害も無く通路を進んでいくと通路の先から大勢の人間の声が聞こえてきた。

「かなり居るわね……」

「待った……皆さん、身を低く」

マリーちゃんが奥を覗き込もうとしたが、ユーリ君がそれを止める。皆が姿勢を低くして壁に沿って静かに進む。

人工的な照明が通路の奥からもれる。照明で浮かび上がる人影は十数人でも足りない。い。

「このまま進むと見つかるかな」

「団長一旦戻りましょう。さつき瓦礫で閉じられてたけど幾つか横道があったの。もしかしたらそっちも通じてるかもしれない」

迂闊に進む事は避けマリーちゃんの案内に着いて行き一度通路に戻る。戻った所には、マリーちゃんの言う様に瓦礫で閉じられた通路が幾つかあった。

殆どが瓦礫で閉じられているが、その内の一つは瓦礫を少しどかせば通れない事もな

かった。實際俺達がその瓦礫をどかすとやはり問題無く通る事ができた。

そこから少し進むと階段があった。上がっていくとまた人工的な明かりが通路側に溢れて来る。先程の通路の先と同じ場所に通じているとわかり、光の溢れている出入口へ進むとカーブする通路に出た。

更に上に続く階段があったがそこは瓦礫で完全に閉じられており今は通れない。その代わり通路の壁には、窓としてか大きな穴が幾つも均等に横に並んでいた。その窓からは最初の通路を進んだ先場所を見下ろす事が出来る。

そこは円形のホールになっており、そしてそこには大勢の人間達——甲冑を纏ったエルステ帝国の兵達が居た。

「帝国兵……！」

見慣れた装備の兵達にユーリ君が驚く。勿論俺達もその数にも驚いたが、ある意味俺には予想通りの展開だった。

「相変わらずどこでも悪い事してるねえ……」

「かなりの人数ね。でも何処からこんなに来たのかしら？」

ルナルさんは大勢の帝国兵を見て疑問を感じた。窓から見ても兵の数は百人は居る。多分まだ他にも居るだろう。それほどの人間を乗せれる騎空艇を俺達は島の外では見ていない。

「多分島の底に戦艦をつけてるなこれ。あそこ、ホール中央あたりが掘り起こされて下に向かって通路になってる。あそこから直通で繋げて出入りしてるんだ」

ホールの中央付近には、大きな荷物が楽々通れるほどに掘られた下層へと向かう通路があり、兵達は荷物を次々とそこから下へと運んでいた。恐らく島から撤収する作業の最中だろう。

「なるほどね。未開の島とは言え調査船も来るかもしれないわけだし、誰にも見つからず作業するにはそれが一番丁度いいってことね」

「よくやるねえまったく」

この島の付近で確認された所屬不明の戦艦、そうじゃないかと思っただけだがやはりエルステ帝国の戦艦だったか。

「だが奴等の目的は一体……」

「……それは、アレだろうね」

兵達が持ち込んだ荷物が至る所に詰まれて山となつてはいるが、その荷物に混ざり檻が幾つもあるのを見つける。そしてその中には黒い毛皮の生き物、ゴリラ達が疲れた様子で詰め込まれていた。

『うほ……っ！』

「———！」

恐らく親か仲間が居たのだろう、ユグドラシルに抱かれたゴリ坊が叫ぼうとしたが、直ぐにその口を手で塞いだ。

「あれはゴリラ……？　ではこの子の親を襲った奴等はやはり」

「エルステ帝国の奴等だな」

「なんと言う非道な！」

遠くからでも分かるほど檻のゴリラの殆どは衰弱している。大きな檻ではあるが、明らかに大きさに対して居れる頭数が多すぎる。あれではストレスが多すぎる。何時かの盗賊達のラウンドウルフのような扱いと同じだ。

奴等がゴリラをどうするかは分からないが、ろくな事じゃないだろう。

「あとゴリラだけじゃないな。見なよあれ」

ゴリラの檻だけでなく、兵達が運び出すため箱に詰めている荷物に煌びやかな金銀財宝が見えた。

先に遺跡を荒らした帝国の見つけ出した遺跡の宝だろう。それをマリーちゃんが歯軋りをして悔しがっている。

「あ、あいつらあたし達のお宝を……！」

「別に俺達のじゃないけど……軍資金にする気かね。依頼の事もあるし見過ごすのは無理だな」

「そんなやどうするよ相棒」

「そうだな……この通路からホールに降りれる場所が無いか探そう」

俺達が来たこのカーブしている通路は、ホールに沿ってカーブしていた。途中上層と下層及びホールへと行ける階段はあったが、上層へと行ける階段の殆どは瓦礫で塞がれており今は使い物にはならなかった。ただしホールに出る事が出来る一つ下の通路へ続く階段は一つ通る事が出来た。

一つ下の通路もカーブしてホールに沿っているので、ゴリラの檻へとかなり近づける事ができる。また都合が良い事に帝国兵はこれらの通路をあまり気にしていなかった。恐らく瓦礫の所為で殆ど通じていなかったため気にする事は無かったのだろう。

「ホールには降りれる。後はどうゴリラを逃がすか……敵の注意を引くか、ユグドラシル頼んでいいか？」

「——！」

星晶獣の派手な技でなら敵の注意を十分に引く事が出来るだろう。ユグドラシルもやる気を示した。

「よし……なら詳しく作戦を説明する。皆聞いてくれ、まずは——」

■ 手短かに作戦を決めた俺達は、ゴリラの救助のため作戦を開始したのであった。

八　こゝであつたが百年目

「そろそろ撤収か」

「案外早くて助かつたな」

ゴリラの檻を見張る帝国兵は、疲れた様子で話していた。初めこそ珍獣として知られるゴリラを間近で見られるとあつて興味のあつた見張りの仕事であつたが、ギユウギユウに詰め込まれ弱つたままのゴリラを見張る仕事は、あまりに退屈で億劫だつた。

「次は檻の搬入だ。暴れないように麻酔打っておけて話だけど、これだけ弱つてるのに必要なのかね？」

「万が一を考えてだろ。暴れたら大変だからな」

「だとしても全部にかよ」

「大人だけつて話だ。子供は大丈夫だろ」

見張りは傍にあつた作業台に並んだ注射器の一本を手にとつた。中には透明な液体が満ちている。それら全てが麻酔が入れられた注射器だ。

鋭利な注射器を持つ見張りに気がついたゴリラの大人の何頭かが威嚇の声を上げた。

「悪く思ふなよ。本国に着くまでは寝てもらわないと困るんだ」

事務的に身動きの取れないゴリラに麻酔を打とうとする見張りの兵。だが注射針が

ゴリラに刺さろうとした時、突如異変が起きた。

「……なんか、揺れてないか？」

「は？ 何言ってる——」

注射器を持った見張りが地面の揺れを感じ手を止めた。そしてもう一人に揺れを感じないか聞くと、相手は揺れを感じていなかったようで「気のせいでは無いか？」と言おうとしたところで今度こそハッキリと地面が揺れ始めた。

「うおおっ!?! じ、地震か!?!」

「馬鹿言うな火山も無いただの島だぞ！ 何がおき——!?!」

注射器を落とし慌てる二人。他の兵達も慌てて荷物を押さえるなどしているが、次の瞬間彼等の立つ石畳がひび割れ兵達を弾き飛ばす様に土の塊が飛び出して来た。

「な、なんじゃこりゃあ!?!」

「俺が知るかよ!?! 地殻変動か!?!」

「んなわけ——」

「ダオラア！ カチ込みだぜえ——っ!!」

「帝国兵っ！ 俺と熱く語り合おうぜええ——っ!!」

見張りの二人が混乱していると二人のいる反対側から男達の雄たけびが聞こえたかと思うと、数名の帝国兵が宙を舞うのが見えた。

「今度はなんだ、何人かぶつとばされたぞ！」

「敵襲っ!? こんな島でか!？」

二人は剣を抜いて戦闘態勢に入った。ゴリラの檻を離れるわけにもいかないので、その場で辺りを見渡すとホールを囲う通路の窓からチラリと銃身が見えた。

「おい、あそこに誰か……っ!？」

侵入者が居るとわかったのと同時に発砲音が響く。そして放たれた銃弾は真つ直ぐに帝国兵の持ち込んだ銃弾薬が詰まった箱に直撃しその直後激しい爆発を起こした。

「どえええ!?! いかん、荷物が燃える!?!」

「し、侵入者! 侵入者が——」

「G y a o o!!」

「んなつ!?! ま、魔物がなんで、ぎゃああ!?!」

「ここ、こつちにも! うわあつ!?!」

二人の見張りは慌てて武器を持って駆け付けようとした。だが後ろから突然二体のラウンドウルフが飛び掛かってきた。不意を打たれた見張りは、魔物に押し倒されそのまま仰向けに倒れ気を失った。それと同時に二体のラウンドウルフは、幻のように姿を消した。

見張りが倒れラウンドウルフが消えると物陰から団長とユグドラシル、ルナール、マ

リー、ユーリの五人、そしてユグドラシルに抱えられたゴリ坊が出てくる。

「お見事ルナールさん」

「ま、この程度ならね」

「ユグドラシルもお疲れさん」

「——！」

ことも無げに答えるルナールの手にはスケッチブックがあつた。そこには二体の飛び出すラウンドウルフの姿が描かれている。今見張りの兵を押し倒し気絶させたのは、ルナールが描き生み出したものだった。

ユーリは見張りが完全に気絶してるのを確認すると、その腰に付いていた檻の鍵を奪い取る。

「ありました。檻の鍵です」

「見張りが手薄で良かったよ。侵入者なんて来ないと思つたんだろうな」

「それにフェザーやカルバ達が派手に暴れてるわね。全然こつちには気がついてない」

団長が先程銃弾が放たれた通路の窓を見上げる。そこには団長に向かってピースサインをするカルバがいた。彼女は更に帝国兵を混乱させるため直ぐに別の場所へ移動を開始した。

「さあ、やるなら今よ」

「勿論そうしよう」

団長達は鍵を持ちゴリラの檻に近づいた。ゴリラ達も檻の外でなにやら大きな騒ぎが起きている事は分かっていた。そこに現れたまた見知らぬ“二足歩行の動物”に警戒心を高め威嚇の声を上げ続ける。

「安心しろ、助けてやる……ゴリラ坊」

『うほっ!』

団長がゴリラ坊に声をかけると、小さなゴリラはユグドラシルの腕から檻の前に飛び降りた。すると一際大きく威嚇の声を上げていたゴリラが途端に声を止めた。二頭は愛おしそうに声を上げると、檻の格子越しに手をつないだりしていた。

その様子から、二頭が親子であるのは間違いないと団長達は確信した。同時に大人のゴリラもゴリラ坊が懐いていた様子から、団長達が敵ではないとわかったらしく敵意ある視線が和らいでいった。

「うほほ——今から檻を開ける。慌てず出てくるんだ。弱ってる奴がいるならこつちでもカバーする。そのまま逃げるぞ、いいな——うほ?」

『……うほ』

ゴリラ語を交え自分達の目的を伝えるとゴリラ坊の親であり、リーダー格と思われる大きなゴリラは、ゴリラ語を解する団長に驚きながらも野太く力強い返事を団長に返し

た。

団長は鍵を使い檻を開けると、「助かった」という意味を込め『うほうっほ』と言いながらゴリラ達が檻から出てくる。

二つ目、三つ目と檻を開けていくと、ゴリラの数は十数頭までになった。

「マリーちゃんとルナルさんは、作戦通り今来たルートを戻ってゴリラ達を連れて外に向かつて。多分のじや子が戻って外で待機してくれてるはず」

「オーケー、それでそっちは？」

「俺はユーリ君とユグドラシルでフェザー君達と合流。そのまま本気で暴れまわれれば帝国のやつらも諦めるはずだ」

「確かにね。あたしなら絶対相手したくないもの」

「複雑な気持ちになる言葉やめて」

「褒めてんのよ。さあ、みんな付いてきて！」

マリーちゃんが手招きすると俺から彼女について行く様に聞いているゴリラ達は、騒動に紛れホールから連絡通路へ入って行く。

だが一頭、ゴリラ坊を抱えたゴリラは群れから離れ団長の元に戻って来た。

「おいどうした？ お前も早く逃げないと」

『うほ、うほほほうほっ！』

「……本当か?」

「団長殿、そのゴリラはなんと?」

ゴリラ坊を抱えたゴリラが何かを団長に伝えると、途端に彼の表情が深刻なものへと変わる。何か問題が起きたと察したユーリが声をかける。

「……『彼女』は、ゴリラ坊のお母さんが言うには一匹だけ既に檻から連れ出されたらしい」

「な……っ!?」

「しかもそいつはゴリラ坊のもう一人の親、『お父さん』だ」

「——!」

「むっ!」

ゴリラが一頭連れ出された事をユーリに告げ終わると同時に、ユグドラシルが突如自身と団長の周りに分厚い土の壁を展開した。そして遅れてその壁に何発もの銃弾が当たる音が聞こえる。

「銃声が聞こえたわよ!」

「ちよつと団長さん大丈夫!」

「こっちは平気、それよりゴリラを早く!」

「わ、わかった!」

銃声を聞いてマリーとルナルが引き返そうとしたが団長はそれを止め地上へと戻るように促した。マリーは一瞬迷ったが、自分について来る弱ったゴリラ達を見て、彼女もそれを優先すべきだと思いき急ぎ地上へと向かった。

マリー達が去って行くと土壁が崩れ武器を構えた団長の姿が現れる。そしてそれと対峙するように複数の兵を引き連れた男がいた。

「急な襲撃に何かもしやと思いきこっちに来てみれば……鼠共がコソコソと」
「貴様は!?!」

ユーリは相手を見ると驚き、そして怒りの籠る声を上げた。対して相手もまた忌々しそうに団長達を見ている。

怪しく黒光りする髭を蓄えた男——ポンメルン大尉であった。

九 帝国の髭

「貴様はツ!?!」

「ポンメツ!」

「ポンメルン! ツ! ですネエ!! 中途半端に覚えるんじゃないやありませんよオ!」

見覚えのある髭の男を見てユーリ君が名前を呼ぼうとしたが、先に俺が中途半端な名

前を呼んでしまった。

そうだ、奴の名はポンメルン。エルステ帝国の軍人でユーリ君の上官でもあった男。アウギユステでは奴の行った作戦でポセイドンは暴走した。そしてジータを一度殺した張本人。ある意味俺との因縁もザンクティンゼルで始まり続いている。

そんなポンメルンは、ゴリラが殆ど逃げてしまった事を知り追っても無駄とわかったのか忌々しそうに俺達を睨みつけた。

「まったく……何処の鼠が入り込んだかと思えば何時ぞやの反逆者と奇天烈騎空団とは」

「誰が奇天烈だい……態々言われつと傷つくから止めてくれ」

「ええい、落ち込むんじゃないやありませんよオ！ まったく、調子が狂いますネエ！」

わかっちゃいても他人から言われると辛い事だつてあるのだ。ウチの騎空団の事とか、騎空団の事とか……それと騎空団の事とか。

「しかし帝国つて言うのは予想通りだったけど、まさかあんたの指揮してるところとはな。ここで会うとは思わなかったよ」

「それはこつちの台詞ですネエ。そのやぼったい顔、実に忌々しい。あの田舎娘共々忘れたりしませんでしたよオ……」

「……ちよ、ちよちよユーリ君聞いた？ あいつ今俺の事忘れてないつて言った」

「え？ あ、はい…………え？」

「うわ、わあっ…………マジか、顔覚えてるとか言われたの初めてかもしれん…………ちよつと感動」

「そこですか!？」

やぼったいは余計だが、顔を覚えてるって言う発言はマジで人生初の可能性がある。地味地味ジミジミ言われ続けて初の成果（？）ではあるまいか。

「あんたのやって来た事を許す気はないが、俺の顔覚えていたのは素直に嬉しいぞ」

「…………それを言われて私はどう反応すれば良いんですかネエ？」

「まあスルーでもいいよ。ちよつと嬉しかっただけだし」

「そ、そうですか。では気を取り直して…………ん、んっ！ ここで会ったが百年目、ですネエ！」

律儀にポンメルンは咳払いの後改めて俺達に凄んでみせた。実は良い奴なんじゃないのかこいつ。

「アウギユステでの事を忘れてたとは言わせませんよオ？ 苦労して捕獲した星晶獣も逃がし、なんの成果も得られないまま撤退する羽目になったのは、貴様達が邪魔したせいですからネエ。しかもまた我々の邪魔をしに現れるとは」

「何を!？」 星晶獣を利用するだけじゃなく、島の人間を危険にさらしておいて！

「やれやれ……あいつも変わらさず青臭い事を言う裏切り者ですネエ。しかし……ガルス
トンからは、裏切り者は“死んだ”と聞きましたがあ……」

アウギユステでのポセイドンとの決戦。その直後現れたのは、ユーリ君が所属してい
た部隊の小隊長ガルストン。彼は最早帝国には戻れぬユーリの事を案じ戦いの混乱の
中“死んだ”事にすると言つて去つて行つた。当然ボンメルンもそれを聞いているだ
ろう。

彼は目を細めユーリ君を睨むが直ぐに興味を失つたのか視線を外した。

「まあいいでしょう、あの混乱では死体を見間違ふ事もあるでしょうからネエ。それに
ここで死ねば同じ事」

「舐めるなよボンメルン！ あの時みたいに後には取らない、貴様達の非道もここで止
めてみせる！」

「やれやれえ……本当にその青臭さは変わらさずのようですネエ。どのような作戦であろ
うと帝国がそれを是とするならば、帝国軍人である私はそれに従い全力を尽くすのみで
すよお」

「だがそれでは正義が無いっ！ 人の道に反する事だ！」

「好きに言いなさい、今言つた様に帝国が是とするならばそれが正義、この場で貴方と無
駄な議論をするつもりなどありませんネエ」

「貴様……!」

「まあまあ、ユーリ君落ち着きなさいな」

今にも切りかかろうとするユーリ君の肩を掴んで落ち着かせる。

「団長殿、しかし!」

「いいから落ち着きなさいって。それよかあんた達こんな無人の島でゴリラ捕まえて何してんのよ? いくらゴリラが珍しいとは言え、軍事大国が軍を動かして密猟なんざせ

て過ぎやしない? 遺跡のお宝まで持ち出してまるでゴソ泥じやないか」

「おやおや? まさか我々が金銭のためだけにゴリラを捕まえたとでも?」

「まさか、そうは思わんさ。けど理由がわからんね」

「いいでしょう、では冥土の土産に聞かせてやりましょうかネエ」

別に答えて欲しいとも言っていないのだが……律儀だなあ、しかも勝った気でいるし。

「ゴリラの大人は、ドラフにも負けない屈強な身体つきを誇り身体能力は正しく野獣。その強靱な肉体は、並みの魔物相手であれば容易く蹴散らせるほど。しかも魔物と違い高い知能も持ち合わせている。それに目をつけた我々は、その力の有効的な活用方を思いついたのですネエ!」

「……まさか、貴様らっ!?」

ユーリ君がポンメルンの言おうとしている事に気が付くのと同時に俺に向かって何

かがふつ飛んで来るのが見えた。ハッとそれを見るとそれは「のわああっ!」と声を上げ受身の態勢のまま俺にぶつ飛んできたフェザー君だった。

「うおおおいつ!?! フェザー君大丈夫ぶおごお——つ!?!」

「だ、団長殿お——つ!?!」

「いつつ……おつとつ!?! 悪い団長、平気か!?!」

心配される側のはずのフェザー君はめっちゃ元気で、咄嗟の事で上手く受け止められずフェザー君に押し潰された俺の方がユーリ君に心配されていた。これじゃトラップの時と一緒にじゃないか。

「そ、それより何があったんだフェザー君……?」

「そうだ団長、凄い手強い奴が現れたんだ! いてもたっても居られず語り合おうとしたらぶつ飛ばされちまった!」

この場所の反対側にいるはずの彼が吹き飛んできた事も驚いたが、それ以上に彼をここまで吹き飛ばせた何者かに驚く。

そんな驚く俺達を見てポンメルンは満足げに笑みを浮かべ一人頷いていた。

「どうやら……実践での投入も問題は無さそうですね?」

「お前……」

「では改めて教えてあげましょう! 帝国の技術、そして野生の力が融合した実験の成

果をオ——ッ！」

『U H O O O O O O O O O O !!』

俺達の頭上を大きな影が雄叫びと共に通り過ぎた。それは壁や瓦礫を蹴って飛び跳ね俺達を翻弄するとポンメルン達の前に着地する。

「こいつだ団長！ 気をつけろ、かなり手強いぜ！」

フェザー君が自分を拳を構えながら言う。それは帝国の鎧に似た銀色の装甲を身に着けている。

「これこそがエルステ帝国の新しい戦力ウ！ 魔獣装甲アーマード・ゴリラ、ですネエ——ッ！」

『U H O O O O O O O O O O !!』

鋼鉄の鎧、それを取り付けられている胸板に両手を叩きつけながら、武装し操られたその大型ゴリラは大きく吼えた。

■ ■ ■
十 ARMORED GORILLA

団長達の前に現れた新しい敵——敵となってしまったもの。帝国に無理やり戦う存在へと変えられたゴリラが兜の隙間から彼等を睨みつけていた。

「なんて事を……ポンメルン、貴様罪無きゴリラをさらうだけでなく、無理やり兵士にっ!?」

「人聞きの悪い事を言わないで欲しいものですネエ。先程も言ったようにこれは有効活用ですよ。ドラフにも負けない体躯、そしてそれ以上の身体能力。そんなゴリラを帝国の生態兵器にする事が出来れば帝国の力になると上層部は判断したのですよ」

「ど、どこまでも非道な……っ!」

帝国の手により戦う兵士——兵器として操られるゴリラを見てユーリは激高した。

「そのゴリラ……ゴリ坊のお父さんか」

「ううん……ゴリ坊?」

「あんた達が捕まえたゴリラ達の子供さ。可愛そうに、森で迷子だったよ」

「ふうむ……」

団長は後ろに下がらせたゴリ坊と母ゴリラを指差した。ゴリ坊達二頭は、鎧で姿が見えなくとも先程の咆哮でアーマード・ゴリラが自分達の家族であると気が付いたのか不安げにしてその場を離れようとはしない。

しかしポンメルンはその親子の姿を見ても興味無さげに髭をいじるのみ。

「興味無いって顔だな。まったく、ルリアちゃんといい生きてる命を悪事に利用するのが好きだね帝国ってのは」

「だまらっしやいっ！ そんな軽口もそこまでですネエ……星晶獣でこそありませんが、帝国の技術でパワーアップしたゴリラは力だけならば最早星晶獣と同等、いやそれ以上！ そして我々も揃っているこの状況……生きて遺跡を出れると思わない事ですネエ！ 行きなさい貴方達！」

『UHOOOO!!』

「来るぞー！」

ポンメルンが紫の光を放つと、その身をアウギユステで見せた魔晶形態へと変貌させた。それと同時に兵達だけでなく、武装ゴリラも団長達に襲いかかる。

「ゴリラは俺とフェザー君で相手をする！」

「ポンメルンは自分に任せて下さいっ!!」

「任せる！ ユグドラシルは雑魚を頼む、ゴリ坊達を護ってくれっ！」

「——！」

この時までB・ビィとカルバは二人と言う少数でありながらもかなりの数の敵を引き付けていた。だからこそ団長達は迷わずポンメルン達相手に即戦う事を選ぶ。

それぞれが敵とぶつかり合った。その中でも武装ゴリラの対応は特に難しいものであった。

『UHOOOO!!』

「うおおっ!？」

武装せずとも元から逞しい両腕を振り上げ襲い掛かるゴリラ。団長はまず剣でそれを受け止めたが尋常では無い力で脚まで痺れてしまうほどだった。

「なん、ちゅー……力……!」

「団長下手に受けるとこつちがやられるぜ!」

「そうみたいだ——」

『G U O !! U H O O o o o o !!』

「ねっ!？」

彼を叩き付けた両手で今度は左右からフックを連発する。対して団長も体をしならせ避けていく。だが脚の痺れがまだ残りうまくその場から動けずにいた。そしてその振るわれる剛腕の拳から発生する風圧も凄まじく、避けているはずなのに頬を叩かれているような錯覚も覚えた。

「団長ばかりじゃない、俺もいるぜえ!」

団長がゴリラの拳を避けていると、別方向からフェザーが拳に電光を纏わせゴリラへと向かった。

「ゴリラも人も関係ない、響け俺の拳い!」

『U h o ……!!』

フェザーに気付いた武装ゴリラは、団長への攻撃を止めフェザーへと向き直った。自分の方を見た武装ゴリラに対しフェザーは拳を連続して叩き込む。

「うおおおっ!! 響けえ!

『HO!!』

フェザーの拳が自分に届くよりも先に、両腕をL字に曲げ顔の前に持つて来てブロッキングする武装ゴリラ。激しく連打されるフェザーの拳は、武装ゴリラに当たる度に閃光が弾ける。

だが武装ゴリラの強固な防御力は、フェザーの連続の猛打をもともしなかった。逆にフェザーの拳の方にダメージが入ってしまう。

「くっおおっ!! 固いっ!!」

『U h o……!!』

「しま……っ! うおおっ!!」

フェザーが一瞬怯むと武装ゴリラはその隙を見逃さなかった。ガードを解くとその大きな腕を伸ばしフェザーの片腕を掴み上げたかと思うと、ブンブンと振り回し地面に何度か叩きつけた。

「だあーストップやめろ!?!」

脚の痺れが収まった団長が後ろをから駆け付け武装ゴリラの背中に飛びつき手を首

に回すと裸絞めを決める。

それに気を取られた武装ゴリラは、掴んでいたフェザーを離した。振り回された勢いでフェザーは地面に投げ飛ばされたが、地面にぶつかる前に受け身を取り直ぐに体勢を整えた。

武装ゴリラは、自分にしがみ付いた団長を払い落そうと両手を振り回した。

『UHO! U h o o o o!!』

「つう!? お、落ち着け! 本当は戦いなんてしたくないんだろ、お前は戦っちゃ駄目だ!」

『UHO………! HO! U H O O o o!!』

「んが………っ!」

団長の言葉も聞こえていないのか、武装ゴリラは遺跡内に帝国の建てたテントや機材に団長事身体を叩きつけ続けた。

団長はこの被害者であるゴリラを何とか傷付けず無力化したかったが、とてもそう言っただけでいられなくなっていた。

確かに力だけなら並の星晶獣かそれ以上——悔しいがポンメルンの言う事は本当らしい、攻撃に耐えながらそう独り言っ。

「まだまだあ!」

体勢を立て直したフェザーが再び武装ゴリラへと向かった。武装ゴリラもフェザーに気が付いた。しかし自分にしがみ付いた団長も気になったのか僅かに動きが止まる。

この時動きを僅かに止めた武装ゴリラの兜の隙間から紫の光が漏れるのを団長は見逃さなかった。

「この光、まさか……!」

『H O!?!』

団長は裸絞めを解くとすぐさま両手を兜に伸ばした。それに気が付いた武装ゴリラは、慌てて両手で兜を抑え込む。

「この反応やっぱりか! フェザー君こいつの動き止めて!」

「任せなあ!! うおらあああ——ッ!!」

『u H o……!?!』

今度は両手では無く左の拳にだけ電光を纏わせたフェザーは、走る勢いを乗せて強烈な左ストレートを打ち込んだ。武装ゴリラも今度はガードが間に合わず腹部へと直撃を受けた。思わずよろめきながら武装ゴリラは、兜を押さえていた手を離してしまう。

「今だっ!」

直ぐに団長は兜を引き抜き放り捨てた。露わになったのは成熟した大人のゴリラの顔。だがその表情は苦しそうに歪んでいる。そしてその額には、強く怪しい光を放つ魔

晶が埋め込まれていた。

「案の定つてやつだな、だったらそれを砕く！」

魔晶で操られているのなら、それを砕けば全てが終わる。団長は鞘から剣を引き抜き、柄頭で魔晶を叩き砕こうとした。

「おのれ、そうはさせませんよオ！」

「うおっ!？」

「おっとー！」

だがユーリを相手にしていたポンメルンが団長達の動きに気づき邪魔をしに入った。頭上からポンメルンの放つ幾つもの光線が降り注ぎ団長達をゴリラから遠ざける。

「でええい、流星に止めに来るか!？」

「当然ですネエ！ そいつは苦労して捕まえたゴリラでしかも実験体、また作戦をおじやんにされてはたまりませんよオ！」

「させるかポンメルン、相手は俺のはずだ！」

「甘い、ですネエ！」

「なんのお!!」

自分を無視し団長に攻撃を続けようとしたポンメルンにユーリが攻撃をしかけるが、ポンメルンはそれを左手の大盾で防ぐと同時に右手の剣をユーリに向かい切りつけた。

だがユーリは直ぐ剣を盾にしてその攻撃を防ぐ。

魔晶形態となりその体格差も大きくなったポンメルンからの一撃を防いだユーリを見て攻撃をしたポンメルン自身も「ほほう？」と思わず唸る。

「ふうむ、これを防ぎますか……」

「言った筈だ、後れは取らないと!」

「なるほど……脱走兵とは言えあのガルストン隊だっただけはあるようですネエ。短い時間でやるようになったようですが……しかしまだまだ、ですネエ!」

「うっ!」

「ユーリ君!?! あぶな、ぐヴえっ!?!」

ユーリの力を認めつつも、しかしまだ自分には及ばないのだとポンメルンは示す様に剣を大きく振り払う。ユーリはまた剣でそれを防ごうとするが、先ほどより勢いを増した攻撃を受け止めきれず体が浮き吹き飛ばされ団長と衝突する。

「も、申し訳ありません団長!」

「い、いいの……気にしないで、もう慣れた」

飛んできたユーリに押し飛ばされ、上に乗つかる彼が退くと団長はフラフラと立ち上がる。頭を振って意識をハッキリさせ視線を前に向けると、ポンメルンと武装ゴリラが並び立っている。

「クククツクツ！ どうやら、年貢の納め時ですネエ」

「おいおい、そりや気が早いんじゃない？ そりやピンチに見えるかもだけど、俺達はまだ負けぢやないよ」

「その通り！」

「語り合いは始まったばかりだぜ！」

ユーリとフェザーは、団長の言葉に応え剣と拳を構えなおした。その瞳には依然として正義と闘志がこもる。

「ええい、諦めの悪い！ やってしまいなさい、アーマード・ゴリラー！」

『U H O o o !!』

ポンメルンの指示を受け、武装ゴリラは雄叫びを上げ三人に向かう。彼等は武器と拳を構えそれを迎え撃とうとした、その時である。

「——！」

『U h o o ……!!?』

武装ゴリラの前に土の柱が盛上り勢いを止めれず武装ゴリラはそれに激突した。兜を失っている武装ゴリラは、眩暈を起こしよろめいた。

『うっほおおおお——!!』

『U h o o !?』

『ほっほお——い！』

「なにい!？」

すると突如二頭のゴリラが乱入、一頭が武装ゴリラの顔を覆う様にしがみ付き視界を奪うと、間髪入れずに二頭目が正面から体を押さえつけた。

その突然の出来事に驚くポンメルン、そして団長達もまた驚く。乱入したゴリラはあのゴリラ坊と親ゴリラだったのだ。

「ゴリラ坊!？ ユグドラシルは」

「——!」

「おおう……片づけてたか」

ゴリラ坊達はユグドラシルが護っていたはずだが——団長がユグドラシル達がいた方を見ると、ポンメルンが連れて来た兵は盛上った土に巻き込まれ身動きが取れなくなり、そしてドヤ顔のユグドラシルの姿があった。

「——!」

ユグドラシルは雑魚は倒した事とゴリラ坊達の言葉を団長に伝えた。

操られた父ゴリラの姿を見て母と子はいてもたつてもいられなかつたのだと。

「……そうだよな。家族なら……だったらゴリラ坊、助太刀するぞ！」

「我々も！」

ゴリラ家族の心意気にうたれた団長達は、更に気合を入れ父ゴリラを助けるために駆け出した。

「たかが獣風情に邪魔などお——っ！」

「ユーリ君、フェザー君!!」

「お任せを！」

「行くぜ！」

ゴリラにまで邪魔をされた事でプライドを傷つけられたのか、ポンメルンはゴリラの親子をまとめて葬り去ろうとする。だがその動きを読んだ団長は、ユーリとフェザーをポンメルンへと向かわせた。

「ぐあつ、貴様等あ!?!」

「家族を助ける邪魔はさせないっ！」

「あんたとはアウギユステでも語り合って無かったな！ さあ語り合おうぜ！」

「ちいっ!?! 裏切り者ごときが！」

帝国式の剣術で攻防を両立させ堅実に立ち回るユーリ、そして軽快なフットワークで相手の隙を突き強烈な拳を叩き込むフェザー。その二人のコンビネーションにさしものポンメルンも翻弄された。

「よしいいぞ二人共、こっちも……」

「貴様等！ 好きにはさせませんぞ！」

「大尉を援護しろ!!」

団長が次の行動に移ろうとしたが、ポンメルンがおされている事に気が付いた兵の集団が彼等へと向かつて来た。

「流石に増援はあるか……だが、ユグドラシル！」

「——！」

「うおッ!? 地面が！」

団長が今度はユグドラシルに指示を出すと、彼女はまた土を操り床から土の塊を盛り上げ兵達を寄せ付けない。

「——！」

「そっち任せた！ こっちに寄せ付けないでくれ！」

此方は任せて父ゴリラを——兵達の相手は自分に任せろと言って、ユグドラシルは团长を父ゴリラへと向かわせた。

彼は父ゴリラが暴れ散乱した瓦礫の中から拳ほどの大ききをした石を掴み取ると父ゴリラを背中から羽交い絞めにして更に動きを止める。そして手に持った石を父ゴリラの頭にしがみ付いているゴリラ坊に手渡した。

「ゴリラ坊、額の水晶を壊せ！ それで親父さんは助かるッ!!」

『うほー!』

それはゴリラの言葉では無く人の言葉であった。だがゴリラは確かに団長の言葉を聞いて理解した。父を操り、生命を冒瀆するのが目の前にある紫の水晶であるのだ、と。ゴリラは受け取った石を強く握った。

『うほおっ!!』

『U h o ……!!』

ゴリラは父を蝕む魔晶目掛け石を振り下ろした。

石と魔晶が接触すると強く発光し僅かに砕けひび割れる。それに合わせ武装ゴリラが苦しそうな声をあげ抵抗するが、母ゴリラと団長がその体を前後から羽交い絞めにし動きを止めてみせる。

「その調子だ一気に壊せ!」

「お、おやめなさい!! 我々があの一頭を大人しくさせて武装させるのにどれだけ苦労したと……!?!」

「黙れ外道! 命を弄ぶ今の帝国に正義は無い!」

「お前も男なら堂々とやってみな! そんなんじやあ誰の魂にも響かないぜ!」

「……この……! この奇天烈集団があ~~~~つ!!」

ついに焦りを見せるポンメルン、それに対し攻撃の手を緩めないユーリとフェザーが

更に強烈なコンビネーションをくり出そうとすると、同時にゴリ坊が再度瓦礫を振り上げた。

「俺の帝国魂は消えん！ 帝国の悪事は俺が止めるっ！」

「そうだけユーリ！ お前の意思を奴の魂に響かせろっ！」

「はいっ!! でいやああああ——っ!!」

「うおおおお——ッ!! 響けええっ!!」

『うほおっ!!』

流れる様にユーリが放つのは三つの連撃、二度の攻撃の最後に鋭く強烈に切っ先をポンメルンへと付き出し、それと同時にフェザーが渾身の力を込めそのた拳をユーリと並び繰り出した。

剣と拳から放たれた攻撃は、一つの大きな衝撃となりポンメルンへと直撃する。同時にゴリ坊もまた瓦礫を魔晶へと叩きつけた。

「ぐふうああ——っ!!」

『uH o……!?!』

ユーリ達の攻撃はポンメルンに届いた。ポンメルンは防御しきれず魔晶形態のまま地面へ倒れる。そして父ゴリラも魔晶が砕かれると同時に短い悲鳴を上げ地面へと倒れて行く。咄嗟に団長と母ゴリラがその体を支えた。

「はあー……！ はあー……っ！ どうだ、見たかポンメルン！ これが俺の帝国魂だっ！」

「熱い、熱いぜユーリ！ その魂、俺にまで響いたぜ！」

『うっほおー！』

ユーリも渾身の力を込めたのか息を荒くしながらも見えを切り、フェザーは彼を讃えゴリ坊は誇らしげ拳を振り上げ叫ぶ。

倒れた父ゴリラを支えながら、団長は彼等を見て頷きほほ笑んだ。

十一 白銀の王者

ユーリ君達の奥義を受けたポンメルンは、かなりのダメージを負ったらしく、立ち上がろうとしているが膝をつき体を起こすのがやっとのようだった。ポンメルン自身も魔晶を使用しているためか、スタミナの消費も激しかったのだろう。

「ぐ、ぐふあ……っ！ た、たかだが一兵卒だった小僧に……この私が、膝を……！」

「悔つたなポンメさん。『奇天烈』騎空団での生活つて中々ハードなんだぜ」

うちみたいに星晶獣ばかりの騎空団での生活は、確実にユーリ君を成長させていた。奴にとって最も因縁があるのはジータであり、それ以外の騎空団があまり記憶には残ら

なかつたのだろう。だからだろうかポンメルンは、膝をつくまで俺達の事を星晶獣以外の者はただの奇天烈騎空団としか考えていなかった。

膝をつきながらポンメルンは、視線を俺と母ゴリラが支える武装ゴリラ——解放された父ゴリラへも向けていた。どうやら魔晶の強制的なリンクは既に失われ完全に解放されたらしい。他のゴリラもほとんどが逃げただろう、ポンメルンにとっては完全な作戦失敗だ。

「二度ならず二度までも……!」

ポンメルンが吐き捨てる様に言った。

「悪い事しなきゃこうはならないと思うけど俺」

「だまらつしやい! せめて貴様達だけでも……!」

ポンメルンは半ば捨て鉢になっているようだった。膝をつきながらも奴の構える剣の切っ先怪しく光る。異常な魔力の高まり、恐らく強力な攻撃で俺達を攻撃するつもりだろう。

だが奴の行動を妨害する者は、俺やユーリ君達だけではない。

「ポ、ポンメルン大尉助け……! 黒いよくわからないナマモノがやたら強つ! んぎゃああ!!」

「ダオラアツ! この程度か帝国兵よお——!!」

「ほらほらー！ もつと注意しないと危ないよおー！」

「どわあ!? な、なんでこんな所に落とし穴あ——!?」

「へっへーん！ 罠を甘く見るから見落とすのさ！」

「こ、これは……!?」

帝国兵の助けを求める声が出たと思えば、数人の兵がマチヨビイに殴り飛ばされた。或いはカルバさんを追った兵は、彼女に誘導され急に発動するトラップに怖気づく。

あれほどいた兵達は、殆ど戦闘不能となっていた。B・ビイ達は戦力の殆どの注意を引くどころか殆ど無力化して見せた。こちらに来ていた兵達もユグドラシルにコテンパンにされている。

「そんな馬鹿なあ……!? もうこんなにも被害が……!」

「俺達ばつか相手してる場合じゃなかったな」

「くうく……!! あ、貴方達、負傷者を連れて艦に戻りなさい！ 撤退ですネエ！」

これ以上部下に無駄な被害を出すわけにはいかないと判断したのだろう。ポンメルンは直ぐに無事な兵に撤退の指示を出した。

「おいおいあんたも逃げないと、もう疲れてるだろうに」

「誰が……! 兵を指揮する立場にいるこの私が！ 部下より先に逃げ出しては帝国軍

人の名折れ！ それに私はあ、まだまだあ……負けていませんよオ!!」

「……ポンメルン」

何とか立ち上がったポンメルンは、依然として魔晶形態のままだった。それは奴自身の気力のなせること、つまりは根性である。

やはりこの男はどこまでも「軍人」だ。アウギユステの一件以来ポンメルンを憎んでさえいたユーリ君もその姿には僅かにも感銘を受けたようだった。

こういった相手は、油断できないから厄介だ。どうした物か悩んでいると不意に俺の肩を誰かが掴んだ。

妙にごつくデカイ手だったため驚きその手の主を見ると、なんと何時の間にか二足歩行で立ち上がった父ゴリラだったのだ。

「お前……!?!」

『うほ……!?!』

彼はかなりの体力を消耗しているはずだった。なのにその瞳はギラギラと輝き、肩を掴んだ俺を自分の後ろに下げると両拳を地面につけて歩くナツクルウオークへと移ったかと思うと、なんとそのままポンメルンへと猛スピードで駆け出したのだ。

「おい、ちよつと待て!?!」

「んなあつ!?! こつちに……き、貴様何をお!?!」

『……ううっ！』

俺達だけでなくポンメルンも驚き慌てて盾を構えた。父ゴリラの敵意は明らかにポンメルンへと向いていたのだ。

俺達の制止を聞かずかける父ゴリラは、右腕を振り上げながらポンメルンへと肉薄しそして――。

『っほおおおお――ッ!!』

「べぼらあ――ッ!？」

ポンメルンが構えた盾事彼を殴り飛ばした。

弧を描き宙を飛んでいくポンメルンを俺達は唾然として見るしかない。そしてポンメルンは、魔晶形態から人間の姿へと戻りそのまま自分達が造ったホール中央の通路へと綺麗に落ちて行った。

「お、覚えておきなさいですネエくく………!!」

「ポ、ポンメルン大尉い――!？」

「大尉がホールインワンしちゃったあー!？」

「急いで追え！ 撤収いそげえ！ 大尉を助けるお!!」

落ちて行くポンメルンのか細い捨て台詞。それに慌て大急ぎで彼を追い撤収する帝國兵。

まだ唾然としていた俺達があのだ父ゴリラを見ると、彼が帝国に着せられていた鎧が少しづつ外れて行く。戦いで接続部が壊れ今ので完全に外れたのだろう。

籠手など自然に外れなかった部分は、父ゴリラが自ら引きちぎり放り捨てて行く。そして再び両足で立ち上がりながら体の鎧を全て外し切る。

すると鎧から解放された彼の身体が露になる。

「なんてパワー……体力だつてほとんど無いだろうに」

「……シルバーバックだ」

俺がその圧倒的な野生の力に驚いていると、ゴリラの後ろ姿を見たユーリ君が息をのみ呟いた。

「シルバー？」

「ず、凶鑑で読んだことがあります。成熟した雄のゴリラに現れる特徴です。背中の方が銀色にも似た白色へと変わる、と……ほ、本当に銀色だ……!」

「シルバーバック……あれが」

父ゴリラはそのまま両手で胸を叩き、雄叫びを上げた。

それは先ほどの武装ゴリラの時とは違う、解放された喜びと勝利の雄叫びだった。

■

十二 バイバイ、ゴリラ

遺跡から脱出すると遺跡入り口の前には避難させたゴリラ達が群れとなって地面に座り込んでいた。

そして遺跡を覆う様に影がさしている。上を見上げれば見慣れた騎空艇エンゼラの姿があつた。

気囊に「船体が浮き過ぎず沈み過ぎず」で一定量ガスを充満させたエンゼラは、遺跡の少し上の位置で浮遊している。そこで錨を地上に降ろす事で遺跡上空で風に流される事も無く停まっていた。そして梯子を降ろし艇に待機していた仲間は既に地上に降りていた。

入り口から出て来た俺に気が付くと、コーデリアさんが俺に駆けよってくる。

「すまない団長、ガルーダに言われて来たんだが遅れてしまった」

「お気になさらず。疲れはしましたが無事ですんで」

「ふふつ、そんな表情で疲れたと言えるなら大丈夫だね」

あの、それってどんな表情でしょうか。いい意味で受け取って良いんですよね？

「マリーから話は聞いている。ゴリラの事も驚いたが帝国とはね……そちらは？」

「懲らしめて追っ払いました」

「流石だね」

「はは、なんのなんの。それでゴリラ達の様子は？」

「体力の消耗はあるようだが目立った怪我も無い、命にも別状は無いだろう。治療の術が使える者で今治療を行っている最中だ。君の仲間とわかってくれたからか、大人しく治療を受けてくれているよ」

うちの団には流石に獣医はいないが、怪我が無いなら動物でも治療の術などで治す事が出来るはずだ。一先ず安心した。

エンゼラを遺跡上空に停めた後俺達はゴリラの治療と遺跡の調査を再び行う事になった。

地上にテントを張って簡易的にだが救護室をつくり、治療の術を使える者達でゴリラ達の治療を続けた。その甲斐あつてか治療を終えるとゴリラ達は、元氣満々とは行かないが身体を動かすのに問題は無い程度に回復した。

だがポンメルン達に武装ゴリラとして操られていたゴリ坊の父親の方は少し回復が遅れた。ポンメルンを殴り飛ばした後、彼はついに限界が来たのかその場で倒れ意識を失ってしまった。魔晶で無理やり体を操っていたので肉体よりも精神力の消耗が心配だった。

俺達は安静にさせた父ゴリラに治療の術をかけた。そして二日後意識を失っていた父ゴリラは、やっと目を覚ました。その事に俺達以上にずっと傍を離れなかったゴ

リ坊と母ゴリラが安堵したのは言うまでもない。

魔晶の事もあつて経過を見ていたおっさん曰く「体力を失くしてただけで、後遺症もねえからなんも問題ねえよ」との事。魔晶の破壊が早かつた事が良かったのだらう。

その後更に数日ゴリラ達の様子をみつ、島の測量や遺跡の調査を続けてゆき俺達はこの島での全ての仕事を終えた。そして――。

『うほ……』

「世話になつたな」

俺達はこの島を発つ時が来た。俺とユグドラシルの目の前には俺達が助けたゴリラの群れ、そしてゴリラ坊とその両親がいる

『うほうほほほ、うほうほほうほつほつほ……』

父ゴリラが俺に謝辞を述べる。彼はまだ体は本調子ではないが、誰かの支え無しでも動けるまでに回復した。もう何も心配はいらないだらう。

「気にしなくていいさ。あんた達を襲つたのは人間だ。ならその始末をつけるのも人間である俺達の仕事だよ。それに土産あんなに沢山貰つて悪かつたな」

俺達の後ろに沢山の木箱とそれに詰め込まれたこの島特有の甘い果実があつた。団員達はそれをせつせとエンゼラに積み込んでいる。

島に滞在する間ゴリラ達は、俺達の島の調査を手伝つてくれた。食べれる果物がなる

木や危険な場所などの情報を教えてくれていたのだ。

“助けてくれた礼だ”——そう彼等は俺に語った。

その中でも木箱の殆どを占める黄色の果実バナナはシエロさんにも良い土産になるだろう。

「暫くは外から人間が来る事は無いはずだ。今後人もお前達を傷つけないように俺も何とかしてみるよ」

「ちよつと——！ そろそろ荷物詰み終わるわよ——！」

ゴリラ達と話していたらエンゼラからメドウ子の声がした。島で手に入れた荷物も殆どが運ばれ、後は俺達がり込んで終わりだ。

「時間か……」

『うほお……』

もうお別れの時間だとわかったのだろう。母ゴリラの背に乗っていたゴリラ坊が寂しそうな声を出し俺とユグドラシルを見た。

「……………」

ユグドラシルも名残惜しそうにゴリラ坊を見つめる。魔物に襲われていたゴリラ坊を助けてから、ゴリラ坊は特に彼女に懐いていた。ユグドラシルもまたそんなゴリラ坊を気に入り、ゴリラ達を助けた後も彼女とゴリラ坊は遊んだりと実に仲が良かった。

『うほ！』

不意にゴリ坊は母ゴリラから飛び降りた。するとそのままユグドラシルへと近づき飛びついた。ユグドラシルもまたゴリ坊を両手で抱き留める。

「――」

『うほ……うほほお』

ユグドラシルが抱き抱えたゴリ坊の頭を撫でる。二人は寂しそうにしながらも、そつと「さよなら」を告げた。

「そうしんみりしなさんな……機会がありやまた来るかもしれないからな」

「――？」

ユグドラシルは俺に向かって「本当に？」と期待を込めた視線を向けた。

「こんだけゴリラと交流しちまったからな。帝国も島荒らしたし……島の調査もどうなるやら。シエロさんにまた何頼まれるかわからんよ」

『うほ？』

ゴリ坊には俺の言う事はよくわからないだろう。彼等ゴリラに人間の生活の事など知る由も無いのだ。

だから言える事があれば一つだけ。

「うほほ——さよならじゃなく、また会おうでいいのさ」

『……うほー！』

この言葉は理解出来たのか、ゴリ坊はその顔を破顔させた。

ユグドラシルとゴリ坊が再会の約束とお別れを済ませると母ゴリラにゴリ坊を返す。俺は梯子を上りエンゼラへと乗り込む。

地表に降ろしていた錨を上げると、エンゼラは徐々に上昇し出し島から離れて行く。

「ゴリ坊、お父さん助けた時のお前カツコよかつたぜ！ また会おうなお前等！」

「——！」

俺達は甲板から島にいるゴリラ達に手を振った。

ゴリラに人の挨拶はわからない。だがきつと俺達のやり方はわかってくれる。彼等は俺達の真似をして手を振った。

『うっほほお——いっ！』

最後までゴリ坊は手を振り、そして俺達に向かい叫んだ。俺だけじゃなく皆もそのゴリラの言葉の意味を分かったろう。

“また会おう”と。

十三 その後リラ

——更に数日後、とある島シエロカルテの店。

「お食事中失礼いたしますす〜」

「いえいえ、呼んだのこつちなんでお気になさらず」

ゴリラの島での依頼を終えた俺達は、飯を食いながらまた新しい依頼をシエロさんから受けていた。

「今度は此方の依頼などどうでしょうか〜」

「ふ〜む、どれも報酬が結構な……そして大変そうな」

見せてもらう依頼書は、どれもこれも報酬は高いがその分苦労しそうな内容だ。中にはうちの騎空団を指名して来た依頼もある。その分俺達の名と実力が知られていると思う事とする。

「とりあえず……これとこつちの魔物討伐と、あとこの貴重品の納品依頼受けますね。同時進行でも出来そうだし」

「かしこまりました〜」

依頼書の中から手頃なものを数枚抜き取りそれを受ける事にする。

シエロさんは笑顔で依頼書を仕舞うと、ふと何かを思い出したのか「そう言えば」と言いながらポンと手を合わせた。

「以前の調査依頼の事です〜」

「あれ、何かありました？」

「学者の方達が新しい調査計画を今立てている最中でして、予定通りその内自分達も上陸して調査しようと考えているようですね。その際は是非団長さん達に同行して欲しいそうです。」

ゴリラ達との出会いから既に数日。驚きの出会いは、それだけに遠い昔のように思える。貴重な経験だった。

「彼等は元気でしようか」

「大丈夫だろうさ。ゴリラは逞しいのだ」

ユーリ君がああゴリ坊家族とその群れの事を思い出す。一切の心配が無いと言えば嘘になるが、きっとバナナを食べて元気でいると信じたい。

「私はもうちよつと遺跡を楽しみたかったなあ」

「あれ以上何を楽しみむきよ」

「畏も悪くない畏だったけどさあ。あれ帝国の手が入っててやつぱ違うんだよねえ……私は手付かざるの遺跡でアブーいスリルを味わいたいのさ」

「あたしはごめんよ……」

あの時遺跡の目ぼしいお宝は、先に来ていた帝国が集めていた。奴等もそれを持ち帰るつもりだったろうが、俺達による襲撃に混乱しポンメルンも倒され撤収を優先して結

局全部残して行った。

そして帝国を追つ払った後にそれを俺達が、と言うよりもマリーちゃんが心躍らせ回収していたのは言うまでもない。

カルバさんもお宝ゲットに喜びはしたが若干不完全燃焼だったようだ。お宝は帝国が回収した物であり、罨に関して帝国兵の手が入ってしまった。カルバさんとしては、手付かずの遺跡に挑みスリルを満喫したかったと言う事だろう。十分スリルのあつた依頼だと思ふけどね。

手に入れた宝石等は、一度シエロさんに渡し学者さん達に納品した。学者さんによる鑑定の後幾つかは報酬としても貰う事が出来て俺もマリーちゃんもウハウハである。

「ねえねえ团长おくまた遺跡調査とかの依頼無いのか〜い?」

「今んとこは無いです」

「むう、残念だなあ」

「うふふ〜カルバさんは本当にスリルが大好きなんですネ。目ぼしい依頼や遺跡の地図がある時は、優先して紹介しますから元気出してください〜」

「マジツ! お願ひねシエロさん!」

「……なるべく危なく無いので願ひよ」

「何言つてんのさマリー! アブいから良いのさ!」

「良く無いのよ……」

いつか来るスリル満点な依頼に胸を躍らせるカルバさん、対照的にげんなりとするマリーちゃん。

その時が来たら俺も用心しよう。また毘にかかりまくる気がする……。

「ところで……島の再調査って直ぐに行うんですか？」

「いえもう暫くは後になるかと……団長さん達が解決してくれましたが、エルステ帝国の戦艦が何度か来ていたと言う事ですので、今直ぐ調査と言うわけにはいかないようですね」

「……それが良いと思います。再度帝国が来ないとも限らないし、ゴリラ達も今はそつとしておいた方が良いでしょう」

「学者の方達も同様の事を仰られておりましたね」

帝国の悪事は秩序の騎空団に報告済みだ。

現在の情勢から完全な解決は望めないが、今後無人のあの島の所へも、定期的に中型巡回艇で見回ると言う事だ。少なくともこれで帝国の艇も迂闊にはあの島には行けないだろう。ゴリラの平和は護られたと思いたい。

「それと提出された島の調査報告書が予想以上に多く正確な記録だったので、急いで島に行かなくても十分な情報を得る事が出来ると喜んでおりました。ルナール先生のス

ケッチも大変好評でしたよ〜」

「仕事だもの、手は抜かないわ」

「さ、流石ですルナル先生……!」

「……うん、まーね」

数十枚にもなるルナルさんによるスケッチ、多分現在世界で一番ゴリラの姿を正確に描けたものだろう。そして他の生物や植物のスケッチも多い。

シエロさんに褒められたルナルさんは、プロらしく事も無げに答えていたがセレストに褒められているとちよつと顔を緩ませていた。

「じゃあ……その内調査はあるだろうし、その時は俺達も行きたいんで学者さんには是非同行したいって会ったら伝えて下さい」

「——!」

島に行けばゴリ坊にもまた会えるだろう。ユグドラシルもそれを期待しているようだ。

「お任せを〜。それでは、新しい依頼の方もよろしく願います〜」

「こちらこそお任せ下さい。あとエンゼラの備品について——」

「ナア、コノ酒ツテマダ残ツテルカ?」

「こつちにもおかわり願いますにゃ〜!」

「おいこら、おのれ等勝手に追加注文するな!？」

エンゼラの消耗品の補充も頼もうと思ったところテーブル端に座る酔いどれ共の声
が聞こえて思わず立ち上がる。

「チイツ! ラムレッダ、大声出スカラ気付カレタジャナイカ!」

「にやひつ!?! あ、あたしのせいかにや!?!」

「やかましい! お前等追加注文させると際限なく高いの飲むから、追加したい時は俺
に一声かけろと言ったろうが!」

「才前シエロカルテト喋ツテタジャナイカツ!」

「待てや少しはよ! ……いや、待てなんでテーブルの酒瓶増えて……」

「アツ!?!」

「し、しまったにや……!?!」

「ラムレッダ、下ゲサセトケツテ言ツタノニ!?!」

「さつきまで無かったろ!?! お前等どのタイミングで注文したんだよ!?! 何本飲ん、い
や幾らの何本飲んだ!?! 言え、吐け!」

「は、吐くのはちよつと……」

「そうじゃねえよ、バカちん!!」

真面目なお話をしたかったのに酔っぱらいの相手をする事になる。結局騒がしい俺

の日々がまた始まり、そして続いて行くのだった。

SAMURAI GIRL

■ 一 始まりは日常から

なんて事の無い、何時も通りの朝。日が昇る少し前に目を覚まし、顔を洗ってから操舵室で航路の確認をしているセレストに朝の挨拶をして食堂へと移る。今日は俺が食事当番だ。

本日はコロツサスが食事当番お休みの日である。日頃から「アサツヨイシ（*・ω・）ボクヤルヨ♪」と自ら朝食当番を買って出てくれたコロツサスだが、そもそも彼は生物の肉体とは違い古のドラフの技術で創られた機械のボディを持つ特殊な星晶獣である。基本的に他の星晶獣以上に「眠る」等の行為の意味が無いのである。

勿論大変ありがたいし、非常に助かるが全て任せっぱなしと言うわけにもいかない。彼が本当になんの意志も持たない便利なだけの機械であるなら話は別だがいまやコロツサスは——俺と出会った事が原因らしいが——ジータ達が出会ったオリジナル・コロツサス以上の自我を得てしまい個として確立している。最早それは生命と言って良

い。ならば互いに助け合わねばならない、日頃も彼一人だけじゃなく手伝いの当番を決め、或いは一日休みを与える。騎空団団員、持ちつ持たれつだ。

本当なら他にも食事当番の人がいるのだが、俺はザンクティンゼルからの習慣で日も昇らない内に起きてしまうから先にとつと準備を始めてしまう。

「んあ〜……ああ、おはよう団長さん」

「おやコルワさん？ おはようございます」

火をつけ食事の準備をしていると、最初に食堂に顔を出したのはコルワさんだった。他の食事当番の人が来るにしても早い時間なので少し驚く。

コルワさんは寝起きの調子が抜けておらず、眠そうな顔でフラフラと歩いて倒れ込むようにして席に座った。

「やけにお早いですね？」

「うん……あんま寝れなくてねえ……それでもお腹すいちゃったから、軽くつまめる物無いか見に来ちゃった」

「おやまあ、昨日は遅くまで？」

「新しい服のデザインに行き詰まっちゃってねえ……横になってもあんま寝れなかったのよ」

「あらら……そいで新しいデザインってのは、誰かからの依頼ですか？」

「別に依頼ってわけじゃないのよ。ただなくんか新しいアイディアが浮かんだ気がしてねえ……。だから直ぐそれを形にしようとしたんだけどピタって急に筆が止まっちゃったのよ！ いやけど漠然としたイメージは描いたのよ？ キュロットスカートをベースにしたボトムスでしょ？ ゆったりとして羽織るようなトップスでしょ？

ああ、けどそのトップスもネックなのよ、単純な上着も良いんだけど巧くボトムスに組み合わせられないかしらって思うところもうちよつと遊べる感じ？ 工夫する余地があるの、ポツカリと空白がある感じなのよ、ありよりのありなのよ！」

「俺クロエちゃん語詳しくないけど最後クロエちゃんのうつつてますよ。しかもちよつと意味違う気がする」

「うん、私も使つてそう思った。けどまだ話は続くの聞いてちょうだい。服つて勿論お洒落も大事だけど動きやすさも重要なよ、だつて服だもんねそりやそうよ。けど動きやすさ重視し過ぎたらそれももう作業着じゃないの。その両立が難しいんだけど、今考えてるのがまた難しいのよ。カジユアルでもいいけどフォーマルでもって感じの奴だから。でキュロットみたいなスカートの方は良しとしても、トップスが問題よ、袖口が広い感じでイメージ出来てるんだけどそれ使いづらくない？ 動かし辛いでしょ、じゃあなんでそんなイメージ浮かんだんだつて話だけど私が聞きたいわよっ!! 誰かこの天啓の概要を説明してよ!」

「落ち着こうコルワさん！　なんか徹夜テンションで暴走してる！」

「あら、ごめんなさい私ったら……けどね、ほんと、コレだッ！　って言うのが思いつかないのよお……もうずつとモヤモヤしちゃって……プチスランプだわ……」

早口で喋りまくるだけ喋ると、ついにテーブルに突っ伏して天板に額をグリグリしだすコルワさんだった。

「まあまあ、頭グリグリしてもアイディアは出ませんよ……食事もう少しかかりますけど、コーヒーか紅茶なら用意しましょうか？」

「ありがとう頂くわあ……コーヒーでお願い、頭冴えそうならいいので……」
「あいあい」

棚からコーヒー豆を取り出し、細かく挽いて要望通り苦味を強く淹れて出してあげた。コルワさんは砂糖を入れずにそのままコーヒーを飲みホツと一息ついた。

「ああ……ちよつと落ち着いた」
「アイディアは浮かびますか？」

「ん………無理、駄目っ！　なんも出ない！」

コルワさんが頭を掻きむしり、脚をバタバタとさせ叫ぶ。どうやら濃いコーヒーでは彼女の悩みを解決するに至らなかったようだ。まあそうだろうね。

「しかもねえ……なんか覚えがあるのよねこのアイディア。だから多分参考に出来る」

何かがある筈なのよ……なんだっけなあ、結構前に見たと思うんだけど……」

「へえ、そうですか……」

「何かないかしら、このアイディアの空白を埋めるような刺激……」

「刺激、刺激ねえ……」

俺はふと食堂に張り出されている掲示板を見た。そこにはレターボックスとメモを張り出すコルクボード、そして月毎の予定が書かれる黒板がある。

基本的に月の予定は、殆ど依頼やらで埋まっており今日もその例に漏れずシエロさんから受けた依頼の日だ。

「ふむ。コルワさん、刺激的是はわからないけど今日の依頼参加しますか？」

「依頼に？」

「ええ、今日はこの後寄る島で依頼があるんですよ。内容は……まあ大した事無いものですが、前手に入れた品をシエロさんに納品するだけなんで。だから依頼を手伝うわけじゃなくて一緒に島を見る感じで良いですよ」

コルワさんは俺達の仲間ではあるが、そもそも本業デザイナーである。エンゼラに乗った目的も刺激を求めて旅への同行を申し出たからであり、部屋も金を払って借りている。なので基本依頼を手伝う義務は無い。

「なるほど……確かに部屋でうだうだしててもしょうがないし……うんっ！ いいわ

ね、団長さんが良いなら着いてくわ！」

「納品の依頼でそんな期待した瞳を向けられてもアレなんですが……」

「そんな心配しなくて大丈夫よ。団長さんと行動すれば面白い出会いがありそうだもの」

「俺が引き寄せてるみたいと言わんで下さい」

「あら？　なら違うって自信持つて言える？」

「い、言えらあつ！」

言うだけならいくらでも言えらあ！　こんちきしよう。

「どつちにしろ初めての島だし楽しみだわ。なんだかインスピレーション湧きそうな予感が……ふああ……」

俺の提案を受け乗り気になったコルワさんだったが、眠気が再び出て来たのかついつい欠伸が出ってしまったようだ。

「お腹すいてるなら、部屋戻って寝る感じじゃないですよね？　朝食までもう少しかかりますからそつちのソファァーで横になっていいですよ。そこの毛布でも使って下さい」

「ん……ありがとう、そうするわね……」

のそのそとコルワさんはソファァーへと移動すると自由利用の備品棚から毛布を手

取りバツタリと横になった。熟睡とまではいかないが多少体は休まるだろう。早い事悩みを解決してあげた方がコルワさんのためだ。今回の依頼でそのきっかけがつかめる事を願いながら俺は朝食の準備を続けた。

■ ■
二 納品クエスト 【南国バナナでこんにちは！】 納品完了しました

その後到着した島で俺達は、島の一番大きな街のバザーエリアに向かった。

この街のバザーエリアの規模と盛況さは中々のものであり、他の島でもそれなりに名の知れたバザーだそう。外から来る人間がまず立ち寄る街がここである関係上この島内での物流の中心部でもあるらしい。ここでは他の島から集めた品を売る店が多く他の村や町からも人間が訪れている。

食品、生活用品、衣類等を売る屋台や露店を見て同行しているコルワさんは、少し興味を惹かれていた。コルワさんが普段住んでいた地域では見れない品がここには輸入されているようだった。

何かインスピレーションを受ける品もあるかも知れないと思い、元々俺達だけでやる依頼なのでコルワさんには少しバザーエリアを見て回って良いと言って一特別行動をとった。

「んじや、これとそれで全部……つと！」

「オイシヨー!! (つ、・ω・) つ」

バザーエリアにあるシエロさんの店に着くと納品する品物が詰まった木箱をコロツサスと協力して積み上げていく。

「いやあくコロツサスさんが居てくれると、荷物も直ぐに運び終わって助かりますねえ」

「チカラシゴトナラ (*ゝωゝ) b オマカセダヨツ！」

シエロさんがズンズン荷物を運んでは積み上げるコロツサスを見て感心する。

荷物の搬入搬出は、本気でコロツサスが居ると助かる。コロツサス一人で果たして何人分の働きになるか。省エネ形態でもドラフの男性十数人、いや数十人分は働いてるだろう。

「じゃあこれで納品予定の品は全部ですね」

「どうもありがとうございます。輸送船の都合が付かなかったのですが、団長さんが居て助かりました」

「ははは……しかしシエロさん、果実ってか急にバナナ好きになりましたね」

俺達が納品した品物は、南の島にある果樹園で栽培された南国の果実、特にバナナが多く詰められていた。全てシエロさんが注文した品々だ。

「おやおやあくぐ存じありませんでしたか？ 前の依頼で团长さんが手に入れてくれたバナナが切欠で、今この辺りの島々ではちよつとした南国果実ブームが起きてるんですよ？」

「マジでか」

話を聞くに俺達がああゴリラ島からゴリラにお土産で貰った多量のバナナや南国の果実をシエロさんにもお土産として分けたのだが、彼女はそれを南国の果実が手に入らない地域の島で売ってみた所良い感じに売れてしまったようで、その流れで軽くブームが起きてしまったとか。

その後ゴリラ島はまだ立ち入りが難しいので南方の果樹園から入荷していたが、今回発注をしていた品を運ぶ予定だった艇がトラブルでこの島に来れなくなったため、俺達が急遽代理で納品したと言う流れだ。

「何時の間にか火付け役に……」

「あはは、ウケるっ☆ だんちよバナナ軽くバズらせてんちゃん（・▽・）。わら」

「バズ……る？ バズとはなんでありますかクロエ殿？」

「ん？ あーね、あれちゃんね、なんかめち話題んなって急にナウった感じ？」

「……っ?!? ……?!?」

クロエちゃんの説明を聞いたシャルロツテさんは、頭に「？」を浮かべるだけしか出

来なかった。

「……まあつまり、流行ったって事で良いんだよね？」

「それなつ（σ、≧▽）σ」

やはりそうだったらしい。まあ話の流れでわかったけどさ。

「ともかく納品の方はこれで完了ですね。俺達このまま昼飯食いに行きますんで、また次よろしくです」

「（こちら）そ次もよろしくお願いします〜」

納品を終えシエロさんと別れると、次にバザーエリアのお店を見て回っているコルワさんを探す。多分衣服を売るエリアにいるだろうと思いそちらに向かうと、やはりコルワさんの姿があった。

「コルワさん、コルワさん」

「あら、団長さん。よろず屋さんの方は終わったの？」

「ええ、無事納品完了です。そちらは？」

「そうね。結構面白いのがあるわ」

コルワさんは店頭に並ぶ色とりどりの生地を見ていた。中でも目を惹かれるのは、柄が美しい生地だった。

俺達はその生地を見てみると、店主の男性がにこやかに話しかけて来た。

「お姉さんこの生地が気になるのかい？」

「ええ、これ「クレープ織り」よね？ 面白い模様が入ってるけど」

「お目が高いねえ……これは東方の島から手に入ったもんで、あっちじゃ「ちりめん」って言われてるらしい。織り方を工夫して模様を入れるそうだが、東の方で伝わる模様を織ってるそうだ」

「へえ……そう、東の方の。あら、こっちの染物も良いわね」

興味が尽きないのかコルワさんは、そのまま興味のある生地を見ては店主にそれについて尋ねた。

「熱心だねえ」

「しかし確かに良い品ぞろえであります。それにこちらの染物は、自分も故郷で見た覚えがあります」

「シャルロツテさんの故郷って雪国ですよね？」

「はい、自分の故郷は雪深い所でしたが、近くの島では染物が盛んな所がありました、ここでは雪の上に布を広げることと布を仕上げ綺麗にするそうであります。それに自分も故郷では、特に雪が積もる時期に家の手伝いで編物を編んだものであります……」

「うちでもママや村のおばあちゃんや、よく編物やってたっけなあ……あ、思い出したら懐かしみヤバ、ちよいセンチんなる……（・ω・）」

生地を見ていただけなのだが、シャルロットさんとクロエちゃんの二人が故郷を懐かしんでいた。

しかし二人の話を聞いていると俺もザンクティンゼルの事を思い出す。あそこも村の年寄り達は、しよつちゆう編物を編んでいた。あのばあさんも修行の合間ストールなんかを編んでいた記憶がある。

「おいおい、三人共故郷を懐かしむのは良いけど早いとこ飯食おうぜ」
「おっとそうだった」

若い三人が望郷の念を抱いて空を見上げていると、奇妙な光景に呆れたB・ビィに食事の催促をされた。

「コルワさん俺達食事行きますけどどうします?」

「そうねえ……うん、一緒に行くわ。私もお腹すいたし。店主さんごめんなさいね」

「いやいや気になさらず。またの機会があればよろしくどうぞ」

どうやらこの生地だけでは、コルワさんのアイディアを刺激しインスピレーションを起こすような力は無かったらしい。中々惜しい所だったようだが残念だ。

「面白い生地みたいでしたね」

「ええ、東方の文化って私も興味あつたけど意外な所で出会ったわね。このままもう一つ面白い刺激的な出会いがあればいいんだけどね」

東方の文化に関しては、俺も本などでしか知らない。空域の東の方の島々は、俺達の住まう地域とは文化的な差異が多いらしく特に「侍」と呼ばれる者達がいる等の話を聞く。特に刀の扱いに長けた剣士をそう呼ぶそうだ。

刀文化、その武術の起源は東方にあるとも言う。今でこそ俺達が住む地域でも刀を扱う者は多く、俺もばあさんに扱いの心得を叩き込まれている。だがそれは剣の扱いを学び、その流れで刀も扱える者が多いと言うべきか。

別にどちらが優れていると言うものではないが、武術の入り口から既に刀を握り、真に刀一本で戦場を渡り歩くような者は多くないだろう。

何時かその地に縁がある人と出会う事もあるのかもしれない。そんな事を考えつつ俺達は、どこか食事の出来る店を探しに行った。

■ 三 フェイトエピソード 異国の風は味醂の香り

その少女がこの島に来たのは、「あの騎空団」とほぼ同時の事であった。連絡艇に乗ってやって来たその目的は、この島のバザーがこの周辺地域では特に有名と聞いたため、すなわち観光目的である。

名前をミリンと言うその少女、この地域の島では見慣れない衣服に身を包んだ彼女

は、遠路遙々東の島よりやってきた。その見慣れぬ衣服を珍しがる島の者達もいたが、同時に彼女もまた異国であるこの地を珍しく思い興味津々であった。

女だてらに刀を携え、故郷を離れ島から島へと諸国漫遊一人旅。見る物全てが驚きに溢れ、中でもやはりこの目的たるバザーが面白くないわけが無い。

並ぶは並ぶ店の数々。屋台に露天で叩き売り、島々から集まる商人と商品がズラリと目白押しであった。

「安くするよ」「いいや、もっと安くしろ」。そんな声がそこかしこで聞こえるこの熱気に押され気味になりながらもミリンは人込みを縫うように歩いていく。

どれもこれも面白そうだ、楽しそうだ、珍しい物だと感心しながら歩いてみると、店の店主から声をかけられたりもする。大抵は先程のように「安くするよ、買わないか」等の様な呼び込みであるが、中には目の利く者がいるもので――。

「お？ その綺麗な おべべ」のお嬢ちゃん！ ええの着とるなあ、それ東の着物やろ？」

と、すんなりミリンが着ている着物の事を言い当てるような者もいた。

特徴的な喋りのエルーンの商人。驚いたミリンは自身が着ている「着物」を知っているのかと聞くと、その商人は「にしししし！」とこれもまた特徴的な笑いと共に頷いた。

「商人やったら知っててなーんもおかしーことないで。あつちやこつちやの服商品に仕入れる事なんて珍しい事やないからな。しかしその着物、ほんでその風呂敷包みもええ出来やなあ。お嬢ちゃん東の生まれか？」

更に商人は着物だけでなく、ミリンが背負う風呂敷もまた上質な東の織物と見抜く。

これらの物は、ミリンの母が自ら織ったものであり、何時帰るか分からぬ娘の長旅にも耐え、御守りの如くあるよう丹精を込めて作られた。ミリンがその由来を話すと商人は深く頷く。

「なるほど御袋さんがなあ、そら立派なわけや。いやこれは値が付けれへんなあ。しかしそれだけや無いな……そっちの腰の刀もまた立派なもんやで」

こんな具合に店の前で立ち話。故郷の話をすれば商人は「ほうほう」と頷き旅の話すれば「へえへえ」と感心する。ミリンも故郷の事に興味があるらしいその商人に好感を抱いた。

そしてミリンが腰の刀や背負った風呂敷包みを下ろし商人に見せてみたりと話が盛り上がっていると時のことである。不意に一人の男がミリンにぶつかつた。

「おっと、失礼……」

ミリンが何か言う前に男は素っ気無い謝罪を言うとその場を後にしようとした。だがその時商人が目を見くさせ男を呼び止めた。

「あんちゃん待ち、今盗ったんこの嬢ちゃんに返し」
「……………」

男は呼び止められるとギョツとして商人を見た。ミリンもまた何事か分ならず二人を交互に見た。

「あの、なにか……………」

「嬢ちゃん着物の袂んとこ財布入れとつたんやないか？　ちよつと見てみ」

「え？　はい…………えつと…………えつ？　あ、あれえ!？」

ミリンは悲鳴を上げた。商人の言うように着物の袂に入れていた財布がなくなっていたのだ。

「今抜き取られたんや、スリやでこの兄ちゃん」

「な、なんと!？」

「…………いや、俺は」

「誤魔化しても無駄や。うちに背え向けて見えんようにしても、パッと抜き取ったんは動きで分かる。まずはそれ返しなはれ、話はそつからや」

男は額から汗を流しギリギリと齒軋りをして二人を睨む。すると脱兎の如くその場から逃げ出した。

「ああドロボー!!?　拙者の財布返して——!?!」

「追うでー！」

そしてミリンと、〃カルティラ〃もまたその男を追いかけたのだった。

■ 四 何か困ったことになってるみたい

飯屋を探して移動する俺達であるが、人込みで移動が阻害され広いバザーを中々抜けられないでいた。

「ううむ、何と言う人込み」

「そろそろ昼だつてのに空く気配がありやしねえな」

「クロエお腹すいたあ〜……」

人込みを縫う様に歩いてみると、丁度バザー中心部の所へと出てきた。するとそこは、他よりは道が広くバザーの各エリアへ移動できるよう十字路となっている。

そしてここに集まる屋台は、殆どが飲食関係の店であり、店頭で肉を焼いたりする屋台がズラリと並んでいた。

「なるほど食事の屋台目当ての人達でありましたか」

「昼になつても空かねえわけだけ」

「肉を焼く香りが……ううん、この際屋台でも……いや、けど歩き食べは……」

別に他の場所に行ったところで込んで入るだろうが、少なくとも屋台では落ち着いて座って食事は無理だろう。やはり繁華街にでも出た方が店も選べるなあ……などと考えていると、急に俺達が歩く前方より騒がしい声が聞こえてきた。バザー特有の喧騒ではなく何かが原因で起きた混乱によるものだ。

「なにやら騒がしい……事件でありますか?」

「穏やかじゃありませんね」

人込みの間隙からこの先で何が起きたか観ようとしていたら、今度はハッキリと複数の男女の声が聞こえて来た。

「どけどけどけっ!! どけてめえらぶつ殺すぞ!」

「またんかワレエ——ツ!!」

「拙者の財布返してえ——ツ!!」

人々が驚き道を開けて行くと、その空いた道を一人の男がナイフを振り上げつつ走り、その後を何故かカルティラさんと見慣れぬ少女が追いかけていた。

「あれカル姉じゃん!?!」

「……そう言えば自分もバザーに出店するとか言ってたな……」

「それよりジミー殿、どうもスリか何かのようでありますよ」

「らしいですな。せいじゃここは一つ……」

ナイフに驚く人々が道を開ける中そこへ躍り出る。男は突然現れた俺達を見て怒声をあげた。

「んっただあてめえ!! どけえ!!」

「お断り」

「この……死にてえのか!!」

男はナイフを俺に突き刺そうとしたが動きが単純で簡単に動きが読めてしまう。

「ふんっ!」

「っつてっ!」

ナイフを持つ男の手に向かって上から拳を振り下ろす。すると衝撃で簡単に手が開きそのまま男はナイフを落した。そしてそのまま男から少女の物と思われる財布を取り上げる。

「これあの子のだろ? 泥棒はいかんと思うよお兄さん」

「て、てめえ……くそ!」

「逃がさないであります!」

「んなあ、いつの間に……っ!? ぎゃあ!」

男はその場から逃げようとしたが直ぐにシャルロットさんが回りこむ。小柄であるシャルロットさんの接近に男は直ぐに気が付かず、一瞬で組み伏せられてしまう。

「な、なんだこのガキ……なんて力、いでで!？」

「じ、自分は子供ではないであります!」

「いだけ……!?! い、痛いって!?!」

たとえ小柄のハーヴィンであっても大剣を自在に振るうシャルロッテさんの腕力は、明らかにハーヴィン種を超えておりヒューマンの男性でも簡単に敵う相手ではない。地面に付した男は両手をシャルロッテさんに押さえられ悲鳴を上げた。

そうして野次馬が集まる中、男を追っていた少女とカルティラさんも俺達の所へ追いついた。

「団長はん……!! ナイスタイミングやで……!!」

「あ、あの……!! そ、その財布……!!」

「うん、君のでしょ」

「あ、ああ! そうです!」

息を切らせた少女に取り返した財布を渡す。彼女はそれを受け取ると大事に抱きしめた。

「よ、良かったあ……!!」

「念のため中身確認しておいてね。仲間とかいると逃げながら盗んだ物渡す時あるから」

「あ、はいっ！　そ、そうですね！」

少女は慌てたまま財布の中身を確認しだす。その様子を見てみると少女の風貌と持ち物が気になった

彼女は見慣れぬ衣服を着ており、そしてその腰には刀を一振り下げているのだ。先程東方の話をしたばかりなので、なんとなくそれが気になった。

「……うん、うん大丈夫。大丈夫です！　何も無くなってません！」

「そう、ならよかった。それでカルティラさん、何となく予想はつきませんが何があつたんですか？」

「いや無事解決した以上大したことやないんやけど、今さつきあつちで——」

「いよお、あんたら大活躍だな！」

「はい？」

俺がカルティラさんから事情を聞こうとした時、突然人込みから数人の男達が近づいて来た。その中のドラフの男は、大きな声で俺に話しかける。

「貴方達は？」

「なーに、ただの通りすがりよ。偶然ここに買い物に来ててな。しかし中々やるな兄さん達！」

「はあ………そうですか」

「まあお疲れさん。ああ……その不逞野郎は、俺達で衛兵に突き出して置いてやるよ」
ドラフの男がそう言うと、他の男達はシャルロットさんが押さえつけてる男に「ろくでなしめ」「盗人野郎っ！」と言いながら取り囲み持っていた縄で男を縛り付けてしまった。

「いや、別に俺達で連れてつても……」

「いや見たところあんたら外のもんだろ？　後始末は俺達島の人間に任せておいてくれよ」

男が縛り上げた男を立ち上がらせると、なんと更に別の男達が「俺も手伝おう」等と言いながら現れる。

「それじゃあ市民の務めとしてこいつを衛兵に……」

男達はそのまま捕らえたスリを連れて行こうとした。不思議とスリも諦めたのか特に抵抗するそぶりは無い。なんだか急な展開にキョトンとしてしまう。

正義感の強い男達なのか？　いや、なにか違和感がある。むしろこのタイミングと強引なやり方。俺は男達に声をかけ引き留めようとした。

「おやおやあ〜？　変ですなあ〜？」

だが俺が声をかけるより先に、人込みより現れ男達の行く手を遮ったのは、さつき別れたばかりのシエロさんだった。

「おやシエロさん？」

「うふふ、どうも先程ぶりです。騒がしいので様子を見に来ました。」

この人がひよっこり現れるのは慣れたもの。何時かのトラモント島並みに不意をつかれぬ限りどこから現れようが俺は今更驚かないが、そんな事は知らない男達はギョツと目を見開いていた。

「な、なんだ……あんたあ？」

「私はただのよろず屋です。それより衛兵さんの所に連れて行くなら方向が違いますね。」

シエロさんは男達が行こうとした方向を見て首を傾げる。そしてスツと反対側のほうを指差した。それを見たドラフの男は、冷や汗を流していた。

「そ、そうだったな！ いやあ今日は特に込んで……いや道をな、間違えてな、いやいや、まいった参った……それじゃあ改めて。」

「いえ、そちらに衛兵の詰め所はありませんよ。」

「……え、!？」

「私はただ指を刺しただけでそちらに衛兵さんが居るとは一言もいつてませんね？」

「お、お前騙し……うっ!？」

ドラフの男はうっかり口を滑らせた。直ぐに口を塞ぐがも遅い、俺達だけでなく一部

始終を見ていた通行人ですら彼等を睨み非難する視線を向けた。

「シエロさん、こいつらは……」

「実は最近この島にスリのグループが来たと聞いていたので……もしやと思いました
が、どうやら当たりのようですね」

「呆れた……市民を装って仲間を助けようとしたのね。態々縄で縛って無駄に手の込んだこと」

「コルワさんが指摘したように、この男達によって縛られたスリは、この集団の仲間
だったのだろう。衛兵に引き渡すと見せかけそのまま逃げるつもりだったのだ。」

「本当に街の人間なら、一度道を間違えても指摘されれば思い出しますからね」

「うぐぐ……」

「とは言え、私の勘違いと言う事もありますから……ここは一緒に詰め所に行きます
か？」

「……ちくしょうっ！」

「むっ?!」

突如ドラフの男は、シエロさんに殴り掛かった。追い詰められ怒りのままに動いたの
だろう。俺とシャルロットさんが直ぐにシエロさんを庇おうと動いたが、それよりも早
く動き二人の間に入る者がいた。

「といやっ！」

「っう……!?!」

ピシッ！ と男の手を強く叩く音がしたかと思えば、男は弾かれるように一步後ずさる。男の手を掌で叩いたのは、あの財布を盗られた少女だった。

「こ、この……なにをつ?!」

「それは此方の台詞です！ 暴力だなんて破廉恥極まりない。盗みを働くだけでなくこのような狼藉以ての外です！」

「何を生意気な、小娘風情が！」

「生意気小娘大いに結構！ その様な小娘を狙って盗みを働く貴方達は、それ以下の小悪党ッ！」

「ぬ、ぬぬ……!?!」

「もしこれ以上乱暴な振舞いを続けると言うのならば私が相手になります！」

「こ、この……馬鹿にするなよ小娘！」

彼女の叱責を受けついに居直った男共は、逆上し腰に下げていたナイフや棍棒を手に持った。その内の一人がナイフを振り回し少女へ迫る。

「むむ、来ますか……ならばこちらも」

少女は男達が得物を手に取るのを見て自身もバツと腰の鞘より刀を引き抜いた。

鞘より抜かれた刃は光に照らされキラリと光る。美しさだけでは、見ただけでわかるその「刃」の精巧さ。道楽で持つような代物ではない。

「せいっ!」

「うっ!」

ビシィ——ツ! と、今度は手では無く刀の峰で男の手を打ちナイフを弾き飛ばす。

「えいやっ!」

「うが……っ!」

そして間髪入れずに強烈な峰打ち、あっけなく男は気絶し地面に倒れた。

「ふう……さあ、まだ来ますか!」

「こ、こいつ……! なら——」

「え! あ、兄貴なにを!」

「そら、こいつでもくらえ!!」

「わああ——ツ!」

ドラフの男は不意に自分達で縛った男を持ち上げそのまま少女へと投げつけた。スリの男も突然の事に驚いているが、ドラフの男はなにも気にした様子はない。

「うわわ……っ!」

「おっと危ない!」

急に飛んできた男に驚いた少女、まさか峰打ちとしても刀で飛んで来る人間を打ち払うわけにいかない。だが今度は俺が彼女の前に躍り出る。そして投げられた男をつかみ取った。

「やれやれ、無茶苦茶だ……ああ、そっち平気？」

「は、はい！ 何度もすみません！」

「た、助か……」

「お前はそっちで寝てなさい」

「ぎゃっ!？」

財布の事も合わせて礼を言う少女。スリの男も何か言っているが、いまコイツに構つて暇は無いので適当に地面に転がしておく。

だがその間に他の男達は反対方向に逃げ出そうと走り出そうとしていた。

「そら今の内に——」

「させんぞ！」

「うげっ!？」

だが奴等にとっては予想外、振り向き走り出そうとした矢先男の一人がバシンツ！と顔を叩かれよろめいた。

「そんな簡単に逃がすわけないやろ、あほたれ」

パンパンと手でハリセンを叩くカルティラさん。今男の一人を叩いたのは、彼女のハリセンであった。

俺達も男達の様子をただ眺めていたわけでは無い。諦めの悪そうな男達の事だから何かしらの方法で逃げようと思えばいい、既にカルティラさん達は男達を囲んでいたのだ。

「逃げれると思わぬ事があります」

「泥棒はダメって、子供でも知ってんよ〜?」

「悪い大人はお仕置きが必要かしらね?」

「ま、抵抗するってんなら相手してやるがよお……!」

シャルロットさん達は武器を手を持った。B・ビイもマチヨビイ形態へと変わる。そのように様子の変った俺達を見て刀の少女は驚き俺達を見ていた。

「あ、貴方達は一体……!」

「ふっ……どこにでもいる、普通の騎空団さ」

「それはねーよ」

「フツージャンイネ (||ω||)」

「……無いであります」

「無いわ〜」

「うん、無いわね」

「う、うるせえやい！」

せめて初対面の人にぐらい普通を装わせてくれ。

五 侍少女大捕物

バザーに集まった団長と仲間、一人の少女、そして犯罪グループ。騒ぎも大きなり始め彼等が居る場所には、一定の距離を保ちながらも野次馬が集まりだしていた。

「えーと……泥棒さん達、まあこんな状況だけでもね。俺としては、争わずに済ませたいのだけど」

「う、うるせえ！」

団長は一人剣を抜かず話し合いでの解決を提案してみたがあっけなくそれは断られた。

「たかが小娘に小僧の騎空団なんて……」

「その黒ナマモノを見てもそう言うのかあんだ……」

「それは……い、いやどうせ見かけ倒しだ！ おい、お前等やつちまえ！」

マチョビイの姿を見ても頭に血の昇った男達は抵抗する事を選んだ。むしろB・ビイ

のその姿が何か細工をしたものだど勘違いしたらしい。彼等は巨大な鎧姿のコロッサスの事もするように考えていた。

また団長以外の殆どが年若い女性である事、その事で男達は団長達の実力を見誤っていたのだ。

リーダーであるドラフの男が指示を出すと、短剣を持った男達は団長とミリン、そして他の団員達のへと襲い掛かる。

「やる気なら仕方ない。君、腕に自信ありのようだけどやれるかい？」

「ミリンとお呼び下さい。あの程度の悪党に負けるつもりはありません！」

「了解、ならミリンちゃん。俺も頑張るとしようかね……来い！」

団長もついに剣を抜き、隣に立つミリンと並び剣を構えた。

それと同時に他の悪党達は、女子供のクロエやコルワを狙う。

「ひゃあ！ クロエの方も来た、（。D。；）ノ!？」

「どけえガキが！」

「いや、そつちが来んなし！」

「ぐが……っ!？」

驚いた声を上げたクロエだったが、彼女はナイフを振り上げて迫る男のナイフの間合いを見切り、肩にかけていた鞆を男の顔に叩きつけその体勢を崩した。

「つてかあ、大人なつてドロボーとかダサイことしてんじやね〜……つて——のっ！」
「ぶい）……っ!？」

そして態勢を崩した男の顎に向かい鋭くハイキックを放った。その一撃で男はそのままナイフを落とし地面に倒れた。

「おっ!?! クロエつてばバシツとやれた? カッコよく決めちやつた系!?! 特訓のせいかキタコレ(。▽。)!!」

「てめえ、やりやがつたな!」

「クロエ殿、まだです!」

「え……うひやつ!?!」

一人の男を倒したクロエの傍に男が一人迫っていた。だがそれに気が付いたシャルロットが素早く男の前に出る。

「ていつ!」

「ぎゃあつ!?! ひ、膝が……ぎゃつ!?!」

シャルロットは、男の膝に向かいクラウソラスの柄頭を強く叩きつけた。かなりの痛みだったのか男はその場で思わず膝をつく。それと同時に彼女は、バッククラーを装着している左手で裏拳を男の顔に向かつて振る。すると膝をつこうとして顔を下げた男の顔にバッククラーが直撃、小柄である事を活かしたその攻撃に、男はたまたまそのまま気

絶してしまふ。

「ス、スゲエ〜……あ、てかあぎますシャルるん」

「クロエ殿、十分特訓の成果は出てますが、何事も油断大敵でありますよ」

「は、はい、さーせん……（；・ω・）」

クロエとシャルロッテが二人の男を倒した時、コルワの元へも男が迫る。

「んだあ、てめえは！ 華奢なくせに武器も持たずやろうつてか！」

「悪党風情が偉そうに言わないでよ」

「なにっ!？」

「あんた達みたいなのはね、世のハッピーエンドの障害よ。人の物を奪うなんて酷い事

して、今まで何人の幸せ奪つて来たのよ。知らぬ存ぜぬじゃ済まされないわよ！」

「なあにがハッピーエンドだ!？ わけわかんねえ事言つてんじやねえぞこんあまあ!？」

「聞く耳持たずね。なら私も遠慮しないわよ！ これをくらいなさいっ！」

コルワは手揚げのバックから何かを取り出すとそれを男目掛け投げつけた。それは一直線に男の手元へと向かい、そのまま男の持っているナイフを弾き飛ばす。

「つてえっ!？ なん、だ……つて、これは!？」

ナイフと共に落ちたのを見て男は驚く。それは編物に使う木製の棒針であった。

「油断したわね。そして次はこれ！」

コルワは棒針に気をとられた男に向かい、勢いよく糸の巻かれた糸巻を投げつけた。

「くそ……何かと思えば、ただ物を投げつけてるだけじゃねえか！ 舐めやがって！」

だが今度は男もそれに気が付き飛んで来る糸巻をつかみ取った。しかしそれを見てコルワはニヤリと笑う。

「な、ななが可笑しい!？」

「ふふ……なんでかしらね？　ところで貴方“まだやる気”かしら？」

「ふざけんな、なにを……！　なにを……なに、言つて……アレ？　俺……なんでこんな、急に……」

男は自分でも驚く程急に気分が変わったのが分かった。体が重い、実に億劫だった。そして何よりも“罪悪感”が止めどなく溢れ出てくる。

よく見れば男の掴む糸巻からは、細く長くコルワの下に糸が続いていた。

「その糸巻からは、“既に糸が出ている”。私の魔力を付与した糸がね。そして今あなただの罪悪感を増やした。ほんの“ちよっぴり”だけど、貴方に人の心があるならそれは十分な心の重みになる。そこで後悔しなさい、今までの行いをね」

「う、うう……俺は、俺はあ……」

男は溢れ来る罪悪感に耐えられなくなり、その場に座り込み動かなくなつた。魔力を込めた糸を介して対象の気分を変える事の出来るコルワ、やろうと思えばこのような芸

当も可能であった。

「お前あいつに何しやがった!？」

「あら？」

だが彼女の後ろから他の男が近づき羽交い締めにする。

「やーね、女性に乱暴して」

「うるせえ！ このまま締め落して——」

「出来ると思うのかよ？」

「うえ？」

コルワを締め上げてやろうとした男だったが、後ろから聞こえる声に驚き振り向く。するとそこには自分を見下ろすB・ビイの姿があった。

「さあてその手を離してもらうぜ」

「うげええっ!? いだ、いだだだ……曲が、折れ……!? 俺の腕折れれえ——っ!？」

B・ビイはコルワに伸びた男の手を後ろから掴み上げる。するとそのまま強引に彼女から引き離れた。尋常では無い剛力で腕を曲げられ、腕の骨も男自身も悲鳴を上げた。

「安心しなあ、お前が抵抗しなけりや折れやしねえ」

「ふう、ありがとB・ビイ。どうやらハッピーエンド・スピン・クラッチを使うまでも無かったようね」

「なにその技、オイラ超気になる。そらコロツサス、こいつも頼むぜー！
「うわあっ!？」

コロワの秘められた必殺技が気になりつつも、B・ビィは引き離れた男を両手で持ちあげるとそのままコロツサスに向かい投げ飛ばした。

「ハイ（*ゝω・）ノ キャッチ！」

「ぐえっ！」

「さあさあ、観念し。アンタらみーんな御用やで〜」

そしてコロツサスは、その投げ飛ばされた男を大きな手で受けとった。今彼の手には、既に彼に捕まり抵抗を諦めた男達が握られていた。そしてカルテイラも他の無力化された男達を縄で縛りあげていた。

瞬間間に悪党達は全滅寸前となった。もう残ったのは、リーダーであるドラフの男一人のみ。

「そ、そんな……」

ドラフの男の目の前には、気絶して倒れる仲間の姿があった。その傍には、剣と刀を構える団長とミリンの二人。

「まあこうなるよね」

「物を奪うか、逃げるかしか考えない相手に遅れなど取りません！」

おそらくミリン一人でも十分に勝てる相手だったのだろう。男達は正にケチな泥棒でしかなかった。ナイフの使い方も乱暴な振り回すだけの戦い方しか知らない。

もしも大人しく投降していれば、このような事にはならなかつたらう。だが往々にして悪党、特に小悪党とは自身と相手の力量の差を見誤るものだ。

「ど、どうしてこんな事に……」

「どうしても何も悪い事してるからでしょうに。長続きしないもんだよ悪事なんて、しかもあんた仲間に入れて逃げるばっかだし」

なんとも情けない事に、このドラフの男は仲間に関員達の相手を任せている間戦いに参加する事無く何とか逃げようと右往左往するばかりであった。

「屈強なドラフボディが泣いてるよ。あんたリーダーなんじゃねえの？　せめて率先して戦いなさいよ……」

「う、うるさい……俺は頭脳派なんだ！」

「頭脳派はこんなセコイ悪さしないんじゃないかねーかね」

「さあもう残ってるのは貴方一人、観念しなさい！」

逃げる事も出来ず、仲間も皆やられた。ドラフの男は、ダラダラと汗を流し焦りや怒りで顔を歪ませていた。

「……ぐ、ぐぐ……ちくしょう、くそつたれめえ!!」

するといよいよ捨て鉢になったのか、ドラフの男は棍棒を振り上げミリンに向かって行つた。

「往生際の悪いこと……」

「お兄さん、ここは拙者にお任せ下さい」

ミリンは徐に剣を鞘に戻したかと思えば、そのまま団長の前に出る。棍棒を片手に迫る男は、やはり腐つても巨漢ドラフ、突進する姿の迫力は中々のもの。だがそれに臆せずミリンは迫る男をジツと見据えた。

「てめえなんかにいっ！」

「——鳳回転流・抜刀術！」

相手との距離が縮まり、自分の間合いへと相手が入つたその瞬間、ミリンは強く踏み込みながら鞘から刀を引き抜いた。

まさに一瞬——白刃が舞い、風と共に閃光が走る。

「う……っ!？」

「……」

ドラフの男は棍棒を振り上げたまま立ち止まった。ミリンは何時の間にか、男とすれ違いその後ろに立つ。

するとどうした事だろうか、バラバラと男の持つ棍棒が輪切りになつて地面へと落ち

ていく。そしてその事に驚愕すると同時に男は白目を向きグラリ……と倒れて行った。

ミリンは静かに刀を鞘へと戻す。

「ご安心を……峰スラツシユです！」

「ううむ……！ お見事っ!!」

見事の剣技、それに唸る団長。称嘆の声を上げると野次馬達もつられて「お見事！」と彼女を褒め称える。

「凄……あの子、素敵じゃない！」

そしてこの時、誰よりもミリンの事を熱烈に見ていたコルワに団長は気が付いていなかった。

■ 六 かくかくしかじか ぎぎぎぎる

あの悪党達を倒した俺達は、縄で縛り捕えた男達を街の衛兵に突き出した。奴らが現れた時シエロさんも言っていたが、あのグループは少し前からこの島で盗みを働いており衛兵達を困らせていたらしい。どうやら島から島を転々として悪事を働く奴等だったようだ。

悪党達の後の事は衛兵さんに任せた俺達は、やつとこき遅めの昼飯にありつく事が出来た。街の繁華街にあるファミリー向けカフェレストラン、気取った感じも無い入りやすい良い店だ。

更にスリの被害者であり、共に男達をやつつけたミリンちゃんを誘い食事を共にする事になった。と言うのも何故かコルワさんが強く一緒に食事をしないか誘ったからである。

「やつとごはんく……クロエもうお腹がペコちゃん過ぎて、背中と引つ付いちやうく……」

「丁度テーブル席空いててよかったな。奥の方だからコロツサスも入れるし」

「シヨウエネモードナラ（ω、）ダイジョーブダネ」

「あの……本当に拙者もいいでしょうか……」

席に座る俺達を見て遠慮がちにするミリンちゃん。中々席に座らず自分が場違いであると思っているようだ。

「良いの良いの！ ほら貴女も座って、はいこれメニュー。好きな頼んでいいわ、私払うから」

「ええ!? いえ、そんなお構いなく!」

「遠慮しなくていいの、私の方から誘ったんだから。あ、店員さんっ！ 取り合えず人

数分のドリントクバー、それとポテトとオニオンフライの盛り合わせにシーザーサラダをお願いね——っ！」

「コルワ殿なんだか慣れてるであります……」

「仕事柄こんなコミュニケーションも多いんでしょうね」

やたら仕切りの上手いコルワさん。その強引とも言える押し強さにたじろぐミリンちゃんは、遠慮がちなまま取り合えず席に着いた。

「無理に誘って悪いね。何と言うか、この人強引だから」

「いえ、誘って頂けたのは嬉しいです。そう言えば、もう一人……えっと、あの商人の方は？」

「ああカルティラさん？ あの人は——」

泥棒を捕えた後カルティラさんは直ぐに自分の店に戻った。スリを目撃し直ぐに追いかけたので、店はそのままだったらしい。特に問題が無ければそのまま商売を続けて稼いでくるそうだ。

「その内艇に戻ってくるけど、多分もう商売再開してる頃だろうね」

「そうでしたか……ちゃんとお礼を言っておこうと思っただんですが」

「気にしないで良いって言うだろうけどね」

何時もの様に「にじしし」と笑ってそれで済ませそうだ。

「あ、それに皆さんにも……改めまして、拙者の名前はミリン。侍やっています！」
「お待さん？」

「と言う事は、ミリン殿は東の御出身でありますか？」

「はい！ 空域のかなり東の方ですね」

「かなり離れていますがお一人でありますか？」

「そうです。実は拙者異国の文化に興味を持ちまして、見聞を広めるため旅に出たので
す」

「なるほどな。だから見慣れねえ服着てんだな」

「はい、着物って言うんですこれ！」

「そう、着物よ!!」

「うわ、なんすか突然?!」

B・ビイがミリンちゃんの着ている服について聞くと、コルワさんが強く反応を示した。
た。

「着物！ 東の島から伝わった伝統衣装！ 今でこそ私達の住む地域でも年始に着たりして決して珍しい物では無くなって来たわ。夏には着物の一種のユカタヴィラが夏のロマンスを彩って若者にも人気だわ。けどそれは昔に東から来た商人や、東に行つた学者達の手を介してその現物や文献が伝わったためなのよ。着物を作る技術は伝

わってるから、こちらの地方でも作られてるけど上質な生地を使って東の地方で作られた着物は、今でも価値が高くてこっちでは高値で取引されている事もあるわ。いえ、それはともかく……ああ、私とした事がすっかり忘れてた！ 着物を参考にすればいいのよ、この頭に引つかかかっているもやもやのデザインに！」

「あの……私になにか変な事言いましたか？」

「気にしないで、発作みたいなものだから」

「はあ、そうですか？」

早口でまくし立てるコルワさんに引き気味に何か自分が粗相でもしたか俺に尋ねるミリンちゃん。だがこの人は元からこんななので気にしなくていいです。

「そこでミリンちゃん！」

「ごぎるっ!」

「おーコルワ姉燃えてんねえ」

「はい、ミリンちゃん怖がってますからねえ。はい、ちよつと下がりましたよか」

「おつと度々ごめんさい」

「ずいとい身を乗り出しミリンちゃんに迫るコルワさん。美人さんとは言え興奮した顔で迫られれば怖かろう、コルワさんの肩を掴んで少し後ろに下げる。」

「おほん……では改めてミリンちゃん。実は貴女にお願いがあります」

「お、お願いですか?」

「ええ、実は貴女の着物とそれを着た貴女をモデルにさせて欲しいの」

「モデル……? モデル……え、モデルですか?!」

コルワさんはミリンちゃんに話す。服飾デザイナーである自分が今新しいデザインに関してスランプになっている事。そしてそのデザインの参考になる何かを探していた事。そしてそんな時に出会ったのがミリンちゃんだったと言う事。

コルワさんは、彼女の着物とそれを着たミリンちゃんを参考にデッサンを描き、そこから更に新しいデザインを生み出したかったのだ。

「その綺麗な着物を着て、そして刀を扱う貴女を見て “これだ” と思ったわ。だから是非貴女をモデルに新しいデザインを考えたいの」

「せ、拙者をモデルに新しい服を……? な、なんだか恥ずかしいような……」

「あとそうね……勿論御礼も出すわ、モデルの依頼でもあるのだから」

「いえ、いえいえそんな!? お、御礼なんて……け、けれど嬉しいです。この着物を綺麗だと言ってきて……商人の方、カルテイラさんにも話したんですが、これ故郷の母が織ってくれたものなんです」

「まあ道理で! 娘のミリンちゃんのために織ってくれたからこんなに素敵なのね!」

「えへへ、ありがとうございます」

着物と母の事を褒めてもらい照れた様子のミリンちゃん。見ていてなんだか微笑ましい。

「えつと……拙者をモデルにと言うのは恥ずかしいですが、着物ならいくら見てもらってもかまいませんよ。着物文化が評価されるのは拙者も嬉しいですし、それにさつきは財布を取り戻していただいて私の方こそ御礼をすべきですし」

「いえそう言う訳にはいかないわ！ それはそれ、これはこれ！ これは私個人のあなたへの依頼だから、そこはハッキリしておきたいの」

「し、しかし……ううむ、けど」

ミリンちゃんはグイグイと来るコルワさんに困惑していたが、御礼と言われ何か思うところがあるのか少し考えると控えめに口を開いた。

「その……拙者御礼と言うか、どちらかと言うと色々と助言等をいただきたいのです」

「助言？」

「はい、今話したとおり拙者は一人旅の身ですゆえ……お恥ずかしいのですが、異国について世間知らずと言いますか、何かと分からない事も多く……皆さんは旅慣れてらっしゃるようなので、何か旅の助言をいただけたらな、と……」

「なるほどオツケーよ！ なんでも言つてちょうだい。力になってあげるわ、私と彼が！」

「……………え、俺ッ!？」

なんかサラッと巻き込まれた。

「そう言えば皆さん騎空団の方達でしたね」

「ええ、彼は騎空士さんで騎空団の団長なのよ。私の本業は別だけど、今は彼の艇に乗せてもらっているの。理由は貴女と同じ、見聞を広める旅みたいなのと一緒に。ね、団長さん?」

「あー……………まあそんなとこです」

かなり強引な加入ではあったが確かにそんな感じだ。

「なんと、そうでしたか!? 拙者と歳も同じ位なのに、既に人を率いる立場となり広い空を旅しているとは……………お兄さん、いえ「団長」さんは大変立派なのですわね!」

「はっはっは……………うえっへっへ、そう褒めなさんなお嬢さん」

「相棒、顔が緩んでキモくなってる」

「うるせえ」

褒められたら嬉しいんだからしかたねえだろ。見逃せそう言うのは、泣くぞ。

「んで、オイラ達はその仲間ってわけよ。こっちも改めて名乗らせてもらうぜ、オイラはB・ビイってんだ。まあ、よろしくな」

「コロツサスデス（　　ω　　）ヨロシクネ」

「自分はリュミエール聖騎士団団長シャルロット・フェニヤであります。自分もわけあって仲間と共にジミー殿の団に身を寄せさせていた দিয়েおります」

「クロエでええ。だんちよんとこでええ激つよヒーローになれるよくに絶賛しゆぎよ
ちゅちゅ的な？ よろびくまる☆（ゝ▽・ゝ）ノシ」

「さっきのカルティラさんも仲間だね。まあ他にも仲間は居るけど今別行動中」

「わあ……！ 他にも沢山のお仲間がいて……きつと色んな所を旅されてきたのですね
！」

「まあそれなりに」

「ミリンちゃんも俺達が騎空士だとわかるとその目を輝かせた。それはどこか、空の旅に憧れを抱いていた時のジータを彷彿とさせた。

「あの……よろしければ旅のお話を聞かせていただけませんか？ 今まで騎空士さんのお話を聞く機会って無くて……それに、何か旅の参考にもなると思うんです！」

「俺達のか……あんま参考にはならないと思うけど」

「まあ反面教師にはなるだろ」

「うるせいB・ビィ」

だが確かに俺の話が参考になるような状況になれるならなってみろって所はある。

「Lesson, 1」、まずは星晶獣とタイマンで勝ちましょう、である。まずねーよ。

「まあお話ししようかね。時間なら十分あるし」

「やったあ！　ありがとうございます！」

「だが何から話したもんか……」

「お待たせしました」

「おっ？　相棒、飯きたぜ」

俺達の旅の中で常人でも理解の追いつく話を選んでいたらコルワさんの頼んだ料理が運ばれてきた。人数分のポテトとオニオンフライ、そしてシーザーサラダ。揚げたてなのか、ポテトはホカホカとして食欲を誘う揚げ物の香りが漂う。

「美味そうだ。とりあえずこれで騒ぐお腹を静めれるな」

「後は各々好きなの頼みましょうか。私そんな食べないし、スープか何か軽いので……」

あ、ミリンちゃんは何か決めた？」

「は、はい！　今決めますね！」

ひよんな事では出会った侍少女。その出会いの経緯は可笑しなものであったが、しかし美味しい食事もあってその後お互い旅の話に花を咲かせたのだった。

七 旅の九割苦勞話

「ええっ?! コロツサス殿って星晶獣なんですか!？」

「(*・ω・) v ソダヨー♪」

「大分サイズ抑えてるけどね」

食事をとりつつなんやかんやで話は盛り上がる。ミリンちゃんの旅の話は、観る物全てが余程新鮮に感じられたらしく、まるで先程観て来たばかりだと思わせる本人の語り口もあつてか聞いていて実に面白い。そしてやはり故郷である東の島での話は特に盛上った。

彼女の両親は元々別の島の生まれで、父が民族学者で全空の文化を調査して回り、母はその船の専属医であつた。そうして両親は出会い旅の中で恋に落ち、揃って魅了された東の地に移住したそうなの。

この話にコルワさんが食いつき「イエス、ナイスハッピーエンド!!」と叫んでいた。まあ如何にも好きな話だろう。しかも幸せ物語主役二人の娘さんが目の前に居るのだから尚更テンション上がつていた。

そして俺達の話もまたミリンちゃんの興味を刺激するには十分であつたようだ。中でもうちの団が星晶獣大バーゲンセール状態と知って驚き、目の前に居る鎧と謎の黒いナマモノ、もとい化物トカゲもそうだとわかり更に興味津々であつた。

「はあ……不思議な方達とは思いましたが、まさかです……」

「喋る上に変身するコイツを、よく不思議で済ませようと思ったね」

「しかし驚きです。異国では騎空団で星晶獣を仲間にするのが普通なのです」

「違います、ミリン殿違います。ジミー殿の所がおかしいだけです」

「おかし……っ!? おかしい……いや、そうですよね」

「あっ!?! ちよ、違っ! ジミー殿誤解であります! 今のは言葉の綾と言いますか、決してこう言った状況が当たり前ではないと言う意味でして、ジミー殿がおかしいというわけではなくて!」

「平気……わかってます。わかってますから……」

「んもくだんちよナイーブ過ぎっしょ（―▽―；）。純情ガラスハートわろわろ」

うちの団がおかしいのは自覚している。自覚はしてもやはり言われると辛いのだ。特にシャルロットさんに言われるとなんか特に辛いのだ。と言うかフォローが更に辛いのだ。

「どう言った所で全空一のビックリ騎空団には変わらないわね」

「あんたその騎空団に身を寄せてる自覚有ります?」

「当然! とっても刺激的で楽しいわよ?」

悪気の無い顔で言いやがるぜ、このハッピー大好きさんめ。

「しかしこんな騎空団があるなんて拙者想像もませんでした。やはり異国は驚く事ば

かりです」

「いや異国関係ないと思うよ俺」

「それに凄い大冒険の連続！ 狂える星晶獣を鎮め、悪党を懲らしめる大活躍に大立ち回り！ 星晶獣に乗つてのレースなんて！」

「いや、最後のは違うよ」

「あ、そうでした……えへへ、すみません。つい頭の中で大風呂敷を……」

「あれ、相棒そんな事やらなかったっけ？」

「やってねえよ」

「けど星晶獣には乗った事あるでしょ？」

「ええっ!? やっぱりあるんですか!?!」

「それセレストの艇形態の事ですよ……」

「まあリヴァイアサン殿の波にユーリ殿達と乗ったりもしましたが……」

「星晶獣と波乗り!?!」

「クロエン時は、がっちゃんに運ばれて落っこちたんだよね。おかげでクロエ助かったんだけどさあ、わら」

「星晶獣に運ばれて落ちる！」

「みんなストップ！ 話ややこしくしないで!?!」

あと俺が落ちるところそんな興奮するところかな？ 星晶獣の要素除いたら、俺が落ちてるだけだよ？

「すごいすごい！ 団長さんなんだか昔話で活躍する英雄みたいですよ！」

「へへへ……よせやい」

「相棒、顔顔」

「うっせい」

もう俺の顔は放っておいてくれよ。

「それでどう？ 何か参考に……なるわけないか。まあ他にも答えられる事なら答えるから何でも聞いてよ」

「ありがとうございます！ それではお恥ずかしい話ですが……やはり路銀についてちよっと」

「お金かあ……足りないの？」

「いえ、両親が必要以上に持たせてくれたので今のところは……ただ今後旅を続けるならどうしても必要になる物ですし、拙者もよくよく節約してはいるんです」

「ああ、だから『さつき』の奴みたいなのを——」

「さつきの——と言うのは、皆で改めて好きな料理を頼もうとした時の事である。コルワさんが払うと言う事で好きなものを選んで良いと言われたミリンちゃんは、メニューに

穴が開く程見ていたのだが中々注文を決められずにいた。そこで何か探しているのか聞いてみると「実はこれを探していたのですが」と言いながらメニューとは別に一冊の本を彼女は荷物から取り出した。

俺はそれを受け取って見てみると、それは表紙の色が煤けている古いガイドブックだった。付箋の貼られたページには、上手に描かれたパスタのイラストがあった。更にその説明文には「若者の間で大流行」今オススメの一品」とあったが、そんな話は最近聞いた事がない。

俺は流行に疎いので念のためクロエちゃんにも確認をとってみたが「初知り」と言われ聞いた事が無いようだった。

不思議に思い本の出版年を確認してみてもまたも驚いた。その本はもう30年は前のガイドブックだったのだ。

どうやら特売品の棚にあった物だったらしく、中古品のため全ての情報が古かったと言うオチだった。そのためスパゲッティと言う名称以外が記載されておらず、彼女はスパゲッティがパスタの一種と言う事に気がつけなかったわけである。

さあこれで待望のスパゲッティを頼めると分かったが、彼女はただ茹でた麺に塩のみで食べると言った。本当にそれでいいのか訪ねたのだが、「素材の味を楽しむので！」と本人は乗り気だったし、そして実際食べきっている。

本人が良いと言うので良いのだろうか、奇妙と言うよりなんか渋い食い方だ。

「しかしまた古い本を見つけたもんだね。カレーライスまで流行扱いだし」

「たはは……一人旅の身ゆえ、路銀を節約しようと特売の文字に釣られよく調べもせずつい買ってしまった」

「大事な事ではあるけどね。節約、大事。お金、大事」

「な、なんか気持ちこもってますね」

そりや気持ちこもるってもんだ。

「しかしこの本もですが、あまり節約ばかり考えてしまうと折角の旅も窮屈になってしまいます。とは言え今回のようにトラブルもありますし、万が一を考えると不安でして……そこで何か長旅で効率よくお金を得る方法つてあるでしょうか？」

「そりや俺が聞きたいよ」

「いざいざ」

「いやこつちの事」

何故か減らず増える借金を思い出し不貞腐れモードになりそうになったが直ぐに切り替える。

「それでお金、となると……まあやっぱ何処かしらで“依頼”を受けるかしてそれで稼ぐだね」

「うむう……やはりそうなりますか」

予想していた答えだったらしく、難しい顔になったミリンちゃんは腕を組んで唸った。

「実は拙者もそう思つて何度か依頼を受けようとしたのですが、騎空士と言うわけでも無く女一人の身である所為かあまり大した依頼を受けさせてくれないです」

「迷子探しや草むしりとか？」

「はい……無論誰かがお困りであれば迷子探しも草むしりもやりますが、拙者もある程度腕に自信はありますので魔物退治でも遅れはとらないつもりです。ですからそう言つた依頼を受けたいのですが……」

「無理だったと」

「いざいざ……」

今度はしよぼくれてしまうミリンちゃん。申し訳ないのだが口癖のせいか妙に可愛い。

「けど確かに一人旅だとそれは問題かもな。いざお金が必要と言う時もあるだろうし……そうだな」

騎空団と言う集団であるなら、*“集団である事”*が既に数と言う名の武器であるので早い段階で魔物討伐の依頼も受けられる。そうして活動する内にその団の名前がブラ

ンドになって広まり民衆や依頼を紹介するギルドからも信頼を得る事が出来る。

また騎空艇を所持しているなら尚更良いだろう。騎空艇は騎空団にとつて看板のよ
うなものだ。『あの艇に乗ってる、あの騎空団』として人々の記憶に残るからだ。うち
みたいに——良くも悪くも。

だが個人であるとそれは難しい。騎空士でも無い旅人個人では、ミリンちゃんの様
に受けられる依頼も限られ騎空艇も所持しようが無い。余程の強者、それこそゾータクラス
に強いなら話は別であるがミリンちゃんは流石にあのレベルでは無いだろう。

とは言えミリンちゃんの強さは先ほど見たばかりだ。相手はケチな盗人であったが、
この子のあの太刀筋は生噛りのものではない。それを知る者であれば実力相応の依頼
をくれるはずだ。

「……さつきシエロさんいたし、あの人に紹介するか」

「シエロさん？」

「さつき泥棒を引き留めてくれたハーヴィンの人ね。よろず屋さんで何かと凄い人で
ね。何でも売ってるし、何でも用意して、何でも依頼を持ってきてくれる人。親切だし
その人なら何度か依頼受ければ、困った時も助けてくれるよ」

「ほ、本当ですか!?!」

「うん本当」

さっきの現場にもいたし彼女の實力についてはわかってはいるはずだ。きつと彼女ならミリンちゃんの実力に見合った依頼を紹介してくれるだろう。悪い結果にはならないはずだ。

「後はそうだな……どこぞの騎空団に入団するのも有りかなあ」

「騎空団、ですか」

「まあ自由気ままな一人旅とはいかなくなるけど——」

「それよ!!」

「うおっ!」

「(ぎ)ぎるっ!」

突然コルワさんがテーブルを叩きながら叫び、俺も驚き叫び、ミリンちゃんも驚き叫ぶ。

「団長さん、＼それ＼が一番ナイスなアイディアだわ。皆でウインウイン、ハッピーエンドよー」

「それって……まさか」

「(ぎ)ぎる……っ!」

何やら一人話が完結しているコルワさん。何が何やらわからず首をかしげるミリンちゃん。

一方俺は、なんかまた話が勝手に進められそうでも嫌な予感がしていたのだった。

■ 八 旅は道連れ、世は情け

『……で？ 仲間にしたのか？』

「いや、そのね……まあ、うん」

エンゼラの甲板、そこに並んで立つ俺とリヴァイアサン。揃って見るのは、甲板で目を輝かせているミリリンちゃんである。

「うわあ〜……！ 凄く凄く、どこもピカピカですね！」

「出来上がってからそう経っておりませんから。ほぼ新品同様であります」

「凄いなあ……拙者こんな立派な騎空艇乗ったの初めてですよ！」

シャルロットさん達に説明を受けながら興奮している様子。いやあ、微笑ましいですねえ。

「なに呑気してんだおめーはよ」

「いてー！」

はしやぐミリリンちゃんを見てると横に立っていたおっさんに膝小僧を蹴られた。

「ただの納品依頼から帰ってきたかと思えば何仲間増やしてんだよ」
「色々あつたんすよ……」

——時は遡る事30分程前、あの食事の席で俺の不用意な「騎空団に入団するのも有り」発言を聞いたコルワさんが突如「ミリンちゃんも仲間になればいいのよ！」と発言。当然ちよつと待つたと止める俺。

いくら何でも急すぎる——それが何時も通りだとしても——ミリンちゃんと俺達は、出会つたばかり——これも何時も通りだとしても——初対面なのだから。

が、コルワさんは続ける。

「団長さん、女の子が一人旅よ？ 文化の違う場所から来てるのよ？」

そう言う事言われちゃうと弱い俺。しかも古い観光案内の本を買って勘違いしたままで旅をするタイプの子。なんだか心配になつてきた。

とは言え本人の気持ちが必要だ。勝手に俺達で話を進めてはいけない。だが全員集合してないのに関わらず、こんな濃い面子の頓珍漢集団に入りたいと思うか？ 普通思わないだろう。そこらへんの事を踏まえてミリンちゃんにも一応「一緒に来る？」と意見を聞いてみる。すると——。

「そ、そんなお気になさらず。それに急にお邪魔すると……皆さんの旅の邪魔になつてしまいますし」

なんか俯いてしまった。なんてこった、もしかしてちよつと期待してたの？

と言うか待つてほしい、違うのだ。別に俺は暗に「来るな」と思つて聞いたんじゃないんだ。と言うか別に本人が希望するなら構わない、と言うか邪魔とかじゃないし、もつと言うならミリンちゃんみたいなタイプの子なら俺は一向にかまわん!!

「——と言う話し合いがだな」

「おめーが甘いだけじゃねーか」

「あ、甘くないやい!?!」

『お前は本当に女子おなごに弱いな』

「誤解与える言い方止めてもらえろっ!?!」

それに別に女子に弱いとかじゃねーし、一応俺もミリンちゃんも納得して入団と言う結論になったんだい。

「ミリンちゃんの剣の腕はかなりのもんだった。あれは俺達の助けにもなつてくれる。彼女も彼女で旅を続けて寝食の心配も減る、一応互いに悪い話じゃなかったんだよ」

「悪い話じゃなかった、ねえ? まあそれはコルワにとつてもそうだったわけだがな」
おっさんが呆れた様子でミリンちゃんを見る。その傍には仲良く話すコルワさんが居た。

「コルワはコルワで興味のある東の着物が見れる。ミリンの奴が持つてる他の着物に、

知ってる着物文化の話も聞ける。良い事尽くめってわけだ」

「まあ別に打算だけで誘ったわけじゃないでしょうけど」

「わかつてるよ。着物やなんかは建前、こつちが必要としてるからって事でミリン自身に入団を遠慮させねーためだろうせ」

『真剣に彼女の事を心配しての提案だろうな。会ったばかりだがわかる。あれは素直な……いや、素直過ぎる娘のようだ』

「實際剣の腕が良かろうと慣れねえ見知らぬ土地で一人旅だ。さつき聞いたスリと言い、このまま一人で旅を続けてりや何かしら盗みか詐欺かの被害に遭ったろうぜ。世の中お前みたいにお人好しばっかじゃねーからな」

「……それ褒めてる?」

「褒めてる褒めてる。カリオスト口、優しい団長さんの事だ〜い好き☆」

「そう言うの良いから」

「つんだとこの野郎!?!」

年齢不詳のおっさん美少女が怒っても怖かねえもんね。怖かねえが、膝小僧を狙うな。

『まあ我もそろそろ新しいメンバー増えるだろうとは思ってはいた。別に驚きはせんよ』

「思うなよ」

『今更何を……なんなら前のゴリラでさえ仲間にするんじゃないかと思つたぞ』

「何でだよ」

流石にしねえよ。ゴリラ坊達だつて島離れたくねえだろうし。

『星晶獣が仲間になつてゐるのに、野生のゴリラが仲間にならない理由があるか?』

「それは……いや、まあいいだろゴリラ坊達の事は」

今は昔のゴリラより今の仲間だ。

そうこう三人で色々話していると甲板をあらかた見た見たミリンちゃんが俺に駆け寄つてきた。

「団長さん、団長さん！ 凄い立派なお艇ですね！」

「あはは……ありがとうね。そう言つてくれると嬉しいね」

借金した甲斐があると思えるよ……。

「いえこちらこそありがとうございます！ まさかこんな立派な騎空艇で旅をする事が出来るなんて……拙者感激です！」

「ミリりん☆ つぎ艇ん中見にいこお〜(・▽・σ)σ！」

「あ、はい！ 少々お待ちを！」

「ミリ……りん?」

「はい！ クロエ殿が『につくねえむ』とやらを付けてくれました！ なんでも親しい者同士でつけるハイカラな渾名だそうで。あ、もちろん団長さんも呼んでも良いですよ！」

「いや、俺はクロエちゃん文化圏の者では無いので……けど打ち解けるの早いのね君達、良い事だけだ」

「えへへ……その、クロエ殿とは歳もそんなに離れておりませんので。それに拙者故郷を離れてからは、近い年代の人と話す事も少なくて……だから、なんだかとも楽しんでます！」

「そっか……うん、喜んでくれて何よりだ」

明るく笑うミリンちゃん。それを見ると俺も温かな気持ちになる。

「まあ今日はゆつくり艇見てつてよ。本格的に仲間になるのは明日だしね」

実際の所今日はまだエンゼラを見に来てもらっただけである。俺達は今日島に来たばかりで、ミリンちゃんも既に島で宿をとっている。明日物資の補給後島を発つので、その前に艇の様子と使ってもらおう個室を見てもらいに来ただけだ。

「あと念のため……もう一度聞いとくけど、俺達色々受けてる依頼も多いからのんびり出来ない事も多いけど大丈夫？」

「もちろんです！ それに艇に乗せてもらうのですから、依頼も是非お手伝いさせて頂

きます！ 故郷に伝わる隠し味「みりん」の名に恥じぬよう、精一杯団長さん達のお役に立ってみせます！」

「ふむ、〃隠し味〃と来たか」

「はい、そうなんです！ 両親が侍文化に憧れてるので……主食でもおかずでもないけど、料理に必須の存在であるようにと！」

「ふふ、けど侍の君は……さしずめ〃隠し味〃ならぬ〃隠し剣〃かな」

「か、隠し剣……!? なんだかカッコいい……これ何か秘剣とか考えておいた方がいいですかね？」

「え？ あ、マジに受け取られてしまった……」

俺の何となく発言にわりと真剣になってしまったミリンちゃん。するとおっさんが呆れた様子でため息を吐いた。

「たく……別に気にすんな。こいつがちよつとカッコつけようとしただけだ」

「あれ、そうでしたか？」

「……うん、そうだけどき。だけど別にカッコつけたとかじゃなくて……」

「自分で言つといて恥ずかしがつてんな。ほれ、中案内すんだろ」

『なら私も行こう。そうだ……先ず食堂に來い、このリヴァイアサン自慢の大水槽を見せてやろう』

「星晶獣の水槽ですか！」

『ふふふ……アウギユステの海を再現した物だ』

「アウギユステですか……まだ拙者行つた事無いんですよね。楽しみだなあ」

「あ、こら君達、団長の俺を置いてくなよう……」

こうして何時も通りの「なんだかんだ」で仲間となつた侍ガールのミリンちゃん。明日ちよつと奮発して歓迎会でもしようか考えつつ俺達は彼女をエンゼラの中へ案内しに行つたのだった。

■ 九 道連れは、沢山いれば、もっと愉快

「せいじやシエロさん、また次よろしくです！」

「はいはい。道中お気を付けて〜」

後日、港から発つエンゼラとその甲板から手を振る団長、そしてそれに手を振り返すシエロカルテの姿があつた。

東からの旅人ミリンを仲間にした彼等は、また新たな依頼を受け次なる島へと旅立つ。

彼等の行く先に待つのは何であるのか、それは彼等にもシエロカルテにもわからな

い。だが一つシエロカルテにはわかる事がある。それは彼等がどこに向かうとしても、その行く先には『騒動有り』。そしてそれを最後には丸く収めると言う事だ。

「おい、よろず屋……」

次はどんな騒動を起こし、あるいは巻き込まれるのか——そのような事を考えていると、一人の男がシエロカルテの傍に現れた。

「あらあらもう御着きになつてたんですな〜」

「今日が依頼の日だ。当然だろう……それよりも、受け取れ」

灰色の髪を伸ばす不気味なその男の両手には、長い鎖が蛇の様に巻かれていた。不思議な事に男は立っているだけだと言うのに、その鎖は静かにジャリジャリ——と、風も無いと言うのに不気味に揺れる。その様子は手に巻いてあると言うよりも、まるで意思をもつて鎖が『絡みついている』ようだった。

男はその鎖の巻かれた手でシエロカルテへ一枚の紙を手渡した。

「報告書だ。頼まれた奴等は全て捕えた。盗まれていた金品も取り返してまとめて衛兵に引き渡したぞ」

「これはこれは、流石お早い仕事ですな〜」

「世辞はいい……それより、依頼にあつた窃盗団の一つが既に捕まっていた。どう言う事だ」

「実はですね〜……」

シエロカルテはその男に前日に起きた出来事を話す。すると男はその事に関しては、特に興味を抱いている様子はなかった。

「スリに失敗して居合わせた騎空団に捕まったか……ケチな盗人らしいな」

「すみませんでした〜こちらでお会いしてからお知らせしようと思つてたんですが〜」

「かまわん、そう言う事もある。第一俺の目当ては報酬では無いからな」

「それで、お目当ての情報は得られましたか〜?」

シエロカルテが男に問うと、つまらなそうに男は答える。

「何も……奴等はただ噂を聞いたに過ぎないコソ泥だった。俺が今持つてる情報と何も変わらん」

「そうでしたか〜……残念です〜」

「やはりもう少し踏み込んだ依頼で探るしかないか……」

「しかしそうになると、かなり危険な依頼になりますからね〜。一人で受けるのはオススメ出来ませんよ〜?」

「……関係ない、俺は俺の目的の為ならその程度の危険など——」

その時であった。男の手に絡みついていた鎖が大きく動き伸びていく。

「これは……っ!?!」

「おやおやおや〜?」

男の手から伸びた鎖の先には、強く光る紫の水晶があった。それは男の腕の自由を奪う程の力で真つ直ぐに空のある方向を指し示している。

「くあ……っ!? な、なんだ、この強い反応は……!?」

「ふ〜む、これは恐らく団長さん達ですね〜」

「よろず屋、何か知っているのか……!?!」

シエロカルテが何か知っているとわかった途端、不気味な程に冷静だった男の様子が変わる。詰め寄るようになって問いかけるがシエロカルテは何時もの調子で話し出す。

「入れ違いで先程話した騎空団の方達が飛び立って行った方向と一緒にそうですね〜」

「……窃盗団を捕まえた奴等か」

「はい〜。あの方達……いえあの団長さんは、それはもう色々と呼び込みますからね〜。もしかしたら、目的達成の力に成ってくれるかもしれないですよ〜」

「……」

「おや〜鎖が……?」

男は沈黙し鎖が伸びる方向を睨むようにして見続けた。すると急に鎖はジャラリと音を立て地面へと落ちる。そして徐々に男の腕へと再び絡みついて行った。

「距離が離れたらしいな……」

鎖の様子から何かを感じ取った男、彼はそのままその鎖の先につく紫の水晶を見つめ何かを決心すると港内の連絡艇乗船受付へと足を向けた。

「行き先は聞かないんですね〜?」

「お前ほどの奴が気に入った騎空団だ。そんな客の情報など軽々と話したくもあるまい」

「ふふふ〜お気遣い感謝いたします〜」

「それによろず屋、お前なら〃わかっている〃だろう」

「そうでしたね〜。行き先なんて聞くまでも無いでしょうね〜」

「ああ……全ては、紫水晶の導きのままに……」

シエロカルテと別れ団長を追う一人の男。水晶の指し示す先、それが団長へと繋がり男を導く。

そして、また別の地でも――。

「……お久しぶりです。お師さん」

「きつちつち……! なんじゃなんじゃ、そんなしよげた顔して」

場所は移り某島某所、秩序の騎空団収監施設、その面会室。そこには三人の男が居た。一人は秩序の騎空団の者、一人はそれに見張られるエルーンの男性。そしてもう一人は、そのエルーンの男に面会しに来た老齡のハーヴィンであった。

「俯いたままでわかる。まるで萎れた青菜みたいになつとるぞ？ お主、昔はもうちつとシヤキツとした顔しておらんかったか？」

「いえ、その……」

「きつちつち……まあ、ワシに合わせる顔が無いという所かのう」

ハーヴェインの老人がそう言うと、エルーンの男は更に顔を伏して沈黙した。

「まったく……別ににお主を叱りに来たわけではない。ほれ、時間も限られとる。顔を上げんか」

「……はい」

渋々と言つた様子でエルーンの男は顔をあげる。なんとその男は、以前団長がクロエと出会つた島で戦い倒されたあのエルーンの剣士であつた。彼は顔を上げた後も気まぐすそうに視線を少し逸らしていたものの、少しして目の前の老人へと視線を向けた。

「本当に……お恥ずかしい事をしまして」

「盗賊の用心棒か……ま、それに関してはもうええわい。その様子じゃと自分の過ちは、もうわかつておるのじやろう？」

「はい……」

「ならワシから言う事などない」

「そう、ですか……とところで、一体誰から俺の事を？」

「きつちつち……！ 爺になるつちゆうのは、その分知り合いも増えると言う事じやよ。まあ本来なら〃もつと早く〃会いにくるつもりじやつたがのう」

「そうでしたか……ふふ、運が良いのか悪いのか」

「なあに、ワシはこれで良かったと思つとる。なんせワシ以外の者でもお主の道を正す事が出来たと言う事じやからのう。世の中捨てたもんじやないわい、きつちつち……！」

「いや、まつたく……ふ、ふふふ」

その老人は特徴的な笑いで場を和ませると、エルーンの男も徐々に表情が穏やかなものに代わっていた。

「……して、お師さん」

「むっ」

「〃アレ〃の事で来られたので？」

〃アレ〃、そうエルーンの男が言うと、今度は老人の顔色が変わる。

「違う、と言えば嘘になる。そつちはちいと確認程度のつもりじやつた。話に出た以上聞くが……お主、アレと会ったか？」

エルーンの男はフルフルと首を振って否定した。

「会っておりません。いえ、そもそも一度たりともアレと〃会いたい〃とは思いません

でした。だからこそアレがまた何か動いていると聞いた時は……正直信じられなかった。アレの腕は、お師さんが……」

「うむ……」

「ただ何人か他の弟子に会った時、その者達は「会った事がある」と答えておりました。皆一様に下らぬ悪事に手を染めておりましたよ……俺の様に」

「……唆されたか」

「そのようです。強者との戦いを求め、自ら修羅に堕ちた俺が言える事じゃありませんが、アレの恐ろしい所は人を魔道に誘い堕とします。誘い落ちた者は、最早傀儡の様なもの……誰かが目を覚ましてやらねばならないでしょう」

「誰かが、か……」

老人が深いため息と吐くと、口ひげが僅かに揺れた。

「やはり、お師さんが？」

「無論ワシも動くつもりじゃ。じゃがのう……今、世は乱れておる。当然知っておろう？ 各地でのエルステ帝国の侵略、それに伴い多発する星晶獣の暴走、そして剣を封じたはずのあ奴の暗躍……不穏な空気がそこかしこにある中、たかが爺一人が気張っても後が続くまい」

「……では、次代の者に」

「さよう。正にお主を正した者のような、のう？」

老人に問われエルーンの男はジツクリと自身を倒した団長の事を思い出した。

「実の所今日はその者の事を聞きに来たんじゃよ。うちの弟子の中でもかなりの腕であつたお主を容易く倒した者がどうも気になつてな。で、どうじやつたその者は？」

「彼ならば……あるいは」

「それ程の者か？」

「はい……少なくとも俺では到底勝てません。あの時でさえ、傍にいた娘に、血を見せたくない」と言う理由で手加減され、俺は本気で挑んだと言うのに剣では無く鞘と拳で倒されました」

「ほうー」

エルーンの男は、自分が倒された状況の事と団長の事を話した。

その少年は、一見して地味で頼りない男であつた。だがその真つ直ぐな瞳、悪事を許さぬと言う意志の強さ、傍にいたクロエのような少女を護つて見せると言う正義感、頼もしく信頼ある仲間達。

そして何よりも、あの圧倒的で底知れぬ強さ。

すると老人は強張つた顔を緩ませ呵々大笑した。

「きつちつち……っ！　　そうか、そうかそうか！　　それほどの……、しかし鞘と拳での。

ふふ……それは良い！ 実に面白い！」

「しかも愚かにも、お師さんの奥義まで使おうとして……不発です、剣を鞘から抜く事さえ出来ませんでした」

「ほっほ……そうかそうか！」

ほんの少しの出会いの話、修羅に堕ちた男がこつぴどく負けるだけの話だ。だが人と言うのは不思議なもので、自身の恥ずべき行為を誰かに話しながらない事もあれば、逆に話してしまいたい事もある。そして話してしまいたい相手と言うのは、大抵その者にとつて親しく心許せる相手であるものだ。

「彼に言わせると、俺など『自分勝手な、ただの悪い奴』だそうです。だがまったく、その通り……否定しようがありません」

「きつちつち……いや、じゃがお主はその過ちに気付いた。その少年のおかげでとう」

「ええ、本当に……」

あの少年の団長と出会ってなければ、果たして自分はどうなっていたのだろうか？ 男は考える。少年ではなく、遅れてやってきた眼前の師に剣を封じられたか？ あるいは盗賊の用心棒を続けているのか？ またあるいは、更なる修羅となり後戻りできぬ事になったかもしれない。

「不思議な男でした……そうです、今思えば彼はどこかお師さんに似ていた」

「ほ？　ワシにか？」

「はい……剣の腕、と言うよりも気質と雰囲気と言うべきか。覚えておりますか？　俺がお師さんに弟子入りをした日の事？」

「おうおう、あの時か」

「はい。剣では負け知らずである事に己惚れ無謀にも大剣豪に挑み、*“釣り竿”*で返り討ちにあつた馬鹿な男、それが俺でした」

「ありやお主が、戦え戦えと煩かつたからじゃよ。おかげでワシああん時大物を逃がしちゃつたわい」

「あの時はとんだ失礼を……しかし、彼と戦つて気を失う時にその時の事を思い出したんです。恐ろしく強い、しかし戦い自体には興味など無いと言う、あの雰囲気を感じて……」

「そうか……そこまでの者か」

老人は粗方の話を聞くと納得がいった様子であつた。そしてチラリと監視で傍に立つ秩序の騎空団の者を見た。すると彼は老人に向かつて軽く頷いた。

「そろそろ時間の様じゃな……ここいらでワシは行くとするわい」

「そうですか……してお師さん、アレの方は」

「まあ暫く会う事はあるまい。色々やつとるようじゃがワシへの挑発程度……かと言つ

て追つて捕まる奴でも無い、暫くは泳がせるとするわい。ここであれば平気じやろうが、お主も努々気を付けておくんじやぞ」

「はっ！　しかと……」

「うむ」

「……久しぶりに、会えて良かったです。お師さんも、お気を付けて」

「きつちつち……！　　のう、さつき昔の方がシャキツとしとると言つたが……どうやら勘違いのようじゃ」

「え？」

「昔のお主の顔は、確かにシャキツとはしていたが強さに捕らわれておつて変に強張つておつた……今の方がええ顔をしとる！」

「お師さん……！」

老人は立ち上がると脇に置いていた釣り竿等の荷物を持つた。その荷物を見てエールの男は、顔をほころばせる。

「はは……お師さん、相変わらず釣りですか？」

「きつちつち！　　こればかりは止められんわい、それにこれから大魚を釣らねばならん。あの時逃がした魚より、もつと大きな大きな「大魚」をのう！　　きくつちつちつち！」

面会室に二人の笑いが響いた。

そして、数日後。更に別の某島某所にて――。

「なあ聞いたか？」

「お？　また星晶戦隊（以下略）か！」

「当たり前！」

二人の男が話題に出したのは、前から噂の星晶戦隊（以下略）の事だった。

「どうも新しい仲間が一人増えたつてよ」

「ほう一人か？」

「ああ、まあ今までの事思うと少ないが新メンバーは新メンバーだ」

「つてこたあまた濃い仲間だと？」

「いや、今回はある意味普通だ。女の子ではあるらしいがな」

「ふむ？　ハーヴィンか？」

「いや、ヒューマン、そして侍だそうだ」

「……着物好きなのかな？」

「さあ」

またとんでもない勘違いをされている団長。積み重なった噂が噂だけに、仲間一人増えるだけでも酷い勘違いが増える負の連鎖が生まれ続けている。

「つまりだ……」ロリコンの年上巨乳好きで、幼馴染属性のホモの可能性がある着物女

装っ子好きの腋フェチケモノ」となる、と……?」

「ああ……だが俺思ったんだが、星晶獣仲間にしてるんなら人外も好きなんじゃねえかな? ケモノとは別で」

「ああ……つまりそうなると、「ロリコンの年上巨乳好きで、幼馴染属性のホモの可能性がある着物女装っ子好きの腋フェチ人外ケモノ」になるか」

「なげえなく……ちよつとメモツとこうぜ、忘れちまうから」

「そうだな」

そんなのメモってどうするんだ——団長がいればそう言うだろうが、あいにく彼ははるか遠く別の島である。

「ところでさ、お前今日何しにここ来たの?」

「ん? 夢占い」

「乙女かよ」

「いや最近夢見が悪くてよ。この島に腕のいい夢占い師が来てるって言うから相談でもしようかと」

「その占い師がこの子?」

二人の男の目の前には、椅子に座ってぼんやりしている一人の少女が居た。目を薄く閉じており寝ているのか起きているのかわからない。

「腕はいいって聞いたぜ？　んで、今占ってもらってる」

「寝てるんじゃないか？」

「占い中なんだと。なあ、一緒にどうだ」

「何が悲しくて野郎と夢占いせにやならんのだ。それに俺興味ねえもん……」

「まあいいじゃねえか。お前だつて夢見んだろ」

「そりゃ……ただ俺大した夢見ねえよ」

二人がお互いの夢の話していると、目を閉じていた少女が目をパチリと開けた。

「……ふあゝ、うううん……結果、はつぴよおゝ」

「お、お待ちかね！」

「……貴方は、何かを探してる。無くて別にも別に困らない、けれど大切、無いととっても寂

しいもの……」

「え!？」

少女の占いの結果を言われると、男は驚き声をあげた。

「探し物？　お前なんか無くしたの？」

「あ、ああ……実は数日前から御袋が昔くれたお守りがねえんだ……どつかで落とした

みたいだよ」

「気になる気になる……気になっちゃうと寝付けない。とつても気になる大事なもの

……」

「そうなんだ……あれ以来俺なんか落ち着かなくて……無くしたって言うのも悪いさ」

「うふふ……そつちのお兄さん……」

「え、俺？」

「貴方はちよつと忘れてる……あれよあれよと後回し。胸にしまった、うっかりさん……」

「胸にしま……ああ!？」

少女に言われて男は驚き懐から一つ木彫りのチャームを取り出した。

「これもしかしてお前の？」

「それだよ！ え、お前が持ってたの!？」

「艇で落ちてんの拾ったんだよ。誰のか聞こうと思つて忘れてた……」

取り出したチャームを渡すと、受け取った男はそれを大事そうに握りしめた。

「うふふ……うっかりさん」

「いや凄いな……完璧ピタリ賞だぜ……」

「ありがとなお嬢ちゃん。これ料金」

「まいど……ふああ……ねえ、お兄さん」

「うん？」

「一つ教えて……さっきの、星晶戦隊（以下略）ってなあに……？」

料金を受け取ると少女は眠そうな瞳を向けて男達の話していた星晶戦隊（以下略）について聞いた。

「ああ、聞こえてたのか。星晶戦隊（以下略）——【星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女Z O Y】——世にも珍しい星晶獣を何体も……更にやたら濃い面子を仲間にしてる地味な団長率いる騎空団だよ」

「結構有名だぜ？ なんせ星晶獣が仲間だからな。まあ中々会えねえけど」

「そろそろ新しい星晶獣の仲間でも増えるんじゃないかな」

「……ふうくん。そうなんだ。うん、ありがとう……ふあく……」

礼を言うと少女はそのまま目を閉じ眠りについた。

「寝ちまった……」

「まあ占いは当たりって事だな」

「そうだな。帰るか……けど御袋か、今度実家帰ってみようかな」

「いいんじゃない？ 今回のもそうしろって事だったんだろ、どうせ暫く依頼もねえし」

「だな」

占いの結果にも満足し、二人はそのまま帰って行った。そしてその場に残った少女

は、二人が居なくなり周囲の人間も彼女に視線を向けなくなると不思議な事にその姿が煙の様に消えていく。

「……星晶戦隊……星晶獣が “仲間” ……そんなの、嘘に決まってる……——」

そして少女の姿は完全に消え去った。初めからそこには居なかつたかのように、夢か幻の如く——。

その男、獵犬が如く

一 穩やか一時、トラブル日常

今日も今日とて空路は続くよどこまでも。少し前に出会った東からの旅人ミリンちゃんも新たに仲間として迎え、依頼を受けては解決し、またも依頼を受けては解決し……騎空団としてなんて事の無い日々を過ごしている俺達【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女ZOY】。

「これはアウギユステで手に入れた熱帯魚のガラス細工」

「うわあ！ 綺麗ですねぇ〜！」

「こっちは、ポート・ブリーズで買った置き物」

「はあく……なんと、実に細かく……」

「このお菓子はルーマシーで手に入れた果実を使ってる」

「美味しいですねぇ〜っ！」

その日の午後、俺は書類仕事の息抜きにと食堂でミリンちゃんに今までの旅で旅入れ

た物を見せたり、その時の話をしたりしていた。

仲間になってから空いた時間を見つけては、彼女は団員達に色んな話を聞いている。多くは俺達にとっては些細な事かもしれないが、遠い国から来た彼女にとって俺達の話はどれも面白いらしく楽しそうにしていた。

「俺はあんま島で個人的な物買わないからね。食いもん以外で俺が見せれるのは、私物と言うかエンゼラの賑やかし用の置き物ばつかな」

「いえいえ、拙者がまだ行っていない島の物などもありましたしとても面白いです！」

「そう思ってくれるなら嬉しいね」

素直な人の相手は心が落ち着いて良い。激流の様な事ばかりの日常では、このように穏やかな時間が必要なのだ。

「それで、この置き物は——」

「ミミーン！」

「うわあ、喋った!？」

「こらミスラ、当たり前のように混ざるなよ」

「ミンミミーン♪」

悪戯のつもりなのか、机に並べた置き物なんか混ざっていたミスラを注意する。見た目無機物なので置き物に混ざられるとマジでわからん。一方でミスラは楽しそうに

鼻歌？ を歌いながらフヨフヨと俺達の周りを回っていた。

「あはは。してやられました」

「悪いね。人に構わってもらおうの好きみたいなんだ」

「なんだか子犬の様な……けど星晶獣なんですすよね？」

「ま、一応ね」

小さな歯車な見た目のミスラだが、これでも歴とした星晶獣である。尤もB・ビィやゾーイの話では、ガロンゾで俺の要望を受けて本体より分かれた省エネ形態の個体であるので最早本体とは別個体となりつつあるらしい。詳しい事は分らんが、まあそういう事なんだろう。

そんなミスラの背景はともかく、今では確かに子犬のような存在だ。尻尾はないが、ご機嫌ならクルクル回る。

「楽しそうだからって、ガロンゾ出る時にちやつかり付いて来てからに……」

「ミンミン♪」

何を言っても楽しそうなミスラ。それを見てると怒る気は失せる。まあ元々怒る気は無いが。

「さてと、それじゃそろそろ仕事に戻ろうかね」

「あ、ごめんなさいお時間とらせて」

「いいよいいよ。俺も休憩したかったからね」

そこそこミリンちゃんと話をしたので世間話は切り上げる。書類整理に次の島での依頼の準備とやる事は多いのだ。

「……ところで団長さん」

「うん？」

「あちらのお二人は大丈夫なんでしょうか？」

ミリンちゃんが心配そうに別のテーブルの方を見る。そこには具合が悪そうにつつぶし呻く二名のろくでなしがいた。

「えぶ……の、飲みすぎたにやあ……」

「ウ、ウウ……ア、頭イタイ……ッ」

「艇の揺れすら……つぶ！　じ、地獄……の、ようにや……うおつぶ!？」

「頭痛ガスル、ハ……吐キ気モダ……」

昨日の夜二人で酒盛りをしてそのまま泥酔し、今日になって痛い目を見ている何時もの二人。水を飲みまここに来たは良いが、もう動く事は出来ないらしくあのままのようだ。

「……俺達には救えぬものだ。気にしないで良いよ、ただの二日酔いだから」

「はあ……そ、そうですか」

二日酔いはクリアオールでも治せない。無理に移動させるとそれだけで「決壊」して大惨事になりそうだ。強いて救いがあるとすれば、二人の足元に深めの桶を置いておく事だろう。

こんな光景をこれから何度も見る事になる。ミリンちゃんには大変だろうが慣れてほしいものだ。

そんなどうしようもない二人を放って置いて仕事に戻ろうとしたところ、足元に紫色の瘴気が漂い出した。

「やや、これは!?!」

「ああミリンちゃん初めてか。大丈夫、セレストだよ」

「え? セ、セレスト殿」

「は、はい……そうです……」

「うひゃつ!?!」

足元で渦巻いていた瘴気が徐々に人の形をとっていく。するとそれはセレストの姿へと変わった。

控えめな挨拶と共に現れたセレストにちよつと驚くミリンちゃん。瘴気となってエンゼラの船内を自由に移動できるセレスト、申し訳ないがこれもよくある事なので慣れてほしい。

しかしこの方法で俺の前にセレストが現れるのは、緊急事態かちよつと変な事があつた時だ。慌てた様子もないので多分後者だろう。

「どうした、なんか問題あつたか？」

「ん、んつとね……今日補充した荷物あるでしょ？」

「んあ？ ああ、あるな」

「さつき気がついたんだけど……荷物しまった倉庫から、その……へ、変な気配があるの……」

「変な気配？」

「うん……魔力をね、感じるの……」

「ふむ……」

今までエンゼラには空から降ってくるような奴は数名いたが、侵入者と言うのは多くない。空から降ってきたメドウ子が密航を凶つた事もあるが、こちらは即B・ビー達に捕らえられている。

そして今回新たな侵入者らしき気配があるとセレストは言う。

「直ぐ気が付かなかつたのか？」

「し、島を出る頃には気配が弱くなったから……気のせいと思つて……ご、ごめんね？
直ぐ報告すればよかつただけ」

「いや気にしないでいい……しかし確認はせんとな」

倉庫には旅に必要な物が蓄えてある。万が一何かあつては一大事だ。

「倉庫には？」

「ここ、ここより近くに居たから……先にコーデリアとフェリちゃんに行つてもらつた……」

「わかつた。なら直ぐ俺も行くわ」

「万が一密航者であるなら何があるかわかりません、拙者もおとします」

「うむ。ミスラは？」

「ミミンツ！」

ミスラは直ぐに俺の頭の上に行くところまでクルクルと回つていた。着いて来るようだ。

「お前ほんとそこ好きね……まあいいや、行こうか」

俺達は直ぐに食堂を出て倉庫へと移動した。なお酔つ払い二人は放置。

早々に倉庫にまで行くと、入り口前にコーデリアさんとフェリちゃんにベツポ達が待機していた。

「やあ、来たね団長」

「どもつす。様子は？」

「まだ中には入って無いからなんともね……だがセレストの話では『何か』が居る事は間違いない」

「ベツポ達も何か感じてるようだ。人か魔物か分からないが何かはいる」

扉の前でベツポ達は、鼻を倉庫内へと向けて何か匂いを嗅ぐ仕草をしていた。俺も気になって倉庫の内側に意識を向けてみたが確かに何かの気配を感じた。

「ベツポ達には位置が分かりそうだな」

「先行させようか？」

「……うむ、そうしてもらおうかな。頼める？」

フエリちゃんの提案を受けベツポ達に直接聞いてみると、彼らは「任せろ！」と胸を張っていた。

「ならベツポ達を先頭にして探ろう。セレストはミリンちゃんと念のためここで待機、万が一ここに居る『何か』が逃げるようなら……まあ無理に足止めはしなくていいから追跡をお願い。艇に居る以上逃げ道は無いけど妙な事されても困る」

「う、うん……」

「お任せください！」

二人を出入り口に残し俺達は倉庫へと入っていく。

エンゼラには倉庫が幾つかあり、ここは家具や雑貨をしまっている倉庫だ。棚には

細々としたものを小分けに入れた木箱を並べて置き、床には大きい荷物が箱につめた状態か埃よけに布を被せた状態で置かれている。

ある程度室内は棚で区切られてもいるが、大きい荷物の移動が邪魔にならないよう開けた場所もある広めの倉庫だ。窓は無いが魔力を補充すれば長く灯り続ける魔導ランタンを幾つか配置しており、多少薄暗いが歩く分には問題は無い。

その明かりの中用心しつつ俺とコーデリアさん達は倉庫内を少しずつ進んでいく。

「パツと見じゃあ不振な物も人も居ないけどもね」

「みんなどうだ？ 何か分かるか？」

フエリちゃんが先頭をいくベツポ達に尋ねると、彼らは俺達をチラリと見ながら鼻をスンスンと鳴らし匂いを嗅いでいた。俺達に感じ取れない何かを既に見つけている様子だ。

「ここは任せてみるか」

「そうだな」

ベツポ達は匂いを嗅いで進んで行く。途中までベツポやジジ達は別方向を向いたりもしたが、徐々に皆同じ方向に向いて歩いて行く。そして倉庫の奥の方にまで来ると皆は一つの大きな木箱の前で立ち止まった。

「……………これ？」

「木箱を指差すとベツポ達は「そうだ！」と頷いていた。今日補充した荷物の内の一つには間違いない。」

「これ何の箱だっけ……」

「ここにラベルが……ふむ、ペット用品のようだ」

「ペット用品？ そんなの買……つたなそう言えば」

仲間になった団員の中にメドウ子のメドウシアナ、フェリちゃんのベツポ達のように人型ではない存在が多くなったので、それらのもの達の衣食住を充実させるために今回まとめて買い込んだのだった。

なお何かと例外が多い存在のB・ビイは、人型にもなれるので微妙な所だが普段ビイもどきの姿なので基本俺の部屋に設置した小型ベッドで寝ている。

「これは寝具類だな。ベツポ達のもあるし、ミスラ用に新しく小型ベッドも買ったんだぜ。」

「ミニミニンツ！」

実はこっそり買ったミスラのベッド。B・ビイとは違い、ソーサー程度の大きさのミスラに合わせた更に小さな物だ。今までタオルを畳んで寝床にしてたので悪いとは思ってたんだよね。

「しかし団長、この箱の中に恐らく何か居るといふわけだが……どうするね？」

「まあ釘打つて封してるわけでもないんで……蓋開けりゃ人も余裕で入れる大きさではあるけどなあ……」

俺達がかようやって話しても特に反応は無い。とつと開けてしまってもいいのだが——と、色々考えているとフージーとニコラがゴソゴソと木箱を弄りだしたではないか。

「あ、コラお前達!? 勝手に……!」

「——!」

フエリちゃんが注意するがニコラ達は中身が気になるようだ。自分達の物が入っていると分かりそれを守るために慌ててもいる。

「待て待て、今開けるから……!」

「——!」

「あっ!?!」

木箱を開封しようとしたらその前にフージーとニコラはパツと姿を消した。どうやら箱の中に移動したらしい。

「しまった!」

「おいコラ、お前達ツ! 戻って——」

「ふひやあああああゝゝゝゝつ!」

フエリちゃんが再度叱ろうとした。だが彼女が言葉を言い終えるよりも先になんと木箱の中から悲鳴が聞こえた。

「ふえゝつ!」

「おおつ!! な、なんじゃあ!」

「むう、これは……」

急にドタンバタンと木箱が揺れだし、一同驚き思わず驚き後退る。

「え、ええ! な、なんですかあ……!!? だ、誰ですかあ……!」

「——!」

「——!」

「ひやああああん!? そ、そこ……ツンツンしないでえ……! いたつ! はう、ひええ

ゝゝ!」

「——!」

「や、やめてくださいあゝ……! そつちも駄目です、引つ張つたら駄目ですうゝゝツ!

ひゝゝん! お助け、お助けですうゝゝ……ツ!

木箱の中からはニコラ達の騒ぎ声、そして彼等に襲われてる女性の悲鳴が聞こえる。

「案の定『何か』は……居たようだね」

「ふええ……こゝ、これ、どうしよう団長……」

「さてな、こいつは……」

あの箱の中で果たして何が起きてるのか。まあ予想がつかんでもないが、中々手の出しづらい悲鳴が聞こえて来るので困ってしまう。

「ひゃああんっ!?!」

どうするか悩むうちについて木箱は傾き俺達の方へと倒れる。そしてそのまま蓋が開き中から「スツテンコロリ」とそんな擬音が目に見えるようにして、フージーとニコラ、そして一人の女性が中の荷物と共に絡み合いながら転がり出て来た。

「あらら、荷物が……」

「――!」

ベツポやミスラ達のために買った毛布や枕が雪崩を起こし床に散らばる。ベツポ達もこぼれたその寝具の匂いを嗅いで鼻を押し付けたり布に包まったりとやりたい放題だ。

「それどころじゃないんだがなあ」

「す、すまない団長……みんな興奮してしまつて」

「うーむ、まあいいや。それより俺達は……」

改めて散らばる寝具の中央で目を回している女性を見る。倉庫の明かりでもはつき

り見えるヒューマンとは違う耳、それを見れば直ぐに彼女がエルーンであるとわかる。

「何かと思えばとんだ珍客のようだね」

「いやはや全く……そのようです」

なんだって俺の艇には珍客ばかり来るのか。せめて星晶獣ではなかったただけ助かったと思う事とする。

■ 二 トラブルの種がタンポポの綿毛みたいにフワフワしてるのになんか全部こつちに来る

■ 目を回していた女性を倉庫から連れ出した俺達。彼女自身に特に危険を感じなかった俺は、団員を集めてこんな時に何時も使われる食堂へと移動して一先ず彼女の事情を聞くことにした。

「すみません、すみません……」

「あの……」

「悪気は無かったんです……」

「いやその……」

「丁度良い大きさと狭さの木箱につられただけなんです……」

しかし食堂で椅子に座りながら頭と耳をたれる女性、口を開けば謝罪の言葉が出てくるばかり。

「まためんどーなの連れて来たなお前」

「お、俺が連れて来たんじゃないやい！」

向かい合っても勝手に落ち込んでいく女性を前に中々話が進めれない。そんな様子を見ておっさんが俺を呆れた様子で見るが別に俺が連れきたわけではない。と言うか俺が面倒を態々連れて来た例は無いはずだ。

「しかし密航者だろ？ ふん縛って次の島で突き出すか？」

「ひええ……………」

「おい脅かすな。まず話聞いてからだ」

B・ビィの言い方がちと物騒なせいで彼女は縮み上がってしまった。なんか小動物みたいな人だな。

「まあまあ。ほら君、このココアでも飲んで落ち着くといい」

「はう…………お気遣い感謝します…………」

一方で普段通りの落ち着いたペースのゾーイが厨房から一杯ホットココアを持ってきた。女性はココアを受け取るとクピクピ少しずつ飲んで落ち着きを取り戻していった。

「はあく……美味しいです……」

「それは良かった。最近私はココアが好きなんだ。それに甘い物は、心が落ち着くからな」

「頭の回転もよくなるしねえ。良い事しかないよ、あは」

ゾーイの言葉に頷くフィラソピラさんであるが、貴方は甘い物が好きなだけと思いません。

「話できますか？ 悪気が無かった云々はそちらの事聞いてから考えるから、まずは話を聞かせて欲しいですね」

「は、はい……すみません……」

「まずお名前は？」

「えつと……コンスタンツィア、と言います……」

エルーンの女性、コンスタンツィアさんは少しずつだが自分の事を語り出した。

とある島から「逃亡中」の身であると語る彼女、今も島から島へと移動して「追っ手」から逃げ続けているらしい。

「……うん、まあ色々と言った事がありました。が、なんだって木箱に？」

「そのお……私を追いかけてる人が近くまで来て……慌ててどこかに隠れないとって思ってたなら、良い場所に荷物が積まれてるのを見て……」

「俺達の積荷か……」

「それで、その……最初は身を隠すだけのつもりだったんですけど……運良く箱の蓋が開いてたらなあ〜って思ってたら……」

「あの木箱があつたわけか……それで入るかね普通」

「ごめんなさい、ごめんなさい！ わ、私暗くて狭いのが好きで……落ち着くんです。中にはフカフカの毛布もあつたので、そのお……つい……」

「——！」

「ひゃあ〜！」

「ほらお前達、落ち着け」

自分達を使うはずだった毛布を先に使われ憤慨するベツポ達が抗議の声を上げている。フェリちゃん達が彼らを落ち着かせるが、コンスタンツィアさんは悲鳴を上げて怯えていた。

なんとも情けないと言うか呆れた話だが更に話を聞くと、その後木箱に隠れて追っ手をやり過ぎしつつか毛布に包まってる内に眠ってしまったコンスタンツィアさん。そして何時の間にか箱ごと積み込まれエンゼラは出港、そして今に至るわけだ。

「積み込まれるタイミングで眠ったから少し心配が無くなったのか」

「しゅ、出港のタイミングだったから……私も操舵の方に気をつかってたし……」

セレストがコンスタンツィアさんに気がつくのが遅れた理由がこれでわかった。

「ちなみに、〃とある島〃って何処の島です？」

「そ、それはあ……皆さんにご迷惑かけてしまうのでちよつと……言えないです……」

「……じゃあ〃追っ手〃って言うのはどんな奴等ですか？」

「えつと……火炎放射器で脅したり、拳骨で脅したりする二人組みですう……」

「おつと、俺が思ったより超危険人物だぞ〜」

「俺は拳骨の方に興味があるな！」

「フェザー殿、ちよつと今はそう言う話じゃないと思います」

拳骨に反応したフェザー君の方はユーリ君に任せ、俺はチラリとコーデリアさんと

おっさんと視線を合わせる。すると二人は軽く頷いた。

「……カルテイラさん、ちよつとこの場任せていいですか？」

「ん、任せとき」

カルテイラさんに一時この場を任せ席を立つ。後からコーデリアさんとおっさんの

二人も着いて来て、そのまま三人で廊下の方に出た。

「……で、どう思います？」

「嘘はついてるね」

「ああ」

俺が意見を求めると二人はきっぱりと告げた。

「そう思います?」

「まあね。緊張してるにしても常に視線は定まらないし酷く挙動不審、何か重要な事を誤魔化そうとしてるのがはつきりわかる」

「とは言え事実も混ぜてるな。まあ意図してんじやなくて嘘が下手なだけ、自然と本当の事を言っちゃまってるタイプだな」

「根が正直なのかなあ」

「だろうな」

ではどこが本当の事だろうか? まあ何となくだが追って云々は本当そうだ。

「追われてるって言うのは……微妙だけど、俺は本当だと思いますがね。怯えた感じからして」

「別に否定はしねえよ。あの女の素性は知らねえが、何かに追われてても不思議じやない」

「やっぱ『魔力』?」

「当然」

コンスタンツィアさんと話して分かったが、彼女は中々強い魔力を持っている。並の魔術師とは比べ物にならないだろう。仮にもしあの魔力を魔法として使える才がある

ならば、相当な実力を持つてゐる事になる。そう言つた人間が狙われると言うのも理由としてはありえる。

「まあオレ様のような天才ではねえが、何かは特別だろうな」

「身の上を深く語りたがらないあたりも気になるね。それにどこか浮世離れた印象を受けた。身形も悪く無い、もしかすれば身分が高い者の可能性もある」

「うへえ……貴族とかだと面倒でやだなあ」

「確証は無いよ。面倒には違いないがね」

そこは違つて欲しかった。コーデリアさんの予想は当たるからなあ。

「でどうする？ B・ビイの言うように次の島で密航者として突き出すか？」

「それも良いけど……なんかほつとけない感じありません？」

「お前そう言うところだぞ」

耳が痛い。

「どの道次の島まで時間がある。今は下手に出歩かない様にして艇で大人しくして貰おう」

「ですね。部屋空いてるし、最低限の家具置いて適当に鍵閉めりや牢屋代わりにはなる。それで大丈夫でしょう」

結局追われている事も確証は無い。彼女がただの密航者であるオチも十分あるのだ。

「それじゃあ一先ず部屋を用意し——」

「団長ツ!？」

「うお!？」

食堂に戻ろうとしたらそれよりも先に中からマリーちゃんが血相を変えて飛び出てきた。

「な、なにどうしたの?」

「どうしたじゃないわよ! ラムレッタとティアマトがヤバイの!」

「……ああ!？」

そう言えばあの二人が食堂でダウンしてるのを忘れていた。

「け、決壊したの!？」

「まだだけどなんかブルブル震えだしてんのよ! 出すのは良いけど、ここだけでは止

めさせて!!」

「そりやそうだ……!」

一応足元に桶は置いてあるはずだが、いざそうなれば果たして一人一個で足りるかかわらん。しかも今はコンスタンツィアさんまでいる。ちよつと状況が悪すぎる。

「ちくしょう! 無理しても早い内に移動させとくべきだった!」

慌てて食堂に飛び込みながら、俺はまたこれから色々と有耶無耶になりそうな気がし

た。

■ 三 馴染んでるうゝ

■ コンスタンツィアさんを捕まえ（保護とも言う）数日後。俺達は次の目標の島に近づいていた。

一方で問題のコンスタンツィアさんは、臨時であてがった部屋で大人しくしてもらっていた……のだが。

「コ、コンスタンツィアさん……これ、お茶はいったよ……」

「あ……ど、どうもありがとうございます……」

なんか知らんがセレストと仲良くなっていた。おどおどした二人がおどおどして仲良くしてる。

「何をしているのかねお二方……」

「ひゃっ！」

「あ、団長……」

食堂でなんか和んでる二人を見かけて声をかけたが、コンスタンツィアさんに驚かされ悲鳴まで上げられた。

「ひやつて……そう驚かんでも」

「す、すみませんすみません……急に声をかけられると駄目なんです。ビックリしちゃつて」

「ビックリしちゃいますか」

「はい……ビックリしちゃいますう」

繊細なのかな。けど声かけただけであそこまで怯えられると傷付くのだ。

「まあ驚かせたのは悪かったです……で、二人揃つてなに？ 一応コンスタンツィアさんは部屋での待機が原則なんだけど」

「け、けど団員の誰かが付き添えば船内の移動は良いって事にしたよね……？」

「まあね」

コンスタンツィアさんは、持ち物検査も身体検査もしたが特に危険な物は持っていなかった。なので一人で出歩きさえしなければ部屋から出る事は許可している。

「別に俺も疑うわけじゃないけどさ……まあいいや。それで二人で何してんのさ」

「えへへ……ちよ、ちよつとお茶会を……」

「お茶会であーた……」

「な、なんか気が会つちやつて……」

誰とでも簡単に仲良くなるなあうちの屋晶獣達つてば……。

「それも良いけどね。じゃあ何で気が合ったわけ？」

「趣味、とか……？」

「お前まさか」

「ち、違うよ！ ルナール先生の方とは関係ないから！」

セレストの口から趣味と出てくると、最近今まで以上にルナール先生と一緒に部屋で作業してる時間の多い耽美物の方が浮かんてしまう。二人が手と顔をインクで汚して部屋から出て来た時はゾンビかと思つたぞ俺は。

あと最近二人のフェザー君とユーリ君を見る目が怖い時がある。フェザー君は多分説明しても理解しないだろうが、ユーリ君は多感で未来ある青少年なんだ。やめてさしあげなさい。

「あ、あの……私がその、狭くて暗い場所が好きだから……セレストさんとそれで話が合つて」

「なんじゃそりや」

「わ、私閨系の星晶獣だから暗い場所好きでしょ？ だからそこ等へんで気が合つちやつた……」

「歴代居心地の良かった狭い場所ランキングは盛り上がりました」

「うーん、一生縁が無さそうなランキングを知ってしまった。……因みに一位は？」

「クローゼットです」

「クローゼットだねえ……」

やっぱ縁は無いな。

「だ、団長もどう？ お茶淹れるけど」

「あー……うん、じゃあ貰う」

「わ、わかった……ちよつと待っててね？」

セレストは俺の分のカップを取りに厨房に向かって歩いて行つた。そして俺は席に付いてコンスタンツィアさんを見る。

「……あ、あの？ なにか……」

「何ってわけじゃないですけどね……」

椅子に座つて茶を飲んでいる姿を見ると、何となく上品に見えてくる。やはりコーデリアさんの言うようにある程度身分の高い人物、それなりの教育を受けている人に思えた。

一方本人の性格もあつて本当に貴族かと聞かれると疑問であるが、それでもただの村人みたいな事はないだろう。

「……そろそろ島に着くんですけど、コンスタンツィアさんをどうしようか考えてました」

「はう……や、やっぱりご迷惑でしたよね……」

「そらご迷惑でしたかね」

「あわわ……！ すみませんすみません……！」

勝手に人の騎空団の荷物に紛れ込んで密航されりや誰だつて迷惑だわ。

「普通に考えれば秩序の騎空団なりに後任せちゃうんですがね」

「そ、それは……そのお……」

「嫌だど？」

「うう……」

この感じはやっぱり何かから逃げてるか、単純に後ろめたいなにかがあるのか。悪いこと出来る人では無いと思うがどうなんだか。

「どう言う事情か知りませんがね。俺も身元不明で目的不明の人を乗せたままつてわけにいかんのですよ」

「うう……そうですよ。その通りですよ」

「いやそこまで落ち込まなくても」

「良いんです。全部私が悪いんです……私がしつかりしてれば良かったの……私なんて壁の染みとお話してれば良かったんだわ……」

「卑屈だなあーんもー！」

別に責めるつもりも無かったんだが、コンスタンツィアさんはみるみるしよぼくれてしまう。繊細と言うかこれは打たれ弱すぎるぞこの人。

「お？ なんじや団長が密航娘をいじめておるぞ」

「おやおや、本当かいガルーダ？」

「酷い奴がいたものね」

「ちがぁう！」

コンスタンツィアさんがメソメソし始めたら食堂にメドウのじやコンビとフィラソピラさんまで入ってきた。入って来るなり目撃した俺達二人の姿を見て適当な事を言うのじゃ子。そう言う適当な発言の所為で俺の変な噂が増えるんだ畜生。

「違うんです……全部私が悪いんです……」

「あは、台詞だけなら完全に君が悪者だね」

「違います」

「こう言う台詞最近買った本で読んだぞ。痴情の纏れと言う奴じゃな！」

「ちがうっ！」

「女は何時だつて泣くしかないのね」

「俺が悪くないって分かってんだろテメー!?!」

涙目のコンスタンツィアさんの言葉は益々俺を悪者に仕立て上げてしまう。そして

それを分かってからかう三人。

「シヤ〜……」

「メドウシアナ……うう、お前だけだ慰めてくれるのは」

一方メドウ子に着いて来たメドウシアナ（省エネ）は実に優しいものだ。「元氣出しなさい」なんて言いながら、ポンと俺の肩にまるで手のように尻尾を乗せる。

「シャーッ」

「あ、どうもこれはご丁寧……」

そしてちゃんとコンスタントツイアさんにも挨拶をするメドウシアナ。この子主人より礼儀正しいな。

「……そう言えばコンスタントツイアさん、メドウシアナとか特に驚いてなかったですね」「え？　そ、そうですか？」

もつと言うならティアマト達星晶獣を見ても初めこそ驚いていたが、直ぐに慣れた様子でもあった。

「そう言えばそうじゃな。妾の事もそこまで驚いてはいなかったのう」

「ど、どうでしょうか……ちゃんと驚きました……よ？」

「ちゃんと驚くってなんですか、ちゃんとって」

「あわわ……そ、それはその……」

「あ、あれ……人数増えた……」

コンスタンツィアさんが俺達の疑問に答えが詰まっていたところ、厨房からセレストが戻って来た。

「今来たのよ。なんか食べたくなつたの」

「甘いものが欲しくなるのは、人も星晶獣も変わらないよ。あは」

「うむうむその通り」

「おやつ目的かよ。まったく……」

そう言う事ならしかたあるまい。どうせお茶請けに何かあるか俺も考えてたところだ。俺もなんか食おう。

「セレスト、悪いけど飲み物追加で人数分頼む」

「あ、うん……それは良いけど、団長は……?」

「小腹空いたしパンケーキでも焼くわ」

「パンケーキ!？」

「それは魅力的な提案だねえ」

「トッピング! アタシの分のトッピングは大盛りにしなさいよ!」

「ええい、群がるな!?! アリかおのれらは!!」

パンケーキと言った途端に俺に群がる甘味大好き三人組。見た目未成年なので行動

も相まって完全に子供である。

「トツピングは凝ったもんは無し！ ジャムかバターだけだ！」

「ケチっ！」

「うるせい」

「地味っ！」

「関係ねえだろ!!? 髪三つ編みにすんぞ！」

「こわ……っ!!? どう言う脅しよ!?!」

三方向から群がられて動きにくい。メドウ子達を体で押し退けながら厨房へと移動する。

しかし中途半端に話が途切れたが、結局コンスタンツィアさんの事は分からなかったな。星晶獣を見ても直ぐに慣れた理由、果たして何だろうか？ 気が小さいようだから魔物のようなのが怖くないと言う風じゃないだろう。むしろ苦手と考えるのが妥当だが、もしや異型の存在に慣れているのか？

追求すれば分かるだろうが、だが俺がそんな事を態々する事も無い。なんなら島に到着したらお別れするわけだし、あんま気にする必要も無いだろう。へーきへーき。

■ 今は難しい事よりパンケーキなのだ。

■ 四 予定通りにはならないのが常

数時間後、俺達は目的の島に到着した。森と平原があり、幾つかの村と町がある比較的小さな島だ。

島に到着してから依頼されていた積荷を下ろし納品する。シエロさん経由で手に入れた香辛料や医療品など、小さな島では手に入れるのが難しい品々である。こう言うのを運送の艇とは別で運ぶのも騎空団の立派な仕事であり人助けってわけだ。

そしてその品の納品自体は無事終了。依頼も完了して一安心……と行きたいがちと困る事になる。

「団長さん、やっぱりこの島には秩序の騎空団の施設は無いそうです」

「あらら……そうでしたか」

「はいです……」

停泊所での納品作業の最中、別行動で町の方に情報を集めに行つて貰つたブリジールさんが残念そうに話す。

「そ、そうですか……ほつ」

「相棒、この姉ちゃんあからさまにホツとしたぞ」

「い、いえいえしてないです……！ これっぽっちも……！」

「隠すのへただなあ……」

「ミンミン」

たどり着いた島が小さい島なので、秩序の騎空団関係者が駐在するような施設が無かった。その事を知ったコンスタンツィアさんはと言うとあからさまに安心していた。

思わず俺もミスラも呆れてしまった。

「別に呼ばば来ますがね。ここだって秩序の騎空団活動範囲だし」

「ひえ……っ!」

「一タリアクション大きいな姉ちゃん」

「まあ呼ぶぐらいならこつちから駐屯施設ある島に移動した方が早いんで呼びませんが」

だとしても暫く時間はかかる。まだこの奇妙な密航者との旅が続くだろう。

「そ、それじゃあこの島では特になにも?」

「まあ依頼は今んとこ終わってますからね。本来補給するべきもんも無いんですが……」

「……ふえ?」

コンスタンツィアさんを見ると彼女は何も分かってない顔だった。

「……基本部屋に待機で数日、何か必要なもんも出てきた頃でしょう」

「あ、私のこと……えっと、それは……」

「必要最低限の生活用品はこっちであげますけど、それとは別で要るもん買いますよ。着替えとかいるでしょうし、それに暇潰す奴とか……まだ暫く艇に乗ってもらうことになりそうですからね」

「そ、そんな悪いです……」

「悪いと思うなら密航せんで欲しかったなあ」

「はうあ……っ!!」

そもそも今まで良くもまあ、こんな性格してんのに着の身着のまま逃げてきたもんだ。たいした荷物も見当たらず、路銀だつて自分で稼げるようにも見えない。ある意味度胸があると言えよう。

「とりあえず今日は、コンスタンツィアさんは俺にB・ビィ、そしてブリジールさんとで買い物です」

「え、他の皆さんは?」

「今日は自由行動なので各々好きにしていますよ」

「自分は買い物のお手伝いです!」

こういう裏方と言うか買出しとかお手伝い関係の時輝くのがブリジールさんだ。日頃家事手伝いもよくしてくれて、こんな時也大変助かっている。

「う、うう……すみません私のようなのに気を使ってもらって……」

「別に気を使ってるわけじゃないのだけでもね……」

特に量も多くなく、大きな買い物もするつもりは無い。とつとと済ませてしまおう。

「せいじゃ早いとこ終わらせて……む？」

二人を連れて移動しようと思った時、ふと何か視線を感じる。

停泊所にいる人の数は少なくない。人の気配は勿論そこかしこにあるが、しかしこれはこちらを見ている視線だ。殺気は無いが何か気になる。

「団長さん？ どうしたです？」

「……ふむ」

視線は後ろの方から感じる。振り向いてもいいがそれで俺が視線に気がついた事を知られるのも面倒だ。

「ちよつと移動しますよ」

「え？ 買い物は……」

「しますが、取り合えず付いてきて下さい」

一先ずコンスタントツイアさん達を連れ移動する。町の方へ向かいつつ人通りのある場所へと移動した。

「団長さんこれ何処にむかってるです？」

「さて何処と言うわけでもないですがね」

「へ？」

「B・ビイ、ミスラ……気付いてるか？」

「ああ、ついてきてる」

「ミン！」

「へ？ え？」

コンスタンツィアさんとブリジールさんは気が付いていないようだが、B・ビイとミスラは俺の感じた視線に気が付いていた。そしてその視線はまだ感じる。

「二人とも歩くの止めないで下さいね。それと声は抑えて」

「え、はい……」

「……さつきから俺達をつけてる人がいます」

「え……っ!？」

「コンスタンツィアさん、振り向かないで」

「あわわ……!？」

慌てて振り向こうとしたコンスタンツィアさんの肩を押さえる。彼女は汗をたらりと流し怯えた様子になった。

「じ、自分気が付きませんでした……間違いないです？」

「まあ多分。移動しても付いて来てるんで」

「問題はオイラ達の中の『誰』を狙ってるかだな」

「覚えがないでもないけどさあ……させて」

「ううう……」

俺自身というか俺達騎空団が誰かに終われる覚えはないでもない、色々やらかしてるし。ただ現在俺の横にいるコンスタンツィアさんと言う存在がまたややこしい。

「コンスタンツィアさんを追ってるのか言う二人組とは別かね」

「ど、どうでしょうか……顔を見ないとちよつと……」

「ですよね……お？」

少し辺りを見渡せば幾つかの店が並んでいる。その中に一店服屋を見つけた。

「よし、あそこの店の前に行きましょう。ショーウィンドウの前に」

「あ、はいですー！」

「あわわ……！ ま、まっってくださいあーい……！」

店のショーウィンドウ、その前に並び買い物を装う。そうしてそのまま俺はガラスに映る景色を見る。通行人が歩く中で数人が足を止めている。そしてその数人の中で一人俺達の方を見ている男がいた。

「……ああこの服なんかイイ感じっすねえ〜」

「え？」

「ほら、この服つすよこの服う」

そして丁度ガラスにその男が映る場所に飾られている服を指さし「トントン」とガラスを叩く。コンスタンツィアさんは、最初キョトンとしていたが、ガラスに映った男の姿を見てハツとした表情になる。

「そ、そうですね。けど私には似合わない……ですね」

「おっとそうでしたか……ふうん？」

言葉は軽い調子で、しかしフルフルと首を横に振りながら俺をジツとみた。知らない男、と言う事だろう。

（意図をくんでくれたのは助かった。が、コンスタンツィアさんの知らない男か……追手とは別なら俺達が狙いか？　けどまあコンスタンツィアさん狙いの可能性が消えたわけでも無い、か……）

ガラスに映る感じではハッキリと顔は見えないが、ちよいとばかり怪しい男と言う風貌だった。ガラスの表面でぼやける姿でもわかる男の手に巻き付いている鎖、ファツシオンにしては大袈裟だ。

「……B・ビィ、ブリジュールさん。俺達先に行くから、後から来て、下さい」

「お、そうか……じゃあ、後から追い付く」とするかな」

「あ……は、はいです!」

「じゃあ先に……ほら、こっちです」

「え? あ、あの団長さん……あわわ! まってえ〜!」

コンスタンツィアさんの手を取って店から離れる。そしてB・ビー達と別れ、俺とミスラ、そしてコンスタンツィアさんはそのまま町の路地へと入って行く。

「あの、こっつて行き止まりになるんじゃない?」

「なりますね」

「ええ!」

「ミスラ、あの男来てる?」

「ミー……ミンツ!」

ミスラに後方の確認をさせると付いて来ていると言う。どっちが正面か初見じゃわからんミスラなら、後ろを向いても相手にはわからん。そもそもどう言う存在かわからんだろう。

「B・ビー達の方に残らなかつたか、ミスラ狙いなわけは無いしこれで俺かコンスタンツィアさん狙いの何者かが確定つすね。だろうとは思ったけど」

「ひ、ひええ〜……」

「そして行き止まり、と」

「ひええ〜……!!」

路地の行き止まり。そこで立ち止まり後ろを振り向く。

「え〜……先程から俺達の後ろから付いて来てるようですが何か?」

「……コソコソし始めたとは思ったが、やはり気が付いていたか」

薄い肌の色。灰色の髪。だがその眼光は鋭く、猟犬を思わせる。

そしてジャラジャラと男の腕には長い鎖が巻き付き連れていた。やはりいかにも怪しい。

「そいで用事は何でしょうかね? 後ろからつけられるのって案外気分悪いもんです

よ」

「当然用があつて来た。だがそちらが急に移動し出したから追っただけだ」

「あらま? そりや申し訳ない……ただ俺も普段から結構面倒な事多くてですな。用心

しちゃうわけですねこれが。にしたってちよい後の付け方が怖かったんですがね」

「俺も色々事情がある。人に会うにも見極めと言うのも必要だ」

「さいですか」

「聞くんが……貴様が【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z O Y】の

団長だな」

「ええ、その通りですが」

「……ふざけた名だ」

「略していいですよ？」

「言われなくてもそうする」

男は面倒そうにしていた。俺も呆れてるよ、自分の騎空団の名前なのにね。

「しかしそれを聞くって事は、俺に用事があるんですね」

「そう言う事だ。要件は一つ、単刀直入に聞く。貴様……『紫水晶』を知っているか」

「紫水晶……？」

はてそのような水晶は覚えがない……とも言えないな。

「紫か……アレの事かな？」

俺は何かとトラブルの元になるエルステ帝国の作った『魔晶』の事を思い出した。

あれは確かに紫色だし名前の通り水晶の形ではある。

「貴様……っ！ やはりなにか知っているのか……っ!？」

「ひええ!？」

だが俺が紫の水晶に覚えがあるような言葉を口にした途端、男は表情を険しいものへと変える。そのためコンスタンスツイアさんが怯えてしまった。

「ちよちよ!?! ちよつと落ち着いて、彼女驚いちゃうから。とつても繊細なのよこの人」

「関係無いな。それよりも知っている事を答え……む!？」

男は俺に詰め寄ろうとした。だがそれと同時に男の腕に巻かれた鎖が独りでに動き出した。鎖の先についている紫の水晶、それがまるで蛇の頭のようにうごめきジャラジャラと伸びて行くと俺を指し示す。

「そ、それは武器か何ですか？ お、俺何かしましたかね……っ!？」

「この反応は、前と同じこの小僧に……いや違う、これは……」

そして鎖は俺を指し示すと、続いて隣のコンスタンツィアさんを指し示す。

「その女も……何か知っているのか？」

「わ、私ですか!？」

「ええ……コンスタンツィアさんなんか知ってんすか？」

「し、知らないですよ……! 紫の水晶なんて私しりませえくん……っ!？」

「ですよね……だそうですが」

「同時にこのような反応とはな……答えてもらうぞ、知っている事を」

「うわぁーい、聞いてない!？ ちょっと待って下さいよ、冷静になりましょうっ!？」

「ひいくん!？」

「ミニミニーン!？」

獲物を見つけた猟犬の様に迫る男に思わず叫ぶ。なお俺達を指し示す鎖が更に男を恐ろしく見せた。

「おっと兄ちゃん、そこまでだ」

「乱暴は許しませんです！」

「ぐっ!？」

だが俺達に迫る男の肩を掴み動きを止めたのは、後ろから現れたマチヨビイとブリ
ジールさんだった。

「なんだこの化物は……!？」

「おいおい、ひでえな化物とはよう。オイラはキュートなマスコットだぜ」

「残念だがそのポジションはミスラだぞ」

「ミンツ！」

まったく当たり前の感想言われ不本意そうなB・ビイだが、マチヨビイ形態はどこか
らどう見ても化物である。更に凶々しい事言ってるので否定しておく。

「ひええくく……!？」

「こつちも怯えてるし」

そしてマチヨビイ初見のコンスタンツィアさんも怯えてた。

「いやけど助かった。無駄に一戦交えるなんてごめんだからな」

「貴様計ったか……」

「ただの挟み撃ちですよ。計るって程じゃないでしょう」

B・ビー達と別れてあえて路地に入って挟み撃ちにするのは上手くいった。B・ビーに肩を掴まれてしまえば例えドラフの男でも動けんだろう。剣に伸ばしかけていた手を戻し男へと近づく。

「あのですね、まず初めに言つとくと俺の知ってる『紫の水晶』ってのは『魔晶』ってのもんです」

「魔晶、だと……?」

「そうそう、魔晶。で、そつちの言う『紫の水晶』ってのは、多分その鎖に繋がってる奴ですよ? だとすれば俺は知らないです。雰囲気も違うし……勿論こつちの彼女も知らんですよ」

「……」

男はB・ビーに押さえられながらも俺とコンスタンツィアさんの二人を疑う様に睨んでいた。だがふと鎖の水晶を見ると表情が冷静なものに変わっていく。

「……そのようだ」

「はあ……わかつてくれたならなにより」

「元より俺も戦うつもりなど無い。ただ話を聞こうとしただけだ……しかしその女を不安にさせた事は謝罪しよう。だが既に話した通りこちらにも事情がある。でなければ態々後を追いもしない」

「あー……つまりここで「さようなら」する気は無いと?」

「そう言う事だ」

「やれやれ……」

これはコンスタンツィアさん始まりのトラブルって事で良いのかね。俺はどうもそんな気がしてならない。

「場所を変えましょう。俺達の艇で話聞きますよ」

ただこのトラブルはちよつと長くなりそうだ。俺はそんな予感もしていたのだった。

■ 五 フェイトエピソード 悲劇が生んだ獵犬

彼——エゼクレインと言う男は、とある島のある村で育った。

その島は平和な島であり、村もまた平和な村だった。どこにでもある、当たり前前の平和な村。だがその村には、ただ一つ他にはないとある。『至宝』があった。

『始原の大水晶』。それは覇空戦争時代の遺物と言われている。それ以外は何もわからない。ただ古くからそこにある、それだけだった。それ以上の事は誰も知らず、知る事すら禁じていた。

この世界での遺物とは、すなわち多くが覇空戦争時代のオーバーテクノロジーであ

る。その利用法を知ってしまえば、例え平和利用のための研究であつても争いを招く。

それは、人の身に余る力——そうであろうことを大水晶を見て来た者達は直感的に感じ取つたのだろう。故に大水晶の研究の一切を禁じた。

しかし村の人間は、その欠片を利用した“占い”に長けていた。それが大水晶、その欠片である“紫の水晶”を利用する唯一許された事だつた。

今までも、これからも、大水晶と人の関係はそれで終わり、そしてそのままである。そうであるはずだつた。

だがある日、悲劇は起きる。

村を見守り続けたその“始原の大水晶”は、正体の見えぬ闇の組織に奪われた。更にその時村は争いに吞まれた。人が争い、村は焼け、多くの者が傷ついた。

エゼクレインが村の惨劇を知つたのは、彼が島に居ない時だつた。彼は紫の水晶による占いに特に長けており、それを生業ともしていた。そのため島を出る事も少なくなかつた。或いは、そうでなければ“悲劇”は防げたのか……。

その惨劇を知つたエゼクレインは、静かに怒りに燃えた。彼は誰よりも故郷を愛していた。村の仲間を愛していた。だからこそ、その平和を壊し至宝さえも奪つた者を憎んだ。

「どこにしよう、必ず見つけだす。そして報いを受けてもらう……俺と紫水晶から逃げれると思うな……」

彼の腕に巻かれた鎖は、蛇の如く獲物を探し出す。そしてエゼクレインのその瞳は、獲物を狙う獵犬そのものである。

そしてその瞳は、今一人の騎空団団長を捉えていたのだった――。

六 団長「シリアスな話に巻き込まれてしまった……」

俺達の前に現れた男、エゼクレインさんと言うその人は、俺達――いや、俺を追いかけた理由をエンゼラで短く語った。

奪われた至宝、平和の崩れた故郷。簡潔に村で起きた出来事を語るエゼクレインさん。彼自身も村を離れていたため事の全ては知らないと言う。だがその時起きてしまった悲劇でどれ程の事が起こり、どれ程の犠牲が出たのか……それは想像に難くない。

「許せぬ話であります」

誰よりも正義を重んじるシャルロットさんが腕を組みつつ険しい顔で呟く。同じように思っているのは、きつとシャルロットさんだけじゃないだろう。俺もまたその話を

聞き村を襲った人間を許せぬと思う。

「しかし、何と言いますか……お辛い事が……」

「別に同情の言葉が聞きたいわけでもない。今の事に関しては気にしなくていい」

「なんじゃ、気難しそうなやつじゃのう」

エゼクレインさんの物言いに呆れるのはガルードだった。俺がまた妙な男を連れて来たとおつて、自由行動中であつたメンバーも集まり皆でエゼクレインさんの話を聞いているのだ。

「のじゃ子、あんまそう言う事言わないの」

「ん、すまぬ」

「……噂では聞いたが、本当に星晶獣の団員がこれ程いるとはな」

エゼクレインさんはエンゼラにいるのじゃ子だけではない星晶獣の数に驚いている。と言うか呆れていた。

「だからこそ紫水晶がアレ程の反応したと言う事か……」

「何か勝手に納得してますが……まあ事情は分かりました。ただそれと俺を追いかけた事の関係は？」

「と……とん鬼気迫つた様子でした……自分、少し怖かったです……」

俺とコンスタンツィアさんの前に現れた時、特に俺が魔晶について話した時のエゼク

レインさんの顔は、ブリジールさんが言う様に正に鬼気迫るものだった。

「今話したが俺の村から至宝である『始原の大水晶』が奪われた。俺はそれと奪った奴等を追っている」

「……復讐ですか」

「ああ」

「……成程。だとしたら尚更何故俺を？ まさか俺の事を仇と思っているわけじゃないでしょう」

「それは——」

理由を話そうとしたエゼクレインさんだったが、それよりも先に出会った時と同じように彼の腕の鎖が独りでに動き出し蛇のように俺とその隣に座るコンスタンツィアさんを指し示した。

「ひゃ、ひゃあ……！」

コンスタンツィアさんは思わず短い悲鳴を上げた。僅かに場に緊張が走り、数名の団員は武器に手を伸ばす。

だがその鎖はそれ以上動かず、俺達二人を指し示すのみだ。

「さつきもそうでしたけど……これって」

「これが理由だ」

「へ?」

「俺の占いはこの紫水晶を利用する。これはそう言ったものだ。だが時に紫水晶が自ら道を示す事がある。俺を『導く』ようにな」

自ら動き何かを示すそれは、確かに行くべき道を指し示す導きのようだった。そしてその導きは、俺とコンスタンツィアさんを示す。

「以前ある島で紫水晶がお前に強く反応した。今までにない反応だった……ご覧の通り、今も変わらずな」

「それで俺が何か知ってるかもと?」

「その通りだ。だがまさか更にもう一つ反応があるとは思わなかったがな」

「ひええ……」

エゼクレインさんがコンスタンツィアさんを見る。別に睨んでるつもりは無いんだろうが、鋭い視線が怖いのかコンスタンツィアさんは相変わらず震えていた。

「わ、私なんにも知りませんよぉ……」

「と言うか俺に関しては、騎空団としての活動もまだ始めたばかりかと言うか、わりと最近に旅立ってるんでエゼクレインさんの故郷に行くの無理ですよ」

話を聞く限りその事件があつたのは、俺が旅立つ前だろう。事件に関わると言うのが無理だ。

「それはわかっている。よろず屋も似た事は言っていた」

「ええ……シエロさんの名前が出たよ」

「何かと俺も奴から情報を貰う事はあるんでな」

「じゃあ俺にはもう用事無いんじや……」

「いやある」

あるのか……。

「依然として紫水晶は貴様とその女を強く指している。お前達が何かを知っていようといまいと関係はない。お前達には利用価値があると言う事だ」

「利用価値ってあんた……」

「わ、私そんな価値なんてないですよ……」

「コンスタンツィアさんはコンスタンツィアさんで卑屈だ。なんなんだこの会話。」

「それは俺と紫水晶が決める事だ」

「そんな断言されましても……いや待て、利用価値があるとしてどうするつもりですか？」

「……で無性に嫌な予感。俺このパターン知ってるぞう。」

「知れた事、俺の目的を果たすために利用させてもらう」

「そ、それは……その、つまり？」

「俺をこの艇に乗せろ」

「……お、俺そんな価値ないですよ……!?」

「相棒、密航姉ちゃんの真似してもおせえよ」

畜生わかつてるよ、こんちきしようめ。

「あのあの……急に言われてもちよつと困ると言うか、それ以前にコンスタンスツイアさんもそのですね……色々事情と言うか経緯がややこしくつて適当に艇降りてもらおうつもりで……」

「駄目だ。その女も“導”^{しるべ}の一つだからな。少なくとも紫水晶が反応しなくなるまで艇に乗せたままにしろ。反応がある内は利用価値があると言う事だ」

「うわあん！ 勝手に決めるっ!!」

「ひいいん！ 巻き込まれましたあ〜……!!」

この人強引だよっ！ と言うか巻き込まれたの俺だよ!!

「別にタダで乗せろとはいわん。俺はお前達を利用するが、お前達も俺を利用すればいい」

「り、利用すればって……つまり依頼とかの手伝いですか？」

「そう言う事だ。今までも情報を得るために依頼を受けて荒事は慣れている。タダ飯食らいの足手まといになる気も無い」

色々事情がややこしいが、これってつまりはエゼクレインさんを仲間にすると言う事だ。それとそれなりに戦えると言う事でもある。

しかしだ。その提案を受ける事は、コンスタンツィアさんを考えていたより長くエンゼラに乗せる事にもなる。それに復讐の手伝い、あんま気が乗らない事だ。

だが断った場合——それも可能ではあるだろう。だが紫水晶の反応とそれによる占いで俺の居場所を突き止めた事を考えると、ここでエゼクレインさんと別れても居場所が突き止められる可能性がある。

結局何時もの事、つまり合流するのが早いか遅いかだ。断つても多分そのうちまた出会ってしまうだろう。そしてこの分だとコンスタンツィアさんもそんな感じする。艇降ろしても次の日別の島で再開しちゃうとかそんな光景が浮かぶ。

「そつすね……事情もあるようですし良いですよ。部屋も空いてますし」

「……案内素直に受け入れるな。あれほど嫌そうにしたと言うのに」

「まああれですかね。最初っからウェルカムじゃないよと言う意思表示みたいなのは、はははは」

「にやあく団長きゅんの力無い笑いが……」

哀れむような視線を向けてるがラムレッタよ、こんな展開で最初に団員になったのは君だよ忘れるな。

「……よし、決まったもんは仕方ない。切り替えだっ!!」

「流石主殿、切り替えの早さがより早くなつたな」

シュヴァリエがうんうん頷いている。そして他の面々も頷いてた。なんも嬉しかな
い。

「改めて買い出しだ。コンスタンツィアさんの買い物も途中だったし……長い事一緒と
なると、もうちよい買い物の内容考えないとな」

「す、すみません……私のために……ほっ」

「……面倒に巻き込まれたと思いつつ、秩序の騎空団に突き出されずに済むとか思つて
ほっとしてないですよね?」

「そうで、す……いえ!? いえいえ、そんなまさかつ!?」

「相棒並みに表情出るな」

「俺こんな風なの?」

「イヤ、コレ以上ニワカリヤスイ」

嘘だあ。

『そういう所だぞお前』

「ふふふ、嘘だあつて思つてるな団長?」

「ウツソだあ……」

「本当だあ」

リヴァイアサンとゾーイに指摘されてしまい俺の表情筋の緩さがまたも露呈する。今更とか思ってたまるか。

「……騒がしい騎空団だ」

「生憎そう言う騎空団なのですよ……どうします？　ついて来るの止めます？」

「まさか」

如何にも騒がしいのが苦手そうなエゼクレインさん。だが彼は腕の紫水晶を見て強い意思を込め呟く。

「……すべては、紫水晶の導きのままに」

その水晶の光はエゼクレインさんの言う様に導きの光なのだろうか。その答えを俺達を知るの、まだ先の事だろう。

■ 七 追う者、また別に……

■ 団長達がエゼクレインを仲間に加え、そしてコンスタンツィアを暫く艇に乗せる事を決めた数日後の事――。

「やはり、この島に来たのは間違いないようですね」

「それらしい人を見かけたって事だったのにな」

「今一步遅かったですか……」

団長達が立ち寄り行動したとある島。そこで二人の女性が何やら話している。それだけならば大して目立つような事は無いが、しかしこの二人の服装が町の中では少しばかり目立つものだった。

「今度こそ追いつけそうだったのですが……」

「次にどこに行ったかもわからないみたいだし」

「複数の男女と行動をしていたと言う事ですから……もしかすれば、どこぞの騎空団に潜り込んで移動してるかもしれませんね」

「んもうっ！ 逃げる時だけは思い切り良いんだから」

どうやら誰か人を探している様子の二人。その人物が見つからず頭を痛める様子の一人、そしてプリプリ怒るもう一人。二人の女性は、黒の服に白のエプロン姿。つまりメイド服に身を包んでいた。そんな二人がメイドを雇うような人間が居ない町で何やら話しているので道行く人達は「おや？」と足を止めたりもする。

だが二人はそんな事を気にする事も無く話を続けていた。

「なんにしても振り出しですね。行方も情報も途切れしました」

「けどこれはこれで良かったかも」

「何が良かったんですか？」

「だって！ これでもうちよつと『ご主人様』と旅が出来るもんつ☆」

「……確かに、それもそうですね。……ふひっ」

何か困っている様子かと思えば一転、一人は明るく笑い一人は奇妙な笑みを浮かべた。

「ドロシーさーんっ！ クラウディアさーんっ！」

「こつちこつち——っ！」

すると遠くから手を振りながら駆け寄ってくる二人の少女。それに僅かに遅れて数人の男女も後を付いて来ていた。

その声に気が付いて二人の女性——ドロシー、クラウディアと呼ばれた彼女達は振り返り顔を明るくする。

「あ、ご主人様あ☆」

「ルリアお嬢様」

元気一杯の二人の少女、それはジータとルリアの二人。そしてビィやラカム達だった。

「こつちの用事終わったから来ちゃった」

「ごめんなさいご主人様。ちよつとこつちは時間がかかってしまいました」

「そうなんですか？ それじゃあ、探してた人は？」

「それが——」

ドロシー達は自分達が探している人間が既に島を発ち、そしてその次の行方が分からない事を告げた。

「そうだったんですか……残念です」

「悲しまないでくださいルリアお嬢様。これが初めての事でもありませんから」

「そうねクラウディア。前もこんな感じで空振りだった事もあったもんね」

「ええ……まあ、今回は特に逃亡日数が長いですが。既に記録を更新してますし」

「はあ……」とクラウディアは深くため息を吐いた。

「……け、けどこれでももう少しクラウディアさん達と一緒に旅が続けられるんですね」

「はいっ☆ まだもう少しご主人様達と一緒にですよ！」

「あ、確かにそうなるね！ いえーいっ！」

「いえーいっ☆」

ルリアの言葉に反応したドロシー、そしてその事を聞いてドロシーとハイタッチで喜ぶジータ。

「えへへ……ごめんなさい、クラウディアさん達は早くその人と会いたいのに。だけど私ちよっと嬉しいです」

「ル、ルリアお嬢様……………ふひっ!!」

そして少し困り顔ではにかむルリア。それをみてクラウドは、胸を押さえてふら付いていた。

「なあなあ、何時も通りのやり取りは良いけどよう、新しい情報とかねえのかよ?」

好き放題なメイド二名に呆れた様子の子。話を進めようとするどロシーが「そう言えよ」と言葉を続けた。

「よくわかつては無いですけど、一緒に行動している人達がいるようなんですね。複数の男女だとか」

「男女ねえ……………で、その男女の情報は無かったのか?」

「それが何故か妙に情報が途切れてるのです。特に一番傍にいた男に関しては、一緒にいた所を見たと言う話しか無く、目撃者皆が顔をあまり覚えていないと言う始末……………」

「影が薄かったのかもしれないね」

「実に面倒な……………きつと陽炎の様な男なんでしょう。忌々しい」

「そ、そうなんですか……………」

「けど誰かと行動してる事が分かったなら直ぐに次の情報も見つかると! 私も手伝うから安心して!」

「わ、私も手伝います!」

「ご主人様……！」

「ルリアお嬢様……っ！」

ラカムの疑問に対してドロシーとクラウディアの答えはあまりに中身の無い情報だった。目当ての人物が、顔のおぼろげな男と一緒にいた——たつたそれだけの情報。ジータもルリアも残念そうにしつつも二人を励ましなにやら盛上げる。

その一方で後ろではビイとラカムが多量の汗を流していた。そしてソロリソロリ……とジータ達から少し距離を置いた。

「……なあ、ビイよう」

「なんだよ、ラカム……」

「今、クラウディア達 “顔を覚えてない” だとか “影が薄い” とか言ってたな……」

「おう……」

「……影の薄い誰も顔の覚えてない男、なんだよな」

「やめてくれ、止めてやってくれえラカムウ……」

ビイは両手で顔を覆い悲しみに暮れた。

「けどよ、こう言うトラブル関係で影が薄い男って……お前それって」

「わかってる、わかってるよ。多分そうだとオイラだってわかってるんだ……」

二人の頭にはこんな事態を知る由もなく、呑気な顔をした一人の男が浮かんだ。残念

な事にその表情がおぼろげで流れる雲の様なのがまた悲しい。

「しかし、どうするんだよ……絶対そうだぞ。あの二人の目当ての奴がいるの」

「い、今この場で言うのはマズイと思うぜオイラ」

「それは……確かに」

二人はチラリとまだ盛上るジータ達を見た。

「ジータとルリアは、雰囲気で流されて気が付いてねえようだな」

「ジータの奴前の記事の事まだ覚えてるもんな……」

ビイの言う記事とは、少し前に一部地域で発行されたゴシップ記事であり、そこにはガロンゾで起きた喜劇（当事者にとっては悲劇）についての事が書かれており、見出しはズバリ『噂の騎空団団長、七曜の騎士と乱痴気騒動!?!』と言う物だった。なまじ嘘でも無いのが余計に性質が悪いだろう。

それを見たジータの機嫌は非常に悪くなり、今でもこの記事の事を思い出すと何時かの様な異常現象を小規模ながら無自覚に起こしていた。ついでに何故か仲間のオイゲンも悩んだ様子だったが、それは今特に関係はない話である。

「今迂闊に兄貴の事話すと絶対居場所突き止めて何しでかすかわからねえ。さ、最悪兄貴が……兄貴、逃げっ!?!」

ビイの脳内でアウギユステで起こった「ラブホ事件」の結末がフラッシュバックし

た。

「いや流石にあそこまで酷い事にはならねえだろ……多分」

「多分……」

「そう、多分」

ビィを励ましたいのは山々であるがラクカムとて自信はない。

「だが今話さない方が良いのは賛成だ。タイミングが悪い……もう少しジータが落ち着いてから話した方が良い。坊主を前にしても冷静でいられるタイミングでな」

「だよな」

「しかしなあ……そろそろ、そのなんだあ。会った方が良いだろうか？」

「うん……ポチポチお兄ちゃん分が切れる頃だからな」

「何度聞いても無茶苦茶だな」

「けど兄貴に会えるならオイラも嬉しいぜ」

「よし、じゃあそう言う事で……グランサイファーに戻ったらカタリナ達とも情報を共有するぞ。迂闊にジータに気が付かれないようにしねえとな」

「ああ……」

しかしなんだって自分達がこんなに苦労をするのだろうか——ふとそんな事をビィもラクカムも思わないでも無かった。

しかしこの場に居ないのに既に事件に巻き込まれている事がほぼ確定しており、今後
もまだ何か別の事に巻き込まれる可能性（或いはもう巻き込まれる）があり、しかも
星晶獣関係の揉め事もありそうで、最後には最悪ジータに何をされるかわからないと言
うトラブル数え役満ぶらり旅を続けている男の事を思うと涙も引っ込んだ。

思わず彼の無事を祈り合掌するビイとラカムであった。

編
O d d a n g l e r & O d d l e a d e r 前■ ■
一 始まりの山中

「よっ!!」

——その老人は、慣れた様子でキャストイングを行った。まるで本当に虫が飛んでいるように毛針が空を進み、そして着水にいたる。そして数秒の後、毛針が水中へと沈む。「ほいっ!!」

まるでそのタイミングを分かっていたかのように、焦りも無く老人は竿を引いた。すると見事針は毛針を飲み込んだ魚にかかり、水中より一匹の川魚が釣り上げられた。

「やや、これはお見事!!」

それを見ていた少女、ミリンが思わず歓声を上げた。

「なにこの程度大した事ないわい!」

対して老人は笑うのみ。謙遜とは違う本当に当たり前の事と思つてゐるようだった。

「流石だなあ」

そしてもう一人、老人の腕前を見ていた少年。老人の物と似た竿を手に持った団長も感心して感嘆の声をもらした。

「とてもそんな風にはできないなあ」

「なあにお前さんは筋がええ。もうちつとやればもつと釣れるようになるわい」

その場には老人に何時もの団長とB・ビー。ミスラにミリン、そしてゾーイ、メドウス、コンスタンツィア達の姿があつた。

コンスタンツィア以外は皆釣り竿を持ち、目の前の川に向かい竿を振る。

とある島の低い山の山中、その川での団欒。しかし果たしてこの老人は何者であるのか、そして何故団長はこのような所で釣りに興じているのか。

ここに至るまで何があつたのであろうか。時間は数時間前に遡る――。

■ 二 きっかけがよろず屋さんなのは多々ある

■ その日俺達は、物資補給のため立ち寄つた島の騎空艇停泊施設にエンゼラを停め島に降りた。そう大きくもない島であるが物資の補給をするには十分の街がある。

滞在予定は一日。今日で物資を補給して後は体を休めて次の島へと向かう予定であった。

補給に関しては予め別の島でシエロさんと打合せを行っていた。予め補給物資が揃っていれば、搬入もスムーズに行えるからだ。

しかし流石よろず屋シエロカルテ。この日、こちらの予想よりも搬入準備が整った状態で荷物がまとめられていた。搬入作業も驚異の速さで終わってしまった、一気に時間ができてしまった。

「それではこちら、今回の納品書になります。ご確認お願いしますねえ〜」
「はい、どうもです」

搬入が終わればシエロさんに今回の補給での支払いを、そして他にも幾つかの書類を俺が書いたり書いて貰ったりを、そのついでに少し雑談もしたりする。

「これから団長さんの方はどうされますか〜?」

「そつすねえ。この後大分時間空いたんでのんびりするか、街をブラつくか……」

「もし予定が無いのでしたら、釣りなどいかがかあ〜?」

「釣り? 釣りかあ……」

「ええ、実は街近くの山に釣りが出来る溪流がありましたですねえ〜、もし興味があれば行ってみてはいかがですかあ〜?」

彼女の提案は、俺にとっては予想外で考えてもなかった事だった。

俺の生まれ育ったザンクティンゼルは、水源は勿論あるのだが気楽に釣りが出来るほどの川や湖は無い。そのため俺にとって釣りとはあまり縁のないものだった。だから彼女の提案を受けても「どうしようかな」程度にしか考えていなかった。

「シーズンではありませんが場所も近く魚はまだ釣れますし、その分観光客も少ないので物見遊山にも丁度いいと思いますよ〜?」

「ふうむ……興味がないわけでもないけど、なんせ経験が……それに竿もないしなあ」「それでしたら〜心配なく〜」

そう言つてシエロさんは、荷物の中から一本の釣竿を取り出して見せた。

「釣竿?」

「実は近々商品の入れ替えで古い品の整理を行つておりましてですねえ〜。こちらの釣竿なんですが大分型落ちなのでセール品にするか廃棄しようか考えていたんですよお〜」

「……お安いので?」

「なんなら五本セットで一本分の値段でもお〜」

などと言われ思わずに「買ったつ!」等と言つてしまうのが俺の駄目なところだなあ、と常々思うのである。これ体のいい在庫処分ではあるまいか。いや、深く考えまい。

まあ釣りには興味があつたのは嘘じゃない。何時ぞやのアウギユステでも結局釣りとかそれらしい事を出来ていない。休息ついでに良い機会だろうと思つたしだいなのだ。

■ ■ ■ 三 釣りキチ団長

「よつと……つ!!」

ピツと軽い力で竿をしならせると、反動で勢い良く糸の先に結ばれた疑似餌が飛んでいく。すると「フワリ……」と、水の上へと疑似餌が落ちていった。

「わあ、お上手ですね団長さん」

「そ、そつすかね?」

「はい、私にはとてもできません」

狙つた位置に近い所へ着水した疑似餌を見て満足げにしていると、コンスタンツィアさんが小さく拍手をしながらほめてくれた。裏表の無い性格からくる話し方にお世辞の雰囲気はなくちよつと照れてしまう。

「ま、あとは釣れるかどうか……」

じつと糸の先を見つめ魚がかかるのを待つ。ちらりと見た足元の籠には、一匹も魚の

姿はない。

シエロさんから釣竿を買ったあと、一度停泊中のエンゼラに戻り街に出ていなかったメンバーを誘ってみた。

集まったのは基本俺というB・ビィ、ミスラ。更に艇で暇していたゾーイ、メドウ子、ミリンちゃん、コンスタンツィアさん。以上のメンバーでシエロさんの言う釣りのできる場所まで向かったのである。

そして目的である山中の川。流れのある渓流で早速釣りを開始したわけであるのだが成果はサツパリであった。

「なんかすみません、つき合わせちゃって。見ててつまらないでしょ、俺が魚釣ってるだけ見てるなんて、しかも釣れてないし」

「そんなことありませんよ。ねえ、メドウシアナさん？」

「シヤア〜」

コンスタンツィアさんは、傍でとぐるを巻くメドウシアナに同意を求める。するとメドウシアナは、欠伸なのか返事なのか分からない声で答えた。

気遣いのできる大蛇メドウシアナは、釣りの邪魔にならないよう省エネ状態でジツと日向ぼつこの最中である。山中の渓流とは言いえ日の当たる岩場での日光浴は、気持ちがいい様子だ。

「それに私こうやってのんびりするの大好きですので」
「そつすか？」

「ええ……自分の知らない島でのんびりして、色々な事を忘れられて……ああ、けど何時か二人がきつと迎えに来るんだわ……うう。私には向いてないのに……一生クローゼットの途中で過ごしたい……」

アウトドアしながら後ろ向きにインドアな事を言ってる。詳しくはわからんがコンスタントツイアさんの悩みは、なんとも面倒そうなことである。

「む、かか……っ?! あっ!!」

魚が糸を引くのを感じたのだが、竿を上げて針には何もかからずであった。虚しく戻る毛針を見てため息をはく。

「また逃げられたなあ」

「相棒ちよつと引くの早いんじゃないのか？」

「そう言うお前は遅いんじゃないか？」

隣でフワフワ浮きながら糸を垂らすB・ビイも成果は無い。揃って魚を引っかけるタイミングを逃し続けていた。

「そつちはどうだミスラ？」

「ミーン……」

数メートル先、齒車ボディに釣り糸を結び付け川の上をフヨフヨ漂うミスラを呼ぶが返事の通り結果は芳しくない。

腕の無いミスラも釣りをしたいと言うので考えた結果の釣り方だが、実に奇妙な光景である。

「こればかりは、コツも知らんからな。ばあさんにも教わってないし」

「時間があれば教えてたかもしれないね」

「時間あるからって釣り教えるかね」

「教えんじゃねえの？ 覚えて損にならないよ」とか言つて」

「……ありえるな」

あのばあさんならあり得る。よくよく思い出せば修行用の道具や武器の中に太鼓やら明らかに調理器具やら家具やらもあった。あんなもん何に使うのかと思つたが、ばあさんの教える戦闘技術はどこかぶつ飛んでるからな。釣りを応用したものがあつてもおかしくない。

「だーめだ、集中が切れたな。ちよつと休憩すつか」

「あ、でしたらお茶入れますね」

「あ、申し訳ないです」

「いえいえ、これぐらいしか出来ませんから」

コンスタンツィアさんがバスケットから道具を取り出しお茶の準備をしてくれる。溪流では石や岩ばかりで平らな場所は少ないが、そんな所でもシートを引き薄くともクッションがあれば寛ぐ事は出来なくもない。水はいくらでもあるし、焚火をすればお湯は簡単に手に入る。簡単なキャンプのようで中々に楽しいものだ。

「なに休憩？」

「うむ。ちよつくらお茶の時間だ」

「食べ物はあるかい？」

「はい、ありますよ。艇からお弁当持ってきましたから」

「それは嬉しいなあ」

俺達が寛ぐ準備をするのを見て少し離れたところで釣り糸を垂らしていたメドウ子達が戻ってきた。肩から下げる籠は軽そうだった。

ともあれ釣りの成果については後にする。今は休息だと言う事で各々平らな場所に座りコンスタンツィアさんの準備してくれたお茶や食事に舌鼓を打った。

依頼の時に外で野営して飯を食うことはあるが、こんな風にのんびりと外で食事をするのは良いものである。

そうして暫し休息をして疲れも空腹も落ち着いた頃、それぞれ釣りの成果について話す事にした。

「そつちもあんま釣れんかった？」

「いやあ慣れぬ土地での釣りは中々どうして……」

「魚を獲るといふのは大変なんだなあ」

たはは、と恥ずかしそうに笑うミリンちゃん。共に釣っていたゾーイも同様である。

ミリンちゃんは故郷で釣りをした経験があると話を聞き今回の誘いにもものつてくれた。だが見せてくれた籠には小さな魚が数匹ピチピチと跳ねるだけであった。気候も感覚も違う土地では、きつと勝手が違うのだろう。あと何故か魚ではなく小さなカニも十数匹カサカサ動いている。

「……なぜにカニ？」

「岩の間に沢山いたんだ。面白いから獲ってみた」

どうやらカニを獲つたのはゾーイだった。石や岩の隙間にいるのを見つけて捕まえたようだ。どこか満足気なのでこれはこれで彼女も楽しんでいるようで何よりだ。

一方えらく悔しそうにしているのが一人。

「釣れる釣れない以前にさあ……」

「うん？」

「ぜんく……つぜん、かからないんだけどっ!？」

岩場でとぐるを巻くメドウシアナ（省エネ）にもたれながらプリプリしているメドウ

子だった。

「シーズン過ぎてるらしいからな。まあ簡単にはかからんだろ」

「にしたって釣れなさすぎよ！ 小魚数匹じゃメドウシアナのオヤツにもならないわよ」

「シヤア〜……」

メドウシアナが欠伸のような返事をする。別に気にしちやいないと言う意味だったが、メドウ子の方は納得いかんという風だ。

「まあそこはメドウ子の腕の問題じゃないかね」

「アンタだつて釣れてないでしょーが！」

「いやまったくその通りなんだな」

メドウ子は「シャーッ！」と憤慨していた。

「まあそう怒りなさんな。こっちはシーズンオフ承知で来てんだからな。シエロさんに勧められてきた物見遊山、俺は魚を釣る事より初めての釣りと言う事を楽しみたいね」「けど一匹も釣れないんじゃないわよ。他の奴らは釣れてるみたいなのに……」

メドウ子がチラリと見たのは、俺達以外の釣り人である。シエロさんの言ったように観光客は少ないが、人も少なくまだ魚が釣れるこのギリギリの時期を狙って来た釣り人

がポツポツといる。グループで来てるのは、俺達ぐらいのものだった。

そんな釣り人達は、流石慣れているのか竿を振れば大抵魚を釣り上げている。俺は感心するばかりだが、どうやらメドウ子の方は羨ましいやらで悔しい思いをしているようだ。

「やっぱ生きて餌が良いのよ。なによコレ、針金に毛が生えただけじゃないの」

メドウ子はブツブツと文句を言いながら、釣り糸の先に結ばれた疑似餌を突いた。

「毛針」 ってな、虫を模してるんだと。水面に落ちるとそれを虫と勘違いして魚が食べるのさ」

「食べないじゃないの」

「そうだけどさ」

素人の俺だって竿を振れば良いわけじゃないのは分かっている。結局釣りのノウハウが俺達に無いのだ。

「生餌だとそこ等辺の岩ひっくり返して虫探すしかないな」

「ムシ……こんなのか？」

「ぎゃあっ!？」

ゾーイが足元の石の隙間から見つけたのか、ウニウニ動くゲジゲジのような多足生物をつまんでメドウ子に見せる。だが急に目の前に持ってこられたせいでメドウ子は悲

鳴を上げてのけぞった。

「きゅ、急に近づけないでよっ!」

「ああ、すまない。メドウーサは虫がダメだったか?」

「ベベ、別に苦手とは言っていないでしょ! 急に目の前にだされたら、誰だつてビックリするでしょうがっ!」

ゾーイの見つけたような虫も魚は食うだろうが、しかし疑似餌でろくに釣れない奴が生餌に変えたところで釣れるのかと言う疑問もある。食いついた所で釣り上げる技術も素人だし。あと一々虫探すのも大変だ。

「親切な達人が釣り方教えてくれねえかな」

「そんな都合のいいことあるか?」

「無くはないと思うぜオイラは」

無くはないだろうが、果たして浮遊する歯車と浮遊する黒いトカゲモドキを引き連れた面々に釣りを指導してくれる人が居るかと言われると正直居ないと思うね俺は。

「そういえば団長さん、ミスラ殿は?」

「まだ釣つてる。釣れてはないが、あれはあれで楽しいらしい」

俺の指差すほうを見るミリリンちゃんの視線の先には、相変わらず体から糸を垂らしながら川の上をフヨフヨと動くミスラがいた。

「……奇妙な光景ですなえ」

「全空探しても今ここでしか見れんだろうね。おーい、ミスラ。そろそろ休んだらどうだ？」

「ミーンツ！」

ミスラに呼びかけると元気な返事が返ってきた。そのままフヨフヨ動いて俺達の方へと戻るミスラであつたが――。

「ミンミン……ミン、ツ!？」

「ミン、ミスラア——ツ!？」

突然ミスラに括り付けてあつた糸がピンと張つたかと思えば、そのまま小さなミスラの体を引つ張り激しく振り回しだした。糸の先には30センチ程の魚影が見えた。

「ミス……ツ!？ ミン……ミン、ミィィ——ツ!？」

「ござるう!？ ミスラ殿が魚に振り回さてるう——ツ!？」

「あわわわ……!？ だ、団長さんミスラさんが大変なこと……!？」

「う、うおおー!! ミスラ、うおおくくつ!？」

慌てて助けようとするが溪流の流れは強く歩きづらい。どうしてもここは水中の魚に分がある。

「ミシユウ!？ ミミィィ——ツ!？ ミン、ミィィ——ツ!？」

「踏ん張れミスラ、今行くぞお——ッ!」

いくら星晶獣と言えども、ガロンゾの本体から分かれたティソーサー程度のミスラでは、水中で泳ぐ大きな魚の力には抵抗できないでいる。頑張つて抵抗はしているようだが、それでも魚に振り回されていた。

俺も必死に追い付こうとするがこちらも魚に翻弄される。このままではミスラの三半規管の危機——そう思つた時であつた。

「ほうれ!!」

威勢の良い男の声が聞こえたかと思えば俺の頭上を越えて一本の釣り糸が宙を切るように跳んだ。その先にある釣り針が光を反射させ剣の切先が如く輝いた。

釣り針はそのまま一直線にミスラへと向かうと、実に見事な動きでミスラの歯車ボディに引つ掛けた。

「ミンツ!!」

「きつちつちつち……つ!!」

そしてそのまま男は笑い声をあげ竿を引き上げる。するとなんとミスラだけでなく、ミスラを引つ張つていた魚事引き上げた。今度はミスラが俺の頭上を叫びながら通り過ぎて行つた。

「そうら、釣り上げるぞい!!」

「ミイ——ンツ!？」

「ミスラア——ツ!？」

ミスラは魚ごと如何にも釣り人と言った風貌の男の手に収まった。男の足元では、オマケのように釣り上げられた魚がピチピチと跳ねている。

「よつと! きつちつち……ほれ大丈夫かお前さん? えらく振り回されておつたようじゃが」

「ミ、ミミミ……」

取り合えずミスラは無事なようだった。男の手の上でグルグルと回っている。その様子にほつと胸をなでおろし、とにかくミスラを助けてくれた人物に礼を言わねばならぬと急ぎ戻る。

「すみません、ありがとうございますっ!」

「きつちつち……! なに、気にせんでええ。それよりそこは危ないぞ!」

「へ?」

「その川底は、急に深くなる場所がある。注意してすす——」

男の声が突然途絶えたかと思えば、俺の視界は水中の中にあつた。全身が冷たく、ブクと口から空気が漏れていく。

どうやら水の深いところに足を入れて転倒してしまつたようだ。あはは、まいったねこ

りや。

「——つて、暢気してるばあいじゃプロオツ!? あばあ——つ!!」

「うわあ——つ!!? 今度は団長さんが流されたあつ!!」

「あわわ……つ!!? ど、どうしましょう、どんどん流されてますう!!」

「ちよ、ちよつと! この先小さいけど滝があるんじやなかつた!」

「流れが速いなあ。B・ビー頼む」

「あいよ」

なれない水中で激しい水流に揉まれる中、遠くから猛スピードで泳いでくるマチヨ
ビーが見えた。

アウギユステと言い俺は、なんか水があるところではこんな目ばかりに遭ってる気がする。果たして俺は何時になつたら平和な休日と言うのを送れるのだろうか——遅しいマチヨビーの腕で引き揚げられながら俺は涙した。

■ ■ ■
四 フェイトエピソード 太公望

■ ■ ■
かつて「変幻自在の妖剣士」とまで呼ばれた剣聖がいたと言う。

その活躍たるや数多の逸話が生まれ、今尚その活躍に憧れる剣士は多い。

だがその剣士の実態を知る者は少ない。活躍のみが語られ、或いはその弟子を名乗る者が現れる事はあれど、その本人を見た者はいない。

果たしてその剣士とは、一体何者なのだろうか――。

そして時は今、場所はとある島の溪流へと移る。

一人のハーヴィンの老人が、溪流の岩場で釣り糸を垂らしていた。

オフシーズンに入ろうという時期であり人は少ない。だからこそ自然の音がよく聞こえそれが心地よい。水が流れ、岩に水が当たれば太陽の光が反射してキラキラと飛沫が散った。穏やかな自然、その中に老人は一体化していた。

老人は、ある目的があつて旅を続けている。その道中この場所へと訪れた。根っからの釣り人である老人は、常に竿とルアーを携えどの島でどんな魚が釣れるか熟知していた。

釣りは旅の中での楽しみだった。魚を釣り上げられなくとも、釣り糸を垂らすだけで心が澄んでいくのを感じる。彼はそんな時間が好きなのだ。

そうして急ぐ様子はなくのんびりと溪流を眺めながら竿を引いては、またキャストを行く。釣りの成果も上々で気分もよかった。だがふと――「おや？」と彼は、その視線を岩場の下へ向ける。

自分がいる場所より下の方でなにやら数人の男女が釣竿を振っている。皆初心者な

のだろう、不慣れな様子で竿を振るよりも竿に振り回されている印象を受けた。だからこそ一見してレジャーで釣りを楽しみに来た観光客と言った感じであった。

しかし老人は、その男女の中で一際無害そうな男を見た。

年若く何処にでもいるような少年。その彼はピツと竿を振つては、直ぐ魚に逃げられたのか、それともまるで食いつかないからか、釣り糸を戻す度「あ………」と天を仰いだ。

なんと言うことは無い普通の少年だ。だが老人はすぐに分かった。『筋が良い』、と。

少年の方は、諦めたのか竿を置いて他の仲間と休息に入った。今のところ結果は『坊主』のようだがそれは初心者ゆえのこと。ならば自分が少しコツを教えれば直ぐにでもそれを自身の技として身に着けてみせるに違いない——そのような事を老人が考えていると、少年達が突如悲鳴を上げた。少年はそのまま川の中に入っていく。

老人は少年が向かう先を見た。そこでは奇妙な歯車が「ミンミン」と悲鳴を上げて魚に振り回されている。

生物なのかも不明だが、どうやら少年はあの歯車を助けようとしているようだった。だが川の流れに足を取られ中々進めないようだ。なによりあの場所は急に底が深くなるので素人が迂闊に入ると溺れてしまう。

老人の動きは速かった。垂らしていた釣り糸を一度引くと直ぐにキャストしなおす。竿がしなり真つ直ぐとルアーが飛んで行くと針は見事に例の歯車の体に引っかかった。

「そうら、釣り上げるぞい!!」

「ミイ——ンツ!？」

「ミスラア——ツ!？」

歯車に加えてそれを振り回していた魚の重量もあつたが老人は難なく丸ごと釣り上げた。

後は少年だ。老人は急ぎ川底の危険を伝えた。だが運悪く少年は足を滑らせ水中へと没した。

ああこれはいかん——と、思ったが直ぐに少年の仲間らしき黒いトカゲが筋肉隆々な姿へと変わり救助へと向かうのが見える。

あのトカゲがどう言う生物なのかまったく分からなかった。そもそも自分が助け手の中で（目はないが）目を回してゐる歯車と言ひ奇妙奇天烈な集団である。

故に老人は、ある噂を思い出す——。

“奇妙な集団に地味な少年”

もしや、と思つた。だがそうであるならばなんたる偶然であろうか。老人は正にその噂の“地味な少年”を探していた。

(ふむ、面白い……！)

奇妙な出会いに老人は思わずニヤリと笑った。

■ ■
五 団活けいりゆう日誌

川に流されあわや滝にまで落ちそうになった俺だが、なんとかマチヨビイのおかげで生還する事ができた。

そしてそんな事があってからも俺達はそのまま溪流にいた。

まず俺の方が全身水浸しになったので、焚火で服を乾かしていた。さすがに全裸は不味いので下着を着て持ってきていたブランケットを腰に巻いている。服が乾くまでは見苦しい姿である。なんとも情けないがここが寒い島でなくて助かった。

「すみません……暫くお見苦しい姿ですが」

「い、いえいえ……お見苦しいという事は……」

B・ビイなんか他の仲間達は、それなりの付き合いだから今更であるが、ミリンちゃんや特にコンスタンツィアさんにはちよつと申し訳ない。

そして次に俺達は、釣りを続行していた。しかも今度は、先ほどと打って変わり籠には魚がドンドン入っていく。

「あ、かかりましたよ!!」

「オイラも来たぜ!」

「わ、わわ……凄いです! こんなに大きなのも!」

「ミンミイ!」

「わあ……! 魚が沢山だなあ!」

ミリンちゃんやB・ビーが魚を釣り上げている。籠にたまる魚を見てコンスタンツイアさんとミスラがはしゃぎ、ゾーイも魚を釣り上げる度に顔を輝かせていた。

「教えるの上手いっすねヨダルラーハさん」

「きつちつちつち! なくに、ちよいとコツを教えただけじゃよ。言ったじゃろう、お前さんらの筋が良いんじや」

不思議な笑い方で返事をする老ハーヴィンは、流浪の釣り人ヨダルラーハと名乗った。この人こそあの時見事な竿さばきでミスラを魚ごと釣り上げた人であるが、なんとも愉快で奇妙な老人であった――。

「何事かと思えばそのヘンテコのが魚に連れ去られて、かと思えばお前さん達は慌てて助けようとして、お前さんは溺れてそっちのトカゲはデカくなつて……見てるこつちも驚いたわい」

「誠に……迷惑を……」

「きつちつちつち……！ まあ気にせんでよい」

などと言うやり取りをしてからヨダラーハさんは、俺達に興味を持った様子で話を続けた。

「さつきから様子を見ておつたが、お前さん達どうも釣りの方は慣れないようじゃのう？」

「え？ ああ、まあ殆ど未経験者なもんで……」

「うむうむ、ならどうじゃろう。どうせ服も乾くまで時間がかかろう、ワシがちよいと釣りのイロハを教えてやろうかのう」

「へえ？ いや、いいんですか？」

「いいも何もワシがそうしたいんじゃないよ。お前さん達、特にお主は……筋が良い。ちよいと教えれば直ぐ釣れるじゃろうて！」

——と、言う流れがあつた。

そして確かにヨダラーハさんの言うとおりでつた。幾つか釣りのコツを聞いた俺達は、その通り竿を振ってみると今度は面白いように魚が釣れたのだ。

その目覚ましい成果に驚き、そしてヨダラーハさん自身の腕前や指導の上手さに感嘆したがヨダラーハさんは、元々俺達自身の筋が良かったと言う。

「お前さん達『劍』を扱っておるな？」

「おや、わかりますか……」

「竿の扱いを見れば大体わかる……あつちの娘っ子も侍と言うし、お前さんらただの観光客じゃあるまい？」

「あは、はは……まあ、肝心の剣は沈んじまいましたが」

先ほど水に流された際、水に揉まれ岩にぶつかる等するうちに鞘から剣が抜け落ちていた。剣なので早々流される事はないだろうが、生憎あそこは水深が深く潜って見つける必要がある。しかも流れの速い場所のため、もし岩の隙間にでもあつたら探すのも一苦労だ。そこまでするならもういつそ買ったほうが早い。

フエリちゃんに会った時と言い武器をよく落とすな俺は。

「そんで何者じゃ？ 騎空団かなにかか？」

「あく……はい、まあ一応俺が団長で騎空団してます」

「ほう？ ……で、団の名は？」

「……【星晶戦隊マグナシックスとB・ビィくんマン&均衡少女ZOY】っす」

「きつつちつつち……!! そりやまた愉快な名前じゃのう!!」

「あはは、ほんと。笑っちゃう、あは、あはは……」

絶対いつか改名するぞ、絶対だ。

「しかし竿の扱いでわかります？」

「あつち劍に通じるもんは、こつち釣にも通じるもんじゃやて。だからこそコツさえつかめば直ぐに上手くなる」

「つてことは、ヨダルラーハさんも?」

「きつちつちつち! ワシは劍の方はよう知らんよ。ま、劍も竿も握つて振つてと似たようなもんじゃよ」

「似て……るのかなあ?」

「ま、竿の振りを見れば劍のほうも大体わかる……なんて、どこぞの誰かが昔言つておつたのう! きつちつちつち……!!」

そう言つてヨダルラーハさんは、自身も竿を振つた。確かに一見してヨダルラーハさんは、ただの釣り好き好々爺だ。だが俺はこう言う人を知っている。ザンクティンゼルの婆さんだ。一見してただの老人、それが一番怖いんだ俺は。

それに今のヨダルラーハさんの竿さばき。ミスラを助けた時と言いついその見事な竿の扱いに俺は何か既視感を覚えていた。それが妙に引つかかる。

「釣りは、劍にも通ずる……ねえ」

「なんか言つたか?」

「いえ別に」

「ふむ……それよりも、あの娘つ子」

ヨダラーハさんは、俺から少し離れた場所で竿を投げては戻して投げては戻しを繰り返すメドウ子を見て呆れた様子であった。

「あつちは……上手い事いつとらんようじゃのう」

「のようで……おい、メドウ子そんな忙しなく竿振んな。太鼓叩くんじゃねえんだぞ」

「むう……!!」

声をかけると膨れつ面のまま俺を睨むメドウ子。俺は何も悪くないのに何で睨まれなきゃならんのだ。

「全然釣れないじゃない!」

ヨダラーハさんのアドバイスを受けて皆が一様に釣れている今、メドウ子はただ一人成果なしだった。

ヨダラーハさん仕方ないといった様子で、「よつこらせ」と老人らしくメドウ子の所に歩いていく。

「やれやれ、お前さんそんな乱暴に竿を振ってりや釣れんのもしかたないぞ」

「だ、だつて魚の居る所に投げればいいって言ったじゃない……」

メドウ子が指さす方向には、確かに数匹の魚影が見えた。あいつもそこを狙って竿を振っていたのだろう。

「そうは言ったが、あんな叩きつけるように投げりや魚も逃げる。毛針だつて直ぐに二

セモンとわかるぞ」

ヨダラーハさんは、そのままメドウ子のいる場所から川の様子を見る。すると視線を川上へと向けた。

「ふむ、娘つ子。ここから川上方に投げてみ」

「あつちに？」

「こう言う場所の魚は、流れに逆らって泳いどるからのう。視線は自ずとあつち側、つまり上流側に向いとる。じゃから死角になる所から投げれば魚の方もそう警戒せん」

「ふーん……」

ヨダラーハさんの説明に半信半疑と言った様子ではあつたが、メドウ子は竿をかまえた。

「さつきみたいに叩くように振つちやいかんぞ？ 竿は軽く振るだけでしなつて糸を飛ばしてくれる。力まんでええ」

「うぐ……わ、わかつたわよ」

成果が無い事に焦っていたのか力んでいた自覚はあつたらしく、メドウ子は先程よりも自然な調子で竿を振つた。軽い力でしなつた竿は、毛針と釣り糸を飛ばすと自然に羽虫が落ちたように上手く水に着水させた。

「あとは数秒待つ。魚にやる気……ようは食い気がありや直ぐに食いつく」

「食いつかなかつたら？」

「そんな時こそ一度戻して何度か投げなおせばよい。まああの位置なら直ぐにでも——」

ヨダルラーハさんが言い終えるよりも先に、水面が跳ね毛針が水中に飲み込まれた。

「ほれ食った！ 引けい娘っ子！」

「そ、そんな急に……え、えーいっ！」

慌てながらもメドウ子が竿を引いた。すると水中から一匹の魚が見事釣りあげられそのまま彼女の方へとやってきた。

「うむ見事っ！」

「わ、わわ……っ！」

ヨダルラーハさんが直ぐ慣れた手つきで魚から針を取る。メドウ子はそのまま魚を両手で掴むと、本日初めての成果に目を輝かせた。

するとメドウ子は、速足でおれの所にやって来た。何かと思えば彼女はニヤリと笑い俺に釣った魚を見せつけた。

「どうよ!!」

ただの自慢だった。

「流石アタシね。見てみなさいこの魚！ アンタの釣つたどの魚よりも大きいわよ！」

「へいへい、見りゃわかる。大したもんだ」

「ふふんっ!! まあアタシが本気になればこの程度朝飯前よ!」

ヨダラーハさんに手取り足取り教えてもらった事を忘れたかのような台詞である。

「いっぺん釣ればなんとなくコツもわかったじゃろう? 後は自分らでやってみよ。ワ

シは場所を移してみるわい」

「あ、色々とすみませんでした」

「よいよい、また後で来るからの。成果の方楽しみにしておるぞ」

そう言うヨダラーハさんは、釣竿を持って岩場を軽い足取りで移動していった。

岩から岩へ、蹴って飛ぶように移動する姿からは、まるで年齢を感じさせない。

「団長さん……あの御仁の身のこなしですが」

「……まあ、今はただの釣り人って事で」

移動していったヨダラーハさんを同じく見ていたミリンちゃんは、その身のこなし

に強い興味を持っていた。

彼女が感じ取ったものは、俺もすでに分かっている。だが俺は、態々「藪を突く」趣

味はない。あの人が何者であれ、今の俺達には関係のないことだ。

「あのじーさんの事はいいから! もっと見なさいよ、コレ! ほら! コレツ!」

「わかった、わかったから……!」

それよりもメドウ子にとつちや初めて釣った大物を自慢する事のほうが重要らしい。

魚を押し付けるように見せてくるので生臭い。

「あんま近づ、け……ウヴェエツ!!」

メドウ子の手の中で暴れる大きな魚は、俺の間の前で体をうねらせた。そのせいで尾鰭で激しくビンタされた。生臭いし痛い、俺が何をしたというのか……。

「あつはははっ! 変な顔ねえ!」

「うるせいやいつ!! それより籠入れとけよ。あんまはしやぐと落とすぞ」

「そんな間拔けな事しないわよ。アタシを誰だと——」

メドウ子が魚掴んだまましやべり続ける。その時だった。パアッ!! と、乾いた発砲音が周辺に響き渡った。

「ひゃっ!?!」

突如響いた銃声。驚いたメドウ子が思わず手を放してしまい、彼女の手から魚スルリと抜け出しパチャンと川へと落ちた。

「あ、ああ……っ! アタ、アタシの魚……!?!」

メドウ子が恨めしそうにしながら逃げていく魚の影を目で追った。それより発砲音が響いてすぐ辺りから俺達を取り囲むようにして何人も人間が現れた。

「動くんじゃねえ!!」

その中の一人が一人硝煙が出ている銃口を上に向けたまま、俺達含めこの場にいる釣

り人全員に向かい男は叫ぶ。

「命ばかりは奪わねええ!! 金目の物を置いてきなあ!!」

その乱暴で安っぽい台詞を聞いて俺は察する。結局最後まで穏やかな休息は早々得られないのだと。

編
Odd angler & Odd leader 後

■ 一 休めない団長、命運尽きた悪党

この場に現れたその男達は、如何にもな盗賊団であつた。武器もよくあるハンドピストルにナイフなどばかり。それでも弾が当たり、刃が刺されば人の命を脅かすには十分である。事実脅しの発砲音だけでも彼らが狙つた溪流にいた観光客の釣り人は震えあがつていた。

実はこの盗賊達、この島を含めた周辺空域を最近荒らす盗賊団であつた。

彼らの手口というのは、大体決まつている。盗賊仕事のしやすい島を見つけてはそこへ行きジツクリと下見をする。

大抵彼らは観光地を狙つた。それも山などの身と物を隠せる場所がある島だ。そう言つた島の山に“ここがいいぞ”と言う盗んだ金品の隠し場所を決める。そこからが彼らの本格的な仕事の始まりだ。

観光地の観光客が少なくなる時期を狙い今回のように襲撃をする。土地勘もなく油断した観光客は大抵直ぐに怯えて金を出すのだ。

そうして金品を頂いた彼らは、まず予め決めた隠し場所に奪った物を隠す。洞窟、木のうろ、掘った穴、あらゆる場所を利用し直ぐには盗んだものを懐に入れない。そして彼らは、物を奪うと直ぐに島をたつのだ。

そのようにして奪い隠した物は、ここ以外でも幾つかの島にある。まるで冬支度をすすりすが色んな場所に食料を隠すかのように。そして彼らは数か月か半年は間をおいてから隠した金品を安全に回収、そうしてはじめて懐にしまうわけである。

今回もいつもの同じ手口だった。案の定一発の脅しの銃声で怯える釣り人達を見て彼らは「今回も上手くいった」と仕事の成功を確信していた。

「金目のもんその場において大人しくしてな！ 抵抗したらどうなるかわかってるよなあっ!!」

そう盗賊が言うのと釣り人達は、慌てて財布等の金品を放り出して地面に伏せて震える。後は適当に縛っておけば十分逃げる事もできる。

——そしてこの後もいつも通りだ。金目の物を奪った後は、山の中に紛れ用意した隠し場所に隠す。そしてバラバラに行動し島を出ていく。また数か月して、盗賊騒ぎが収まった頃何食わぬ顔で金品を回収すればいい——。

成功の確信は、そんな甘い考えが浮かぶ。それ程に何時も通りであった。ただしそれは、この時までの話である。

「よし、よし。そのまま大人しく——」

「諦めろ、間に合わねえってっ!!」

「放しなさい! あそこにアタシの魚がまだいるのよっ!!」

「……大人し——」

「また釣ればいいだろうがっ!」

「そういう問題じゃないのよっ!!」

「おと——」

「そ、そうよ……!! 川ごと固めればまだ……っ!!」

「大惨事だよ馬鹿野郎っ!! 水が塞ぎ止められて川筋変わっちゃまうだろうがっ!!」

「大人しくしろよっ!! 状況わかってるそののっ!!」

普段ならばここから悠々と金品回収の時間。だと言うのにやたらめつたらと騒ぐ集団がいた。

言うまでも無く団長とその一行。だが盗賊達は、彼らが“あの噂の騎空団”と、ややこしい情報を“噂”の一言で省かれるヤバイ騎空団、星晶戦隊（以下略）とは思っていない。

つまりは、この時点で盗賊達の命運は尽きてるようなものであった。

■
二 ファータ・グランデ空域で悪事をする場合、騎空団に見つかつて、その騎空団に星晶獣がいて、星晶獣と同等以上の戦闘力を持つ団長がいて、それ並みの仲間を相手にする場合を想定しよう！

■
「落ち着きなさいって、また釣れるから！ やれるつてお前ならー！」
「うぬぬう〜……くそう！ くそう！」

団長は必死にメドウーサを抑えていた。彼女は、魚を逃した苛立ちとその原因を作つた盗賊達への怒りで暴れようとしているのだ。川まで石化しせき止め、逃した魚を捕まえようとしているのだからかなりの怒りである。

だが盗賊はそんな彼女が石化の魔眼を持つ大星晶獣とは考えていない。彼女達の近くにいるメドウシアナ（省エネ）の方にも、とぐろを巻いて大人しくしているので岩に紛れて気が付いていないようだった。

「その半裸の変態と小娘と、あとなんだあ……その他っ!! てめえらぶつ殺されてえのか!？」

「誰が変態だ馬鹿野郎!! 服乾かしてんだよ今！」

「うるせえ！ いいから大人しくしろいっ!!」

「はわわ……!!?」だ、団長さん。盗賊の方達怒ってますけど……」

「怒りたいのこつちですよ……」

現状、戦闘力皆無のコンスタンツィアだけは素直に怯えているが、団長達は普段通りだった。

「……どうされます、団長さん?」

「数多いし囲まれてるからね。俺達だけならともかく一般人もいる。今は大人しくしとこ。メドウ子もいい加減……な?」

「くう……!!」

ミリンは何時でも腰の刀を抜けるようにしていた。だが団長は、今すぐ盗賊を倒そうと思わなかった。盗賊が広く自分達を囲んでいる今、迂闊に動けば他の一般人に被害が出る可能性があった。そのように言うのと流石にメドウーサも落ち着いたのか、悔しそうなのは変らないがジツと大人しくなった。

「盗賊さん、わるかったよ。ツレがちよつと痲癩起こしたもんでね。もう大人しくしとく」

「ケツ！ わかりやいいんだよ」

団長は両手を挙げ無抵抗をアピールする。盗賊達はしばらく団長達の事を睨んでい

たが、多少団長達に対して警戒を解いたようだった。この場合は金目の物を優先するらしく直ぐ他の釣り人達が投げ出した財布やらの回収に向かっている。

(さて、後は様子を見つつ隙を見つけるか)

無抵抗を装い団長達は盗賊達の隙を伺った。

団長は、盗賊達の人数と手慣れた襲撃の様子から初犯じゃないだろうと判断した。ある程度盗賊稼業で食つてるとも考え、目の前に現れた以上ここは全員捕まえる方が良いと決める。

とは言えどのタイミングでしかけたものだろうか、とも考える。何か奴らの気を逸らすようなものがあれば――。

するとその時であった。何か遠くから飛んでくるナニかを団長は見た。それは真つすぐに盗賊の一人を目指し飛んでいき、そして。

「んぎゃあつ!？」

案の定盗賊に衝突、そのまま盗賊は倒れてしまった。他の盗賊も当然気が付き、衝突し倒れた仲間のもとに集まった。

「お、おい大丈夫か!? 何があつた!」

「きゅ、急に何かが……頭に……ぶつ、かつて。ほげえ……」

「し、しっかりしろお——っ!？」

倒れた盗賊はそのまま気絶した。

「何だってんだ一体!?! 何が飛んでき……ああ?」

気絶した盗賊のそばに落ちるものを見て他の盗賊は、素っ頓狂な声を上げた。そこにはピチピチと元気に跳ね回る一匹の魚型の魔物がいたのだ。

「魔物……魚の魔物だっ!?!」

「いや、それでも可笑しいだろ!?! どうして魚の魔物が飛んでくんだよ!?!」

「知らねえよ! だけど確かあっちの方から——ぎやぶう!?!」

「うわあ、またあ!?!」

魚の飛んできた方向を確認しようと顔を向けた一人の盗賊は、次の瞬間再び飛んできた魚の魔物と衝突。そのまま同じようにのびてしまった。

その突然の出来事に団長達も驚いた。離れた位置だったが魔物が盗賊に激突する所は、はつきりと見えていた。

(あっちの方角は、確か……いやそれよりも)

——好機だ。団長は、直ぐにそう思った。

なぜ魔物が飛んできたか、団長には何となく予想がついた。だがそれは後で良いだろう、と考えを隅に置く。まず優先すべきは、何よりも盗賊達だった。

「何かわからんがチャンス……!?! メドウ子!」

「言われなくつてもお!! メドウシアナツ!!」

「シヤアアアア——ツ!!」

盗賊達が飛んできた魔物に驚いている隙にメドウーサは、メドウシアナを一瞬で元の大きさにまで戻した。

急にこの場に十数メートルはあろう大蛇が現れたのだ。これに盗賊が驚愕したのは、言うまでもなかった。

「んっだああああ——っ!? ば、ばばば、化け物お——っ!?」

「こ、今度はなんなんだよ……!? 何だつてんだよ!?」

「愚かな人間達! 人間の言葉には、こんなのがあるんですってね…… 逃がした魚は大きい〃……アイツのよりもおっきい魚だったのに!!」

「な、なに言つて——」

「もう、問答無用よ! アンタ達全員石になっちゃえっ!!」

メドウーサの両眼が怪しく光る。そして次の瞬間彼女の瞳からは、紫の光線が放たれ何人かの盗賊に命中する。

「うわ……っ!? な、なんの光いつ!?」

「お、おい……お前その体!」

「え? ……え、ええっ!?」

光線が当たった盗賊は、直ぐに自分の身に起きた事に気が付いてはいなかった。だが仲間には指摘され自分の体を見て悲鳴を上げる。

「な、なんじゃこりやああ——っ!」

光線を浴びた盗賊は、身体が石化して固まっていた。正確に言うならば、身に着けている衣服のみが固く石に変化していたのだ。固まった衣服に拘束され、身動きの取れない仲間を見て盗賊達は更に慌てだした。

急な魔物の襲撃（？）に加え突然の石化。もはや盗賊達には、釣り人達から金銭を奪う考えは無く混乱と恐怖があつた。石化を逃れた盗賊達は、慌てふためき逃げ出そうとする。

「逃がすなメドウ子っ!」

「わかっているわよっ!! メドウシアナ、逃げ道塞いでやりなさい!!」

「シヤアア——……ッ!!」

メドウーサの指示を受けメドウシアナは、盗賊達が逃げようとした方向に移動すると逃げ道を塞ぐように体を横たわらせた。巨木の幹よりも太い身体は、容易く盗賊の行く手を遮った。

「全員捕えるっ!! 観光客の安全確保と盗賊退治同時進行っ!!」

「承知っ! ミリン、参ります!!」

「シャオラ、行くぜオラアツ!!」

「デイ、リイ、お前達も出番だ。他の釣り人達を守るぞ」

ミリンも抜刀し、B・ビイは再びマチョビイへと変身。ゾーイはデイ達を呼び出し釣り人達を守るように動く。

混乱した盗賊達は、逃げ道をメドウシアナに殆ど塞がれ別方向に右往左往と逃げ回る。だがすでにB・ビイ達が先回りし直ぐに盗賊を叩きのめされた。

そして逃げる盗賊の一集団は、団長達のほうにも向かった。

「化け物蛇と化け物女、黒いトカゲみてえな化け物っ!! 竜を連れてる化け物みてえな女、やたらつえー侍女っ!! なんなんだこいつらっ!?!」

「あっちだ!! あっちの半裸野郎は多分大丈夫だ!!」

盗賊達は、オロオロするコンスタンツィアと剣をなくしてシヨックを受けてる団長を見てそちら側に逃げようと決めた。だが一見ただの少女のメドウーサやゾーイが尋常じゃなく強いというのに何がどう大丈夫なのか。そのところは、盗賊達も混乱して最早危険の予測ができなくなっていた。

逃げる、ただそれだけが盗賊達の頭にあつた。

「だ、団長さん……!?! こ、こっち来ますよお!?!」

「やっば抜けたか。まあ数多いからな……ミスラ、コンスタンツィアさんのそばにいて

な」

「ミンツ！」

向かつてくる盗賊に対し、団長はすぐに盗賊を迎え撃つ構えをとった。だが、この時彼の手に武器はない。

（剣は水中……こんなことしたら冷えるの我慢しても探しやよかつたなあ）

落とした武器を拾わなかつた事を若干後悔しながらも、拳で戦う事には抵抗はなかつた。盗賊の半ば捨て鉢の攻撃は、団長には簡単に見切れる。適当に避けて殴り倒そうと思つた団長であつたが――。

「――ほれ、そつち飛んでくぞつ！」

「うが……つ!？」

突然声が聞こえたかと思えば、またも魚の魔物が飛来し盗賊の一人に激突。そのまま男は、氣を失つてしまった。

「すまんすまん、ちよいと竿に力が入りすぎてしまつたわい」

何事であろうか、団長もギョツとした。そして声の聞こえた方向をみれば、釣竿を保持つたヨダラーハがいたのだつた。

■

三 剣よ、竿よ、釣り人よ

別の場所で釣りに興じているはずであったヨダラーハさんがこの様に現れた事に驚きがあつたかと言え、もちろん無いとは言えない。

だが意外ではなかつた。先程から飛んでくる魚の魔物は、明らかに誰かが釣り上げ飛ばしていたものだ。では誰が？ と、なれば釣り上げた獲物を何度も正確に投げられる腕前を持つ釣り人、それは魔物が飛んできた方向から見一人しかいない。

「魔物まで釣り上げたんすか、ヨダラーハさん？」

「別に釣る気もなかつたがのう。こつちが騒がしくなつて魚が逃げちまつたわい。変わりに気が立つた魔物しか釣れんな」

銃声やら怒号。ヨダラーハさんのいた場所は、結構離れていたはずだが魚の方は敏感だつたようだ。

「釣つては投げてを繰り返したが、何匹かこつちに飛んでつたようじゃのう」

「狙つたんじやないんすか？」

「うん？ 何のことかのう？」

ヨダラーハさんは、惚けた様子を崩さない。まあ別に追及する気もないが。

「て、てめえ……爺っ！ さっきの魔物もてめえが!!」

そして盗賊達は、何度も仲間を魔物をぶつけた人物の正体がわかりかなりお怒りの様

子である。自業自得であるが。

「おお、すまんすまん。魔物を釣って焦って放り投げちまった！ 他の誰かにも当たつたなら悪いことしたのう」

「ふ、ふざけるなよ爺!?! てめえのせいよ……!!」

怒りに我を忘れると言うけれど、人間一度カツと怒ると優先すべき事を間違えるものだ。本当ならとつとと逃げるべきだろうに、盗賊は武器を手にヨダルラーハさんに襲い掛かった。

「こいつつ!!」

「おつと、危ない危ない」

「なっ!?!」

だがナイフを軽々躲したヨダルラーハさん。盗賊は簡単に攻撃を躲され驚いている。

「なんじゃ、こんな老いぼれ相手に必死になりおつて」

「この爺……つ!! これならつ!!」

「よっ! ほっ! そらどうした、ワシはこつちじゃよ?」

「ま、また……くそつ!! 一斉にかかれ!!」

突けど切れども当たらぬナイフ。業を煮やして盗賊達は、一斉にヨダルラーハさんに襲い掛かる。

だがヨダラーハさんと言うとまるで焦らず飄々としたまま。だが一瞬、その瞳が鋭い刃のように光るのを俺は見た。

するとどうか、まるで枯葉か蝶々か——四方八方からの攻撃にも関わらず、ひらりひらりと盗賊共の攻撃をヨダラーハさんは、難なく躲けてみせた。むしろそれを見ているコンスタンツィアさんの方が冷や冷やもので、盗賊の攻撃がヨダラーハさんに当たりそうになる度に何度も「ひゃあっ!？」と悲鳴を上げている。

「やれやれ……お前さん等、釣りには向かんようじゃ。そんな乱暴じゃあ魚も逃げちまうわい」

「うるせえ……！ 俺達は釣りなんてしに來てねえんだ!!」

「きつちつちつち……！ 釣りつてのは、何にでも通じるもんじやて……」

「舐めやがってえ!!」

棍棒を持ったドラフの盗賊が体重を乗せた重たい一撃をふるおうとした。

「そこで止めなよ、みつともない。お爺さん相手に何人も」

「ぐっ!？」

だが俺が横から手を伸ばし、ガシリと盗賊の手を掴む。盗賊のほうは、急に近くまで来ていた俺に驚いていたが、奴等はヨダラーハさんにばかり気を取られ俺の接近にまるで気が付いていなかった。

「半裸の小僧、てめえ!？」

「だから好きで半裸じゃねえっての!!」

「うぶっ!？」

カチンときたので拳を一発叩き込む。すると盗賊は、簡単に気絶した。

「ほう、ドラフの男を一撃か。お前さんやるのう」

「武器頼りの奴でしたからね。見掛け倒しですよ」

「ま、そうであろうな。武器を持たぬ者相手を脅して盗みを働く輩じゃ、身体なんぞろくに鍛えちやおるまい」

ヨダルラーハさんの眼がまた鋭くなる。

「だが奴さん等、まだ一度も人を殺めてはおらんな」

「わかりますか」

「うむ。だがこれ以上盗みを繰り返せば、何時かは手を血に染める日も来よう」

「なら今日で盗賊稼業は廃業してもらいますかね」

「それがいい。ほれ!」

「はい?」

不意にヨダルラーハさんが俺に向かって何かを投げた。反射的に受け取ったそれは、剣より細く、握っただけで何かすぐわかった。

「……釣竿？」

「ワシの予備のもんじゃ、剣がないなら使ってみよ。中々良い竿じゃぞ？」

「竿……竿ねえ」

剣も竿も握って振って——ヨダルラーハさんの言葉が頭に浮かぶ。

「ならやつてみるか。ヨダルラーハさん、何人かはそつち抜けると思うんでコンスタンツィアさんの方お願いします」

「うむ、ただの釣り人でいいならまかせよ」

竿を振れば鋭く風を切る音がする。しなりも良く、何よりも「丈夫」だ。これならば魚を釣るならもつてこいである。もつとも獲物は、魚は魚でも——。

「くそつたれ、なんでこんな事に……っ!？」

「もう自棄だ!! 構わねえ、やつちまえ!!」

下らぬ悪事に手を染めた「雑魚」である。

四 だけの釣り好き好々爺

団長がヨダルラーハから釣り竿を受け取るとそれを構えた。なんの変哲もない、本当にただの釣り竿だ。

釣り竿なんぞで——と、盗賊の一人は思った。馬鹿にされているのだと、舐められているのだと、そう思った。

既に盗賊達は、完全に自棄になっている。まわりはメドウシアナのような化け物だらけであり、流石に逃げられない事を悟っていた。だがならばせめて自分達を舐めた奴らに痛い目を見させる。それだけを考えていた。

「そもそもお前らさえ居なけりやなあ!! こんな、こんな事にならなかつたんだ……!!」
「そもそもって言うなら盗賊なんてしなきやいいのに」

「う、うるせえ!! 俺達に一番向いてる事がこれだつたんだよ!!」

「邪魔されて失敗する事考えてない時点で向いてなかつたと思います」

「ぐう……!! く、くそが……!!」

団長の言葉を否定も出来ずに盗賊達は、ただ口汚く苛立ちの言葉を吐き捨てた。

「今更あ!! 今更向いてないなんて言われてもなあ!! 俺達はもう盗賊なんだよ!!」

盗賊の一人が銃を団長に向けようとする。それに対し団長は、竿を剣のように握り、そして一瞬、差を握る腕がぶれて見えない速さで竿を振った。

「くらえ……えっ!?!」

「ヒュンツ!」と、風を切る音がした。すると次の瞬間、銃口を団長に向けたと思つた盗賊の手から銃が消えてなくなっていた。

「ほうっ!」

その時ヨダルーハは、強く唸った。彼には今起きた事がハッキリと見えていた。だが盗賊は何が起きたかはわからない。前に伸ばした手から一瞬で銃が消えたようにしか見えなかった。

「な、なんで……」

「これお探し?」

「あっ!」

盗賊はギョツとした。からかう様に喋る団長の手には、自分が持っていたはずの銃が握られていたのだ。

「な、なんの魔法だ!」

「魔法じゃねーやい」

団長はまたも竿を振った。あの「ヒュン」と風を切る音がある。すると次の瞬間、別の盗賊が手に持っていたナイフが消える。

「また消えた!」

「こっちさ」

「あっ!?! て、てめえそれ!!」

ナイフの行方を探ると今度もまた団長がそれを手に入れている。しかも今度は、釣り

糸の先にぶら下がっていた。

「まさか、引っかけて!? この一瞬で……!?」

「油断してりや簡単だよ。さあ、まだまだ……!」

団長がまたも竿を振る。それに気づいて盗賊達は用心して自分の武器を取られないように強く握った。だが団長の狙いは武器ではなかった。

振られた竿の先には、まだ奪ったナイフが引っかかっていた。そしてそのまま振られたナイフは、狙いを定めた猛禽類のように盗賊へ襲い掛かった。

まさに一瞬。『スウツ』と静かに素早く振り下ろされたナイフは、盗賊の体は傷つけずなんとその身に纏う衣服を切り裂いた。

「わあっ!? お、俺の服っ!」

「ベルトが切れ……あっだっ!」

「パ、パンツの紐が……ひえっ!」

ベルトやボタン、衣類を固定するためのものが切られた盗賊達。ズボンがずれ落ちこける者、パンツまでずれ落ちそうに焦る者。何人もが僅かな時間で動きを封じられた。

「さあ、それじゃあいよいよ逃げられないでしょ」

「こ、こいつ……!!? この半裸野郎ヤバイぞっ!」

「だから好きで半裸じゃねえよ!? ちくしょう!!」

団長は釣り針からナイフを外すと怒りの声を上げ、今度は盗賊達の脱げかけている服やズボンに目掛け竿を振った。

針は生地に食い込みそのまま竿を引くと、スルリスポスポと服が脱がされた。

「ぎゃあ——っ!? よ、よせ馬鹿やめろっ!」

「やかましい! さんざ身包み剥いで来たってんなら、剥がされる覚悟もあるんでしょーがよ!!」

「ねえよそんな覚悟……!! わああっ!? か、買い換えたばつかのズボンッ!!」

「貴様らも半裸になっちまえ、このやろ——っ!!」

団長怒りの衣服剥からの逃れようと盗賊達は、必死に衣服を抑え逃げ惑う。それでも釣り針に捕まるとどうしようもなく、服を押えたところでそのまま引き摺られ川辺の石や岩に体をぶつけた。

「お、俺の一張羅が引き裂かれた……!!」

「くそ、かまってられるかよ! そっちの女なら……!!」

「ま、待ってくれ俺も!」

この時三人の盗賊が、ズボンを抑えたり開き直って下着のままであつたりしながらも狙いをコンスタントツィアに向けた。おびえた様子の彼女であれば、盗賊らしく更に怯えさせ人質にもなると思つたからだ。

「華奢な娘程度ならあ!!」

「ひゃああつ!!」

「ミンツ！」

「つてつ!!」

だが盗賊がコンスタンツィアに近づくよりも先に、飛び出し盗賊に突撃したのはミスラだった。

「ミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンミンツ
!!」

「いて、いてててつ?! や、やめ……?!」

ミスラは盗賊の顔に体当たりをすると、そのまま体を大回転させながら何度も連続で体当たりを続けた。

ティーソーサー程度の大きさとはいえ、それなりに硬い歯車ボディで顔面を何度も素早く叩かれては、大人の男と言えど怯んでしまう。盗賊はなんとか手で振り払おうとするが、素早いミスラの動きに追いつけずジタバタするだけだった。

「何遊んでんだ馬鹿野郎！」

「くそ、俺達だけでも！」

「そうはいかんよ」

残った二人の前にヨダラーハが躍り出た。

「男が怯えた娘つ子相手に二人がかりか？」

「うるせえ！ 爺、てめえだつて許しちやおけねえんだぞ!!」

一人が奪われずに済んでいた予備のナイフを取り出しヨダラーハに襲い掛かる。それを見てヨダラーハは、「やれやれ……」とため息を吐いた。

「ワシみたいな爺なんぞにムキになって楽しいかお前さん」

「黙れ爺っ！ さつきみたいにはいかねえぞ、俺は仲間ん中で一番ナイフ使いが上手いんだ!!」

「そう言うのを何と言うか知つとるか？ 『井の中の蛙』、お前さん達の中で一番が世

界で一番と思うか？」

「……ブツさしてやる!!」

ナイフを振り回す盗賊。だが残った一人の盗賊は、そんなミスラ達にかまう二人の助けには入らずコンスタンツィアに向かった。

「てめえらはそこで遊んでな……俺はコイツを！」

「あわわ……ひやつ!! こ、来ないでくださーいっ!!」

「うおっ!! あ、あぶ……!」

盗賊に迫られ彼女は悲鳴を上げて尻餅をついたが、そばにある自分達の荷物を手当た

り次第に盗賊に向かい投げ出した。

「あわわ……!! ひゃああ!!」

「ちよ、やめっ!? あぶな……投げんのやめ!?」

「ひええ〜っ!」

「ぎゃっ!?!」

そして一際大きな荷物が盗賊の顔にぶつかつた。あまり痛くはなかつたが、妙な事に生臭い臭いを盗賊は感じた。

それもそのはず臭いの正体は、釣つた魚を入れていた籠だつた。盗賊の足元には、籠と魚が落ちてゐる。そしてそれは、ゾーイが使つていたものだつた。

「くそが、こんなもんで抵抗し……てっ!? いっだああっ!?!」

生臭い臭いに苛立つた盗賊だが、次の瞬間激しい痛みが顔中に走つた。

なんと盗賊の鼻先にゾーイが捕まえていたカニがいた。カニは盗賊の鼻をその鋭いハサミで挟みこんでいた。

急な鋭い痛みに驚いた盗賊は、ミスラが戦つてゐる盗賊の方へと悲鳴を上げながらヨロヨロと動く。慌てた彼は、自分がどこに向かつてゐるかわかつていなかつた。

「ミンミンミンミン……ッ!! ミイ——ンッ!!」

「でっ!?! あ、とと……」

そしてそのふら付く盗賊に気が付いたミスラは、渾身の力を籠め戦っていた盗賊に体当たりを食らわせると、ふら付く盗賊の方向にその体をのけ反らせた。

すると互いの事に気が付いていない盗賊は、そのまま近づいてゆき――。

「おべっ!？」

「んぎゃっ!？」

頭から激突。そろって倒れ気絶してしまった。そしてコンスタンツィアを救ったカニは、そそくさと川へと逃げ込んだ。

「ミンツ―！」

「は、はえ〜……！」

誇らしげなミスラ、そしてコンスタンツィアは、絶妙に都合の良い展開にキョトンしつつも安堵していた。

そしてヨダルラーハ、彼はナイフを振り回す盗賊の攻撃をヒラリとかわし続けている。

「きつつちつつち……！ あつちは助けはいらなそうじゃ。あとはお前さんだけのよう

じゃぞっ！」

「ちい……っ!！」

「ほれどうした、ナイフ使いが一番上手いんじゃない？」

「クソ爺が、避けてばっかで偉そうに……!! こいつっ!!」

「殺気が強い、振りも荒い、狙いも甘い、動きも雑。やはり釣りには向かん」

「なにが釣りだ、関係ねえだろう!!」

「きつちつちつち……。釣りは全てに通ずる。そんな乱暴なやりかたじゃ、こんな老いぼれ一人に傷一つ付けれんと言う事じゃよ」

「くそがあ!!」

「どれだけナイフを振つても攻撃は当たらない。苛立つ盗賊だったが、ここで攻撃を躲したヨダラーハが立ち止まる。」

「おっと?」

「攻撃を躲し移動した先に巨大な岩があった。この溪流地帯でも特に大きな岩だ。後ろを塞がれヨダラーハの動きが止まる。「今だ」と盗賊は思った。」

「——殺気が強くてなんだと言うのか。振りが荒いだと? 狙いが甘いだと? 動きが雑だと? ならば、言われた通りにしてやる。お前の体にこのナイフを突き立ててやる。それだけだ。それだけを考えてぶっ刺す!」

「盗賊は自然と腰を落とし片手で持っていたナイフを両手で握った。振り回すのではなく、直線、真つ直ぐ、ブレない一撃。一気に突き刺してやろうと考えた。」

「くらえやあ!!」

「むっ?」

走るでもなく、地面をけって弾丸のように飛び出す。両手で握ったナイフの切っ先は、明らかにブレが抑えられていた。そして腕を伸ばし一気にヨダラーハにその切っ先を差し込もうとする。

だが次の瞬間――。

「今度こそ、刺さ……うっ!」

肉を突き刺す感触があるはずだった。だがその感触の変わりに感じたのは、硬い硬い岩にナイフの切っ先がぶつかった感触。

それだけではない、盗賊は突然ナイフの先が重たくなったのを感じた。それもそのはず、盗賊が突き出したナイフの先、その切っ先になんとしたことがヨダラーハがつま先一本で「そつと……」立っているのだから。

「言ったじやろう、傷一つ付けぬと」

盗賊はその時ドツと汗をダラダラと流し、切っ先から自分を見下ろすヨダラーハを見た。

ハーヴィンの年寄りでしかないと思つた相手、それが急に山のような巨人に見えた。「井の中の蛙」どころではない、自分はこの「巨人」の手の中で遊ぶ子供でしかなかった事を悟つた。

「だが最後は悪くなかったぞ。案外見込みがあるかもしれないのう」

「……な、なにもんだ……爺」

「きつちつちつち……見ての通り、ただの釣り好きの爺じゃよ」

ヨダルラーハは、ニヤリと笑うと更に切っ先を蹴る。「トン」と上がると盗賊の頭に足をかけ、さらに蹴り上がる。頭を蹴られた盗賊は、「うわっ!？」と叫びながら岩に激突した。

「人間若ければ一度ぐらい道を誤る事もあるうて。だが肝心なのは、それを自身で正せるかじゃ。ナイフ使いに真に自信があるなら一から鍛えてやり直してみせい。あの最後の突き、ケチな盗賊にやもつたいたいないわい」

「……は、はは……そうか、よ……」

——次無事に娑婆へ出れたらそうしてみるか。

盗賊はどこか吹っ切れた様子で気を失った。

「……奪うだけでは、本当に必要なものを得る事はできん。反省の中で奪う以外の道を探め」

「ヨ、ヨダルラーハさあん……」

「ミンミン」

どこか悲しげな表情で気を失った盗賊を見るヨダルラーハ。そのそばに少し腰の抜

けた様子のコンスタンツィア達が近寄ってきた。

「おお、娘っ子達。無事のようじゃな」

「は、はいなんとか……それより……これは、もう」

「うむ、終いじやろう」

ヨダラーハ達が視線を向けた先には、完全に無力化された盗賊達がいた。

メドゥーサに衣服を石化され動けぬもの、メドゥシアナに啞えられて宙ぶらりんで泣き叫ぶもの、B・ビーに締め落とされているもの、ミリンとゾーイの攻撃で気を失ったもの。そして、団長によって身包みはがされ戦意を喪失したもの。

「皆さん凄……それに団長さん、釣り竿なんかで……す、凄いですう」

「うむ、ありや確かに筋がええ。だがまだまだ伸びるぞ……きつちつちつち！ 確かに

聞いた通りじゃ」

「え、ヨダラーハさん団長さんの事ご存じだったんですか？」

「なあに、噂で聞いた程度じゃよ、噂で」

意味ありげな事を語るヨダラーハに対し首を傾げたコンスタンツィアであつたが、ヨダラーハは、笑つてごまかした。

■
ともあれ盗賊団の命運は、今ここで尽きたのだった。

五 団長の服、暁に散る

「もし次こんな下らない事してみなさい、アンタ達全員石にして川に沈めてやるからっ
！」

「や、やめてくれえ!？」

「悪かつたよお——!!」

メドウ子が服を固められ動けない盗賊達を脅している。まだお怒りで青筋ピクピク
な彼女の様子に、もう盗賊達は悲鳴を上げるしかない。

当たり前だが今彼らは、彼女がただの少女など誰一人思っていない。メドウ子には、
今言った事を実行できる力があり、それを目の当たりにしたのだから。

「脅すのは程々になメドウ子。もう十分ビビっちまつてるよ」

「なによ、別に本当にそうしてもいいのよアタシは」

「それはやり過ぎ」

「フンだっ!」

結局魚を逃がしたのを相当気にしてるらしい。川に沈めるとまではいかないが、こ
うやって怒りを示さない事には憂さも晴れないようだ。それに実際盗賊のせいで魚も逃
がしてこんな事態になっている。悪事を働いていた以上俺も同情はできん。

「悪い事すつからこんな目に遭うんだよ、ばかちん」

「わ、わかった！ 悪かった！ 反省する！ 反省するから、せめてズボンだけでも返してくれえ!!」

俺が奪つて釣り針に引つかかったままのズボンを返して欲しいと懇願する盗賊。もう十分肝も冷えた事だろう、ここから更に悪足掻きをしようなんて考えるやつはいない。

それよか気になるのは、ヨダルラーハさんの俺を見る視線だ。

(な〜くんか今……ヨダルラーハさんの目が、ばあさんっぽくなつたんだよなあ。やつばあつち側なのかなあ……)

何か予感と悪寒を同時に感じる。なんと言うかロックオンされた気分だ。

ただでさえ今日は、釣りをして帰るだけのレジャーだったはずなのにこの有様だ。これ以上の面倒は御免である。

「……考えんのやめよ。よつしや、みんな撤収準備。全員ふんじばつて衛兵さんに突き出すぞ」

「ちよつと、アタシの魚はどうなるのよ!?!」

いつの間にやら釣り竿を持っているメドウ子。どうやら魚を諦めきれず釣るつもりらしい。

「……いいや、今からは無理じゃねえか？」

「わっかんないでしょ、やってみなくちゃ！」

「きつちつちつち！ その負けん気は嫌いじゃないのう」

竿を振り回すメドウ子の傍にいつの間にもやらヨダラーハさんがいた。

「どうせ撤収にしても盗賊共縛つたり多少時間があるう？ その間こつちはワシが面倒を見ておく、好きにさせてみたらどうじゃ？」

「……まあそれなら」

メドウ子一人だと釣れないかもなのと、諦めきれず更に粘ろうとするかもしれん。ヨダラーハさんがいれば何とかなるだろう。

「ただこれだけの騒ぎがあつた後じゃ、当然魚達も警戒しておる。釣れなくても我慢するんじゃぞ」

「子供じゃないんだからわかつてるわよ」

メドウ子の言葉に（どうだか……）と思わずにはいられない。コイツの場合完全に「精神年齢Ⅱ見た目」である。

取り合えず釣りのリベンジは、ヨダラーハさんに任せることにする。こちらは盗賊達の拘束作業に移る。しかし人数が多いので「メドウシアナに啜えて貰って運べないかなあ」等と考えていると――。

「あ、ああっ!! ああああ〜っ!!」

コンスタンツィアさんの悲鳴が聞こえた。

「何事ですか!?!」

「あ、あの……団長さん……!」

コンスタンツィアさんは、悲痛な顔を俺に向けた。「まさか盗賊の仲間がまだいたのか?」と思わず身構えたが、どうもそういう様子ではない。

すると彼女はプルプルと震える指先を一方に向けた。

「い、いれ……!」

「これ?」

指さす先をみるとそこは、俺達が焚火を起こした場所だ。そう言えば急な盗賊の襲撃に驚いて消すのを忘れていた。火の始末はしっかりしないとである。

——なんて事を考えていたが、よくよく見ると何かおかしい。

と言うか、俺の服を乾かしてたのに無い。

と言うか、なんか燃えてる。

と言うか、服は無いのになんか燃えてる。

と言うか、もうほぼ燃えカスしかない。

「……………はっ!」

「そ、騒動の時……何かの拍子に火の中に……」

「ミーン……」

「お、俺の服……」

燃えている。

「だ、団長さん……気の毒な」

「ティアマト達が聞いたら大爆笑だなこりゃ」

「悲しいかなそうだろうなあ」

俺の服が、燃えている。

「俺のふくう——っ!？」

山中に響く俺の悲鳴。この騒動最後にして最大の犠牲は、俺の服であった……。

■

六 針無き釣り糸

■

盗賊の捕縛後、街に戻った俺達であったが街でこちらに向けられたのは、奇異の視線であった。

山から下りてくる盗賊達を捕えた集団。それだけならまだしも、その捕えた盗賊を啜えて現れる大蛇メドウシアナと言う存在がまたでかい。そしてマツチヨなトカゲモド

キまで盗賊達を担いで運んでる上その先頭を行くブランケットを腰巻にした男がいるのだから何が何やらである。もはや俺達の方が不審者だ。

そのあと駆け付けた衛兵が「どつちを捕まえればいいんだ」と途方に暮れていたのは、実に印象深く申し訳なかった。

「——ッ!! ——ッ!!」

「笑うんじゃない!!」

そしてエンゼラでは、今回の事を聞いたティアマトが声にならないまま腹を抱えて爆笑していた。

「フクガ、服ガ燃エ……ッ!! ソレデ腰巻ツテ……ッ!!」

「他に変え無かったんだよ……!」

エンゼラで半裸で戻って来た俺を見て直ぐ「ああ、どうせ何かあったんだろうな……」と直ぐ察した察しの良い我が仲間達であるが、
「団長の服焼失」と言う展開を聞くと何人かは思わず吹き出していた。

そしてティアマトは、相当ツボに入ったのかまるでルドさんのように笑い続けている。俺が一度着替えてからもまだ笑っている。

「うふ、ふふ……! な、なんだか親近感覚えてしまうな……ははは!」

「覚えんていい、覚えんていい」

妙な親近感を抱きだしたルドさん、これ以上こんなキャラ増えられても困るぞ俺は。

「もういい加減笑うのやめい」

「超見タカツタ……!」

「うるせい」

俺は見世物ではないのだ。

「お前には、塩焼きやらん」

「ア、・ソレハ嫌ダツ!! スマンツ!」

だがうちの団員は、大抵食い物に弱い。こんな時食い物を取り上げれば素直になる。

そしてティアマトも思わず謝り欲しがる魚の塩焼き、勿論俺達が釣った魚で作ったものだ。

ヨダラーハさんの指導の下釣った魚の数は、かなりのもので今日の夕飯には十分な数だ。その分調理は大変である。とにかく魚は、捌いてあれこれ処理が必要だ。それに全部今食べ切るつもりもないので、何匹かは保存が出来るようにもしなければならぬ。

後はとにかく大人数が各々食えるように……と考え、とりあえず捌いて塩を塗した魚を使い、甲板でバーベキュー形式で食う事にした。これなら各自自分で串を刺して焼いて勝手に食える。しかも火種は、コロツサスが生み出した火だ。それを使って炭に火を

入れた。火の星晶獣による炭火焼き、もし売ったら結構需要ありそうだな。

「食堂でもいいけど、甲板で食うつてのも良いもんだなあ。炭火でも煙や臭いも籠らない。航行中じゃ風で無理だけど」

「しかしすまんのう。ワシまでご馳走になってしまつて」

そしてそんな魚と一緒に魚を食べるご老人、ヨダルラーハさん。

この人には、自分達も世話になった。あんな騒動があつて、直ぐにサヨウナラもあれなのでせつかくだからと艇に呼び食事に誘つた。

「気にせんで下さい。ヨダルラーハさんが居たから釣れた魚ですよ」

「なあに、釣つたのはお前さん達自身じゃよ。どうじゃ、覚えれば面白かつたらう？」

「そうつすね」

確かに釣りは楽しかった。この際盗賊の件は、思い出さんようにする。

始めは釣れなくても良いかと考えていたが、やはり釣れたらその方が良い。そう思つたのは俺だけではないだろう。

「まあアタシの手にかかればね？ 魚釣るのなんて簡単なのよ」

「ほー？」

「もうね、最後は手加減してやつたぐらいよ。別に人間の事なんてどうでもいいけど、川の魚全部獲っちゃ悪いでしょ？ 他の人間も来るつて言うからねえ、まあ偉大で慈悲

深い星晶獣のアタシは、ね？ そののところが氣遣えるのよ」

「ふーん？」

「あー司つちやうわねー、もうこれアタシ釣りの星晶獣司つちやうわねー」

「へー？」

満足げなメドウ子が鼻高々にして、釣りの腕前自慢をしている。盗賊退治の後で行われたリベンジでは、彼女はかなりの成果を上げて見せた。

ただ別に彼女の釣りの腕前が凄いわけではなく、殆どヨダラーハさんの指導と釣れるポイント指示のおかげである。

まあヨダラーハさんの言葉を借りるならば、*“釣ったのは、俺たち自身”*。確かに釣ったのはメドウ子自身によるものだ。

もともと話を聞いているカルバさんは、釣りの内容には興味がないらしい。適当に相槌を打ちながら魚を食べていた。

「調子のいい奴」

「きつちつちつち……！ まあよかろう。自慢したいほど楽しめたなら教えた甲斐もあると言ふもんじゃないよ」

「そう言つてくれると気も楽ですわ」

「それに他の団員の者達もいい。皆良い目をしとる」

ヨダラーハさんは、食事と団欒を楽しむ団員達を見て笑う。

視線の先には、ユーリ君やミリンちゃん、他にも若くまだまだ伸びしろのある者達がいる。

「皆若く、強く、志がある。誰もが光る原石じゃ」

「ただの『釣り人』の言葉とは思えませんなあ」

「なあに、腰から下げた剣。あれの使い込み具合をみりや大体わかるもんじゃて。剣も竿も——」

「——『握って振って』、でしよう?」

「きつちつちつち! セリフとられちまったわい!」

しかしただの釣り人は、腰から下げた剣なんか態々見やしないとと思うけどもね。

「じゃがこの仲間達と『星の島』か。随分と大きく出たのう」

ヨダラーハさんには、食事の合間に俺達の旅の目標である『星の島到達』を話してある。基本的に『与太話』で終わる内容だが、ヨダラーハさんに俺達を馬鹿にした様子はない。

「ま、約束なんで」

「約束?」

「妹分がいてどっちが先に星の島行けるか競走中つす」

「きつちつちつち！　そうか、まだおつたかつ！　空の果てを目指すもんが！」

呵阿大笑するヨダラーハさん。やはり嫌味な感じはない。

「良い話を聞いた。久々に楽しませてもらったわい」

「楽しいですか、今の話？」

「うむ、何より今日一日愉快じゃった」

「愉快ですか……」

愉快と言うには、いささか面倒事が多かったと思うのだがそれは……。

「うむ、愉快愉快！　こんな愉快的な騎空団そうそう会えん」

「うーむ、反論が難しい」

「それに『大物』も見つけたからのう」

「大物？　何かデカいの釣ったんで？」

今日しばらく一緒に行動したが、ヨダラーハさんが大物を釣った記憶はない。魚を

入れたズタ袋にも、特に特筆するほどの大物はいなかったはずである。

「ああ、大物も大物。しかもまだまだ大きくなる」

「まだまだ……？」

「その通り。まだまだ……まだまだ、のう」

そう話すヨダラーハさんの目。その鋭い瞳。それが俺を見据える。

ああ、まずい。いけない、これはいけない。同じだ。ばあさんと同じ目。ばあさんが俺を鍛える時にしていた「あの目」だ。

「あの、何を考え——」

「のう若き団長さんや。一つこの命の頼みを聞いちやくれんか？」

「……き、聞くだけなら」

「まあそう身構えんでええ。実は故あつてワシは、あちこち旅をしておる。星の島に行くついでに、お前さんの艇に乗せちやくれんか」

「……その「故」つてのは、一先ず聞かんでおきます」

「スマンな」

どうせ碌なことではあるまい。藪蛇藪蛇。

「もちろんタダでは言わん。見返りは、そうじゃな……お前さんや、他の奴らにも「釣り」を教えてやろう」

「「釣り」、ですか」

「ああ、「釣り」じゃ」

釣りを教えるから船に乗せてくれ。それは普通に考えれば割に合わない見返りだ。だが——。

「まあ……水のあるところで食料を獲らないといけんこともある、か」

何よりも技術と言うのは、時に物より重要だ。まあ、この人の場合そう単純でもないだろうが。

「釣り以外も手伝ってもらう事もあると思いますが」

「もちろんじゃ。爺に出来る事ならなんでも手を貸そう」

「……なら、まあ。よろしく、つてことで」

「うむ。感謝するぞい」

旅に同行する仲間として握手をしておく。男性とは言えハーヴィン特有の小さい手であるが、その手は力強く俺の手を握り返した。

「……本当に随分と『竿』を振ってきたようで」

「うむ。長い事な」

この手もそう、ばあさんと同じ手だ。力強くもしなやかな手。

「元氣かなばあさん……いや、元氣だらうな絶対。」

「一つ、雑談を良いですか?」

「うむ、かまわんよ」

「……貴方に会った時、竿の振り方に既視感を覚えました」

「ふむ?」

「もちろん初対面ですが、竿の扱い……それに覚えがあつた。ちよつと前に戦つて捕ま

えた盗賊団で用心棒をしてた剣士です」

「……ほう」

ヨダラーハさんの表情は変わらない。

「……盗賊の用心棒とは、劍の振り方を誤ったな。そやつにもし……“師”がおつたなら、余程弟子を育てるのが下手な者だったんじゃないな」

「……仮に居たとしても師匠のそこ離れてからの事は、劍を振る本人の責任ですよ」

「そうか……そうかもしれん」

「まあ、それだけの話ですがね」

まあその男も今は秩序の騎空団が面倒みてるだろう。無事更生する事を祈る。

「じゃあ明日改めて艇に来てください。宿とつてるでしようし、荷物の整理とかあるでしよう?」

「そうさせてもらうかのう。まあ、荷物なんぞちよつとの路銀に釣り竿ぐらいなものじゃがのう! きつちつちつち!」

「あはは……まあこちらも部屋の方用意とききます」

「あら、団長。おじいちゃんやつと仲間になったの?」

仲間になるにことでの準備について話していると、飲み物片手に満腹で上機嫌のマリーちゃんが現れた。

「まあそうだけど……「やっ」と「って」になにさ」

「だって連れてきた時点で新しい仲間って思ってたし」

「確定事項かよう」

「それにティアマト達もう歓迎の準備してたわよ？」

「オイ、続キハ食堂デ飲ムゾッ！」

「準備万端にやっ！」

何時の間にやら両手に酒瓶を持ったティアマトとラムレッダが甲板出入り口から顔を出していた。

「飲みてえだけじゃねえか!？」

「でしようね」

あの飲兵衛共、既に魚と一緒に飲んでるはずだろうに。二人とも顔が真っ赤ではないか。両手に酒瓶なんぞもって、これ以上飲んだらまた二日酔いに……。

「いや……待てお前ら、その酒瓶見たことねえぞ何時買った!？」

「さつき追加で買って来たにや！」

「酒の勢いで酒増やすんじゃねえ!!」

「ひい!?! ご、ごめんにやさい……!」

「オイ爺サン、マダ飲メルカ？」

「おめえはちった聞けよ話!」

もう酒が回った星晶獸(笑)は質が悪い。もう俺の声など微風程度にしかならないだろう。

「無理に引き留めんな。ヨダラーハさんも明日の準備がだな……」

「なあに気にせんでええ。今も言ったがどうせ荷物なんぞ釣り竿ぐらいじゃ。それにこの島の酒は、辛口の清酒が有名……それを手に入れたなら“骨酒”を作るのもよいな」
「ナンダソレ?」

「魚の骨や鰭を焼いて酒に入れるもんじゃよ。出汁が出てスープみたいになって美味しいぞ」

「絶対美味イヤツジャンツ!」

「優勝するヤツにやあ!!」

「身を入れる場合もあって、島によつてやり方は変わるがどれも美味しい」

「熱燗ノ準備ヲシロオ!」

「早速作るにや作るにやあ〜!」

「妾も混ぜろ! 魚に肴、どちらもまだまだあるぞ!」

『かかっ! いいぞいいぞ、私の胃も温まってきたわ!』

飲兵衛共達が集まりだす。主に星晶獸(笑)。こうなると暫くは飲み続けるだろう。

もう俺の手には負えん。

「……肝臓傷めない程度にしるよなあ」

「あ、団長諦めた」

言わんでくれマリーちゃん、俺はもう今日は疲れた。眠い。後は大人と星晶獣(笑)で盛り上がりたてくれ。

——その後甲板の片付けだけ終えて俺はベッドに潜り込んだ。食堂からは、時たま部屋まで賑やかな声が聞こえた。

そして次の日。ヨダラーハさんは普通に宿に戻ったらしいが、案の定と言うべきかティアマトとラムレッタが食堂で酒瓶抱いて眠りこけていた。

「部屋で寝ろっ!!」

「ムニヤムニヤ……モウ飲メナイヨ……」

「飲めてたまるか阿呆。寝ぼけてんなら顔洗って部屋に——」

「にやあく……団長きゅん、おぶつてえ……」

「のしかかな! あーもう、酒臭いつ!!」

「……うつぶ!?」

「おい……おい、馬鹿おい!! のしかかったままは止め——」

ヨダラーハさんを団に迎える朝。その日最初の仕事は、酔っ払い共の面倒と後始末

であつた。

少し違う空編 III

アナザーストーリー 星晶戦隊（以下略）デジタル革命!!

■ 一 “団内で過去の超技術を利用したガジェットが流行した”の巻

ある日の事、シエロさんに「頼みたい事がある」と呼び出された俺達は、待ち合わせの島に向かった。

島であつたシエロさんは、いつも通りのニコニコ笑顔。その傍には大きめの木箱が置かれていた。

「突然お呼びして申し訳ありません。団長さん達の所が頼みやすい事です……」

「気にしないで良いですよ。それよりどんな依頼です?」

「依頼、と言えば依頼なんですがあゝ」

シエロさんは、木箱を開けるとその中から薄い金属製の板を取り出した。

「これを団長さんと団員の皆さんに使ってほしいんですよ」

「これを? いやそれよりもなんですかこれ?」

一枚受け取ったその板は、見慣れぬものだった。金属製のボディにガラスの面がある。

「上のスイッチを押してみてください」

「スイッチ……これっすか？」

言われるがままにスイッチらしき出っ張りを指で押す。カチともポチとも違う感触で押し込まれたスイッチ。すると急にガラスの面が明るく輝いた。

「おおっ!？」

ガラスの面は、明るいだけでなくなると絵まで浮かび上がりだした。

「シエ、シエロさんこれは……」

「詳しく説明すると長いんですがあ……」

シエロさんが言うには、この板——“タブレット端末”と呼称される物は、断片的に遺された星の技術、更には月の技術等を流用し作られた物だという。

驚いた事に写真のように風景を写し取り、それだけでなく同じ端末を持つ人間とそれを共有し“チャット”と言う簡単な連絡のやり取りまで出来ると言う。

そしてここにあるのは、シエロさんがいろんな技術者と協力して作った試作品群とのことである。

「機能としては話した通りですが、まだ通信に関しては精々騎空艇内が精一杯でして」

……。量産の用途が立って将来的には、空域内の島々にタブレット同士を結ぶ中継スポットを設置して離れた島での連絡も可能にしたいところですねえ〜」

「いやいや、十分すげえっすけど」

「とりあえず団長さん達で暫く使って感想を聞いてみたいというわけなんですよ〜」

「暫くと言うと？」

「そうですねえ〜……皆さんが操作に慣れて、諸問題がわかる程度ですからあ〜……一月ちよつとと言う所でしょうかあ〜」

「ふむ」

成程、と頷く。つまりはお試し、テスターになってくれと言う事だろう。

「それは良いんですけど……うちの連中こう言うの最悪壊しますよ？ 俺弁償とか勘弁したいんっすけど……」

「そこは大丈夫です〜！ これを作られた方達も団長さんをご指名でして〜。なんでも「星晶戦隊（以下略）が使って問題ないなら大丈夫だ」らしく、余程意図的に破壊したなどでない限り、壊れてもそれは「改善すべき問題」という事で済みますから〜」

それは何がどう大丈夫なんだ……。

「それと一応試作品ですから、あまり色んな騎空団に貸し出しも出来ないのですね……すでにジータさんの所にも貸し出してはるんですが、今のところジータさんの所と団長さん

達の所が一番信用できると言う理由もあるんですよ」

「……まあ特に損もない事ですし、わかりました。引き受けましょう」

「助かりますう〜！」

てなやり取りがあつたりしたのだ。

■

二 デジタル革命

■

「ちゅーわけだ。人数分あるから各々好きに使つてくれ」

「雑ダナ〜説明ガ〜」

配られたタブレット端末を見ながらティアマトがブツブツ言う。だが俺だつてこの機械について知つてる事など大してない。

「俺が皆に望むのは、ただただ『壊すな』それだけだ。それ以外は、俺だつてよく知らんもん。だから説明しようもない」

「まあ、船内限定とは言え離れてても連絡できて、このレンズで……カメラにもなるつてことよね？」

タブレットを受け取つたマリーちゃんが、不思議そうにそれを見ながら確認する。

「シエロさんの話ならな。確か……なあコロッサス」

「(・ω・) ウン?」

「ちよつとピースして」

「ン? (*・ω) y コウ?」

「そうそう……ほい、一枚」

「カシャ」と、レンズが落ちる音がした。すると直ぐにタブレットの画面にピースサインをするコロツサスの姿があった。

「こんな感じ」

「おお〜っ!! なにこれすっごいじゃん!」

「ナンカ (*・ω) 、 テレル」

思いの外鮮明に映ったコロツサスの姿を見て、カルバさんが興奮した様子で身を乗り出した。

「容量がどーとかで、保存できる枚数は大体二、三十枚が限度ってところらしい。あとは、画面を操作すると内レンズに切り替えれるとか……で、自分を撮る事もできるとさ。」

「自撮り」って事だな」

「なにそれ、アガるっ!! ちよお〜いいじゃんっ!! ねね、だんちよ、それどうやんの、どうやんのお〜!! (。≡▽≡) ノノ」

「落ち着きなさい」

「は〜い！」

食い付きそうと思ったクロエちゃんが案の定食い付く。好きだよねこういうの。

「枚数制限あるのね……絵の資料とか溜めれると思ったけど」

「試作だしね。ただ撮影した写真を『印刷』する機械も作ったらいいすよ」

「それ本当？」

「まだ小型化が難しいのとそつちも試作なもので、まだまだ品質が保証できないらしいけどもね。一応それでいいなら、シエロさんのところ立ち寄って印刷してくれるらしいです」

「それは……ぜひお願いしたいわね」

絵描きにとつて願ってもない機能だったのだろう。ルナル先生の目は燃えていた。

その後タブレットの操作説明書を配りながら、シエロさんに聞いた操作方法を説明する。

「各々使い方は大体把握したね？ わからんきや説明書読むか分かるやつに聞いてな」

「も、文字の打ち込みが……た、大変だねこれ……」

「そこは慣れだ」

「キーボード」と言う文字盤が画面内に表示されるが、それを操作して文字を打ち込むことになる。殆どが初めての操作なのでセレストなんかは、結構苦戦してる様子だ。

「団長、船内での連絡については？」

「おっと忘れてた」

コーデリアさんに指摘され、一番重要なことを言い忘れていたのを思い出す。

「みんな“ホーム画面”に“シエロチャ♪”ってマークあるのわかる？ それ押してみ」

皆が俺に言われた通りそれを押すと画面には「シエロチャ♪」とロゴが表示された。

「なあ団長はん……これ」

「シエロさんのところで開発したトークソフ……ソフト？ の意味は、よくわからんけど

“シエロチャ♪”って言う、これで短文書き込んでお喋りするトークツールだそうです」

「シエロはんは何でもやるなあ……うちも負けてられへんわ」

シエロさんの手の広さにカルティラさんは、ライバル心を燃やすのと同時にちよつと呆れてた。

「んで、みんなのタブレットは大体設定済みだから……開いた画面の“グループ・星晶戦隊”を選んで」

予め作ったグループのアイコンを押すと、画面が何もない通話画面に移り変わった。すると画面には、一斉に俺の「団長が入室しました」を始めとして皆の名前で“入室”

表示が映りシャルロットさんが首をひねった。

「これはなんでありますか？」

「ここがグループのトーク、通話の画面。今俺達はここに“入室”したわけです。んで、試しに俺が適当に……えーと“テスト”“見えてますか”“つと”

一言単語を入力しそれを送信。すると数秒たって全員のタブレットから“シエロ
ンツ”“と音が流れた。

「……今のなんなん？」

「通知音だそうです」

「シエロはんの声やったけど」

「テストで入れたとか。音声は消したり切り替えもできますよ」

「ようやるわ……」

「それで、みんな俺の文字見えてる？」

動作に問題がなければ今俺が送った文字がみんな見えているはずだ。

「はい、問題なく見えております！」

「凄いな团长っ!! どうやって俺の方に文字を送ったんだっ!!」

「うん、俺も良くわからんから技術的な質問はやめてな」

「フェザー殿、この板の中に誰でもすぐ書き込めてすぐ見れる掲示板がある思えばいい

かと」

「なるほど……!! 何となくわかったぜっ!!」

ユーリ君は、理解が早くて助かる。フェザー君は、返事が元気だけど本当にわかってんのかな。

「これで船内なら誰でも文字での情報のやり取りができるわけ。誰かが見たら、見た人数分”既読”がつくんで、見た事は確認できる。でね……これ、画面下の四角、写真のマークだけどこれ押せば……ほいっと」

続けて俺は先ほど撮ったコロツサスの写真をグループに送る。すると皆のタブレットにもコロツサスのピース写真が映し出された。

「こんな風にな」

「わ、わわっ!! 自分の画面にもコロツサスさんが写ってるです!」

「(つω、*) テレルヨォウ♪」

「悪い悪い。けどま、こうやって写真も共有できるって事さ」

勝手に写真を使ったのを詫びながら、グループ上からコロツサスの写真を削除すると、そこには俺の打ち込んだ文字だけが残った。

そして会話を打ち切り、グループを出ると皆の画面には【団長が退室しました】と出る。

「これが『退室』。またみんなに連絡したいことがあれば入室すれば良いし、自分達でグループ作って話したりもできる。だから趣味のグループ作るのも良いし色々できるわけ。それじゃ各々好きに使ってな。ただし最初に言った通り壊すなよ」

「よろず屋ハ、壊シテモ大丈夫ツテ言ツタンドロ」

「だからって壊していいわけあるか。わざわざ壊すなよマジで」

「ウイウイ」

大丈夫かなこの星晶獣（笑）……。

「まあ同じ艇だから態々これ使ってグループで集まる人数多かないだろうが、感想や問題点言える程度には、使用してくれ。壊しさえしなきゃ遊び感覚で良いから」

「ね、念押しね団長……」

「押しさ……そりゃあ」

ともあれタブレットは配った。後は皆が操作に慣れて問題なく使用してくれるのを俺は祈るのみだ……。

■ 三 グループ一星晶戦隊（通常グループ）

【マリーが入室しました】

マリー ・ 「やっほー誰か見てる？」

【団長が入室しました】

【B・ビイが入室しました】

団長 ・ 「ん」

B・ビイ ・ 「ん」

マリー ・ 「んってあんたら……」

団長 ・ 「ごめん、とりあえず返事した」

B・ビイ ・ 「オイラも」

マリー ・ 「まあいいけど」

【ガルーダが入室しました】

マリー ・ 「あら、意外なのがすぐ来た」

団長 ・ 「操作大丈夫か？」

ガルーダ ・ 「ガルーダです。台ジョブです」

マリー ・ 「のじゃちゃんか、のじゃのじゃ言わないっ!？」

団長 ・ 「まあ画越しだし」

B・ビイ ・ 「あとちよい誤字&脱字ってるぞ」

ガルダ ・ 「僧ですね。住みません」

マリ ・ 「……それにしたって違和感凄いわね」

団長 ・ 「誤字つた上に予測変換入れたな。入力して出てきた文字押したる？」

ガルダ ・ 「配送です」

B・ビィ ・ 「笑うわこんなん」

マリ ・ 「やばい、真顔でのじゃちゃんが片言で喋ってる風に見える」

ガルダ ・ 「違い増す」

マリ ・ 「予測変換やめてっ!!」

ガルダ ・ 「肺」

団長 ・ 「わざとかな？」

ガルダ ・ 「わざとジャスティス」

マリ ・ 「ジワるから止めてっ!!」

【メドゥーサが入室しました】

メドゥーサ ・ 「タワシが来たわよっ!!」

マリ ・ 「誤字っ!!」

B・ビィ ・ 「畳み掛ける誤字の嵐」

団長 ・ 「台所用品司るな」

メドウーサ・ 「は？ 何言てrr」

メドウーサ・ 「違うから」

メドウーサ・ 「アタシ!! アタシが北だからっ!!」

B・ビィ・ 「十二神将志望かな？」

団長・ 「狼狽える姿が目に見えるようだ……」

メドウーサ・ 「忘れて」

メドウーサ・ 「ねえこれ消すのどうやんのよ!?!」

団長・ 「タワシを司る偉大なる星晶獣」

B・ビィ・ 「活躍は台所」

マリー・ 「世の奥様に人気」

ガルーダ・ 「頑固な汚れに強い」

メドウーサ・ 「わーすーれーてーっ!!」

メドウーサ・ 「アタシはタワシじゃないのっ!! あんた達、なに息そろえてんのよ!?!」

メドウーサ・ 「て、なによ? のじゃ子も来てるじゃない。操作大丈夫なのあんた」

ガルーダ・ 「兵器です」

団長・ 「もう無茶苦茶だな」

マリー・ 「……メドウー子ちゃん?」

団長 ・ 「来たと思ったら急に途絶えたな」

ガルーダ ・ 「どう舌んでしようね」

マリー ・ 「だからっ!!」

メドゥーサ ・ 「すみませんメドゥーサ笑い転げてます」

マリー ・ 「……ん？」

団長 ・ 「ん？」

ガルーダ ・ 「ん？」

メドゥーサ ・ 「みなさんの会話見て、ガルーダさんの言葉で笑ってる」

マリー ・ 「え、誰？」

ガルーダ ・ 「名前はメドゥウ子に鳴ってる」

団長 ・ 「……もしかしてメドゥウシアナ？」

マリー ・ 「は？」

メドゥーサ ・ 「はい」

マリー ・ 「えっ!？」

メドゥーサ ・ 「鼻先や尻尾で画面打ってます。これ楽しいですね」

ガルーダ ・ 「器用ですね」

メドゥーサ ・ 「皆と会話できる楽しいです」

マリー ・ 「あらやだ、かわいい」

団長 ・ 「メドウシアナはいい子、俺は知ってた」

メドウーサ ・ 「照れます」

【ミリンが入室しました】

ミリン ・ 「ごぎる！」

マリー ・ 「ごぎる！」

団長 ・ 「ごぎる！」

B・ビィ ・ 「ごぎる！」

ガルーダ ・ 「ごぎる！」

メドウーサ ・ 「ごぎる！」

ミリン ・ 「あわわ!? すみません合わせてもらって」

団長 ・ 「いいよ、楽しいから」

ミリン ・ 「ありがとうございます！ それで、これ使い方あってますか？」

マリー ・ 「平気よ。ちゃんと見えてるから」

団長 ・ 「ちなみにみんな、今自室？」

ミリン ・ 「そうです！」

メドウーサ ・ 「こちらもそうですね」

ガルーダ ・ 「肺」

B・ビィ ・ 「オイラは相棒といえるけどな」

マリィ ・ 「私は食堂。一息ついて試しにいじってる」

団長 ・ 「なら通信状況は悪くないか」

ミリィン ・ 「あれ？ ところでメドウーサさん達言葉遣いが違いますか？」

マリィ ・ 「のじゃ子は、操作慣れてないのよ。あとメドウ子のは、メドウシアナが操作してる」

ミリィン ・ 「そうなんですか!？」

メドウーサ ・ 「そうです。ござるさん」

ミリィン ・ 「ござるさん!？」

メドウーサ ・ 「あ、今メドウーサ復活しました。順番変わります。またよろしくお願
いします」

団長 ・ 「よろしく」

マリィ ・ 「またねー」

メドウーサ ・ 「アタ酢が戻ってきたわよっ!!」

マリィ ・ 「だから誤字いつ!!」

団長 ・ 「笑い殺す気かお前は」

メドウーサ ・ 「何よ、もう間違っでないで」

メドウーサ ・ 「なんでよっ!？」

ミリン ・ 「新しいお酢ですかね」

団長 ・ 「酔って茶渋洗う時たまに使うんだよね」

B・ビィ ・ 「やはり台所用品の星晶獣だったか」

メドウーサ ・ 「違うっ!!」

ガルーダ ・ 「メドウ子わ落ちくわ突くべきです」

団長 ・ 「おめえもだよ」

ミリン ・ 「ちくわ突くんですか？」

マリー ・ 「追い打ち止めてえ!!」

ガルーダ ・ 「落着きまSHOW」

B・ビィ ・ 「スゲエなこいつ」

団長 ・ 「天才かよ」

【ルドミリアが入室しました】

ルドミリア ・ 「やあやあ、何か食堂でマリーがお腹抱えて楽しそうにコレをいじつ

て

るけど、どんな感じなんだい？」

団長・ 「あ」

団長 「マリーちゃんルドさんを」

マリー 「無理、もう履歴見て痙攣してる」

団長 「遅かったか」

B・ビィ 「文字とは言え、貴重な素面のルドミリアが秒で退場したな」

ミリン 「だ、大丈夫ですか？」

団長 「俺行くわ。ごめんねせつかく入室したのに話中断して」

ミリン 「いえいえ」

ガルーダ 「大した話もしてないです」

メドゥーサ 「ちよつと、アタシせつかく来たのに！」

団長 「後で話してやるから」

マリー 「ごめんちよつと早く来て、なんか痙攣の揺れ幅やばい」

【団長が退室しました】

【マリーが退室しました】

ミリン 「団長さん、大変ですね」

B・ビィ 「ゆつくりトークも出来ねえんだなあ」

メドゥーサ 「アタシを放っておくとは言い度胸ねアイツ」

ガルーダ ・ 「タワシをかまう暇はないと重います」

メドウーサ ・ 「違あうっ!!」

ガルーダ ・ 「態度もトゲトゲC」

メドウーサ ・ 「アンタそれはもうワザとでしょ!？」

——そして、後日。

「メドウ子、ちよつと食器洗うの手伝ってくれ」

「なんでよ。今日アタシ当番じゃないでしょ」

「いや、得意かなくて」

「はあ? 何言つて……あんたねえっ!？」

誤字を普段の仕返しにからかわれ、わちやわちや戯れる団長とメドウーサがいた。

■ 四 グループ2 星晶獣グループ

■ 【ティアマトがグループ “星晶獣” を作成しました】

■ 【ティアマトが入室しました】

ティアマト ・ 「みんなあつまれー」

■ 【コロツサスが入室しました】

「リヴアイアサンが入室しました」

「ユグドラシルが入室しました」

「シュヴァリエが入室しました」

「セレストが入室しました」

「B・ビイが入室しました」

「ゾーイが入室しました」

「ガルーダが入室しました」

「メドゥーサが入室しました」

「ミスラが入室しました」

B・ビイ・ 「星晶獣専用グループのじかんだよお！」

リヴアイアサン・ 「どういうノリだこれは」

セレスト・ 「これ私入れてるよね？」

シュヴァリエ・ 「問題ない、見えてるぞ」

コロツサス・ 「ヤホ（*、ω、）」

メドゥーサ・ 「アンタここでもそういう感じなのね」

ガルーダ・ 「じゃがここだと不思議とマツチしてるのう」

B・ビイ・ 「ガルーダ、操作慣れたのか？」

ガルーダ
 ゴーイ
 ガルーダ

文字

を打ち込みやすいのじゃ！」

▪ 「前みたいな誤字は止めるよ？」

ガルーダ
 「のじゃ」

ゴイー
 「ガルーダは何かしたのか？」

ティアマト
 「あの前、ルドミアアの腹筋ぶっ壊した戦犯の一人」

B・ビィ
 「もう一人はメドゥーサ」

メドゥーサ
 「アタシは、関係ないでしょう!？」

ガルーダ
 「反省しておる」

リヴァイアサン
 「気になるなら『星晶戦隊』のグループ履歴見てみる」

ゴイー
 「ああ、後で見てみよう」

ゴイー
 「ところでみんな今どこからコレ使ってる？ 団長には、使用場所

確認

しとけと言われたが」

ティアマト ・ 「全員自室の筈。集まれるタイミング狙ったからな」

シユヴァリエ ・ 「ところで若干二名発言がないが、大丈夫か？」

コロツサス ・ 「ア、ユグドラシル（・・・ω・） アト、ミスラ」

リヴァイアサン ・ 「操作出来るのかミスラは、あの身体で」

メドゥーサ ・ 「それアンタが言うか……」

リヴァイアサン ・ 「我は口や鰭でやれる」

メドゥーサ ・ 「うちのメドゥシアナだつてできるわよ!!」

セレスト ・ 「それより二人は？」

ユグドラシル ・ 「大丈夫です！」

ティアマト ・ 「おお!!」

B・ビィ ・ 「きや——!? 喋ったアアア——っ!?」

リヴァイアサン ・ 「だから何だそのノリは」

セレスト ・ 「けど新鮮だね。活字とは言え、こうやってユグドラシルとコミュ

ニケ

ーションとるのがって」

シユヴァリエ ・ 「何時も意思はわかるが、"フイーン" だけだからな」

ユグドラシル ・ 「団長に、操作、教えて貰いながらうてますです！」

メドウーサ
 ユグドラシル
 から
 「は？」
 「この機械、使うの難しい。けど皆と文字で喋るの、楽しい！だ

頑張るですっ！」

メドウーサ
 「あのバカ人間アタシに何にも使い方教えなかったんだけど」

ティアマト
 「お前頼んでないだろ別に」

シユヴァリエ
 「そもそも「アタシにかかれば余裕よ！」とか言つて、主殿が教え

よう

としたけど誘い蹴ってなかったかお前」

メドウーサ
 「むむむ」

B・ビィ
 「なにがむむむだ」

ユグドラシル
 「ミスラも、一緒教えてもらてる。今文字教わってる」

ティアマト
 「ほう」

ミスラ
 「テスト。今からミスラが文字打つから（団長）」

B・ビィ
 「早速来たな」

コロツサス
 「キタ——☆・*:.:(。▽。)。*:.:☆——!!」

セレスト
 「ドキドキ……！」

ユグドラシル ・ 「ワクワク！」

ミスラ ・ 「ミミミミーン!!」

リヴァイアサン ・ 「待て待て待て待て」

ガルードダ ・ 「メドウ子達の部屋から笑い声が聞こえるのう」

ゾーイ ・ 「ミスラここでもそれなのか？」

ミスラ ・ 「ミンミンミンミンツ!! ミンツッ! ミーンミンミンツッ! ミミミ

ンツ!! ミンツ!!」

リヴァイアサン ・ 「いや待て、マジで待て。活字にされると本気でわからない」

B・ビィ ・ 「話し言葉以前に擬音じゃねえか」

ミスラ ・ 「ミーン？」

ゾーイ ・ 「省エネ個体が若いからか? 星晶獣的なアレを使えない活字で

は、意

志の言語化がまだ巧く出来ないのかもしれないな」

ユグドラシル ・ 「ミスラ、違う。こうやって文字打つよ」

ミスラ ・ 「ミーン、み？」

ゾーイ ・ 「おお、いいぞミスラ」

ミスラ ・ 「こう? ここモジ? でる？」

B・ビィ
 ・ 「いいぞいいぞ」

リヴァイアサン
 ・ 「うむ、出来始めてるな。いい感じだ」

ティアマト
 ・ 「やっと治まった。笑い死ぬかと思った」

ミスラ
 ・ 「ミミーローンツ!!」

ガルード
 ・ 「また部屋から笑い声が」

B・ビィ
 ・ 「あーもう無茶苦茶だよ」

リヴァイアサン
 ・ 「コロツサスの鎧が軋む音が聞こえるな」

ゾーイ
 ・ 「褒められて嬉しかったんだなあ」

リヴァイアサン
 ・ 「これはもう、今日無理だろ」

ユグドラシル
 ・ 「ちよつと話せた！ 十分出来たからヨシツ!!」

ミスラ
 ・ 「ミンツ！」

ゾーイ
 ・ 「追々ミスラは、団長やユグドラシルと文字の練習をしような」

ユグドラシル
 ・ 「がんばユグユグツ!!」

リヴァイアサン
 ・ 「待て待て待て待て」

ガルード
 ・ 「ユグドラシルよ、それなんじゃ？」

ユグドラシル
 ・ 「こう言うの言いたかった！」

ガルード
 ・ 「そうなのか」

ゾーイ 「ならば私は……頑張るゾーイ！」

ガルーダ 「む！ ならば……頑張ルーダツ!!」

B・ビィ 「頑張るビィ!!」

リヴァイアサン 「二名ほど別の世界の奴じやないか」

B・ビィ 「また会いたいよな。それより最後お前な」

リヴァイアサン 「は？」

ユグドラシル 「ワクワク！」

B・ビィ 「チラ!! チラツ!!」

リヴァイアサン 「……頑張リヴァイアサン」

ユグドラシル 「ヨシッ！」

ミスラ 「ミンツ！」

——この時、団長は会話を見ていたため流れ弾に当たり、腹を抱えていた。そして、
 がんばユグユグが流行った。このような利用方法で、徐々に星晶戦隊（以下略）では
 タブレットの利用頻度が増えていくのだった——。

星晶戦隊（以下略）デジタル革命!! その2

■ 一 愉快的騎空団トーク

俺達の騎空団にシエロさんの依頼として“タブレット端末”が配布されて暫くが経った。最初は皆操作に慣れるのから始まり悪戦苦闘していたものの、最近では問題なく使いこなせて来ているようだ。

ただしユグドラシルとミスラに関しては、どうも相性が悪いのかトーク中の誤字脱字が目立つ。ミスラに関しては、まず“文字”を覚える事からが始まりだった。

それでも二人（または二体？ 一人と一体？）は、タブレットを使うの自体は楽しいようだ。ユグドラシルは、自然味の強い星晶獣なので本来人工物やその最たる機械類は苦手なのだが、団員とのコミュニケーションツールとして非常に喜んでる様子。普段の鈴の音のような“フイーン”での会話ではない、人の言葉——文字での交流と言うのに憧れがあったのだらうか。ミスラもまた同じと言う事か。

今では二人の入力ミスは、ご愛嬌と言った感じで皆強く指摘する事も無い。

そして他の使い慣れて来た団員は、自分の目的、グループでの目的それぞれにあった使い方です。連絡のためだけでなく、自分達の趣味のため、目的は色々だ。俺としては、壊したり人に迷惑かけなければ問題ないので、とにかくそこだけ気を付けて欲しいものだ――。

団長 「船内消灯の時間となりました。一日みんなお疲れ様。船内は一部施設と常夜灯

を除き消灯します。明日は物資の搬入出と、魔物退治の依頼があります。今夜

はもう寝て明日に備えてください」

メドウーサ 「まだ眠くない」

団長 「寝ろ」

ガルーダ 「眠くない」

団長 「寝ろ」

ティアマト 「酒のみたい」

ラムレッダ 「たい」

団長 「寝ろ」

シャルロツテ 「皆さん、早く寝ないと明日に響くでありますよ」

団長 「寝ろ」

シャルロツテ 「ごめんなさいであります」

団長 「まちがえまいstが」

団長 「間違えました」

団長 「すみません反射で入力しました」

団長 「シャルロツテさん」

団長 「違うんです」

団長 「シャルロツテさん？」

団長 「誤解なんです。本当に」

B・ビィ 「浮気男かよ」

カルティラ 「ダメンズやなあ」

ティアマト 「ウケるうー↑」

団長 「他は寝ろ」

【シャルロツテが退室しました】

【団長が退室しました】

メドウーサ 「廊下走る音がするわね」

B・ビィ 「相棒が部屋飛び出してったわ」

カルテイラ 「頭下げに行つたんか……」

ティアマト 「ラムレッダ、部屋で飲むぞ来い！」

ラムレッダ 「オツケエイ!!」

B・ビイ 「お前からこれ履歴残るの覚えてる？」

【ティアマトが退室しました】

【ラムレッダが退室しました】

B・ビイ 「見ずに退室したか」

カルテイラ 「分かつてても飲むやるあの二人」

メドウーサ 「酔っ払いつてやーねー」

ガルーダ 「メドウ子も酔うと面倒じゃがな。小柄で酒が回るの早いからのう」

メドウーサ 「うっさいわね!? それ言うならアンタもでしょうが!」

カルテイラ 「はいはい、いい加減アンタらも寝え。明日の依頼メンバーやろ」

メドウーサ 「はいはい」

ガルーダ 「のじやのじや」

【メドウーサが退室しました】

【ガルーダが退室しました】

カルテイラ 「うちももう寝るわ。ほなお休みい〜」

【カルティラが退室しました】

B・ビィ 「他見てる奴いたら寝てやれな。相棒また胃が痛くなっから」

【B・ビィが退室しました】

——そんな会話がタブレット上で行われる。それがある程度慣れて来た俺達の日常。

「シャルロットさん、ほんとに！ 本当に違うんですって！」

「自分気にしてないであります」

「じゃあせめてこっち向いて下さいよお!?!」

「ジミー殿も早く寝た方が良いでしょうよ」

「本当に誤解なんです!! 強く当たる気なんて無かったですって!」

「グースカピーであります」

「シャルロットさあんっ!?!」

けど、拗ねて布団に包まるシャルロットさんに謝り続けるのは、決して日常と思いたくない。

■ ■
二 ルドミリアチャレンジ

団内でのタブレットを利用したトーク、あるいはチャットと言うために「団チャ」と呼称されたはこの機能。普段言葉で会話できないタイプの子星晶獣とも会話できる新鮮さは、先述の通りであるが、その他にもある事に気づいた団員達――。

フィラソピラ 「じゃあ今日もやってみよー」

ルドミリア 「よし、がんばるぞ」

B・ビィ 「今日はどんだけいけるかね？」

ルドミリア 「前の記録は更新したいところだな」

フィラソピラ 「出だしは良いんじゃないかな？」

このような会話が行われているのは、団員共有グループの「星晶戦隊」。この日行われているのは、ルドミリアを主役としたあるチャレンジだった。

団長 「じゃあ、一応テーマとして好きなキノコの話題」

ルドミリア 「ならそれでいいこう」

フィラソピラ 「それじゃあ存分に語らおうか」

ルドミリア 「うむ」

ルドミリア 「好きなキノコと言うと最近なら山での依頼で見つけたものだろうな」

――と、ルドミリアはキノコの話題を話し出す。

普段笑ってしまい会話もままならないルドミリアであるが、タブレット上であればそれなりに落ち着いて「話せる」事に気づいた団員達による通称「ルドミリアチャレンジ」。これは彼女がいかにかにタブレットの入力すら出来なくなるまで笑うのを耐えられるかと言う挑戦であった。

ルドミリア 「あそこは種類も豊富で良いキノコが多かったな」

B・ビィ 「晩飯キノコだらけだったな」

団長 「食費浮いたのはいいけど、正直食うの怖かった」

ルドミリア 「毒味はしたと言ったのにな」

団長 「アンタ毒味しても症状わからんじゃん」

B・ビィ 「同様の症状の場合、マジでわからんからな」

ルドミリア 「流石にそこまでのヘマはしないさ」

B・ビィ 「そこまでのヘマを、既にしてるんだよなあ……」

ルドミリア 「言わないでくれ」

フィラソピラ 「けれど君のキノコ料理は美味しかったよ」

団長 「確かに美味くはあった」

ルドミリア 「ありがとう。そう言ってくれると嬉しい」

団長 「ただ団の皆が俺が食うまで様子見てたのは納得できん」

B・ビィ 「相棒は、毒あつてもなんとか対処できると思ってるから」

団長 「くそう」

ルドミリア 「次もまたキノコがあるとこkkkkr r r」

B・ビィ 「あ、キタか？」

フィラソピラ 「ルドミリア？」

突如文章がおかしくなるルドミリア。だがそれを団長達は、慌てずにはしばし見守るよ
うに待った。

そして、一分程経つとルドミリアから返信が来た。

ルドミリア 「すまない、治まった」

団長 「やつぱ口頭より収まるのは早いかな？」

ルドミリア 「喋らず呼吸だけなら発作は軽度に済むのかもしれないな」

ルドミリアの答えを聞き安堵する一行。

今の異常は、ルドミリアが何時もの発作を起こしたタブレットを打つ指が震え続けた事
で起きたものであつた。

彼女は言葉を発していると、何が切欠で発作を起こすかわからない。だが口で話さず
呼吸のみを意識していたおかげか、一人でもなんとか呼吸を整え発作を僅かながら治め
れるようになってる。

フィラソピラ 「今君は自室だよな？」

ルドミリア 「ああ」

団長 「やばそうならそっち行きますから」

ルドミリア 「すまない。カギは開けておくが、多分もう少し大丈夫だ」

フィラソピラ 「なら頑張ろうか。もう少し話してみよう」

ルドミリア 「うむ」

「キノコ話題で良いなら続けるが、逆に君達が好きなキノコはなん

い？」

フィラソピラ 「ふむ。好みで選ぶほど気にしたことがないね」

団長 「まあマツシユルームかな。よく食うし」

B・ビィ 「何にでも使えるからな」

ルドミリア 「マツシユルームはいいね。味も良いし、B・ビィの言うように何に

も利用できる。シチューに入れてもソテーでも美味しいな」

B・ビィ 「つーか、それ以外あるか？ 食う種類って」

ルドミリア 「幾らでもある！ アマツタケの様に香り高いものであれば、汁物な

んかが良い！ 出汁が美味しいんだ」

ルドミリア 「マイタケと言うものは、味も食感も良い！ どう調理しても美味し

い。カリカリにバターで焼くとツマミにもなる！」

団長 「そう言われると食いたくなる」

ルドミリア 「マイタケならよろず屋さんに頼めば手に入るだろう。マツシユル
ム同様に流通もしているはずだからな」

フィラソピラ 「舌がキノコ味を求めましたよ」

B・ビィ 「明日でも良いから食いてえ」

団長 「明日なら島に寄るし、シエロさんに聞いてみる」

フィラソピラ 「よろず屋さんが居る前提なんだね」

団長 「居るでしょう多分」

B・ビィ 「まあ居るだろうな」

ルドミリア 「そうと決まれば自分も腕をふるうういいgfすすすまあなあ」

再びの発作。グループ内に緊張が走った。

団長 「ヤバいかもしれん」

ルドミリア 「待って、何とかじb bじぶんんでえおおといtpとtぼち落ち着き

kkkいてtつてみmm

B・ビィ 「ダメだな」

団長 「部屋行くわ」

B・ビィ 「急いで行ってやれ」

フィラソピラ 「セレストに安楽一応頼みに行くね」

【団長が退出しました】

【B・ビィが退出しました】

【フィラソピラが退出しました】

——こうして何度目かのルドミリアチャレンジは終わった。結果としては、それなりに時間をかけて話す事が出来たものの、団長が彼女の部屋に駆け付けた時には、床で癡攣して倒れるルドミリアの姿があった。

「ルドさんしつかりっ!？」

「は、はははっ!! す、すまな……!! あは——っ!？」

「身体変に丸めないでっ! 気道確保してえ!!」

「す、すま……ごめっ! 身体が、はははっ!! あははっ! 苦し……っ! 勝手に丸

まって……あは、あひい——っ!？」

「ルドさあ——んっ!？」

彼女が「笑い」から解放される日はいつ来るのか。それは神のみぞしる——。

三 コルワのハッピーアワー

■
【コルワがグループ「コルワのハッピーアワー」を作成しました】

【コルワが、全員を招待しています】

【コルワが入室しました】

コルワ 「みんな？ ハッピー足りてるっ？」

【団長が入室しました】

【B・ビイが入室しました】

【フェリが入室しました】

団長 「なんすかこれ」

B・ビイ 「一応来たけど」

フェリ 「私も来たけど……」

コルワ 「これは私コルワがお休み前夜の一時に、集まった人のお悩みを聞いて

私とみんな

なで考えて、些細な事からハッピーエンドに導くコーナーです

！」

団長 「コーナーで。しかも俺達も考えんのかい」

B・ビイ 「ようはお悩み相談室か」

コルワ 「イエエ〜スツ!!」

団長 「テンションたかつ!!」

【ブリジールが入室しました】

ブリジール 「お悩み相談室です?」

団長 「ですです」

フェリ 「つまり私達は、コルワに悩みを言えばいいのか?」

コルワ 「そう言う事! なんでも聞いて頂戴! 参加しても見てるだけでも

オツケーよっ!!」

団長 「俺の胃痛について」

コルワ 「頑張つてね!! 次行きましょう」

フェリ 「バツサリだあ!」

B・ビィ 「お悩み相談とはなんだったのか」

団長 「胃痛は友達い!!」

フェリ 「団長自棄にならないでくれ!!」

ブリジール 「団長さん、自分家事も依頼もとことんお手伝いするです! だから

もつと自分

をとことん頼ってください!!」

団長 「天使かよ……」

ブリジール 「照れますから」

B・ビィ 「素で照れたか今？」

ブリジール 「とことん聞かないでください！」

コルワ 「フェリちゃんは何かない？」

フェリ 「私か？」

コルワ 「なんでもいいわよ？」

団長 「対応の差に泣ける」

フェリ 「悩みと言っても私は、団長やみんなと出会えて旅にも出れた事で十

分恵まれて

ると思うからな」

B・ビィ 「言葉の重みがスゲエ」

コルワ 「今すぐ抱きしめたいわ……」

団長 「わかる」

フェリ 「それは、恥ずかしいから！」

ブリジール 「自分もフェリさんと出会えてとことん嬉しいです!!」

フェリ 「ありがとう。けど強いて言うなら一つあるかな」

B・ビイ
フエリ
選んで手に

「なんかあったか？」

「実は前にベツポ達に読み聞かせれるような本が欲しくて、町で本を

取ったらそれが偶然怖い内容で……」

団長

「あらら」

フエリ
「買わなかったけど、頭に残ってるんだ……」

コルワ
「なるほどね。軽いトラウマになっちゃったわけね」

フエリ
「うん……」

B・ビイ
「ちなみに内容は？」

「普通に読んでたら、実は怖い話だったみたいな……。だから直ぐ気

付かなくて

結構読んじやったんだ……」

ブリジール

「自分も怖い話とことん苦手です」

コルワ
「思い出させるような質問NG！」

B・ビイ
「わりい」

「けどそうね。忘れる事ができれば勿論いいけど、忘れるのって案外

難しいから

事を考えた

フェリ

コルワ

上書きよ！」

コルワ

メの本貸し

フェリ

コルワ

コルワ

！」

フェリ

コルワ

らっ？」

団長

ね。だからこういう時は、それを思い出すことも無いぐらい楽しい

りしたりすればいいのよ」

「楽しいことか？」

「そう、なんでもいいから好きな事をね。アンハッピーはハッピーで

怖い本を読んだなら、楽しい本を読むのもありよ。何か私のオスス

てあげましょうか？」

「いいのか？」

「もちろん！」

「明日でも部屋に来てちようだい。素敵なお話のやつがあるからね

「ありがとうコルワ。少し気が楽になったよ」

「オツケー！ イエス、ハッピーエンドツ!! さあさあ、他はあるかし

「不幸な出来事が多くて」

コルワ 「ドンマイツ!!」

団長 「この差よ」

B・ビィ 「相棒は、なんやかんや自己解決するから」

ブリジール 「それじゃあ次自分がいいですか？」

コルワ 「もちよ!」

ブリジール 「実は自分もちよつと、怖い事できとん困ってるです……」

団長 「また怖い系か」

コルワ 「何かあったのかしら？」

ブリジール 「実は前、夜の船内見回り当番だった時。見たです」

団長 「待って、ガチ目に怖いやつなの？」

B・ビィ 「何を見たんだ？」

ブリジール 「小さな子供を引き連れた、幽霊だったです……」

コルワ 「真面目に怖いわね」

団長 「そんな話知らないんだが」

ブリジール 「実は明日とことん相談しようと思ってたところだったです」

B・ビィ 「しかし夜中に幽霊? 魔物入り込んだか？」

団長 「それならセレストが直ぐ気付く」

B・ビィ

「だよな」

コルワ

「この場合でハッピーエンドを迎えるには、まずその謎の幽霊をどう

にかしない

といけないわね」

フェリ

「あの、ブリジール。もしかしてその幽霊って、消灯時間過ぎて一時間

位の台所

近くで見たか？」

ブリジール

「そうです！ よくわかりましたね？」

フェリ

「ごめんなさい、それ私だ」

ブリジール

「えっ!？」

団長

「スピード解決っ!!」

B・ビィ

「真実はいつも一つっ!!」

フェリ

「今言った怖い話のやつで、夜夢見が悪くて……起きて水飲みに行っ

たんだが、

ベツポ達もついて来たんだ」

団長

「子供達ってベツポ達のことか」

B・ビィ

「まあ暗がりです突然あいつ等見たらそう見えん事もないか」

フェリ
ブリジール
す。とこと

「誰かに見られたと思ったがブリジールだったんだな」
「自分驚いて一度引き返したので、その時行き違いになったみたいで

んお恥ずかしいです……」

フェリ

「こちらこそ大変申し訳ない……」

ブリジール
ん怖くなく

「いいえ、大丈夫です！ 正体がフェリさんだってわかったらとこと

なつたです!!」

コルワ

「なんであれ問題解決！ イエス、ハッピーエンドッ！」

団長

「俺の問題は」

コルワ

「大丈夫よ！」

団長

「何が？」

コルワ

「B・ビイは何かある？」

B・ビイ

「いまんとこ大丈夫だな」

団長

「ねえ」

コルワ

「それじゃあみんなっ！ 何かあったら気軽に相談してね！」

団長

「したんだが？」

コルワ 「それではいつか、また次回！ 今夜もみんなハッピーな夢を見てね
！ おやす

みなさい！

団長 「もしかして俺に関しては、匙投げてませんか？」

【コルワが退室しました】

団長 「ヘイツ!？」

——その後このコルワのハッピーアワーは、それなりに好評で彼女の気分次第で不定期開催される事になったと言う。

「そもそもよ相棒、しよっちゆう星晶獣にからまれて一千万以上の借金ある奴の相談とかどう答えりゃいいんだよ。普通匙投げるぜ」

「そりやそうだけど、お前に言われるのも癪だな」

「ヨウ、昨日ノコント面白カッタゾ」

「コントじゃねえよっ!？」

■ 四 耽美なる世界

トークではみな好きなグループを作り活用している。それは連絡のためもあるが、コ

ルワのような娯楽とも言えるグループを作るのも一つの楽しみ方だ。

そんな趣味全開グループの一つが、ルナール達によって作られた絵描きグループ「TANBI」である。

今回は、その優雅で耽美的な彼女達の活動を少しのぞいてみよう――。

「ルナールが入室しました」

「セレストが入室しました」

セレスト 「先生進捗は」

ルナール 「だめです」

セレスト 「ああ……今は何を？」

ルナール 「部屋の片づけ」

セレスト 「ああ……」

ルナール 「ちやうねん」

セレスト 「カルティラさん語入ってるよ」

ルナール 「うんごめん。けど始めたら……ね？」

セレスト 「わかる」

ルナール 「でしよ？」

セレスト 「けど、次の島でやってる書物見本市出すーって言ってたのに」

ルナール 「言いました……」

セレスト 「小規模だから、描くの大作じゃなくて済むって」

ルナール 「それも言いました……」

セレスト 「んもう！」

「……ところで、そっちの進捗は？」

セレスト 「だめです」

ルナール 「おーいー」

セレスト 「ちやうねん」

「……まあ最近依頼が忙しかったから」

セレスト 「それ」

セレスト 「依頼多かった」

ルナール 「そう、まあ騎空団だからね仕方ないのよ。騎空団だから」

ルナール 「あと、あれ。丁度部屋の間取りの具合がね？」

セレスト 「そうそう」

ルナール 「よね？」

セレスト 「うんうん」

ルナール 「じゃあそう言う事で……次頑張ろうか！」

セレスト 「うんっ！」

——また別の日の事。

セレスト 「先生起きてる？」

ルナール 「全然起きてる」

セレスト 「あの前貸してもらったポポル・サーガの耽美本今読み終わった」

ルナール 「どうだった？」

セレスト 「てえてえ……」

ルナール 「でしょお!!」

セレスト 「作者のポポルとマキリの解釈、あんまり見ない奴だけど良かった」

ルナール 「わかり味が深い。ともすれば解釈違いなんだけど、なんか読み返し

たくなるの

よね。人は選ぶでしようけど」

セレスト 「私は好きかな」

ルナール 「うん、そう思ってた貸したー」

セレスト 「存じてらっしゃる〜」

ルナール 「存じてますとも〜」

セレスト 「明日返すね」

ルナール 「はーい」

——さらに別の日。

セレスト 「先生私の部屋にペン忘れてない？」

ルナール 「あ、やっぱそっちあつた？」

セレスト 「うん、原稿に紛れてた」

ルナール 「ごめん、あと取りに行くわ」

セレスト 「うん」

ルナール 「けど助かったわ。その子一番愛用してる子だから部屋探しても見か

けなくて

焦ってたところなのよ」

セレスト 「やっぱ他と違う？」

「感覚的には。市販してる普通のペンだけど使った年期つてやつ？」

グリツプの

馴染み具合が違うわね」

セレスト 「私そこまでの域に行ってないなあ」

ルナール 「そのうちわかるわ」

——また更に別の日の深夜。

ルナール 「いい感じの描けたわ」

セレスト 「ほほう」

ルナール 「イラストだけど」

セレスト 「見た〜い」

ルナール 「はっはっは、待ちたまえよセレストくん」

【ルナールが画像を投稿しました】（とても耽美な画像が表示されている!!）

セレスト 「ほーほー……？ ほーほーほーっ！」

ルナール 「どう？」

セレスト 「いっぱいちゅき」

ルナール 「照れるぜ」

セレスト 「流石ルナール先生だね」

ルナール 「うへへへ」

セレスト 「ところで、これもしかして差分あり？」

ルナール 「気付くわねえ」

セレスト 「ふへへ」

ルナール 「今送る」

ルナール 「どう？」

セレスト 「来てないよ？」

ルナール 「あれ？」

ルナール 「見えない？ 確かに送信したけど」

セレスト 「先生まずい」

ルナール 「え？」

セレスト 「ちよつと部屋おじやましまう」

——突如返信が途絶え首を傾げたルナール。だがすぐに彼女の部屋の中に黒紫の霧が起こりセレストの姿となった。

「うわあ!？」 来るつて直でえ!？」

「ル、ルナール先生……マズイです……!？」

「な、なにが?」

「『誤爆』してる……! 全体グループに送ってる……っ!!」

セレストの言葉を聞いた瞬間、ルナールの顔から血の気が引いていった。

「や、やばばば……っ!？」

「あわわ……は、早く消さないと……!」

「き、既読は……っ!？」

「わ、私が見た時は、まだ私以外ついてなかった……!」

「け、消し方……!! 削除って……!」

「え、えつと……画面開いて……えつと……」

冷や汗を流し大慌ての二人。あわあわとタブレットを弄るが焦りのせいで操作が上手くないかない。そうこうしている内に、ルナルルの部屋へ近づく激しい足音。そしてノック音。

「——ルナルルさんっ!! 送信画像の件でちよつとよろしいですかねえ!」

「ぎゃああああつ!! だんちよおおつ!」

「だ、団長……ちよ、ちよつとまつてえ……!」

「待てんわっ!! 悪いけど入るぞ!」

鍵を閉めていなかっただために団長は、あつさりと彼女の部屋へと入り状況をすぐに察した。

「やっぱり間違えたな……!」

「あの、これは……!」

「あわわ……!」

「まずタブレットを貸しなさい!」

ひったくる様にルナルルの手からタブレットを取ると団長は、慣れた手付きでそれを

操作しルナルが誤送信した画像を消した。そして団長自身が持つているタブレットで全体グループから画像が消えている事を確認してホッと息を吐いた。

「……一先ず画像は消しました」

「よ、良かった……」

「何も良くないんですが」

「申し訳ありませんでしたあ!!」

そしてルナルは、土下座をした。

「すみませんすみませんすみません……っ!!」

「多分画像送信の送信先選択で『星晶戦隊』を選んだか……」

「平に……!! 平に……っ!!」

「団長……ル、ルナル先生を許してあげてえ……!! わ、私が見たいって頼んだの……」

武士の情けだよお……!!」

「ミリンちゃん聞いたら怒るぞ……まず頭上げてルナルさん」

「へい……!!」

「そのノリはもういいので」

タブレットをルナルへと返す団長。その表情は、怒りよりも呆れの方が勝っていた。

「たまたま水飲みに俺が起きたから気付きましたかね……もうちよつと慎重にやりましょうね」

「はい……すみません……」

「恐らく未成年組は見えないはずですが……いや、俺も未成年だけどさ」

「大変お見苦しいものをお見せして申し訳ございません……」

「……寝ぼけた頭も冴え切ったわ」

詳細は省く事となるがルナルの“差分イラスト”は、相当な出来であった。彼女の絵の実力と深夜テンションが合わさった劇薬と言つても良い代物であり、団長はそれを起き抜けに見てしまったのだ。

「絵の見せ合いは構わないけどもね……“ああ言うの”は、部屋で直接見せるようにして下さい」

「肝に銘じます……」

「ごめんなさい……」

しょんぼり耽美コンビに呆れ疲れた団長は、欠伸をして頭をポリポリとかいていた。落ち着いたら眠気も戻ってきたらしい。

「こと耽美に関してルナルさんは、しっかり反省する人って言うのは、俺も知ってるからこれ以上言いません」

「ありがとうございます……っ！」

「ただね」

「え？」

「……絵を消す瞬間、既読が増えたんだけどもね」

「——」

ルナルルの顔からまた血の気が引いた。

「俺とセレストで既読は2のはずだ。それが一瞬“3”に変わった」

「カハ……ッ!？」

「ル、ルナルルせんせええ——ッ!？」

呼吸を乱し床に散らばる現行の上に倒れるルナルル。それを見てうろたえるセレスト。
ト。

「俺も誰かはわからんし、それを追及もしたくない。けどルナルルさんは、誰かにあの絵の事を言われても良いよう覚悟だけはしといてくださいね」

「フヒイ——……ッ!! カヒイ——……ッ!？」

「ルナルル先生……っ! し、しっかりしてえ……!!」

「……俺もう戻るから……君達も寝なさい……一気に疲れた……」

「だ、だれが……カヒイ……!？」

「ルナルルせんせええええ——っ!?」

倒れるルナルルとセレストを残し部屋を出る団長。後に団長は、シエロカルテに画像送信選択機能の誤送信改善を要望する。これによりどのグループからも「送信先を選択できる」と言う誤送信を誘発する仕様は改善される。タブレット端末を製作して間もなくであり、専用アプリケーションのノウハウも浅く少ないが故の不幸な事故であった。

またこれより暫くルナルルは、生きた心地がせず誰かに声を掛けられる度に挙動不審となったそうである。

最後にあの増えた「既読」は何者であったのか？

「——買ってしまった。これが、耽美本……」

それは今も尚誰かはわかっていない——。

■ 五 拳で語らず指で入力!

■ タブレットの操作の慣れは個人差があるが、総じて何とか使っている。だが中には根本的に何か勘違いをしているような者もいるわけ——。

【団長が入室しました】

「B・ビイが入室しました」

「フェザーが入室しました」

「ユーリが入室しました」

団長 「夜分失礼。念のため明日の依頼の確認します。魔物討伐で移動込みで

一日かかるけど用意は大丈夫だよな?」

ユーリ 「承知しております。必要な物は既に準備してまとめてありますので」

B・ビイ 「流石に用意が良いなユーリは」

フェザー 「俺の準備もバッチリだ」

「俺の準備もバッチリだっ!!」

団長 「魔物の強さは大した事ないらしいけど、用心に越した事は無いからね」

団長 「ただ数は多いらしいから、そのとこだけは注意かな」

ユーリ 「状況次第ですが、自分が前衛で引きつける形にすればよろしいかと」

B・ビイ 「盾持ちは頼れるな」

フェザー 「どんな相手でも真剣勝負だっ! 拳で語るぜっ!」

「——どんな相手でも真剣勝負だっ! 拳で語るぜっ!」

団長 「フェザー君」

フエザー 「なんだ？」

「——なんだっ!？」

団長 「入力しながら叫ばないでね？」

フエザー 「すまないっ！」

「——すまないっ！」

ユーリ 「あの、フエザー殿。また叫んでます」

B・ビィ 「さっきからこっちの部屋まで聞こえるぜ。部屋そんな近くねえのに」

団長 「別に音声入力でもないんだから……」

——各部屋で困り顔の面々。団員の中でフエザーは、今の様にこのタブレットを用いたチャット機能を利用する際、*“喋りながら入力する癖”*があった。

呟きながら入力するのは、不思議な事ではないが如何せん彼の場合その呟きが、*“叫び声”*になってしまふのが問題であった。

当然団でタブレットを利用し始めた時早々に指摘された事だが、どうにもこの癖が治らない様子。

一度指摘されて暫くは治まるが、だんだんとまた……と言った具合に。

フエザー 「悪い、どうしても喋ってると思うとつい口がな」

B・ビィ 「普段から叫んでるからなお前」

団長 「部屋まで聞こえるなら、タブレット使う意味なくなるからね？ あと
もう 夜だから静かに頼むよ」

フェザー 「すまんっ！」

「——すまッ！」

ユーリ 「耐えましたね」

団長 「ちよつと聞こえたけどね」

B・ビィ 「色々と向いてないなフェザーは」

フェザー 「タブレット、これは勿論便利だが確かに俺には合わないかもしれない

！

やっぱり語り合いは拳じゃないとな！

団長 「それもちよつと違う気がするが……」

団長 「まあ明日の事わかってんならいいや。質問なきや終わる」

フェザー 「大丈夫だぜっ！」

「——大丈夫だぜっ！」

団長 「よし、寝よう。もうその方が良い」

B・ビィ 「これ以上やると苦情出るしな」

ユーリ 「では、また明日に」

フエザー 「おやすみ」

「——おやすみっ!!」

団長 「そこぐらい静かにしなせえ」

——と、言った様子でフエザー達の会話は終わった。依頼に関しても問題なく終わり、何事も無かったのであったが……。

フエザー 「団長、ちよつと聞きたいことがあるんだ」

「——団長、ちよつと聞きたいことがあるんだっ!」

「……フエザー君、俺が目の前にいるならタブレット要らないよね?」

「そう言えばそうだな、すまんっ!」

フエザー 「そう言えばそうだな、すまん」

「器用に不器用な真似をしないでくれ。活字と叫びのステレオ止めて」

——結局フエザーの癖は、その後もあまり改善されなかったと言う。

六 オシヤレ番長☒S

タブレットの画像投稿機能は、ルナルのような悲劇的喜劇を生みつつも皆に受け入れられ浸透し各々活用していた。

カリオストロ「おはよ、みんなっ☆ 世界一可愛いカリオストロが、朝をお知らせしちゃうぞっ☆」

「カリオストロが画像を投稿しました」(枕を抱えた寝巻の可愛い美少女が写っている!! ……だがよく見ると、明らかに身なりを整えてから自撮りしたようだ)

団長 「画像いるの?」

カリオストロ 「なんだその反応は」

団長 「お知らせだけでいいじゃん」

カリオストロ 「朝からオレ様の可愛い姿見れたんだからありがたいと思え」

カリオストロ 「保存して家宝にしろ」

団長 「可愛いを押し売るな」

カリオストロ 「押し売りとはなんだ!?!」

自撮り投稿率一二を争うカリオストロ。彼女が自身の姿を投稿すると、このような会話がちよくちよく行われていた。

そして彼女と自撮り投稿率を争うのは、早々にタブレットの操作をほぼマスターしたクロエ。試験的にインストールされた画像編集機能も駆使した彼女の自撮り写真は、カリオストロも認める出来栄であった。

「エンゼラオシヤレ番長グループにクロエが入室しました」

【カリオストロが入室しました】

クロエ 「ばいせん、ちいーすっ!! ー、ω、ノ」

カリオストロ 「おう。なんか見せたいって?」

クロエ 「っそ! じゃーんっ☆ オニユ一の服ゲットッ(▽、艸)♡」

【クロエが画像を投稿しました】(冬にピッタリな暖か度かつイケイケな服を着たクロエが写っている!)

カリオストロ 「中々いいじゃねえか」

クロエ 「えへへ♪ 最近依頼ガンバって、お小遣いためたんだあ♪」

カリオストロ 「最近やけに張り切ってたのは、そう言う事か」

【コルワが入室しました】

コルワ 「来たわよお〜!」

クロエ 「コルワ姉キタ——、—*。▽。*—ノ——!!! どすかどすか

? 感想もとむっ(〃。3。〃)」

コルワ 「いいじゃない、いいじゃないっ! クロエちゃんによく似合ってる

わよお!」

クロエ 「(*、▽人) あぎますっ♪」

カリオストロ 「ねーねー、カリオストロの冬コーデも見てっ☆」

「カリオストロが画像を投稿しました」（フワモコできやるんスタイルのカリオストロが写っている！）

クロエ

「きやわたんく!! +。*。：。+（人*、▽、）+。：。*。+」

コルワ

「流石カリオストロちゃんねえ」

カリオストロ

「うふっ☆ ありがとっ!」

クロエ

「つか、後ろの……鬼モフイウロちゃんっぽいなん?」

カリオストロ

「カワイイ姿に変えたウロポロス」

クロエ

「そマ（。∩。）!?!」

コルワ

「ぬいぐるみかと思った……」

カリオストロ

「ウロポロスは、オレ様が生み出したもんだからな。姿形程度自由自在だ。カワ

在だ。カワ

「いい衣装の傍にいるなら、コイツもカワイくなきやだめだ」

コルワ

「なんか画像越しでもまんざらじゃなさそうな顔に見えてきたわね

……」

クロエ

「ウケる（笑）」

クロエ

「おもしろそうだし、あとで一緒写真とろう。もちウロちゃんも一緒

で!」

カリオストロ 「いいぜ、今日はそう忙しくねえしな」

クロエ 「んじやあ、あとでそっちの部屋いくから」

クロエ 「あ、ちよいまち」

コルワ 「あら？」

カリオストロ 「どした？」

クロエ 「メンゴだんちよきた。もうちよい待つてて〜」

カリオストロ 「おう、用事なら無理すんな」

コルワ 「明日の依頼かしら。確かクロエちゃんメンバーよね」

カリオストロ 「かもな」

クロエ 「おまた〜！」

カリオストロ 「はえーな」

【団長が入室しました】

コルワ 「あらま」

クロエ 「タブレット持ってたから、ついでに来てもらった」

団長 「なんかこのグループ来いつて言われたんだけどなに？」

カリオストロ 「お前クロエに用事あったんじやねーのか？」

団長 「それは明日の依頼で軽い確認しに来ただけ。そしたら、男子の意見

欲しいって

言われて部屋連れ込まれた。何してたのこれ？」

カリオストロ

「服の見せ合いしてたんだよ」

団長

「ファツシヨンの意見かよ、俺よう知らんよ？」

コルワ

「けど確かに団長さんなら当たり障りのない無難な意見くれそうね」

団長

「なんか素直に喜べん」

カリオストロ

「まあお前だからな。的確な評価も期待しちやいねーよ」

団長

「服の評価の前に俺の評価下げるのやめて」

カリオストロ

「まあ男連中じゃ、お前が一番普通だしいいとする」

団長

「おい」

クロエ

「だってユリつちとかヘンに気いつかうつしよ？ フェーくんもぜっ

たい「動き

やすいほうがいいと思うぞ！ 拳で語れる！」ってゆるーじゃんねえ

く。ファツ

シヨンセンスがフィジカル一辺倒すぎ（笑）

団長

「ユーリ君は、帝国兵の時男ばつかでそう言うの無縁だったろうし、ま

だ若いん

言うの」

コルワ

「あなたも若いのよ団長……?」

団長

「そだけどさ」

カリオストロ

「じゃあ他の男って言うとはぼ星晶獣しかいねえからな。しかも辛う

じて人型な

のコロツサスしかいねえし」

クロエ

「ビイたそわ〜?」

カリオストロ

「アレは人型になれるナニかだから論外」

団長

「確かに」

カリオストロ

「改めてなんだこの奇天烈騎空団」

団長

「言うな」

クロエ

「ちな、クロエのオニユーは、ステに高評価いただきましたあ〜♪」

カリオストロ

「高評価なのか?」

団長

「高評価と言うより、扉開けてすぐ聞かれたから咄嗟に「いいね」って

答えただけなんだけど」

クロエ

「いやガチ目にだんちよってば、クロエの事ガン見してたって!」

クロエ 「あれはマジ見惚れてたって！ だんちよクロエに惚れちゃった的な？」

団長 「話盛らない」

クロエ 「(ノ≡?≡) テヘペロツ！」

カリオストロ 「じゃあ世界一カワイイカリオストロの冬コーデの意見もちよーだ
いっ☆」

団長 「クロエちゃんの次に投稿されてるの？」

コルワ 「そうそう」

団長 「これ後ろのウロボロス？」

カリオストロ 「そうだよっ☆ それよりカリオストロ、カワイイ？」

団長 「ウロボロスまだこの姿なの？」

カリオストロ 「ああそうだよ。それでオレ様の服は？」

団長 「後でモフらせてよ」

クロエ 「あ、クロエもモフリたくい♪」

カリオストロ 「わかったよ。後で二人とも来い！ いいから感想っ！」

団長 「ウロボロスがカワイイ」

カリオストロ 「オーレーさーまーのーだーっ!!」

カリオストロ 「誰がウロボロスの感想言えって言ったあ!? オレ様の服を見る、と言うかオ

レ様を見ろお!!」

クロエ

「(笑)」

カリオストロ

「笑うな!」

団長

「普通に良いんじゃないの? カワイイし」

コルワ

「笑っちゃうぐらい軽い感想ね」

クロエ

「ウケる笑」

カリオストロ

「錬金素材にされてえようだな」

団長

「待たれい」

カリオストロ

「部屋で直接オレ様を誉めなきやお前の食器全部先割れスプーンに錬

金する」

団長

「報復が地味にキツイ」

カリオストロ

「じゃあ誉めろ、褒め称えろ、オレ様の可愛いさに見惚れ倒せ」

団長

「なんじやい見惚れ倒すって」

カリオストロ

「答えはイエス」

団長

「わかりましたよ」

「ところで団長さん」

「はい？」

「服の話で思ったんだけど、団長さんって全然服装変わらないわよね。

同じ服何

着もあるの？」

「ええ、まあ」

「基本パーカーに鎧だもんな」

「楽なんだよパーカー」

「いいじゃん、フードがあると便利だぞ。結構多いしそう言う服装」

「ダメじゃねえけど、お前あれしかねえだろ。しかも同じ色で、下も装

備以外ス

エットパンツばっかだし。パーカー何着なんだよ実際」

「10着」

「同色同種で10着!？」

「(笑)」

「お前マジで他持っていないの……?」

「ジョブ用装備なら」

カリオストロ 「普段着だよ！」

団長 「色違いで5着」

クロエ 「色違いってパーカーの？」

団長 「うん」

カリオストロ 「結局パーカーじゃねーか!!」

クロワ 「どこで買ったのよそれ……」

団長 「旅出ですぐシエロさんとこのセール品で」

クロエ 「ウケる。だんちよパーカーガチ勢かよ（笑）」

カリオストロ 「なんだってそんなパーカーだけ」

団長 「故郷で近所の人からお古のパーカー貰って着て以来、なんか楽だか

ら自然と

パーカー着てる」

コルワ 「なんか、あれね……おじいちゃんとかが、勿体ないからって孫の古着

貰って着

てるみたいなき感じかしら……」

団長 「例えがおかしい」

クロエ 「超ウケル、わら。村にいたわそーゆう人」

クロエ 「パーカーとスウェットって、ほぼじもぎだけじゃん」

団長 「じもぎ？」

クロエ 「地元でしか着れない系のヤツ」

団長 「ああ……なるほど」

カリオストロ 「お前今度一緒に服買うぞ」

団長 「ええ……」

カリオストロ 「ええ、じゃねえ」

カリオストロ 「仮にも名うての騎空団の団長がパーカーしかねえってどういう事だ

よ」

団長 「仮にもって……」

カリオストロ 「この天才美少女錬金術師のオレ様がいる騎空団の団長なんだぞ、

ちった洒落た

服の一つ買え」

団長 「洒落た服とか言ってもな」

カリオストロ 「フォーマルな服何着かねえと困るだろうが色々」

団長 「俺よくわかんないし」

コルワ 「安心なさい、私たちも付き合うわ！」

クロエ 「クロエもおろく！」

団長 「や、ご迷惑ですし」

コルワ 「気にしないの！ 団長をフォローするのも団員の役目よっ！」

クロエ 「はげどう！ とりまぱいせんの部屋でだんちよオシヤレ会議やろっ

か!!

、（。△。∥。△。）ノ!!」

団長 「会議で」

カリオストロ 「いいや、やるなら本気だ！ オレ様達でどこ出しても恥ずかしくな

い騎空団の

団長にしてやる」

団長 「クロエちゃん達の服の話から何故俺の服選びの話に……」

クロエ 「そんじゃ、だんちよぱいせんの部屋れんこーしまっす！（。・ω・。）

ノ∥3」

団長 「ええ……」

【クロエが退室しました】

【団長が退室しました】

カリオストロ 「よし、コルワも来い。部屋広くしとく」

コルワ 「オツケー！ なんなら一から团长服デザインしてもいいわ！」

カリオストロ 「頼もしいな」

コルワ 「じゃ、後で！」

カリオストロ 「おう」

【カリオストロが退室しました】

【コルワが退室しました】

その後カリオストロの部屋に集まった四人。カリオストロ達かしまし娘三人にいじられつつ、团长にはまるキマツた服を色々考えられた团长は、後日服屋にて着せ替え人形と化した――。

「これなんか良いかもしれないわよ？」

「ああ……悪くないが、コイツの雰囲気じゃもうちよい攻めても良いんじゃないか？」
「けどけどお、ゆーてだんちよ地味メンだしハデハデじゃだんちよの方が負けんじゃない？」

「一理アルナ」

「それより、こつちなんか团长に合うと思うんだけど？」

「こつちも似合うと思うぜ？」

「あの服とかモデルとして着てくれたら助かるわ……あ、これも良いかも……」

「待ちたまえ。団長にならこれが丁度よいのでは？」

が、その場にはカリオストロ達以外も来ていた。と言うよりも、団の女性全員である。思わず冷や汗を流す団長。

「あの……なんで人数増えてるのでしょうかね？」

「面白ソウダカラナ」

「確かに団長は服のバリエーションないからなあ。ちょうど良い機会じゃないか」

「——!!」

「ゾーイにユグドラシルまで……」

「み、みんな……団長を思つての事だよ……多分」

「多分て……」

「主殿、あつちの俺様系の服着て罵ってくれないか？」

「それもうファツションの趣旨からはずれてる……」

「ねえねえ、こんなのあつたわよっ！ ちよつと着てみなさいよ！」

「ハデハデのピカピカじゃっ！」

「まぶしっ!? 目に厳しい服持つてくんなっ！ つか、仮装用じゃねーか!?!」

ワイワイと……団長達の集団は、しばらく服を選び団長が最早抵抗もなくなる頃、カジュアルとフォーマルで選び抜かれた“団長に丁度良く、良い感じにキマってる服”

を数着服を購入。

疲れ果て艇に戻る団長であったが、心なしか皆に選んでもらい買った服を見て嬉しうであつた――。

アナザーストーリー ゆく年くる年

一 ゆく年くる年

数多の島があろうと、空域が瘴流域で遮られようと、人々はどこでも生きています。世界は確実に時を刻み人々も歳を取る。そして世界はまた一年と言う区切りを終えるのだ。

そして新しい年を迎えるために人々が目指すのは、この島にある今年の歳神を祭る神宮。そこへと向かう行列の中に俺達も混じっている。目的は当然初詣、そしてその後初日の出を見るためだ。

理由として俺達が初日の出を見たいこともあるが、今年もまた去年同様ジータから手紙が届いたのもある。

『今年はこの島で初日の出を見ようよ。もちろんそのまま初詣だよ！』

去年のこともあるため、今年も手紙が来る事は予想していたが、案の定手紙からは「来てね！」と言う微笑ましい文面以上に「いいから来い」と言う念を感じた。こえー

なあ。

ともあれ新年明けて最初のお出かけである。みなで神宮を目指し日の出が見える場所を探す、なんとも人の多いこと。

「去年と違う場所なのに混み様は同じだなあ」

「十二年に一度の開帳だからね。その年の神宮には、皆駆けつけるのさ」

干支を司り祭る神宮があるのは、一か所ではない。神主を務める「十二神将」達の名が示す通り、各地十二か所の神社がある。

その地に関しては色々と呼ばれているが、今はそこまで気にしなくていいだろう。重要なのは、どこにあるかと年が変わる前後には、その場所に人々が押し寄せるということだ。

去年参拝した神宮とは別の場所というのに変わらぬ混雑具合に魂消る俺であるが、コーデリアさんは落ち着いた様子だった。

「ケヒヒツ！ 夜でも賑やかだなあ〜！」

興奮した様子のハレゼナが、ピョンコピョンコと跳ねながら辺りを見渡している。人の多さもあるが日が昇るまで境内では、思い思いに時間をつぶす人達が多く思いのほか賑やかに感じる。

そしてなによりも参道にズラリと屋台が並んでいる。目的の社のある場所まで続い

ているらしいこの屋台の数に魂消るばかりだ。

「しつかしまあ、すげえ屋台の数」

なんとも平凡なコメントを呟くと、カルティラさんが“うんうん”と唸った。

「新年最初の稼ぎ時やもん。しかも靈験あらたかな十二神将の島、商人も空域中から来るのは当たり前や」

「そりやそつか」

「うちも出店考えたけど、やっぱ新年はのんびりすることにしたわ。なんせ疲れる騎空団やからなあ」

「自分で仲間になつたくせに」

「にししししい〜！」

そんな会話をしていると、ハレゼナがそわそわと俺の袖を引く。

「なあなあ、団長〜！ せっかくだしよおう！ ボク達も屋台見ようぜえ〜!!」

「ん？ んむう……」

ジータ達との待ち合わせもあるのだが、少し早く着いたのでまだ時間には余裕があった。屋台を楽しみながら歩くのも悪くないだろう。

「じゃあそうするか。別行動するのもいいけど、ちゃんと神社の方には来ること」

「酒ノ屋台トカ無イノカ？」

「御神酒はともかく、流石にもろ境内じゃ酒売らねえだろ」

「残念だ」

「甘酒で我慢せい。アルコールは、エンゼラ帰ってからだ」

「シカタナイナ……」

そんな成り行きで道を進みながら屋台を楽しむ事となった。酒が無いとわかりテイアマトは残念そうだが、楽しむと決めれば途端に俺はワクワクとしてきた。

皆で色んな屋台に目移りしそうになりながら、チョコバナナやりんご飴なんかを買って食べ歩きを楽しんでいた。

「俺普通のチョコバナナ」

「オイラはりんご飴」

「だと思つたよ」

凄く美味しい、と言う事は無いのだがこの場の雰囲気ですらに美味しく感じるチョコバナナ。幾らでも食べれてしまいそうさ。

「どれもこれも美味しそうだなあ」

「……おい、あまり気を緩めるんじゃない」

「うっ!？」

どうも気を緩めすぎたのか、エゼクレインさんに少し注意されてしまう。

「年始とはいえお前は騎空団の団長だ。場の空気で見を抜かすような真似はするな」
「お、おっしゃる通りです……」

「まあまあ、良いではないか。せつかくの正月なんじゃ」

思わず縮こまってしまっていると、何時の間にかつたのか、イカ焼き（ゲソ）を食べながらヨダルラーハさんが助け舟を出してくれた。

「ヨダルラーハ……」

「団長も年を越せてホツとしとるんじゃよ。多少の緩みは、大目に見てやろうではないか？」

「それはわかっている。小姑であるまいし、俺とて正月まで神経質になる積もりはない。ただ自分の立場を忘れるなど言いたいだけだ」

「あ、はい。もちろん重々承知です……」

「わかっているなら構わん」

「きつちつちつち……！ お前さんは、真面目じゃのう。ほれ、イカ焼き一本食うか？」
「……貰っておこう」

エゼクレインさんは、少し迷ったようだったがヨダルラーハさんからイカ焼きを貰うと黙々とそれを食べていた。

俺としては、エゼクレインさんの言葉はありがたいものだった。なんやかんだで今の

ようにきつく指摘してくれる大人の男性と言うのが団には居なかった。同時にヨダララーハさんのように、場を収めるのが旨い余裕を感じる大人も嬉しい存在だ。

ある目的のために旅に同行しているエゼクレインさんは、まだ「仲間」と言うには違うのだが、それでもコーディネリアさん達を始め頼もしい年上が増えてくれた事は、非常に良かったと思える。

「ドコカデ酒売ツテナイカ……」

「寒い日は、おしゃげ飲みたくなるにやあ〜」

一方でこの飲兵衛達。星晶獣とか年上とは思えない、そして思いたくない姿だ。

人生いろいろ、大人も色々。少なくとも将来飲兵衛にだけはなるまい、彼女達を反面教師とし、そう俺は強く誓った。

二 運試「C」

神社の拝殿へと到着すると既に参拝の列も出来ており、鈴緒が揺れて鈴の音は止むことなく鳴り響いていた。

辺りを見渡すがジータ達の姿は見えず、まだ来ていないようだった。

どうしようか少し悩むが、まだ日の出にまで十分時間があつた。

「どうすんだ相棒？」

「そうさな、時間もあるし……さて」

「なあ団長」

ジータ達に来るまでどうするか考えていたら、ゾーイが俺の袖を引いて来た。

「うん、どうした？」

「あつちにも人がいるようだが、あれは何をしているんだ？」

ゾーイの指さす先、その拝殿とは別の建物では、運勢を占うおみくじがおかれていた。おそらくこの時期のみの手伝い巫女さん達が参拝客の相手をしている。

「あー……あれは、おみくじだな」

「おみくじ？」

「主に今年一年の運勢を占うのさ」

「ほほう、ヒトは面白い事をするんだなあ」

なにか気になるのか、ゾーイは興味深げにおみくじの方を見ていた。

「せっかくだしやるか？」

「いいのかい？」

「ジータ達まだだしな。このぐらいいいよ」

「そうか……ありがとう団長。それならやってみよう」

ゾーイは嬉しそうにおみくじに向かう。ついでに俺含めて何人かもおみくじに挑戦する事となった。

「ここで一つ、今年一年の運勢を確かめさせてもらいたいね」

「ダメなんじゃないの？」

「そうハッキリ言う？」

心底興味なさそうにメドウ子に言われてしまう。実に不本意である。

「年も明けてる時点で占ったって何も変わらないわよ。どうせ悪い結果なら態々見る事ないでしょ」

「おま、お前……お前見とけよ!? なんだその、あれだ……悪い結果とは、決して限らないし……だから、あれだぞ……限らないからな!」

「その台詞からしてダメそうだぞ主殿」

「じ、自信のなさが出ちやつてるよお……」

「大吉引いたるわいコンチキショーウツ!!」

シユヴァリエとセレストにまで哀れみの目を向けられてしまった。何たることか。

だが俺は認めんぞ。おみくじは引くまで結果はわからないのだから。

「巫女さん、人数分! おみくじ一回づつツ!!」

ザンクティンゼルを旅立ち騎空士として、騎空団団長として、盗賊魔物に星晶獣、そ

して時にジータ……あらゆる脅威と戦いなんとか生き残ってきた。その旅で培った集中力、そして“念”。すべてを込めて幾数ものおみくじが入った箱へ手を入れる。そして “これだっ！” とする直感を頼りにして一枚のおみくじを引き抜いた。

「これだあ——っ!!」

「うるさいわよ」

「うげっ!」

引いたおみくじを天に掲げていたら、メドウ子に小突かれた。

「次引くんだから早くどきなさいよ」

「……お前おみくじ否定的だったのに引くのな」

「う、うるさいっ! いいでしょ別に、人間の習慣に合わせてやってんのよっ!」

「メドウ子も早く引かぬか。妾達も引くんじゃから」

「わかってるわよ! ……これよっ!」

そしてメドウ子は、のじや子に小突かれくじを引き、そしてのじや子達もおみくじを引いていった。

しかしどちらかと言えば崇められる側の星晶獣が列になっておみくじを引こうとしているのは、冷静に考えると奇妙な光景である。

「ゾーイも引いたな」

「ああ、運に任せて引いてみたよ。ところで団長、これはどう言う結果が出るんだい？」
「えつと……吉凶が書かれてて、後は細かい運勢かな」

「ほほう……」

「それじゃ結果見てみるか」

「アンタはどうせ一番悪いやつよ」

メドウ子の奴がニヤニヤしながらからからかいやがる。

「言つとけ、お前こそ凶でも落ち込むなよ」

「偉大なる星晶獣のアタシが、凶なんてありえないから」

「へいへい……では、いざっ!!」

俺の合図で皆折りたたまれていた紙のおみくじを一斉に開く。

そこに書かれているのは、吉凶の結果と細かい運勢の羅列。

「だい……吉？」

「お、ゾーイそれ一番いい奴だぞ？」

「そうなのか？」

「ああ、大吉な。良かったじゃん、新年最初から幸先いいな」

「そうか、一番良いのか……ふふ、そうか」

ゾーイは大吉と書かれた小さな紙を嬉しそうに眺めている。とても微笑ましい、新年

最初の癒しパワー頂きました。

「お、アタシ中吉っ！ え〜つと？ 【失物】が『根気よく探すべし』……だって。これトレジャーハントも期待していいのかしら？」

「私は【旅行】が『けが注意』だねえ。あはっ！ これはあぶ〜い遺跡期待していいかな〜？」

「……アタシ【旅行】に『同行人に注意』ってあるけど、これカルバの事かしらね」

「まーまー、何時ものことじゃない」

「次別行動にしようかしら……」

「自分の【願い事】は……『身の丈に合った願いは叶うでしょう』っ!? な、なんでありますかこれっ!？」

『随分と見透かしたような結果が出たな』

「うぐぐう〜……っ！ 叶うのか叶わないのかどっちでありますかあ〜っ!？」

『身の丈に合っつれば叶うんだろな』

「リヴァイアサン殿、少しはフォローして欲しいであります……」

『カカカ……ッ!』

皆それぞれ自分の結果に一喜一憂している。これもまた微笑ましいじゃないか、ちよつと一部落ち込んでるが。

「さて、俺の方はどんな結果か」

「おや……団長、君にも“大”とあるよ？」

「お、マジ？」

俺の親指で隠れるおみくじの吉凶であるが、その一部が“大”とあり、それが見えたゾーイに言われ期待が高まる。これはもう大吉確定である。

「俺も今年は、幸先良い——」

「どうした相棒？」

「……だい、き？ えっ？」

「大吉か？」

「ううん……大凶」

「大凶ッ!？」

「うん……大凶」

大凶、大きい凶。凶のSSR。リミテッド・凶。

「まつ!？ ヤバ、だんちよ大凶引いたん!？ 〃。㇏。；ノ!!」

「お遊びならともかく、こう言う場では初めて見たわ……」

クロエちゃんやコルワさんが、とても珍しそうに俺の引いた大凶のくじをみる。俺も何度も見たが、やはりそこには大凶とある。何度見ても大凶とある。

「ふへ……俺だけ出現率二倍だったのかな？」

「放心するな相棒。それで……内容はなんてあるんだよ？」

「ん……」

B・ビイにおみくじを渡す。大凶の後には短く俺の運勢が書かれているが――。

【願い事】 “暫く叶わない”

【待ち人】 “直ぐ来る、危険、背後注意”

【失物】 “希望は失わないように”

【旅行】 “主に道中落下注意”

【商い】 “利益を得ても油断せず、借金は注意”

【学問】 “根は詰めぬこと”

【争い事】 “引けぬ、逃げれぬ、避けれぬ”

【求人】 “如何なる者が来ても心を強くして迎える”

【縁談】 “縁は多し、だが居を構えるまで止めた方がよい”

【転居】 “すべき事を終えてから”

――である。

「すげえな。今までの相棒の行い見て来たような結果だ……」

「諸々酷いわね……」

「えらくピンポイントなのもあるな。【待ち人】の背後注意ってなんだよ、刺されでもするのよ」

「うう、なんたること……こ、こう言うのってどうすればいいんだっけ」

「えーとね……確か神社の木の枝とかに結び付ければ良いって聞いたことあるわ」

「そ、そうなんですか？」

思わぬ結果に狼狽えてしまうが、コルワさんからとても良い情報が出てきた。

「神様のいる神社に縁が出来るとか、利き手と逆で結べば吉凶が転じて良い結果になるとか……まあ、色々言われてるわね。はつきりしないけど」

「それじゃあ大吉とかは結ばないほうがいいのかい？」

ゾーイが少し残念そうに聞くが、コルワさんは「大丈夫よ」と言う。

「昔におみくじ引いた誰かが始めた勝手な風習だろうし、好きに解釈すればいいと思うわ。良い結果ならお守りの代わりに持ってて良いし、結ぶなら神様との『縁結び』と思えばいいのよ。星晶獣に言うのも変な気もするけどね」

「ほほう」

「団長さんの方は、厄除け的に結べばいいわけ」

「な、なるほど」

「ま、効果の方はわからないけどね。ようは気持ちの問題なのよ」

コルワさんの話を聞いて直ぐ辺りを見渡す。すると確かに周辺の木々の枝には、無数のおみくじが結び付けられていた。なるほど、あれに結ばばいいわけだ。

「多少で良いから運勢良くしてくれ……」

コルワさんに聞いた通り利き手とは逆の手で結びつける。気持ちの問題と言うが、まさにそれなのだ。少しでも気持ちの良い方に向けたい。おみくじの内容は、教訓として心に刻んでおくんで変な事が起きない事を切に願う。

結ばれたおみくじを見て念を送っていると、こそこそと枝におみくじを結ぶ姿が見えた。

「……メドウ子？」

「うっ!？」

隠れたつもりで結んでいたのだろうが、普通に見えていた。キツチリ利き手と逆で結んでいる。

「な、なにかしら?」

「お前……」

「言つとくけどっ!?! 言つとくけどね、人間の風習に合わせてやってるだけだからっ!!
それだけだからっ!」

「お前、おみくじキョ——」

「『大吉』だったけどなにかっ!？」

「メドウ子『凶』じゃったろ?」

「言わないでよっ!?!」

狼狽え具合でバレバレであったが、メドウ子の誤魔化しも空しくアツサリのじゃ子にバラされていた。

「……星晶獣も、引くもんだな……凶……」

「うっさい! アタシは別に気にしてないし、こんな紙切れの結果なんて知らないっ!」
その割にコルワさんの話も聞いて枝に巻いている。まあ言わないでおいてやるとする。

なお団員で大凶と凶を引いたのは、俺とメドウ子だけだったもよう。

「……大凶よりはいいじゃん」

「気休めにもならないわ……」

大凶人間と凶星晶獣。今ここに『最凶のコンビ』が誕生してしまったが、まったく嬉しくない出来事であった……。

■ 三 初日の出ッ! お前ら、拝めッ!!

一切良い意味の無い『最凶コンビ』となつてしまつた俺とメドウ子であるが、そんな事は関係なく時は進み日の出も間近となつてくる。

他の参拝客も日の出が見える所へと集まり出していた。

「相変わらずね〜人間達つて。ただの日の出観るために、よくこんな集まるわね」
集まる人々の姿を見てメドウ子が呆れた様子でいる。

「去年日の出奇麗だつて言つてたくせに」

「うっさい。別にそこは否定してないわよ」

「わかつてるよ」

人間の習慣風習に疑問を持つのは、彼女に限らず星晶獣にはよくある事だ。

霸王戦争と言う戦乱の中、人も星晶獣も自然の美しさを楽しむ暇も無かつただろう。もとよりそんな習慣も風習も無い星晶獣にすればなおさらの事である。

戦争が終わりティアマト達のようにこの世界の島に根付き、あるいはガロンゾで出会つたノアのように各地を転々とする星晶獣であれば、人間の生活に馴染む事もあつただろう。だが人間との交流を避ける星晶獣の場合そうとはならない。何であれば敵対すらする事もある。

メドウ子の場合の後者だ。人間との交流をせず時にちよつかいを出していた。星晶獣である事を誇りとしており、人間と言う種族を下に見ている。その考えが変わつたと

は思わない、だが同時に変化していると俺は信じている。

友であり家族、そして半身たるメドウシアナとだけの生活では見えなかつたモノが、今俺達との生活で見え始めているのではないだろうか。文句を言いながらも、騎空団“と言う人間の生活に馴染み生きていくのだから。

彼女以外の星晶獣もまたそうなのだろう。先程人間の風習に興味を持っていたゾーイが良い例だ。

「オイ、アツチデ甘酒配ツテタゾ。ホレ」

「お、サンキュ」

手に二つのコップを持ったティアマトが現れ一つを手渡してきた。境内では温かい甘酒が参拝客のため配られている。

「冷える身体にしみるねえ……」

「アルコールがあればもおくつと温まるにやあゝ」

「マツタクダ」

「エンゼラ帰るまで我慢な」

二人揃って「ブーブー」と不満げなティアマトとラムレッダ。これは変わり過ぎの例なんだろう。星晶獣（笑）は伊達じゃない——褒めてはないが。

「ぶは……っ！ はあゝ……異国の甘酒も美味しいですなえ」

他の団員も甘酒で冷えた体を温めていた。

「ミリンちゃんは、頬を寒さで赤くしながら、熱い甘酒を飲み吐息をより白く染めた。」

「ミリンちゃんのところは、甘酒の味が違うのかい？」

「そんなに違いはありませんが、拙者は夏に生姜を加えて飲むのが好きでした！」

「生姜を？」

「はい！ 生姜を入れてサツパリとした味にします。暑い日でも美味しく飲めるんですよ！」

「へえ、良いね。今度真似しようかな」

「ざざざ！ 是非とも！」

「ミリンちゃんもまた何か変わろうとしてるのだろうか。」

「遠い故郷の島から一人見分を広めるため旅に出た侍少女。奇妙な縁で出会い噂で」

「奇天烈な」とまで言われる我が騎空団に入った彼女だが、果たしてちゃんと見分を広め

「れるのか不明である。色んな島に行く度に楽しそうなので大丈夫と思いたい。」

「団長っ！ 日が昇って来たぜっ！」

「おっと」

「フェザー君の元気な声につられ地平線を見る。境内に灯された松明程度しか明かり

「の無い空間が、徐々に淡く照らされていく。」

大きく明るい初日の出が姿を現し更に世界を照らす。暗闇が無くなり、冷えた空気も温められる。この場に集まった人々も、思い思いの反応をみせていた。

「ああ〜……この眩しさ、気持ちが悪くなるようだ」

「初日の出ならではだね。新年の始まりに相応しい光だ」

全身で浴びる日の光にありがたみを感じる。コーデリアさんの言うように、初日の出の光は新年に相応しい光だ。

さっきのおみくじの結果さえ些細な事に思えて来た。

「……よしっ！ 気分切り替わった！」

おみくじは枝にも結んで来たしこれ以上気にしても仕方ない。

「心機一転！ 運勢に惑わされず今年を良い年にしてやるぞー！」

「さっきまでへこんでた癖に言うわね〜」

初日の出に向かいながら、自身に気合を入れていたらメドウ子がからかって来た。

「そう言うなよ、俺達揃って最凶コンビじゃん」

「そんなコンビ解散よっ!?! 結成したつもりもないしっ！」

まあ、俺も結成したつもりはない。

「で、どうする相棒？ 先に参拝しちゃうか？」

プリプリ起こるメドウ子の拳を受け止めていると、B・ビィにこれからの事を言われ

少し考える。ジータ達はまだ居ないようなので先に参拝を済ましてもいいが、俺はもう少しジータを待つてからでもいいだろう。

「みんなは先済ませていいよ。俺はもう少しジータ達を待つ——」

「おにい——ちゃんっ!! 明けましておめでつとお——うっ!!」

「うぶえっ!!」

「ふげっ!!」

「団長殿お——っ!!」

「うわあ、メドウ子ちゃ——んっ!!」

聞きなれた声がしたかと思つたら、戦艦の砲撃かと思うような衝撃を背中に受ける。そしてそのまま俺は、前に立つメドウ子に衝突、吹き飛ぶようにメドウ子と共に地面へ倒れた。かなり強く倒れたので、ユーリ君とマリーちゃんが驚き叫んでいた。

「あ、兄貴無事かあ——っ!!」

「馬鹿野郎ジータ!! 新年早々また兄貴再起不能にする気か!」

「そんな事しないよっ!! ……いや、またでもないしっ!!」

そして少し遅れて駆け寄るのは、やはりビィやラカムさん等ジータ率いる騎空団の仲間達。去年の年始も彼女のタックルで始まったのを思い出させる。

「やはり最凶コンビ」

「気の毒コンビじゃのう」

地面に倒れる俺達を見てB・ビィとのじゃ子は、納得したように頷いている。

そう言えば結んだおみくじの「待ち人」には、「直ぐ来る、危険、背後注意」とあつたのを思い出す。

「……おみくじつて凄いんだな、メドウ子」

「いいからっ！ 退きなさいよ……！ 重い……っ！」

メドウ子が腹の下あたりでウゴウゴもがいている。おみくじの凄さを感じつつ、ジータの変わらぬ元気な様子に呆れつつ少しホツとする俺だった。

四 二大ビックリどつきり騎空団

「だ、大丈夫かよ兄貴？」

「すまねえ、お前さんの姿見た途端走り出して止められなかった」

「オ、オイゲンさん……いえ、お気になさら、ず……ぐぐう……」

遅れて駆け付けたビィやオイゲンさんに助け起こされながら腰をさする。一瞬曲がっちゃ駄目な方向に曲がった気がしたが、多分大丈夫だったろう。

「あんたねえ!? こんな人混みで、あんな速度で突っ込んでくるんじゃないわよ！ 危

ないでしようが!？」

「はい、ごめんなさい……………」

「ぶつかったのがアイツとアタシだったからよかったけど、普通の人間だったら無事じゃすまないからね!？」

「すみませんでした……………」

そしてジータは、衝突に巻き込まれたメドウ子にお説教を受けていた。あと自然に俺を普通の人間扱いしてない、極めて遺憾である。

「そ、それより、皆さん……………あ、あけまして、おめでとうございます……………あいたた……………」

「あ、ああ……………明けましておめでとう……………」

「えつと……………ほ、本当に大丈夫なんですかっ?？」

「こんな苦しそうな新年の挨拶初めてだわ……………」

困惑するカタリナさん、狼狽えるルリアちゃん、呆れるイオちゃん。すまねえ、こんな新年の挨拶をしてしまい。

「まあこんな調子ですが、なんとか夫々無事新年を迎えられて良かったです。そちらもお変わりなく?？」

「ああ、ジータは始終あんな調子だが……………つまり何時も通りだよ」

「元気に面倒事に首突っ込んで解決してるぜ。相手が帝国だろうと星晶獣だろうとな」

「うわあい、ほんと何時も通りだ」

苦笑するカタリナさんとラカムさん。あらゆる問題を勢いと物理で解決。出来てしまふ。からなこの娘は。振り回されるカタリナさん達は、さぞ大変だったろう。とても申し訳ない。

「面倒かけて申し訳ありません……」

「気にしなくていい。結果的に彼女には、色々助けられているからね」

誤魔化す様な様子も無く語るカタリナさん、きつと本心だろうと思う。ジータは本当に良い仲間に出会えた。ジータに振り回される団員には、申し訳ないと思いつつも仲間になつてくれてありがたいと思う。

「そつちも変わりないようだな」

「ええ、まあ……変わりなくと言うか、何と言うか……は、ははは……」

あまり変わらないのも困りものだ。

「とりあえず皆集まりましたし、参拝しますか」

「ああ、他の参拝客も更に大勢来るだろうからな」

初めから参拝客は多かつたが、日の出と共に更に増えていくのがわかる。カタリナさんの言うように、あまり混雑してくると移動も大変になつてしまう。

「メドウ子、その辺で良いよ。一応反省したろうから」

「一応じゃないよ、ちゃんと反省したよう……」

しょぼんとしてるジータ、去年も俺にぶつかつてるので流石に反省はしてるだろう。だがその上でこの娘は「こんどは大丈夫！」と謎の自信を持って行動する。あるいは単純に忘れてるのか。

何であれ、来年は俺も忘れず用心しよう。

「そいで初詣終わつたらエンゼラでいいよな？ 去年と同じで」

「あ、そうだね。そう思つて私達も持つてける料理作つておいたの」

「そりゃ助かる。なにせ人数多いからな」

「あと今年はね、シエロさんに頼んで白と杵借りて来たよ！ 皆でお餅つきしよう！」

餅つきか、なんとも正月らしい響きがする。

「お餅つきでしたら拙者も！ 故郷でもお正月には、よくお餅を ついておりました！」

「臼を突くなら俺もやらせてもらうぜ！ 拳でもいいぞ！」

それなりに力仕事となる餅つきだが、だからこそやりたいと言う者もいる。気合十分のミリンちゃん、そしてフェザー君。特にフェザー君は疲れ知らずだ。つかせる場合突き過ぎないように注意した方が良さだろう、最悪餅を通り越し「糊」になつてしまう。

しかしジータとの会話をきつかけにこの後の予定で浮かれた調子になつてくる。正月に二つの騎空団が揃つての宴会となると、それはもう盛り上がるので当然である。去

年も実に愉快的な宴会だったのを思い出す。

「ラムレッダ、今年も良い酒見つけて来たぜ。後で飲もうや」

「オイゲンさんのオススメ！ それは期待大にや！」

「ラムレッダ殿、去年もそのような調子で飲み過ぎて、最後ジミー殿に怒られていたではありませんか」

「にやつ!? それは……ほ、ほら? やっぱり、年に一度のお正月だし、にやつ? にやは、にやはは……」

「……」

「にゃあつ!? だ、団長きゆんが去年以上にゴミを見るような目で……つ!?」

「……ラムレッダ、去年もそうだが確かに正月なんだ。俺も飲むなどは、飲むなどは言わん」

「にゃ……はは? じゃ、じゃあ」

「言わん、がつ!!」

「にゃひつ!?」

「程々、程々にしなさい。ね? 頼むから」

「は、はひ! 気を付けます!!」

俺は新年早々、またラムレッダの世話と“口からレインボー”の始末をするのは御免

蒙る。

だが、きつと……ダメなんだろうなあ、と俺は諦めていた。

「そう言えば、アンタ。ちゃんと今年の用意してるんでしょね？」

ラムレッツダに呆れていると、今度はメドウ子がよくわからない事を聞いてきた。まるで去年俺が何かを渡し忘れたような物言いだがまるで覚えがない。

「……なにを？」

「なにがじゃないわよ。アタシ知ってるのよ、〃お年玉〃の事」

お年玉、その単語を聞いた瞬間俺に衝撃が走る。

「お、お前……どこでそれを」

「アタシだって人間の風習を調べる事だってあるのよ」

〃ふふくん！〃と胸を張るメドウ子。一方俺は穏やかではない。

俺とお年玉の事は当然知っている。だが俺はうちの騎空団でその存在を無い事にしてきた。だってお金貰えるって知ると面倒臭そうな奴ら多いんだもん。そもそも俺はまだお年玉を上げる側の年齢ではないはずだ。流星に貰う側とは言わないけどもさ。

「お、お前別に金そんな必要無いじゃん……！」

「確かに人間のお金になんて大して興味ないわ。けど貰える物が貰えないってのもなんか嫌」

「……ダメです」

「なんでよお!？」

「お年玉は子供が貰う物です。偉大なる星晶獣が貰う物ではありません」

「あ、うう……」

ヨシ、これでよい。子供が貰う事強調してやらあプライドの高いメドウ子のことだ、諦めてくれるだろう。

「おつとだんちよ!?! ? (。▽。) それだとクロ工達つてえくお年玉貰えちゃうかんじい?！」

「だつたらく? アタシとカルバも団長より年下、よねく?！」

「藪蛇いッ!？」

うちの俺の年齢以下のメンバーが獲物を見つけた目をして俺を取り囲みだした。

「ええい、散れえ!?! 普段ちゃんと団員としてお金あげてるでしょーがっ!？」

「だとしてもお年玉は、正月最大の子供の楽しみよ! 団の長なら日頃頑張る団員に労いとして、配ってくれても良いと思うわ!！」

「元々トレジャーハンターで自立しとる娘が何を言うか!？」

「団長はん! お年玉は、年齢立場関係無しで欲しいし貰えば嬉しいんやでっ!！」

「……やっぱりアタシにも寄りこしなさい!！」

「大人ああ——っ!?!」

ついにカルティラさんまで混ざり出した。しかも彼女の言葉のせいで、思い悩んでいたメドウ子が再びお年玉を寄越せと言いだす始末。畜生、さては楽しんでやがるな、畜生。

「うちの騎空団には、お年玉システムはありません！ 以上ッ!! いいから参拝の時間だオラァー！」

「逃がすかつ！」

「確約させるまで参拝させないわよ！」

「囲め囲めー！」

「よくわからぬが、妾もお年玉とやらが欲しいぞ！」

「よくわからんなら欲しがんな!?!」

「お兄ちゃん、私も欲しい！」

「混ざんなっ!?!」

「ザンクティンゼルじゃ毎年くれてたもん！」

「今の立場つてもんを考えろ別騎空団団長お!?!」

「物でも可っ!!」

「喧しいわっ！」

俺を取り囲むお年玉包圍網、それにもみくちやににされながらも、正月全世界の父親達の苦悩が多いに分かった気がしたのだった。

■ 五 団の長二人

お年玉包圍網から逃れなんとか参拝を済ませた俺達は、エンゼラで再度集まり新年の宴会となった。

お互いに用意した料理に舌鼓を打ち、新年の御馳走を皆で楽しむ。酒を飲む者も多いため、直ぐにどんちゃん騒ぎとなって行く。

俺は宴会中でも料理の追加や酔ったラムレッダの相手やらなにかと忙しいのだが、そうした中やつと一息付ける時間をみつけ、一人甲板で風に当たりに行った。

気温は低く相変わらず肌寒いが、動き回り熱くなった身体にその寒さが心地よく感じる。

遠くを眺めていると、幾つもの騎空艇が島に近づいてくるのが見えた。日が高くなっても参拝客の足は止む事は無いようだ。きつと暫くこの調子で騎空艇が島を目指すのだろう。

島の陸の方を見てみるとエンゼラからも見える場所で幾つか凧が上がっているのも

見えた。大きく派手なデザインの凧もあるので遠くで見ても中々面白い。

「あ、お兄ちゃんいた!」

「ん……ジータか」

正月の風物詩と言える光景を眺めているとジータが現れた。

「何見てたの?」

「遠くでな、凧上がってんだ」

「あ、ほんとだ! 面白いね色んな絵の奴もあつて」

ジータは俺の横に立つと直ぐに凧の場所を見つけた。俺も見つけていたし確かに見えなくもない位置ではあるのだが、一瞬で凧の個々の違いまで「見えた」らしい。やはりただ者ではない。

「いいなあ、後で私達もやらない?」

「凧がねえよ」

「……お兄ちゃんが布で凧受けて」

「絶対せんからな」

なに自然と俺で凧上げしようとしとるんだこの娘。高いところ最近苦手なんだよ、落ちるから。

「冗談だよ」

「本当だろうな……」

割と本気だったきもする。

「しかし正月って大変だ……新年迎える前も後もやること沢山だよ」

「けどその分楽しいよ」

「楽しい、ねえ……」

「……楽しくないの？」

「……」

「楽しくない」、そう否定できるわけがない。だって楽しいのだから。

今日に限らず忙しいし大変な日々だ。きつと今年も大変な目に遭うだろう。借金も返済は先になるに違いない。そんなのおみくじを引かなくても分かっていた。

だがそれでも、自分で選んで決めたこの空の旅、その中での出来事は、何時だって楽しかったと最後に思える。

「まあまあ楽しいさ」

「む、なんか素直じゃない」

とは言え、素直にそう言う事言っちゃうつもりもない。迂闊にそう言う事言うとジータも他の星晶獣（笑）共が調子に乗る。

「さて、戻るかな。餅つきの準備もせんといかん」

「そうだ、お米の準備！」

「今から蒸せば丁度いいだろ」

「うん、早くしよ！」

駆け足で船内に戻るジータ。もう頭は餅の事でいっぱいのようなのだ。

きつと彼女こそ世界が楽しい事で溢れてるんだろう。誰よりも、俺よりも、人一倍外の世界への憧れを持っていたのだから。

「……なあ、ジータ」

「なあに？」

「んつとな……確か街の市場にシエロさんいたよな」

「うん、まだお店いると思う」

「じゃあさ、餅食つてからでいいけど……風売つてないか見に行かないか？」

「え!？」

「驚くこたあないだろ……俺も興味はあるんだよ。嫌ならいいけど」

「嫌じゃない！ 行く、絶対行く！ 皆も誘おう、ルリア達も絶対やりたいつて言うよ

！」

「そうだな……うん、皆で買おう」

楽しみは、多い方がいい。皆で楽しんだ方が良い。せつかくの正月なのだから。

新春の一日、新しい年もこうやって楽しく過ごせる事を切に願う。

俺も、ジータも、団員の皆全員で。

「楽しみだなあ。一番おっきいの買おうね！ お兄ちゃんごと飛べるようなの！」

「それだけは、マジで止めろ……止めろよ？」

——なお、新春の空はクソ寒かった。

夢の冒険編

木人危機一髪

■
一 日常ですよ团长さん

■
——とある島のとある町、その食堂。

「依頼完了のご苦労様ですう。こちらが今回の依頼の報酬になります」

「どうもです」

シエロさんからルピ硬貨の入った袋を受け取る。ちよつと軽めのそれは、軽かろうが依頼達成の証である。

ふらりと立ち寄った島のそう大きくない町で偶然居合わせたシエロさんに頼まれ、急遽魔物討伐の依頼を受けたらしい。

「取り逃がしもないですし、こつちで見た限り巢のような物は無かったと思います」

「細かい所までありますがとうございます」。後は町の人でも対処できると思いますので」

「ならこつちとしても安心です」

そう値段の良い依頼ではなかったが、魔物の被害は人命に係わる。人が困っているならやらんわけにもいかん。と、思ってしまったあたり我ながらお人好しだと感じる。そしてそんなお人好しのところに、聖騎士団団長だとか更なるお人好しがいるのだから「やりません」と言う言葉が出ようもないのだ。

さてそんな魔物討伐の依頼だが、結局それはもう済んだ依頼であり特に重要でもない。何が重要かと言えば——いや、さして重要でもないのだが——どうも先ほどから無数の視線を感じるのである。

「……なんか俺妙に見られてませんか？」

「団長さんと言うより、〃皆さん〃が見られてるようですね」

シエロさんに言われ「ですよね」と返す。

依頼の事で話す俺達の後ろにある広いテーブル席には、依頼を受ける際偶然集まってしまったそれはもう濃い面々がいた。

「仕事ノ後ノコノ一杯ツ!!」

「このために生きてるにやあ〜っ!」

『酒の追加だ。普通のジョッキじゃ小さい、特大ジョッキで頼む』

「B・ビィ! あの魔物じゃ俺は語り足りないみたいだ……! この後腹ごなしに付き

合つてくれないか!」

「いいねえ、オイラも暴れたりなかったところだぜ」

「ははは……! こ、このキノコのスープは、中々美味しいなあ! 出汁がよく出て……ふふ! あはははは——っ!」

よりにもよつてこの面子、騒がしい上に目立つ。そりや注目の的にもなるうつてもんである。

「最近は慣れたつもりですがね」

「そうですかそうですかあゝ」

俺の言葉を聞いてもシエロさんは微笑むのみだ。

「だんちよおー! メドウ子がメドウ子があゝ!」

「ぐえ……!」

突如横つ腹に衝撃。何かと思えばのじや子が泣きながら突つ込んできた。

「のじや子、今仕事の話してるんだけど……」

「メドウ子が妾のケーキのイチゴ食べたのじやゝっ!」

「しようもねえ!」

「しようもないとはなんじゃ! イチゴじゃぞ、ケーキのイチゴなんじゃぞ!」

「ちよつと、一々そいつに言いに行かないでよっ!」

そして登場するメドウ子。

「だってお主がイチゴ食べるから！」

「除けてあつたし、要らないと思つたのよ！」

「妾は最後に食べる派なんじゃ！」

「じゃあ最初にそう言つときなさいよっ！」

「要らんとも言つておらんわ！」

ギヤイギヤイ騒ぐ星晶獸（笑）二人。イチゴで争う星晶獸（笑）二人。終いには互いの口をつねり引つ張り合う星晶獸（笑）二人。世界一しようもない星晶獸の争いが今ここに

「やめいやめい、このスットコドッコイ星晶獸！」

「のじゃっ!？」

「たっ!？」

この虚しく醜い争いを止めるのは、きつと団長の役目なのだろう。そう信じ二人を頭をはたいて大人しくさせる。

「毎度言うけどのじゃ子は、食いもん大事にするなら食べられないようにしとけ。そもそもメドウ子は、人のを食うな。お前たまに俺のも取つてくじゃん」

「アンタの物は、アタシの物よ」

「ガキ大将かお前は」

「誰がガキよっ!？」

騒ぐ二人に辟易しながら宥める。小さい娘二人持つ親つてこう言う気持ちなんだろ
うか、なんだか自分が急に年を取った気がしてならなかった。

すると周りから何かコソコソボソボソと声が聞こえる。

「なあ、あれつて……」

「ああ、間違いないだろ」

「星晶戦隊（以下略）……スゲー、ほんとにあんな感じなのか」

「つて事は、あの地味なのが」

「あの苦労人が団長か……」

「まるで女房に逃げられた男親の背中だ」

「しかしマジで地味だ……」

「驚きの普通さ……」

食堂にいる他の客が、俺達を見て話す。

俺のこと？ それ俺の事だよ？ あと何で地味つて二回も出てきたの？

「団長さんは、人気者ですねえ」

「人気違う」

シエロさんは、ニコニコと言うが違う。これは奇異の目だ。

「すっかり空域中で噂になって、騎空団としても名が上がってるようですねえ」

「素直に喜べないな」

その名つて俺にとつて汚名じゃないでしょうかね。

「まあまあ、名が広まるのは良い事ですよ。おかげで団長宛の依頼も増えてますからねえ」

「否定はせんですがね」

「私としても、団長さんへの依頼を仲介させてもらう機会が多いので、新しいお客さんが増えて助かりますよ」

そう言えば俺つて依頼人から直接依頼を受ける以外だと、殆どシエロさんの仲介でしか依頼受けてないな。周りの人間も、シエロさん通した方が俺に依頼しやすいと認識してるようだ。

尤も、シエロさんが依頼の仲介をするのは、俺に限った話ではないが。

「なんであれ目指せ借金返済……身が軽くなるまで頑張りますかね」

「うふふ、ぜひぜひ御鼻屑に、ですよ」

「させてもらいますとも」

借金返して俺は星の島へ行つてやるのだ。

「そーいや、星晶戦隊（以下略）仲間増えたんだってな」

「マジ？　どんなよ」

「まだわかんねえと。色んな奴が情報集めてるとき」

「こりや噂増えるなあ……！」

とても不穏な会話が聞こえた気がしたが、うんざりした俺は、この時は聞こえないふりをしたのだった。

二 ブレイクタイム

■ ■ ■
新たな噂に怯えつつ、なんやかんやで日々を過ごす。

噂の元になりそうな新たな仲間達、ミリンちゃん、エゼクレインさん、ヨダルラーハさん。この三人も結構団長に馴染んできてくれた頃である――。

「え、緑茶が手に入ったんですか?！」

ある島で停泊中、街に出かける団員や艇で過ごす団員と各々好きに過ごす中、基本俺と居るB・ビイもミスラを連れ街にお出かけしてるので珍しく俺は一人になった。久々の穏やかな時間だ。

そんな時間の中艇に残る何人かと食堂で軽食を食べ食後の飲み物を決めていた時、ふ

と手に入れた新しいお茶の事を思い出し話題に出すと、ミリンちゃんが驚いた様子でカウンター席から身を乗り出した。

「うん、シエロさんに聞いたらあつたから買ったんだよね。ミリンちゃん前飲みみたいって言つてなかつた?」

「覚えててくれたんですね! 嬉しいです!」

太陽のような笑顔。これが見れるなら買った甲斐があると言うものだ。

「おい、だらしない面をするな」

が、笑顔につられ緩んだ顔を見せてしまい、カウンター席にミリンちゃんと同席するエゼクレインさんに窘められてしまう。いかんいかん。

「や、こりやすみません」

「噂には聞いていたが、本当に分りやすい男だ……」

心底呆れた様子で言われてしまう。そこんどこまで噂なのかい俺の表情筋よ……。

「きつちつちつち……! なあに、まったく裏の読めん輩に比べれば可愛いもんじゃわい」

だがこれまた席に同席していたヨダルラーハさんにフオローをされる。いや、フオローになつてるかはわからんが、まあいいだろう。

「お前さんは、逆にもうちつと顔の険を無くしたほうが良いぞ。……抜き身の刃のよう

な目では、いくら狙おうと獲物も逃げちまうぞ」

「……忠告として受け取っておこう」

我が団で貴重な大人の男性、しかしなんだか渋い二人が団に入ったものである。

「リヨクチャ、ですか……どんなお茶なんですか？」

更に同席、と言うか俺と一緒にカウンターの内に立つコンスタンツィアさんが、茶葉の入った茶筒を見て首をかしげる。

コンスタンツィアさんは、なんかエンゼラで何かと家事を手伝ってもらうようになってる。元々密航者とは思えぬ立場だ。

「主に空域の東で親しまれとる茶じゃよ。紅茶なんかと比べると、ちと渋めじゃが甘みも感じて紅茶とは違う風味を楽しめる」

「そうなんですか……不思議な、けどいい香りですねえ」

ここで流石と言うか、物知りヨダラーハさん。よく知った様子で語る。

「ヨダラーハさんは飲んだ事ありで？」

「うむ。交易盛んな大きい島でなら流通しておる……が、まあ普通の島であまり見かけんから知らんのも無理はないわい」

「私も旅の中で探してたんですが、中々売って無くて諦めてたんです」

「ふむふむ……なら『お待ちかね』って感じか」

しかしはてさて、紅茶やコーヒーはよく淹れるが、これはシエロさんがミリンちゃん
の故郷、東方より仕入れたもので、これ自体が俺にとつては馴染みの無いものだ。一応
一緒に茶器も買っておいだが、俺の知る紅茶などで使うのとは違う。

なのでここは、素直に淹れ方を知る人に聞く。

「ミリンちゃん、悪いんだけど手伝ってくれない？ 紅茶とは違うよね」

「あ、勿論いいですよ」

二つ返事で引き受けてくれるミリンちゃん。カウンターの内へとまわり、揃えた茶器
をじっと見た。

「急須に湯飲み、しっかりと揃ってますね！」

「ある方がいいってシエロさんが言ったんでね」

「さすがよろず屋さん。では、早速淹れましょうか！」

そう言うミリンちゃんは、てきぱきとお茶の準備をしてゆく。

沸かした湯を湯飲みにいれ、急須へ茶葉を入れる。そして冷ました湯飲みのお湯を急
須へと入れてゆく。

「お湯つて冷ますんだね」

「茶葉にもよるんですけどね。これは結構良い茶葉ですから、冷ました方が味が良い
です。好みもありますけど、基本と言う事で」

「なるほど」

「それにしても、こうやってると故郷を思い出します。家では母が一番お茶を淹れるのが上手なんです。私と父の好みをよく知ってて、温度を変えたり濃さを変えて同じ茶葉なのに好み通りの味にしてくれるんです」

故郷の思い出を語るミリンちゃん。彼女も旅を始めそれなりが経つので、こう言った故郷を思い出す物を見て望郷の念を感じるのには不思議ではない。

皆で微笑ましく思い話に耳を傾ける。エゼクレインさんも表情は変わらぬが、決して不愉快そうな雰囲気は無い。

「さ、出来ました！ 熱すぎないと思いますが、気を付けて飲んで下さいね」

そして彼女の話が終わると良い香りが漂い出す。湯飲みには、綺麗な緑色をしたお茶が入っていた。なるほど、*“緑”*茶である。

湯飲みを受け取り、匂いを味わう。紅茶とは違う香りだが、良い香りだ。これが東方のお茶の香り。

「では、いただきます」

皆そろって緑茶を飲む。

口に含んでみて広がるのは、渋み、だが甘みもある。やはり紅茶とは違う風味、だが

「美味しい」

「これは良いものだ。」

「緑茶、良いねこれ」

「ふわあ……美味しいですう」

「……悪くない」

「うむ、この渋みと甘み。東方の茶ならではの風味じゃ」

「ミリンちゃん淹れるの上手いね」

「いえいえ、お粗末様です」

四人そろってミリンちゃんを褒めると、彼女は照れた様子で謙遜する。しかし本当に美味しい。

「シエロさんにまた頼も」

「いいんですか？」

「道具も買ったし、俺も飲みたいからね。高いのは無理だけど、幾つか種類買って茶葉の飲み比べたいし色々教えてよ」

「はい、もちろん良いですよ！」

緑茶、これは何やら奥が深そうだ。

その内厨房の棚に茶葉の茶筒が幾つか並ぶだろう、そう思うと少し楽しみだ。

——と、穏やかな時間を過ごし終れば良かったのだが、生憎そうはならないのが俺の人生。

「だ、団長いるっ!? 大変、大変なの!」

突然食堂にマリーちゃんが慌てた様子で駆け込んでくる。その慌てようから俺はすぐに嫌な予感に襲われた。

「星晶獣関係か!?!」

「違うっ! けど、大変なの!」

思わず最悪の事態の方を叫んでしまうが違ったらしい。

「ユーリ君達が……ああ、とにかく来て! トレーニングルームで——」

マリーちゃんが詳細を言う前に艇内に響いた破壊音と衝撃。俺の穏やかな時間を壊すには、十分な出来事だった——。

■ 三 大騒ぎ

マリーちゃんに連れられ慌てて食堂を出て廊下を走る。目的の部屋は、トレーニングルーム。そこへ近づくと毎に強い衝撃と激しい戦闘音が響く。

「うわわ、また激しい音が!」

「だ、大丈夫なんでしょうか……」

「随分派手にやっておるようじゃのう」

「この騎空団は、大人しく出来る奴はいないのか……」

「実に耳が痛い」

ミリンちゃん達もただならぬ様子を見て一緒に来てくれている。

「アタシも通りがかったたらラムレッダに“助け呼べ”って言われて慌てて来たのよ。こっちも何が何だか……!」

マリーちゃんも何をどう説明していいのかわからないようだった。とにかく現場に行つて事態を解決する他ないようだ。

そして目当てのトレーニングルームに到着し、急ぎ中へと突入する。

「ユーリ君、フェザー君！ 大丈夫——」

「うおおおつ!」

「つぶぐええ——つ!」

「うわあ——つ!」

「だ、団長さあーんつ!」

扉を開けたと思ったら、突如叫び声と共に飛んできたフェザー君と衝突しそのまま廊下の壁に激突。ミリンちゃんとコンスタンツイアさんの悲鳴が響く。

「てて……油断した。ん……？ おお、団長！ どうして俺の後ろに!？」

「……何故だろうね」

俺がクツションになり無事なフェザー君、壁にめり込んだ俺。こんな目に遭ってばっかだなあ。

「それより、これ……何事？」

「そうだった！ ユーリとシャルロツテだけじゃ危ない、団長助太刀を頼む！」

「助太刀は構わんけど、なんの？」

「あれを見てくれ！」

フェザー君がトレーニングルーム内を指さしそちらに目を向ける。するとそこには

「にや、にやあく〜っ!？」

「うおおっ!？ つ、強い……っ!!」

「!! ——!!」

「た、太刀筋が読めないであります……!？」

部屋の中を逃げ回るラムレッダ、そして叫び声と共にユーリ君とシャルロツテさんが、何者かと刃を交えている。いや——待てアレは、何者かと言うよりも。

「……木人？」

組み手用自立人形 “木人” だった。

■ 四 どうしてこうなった

■ — 少し前、エンゼラトレーニングルームにて。

「ふう……！ ああ、やっと終わったぞ」

部屋で額に汗を流すユーリ。だがこの汗は、鍛錬によるものではない。清掃によるものだ。

剣をモップに持ち替えて、丁度床の掃除が終わったところであった。

「大分綺麗になったな！」

「頑張つて掃除して良かったであります！」

ユーリだけでなくフェザー、シャルロットもモップや雑巾を持ち清掃に汗を流した。

エンゼラのトレーニングルームは、団員の多くが利用する。そして特に鍛錬修練に対してストイックなこの三人は、普段最もこの部屋を使う三人である。そのため定期的に三人で部屋の清掃を行っていた。

「にやはは、お姉ちゃん疲れちゃったにやあ……」

そしてそんなストイック三人衆とは正反対の人物。酔いどれのラムレッダ。腰を落

とし疲れた様子の彼女もまたこの清掃に協力していた。

「ごめんねえ三人とも……お姉ちゃん、あんま助けにならなかつたにや」

「いえそんな事は……あの、それより大丈夫ですかラムレッタ殿？ アルコールも残った体で動いてはやはり……」

「にやはは……いーのいーの、あたしが手伝いたいって言ったんだから……」

ユーリに心配されるラムレッタは、自ら進んでこの部屋の清掃に参加した。

きつかけとしては、部屋で何時ものように飲んでいて追加の酒を探しに食堂へ行つたが団長が居たため断念しトボトボ戻る途中清掃中のユーリ達をみかけたことだった。

忘れられがちであるが——いや、普段の行いで完全に忘れられているが——彼女は、この騎空団が旅立つて最初の入団した仲間であり、ティアマト等星晶獣やカリオストロ等年齢不詳・不明の者を除けばエゼクレインが騎空団に同行するようになるまでなんと最年長者であった。

だからこそ、清掃に励む若人を見て年長者として自身も手伝おうと思うのは当然なのである。

酔って吐こうが、腐ってもシスター。奉仕献身と慈愛の心はある立派な女性だ——酒が無ければの話だが。

結局酔いの残る体では、たいして手伝いは出来なかつた。しかし最早この騎空団では

ご愛嬌と言うべき姿である。ユーリ達は、彼女のその心意気を十分受け取り責めもせず苦笑で済ます程度だ。

とは言え、ラムレッダとしては「なんとも自分が情けないにやあ」とがつくりとする。日々こう言つた事で団員としての役目を全うしようと言う意識もあつたわけだが、結局こんな体たらく。

これでは、最悪あの優しき団長より「解雇」を告げられるのではないか——彼女の心は休まらない。

そんな彼女の心情はともかく、ここよりあの団長が壁にめり込む羽目に遭う騒動へと繋がる。

「そう言えば……あれはなににかにや？」

ラムレッダは、部屋の隅に置いてあつた一つの人形を見つけた。人型をしつつ特異な形状の体からは、何本か剣が装着されバックラーも付いていた。

「ああ、あれですか？ あれは鍛練用の木人です」

「ほほう？」

隅に置かれたそれは、エンゼラ大改修時のトレーニングルームを作る事となつて導入された設備でありアイテムでもある“木人”であつた。

「組み手なんかの相手がいない時は、そいつを相手にしてるんだ！ 作り物だけど、中々

熱い奴だぜー！」

「フェザーきゅんも納得の強さなのかにや？」

「よろず屋殿に頼んだ特注品ですので、動きのレベルを上げるとかなり強いですよ」

「訓練用とは言え油断すると自分も危うい事があつたであります」

「ほええ〜……そこまで」

若くともこの騎空団で実力を磨くユーリとフェザー。そしてリユミエール聖騎士団団長さえ「強い」と評するこの木人。

そう言われると部屋に佇む命無き人形も、百戦錬磨の達人にラムレッダは見えてきた。

興味の湧いた彼女は、立ち上がり千鳥足のまま木人へと近づく。確かに既に幾度も使われた跡がある。

流石武闘派も多い騎空団、この場に居る三人以外も利用しているのだなあ——と、ラムレッダが頷くと、木人の首の付け根付近に一つボディと似た材質のカバーで封のされた箇所があるのが見えた。

なんであろうか気になりそのカバーを上げると中には「団長用」と書かれたボタンがあつた。

「こや？」

「どうされましたかラムレッツダ殿？」

「あのくこのボタン、団長用つてあるんだけどにやにかにや？」

「だ、団長殿用ですか……？ いや、そんなのあつたか？」

「自分も覚えが……多分取説にも載つてなかつたと思つてあります」

「にやんと意味深な……」

「押せばわかるんじゃないか？」

謎のボタンに対し単純な意見を述べるフェザー。それもそうなのだが、彼以外は「それはちよつと……」と顔をしかめた。

何せ「あの」団長用である。もちろん彼らは、団長の事を信頼しているが、どう言う意図で設置されたにせよ、押せば何が起こるか分かつたものではない。

つまり、団長自身もよく言う言葉だがこれは「藪蛇」と言うものだ。触らぬ神に祟りなし、彼らの脳内にその言葉もよぎる。

「み、見なかつたことにしようかにや……？」

「ええ、まあ……」

——いつそ団長にも知らせない方がいいかもしれない。

トラブル回避と彼の胃痛を防ぐため、言葉多く交わさずともユーリ達の考えは一致した。

「それじゃ、元に……ふにや、にやふ?」

だがカバーを元に戻そうとしたラムレッダであったが、掃除後のため埃が待っていたのか、急に鼻がムズムズとします。そして――。

「にやつぷしよおーいつ!」

盛大なくしゃみ。ユーリ達が「あ」と同時に口を開けた。

「うにに……埃かにや? マスクでもすればよかつたにやあ」

「ラ、ラムレッダ殿……あの」

「んにや? みんな、どうした……にや?」

顔を青くしたユーリが指を震わせラムレッダの手元を指さす。つられてそこを見たラムレッダが見たのは、ぼつちりボタンを押した己の指であった。

「にやああああくっつ! お、押しちゃつたにやあ!」

『―― Main system Activating』

「でえ! し、しかも喋つたにやあつ!」

人間で言う顔に当たるパーツの隙間から怪しい光が漏れ出す木人。奇妙な音を発しながら、ガタガタと揺れたそれは明らかに様子がおかしい。

「あぶない……っ!?! ラムレッダ殿下がってください!!」

『Combat Mode. HIGH LEVEL 7――』

「にやつ!? にやにやつ!?」

『Get Ready』

「あぶにやああ——っ!?」

抑揚のない声と共に木人は完全に起動。身に着けた武装を可動させ始めラムレッダ達を襲いだした。

「なんなのにな、なんなのになあ!?!」

「このっ! 止ま、れ……っ!?」

ラムレッダと木人の間に入り剣で攻撃を受け止めるユーリ。が、しかし——。

『——!!』

「ふみこみ……っ!? 重……ぐああっ!?」

「ユーリ殿!?!」

木人はボディに装着された武器で戦う。その関係上攻撃方法は、単純な横降りの薙ぎ払い程度しかできない。その攻撃に慣れていたユーリは、普段の通りそれを剣で受けたのであるが、この時木人は攻撃を受けられた直後一步強く踏み込みユーリの防御を崩し弾き飛ばしたのだ。

「大丈夫でありますかユーリ殿!?!」

「な、なんとか……しかし、今のふみこみはなんだ……!?! 途端に攻撃が受けれなくなっ

たぞ……!!?」

「動きも普段と全然違うぜ!? なるほど、これが団長用ってやつかあ!?」

「か、関心してる場合ではありませんフェザー殿!」

「一先ずラムレッツダ殿は逃げるであります!」

「ご、ごめんにやあー! あ、マリーちゃん!? ちょっと助け、団長きゅんを——」

『——!!』

「にやああ——ッ!? こ、こつち来たあ——ッ!?」

「いけない!? ユーリ殿、フェザー殿! 自分達で木人の動きを止めるでありますっ!!」

「了解っ!」

「うおお——っ!! 行くぜ木人! 俺とも熱い語り合いだあ!!」

かくして史上最強の木人は、空の上エンゼラにて起動したのであった。

■ 五 そんなこんなでこうなった

「俺用ボタン押したらああなったって……つまりどういう事なんだよ」

フェザー君からこの騒動の経緯を聞いたが理解が追いつかん。なんだ団長用ボタンって、俺も知らんぞそんなの。

「ともかく止めるぞ。艇に穴でも開いたら事だ」

「それは確かに」

だがエゼクレインさんの言うように、詳細を調べるよりも木人を止めねばならない。幸いにも今は航行中ではないのと、この部屋は直ぐ外に面してこそいないが既に床や壁が破損している。何時かみたいユグドラシルに材料貰ったとしても修理費だつて馬鹿にならないのだ。

「こりゃ手ごわそうじゃ。ワシらも手を貸そう」

ヨダルラーハさんが、この騒ぎで部屋の出入り口に転がってきた棒術用の棒を手にした。

「刀じゃなくてよろしいんで？」

「きつちつち……！ どうせなら釣り竿のほうがよいがのう。ま、かく乱程度なら任せとおけ。して止め方はどうするつもりじゃ？」

「ボタンで起動したならもう一度押せばとは思いますがね」

「でしたら背中ですね。人数でかく乱していきますか」

「そうしよう……コンスタンツィアさんは、マリーちゃんと念のため戦える人呼んで」

「は、はひい……！」

「気をつけてよね……!」

一先ずコンスタンツィアさんは、もう少し仲間を呼んできてもらおう。俺達は木人が暴れるトレーニングルームへと入る。するとユーリ君とシャルロットさんを相手に余裕の立ち回りを見せていた木人が、表情も無いと言うのにこちらを見たような気がした。

「気付いたのかよ……なんなんだあの木人」

確かにただの木人ではなさそう。気合を入れ剣を手にして木人へと向かう。

「ユーリ君、シャルロットさん!」

「だ、団長殿!」

「助太刀、話は聞いた。ボタンってどこ?」

「ボディ最上段の首付け根! ペイントの横、そのカバーが外れてるので見えてるであります!」

「了解です!」

木人は樽を四つに切ったような姿をしており、前後の区別はないのだが見栄えと[〃]的[〃]としての役割を兼ね胴体には、何本かペンキでラインが引いてある。そこを目印にしてボタンを目指す。

「……まずやたら追われてるラムレッダ助けよう」

木人起動時最初に目に付いた標的だからか、ずっと狙われているラムレッダの救出を

優先する事にした。

なんか顔面も青いと言うか紫に変わりだして嫌な予感がする。

「じゃな、ほれこつちじゃ!」

『!』

まずヨダルラーハさんが木人の前に出て注意を引いた。ヨダルラーハさんは、棒を巧みに使つてひよいひよいと床を跳ねるように移動してゆき、木人もヨダルラーハさんの挑発に乗つたようで標的がラムレッダから移る。

「おお、何と身軽なっ! それに木人も誘いに乗りましたね!」

「この隙にっ……ラムレッダ、こつち!」

「だ、团长きゅくんっ!!」

「ぐえ」

逃げ回りへとへとなつたラムレッダが泣きついてきた。

「めつちや怖かつたにゃ〜!」

「あいあい……話は聞きました」

「はっ!? あ、あわわ……ごめんなさいにや、すみませんにやあ!? ワザとじゃにやいんです、埃が、くしゃみが、ボタンがあ〜!!」

「わかつてる。不幸な事故つて事にするから、一先ず物置なり安全なところ隠れてて」

「ひんひん……! ほ、ほんとにごめんねえ……ううえっ!? は、走り回って……きもち、ウエ!」

「おい、おい……!?! 吐くのは止めろ、それはマジ止めろよお!」

「が、がんば……る……ヴォエ!」

ふらふらとトレーニングルーム内の倉庫に身を隠すラムレッダだが、聞こえてくる嗚咽の声が不安で仕方ない。これならマリーちゃん残ってもらって連れてってもらえばよかった。

そんなラムレッダの後ろ姿を見てエゼクレインさんは、心底呆れた様子だった。

「よくあれを仲間にしたな」

「あれで一応頼れる事も無くは無いんで……まあ今は木人だ。木人の武器と防具はボディを軸にした横回転式で近づくには隙が少ない。もうちよいおちよくってやって隙を見つけよう」

「承知! さあ木人さん、こちらですよ!」

「はあ……おい、こつちもだ!」

『!?!』

ミリンちゃんとエゼクレインさんも木人を挟むように攻撃をしかけていく。するとユーリ君達も含め標的が急に増えたため、木人は標的を絞り切れなくなったのかその動

きがわずかに止まる。

すると確かに首の付け根部分近くにボタンらしきものが見えた。

「速攻！ 大人しくしてもらおうぞ！」

動きを止めた木人にとびかかり直ぐにこの騒動を止めようとする。が、しかし――。

『――（甘いネエ、坊や）』

「ん……なあっ!？」

瞬間、俺の目の前から木人の姿が消えた。どこへ？ 数で取り囲み逃げ場はなかったはず――いや待て、一つだけある。

「上に跳ん、でげべええーっ!？」

「ジミー殿おお――っ!？」

木人のやつは、その短い脚を床がへこむ程踏み込んで跳び上がったのだ。通常の木人ならあり得ない動きに驚いた俺は逆に隙を晒してしまい、頭上から降ってきた木人の蹴りを顔面に食らった。

「ふげ……っ!？」

「大丈夫か团长っ!!」

「へ、平気フェザー君……けど蹴り!? あの脚で蹴りい……!？」

「ああ、良い蹴りだった！」

「そこじゃないんだけどね……」

到底蹴りに向かない木人の構造。それでありながら繰り出されたあの鋭い蹴りに驚いていると、何やら木人の様子がまた更に変わりだす。

「動きが変わったようじゃな」

「ど、どんだん隙が無くなってるように見えますが……」

「なんなんだあの木人は……ちゃんとしたのを買ったんだろいうな貴様」

「そのつもりでしたけど……」

もはや木人を超えた何かに見えてきたそれを見て、ヨダルラーハさん達も冷や汗を流す。

「ユーリ君、シエロさんへの注文って君とフェザー君でやったよね」

「あ、はい！」

「そんな時何か変わった事聞いてない？」

「そ、そうですね……変わった事は特に……あ」

「こーゆー時の“あ”って一番怖いよね」

「す、すみません……その、確かシエロカルテ殿から木人を受け取る際「特別な方に調整をしてもらった」と聞いたのですが……」

「特別なって……」

その話を聞き何となく俺の頭に一人のシルエットが浮かび上がってきた。

(音声は流れたらしいが、しかしさっきの“声”……俺の幻聴だな。けど、だとすればまさか……)

奴が上に跳ぶ直前聞こえた声。幻聴なのは間違いないが、この状況であの声が幻としても聞こえたのなら、木人を見て“あの人”を思い出したと言う事だ。だとすると最悪のパターンである。

「団長さん、来ました!!」

「ちいっ!!」

嫌な予感に襲われていると、木人は俺を狙って攻撃を仕掛けて来た。しかも信じられぬ事に、素早い動きが出来ないはずの木人が取り囲んでいたユーリ君達をすり抜けるようにして俺に狙いを定めて来たのだ。

「ふざけ……っ! ふげっ!!」

『!!』

木人は、剣を使わず同様に装着されているバックラーでの打撃を行って来た。腕が伸びるような機能は無いので、殆ど体当たりであるがボディを揺らし器用にそして的確に俺の防御が薄い場所を狙いラッシュで打ち込んでくる。

「ハ、ハ、ハ、っやっほ……っ!!」

『!!』

「おおっ!？」

そしてなんと木人はまたも跳躍、そのボディを横にして本来“使用不可能”の縦軸の攻撃を加えて来た。

咄嗟にそれを剣で受け止めた。すると木人は、今度は俺の剣を軸に回転しそのまま俺の背後へと着地してみせた。

「うっそだろおま……っ!？」

『!!』

「あげっ!？」

ガラ空きだった背中、そこに強いバッククラーでの一撃を叩きこまれそのままユーリ君達の方に殴り飛ばされる。

「おい、大丈夫か……!？」

「ぶ、無事ではないかも……ほげ」

エゼクレインさんに引つ張り起こされなんとか立ち上がる。足がふらついたが、対して木人は不敵に揺れ動く。

そしてその動きは、今まで以上に機敏になり単純な“木人の動き”でなく、一つの“形”として見え始めたのだ。その形を見て俺は、血の気が引いていくのが分かった。

「あ、ああ畜生……やっぱりだっ!」

「おい、何がやっぱりなんだ。何を知ってる?」

「あの執拗に俺の意識を刈り取ろうとする動き……アレは、ばあさんの動きだ!」

「ばあさんと……?」

エゼクレインさんには、多分ピンとは来ないだろう。だが何人かは俺の言う「ばあさん」なる人物の事を聞いてハツとしていた。

「あ、あのババア……自分の木人コビを送り込みやがったなあ!」

不気味に動く木人に重なるばあさんの幻影。笑みを浮かべて幻影は喋る——「試させてもらうよ」と。

■ 六 ランクキャップ解放クエスト「故郷からの使者」

突如として始まった、木人对俺&その他大勢。まるでザンクティンゼルでの修行を思い出させるような戦いが今ここで起こる。

最早ばあさんそのものに見えだしてきた木人は、ばあさんそのものの動きを用いて俺達を試すかのように襲い掛かってきた。

「さつき通り各自隙突いて動き止めてボタン押して停止ねらって、うおおおっ!」

物凄い早口で作戦を伝えながら突進してきた木人の攻撃を受ける。木人には、大中小三種の剣が装着されているが、その内二本の剣を二刀流の様にして襲いかかってきた。

二刀流を得意とするジョブ「クリュサオル」。それを彷彿とさせる動きは、やはり数多のジョブを知り完全に使いこなすあのばあさん特有のモノだ。

だがこれで木人が今この場では、率先して俺を狙う事がわかった。その後俺自身を囲として使い各自攻撃を行う方針へ変える。

人数としては一対七、数ならば俺達が圧倒的に有利である。だがやはり相手は、ばあさんのコピー木人、一筋縄ではいかない。

俺に攻撃を引き付け囲として十分仕事を果たしてるはずなのに、ほかの皆の攻撃がまるで通じないと言うか当たらない。理屈は不明だが、あらゆる攻撃に瞬時に対応して避けて防いで反撃してくるのだ。

ミリンちゃん達の刀剣、フェザー君の拳は、剣と盾で防ぎ弾いてカウンター。エゼクレインさんによる中距離からのボタンを狙ったチェイン攻撃も盾で綺麗に弾かれた。

これらの動作を俺への猛攻を続けながら行うのだから、いくらばあさんコピーとは言えバケモンである。単純に木人の性能も高すぎる。おそらく木人の調整以外にも、ばあさんが関わってるのだろう。

「ユーリ君、こいつって連続稼働時間どんぐらいだっけっ!？」

「い、今は十分燃料も入れてしまつてるので半日は確実かと……うおっ!!」

出来れば木人の自然停止も願いたいところだったが、生憎そうはいかなかった。半日も動いたら、艇の破損が増えてしまう。ティアマト達も待つていられない。

こうなるといよいよ、俺たちだけでボタンでの停止なりをせねばならなかった。

ここで俺達最大の利点は、やはり数であった。木人の動きは、ばあさんそのものではないが、決してばあさん本人ではない。信じられぬ性能で攻撃を防ぎ続ける木人も数の攻撃を前に少しずつであつたが、ほころびの様な隙が見えてきた。

狙いは脚部だった。木人らしからぬ高機動であるが、なんとかエゼクレインさんの鎖を足に絡ませることに成功した。理想としては、このまま転倒させてしまいたかったが、木人はバランスの悪い状態に閑らず直立を維持していた。しかしこれで機動力を削ぐことはできた。

とは言え近づけば剣の攻撃盾の防御の達人木人。鎖の絡ませたまま踏ん張るエゼクレインさん以外で攻めに行くが、やはり防がれ弾かれボタンに近寄せない。なので攻撃も防御も封じる手段に出る。

全員で攻撃を続けて倒す、ではなく木人の攻撃も防御も全部受けて止めて“固定”する。木人の剣をユーリ君達が剣等で受けて罅迫り合ひの様な形で動けないように止める。バックラーもフェザー君が掴み止め固定、ヨダルラーハさんが棒を木人の武器回転

軸のレールに挟み込み固定。

まるで木人を中心にしたおしくらまんじゅう。そのままボタン開放部が見えるよう壁際まで押し込み、更に動きが鈍くなった木人のボタンへ「今度こそ」と俺は手を伸ばした。

が、最後に残ったバックラーがそれを拒んだ。

「くどいわあ!!」

俺もバックラーを掴もうとすれば、それを避ける木人。ならばボタンを、と手を伸ばせばそれを弾く。

粘る粘る、実に粘る。もう単純な調整とかじゃなく、こいつに何か意志すら感じる程に粘る。

どうにかこうにかバックラーを掴んで止める事が出来たが、ここで気が付いた。ボタンを押せる奴がいない。

「だ、誰か押せない!？」

「い、一番近いのは、だ……団長殿ですっ!？」

「片手じゃこいつのバックラー押さえられんし、離すと弾かれて押せんのだよ!」

「おい……っ! こつちもそう何時までも持たんぞっ!？」

鎖を引くエゼクレインさんの額には、大量の汗が流れていた。木人が少しずつ俺達毎

移動しようしてるのだ。

ボタンを本当に目の前にして誰もそれを押せないでいる。たとえ一瞬でも誰かがボタンに手を伸ばせば、その瞬間で木人は反撃しそこから体勢を直してくる。

もう一手、何か手段を——そう思った時だった。

「う、うおお——っ!? んにやああああ——っ!!」

背後から聞こえた酔っ払いの叫び声。それに気が付いて直ぐ、俺の横にラムレッダが飛び込んできた。

突然の8人目。逃げていたはずのラムレッダが飛び出し一気に肉薄。木人のボタンへ手を伸ばし、そして——。

「じ、自分のミスはあーっ! 自分で始末つける……にやああああ——っ!!」

『!?!』

彼女の手はボタンを深く押し込んだ。

『!?!……:Mission complete. System Return to Normal Mode……:Congratulations』

無機質な音声を流し、そしてついに木人は動きを止めたのだった。

七 日常ですよ!! 団長さん

「——で、艇に居た奴全員へとへとなわけか」

街から帰ってきたB・ビー等が食堂で見たのは、へとへとになっている俺達の姿だった。

慌てたマリーちゃんとコンスタンツィアさんに連れられ急ぎ戻ったようだが、それはもう既に木人を停止させた後の事である。

「ほんと疲れた……休日なんだぜ俺あ……」

「シカシ本当ニ……バアサンノ仕業ナノカ？ 才前ノ予想ナノダロウ？」

「これ、見てみ……」

「ウン？」

木人ばあさんコピー説を疑うティアマトに俺は一枚の紙を渡す。

「ナンダコレ？」

「機能停止した木人から出て来た。俺宛のばあさんからの手紙」

機能停止の直後、木人のボディの一部が「パカッ！」と開き、そこから一枚の手紙が出て来た。どうも俺用難易度クリアすると出てくる仕掛けだったらしい。

そして内容であるが——。

『坊や、元気にしてるかい？ これを読んでいると言う事は、無事木人を止めれたようだ』

ね。アンタの事だ、察しはついているだろうけどこの木人は、アタシの調整したもののさ。よろず屋さんに出会った時、アンタが艇を直してトレーニングルームを作るから木人を注文してると聞いて用意したんだよ。試練みたいなもんさ。それで木人は、手ごわかったかい？ それとも楽勝かい？ 所詮木人だからアタシの半分も動けないけど、十分だったろう？ この程度倒せなきゃだからね。修行終わって怠けてなけりや問題ないだろうさ。とは言え、倒した時誰か仲間は居たかい？ B・ビイ達じゃない、旅で新たに出会った仲間だよ。別に一人でも良いけどね。一人でも強いのは悪い事じゃない。ただアンタは、ジータちゃん以上に仲間いてこその子、いい仲間はどんどん増やした。仲間あつての騎空団だよ。それにアンタの事は、風の便りで色々聞いてるよ。随分面白い旅のようだけどそれも仲間あつての事さ。その仲間のためにも励みなさい。それが自分のためにもなるのさ。それじゃ、身体には気を付けるんだよ。——追伸：もしも身体が鈍ったと思ったら、また木人を使いなね。あと偶には、そっちからも手紙寄こしな」

——である。

「ワハハッ！ 才前バアサンニ愛サレテルナア！」

「笑うな」

「こつちや笑い事でないのだ。」

「ケド オバアチャン（ω、ω） ゲンキソウダネ」

「あと主殿の噂がザンクティンゼルにまで届いてるのがわかるな」

「やだあ、俺どんな顔して故郷戻ればいいのさあ……」

あの不本意な噂がザンクティンゼルにまで届いてると思うと、故郷の友人知人に顔合
わせるのが怖い。もし子供遠ざけられたりしたら泣くぞ俺は。

「ミンミンイ……」

「ありがとミスラ、大丈夫落ち込んでないよ……疲れただけ」

ミスラが俺の頭を撫でてくれる。機械ボディの冷たさが、疲れた体にちよつと心地よ
い。

「……ああ、あと今回で壊れた壁やらの修理費ピツタリぐらいの金も木人から出て来た
わ」

「こわっ!! 何よそのおばあさん、どっかで見てんじやないの?」

メドウ子が気味悪そうにビビってる。俺もビビったよアレは。完全に予想されてた
らしいからな。俺と仲間の現在の實力、それによる戦闘被害を完璧に予測されてた。

離れていても侮れんばあさんだ。ともあれ金はありがたい……いや、そもそも木人の
せいだけでもさ。

「しかし、あれで『實力の半分以下』か……! 団長の師匠つてのは、凄い人なんだな
!!」

「完全な人型だったら、どうなってたかわからないであります……」

「拙者の太刀筋も全部見切られました……ううっ！　まだまだ未熟ですう！」

「し、しかし……暫く木人とは戦うのは避けたいです……」

「何時か直接語り合いたいなっ！　会えないか団長!?!」

「暫く帰省予定なし」

「むう、そうか……！　じゃあ、その内な！」

「あいあい」

今でも木人の猛攻が脳裏に浮かぶのか、フェザー君を除きシャルロットさん達は身震いをしていた。

「しかし団長の實力にも納得じゃよ。故郷では随分可愛がられたようじゃな」

「可愛がるどころか……俺をいじめるのが好きなんだあのばあさんは……」

「きつつちつつち……！　ま、期待の証ってことじゃろうて。その内会って話してみたいもんじゃ」

ヨダラーハさんは、案外元気そうだ。確かにこの人とはあさんは、話が合いそうではある。

「しかし、本当に人間なんだろうなそのばあさんは……」

「少なくとも見た目は」

「こちららはちやんと、と言うかガツツリ疲れた様子のエゼクレインさん。あの木人をはるかに超えると言われるばあさんの強さを聞き、ついに人間か疑い出す始末。

まあ疑うのも無理はない。ばあさん強過ぎんだよ。俺が知る限り空でジータと対等に「遊べた」一人だからな。

「ともかく、木人の「あのモード」は封印だ」

「なんでえ使わないのか？ オイラも試してえんだけど」

「俺ももう一度使いたいぜ！」

俺用モード封印を告げるとB・ビイとフェザー君から不満が上がった。

「ダメダメ部屋が壊れっちまう。どうしてもなら島止まつてる時広いとこ運んでやってくれ」

「ま、確かに……んじゃ次の島で試そうぜフェザー」

「おう！」

流星にB・ビイが居るなら今回程の騒ぎにはならんだろう。

いやむしろB・ビイ、すなわち星晶獣が居ないと危ない木人ってなんだよ。震えてきやがった怖いです。

「……と、ところで団長？」

「どしたセレスト？」

話も終わった雰囲気だったが、一人食堂をきよろきよろしていたセレストが控えめに手を挙げて質問をして来た。

「ラ、ラムレッダは……？」

「……うん？ そう言えはいねえな。アイツが木人止めたんだろ？」

セレストとB・ビーが食堂を見渡すが、確かにこの場には彼女の姿はない。

「ああ……あいつか。まあ、うん……色々あつてな」

「い、色々つて……？」

「色々は、色々だよ……色々とりどり『レインボー』……」

俺が今日一番げんなりした表情を見せると、セレスト達は揃って「あ」と声を出し察してくれた。

そう、ある意味で木人停止後が一番大変だったのだ。

不注意と言うより事故の様な形で木人を起動してしまったラムレッダは、確かに見事木人を停止させその責任をとったと言える。

で、あるのだがやはり綺麗に、文字通り『キレイ』に事が終わらない我が人生。

「動き回って気分悪いのに責任取るために結構無理したらしくてな……ホツとしたら一気に戻した」

「Oh……」

想像したのかB・ビィ達は、顔をしかめていた。

「その後始末が一番辛かった……その後もラムレッタ部屋に運んで水飲ませて寝かせて……おかげでへとへとだよ」

「あ、そつちで疲れてんのか」

「殆ど木人疲れだけど、トドメだったんだよ疲れの。いや精神的にはこつちが上だわ」
俺も早いところ寝たい。

「あれ……とここで相棒服替えたか？ 朝と違うけど」

と、ここで更にB・ビィが気づいてしまう。ある一つの事実に。

「……木人止めた時、ラムレッタ俺に飛び乗る形になってたんだよ」

本日何度目かの「あ」が重なった。ほんと、こういう時の「あ」って悪い意味ばかりだ。

——結局この日は、休日のように休日でない。どこまでも気の休まらない、俺にとつては当たり前前の日常の出来事。遠くラムレッタの私室から「ごめえくん……っ！」の聲がとて弱く聞こえた気がした。

■

八 そして

■
どんな日でも起こり続く騒動。団長の日常。ある意味でそれが日常である限り、平和であるのかもしれない。

「——さて、次は“どれ”を送ってあげようかねエ？」

並ぶ木人、無数のタレット。それを見つめる老婆。

きつと団長は、また大変な試練を受けるだろう。

「——星晶戦隊（以下略）が、この島に？」

「うん、そうらしいよ“姉さん”」

「そう、なんだ……ふうん」

「会いたいつて言つてなかった？」

「ううん？ うーん……言つたかな？ 言つてないかな……う？ ……スウ」

「あ、姉さん寝ないでよ！」

そして次に団長を待ち受けるのは、新たな“仲間”か、それとも“悪夢”か、果たして——。

転寝

■ ■
一 半醒半睡

何ですかシエロさん、急に呼び出したりして……。

「……態々すみません、団長さん」

ええ、やだなあ。なんだか表情が普段より硬いですよ？ ……いや、ほんとに硬い、つてか怖い。え、え？ なにか問題でも……？

「そうですね……確かに問題です。ええ、とても問題ですねえ……」

あ、あのいつものように笑顔を……。そ、そんなシリアスフェイスシエロさんには似合わないですよ。ほら何時もみたいにつまらな——面白いダジャレ言いながら会話を始めましょう？

「そう出来たら良かったんですがあ……まずこちらを」

わーなんだろう？ 突然差し出された一枚の紙。それを受け取る俺。

嫌な予感がするけどついついそれを見てしまう。——違う、おかしい何かがおかし

い。

いや、だが……俺はこの紙を見る。——何故だろう、シエロさん以外がぼやけて見える。

「大変申し訳ないのですが……少し私も余裕がなくなってきました……」

シエロさんの声が妙に響いて聞こえる。そして手元の紙を見る。

そこには俺の大嫌いな数字が並ぶ。特に大嫌いな“0”の数字が多いようだ。

一、十、百、千、万……ああ、まだ増える……なぜだ。まだ、まだまだ増え——ダメだおかしい。やめてくれ。

「直ぐにとは言いません……ですが、これの8割は返してほしいんです……」

またシエロさんの声が響く。俺の覚えのある数字よりまだまだ多くなる。四千万……六千万、八千万……ああ、そんな一億……！ やめてくれ。頼む。なぜ俺がこんな目に——気付く、違う、現実じゃない。こんなのであつてたまるか。

「一先ず来月までには——だんち——お金を——かえ——」

シエロさんの声が響きながら遠ざかる。その代わり俺の周りに借金の額を示した紙が何枚も積み重なり、俺よりも高く柱となつて集まり山積みになつていた。

怖い、どんな星晶獣よりも恐ろしい。無理だ。絶対に無理だ……。返済できない……！

助けてくれ。誰か俺を……。

「——つと？　ちよ——馬鹿にん——!!」

——声、声が聞こえる。やめてくれ。もう俺に返せるお金は無いんだ。借りたお金も、もうないんだよ。これ以上は無理なんだ。助けてシエロさん、頼みますから……。

「——おき——！　団長起き——!!」

みんなは関係ないんだ。俺の借金だ。俺が借りた借金なんだ。他を巻き込まないでくれ……。頼む、頼むよ……。

俺にとって最大の恐怖……その書類の柱がバランスを崩した。それに伴い他の柱も崩れる。俺に向かってくる……途方もない数字が書かれた紙が雪崩となり俺に押し寄せる。俺を飲み込む。借金が俺を……俺を食い殺——。

二 悪寒

「——起きろおっ！」

「いでえああっ!!」

突然の頭部の激痛。あまりの痛みに俺は、伏せていた身体を跳ね起こした。

「な、なにすんじゃいメドウ子お!!」

犯人はやはりメドウ子。髪の毛を蛇に変えて俺の頭をカミカミしていた。超いてえ。「なにすんだじゃないわよ！」

「……へ？」

「こんなところで寝て風邪ひいてもアタシ知らないわよ」

メドウ子の喝の一声を受け自分の意識がハッキリして来るのがわかる。

俺がいるのは、食堂の何時もの特等席。そばには座る俺を見下ろすメドウ子とコーデリアさんの二人がいた。

「……俺寝てた？」

「ああ、だが酷くうなされていたよ。思わず声をかけてしまった」

「あ、ああ……そう、そうか夢……転寝か、俺としたことが……」

時間はお昼過ぎ。机にあるのは、俺が持ち込んで整理していた書類の山。それが傾き机に伏せていた俺に押し掛かっていたようだ。そしてそこには、現在借金返済に充てている金銭について書かれていた。

窓からの柔らかな日差しにつられウトウトとしてしまい寝てしまったのか。だがなるほど合点がいった。そりゃあんな夢見るわけだ。

「酷い夢だった……」

「顔も酷かったわよ。顔中しわくちやで酷いアホ面……ぶぶー！」

「うるせ、笑うな」

「で、どんな夢見たのよ？」

「思い出したくねえ」

「何よ、つまらないわね」

「人の夢は無理に聞くものじゃないさ」

ああ流石コーデリアさんだ。メドウ子とは違う、人が出来てる。

「少し気晴らしをした方が良く。汗も酷いようだからね」

「そのようです……冷や汗かな、ああやだやだ。……水でいいや、ちよつと風呂行つてきます」

まだ昼を過ぎて少しなので湯は張つてないがこの際水浴びでもいい。この酷い気分を洗い流すならむしろ水が良いぐらいだ。

「書類は後で片付けます……すんませんけど、そのままにしてください」

「ああ、そのようにしておくよ。それに水浴びでは、身体が冷えるだろう。温かい飲み物の準備でもしておこう」

「やあ……それは、どうもすみません」

「気にしないでくれたまえ……誰かのために飲み物を淹れるのはいいものさ」

「ありがてえ……」

「ほら、デレデレしてんじやないわよ。そのだらしない顔早くシャキつとして来なさいっ！」

メドウ子が髪の毛を逆立て俺をやたら急かす。

「言われんでも行くわい」

「ふんっ！」

俺はあの悪夢を忘れ、汗で気分の悪い体をスッキリさせるため、いそいそと風呂へと向かった。

——だがこの時はまだ、まさか次に立ち寄る島であんな事になるなんて思いもしなかった。

騒動とは、何時も突然であり、しかしこの悪夢はある意味でそれを予感させる出来事でもあったのだ。

事の始まりは、島に到着して一日経った時の事である。

■ ■ ■ 三 呼び声

■ ■ ■
休暇と補給を兼ね俺達は、とある交易盛んな島へと立ち寄った。

補給も大事だが、なにせ休暇にしようと思った日にこっちは、木人ばあさんエディ

シヨン”の暴走の対処に追われたのだ。別の日に休まないとやってられんのである。

滞在は五日程の予定。休暇と補給なら十分だろう。

エンゼラから街に移動した俺は、早いとこ休んでしまいたいので直ぐ商人相手に物資補給の手続きやらを行った。

そして生活物資購入の手続きなら俺だけでもいいのだが、今回は更に別でカリオストロとルナルさんも付いて来た。なんでもそれぞれ実験材料と筆記用具が欲しいとの事。

団員の私物は基本的に自費購入なのだが、彼女達の場合殆どが薬品やインク等の消耗品であり補給の際にまとめて買ったほうが単価が安くなる場合がある。この場合は、私物でも一緒に買ってしまいう事も少なくない。

更にはその後まとめ買いのできない、あるいはまとめて買うまでもないような日用品を買いに幾つかの店へと移動した。

しかし交易盛んな島の大きな街。少し歩くだけで珍しい商品を置く店などがありつついつい寄り道しがちになってしまう。特にカリオストロとルナルさんは、それぞれ興味を引いた品のある店に行くなどしてその買い物にも引き続き付き合わされた。

「やれやれ……疲れたねっ」と

結局補給の手続きだけじゃなく他の買い物にも付き合ったので思ったより疲れてし

まった。特にカリオストロの荷物が多く大変だ。

「なんかお爺さんみたいよ団長」

「荷物重いんすよ」

「んもう！ 団長さんつてば、情けなくいぞっ☆」

俺の寂れた姿を揶揄うルナルさんとカリオストロ。と言うか俺が持つてる荷物はカリオストロのだ。俺の両手にある品は、錬金術とは関係のない衣服の入った袋。

「自分の荷物くらい持つてくださいよ」

「持つてるだろ、ほら」

途端に表情を素に戻してカリオストロが見せた荷物は、荷物の中で最も軽いアクセサリーだけ入った小袋であった。

「重いもん殆ど俺とB・ビィじゃん！」

「んもおく！ 団長さんは、か弱い女の子に重い荷物持たせるの？」

「か弱い……？ 女の子……？」

「おい全部疑問で返すな!!」

か弱い女の子はそんな風に叫ばん。

「ま、相棒は何かと疲れてるしな。エンゼラ戻った後はもう好きに休もうぜ」

「ミンミーン！」

俺を励ましてくれているのか、ミスラが俺の周りをくるくる回っている。まったく愛いやつめ。あとB・ビィ、俺が日頃疲れる理由に割とお前が含まれているのを忘れるな。わからんかこの俺達に向かう奇異の視線を。荷物を持つてくれるのは良いが、お前がマチヨビィで荷物運ぶもんだから道行く人間が全てギョツとしているんだぞ。

そしてそんな視線にちよつと慣れてる自分が怖い。

「けどありがとね団長。おかげで私も色々買えたわ」

「原稿進むといいですね」

「うゝんゝっ!? そ、そうね……」

途端に冷や汗をかき始めるルナールさん。こりゃ「進捗ダメです」って感じだな。買った文具が無駄にならない事を祈るのみだ。

そうこう言いながら歩いていても商業エリアを抜けないのは、流石交易盛んな島と言ふべきだろう。だがあまり長居をすると更に寄り道をしてしまう。早いところエンゼラに帰ろうと思つて速足気味になった時——俺の視界は同じくエンゼラへ帰ろうとしている一人のドラフの姿をとらえた。

一瞬「このまま無視しちやいたいなあ……」と思つたのだが、同時に目に入ってきた酒瓶の数を見ては、そもいにかぬと諦める。

B・ビィ達にもついてくるように言い俺は、ほくほく顔で歩く「彼女」にそつと忍び

寄つてその肩を叩く。

「ちよいちよい」

「はえ？」

「やあやあ、ラムレッダ」

「……にやあつ!?　だ、だだだ団長きゅんつ!?」

両手に抱えた酒瓶を落としそうな勢いで俺に驚いたのは、ラムレッダであつた。

「面白い物は楽しいかな……?」

「え、えへ……にやはは……」

彼女の持つている酒瓶を見ながら話すと彼女はダラダラと冷や汗を流していく。

「また随分と買ったみてえだな」

「コイツにとつちや数日分か?」

「ホント、よく飲むわねこんなに……」

「ミミーン?」

B・ベイ達も彼女の酒の量を見て呆れるばかりだ。

「ち、違うにや……っ!?　これは、ティアマトの分もあるわけでしてえ!」

「だとしても多いわバカチン」

「バカチンツ!」

「お前さん昨日同じぐらい酒飲んでたでしょーに？　んで、昨日飲んだのと同じ量次日に買足すかい？」

「それはあく……色んなおしやげが、買って買って」と手招きをお……」

「ほおん？」

「あ、ごめんにやさいつ؟!　嘘、うそです！　単に私が誘惑に負けてしまいましたあ！」
まあそんなこつたろうと思つたさ。それこそ「ちよつと」買うつもりで来たら我慢できなくなつたんだろう。

「……はあ。買ったならしやーない、返せとは言わんよ自分の金だろうし」

「あじやます……っ！」

「ただ一気に飲まない事！　何度も言つとるが、一晚でいくつも空き瓶増やす事は止めなさい」

「肝に銘じます……っ！」

正にその「肝」が酒でどうにかなつてないか不安になる。元来酒に強いドラフとは言え程度と言うものがあるはずだ。休肝日つてもんがあるんだろうかこの飲兵衛は。

結局図らずもラムレッタと合流し帰ることとなつた。俺は「一度団員の健康診断でもしたほうがいいかもしれんなあ」等と思いつつ歩いてみると、市場の喧騒の中でありながら少年の声がハッキリと聞こえてきた。

「夢占い、夢占いはいかがですかあー！ よく当たりますよお〜！」

声のほうに視線を向けると市場に似合わぬ水色のパジャマ姿の少年がいた。

「へえ、夢占いだつてよ相棒」

「しかも子供ね」

B・ビイトルナルさんが興味を惹かれたようで反応を見せる。確かに “占い” の呼び込みをパジャマ姿の少年が行っているのは、人の多い市場でも中々に目を引かれる光景だ。

しかし夢占い、夢と言うと最近見たあの借金の悪夢を思い出してしまふ。

「なんだ団長、興味でも沸いたか？」

俺を見てニヤニヤ笑いながらカリオストロが言う。この人は俺の見た悪夢の事を知っていた。と言うか、その日の内に結局夢の内容がメドウ子にバレてしまい「アイツ借金の夢でうなされてたわ、プークスクスツ！」と団員に言いふらされた。おのれメドウ子。

「そりやまあ……ちよつとは」

「占つてもらつたらどうだ？」

「占いか……けどもう寄り道はなあ」

「いいじゃない、興味があるならやってみれば」

今度はルナルさんも占いを勧めてくる。もつともこちらは、からかいの意志はなさそうだ。

「私達の買ひ物に付き合ってくれたし団長も興味ある事したら？ 私もちよつと興味あるし付き合うわよ」

「ルナルの言う通りにやよ団長きゅん。それに今なら直ぐ占ってくれそうにや」

確かに少年の周りには、足を止める者がいても占い目的の客はいなさそうだった。

「ふーむ……興味はあるが、夢の内容が内容だからな。ちよつと怖い気もする」

「占いの結果を真に受けろってんじゃねえさ、もし良い結果なら気休め程度にはなるだろ」

「気休めね……悪い結果だったら？」

「戒めにしな」

素のカロオストロらしい実にドライな言葉だ。これが見た目は美少女の口から出るのだからな。

「誰が見た目〴〵は〴〵美少女だつ！ 全部美少女だろうがっ!？」

「何も言つてな……いつてえつ!？」

「顔が言つてんだよっ!」

なんちやつて美少女の小さい脚が、俺の膝小僧を襲った。またも心の声を出していた

らしい。どんだけわかりやすいんだ俺は。

しかしカリオストロの言う通り夢占いに興味を惹かれたのは事実。良くて気休め悪くて戒め、そんなのも悪くはないだろう。

「そんじゃま、せつかくだし一つ頼もうかね」

一度決めれば行動は早く俺達は少年へと近づき声をかける。

「ちよつと君、占いについていいかな？」

「あ、はい！ 夢占いに興味がおありで……うわあ!？」

彼は声をかけた俺の方へ振り返り、そして俺の傍にいたB・ビィ（マツチヨ）を見て叫んだ。

「ハイハイ、人を見て叫ぶたあ失礼だぜ？」

「うん、人ではないね？ 少なくとも姿は」

「す、すみません……！ ちよつとびっくりして」

「ちよつとではなかったわね」

「普通に魂消てたな」

「度肝抜かれてたにゃ」

「ミンミン」

「えつと……ごめんなさい」

少年は胡麻化してくれているが、あんな叫び方して「ちよつと」と言うのは無理がある。だが誰が彼を責められようか。振り向いて直ぐに筋肉モリモリマツチョマンのB・ビイがいたら普通の人なら悲鳴を上げる。むしろ良く逃げなかつたと思う。

「いいよ、気にしないで。普通ビビるよこんなナマモノいたら」

「こんなとはヒデエな相棒」

「他にどう言えと言うのか……」

「あは、ははは……あれ？」

俺とB・ビイのやり取りを見て困った様子で笑う少年であつたが、ふと俺とB・ビイを交互に見て、そしてミスラやカリオスト口達を見る。すると途端に合点がいったと言ふ様子で「あつ！」と叫んだ。

「も、もしかして【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイクンマン&均衡少女Z O Y】の团长さんですか？」

「それ判断材料聞いていい？」

「あ、それは……」

一体何を見て俺を星晶戦隊（以下略）の团长であると言う考えに至つたのか。俺とB・ビイだけならまだしも、カリオスト口とルナルさんあたりを見て特に深く納得していったのが納得できん。

「え〜つと……そ、そう！ 姉さん、僕の姉さんが一度星晶戦隊（以下略）に会ってみたいと前から聞いてて！ そ、それでピンと来たんです！」

「お姉さんが？」

「はい！ 以前から星晶戦隊（以下略）の噂を聞いて興味があると」

「それは……それでなんかやだなあ」

「ええ!？」

俺の答えに少年は驚いているが、俺の「あんな噂」を聞いて俺に会いたいわう人があるのも驚きだ。興味がわいたと言うが、どんな興味だというのか。思わず身構えつしまう。

「君も知ってるようだけど、あんな噂だよ？ よく会おうとか思うね」

「いや、その……そ、そう！ どちらかと言うと、色んな団員が居る」と言う噂のほうに興味を持ったらしくって……！」

「まあ確かに興味は沸くだろうな。オレ様だつて沸いた」

「実際色々居るしにや〜」

「ミンツ！」

「年間空域クセの強い騎空団ランキング堂々一位よね」

「相棒のクセがスゴイ」

「そんなランクはねえし、クセがつよいんはお前らじゃあ！」

「ほ、本当に『色んな』団員がいる……！」

阿呆な会話のせいで少年が更に納得してしまっている。こうやって誤解が広まるんだ。ちくしようめ。

「あの……もしよければ姉さんに会っていただけませんか？」

「会う？ ……今からかい？」

「はい。実は占いをするのは、姉さんなんです」

「……今聞いたお姉さん？」

「ええ、今はその占いのために間借りしてるお店、そこに居ます」

少年が指さす方向にある店を見る。どうやら普通の飲食店のようであるが、当たり前だが外からはその『姉』の姿は見えない。

「さてどうするか、と悩む。と言うか、『俺に興味がある』と言う時点で割と引き返したい。」

「会ってやりやいいじゃんか相棒」

「B・ビー、お前って簡単に言うよね」

「つてもよう、占いに興味あつて声かけたのはこつちだぜ。別にそつちの興味が失せたわけじゃねえだろ？」

「そだけどき」

今までの旅の中で俺に興味があると言う奴つて大概星晶獣だよ。そうでなくてもなんか厄介な事抱えた人だよ。巻き込まれるよ……何かしらに。

だが、チラつと少年の方を見ると不安げに期待を込めた瞳で俺を見ている。ああ、そう言う視線に俺は弱い。若く純粹で無垢な視線が俺に刺さる……いや、俺も若いが。

「……じゃ、じゃあ取り敢えず占いはお願いしよつかなあ……つて」

「あ、ありがとうございます！」

「折れたな」

「折れたにや」

「団長、少年にもちよれ……」

「ミーン」

うるさいよ君達。別に折れたわけじゃない、占いへの興味が勝つただけですが？ あとちよろくも無い。

「それでは、こちらへどうぞ！」

一方俺の答えに安堵したのか少年は、嬉しそうに姉がいると言う店へと俺達を連れて行く。

しかし俺に興味があると言う占い師の姉とは、本当にどんな人なのだろう？ そんな

事を考えながら、呑気に俺とB・ビイ達は彼の後をついていった。

■ 四 忍び寄る

■ 団長達を引き連れた少年は、占いのために間借りしている店へ入った。その店の隅には、店の喧騒も気にならぬ様子で椅子に座ったまま眠る一人の少女がいる。少年はその少女のそばへと向かった。

「姉さん、ヴェトル姉さん！ お客さんが来てくれたよ！」

彼が声をかけると、座って眠る少女は薄く目を開き声をかけた少年を見た。

「ふあ……モルフエ……？」

「ほら、姉さんしつかり！ お客さんだよ」

軽く肩を少年に揺らされ少女は更に目を開く。それでもまだまだ寝ぼけ眼のそこには、団長はじめB・ビイ等の面々を映し出した。

「いらつしやあくい……ふあ」

客を前にしても欠伸をするのを躊躇わない少女。その姿を見て団長達は、少し肩透かしを食らったような気分になっていた。

「君の姉とは聞いたから、若いだろうとは思ったけどね」

「思ったより若かったな」

「と言うか子供にや」

「あはは……よく言われます。けど占いの方は、間違いないですよー!」

少年が姉のフォローに回るが当の姉本人は、どこ吹く風といった様子で団長達を見つめていた。

「んふふ……しわくちゃのおばーさんの方が良かった……?」

「いんや、ばあさん相手だと身構えちゃうからこの方が良いよ」

「おばーさんは、お嫌い……?」

「嫌いじゃないよ。ただね、苦手なのさ」

老婆と言う存在に若干トラウマを抱える団長は、如何にもな怪しい雰囲気の占い老婆より目の前の少女の方がよっぽど取っ付きやすく助かっていた。

「んふふ、変なおにーさん……」

「失礼だよ姉さん!?! 折角会いに来てくれたのに!」

「ん〜? 会いにいく……?」

「そーだよ。この人が星晶戦隊（以下略）の団長さんだよ!」

「星晶せんたいく……? ふあ〜……」

星晶戦隊（以下略）、その名を出されても少女は変わらず欠伸をしながらうつらうつら

と揺れている。

「……本当に俺に興味あったの?」

「ほ、本当ですよ!?! ちよつと姉さん、星晶戦隊(以下略)だってば!?! 会ってみたいって言つてたでしょ!?!」

団長の視線が疑いのものへと変わり少年は慌てて姉の肩をつかんで揺らした。

「うううん……! モルフエ、らんぼうしないでえ……!」

「なら寝ないでよお!?! 大切なお客さんなんだからあ!」

「はあくい……ふあく……!」

少女はまた何度目かの欠伸をするとほんの少しであつたが、意識がハッキリした様子だった。

「はあくい……ヴェトルとモルフエの夢うらなくい……私がヴェトルく、そつちがモルフエ……ようこそお……!」

「随分気の抜けた挨拶ねえ……!」

「す、すみません……け、けど本当に占いは当たるんですよ!」

占いの少女、ヴェトル。そしてルナールの感想に対しても姉のフォローをするのは、その弟であるモルフエ。

素直で人当たりの良いモルフエに対し、全てが欠伸に聞こえてくる様なゆつたりとし

た言葉使いで喋り掴み所の無いヴェトルは、占い師としては十分すぎるほど不思議で奇妙な雰囲気であった。

「んふふ……星晶戦隊（以下略）団長さん……お空で噂のお兄さん……」

「その噂信じちゃだめだよ？」

「噂は眉唾、ウソ？ ホント？ あんな噂やこんな噂……ちよつとホントで、ちよつとウソ？」

「ウソウソ全部ウソだよ、ウソだよせんぷー」

団長は首を振って必死に噂を訂正しようとした。彼の頭の中では、あれやこれやと何処で尾鰭がついたかわからない噂がゾロゾロ百鬼夜行の如く並んで歩いていった。

「それじゃあ……星晶獣は？ 仲間に居ないの？」

ヴェトルは団長の横に立ち、そして頭上にもいるB・ビイとミスラ見た。

「それはホントだぜ嬢ちゃん。オイラはB・ビイ、こっちはミスラつてんだ。よろしくな！」

「ミーンッ！」

「……星晶獣ってこんな気軽に名乗るものだったかしら？」

「違う、断じて違う」

ルナールの眩きに団長は、唸るように答えた。恐らく全空広しと言えど、こんな挨拶

をする星晶獣は、この騎空団ぐらいにしかない。

「それでオイラは、騎空団のマスコットさ」

「図々しい事言うな。騎空団マスコットはユグドラシルやミスラだ」

「ミンツ！」

マチョビイ状態でマスコットを自負するのは、かなりの無理があるがB・ビイの自信は本気のものであった。当然すぐに団長に否定され、別に団長にマスコット認定されたミスラが誇らしげに回転していた。

「艇に戻ればもつと他の奴にも会えるぜ。みんな気の良い星晶獣ばつかだぜ！」

「ミンツ！」

「星晶獣って、こんな〴〵会いに行ける〴〵系の存在だったかしら……？」

「違う、断じて違う……っ！」

またもルナルルの呟きに対して、唸るように答えた団長。やはり全空広しと云えど、こんな〴〵会いに行ける星晶獣〴〵が居るのは、この騎空団ぐらいなものである。なにせ星晶戦隊（以下略）に何かしらの依頼を出せば会えるのである。星晶獣も安くなったものだ。と団長達は思わずにいられない。

星晶獣の本来あるべき姿や、そのありかたとは云々——ブツブツと団長は項垂れ呟いた。

「ふうん……」

そんな団長やB・ビー達のやりとりをヴェトルが一瞬冷めた表情で見ている事に、この時団長達は気が付くことはなかった。

■ 五 夢占い

「ふあ〜……それで、占って欲しいのは……お兄さん？」

俺とB・ビー達のやりとりを見て一瞬黙っていたヴェトルちゃん。欠伸までされてしまった。

「ごめんごめん、つまらん物を見せちゃって」

「んふふ……別に気にしなくいい」

「悪いね。それで占ってもらうのは……」

「あ、ついでに私達も占って欲しいにや〜」

ここでラムレッダが自分とルナルさん達を指差しながら手を挙げた。

「そうね、話のネタとしても興味があるし」

「おい、オレ様はやるとは言ってねえぞ」

「まあまあ、せっかくだしやろうにや。団長きゅん誘ったのもカリオストロにやよ」

「む、むう……」

荷物も置いて完全に占いに参加する気満々のラムレッタ達に挟まれ、さしものカリオストロも押され気味のようにだ。

結局俺達は、「最近夢は見えてない」と言うB・ビイとミスラを除くメンバーで占つてもらう事になった。

「そもそも星晶獣って夢みんの？」

「見てんじゃねーの？ 他は知らねえけど、少なくともウチのここは全員見てるぜ」

ちよつと疑問だったのでB・ビイに聞いてみたところ、コロツサスやミスラのように、非生物型星晶獣でも夢は見るとのこと。ウチと言うのは、やはり星晶戦隊（以下略）のことであろう。あまりウチのメンバーを星晶獣のスタンダードにしてはいけないと思うので、この答えは話半分で聞いておく。

さて肝心の占いであるが、俺から順にヴェトルちゃんに夢の事を話していく。当然俺の夢は、あの借金の悪夢である。思い出すのも嫌だがあれ以外を占う意味もあまりない。俺はあの悪夢を見たままに伝えた。

ルナールさん達もここ最近見たと言う適当な夢を伝える。俺と違って誰もが当り障りない、けどちよつと不思議な夢らしい内容であった。

それらを聞いたヴェトルちゃんは、しばし沈黙した。

「……………」

「これ寝てないよね？」

「寝てない、寝てないです！ 集中してるだけです！」

「おい、首が船漕いでるぞ」

「ね、姉さん流の集中ですっ！ すごい集中力なんですよ!? ええ、はい！」

なんなら「スヤア……」とまで言い出しそうな雰囲気のエトルちゃんに不安を覚えるが、モルフエ君が言うには集中してるだけとの事。それを信じてもう少し待っている、エトルちゃんが再び眠気眼を開いた。

「ふあく……結果はつびよあく……」

「寝てたんじゃないわよね？」

「大丈夫、大丈夫です……っ！」

「ふあく……よく寝た……」

「この子、今〃よく寝た〃って」

「集中、集中したんだよね姉さんっ!?!」

「むう……どうしたの、モルフエ……」

当然の疑問を指摘するルナルルさん、それに対してのモルフエ君の必死なフォロー。だがどこ吹く風のエトルちゃん。これで案外バランス取れてそうな二人に見える一

方、モルフエ君の姿に自分が重なりだしてきた。

「……身近にマイペースな人いると大変だよね」

「え……えっ？ 何がでしょうか？」

「みなまで言うな、頑張つてモルフエ君」

「あ、はい……？ ありがとうござい、ます？」

とりあえず彼の未来を憂いつつ応援しておいた。

「それより占いの結果よ。どうだったの？」

ヴェトルちゃんのペースに焦らされたのか、占いの結果が気になるらしくルナールさんが急かすとヴェトルちゃんは、そつと俺を指さし結果を語りだした。

「あなたは、険しい道を行こうとしている……長くて遠い、険しい道……。行く手を阻むは、幾多の困難……。星の獣が、呻いて騒ぐ……」

「星晶獣関連のトラブルは避けられんらしいな相棒」

「お黙りよB・ビー」

B・ビーに茶化されるがヴェトルちゃんの言う事は、まあ当たっている。ヴェトルちゃんは、そのまま結果を続けて語る。

「旅の中で、襲い掛かるのは過去……。あなたが過去に失ったもの。例えあなたが忘れても……過去はあなたをわすれない……」

極めて、実に意味深な事を告げるとヴェトルちゃんは黙った。俺の瞳を彼女は、ジッと睨むように見つめている。

「……努々気を付けるとするよ」

「それがおすすめ……んふふ……」

眠気眼に見えた薄い瞼が、今は鋭い刃に思えた。

その後、彼女はラムレッタ達の占い結果を語った。

「筆を走らすあなた……己の愛する世界を描くあなた。妄想空想……夢の世界は、現に
あらず。忘れてはだめ……あなたは、現に生きる者……」

「ななな、なんのことかしらあゝっ！ ははあゝん！」

「妄想浸りすぎって事じゃないっすか？」

「はぐうっ!？」

ルナルさんが痛い所を突かれたのか、胸を押さえて呻いていた。

「時の流れは、何時だって残酷……初めから守れないなら、辞める事も大事」

「締め切りかな？」

「うい……!？」

最近も自分で決めた期間内で原稿を描けなかったのか、ルナルさんは頭を抱えた。

「そしてあなた、美酒に酔うあなた……。律する心を忘れるなかれ……。酒は飲んでも飲

まれるな……」

「はうわっ!？」

大いに思い当たることがあるのか、ラムレッダも胸を押さえて呻きだした。

「過去の後悔と過ちは、繰り返すべきじゃない……懺悔の時は、近づいている……」

「酒の失敗多いもんな」

「しゅ、しゅみません……っ!」

最近も「木人騒動」での失敗がある。そうでなくても身に覚えの多いラムレッダは、縮こまる様に頭を下げた。

「最後にあなた、可愛いあなた……」

「えへ☆ 可愛いだなんて、カリオスト口照れちゃう☆!」

「偽りは、所詮偽り……真理とは程遠いもの。いくら愛らしい姿で隠しても……あなた
の心は隠せない……」

「ああんっ!？」

「そーゆーとこ、そーゆーとこだよおっさん」

心と言うか本性だだもれカリオスト口。少女の姿のギャップを良くついた言葉だ。

「きつと思いい出す……あなたの心、真理の原点を……」

「てめえ……」

全てを見透かしたようなヴェトルちゃんと言葉。カリオストロも思わず唸り、彼女を睨んだ。

「んんん……っ！ 以上、占いでした……」

寝起きの背伸びの様な仕草をしつつ、ゆったりとした調子を崩す事無くヴェトルちゃんは、俺達に占いの終わりを告げた。

決して良いとは言えない結果に俺だけでなくルナルさん達は、すつきりとしめない顔をしている。

しかし悪いだけでも「占い」でしかない。ヴェトルちゃんの言った内容は、悪意ある「予言」でなくあくまでも「占い」でしかない。カリオストロの言っていた通り、戒め程度に受け取るのが良いのだろう。

「ありがとう、面白い占いだっただよ。それじゃこれ、占いの御代」

「はあ……い……ん」

「おっ」

彼女は御代を受け取ると思っただら、突然俺の手を掴んだ。すると彼女は、俺の目をじっと見て囁くように話します。

「夢を否定してはダメ……。夢は鏡、心の鏡。映るがまま、見えるがままを受け入れて……鏡に映るのは、あなた自身だから……」

これも占いの結果であろうか。今回の占いでも特に意味深な言葉は、忠告のようにも聞こえた。

「……忘れずにおくよ」

「んふふ……良い夢を……ふふふ……」

ヴェトルちゃんは、今度こそ御代を受け取った。

「ま、聞くこた聞いた。帰るとしようぜ」

「あ、ちよつと待つて下さい！ これ、サービスです！」

カリオストロが帰ろうとするとモルフエ君が慌てて声をかけた。彼は何時の間にか手に紙袋を持つており俺達にそれを差し出す。

封はされていたが袋からは、僅かに心地よい香りが漂った。

気になったのかB・ビィがスンスンと臭いを嗅いだ。

「お、良い香りじゃねえか。ハーブか？」

「はい、僕が調合したハーブティーです！ 寝る前に飲めばリラックスできますよ！」

「そりや良いね。ありがたくいただくよ」

モルフエ君から袋を受け取ると俺も軽く臭いを嗅いだ。バランスの取れたカモミール系の香りが心地よい。

「それじゃこれで。占いありがとうね」

「いえいえ、こちらこそありがとうございます！」

「毎度、ありがとうございます……。ふあ……」

今度こそ別れを告げて店を後にする。きつちり見送るモルフエ君に欠伸をしながら手を振るヴェトルちゃん。最後まで差の激しい姉弟である。

「不思議な占いだっとなあ、相棒」

「確かにな。まあ俺は、きちんと占い受けたのは初めてだがね」

帰ったらエゼクレインさんにも結果について聞いてみるのもいい気もする。あの人だって占い師だ。また別に視点からの占い結果を教えてくれるかもしれない。

ふと受け取ったハーブティーの香りをもう一度嗅いだ。やはり心地よい香りだ。この香りだけでも今日の眠りが楽しみになった。

不安夢

■ ■
一 始まりの前夜

「ストレスだろう」

食堂のテーブル席、目の前に座るエゼクレインさんが、呆れた様子で俺に告げた。

——数時間前、俺は今停泊中の島でヴェトルちゃんと言う姉弟の夢占い師に借金の悪夢を占ってもらった。それで得た占い結果は、良いと言えるものではなく俺の旅路を不安にさせる忠告にも思えるものであった。

その結果自体に不満はないがエンゼラに帰った俺は、試しに占い師であるエゼクレインさんにこの占いに関して聞いてみたのだが——。

「ストレス、ですか……？」

「そうだ。ストレスだ」

「こんな答えが返ってきたのである。」

「あのお……紫水晶で占ったりとかは……」

「するまでもない」

「そんなハッキリ……」

「ハッキリ言いもする。考えてみる……お前がその悪夢を見た時は、金銭関連の事務仕事の最中だった。そんな中での転寝、浅い眠りは直前のイメージを残して夢に出た。もう一つの原因としても日頃のストレスと考えるのが妥当だろう」

「ま、まったくもって……その通りで」

理路整然と言われると占い以上の説得力だった。

「けど彼女の占いは、結構当たるようにも思えたけどなあ」

「……さあな。俺もその占いの結果にケチをつけようってわけじゃない。……そもそも夢占いは、俺の扱う占いとは異なる。むしろあれは精神分析の類だ」

「心理学のような？」

「ああ、そうだ……」

エゼクレインさんは、腕に巻かれた紫水晶を揺らしつつ話を続けた。

「俺の……俺の紫水晶を扱う主な占いは、わかりやすく言えば『失せ物探し』だ。紫水晶が示す先には、探し求める物かそれに導くなにかがある……つまりは指し示す占いだ」

「なるほど」

「一方で、だ……目で見る事も手で掴む事も出来ん曖昧な『夢』と言うモノを占う事は、紫水晶では出来ん。つまり夢占いは、読み取る占いだ。それが出来るのは……話を読み取る術に長け、分析力も優れた者だ」

「な、なるほど……」

だんだんとヴェトルちゃんが物凄いい切れ者のように思えてきた。あの眠気眼の奥にそんな分析力があるとは。一瞬見せた刃のような視線こそが、彼女の本来のものであったのだろうか。

「後は……夢の内容から夢を見た本人が不安に思っている事を読み取って、それらしく『告げてやれば良い。それだけで相手は信じてしまう、不安こそが信憑性を高めるからな』

「そういうもんですかね」

「そう言うものだ。他の奴らもそうだったろう?」

そう言われると確かにルナルさん達も、夢から読み取れる範囲の不安な内容を織り交せて告げられていたように思える。

「つまり、だ……俺に夢占いの結果なんぞ聞かれても答えようが無い、つまりそういうことだ」

「な、なるへそ……」

「まあ話を聞く限り、その娘がいい加減な占いをしたとも思わん。腕は……確かなんだろう。お前の感じた通り忠告として受け取っておくのが吉という事だ」

「ふむう……占いつてのは難しいもんだ」

「だろう？ ……難しいんだ。物事を占うって言うものはな……」

若干自嘲気味でニヒルな笑みを浮かべたエゼクレインさんは、手元のティーカップを持ち注がれていた紅茶を飲んだ。

「……ハーブティーか」

「ええ、今話した子の……弟さんの方がくれたものです。結構いけますよね」

「ああ……確かにな」

睡眠を良くすると言うハーブを調査した特性ハーブティー。香りだけでなく味も良い。モルフエ君の言う通り良い眠りが期待できる。ベッドに入ってスツと眠れそうだった。

■ ■ ■ 二 悪夢の目覚め

「——ルナル先生、新しい仕事です」

声をかけられてハツとする。この声は、今の担当さんだったわね……ええ、そう、そ

のはず。

「来年出す予定の百科事典の挿絵、それと魔物図鑑の挿絵です」

担当のハーヴィンの男性が書類を次々と並べる。どれも大手の出版社の書類だわ。

「前回の挿絵も随分好評でしたよ。流石魔物を描かせれば全空一の絵師ですね」

つまらないお世辞だった。表面は笑みを浮かべて「ありがとう」と返しておく。

彼は更に別の仕事だと言っていくつか書類を置いて帰っていった。

はあ……——大きいため息をついた。

もう何年目だろうか、こんな風に絵を“仕事”にしてしまったのは。

別に辛いと言うわけではない、むしろ一般的には充実してる部類のはずだ。大手出版社からの依頼は、もう数年も絶えていない。描けばそれだけお金も入ってくる。何が不満だろうか？

不満……そう、不満はないはず。なのに私の心は満たされていない。

ふと、アトリエの本棚を見た。そこには、数々の参考画集や自身のスケッチがびっしりと並ぶ。

動物、魔物、人体、あらゆる絵を描くための参考書。けれど、その中にかつてあった本の名前はない。

『ポポルサーガ』、私にとって運命の絵物語。

ずっとそばにあるはずだったそれは……今はもうない。魔物絵師として、また挿絵画家としても大成した——してしまっただけには、もう必要がなくなってしまったもの。

あれを手放すなんて思いもしなかった。だが多くの出版社やその関係者が出入りするようになった今あれを仕事場には置けない。ましてそれ関係の耽美物なんて……。

はじめは専用の部屋を作っても残そうとした。あるいは別荘を買ってでも。しかし……結局できなかった。仕事を優先してしまい、そのまま……結局ポポルサーガも……。

後悔してるのだろうか？ いや、そんなものを感じる暇も無いほど仕事は多いのだ。それに、これでいいはずだ。全空で読まれる本に絵を載せているのだ。これ以上ない仕事、親にだって誇れるだろう。

耽美物に憧れ絵を描きだしたけど、理由をつけてはろくに絵物語もかけずにいた私には、これでいいのだ。むしろ十分すぎると思う。絵は好きだ……それを、仕事に出来るなら……十分じゃない。

だけど、このぼっかりと空いたような……心の喪失感。これが埋まる日は来るのだろうか？

そんな日が来るのかわからないまま、私は絵を描き続ける……心が満たされない絵を……ずっと……ずっと……。

■ 三 予兆 ■

夢占いを受けた次の日、島での滞在二日目の朝。

久々の休日である（本来は木人暴走の時が休日だった……）。だが休みだからとあまり遅くまで寝る事はしたくない。折角の休日は、朝と言う時間も楽しみたい。そもそも日が昇ると目も覚めるし。

洗面所で顔を洗った後とりあえず食堂に移動する。どう休暇を過ごすにしても朝食を食わねば始まらない。

「あ、団長……おはよう」

「おや、セレスト。おはようさん」

食堂に向かう途中廊下でセレストに会う。

「だ、団長やつぱり朝早いね……」

「まあな。そつちも早いがなんかあったか？」

「えつとね……一応エンゼラの船体チェックをね、してたの……」

「さすが熱心だなあ。いや、団長としてもありがたい」

「えへ、えへへ……」

日頃の安全な航行は、ひとえに彼女のおかげである。本当にありがたい事だ。

「俺食堂でコーヒー飲むけどいる？」

「あ、私も欲しい……お、お願いします……」

「あいあい、了解」

他愛のない話をしながら二人揃って食堂に向かい扉を開ける。休暇の早朝とあってまだ誰もいない———と思つたが、既に先客がいた。ルナルさんだ。

基本夜更かし気味で朝の苦手な彼女がこの時間食堂にいるのは珍しい。あるいは、この時間まで起きていたと言うパターンもありえる。なんであれ声をかけた。

「ルナルさん、おはようございます」

「……」

「ルナルさん？」

テーブル席に座るルナルさんは、どこかボーつとしている様子だった。ただそれは、寝起きや寝不足のそれとは違うように見えた。

「ル、ルナル先生……？」

「……え、ええ？ あれ？」

様子がおかしいルナルさんにセレストも声をかけた。すると今度は反応を示すのだが、やはり様子はおかしいままだった。

更には――。

「あ、あら……ごめんなさいボーつとしてて……ええと、あれ？ 私なんでこんなところにいるのかしら？」

「……え？ ルナールさん？」

「変ね……私起きてから……あれ？ 思い出せないわね……あ、それよりあなた達新しい担当の方かしら？ どの出版社の方？」

俺だけでなくセレストも寒気を感じたことだろう。ルナールさんにふざけている様子はなかった。まるで本当に俺達と『初対面』のように彼女は話しているのだ。

「ル、ルナール先生……!? なんて、私……セレストだよ……」

「セレストさん……？ 前にあったのかしら……いやね私ったら。担当さんもよく変わるから全員覚えてなくて……」

「昨日会ったばかりだよ……！ 夜もポポルサーガの話したじゃない……」

「ポポ……ッ!? なんて知って……私誰にもそれが好きだって話してなんて――」

「ルナール先生が教えてくれたんだよ!? ポポルサーガも耽美物も……っ!!」

「耽美物……だ、だってあれはもう捨てて……」

「ルナールさんしつかり！ あんた寝惚けてんだ!!」

思わず彼女の肩をつかみ体を揺らした。俺達の声が届いているのかすら怪しい程異

様な様子だった。

「……あ、あう!? な、なに!？」

「ルナールさん、ここがどこで俺が誰かわかるか!？」

「え、あ……」

「わかりますか?!？」

「あ、はい!? エンゼラの食堂で団長さんです!!」

「私は……っ!？」

「セレスト……え?？」

俺とセレストの事をハッキリと認識した彼女は、今日は初めて目を覚ましたかのような顔だった。キヨロキヨロと辺りを見渡し、最後に俺達を見た。

「わ、私……なんであんな」

「ううう……っ! び、びっくりしたよお……! 私の事忘れたのかと思ったあ

……っ!」

「ご、ごめんなさいセレスト……! やだ、私寝惚けてたの……?？」

「……そう、ですね。寝ぼけてました」

「ああ……変にリアルな夢見ちゃったからかしら? ほんとごめんなさい、なんか妙に真に迫ってたのよね……」

果たしてそうだろうか——ルナルさんの言葉に同意しつつも俺は、違和感を覚えた。

普通寝惚けたただけであそこまで記憶が混濁するだろうか？ 真に迫った夢と言うがどれ程のものだというのか？ 疑問が浮かぶ。

「ごめんなさい、もう平気だから……疲れたのかもね」

「よ、夜更かしのせいかな……？」

「あんなの夜更かしとも思わないけど……」

「け、けど耽美談義結構盛り上がったし……新しい原稿のアイデアとか——」

「わあっ!? だ、団長いる場で耽美トークはNG!」

「むぐう……!」

セレストが昨晚話していたらしい話題を言おうとすると、慌ててルナルさんが両手でセレストの口をふさぎ遮った。

「……なんにしても疲れてるんですよ。ちようど休みですし、一日ゆつくりして下さい。良ければコーヒー淹れますよ」

「ええ、お願い……ブラックで濃い目で目が冴えるようなの」

「了解っす」

「ああ、ほんとに夜更かしてことかしら……酷く眠いの……ああ、眠い」

一応は調子を取り戻してきたらしい。一先ずはであるが安心する。

その後もコーヒーを飲みながら俺とセレストは、ルナルさんを気遣いつつ何時も通りに過ごした。また食堂にいた理由を尋ねると、「目が覚めて、水を飲もうと思ったことまでは記憶してる」とルナルさんは話した。おそらく寝惚けながら食堂に来て椅子に座り呆然としてたのだろう。

ルナルさんの話を聞きながら俺は、彼女の見た夢がまるで悪夢のようだと思った。まして現実はまだ影響が出るほどならば猶更である。

数日前に見た俺自身の悪夢と言いどうも嫌な予感がした。

ただ全てが気のせいであってほしい——俺はそう祈りながらコーヒーを飲みほした。

■ 四 悪夢の手招き

「——ラムレッダ、悪いが限界だ。明日からもう来なくていい」

店の店長にそう言われた私は、何も言い返す事ができずにいた。きつと表情だけは、僅かでも驚いて見せていただろう。

「今までの給料は出す。だが割れた食器や今までの粗相の分を引いたものだ……出すだけありがたいと思ってくれ」

チャリン——店長から投げ渡されたお給料が入った袋からは、わずかな金子が擦れる音が聞こえた。

私は何も言うことが出来ず受け取った袋を見て、やつとのことで「お世話になりました」と言葉を絞りだし、頭を下げその場を逃げるように後にした。

今回も駄目だった。またクビだ——トボトボと街を歩きながらも何度目かわからない後悔をする。

適当なベンチに腰掛けて今後の事を考える。もつとも、考えたところで意味はない。先ほどのお金を含めれば、島を渡る程度のお金はある。それでまた別の島に行き新しい仕事を見つけるしかない。そしてきつと……またどうせクビになる。自分はそう言うやつだから。

惨めで誰かに慰めてほしい気持ちになった。だがそんなお人よしなんているわけがない。そうなると結局自分が頼るのは、手元にある酒瓶しかなかった。

酒瓶に直接口をつけアルコールの強い酒を呷る。すると少しだが気分が良くなった。けれど足りない。まだ酔えない。私はまた酒を飲んだ。

悪循環、まったくもってそうとしか言いようがない。私を慰めてくれるお酒を飲めば飲むほどに、私はもつとダメになってしまうのだから。

今回だってそうだ。酒に酔って失敗して仕事をクビになった。今回だけじゃない。

なんどもなんども、なんどもだ。

修道院の時も……それに、「あの時」だって……。ああ、そうだ……そうだった。私
はあの騎空団を飛び出してどれ程が経つたろう？ 自分のような人間が騎空士として
働いていたのが不思議なほど素晴らしい騎空団だった。優しい団長に気の良い仲間達、
今までで一番長く働けた場所だった。あんなに居心地の良い場所があったらうか。

しかし、そんな素晴らしい場所を私は自ら飛び出した。「取り返しをつかないミス」
をした。やはり酒が原因——いや、酒を飲んだ自分が原因で。

あの時一気に酔いが覚めた私は、無我夢中で逃げたのだ。気づけば彼らがいた島とは
別の島にいた。それからは、流浪の旅である。

修道院を飛び出した時と同じだった。一度目は修道院の失敗、二度目は騎空団での失
敗。自分の居場所になると思つた場所なのに、その全部を私は自分自身で捨てて来た。

修道院のみんなにも、騎空団のみんなにも合わせる顔がない。

きつともう、私はこうやってしか生きられないだろう。酒を止めることも出来ず、今
までの過ちから逃げるようにしか生きていけないのだ。

次の島でも、その次の島でも……また、その次の島でも——。

五 異変

島滞在三日目。カーテンの隙間から溢れる日の光を感じ目を覚ます。体を起こし背伸びをすると徐々に目が冴えてきた。

「ふう……朝だぞB・ビィ」

「んん……？ オイラもうちよつと寝とくぜ……」

「そうかい？ まあ朝食までには起きとけよ」

「あいよお……」

同室のB・ビィは、小型のベッドの中で毛布に包まり二度寝に突入。B・ビィは普段普通に早起きなので、今日は単にそう言う気分だったんだろう。休日だしうるさく言うつもりもない。

俺は軽く朝のストレッチを行いながら、今日はどう過ごそうかと考えていた。すると――。

「――んにゃあああああ~~~~つ!」

部屋の外、廊下の向こうからラムレッダの声と思われる悲鳴が聞こえてきた。

声の距離からティアマトの部屋からだろうか？ またぞろ、酒でなにか失敗でもしたのか？ この時点で俺は、特に焦る事もなくその程度に考えていた。だが今度は、バタバタと誰かが走ってくる音が聞こえた。

「オイ、オイ……ッ!! オイ起キロツ!!」

「な、なんだあ……!?!」

突然部屋に響いた激しい扉のノック音、そしてティアマトの大きな声。悲鳴には反応しなかったB・ビイも、これには驚き飛び起きた。

「短い二度寝になったな」

「ふああ……やれやれ、オイラまだ寝てたかったんだけど」

「そりや残念。おいティアマト待て、扉が壊れちまうよ。今開けるから」

B・ビイとそろって驚きつつも、部屋の鍵をあける。するとティアマトは、扉を押し開け飛び込んできた。

俺はまた何事かと身構えたが、息を切らし妙に焦りを見せている彼女の表情を見るに、どうもただ事ではないようだった。

「……何があつた?」

「ラ、ラムレッダノ……様子ガ変ダ……!」

「ラムレッダの? ああ……さっきの悲鳴か。で、どう変なんだ」

「ソレハ……アアツ! ト、トリアエズ来イッ!! ワタシノ部屋ニ居ル!!」

「ちよ、ちよちよお……っ!?!」

「あ、待てよ!?!」

何が何やらわからぬままに、ティアマトに手を引つ張られ連れて行かれる。B・ビィも慌てて追いかけてきた。

バタバタと朝から慌ただしく移動して、同じ階層でも「团长室」から少し離れた場所にあるティアマトも私室へと到着。そのまま飛び込むように部屋へと入る。

「オイ、ラムレッツダツ!!」

「ひえっ!?! ティ、ティアマ……ひよええっ!?! こ、こんどは团长きゅんまでええ——っ!?!」

ティアマトの部屋に入った途端、中に居たラムレッツダは、俺の姿を見て何故か絶叫。そのまま怯えた様子でティアマトの布団に包まっていた。

「……な、何事さこれ?」

「ワカランカラ呼ンダンダツ!!」

ティアマトが言うには昨日の夜からラムレッツダと部屋飲みして酔った二人は、揃って部屋で寝たらしい。だが朝目を覚ますとティアマトを見たラムレッツダが、驚き先ほどの悲鳴をあげたらしい。するとそのまま「なんで自分がここにいるのか」「連れ戻してきたのか」などと意味不明の言動を繰り返し、ついに困り果てたティアマトが俺を呼びに来たと言う。

「ワタシヲ見テカラ、ズットコンナ様子ダ……! モウワケガワカラン!」

「ひっ?! ……ひい! ごめんによさい、ごめんによさい! ……っ!!」

気の毒になるほどラムレッダは、俺達に怯えていた。仮に酔っていたとしても、様子がおかしいのは明らかだった。

「……ティアマト、ここ水置いてある?」

「ン? アア……ソレナラ丁度チエイサー用ガアル。コップハソレ使エ」

酒瓶で散らかった机に水の入ったピッチャーがあつた。空のコップに水を注ぎそれをラムレッダへ差し出す。

「……ラムレッダ」

「ひいん!」

「ここまで怯えられると傷付くぜ……ほら、まず水飲みなさい。なんか知らんけど、寝ぼけて混乱してんだよお前」

「だ、だって……団長きゅん絶対怒ってるにや……だ、だから連れ戻したんでしょ……!!
わ、私“あんなこと”して……だ、だから逃げて……!」

ラムレッダはわけのわからない事をずつと話している。彼女の酒のミスなら何時もの事だが、それにしても脈絡が無さすぎる。彼女の言う“あんなこと”とやらに俺は全く身に覚えがない。

最も最近起きた事でなら木人暴走事件だが、あれは解決済みだしそもそもばあさんの

せいである。吐かれるのも毎度のことだ。

「大丈夫、なにも怒っちゃいないよ、ラムレッダ。昨日だってお前もしちやないだろう？」

「ウ、ウソにや……そんなわけ……」

「嘘じゃないさ、怒っちゃいない。第一お前俺が怒つてると言うけど、お前俺に『なにを』したつて言うのさ？」

「そ、それは……っ！……それは？ え、あれ？」

ラムレッダの言う話の中でも特に強い違和感を感じた『俺が怒っている』と言う点を指摘して行くと、徐々にラムレッダは大人しくなってきた。怯えていた表情も困惑へと変わり、自分の今の状況が見えてきたようだった。

「な、なにも……そうにや、あたし別に……なにもしてにやい……」

「だろ？ 昨日お前は、この部屋でティアマトと飲んでた。そうだな？」

「うん……あ、あたし……昨日ティアマトとお酒飲んで……そのまま」

「才前私ノベッドデ寝テタンダゾ。オカゲテ私ハ床デ寝テタシ」

「にや……にやははっ！ はは……？ そ、そくだったかにや？」

それは多分単にラムレッダが勝手にベッド使つて、ティアマトが酔いつぶれて床で寝ただけだろう。

「記憶の方は大丈夫そうだな。ほら水、取り合えず飲んでけ」
「あ、はい……ごめんにや団長きゅん……」

まだ困惑した様子のラムレッダだったが、俺やティアマトの声も届いている。ちゃんと水を受け取り少しずつ飲み始めた。

俺もティアマトもその様子を見て一応はホッと胸をなでおろした。だが安心してばかりもいられないだろう。

「なあなあ、昨日もルナルルの様子がおかしかったって言うし、こりやどうも変じゃねえか？」

「ふうむ……」

B・ビィに言われ考えるが、実際のところ俺も何かがおかしいと思っていた。

昨日今日とで連続だ。しかも二人とも寝起きで妙な言動、記憶の混乱と似た様子ときてる。もうただの偶然や気のせいでは片付けられないのは、無理な話というものだ。

「……待てよ、ルナルルさんとラムレッダが？」

この時ふと浮かんだのは、二人の共通点だった。単に俺達の仲間と言う事でなく、最近で共通事項がある。

「……二人とも、夢占いをした」

考えをまとめるように呟くと、B・ビィもハツとしながら俺を見た。

「一昨日俺と一緒に……二人とも夢占いを受けてるな」

「確かにそうだけ。それで昨日はルナル、今日はラムレッダときた」

「それにあとは……カリオスト口もだ」

妙な胸騒ぎを感じ俺とB・ビイは、ティアマトの部屋を飛び出す。

「オイ、ドウシタンダッ!？」

「ちよつと確認せんといかんのだ! ラムレッダはそつちで頼む!」

ラムレッダの事はティアマトに任せ俺達は、急ぎカリオスト口の部屋へと向かった。あのカリオスト口に限つても思いつつも、自分でも焦りを感じる。

彼女の部屋まで来るとさつきめのティアマトみたいにドアを激しくノックし呼びかけた。

「朝から失礼! カリオスト口、起きてるか! ……カリオスト口? なあ、おっさん!

おっさ——」

始め返事がなく不安になりさらにノックを強くしようとした時、扉が開き部屋の中から手が伸びてきた。それは俺の胸倉をつかみグンと引き寄せる。

「ぐえっ!?! な、なに……うおっ!?!」

手は下の方から伸びて来たため、俺は床に跪くように引つ張られてしまった。両膝を打ち痛みを感じていると、目の前には可愛いからは程遠い形相のカリオスト口の顔が

あった。

「カ、カリオストロ……ッ?」

「まず答えろ……っ!」

「な、なにを……っ!」

「いいから、答えろ!! お前は地味で苦勞人で借金1千万でお人好しの騎空団【星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z O Y】の団長っ! そうだなっ!」

「だしぬけに酷いっ!?! な、なに突然!?!」

「そうだな……っ!?!」

「う、うんうんっ!! そう俺団長……っ!! だ、だから離し、ぐええ……!!」

鬼気迫る顔のカリオストロの質問に驚きつつも、胸倉をつかまれたまま首が締るのを感じ早く解放してほしくて俺は頷き答えた。

「……………よし」

「ぐえ」

カリオストロは、しばし俺の顔をじっと見ていたが、やっと表情が落ち着き俺から手を離してくれた。離すのも突然で俺は、哀れそのまま床に倒れる。

「おいおい、大丈夫か相棒」

「だいじよばない……なんなのさもおく……」

「悪かったな……自分の記憶を正誤確認しないと、ちとやばかったんでな」

「記憶を確認？」

「そう、記憶だ」

「……もしかして、変な夢とかみてない？」

カリオストロの話聞いて俺は「もしや……」と思い夢の事を聞いてみる。するとカリオストロは、少し驚いた様子であった。

「他でも起きてるのか、“これ”が？」

「みたいだね。丁度それ確認しに来たとこなのよ俺は」

案の定カリオストロも悪夢を見たらしい。だが流石と言うべきだろう、カリオストロはそれによる記憶の混濁を自ら意識して克服していた。

「ルナールさんが昨日の朝に記憶の混乱、んで今さっきラムレッダが錯乱してた」

「なるほど……オレ様とで夢占いのメンバーって事か」

「流石気づくね」

「世辞は良い。……まず状況の整理からだ。直ぐルナール達集めろ。色々調べる必要がある」

「だな。B・ビー、俺はルナールさん呼びに行く、ラムレッダの方呼んでくれ」

「あいよ、任せな」

B・ビイが再びティアマトの部屋へと向かい飛んでいく。俺もすぐルナルさんを呼びに行こうと部屋を出た。

「だ、団長……だんちよお……っ！」

「うおっ?!」

だが直ぐに慌てて泣きそうな声を上げるセレストが目の前に現れた。緊急時身体を霧へと変え自在に艇内を移動するセレストの移動方法である。この現れ方をするだけで何か更なる異変が起きた事がわかる。

「ど、どうしたセレスト?」

「ル、ルナル先生が……ルナル先生が、目を覚まさないよお……っ！」

困り果て涙声となるセレスト。俺とカリオスト口は、互いに顔を見合わせいよいよよおか起きたのだと感じ取っていた。

六 閉じた眼

——エンゼラ、医務室。

まだ日が昇り切っていない時間から、そこに集まった面々は、深刻な面持ちで椅子に座るラムレッダ、そしてベッドに横たわるルナルを見ている。

「ど、どう……？ カリオストロ？ ルナル先生は……」

「……マズイな」

横たわるルナルの傍で彼女を診ていたカリオストロは、セレストの問いに首を振った。思わずセレストは、短い悲鳴を上げる。

「そ、そんな……！」

「まてまて、慌てんな。別に死んだとかじゃねえ。息も脈もある」

「じゃあ『マズイ』ってのはなんだい？」

B・ビイの問いにカリオストロは、困った様子で答えた。

「……名前を呼ばれたりしたら反応を見せたりする。肩をゆすつたり外部の刺激でも同様だ。だがな……」瞬だ。少し目を開いたかと思えばすぐに閉じる」

「そ、それって……」

「眠り続けてるんだ……今こいつは」

カリオストロは、目を閉じたままのルナルをジッと見た。

ルナルの眠る顔は、穏やかだった。だがその穏やかな表情は、団長達には不安を感じさせた。

——時は遡る。昨日の事で不安が残っていたセレストは、この日朝になってルナルの部屋を朝訪ねた。するとルナルの部屋からは、返事もなく更に強い不安を覚えたセ

レストは、悪いと思いつつも身体を霧へと変えルナールの部屋へと侵入してみると、やはり原稿に突っ伏したルナールの姿があり、驚いた彼女は急ぎ団長達を呼びに来たのだ。

セレストに連れられルナールの姿を見て驚いた団長達は、すぐに彼女へ声を掛けた。するとその時ルナールは、瞼を開け団長達を見ると驚いた様子で「あなた達はだれ？」とだけ言った。そしてまた瞼を閉じ眠りに落ちてしまったのだ。

そして今に至る。

ルナールを心配して見守る団長は、ふと別で椅子に座るラムレッダを見た。

「……ラムレッダ、寝てないよね？」

「ね、寝てない……にゃ」

ラムレッダは、激しい睡魔と今戦っていた。

団長に水を飲ませてもらった後彼女もこの医務室に移動していたが、突然睡魔が襲い始めたのだ。

「ね、眠気も凄いいけど……あ、頭も痛いにゃあ……」

「そりゃ二日酔いだろうが」

本来なら座るだけでも寝てしまいそうな睡魔であったが、二日酔いで前後不覚気味の彼女を今の状態で立たせておくのは、また別の意味で危険だった。

更には――。

「意識が覚醒して症状が治まるどころか、更に……症じよ……が、つよ……」

「おっさん、あんたもやばいか？」

「おっさんじゃ……！　ねえ……ああ、くそっ!!」

徐々に瞳が閉じかけたカリオストロに対し、団長が直ぐ「おっさん」と呼びかけた。カリオストロは、何時もの様に反論しようとしたが思うように言葉が出ない。

彼女もまた強い睡魔に襲われ意識を失いかけているのだ。

「腹が立つぜ……おっさん呼ばわりされた怒りで目を覚ますなんてよお……っ!!」

「まあ効果あるししやあない」

「んがあ――っ!!」

ラムレッタと同様眠気と戦うカリオストロは、団長にあえて「おっさん」と呼ばせ睡魔を怒りで吹き飛ばす作戦に出ていた。効果は十分であるものの彼女本人は、不本意極まりない様子であった。

「つ、追加のスパイス持つてきましたあゝ!」

「キンキンに冷えたお水もです!」

会議室にコンスタンスティアとブリジールが、慌ててお盆や桶で眠気覚まし用のスパイスと氷水を運んでくる。

「ま、またスパイスにやつ?!」

「はい、更に辛いの持つてきたです!」

ラムレッダとカリオストロは、効果は一瞬であるものの強い刺激のスパイス等を眠気を感じて直ぐ摂取する事で睡魔に耐えていた。

「今寝ちまうとルナルと同じになつちまうんだよ……! オレ様だつて食つてんだから、お前も我慢して食えつ!」

「す、すみませんラムレッダさん……!」

「頑張つてこれ食べて下さいですつ!」

「も、もう激辛唐辛子は……あ、ああつ!? にやああああくつ!?」

コンスタンツィアに肩を抑えられブリジールに唐辛子を口に投げ込まれ悲鳴を上げるラムレッダ。ふざけた光景だが、彼女たちは至つて真面目である。カリオストロもまた唐辛子を口に含み激しい辛味に眉間の皺を寄せた。

「くっそ……これも効き目薄れてきやがった……」

「眠気が勝りでしたか……なんなんだいこの症状は」

「オレ様は医者じゃねえが、少なくともただの病気とは違うな」

「錬金術でなんとかは?」

「無理だ」

お手上げの状態になり、団長は頭を抱えた。それに対しカリオストロは眠らないように立ったまま話をつづけた。

「これの原因は『悪夢』だ。時間さえあれば解決策も見つかるだろうが、『夢』なんて曖昧なもん相手じゃ今すぐどうにかできねえ……まして今の状態じゃその解決策見つける前に眠ったままになっちまう……」

「……確かに、睡魔も更に激しくなってきたみたいだ」

「んにやああああ——つ!? か、から……喉やけ……ねむ……つめったああつ!?」

「寝ちゃダメ、とことん寝ちゃダメですラムレッダさん!! これ氷水タライに入れたですー! もっと足沈めて下さいっ!」

「私手のここが、眠気覚ましのツボって聞いたことあります……!」

「ふ、二人共ちよ、ちよつとま……うにや、あ、っ!? 冷た……あだ、だだ……っ!? 冷たい痛い辛い眠いい……っ!?」

睡魔の強さが増したのか、今にも寝てしまいそうなラムレッダを起こすため、コンスタンツィア達があの手この手で彼女を起し続けている。その様子は最早新手の拷問のようであった。

「あれで眠りそうになるんだからとんでもねえな……」

「まあな。話を続けるが、夢占いを受けた次の日……まずルナルが『悪夢』で記憶の混濁が起きた。オレ様とラムレッタはまだ大丈夫だったが、今日になってまとめて悪夢を見た。タイミングのズレに関しちや多分誤差みたいなもんだろう」

「悪夢の内容に関しては、何か共通項あったりした？」

「ルナルが寝ちまつてるが……今わかる範囲で確認したが内容はバラバラだ。ただし一つ共通するのは、見た者にとつてそれが『悪夢』である……つて事、だけ……」

「おっさんは、どんな夢見たんだ？」

「おっさんじゃねえし夢の事は話さねえ!! あーもうっ!? 唐辛子よこせっ!!」

「あ、はいこちらです……っ!」

カリオストロは、コンスタンツィアが差し出した唐辛子の入ったボウルから何個も掴み取り一気に口に放り込んだ。そして直ぐにその辛さに悶えテールをたたく。

「はあ……! ぜえ……! と、とにかく原因だ! きっかけはあの夢占いでもまず間違いないねえ」

「だよなあ」

団長も夢占い師である双子を思い出していた。彼女達が何者であるのか、この件にどう関係しているかはわからない。しかし解決策の無い今手掛かりは、あの二人しか思いつかなかった。

「このままじゃラムレッタもオレ様も何時昏睡状態になるかわからねえ。それに最初に占い受けたお前も時間の問題だ」

「わかってる」

夢占いを受けたメンバーで現在睡魔の症状が現れていないのは、団長一人であった。症状の現れない理由は、カリオストロの言う発症タイミングの誤差なのかそれ以外なのかは不明である。そうである以上この状態がいつまで続くかわからず予断は許されない。

「直ぐあの二人を探す。島を出てさえいなきやそう時間はかからないはずだ」

「……その必要は無いみたいだぜ、相棒」

団長が団員全員でヴェトル達二人を探そうとしたところ、B・ビーが医務室の出入口を見ながら団長の肩を叩いた。すると「おや？」と団長もまた医務室の出入口の方を見た。するとそこには、まさに今探そうと考えていた二人――。

「突然すみません！ 団員の方に通してもらいました……！ 今すぐ、どうしても確認しないとイケなくて……!!」

酷く切羽詰まった様子の少年、モルフエと。

「夢の乱れ……さかさま、さかさま……ウソとホントが入れ替わる……」

「君達……何故ここに？」

「悪夢の誘い……誘われたのは、私？ それとも、あなた……う？」
モルフエに手を引かれ、何かを歌うように現れたヴェトル達双子の姿があつた――。

夢の中へ

一糸口

「確認したいことがあります」。そう言つてエンゼラへ駆け込んで来たヴェトル達双子。

突如起きたルナルルの昏睡、そしてラムレッダ等の危機的睡魔の対応に追われる団長達は、この事件の切っ掛けと思われ唯一解決の手掛かりとなるであろう二人の登場に対し驚きとわずかな安堵を覚えた。

「それじゃあるナルルさんは、悪夢を見てから眠り続けているんですね？」

「ああ、それに強い眠気にも襲われてたらしい。ラムレッダ達もそうだ」

団長はルナルルとラムレッダを団員に任し、B・ビイとカリオスト口をつれてヴェトル達と落ち着いて話せる場所へ移動すると今までに起きた事を全て話した。

モルフエは団長の話を真剣に聞いて深刻な顔をしている。一方で姉のヴェトルは、うつらうつらとしていた。

「オレ様とラムレッダは、今日になって症状がでた。オレ様も危ないがラムレッダの方がギリギリだ。いつ寝てもおかしくない」

「ですね……ははは」

モルフェの苦笑は、寝まいとする、あるいは寝させまいとするラムレッダと団員達の拷問まがいの惨状を先ほど医務室にて見てのことであつた――。

「待つて、待つて……!? ブリジールもコンスタンツィアしゃんもマジでまつてえっ!?
寝てない、あたし……ね、てな……にやああっ!?」

「寝てる、寝てるですラムレッダさん!」

「フェザーさん……! ここ、ここも眠気覚ましのツボって私聞きました……思いつきり
お願いしますう!!」

「いよつしやああああ——っ!!」

「フェザーきゅんいつの間につ!? まつて、コンスタンツィアしゃんでもきつかつたの
に……君が……や、ると……あ、寝てにやいから!? だから、ちよスト……ギニャ
アア——ッ!?!」

「ミミミミーン!!」

「ひい!? ミ、ミスラまでえ!? ちよま……あだだだだつ!? 高速回転で突撃やめ……
!」

「ござる！ ラムレッダさん、お待たせしましたっ！ 朝市で『ワサビ』を見つけましたー！」

「ミリンちゃんっ!? そ、それで何する気にやあ!?!」

「今からこれをすつてそれを鼻の下に塗ります！ そうすればそれはもうっ!!」

「善意の笑顔がすご……いや早、するの早いにやミリンちゃんっ!? もうすつてるにや!?!」

「はい、すりたてですよ！ さあ、ラムレッダさんさあさあ!!」

「ちよ、近い近いにや……!? こ、こう言うのつて本来団長きゅんのポジションにやよおーっ!? あ、待つてほんと待つてミリンちゃんっ!? 匂いスゴイ、これ絶対キツ……あ、ああ!?! ふにやあああ——ツ!?!」

——今この瞬間も医務室から聞こえるラムレッダの悲鳴。やりすぎに思えるが、これだけの対処をしてやつと彼女は眠らずに済んでいた。

「……今まで同様の症状を見ましたが、あそこまで強引な対処する人達は初めて見ました」

「こいつの騎空団だからな」

「ハイハイ、それどういう意味?」

カリオストロは団長を指さしニヤリと発言、団長は責めるような視線を送るが彼女は

気にした様子はなく、モルフエはまたも困惑し苦笑する他なかった。

「ともかくそう言う状況だ。座ると寝ちまうから立ったまま話すのは許せ」

「いえいえ、しかたないですよ。けど……原因は、わかりました」

「ずいぶん早く分かったなオイ」

思いのほかあつさりと原因が分かったと言うモルフエにB・ビィが少し驚いた。

「はい、話を聞いて状況も合わせると間違いないでしょう。これは……ある星晶獣の作業です」

「ほげえ——っ!？」

「ええええ——っ!？」

モルフエが「星晶獣」と言葉を発した瞬間、団長が奇声をあげ床に仰向けに倒れた。それを見てモルフエが悲鳴を上げたのは言うまでもなく、うつらうつらとしてマイペーを貫いているヴェトルでさえ体をビクリと跳ねさせ驚いていた。

「え、あの……えっ!？ なにが……っ!？」

「ああ、気にしなくていいぜ。なるべく考えないようにしてた星晶獣案件だった事にシヨック受けただけだ」

「それ大丈夫なんですかつ!？」

「へーきへーき、相棒にとつちや日常茶飯事だぜ!」

「だぜ、じゃねえ……っ!!」

床に倒れ両手で顔を隠しながらもシヨックを隠し切れない団長。B・ビイは慣れた様子で、カリオストロは呆れてため息をついていた。

「まあそんなこつたらうとはオレ様も思ってたがよ。お前がらみだし」

「どういう意味じゃあ……!」

「けどある意味ラツキーだぜ相棒。病気だなんだじゃ相棒でも解決は難しいが、星晶獣なら多分大丈夫だろ」

「アンラツキーだよ……っ!!」

メソメソと泣き言を言う団長の姿を見てモルフエは、「ああ、この人何時もこう苦労してるんだなあ……」と哀れみ感じていた。

■ 二 団長はいつも通りです

■ 「それでモルフエよう、その星晶獣ってのはどう言うやつなんだ？」

シヨックを受けた団長に代わりB・ビイが話を続け、モルフエは「あ、このまま続けるんだ」と更に困惑していた。

「えつとですね……星晶獣の名前ですが、名をオネイロスといいます」

「オネイロス、ね。だが名前より能力さ。状況から見れば人の眠り……いや、夢を操るつてところか？」

カリオストロの言葉にモルフエは、静かに頷き返した。

「はい、オネイロスは夢を操る星晶獣なんです」

「夢ねえ……」

「ここで床に倒れていた団長がゆらりと疲れた様子で立ち上がり椅子に座りなおした。

「どうせなら良い夢見せてもらいたいね」

「だとしてもオネイロスは、人を夢へとらせる厄介な星晶獣です。今のルナールさん達のように……」

「現実と夢の混濁、そして昏睡……覚めない悪夢を現実と思ったまま見せられちゃたまらんよ」

「僕達もどうしてオネイロスがそのような事をするのか……」

「しかし……随分お前らオネイロスって奴に詳しいな？ 会ったことあるのか？」

やけにオネイロスなる星晶獣に詳しいモルフエ。B・ビィは不思議に感じ質問をする
とモルフエは、悲しい表情を浮かべた。

「実は、僕達の生まれ故郷の村も……オネイロスに」

「被害に遭ったのか？」

「はい、僕ら以外の人が全員眠りについてしまいました……」

「なるほど、それで……」

「偶然助かった僕と姉さんは、二人でオネイロスを探して旅をしているんです。それで一度眠りについた人を起こす方法を見つけようと……それでやっと今日オネイロスの気配を感じたんです！」

「夢の乱れ……」

「ここでモルフエに説明を任していたヴェトルが口を開いた。

「夢の世界の乱れ……オネイロスの仕業……。夢と現がさかさま……ウラ、オモテ……」
「ヴェトルちゃんは……オネイロスの気配がわかるのかい？」

「オネイロスと言うよりも、夢の乱れを感じ取れるんです。姉さんはその特技、能力で夢の乱れを激しい……きつと、近くのとどこかにいる……。影響が強まって……危ない……」

「ラムレッダやカリオストロの眠気が強くなったのは、そう言うことか……」

ルナール以外にも急に症状が出始めた事に合点がいったと団長は頷く。

「ここでカリオストロがモルフエに質問をした。

「一つ聞くがオレ様達は、お前たちの夢占いを受けてこの状態になった……それに関し

て理由はわかるか」

「それは……」

「多分、不安がオネイロスを呼び寄せた……」

モルフエが言葉に詰まると、ヴェトルがその続きを話し出した。

「不安、恐れ……オネイロスは、そこから悪夢を生み出すの……」

「相棒達は、夢占いできつかけを……『悪夢の種』を生んじまったわけか」

「はい……本当にすみませんでした。まさかこの島にオネイロスがいて、こんなすぐ仕掛けるとは」

「謝らなくていいよ、モルフエ君。君達のせいじゃないさ」

「……お兄さんは、平気なの……?」

夢占いがきつかけならば、団長も被害に遭っているはずだった。だが実際団長は、眠そうな様子もない。それを不思議に思ったのか、ヴェトルは興味深そうに団長の顔を観察するように見ながら聞いた。

「ああ………なんでか平気だね」

「これが『状態異常』とかなら、ベールかデイスペル効いたんじゃないかねえのか? 相棒毎

朝起きると直ぐベールかけてるじゃん」

「そんなのことしてんのかお前……」

「引くなよ。毎度なに起こるか、わかんねえんだよ」

毒や麻痺などの状態異常を阻止、予防するスキル“ベール”。それを毎朝使用している事をB・ビィにバラされカリオストロに引かれる団長。もはや彼のトラブルへの用心深さは、並の騎空士のそれを超えていたのだ。

——もつとも、肝心な所での詰めめ甘さが目立つのは、彼がまだ若い年頃であることの表れだろう。

一方、B・ビィの答えを聞いたモルフエは、首を振ってそれを否定していた。

「いえ、オネイロスの“眠り”は、そう簡単に魔法や薬で防げたりするものじゃないんです……」

「まあ実際ラムレッタもあんな目に遭いつつ眠りそうだしな」

「なので多分……他に理由があるのか、それとも単に症状の表れが遅いのか……」

「どのみち確な理由じゃなさそうだな」

「言わないで」

ただでさえ普段から“起こる出来事想定外、起こした本人規格外”な扱いを（不本意ながら）受ける団長である。今回もまたそんなところではないかとカリオストロに疑われ、団長は胃の痛みを感じたのだった。



三 夢を目指して

■ モルフエ君達の来訪によりルナルさんを始めとした異変解決の糸口がつかめた。しかしそれと同時に、俺は今回の異変の原因が（案の定と思いたくないが）星晶獣であると知ってショックを受ける。

だがショックを受けて落ち込んでもいられない。気を取り直して、モルフエ君達に異変解決の方法を聞く事となる。

「原因がオネイロスってのは分かった。それで……解決するにはどうすればいいのかな？ 倒せば良い？」

「それで良いってんなら、引きずり出してボコボコにするぜ？」

B・ビイが戦う気満々で、右半身を少しマチヨビイに変えると言う器用で不気味極まらない事をする、ヴェトルちゃんがギョツと怯えて体を強張らせていた。

「バカ、脅かすんじゃないよ」

「へへ、わりいな」

B・ビイは直ぐに体を元に戻したが、人によってはトラウマ物の姿だったろう。

「ごめんねヴェトルちゃん」

「う、ううん……大丈夫、ちよつと……驚いただけだから……」

彼女はそう言ってくれているが、やはり相当キモかったんだろう。彼女の視線は、不安げにB・ビィと俺を見ていた。俺まで見られるのは、実に不本意であるがB・ビィの変身を許した責任もあるのでここは受け入れる。

一方モルフエ君は、そんな俺達の様子に戸惑いながらも話を続けた。

「ええとですね……確かにオネイロスと倒すと言うのは、一番良い方法なんです、けど……」

「けど?」

「オネイロスは、夢を操り……そして夢に潜む星晶獣です」

「……なるほどね」

相手が夢の世界の住人じゃ、B・ビィの言うように引きずり出すのは難しい。まして倒す事もできない。

「じゃあどうする? なんとかする手段をお前らは持つてると思つて良いのか?」

「はい、その通りです」

カリオストロの言葉にモルフエ君は、頷きながら持つてきた荷物から数枚奇妙な柄の入った札を取り出し団長達の前に置いた。

「姉さんの作つたお札です。これを枕の下に引いて寝れば、“夢の回廊”へ行くことができます」

「夢の回廊?」

「ええ、夢の世界へ続く扉のある場所です。姉さんのお札と魔法を使えば、そこへ行く事が出来るんです」

「引きずり出せねえなら、殴り込みつてわけか。分かりやすくいいじゃねえか」

「い、いや……まあそう言う言い方も出来ませうけど……」

やはり気合十分のB・ペイに、モルフエ君もヴェトルちゃんも呆れるやら怯えるやらであった。

「だけどB・ペイの言う通り……乱暴だとしても今は殴り込んででもどうにかしないとだ。それでオネイロス倒せて事態が収まるつてなら、たしかにわかりやすいよ」

ヴェトルちゃんのお札を一枚手に取つて眺める。模様なのか文字なのか、札に書いてある事はさっぱりだが、今はこれがルナールさん達を助けるための鍵だ。

「四枚だけかい?」

「はい、今用意出来るのは……」

「行ける人数は限られるわけか」

「それに、夢の回廊は複雑で現実の常識が通じないので、仮に枚数があつても大人数で行く事はお勧めできません。僕らも案内で同行しますが、迂闊に回廊や夢に迷つて取り残されてしまえば……」

「……しまえば？」

「今のルナールさん達と同じ、いえ……もつと酷い状況になるかもしれません」

「覚めぬ夢に置いてきぼりってわけね……それは勘弁だ」

モルフエ君の言葉に納得しつつも、目の前の四枚の札を見て考え込む。——果たしてこれは、だれが使うべきか？ だ。

「案内人にモルフエ君達。なら、実質二枚……」

「当然相棒は、行かなきゃだろ？ 星晶獣相手だぜ」

「ま、そうなるよな……で、あと一枚は」

「オイラだろ？」

札の一枚をB・ビィが既に手に取って自分を指さす。

「……おい、ちよつと待て」

だがここで異議を唱えたのは、カリオストロだった。

「夢の回廊つてのに行くのはいい……が、その後はどうするんだ？」

「えつとですね……まずそこにある個々の扉から、カリオストロさん達の夢を探しだします。そこからは、その扉から夢に入って囚われた皆さんを悪夢から解放して正気に戻すんです。そこからは、解放した皆さんと一緒に夢の世界から脱出する流れになりますね」

夢の世界と言う未知の世界へ赴く作戦としては、中々まとまった作戦だろう。オネイロスの事件に精通しているらしいモルフェ君達だからこそそのものだ。

だがカリオストロは、その作戦に一点不満があるようで――。

「待て、それじゃ……オレ様の夢が見られちまうじゃねえか!？」

「え? はい、そう言う事になりますけど……」

「じよ、冗談じゃねえ!! おい、寄越せそれ!」

「ちよ、おっさ……!?!」

カリオストロは慌てて俺から札を奪おうとした。

「オレ様が直に行つて何とかして来るっ!! お前らはこつち居ろ!!」

「夢に囚われたあんた助けに行くのに、あんた自身がどうやって行くつてのさ!？」

「天才のオレ様に不可能はねえ!!」

「あんた今すぐ夢どうこうするの難しいって言ったじゃん!？」

ワーワー騒ぐカリオストロに参つてしまふが、ここで助け舟を出したのは、モルフェ君だった。

「あ、あの……カリオストロさんは、一度悪夢を見てしまつてるので……もう一度寝ると悪夢を自覚するのが難しいと思いますから……その……」

「ぐう……! そ、それは……いや、まて! オネイロスをして倒して収まるなら、こいつら

が戻ってくる間オレ様は、寝ねえようにしてる！ その間に解決しろ！」

俺を指さしながらカリオストロは、しつこくモルフエ君に詰め寄っていた。困り果てたモルフエ君は、言いくそうにしながらも口を開く。

「そ、それも間違いじゃないんですけどもお……！」

「何がだめだっ!?!」

「今……オネイロスの気配、分かりにくい……いないかも」

カリオストロの押しの強さに弱ったモルフオ君だが、ヴェトルちゃんが助け舟を出した。彼女の言葉を聞いたカリオストロは、美少女思えぬ迫力でモルフエ君を睨む。

「ひえ……!?! あ、あのですね……！ 先ほども言いましたが、オネイロスは夢に潜むので隠れるると姉さんでも気配が感じにくくて……！」

「……つまり?」

「つ、つまりそのお……方が一オネイロスがいらない、それか姿を見せない場合、夢の回廊に行っても無駄足になりかねないので……すでに昏睡状態のルナールさんは勿論ですが、できれば一度にカリオストロさん達の悪夢を優先してなんとかしたいわけですし……！」

モルフエ君の説明が若干早口なのは、カリオストロに怯えてるんだろう。それでも彼の言葉にカリオストロは「うぐぐ……！」と唸り言い返せないでいる。

「寝てもらわないと僕らの目指す夢が出現しないので……」

「それに夢を見ないと……オネイロスも出てこない、かも……?」

「……チツ!!」

カリオストロは苛立った様子ではあったが、モルフエ君達の言葉に納得するほかない様子だ。すると彼女は、険しい形相のまま俺のほうを睨みつける。

「おい、団長……!!」

「な、なに……?」

「……しかたねえから、夢の方はお前に任してやる」

「あー……うん、わかっ——」

「ただしっ!!」

「ぐえ!!」

俺が承知する前にカリオストロは、大きな声を上げ俺の胸倉をつかみ寄せた。

「最優先にオレ様の悪夢に來い!! それで速攻解決しろ!! 当然内容も他言無用!! と
言うか忘れる、記憶を消せっ!! もし他の誰かに言おうもんなら錬金素材にしてやるか
らなあ……っ!!」

「わ、わかった……わかったから離せえ!! く、くるし……ぐええ……っ!!」

「カ、カリオストロさん!? 首、団長さんの首締まっていますよっ!!」

「わかったなあ……っ?!」

「わかったって……言っで……?! ほげええくっ?!」

「わあ——っ?! だ、団長さんしっかりい!」

もう胸倉でなく俺の首を絞める勢いのカリオストロをモルフエ君が慌てて引き剥がそうとしてくれているが、B・ビイは呆れて眺めるだけで、ヴェトルちゃんも呆れているのか俺の方を睨むように見ている。

そしてわちゃわちゃと騒がしいままに、この話し合いは終わったのである。

■ 四 悪夢を目指して

カリオストロに締め落されそうになりながらも、なんとか話をまとめた俺達は、急ぎルナールさん達の救出作戦にむけ動き出した。

医務室には、急遽別室から幾つかソファが運び込まれ俺やモルフエ君が横になる準備に入る。

「今から俺とB・ビイ、それとモルフエ君達で三人の夢に向かう。だからラムレッダも横になつてくれ」

「も、もうこんな目に遭わなくていいのにや……?」

俺の目の前には、顔にスパイスが塗られ、右足のツボをフェザー君に押しまくられ、左足を氷水に浸す無残な姿のラムレッタがいた。

「しかし、ちよつと席を離れた間にえらい目に遭つたな」

「これでも眠いからたまつたもんじゃにやいにや……」

スパイスやらをふき取るラムレッタだが、そんな状態でもうつらうつらとしている。その様子から、オネイロスの眠りに誘う力の強さがうかがえる。

さらには――。

「なんでルナルさんまでスパイスまみれに……」

「起きるかもと思つて、一応とことん試そうと思ひまして……」

「思わず……す、すみません……!」

申し訳なさそうにするブリジュールさんとコンスタンツイアさん。その傍で昏睡し横になるルナルさんの顔には、練つたりすつたりした唐辛子やらのスパイスが塗られ振り掛けられており、眠つたまま「うーん……うーん……」と苦しそうにしていた。

「余計苦しんでいる……」

「悲惨だな」

まじまじとルナルさんの顔を見てB・ビイと共に気の毒に思いつつ、なおさら早いところ彼女達を助けねばならないと思つた。

「はい、これ……枕」

「あんがとさん」

「も、毛布とかはいらない？」

「いや、枕があればいい。熟睡のつもりもないしな」

セレストから枕を受け取りソファに置き、そして一枚ヴェトルちゃんの札を取り出す。出発の準備は整った。

「念のため確認ですが、夢の回廊では僕達が道案内をします。言い方はおかしいですが……」
「夢で目が覚めたら」、僕達とすぐ合流してください。お互いすぐ傍に現れるはず
です」

「了解、夢で迷子は悲惨だ」

「その後は、カリオストロさん達を悪夢から解放して一緒に回廊から脱出します。そうすれば全員目を覚ますはずですよ」

「で、可能ならオネイロスも倒すと？」

「はい。けど、もしかしたらオネイロスも妨害してくるかもしれません。色々一筋縄ではいかないと思いますが……僕達も頑張りますので！」

「ありがとう、心強いよ」

モルフエ君の言葉に頷きながら札を見つめる。

「これが夢の片道切符になるか、往復切符かは俺達次第だな」

「なあと、相棒なら大丈夫さ」

「大丈夫じゃなきや困んだよ」

呑気なB・ビーに焦り気味のカリオストロと対照的な二人。カリオストロにしてみれば、ラムレッタ達共々俺に命を預けてるも同然だから当然だろう。

「約束通り最優先でオレ様のとこに来いっ！ いいな！」

「わかってる。ほら、早く寝て」

「ち……………不甲斐無いぜ、天才美少女錬金術師である……………オレ様、が……………ほん、と……………頼んだから……………な……………」

体をソファに横たわらせたカリオストロは、一分も経たない内に目蓋を閉じた。

「さあラムレッタも」

「う、うん……………迷惑かけてごめんね団員きゅん。あたしの夢……………見ても、おこ……………らない……………で……………にや……………」

「……………別に怒らんよ」

必要とは言え長い拷問が如き睡眠の妨害を経て眠りについたラムレッタ。それでいて尚彼女が見るのは、歪んだ悪夢なのだから酷い話だ。どんな夢だろうが、彼女を怒る気など微塵も起きない。

「……さあ、あとは俺達だけだ」

「おう」

ソファに横になるとB・ビイが俺の腹の上に寝っ転がった。現実での距離が近いほうが夢の回廊でも近くに現れる傾向があるらしくそのためだ。そしてモルフエ君達も用意したソファに体を横たわらせていく。

「夢の回廊行ってる間は、俺もB・ビイも寝てるだけだ。休暇中で悪いけど、こつちの事は頼むよ」

「任せテオケ。ソツチモ上手クヤレヨ」

「ゆ、夢の世界の事じゃ助けられないけど……が、頑張つてね！ ルナール先生達を助けてね……！」

「あいよ。じゃあセレスト、頼むわ」

「う、うん……！」

。現実に残る面々に後の事を頼むと、セレストが俺とB・ビイに手を向けた。そして――

「――『安楽』」

静かに唱えた彼女の呪文を聞くと、次の瞬間俺とB・ビイの意識は途絶え眠りに落ちた――。

■ 五 夢での目覚め

「——お？」

ふつと意識が覚醒すると、目の前には不思議な光景が広がっていた。

淡い紫に染まり歪んだ様な景色は、色んな景色が混ざり合い、遠近感の狂う場所だった。

まるで夢のような世界——と、思ったところで正にここが「夢の中」であると気づく。

「おーい、相棒」

すると直ぐ後ろからB・ビイの声が聞こえた。振り向いてみれば、ほんの数メートルもない所にB・ビイがいた。

「B・ビイ、いたのか？」

「ああ、気が付いたら直ぐに相棒が見えたぜ」

「それじゃあ、あとはモルフエ君達だけ——」

「団長さん！」

案内人二人を探そうとしたら直ぐに目当ての人物から声をかけてくれた。手を振つ

てモルフエ君が駆け寄り、それに続いてヴェトルちゃんのがのんびりと歩いてくる。

「やあ、よかった。直ぐに合流できた」

「はい、早々離れた場所に出る事はないですが早くに合流出来るに越したことはないの
で」

「相棒の場合、一人どっかポツンってのもありえるしな」

「怖い事言うな……」

俺の場合本当にそれがありえるのが怖いんだ。

「けどスムーズに眠れてよかったです。あまり時間をかけられないので」

「流石セレストの『安楽』の効果は抜群だよ」

セレストの呪文、あるいは特技と言える『安楽』は、相手を眠らせる強力な技だ。また本来は同時に『アンデッド』効果まで与えるが――。

「ルドミリアの発作対策で培われた技だな」

「話に聞いた時は驚きましたけど、大丈夫そうでしたよ」

ほぼ強制的に眠らせる技なので、笑い出しては止まらないルドさんの発作を収めるのに丁度いい安楽と言う呪文。おかげでセレストも手加減が直ぐ上手くなり、アンデッド付与を省き睡眠効果のみ与える事もできる。いうなれば『安楽（弱）』である。

まあ最近じゃ耐性があったのか、ルドさんにはその効き目も悪いが……。

「ともあれ合流完了だ。それで夢の扉だっけ？ それを見つけるんだろ？」

「はい。まず回廊を進んで扉を見つけ出します」

一応辺りを見渡してみたが、それらしい扉はない。歪んだ奇妙な景色が広がるのみである。

「扉の場所に心当たりとかあるのかい？」

「えっと、とにかく進んで探すしかなくて……すみません」

「夢の世界に地図はない……あっちの道、こっちの道……どれが近道かな？」

「……つまり、自分の足で探すってことね」

「みてーだな」

ヴェトルちゃんは、いろんな方向を指さしているが、そもそも道らしい道など見当たらない。どんな場所でも地道な行動が大事って事だろうか。

「ちなみにオネイロスの気配は？」

「ん〜……？ 居るのかな？ 居ないかな？ 見られてるかも……違うかも？」

「フワツとした感じだな」

「すみません、どうしても夢に溶け込まれてしまうと、姉さんでもオネイロスの気配を探るのは難しくって」

「別にかまわないよ。結局優先はおっさん達だからね」

ためしに「おっさん」呼びをしてみたが特に周囲に反応は無い。あわよくば、このフリーズに何か反応があれば楽だったがやはり星晶獣がらみ、俺に楽をさせてはくれんらしい。

「じゃあ探すか……。遅くなって文句言われてもやだし」

「案外早く見つかるかもしれないねえしな」

「だといいがね。モルフエ君、早速先導お願い」

「わかりました！ それでは、僕らの後を着いて来てください」

「ふふ……うっかり迷うと戻れないかも」

「姉さん、不安なこと言わないでよ！」

「ふふ……気を付けないと、ね？ ふふふ……」

夢の世界でもまた眠そうな表情のままのヴェトルちゃん。俺に向けられた無垢に見える彼女の笑みは、どこか挑発的なものにも見える気がした――。

■ 六 悪夢はささやく

「――おにいちゃん」

――ああ、この声は……。

「薬、持ってきたよ。おにいちゃん」

おにいちゃん、そうだ……おにいちゃんってのは、〃オレ様〃の事だ。

「おにいちゃん」

そうだった。オレ様はまた……ああ、悪いな、迷惑かけて……。

「いいんだよ、おにいちゃん。私がついていてあげるから」

だけど、もうちよつとなんだ。もうちよつとで、こんな体とも……。

「……またそんなこと言ってる。〃もう無理だよ〃おにいちゃん。〃アレ〃は失敗して、もう無理だって言ってたじゃない」

……〃そうか、そうだったな〃。

「そうだよ。だからおにいちゃん、もう休んでいいよ。私はずつとついててあげる。ずつと、ずつと……」

——早く、来やがれ……だん、ちよ……。

夢の“また”夢

一 回廊前進

夢の回廊へ降り立った俺とB・ビイは、モルフエ君達の案内で奇妙なこの世界を進んでいた。

相変わらずこの世界は、景色が正しく夢のようにぼやけ上下左右も油断すれば見失い、平衡感覚がおかしくなりそうだった。更に時には落とし穴のようなトラップまである始末。

「あ、そこ……落とし穴」

「もちよ早、言っうおおおおっ!？」

「だ、団長さあ——んっ!？」

ワンテンポ遅れたヴェトルちゃんの言葉通り俺の足元に落とし穴が現れたりして危うく落ちるところだった。こんな事が既にもう何度か起きている。

「夢の中でまで落ちるのか相棒」

「ほっとけ……!」

マチヨビイに引き上げられながらどんな場所でも落っこちそうになる自分に情けなくなる。

「だ、大丈夫ですか団長さん？」

「肝が冷えるよ……落とし穴なんて誰が用意したんだ」

「オネイロスか？」

「あり得ますが……夢の回廊は夢同様で変化が突然なので」

「自然現象かもと？」

「はい……」

モルフェ君にも落とし穴やらのトラップがオネイロスが意図的に用意したのか、それとも自然に空いたものなのかわかりかねるようだった。

また更にこの世界にも魔物がいることがわかる。それは回廊探索中の俺達の目の前に現れた。

「おや、カワイイ」

ガラガラガラ……—そんな音を鳴らす魔物の姿は、幼児用の玩具「ガラガラ」そのまんまであった。オマケのようについた瞳が妙にかわいらしい。急に現れた時はなにかと思ったが、愛らしい姿に反して妙に好戦的で俺達に向かい突進してきた。

「あれは『悪夢の欠片』です！ 気を付けて、襲ってきますー！」

結局この悪夢の欠片と呼ばれる魔物とは交戦を余儀なくされる。幸いにも俺とB・ビィであればなんの問題もない強さであったが、夢の中であっても現れる魔物に多少驚いた。

「悪夢の欠片は、誰かの夢から滲み出たもの……」

ヴェトルちゃんの話では、奴らは一人一人の悪夢から滲み生まれる存在であると言
い、悪夢と言う負の記憶や感情から生まれたからか、人を見れば襲い掛かってくるそ
うだ。

その後も悪夢の欠片達と戦いつつ先へと進んだのだが、中々目的の悪夢への入り口が
見つからない。更には悪夢の欠片の出現頻度も高くなってきた。

「どうもやな感じだ」

思わず呟く。

「誘いこまれてると言うか、なんか観察されてる気分だ」

「わかるぜ。居るなこれは」

俺の呟きに対しB・ビィも同意見のようだった。

「えっと、どうかされましたか？」

モルフエ君は何かわからないと言う風であるが、ヴェトルちゃんの方は変わった様子

もない。

「視線は感じないけど見られてる気がする」

「え!? ま、まさかオネイロス……?」

「さあどうかな。ただオネイロスが夢に潜むってんなら、ここはとつくに奴さんのテリトリーだ。どんな方法で姿を隠してるかなんてわからんからね……ヴェトルちゃん、オネイロスの気配はある?」

「……」

オネイロスの事を聞いてみると、ヴェトルちゃんはジツとあたりを見渡し最後に俺の目を鋭く見た。

「いる、かも……」

「なら居るな」

“かもしれない”の答えだったが、俺は直ぐ直感でオネイロスは“居る”と判断した。

「わ、わかるんですか?」

「今までの星晶獣とは、どうも毛色が違うんで気配は探れないけど……居る。まず間違いないく居る」

今までの星晶獣がらみの騒動やら事件やらの経験上の判断である。モルフエ君は半

信半疑のようだが、ヴェトルちゃんはやはり特に表情を変えなかった。彼女も何かを感じ取ったのだろうか。

「相棒の星晶獣に対しての危機感が直観力を高めている。こりや居るぜえ」

「おい俺に妙な設定を足すな」

「いんや？ アウギユステでのポセイドン事件あたりでもう身に着けてたと思うぜ？」

「思うぜ、つてお前……ええ？」

「流石オイラの相棒だぜ！ 危機的状况になればなるほど新しいスキルを身に着けるな
！」

まったくもって嬉しくない。

「ま、それは兎も角……目的は、嫌がらせと妨害かね」

「だな」

俺とB・ビイは、また意見が一致した。

「オネイロスがどつかで見てて悪夢の欠片喚けてきやがんだ」

「僕達の妨害のためですか？」

「ああ、それも嫌がらせも兼ねて一気にこさせず小分けに少しづつな」

「逆にオイラ達が来て欲しくないところに近づいた証拠かもな」

「それじゃ……みなさんの夢の扉が近くにあるかも！」

モルフエ君があたりを見渡すが直ぐそばにはそれらしいものはない。だが近くにあると言う可能性は高かった。

「とにかく用心して進むしかないな。姿を見せない以上、この世界で俺達が出来る事は限られてる。さ、行こうか」

果たしてどのタイミングでオネイロスが仕掛けるのか。そしてどのような手段で？俺は嫌な予感を覚えつつ回廊を進んだ。

二 モフモフガーディアン

■ 案の定と言うべきか、更に道を進んでみるとやつと景色に変化が現れた。突然道に三つの「扉」が現れたのだ。

扉は何かの建物に取り付けられてるわけで無く、ただ扉だけが存在している。

「さて、随分と物々しいじゃねえか」

B・ビィが扉を訝しげに見る。確かに三つの扉には、過剰なほどの鎖が巻き付けられており、更には錠前で施錠までされている。だが鎖の隙間からよく見れば、その扉一つ一つが違う扉である事もわかった。

「個人の記憶や悪夢の内容で扉の見た目は変化してるんです」

「なるほどね……するってーと」

モルフエ君の言葉に頷き扉の主を探る。まずハツキリとわかるのは、酒場らしき扉の主だ。間違いなくラムレッタだろう。他の二つの扉は、たいして目立つた特徴はないのだが片方の扉には覚えがあった。

「これは、ルナルさんの私室の扉だな」

ルナルさんと初めて出会った日、ハレゼナとも出会ったあの日俺達は一日彼女の家泊まらせてもらった。その時セレストが入り込んだ彼女の私室の扉がこれだったはずだ。つまりこの扉の主はルナルさんとなる。そして消去法で残った扉がカリオストロのものとなる。

「三人の居場所は見つけた。さて、あとは……」

「悪夢から三人を開放する……。夢が、夢へ……。泡のように消える前に……」

「姉さんの言う通りです。オネイロスの強い影響下にある今、この扉も何時消されるかわかりません。急ぎましょう！」

「なら約束通りカリオストロからだ……とは言え、まずは鎖を外さないと」

異様なまでに頑丈に閉ざされた扉。三人を助けるには、まず扉にまわりつく鎖を排除せねばならない。

「鍵なんてねえしなあ、叩き壊すか引きちぎるかさせて……」

「……………!!」

「ぶえっ!」

錠前やら鎖やらをどうしようか扉に近づいたところ突如目の前に何者かが現れた。そしてそのまま激突してしまうが、痛みはなく妙に柔らかな感触を感じる。

「な、なんだあ……………?」

「そいつは……………イケロスッ!? 団長さん離れて!」

モルフエ君の慌てた声を聞いて俺も咄嗟に目の前の何者かから離れる。すると目の前にいたのは、大きなぬいぐるみのような魔物であったとわかる。

「おいおい、これまた随分と可愛いな……………いや、可愛いな」

「見た目に惑わされないで下さい! こいつはイケロス、オネイロスのペットなんです!」

「俺ちよつとオネイロスが羨ましいと思ったわ」

「見た目に惑わされないで下さい!」

黒と白の体毛に長い吻、なんかの動物図鑑で見た「バク」に似たそれは、大事そうに枕を抱えてやたら愛らしい。実に愛らしいが残念ながら向こうはやる気のように、その枕を振り回し俺達を扉から遠ざけようとしている。

しかたなく一旦後ろへと下がる。すると一転してイケロスは枕を抱きなおしたかと

思えば瞼を閉じて眠り始めた。一瞬で熟睡したのか鼻提灯まで出している。試しにまた近づいてみると、閉じた瞼をまた開き円らな瞳で俺を睨む。そして下がるとまた眠りについた。

近づけば容赦はしない——言葉は無くとも態度でイケロスは、そう伝えているようだった。

「扉を護ってる……そうか、だから扉が一か所に固まつてるんだ！ こいつに護らせるために！」

「つまりコイツを倒しちまえば扉に入れるってこつたな？」

B・ビイはマチヨビイへと変わり戦闘態勢へと移る。

「二人共、奴に関してなんか注意とかあるかい？」

「ええと……！」

「……枕投げえ〜」

「あ、そうか！ こ、攻撃は枕を使った打撃が強力なので注意を！ 当ると眠らされる事もあります！」

「なら『ボール』つと」

すぐに俺を含め全員にボールをかける。余程のことではなければこれで防げない状態異常はない。

「あとは何かある？」

「あとは、えつと……」

「グーグー、スヤスヤ……要注意」

「そうだ！ イケロスは眠ると鼻提灯を……あ——」

ペアアンツ!! ——モルフエ君が言い終わるよりも先に、強烈な破裂音と衝撃が俺を襲った。そして気づけば俺は、体中をベトベトにされていた。

「……破裂させるって言おうとしたんですけど、ごめんなさい……」

「……なるほど？」

顔の粘液を手で払い落す。最もイケロスに近づいていた俺は、そのほとんど飛沫と衝撃が来たが、おかげでモルフエ君達は無事だったのでまあいいだろう。だがちやつかり通常形態に戻って俺を盾にしたB・ビィは許さん。

「お前気づいてたなら言えよ……」

「いや咄嗟によ。わりいわりい」

「ふふふ……ベトベトね……」

ヴェトルちゃんには、クスクスと笑われてしまった。あんまりである。

「くそう……二人は下がってて、俺とB・ビィでやる」

「は、はい！ けど気を付けて、イケロスは悪夢の欠片達と違います！」

モルフエ君達を後ろへと下げ改めてイケロスと向かい合う。

「やってくれたなイケロス。可愛いからって許さんぞ、悪いが手加減なしだ」

「オイラ達の仲間が助け待ってるんな。速攻で決めさせてもらうぜえ……！」

夢の扉へ入るべく、俺達とイケロスの戦いが始まったのだった——。

■ ■
三 悪夢、夢破れた者

——酷く体が重たい。

それが今の「彼」が感じる肉体の感覚だった。

「お兄ちゃん、大丈夫？」

——大丈夫だ。

そう「彼」は言葉を出したかった。だが口が開かない。「彼」の口は震え言葉を発するのも難しくなっている。

「無理しないで、お薬持ってくるから」

「妹」の声が聞こえる。だがその姿は見えない。瞼を開けるのもつらく、僅かに開いた瞼から見えるのは、ぼやけた視界だけだった。

——自分は、何をしているのか？

“彼”は、只々そう思った。

病弱で貧弱な身体。病に蝕まれ、明日の命もわからぬ身。今や親もなく、頼れる人も無く、医者も彼の事を見放す死人の如き身体。

——自分は、何をしているのか？

“彼”は、また考える。

魔術、呪術、民間療法全てを組み込んだ新たな治療方法、それを求め衰弱する一方の体に鞭打ち研究に没頭した。既存の治療法では“不治の病”として見捨てられる病を克服するために。そして新たな肉体を手に入れるために。

——自分は、何をしているのか？

“彼”は、また更に考える。

何も出来はしなかった。なんの成果も得られなかった。様々なアプローチも失敗し、新しい治療法どころか薬の一つも出来なかった。

後に残ったのは、意味もなく徒労に終わった研究資料。そして、寿命を縮めた自身の肉体と後悔だけ。最愛の妹、ただ一人の家族に迷惑をかける自分自身。

——自分は何をしている？ 何がしたかった、何をすればよかった、どうすればよかった？

“彼”の後悔と無念の思いに答えてくれる者はいない。

「——お兄ちゃん、お薬飲んで休んでて」

また、「妹」の声が聞こえる。やはり返事はできない。かすれた声すら出ず、「妹」に薬を飲ませてもらいベッドに横たわるしかできない。

「お兄ちゃんはね、頑張ったよ。けどもう頑張らなくていいの。私がずっとみてあげることから……」

——ああ止めてくれ、こんな自分なんて捨ててくれ。こんな、こんな未来のない自分に構うな。お前は、お前だけは未来を……。

「ずっと、ずっと一緒だよお兄ちゃん……私は、お兄ちゃんを見捨てたりしないから……」

——頼む、構うな。構うんじゃない。こんな自分に付き合うことなんてないんだ。自分の無駄な努力に付き合った挙句、こんな惨めな自分に付き合う必要はない。

「何時までも一緒……いつまでも……イツマデモ……」

——やめろ、もうやめろ……やめてくれ。

「……見、捨てて……くれ……」

掠れながらもやっと出た「彼」の言葉は、枯れ枝の痩せ細り朽ちるばかりの自分を見捨てるように頼む言葉だった。

だがその言葉は、横たわる「彼」を覗き込み不気味に笑う「妹」には届かない。甲斐

甲斐しく、*彼*に付き添うだけの彼女には決して届かない。

永遠の悪夢は続く。死ぬ事も朽ちる事も無く、無念と後悔に苛まれ続ける *彼*の言葉に耳を傾けるものは、この場所にはいない。

「あのおく……カリオストロ居る？」

——ただ一人を除いて。

■ ■ ■ 四 ドリームハンター団長

モフモフ枕門番のイケロスをB・ビイと共に倒した俺達は、急ぎカリオストロのものと思われる夢の扉へと突入した。

可愛い見た目のイケロスは、星晶獣オネイロスのペットと言うがオネイロスの力の一旦の様な物であり、悪夢の欠片と比べれば確かに手ごわかった。だが手加減無用の俺とB・ビイでは、門番としては不足であったようだ。

特に俺もB・ビイも負傷はない。鼻提灯攻撃で俺が何度もベタバタになったのを除けば。

そして扉開いて直ぐ俺達の目の前に飛び込んだ光景は、どこかの家の中であった。

「おいおい、なんだいこゝろあ？」

俺達が見つけた夢の扉は、ポツンと扉だけが存在し入る世界の外見はわからない。思わず扉の中と外を交互に見たが、やはり扉の枠から中は室内となり枠外は依然夢の回廊のままだ。

不可思議な夢の回廊から突然民家と言う変化にB・ビイも辺りを見渡し困惑気味である。

「恐らく、カリオストロさんの記憶で生まれた悪夢の世界です。あの人の記憶に残るどころかのはず！」

モルフエ君の言葉に「なるほど」と頷く。悪夢と言うのもつと禍々しい光景を思い描いても居たが、どうやら俺の予想と違い悪夢とはもつと身近なものから発生したらしい。

用心しつつ扉から中を覗き込む。家の中は広くはなく、俺達が見つけた扉はリビングに通じる扉のようだった。雰囲気はかなり質素、と言うより「おんぼろ」だと言ってもいいかもしれない。

埃が大量に舞っていて少し息を吸えば咽こみ、家具も家自体も古びているためどこか生活に困窮した様子が見て取れる。更に付け加えるならば、大人が住んでいる様子がない。

とりあえず救出対象であるカリオストロを探さねばと思ったが、ここでカリオストロ

との約束を思い出す。

「すまん、ここは俺だけで行くわ」

「え、けど……」

俺に続こうとするモルフエ君達達を制止し俺だけ扉を潜ると言うのと、モルフエ君は不安な表情を浮かべた。

「だが俺カリオストロと約束しちゃったからね。俺だけで行く」って

「け、けど団長さん」

「まあ安心しろってモルフエ」

「B・ビイさん……」

「ここに来る前の事は覚えてるだろう？ 約束違えちまうとカリオストロはうるさい

ぜ。なあ、相棒？」

「まったくである」

報復になにされるか分かったものではない。一度なんかで機嫌損ねたら俺の食器全部を先割れスプーンに錬金されかけた事もある。

「なんで俺一人で行く。B・ビイと一緒に悪夢の欠片来ないように見ててな」

「……わかりました。けど何か異変を感じたら、B・ビイさんと一緒に入りますからね？」

「了解。そんじやまたあとで」

「本当に気を付けてくださいね!」

「……気を付けてえ〜」

「ま、しつかりな〜」

まだ不安なモルフエ君、眠そうなヴェトルちゃん、いつも通りのB・ビィ。三人の声を受けながら扉を潜り辺りを見渡しながら完全に扉の内に入り戸を閉める。すると元より静かな民家の中が、更に静かに感じるようになった。

改めて部屋の中を観察する。中に入って見て見れば、除くだけでは見えなかったものも見える。

テーブルや床の上に散乱する羊皮紙やら砕けたフラスコ。その内の一枚の羊皮紙を手にとってみる。そこには細かく様々な実験の内容とその結果が書かれていた。

(……『某日、別のアプローチで検証。——失敗。データを残す』『某日、ウ……ボロ……のコア精製……だが、失敗。『芋虫』状のものとなるが、破棄。データを残す』『某日、術式の変更——失敗。データを残す』『失敗。データを残す』『失敗。データを残す』『失敗』『失敗』『失敗……なるほど?』)

他の羊皮紙やメモを見てみたが、どれもこれも『失敗』の二文字で埋め尽くされている。

これらの実験データが過去本当にあったものかは不明だが、文面から少なくともカリオストロのもの、あるいはそれを再現したものであるのは間違いないだろう。

静かな雰囲気と合わさり、不安を煽る不気味なメモを見てしまった。早いところカリオストロを探そう。

狭い民家のためカリオストロを探すにしてもそう時間はかからない筈だ。そう思い他の部屋を調べようと思つた矢先、入つてきた扉とは別の扉の向こうから人の声が聞こえてきた。

静寂の中で聞こえるか細い声だった。物音を立てずそつと扉まで近づき聞き耳を立ててみると、それは少女の声のようであり、それは誰かに話しかけているようだった。だがどうも一人の声しか聞こえない。しかも声の雰囲気のカリオストロとは違う。

より耳を扉に近づけてみるがやはり一人分の声だけだ。だが誰かが居るのは間違いない。少なくとも悪夢の欠片やイケロス等と違い、会話の出来る何者かがいる。思い切つて一応ノックを試してみた。だが反応はない。何者かは、会話を続けているようだ。悩んでいても仕方がない、部屋に入る事を決める。俺は扉を開け部屋へと入った。

「あのおく……カリオストロ居る？」

■
五 おっさん！ おっさん!! おっさん!!! おっさん!!!!

突然部屋に現れた闖入者である団長に驚いた者は、この部屋にはいなかった。〃彼〃も〃妹〃も反応を見せず、むしろ団長の方が面を食らう。

「あ、あの……?」

「……」

気まずそうに団長が再度声をかける。今度はやっと〃妹〃がその呼びかけに反応したが、彼女はゆつくりと顔を団長の方へと向け、怪しい目つきで睨みつけるだけであった。

「き、君は?」

「……」

団長が話しかけるが返答はない。だがその視線は「出ていけ」と言っているようであった。

「まいったな……」と困る団長であったが、ここで彼女の傍にあるベッドに誰かが横たわっているのが見えた。顔は〃妹〃の体で隠れているが、横たわっているのは間違いなく一人の〃少女〃であった。

「おい、そこにいるの——」

「帰って」

団長がベッドの上の「彼」に気が付いたと知るや「妹」は、閉じていた口を開き少女と思えぬ強い口調で団長を拒絶した。

「か、帰ってって……ええ」

「あなたは必要ない。「お兄ちゃん」の傍には、私だけでいい」

「お兄ちゃん？」

「帰って」

「いや、そうもいかんのよ。悪いけどちよつと退い——」

「帰ってっ!!」

「へ? ちよ……あだあつ!」

「妹」が更に強く、大きく叫ぶように団長を拒絶した。するとその瞬間、狭い寝室が「ぐにやり」とバネの様に歪む。そして直ぐ団長を拒むように部屋自体が伸び始めた。床が、壁が、天井が、「妹」達のいるベッドを起点にゴムの様に伸びて行き団長を遠ざけていくのだ。

「ちよ、ちよつとっ!! おい、ちよつと待っ……おっさあああああ……:……:——」

凄まじい勢いで伸びていく部屋。団長は急に動いた床に躓き倒れたままその床に運ばれて行った。「妹」の視界から団長が豆粒より小さくなって消えるのは、あつという

間の事であった。

「……なに、が」

だが団長が運ばれながら叫んだ言葉、ベッドの上に横たわる“彼”がそれに反応し呻く。

「何でもないよお兄ちゃん。安心して……もう、追いつたから」

視界の彼方へと消えた団長の事をもう気にしない“妹”。再び彼女は、“彼”の介護を始めようとした——だが。

「——……ふん、ぬぬ……っ!! うぬぬぬぬおわあああああ~~~~っ!!」

「う……ああッ!!」

再び聞こえた闖入者の声。驚き振り向く“妹”が見たのは、未だ動いて遠ざかる床の先から凄まじいスピードで走り自分達へと向かってくる団長であった。

「ゆ、夢だからって……!! 何でもあり過ぎだっっの……っ!!」

「……あいつ!!」

“妹”は苛立ち迫る団長に向け手を向けた。すると動いていた床が更に速度を速め団長を再び遠くへと、部屋の外へまで運び弾き出そうとした。

「おお……ッ!!」

「帰れ……消えろッ!!」

「おつとと……!!? ええい、クソつたれっ!!」

超高速のルームランナーのように動く床。団長はまたもバランスを崩したが、今度は躓かずそのまま走り続ける。

「お前……っ!! この床と言いやつば悪夢の住人だな?」

「うるさいっ!! 現の者が人の夢にずけずけと入るなっ!!」

「入らんわけにいかんのさ……!! その寝込んでるおっさんに助けると言ったからなあ……っ!!」

「……くうっ!!」

「妹」は咄嗟に「彼」を隠すように立塞がった。だが団長はもうわかっている。「彼」が誰であるのかを――。

「おい起きろ、おっさん!! 助けに来てやったぞ、おっさんっ!!」

「――!!」

――また聞こえた。この声、自分をおっさんと呼ぶ男の声。

「彼」がまた団長の声に反応を示す。それを見た「妹」は、忌々しそうに団長を睨みつけた。

「黙れっ!!」

「後はあんたが起きるだけだ!! こんな悪夢で寝てる場合じゃないぞ、おっさん!!」

「黙れエエツ!!」

“妹”が団長を拒むように手を強く払った。すると部屋の家具がガタガタと揺れ出し一斉に団長へと襲い掛かる。

「うおつとつ!!? こいつらも、悪夢の欠片みてえなもんか。いよいよ手あたり次第だなっ!!」

飛んでくる食器や家具を剣で払いつつ前進する団長。加えて猛スピードで動く床にも必死に抵抗し徐々に団長は、自分の声が十分“彼”に届く距離にまで詰める。

「諦めてよ……!! お兄ちゃんには、もう私がイるんだ!!」

「できん相談だなあ!」

「才前はイラナイ! お兄ちゃんに才前は必要無い!!」

「俺が必要なんだよっ!!」

「——!」

団長の声は“彼”の耳にも届いて来る。大きな大きな叫び声、それを聞いた“彼は、自分の知らない筈の男の声に覚えがあった。

「俺あそいつに押しかけられて、ヘルなったら錬金術学会に狙われとるかもしれんだ。そこんとこ責任とって助けてもらわんと困んの!!」

「——!?!」

——ちよつと待て、なんだその理由は。誰か知らねえが、俺が必要つてそう言う意味か!?

“彼”の眉間に皺が寄つた。目尻も“ピクピク”と怒りで動く。

「ソんな理由で……ッ!!」

「重要なんだよこつちはよ!! それにおつさん特製ポーシヨンの売り上げは、地味に騎空団財政の助けになつとるんだ!!」

——他にあるだろ、もつと助けになつてるの!? あとさつきから誰が“おつさん”だ!?

“彼”は歯を噛み締める。その表情が怒りに染まりつつあつた。

「しかもいざと言う時騎空団の(笑)共を押し付け……もとい、任せられる人材でもある!!」

——ふざけんな、誰が“あんな奴等”の面倒好き好んで……。

「いいや、待て」と“彼”は考える。——“あんな奴等”とは誰だ? 自分は病に伏せ島の外どころか、家の外にすらまともに出れていない。自分はその奴等を知らない筈だ。だから“あの男”も知らない筈なのだ——と。

“彼”の混濁した記憶が整理され始める。何が夢で何が現か。それに伴い横たわる彼の身体に徐々に力が入る。四肢が動きだし、起き上がれと脳から全身に信号が発信さ

れる。

すると、団長のいる悪夢の景色が変化をし始めた。

「あ、アアツ!? ダメ、ダメえ!」

「これは……」

民家だった空間が、少しずつだが夢の回廊と同様に歪んだ霧のような景色に変わり始める。それを見た「妹」は、酷く焦り始める。

「だ、ダメだよ……ダメお兄ちゃん!! 寝てナイと!! お兄ちゃんは、病気だから!! 私
が、お世話するカラ……!!」

「……なるほど、声は届いたかよ。おっさん!!」

「ウああアツ!! 黙れ、黙ってヨォ!」

「黙れんなあ!! 確かに普段おっさんは、一々可愛さの押し売りするし、美少女アピールが凄いいし、適当な返事するとウロボロスけしかけたりするが……」

——それはお前が、俺の可愛さを見もせず生返事ばかりするからだ!! ウロボロスけしかけても蝶結びにしやがった癖に……。……「ウロボロス」? まで……。それは、失敗作で破棄したあの「芋虫」じゃ……。いや、違う……。あれは破棄してない……。そうだ。あれは失敗作なんかじゃない、ウロボロスは……。!!

「結局おっさんが仲間になってからこつち、色んな騒動で結構助けられてるわけよ!!

そんな助けられっぱなしな情けない団長としちや……きっちりここで助けないといかんよなあ!!」

「黙レえエ……!!」

崩れ歪む悪夢の景色。焦る「妹」は、更に操る家具を増やし、床や壁を格子状に変形させるなどして行く手を阻んだ。

だが如何なる妨害も団長の前では意味がない。家具も切り払い、変形した格子も切り裂き突き進む。

「こんなウソっぱちの世界、ずっといる所じゃないぜ!!」

「違ウ!! ここコソが『真実』ダ!! 私とお兄ちゃんノ、二人だけの『現実』ツ!!」

「いいや、ただの悪夢だな!!」

「違ウ……ツ!!」

「違わんよ、だからこそ悪夢は覚めるものさ!! そうだろうが——なあ、おっさんつ!!」

——おっさん、おっさんおっさん。ああ、そうだ。この世の中に「オレ様」をそう呼ぶバカは、今も昔一人だけだ。この美少女に対して、おっさん呼ばわり。ああ実に忌々しい、まさかこんな言葉で起こされるなんて、まったくふざけた目覚ましだ。まったくいい加減しろってんだ。

「——誰がおっさんだ、コラアツ!」

——もつとも、コイツに普通のやり方なんて期待しちやいないな。

六 目覚めよ、世界一の美少女錬金術師

「ん……なアツ!!」

その怒声を聞きいた“妹”は、慌てて後ろを振り向きギョツとした。そこには、“病人”として“横たわっていたはずの“彼”が——カリオストロが、怒った勢いで身体を起こしベッドの上に立ち上がったのだ。

「わは……っ！ やっとお目覚めかよ、おっさん!!」

「お前がうるせえからな。ほらよ……っ!!」

カリオストロは、ふいに指を“パチン”と鳴らした。すると次の瞬間、団長を襲う家具に向かい無数の槍や杖が飛び出し刺し貫いた。

「アあ……っ!？」

「たく……っ！ 記憶の再現とは言え、オレ様の家を化物屋敷みてえなことしやがって」
一瞬にして“妹”の操る家具の怪物達を無力化したカリオストロ。その光景に“妹”は、驚きの表情を浮かべ後ずさる。

家具に襲われなくなった団長は、ホツとした様子でカリオストロに駆け寄った。

「ふう、悪いね。助けられたわ」

「気にすんな。こつちも助けられたんだ」

互いの無事を確認し安心する団長達。一方で対抗する手段を封じられ、狼狽えるだけの「妹」は、そんな二人を見ている事しかできなかつた。

「お、お兄ちゃ——」

「……黙りな」

狼狽えながらも声をかけようとした「妹」。だがその声は、今までの心配したとは違
う、怯えた様子であつた。

そして、そんな「妹」の声に答えたカリオストロの声は、もう既に病人のものでは無
くなつていた。

「もう無駄だぜ。てめえオレ様の記憶から生まれたんだろうが、目が覚めた以上どれだ
け姿を似せても醜いイミテーションでしかねえ」

「違ウ……私は……!!」

「違わねえな。あいつは、もうとつくの昔に死んじまつてる。永久を生きる事を選んだ
オレ様と違つて普通の人間としてな……」

カリオストロは「妹」へと手を向けた。既に錬金術の術式が展開されている。

「や、ヤメてお兄ちゃん……!?!」

「お兄ちゃん、か。記憶から生まれて、そう役目を負ったお前を哀れには思うぜ……」
「ヤメてよ……!?!」

「だが、オレ様とあいつは……こんな安いお涙頂戴な兄妹ごつこの関係じゃねえのさ——
—あばよ、〃妹〃」

彼女の錬金術が発動する。

病魔に打ち勝ち、新たな肉体を得て、歴史に残る新たな学術を生み出した錬金術師の開祖。世界一の美少女錬金術師カリオストロ至高の錬金術。

「おに——」

一切の迷いも躊躇も無く、それは迸り炸裂した。〃妹〃の断末魔すらかき消して、その〃妹〃ごと葬ったのだ。

「……俺がやつても良かったんだけど?」

「いんや、オレ様の記憶の産物だ。オレ様がやるべきだ」

消滅する〃妹〃を見送ったカリオストロの顔は、団長が予想したよりも平静そのものであった。

「……妹、居たんだな」

「ああ」

「錬金術師だったん?」

「一応は、な。もつともオレ様の助手つてだけで……至つて普通のみかんが好きなた田舎娘さ」

「はは、気が合いそうだ」

「さて、どうだろうな」

「妹」の消滅、そしてカリオストロの覚醒と共に悪夢の景色が消えていく。悪夢への出入口であつた扉だけを残して。

「……さて！ B・ビィ達が待つてる。あと二人助けにやらんし戻ろうぜ」

「そうだな。だが……その前に」

「ん、なにか……つでえっ!？」

扉に戻ろうとした団長の後ろに居たカリオストロが足を止め、団長が何かと思ひ振り向いた瞬間彼の膝小僧にカリオストロの脚が襲ひ掛かつた。

「い、いったあゝ……!?! な、何しやがる!？」

「助けてもらつたのは感謝してる。ああ、感謝してる……がっ!! おっさんおっさん呼び過ぎだバカッ!!」

「それかよ!?! 別にいいじゃねえかよ!?! そのおかげで目え覚めたんだぞ!?!」

「ムカつくもんはムカつくんだよ!! 十一回も呼びやがつてこの野郎!!」

「ちやつかり数えてんじやないよ!?! 起きろそんな暇あつたら!!」

「しかたねえだろ、起きたくても起きれなかったんだよ!!」

「気合で起きろよ天才錬金術師!!」

「錬金術関係ねえよ!!」

「カア〜……ツ!! 可愛くない!! ほんと可愛くないなアンタって!!」

「ん……つだどこのやろお〜〜つ!!」

カリオストロは顔を真つ赤にして指を鳴らした。すると何処からともなく彼女の傍にウロボロスが現れた。

「うげえ、ウロボロス……!? な、なんで夢の中で」

「夢の中なら何でもありだろうが!! ウロボロス本体は確かに現実だが、錬金術が使える以上こつちでも呼びだせらあ!!」

「んな無茶苦茶な……つ!!」

「それで……だあれが『可愛くない』だつてえ〜?」

カリオストロの表情は、美少女のモノではなく素の邪悪な笑みであった。

「お、おい……そりや、言葉の綾つてもんで」

「うるせえ!! オレ様は、世界で一番つ!! 可愛いい〜……つ!! 天才美少女錬金術師なんだよおつ!! やつちやえウロボロスッ! ☆ ……お置ききだあ、オラアツ!!」

「んぎやあああつ!! すんごい本調子い〜つ!!」

せまるウロボロスと錬金術を発動しまくるカリオストロ。団長はたまらず悲鳴を上げて悪夢の扉にまで逃げて行つた。

「おっさん呼んだ分、美少女と褒める讚えろ見惚れる……この、馬鹿やろおおおッ!!」
そしてそれを追うカリオストロにウロボロス。まだまだ夢の探索は続く中、妙に楽しそうな一行であつた。

七 悪夢アンコール、アルコール

団長達がカリオストロを救出している最中の頃――。

「ねーねー……これ、やつぱマズインじゃないのーレダ美ー?」

「わかっているわよ、ラム子。どう見たってマズイわよ……」

賑やかな酒場、どんちゃん騒ぎの宴会場。そんな陽気な場所で深刻そうな顔をするのは、数人のドラフ女性であつた。

一人は、のんびりとした口調のドラフ女性。

一人は、しっかりとした口調のドラフ女性。

「もう籠が外れちゃった感じよね……て、言うか自暴自棄?」

「なんかー超やばいよねー。ねえ、レム代もそう思わないー?」

「う、うん……や、やば……やばい……にや。かなり、やば……うぶえ!」
「うわあ——ッ!? べ、別の意味でヤバい——!」

そして一人は、床に四つん這いで伏せ明らかに具合が悪いドラフ女性。

「ちよつと平気レム代!? いくら夢でもマズイわよつ!」

「わ、わか……でるにや……。が、我ま……がま……んぶうつ!」

「桶桶つ!? 誰かー!? 桶くださ——いつ!」

今にも色々と決壊してしまいそうな彼女の尊厳を守ろうと必死の二人。

そんな彼女達を余所に大いに盛り上がる酒盛りの中心にいるのは——。

「にやばあ〜っ!! まだまだあ!! もお〜っつと飲めるにやあ!!」

両手に酒瓶を持って顔を真っ赤にして騒ぎ立てるラムレッダの姿があった。

「どんどん次持ってこお〜っ!! 幾らでも飲めるにやああ〜っ!!」

店員に次々と酒を運ばせ、それを飲み干していくラムレッダ。

「……」

そして更に、腕組みをしたまま彼女を睨むようにして立つドラフ女性。

「ねーちよつとー? 羅無も居るならレム代なんとかしてよー!」

「……つまらぬ」

「えー?」

「つまらぬ……そう言ったのだ」

「あ……」

腕組みの彼女の言葉にのんびり口調の彼女は、心底同意した様子で頷いた。

「確かにラムレッダってば……全然楽しそうじゃないもんね——」

ラムレッダの笑顔と笑い声、ぱつと見明るく陽気な彼女のその様子は、ラムレッダの姿をした彼女達から見れば、全てが上っ面でしかなく無理をしているようにしか見えなかった——。

夢に吞まれて

一 美少女脱出

「……あのうB・ベイさん、やっぱりもう僕達も入ったほうが」

「いやまだ大丈夫だ。やばそうならマジでやばいから」

「それどう言う意味ですか……」

「相棒でヤバイならこんな静かなわけないってこと。まあ待つてな」

団長が約束通りカリオストロ救出に一人で向かって十数分経った頃。中々戻らぬ団長の身を案じ待つ事に耐えかねたモルフエがB・ベイ達に対し、もうそろそろ自分達も悪夢に入った方が良いのではないかと何度も言い出していた。

気もそぞろなモルフエに対して一方のB・ベイはと言うと、通常形態にまで戻ってリラックスした様子。姉のヴェトルも相変わらず眠そうでウトウトしており、一人生真面目なモルフエは、本当に大丈夫なのかと不安で仕方なかった。

だがモルフエがもう一度B・ビイに扉への突入を進言しようとした時、団長がカリオストロを連れ悪夢の扉からやつと脱出してきた。

「おまたへ……」

「あつ！ 団長さん、良かったご無事でしうおわあああああ——っ!」

しかし振り向いたモルフエの見た団長の姿は、全身ボロボロな上に上半身はウロボロスに巻き付かれ顔が殆ど見えない状態の団長であった。

「い、いつたい何がっ!? まさかオネイロスに襲われて!」

「いや、おっさ——」

「あ、あ、ん、ッ!」

「……天才美少女錬金術師のカリオストロに襲われた」

「本当に何があつたんですかっ!」

何か言おうとした団長だったが、すぐにカリオストロがドスの利いた声と鋭い視線で団長を一睨み。すると団長は直ぐに言おうとした言葉を訂正したようだったが、事情をしらぬ困惑するモルフエは、困惑するばかりであった。

「こいつは気にしないで。ウロボロスって言うカリオストロの使い魔的なのだから」

「そ、そうですか。なら良か……いや、普通に気になりますけど!」

「グルグル巻きね……うふふ」

「笑い事じゃないよ姉さん!？」

ヴェトルは顔も見えないウロボロス巻き状態の団長を見て愉快そうに笑う。

「まあカリオストロは無事に救出できたよ。待たせて悪かったね」

「い、いえ……僕達は大丈夫ですけど。それよりあの……団長さん？ そのまま話し続けるんですか？」

「カリオストロの機嫌が良くなるまで」

「は、はあ……」

本人は特に苦しくも無さそうなので、モルフエはこれ以上指摘するのを止めた。

きつと僕では、もうどうしようもない事なんだろうなあ——と、心中にて騎空団団長と言う立場の人間の苦労を哀れんだ。もつとも、普通の騎空団団長は、こんな苦労をしないが。

「しかし、これが悪夢への扉か。なるほど奇妙なもんだぜ」

カリオストロも初めて見る夢の回廊と目の前にある自分の悪夢へと通じていた扉をまじまじと観察した。

すると突然彼女達の目の前で、カリオストロの悪夢の扉が淡く輝きそのまま消失していった。

「モルフエ君、これは……」

「きつとカリオストロさんが悪夢から解放されて、悪夢の主を失ったから完全に消えちゃいます」

「……」

カリオストロは、光の粒子となって消えていくその扉を静かに見送った。その扉の中で起きた出来事、現れた人物、それら全てを己が見たほんの一時の夢として。

■ 二 突撃！ 隣の悪夢さん

「さて……これでオレ様の悪夢は完全に消滅ってわけだ。改めて礼を言っとくぜ……ありがとうだよ」

「いえ、気にしないで下さい！ カリオストロさんが助かってなによりです！」

「ただし……！」

カリオストロは突然その場で腰に手を当て人に注意をするような決めポーズをとった。

「カリオストロの夢は聞かないこと！ 乙女の大事なヒ・ミ・ツ、だぞっ☆」

「はい、じゃあ次行こうか」

「おいサラッと流すんじゃねえ!？」

カリオストロの美少女ムーブを自然にスルーした団長。何はともあれ、カリオストロを救出した事で夢の回廊での目標を一つクリアした団長達。次の目標は、残った二つの扉の何れかであった。

「で、次どっち行くんだ相棒？」

「今度はどっちの扉としてもついて来ますからね!!」

「あ、うん。なんかごめんね？」

モルフエは単純に団長が心配であったが、また一人で行かせたら帰って来た時どんな姿で現れるかわからない。これ以上驚き疲れないためにもついて行く硬い意思を見せていた。

「さて、ラムレッダカルナルさんか……って事だがここはラムレッダの扉で行こう」

「理由は？」

「……体力ある内に済ませたくて」

団長はカリオストロの悪夢を見ていよいよ夢の世界は、〃何でもあり〃だとわかった。そんな中でラムレッダの悪夢を後回しにするのは、なんだか気が重たく感じたのだ。

「ルナルさんを後回しにしたいわけじゃないが、最後にラムレッダの悪夢が待ち構えている状況が怖い」

「まあ確かに」

「ラムレッタだしな」

B・ビィもカリオストロも、つつい揃って頷く。もうラムレッタへの不安なのか、悪夢への不安なのか団長もわからないでいた。

「つーわけで、思い切って即突入だ」

「いや、ちよい待て団長」

「ん？」

団長がラムレッタの扉に手を伸ばすとカリオストロがそれを制止した。

「ウロボロス、もういいぞ」

カリオストロが団長の頭部に巻き付くウロボロスに声をかける。するとウロボロスは、短く「シャー」と鳴いて団長の体から降りて姿を消した。

「おお、頭が軽い」

「流石にあのままってわけにはいかねえだろ」

「そりやそうだ」

「だが……もしかまたカリオストロに酷いこと言ったら、めっ☆ だぞっ！」

「はいはい」

（慣れてるなあ、団長さん……）

ウロボロスがいなくなりやつと顔が見えた団長。本人以上にモルフエの方が安心しているのは、やはり慣れの問題であろうか。

「じゃあ視界も広くなったので行くぞ皆の衆」

今度こそドアノブに手を伸ばした団長。覚悟を決め勢い良く扉を開いた先に広がる光景は――。

「酒にやああああ〜〜〜っ!!」

「知ってた」

どんちゃん騒ぎの居酒屋であった。しかも目的のラムレッダが店の中央のテーブルに乗って大いに騒ぎ酒をあおっている。

救出目標がさっそく見つかったのは良いが、悪夢と思えぬ光景に団長は呆れるばかりだ。

「扉からして予想はついたけどさ、案の定にも程がある。悪夢とは何だったのか」

「これってあそこのラムレッダを連れ帰ればいいのか？」

「……いいえ、そうもいかなそうです」

B・ビーが大騒ぎするラムレッダを指さすが、モルフエは首を横に振った。

「ラムレッダさんは、悪夢に囚われ“今”を現実とと思っています。その認識を正さない限りは、外に連れ出してもまた悪夢に引き戻されます」

「確かに……カリオストロも暫く夢と現実がわからなかったもんな」

「夢の世界で言うのも変だが、きつちり目を覚まさせねえとつて事か」

団長は少し前のカリオストロの悪夢を思い出した。あの時も団長は、始め一見普通の民家の姿に「悪夢らしくない」とも思ったが、今回はそれ以上だ。

「賑やかね……けど、ううくん……」

「あ、姉さん!？」

「お酒の匂い……ふわあ……」

「あらら、大丈夫かいヴェトルちゃん」

店内の雰囲気と充満する酒の香り、それにあてられたのか、ヴェトルがふらつき咄嗟に団長が体を支えた。

「ううむ、教育上よくないよこの雰囲気。賑やかと言うか騒がしい。早いとこ解決して出ちまおう」

「なあ、詳しい内容は言わなくていいけどよう、攻略法として知りたいんだけどカリオストロの時はどう言う状況だったんだ？」

「あ？ ああ……」

B・ビイの問いにカリオストロは一瞬如何しようか悩んだ様子だったが、すぐに「しかたねえな」と言い辛そうにしつつも口を開いた。

「ちよいと昔の記憶を悪夢として見てな。先日にあつたルナルの時以上に自分の状況がわからねえ……と、言うより完全に夢の方を現実と思つちまつた。むしろ今までの現実を夢と思つてたぐらいいだ」

「それがオネイロスの悪夢の恐ろしいところです。完全に人を悪夢へと引き込む……」
「情けねえがありや自分じゃどうしようもねえ、こいつが来て騒いだんで目を覚ましたつてところだな」

「それじゃ俺が騒いだけみたいなんだが……」

「そんな感じだったろ？」

「そりやそだけどさ」

若干すねた様子の団長をケラケラと笑つたカリオストロ。そして改めてラムレッダの方を見た。

「……しかしあのラムレッダは、どんな夢を現実と思つてるんだ？ 見たところ何時も通りのあいつみてえだがな」

居酒屋の客に囲まれ騒ぐラムレッダは、確かに普段通りの彼女に思える。過去に囚われてるようでも、何かに悲観してるようでもない。

(とは言え、なんか違う……とも、感じるんだよな)

ただ団長は、騒ぎまくるラムレッダの様子に違和感を感じていた。果たしてその違和

感は何であろうか——と、考えていたところ。

「——ねえ、貴方。団長君、よね？」

「へ？」

突然何者かに声をかけられた。まさか誰かに声をかけられると思わなかった団長は、驚きながら声の方へと向き直った。あるいは“妹”のような悪夢の住人かとも思いうちも剣へと伸びている。

だがしかし、目の前にいた人物に団長のみならずB・ビー達も目を見開き驚いた。

「ラ、ララ……ッ!!」

「ラムレッダアツ!!」——団長達の驚きの声が重なる。だがその驚き様は当然と言えるだろう。彼らの前に居たのは、間違いなくラムレッダその人であったのだ。

「だ、だつて……ええっ?」

団長は最初に見つけた酔っ払いのラムレッダを見た。するとラムレッダは、相変わらず酒瓶を持つて騒いでいる。そしてもう一度目の前に現れたラムレッダを見る。

「……いや、だつて!!? なんて!!?」

「まさか、お前も悪夢の欠片!!」

モルフエは目の前のラムレッダが、悪夢の欠片や住人ではないか疑い警戒した。だがラムレッダの姿をした女性は、慌てて首を振ってそれを否定する。

「わあ、待つて待つて!? 確かに驚くのも無理ないわ!! けど安心して、私は悪夢の欠片じゃないのよ!」

「じゃ、じゃあ貴方は何者なんです!? いくら夢の世界でも、同じ人間がいるなんて聞いたことありません!」

「私は……何て言えばいいのかな。とりあえず、名前はレダ美っていうわ」

「レダ美?」

「ええ、私は……いえ、*“私達”*は」

「達っ?」

「あーレダ美ー。団長くんみつけたのー?」

「ぎゃあ!? またラムレッダッ!? ラムレッダなんで!」

レダ美を名乗るラムレッダ、彼女の言葉に困惑する団長の前には、なんと新たにラムレッダが現れた。

「あーどうもー。ぼくラム子ー。よろしくねー」

「ラム子……さん?」

また雰囲気の違いラム子を名乗るラムレッダ。更に……。

「ヴえ……ヴおえっ!? ま、まって……ラム、子……うえっ!」

「ま、また増えましたけど……」

「おいおい、どんだけ居んだよ」

「ど、どう……も。あ、あたし……レム代っていい……まぶうつ?」

「ああ、レム代無理しないでっ!!」

そのラム子の後をふら付きながら追ってきたのは、手で口をふさいで顔色が悪いラムレッダ。モルフエもB・ビイも驚く以上に呆れと困惑で目をパチクリさせていた。

そして勝手にラムレッダ達は集まり何やら話し合っている。

「えーと、一応はメインそろったし……」

「やっところかー?」

「わ、わかった……にや……」

「おほん……私達!」

——「ラムちゃんズでーすっ!!」

「……を、えっ!」

「ああ、レム代!」

「あーやっぱ揃って言うのはきつかったねー」

「ごめ、ほんと……やば……。で、出るにや……うぶつ!」

「待ってレム代、せっかく団長君来たんだから待って!? 空気読んで! 我慢してえ!」

突如現れた三人のラムレッダ。その彼女達による謎の名乗り、そして直後酷く嘔吐く

ラム代に慌てふためくラム美達を見て呆然とする団長達。

「……………これは夢だ」

思わず団長は、そう呟いた。

■ 三 ドキッ！ 全員酔っ払い ラムレッダだらけの居酒屋

俺達の前に現れたラムレッダ三人衆、通称“ラムちゃんズ”。夢とは言えそのあまりにも唐突なラムレッダ分裂の光景に俺は眩暈を感じ、夢の世界だと言うのに「これは夢だ」など当たり前前の事を呟く始末。

しかし何とか冷静になり、この悪夢の世界において悪夢の欠片でも悪夢の住人でもなく、俺達に友好的な彼女達の話聞くことにした。

「私達は、そうね……………ラムレッダの“内の部分”って言えば良いのかしら」
「内の部分？」

「そーそー。ラムレッダのー？ 色んな面って感じー？」

「つまり、内面の性格って事ですか？」

「そうね。私は言ってしまうば“ほろ酔いのレダ美”」

「あたしはー、“酪酊のラム子”おー」

「あ、あた……しは、〃泥酔のレム……〃……ヴェツ!？」

「……レム代さんは、安静にしてどうぞ」

「ごめ、だんちよ……きゅん……」

絶賛嘔吐き中のレム代さんには、安静にしてもらいつつ俺は「なるほど」と頷いた。

言われてみるとその通り、ラム子さんとレム代さんは、多少違いはあるだろうが俺にとつて〃普段のラムレッダ〃である。

一方でレダ美さんに関しては、なんとも言えん。俺はほろ酔い状態のラムレッダすら碌に見る機会がないのだ。素面なんて見たこともない。

だがこの頬を酔いで赤らめながらも落ち着き、普通に呂律の回るレダ美さんが素面のラムレッダに近いのかと思うと、最近どこるか出会った当初より仮装に見えた修道女の姿に説得力が生まれた。

「こーゆーのってあり得るもんなのかね」

「……一概に無いとも言えねえかもな」

「と、言うところ？」

「つまり一種の……俗に言う〃多重人格〃みたいなもんだ」

ラムレッダと言う〃個〃の中に現れた複数のラムレッダ。しかも特殊な悪夢世界とは言え夢で自立して行動する確固たる自我もある。

そんな奇妙な存在にカリオストロは、冷静な分析を行った。

「カリオストロさんの言う通りよ。本来私達は、ラムレッダの夢や意識内だけに現れる人格であの子だけが認知できる存在。けど知つての通り、今あの子……ラムレッダは、悪夢に囚われちゃつてるのよ」

「そのせいでさー、ラムレッダもぼく達の事わからないみたいなんだよねー」

「団長君が来るまで結構呼びかけたんだけど……あの有様」

レダ美さんは、悲しそうな様子で騒ぐラムレッダを見た。

「結局私達は、あの子自身でもある。認知の歪んだ状態の自分に、自分自身が呼びかけても気づく筈がないのよ」

「——故に、うぬ達を待っていた」

「わあっ!? またレッダッ!?!」

急にヌツと俺の傍に現れたのは、もう出ないと思つた新たなラムレッダだった。思わず変な言葉を叫んでしまう。

「この程度で驚くか、修行の足りぬ小僧よ」

「驚くわ普通につ!?! もう出ねーと思つたんだからよ!?! どんだけ分裂すりや気が済むレッダ!?! そしてお前は何レッダ!?!」

「落ち着け相棒、語尾がおかしい。下手糞なラップみたいになつてる」

「う、うるせいやい!？」

混乱したんだ、見逃せい。

「フフ、何レッツダか……。まあよかろう……。我が名は羅無!! 欲望の羅無” つ!! ラムレッツダの欲望を司りし者也ツ!!」

背中に“酔”の文字を背負いそうな勢いで名乗る新たなるラムレッツダ改め羅無さん。やたら古風な喋り方な上、なんか変なオーラまでまとっている。

「まーた随分濃いのが来たなあ、おい」

「ラムラムだらけね……。うふふふ……」

「だから笑い事じゃないよ姉さん……。ほんと何なんでしょう、この夢……」

「おい逃避するなモルフエ、夢だ諦めろ」

俺と同様もう別レッツダが来ないと思つてたであろうモルフエ君が、もう驚きも呆れも通り越したよくわからない表情をしていた。

「三人でもややこしいのに増えるなよ……。ええと、レム美ラム代レダ子に羅無と……」

「違う違う、私はレダ美でラム子にレム代」

「ラレ代とムム子……」

「混ざってる混ざってる」

「ううむ、いい加減混乱してきた……」

頭の中でラ行が溢れ混乱してきた。全員ラムレッダの名前をもじり過ぎである。

「……で、その欲望の羅無さんや？ 俺達を待っていたつてのはどう言うこつてす？」
「うむ……まず聞くが、ぬし等あのラムレッダの姿を見て何を思う？」

羅無さんはもう何杯目か——いや、何本目かわからぬ酒に手を伸ばすラムレッダを指さす。俺達は改めその様子をジツと見る。

「……お酒を、飲んでるようにしか」

「だな」

モルフエ君は首をひねりながら見た通りの事を言った。B・ビイも相槌を打っている。それに対し羅無さんとレダ美さんは、何も答えない。

「酒にや酒にや!! お酒を飲むにやあ〜っ!!」

「……ああ、なるほど」

だがここでラムレッダを見て俺はやつとある事に気づく。それはこの空間に来てラムレッダを見た時から感じていた違和感の正体だった。

「あいつ、全然楽しんでないんだ」

「ど、どう言う意味ですか団長さん？」

「んつとな、モルフエ君。わからんかもだが……ラムレッダの奴、あんなだけ酒美味そうに飲んで見えるけど、実際はガバガバ口に流し込んでるだけなんだよ」

「えつと……う？」

「つまりは『自棄酒』だな。最も……ありやそれより酷いがね」

未成年である以上当然俺は酒の味など知らん。だが酒を美味そうに飲む大人達の姿は、それなりに見てきた。当然ラムレッダもその内の一人だ。

確かに彼女は、なにか思う所あれば自棄酒を飲む事がある。そんな時仲の良いティアマトやシユヴァリエなんかが付き添って夜通し飲むなんて珍しくない。運悪く捕まり、俺までジューズ飲みながら酔っ払いの相手をされるなんて事すらあった。

だが、そんな時でもラムレッダは楽しそうだった。鬱憤を晴らす目的だとしても、少なくとも俺はそう思えた。

俺の知るラムレッダは、あんな酒の味を楽しまず只管 アルコールと言う名の液体を飲み込むような無粋な飲み方をしない。

「自棄に自棄を重ねて、色々ダメになつた悪夢……つてどこか」

その『自棄』がなんであるかは、具体的にはわからない。夢らしく漠然としたなにかだろうとは思ふ。

「そもそも酔えてんのあれ？　なんか下戸が無理に酔つたふりしてるように見えるけど」

「……気付いてくれたか」

何故か俺の指摘に羅無さん達は、どこか嬉しそうに頷いた。

「お主の言う通りよ……ラムレッダの奴は、実際酔ってはおらぬ。元より悪夢の酒は、飲むに値しない駄酒も駄酒。どれ程飲もうと真に酔う事など出来ぬ」

「じゃあ、あのラムレッダは……」

「この悪夢が『己は酔っている』と奴に思わせておるのだ。あの駄酒は、そう思わせる道具なのだ。そしてラムレッダの奴は、それでは足りぬと更に酔おうと必死に駄酒を飲み続けておる……酔う事もできぬ不味い酒を、自分でも気付く事無くな」

「……その『自分』には羅無さん達も入ってるど？」

「然様。レダ美も話したが、今のラムレッダに我等の言葉は届かぬ。だがお主達、いや……団長であるお主ならば届くだろう。だからこそ待ったのだ」

「お願い団長君、あの子のあんな姿もう見てられないわ」

「ラムレッダはさーやっぱ楽しそうに飲んでなきやねー」

「それが……ラムちゃんズの総意……おえ……えぶうっ!？」

嘔吐くレム代さんはともかく、彼女達の気持ちはわかる。俺も同じ気持ちだ。それに元々それが目的でここに来ているのだ。断る理由はない。

「ハナからそのつもりさ」

俺が頷いて見せると、レダ美さん達も俺達と並び立ち目標であるラムレッダを見据え

た。

「手伝ってくれるんすか？」

「まあ、やっぱねー？ 団長達に任せっぱなしってわけにもいかないよー」

「お主は真直ぐ彼奴を目指し目を覚まさしてやるがよい」

「それに団長君の呼びかけが通れば、私達の声も届くかもしれない。近くに行つてあげたいの」

「そら勿論助かりますが……レム代さんは、安静にしたほうが良いのでは」

「へ、へいき……ぜんぜ……だいじよ、ぶ……」

「んじや、オイラ達は邪魔入らねえようにラムちゃんズと有象無象の相手してやんよ」

「“ごいつら”が悪夢の住民とすれば、お前がラムレッダに接触してから反応する可能性があるからな」

カリオストロの言うようにラムレッダを取り囲む酔っ払いの集団。これは幻影でもなく、おそらくは悪夢の住民。カリオストロの“妹”のようなものだろう。今は俺達を不自然なまでに無視しているが、それはラムレッダが俺達に気が付いていないからだ。彼女が俺に気が付いた場合、そして正気に戻りそうになった時、どのような反応を見せるかは分からない。

「団長さん、僕と姉さんもお手伝いします！」

「それは危ないよ。隅に避難してても……」

「いえ、僕達も何か力になりたいんです！」

カリオストロの時待機していたのをやはり気にしてるのだろうか、モルフエ君の熱意をかなり感じた。

「……じゃあ、俺と一緒に来て。ラムレッダ説得する時あいつ酒絶対飲もうとするからそれ阻止するのお願い」

「任せてください！ 頑張ろう姉さん！」

「んう……わかったあ……」

大量の酔っ払いの相手は不安だが、それでも俺はラムレッダの目を覚まさせなければならぬ。カリオストロの時同様気合を入れて彼女のもとに向かう。

「それじゃ、いっちょ始めますか」

■ ■ ■ 四 悪夢の酒

修道院での過ち。それこそが最初で最大の罪だ——ラムレッダは、そう認識している。

飲み干した酒の多さを見て芽生えた罪の意識。それを抱えての逃亡生活。流浪の旅

は、終わる事もなく、今自分が果たしてどの島にいるのかさえ分からない。

「酒にや!! お酒にや!! まだまだ飲めるにやああくつ!!」

そんなどこかもわからない島の居酒屋で、大いに叫び騒ぐラムレッタ。その周りに転がる酒瓶は、全て彼女が飲み干したものだ。それも一本や二本どころでなく、もう数十本は超えているだろう。

だがそれでも——足りない、足りない。ああ、まだ足りない。

ラムレッタは、酔えないでいた。

顔は赤く火照っているのに——酔えない。

アルコールが体をめぐるのに——酔えない。

あらゆる酒を飲み続けても——酔えない。

酔えない。酔えない酔えない酔えない酔えない酔えない——酔えない。

「お酒、お酒にや……!! にやは、はは……!」

彼女は口に出さない。だが今にも叫びたいのだ。「なぜ酔えないのか!? 酔いたい、酔いたいのにっ!!」と。

酔う瞬間だけが幸せでいられる。酔った時間は、全てを忘れていられる。酔ったその時だけは、全てが許される気がした。

結局のところ、“今の彼女”が酒を飲む理由は即ちそれ——逃避なのだ。

修道院での失敗に始まる酒のトラブル。それは修道院を逃亡してからも続き、どこへ行っても繰り返し繰り返し……。

何をしてしても失敗する。そして酒を飲む。そして失敗する。だが止められない、酒を断てない。

「お酒……飲んで、飲んで……！ 飲めば、忘れられ……」

そして酔おうとする時、逃げようとする時、忘れたい時。そんな時に限って頭の中には、思い出したくない光景が浮かんでくる——。

『もう来なくていいから』

『クビだ。金？ 払うと思ってるのか？』

『二度と店に来るな。客としてもだ』

クビになった店の店長に言われた最後の言葉は、どれも明らかな拒絶のもの。

『いやね、あんな昼間っから酔っぱらって……』

『悪いが、酒癖の悪い……いや、品の無い女性は嫌いでね』

『修道院を飛び出して正解だったんじゃないかね？』

知り合った人達も、最後には蔑みの視線と非難の声を向ける。

だが……それは自業自得だ。結局自分が酒に溺れ失敗を繰り返したせいではない。誰も責めれない。自分は責められて当然の人間なのだから——ラムレッダは、どんな言

葉を投げかけられようとそう思ってきた。

きつと修道院の仲間達もそう言うに決まっている。厳格な父、優しい母もそう言うに違いない。ああ、そうだ。きつとそうなのだ。

「お酒……酔わせて……。もつと、酔わせてよお……」

この時、最早ラムレッダの声は、嗚咽の如きものへと変わっていた。

——これは悪夢。全てが最悪にして、見る者を破滅へ導く希望なき夢。

ここにいる限り、彼女は世界の銘酒美酒を呑み尽くそうと、甘美なる酒を味わえず、心地よき酔いには至れず、ただただ酒で酔う事を求める生きた屍の如き存在となる。強烈な悪夢のアルコールは、口に入れた瞬間こそ酔ったように感じるが、それはほんの一瞬でしかなく直ぐにその感覚は無くなる。この悪夢の酒で酔うには、そんな酒を飲み続けるしかないのだ。だがそうなれば、彼女は完全に悪夢へと沈み永遠に戻る事は無い。

「——止めなよ、そんな飲み方」

だがそんな彼女を止めたのは、一人の少年の声だった——。

■ 五 酒と仲間と彼女と団長

団長達がラムレッダに近付く事は、思いのほか簡単だった。無数の酔っ払い達は、団

長達を無視して妨害もなかったのである。ただ数ばかりは多いのでB・ビー達と共に酔っ払い共をかき分けテーブルの上で騒ぐラムレッダに近づいた団長は、パツと彼女から酒瓶を奪い取った。

「ああ〜……!? 誰にや!! なにするにや……返して欲しいにやよ……!!」
「ダメ」

「い、意地悪しないでほしいにや!! あたしは……お酒のみたいんらよお〜!」

「ダメダメ」

「うう〜……っ!!」

団長に酒を取り上げられたラムレッダは、愚図る子供のように団長が持つ酒瓶に手を伸ばし奪い取ろうとした。当然団長は、酒瓶を渡そうとはしない。

すると直ぐに団長から酒を取り返せないと無駄に早く判断した彼女は、すぐ別の酒瓶に視線を移してスツと手を伸ばした。

「あ、ダメですよラムレッダさん!!」

「んにやあ〜っ!? またお酒とられたあ……!」

「飲みすぎ……注意、ね……?」

だがすぐさまモルフエがラムレッダが手を伸ばした先にあつた酒瓶を取り上げた。ヴェトルもまたさり気無く他の酒瓶を隅に移動している。

「にやあ……酷いにやひどい！ 誰か知らないけど、なんでそんな意地悪するにや……!!」
 ここは居酒屋にやお酒の店にや！ ここで飲んで何が悪いってんだにやあゝ!!」

案の定団長の事はわかっておらず、「カリオストロの時と同じだ」と団長は思った。レダ美達の話も合わせるなら、この悪夢は——今のラムレッダにとつての現実は——団長達と出会わなかった世界という事になる。

そして更には——。

「おい、こいつら動きが止まったぜ……」

酔っ払い共を団長とラムレッダに寄せ付けないようにしていたB・ビー達。だが団長とラムレッダが接触した途端酔っ払い共は、バカ騒ぎをやめ人形のように動かなくなつた。

団長達を取り囲み動かない人間達と言うのはあまりにも不気味な光景であつた。

「ラムレッダさんが団長さんに気付いたから、こいつらも僕達を認識し始めたんだ……!!」

「まだ様子見か……各々抜かるな。何時襲い掛かるかわからぬぞ」

羅無の言う通りまだ戦闘は起きていない。だがラムレッダの精神次第では直ぐにでもこの酔っ払い共は、再び動きだし団長達を襲いだすだろう。自分達の住むこの悪夢を

覚まさせないために。

「あれえ……? 急に静かになったにや……?」

一方で悪夢の主であるラムレッタ本人は、この状況をよくわかっていない。彼女にしてみれば、ただ店で飲んでいただけなのだ。

「……今周りは気にせんでいいよ。それより今日はもうお開き。酒も終わり」

「ええ〜っ!? なんでにや、まだ飲み足りないにやあ!!」

「もう十分だよ。第一こんな場所ですんでたつて美味くも楽しくもないだろうに」

「た、楽しいにや!! お酒も美味しいし……!!」

「ほーん? じゃあ聞くけど、このお酒の味どうだった?」

「うっ!!」

団長が彼女から奪い取った酒瓶を眼前にまで差し出す。酒を知らぬ団長には、とんと分からぬ物であったが、それは現実存在する果実酒であり、ラムレッタの記憶に存在したものが再現された物だった。

なればこそ、ラムレッタはこの酒の味の感想をすぐに答えなければならぬ。だが実際の彼女は、冷や汗をたらし言葉に詰まった。

「その酒も、あの酒も、味がわかって飲んだのか?」

「も、もちろん……美味しかったにや」

「どんな風に？」

「それは……そのう……」

「わからんだろうね」

団長は次々そこらに転がる酒瓶や、モルフエの持つ酒瓶、それらを指さし味を聞くがやはりラムレッダは、気まずそうにするだけで答えない。本来の彼女なら考えられない事だった。

「らしく無い飲み方するからだよラムレッダ。お前酒を頼る事はあつても、酒に逃げる事は無かつたはずだ」

団長の言葉を聞きラムレッダは、困惑と同時にキョトンと不思議そうに団長を見た。

「さ、さつきから何で……？ きみ、あたしとどつかで会つたかにな……う？」

「会つた会つた、バツチリ会つてる」

「んく……そ、そう言われると……にやんかどこかで会つたような……」

「思い出してみなさいよ。まだ居酒屋の店員だった酔つたあんたに酒瓶ぶつけられてシチューに顔ぶち込まれた時の事」

「ええっ!!? そう言えばそんなミス、どつかの店や色んな店で一度二度三度四度……うええっ!!? じゃ、じゃあ報復!!? 復讐!!? お、お許しをおくっ!!?」

悲鳴を上げて団長に許しを請うラムレッダ。余程この悪夢の世界では、色んな者に恨

まれたりしてる——事になつてるのだろう。

「おバカ、思い出しなさいよ。そこで会つてからのことを」

「へ？ 会つてから……？」

「そうそう。色々とあつたじゃないの、お前さん仲間になつてからそりやもう」

「仲間になつて……？ けど、あたし……君と一緒に騎空団になんて……」
「騎空団」？

「ほら思い出してきた」

「え？ え……あれ？」

団長の言葉を聞いてラムレッダは、混乱しつつも徐々に何かを思い出そうとした。歪んだ現実となつていた悪夢が、再びただの夢に戻ろうとする。

しかし、その変化は彼女にだけ表れたものではなかった。

「——A h h h !？」

「A h h h h ……!!」

ラムレッダが騎空団の事を少し思い出した瞬間。これ以上は無視出来ぬとばかりに動きを止めていた酔っ払い達が、ラムレッダの記憶を戻させないため団長やモルフエ達に向かい獣のような叫びをあげて襲い掛かつてきた。姿こそ人のままであつたがその形相は、怪物の如きものであつた。

「そら来たやるぞ!!」

「みんな、団長君達に近寄らせないで!!」

「おうよ、オイラに任せろあ!!」

「有象無象如きが、この羅無に敵うと思うか……!!」

だが直ぐB・ビィ達がそれを防ぐ。マチヨビィとなつたB・ビィもカリオストロも、そしてラムちゃんズも奮戦し本性を現した悪夢の住民である酔っ払い達を次々と撃退し団長達に近寄せようとしなない。

「みんな足止め頼むぞ!! こつちあ動けねえから、派手な技は抑えてくれよ!!」

「ま、まかせ……うヴお!! おう……うおえええくくつ!!」

「そつちの派手なのも抑えとけよっ!! マジ頼むぞ!!」

「な、なんにや!! 何事にやあつ!!」

静かになつたと思えば突然の大乱闘。ラムレッタの混乱は、最早ピークに達していった。

「お前に目を覚まされたくないんだとき」

「へ?」

「これはお前さんの見てる『悪夢』なんだ。お前が悪夢から抜け出せばこいつらは消える。だからなんとしても阻止したいわけ」

「悪夢……? にやに言つて……」

「ここは現実じゃないってこと！ さあ思い出せラムレッダ、お前は俺とみんなですつと旅してきただろう。騎空団で一緒に!!」

「みんな……」

「そうよ、ラムレッダ!!」

団長の呼びかけに加えレダ美達もラムレッダへと呼びかけ始める。

「団長君達も来てくれて、いい加減私達の声も届くんじゃないの!?!」

「その声は……あたしっ? あ、いや……違う……」

すると今までは届かなかったはずのレダ美の声、それがラムレッダへと届き始めた。

「こんな悪夢に負けちゃダメ! あなたの居場所は、ここじゃないでしょ!」

「ちゃんと思いき出したよー。君と居る事を受け入れてくれた人達をさー」

「ど、どんなに……うぶっ!?! め、迷惑かけても……一緒に居てくれる、みんな……」

うおええ……っ!?!」

「久方ぶりだったろう、帰れる場所が出来たのは……っ!!」

「ラ、ラム……ちゃんズ……?」

レダ美達の声を聞いたラムレッダは、自分の一部でもある彼女達の声が届いた事で更に記憶がはつきりと蘇りだす。

脳裏では今まで現実と思ってきた悪夢での出来事が次々と水泡のように弾け消えて

いく。それに変わり浮かび上がるのは、本当の記憶の数々。

「ティアマト、リヴァイアサン、シユヴァリエ。暇さえあればこいつらと昼間つからだつて酒飲んでるよな」

「ティアマト……そ、そうにや……ティアマト達と、いつも」

「オイラに美味しいリンゴ酒の話してくれた事もあつたっけな!!」

「トカゲちゃ……違う、B・ビィ? そう、リンゴの話で……」

「オレ様の研究室に酔って入り込んだりもしたろ!! ベロベロに酔つてなあ!!」

「カ、カ……カリオストロの研究室……依頼が終わって……依頼の打ち上げで飲みすぎ
て……」

B・ビィ達の言葉もラムレッダの記憶を鮮明にさせていった。蘇りだした記憶は、次々溢れる。それは新しい記憶からどんどん過去へと遡り数々の仲間との出会いを思い出す。

「思い出沢山、まだまだ挙げればキリがない。まったく濃いキャラしてるよ」

「あ、あたしは……あたしは」

「仲間だろ? 俺がB・ビィ達と旅に出て、最初に出来た仲間だ」

■
そして彼女の記憶は、運命とも言える居酒屋での出会いへと辿り着いた――。

六 帰って来いヨッパライ

『——んにやあくおもしろそうなお客さん達……ごあんやいゝしておきましたにや
』

思い出す出会いは、居酒屋の店員とそのお客だった。

『んにやあく〜〜〜つ?』

『あじゃあつ?!』

『ああ……団長が、熱々シチューに顔を……っ!』

『はにやあく〜〜つごめんやさ〜い』

その客だった。『地味な少年』に酔った自分は、あろう事か酒瓶をぶつけてシチューに顔を叩き込み。

『んにやあく〜〜つはっはっはあつ!! きようはあくあたしの入団歓迎ありがと
にやあく〜んっ!!』

騒ぎを起こし、店をクビになって追い出され。

『よろしくにやあくだんちようくん〜』

『はいはい……』

居酒屋を去ってそのまま新しい職場、呆れ顔の少年団長の騎空団へと転がり込む。

何時もながら情けない、まったく何時も通りでお決まりの展開——だが。

（あたしは……あたしは、修道院を飛び出してから何処かに留まるなんてしにやかった……違う、出来かったにや……。お酒を飲んで、何時も失敗して……。だから、心のどこかで“どうせまた失敗する” “クビになる” って思ってた。けど、けど君は……君の騎空団は……）

予想に反して続くのは、“奇妙奇天烈騎空団”での愉快な日々。

並大抵の騎空団では味わえない、体験できないような出来事の連続。日頃から星晶獣と酒を酌み交わすと言う経験は、この騎空団だからこそ出来た。

そして、その騎空団で過ごす内に自分が感じたのは、久方ぶりの安堵だった。

（あたしがお酒で失敗した時、君はどれ程怒っても一言だって“出てけ”って言わなかった。あたしのダメな所さえも受け入れてくれていた……ダメダメなあたしなのに）

団長ばかりか団員の仲間達さえも自分を受け入れてくれていた。

仲間と酒を飲み、仲間と語らい、唄を歌い酒を飲む。心の底から楽しいと思える騎空団。

「そう言や、最初になし崩しの歓迎会したら言ってたな。俺が酒飲める歳になれば、飲み方教えてくれるって」

団長への言葉——ああ、そうだ。覚えている。

『——にやはは……団長君は、まだ子供だったねえ……おしゃげ、飲めるようになったら、飲み方おしえてあげるにや〜』

『はいはい、ありがと、ありがと』

酔った戯言であつたかも知れない言葉。それさえ、彼は覚えていてくれたのか。

「さあ、もういいだろうラムレッダ。酔いも悪夢も覚めて良い頃だ。こんなつまらん悪夢が、俺達との旅より楽しいなんて絶対に言わせねえからな」

——“楽しい”、その通りだ。彼の騎空団は、彼との旅は本当に楽しい。今までも、これからも。

「Ahhhh……!!」

「あ、しまった……っ?!」

「気をつけろ、何人か抜けおつたぞ!!」

この時突如ラムレッダの視界に、レダ美達の合間を抜けてテールへと飛び乗った酔っ払い達の姿が入る。彼らは次々最大の脅威と判断した団長に向かい手を伸ばす。

——咄嗟に、体が動いた。

今まで深く先の見えない霧に覆われたようだった意識が晴れる。ラムレッダ自身が驚くほど、この時彼女の意識は冴え渡った。そして全てを完全に思い出し、何をすべきか、どうするべきか直ぐに分かった。

自然にとつた動きは、見様見真似の動き。修道院に入る前に厳格な父が時折見せた「動き」を覚えていたものだ。

酔つたような足取り、だが同時に滑らかな動き。更に独自の拳の構えをとると、そのまま拳を団長に迫る酔っ払いに向けて放つた。

「Ah……!?!」

ラムレッダの拳を受けた酔っ払いは、短く悲鳴を上げテーブルから殴り飛ばされた。するとそのまま床に落ちて霧のように消えてしまう。

「——団長君達に、手出しはさせないっ!!」

自分の事を仲間と言つてくれる人達が居る。そんな素晴らしい仲間と場所が、今の自分にある事を彼女は思い出した。

■ ■ ■
そして自分もまたその「仲間」であるために戦う。仲間を守るために——。

■ ■ ■
七 羅無打の拳 〳世紀末救清酒伝説〵

俺に襲い掛かってきた酔っ払いは、俺が倒すよりも先に床に殴り飛ばされそのまま消滅した。それをラムレッダがやったのだとわかり、ハツとして彼女を見た。

「ラ、ラムレッダ……!! 目が覚めたのか!?!」

「うん、バッチリ……ごめんね団長君、恥ずかしい所見せちゃった」

「ん？ あ……いや、気にしなくていい」

目の前のラムレッダは、悪夢で最初に見た時に比べ——と言うよりも、普段から比べても凛々しさがあつた。色々疑問は感じたが今それを気にしてる場合じゃないだろう。

「ラムちゃんズも、みんなもありがと!!」

「礼は後よ、ラムレッダ!!」

「まだまだ悪夢から抜けちゃいねえぜえ!!」

「B・ビイの言う通り。モルフエ君、ラムレッダの目が覚めたなら脱出でかまわんね!」
「は、はいっ!! ラムレッダさんが目覚めて悪夢自体も弱まっています。今悪夢の住人が消えたのもそのせいです!!」

「なら早いとこ外に出ちまおう……しかし、まだ大分残ってるなこいつ等」

相変わらず酔っ払い共の数は多い。全員を相手にする必要はないが、ぶっ飛ばして進むにしても面倒だ。

そう思った俺であつたが、一方悪夢より目覚めたラムレッダの考えは違ったようだ。

「団長君、ここは私に任せて」

「ラムレッダ?」

「今こそ私も活躍の時……とおうつ!!」

「ちよつ!？」

驚く俺をよそに何を思ったかテーブルから酔っ払いの群れに飛び込んだラムレッダ。悪夢の主であつた彼女を酔っ払い共が見逃すはずはない。

「おい、逃げろラムレッダ!？」 捕まると面倒だぞ!？」

「心配ないよ団長君。今の私は——」

「A h h h h!？」

「——『素面』だからっ!!」

バキィ……ッ!! ——強い打撃音と共に、またも一人酔っ払いが吹き飛んで消えていった。やったのは、やはりラムレッダだった。

「さあ、どんどん来なさい!! 今の私は、いくら動いても吐かないわよ!!」

「おお……っ!？」

突如何かが覚醒したラムレッダは、四方八方から襲い掛かる酔っ払いの攻撃を『するり……』と躲してそのまま次々と強烈なカウンターがさく裂。間をおかず、果たしてそれ程柔軟に動けたのかと思う程脚を上げて酔っ払いを蹴り飛ばす。ラムレッダは、その流れるような動きで次々酔っ払い共を蹴散らし消滅させていった。

「す、すごい……!？」 ラムレッダさんって、あんなに強かつたんですね」

「い、いや……あれは俺も知らん戦い方だ」

「え？」

モルフエ君は「流石ラムレッダさんも星晶戦隊（以下略）の団員だ!!」とでも思ってくれたのかもだが、本当にあんなラムレッダの戦い方を俺は知らん。知らんたら知らん。

「長い放浪生活、幾度もクビになった居酒屋従業員!!　そこで酔っ払い達の荒事が無かったなんて思わないでね!!　毎度誰よりも酔ってた私は……慣れてるわよ!!　ハイ——ツ!!」

「Ah……!?!」

そして俺達にとつても慣れ親しんだ酒瓶攻撃まで繰り出し始めるラムレッダ。床には幾らでも空になった酒瓶があり、それを器用に足でボールを蹴り上げるようにしてキヤツチ。こん棒のようになり、投擲武器にしたりと凄い技を連発した。

だがその酒瓶を武器にしようと思ったのは、敵もまた同じだったらしい。

「Ah h h h!!」

「なにを——キヤツ!?!」

酔っ払いの一人が中身の残る酒瓶を持ち不意にラムレッダに中身をぶっつけたのだ。それは、目くらましのような苦し紛れの行動に思えるが、羅無さんの言葉を俺は思い出す。

——この悪夢が「己は酔っている」と奴に思わせておるのだ。あの駄酒は、あの駄酒は、そう思わせる道具なのだ——。

この言葉通りであれば、もしや酔っ払いはラムレッダを再び悪夢に引き込もうと狙ったのかもしれない。酔えない駄酒であっても、その臭いは強烈なアルコール臭だ。このままではまた再びラムレッダが悪夢に吞まれる——かと思われた。

「——ツペ!? ペツペ……!! 急に何するのよ!?!」

「A h……!?!」

「さっきまでならいざ知らず、今の私をそんな不味い酒で酔わそうなんて十年早いわっ!!」

「A h h h……!?!」

顔にかかった酒を拭い正気のままラムレッダは、酒をかけた酔っ払いから酒瓶を奪いそれで相手を殴り倒した。

この思わぬラムレッダの活躍に俺も思わず啞然とするが、直ぐこれが好機だとわかる。ラムレッダは出口となる扉をわかつて酔っ払いを蹴散らし進んでくれている。この獅子奮迅の活躍による勢いを利用しない手はない。

「全員ラムレッダに続けえ——いつ!!」

依然敵の数は多かった。だが悪夢の主であったラムレッダが完全に正気に戻り、そし

て予想外の活躍に今度は俺達が勢いづく番だった。

「邪魔だあ!! 退きやがれ有象無象共がよお——っ!!」

「やれ、ウロボロス!! まとめて蹴散らせっ!!」

「私達も……ラムちゃんズ、アタア——ツク!!」

「いくよーラム子ー! ダブルどんケツウ——!!」

「あ、あた……くうおええ……っ!」

「うっわっはっは……っ!! 我らも調子が出てきたわ……っ!!」

ラムレッダを取り戻し遠慮無用の戦闘となつたならば、B・ビィ達に敵う者はこの場
にいない。俺が参加しなくてもどんどん道が開けていく。おかげでモルフエ君とヴェ
トルちゃんを守りながら進む事が出来て助かった。

「撤収撤収!! 酒臭い悪夢とはおさらばじゃい!!」

「ほら、姉さんも早くっ!!」

「うう……っ! みんな、早い……!」

ここまで勢いづけばもうこちらのもの。伊達に何時も勢いで依頼を解決していない。
……いや、別に誇れる事じゃあないが。

「さ、みんな早く!!」

誰よりも先に扉に辿り着いたラムレッダが、扉を開き皆を急がせる。扉の外には、夢

委の回廊が見えた。バタバタと急ぎ俺達はその扉をくぐった。

「ほら、ラムレッダも!! お前の脱出が肝心なんだから!!」

「わかつてるっ!!」

そして最後、ラムレッダの手をつかんで回廊側へと引き寄せる。悪夢の居酒屋からは、扉の外にまで手を伸ばし尚もラムレッダを連れ戻そうとするしつこい酔っ払いの姿があつたが――。

「絡み酒か? しつこい酔っ払いは嫌われるぜ!!」

「そー言うこと!! 悪いけど、そっちのお酒は美味しくないの!!」

俺とラムレッダ、二人そろって蹴りを入れ酔っ払いを押し戻した。そしてその直後、ラムレッダは夢の扉に手を伸ばし勢いよく扉を閉めた。

「さよなら悪夢!! 私の夢なら、もっと美味しいお酒を用意しときなさい!!」

バアアアンツ!! ――激しく音を立て、夢の扉は完全に閉じられた。

かくして、俺達はラムレッダの悪夢を抜け出したのであつた――。

ビューティ腐ルドリーマー

一 睡眠見守り隊

——団長達がラムレッタを救出した頃の事、現実にて。

「だ、大丈夫でしょうか……まだ誰も目を覚ましませんけど……」

エンゼラの医務室では、眠りについた団長達の帰りを待つコンスタンツィア達が不安そうに眠る団長達を見守っていた。

現実にいる彼女達は、夢の中にいる団長達の状況を知る事も出来ず、そして手を貸す事も出来ない。

「何も出来ないなんて、とことんもどかしいです……」

「ミンミィ……」

共に見守るブリジールとミスラ。大人数で夢の世界に行けないからとは言え、団長達を助けにも行けない現状に不安だけでなく苛立ちを募らせた。

「……ダガ案外ウマクイッテルカモシレンゾ」

「え?」

「見テミロ、ラムレッツダ達ノ顔」

だが一人ティアマトが悪夢に囚われ眠るカリオスト口達の僅かな変化に気づいた。コンスタンツィアは、ティアマトに言われじつとカリオスト口達の顔を見てみる。するとどうだろう、確かに僅かであるがその表情が穏やかになっていくようにも見えた。

「モシカシタラ悪夢カラ抜ケ出シタカモシレン」

「なら団長さん達も!」

「多分無事ダロウ。ソナナ軟ナ奴ジャアナイカラナ」

「け、けどそれなら……後は」

悪夢に囚われた内の一人、最初に悪夢を見たルナル。彼女だけはまだ死んだように眠り続ける。果たして彼女の方は、今夢の中でどうなっているのかブリジール達には、想像がつかない。

「だ、大丈夫……だよ……!」

だが一人、ルナルの傍から離れず見守るセレストだけは不安を見せない。

「団長達が……絶対ルナル先生も、みんなも助けてくれるから……」

「セレストさん……」

「だから、大丈夫だよ……!」

セレストは、ルナル達を助けに向かった団長達を信じていた。何よりもルナル自身が悪夢から目を覚ますであろうと信じている。

「それに……団長には、『秘策』あげたんだ……眠る直前にね……」

「秘策？ ナンダソレハ？」

「ひ、秘密だよ……だから、秘策だもん……」

自信ありと言った様子のセレスト。彼女の言う秘策とはなんぞやと不思議そうに顔を見合わせるティアマト達。

「が、頑張つてルナル先生……ま、まだ見本市……一緒に行つてないもん……夢で終わらせちゃ駄目だよ……！」

きつと自分の声も聞こえていると信じ、セレストは眠るルナルへと声をかけ続けた。

■ 二 ほんとにほんとにほんとにほんとにラムレッダ

■ — 夢の回廊。ラムレッダの扉前。

予想外のラムレッダ分裂などの事態を受けながらも俺達は、ラムレッダの悪夢から脱出する事ができた。酒の臭いが充満する空間から出てホッと一息である。

「ふい〜……。息しても酒臭くねえや」

「僕まだちよつと鼻に残ってます……」

「オイラも流石に気分悪くなりそうだったな」

強烈なアルコール空間でモルフエ君は顔をしかめ、B・ビイも若干気分を悪くしたようだ。何時の間にやら通常形態に戻っている。

「まあ全員無事に出て良かったよ」

「確かに全員無事だな。と言うか、増えたんだが？」

俺の言葉に対し、カリオストロが呆れた様子である集団を指さす。そこにいたのは、合計五人の同じ顔。

「助かって良かったわ、ラムレッダ!! 本当に!!」

「レダ美達のおかげよ!! 本当にありがとう!!」

俺達が助けたラムレッダ、そしてその彼女から生まれたと言うレダ美、ラム子、レム代、羅無。俺命名「名前のラ行ややこし」シスターズである。

「それにこれで私達勢ぞろいね!」

「今こそ真のラムちゃんズ!!」

「いやーにぎやかでいーねー」

「ラムレッダ……たす、か……よか。お。うえ。えええ……っ!?!」

「耐えよレム代。空気を読め」

ラムレッダを中心に集まるラムちゃんズ。傍から見ると本当になんだこの集団。

「団長君、みんなも改めてありがとう!!」

「それは気にしなくていいけども……ラムレッダ?」

「なあに、団長君?」

「君性格変わってない?」

悪夢の中では指摘する暇もなかったが、脱出した今いい加減聞いておきたい。ラムレッダの性格が変わりすぎである。活舌も良くて足取りも悪くない。

「あ、ああ……これは、ね? そのお……」

「これじゃ普通のシスターじゃないか」

「ふ、普通のシスターだよ私は!? ……元々」

「実はラムちゃんズの一人で、本人じゃないとかないよな?」

「ししし、失敬な!」

俺の発言にショックを受けているラムレッダだが、やはり普段のイメージと違いすぎる。

「確かに……こんなラムレッダ見たことねえな。にやあにやあ言わねえし、嘔吐いてもねえし」

「オレ様が仲間になる前からずっと『そんな風』だったんだろ？」

「うん、酒瓶手放したのだから見て事ないよ俺」

「オイラも」

「見なさいラムレッダ、あなたの普段の行いが団長君達に不信感を与えてるわ」

「あーん、ひどい!?!」

「にやはー自業自得だねー」

更にシヨックを受けるラムレッダ、レダ美さん達にさえ言われている。だが、本当に違和感スゴイからしかたない。ほぼ別人である。

「ほんとにほんとにほんとにほんとにほんとにラムレッダだよ!! 居酒屋で団長君の頭酒瓶でぶってシチューに入れたラムレッダだよ!?!」

「改めて酷い出会いである」

「それはごめんなさいでしたあーっ!!」

流れるような腰を曲げての謝罪。なるほど、この感じはラムレッダである。

「(笑) 団員の空気がある。確かにラムレッダだ」

「判断基準!?!」

「シスター(笑) だったろ今まで」

「あひいん、否定できない……およよ……」

酔っぱらって詠唱魔法嘔吐して使えないシスターなんて（笑）で十分である。

「団長君、これが『素』なのよ。本当にラムレッダの素面」

「普段からこうあつてほしいものである」

「素直な感想だにや〜」

「言われておるぞ、ラムレッダよ」

「はい……面目ないです」

酒を飲まない、酔っ払わない。たったこれだけで、これほどに違う。人間とは、酒とは実に恐ろしきものである。

「とりあえず……夢の世界だから素面でいられた、というか戻れたわけ？」

「うん、多分そうだと思う。悪夢の中じゃ、ただ酔ったつもりだったわけだし」

「ならさつき使ってた拳法みたいなのは？」

「あれは……確かだいぶ前、お父さんが使ってたのを見て覚えてたと言うか……」

酔っ払い共相手に使った拳法に関して聞いてみると意外な答えが返ってきた。

「親父さん拳法家なの？」

「ううん、めっちゃ厳しいけど聖職者だよ。めっちゃ厳しいけど」

どうやら父親に苦手意識があるらしい。余程聖職者として厳格なのだろうか。

「そもそもドラフだから腕つぶしは強いんだ。けどなんかああ言う拳法みたいな動きも

してただけど……もしかして、一子相伝な感じだったりしてね」

「まだやれる感じ？」

「見よう見まねだけど多分」

「……現実では？」

「自信ないです!!」

きつと「(酔って動けないだろうから)自信ないです!!」って意味で受け取るほうが良いのだろう。

「ほろ酔い程度なら大丈夫だろうけど……」

「ほろ酔いで済むの？」

「へ、へへへ……」

「まあ現実の方は、現実戻ってから考えるよ。今はまだ……おや？」

次にやるべき事に向けて移動しようとしたが、俺達が入り出したラムレッダの悪夢への扉が淡い光を発し出した。

「モルフエ君、これはさつきと同じ……」

「はい、ラムレッダさんの悪夢が消えていきます」

「……主を失って、ただの夢になる。覚めれば消える……ただの夢」

カリオストロの時と同じように消える扉、そして悪夢。ヴェトルちゃんの言葉通り、

あの悪夢は夢となって消えるのだろう。

だが、今回はカリオストロの時と少し違う事があった。

「……んじや、あとは頑張りなさい。ラムレッダ」

「げえ!? ラ、ラムちゃんズ!」

「皆さんなんか薄くないっ!」

レダ美さん達ラムちゃんズの皆までも光を放ち消え始めていた。

「私達はあなたの悪夢だからこそ、存在していた。だから悪夢が消えれば、私達も消えるわ」

「ようは、手助けはここまでってことだねえー」

「そ、そんな……けど」

「か、悲しまな……い、でええおええ……」

「暫く我らの助けなどいるまい」

少しづつ消えていくレダ美さん達。彼女達は、ラムレッダに近づき、そして手をとった。……レム代さんだけ、嘔吐してるためもたれ掛かるようにしてるが。

「それに消えると言っても、あなたに戻るだけ。私達はあなた自身なんだから」

「どうせ酔ったらまた会えるしさー」

「レダ美、ラム子……」

「ラムちゃ……ズは……、ずつと……いつしよ……えヴお!？」

「貴様が酒を飲む限りな」

「レム代、羅無……レム代は、ほんとに大丈夫なの?」

「だいじよ、ヴあな……い……から、先に……さよなら……う、うえおお……うヴ——」

レム代さんの口が一瞬膨れこの場の全員が「ヤバい」と思った瞬間、彼女は光の粒子となつてラムレッダの中へ消えた。

「よかつた、夢の中まで虹を見る羽目にはならなかつた」

「今頃ラムレッダの中で思う存分吐いてるな」

「嫌な言い方やめてB・ビィ!？」

完全に吐く寸前でラムレッダのへ戻つたので間違ひじゃないが、B・ビィの例えに本気でラムレッダは嫌がつた。

「最後までレム代はレム代ね……けど、だからこそラムちゃんズなんだけどさ」

「あれもラムレッダの一面だよねーにやははは〜」

「あまりにも身に覚えあるから反論できない……」

「ラムレッダー肩ひじ張らず程々がんばりな。んで、酒も程々に。そんじや、僕もさいにやら〜。にやははは〜——」

続いてラム子さんが笑いながらラムレッダの中へ消えていく。

「ラム子の言う通り、お酒は程々に。団長君達に迷惑かけちゃ駄目よ?」

「あは、あはは……自分に叱られちゃうとなあ」

「つまり文字通り『自制』しなさいってこと。それじゃ団長君、みんな、会えて良かったわ。機会があればまた会いましょうね——」

レダ美さんが俺達にも手を振ってラムレッダへと消えて行く。そして最後には——。
「……ラムレッダ、レダ美達の言葉もしかり、だが道楽あつての人生よ。精進せい、悪夢の酒に惑わされぬよう」

「こ、心がけます」

「くはは……っ! ならば良い。貴様が飲む酒は、我らの飲む酒。今度はちゃんと美味しい酒を飲め」

「それは勿論! 美味しく楽しく、それがモットー!!」

「うむ……」

羅無さんは、他のみな同様ラムレッダの中へと消えようとする。

が、不意に立ち止まりラムレッダの耳元に口を寄せていく。

「——忘れるなラムレッダ、悪夢で貴様が酔えていない事も、苦しんでる事も、あの小僧は気付いてくれたぞ」

「……へ?」

「良い団長よなあ。睡でもつけておくがよかろう」

「はいいつ!？」

「ふははは……っ!! また宴で見えようぞ——」

なんか高らかに笑うと羅無さんは、ラムレッダの中へと消えていった。

最後の言葉は、ラムレッダに向けたものらしく、俺達の方では聞き取る事は出来なかった。ラムレッダの反応からしてなんぞ変な事言われたらしい。

「羅無さんなんて?」

「へっ!? いや、いやいや……いやゝなんでもないにやあつ!？」

「ちよつと戻ったぞ」

「戻ったな」

何を焦ってるのかは知らないが、若干俺達の知るラムレッダの口調に戻ってきた。主にラム子さんとレム代さんが戻ったからだろうか? なんかホツとする。

そしてホツとしたなら次の事。俺達には、まだまだやることがあるのだ。

残る扉は、あと一つ。どんな悪夢が待つかわからぬ魔の扉、ルナルさんの悪夢へ続く扉であった——。

■
三 三つ目のドア

■
目の間にあるこの場で最後に残ったルナルさんの扉。おそらくルナルさんと出会った時に招かれた家で見た彼女の私室の扉だろう。

扉からこの奥が彼女の私室、あるいはそれに近い室内なのはわかる。尤もそれが現実の通りとは限らない、何よりもどんな悪夢であるかが問題であるが、それは入ってみないとわからないのが辛いところである。

「茶化すつもりはねえが、やっぱ趣味に関してじゃねえか？」

B・ビィがルナルさんの夢に関して予測を立てる。俺もそうであろうとは思っているが、どっこい必ずしもそうとは限らない。

「最初の悪夢を見た時のルナルさんは、なんて言うか『普通の人』だった。まあ色々予想出来なくもないけど……」

「いえ、あまり予想を立て過ぎると却って混乱するかもしれないですね」

悪夢についてあまり予想を立てるのは、あまり良くないだろうとモルフエ君。

「僕自身ラムレッタさんの悪夢で予想も何もかも崩れました……。夢だからとかじゃなくて、今回は常識が通用しなさ過ぎです……。団長さん一人じゃ頭グルグル巻きで戻りし……かと思えば、悪夢にご本人登場 with 五人とかなんなんですか？ なんかのコントですか、コントなんですか!？」

「モルフエが荒んじやった……」

「ラムちゃんズで理解を超えたか」

「な、なんかごめんにやさい……」

だんだん声を荒げるモルフエ君。経験した事の無い悪夢に色々理解を超えてしまったようだ。肩で息までして落ち着こうとするモルフエ君。なんだが大変申し訳ねえ。

「……す、すみません、取り乱しました」

「いや気持ちはわかる」

「いえ……それより、一つ分かる事があります。ルナルさんは、皆さんの中で最初に悪夢を見た人です。そして一度目を覚まし、そして二度目はそのまま……つまり、一番眠りが深い状態にいます」

「ルナルさんが、悪夢にいた時間が一番長いわけか」

「そうです。ですのでこちらの存在は勿論、言葉でさえ中々認識されない可能性があります」

ルナルさんは、俺とセレストが目撃した最初の悪夢を見た時でさえ俺達をの声もすぐ届かず記憶も混濁していた。最早目を覚ます事すら出来ていない今、果たしてどんな悪夢が待つというのか。

「……けどとりあえず、もう入ってみるしかないです」

想像できない悪夢に対し、思わず「ゴクリ……」と唾をのんだ俺だったがモルフエ君は、すぐなんか緩い感じになった。

「急にいい加減に……」

「だってなんかもう、团长さんなら何起きても大丈夫な気がしてきました僕」

「その通りだぜモルフエ」

「こいつだいたい何の事だいたい何とかするからな」

「しちゃうよね」

「なあーんで君達が自信満々で答えるう？」

異議を唱えたいモルフエ君の言葉に俺より先にB・ビー達が答えるのはなぜですかねえ？　と言うか、モルフエ君遠慮無くなってきたな。

結局議論の意味が無いのでこのまま扉に突入することとなる。出たとこ勝負のルナルさん救出作戦である。ずっと出たとこ勝負とか言っただけじゃないのだ。

「それと皆さん……ルナルさんを悪夢から解放したらオネイロスも何か反応するかもしれない、そちらも用心してください」

現在影すら見えぬ星晶獣オネイロス。こんな摩訶不思議空間で不意打ちをされてはたまらないが、姿を見せない以上対策も難しい。

「やれやれ、この世界にいるだけで、既に奴の腹の中にいるような気分だったのにな」

「団長さんじゃ……お腹壊すかも、ね？」

「ハツハー……そりやどういふ意味かなヴェトルちゃん？」

「ふふ……うふふふふ……」

ヴェトルちゃんは、俺を見て微笑むのみ。からかわれたのかもしれない。

「はあ……それじゃ最後の扉、頑張つて行きましようかねえ」

ドアノブを回し、思い切つてバツと開ける。そして、俺達の目に飛び込んできた光景は——。

「なんだ……これ……」

扉の中には、やはりルナルさんの私室があつた。だがそこに広がる光景は、床一面に散らばる——最早敷き詰められたと言つても良いほどの量の「折れたペン」、そして「破けた白紙の紙」。

そして、その薄明りの中部屋の中心で膝を抱えるルナルさんの姿だつた——。

■ ■ ■
四 折れたペン、破けた紙、挫けた心

果たして耽美絵師を目指した彼女——ルナルは、如何にして悪夢にのまれたか。

ただ地味な少女でしかなかったルナルは、古本屋で出会つた絵物語を見てからそれ

に運命を感じ取り、自然と耽美絵師を目指した。その耽美絵の基となった名作『ポポルサーガ』との出会いも彼女の人生を大きく変えただろう。

自分も絵を描きたい、ポポルサーガの絵を、耽美モノを——そう思った彼女は、気づけば絵を描いていた。そのための勉強をした。

幼き故に耽美モノが買えないならば……と、人体図鑑などを両親に買ってもらい、それに載る「そういうところ」を食い入るように見て楽しんだ。

そして時が経ち、絵も十分に巧くなった。少なくとも図鑑の挿絵などに載せられる程の腕前を持った。特に魔物の絵に関しては、評判が良く売れっ子と言っても良いほどだった。

彼女自身「十分準備は整った」と思った。魔物絵師として挿絵を描く傍ら、耽美モノの練習もした。ネームも棚に収まらないほど描いていたのだ。

彼女は意を決し本の展示会であり即売会でもある書物見本市へ参加を応募、そしてそれは見事通った。

気持ち舞い上がるままに彼女は、本を描き始めた。そして筆は大いに進んだ。頭に描いていた物をこれでもかと言うほど描いた。

原稿を入稿し、そして無事印刷。仕事でためた旅費で見本市へと赴き、そして存分に祭りを楽しみ帰る——はずだった。

「——絵柄が向いてない」

それは、彼女の本を手に取り数ページ読んで買わず去っていった見知らぬ誰かの言葉だった。

悪意とは違う純粋な意見であつたらうが、それは初めて見本市に参加したルナールにとつてあまりに厳しい生の意見だつたのだ。

更にそれ以降、本を買うどころか手に取る者すらおらず時間だけが過ぎ去つた。まるで孤島で遭難した気分だつた。

意気揚々と参加した見本市。しかしルナールは、自分が酷く場違いだと感じるようになった。

そしてそのまま彼女の見本市は終了、本の在庫を抱えたまま帰宅する。気が付いたら全ては終わり家に戻つていた。

家に戻つてからも暫し呆然として、そしてふと……自分の描いた本を手にとつた。敬愛しバイブルといえるポポルサーガを基にした耽美モノの絵物語。渾身の出来と思つた作品だ。だが、今見てみるとなんの感情も湧かなかつた。

そして頭にあの言葉が繰り返して浮かんた。

「——絵柄が向いてない」

言われなくてもわかっている。癖なのだ、自分の作風なのだ——だが、ハッキリ言わ

れた言葉は、まるで呪いのようにのしかかった。たった一言があまりにも重かった。

ならば、と。彼女はなるべく絵柄を変えて絵を描いてみた。なるべくマイルドな絵柄を目指す。

そして時間は流れ別の見本市。最初より少し小規模のものを選んだルナールは、わずかながら余裕をもつて参加してみた。

だが、結果はどうであつたらうか。彼女の本を手に取る者もいたが買つていく者は皆無であつた。

意気消沈した彼女は、また在庫を抱え家に戻る。そして考えた——やはり絵柄だろうか？ そのように。

ルナールは、また少し絵柄を変えてみた。慣れない絵柄だがこれならば、と彼女は思う。そして三度見本市へ参加、描いた本を並べるが——結果は変わらなかつた。

何故なのかとルナールは、酷く悩んだ。売り上げの問題ではない、なぜ誰も私の絵を、耽美モノを読んでくれないのか——その理由は、やはり絵柄なのだろうかと思ひ至る。

それから彼女は、更に人に受け入れられるような絵柄を目指してみた。

——だが違う、なにかが違う。筆がのらない、ペンが進まない。強引に変えた絵柄は、むしろより歪な絵柄になつてしまった。

更に別の絵柄を目指す、がやはり違う。更に絵柄は歪になつた。

その後も何度も絵柄を変えてみる。だがどう描いても絵は歪になるばかり。何度も何度も、何度も何度も……何度も描いた。歪な絵を。

「なんなのよ……何よこの絵は……っ!!」

そして何時しか魔物絵すら歪になり、彼女本来の絵も描けなくなっていた。

「“向いてる絵” ってなに!? 受ける絵って何よ!? こんなのもう私の絵じゃない

……私の絵は、絵は……っ!」

憧れた世界はこんな風ではなかった。

「ポポルサーガ……楽しい、面白いわよ……そうでしょう私!?」

目指したものはこんなモノではなかった。

「……ほら、有名作家の耽美モノよ!! こんなのを描いてみたいって……思ってたでしよう!?! ずっと、ずっと思ってたじゃないのお!?!」

たった一言の言葉は、こうもあつげなく、そして簡単に彼女の心を折ったのだ。

——以来、ペンを握っても、紙を見つめても、そこに描くべきものが浮かばなくなつた。大好きだった耽美モノや、ポポルサーガを読んでも創作意欲がわかなくなつた。

そして彼女は、今日も自分の部屋の中で床に座り込んで膝を抱える。最早 “いつ頃からそうだった” かは、彼女自身でもわからない。とにかく “ずっとそうだった” のだろう。しかし折れたペンと破けた紙の数が彼女の苦悩と時の長さを表した。

何も描けず、何も楽しめず、そして未練だけが残り……ただ虚無感のみを味わう日々。それが、今のルナルだった。

楽しめた事が楽しめなくなった人間は、あまりにも脆いのだ――。

■ ■
五 届かぬ声を届けるために

「おいおいおおい!? ルナルさん、ルナルさんっ!? ねえってばちよつとお!?」
「ルナル、起きてっ!! 団長君達が来てくれたわよ!!」

夢の扉をくぐり異様な光景を前にした俺達。床を埋め尽くすペンと紙のゴミの中でうずくまるルナルさんを見つけるが、案の定まともな様子ではなかった。

ラムレッツ達と一緒に声をかけても、肩をゆすつても、なんなら軽く頬を叩いてみてもピクリともしない。反応がなさ過ぎて不気味に思うほどだった。

「悪夢に浸かり過ぎたんだ……。殆ど心が閉ざされ始めてる……」

ルナルさんの様子を見たモルフエ君が、酷く深刻そうに呟いた。

「そりゃ、つまりどう言うこつたい……」

「悪夢に心が負けそうなんです。そうなったら肉体じゃなく心が、精神が先に死んでしまいます……」

「そんなん死んでると変わらんじゃんか!？」

想像以上に事態は切迫していた。今すぐルナルさんを正気に戻し悪夢から引き揚げ正しい記憶を思い出してもらわなければ彼女自身が悪夢の住人になってしまう。

「ルナル、随分衰弱してるみたい。回復魔法とかかけた方がいいかしら……今の私なら魔法も」

「いえ……多分無意味です」

死人のようなルナルさんを見てラムレッダがヒールか何かをかけようとしていた。だがルナルさんの様子を見たモルフエ君は、首を横に振った。

「どれだけ回復魔法をかけても、ルナルさん自身がそれを認識しなければ意味はありません……いや、そもそもルナルさんは、弱っていない」はずなんです」

「弱ってないって……どういう事?」

「この悪夢のせいです。ラムレッダさんが自分が『酔ってる』と思い込んでたように、ルナルさんも、『衰弱してる状態』だと思い込まされて……」

「思い込みで……ここまで? そんな、私より酷いじゃない……」

もはや思い込みや暗示の域を超えた悪夢の影響。ほんの少し前まで自分自身もそうであった事実も相まってその恐ろしさにラムレッダは、顔を青くしゾツとしていた。

そして事実異様な睡魔や記憶の混濁など現実にも悪夢は影響を与えだしている。

「だが起こそうにも生半可な刺激じゃ効果がねえ。どうすんだ……」

「ガツンとデカい目覚まし使うしかねえんじやねえか？」

「んなもんどこにあるってんだよ……」

カリオストロとB・ビイの会話を聞きながら俺は考えた。殆ど外部の声が聞こえない程。今のルナルさん〃は弱っている。肩を揺らしても反応が無いため肉体への刺激も鈍くなってるだろう。

そしてこの悪夢には、ルナルさん以外の存在がない。カリオストロやラムレッダの時は、それぞれ〃妹〃と〃酔っ払い〃、更には〃ラムちゃんズ〃が居た。だが今ここには悪夢の住人が誰一人いないのだ。悪夢の欠片すら姿を見せない。登場人物の少ない悪夢は、この世界の詳細を知るのを困難にさせる。あるいは、もうそんなモノが必要無い程ルナルさんが弱ってる……悪夢として完成されている証かもしれない。

「……アレ〃を、使うしかないかもしれん」

早急に、そして確実にルナルさんを正気に戻す方法。たった一つ思い当たるその手段。俺の眩きに対しカリオストロが顔向けた。

「おい、アレってのはなんだ？」

「実は寝る前にセレストからちよつと……が、正直使いたくない。けど確実に……ルナルさんを正気に戻せると思う」

「だから、そりやなんだってんだよ？」

「何って言われると、まあ……これですが」

カリオストロに急かされた俺は、懐から一冊本を取り出した。カリオストロは、ギョツとしてその表紙を見た。

「お前……それまさか」

「うん、ルナルさん直筆のやつ」

「そんなもん何時の間に……」

「寝る直前にセレストが渡してくれた。身に着けてれば夢でも持つてるだろうからってな」

一人の半裸の青年がもう一人の半裸の青年を後ろから抱きしめる表紙からして濃いく内容を覗かせるルナルさんの本。セレストの要望で描いたほぼ下書きで趣味のものとの事。

「とは言え内容は出来てて、一応オチまである……あと全年齢向け」

「んなこたあ聞いてねえ。お前……それで何するつもりだ？」

カリオストロは、それはそれは如何にも「嫌な予感がする……」と言った様子で俺を見る。多分彼女の予想通りの事を今から俺は、この場でやるつもりだ。

「許セルナルさん。これもあなたを助けるため……」

俺は覚悟を決め手に持った本を開いた――。

■ 六 邪眼音読黒歴史

「……………」

悪夢の中、ルナルルの心は、虚無感だけに支配されていた。

重ねた挫折は、彼女の気力を奪い完全な無気力とした。だが今や何をするにもやる気は起きず、食事すら億劫になった。

ペンを握る気力も起きない。原稿に向かう意欲もわかない。ならば自分は、死んでも同然とさえ思った。そしてそのまま本当に死んでしまうのだろうか……。

そんな事をふと思つては、すぐさま思考さえ虚無となる。闇に闇を重ねた深淵に飲まれるかのような虚無感。いつそそれを心地良いとすら感じた。

耽美モノへの憧れも、創作への熱意も失い、ただ消えるのみの小さな火のような存在。そうである事を受け入れたルナルル。

悪夢と言う暗闇に溶ける感覚を味わいながら、彼女の思考は完全な無となり、そして命さえ闇へと消えていく――。

「――待てよ。こんなところで終わるなんて残酷じゃないか?」

——かと思われた。

突如ルナールの耳に彼女に語り掛けるような声が聞こえてきたのだ。

「〃——その時、マキリはポポルを壁際まで追い詰める〃」

「……………」

「……………ほら……………次、ポポルの出番よ」

「早く、ポポルのセリフ……………続けて」

「おい……………やっぱ、言わねえとダメか……………せめて役変えさせろ、オレ様のキャラじゃねえ……………」

「ジャンケンで決めようって言ったのあんたじゃん……………！ 俺だってマキリ恥ずかしいんだから……………！ ほれ、時間ないんだから……………早く……………」

「あーもう、わかったよ……………はあ……………——〃よしてくれ、もう充分なはずだろ〃」

「〃いいや、駄目だね。こんなもんで満足出来るわけないだろ。俺も、アンタも……………」
更に聞こえてきた別の二つの声。

「〃バ、バカ言わないでくれ！〃」

「〃へえ？ ならなんでもっと強く拒まない？〃」

「〃——恥じらうポポル。だがマキリは、更に彼に迫る。二人の距離は、互いの吐息がかかる程に縮まった〃」

耳に入っても気にも留めなかったはずの外部の雑音。だがその声が語る内容にルナールは、とても覚えがあった。

「それは、君が強引だから……」

「その俺の強引さを理由にしたいんじゃないのか？」

「なにを……っ！」

「おっと、逃がさないぜ」

「ああっ?!」

「——隙間から逃げようとしたポポルの肩をマキリは、左手で押さえつけた」

ルナールの闇に沈んでいた意識が急速に浮かび上がった。感覚全てがクリアになっ
ていく。

「は、離してくれ……」

「いいやダメだね。俺は、強引……だからな」

「——マキリの情熱を秘めた視線は、澄んだポポルの瞳を見て離さなかった。そのギリギリとした視線を受けてポポルは、戸惑いと同時に何かを期待する気持ちが芽生えるのを感じていた」

「なあ、いい加減ハッキリさせよう。俺は、お前にとってなんなんだ……?」

「……友達だよ。当たり前だろう」

「違う、そんな答えを聞いてるんじゃない」

「他になんの答えがあるって言うんだ！」

——あれ？　これ、まさか「耽美モノ」？　って言うか、なんかすつごい覚えある内容なんですけど？　どっかで読んだ？　あれ？

聞こえてくる会話、そのシチュエーションは、二人の男性が痴話喧嘩のようなやり取りをしているようであり、更に何故かそれに覚えのあるルナールは、その情景がありありと想像できた。

「お前だつてわかつてるはずだろ」

「そんなの、言えないよ……」

「悲しいな……俺は言えると言うのに、ハッキリと……」

——いや、いやいや……覚えあるっていうか超心当たりあるんですけど？　なんなら自分で作った……え、これわた、私が描いたやつ？　メイドイン私？　描いた？　いや待って、だつて……「何時」描いたの？

意識が戻りだしたルナールは、悪夢の記憶と現実の記憶が入交そして正しい記憶へと修正され始めた。

「俺はいつだつて思いを隠さなかった。はぐらかしたのは、ポポール……お前だけさ」

「ち、違う……！　誤魔化すつもりなんて僕は……っ！　」

「じゃあわかるだろ！俺にとってお前は、もう友達なんかじゃ我慢できないのさ」

「君、それは……」

「友達のままでなんて……それじゃ収まりやしない。この気持ちはな」

「マキリ……」

——あ、描いたわ。私描いてる……。誰かにヨイショされて調子乗ってホイホイ描いて——誰か？誰かって……違う、セレストよ。そうよセレストにお願いされて描いたんだ。それも結構最近……え？それ読まれてる？朗読？

ルナールの脳裏には、自分の部屋——エンゼラでの自室でセレストと二人語らいながら今読まれている本を描く光景が思い浮かんだ。そしてそれが今日の前で朗読されている事に気が付きいた。

「……わかってるさ、お前の気持ちもそれを言えない理由も。けど俺は、どうしても聞きたいんだ。お前の口から、お前の気持ちを！口に出して伝えてほしいんだよ！」

「……ぼ、僕だつてっ!!」

「——ポポルの手が、自身を壁に押さええつつけるマキリの手へと伸び重なる。それは自然と手の平を合わせ、そして指をからませ強く互いに握り合った。もう、離れたくはないといわんばかりに」

「僕だつてそれが言えれば、君にこの気持ちを伝えられるならどんなに……!!」

「——ちよ、ちよ……ま」

擦れた声だが、ルナールの口から声が出てきた。制止の声だ。聞こえてくる声の主達を止めるためのもの。

「『なら言えよ!!』言ってくれ!! ためらう必要なんて無いはずだ!!』」

「『わかつてくれ! 僕と、君は……僕達は……!!』」

「ちよつと……?」

「『——ポポルとマキリ、二人は例え互いに想い合っても共に道を歩む事は許されない運命にある。だが! この時燃え上がる友情を超えた思いは、最早その運命でさえ抑えられない程に!』」

「ちよつと待つ……え? なに? あれ、どこ……つて言うか、団長? それにカリ

オストロとラムレッダ……?」

「『国は関係ない!! これから何があつたとしても、俺達の気持ちは嘘にはならないだろう!!』 少なくとも、今のこの気持ちは……っ!!』」

「いやそれより待つて……待つてまで……何でみんなそれ読んで……ねえやめて?

ね、ちよ……やめっ!」

三人の声にも熱がこもる。いよいよ場面はクライマックスへと近づいてきたのだ。それと同時にルナールの表情は、みるみる生気が戻り始める。それどころか焦りさえ見

せ出しはらはら汗を流し顔を上げた。

「僕は……僕は……っ!!」

「止め、とめ……ストツ!? ストオ——ツプ!?」

「答えてくれポルツ!! お前にとって、俺は……!!」

「——マキリの想いに応えられるのは自分しかいない、ポポルは決意した! たとえ、

自分たちの未来が、どれ程残酷だとしてもっ!」

「ちよつとお三方あつ!? ねえ、止めてお願い止めて、死ねるから!? 羞恥がやばいから

!?! ほら目え覚めてる!! 状況わかんないけど私もう気づいてるう!」

「マキリ……僕は」

「やめてっ!? ほんとそれ以上は……」

「僕にとつて君は……!! 君は——」

「やめ……や、やめてええああああああ——っ!?!」

最後のキメ台詞が言われようとした瞬間ルナールは、叫び声をあげ立ち上がった。その姿は、既にあの死人のようなものではなくなっており、常に創作への熱意に溢れる彼女へと完全に戻っていた。

「キエアア——っ!?! 描いた本を本人の目の前で朗読しないで!?! 死んじゃうでしょ!?!

心がっ!?! ぐええ——っ!?! その場のテンションで描いたのよっ!?! 盛り上がった勢

いななのよっ!! だって深夜テンションだったんだもんっ!! 邪眼が私をそそのかしたのよっ!! 自分で聞いてて鳥肌立つわよっ!! ……嫌いじゃないけどねっ!!」

「はい成功っ!! 終了、終わりっ!!」

「……へ？」

立ち上がったルナルが立ち上がり叫ぶと朗読は止んだ。

「ほんとに目え覚ましやがった……」

「効果あるものなのねえ」

叫ぶだけ叫んだルナルを見て朗読を止めた三人——団長、カリオストロ、ラムレッツだ。

「あ、あのお……もう終わりました？」

「お……目、覚めてるね……」

「うん、終わったからもう耳いいよB・ビィ。お子さんには、刺激が強いからねえ」

「あいよ」

そしてヴェトルとその耳を塞ぐモルフエ、そして更にモルフエの耳を塞ぐB・ビィ。

「いやーどうなるかと思っただけ……まあ上手くいつて良かったなあ。うん……ほんとに、うん」

「……だ、団長？ これはいったい……？」

自分の状況を理解できないルナールは、キョトンとした様子で団長を見た。その視線に若干気まずそうな団長であったが、なにか意を決し彼女に一冊の本を渡す。

「いやなんだあ……うん、まあルナールさん。色々説明したいことはあるけども……まあなんだ、とりあえずこれ返します」

「これ？」

団長からスツと渡された物をつい受け取ったルナールは、手に取ったそれを見てみる。そこにはモノクロながら気合の入った表紙の絵物語があった。そう、正に今の今まで団長達に朗読されていたルナール作の耽美モノ——『キミと壁あに挟まれて……』が。

「あ、ああ……！」

「え〜とですね。とりあえずそのお……いい作品でしたよう？」

そしてルナールの脳裏には、先ほどの朗読劇の様子が鮮明に蘇った。

「いい————やああああ————っ!？」

再度自分の作品が目の前で迫真の演技で読まれた事を理解したルナールの悲鳴は、悪夢の世界を消し去る程のものであった——。

見知らぬ悪夢

一 目覚めルナール

セレストより授かった秘策（耽美）により、無事（？）ルナールさんを救出した俺達一行。ルナールさんが一時のテンションに任せて描いた本を本人の目の前で読み上げれば、大なり小なり反応するだろうと言う作戦であったが、大なりどころかそれ以上の反応であった。

今までの悪夢の中で一番深刻な状況だったのに、方法自体があまりにも簡単のため「なんだかなあ……」と思わないでもないが、助かったのでOKとする。

んで、早々にルナールさんの悪夢から脱出したは良いが、扉から出てからもルナールさんは、地面で悶絶していた――。

「ああああ……!!」

冷静になったとはいいが、冷静になって自分の描いた本が読まれた事実を再度突き付けられ羞恥で悶えているのだ。

「読まれたあ……!! 目の前で朗読されたあ……!! 悪夢より悪夢だわあ……っ!!」
「いい加減立ち直れよ……」

「ムリイ……助けてくれた以上に羞恥で死ぬう! 恥ずかしっ!! 恥ずか死い……っ!!」

カリオストロが声をかけてもこの調子。余程シヨッキングだったのだろう。

「お前こつちだつて相当恥ずかしい思いしたんだぞ……助けるためとは言え」

「それはありがとすみませんでしたあ——っ!!」

ルナルさんは、カリオストロに向かい深く頭を下げた。

悪夢に捕らわれていたルナルさんを助けるため、大きな声でそれはもうしつかり演技した俺達。この作戦最大の難点は、助ける側もそれなりの羞恥心に襲われる事だろう。だからやりたくなかった。

「けど結構楽しかったわね。カリオストロもいざ始まると演技巧かったし」

「う、うるせえナレーション役!」

朗読の配役は、俺マキリ、カリオストロポポル、ラムレッタナレーション。ナレーション以外は、何れもルナルさんが大好きなポポルサーガの主要人物である。

ぶつちやけ配役は、時間も無いのでじゃんけんで決めた。あまったB・ビイは、教育上よろしく無いと作戦不参加としたモルフエ君の耳を塞ぐ役。

んでまあそれはそれは、とてもとても恥ずかしい——もとい、熱意溢れる台詞のオンパレードなので本当はまだ普通なナレーションを俺もやりたかった。

「セレストも……もうちよつとダメーシ少ない本選んだつていいじゃない……!」

「ダメーシ少ない本あるんですか」

「無いですけど何かあつ!? どれも妄想全開ですけどお!? 全部致命傷なんだけども!?」

「ひでえキレ方……まあ最悪のパターンでの最後の手段的に考えてたろうから責めてやらんでください」

「わかっているけどお……!! 団長だつてあんな場面から読まなくても……!! お子様には聞かせられないでしょっ!」

「いや全年齢向けでしょうがコレ」

「そだけどおーっ!? そだけどちがあうっ!! 私の中では、その後一歩も二歩も進んじやうイメーシなお!! 描いてないけどそう言う展開なのよお……っ!!」

「知らんがな……それにちゃんと耳塞いでもらつたよモルフエ君達は」

ルナルルさん作の耽美モノ。全年齢向けとは言えやはりそこはルナルルさん作。モルフエ君達には、まだちよつと早い。モルフエ君達もよくわからない内に耳を塞がれ要領を得ていないがそれでよいのだ。うん、まだ早い。

「え、えーと……よく分からなかったけど大丈夫です……よう？」

「そだけどお……！」

「ねえ……タンビって、なに？」

「ダメツ！ 忘れてっ!? まだ早いわアナタ達には!! だって私責任持てないもん！
アナタは私みたいに目覚めちゃダメエ!!」

「せ、責任？」

「目覚める……？」

「ルナルさん落ち着いて、どんどん口滑ってる」

「うゝうゝえゝえあゝあ——っ!!」

再び床を悶え転がるルナルさん。創作するつて大変なんだな、色々。

まあなんであれルナルさんが無事でよかった。最悪のケースに比べれば若干、うん
若干心に傷を負ったが、時が癒してくれよう。

「時間も無いんでスマンですがそろそろ立ってどうぞ」

「あう」

いつまでもルナルさんをゴロゴロさせるわけにもいかないの、もう強引に立ち上
がらせる。彼女とていつまでもこうしてるわけにいかないのはわかってるだろう。

「今はとにかく助かった事を喜びましょう」

「うう……」

「セレストだつてルナルさんに怒られるのを承知であの本を俺に託したんですよ。何言われたつてルナルさんが無事に戻ってくれば良い、それでまた絵を描いてくれるなら構わないって思ったからです」

「……うん、わかつてる」

「どんなに恥ずかしくても、大好きだから絵を描いてるんじゃないですか。あのままじゃ二度とペンも握れなかつたんですよ」

「……そうよね。好きだから……そんな、当たり前な理由だつた」

叫ぶだけ叫び、悶えるだけ悶え、やっと平静を取り戻したらしいルナルさん。するとそれを感じ取ったかのように、彼女の悪夢の扉は光の粒子となつて消えていく。

「悪夢がただの夢に戻つてます。もうルナルさんを縛る悪夢はない、失敗だろうと乗り越えられる現実に戻つたんです」

「そつか……そつか。なんだか、むしろスッキリしたかも。うん……うん、なんか靄が晴れた感じ」

ルナルさんは、悪夢に捕らわれていた時とはまるで違う表情だつた。変わったのではない、元に戻つたのだ。

「描きたいものに悩んで挙句に見失う……変よね、今に始まつたことじゃないのに。絵

柄だとか話の展開とか、全部悩んで迷つての繰り返し。納得できた作品なんて数える程度……けど、それでも私は——」

扉が完全に消えていく。悪夢など無かったかのように。

「——絵を描くの。それが私の、好きだから」

二 悪夢のヌシ

ルナルさんの悪夢は消え去り、そして悪夢に囚われていた三人も救出完了。思わずこのまま「帰ろうか」と言いたくなるが、そうは問屋が卸さない。

今回の事件の原因であり、最後に最大の問題。星晶獣オネイロスの存在だ。

「じゃあ俺ちよつとオネイロスは何とかしてから現実に戻ろうと思うけど、カリオスト口達はどうする？ 疲れてるだろうし先戻っても良いけど」

「ちよつと飯食つてく感覚で言うな」

「団長君そんなんだから団長君なのよ」

「星晶獣の波に揉まれた者の末路ね」

そんなつもりは無かったが、そんな風に聞こえたらしくカリオスト口達に呆れられた。みんなしてあんまりな言い方である。

「残るに決まってるんだろ。やられっぱなしは、我慢ならねえ」

「私も何で狙われたのかハッキリさせたいわ」

「それにこのまま帰ってもね。オネイロスって言うのが無事じゃまた同じ事になるみたいだし」

カリオストロ達は、ここに残る事を決めていた。戦力があるに越したことはないので助かると言えば助かる。実際頼れる面々だ。

ともかくオネイロスを探す事にした俺達は、引き続きモルフエ君達の案内で用心しながら夢の回廊を進んだ。

道中悪夢の欠片がまた襲ってきたりするものの、肝心のオネイロスの姿は無い。

「おいおい？ オネイロス野郎は、どうしたんだよう」

「ルナールさんを助けたなら姿を見せるかもと思ったんですが……」

辺りをB・ビーが見渡すがオネイロスらしい姿は、どこにも見えない。モルフエ君も解せないようである。

この夢の回廊、わかっていたが夢に潜み夢を操るオネイロスにとつては、勝手知ったる場所だろう。それに加えて先程から周りの様子も徐々に変わってきていた。

夢の回廊では、カリオストロ達以外の夢に通ずる扉がそこかしこにあった。三人を助けた今その扉事態に問題はないのだが、夢の回廊を進むとその扉の数が減り始めたの

だ。更には、悪夢の欠片の襲撃も減ってゆき回廊内では、俺達以外の声がしなくなる。静けさがかえって不気味であった。

「雰囲気がだいぶ変わったな」

「回廊の深層に近づいてきたんです」

「深層？」

「夢の深層……眠りは、深ければ深いほど……逆に夢を見ない」

モルフエ君達の説明によればこのエリアは、特に眠りが深い者達の深層心理の漂う場所。夢を見ないため夢に続く扉は、あまり現れないと言う。

「実際ルナルさんは、助けるのがもう少し遅ければ悪夢に沈みすぎて扉が消えたかもしれませぬ」

「そうなりや手出しできねえからお終いか……」

「こわあつ!? 想像だけでゾツとするわ……ほんと助かってよかった」

回廊の深層は、ルナルさんがいかに間一髪であったかわかる場所だった。あんな助け方であったが、本当にギリギリだったのだ。

しかしオネイロス、もしや居ないのか? 逃げたか? ——とも思わなくもないが、

俺の経験と夢の回廊に漂う嫌な雰囲気からそれは無いだろうと確信できる。むしろずっと俺達、と言うか俺が見られてるような気がしてならない。

「……なあモルフエ君、そもそもオネイロスは、なんで人を悪夢で縛ろうとするんだ？」
「え？」

ここで少しオネイロスについて考えてみる。なにゆえにオネイロスは、人を悪夢へ縛り苦しめるのか。

「星晶獣の性質か？ 覇空戦争時代、*“そういう風”*に生み出されたからか？ 未だその使命に従ってるのか？ 淡々と機械的に？ それともオネイロスにとってこれは、ただの戯れなのか？」

「どれも考えられる事だぜ」

思いつく疑問を並べていくと、カリオストロが頷いた。

「星晶獣が星の民に生み出された時に与えられた使命、それに従って今なお行動するなんて別に不思議な話じゃない。星の民が居なくなつて解放されたんで好き勝手してるのもあり得る。それに今回被害にあつたのもオレ様達。標的にされただろう夢占いの場には、B・ビイもミスラもいたのだ。無意識に*“空の民”*を狙つた可能性さえある」
「俺もいたんだけど？」

「知らねえよ。影薄いから気づけなかつたんじゃねえか？」

「ひでえ!!」

真剣に考えてたら最後に酷い事を言われた。ともかくオネイロスは、今回の事で何か

目的があるのかが気になるのだ。目的があつて人を襲うのか、天災のように人々を襲うのか。

「今回の件どうも俺は、オネイロスが俺達を偶然襲つたように思えないんだ」

「それつて……まさか、初めから団長さん達を狙つていたと？」

「確証はないよ。ただ何故俺達だったのかが気になる。やっぱり夢占いが切つ掛けなのか……」

「……で俺は、夢の回廊に入る前にモルフエ君から聞いた彼等自身の話を思い出した。

「モルフエ君、確か君達の村の人間も同じ被害にあつたんだよね」

「ええ、僕と姉さん以外全員眠つたままで……」

「その時何か前触れのようなものはなかった？ 夢見の悪い人が居たとか君達が夢占いをしていたとか、そう……何か今回との共通点とか」

「共通点……えつと——」

「特に無かつた」

モルフエ君が質問に答えようとしたが、割つて入るようにヴェトルちゃんが答える。あまり強引な事をしないと思つていたので少し驚いた。それはモルフエ君もそうであつたように驚いた様子でヴェトルちゃんを見る。

「姉さん？」

「無かった……別に、何も……でしよ、モルフエ」

「あ、うん……うん、確かに……そうだけど」

「……そうか。何かオネイロスについてわかればと思っただけど仕方ない」

「だがお前ら村の人間助けるためって言うが、何時からそうなんだ。その村の方も今どうなってる？」

「それは……」

「確かにそんな奇妙な事件あれば耳に入りそうよね」

「騎空団なら猶更情報集まるだろうし」

「えっと、そうですね……えっと……えっと………？」

続けてカリオストロが質問をした。さらにラムレッダとルナルさんも……だが奇妙な事にモルフエ君は、直ぐに答えない……と言うよりも、自分でも「わからない」ために答えられないような様子だった。

どうもおかしいと思ひ俺もカリオストロも顔を見合わせる。

「……じゃあ村と島の名前は？ 聞いた事あるかもしれない」

「えっと、僕達の故郷の村は——」

だが、モルフエ君が質問に答えようとしたその時だった。

「キヤア……ッ!？」

突如ヴェトルちゃん悲鳴が響く。俺も皆も一斉に声のほうを向くと何時の間にかヴェトルちゃんが巨大な影につかまっていたのだ。

「姉さんっ!? あれは、まさかオネイロス……ッ!?」

「あいつがか!?」

「い、いつの間に現れたのよ!?」

なんの前触れもなく表れたオネイロスらしき影。だがその正確な正体を確かめるよりも、ヴェトルちゃんを助けねばならない。俺達は急ぎオネイロスを追ったが、それを遮るように大量の悪夢の欠片が現れ俺たちの行く手を阻んだ。

「うおおっ!? こいつらなんだって急にっ!?」

「オネイロスが呼び出したのかもしれない!!」

こうしてる間に悪夢の欠片は、俺達を取り囲むように更に増えていく。その動きからオネイロスが操っているのは、まず間違いないかった。

「ま、待てオネイロス!!」

「君が待てモルフエ君!! 一人じゃいかんってば!!」

ヴェトルちゃんを連れ去られ動揺したモルフエ君が一人オネイロスを追いかけるようにした。だがその肩をつかみ引き留める。

「団長さん姉さんが……!!」

「大丈夫俺が助ける。君はB・ビー達といなさい」
「けどっ!？」

「まず落ち着きなさい。ヴェトルちゃんが連れてかれたらこの面々で夢の回廊に詳しいのは君しかいない。万が一の時は、君がB・ビー達を連れてまず現実に戻れ」

「そんなっ!? そんな事出来ませんよっ!？」

「だから万が一だよ。それに相手は星晶獣、慌ててみんなを追わんほうがいい。B・ビー、モルフエ君頼む。カリオスト口達と欠片共から守ってやってくれ」

「あいよ!! コイツラ片づけたら直ぐ追いつく!!」

「団長さん……」

「大丈夫だから、ヴェトルちゃんは絶対取り戻す」

悪夢の欠片の数は多いが、こちらにはB・ビーとカリオスト口達がいる。未だ能力の詳細不明の星晶獣相手にモルフエ君を無理に連れて行くより、こちらに残ってもらった方がむしろ安心できた。B・ビー達ならばモルフエ君を守りつつもそう時間もたたず俺に追いついてもくれるだろう。

「じゃあ先行くわ! みんな気を付けろよ」

「そつちも気を付けてね!」

「油断すんなよ!! なに仕掛けてくるか予想つかねえぞ!!」

無数の悪夢の欠片を一旦B・ビー達に任せ、俺は、急ぎオネイロスを追いかけた。回廊を漂うように逃走するオネイロスは、あまり足が速いとは言えず直ぐにでも追いつけそうではあった。だがむしろそれは俺を誘い込むような動きにも思える。

違和感を覚え果たして「直ぐに追いついてしまつて良いのか？」とさえ思えたが、オネイロスに捕らえられたヴェトルちゃん姿を見ては悩む暇はない。必死に駆けた俺は、やはり直ぐにオネイロスに追いついた。

「待てコラ、止まれ止まれオネイロス!! せめてヴェトルちゃん置いてけ!!」

静止を呼びかけるがそんな俺の声を聴くわけがない。案の定まだ逃げようとするので仕方なく剣を抜く。

だが俺が剣を抜いたのを見てオネイロスは、ヴェトルちゃんを盾のように突き出した。「うっー」と唸る。彼女に攻撃を当てないで助けられるかと言われると出来なくも無い。だがこう言う手段をやられると俺は弱い、マジで苦手だ。まして相手は星晶獣、しかたなく剣は鞘に戻す。

「ぬう〜子供を盾にするかあ〜!」

「……………」

俺の言葉にオネイロスは答ええない。ヴェトルちゃんも気絶しているのかグツタリとしている。

「剣でなくとも戦えるんだぞ俺は。ヴェトルちゃんを傷つけないで助けるのも出来んくは無い」

「……」

オネイロスは無言だった。俺の言葉は、聞こえてはいるだろうが……これはつまり「やれるものならやってみる」と言う事であろうか。だがそうでなくてもやるしかない。モルフエ君にヴェトルちゃん助けると言ったし。

「いくぞこの野郎！ 待つてろヴェトルちゃんっ!!」

まずはヴェトルちゃんを助けるため、幾分か強引になるが素手で戦う事にする。あくまでヴェトルちゃんを助ける事を優先した戦いだ。彼女を無事取り戻せれば、B・ピー達とも合流してオネイロスと心置きなく戦える。

ヴェトルちゃんを盾にしたままのオネイロスに向かって走り、ヴェトルちゃんへと手を伸ばした。

すると俺の伸ばした手を突然つかむ者がいた。だがオネイロスではない。

「……やっつと」

「……つかまえた……」

「——っ!? 君は!?」

「ふいふ……」

「あはは……っ！」

オネイロスに近づいた事で回廊深層の薄暗さでもオネイロスの顔が見えた。そして俺を見つめるのは、同じ二つの顔。それに驚愕した俺の隙をつきオネイロスは、その細い腕を伸ばしもう一方の俺の手をつかんだ。

左右つかまれた腕、だがそれをつかむ手は、何もかも同じ少女の手をしている。

「オネイロス、やつぱり……君は……っ！？」

「()なら……引き込める……」

「あなたも、悪夢に……溺れなさい……っ！」

「おおっ!? なにを——」

状況を理解する間もなく、そのままオネイロスの抱擁を受けた俺の意識は、ここで途切れた——。

■ 三 悪夢の深淵

「おい………どういこうった」

悪夢の欠片の殆どが主にB・ビイとカリオストロにより吹き飛ばされ、直ぐに彼等は団長の後を追った。団長の予想通りルナルも揃ったB・ビイ達に悪夢の欠片では、多

少の足止め程度にしかならない。

だが「多少」であっても足止めには違いない。B・ビー達が団長に追いついたと思つた瞬間団長は、突如オネイロスの抱擁を受けヴェトル諸共回廊の暗闇へと解けるように消えていったのだ。

「団長は……あいつはどこに連れてかれた!？」

カリオストロが叫び辺りを見渡す。だがもうこの場には、オネイロスもヴェトルも、そして団長の姿はない。

「まさか、悪夢……? 夢の回廊内で直接悪夢に引き込んだ!？」

モルフエは目の前で起きた事から団長がどこに連れてかれたか予想が付いた。だがまさかオネイロスがここで直接団長を悪夢に引き込もうとするとは、思っていなかった様子だった。

「最初から狙ってた……団長さんの言ってた通り狙いは、この騎空団……いや、団長さん一人だった?」

「誰が狙いだつたかなんぞ今はいい!! それより……アイツは悪夢に連れ込まれたつて事で良いんだな!？」

「は、はい……」

「……よし、わかった。すまねえな、取り乱した」

団長が悪夢に連れて行かれたと言うモルフエの言葉を聞き、取り乱していたカリオストロは大きく深呼吸をして落ち着きを取り戻す。

「悪夢って事なら、助ける手段があるって事だ」

「そうか、私達みたい団長の扉がどこかに出てくる筈よね」

ルナールが自分達と同じように団長を助ければいいと気付く。だがモルフエの方は、不安の色を隠せていなかった。

「それも、そうですが……その扉を見つけようにも」

カリオストロ達が辺りを見渡す。だが夢へと続く扉らしきものは、特に見当たらなかった。先程モルフエ達が話していた通り、この場所は深い眠りについた者の場所。眠りが深くなるほどに夢は見ず扉は現れない。つまり団長もまた――。

「だが直ぐに悪夢に呑まれるとは限らねえ筈だ。アイツの意識が消えるより先に、とにかくそれらしい扉を片っ端から探すぞ!!」

「そうしてえが……オネイロスは、好きにさせてくれないようだぜ」

B・ビイが何かに気付く。彼の視線の先には、蹴散らしたばかりの悪夢の欠片の新たな群れがB・ビイ達へと迫っていた。

「どうやら相棒が狙いだつたてえのは、ほぼ間違いないらしい。目的は知らねえがよう」
モルフエは先ほどの団長の言葉を思い出した。『方が一は、先に現実に逃げろ』。今

まさにこの状況こそが「万が一」ではないのか？　そう思いひとまずB・ビー達の脱出を優先しようとした。

「まだまだモルフエ、まだ「万が一」じゃあねえなあ」

だがモルフエが脱出を提案するよりも先にB・ビーがその考えを読んだのかモルフエの考えを否定した。

「相棒が攫われるのは、これで三度目だ。万が一じゃねえ」

「既に二度もっ!!」

「敵が大勢……これも毎度のこと、万が一じゃねえ。全部普段通りだ。傍から見て不利、毎度の事よ。こっからがオイラ達星晶戦隊（以下略）の戦いよう」

B・ビーに焦りはなかった。まったく普段と変わらぬ様子で悪夢の欠片を迎え撃つつもりでいる。

「おいモルフエ、お前はラムレッタ達と団長の扉探せ。ザコはオレ様とB・ビーで引き付ける!!」

B・ビーは拳を構え、カリオストロはウロボロスを呼び出した。無数の欠片を迎え撃つつもりなのだ。

「けどさつきより数が多いんですよ!?!」

「あんなんオレ様だけでも物の数じゃねえんだよ。だがちよつとだろうと扉探す邪魔を

させるわけにいかねえんだ」

「それは……だけど直ぐ扉が見つかるか、有るかすらわからない……」

「扉がなけりや団長自身を探せ！ 地味で幸薄い気配迎ればそこにいる」

「地味で幸薄い気配ってほぼ気配無いのではっ!？」

「とにかく探せっ！ 地味で幸薄くて団長に見えなくてもアイツは団長なんだよ!!」

「そう言う事だぜモルフエ。それにお前の姉貴も攫われてるんだからな。ラムレッダ、ルナル。すまねえが相棒の方を探してくれ。あいつ置いて帰るわけにいかねえ」

「わかってる。私達だけで帰れるわけないわ」

「モルフエ君、扉……と言うか夢の気配は、あなたの方がわかるわ。お願い、団長さんの夢が探せる内に……!」

「み、みなさん……」

決して諦めない様子のB・ビー達。そんな彼らを見て弱気になっていたモルフエは、自分を情けなく思った。姉であるヴェトルを置いて逃げるわけにいかない。その姉を追って捕まった団長も放つてはおけない。そして姉がいなかったからこそモルフエは、自分もまた諦める訳にいかないのだと強く思った。

「……わかりました。団長さんとオネイロスの気配も同時に迎ればきつと……やってみます!!」

「よっしや、扉見つけたら呼んでくれ。オイラ達も直ぐに駆けつける」

「無茶承知で言うが早めに頼むぜ。アイツの事だから、直ぐにどうにかならねえとは思
うがな」

「はいっ!」

気持ち切り替えたモルフエは、ラムレッダとルナルと共に団長の悪夢へと続く扉
を探しへと向かう。

「おい、B・ビイ」

「おうなんだ?」

モルフエ達が扉の搜索に向かうのを見てカリオストロは、B・ビイへと声をかけた。

「団長の悪夢……なんだと思う」

「さあな。知つての通り苦勞が多い奴だからな」

「気の毒な奴だぜ」

「ま、相棒は……大丈夫さ。なんとかなる」

「根拠は?」

「そりゃ「相棒」は、オイラ達の「団長」だからな」

「はっ! 違いねえ!!」

カリオストロとB・ビイは、迫る悪夢の欠片の群れを迎え撃つ。自分達の団長を助け

る時間を稼ぐために。

■ 四 アノヒノキミニ

——ザンクティンゼル。ファータ・グランデ空域にある何の変哲もない、平和でのどかな小さい島。

……ある時、俺の住む島ザンクティンゼルへ少女が“墜ちた”。それが全ての始まりだった。俺はその場にはいなかったが、村に住む幼馴染のジータが彼女の元へと向かった。そして直ぐエルステ帝国の船が現れそこから兵隊達が少女を狙う。その中でジータはルリアを守り——。

「……森？」

——ふと、自分のいる場所が何処か分からなくなった。不思議な話だ。ここが何処かなんて考えるまでもないのに、ここは“ザンクティンゼルの森”だ。

はて、だとして俺はここに何をしに来たのだろうか？ ザンクティンゼルの森には、獣を狩るか野草やキノコを採りに来るが……俺は、そんな準備をしていない。

それに直前まで何か懐かしい事を思い出していたような気がしたが……

「……ジータ、そうだあいつ」

してやっと森の開けたところへと出る。

「ジータ……！　おい、ジータ……ッ！」

「ビィ……？」

森の広場に出たらとビィの声が聞こえて来た。ビィが居るならジータもいる。この声が聞こえてホッとすする。

「どこ行ってたんだ……おい、二人共早く戻って……」

「ジータ……なあ、お願いだ……！　起きてくれよお……!!」

「……ジータ？」

確かにビィは、ジータといた。地面に横たわり動かない彼女の傍に。

「なんで……ジータ……なんでっ!？」

駆けた。全身が凍り付くような感覚だった。『夢』であってくれ、嘘であってくれと願った。だが、俺がジータとビィの傍に来ても彼女は、何一つ喋らない。

何時だって俺の姿を見れば「お兄ちゃん」とはしゃぐはずなのに。

「あ、兄貴……兄貴ッ!?　ジータが、ジータが……!!」

ビィが俺になにか言っている。だがその言葉が入ってこない。それよりも目の前のジータの事しか考えられない。

大きく切り裂かれた身体からは、まだ少し暖かい血が出ている。その瞳からは、既に

生気が感じられない。彼女の命が消えようとしている。

「…………おに…………ちや」

小さくかすれる彼女の声がある。

「ジータ、喋るな…………ジータ…………」

「いたい…………痛いよ…………寒い…………」

「大丈夫、大丈夫だから…………」

「身体が…………冷たいの、寒いよ…………お兄ちゃん」

何もしてやれない。こんな酷い怪我を負った彼女に対して俺は、何もできないでいる。治療の術も何もかも“この時”俺は、何一つ知らない。

「なんで…………もつと早くキテく、れ…………なか…………」

…………そうだ。俺が、俺がもつと早くここに来れていれば彼女は、ジータはこんな思いをせずに済んだ。

「兄貴…………どうして、ジータと…………一緒にイテくれなかったンダ…………」

そうだ。俺が目を離さなければ、あの時——そう、“あの時”…………。

「…………どうシテ、ドウシテ一緒にイテくれなかったの…………」

「……………」

「おニイちゃん…………の、せい…………」

「アニキが……ジータを見失わなきゃ……」

俺が、ジータから目を離した……。俺のせいで……。

「ヒトリは……いや」

「ジータ……」

「一緒……ずつと……イツシヨに」

淀んだ瞳が俺を見つめる。冷たい彼女の手が俺に伸びる。その手を俺は――

■ 五 探し物はなんですか

悪夢に囚われた団長、その扉を探すモルフエとラムレッタ達。扉の少ない夢の回廊深層を必死に探し回った。

「ないない、無いっ!!」

「ほんとに影も形も無い!!」

ラムレッタがルナールがもどかしそうに叫ぶ。薄暗い回廊深層、物陰と言う物はなくひたすらに扉らしきものを見渡し探す事しか出来ない。

「深層じゃないって事とかありえないのっ?」

「い、いえ……多分無いと思います」

いくら探せど見つからない団長の扉。ルナルは、この深層エリアにはないのでないかと考えたが、モルフエはその可能性が低いと考えていた。

「と言うよりもここ以外で悪夢に閉じ込める必要がありません。仮に扉を見つけれたとしても団長さんを悪夢に閉じ込めたいなら深層部が確実ですから……」

「じゃあやっぱり現れるかわからない扉を探し続けるしかないわけね……」

「だとしても、こんな場所です。現れてさえくれれば目立つはず。見落とさないようにするしかありません」

「もちろんわかっているけど……危ないっ!!」

「わあっ!!」

ラムレッダが咄嗟に拳をモルフエの背後に向かい突き出す。それに当然驚くモルフエであったが、すぐに彼の後ろから「カララアッ!!」と音が鳴った。

「あ、悪夢の欠片……」

モルフエの背後には、玩具のガラガラ型の悪夢の欠片が目を回し倒れており程なく消滅した。

「す、すみません、助かりました」

「気にしないで。けど、やっぱりこっちにも出るわね」

悪夢の欠片の大群は、B・ピイとカリオストロに任せて来たモルフエ達。だが少数で

あっても妨害のためか悪夢の欠片は、モルフエ達のところにも現れた。

「こいつらのせいで扉を見逃したら大変ね……」

「やっぱりなるべく私とルナルで欠片の相手するわ。モルフエ君は、探すのに集中してちょうだい」

「わかりました。負担かけて申し訳ないです」

「いいのいいの、慣れっこなもの」

「この騎空団じゃこんなの日常茶飯事よ」

この時モルフエは、ラムレッダとルナルを見縊っていたつもりはない。だが戦う姿としてB・ビーのような星晶獣、そしてカリオストロのような飛びぬけた天才錬金術師を先に見てしまうとその強さの印象は、どうしても弱くなった。

だがいざ彼女達に守られていると「やはり星晶戦隊（以下略）なのだ」とわかる。

ラムレッダは、未だほぼ素面を保ち今しがたモルフエを助けたようにその拳で戦える。ルナルもまた悪夢から助けられて直ぐにも拘らず冴えわたる魔物絵の妙技を具現化し悪夢の欠片を撃退している。

彼女たちとてあの星晶戦隊（以下略）の団員、ただの酔っ払いと絵師（腐）ではない。（僕も諦めるわけにいかない。まだ探せる……もつと探るんだ。気配はあるはずだ。オネイロスと団長さんの気配の残り）

ラムレッタ達を信用し悪夢の欠片の事を完全に意識から外したモルフエ。彼は必死に周辺に残るオネイロスや団長の痕跡や気配の残りを探った。

夢が生まれさえすれば現れる回廊の揺らぎ、それによる扉の出現。

(オネイロスの気配……これは、まだ残ってる)

オネイロスの気配、これ自体は早い段階で辿る事が出来た。だが夢の回廊にオネイロスの気配があるのは、ある意味で当然と言える。オネイロスは、この世界ではどこからでも現れどこへでも移動できるのだ。オネイロスの大まかな位置を辿れてもそこで行き詰まる。肝心なのは、団長の方なのだ。

(どう探す……オネイロスの濃い気配だけ追っても…… “濃い”?)

ここでモルフエは、初め気にも留めなかったオネイロスの気配に混ざる “薄い気配” に気付く。悪夢の欠片か何かのものと思っていたモルフエだが、カリオストロの言葉を思い出した。

『——地味で幸薄い気配辿ればそこにいる』

(……これの事！)

探るべく気配を見つけた彼は、まるで一本の生糸のように細いその気配を辿った。果たしてそれが悪夢に囚われたから薄い気配なのか、カリオストロの言うような生まれ持ったものかはわからない。だが「きつと本人には言わない方が良いだろう……」と

こんな状況ながらモルフエは思った。

そして細く薄い気配を見失わないよう集中して扉搜索から十分程経とうとした時である。

「ねえ、ちよつと……あれ!!」

ルナルが深層部でも特に暗がりである場所を指差し叫ぶ。モルフエ達がその指先につられ先を見ればついにそこには、夢へと続く扉があった。

「あつた、あつた……っ!! 扉だ!!」

「団長君の間違いないかしら!」

「すぐに確認を……そうだB・ビイさん達も」

「おう、呼んだか?」

「わあ!」

扉を見つけ悪夢の欠片の大群を任せたB・ビイ達を呼びに行こうと振り向いたモルフエ。だが振り向いてすぐ目の前には、その目当てのB・ビイとカリオストロがいた。

「な、なんでこつちに……」

「全部片づけて来たからな」

「全部!?! あの数をですか!?!」

「言っただろ、あんなん物の数じゃねえって」

B・ビイとカリオストロには、目立った傷が無いどころか正に無傷だった。それでいて大群であった悪夢の欠片を片付け息切れ一つしていない。カリオストロの言葉は、決して自惚れでもモルフエへの発破でもなく、紛れもない事実からのものなのだ。

「それよりこの扉があいつのか？」

「ええ、間違いなと思います」

「そうか……扉があるならまだアイツの意識は、心は悪夢に負けてねえ」

目の前の扉を見てカリオストロは、ホッと胸をなでおろした。

「一番最悪なのは、扉が無い場合だったからな」

「全くだぜ。出入り口があんなら相棒の事だし自分で出てくる可能性すらあんぜ」

「あーそれあり得る」

「めっちゃわかる」

「いや、流石にそれは……」

扉が見つかってB・ビイ達もホツとしたのか、雰囲気がだんだん緩くなっていく。元から若干緩めであったが、これもまた星晶戦隊（以下略）の力（？）の様なものなのかとモルフエは思った。

「とにかく中に入って団長さんを——」

団長を助けるため、モルフエが団長のものと思われる扉へ入ろうとする。だがそれと

ほぼ同時の事である。『ジャララ……ッ!!』と鉄の擦れる音を鳴らし、突如扉の周りから鋼鉄の鎖が伸びてきて扉を雁字搦めにしてしまい、最後には強固な錠前が扉を閉じてしまったのだ。

「扉がつ!？」

モルフエが慌てて扉を開こうと試す。だがやはり扉が開くどころか鎖を外す事も出来ない。その過剰なまでの扉の封印は、イケロスが護っていたカリオスト口達の扉の比ではなかった。

「誰が……なんて聞くまでもねえよな」

明らかにモルフエ達を扉に入れないよう妨害するように現れた鎖。このタイミングでこのような事が出来るのは、もう一つの存在に絞られる。

「見てるんだろオネイロス!! いい加減コソコソしないで出てきな!!」

カリオスト口が叫ぶ。すると彼女達と扉を遮るように景色を歪めきりのようにそれは現れた。

「——本当に邪魔な子たち。……諦めて帰ればいいのに……」

青と紫の混ざるドレスを怪しく揺らし、苛立った声を出し空間の揺らめきと共にオネイロスは現れた。



六 扉を超えて

「ほう、思いの外アツサリ出て来たじゃねえか？ 逃げるのは諦めたかよ」

「……………うふふ」

カリオストロは、現れたオネイロスに対して挑発的に話しかける。それに対しオネイロスは、嘲笑で答える。

この時回廊深層の暗がりで見えていなかったオネイロスの「顔」が、ついに見える。それを見たラムレッタ達は、ギョツと驚き目を見開いた。

オネイロスの顔面、そこにはあるべき目や鼻や口が無い、その代りくり抜いたようにポツカリと空洞が開いていたのだ。

「別に逃げてなんてないわ……………本当は、あなた達は見逃しても良かったけど……………いい加減、邪魔になった。だから、出て来てあげたのよ……………」

空洞の顔で怪しく話し出すオネイロス。だが相手は星晶獣、一見人と姿が似ててもその実大いに違うと言う事は不思議ではない。特にそんな事に慣れているラムレッタ達は、直ぐに堂々とした態度へと変わる。

「邪魔邪魔って言うけど、俺君になんかしたかい？……………つて、団長君なら言うでしよ
うね」

「まずこちらの鍵を外してくれると助かるんだけど、オネイロス?」

ラムレッツダが少し団長の口調を真似て彼が言うであろう言葉を代弁する。そして続けてルナールは、嚴重に閉じられた扉を指さしオネイロスに鍵を開けるよう話す。

「ははは……! 開けてなんてあげない……あいつはもう直ぐ悪夢で心を壊される。とびきり残酷な悪夢を現実と思つて……!!」

オネイロスには、団長が今見ている悪夢がどんなものか知つているようだった。そして団長が悪夢に苦しむ様子を想像したのか空洞から「ケラケラ……!」と声を出し笑う。

「オネイロス、そんな事させないぞ!! 団長さんと姉さんを返せ!!」

モルフエは、オネイロスに向かい叫ぶ。だがオネイロスの方は、モルフエを一睨するとまたも「ケラケラ……!」と笑つた。

「姉さんを返せ? 姉さん? うふ、ははは……あはははは……っ!」

「な、なにが可笑しいんだ!」

「なにが? 全部よ、全部可らしい……!! あなたまだ分からないの?」

「だから何が……!」

「いるでしょう目の前に……あなたの『姉さん』は、ちゃんといるでしょう!」

オネイロスは、空洞の顔でモルフエをじつと見つめた。何処までも続く深淵のような

空洞。だがモルフエは、その空洞を見ているとある人物が頭に浮かぶ。

「……姉さん？」

いぶかしみながらモルフエは、そう呟いた。それは自然と出たオネイロスに向けた言葉だった。

「ぼ、僕今……な、なんで……っ」

「ふふ、あは……っ!!」

モルフエは自分が言った言葉が信じられなかった。なぜ今自分は、オネイロスを「姉」と呼んだのかわからず狼狽える。そんなモルフエの様子を見たオネイロスは、愉快そうに笑った。

「違う、どうして僕今……オネイロスを」

「違うわいいわ……こつちを見なさいモルフエ、私の弟……」

「う、うあ……ああ……っ!？」

「——私の『お人形』」

モルフエを見つめる空洞には、いつの間にか怪しく微笑む少女の顔が浮かんでいた。オネイロスの顔を見たモルフエは、ゾクゾクと不安と恐怖で体が震えた。それは確かに姉であるヴェトルと瓜二つの顔だった。

「……ヴェトル、やっぱりお前だったか」

モルフエは勿論ラムレッダやルナル達は、オネイロスの顔に驚き啞然とした。だが一人カリオストロは、納得したようにオネイロスへと話しかける。

「あなた……気づいてたの……？」

「そうだろうと思ってたさ」

「ふうん？」

カリオストロの言葉にオネイロスは、別に困った様子もなく気にした様子もない。

「何時から気づいてたのかしら？」

「違和感自体ならお前らが夢占いなんぞやってた時点であつたさ。妙にタイミング良かったからな。その上更に都合よく、『助け』に騎空艇に来たんだから奇妙に思いもする。団長の奴だって薄々気付いてたろうぜ」

「そう……なのに捕まるなんて、調べた通り馬鹿みたいにお人好しで間抜けな団長さん……ふふふ……」

「団長がお人好しで間抜けなのは否定しねえが、団員でもねえ奴に言われる筋合いはねえな」

「否定してあげようよ……」

「本人聞いたら泣くわよ」

相変わらずこんな状況で本人居なくても酷い言われ様の団長を気の毒に思うラム

レッダ達。ただ彼女達も強く否定しようとはしなかった。

「モルフエは、お前の仲間……弟じゃないのか」

「仲間？ 弟？ ふふふ……言つたでしよ、そいつはお人形。私の生み出した姉弟ごつこのためのお人形……」

「姉弟……ご……」

オネイロスの言葉は、モルフエにとつて絶望でしかなかった。これこそ彼にとつて悪夢以外の何物でもない。

「団長^{あいつ}を引き寄せる『餌』が欲しかった……だから作ったの。私の都合のいいお人形を」

「う、嘘だ……だつて、島みんなは……」

「『島みんな』つて誰の事……？ 誰一人名前は言えないでしよ……両親も、友達も……。あなたに『思い出』なんて何も無い」

「嘘だ……そんな……」

「嘘じゃない……だつてあなたは、『人形』だから……」

「おめえ趣味悪いぜ」

オネイロスの非道とささえ言える行い。それに対してのB・ビイの言葉は、この場に居る誰もが思う事だった。

「それは……それはいくら何でもあんまりよオネイロス……私達への仕打ちより酷い」
「あら……お人形を庇うの？」

オネイロスの言葉で傷つくモルフエを見てラムレッダは、悲痛な面持ちでオネイロスを咎めた。

「そいつがあなた達を見つけて夢占いに誘った。そのせいで悪夢に囚われたのに」

「そう仕向けたのはあなたよ。彼はただ何も知らず……大事なお姉ちゃんのために働いただけ」

「ええ、その子はよく働いた……だけどつまらない姉弟ごっこもいい加減鬱陶しくなつたわ。……消しても良かったけど、私がいなきや役に立たないお人形だから放っておいたの……なのに」

ただモルフエを嘲笑うだけだったオネイロス。だがモルフエへ向ける表情が怒りへと変わる。

「団長の扉を探し出して、見つけてしまった……。わかってるの……？ あなたは、余計な事をしたのよっ!!」

オネイロスがモルフエに向かい怒りの形相で叫んだ。

「やっぱり消しておけばよかった!! もう役立たずの人形のはずなのに!! 私がいなくなつて狼狽えるだけの『弟』であれば良かった!! どうして私の邪魔をするのっ!!」

「あ、うあ……」

「下がれモルフエ」

激しくモルフエを責め立てるオネイロス。それに対しシヨックで狼狽えるモルフエを庇いカリオストロが前に出る。

「仮にも姉が弟に自分勝手な理由で癩癩か？ 大事にしないとイケないぜ、家族つてのはよ」

「家族じゃない……っ!! ただの人形よっ!!」

「じゃあ何故『弟』なんて役割で生み出した。ただの知り合い、仕事の助手……何でもよかった筈だ」

「……お前ッ!」

カリオストロの指摘にオネイロスの憎悪が増していった。

「何が分かる、何が分かるっ!! お前に私の……!!」

「分からねえな。意味の分からねえ逆恨みでうちの団長狙うような奴の気持ちなんざ」

ウロボロスを呼び出し、錬金術の本を広げるカリオストロ。彼女もまた怒りの感情を溢れさせていた。

「扉を開いて団長を出しな。痛い目に遭いたく無けりやな」

「ふん……脅しても無駄よ。団長さんを助けたいなら止めた方が良いわよ……?」

オネイロスとカリオストロの間に火花が散る。間違はなくどちらも本気だった。オネイロスが怪しい素振りを見せた時カリオストロは、オネイロスを錬金素材にするつもりでいる。オネイロスもカリオストロが変に動けば、団長の悪夢へ悪夢の欠片等の魔物を送り込むつもりでいる。

正に一触即発、戦いの火蓋は何時どのように切られるのか……？ そんな時であった。

「——おい、おーい!?!」

「……は?」

緊迫した空気の中突如として聞こえて来たのは、随分と間の抜けた男の声。それを聞いてオネイロスは、ギョツとして傍の扉を見た。声は扉の“中”から聞こえて来たのだ。

「ちよつと……誰かいねえか?! なんかさ、コレ鍵かかってただけどつ!」

今度は扉が“ガタガタ!!”と音を立て出す。中から扉を開けようとしているのだ。声の主、すなわち——。

「は、はは……!! あいつは、ホント“らしい”なおいつ!!」

「まったくね……本当に!」

「けど流石って言いたくもなるわ」

「だな。ほれ見ろモルフエ、オイラ達の冗談が本当になったぜ」
「え？」

「案の定」「知ってた」「やっぱりか」「だろうと思つた」。色んな言葉がカリオスト口達の頭に浮かぶ。なんとなくこんな感じで、こんな展開になるのはわかつていた。

今更「彼」が、現実ではない世界に負けるわけがないのだ。悪夢は所詮、夢であるのだから。

「ちよつとコレつて開けていいの!? 開けれるぞ!? 強引でいいならやるぞ!? 返事無くても出るぞ俺!」

扉の揺れが激しくなり、更に「ガンガンツ!!」と音をたてた。すると扉を縛っていた鎖が信じられない事に徐々に割れて落ちて行く。

「嘘、嘘でしょ……なんで!」

この事態に一番驚いたのはオネイロスだった。完全自力で悪夢から脱出出来る人間が居るはずがない。絶対にありえないのだ。

だがどうだろうか? 今まさに目の前でそのありえない事が起きようとしている。

「モルフエよう、さつきオイラ言つたな。まだまだ万が一じゃねえつて」

「は、はい……」

「そもそも相棒はな、どちらかと言えば相手にとつての——」

「ん、待て何で……開かな……!! ……ん? あ、これ違う」

揺れる扉が一瞬止まる。既に鎖はボロボロになり、錠前も砕けそうだった。そして次の瞬間――。

「――万が一を起こす側なんだよ」

「これ外開きいい――っ!!」

鎖と錠前を砕きながら悪夢に続く扉は、勢い良く開かれ中より現れる。

「……あれ、みんな居んじやん」

悪夢からの帰還者が――。

Dreamers 夢見た者達、夢見る者達

■ 一 今、過去を超え

■ ——— ザンクティンゼルの森。そこに居たのは、地面に横たわり血を流す瀕死の重傷を負ったジータだった。

彼女を抱きかかえ、声をかける。だがもう手遅れなのは明らかだった。世のどんな医者や回復魔法でも今の彼女を助ける事は出来ないだろう。

——— 奇跡が起きない限り。

「——— なんて……もつと早くキテく、れ……なか……」

かすれる様なジータの言葉。これを聞いて自分に沸き上がったものは、強い後悔の念だった。

「兄貴……どうして、ジータと……一緒にイテくれなかったンダ……」

俺を咎め攻めるビィの言葉。これを聞いて感じたのは、自分自身の不甲斐無さと無力感。

「……どうシテ、ドウシテ一緒にイテくれなかったの……」

ジータから目を離さなければ。彼女のそばに居てあげていれば。例えあの時俺が無
力だろうと、彼女の盾になら成れたかもしれない。

だがその盾にさえなれず、彼女を守れず、あの日は何も出来なかった。なにも知ら
なかった。

「おニイちゃん……の、せいで……」

「アニキが……ジータを見失わナキヤ……」

「ヒトリは……いや」

死の恐怖と痛みに震える彼女のそばに居てやれなかった。

「一緒……ずっと……イツシヨに」

淀んだ瞳が俺を見つめる。冷たい彼女の手が俺に伸びる。その手を俺は――

「――その手を、とるわけにはいかないんだよ」

俺はジータの手をとらず、そのまま抱きかかえてた彼女をそつと地面に下した。

「お、おニいちゃ……っ？」

「……あの日起きた出来事は、こんな感じだったんだらうな。……だけどきつと、どこか
違う」

ザンクティンゼルの森、帝国の戦艦、血まみれのジータ。あの日に起きた出来事その

まま——だが違う、正確には違うのだ。

「悪夢としては、十分だろうさ……最悪な記憶だよ。この悪夢は、俺の記憶がもともとなつてる。だが実際のところ俺は、ここに来れなかった。ここで起きた出来事を俺は、何一つ見ちゃいない」んだ

ここに居るべきカタリナさんがいない、ルリアちゃんがいない、帝国軍人共がいない、帝国のポンメルンが居ない、ジータの命を奪つた魔物がいない。

「ルリアちゃん達がここに居たのは知つてる。けど話に聞いたただだからな……いまいちどんな風だったかわからない。その致命傷は、誰がやった？ ポンメルンが呼び出した魔物らしいけど俺は姿を知らない、だからここに居ないんだろ？ そうだ、俺は間に合わなかった……ジータが大変な時になんにもしてやれなかった」

忘れてはいけない、忘れるわけにはいかない運命の日。この光景は「あの日」であつて「あの日」ではない。所詮俺の記憶を元に作られた偽りのザンクティンゼルではないのだ。

帝国戦艦から落ちた蒼い光、それを追つたジータ。そしてそのジータを俺は、遅れて追いかけた。

俺が必死に追いかけてる間にジータは、ルリアちゃんを助け守り……そして死んだ。帝国の呼び出した魔物によつてその命を落としたのだ。

だがジータは、ルリアちゃん力により命を取り戻す。奇跡は起き、ジータは蘇り、そして帝国兵は追い返された。

それでやつと追いついた俺はと言えば、もう既に全ては終わった後だった。

あの時俺は、ジータに怖い思いをさせた。一人痛い思いをさせた。死んでしまう時、傍に居てやれなかった。居る事さえ出来なかった。

「……俺が後悔や負い目で悪夢を受け入れると思ったか？」

「アア……ッ!? ウあ二……ギエ……!!」

「とつさにジータの手をとると思つたか？」

「うオ二……チア……!?!」

「——てめー後悔してるに決まってるだろっ!? 負い目あるに決まってるだろーがよっ!?! 手えとりてえに決まってるだろうが……っ!!」

俺は叫んだ。はつきりと怒りを込めていると言つていいほど叫ぶ。そうすればするほど目の前のビィやジータの姿をしたモノが、徐々に形を崩していく。

「あの日俺が間に合つてれば……!! 追いついてれば……っ!! 何度思つたことか……!! 俺に何が出来るとかじゃない、ただあの場に居てやりたかつたのに……っ!! 死んじまつたんだぞ?! 痛かつたに決まってる苦しかつたに決まってる怖かつたに決まってる……っ!! 助かつたから……っ!! じゃあ「生き返つて良かった」なんて……濟ん

じやいないんだ俺はっ!!」

あの時俺がザンクティンゼルで出来た事なんて、なんにもありはしなかった。全てが終わって、そしてジータの旅の始まりを見送っただけ。

全て運が良かっただけ。何かが少しでも違えば奇跡は起きなかった。あれが永遠の別れになるかもしれない。

「夢で誤魔化せると思うなよっ!! 俺の後悔を弄ぶなっ!! 俺の後悔をつまらない悪夢で終わらせんじゃあないっ!!」

「あ二——」

霧の様にビィの形だったモノが消えた。

「な、なんで……どうして……!?!」

「……正直お前が、お前がさつき俺に手を伸ばさなかったら。もしもただ助けを求めるだけだったなら……」

「アア……!!」

「お前が手を伸ばさなかったら俺は、悪夢に残ることを選んだかもしれない。些細な事なんだ。お前が手を伸ばしたから、俺は自分の後悔を……今のジータを思い出せたんだ」

目の前のジータの姿をしたモノの手を見た時俺は、以前アウギユステで再会したジータ

夕を思い出した。

アウギユステでの騒動の後俺は、ザンクティンゼルで助けてやらなかった事、そばにいてやらなかった事を彼女に謝った。だがジータは、気にしなくていいと言った。俺を抱き寄せ生きている証だとその身の鼓動と声を聞かせてくれた。生きたその温もりを感じさせてくれた。

この事を思い出した途端、目の前のモノが全て偽物だとわかった。

「けどな……ジータが許してくれたって俺は、この後悔を忘れないし捨てたりしない。俺が握ってやりたかったのは、あの時のジータの手だったんだっ!! 一緒に居てやらなきゃいけないかったのは、あの日のあいつなんだ……っ!! お前じゃアないんだっ!!」

「ウ、ウア……っ!! おニ……オニイ……っ!!」

「あの日あいつの傍に居てやらなかった俺が、一番辛い時に手も握ってやらなかった俺が……例え夢でも偽物おまえの手をとるわけにいかないんだ……っ!!」

「ウアアアッ!? お、おニイ——」

そして直ぐにジータの姿をしたモノも消えていった。

気が付けば、俺は森の広場ではなく何も無い空間にいた。夢の回廊に似たその空間は、俺の悪夢がその姿を保てなくなったと言うことだろう。

悪夢の発生源であり主でもある俺自身が、この悪夢を否定して夢だと自覚してしまっ

た。その時点でこの空間は、夢として機能しなくなったのだ。

「……ジータに助けられた」

アウギユステであいつに会っていかなかったら……果たして俺は、この悪夢を否定出来たろうか？ 偽物に言った様にその自信は無い。後悔と罪悪感でこの悪夢に残り続けたかもしれない。

だが今を生きるジータの濃い「生」の記憶と思い出が、悪夢の「死」の誘いを撥ね返けてくれた。

アウギユステでの事と言い俺は、常々ジータやまわりに助けられてばかりだ。ありがたい、だが我ながら実に情けない。

自身の不甲斐なさを痛感しているところの空間にポツンと扉が残っているのに気が付いた。おそらく外の回廊に通じるものだろう。

今までの例から考えればあの扉は、俺の家かジータの家なりのものだと思うれる。

俺がどの程度悪夢に居たかわからないが、そう時間は経っていないはずだ。外ではまだオネイロスがおりB・ビー達が残っている。戦いになっていいのか、あるいは逃げているかはわからないが、脱出を急がねばならなかった。

扉へ駆け寄りノブに手を伸ばし引き寄せる。だが中々扉は開かなかつた。明らかに外から鍵に加え何か鎖のような物で封じられている。

「くっそ……!! 外に誰か……おい、おーい!」

ガタガタと扉を揺らしながらダメもとで叫ぶ。もし外に声が届けば鍵を開けてくれるかもしれない。

「ちよつと……誰かいねえか!? なんかき、コレ鍵かかってんだけどっ!」

さらに呼びかけるが返事はない。こうなるともう強引にでも扉を開ける必要がある。幸い扉は、力を籠めれば開けれそうだった。

「ちよつとコレつて開けていいの!? 開けられるぞ!? 強引でいいならやるぞ!? 返事無くて出るぞ俺!」

何度も扉を引いてみれば鎖が碎ける手応えを感じた。あとは思い切り開けば鍵ごと扉を開かれるだろう。

だがもう少しと言う所で中々扉が開かない。

「ん、待て何で……開かな……!! ……ん? あ、これ違う」

ここで俺は、この扉の事を思い出した。この扉は、俺の家のものであったのだ。それも元々の家でなく、ティアマト達が住みだしユグドラシルによって改築されたユグドラシルハウスのもの。

コロッサスなど星晶獣のガタイでも出入りしやすいよう内開きから外開きに変更された玄關の扉。

「これ外開きいい——っ!!」

そりや開かないわけだと思いい切り扉を外に向かい開く。すると残っていたらしい鎖や錠前が飛び散って見事扉は開いた。

「……あれ、みんな居んじゃん」

そして外には、オネイロスと対峙するB・バイ達の姿があつたのだ。

■ ■ ■
二 壊されてM e r c y

自力で悪夢の世界から脱出した団長。その姿を見たオネイロスは、驚愕し信じられないものを見るように団長を見た。

B・バイ達もまた驚いてはいた。だが驚きよりも団長が悪夢から無事戻った事への喜びが大きい。

「よく戻った馬鹿野郎!! 今は手放して喜んでやるっ!!」

「じゃあ馬鹿って言わないでくれない?」

団長の姿を見て喜ぶカリオストロ。その言い方に団長は、眉を顰めるもそこまで不快そうではない。

一方ただただ驚くのは、モルフエだった。

「し、信じられない……！ 悪夢の世界から自力で脱出なんて……」

「やあモルフエ君、心配かけたね」

「い、いえ……無事でよかったです。けど、どうやって……」

「……まあ、運が良かったつてとこかな。色々」と

「色々とつて……それだけで……」

「それよりも!! まず状況は？」

団長の話す事に納得いかない様子の子のモルフエだが、団長は話を遮りB・ビー達とオネイロスを交互に見た。

「見た限り……みんな俺を助けようとしてくれて、結局オネイロスはヴェトルちゃんだった。OK？」

「ズバリその通り、今一戦始めるところだったぜ」

ざっと周りを見渡した団長の見解を肯定したB・ビー。それを聞いた団長は、深くため息をつきオネイロスを見た。

「じゃあ誤魔化し無用。ヴェトルちゃん、いやオネイロス。一戦するにしろしないにしろ、俺を狙った理由は聞いておきたいね。——俺君になんかしたかい？」

「……やっぱり言ったわ」

「案の定言ったわね」

「何か？」

「いえいえ」

「こつちの話」

少し前にラムレッダが予想し代弁した団長がオネイロスに言いそうな言葉、それをそっくりそのまま言う団長。当然そんな事を知らぬ団長は、ラムレッダ達の反応を不思議そうに見ていた。

一方で未だ驚愕の表情を浮かべていたオネイロスは、団長の言葉を聞くと眉間に皺を寄せ苛立ちを露わにした。

「……あなた、気に入らないのよ」

「ほう？」

「……」

「……………え、それだけ？」

一言で済まされた答え。思わぬ答えに団長達は、拍子抜けしつつも気味の悪さを感じた。

「君い……俺も“気に入らない”の一言で悪夢に閉じ込められちゃ敵わないんだけどね？」

「だって気に入らないもの……あなたみたいに星晶獣を仲間だなんて言う人間が……の

うのう過ごしてるのが……っ!!」

オネイロスが叫んだ。ビリビリとその怒気をその身で感じ、これはただの癩癩ではないと団長達はわかった。

「それは、どう言う意味で……」

「仲間なんて嘘よっ!! 星晶獣を仲間なんて言うやつがいるわけない……!! そんなの嘘、全部嘘よっ!! 聞こえは良い言葉で利用してる……!! あなたもそうなんでしょう……っ!!」

「ちよちよいつ!? ちよい待て、なにを言つて」

団長の制止も聞かずオネイロスは、強い憎しみのこもる言葉を呪詛のように続ける。

「都合の良い道具程度にしか見てないんだ……っ!! 使えなくなったら、用済みだったら……要らなくなったら捨てるくせにっ!!」

オネイロスから向けられる憎悪とさえ言える感情。だが団長達は、彼女がそれがもつと別のものへと向けられていると思えた。

ヒステリックとなったオネイロスは、その感情のまま力をふるう。彼女の周りには、突然何体もの“少年の姿をした人形”が現れた。

「これは……」

「ぼ、僕……? 僕の姿の、人形……」

その人形は、不思議な力の糸で吊られた操り人形であり、体は人形そのものであるが衣装や素顔はモルフエと瓜二つであった。

現れた自分にそっくりの人形群を見てモルフエは、ゾツとし強い恐怖を感じた。

「うふ、ふふ……っ!! 私のお人形の『モルフエ』……よく働くお人形。自分に似て驚いた? 人形があなたの姿? それともあなたが人形の姿かしら?」

「や、やめて……姉さん……!!」

「ふ、ふふ……うふふっ!! わかるモルフエ、『それ』があなたよ!! あなたの仲間っ!! あたもこれと同じお人形……っ!!」

「ひい……っ!!」

「……やってモルフエ……っ!! そいつらの心を壊してっ!! モルフエだけじゃない、お前たちもまた悪夢に沈めてやる!! 人形のように壊してやる……っ!!」

カタカタと不気味に動き团长達へ迫る人形達。これらがオネイロスの意思により動き团长達を襲おうとしているのは明白だった。

「ちい!! (こ)で雑魚けしかけるかよ!!」

「それも随分やりづらい見た目のな……っ!!」

迫る人形を見て舌打ちを鳴らすカリオスト口。襲い掛かる以上相手をしないわけにいかず团长も剣を抜いた。

「モルフエ君は下がって!! ルナールさん、彼を!!」

「わかったわ。ほら、モルフエ君こっちに……!!」

「う、うう……」

オネイロスに告げられた事実と自分と瓜二つの人形の魔物、それらのせいでモルフエは今ひどく不安定だった。怯えた様子のままルナールに手を引かれ団長達の後ろに下がる。

「人形の見た目に惑わされないほうがいいわよね」

「当然そうだ。抜かるんじゃないぞ、酔っ払い」

「今は素面よっ!!」

素面のラムレッダは、自身の悪夢で見せたような体内残留アルコール分0%を証明する動きで人形モルペウスへと肉薄した。

「せいっ!」

素早くそして力強く放たれたラムレッダの拳。それがモルペウス当たるとモルペウスは、あつけなくその人形の体を崩した。

その手応えの無さにラムレッダは「あれ?」と一瞬感じたが、モルペウスはその体を崩しながら――。

「――ウワアア……ッ!?!」

「うっ?!」

モルフエと同じ声で悲痛な断末魔をあげた。それを見たラムレッダは、思わず顔をしかめる。

「団長君、これ……すつこいやりずらい!!」

「百も承知だよくそつたれエエっ!!」

モルフエは、人形ゆえに無表情であった。それでも姿形は、モルフエと瓜二つ、さらにはその声まで同じとあり心理的な戦い辛さは、あまりにも大きい。

だがそれでも団長達は、襲い掛かる「敵」を相手に戦う以外になかったのだ。

■ 三 操り人形の糸を切れ

——モルフエにとって目の前の光景は、目をそむけたくなるものだった。いや、実際に目を背け、そして強く瞳を閉ざしていた。

「このっ!?! いい加減にしやがれ!!」

カリオストロが錬金術でモルフエを消し飛ばす。

「ていやっ!!」

「どらアッ!!」

ラムレットダとB・ビイが、拳でモルペウスを破壊する。

「ふんっ!!」

団長が剣でモルペウスを両断する。

そしてその度に聞こえるのは、モルペウスの断末魔だった。

「ウワアア……ッ!?!」

耳を塞いでも聞こえる声——自分と同じ声の断末魔。しかたないとは言え、団長達に壊されバラバラになるモルペウス。

悪夢だった。オネイロスに告げられた事実だけでも辛い中、このような光景を見せられたモルフエは、今にも気がおかしくなりそうだった。

だが何よりも辛いのは——。

「アアアアア……ッ!!」

「コワレチャエ……ッ!!」

自分と同じ姿の人形が、自分と同じ声をする人形が、オネイロスの命令に従い団長達に敵意を向け襲い掛かっている事だった。

「ううう……!!? や、やめて……やめてよ姉さん……っ!!」

「落ち着いてモルフエ君……アレは、あなたじゃないのよ」

怯えるモルフエをルナルが小さな両手で必死に抱きしめる。それでもモルフエの

不安は、どんどん膨れ上がった。混乱は治まらずルナルの声さえ届いているかわからない。

モルフェ自身は、団長達に敵意の欠片もない。だがオネイロスから生み出されたと言う事実を「思い出し」認めてしまい、更にモルペウスと言う瓜二つの存在が敵対するのを見てそれさえ揺らぐ。

——自分の気持ちさえ作られたのか？ 本当は、今の自分もあのモルペウスと同じなのではないか？ 怯える自分は、団長達を同情させるためオネイロスに命令された演技なのか？

そんなモルフェの気持ちを察してか、オネイロスが愉快そうに笑った。

「あはは……!! ほら、やっぱり。自分が襲われればそうやって壊しちゃうんだわ!!」
団長達が躊躇いつつも、しかし容赦なくモルペウスを壊す様を見たオネイロスは、予想通りだと蔑みを込め笑う。

「友達面して、仲間面して……!! そうやって最後は、裏切るのよ!!」

怒りを込め、だが嬉々として団長達を非難するオネイロス。まるで今まで貯めた鬱憤を晴らすかのようにだった。

「言ってくれるじゃねえか……人形に襲わせて自分は高みの見物か？ とことん趣味が悪いなお前は!!」

カリオストロが叫びオネイロスを批難する。実際彼女は、オネイロスが正体を現しモルフエを利用していた事実を告げた時から強い不快感と怒りを覚えていたのだ。

さらにモルペウスと言うモルフエその物の人形を争わせるこのやりかた。思惑はどうあれ仮にも弟として接していたであろうモルフエを自ら貶めるその方法が気に食わなかった。

「あら、お人形遊びは嫌いかしら？ けどきつと楽しくなるわ……あなた達も壊れてしまえば、〃^{モルペウス}それ〃と同じになる。悪夢に沈んで私のお人形になっちゃえばいい……うふ、うふふふふ……!!」

「コワレチャエ……ッ!!」

「誰が……冗談じゃねえんだよ!!」

モルペウスは、カリオストロに向かい魔力の糸を宙から生み出し放つ。モルペウス自体の力は、実に非力であったがこの糸を用いカリオストロや団長達を文字通りの〃操り人形〃にしようというのだ。

無論おとなしくやられるカリオストロ達ではない。モルペウスは、戦闘が始まってから何度もこの攻撃をしているが、その糸がカリオストロ達に絡まるより先にモルペウスが倒される。

しかし、モルペウスを倒せば倒すほどにカリオストロ達の士気は、上がるどころか下

がってしまおう。

「てめっ!!」

一度B・ビィがモルペウスを殴り飛ばし、オネイロスに肉薄寸前までいった。だが迫るB・ビィを見て、オネイロスは薄ら笑いを浮かべる。

「邪魔、目障りよ……」

彼女は手に持った玩具のガラガラを振り鳴らした。それはただの玩具でなく星晶獣である彼女の武器だ。

響く音はガラガラの音を具現化したかのような青い波紋の攻撃へとかわる。

「うおっとお……!!」

波紋攻撃に気づき避けたB・ビィ。だがすぐさま周りからモルペウス数体が襲い掛かりB・ビィを羽交い締めにしていく。

「んだオラアーツ!? うっとおしいぜえ——ツ!!」

B・ビィが腕を振り上げると粉々になり吹き飛ぶモルペウス。モルペウスの腕力では、B・ビィを完全に押さえ込む事は出来ない。だがまるでゾンビのように増えては襲い掛かるモルペウスに僅かでも動きを制限されているのも確かだった。

「うふふふ……あなた達は、お人形遊びがお似合いよ……」

「ああもう、止めてほしいもんだね……!!」

オネイロスに近づくのも難しく、何度も星晶獣と戦った団長でも、この様な戦いは慣れていない。モルフエの似姿と何体も戦わされるより、いつそモルフエを人質にされた方が「助ければ済むのに……」とまだ戦いやすいぐらいに思っていた。

「俺への逆恨みも納得できんが、モルフエ君への仕打ちも納得できんっ!! こんな気分の悪い真似お止めなさいってのっ!!」

「気分が悪い? あはは……っ!! どうして気分が悪いのかしら?」

団長の言葉にオネイロスは、何が悪いのか本気でわからない様子だった。

「私はただ『お人形遊び』をしてるだけ……。私が生み出した人形を、私が好きにして何が悪いの……っ!! 作った側は、作ったモノを好きにするくせに……!! 人間だっけそうでしょう? 要らなくなれば捨てられるっ!! だから私もそうするのっ!!」

(要らない……捨てられる……)

オネイロスの叫びは、両手で耳を塞ぐモルフエにも妙に響いた。

(捨てられる……。そうか、僕は……僕はもう捨てられたんだ。姉さん、オネイロスに……。要らない人形は、捨てられるんだ……)

暗闇に溶けて沈むような感覚を覚えるモルフエ。それは、これまで散々カリオストロ達が味わった悪夢に飲まれる感覚だった。

ついに意識さえ手放しそうになる。いつそこの暗闇に溶け絶望を忘れられればと

思った。

だが――。

「……いい加減にしないかつ!!」

一人の声がその意識を引き上げる。

「人形人形とさつきから……モルフエ君は、人形じゃないだろうっ!!」

団長だった。彼は憤りオネイロスに向かい大きく叫ぶ。

「モルベウスこいつらは、確かに人形だ。言う事を聞くだけの、心の無い操り人形……だがモルフエ

君は違うっ!!」

「……違わないっ!! 同じ人形よっ!!」

「違うッ!!」

苛立ち団長の言葉を否定するオネイロス。だが団長は、さらに強くそれを否定した。

「人形は……泣かない……っ!!」

「……っ!!」

「……涙?」

団長に言われオネイロスは気づいた。そして、モルフエ自身も。

「……これは、僕が流した?」

頬を伝う冷たい雫。いつの間にか、彼は涙を流していた。辛さ、苦しき、悲しみから

感情の表れである涙を。

「モルペウスそいつらのように、同情を誘うみせかけの悲鳴を上げる人形じゃない!! 生きてるからこそ、誰だって流す涙を彼は……!! 彼には感情がある、心がある!! わからないか オネイロス、君がいたからこそなんだぞっ!!」

オネイロスは、団長の言葉に驚き言葉に詰まった。いくらでも言えるはずだった否定の声が出なかつたのだ。

「ふ、ふぎ……ふぎけないで……!! 何を根拠に……っ!!」

「……いや、団長の言う通りだな。オネイロスッ!!」

団長の言葉にカリオストロが続いた。彼女は、団長の言おうとしてる事がすぐにわかつたのだ。そしてそれは、ラムレッツダ達もまた同じだつた。

「確かにモルフェは、お前が生み出したんだろうさ。その時は、まだこの人形共と大して違いなんざなかつたらうな!」

「けど、あなたの『弟』として過ごす内変わったはずよ! それまでの記憶は偽りだとしても、弟である時間が短くても……変わったのよっ!!」

「う、うるさい……っ!!」

「モルフェのハーブティーは美味かつたぜっ!! それこそ心を込めて作つたんだろうさっ!!」

「今までの団長とのやり取りだつてそばで見てたでしょ！ あんな感情豊かなリアクション、人形じゃ無理よっ！」

「うるさい……うるさいうるさいあああああ……っ!!」

オネイロスは一転して焦りを見せた。団長達の言葉が不愉快だったのだろうが、それでも親に叱られバツの悪い子供のように喚く。

「オネイロス、お前にとつて偽りだろうとモルフエ君を『弟』として生み出したならわかるはずだ!! 彼は人を思いやり、寄り添える子だ。喜び笑い、辛ければ悲しむ。だからこそ傷付き『心』を痛めるっ!! 君が彼にそれを教えた……生きる喜びも裏切られる悲しみも!! 君自身が彼に心を与えたんだっ!! 彼は、もう人形じゃないっ!!」

団長達の言葉は、オネイロスを大きく動揺させた。更に――。

(団長さん……皆さん……)

彼等の言葉が絶望で悪夢に飲まれそうだったモルフエに対し強く響き勇気を与えたのは、間違いないかった。

(涙が止まらない……けど、今度は……辛いからじゃない……。言葉が、皆さんの言葉が……嬉しくて……っ!!)

頬を伝う涙が熱く感じた。悲しみだけを包む雫は、いつの間にか喜びを持った。

(そうだ……この辛いのも、苦しいのも……喜びもっ!! どれも僕だけのものだ。僕の、

心が感じたものだ……。僕の感情なんだ。忘れたいほど辛くても、だからこそ……)

モルフエは、周りにいるモルペウスを見た。さつきまで不気味で恐ろしく思えたその姿が不思議と怖くはない。

モルフエがモルペウスに怯えていたのは、ただ恐ろしいからじゃなかった。自分がモルペウスと同じである——その事実が恐ろしかったのだ。だが今は、もう違った。自分と人形モルペウスがはつきりと違つて見える。

(——もう僕は “人形” じゃない……っ!!)

「……モルフエ君?」

ルナールは、自分が抱きしめていたモルフエの身体の震えが止んでいるのに気が付いた。そしてモルフエを見ると彼は、目を閉じ伏せていた顔を上げた。その表情は、絶望に打ちのめされたものではなくなつていた。

「……もう止めて姉さんッ!!」

体の震えも恐怖も消えたモルフエは、涙をぬぐい立ち上がるとオネイロスへと向かい叫んだ。

オネイロスだけでなく、団長達も驚きモルフエへと振りむく。

「モルフエ? ……あなた、なんで」

「なんとなく、わかつてきたよ……。僕が姉さんに生み出されたからだろうけど、姉さん

がなんでこんなことをしたか」

「……じゃあ何故止めるの？ わかるでしょう？ 生み出した側の都合、それだけの理由で捨てられる気持ちがつ!!」

オネイロスの言葉は悲痛だった。確かにこの時モルフエは、彼女の言う気持ちや理由を漠然ではあるが理解していた。しかしだからこそ彼は、オネイロスを止めようと思つたのだ。

「わかるよ。だからこそ僕は……止めるんだつ!! だって団長さん達にこんな事したつてなんの意味もないじゃないか!」

「この……モルペウスツ!!」

苛立ったオネイロスは、一体のモルペウスを生み出しモルフエへと向かわせた。

「いかんいかんつ!! 下がれモルフエ君ツ!!」

後ろに下がるよう指示する団長。ルナールも彼を護ろうと動く。だがこの時モルフエは、迫るモルペウスを見て動かなかつた。しかし恐怖で足が竦んだのではない、彼は覚悟を決めたのだ。

(大丈夫……怖くない)

「アアアア……!!」

「……お前は、僕じゃないつ!!」

「ウア……ア、アッ!？」

モルフエは、ずっと手に持っていた杖のようなガラガラの玩具を振るった。するとガラガラのはじける音色がオネイロスと同じように波紋となり弾け、モルペウスを破壊したのだ。

「モルフエ、あなた……それは……っ!」

「姉さんが、星晶獣なら……僕にだって力がある!!」

確かな決意と勇気が漲るモルフエの表情を見たオネイロスは、彼がこの僅かな間で立ち直った事を悟る。そしてそれはオネイロスを更に苛立たせた。

「そう……あなた……あなたはまだっ!! まだ私に逆らう気なのっ!？」

「逆らうんじゃない、止めるんだっ!!」

「黙りなさいっ!! 同じよっ!! 人形のくせに、私に逆らう……っ!!」

「違うっ!! 僕は僕の意思で戦うんだっ!! 僕は、人形じゃない……姉さんの弟だっ!!」

「もう、黙ってええエエ——ッ!!」

オネイロスが悲鳴のような叫びをあげたかと思えば、再びあのガラガラを振り鳴らした。だが今度は、空をぶつように振り回す乱暴なもので波紋の攻撃も破裂というより爆裂と言ふようなものだった。

「横からファランクスッ!!」

「わあっ!?!」

波紋が広がりきる前に団長がモルフエの前に立ち広域防御の技“フアランクス”を使用した。生み出された障壁は、波紋からモルフエと団長達を護った。

「いいぞモルフエ、よく言ったよく立ち向かった。立ち直って直ぐにしちや良い啖呵だ褒めてやる。だがもう言葉の説得はダメだ。完全に頭に血が昇ってやがる……!!」

「ええ、わかつてはいましたが……」

モルフエの啖呵を誉めつつカリオストロは、聞く耳を持たないオネイロスの説得は始めから不可能と判断しており、モルフエもまたそうであった。

「皆さん……お願いがあります……」

言葉での説得はできない。さりとてオネイロスに力で立ち向かう事は、モルフエ一人では到底できない。彼には仲間が必要だった。

「オネイロスの一部でしかない僕の事を信じられないかもしれないけど、どうか……お願いします……力を貸してください。オネイロスと、姉さんを一緒に止めてください……」

「……モルフエ君」

「僕達のせいでこんな事になって、図々しいお願いなのはわかってます……だけどつ」

「モルフエ君」

団長がモルフェの肩を掴み背を屈め視線を合わせた。地味だなんだと言われる団長だが、この時モルフェが見た彼の視線は、実に力強く頼りがいのあるものだった。

「倒すんでなく、止める……だね?」

「だ、団長さん……はいっ!!」

「そう言ってくれて安心した。こっちは元よりそのつもり……」オネイロス〃を止めて、〃ヴェトルちゃん〃には帰ってきてもらおう。……モルフェ君、もう人形が来ても慮無しだ。いいね?」

「はい……全力で、全部ぶち壊しちゃってくださいっ!!」

「よしっ!!」

迷いがなくなったモルフェの意思を確認した団長は、スツと立ち上がった。団長もどこか吹っ切れた様子で闘志を漲らせている。

「ルナールさんもこっち参加!! 俺達全員で決着付けますっ!!」

「了解、わたしだつて暴れちゃうわよ!」

モルフェを護る為後衛に回ったルナールも前に出る。もう誰一人後ろにはいかず、全員がオネイロスとの決戦に臨もうとする。

「オネイロスにモルペウス、ヴェトルちゃんとモルフェ君……戦いのどつかに遠慮があった。だがもう無い、モルフェ君がやると言つて俺らが応えんわけにいかんよなあ

!!
」

劍を構え、拳を握り、鍊金術を展開し、筆を持つ。歪に思える組み合わせの彼らが、モルフエは本当に頼もしく見えた。

(ごめんなさい団長さん、僕達が原因でこんなことになったけど………だけと思わずにいられない。僕が「生まれて」出会えた人達が……皆さんで良かったと……)

悪夢を巡り夢を正す戦い、その決着は近かった――。

Repaint the Nightmare (前編)

■ 一 夢みるだけじゃいられない

■ この時オネイロスは、自分に挑む目の前の人間達がわからないでいた――。

「もう人形に足止めなんかされんぞーっ!!」

「蹴散らせウロボロスッ!!」

「ほあたあーっ!!」

「腱鞘炎上等ぬああーっ!!」

自分が生み出したモルペウスを次々と蹴散らし向かってくる人間達――星晶戦隊(以下略)。

オネイロスは、気に入らなかつた。この人間達が。

仲間だとか、友達だとか、〃絆〃と言う聞こえは良い言葉でつながろうとする者達。

そんなもので縛ろうとする、利用しようとする者達。星晶戦隊(以下略)がそうだ。そ

してその団長がそうだ——オネイロスは、信じて疑わない。

忌むべきもの、忌避すべきもの、オネイロスにとつて団長達はおぞましく見える。人間だけではない、団長達に混ざり自分に戦いを挑むB・ビィ、そしてモルフエ。

「だおらあア——ッ!! あだだだだぬおらア——っ!!」

「わああーっ?!? ビ、B・ビィさん光弾撃ちすぎわあああゝっ?!?」

「わははっ!! 巻き込まれんなよモルフエ!!」

筋肉モリモリマツチョマンのマチョビィになったB・ビィが両手から無数の光弾を撃ちまくりモルペウスを吹き飛ばしていく。モルフエはその傍で他のモルペウスを、ガラガラを使い倒していた。

なぜ星晶獣である彼らが“向こう側”なのか? “こっち側”であるはずだ。彼らとて同じ星晶獣、ましてモルフエは——オネイロスの思考は、苛立ちと共に混乱していた。

「私は、間違つてない……っ!! あなた達みんな嫌いよっ!!」

苛立ちながらガラガラを振り回し音の波紋を広げるオネイロス。

「なんのフアランクスッ!! せいっ!!」

だが団長が障壁を生み出しそれを防ぐ。いつの間にかオネイロスの攻撃は、殆ど団長達に対して通じなくなっていた。モルペウスによる数の差もまるで効果がない。むし

ろメルペウスを生み出すほどオネイロス自身が消耗するだけになっている。

「どうした終わりか？ どんどん来いっ!!」

フランクス

障壁で攻撃を受けたとしても、100%のダメージカットは不可能、どうしてもわずかなダメージは、受けることになる。だが団長は、そんな様子をまるで感じさせない。雰囲気だけならまるでノーダメージのようだった。

「ばあさんやジータの攻撃は、余裕で全属性ダメージ無効ぞっ!! そんなもんか星晶獣!!」
「なんなの、なんなのあなた達は……っ?!」

「知ってるはずだろ!! 俺達は騎空団、星晶戦隊……以下省りやあああ——つくつ!!」

悪夢はもう、彼らを縛らなかつた。

■ 二 往時渺茫としてすべて夢に似たり

■ オネイロス、またメルペウスに対して戦い難いと暫し攻めあぐねたが、モルフエ君の奮起によりその流れが明らかに変わるのを俺達自身が感じていた。

戦ってわかったがそもそもオネイロスの脅威とは、その特殊な夢を操る能力である。現実の人間を悪夢へと誘い閉じ込めることが最大の攻撃なのだ。一方でオネイロス自

身の強さは、ガラガラ波紋攻撃にさえ気を付けねばさほど脅威と言えなかった。

また次に脅威であったモルペウスによる数の差を埋める戦法であるが――。

「B・ビィ、モルペウスは頼む!! 蹴散らせといってくれっ!!」

「任せろあああっ!!」

これは最早B・ビィだけで十分対処できてしまう。

油断し再び悪夢に囚われたりするならば話は別であるが、今の俺達にそんなものは通用しない。

「この、この……っ!! こいつっ!!」

棍棒のように手に持ったガラガラを俺に何度も振り下ろすオネイロス。ヴェトルちゃんとしての姿と違いオネイロスの姿は、明らかに巨大であったが彼女以上の巨体の星晶獣と戦った身としては、まだまだ剣で受け止めれる範囲の攻撃だった。

「……とは言え、重いもんは重いなっ!!」

「お前、ふざけてるのっ!!」

うちのコロツサス（本気）程巨大で無いにしても埋めれぬサイズ差、流石にあまりに攻撃を受けては手がしびれる。

「ところでオネイロス、人形の数が減ってんじやないのかいつ!!」

「ちい……っ!!」

「これ以上モルペウス出すのも限界か……? 出せたところで、全部B・ビーが吹っ飛ばすがねっ!! もうそろそろ、終わらせてもいいと思うなあ俺」

「戦いの終わりは、お前達の悪夢よっ!! 大人しくまた悪夢に沈んでっ!!」

「そいつは——」

「お断りだなあ!!」

俺がお断りする前にカリオストロの攻撃がオネイロスに向かった。錬金術で生み出された槍が地面から伸びてゆく。

「ほら続けよ二人ともっ!!」

「任せてっ!!」

「日々のスケッチの成果あ!! サラサラおりやあーっ!!」

カリオストロの生み出した槍の間を縫うように駆けるのは、素面で絶好調のラムレッダ。そしてルナルさんのスケッチより飛び出す魔物達。

「ほあっちゃああ——っ!!」

「GAUGAU!!」

槍を避け仰け反ったオネイロスへラムレッダの拳と魔物の爪が向かう。

「この……来なさいモルペウスッ!!」

しかしオネイロスは、ラムレッダ達の攻撃が当たる前に数体モルペウスを生み出しそ

れを盾にし攻撃を防いだ。モルペウスは、簡単に砕け散ったがオネイロスが身を守るには、充分であったようだ。

「なんてうつとうしい……っ!!」

「こつちのセリフだオネイロス!! もうオレ様達に悪夢は通用しねえっ!! 頼みの人形モルペウス

も意味ねえんじやお前の負けだっ!!」

「ふざけるなっ!! 誰がお前達みたいな……っ!!」

オネイロスがガラガラを振るい波紋を生み出す。もう一度フアランクスを出そうとしたが、俺が行動するよりも先にモルフエ君が動いた。

「同質の攻撃なら……ええーいつ!!」

「うあ……っ!」

モルフエ君がガラガラの杖を強く振りほとんど同じ規模の波紋を生み出した。するとオネイロスの波紋とそれは衝突し弾けて相殺された。

相殺による衝撃でよろついたモルフエ君を支えると、彼自身自分のやった事に驚いた様子だった。

「やるねえモルフエ君」

「え、ええ……本当に出来るか不安でしたけど、うまくいきました!」

「頼もしいねえまったく」

この場面でモルフエ君は、本当に頼もしい存在になった。心が折れてしまうような突如の逆境を乗り越え、自ら逆境へと立ち向かう勇氣を得たのだ。

しかしどうやら、オネイロスはそんな彼の事が気に入らないらしい。同じく相殺の衝撃でよろめきながら、彼女は憎悪と嫉妬を含ませた視線を俺とモルフエ君に向けていた。

「……………どうしてっ!!」

「うん……………」

「どうしてモルフエ^{あな}には、周りに誰か居てくれるの……………っ!」

オネイロスが怒りの声を——いや、これはもう怒りだけのものではない。ただの叫びであればもう散々彼女は叫んでいる。この叫びには、ただの怒り以外の感情を感じた。

「オネイロス、お前……………悲しいのか?」

「うう……………っ!! うああああ……………っ!!」

「だとしたらもう止せっ!! 戦いを止めろ!!」

「うるさい……………っ!! うるさい……………っ!!」

彼女の叫びは慟哭だ。怒りと苛立ちの根底に、隠し切れない悲しみがあつた。

「悲しくて悪いの!?! この怒りが悪いとでも言う気なのっ!?!」

「そうじゃない!! その感情を戦う理由にしちやいけないんだっ!! それを続けたら、

君が見せた悪夢と変わらなくなるっ!! 君が囚われるぞ!」

「何も知らないくせに……っ!! 何が違うの、モルフエと私……何が違うのよっ!? 私
も捨てられた、私も辛かった……っ!! なのに、誰も……私には……っ!!」

「まさか……や、やめて姉さんっ!? それ以上悪夢をふりまいちや駄目だ……っ!!」

様子が変わったオネイロスを見て、モルフエ君が何か嫌なものの感じ取ったのか焦りオ
ネイロスを落ち着かせようとした。だがやはりその声は届かない。

「いなかったくせにっ!!」

「え……っ!」

「私が一人の時に、いなかったくせに……っ!!」

「何を言っ……おおっ!」

「ずっと、ずっと……私は一人……っ!!」

俺達もまたオネイロスの周りに異様な力が集まるのを感じた。今までの波紋攻撃と
は、明らかに違った。

「私だけ……私だけこんな悪夢に一人はイヤアアアアア——ツ!!」

ヴェトルちゃんの顔で慟哭していたオネイロスの顔が絶叫と共に“裏返り”空洞へ
と変わった。その瞬間、その空洞からおぞましい黒い靄が大量に噴出し始めた。

「い、いけない……!」

オネイロスから嘖き出る黒い靄を見たモルフエ君は、その正体を知っているようだった。

「聞くのが怖いが聞こう、何がやばいのっ!？」

「姉さんの、オネイロスとしての力……夢を操る力が暴走してますっ!! ああ、あの靄は、僕達どころか、この一帯を丸ごと悪夢で飲み込もうとしてるんですっ!!」

「つまりどうなるっ!？」

カリオストロが答えを急かした。辺りには、オネイロスから発せられる異様な黒いオーラが渦巻きとんでもない事が起きようとしているのは明らかであった。

「ここは『夢の回廊』です。夢ではなく、あくまでも夢へ行くための道……けどここ自体を『悪夢』に変えてしまつては、回廊内の夢の扉が悪夢を通じて全部『繋がつて』しまますっ!!」

「それは……かなり不味いんじゃないのっ!？」

悪夢で繋がる——それを想像したラムレッダが顔を歪めゾツとしている。俺も皆もそうだ。果てしてそれがどんな結果を招くか。

「まともな夢も全部悪夢に代わる……」

「それどころか、最悪他人同士の夢が繋がって個人の境界が崩れて……っ!! そうなつたら悪夢と言う集合体になって二度と『自分』に戻れなくなりますっ!!」

「史上最悪の痲癩だ……」

「今日何度思ったか数えてねえが、あえて言うぞ……まさに悪夢だ」

カリオストロの言葉、まさに悪夢……ほんと「まさに」である。俺も何度今日思ったかわからん。

事態は最悪だった。この夢の回廊には、どこの誰かは知らない人達の夢の扉もある。その全てが被害に遭ってしまうのだ。俺達は何が何でもオネイロスを止めねばならぬ。

「ひ、一先ず霧から距離を取らないと……」

「……いや、違う」

「えっ?」

モルフエ君は、この黒い霧から逃げるように言う。だが俺はそう思わなかった。確かに霧は恐ろしい、だが今俺達ができるべきなのは後退ではないはずだ。

「霧は突っ切る……っ!!」

「ええっ!?!」

前進、この俺の判断にやはりモルフエ君は驚いていた。

「む、無茶ですっ!!? いくら何でも無茶だ、直ぐに悪夢に吞まれちゃいますよっ!!?」

「霧の密度を減らす。霧自体に悪夢の力があるなら、少しでも晴れば効果は薄まるん

「じゃないのかい?」

「それは、確かにそうですが……」

「B・ビイツ!! モルペウスはもう出てこないよな!!」

「ああ、全部ぶつ飛ばした!」

オネイロスが暴走してから新しく生み出されるモルペウスの気配がなくなった。おそらく靄を生み出すのに全ての力を込めているのだろう。これでB・ビイツの手が空いた。

「力溜めとけ、でつかいの一発頼むから」

「いいぜ、派手にやってやる」

B・ビイツの掌にバリバリと音をたてエネルギーが溜められていく。毎度思うがコイツ一人だけ世界観おかしい技を使うな。

「皆の衆、B・ビイツの一撃で靄ふつとんだら一気に攻めるよ」

「任せな。こんな無茶な手をうったんだ、向こうだっていい加減限界のはずだ」

「いよいよここが正念場ね……!!」

「邪眼開放の時が来たわねっ!!」

「……邪眼?」

「あ、ごめん勢い!! 追及しないでえ!!」

誰一人退こうとしないのを見てモルフエ君も俺が、俺達の本気だとわかつたらしい。相変わらず驚いているが、彼もまた退こうとしなかった。

「ほ、本気でやる気なんですね……っ!？」

「うん、本気。だつてほつとけんでしょう」

「ほつとく……?」

「そ、あんな辛そうにしてる子」

俺にはこの靄がオネイロスの涙に思えた。空つぽの顔からあふれる、空つぽの涙。ヴェトルちゃんとしての顔を失い涙を流す顔を持たないオネイロスにとっては、人を悪夢に誘うこの靄しか嘆きの感情を表せないでいる。

「いくつも悪夢を見てる内に考えたよ。なんで悪夢なのかって」

「えっ?」

「人を夢の世界に捕えるなら、別に悪夢じゃなくてもいい。幸せで居心地の良い夢でもいいはずだ。だつてその方が目覚めたがらない……なのに、なんで悪夢なのか。そこんところが、きつとあの子が人を、そして自分を苦しめてる理由なんだろうな」

「……」

「あれは、助けてあげなくちゃいけない子だ」

モルフエ君は、俺の言葉を聞いて沈黙した。彼には、もう十分に分かっているのかも

しれない。オネイロスの、ヴェトルちゃんの気持ちというものが。

「ま、手段が乱暴になって悪い気もするがね」

「おい、もう準備できたぜえ……っ!!」

「ああ、わかったあ……っ!？」

B・ビィに呼ばれ奴を見れば、その掌には、バリバリと閃光を放ち今にも爆発しそうな漆黒のエネルギー体が浮いていた。

「お前それ俺達まで吹き飛ばねえだろうなっ!？」

「安心しなあ……キチつと調整してやったからよおっ!! 強そうで強くない、少し強い
エネルギー弾よお!!」

「こえーよっ!! ハッキリしてくれそこはっ!？」

果たして大丈夫かと思っってしまうが、今さら引つ込めろとも言えん。あとこれ以上ぶざけてもいられん。

「ええい、とにかく頼むぞ!! やれB・ビィッ!!」

「っしやああつ!! くらえ、これがオイラの……ビィッグ・バン・アタックだっ!!」

B・ビィがようわからん技名を叫びエネルギー弾を靄に向かい撃ちだした。それは靄自体には向かわずオネイロスの近く、特に靄の広がる地面に衝突し炸裂する。

「アア……ッ!？」

「オネイロスの動きがっ!!」

激しい閃光と衝撃と共に靄を吹き飛ばしたB・ビイの攻撃は、靄を噴出するオネイロスの動きも止めるのに成功した。

靄が晴れて一直線、オネイロスへ向かう道が生まれた。

「団長さん……っ!!」

モルフエ君が俺に向かい叫ぶ。

「姉さんを……助けて」くださいっ!!」

彼への答えは決まっていた。

「星晶戦隊に任せなさいっ!!」

■ ■ ■ POWER TO THE DREAM

——彼女にとつて“夢”とは、手段であり武器であった。

人間のように希望だとか、明るい未来だとか、幸せでロマンティックな何かを夢想するようなモノでも、夜眠るのを楽しむものでも、センチメンタルになる“場所”でもない。

自分を生み出した主である星の民に命じられれば空の民を眠らせ夢に捕らえる。そ

うする為のもの。

。そして彼女が手段として生み出し武器として利用した夢は、その全てが悪夢だった――

「――夢は、全てが悪夢……っ!! 幸せなんてありえないイイイ……っ!!!」

「それは違うっ!!」

悪夢を経てなお立ち向かう事を止めない団長達。いくら夢と幸せを否定しようと、彼らはオネイロスに向かつていく。

「君は悪夢だけを生み出しそれを見つけてしまったっ!! 悪夢に飲まれたのは、君自身だっ!! その悪夢を、俺達は止めるっ!! ツインサーキュラーッ!!」

「くっ!?!」

団長がオネイロスに向かい剣を一瞬で二度振るい重なる二つの斬撃を繰り出した。本来二刀流で行う技であるが、アベリテイあらゆるジョブの極意を得た者――団長やジータのような人物であれば、それを剣一本で行う事ができる。

だがその斬撃をオネイロスは、ガラガラで受け切った。ガラガラには、ひびが入ったがそれでも二つの斬撃は、ギリギリでオネイロスからそれた。

「この程度で……!!」

「いやまだだっ!! ルナールさんっ!!」

「ええ、今の良い構図……もう描き上げてるわっ!!」

ルナールがオネイロスに向かいスケッチブックを向けた。そのスケッチブックには、斬撃を放つ団長の姿がそっくりそのまま描かれていた。僅かな時間で描かれたと思えないその絵は、ワツと紙より浮かび上がり文字通りに「飛び出した」。

「そんな落書き程度で……っ!?!」

ルナールのスケッチから飛び出した「団長」は、団長とまったく同じ動きでオネイロスへと向い二つの斬撃を放つ。

立て続けに「全く同じ攻撃」が来ると思わなかったオネイロスだが、とっさにこれも同じようにガラガラで攻撃を受けようとした。だがすぐ自分のガラガラが、先の攻撃でひびを入れられていたのを思い出す。

「しま……っ!?!」

「——ツインサーキュラー!!」

「きやああっ!?!」

一度目のツインサーキュラーでひびの入ったガラガラは、二度目の攻撃に耐える事ができず攻撃を受けた瞬間にガラスのように砕け散った。

オネイロスが砕けるガラガラを見て視線を落とす。両手も空き無防備な姿が曝される。

連撃の最後ラムレッダは、渾身の一撃を叩き込んだ。普段の彼女からは、想像も出来ないキレのある動き。その連撃の冴えと一撃威力は、あのフェザーの拳にも劣っていなかった。

「次、ルナールッ!! いけるっ?!

「大丈夫、今描き上げたわっ!!」

ふら付いたオネイロスへ向け続けてルナールが再びスケッチブックを向けた。今度そこに描かれていたのは、二人の騎士の姿があつた。

「自分の夢をもう迷ったりしないっ!! いくら悩んだっていい、後悔だつてするに決まつてる……けど、どれも描かなきゃ始まらないっ!! カラミティ・コミックスッ!!」

スケッチブックから飛び出す二人の騎士——ポボルとマキリ、ルナールにとつて完成の見えぬ憧れの二人。その二人が剣を構えオネイロスを鋭く攻撃した。

「くあっ!?!」

「まだこれが精一杯……けど私の夢は、あんな挫折で終わらないっ!! 本当の見本市に出るのっ!! 私 の 絵 へ の、 耽 美 物 へ の 情 熱 は、 悪 夢 に な っ て 負 け 不 行 だ っ た っ け っ!!」

まだまだ魔物絵師としての絵柄の抜けない二人の青年の姿。だがそれでもルナールは、彼等を描いた。描きたいからこそ描いたのだ。その熱意は、確かに本物であり、ポボル“ 達の剣の冴えこそがその表れだった。

「ぐうつ!! まだ、まだ……こ、こんな程度でエ!?」

「——終わるわけねえよなあ……!!」

ラムレッダ、ルナルと続けて直ぐ間髪入れず既に錬金術を展開していたカリオストロが攻撃を放とうとしていた。

「こちとらやつと封印解けて自由なんだ。今更眠らされた上に悪夢なんざ冗談じゃねえつ!! オレ様はまだまだ可愛くなれんだからよつ!!」

「そんな勝手なつ!!」

「勝手で結構……それがカリオストロの夢だもんつ! ☆ 文句あつかつ!! くらいな、アルス・マグナアアツ!!」

「きやああツ!!」

赤と青、二体のウロボロスが姿を見せオネイロスを挟み込む。そしてそのまま互いに円に高速回転してゆくと二体の身体が激しい閃光を放ちながら炸裂した。

鮮烈にして強烈、始祖カリオストロの真理の一撃は、オネイロスに大きなダメージを与えた。

「あ、が……ううつ!?!」

閃光が収まった時オネイロスは、倒れこそしないがもうあの靄さえ出せないでいる。彼女には膝が存在しないが、通常の人型星晶獣であれば膝をついていただろう。

「……よせオネイロス、もう立つな」

「はあ……はあ……っ!! うるさい……まだ、私は……お前みたいなのに……っ!!」

剣を構えながらも団長は、オネイロスに降伏を促した。事実オネイロスにはもう抵抗する力は、ほとんど残っていない。誰が見ても明らかだった。

しかしオネイロスは、まだ空っぽの顔から呪詛めいた言葉を団長に向けて発する。

「なんで、なんで……お前達みんな、悪夢に囚われたくせに……っ!! 一度助かったからって、悪夢が終わるわけじゃない……っ!!」

「かもな」

「現実で、もつと酷い事が起こるかもしれないっ!!」

「そんな日もある」

「……なら何故っ!? 何故そんなに……希望を抱いて『夢』を肯定できるの……っ!？」

「夢が悪夢ばかりじゃないからさ」

「そんなの……嘘よ……っ!! 薄っぺらな優しさで塗り固めた偽善で都合の良いように言う……!! 優しい言葉は、みんな嘘っ!!」

オネイロスは、武器も失いながらお団長に掴みかかろうとした。それを見た団長は、一息呼吸をして剣をオネイロスに向ける。

「……地烈斬ッ!!」

「ぐう……っ!?」

下から振り上げるような剣の軌道。放たれた斬撃のパワーが地面へと伝わり地面を割って噴出した。

その力はラムレッツダ達の奥義に比べればなんて事のない普通の奥義、だがラムレッツダから始まる奥義の連鎖により溜まった力を解き放つたものとしては十分であった。

「悪夢」と吹き飛ば……ディアストロフィズムツ!!」

「ああ……ッ!? きゃあああああああ……!?」

地烈斬よりも大きく広がる地面の裂け目。そこから溢れる四人による奥義に込められた力。炸裂する破壊エネルギーによる衝撃凄まじく、離れた場所にいるモルフエさえ吹き飛びそうになった。

「うわああ——ッ!」

「つと、ぶねえ!!」

衝撃で浮いたモルフエの身体をB・ビィが掴んだ。

「あ、ありがとうございます……」

「おう。それより……これは決まったな」

徐々に収まっていく地面の破裂により生じた噴煙のような土埃。ラムレッツダ、ルナル、カリオストロと姿が見えてゆき団長の姿が見える頃には、舞い上がった土埃は殆ど

消え――。

「う、あ……」

最後にはオネイロスではなく、地面に倒れるヴェトルの姿が見えた――。

Repaint the Nightmare (後編)

■ 一 姉弟 ■

団長達による奥義の連撃によってオネイロスは、悪夢の力を使い果たし地へと伏せていた。その姿は、オネイロスのものから変わりヴェトルの姿へと戻っている。

倒れてはいるが意識はあるらしく「うう……」と弱々しくも呻き声が聞こえている。その様子をラムレッダが心配そうに見ていた。

「落ち着かせれたかしら……」

「無力化は出来たと思いますけどね。あの靄も晴れてるし」

団長が辺りを見渡すとオネイロスから発せられていた悪夢の靄が消えていた。

「しかしこれは……随分無茶苦茶だ」

B・ビーのエネルギー弾に団長達による奥義の連発、それらの影響でここ一帯の景色は様変わりしてしまった。元々摩訶不思議な景色であった回廊ではあるが、地面は抉れ

吹き飛び、あるいは隆起し、更には大きな亀裂が走るなどして足元が酷く不安定になっていた。

「道中落とし穴はあったが、これは特に底無しだな……落ちたらヤバそうだ」

亀裂で出来た穴を見て冷や汗を流す団長。別に高所恐怖症だからではない、彼は何かとよく落ちるためこのような亀裂や穴が苦手だった。

「姉さんの暴走で回廊自体が僅かとは言え悪夢化した影響もあると思います」

常識の通用しない回廊とは言え異様な崩れ方をした理由を、オネイロスの力によるものと考えたモルフエ。実際広がる穴から見える底無しの暗闇の放つ雰囲気は、彼らが見て回った悪夢のようであった。

「實際落ちたら本当に戻れないと思います。悪夢の影響で出来た穴ですから気を付けて

下さい」

「ひえっ」

現実とは違う異空間である回廊の崩壊は、ただ地面が割れ穴が開いた程度ではない。存在するかすらわからない「底」に向かい落ち続ける事さえあり得る。モルフエの忠告に団長は、肝を冷やした

「……」の場所も暫く不安定で危険です。形を変えながら少しずつ元の回廊に戻ると思えます……元々決まった「形」なんてないですけどね」

「だからこそどう戻ろうとするのかわからんわけか……恐ろしいこった。それなら長居は無用だな」

「……で、アイツはどうするつもりだ？」

「うゝむ……」

カリオストロが指さしたのは、地面に倒れたままのヴェトルだった。団長は少し困った様子で、改めてヴェトルを見る。

「……話せるかなヴェトルちゃん？」

「……」

団長話しかけられたヴェトルは、立ち上がる気力がないのか黙ったまま体を少し起す。もうとても戦える様子ではなかった。

「姉さん……ッ!!」

「来ないで……っ!!」

その痛々しい姿を見たモルフエは、思わずヴェトルへ駆け寄ろうとする。だが直ぐにヴェトルが叫びモルフエを拒んだ。ビクリとしてモルフエは止まる。

「はあ……はあ……。ま、負けた……負けたのね、私……」

荒い息を吐きふらつきながらもやつとのことで立ち上がるヴェトル。彼女は何を思ったか、そのまま団長達からすぐ離れようとした。対して団長は「おいおい、待て待

てヴェトルちゃん」と慌てて止まるように呼び掛ける。

「無理に動いちやいかんよ、もう動くのもやつとだろ」

「ふ、ふふ……そうよ。もう動くのがやつと。悪夢さえ……もう、生み出せない……」
「だったら」

「黙ってよ……何をしたって私の勝手」

勝手と言うが今ヴェトルになにかする気力は微塵もありはしなかった。あえて言うのであれば、おそらく一人になりたかったのかもしれない。団長達を忌々しく鬱陶しげに見る瞳がそう思わせる。

「それとも……私が他の星晶獣みたいに仲間になると思った……？ ふふふ……冗談じゃないわ……あんな、仲良しごっこに……誰が……。それより私を倒して満足でしょ？ 清々したんでしょ……？ 帰ればいいじゃない……モルフエを連れて勝手に目覚めればいい……!!」

「いや君も一緒に……」

「ほつといて……っ!!」

団長の言葉も聞き入れず、取り付く島もない態度に困って頭をかく団長。その代わりに言葉を続けたのは、モルフエであった。

「姉さん、もう終わったんだよ!! 一緒に戻ろうよ……っ!!」

「戻る……?」 戻るってどこに? あの一人ぼっちの世界に? は、ははは……!!」

モルフエにも一緒に戻るよう言われたヴェトルだが、今度は拒絶だけでなく乾いた笑い声で返事を返した。

「あなたは、あなたは良いわ……もう、一人じゃないものね? 受け入れてくれる人もできて、お人形じゃなくなつて……さぞ幸せでしょう? ねえ!」

「そ、そんな事……」

「私は、捨てられたら……ずっと一人だった。なのにあなたは、私に捨てられても……一人じゃない……」

モルフエを睨むヴェトルの瞳には、その言葉に反し怒り以上の羨望があつた。

「バカみたいだわ、私……。星晶獣を……仲間なんて言う奴に、同じ思いを……辛い悪夢を見せてやりたかつた……。なのに、結局惨めなのは……私だけ……」

よろよろと空なのかさえわからない回廊の上層を見上げるヴェトルは、一言「疲れちゃつた……」と寂しそうに呟いた。

「違う、違うよ姉さん、もう姉さんだつて……!!」

「違わない!! 私……!! 私……!! 私……!! 現実でも夢でも……ずっと一人ぼっち!!」

ヴェトルが団長達から離れようと更に後ろへと下がる。

——この時、ヴェトルの一步によつてその足元に無数の亀裂が走つた事に気づけたの

は、ヴェトルを除き誰よりも回廊に熟知しているモルフエ一人だった。

悪夢化によって不安定となった回廊——モルフエに悪寒が走る。「止まって」と言う言葉は出なかった。姉はその言葉を聞かないだろう、意味がないと直ぐに判断したのだ。その代わりモルフエは、まるでその場で弾けたかのような勢いで駆け出した。悪寒と同時に感じた直感、どうすべきか自分の意思のままに彼は動いたのだ。その突然の行動に、彼以外の誰もが驚いた。

「と、止まりなさい——」

ヴェトルが驚いたまま何度目かの拒絶の言葉を言おうとする。だがその言葉を言い切るよりも先に、あるいはかき消すように鳴り響く激しい崩落の音。そして上下の感覚がほとんど無いはずの回廊にも拘わらず明確に感じる“落下”の浮遊感がヴェトルを襲った。

「あ——」

悲鳴を上げる間もなかった。脆く不安定となった回廊深層の地面、無数に走った亀裂が一気に崩壊し大穴となったのだ。

ヴェトルがそれに気付いた時、既にその身体は瓦礫と共に宙へと浮いていた。

(落ちる——どこ——?) 底、見えな——)

消耗しオネイロスとしての力を使えない今のヴェトルは、回廊内を浮遊する事も出来

ず、急な落下を防ぐ事は出来ない。

彼女は星晶獣、決して命を落とす事はないだろう。だが底の見えない、正に奈落の底に落ちた時、果たしてオネイロスの力を使えたとして何時脱出できるのか？ そもそも“落ちる”事ができるのか？ あるいは、脱出しようなどと言う気力が彼女に残っているのだろうか？

その疑問の答えを彼女自身を知るのは、落下した後の事となる。

「——姉さんっ!!」

——落下すればの話であるが。

「……モルフエ?」

浮遊感を感じてすぐ、落下の感覚が止んだ。完全に落ち行くものと思っていたヴェトルは、数秒呆然としてやつと穴に落ちた自分の手を掴むモルフエを見た。

亀裂に気が付いた時点で駆け出した彼は、自身までも穴に落ちるような勢いのままヴェトルの元に滑り込み、腹這いになりながら手を伸ばし落ち行く姉の手をギリギリながら確と掴んでみせたのだ。

「ううっ!!」

小さな体で出せる力を出せる限り込めヴェトルを引き上げようとするモルフエ。だがそれでも支えるのがやつとだ。

「モルフエ、あなた……なににして……」

「ね、姉さん……そっちの手も、伸ばして……!!」

まだ状況を飲み込み切っていないヴェトルだったが、自分を支えるモルフエの周りにも新たな亀裂が出来ていくのに気が付く。直ぐにもモルフエの周りも今起きたように崩れるだろう。

「ダ、ダメ……離しなさい……っ!!」

「嫌だっ!!」

「あなたまで落ちるわっ!!」

「嫌だ……っ!!」

咄嗟にヴェトルから出た言葉は、モルフエを案じるものだった。なぜ今更そんな言葉が出たのか彼女自身もわからない。だが「自分諸共モルフエが落ちる」と感じた時そう言わずにはいられなかった。

だがモルフエは譲らない。より一層ヴェトルを握る手に力を込めた。しかしヴェトルだけでなく、モルフエもまた幼い子供の体である。ヴェトルを支え続けるには、どうしても力が足りなかった。それでも絶対にその手を放そうとはしない。

「見捨てるもんか……っ!!」

「モ、モルフエ……」

「絶対に見捨てるもんかっ!!」

モルフエが叫びヴェトルを引き上げようとする。だが力を込め引き上げようとしたためか、モルフエの周りの亀裂が更に広がってしまった。二人の体重を支えきれなくなった地面は、そのまま激しく崩れ始めた。

「わああああ——っ!?!」

もはや絶体絶命、モルフエもこのまま落ちるのかと思われた——その時。

「そのまま手を離すなっ!!」

「ウロボロスッ!!」

モルフエの時以上の勢いで今度は、団長が二人に向って飛び込んできた。彼はそのまま落下する二人を両手で力強くつかまえた。

それとほぼ同時に団長の背後から現れたのは、カリオストロが呼び出したウロボロスだった。ウロボロスは、大きな口を開きなんとそのままヴェトル達を掴んだ団長の下半身を啜え込んだ。

「だ、団長さ……!?!」

「衝撃備えて!! ぶつかぐええ——っ!?!」

「団長さああ——んっ!?!」

三人分の体重を口で支えたウロボロスの体は、その重みで頭部のほうからグウンと振

り子のように下がりそのまま大穴の壁面へと向かう。ウロボロスに啜えられた団長は、二人を離すまいと手に力を籠め、二人にも衝突に備えるよう言おうとしたが、丁度団長の衝突コースに出っ張りがあり、幸か不幸かその出っ張りで飛び出した分団長一人だけが衝突しモルフエ達の衝突は免れた。

「おぐお……だ、大丈夫か二人どぼ……ぐええ……」

「団長さんが大丈夫ですかっ!? 僕が聞くのも変ですけどっ!? 顔モロ入ってましたけどっ!?」

「き、今日一番の負傷かもしれん……」

心なしか顔がへこんで見える団長であるが、モルフエが心配した程の負傷ではないらしく、余裕があるのか二人をつかんだ両手の力も弱まっていない。

「あなたまで、なんで……」

一方でヴェトルは、心配よりも困惑の表情で団長を見た。モルフエに続いて彼まで危険を冒し飛び込み自分を助けるなどと思いもしなかったのだ。

「なんでもくそもあるかい!! 夢から覚めようつてのに、こんな目覚めの悪いオチはごめんだっ!!」

「だって……」

「御意見無用っ!! 悪夢は終わりだ、俺も、君もっ!!」

力強い返事、力のこもる二人をつかむ腕。ヴェトルは、言葉が出なかった。しかし、何か熱いものが体の奥底から湧く気がした。彼女は、その湧き出るなにかを、はるか昔に知っていた気がした。

「ウギギ……ッ!! シャ……ッ!!」

「すまんウロボロス!! もうちよい頑張ってくれえ!!」

一方余裕が無いのは三人を口で支えるウロボロスであった。並の魔物より強いカリオストロの生み出した存在であつても、空中で咄嗟に三人を啜えて支えるのは厳しいよ、うで頭部の羽を必死にはばたかせ落ちないように踏ん張っている。

「おーい!! 今から引つ張り上げつからよう、二人離すんじやアねえぞっ!!」

団長達に向かつて頭上からB・ビイの声が聞こえた。どうやらウロボロスの尾を握つたよう、ウロボロスごと団長達を引き上げようとしている。

「わかつてる!! 早いとこ頼む……あ、ちよつと待て!! 俺んとこ凹凸多い!! ストツプ、待てB・ビイ引つ張るの待つ——」

「ダオラアツ!!」

「ぐわああああ——ッ!?!」

「だ、団長さあああ——んっ!?!」

団長の声はB・ビイにあまり聞こえなかつたのか、B・ビイが雄叫びと共にウロボロ

スを引き上げると同時に団長の顔面が壁面にこすれていった。

「しゃあっ!! 引き上げ……おい、どうした相棒」

「おめえのせいだよっ!!」

「わわわっ!! 団長君、回復回復っ!!」

そして引き上げられた団長のボロボロの顔を見て首をかしげるB・ビィと怒る団長。ラムレッダが慌てて回復魔法をかけていた。

「シャヒィ……」

「よくやったウロボロス。おい二人共無事か」

疲れたウロボロスを労いながら、カリオストロがモルフエ達の様子をみる。

「は、はい……僕達は別に。それより団長さんの方が」

「こいつは大丈夫だ。見ての通り軽傷だ」

「見ての通り重傷だがっ!!」

（けどもう治ってる。夢の中とは言え……説得力が無いわ団長君……）

（周りから見た）団長基準での軽傷判断をしたカリオストロの言い方に文句を言いつつ、ラムレッダの回復魔法でグングン傷が治る団長。見た目はボロボロだったが実際（団長の肉体的には）軽傷だったらしい。夢の中とは言え現実でもこんな感じのために「なんだかなあ……」と思いつつ、だがあえて言うまいとラムレッダは言葉に出しはしなかつ

た。

結局即回復した団長であったが、すぐにまた自分達の周りで地面が崩れるような音が聞こえた。今落ちかけた穴の底はどこまでも続き、そこへ無数の瓦礫が落ちていくかと思えば異様な軌道で空いた穴を埋めようとする動きを見せるものさえある。なんであれは、*“瓦礫”* なのかさえわからない物質も見えた。

この異様な動きは、モルフエの言う「元の回廊に戻ろうとする」動きなのだろう。そしてこれも彼が言っていたように元々曖昧な回廊は、崩壊と修復を繰り返す *“曖昧”* に直ろうとしているのだ。

「こりゃいかん、とにもかくにも撤収!! また何時崩れるかわからん場所にこれ以上は居れん!!」

「わわっ!!」

「きゃっ!!」

未だ危険なのは明らかだった。団長は言うが早いかモルフエとヴェトルを両脇に抱えて駆け出した。B・ビー達もそれに続いて走り出す。

「な、なんで抱えて……!!」

「この方が早い!! あと君抱えないとまた逃げるだろ!!」

小柄な二人を抱えて走り出す団長達。するとまるでそれを待っていたのか、あるいは

狙ったのか、逃げる彼らを追いかけるかのように地面が崩壊し始めた。

「はしれはしれ!!」

「にげろにげろ!!」

振り返らなくとも崩壊の轟音により何が起きているのかわかる。これはたまたまんと団長達は、更に足を速めそして夢の回廊を駆け抜けていった――。

■ 二 おはようおはよう、そこにいるの？

「――つと？ ちょ――馬鹿にん――!」

――声、声が聞こえる。

「――おき――! 団長さ――起き――!!」

どこだ、ここは……？ 夢の回廊は？ 俺達はどうなった……？ 確か、モルフエ君達を抱えてそのまま……。無我夢中に走ったからか、深層を抜けてからを思い出せない。

「やっぱり――力づく――」

「え？――待っ――もう起き」

意識もはつきりとしなない、まだ夢の中なのか？ カリオストロ達、他のみんなは目覚

めたのか？ モルフエ君とヴェトルちゃんはどうなつて……。

「——起きろおっ！」

「いでえああつ!!」

「団長さああ——んっ!？」

突然の頭部の激痛。あまりの痛みに俺は、伏せていた身体を跳ね起こす。すると俺を呼ぶ悲鳴も聞こえた。

「な、なにすんじやいメドウ子お!! って、これ覚えのあるやり取りだなちくしょうめ!!」

「馬鹿なこと言つてんじやないわよ寝坊助」

眠る俺の頭をメドウ子が髪の毛を蛇に変えカミカミして起こされる。数日前の転寝とまったく同じ方法で起こされほほ同じやり取りをしてしまった。

しかしおかげで意識が目覚めた。この痛みにメドウ子の雰囲気にも夢のような不自然さはない。今俺が居るのは、紛れもない現実である。

「もう起こして良いって言われたから起こしたわよ」

「言われた？ それって……あ」

メドウ子の横にもう一人、それは頭を噛まれている俺をハラハラ心配そうに見るモルフエ君だった。

「あれま、先に起きてたのね」

「えっと、そうですけど……団長さん頭大丈夫ですか？」

「うくん言い方っ!!」

「え……あつ!? 違います違いますっ!! 噛まれて大丈夫ですかって意味です!!」

まあわかつてはいるが、寝起きに即とても心配そうに「頭大丈夫ですか?」とか言われる経験なんてそうあるまい。そもそも寝起きに頭噛まれるって言う状況がおかしい。なんでこんな目に二度も遭うのか。

「『僕達』もちょうど今日が覚めたんです」

「それじゃあ……」

「安心してください。きっと直ぐ皆さん目を覚まします」

俺のそばではB・ビイが、そして医務室のベッドやソファではまだルナルさん達が眠っていた。だが時折「うくん……」とモゾモゾ寝返りをうっている。それを見て俺は安堵した。

俺達が夢の回廊に向かう時ルナルさんは、寝返りどころか僅かな身動き一つせず弱々しい呼吸だけしかしてなかったのだ。一番最初、そして特に深く悪夢にのまれていた彼女がああ様子ならば、モルフエ君の言う通り直ぐに目を覚ますに違いない。

「……あれ、けどメドウ子? セレストやコンスタンツィアさん達は?」

ふとここで眠る前のことを思い出す。ここはエンゼラ医務室、確か眠る直前にはコンスタンツィアさん達がいたはずだ。だが周りには、メドウ子とモルフエ君、まだ眠っているカリオスト口達、そしてもう一人モルフエ君と共に目を覚ました彼女……。

「ずうくくつとここでおもつ苦しい雰囲気のままあんたら見てたから休ませてんの。あれじゃあいつらまで寝込んでやうわよ」

「しようがないんだから」と腕を組みながらメドウ子は呟く。彼女の態度と性格から見兼ねてそうさせたのかも知れない。

「そっか……ありがとなメドウ子。みんなの事心配してくれたんだな」

「ちつが……っ!! そう言うのじゃ……ないしっ!? 違うわよ!? あんな雰囲気ではいられるとアタシまで気が滅入りそうだったからよっ!! ほんとよっ!? あくアタシがないとだめねえこの騎空団は!! まったくねえ!!」

顔を赤面させ否定するメドウ子だが、理由は何であれありがたい話である。

「ふんだ……あんたのマヌケな声聞こえたらもうすぐ戻るわよ」

「マヌケは余計じやい」

頭を寝てる時に噛まれれば誰だつてあんな声になろう。と、思っているとメドウ子の言う通りドタバタと廊下からこちらに向かつてくる音がした。

「い、今の声なんですかあ……!?!」

「団長さんの声が聞こえて……あっ!？」

「ミミンミツ!？」

「お、お……起き……っ!!」

扉から雪崩れ込むようにしてコンスタンツィアさん達が部屋に入る。そして体を起こす俺を見て言葉が出ないのかあわあわと驚いている。

「ご心配をおかけして申し訳ない。おはようございます」

俺がそう答えると彼女達は、やっとなから言葉を出した。

「だ、団長さあん……!! ご無事でよかったです……!!」

「とことん、とことん心配しましたです……っ!!」

「ミンミイーン……ッ!!」

目が覚めた俺達を見て安堵したのか号泣するコンスタンツィアさんとブリジールさん。気付けばミスラも俺の上でグルグル回転しまくってた。

「だ、団長……良かった。ルナル先生は……!? み、みんなは……っ!？」

セレストは俺の無事を確認してすぐにルナルさん達の方へも視線を向けた。それで俺も他のメンバーの事を思い出しルナルさん達の方へ顔を向けた。すると――。

「――っはうあっ!？」

「――にやっ!？」

「——つうお!?!」

「——お?」

タイミングを図ったようにルナールさん達が目を覚ましていく。皆も感覚では直前まで夢の回廊から脱出する感じだったらしくB・ビィ以外焦った様子だ。

「こ、こどここつ!?!」

「夢の回廊じゃ……ない、にや?」

「エ、エンゼラの医務室……そうか、戻ったか……そうか」

「急に目が覚めたな……お、相棒起きてたか」

「ル、ルル……ルナールせんせえくくつ!!」

「わあつ!?! セ、セレストツ!?!」

目を覚ましたルナールさんを見たセレストは、涙声でその名を呼び飛び付くようにしてルナールさんを抱きしめた。

「わ、私の事わかるよね……!!」

「う、うんわかる……つ!! わかるから、力緩め……」

「ちゃんとポポルサーガも覚えてるよね……つ!!」

「覚え、ぐええくつ!?! 星晶パワーがハーヴェインの身を絞めるう!?!」

「あ、ごめんつ!?!」

マグナシックスでは、腕力非力上位になるセレストであるが、しかし腐つても星晶獣。油断して力を籠めれば、小柄なハーヴィンの肉体を締め上げる事は難しくない。慌ててルナルルさんを開放してあわあわしてる。

「ご、ごめんなさいセレスト……心配させちゃったわね……」

「ううん、思い出してくれたならいいよ……ルナルル先生が無事ならいいもん……」

「セレスト……」

「ルナルル先生……」

「……けど団長に持たせた本の件に関しては、後で少し話し合ひましょう」

「あ、っ!!」

「あとなんか顔かゆっ?! すっごいヒリヒリするっ?! なんでっ?!」

ルナルルさん救出の決め手となった絵物語『キミと壁あに挟まれて……』。ルナルルさんも別に怒つちやいないだろうが、まあ言いたい事もあるだろう。

あと顔が痒いのは、ラムレッタを寝かさないためスパイスやらを顔に塗した時ついでに目が覚めるかもと塗られてたせいである。拭き取ってはあるが、やはり痒かろう。顔洗ってどうぞ。

「みんな起きたか。眠気の方はどう?」

「おかげさまで……問題ねえな」

「あたしも……にや」

ベッドやソファから降りるカリオスト口達。念のために問題の睡魔の方を聞いてみれば、カリオスト口もラムレッダも一度目を閉じてみる。それで睡魔が襲って来ない事を確認しやつとホツとした様子だった。

「やれやれ、妙にエンゼラが懐かしい気分だぜ……」

「悪夢の中じや時間無茶苦茶だったもんにああ……。あたしなんて何年も過ごした気分にああ……」

「……お前口調完全に戻ってるな」

「にや？ ああ、そう言えば現実じゃ二日酔……いんつぶ!？」

「おい急に口抑えてなに……待て待て待て寝起きは止めろつ!？」

「ごべ、思い出したら……急に吐き気……おヴェつ!？」

「ぎけんなつ!？ おい団長……コラ嫌そうに見てんじやねえ手伝え何とかしろつ!？」

俺が声をかけるよりも先に最悪な展開になってるラムレッダを見てしまい、まだ俺は悪夢にでもいるのかしらと現実逃避しかけたが、そう言えばそんなのが俺の日常なのを思い出し項垂れる。

「……モルフエ君、ごめん。普通ならここから色々話す事になるんだろうけど、ちよつと待ってて」

「あ、はい……こちらこそ、なんかすみません」

「大丈夫とは思うけど、そばにいてあげてね」

「……はい」

一応気付いてはいた。部屋の隅のソファ、そこで顔を伏せている一人の少女——ヴェトルちゃん。

本当の意味で事態の解決は、これからなのだ。

三 フェイトエピソード Nightmare of the Beginning

g

——星晶獣オネイロスが生まれたのは、他の星晶獣の例にもれず古の大戦 // 覇空戦争 // の頃である。

オネイロスと言う名と、夢を操る力を生まれた時から与えられた彼女は、自身を生み出した星の民に従いその力を使った。

夢を力としてふるう事、それに彼女は疑問を持つ事はなく、星の民に命じられれば団長達にしたように空の人々を夢で苦しめた。

夢を武器として、人を苦しめる手段として使う事を彼女が果たして苦に思ったかはわ

からない。もしかすれば良心を痛める事もあつたかもしれない。だがそれを気にする事よりも彼女は、自分を生み出してくれた星の民が大好きだった。

「よくやった」「偉いぞ」——命じられた事をうまくやれば、そんな言葉をくれる星の民達。オネイロスは、そんな彼らを慕った。家族と思つていた。

しかし大戦末期、覇空戦争の結末が空の民達の勝利へと傾きだす。その最中激しい戦いによつてオネイロスは、星の民以上に傷付き苦しんでいた。だがオネイロスを管理していた星の民達は、そんな彼女を捨て元居た場所へと逃げてしまった。

オネイロスは彼らに「置いてかないで」と言つたのだろうか。「捨てないで」と言つたのだろうか。その全てか、あるいは言う暇さえ与えなかつたのか。その時の星の民がオネイロスの事をどう思つていたのかは、今となつてはわからない。残つた事實は、オネイロスは捨てられたという事のみである。家族と信じた者達は、自分の事をそう思つていなかった。それどころか都合の良い道具程度にしか思つていなかった事を知りオネイロスは、深く絶望した。

その時から彼女は、どこかの島に留まる事もせず空を目的も無く彷徨つた。全てが思い通りの夢の世界、その住人である悪夢の欠片やペットのイケロス以外に何も信じられないで一人過ごしていた。

そして、覇空戦争も今は昔。時は移ろい小さな島ザンクティンゼルから一人の少女が

旅立ち、それを追うようにしてまた一人の少年が旅立ってしばらく——オネイロスが噂を聞いた。騎空団〔星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女Z O Y〕の噂を。

曰く、星晶獣を仲間とする騎空団。

曰く、星晶獣を友とする騎空団。

曰く、地味な団長率いる騎空団。

最後はともかく、それ以外にも荒唐無稽にして意味不明、嘘か真か理解不能な噂が並ぶ騎空団。その噂を聞いたオネイロスが抱いた感情は、久しく忘れていた激しい怒りだった。

——ふざけるな。星晶獣を仲間などと、友などと、家族などと言う者がいるものか。空の民は星晶獣を畏れ、星の民は星晶獣を道具としてみるばかりだ。この騎空団とてそうなのだ。この団長もまたそうなのだ。都合の良い言葉で星晶獣を利用する星の民と同じ、上面だけの優しさ、虚飾にまみれた偽善者共。星晶獣を受け入れる者などいない、いるはずがない、いるはずがない……もしそんな者がいるならば、なぜ私が一人の時に現れてくれなかったのか。なぜ私は、ずっとこの世で独りぼっちなのか。

それは八つ当たりと言っている。団長にとつて彼女の事情など知るはずもなく恨まれる筋合いなどない。だが関係ない、オネイロスにとつてそんな事は関係ないのだ。星

晶獣を仲間とする者がいる、それだけで怒りを覚える理由は十分だった。

そしてついに団長を前にした時、彼女にふつつと怒りが湧いて出る。どうしてくれようかと考える。憎き星の民、自分を捨てた星の民、この男は奴等と同じだ。オネイロスは思った——そう私は、夢を操る星晶獣。悪夢を生み出す星晶獣。かつてと同じ、空の民にしたようにすればよい。自分が味わった絶望を、孤独を、怒りを、悲しみを、悪夢として味合わせてやる。

しかしして、一体の星晶獣、一人の少女が募らせた恨みと怒りにより、団長達は悪夢の世界へと誘われ囚われた。だが彼らはオネイロスが思ったような者達ではない。オネイロスが予想できるような者達でもない。

そう彼らは、騎空団「星晶戦隊マグナシックスとB・ビイくんマン&均衡少女ZOY」。

曰く、星晶獣を仲間とする騎空団。

曰く、星晶獣を友とする騎空団。

曰く、地味な団長率いる騎空団。

全てが事実である。

悪夢を破る戦いの最中団長達にもオネイロスは叫んだ——なぜ私が一人の時に現れてくれなかったのか。なぜ私は、ずっとこの世で独りぼっちなのか

違う、彼等は現れた。長い時の果て、一人ぼっちの少女の下に確かに現れたのだ。

少女はもう、一人じゃない。

■ ■ ■ 四 夢が覚めたなら

「……で、結局八つ当たりか?」

ラムレッダの諸々の世話が終わり、一応は落ち着いた俺達は、他の面々も加え今回の面倒事の発端である話を聞いた。

星晶獣オネイロスの出自、その力、星の民との関係、その裏切り、そして永い孤独で募った絶望と怒り。それら溜まった負の感情を爆発させる理由……つまりこの団長^{おれ}である。

彼女にとって俺と言う存在は、認めるわけにいかないものだった。親として、家族として慕った星の民に裏切られた彼女には、星晶獣と人の良好な関係というもの自体が信じられず、そんなものを当てつけのように謳うこの騎空団は酷くおぞましく思えた。……別に俺はそんなもん謳った覚えはない。

だが俗っぽい言葉で短く済ませるならば、結局今カリオストロが言った通りの感想ずばりそのままである。

「……とりあえず、どんな噂も最後に俺が地味と言われるのを払拭したい」

「んなこたどうでもいい」

「どうでもいいとはなにかっ!？」

おっさんが酷い事を言う。俺が地味な事を噂のオチに使われるのなんなんだよ。誰だ広めたのはっ!!

一方俺達がこんなのんきなやり取りをしてもモルフエ君とそのそばで項垂れているヴェトルちゃん表情は暗い。そして空気も重い。暗さと重さで胃が痛い。

「……僕は」

ここで話しづらそうにしていたモルフエ君が口を開いた。

「僕には、姉さんの気持ち……わかります。僕は姉さんの一部だから。なによりも、僕も同じ気持ちを味わったから……」

「……」

モルフエ君は、ヴェトルちゃん——オネイロスに捨てられた。姉と信じた者に「もう必要ない」と言われ、弟の役目を奪われた。受けた心の傷も絶望も、正にかつてのオネイロスと同じであつただろう。だが——。

「けど、僕は……姉さんを、助けたかった」

彼は彼女のようにはならなかった。反対に自分を捨てた姉を見捨てず救おうとした。どれだけ拒絶されても、孤独に苛まれるオネイロスを救う事を諦めなかった。

「それは……あなたに『この人達』がいたからよ、モルフエ……」

そんなモルフエ君の言葉に対し、現実に戻って初めてヴェトルちゃんが顔を伏せたまま口を開いた。

「私の生み出した悪夢に負ける事なかった……強い人達……だからあなたも負けなかった……」

「……そうだね、その通りだよ姉さん。僕一人じゃきつとダメだった。きつと団長さん達が居なかつたら、僕はきつとまだ『モルフエ人形』のまま……」

「羨ましい、私は……あなたが羨ましい……だけど」

弱々しく顔を上げたヴェトルちゃんは、そばのモルフエ君を見た。まるで手の届かないなにか、自分には無い輝かしいなにかを持つ者へ向ける羨望の眼差し。しかし、あの怨嗟と悪夢に囚われたオネイロスとは違う、どこか慈しみを感じさせる眼差し。

「……ねえ、団長さん」

「……なんだい？」

すると彼女は、俺の方へと視線を向けた。

「お願いがあるの」

「お願い？」

「うん、私がした事が……許されるものじゃないのはわかってる。けど、一つだけお願い

……モルフエを、あなた達の仲間に入れてあげて」

「姉さんっ!? な、なにを言ってる……」

「思いもよらない『お願い』をしだすヴェトルちゃんに誰よりも驚いたのは、モルフエ君だった。」

「モルフエはもう、私の力を離れてる……この子一人でも大丈夫。私といなくても消える事もない……」

「やめてっ!! そんなこと言わないで姉さん!!」

「この子に同じ思いをさせたくないのっ!!」

モルフエ君の言葉を遮りヴェトルちゃんは、俺に縋りつき必死に訴えた。じつと彼女の眼を見る。彼女は視線を逸らしはしなかった。

「私はどんな罰を受けたっていい!! この子はもうこれ以上私のせいで不幸にさせたくない……!! あなた達なら、信じてもいい……お願い、お願い……この子の居場所になつてあげて……っ!!」

「参ったなあ……と俺の方が先に視線が泳ぎそうになる。なのでそのまま泳がせ、視線をそばのカリオストロ口に向ける。」

「ん」

「いで」

すると彼女にわき腹を肘で突かれた。続けてラムレッダやルナルさんにも視線を向けるが……。

「ん」

「ん」

「いいで」

二人そろって俺のもう片方のわき腹を肘で突く。肘の先から「あんたが決める」の意思を感じ、他の団員の視線もまたそうである。つまりはいつも通りの展開になったので我が事ながら「毎度ワンパターンであるなあ」と呆れもした。

「……やれやれ」

まあエンゼラの部屋の空きは、十分あるので困ることなどない。

「ベッドはいくつ？」

「……え？」

俺がふいに聞くとヴェトルちゃん、そしてモルフエ君もポカンと口をあけ俺をみた。

「二人一緒に寝る？　大きいベッドもあるけどもね。二つ入れてもいいし、なんなら

一人部屋とか……」

「待って!!」

「ここでヴェトルちゃんが混乱した様子で待ったをかける。

「わ、私は……モルフエだけを……」

「一人も二人も変わらんけどねえ」

「そう言うことじゃなくて!!」

ヴェトルちゃんは、俺だけじゃなくカリオスト口達を、自分が悪夢に閉じ込めた者達を見た。そして気が付いた。俺も彼女達も、誰もヴェトルちゃんを非難するような視線を向けていない事に。

「なんで、あなた達は……あんな目に遭わされたのに……私のせいで、苦しんだのに……」

「そりや何度もあんな目に遭うのはごめんだがね」

「終わってみりや夢の話でしかねえよ」

「ちよつと自分を見つめなおす機会にもなった感じだしにやあゝ」

「私もまあ……自分の夢の再確認かしらね」

「あつはつは」と笑う俺達。星晶戦隊（以下略）心得（仮）【終わりよければ全てヨシツ!!】である。そしてヴェトルちゃんは、もうわけがわからない感じである。

「そんな……そんなの嘘よ。わ、私を……モルフエを気にして、そんな事」

「そう思うかい？」

「それは……それは……」

「……君はどうかねモルフエ君や？」

姉を見守っていたモルフエ君にも顔を向ける。彼は一瞬ドキツとした様子だが、すぐに困惑し震えるヴェトルちゃんの傍へ寄り添った。

「……僕は、姉さんといいたい。本当の姉弟として、歩んでいきたい。生み出された経緯なんて関係ない、僕がそうしたいんです……!!」

「奇遇だなあ、俺も君達は二人一緒が良いと思ってた」

「わっ!!」

「あうっ」

寄り添う二人の肩をつかみ、もっと二人を引き寄せる。

「“二人共”来なさい。どっちかだけは断る。二人一緒、これがたつた一つの入団条件だ」

じつと彼女の目を見る。そこには、オネイロスの虚空の顔も、それを思わせる影のある表情もなく、琥珀にも似た彼女の瞳が潤んでいた。

「けど、だって……そんな、そんなこと……私なんか……あんなひどい事した、私が……」

「ひどい事? 何度もはごめんと言ったが、星晶戦隊（以下略）の団長を舐めてもらっちゃ困る。俺は仲間増える度に海に落ちたり、艇から落ちたり、島から落ちたり、散々

な目に遭ってばかりよ。今回も島巻き込んでブチギリ水神大暴れだとか、暴走骸骨大決戦とかでもないしな」

「……………っ!!」

「相棒の実績にぐうの音も出ねえようだな!!」

「そりや出ないっしょ」

人生で何度経験するかわからない事をしよっちゅう経験してるんで、今回みたいな事も終わってしまえば「なんか終わったね」程度になっちゃおう。いや、ほんとはダメなんだ、ほんとは。「なんか終わったね」じゃないんだよ、マジでね。

あと何故B・ビーが自慢げなのだ。そして呆れるなルナルさん。

「……………本気で、言ってるの?」

「うむ」

「私も、連れて行って……………くれるの?」

「うむ」

「……………もう、独りぼっちじゃなくていいの……………?」

「うむ」

まだ信じられないという風に聞くヴェトルちゃん。だが俺が彼女の言葉に頷き返すほど、モルフエ君がそつと手を伸ばしヴェトルちゃんと繋いだ手を強く握るほど、実感

が湧いたのか一人暗闇にいたような表情が変わりだす。

「もう……悪夢にいらなくていいのね……」

「うむ」

「一人じゃ、ない……」

「……う、ううう……!! あああ……っ!!」

堰を切ったようにしてヴェトルちゃんの瞳から涙がとめどなく溢れた。オネイロスでは流せぬ涙を、ヴェトルちゃんが流している。

「そうだよ、姉さん……!! 一人じゃないから……もう、一人になんてしない……!!」

「モルフエ……!! ごめんね……酷い事言っ……っ!! ごめんなさい……モルフエ……っ!!」

「もう、大丈夫……」

彼女の慟哭は、もう悪夢を呼ばない。彼女の悲しみは、もう悪夢を生み出さない。

霸王戦争の終わりより募り続けた孤独の傷が、涙によって癒されていく。

悲しみの記憶は、消えないかもしれない。忘れる事はないかもしれない。しかし、変わっていくことはできる。悪夢こそ塗り替えてしまえばいい。

■ 全ての悪夢は、今終わったのだ――。

■ 五 夢のオチ

——まあ、それはそれとして。

「しかし、一つわからんんだけどヴェトルちゃん」

「え？」

ヴェトルちゃんも落ち着いた頃、一つ確認したい事を思い出し彼女に聞く。

「君って結局何時頃から俺に目をつけてたの？ 『借金の悪夢』とかさ……」

「……借金の悪夢？」

俺の質問に対しヴェトルちゃんは、コテンと首をかしげて可愛いなちくしよう。

「いや、ほら……俺がエンゼラで転寝してたら見たやつ」

「……え？」

「……え？」

「……」で「もしや……」と嫌な予感がした。

「あ、あれって……ヴェトルちゃんの仕業じゃなかったの？ 俺てつきり俺を誘い出す

ためとかで……え？」

「わ、私知らない……団長さんの事は、噂で島に居るって聞いたからもし会ったら程度に考えて……。だから、夢占いより前には何もしてないよ？」

「そ、そうなん？」

俺はモルフエ君にも視線を向けた。

「えつと、はい……姉さんの言う通りです。僕が団長さん達を夢占いに連れてくまで、姉さんはオネイロスの力を一切使ってません」

「それに団長さんは、何故か深層まで引き込まないと全然悪夢を出せなかったの……だから直接騎空艇^{エンゼラ}まで会いに来て……」

Oh……あの「悪夢」がヴェトルちゃんの、オネイロスの仕業じゃない？ つまり、トラウマ100%な完璧俺由来の純正「悪夢」……？

「あー……つまりあれだな相棒」

「結局の話、＼たまたま＼団長きゆんが悪夢を見て」

「んで、＼たまたま＼ヴェトルちゃん達に会ったから起きた事件ってわけね」

「しかもリアル^{リアル}の苦勞が勝りすぎて、オネイロスの力殆ど跳ね返してた感じもあるな……なんなんだお前」

心底呆れた様子でカリオスト口達が簡単に話しまとめちゃったよ。

あんまりにもあんまりな事実。呆然とする俺。おろおろするヴェトルちゃんやモルフエ君に何か言うことも出来ずにいると、ふと壁を背に立ち憐れんだ視線を俺に向けるエゼクレインさんに気が付いた。

「……だから言っただろう、ストレスだと」

ため息交じりに告げられた言葉。そう言えばそんな事言われたっけなく!! なるほど、これが今回の騒動のオチかあゝ!! あっはっは……っ!!

「……また悪夢見ちゃうかも」

「あ、団長さんっ!?!」

「あ、え……? 大丈夫、団長さん!?!」

星晶獣オネイロスによる悪夢の事件、これがそのオチ。俺は医務室のソファでふて寝を決め込んだ。

少し違う空編 IV

アナザーストーリー 騎空団 for the New Year

■ 一 ■
 いくつも寝たよお正月

刻まれる時は止まることはなく、今年も今年で年が明けた。それでもまだまだ暗闇の時間、松明や灯籠で照らされた道を行く俺達星晶戦隊（以下略）は、今年の干支を司る神宮へと足を運んでいる最中である。

新年故の初詣、赴く理由はそれで充分であるが、なによりも昨年の年末例によってジータから手紙が届いた。内容も例によって初詣の誘いである。

『今年の干支の神社があるの。この島。なんだって!! 今年もみんなで初詣だよ!!』

地図同封の手紙で気合の入った筆跡からジータが初詣をとて楽しみにしているの

がわかる一方「絶対に来なさい」と言う念を感じ、なんならジータの幻影すら浮かび上がりそうなそれは、もはや特殊アイテム大事件なものかなんかにさえ思えてきた。

そんなわけでまだ日も昇らぬ内に目的の島へとたどり着いた俺達は、他の参拝客に混ざって毎度同じくゾロゾロ神宮を目指した——のは、少し前の事。

「……………ミンツ!! ミンツ!! ミンツ!! ミンツ!! ミンツ!! ミンツ!!」
「……………うむ」

頭の上で声を上げるミスラの一定のリズムで発せられる声で目を覚ました俺は、もそもそベッドから身を起こす。

「はあ……………ありがとうミスラ、ちゃんと起きれたよ」

「ミンミンツ!!」

しばしばおくつとしてからベッドの上で身体を伸ばす。筋肉の伸びがちよつと心地よく感じ少しづつ頭が冴えてきた。

(昨日は大変だった…………)

閉じていたカーテンを開けながら前日、と言うか数時間前までの事を思い出した。

めでたく明けけた新年、今年の干支の神宮前へ続く参道に並ぶ屋台の数々に目移りしてしまいながらも俺達は、約束通りジータ達と神宮で集まる事が出来た。

例年現地で集まった際は俺はジータから強襲されているので用心していた。初詣に来

て用心せにやならんと言うのがまったく変な話だが、とにかく急な突撃を避けるため氣配を探り周辺に目を配った。特に背後に用心したのだが――。

「――おにいいいやああんっ!!!」

「来たなじやじや馬っ!! だが今度は避け……」

「ア、アカン団長っ!? 避けたらアカンっ!!」

「何を言っ……な、なにいつ!!」

俺を呼ぶ声と共に駆け出したジータに気が付いた俺は、すぐさま回避の体勢に入ったがカルティラさんから避けるなど言われハツと背後を見る。するとそこには、俺達が参りに来た社と参拝客達の姿が!!

迂闊だった、突撃しに来るであろうジータの事しか考えていなかった。ここで俺が避ければ、突撃の勢いのままにジータは社に突撃する事になる。それも恐らく無意識に奴は「俺なら耐えられるであろう勢い」で突っ込んでくるはずだ。それが社と参拝客（一般人）に突っ込んで……最早これまで、選択肢は一つ――俺が受け止めるしかない!!

「あけましてええええ……!!」

「……来いやあ!!」

「おめで……ットオオオウツ!!」

「ぐああああっ!!」

「だ、団長殿おお——っ!？」

「兄貴いいいい——っ!？」

——と、ユーリ君とビイが叫び俺は倒れ、なんとか立ち上がりジータを説教すると言
う割と新年見慣れ始めて来た光景があった。

確実にパワーが増したジータのタツクルとそれを受けながら思いの外回復が早かつ
た我が身。その事から今年もジータは、大いに元気に過ごすであろう事を確信しつつ自
身の成長を感じたが、こんな事で彼女と俺のコンデイションを確認したくないと思う。

その後カタリナさん達とも新年の挨拶をして無事(?)参拝を済まし初日の出を拝ん
だ。ありがたい新年の朝日は、まるで今年も頑張れと俺を励ましてるようだった。頑張
りやす。

その後エンゼラに集まり新年最初の朝食、用意しておいたおせちを食う流れになるの
だが、そうなれば吞兵衛達が大人しくしてるわけもなく……。

「酒っ!! 飲まずにはいられにゃくいつ!!」

「今日ノタメニ色ナ酒集メテオイタカラナッ!!」

「おうよ!! こつちも良いの揃えといたぜ!!」

吞兵衛にして団員(笑)筆頭ラムレッダ、そして同じく星晶獣(笑)筆頭ティアマト
やグラサイ側からオイゲンさんら大人達が集まり騒ぐのは、まあわかり切ってはいた。

新年だものね、そうだろうね。

大人数の宴会になったが、コロツサスやイオちゃん達も手伝ってくれたし、予めおせちは量作つとけばとりあえず出して見た目も量も満足できるものになる。特につまみになる料理も多めに入れば吞兵衛達は満足する事を俺は学んでいるのだ。

そして深夜から年明けの瞬間まで年始の準備したりジータのタックル受けたりした俺は、流石に疲れたのでコロツサス達にその場を任せ少し寝かせてもらい——今に至る。

「寝てる間特に問題なかった？」

「ミンツ！」

「ならよかった」

カーテンから少し覗き見た日の高さからまだ午前中であるとわかるが、ぼちぼち正午と言う所だろう。夜まで寝る気など無かったので、正午まで一時間程前に起こしてくれとミスラに頼んでおいたがキツチリその通りだ。流石契約を司る星晶獣……の省エネ分身体。省エネ過ぎて本体の契約の力は使えずとも、きつちり時間通り起こしてくれるので普段も大変助かる。

さてさて、しこたま用意しておせちとは言え昼餉はまた別のが良い、艇で食うにしろ外で食うにしろ準備はある。それに昼が近いならばちぼちと——。

「お兄ちゃんお昼だよっ!! お出かけっ!!」

「……はいはい」

エンゼラにまだ居るだろうジータが、ノック無しで俺の部屋に来るのはわかり切っていた。

新年一日目はまだまだ始まったばかりだった。

■ ■ ■
二 お出かけだよ正月

目を覚ましエンゼラ宴会場と化した食堂へ向かうと、オイゲンさん達はもうグランサイファーに戻っているようだったが、そこには数時間の間で酔いつぶれた者達の姿があった。

床で酒瓶を抱えて眠るラムレッダ、机の上で泥酔しニル達に介抱されてるティアマト、打ち上げられた巨大魚みたいになってるリヴァイアサン……殆どうちの団員だった。そして殆ど星晶獣だった。星晶獣の姿か……これが……。

酔いつぶれるのはかまわんが、みんなの食堂で場所をとるのは許さん。起きろ起きろと小突き起こした。寝るなら部屋で寝ろ。だが酔いの残っているラムレッダらはそのまま飯を所望、俺は君達のお母さんではないのだぞ。だが昼飯はもとより作るつもりで

起きたのでまあいいだろう。散乱した酒瓶と食器を片付けたあと、酔っ払いにも食いやすく温め直せる汁物とか雑炊を作り昼は簡単に済ませた。

さて、新年早々ずっと酔っ払いの面倒を見る気はない。なにも俺は、これだけのためにミスラに起こしてもらったのではないのだ。

「遅いつ!!」

エンゼラの外、舷梯タラップから降りる俺とB・ビーを見て叫ぶのはメドウ子だった。

「悪い悪い、ちよいと準備手間取った」

「んもうつ!!」

「あんま怒ってやんな。ラムレッダがリバースしかけて相棒も大変だったんだ」

「あの酔っ払い……」

「朝から相当飲んだからのう」

「あはは!! ラムレッダさんらしいね」

プリプリ起こるメドウ子の他にジータとのじゃ子、そして――。

「ごめんヴェトルちゃん待たせた」

「う、ううん……! 大丈夫、ぜんぜん待つてないよ」

「ジータさん達と今日の事話し合っていました」

ヴェトルちゃんとモルフエ君がいた。

数日前、俺はモルフエ君に新年にヴェトルちゃんを遊びに誘ってくれないかと頼まれていた。

彼等姉弟が星晶戦隊（以下略）の仲間となつて最初の正月、人間の生活に元々関心が薄かつたヴェトルちゃんに、人にとつて大切な「1年の区切り」とそこで見れる人々の営みを直に感じてもらおうと言うモルフエ君の提案であつた。そしてなによりも騎空団の仲間との交流も考えての事、無論断る理由などない。俺は喜んで出かける約束を受けついでに同じ星晶獣で見た目年齢が近いメドウ子達も誘つた。

最初メドウ子は「どうかしようかしらね」とか言つてたが、今見ると普段の鎧とタイツ姿と違いバツチリ寒さ対策したお出かけコーデになっている。さては楽しみにしていたなこ奴め。

「ところでメドウシアナは？」

「留守番するつて残つたわ」

「おやそうなん？」

「アタシ達以外も出かけたたりしてるでしょ、エンゼラに残ってるの殆ど酔っ払いだから自分が残るつて言つてくれたのよ」

「良い子過ぎる……」

「当たり前でしょっ!! 自慢のメドウシアナなのよっ!!」

お土産山買つて帰ろう……。

「あのね、初詣の時より色んなお店が今日から出てるんだって……！ お正月で食べれる料理を売つてるお店とか、お菓子とかね……あ、あと旅芸人の人とかも来ててね……！！」

「ちよつとヴェトルあんまはしやがないの、子供じやないんだから」

普段は眠そうなヴェトルちゃんが、見た目相応の子供らしく興奮気味に話す。すると呆れた様子でメドウ子がヴェトルちゃんを落ち着かせた。なんと彼女もお姉さんの様な事が出来たのだなあと思つたが……。

「……全部メドウ子ちゃんから聞いたのに」

「うぐつ!!」

拗ねたヴェトルちゃんに一番はしやいでいたのは誰かバラされた。

「ちが……この二人はまだ人間達の事わかんないだろうから……アタシが気を利かせて色々調べておいてあげたんでしょつ!! 別に楽しみだつたとかじやないですけど!!」

「団長が来るまでずつと、屋台はあれを買う、この島じやあの店が有名だ、これ名物だ、この店は混むから時間ずらそう」つて延々喋り続けておつたわ。楽しみでもう待ちきれんかつたようじやのう」

「だだだだ誰がよつ!!」

「お主じゃお主」

どうやら全部メドウ子情報だったらしい。随分と調べたんだなメドウ子よ。のじや子にまでチクられ慌てているメドウ子だが、それだけ楽しみだったと思えばなんだか微笑ましく思える。

「私は楽しみですが!!」

「わかつとる」

で、ジータ。俺がヴェトルちゃん達と出かけると言うについてくと言い出した。若干不安があったが、折角だし誘った。ヴェトルちゃんも愉快なのがいれば楽しいだろう。

「じゃあメドウ子? なんか色々調べてくれたらしいしオススメの場所教えてくれや、ついて行くから」

「いいけど……べ、別に楽しみだったとかじゃないからね!」

「はいはい」

「わかっているのかしら……まあいいわ!! アンタ達アタシに続きなさい!!」

自分が先頭を歩くと思うとやる気になったのか、メドウ子が途端にリーダーシップ(笑)を発揮し始めた。髪の毛も蛇に変わって元氣そうだ。こういう時彼女は煽っておくのが吉である。ヴェトルちゃん達もその後が続いていく。

「みんな楽しそうじゃねえか相棒?」

「うむ……お出かけ、正解だったな」

「ええ、姉さんが楽しそうに良かった」

俺達男面子は、楽しそうに歩みだしたヴェトルちゃん達を見て安心した。だがしかし、このお出かけはヴェトルちゃんだけのためのではない。

「さて……モルフエ君」

「はい？」

「俺達も楽しまないとな!!」

「……はい!! ありがとうございます!!」

離れたところからメドウ子から早くついてこいと呼ばれる。ヴェトルちゃんもモルフエ君を早く早くと呼んでいた。モルフエ君と互いに顔を見合わせ笑い、駆け足で彼女達の元に急いだ。

■ 三 屋台楽しむ正月

干支を司る島での正月は、大層な賑やかさを見せる。年に最初でお祭と言ってもいいだろう。参道の屋台は数日その場から消える事は無く、それを目当てに来る人々も多い事だろう。

「わあ……!!」

「色々あるねえ」

そう、今の俺達のように。

「あ、あれはなに団長さん……!!」

「ありやじゃがバターだね」

「あつちのは!!」

「蒸し饅頭だね」

「あのりんごみたいのは!!」

「ありやりんご飴だね。りんご丸ごと飴で包んだやつ」

「オイラ買ってくるわ」

「ん」

初詣の時より明らかに多い屋台の数にヴェトルちゃんが目を輝かせ興奮しつぱなしだった。そしてりんご飴買いに行ったB・ピイのように、他のメンバーもまた……。

「かわゆいのうかわゆいのうっ!! 千支の姿の人形焼きとはめでたくかわゆく良いモノじゃのう!!」

「大事なものは味でしょ、せっかく焼きたて買ったんだから冷めない内に食べなさいよ」
「のじゃ子達ちゃん何味買ったの?」

「妾のは粒あん」

「アタシはこしあん」

「私のカスタードと幾つか交換しない？」

「うむ、良いぞ!!」

「しかたないわねえ……」

いつの間にやら人形焼きを買って食べてるメドウ子達。手に収まる小さなカステラ菓子は、今年の千支の姿をしていた。

「ほれお主達も食べるがよいぞ、店主がオマケして沢山くれたんでな」

「お、サンキュー」

「はい、ヴェトルちゃんとモルフエ君にも!!」

「あ、ありがとう」

「ありがとうございますジータさん!!」

「アタシが買ったんだから感謝して食べなさいっ!!」

ほくほく顔で気前よく俺達に人形焼きを配るのじや子。焼きたての人形焼きは、まだ湯気を出し香ばしい生地の手がかりが食欲をそそる。

「おお、餡子まだあったか美味しい!!」

「……おいしい」

「カスタードも美味しいです!!」

まだまだ温かい人形焼きは、寒い中で食べると妙に上手く感じる。温かな餡子を食べていくと、口から出て行く湯気の白さが増した気がした。

「これ美味しいな……袋でも売ってるしお土産で買うか」

「結構有名らしいわよ。なんか他の島に本店あるんですって」

「流石調べてるねえメドウ子さん」

「た、たまたま聞いたの!! それより買うなら多めに買いなさい。留守番のメドウシアナにも食べさせてあげたいから」

「へいへい」

餡子系はミリンちゃんとかも好きそうだ。前買った緑茶にも合うだろうし、うちの人数考えれば多めに買って余裕で食い切ってしまうだろう。

「……ああそうだヴェトルちゃんモルフエ君」

「なんですか?」

「はいこれ」

財布に手を伸ばしたところで「そういえば」とある事を思い出した俺は、ヴェトルちゃん達二人を呼び寄せ小振りのきんちやく袋を手渡す。中からは「チャリンツ!」と金ルビがこすれる音がした。

「え……団長さんこれは……?」

「お小遣い、好きに使いな」

「えっ!?!」

もらった巾着の中身がお金と知って二人は驚き俺を見る。

「いや、いやいや悪いですよ!! 結構入ってますよねこれ!?!」

「そうだよ……私なんかに! 団長さんいつもお金の悪夢見てるのに……」

別にいつもそんな悪夢見てるわけじゃないと思うが、ヴェトルちゃんに言われると否定しきれない。だがそれは今は、別に関係ない。

「悪夢見てるかはともかく、気にせず受け取りなさい。正月だからね、お年玉””ってことで」

「で、でも……」

「ま、ここは団長にかっこつけさせてくれや」

ヴェトルちゃんとモルフエ君は、何度もお互い顔を見合わせ「それじゃあ……」と巾着を受け取った。

「わ、私B・ビーが買いに行ったりんご飴気になつてたの……モルフエ、一緒に買おう?」「勿論良いよ!! りんご以外にも種類あるみたいだし、お互い食べ比べしようよ」

「うんっ!!」

二人が楽しそうにB・ビーがいるりんご飴の屋台に走って行く。その姿は間違ひなく仲睦まじい姉弟そのものだった。

「……変ねえ〜？ アタシの記憶が間違つてるのかしらねえ？ 前の正月の時〃この騎空団にお年玉システムは無い〃 って聞いた覚えがあるんだけど？」

が、二人の姿に満足してたらメドウ子から面倒な事を言われてしまった。確かにそう言われるとそんな事言つた記憶がある。

「……いや、それはだね」

「確かに妾も聞いたのオ〜？」

「私も聞いたし、その時くれなかつた」

メドウ子達が示し合せたかのように、スツと俺を取り囲む。ああ、とても面倒な流れになつた。

「いや……ほら、あの子達まだ依頼でお金稼いだとかそんなしてないしき、な？」

「アタシ〃星晶獣が貰うもんじやない〃 って言われたけど……あの二人にはあげちやうんだアンタ」

「待てそれは……ちが」

「なあ〜にが違うのかのお〜？」

「その……こんなめでたい時にさ？ 自分で好きなもの一つも買えないとかつまらない

じゃん……ねえ？」

「ふうん？」

「ほおくん？」

「へえ〜？」

「……うう」

ジトオ〜つとした三人の視線が俺の心に突き刺さる。そんな俺の様子を見た三人娘は、ニヤリと笑ったのだった。

■ 四 お餅舞う正月

「余裕のある買い物が出るのはいい気分ねえ〜」

「のじやのじやー！」

「ほんとほんと!!」

ホクホク顔で歩くメドウ子達、その後ろを俺はトボトボ歩く。懐が温かくなった彼女達に対し俺は寒くなった。

「お前ら他の奴に言うなよ。絶対面倒になるから」

「わかってるわかってる」

「言わん言わん」

「うんうん!!」

浮かれた返事に心配になる。ほんとに大丈夫だろうな、この口軽そうな迂闊三人娘共め。万が一にも他の面々にもお年玉やる事になったら大変なんだからな。

「別に全員に出すわけじゃねえなら団の資金でもいいだろお年玉ぐれえ。ボーナスみてえなもんだし、大した額でもねえだろうし」

ハードコーディングタイプのりんご飴をバリバリ齧りながらB・ビーが俺の思考に返事をして来た。こいつには三人にお年玉渡したのを見られていない筈……。

「……B・ビー、何故俺がお年玉の事を考えていると」

「金の事考えてる顔になってる」

俺の表情筋は今年も大変素直だなちくしょう。

いやだが、しかし……。

「りんご飴、美味しいねモルフエ……」

「このいちご飴も美味しいよ姉さん!」

「……お団子みたいでカワイイ」

「でしよっ!!」

表情筋の緩みは、この微笑ましい姉弟の姿を見ての緩みだろうか。お互いに買ったたり

んご飴を食べ比べしたりする二人の姿は、悪夢の世界で争ったなどと思えぬほどに仲睦まじい。

「……お年玉は賞与ボーナスではないのだ。お年玉である以上俺のポケットマネーから出さざるを得ない」

「ようはカツコつきたいんだな」

「ほつとけい」

笑わば笑え、下らぬ男児の意地だろうとかまわんのだ。俺の懐が寒くなっても、あの笑顔が護れるならば安い……安いのだ……。

とかなんとか、己のプライドを保つよう意志を強く持ち、のんびり色んな屋台を楽しんでいると不意にヴェトルちゃんが足を止めた。

「おや、どしたん?」

「……向こうの方で何かやってる?」

立ち並ぶ屋台のエリアからは少し離れた場所、社がある方角を指さすヴェトルちゃん。そう言われると確かにその方向からは、屋台の賑わいとは別の歓声が聞こえてくる。

「何かイベントかもしれないな」

「……あ、そうよ思い出した!!」

何をやってるのかと思ったらメドウ子がハッと声を上げた。

「今日社の方で『餅まき』やるんですって」

「餅……？」

「まき……？」

メドウ子がイベントの名前を口にする、ヴェトルちゃんら姉弟は揃って首をかしげる。

だがなるほど、餅まきであつたか。

「大工とかが造つた家の足場とか高い場所から餅巻くんだよ。それを下でキャッチするわけ。ここなら櫓とか山車組んでるのかな……まあ細かい説明は省くけどめでたい時にするイベントだね」

「そう言う事!! 忘れる所だつたわ……まだ開始前のはず、始まる前に行くわよつ!!」

一人参加する気満々のメドウ子が早く来いと急かす。

「そうだよつ!! 出遅れると御餅なくなるよ!!」

いや、もう一人やる気満々のジータがいたか。

「わかつてるよ。せっかくだしな」

めでたい日にめでたい行事に参加しない理由はない。駆け出す二人を追って俺達も餅まきの場所へ向かう。

「あけましておめでとうございます!! もう暫しお待ちくださいませ!! 皆様新年おめでとうございますっ!!」

人々の賑わいに誘われるように辿り着いた場所では、3メートル程の櫓——いや、車輪があるので山車だろう。それに乗った中高年のヒューマンとエルーンの男達が、集まった人々に祝いの挨拶を行っている最中であつた。

「すげえ賑わいだ。流石十二神将の島の餅まき」

「こりや前の方はもう無理だぜ」

今か今かと餅まきを待つ人々の様子を少し浮いて眺めると、もうこれ以上前には進めないようだった。

そして集まった人々をみるとある事に気が付く。

「……騎空士が多いな」

参拝客の一般人よりも、明らかに騎空士らしい者達の姿が目立っていた。俺も騎空士なわけなので別にここに居るのは不思議な事じゃないが、それにしたつて多い。

「なんで騎空士関係でござ利益あるつてことかね?」

「ふふ……よくぞ聞いたわね?」

騎空士の多さの理由を考えると、何故かメドウ子が不敵に笑うとドヤ顔浮かべて俺を見る。

「別にお前に聞いてないんだが……」

「この餅まきは、騎空士にとつて見逃せない行事なのよっ!! 何故か聞きたいでしょ? しかたないわねえっ!!」

「まだ何も言つて……」

「特別に! アタシが説明してあげるわっ!!」

強引に説明を始めたメドウ子曰く——覇空戦争の後、十二神将の世代も変わったあたりの頃、当時何かしらの理由で年始に社を修理した大工達が景気づけにと集まった参拝客へ餅をまき始めたらしい。それは普通の餅まきそのままの事だが、その時にまかれた餅を多くとつた騎空士が大いに大成したらしい。いつしか初め社からまかれた餅は、遠くへもまくため高い山車に変わり今の姿へと変わる。そして大成した過去の騎空士にあやかろうと空中の騎空士が年始の餅を取りに集まるようになった——とかなんとか。

そんな逸話が時代の移り変わりの中生まれ、新年恒例の行事として各歳神のいる島にも伝わり今なお行われているそうだ。

「——と、言うわけでアンタみたいな騎空士にとっては見逃せない行事なのよっ!!」

「ドヤドヤ!! フフンッ!!」と効果音が付きそうなほどドヤ顔して胸を張るメドウ子。彼女の説明に普通に感心して「へえ〜」と俺達は頷いていた。

「わかつたら全員餅をとるっ!! ここにも餅は届くだろうし頑張るわよっ!!」

「やる気満々」

既に両手を広げ餅を受け止める気満々のメドウ子であった。しかし由来を聞いたら確かに俺もやる気が湧いてきた。

「皆様めでたき新年、御怪我無きようお楽しみくださいませッ!!」

丁度餅まきも始まるようだ。餅、取ってやろうではないか。

「よしやるか皆の衆」

「よっしやーっ!!」

「アンタ達、じゃんじゃん取りなさいよ!!」

やる気十分ジータとメドウ子。本人達より周りが怪我しないか心配だが、流石に大丈夫と信じよう。

「B・ビィ、のじゃ子。わかつとると思うが……」

「わかつてる。飛ぶのはズルいからしねえよ」

「しかし “マチョビィ” はズルじゃないのかのう……」

「人型だし妙な星晶パワー使わなきやOKだろ」

反則ギリギリな気がするマチョビィに変身してたB・ビィの姿を見てやっぱり心配になるが、大丈夫だとこれも信じるとする。

「ヴェトルちゃん達は怪我に気を付けてね。キツかったら抜け出していいから」

「ううん、私も頑張るっ!! 沢山お餅とつて……団長さんを昔の騎空士より大成させてあげるの!!」

「僕だって頑張ります!!」

「うっ!!」

フランスと気合を込める二人の姿、なんたる眩しさと愛らしさか。

「俺も頑張る……っ!!」

「ああ、相棒が二人の献身に発作を……」

「感動のあまり涙声じゃ」

「阿保あほうねえ」

「お兄ちゃん相変わらずだなあ」

好き放題言われてるがかまうものか、二人が頑張ると言うなら俺だって応えねばならんのだ。

■ 五 つかみ取ろうよお正月

宙を無数の紅白の餅が舞っている。近くから遠くまで届くようにと山車の上の男達が「そうれっ!! そうれっ!!」と笑顔で沢山の餅を投げる。途端に歓声があがり、人々

が両手を広げ自分の方へ飛んでくる餅目掛けて飛び上がった。

「来たわっ!!」

「イヤア——っ! キャッチッ!!」

メドウ子とジータもその場で跳び上がり頭上の餅をつかみ取る。

「お、ナイスキャッチー!」

「ふふん! まだまだこれからよ!! アンタも早く取りなさい、団員分ぐらいは取らないとなんだからねっ!!」

「私もルリア達の分取るよ!! そおいつ!!」

ジータがまた餅めがけとびあがる。他の騎空士達も負けていないが、ジータの跳躍力は凄まじい。垂直跳びで軽く3 mは跳んでるぞコイツ、周りの歓声もなんかジータに対しての様な気がする。

「あの……ジータさん、なんか跳び過ぎじゃないですか……?」

「あいつ昔から身体の本ネが異次元なんだよ。子供の時から当たり前のようにジャンプで木の実採ってたからな。多分本気出すとノーモーションでも垂直跳び6 mは超える」

「異次元ってレベルじゃないんじゃない……」

「超次元かもしれないな」

限界を置き去りにしたジータの肉体にモルフエ君は啞然とするばかりだった。

だがジータの活躍ばかりに目をむけるわけにいかない。俺達も餅めがけ跳びあがらねばならん。

「俺達も負けてられんぞモルフエ君!!」

「は、はいっ!!」

宙を舞う餅は、途切れる事は無い。とにかく闇雲だろうと両腕を伸ばし両手を広げれば、一つ二つはつかみ取れる。ヴェトルちゃんもモルフエ君も勢い良くジャンプしているのだが如何せん位置が悪い。

「あう……っ! と、届かない」

「うう……僕の方にも来ないなあ」

餅は届くが小柄なヴェトルちゃん達では頭上の餅がキャッチできず、そのまま後ろに飛び越え他の騎空士に取られたり、落ちて来たのも取るのが間に合わず先を越されたりしてしまっている。

「ああもうっ!! またっ!!」

「むむう!! 飛ばずにジャンプは慣れんのじゃ……!!」

同じく小柄のメドウ子達も幾つか採れたが苦戦気味のようだ。

「や、やっぱり私なんかじゃ……団長さんの役に立てないんだ……」

「お餅取るのに気負い過ぎだよ姉さんっ!! もっと楽しんで方が良いよ!」

いかんな、ヴェトルちゃんの顔が曇り出してきている。よろしくない、見過ごせんな。
「ようし……ヴェトルちゃん!!」

「うう……だ、団長さん?」

「もつと餅ゲツトだ!! 手伝ってくれ!!」

「え、手伝うって……」

俺はその場でしゃがみ込み、*「パンッ!!」*と自身の肩を叩いた。

「乗れたまえっ!! 肩車だっ!!」

「肩車……っ!?!」

「うむ、身長を稼ぐぞ!!」

「え、あ……うんっ!! そ、そっかつ!!」

ヴェトルちゃんは困惑してたが勢いで納得してもらい、そのまま肩にライドオン。

「来たぞ餅だ!! ヴェトルちゃんキャッチッ!!」

「うんっ!!」

こちらへととんでくる餅、そしてこちらは一般ドラフの身長を超えるに至ったヴェトルちゃん with 俺っ!! これならば子供の小さな手でも広げて伸ばせば――。

「えいつ!! ……あ、と……取れたッ!!」

キャッチは容易なのだ。

「ナイスキャッチだヴェトルちゃん!! お手柄だぞ!!」

「うん……ありがと団長さんっ!!」

卑怯な気もするがそもそも俺達よりも前には、壁の如き何人ものドラフの男達がいるのでこれでお相子と思いたい。ジータのジャンプ力? 奴は素であれだから卑怯じゃないんだ、多分。

「まあ危ないし必要な分取ったらやめるがな!! よし、このまま餅ゲットだヴェトルちゃん!!」

「うんっ!! 頑張る!!」

大事そうに取った餅をカバンにしまい込むヴェトルちゃん。表情が笑顔に戻ってくれている。肩車作戦成功だな。

「お餅肩車作戦……楽しそうっ!! モルフエ君、私達もやろう!!」

「えっ!? ぼ、僕がジータさんにですか!?!」

「よいしょお——っ!!」

「ちよっ!! 僕まだやるとは……うわああ軽々持ち上げられてるうっ!?!」

「……のじゃ子、アンタにアタシを背負う権利を上げるわ」

「なんでじゃっ!?! いらんそんな権利、普通に嫌じゃ!! メドウ子が妾を背負えばよいじゃろうっ!?!」

「しゃあねえな……オイラの肩乗れ二人とも」

俺がヴェトルちゃんを肩車すると、今度はジータがモルフエ君を背負い、更にB・ビイがわちやわちや喧嘩してたメドウのじゃ二名を両肩に乗せた。

「ぬわああつ!! め、目立つ……っ!! お前ら同時にやるなよっ!!」

「だって楽しそうだったの!! いくよモルフエ君っ!!」

「いくよってなんですかっ!! もしかしてジャンプする気で……あ、ジータさんしゃがまないで!! ジャンプしないで下さいねっ!! 十分高いです、このままで十分お餅取れ——」

「シユワツ!!」

「あゝあゝあゝ——っ!!」

「モルフエくう——んっ!!」

「のじゃ子もうちよい羽しまいなさいよっ!! こっちまで来るんだけど!!」

「メドウ子も髪しぼるなりせんかっ!! モコモコして羽に絡まるっ!!」

「おいゝオイラの頭挟んで喧嘩すんなよお」

掛け声と共に4〜5メートル跳躍するジータと、その肩の上で悲鳴を上げるモルフエ君、肩の上で喧嘩するメドウのじゃコンビ。俺が安易に肩車など始めた事により、なんもう無茶苦茶になっている。

「ふ、ふふ……!! あははっ!!」

——だが、俺の上からは楽しそうに笑う明るい声が聞こえていた。

■
六 一息ついた正月

■
あれから餅まきも大いに楽しみ更に屋台や店を巡った俺達は、大量の餅を手に入れ一度グランサイファーに戻ると言うジータと別れエンゼラへと戻った。

談話室に入ると、俺達と同じように出かけてた面々も艇に戻っているようだった。

「戻ったわよメドウシアナー!」

他の団員と一緒に談話室の暖炉にあたっていた寒さの苦手なメドウシアナは、駆け込んできたメドウ子の声に応え顔を上げた。

「美味しいもの沢山買ってきてあげたからね!! 一緒に食べましょ!!」

「シヤア〜ッ!」

メドウ子は机に買って来た荷物を置くと、あの人形焼きの他にも綿菓子やら焼きもちこしやらなんやら取り出してゆく。そんな様子と食べ物臭いにつられ談話室にいた他の面々も寄って来た。

「なになに、随分買ったのねメドウ子ちゃん」

「ああ、これ？」

マリーちゃんが思ったより買って来た荷物を見て目を丸くすると、メドウ子は「むふふ」とニヤニヤ笑った。

「ちよおくと“臨時収入”が入ったからね。にひひ……！」

チラつと俺を見たメドウ子。満足してくれたようで何よりだこん畜生めこの野郎……。

「団長も団長で荷物多いわね。なにそれ？」

「餅」

「餅？」

「そ、餅」

俺が机に置いたズツシリとした買い物袋の口を広げその中身の大量の餅をマリーちゃんに見せた。

「餅まきしてたんで参加してきてね。ヴェトルちゃん達が頑張ったんだ。な、二人共？」
「うん!! 私ね、沢山お餅取れたの……!!」

「そ、そうですね……確かに頑張りました……」

楽しかった餅まきを思い出し餅キャッチの動きをするヴェトルちゃんに対し、ジータの超跳躍を味わったのを思い出し青ざめるモルフエ君と言う対照的な反応である。

「お正月の空は、寒かったです……」

「ああ……俺も前に経験したよ」

「餅まきよね？ 参加したのって餅まきなのよね？」

まあ概ね楽しかったのでもいいでしょう。

「ところでコロツサスって今艇いる？」

「ヨンダー？（・ω・）」

「おお、丁度いいところに」

コロツサスを呼ぼう思ったたら丁度扉を潜りながら現れた。どうやら出かけず艇に残っていたらしい。

「実は見ての通り餅が沢山手に入ってるね。晩まで時間はあるけど、せっかくだから食べたい。手伝ってほしい」

「イイネ！（。▽。） テツダウヨツ!!」

「じゃあキツチンいくか」

「……あ、あの団長さん？」

コロツサスと共に餅を抱えて食堂へと移動しようとする、不安気な声でヴェトルちゃんが声をかけて来た。

「ん、どした？」

「あのね……わ、私もお料理お手伝いとか………あ、ううんごめんなさい。なんでもないの」

「……」

期待と不安が入り交じり、そして不安が勝り尻すぼみになる言い方。俺は直ぐにモルフエ君を見ると、彼も俺を見て深く頷く。そして部屋にいるマリーちゃん達にも視線をあわせ頷いた。

「団長さん、僕もお手伝いします！」

「……え、モルフエ？」

「そうねえ、正月ぐらいみんなで料理もいいかもね」

「しかたないわねえ……アタシも手伝ってあげるわっ!!」

「え、あ……マリーさん？　メドウ子ちゃん？」

「姉さんも一緒にやろうよ、ね？」

突然自分以外の面々が料理を手伝うと言い出し狼狽えるヴェトルちゃん。そしてモルフエ君が彼女を料理に誘う。オロオロとする彼女は、またあの不安げな視線で俺をみた。

「お手伝い、頼んで良いかな？」

「イツシヨニオリヨウリ　ゞ（∥、∨、∥）ノ　タノシイヨ!!」

「……う、うんっ!! 私頑張る!!」

餅取りも料理もやりたいと思った事は、大いにやるべきだ。足取り軽く俺達はキツチンへと向かい、正月に相応しい明るい雰囲気の中、ヴェトルちゃん是不慣れながらも楽しそうに料理に励んだ。

そんな雰囲気誘われるように、他の出かけていた者やエンゼラで休んでた酔っ払い共が徐々に食堂へと集まりだす。

「実市場で故郷の食材をみつけまして、せつかくなので拙者の故郷の味付けで作ってもよろしいですか?」

「辛い味付けはおしやけに合うにやあ〜」

「餡子はあるかい? 甘い御餅もやっぱり良いよ」

「ミリンちゃんは、故郷の味付けの雑炊を教えてください、更には味醂を煮詰めた『味醂蜜』をかけた餅を作る。ラムレッダは酒に合うからと、辛く味付けした大根おろしと七味のトッピングを所望。甘いもの好きフィラソピラさんは、餡子やきな粉を用意し出す。

「お兄ちゃん遊び来たー……あ、お餅焼いてる!! そして美味しそうだっ!!」

「はわわ……良い臭いがしますう〜!!」

途中からはグランサイファーから再びジータ達も合流。出来上がる餅料理を見た彼女達は、自然とそのまま調理に参加し始める。結局集まった者による「このトッピング

が最高」大会みたいになり、どんどん色んな味付けの餅やらトッピングが作られていった。

「量あるからもう好きにおかわりしてくれ。トッピング自由だから」

「タクサンアルカラネエ〜（ω、）」

晩飯のつなぎのオヤツ程度のつもりが、すっかり本格的な食事になっている。人数集まるといつも宴会みたいになるな俺達つて。

「今帰ったでえ〜……つて、なんやえらい賑やかやんか」

すると今日ずつと出かけていたカルティラさんが帰ってきた。

「お帰りなさい……身軽なところを見るに、上々だったようで？」

「せやつ!! 上々も上々、気分上々やつ!!」

上機嫌なカルティラさんは、年明け後の宴会に少し参加した後市場の新春セールへと出かけた。無論本業あきんどとしてだ。これまでの旅で仕入れた商品は、結構な数であったが全部売り切ったようだ。

「こつちの地方じゃあんま手に入らんもん仕入れといたで島の人らによう売れてん! 嬉しい悲鳴やで〜! にししし〜つ!!」

「そりやなによりで。どうです、カルティラさんもお餅。雑煮まだ暖かいですよ」

「ええなあ〜寒い外から帰って温あつたかい雑煮!! ありがたくいただくわ」

雑煮をついで湯気が昇るお椀を受け取るカルティラさん。具材の紅白の餅を見て「あ
あやっぱり」と呟いた。

「無事餅まき参加できたんやな」

「あれ、餅まきの事してました?」

「……ッ!?!」

カルティラさんが餅について話し出すと、離れたところいたメドウ子がギョツと俺達
の方を見た。

「メドウ子に餅まき案内されたんとちゃうんか?」

「確かにそうですけ」

「なんやメドウ子、あんた説明せんかったの?」

「わーっ!! わーわアア——ッ!?!」

慌ててメドウ子がカルティラさんと俺の間に割って入り、叫びながら両腕を振って会
話を遮った。

「ななななーに言ってるのかしらねっ!! あははっ!! 説明とか意味わかんないわ
ねえーっ!! ほほほっ!!」

「だってあんた、大分前からウチに正月で騎空士に縁起の良え催えしないかって聞いたや
ん」

「聞いてないけどもっ!! アタシが独自に調べただけどっ!!」

「団長はんに箔つけたろうって張り切ってたやん」

「張り切ってないけどっ!!」

「アタシがいる騎空団の団長に相応しいやつにしてあげるわ(声真似)」って言ってたやろ」

「言っていないいゝゝっ!! その声真似やめ……うわああああ!! アンタ達その微笑ましい表情やーめーてええ——っ!?!」

食事で身体だけでなく心まで温かくなりやがる。妙にメドウ子が餅まき張り切ってた真相を知り、食ってた餅が更に美味く感じ、あげたお年玉が安い気さえしてきた。

「メドウ子……お、俺は……良い団員に恵まれて……ウ、ウ、ッ!!」

「んがあゝっ!! アンタは泣くなっ!! 餅詰まらせても知らないわよっ!! あーもーこ
うなりそうだから黙ってたのにい!! カルティイラも笑ってないでコイツなんとかして
よもおおおお——ッ!!」

雑煮の湯気が目に染みるぜ……。

七 幸せ感じてお正月

笑い声絶えずワチャワチャする団長とメドウ子達の様子をヴェトルとモルフエは、自分達で作った雑煮や焼き餅を食べて眺めていた。彼等の様子を見るだけで、自分達も笑みが浮かんでいるのが分かる。

空の民と星晶獣がこの場で揃いながら、嘗てのような争いではなく机を囲み食事を楽しんでる。果たしてこんな光景をかつて想像出来ただろうか？ そんな中に自分がいると予想出来ただろうか？

出来る筈はない、出来るわけがない。ヴェトルにあったのは、星の民への憎しみだけだった。空の民にもなんの感情を持つものか。

だが今は違う、彼女は変わり居場所を得た。人形ではない真の家族を得た。胸の奥から湧き出る感情は、もう憎しみではない。

「嬉しいなあ……幸せだなあ……」

意識せずヴェトルは、自分の感情が言葉となって出た。それを聞いたモルフエは、優しい微笑みを浮かべた。

「僕も嬉しい……凄い幸せだよ、姉さん」

「ずっと、続くといいな……」

「続くよ、きつと続く。ずっと続くんだ。これからもずっと」

まるで夢の様な時間。悪夢を脱した星晶獣が感じる幸せは、夢ではなく本物だ。

今日もきつとみんな夢を見る。この日見る初夢は、幸せな夢に違いない。夢を操る星晶獣としてでなく、騎空団の仲間としてそうあれかしとヴェトルは笑みと共に願った。